昭和五年一月出版

群書類從

第拾貳輯

東京
續群書類從完成會

群書類從第拾貳輯目次

和歌部 歌合

群書類從第拾貳輯目次終

群書類從卷第百八十

和歌部三十五 歌合一

在民部卿家歌合（行平）

左には山のかたを洲濱につくり
右にはあれたるやとのかたをすはまにつくりて
ありける

一番郭公

左勝

夏ふかき山里なれと郭公聲はしけくもきこえさりけり

右

あれにける宿のゝすゑは高けれと山時鳥まれに鳴なり

二番

左

誰とかはとはにかたらふ郭公まつ我きくにいはてわたるは

右勝

おほつかな音羽の山の時鳥さすかにいはぬことなたのめそ

三番

左

なくたひとおとろかるらむ郭公とふ一聲にありときゝつゝ（てきイ）

右勝

しらねともこたへやはする時鳥もさつひとゝふ聲をあはれと

撿挍保己一集

四番

左勝

（新勅）住里はしのふの山（もり集）のほとゝきすこのした聲そしるへなりける

右

月夜にはをくらの山の郭公聲もかくれぬ物にそ有ける

五番

左持

ほのかなる聲をすてゝは郭公鳴つるかたをまつそもとむる

右

さよ更てふるの都のほとゝきすかへる雲ゐの聲をきかせよ

六番

左勝

（玉葉）更る夜におきてまたね（きかす集）は時鳥はつかなる音もいかてきかまし（を誰かしらまし集）

右

（同）ほとゝきす雲ゐの聲をきく人は心もそらになりそしにける

七番

左勝

またせつる程は久しきほとゝきすあかて別れなのちの戀しさ

右

小夜ふけて誰かつけつる郭公まつにたかはぬ聲のきこゆる

八番

左

ほかにまた待人あれはやほとゝきす心のとかに聲のきこえぬ

右

ふた聲ときかてやゝまん時鳥あかつきちかくなりもしぬらん

九番

左勝〔右歟〕

あけぬまにはこねの山の郭公ふた聲とたに鳴わたるらむ

十番

左勝

我宿に聲なおしみそほとゝきすかよふ千里のみちはてしそは

右

ほとゝきす今宵とまりてかた岡のあしたの原に歸りやはせぬ

十一番あはぬ戀

左

世中の常のことゝやおもふ覚なみたもことにわきていつるは

右勝

あふことそおしからすしていのちをはあはぬに我よかつすな〔マヽ〕

十二番

左勝

あひかたみめより涙はなかるれと戀をはけたぬ物にさりける

右

夢にたに見ぬ人こひにもゆる身の煙は空にみちやしぬらん

寛平御時后宮歌合

春歌二十番

左　紀友則

花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

右　源當純

谷かせにとくる氷のひまことにうちいつる波や春の初花

左　素性

散と見てあるへきものを梅花うたて匂ひの袖にとまれる

右　藤原興風

聲たえすなけや鶯一とせに二たひとたにくへき春かは

左

梅のはなしるきかならてうつろはゝ雪降やまぬ春とこそ見め

右

春の日に霞わけつゝとふ鴈の見えみえすみ雲かくれ行

左　素性

花の木も今はほりうへし春立はうつろふ色に人ならひけり

右

春の野に若菜つまむとこし我を散かふ花に道はまとひぬ

左

鶯はむへもなくらん花さくら咲とみしまにうつろひにけり

右　興風

はる霞たなひく野邊のわか菜にもなり見てし哉人もつむやと

左

淺みとり野邊の霞はつゝめともこほれて匂ふはな櫻かな

右
春たゝは花をみむてふ心こそ野邊の霞とともにたちぬれ
左
みよし野の山に咲たるさくら花雪かとのみそあやまたれける
右
年のうちはみな春なからはてなゝむ花を見てたに心やるへく
左
春かすみあみにはりこめ花ちらはうつろひぬへし鶯とめよ
右
春雨の色はこくしもみえなくに野邊のみとりをいかてそむ覽
左
はるなれと花もにほはぬ山里は物うかる音にうくひすそ鳴
右
咲花は千種なからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる
左
水のうへにあやをりみたる春雨や山のみとりをなへてそむ覽
右
色ふかくみる野邊たにも常ならは春は行ともかたみならまし
左
駒なへてめも春の野にましりなむ若菜摘つる人は有やと
右
鶯の谷よりいつる聲なくは春くることを誰かつけまし
左
春なから年はくれなん散花をおしと鳴なる鶯のこゑ
右
大空をおほふはかりの袖もかな春咲花を風にまかせし

左
霞立春の山邊にさくら花あかす散とやうくひすの鳴
右
あまの原春はことにも見ゆる哉雲のたてるも色こかりけり
左
まきもくのひはらの霞たちかへりみれ共花のおとろかれつゝ
右
白妙の浪路わけてや春はくる風吹からにはなも咲けり
左
かすみたつ春の山邊は遠けれと吹來る風は花の香そする
右
散はなのまてふことをきかませは春降雪とふらせさらまし
左
かゝる時あらしと思へは一とせをすへては春を（に歟）なすよしも哉
右
まてふにとまらぬ物としりなからしゐてそおしき春の別を
左
梅花香をはとゝめて色をのみ年ふる人の袖にそむらむ
右
あかすして過行春の人ならはとくかへりことといはまし物を
左
梅かゝを袖に移してとゝめては春はすくともかたみならまし
右
行春の跡たにありと見ましかは野へのまに〳〵とめまし物を
左　興風
春霞色の千くさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

右

日くるれはかつちる花をあたらしみ春の形見に摘そいれつる

左

常盤なる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

右

くる春にあはむことこそかたからめ過行方にをくれすも哉

夏歌二十番

左

蟬のこゑ聞はかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは

右

にほひつゝ散にし花そおもほゆる夏はみとりの葉のみ茂りて

左

空蟬の侘しきものを夏草の露にかゝれる身にこそ有けれ

右

夏の夜の月は程なく明なからあしたの間をそかこちよせける

左　友則

宵の間はかなくみゆる夏虫にまとひまされる戀もする哉

右　貫之

夏の夜はふすかとすれは郭公鳴一こゑにあくるしのゝめ

左

かりそめのみや賴まれぬ夏の日をなと空蟬のなきくらしつる

右

はかもなき夏のくさ葉にをく露を命とたのむ虫のはかなさ

左

古郷をおもひやれとも郭公「こその如くになれそ鳴なる」〔菅万〕

右

夏の夜の霜やをけるとみるまてに荒たる宿を照す月かけ

左

夏の風我袂にしつゝまれはおもはむ人のつとにしてまし

右

なつ草のしけき思ひは蚊遣火の下にのみこそもえ渡りけれ

左

草しけみ下葉かれ行夏の日もわくとしわけは袖やひちなん

右　友則

五月雨に物思ひをれはほとゝきす夜ふかく鳴ていつち行覧

左

なつの夜の露なとゝめそ蓮葉のまことの玉と成しはてすは

右　紀有岑

夏山にこひしき人や入にけむ聲ふりたてゝ鳴郭公

左

吹風の我宿にくる夏の夜は月の影こそすゝしかりけれ

右　友則

ゆふされは螢よりけにもゆるとも光みえねは人そつれなき

左

夏の日を暮し侘ぬる「蟬の」〔類菅万〕まにわかなきそふる聲はきこゆや

右

恨つゝとゝむる人のなけれはや山時鳥うかれてゝなく

左

なつの夜は水やまされる天河なかるゝ月のかけもとゝめぬ

右

去年の夏鳴ふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

左

〔歌闕〕

右

夏虫にあらぬ我身のつれもなき人をおもひにもゆる比かな

左

夏の夜のまつはもそよと吹風はいつれか雨の聲にかはれる

右

夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしもすきかてにする

左

いつの間に花かれにけむ長くたにありせは夏の影とみましを

右

幾千たひ鳴かへるらむ足引の山ほとゝきす聲はわすれて

左

夏の日を天雲しはしかくさなむぬるほともなく明る夜にせん

右

郭公なきつる夏の山邊にはくつていたさぬ人やすむらむ

左

なつの日のくるゝもしらす鳴蟬をとひもしてしか何事かうき

右

あやめ草いくらの五月あひくらむ來る年毎にわかく見ゆらむ

左

をしなへて五月のそらを見渡せは草葉も水もみとり成けり

右

くるゝかとみれは明ぬる夏の夜をあかすとや鳴山郭公

左

夏の月ひかりおします照時はなかるゝ水にかけろふそたつ

右

琴の音にひゝきかよへる松風はしらへても鳴蟬の聲かな

左

夏草も夜の間は露にいこふらむ常にこかるゝ我そかなしき

右

なかめつゝ人まつおりによふこ鳥いつかたへとか立歸りなく

秋歌二十番

左　友則

あき風に初鴈かねそ響なるたか玉章をかけて來つらむ

右

浦ちかくたつ秋霧はもしほやく煙とのみそ見え渡りける

左　素性

我のみや哀とおもはむきり〲す鳴夕かけのやまとなてしこ

右　貫之

秋の野の草はいとゝはみえなくにをく白露の玉とつらなる

左

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きく時そ秋はかなしき

右

わかために來る秋にしもあらなくに虫の音聞は先そかなしき

左

日くらしに秋の野山をわけくれは心にもあらぬ錦をそきる

右

秋といへは天雲まてにもえにしを空さへしるくなとか見ゆ覽

左　在原棟梁

あきの野の草のたもとか花薄ほに出てまねく袖とみゆらん

右　　　　　　　　　　　　　　興風
山の井は水なきことそみえわたる秋の紅葉のちりてかくせは
左　　　　　　　　　　　　　　小野美材
女郎花匂へる野邊に宿りせはあやなくあたの名をやたちなん
右
秋風にさそはれ來つる鴈かねの雲ゐはるかにけふそ聞ゆる
左
白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける
右
いつのまに秋穗たるらむ草と見し程いくか共へたゝらなくに
左
鴈のねは風にきほひてわたれとも我待人のことつてそなき
右
大空をとりかへすとも見えなくにほしかとみゆる秋の草哉
左　　　　　　　　　　　　　　在原棟梁
秋風にほころひぬらむ藤はかまつゝりさせてふきり／＼す鳴
右
秋の夜のあめときこえて降つるは風に散つる紅葉なりけり
左
ちらねともかねてそおしき紅葉はゝ今は限りの色とみつれは
右
白波に秋の木のはのうかへるはあまのなかせる舟かとそ見る
左
秋のよのあまてる月の光にはをく白露を玉とこそ見れ
右
あきのゝにをける露をはひとりぬる我涙とも思ひしれかし

左
鴈金は風をさむみやはたをりめくたまく音のきり／＼とする
右　　　　　　　　　　　　　　大江千里
うへし時花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはんとやみし
左
白露の染いたす萩の下紅葉衣にうつすあきは來にけり
右
風寒み啼秋虫のなみたこそ草に色とる露とをくらめ
左
はなすゝきそよともすれは秋風の吹かとそきく衣なき身は
右
音にきく花見にくれは秋野の「道まよふまて霧そ立ぬる萱万」
左
鴈かねにおとろく秋のよを寒み虫のをりたす衣をそきる
右
秋風はたかたむけとか紅葉はをぬさにきりつゝ吹ちらすらん
左
唐ころもほせと袂の露けきは我身の秋になれはなりけり
右
秋の露色のこと／＼をけはこそ山も紅葉も千くさ成らめ
左　　　　　　　　　　　　　　藤原菅根朝臣
あき風に聲をほにあけて行舟はあまの戸わたる鴈にさりける
右
紅葉はの散こむ時は袖にうけむ土におちなはきすもこそつけ
左
秋のせみさむき聲にそきこゆなる木のはの衣を風やぬきつる

右
あきの夜の月の影こそ木の間より(下句欠)
左
秋の月草むらわかすてらせはやゝとせる露を玉とみすらん
右
なをさりに秋のみやまに入ぬれは錦のいろの衣をこそきれ
左
あき山に戀する鹿の聲たてゝ鳴そしぬへき君かこぬよは
右　藤原興風
契りけむ心そつらき七夕の年にひとたひあふは逢かは
　躬恒
年ことにあふとはすれと七夕のぬるよの數そすくなかりける

冬歌二十番

左
かきくもりあられふりしけ白玉をしける庭とも人の見るかに
右
天河ふゆは空まてこほるらし石間に瀧つ音たにもせす
左　友則
篠のはにをく霜よりもひとりぬる我衣手そさえまさりける
右
流れ行水こほりぬる冬さへや猶うき草の跡はさためぬ
左
雪ふりて年のくれゆく時にこそ終にもみちぬ松も見えけれ
右
我宿は雪ふる野邊に道もなしいつこはかとか人のとめこむ
左
神無月しくれふるらしさほ山の正木のかつら色まさりゆく
右
冬くれは梅に雪こそ降かゝれいつれのえをか花とはおらむ
左
ほりてをきし池は鏡とこほれとも影にもみえぬ年そ經にける
右
降雪のつもれる峯は白雲のたちもさはかすをるかとそみる
左　忠岑
みよしのゝ山のしら雪ふみ分て入にしひとのをとつれもせぬ
右
吹風は色も見えねと冬くれはひとりぬるよの身にそしみける
左
霜かれの枝となわひそ白雪を花にやとひてみれともあかす
右
嵐ふく山下里にふる雪はとくむめの花咲かとそ見る
左
雪のみそ枝にふりしき花もはもいにけむ方もみえすも有哉
右　在原棟梁
白雪の八重ふりしける歸る山かへる〳〵も老にけるかな
左
草も木も枯行冬の宿なれは雪ならすしてとふ人そなき
右
ふる雪はえたにしはしもとまらなむ花も紅葉も絶てなきまは
左　是則
冬の池のうへは氷りてとちたるをいかてか月のそこにすむ覽

右
ふゆさむみみのもにかくるます鏡とくも我なか老まとふへく
左
ちらねともかれてそおしき紅葉はゝ今は限りの色と見つれは
右
白雲のおりゐる宿とみえつるは降くる雪のとけぬ成けり
左　興風
霜のうへに跡ふみつくる濱千鳥行衞もなしと鳴のみそふる
右
なみた川みなくはかりの淵はあれと氷とけねはかけも宿らぬ
左　興風
浦ちかくふり來る雪は白波の末の松山こすかとそ見る
右
〔歌闕〕
左
〔歌闕〕
右
ひかりまつ枝にかゝれる雪をこそ冬の花とはいふへかりけれ
左
乙女子かひかけのうへに降雪は花のまかふにいつれたかへり
右
かきくらし散花とのみふる雪は冬のみやこの雲のちるかと
左
足引の山のかけはし冬くれはこほりの上をよきそかねつる
右
ふゆくれは雪ふりつもる高きみれ立白雲に見えまかふ哉
左
雪のうちのみ山から社おいはくれかしらの白く成をまつみよ
右
松の上にかゝれる雪は餘所にして時まとはせる花とこそみれ
左
月夜には花とそ見ゆる竹のうへに降しく雪を誰かはらはむ
右
しら雪を分てわかるゝかたみには袖に涙のこほるなりけり
左
白露そ霜となりける冬のよはあまの河〔さへ水こほりけり〕〔菅万〕
右
冬の海に降いる雪やそこにゐて春たつ浪の花とさくらん
左
ふゝみあへす消なむ雪を冬の日の花と見れはや鳥のとふらん
右
〔歌闕〕

戀歌二十番

左　紀友則
河の瀬になひくたま藻のみかくれて人にしられぬ戀もする哉
右
一たひも戀しと思ふにくるしきは心そちゝにくたくへらなる
左
かけてれはちゝの黄金も數しりぬなと我戀のあふはかりなき
右　興風
君こふる涙の床にみちぬれは身をつくしとそ我はなりぬる

左

白玉のきえて涙と成ぬれは戀しきかけを袖にこそ見れ

右

人を見ておもふ事たに有ものを空にこふるそはかなかりける

左　友則

くれなゐの色にはいてしかくれぬの下に通ひて戀はしぬとも

右　興風

契りけむ心そつらき織女の年に一たひあふはあふかは

左

つれもなき人をこふとて山ひこの答ふるまても歎きつる哉

右　小野美材

我戀は深山かくれの草なれやしけさまされと知人のなき

左

おもひにはあふ空さへやもえわたる朝たつ雲を煙とはして

右　敏行朝臣

明ぬとて歸る道にはこきたれて雨もなみたもふりそほちつゝ

左

おもひ佗けふりは空に立ぬれとわりなくもなき戀のしるしか

右

人をおもふ心のおきは身をそやく煙たつとは見えぬものから

左

あかすして君を戀つる涙にそうきみしつみゝやせわたりける

右

鹿嶋なるつくまの神のつく／＼と我身ひとつに戀をつみつる

左

わりなくも寐ても覺ても戀しきか心をいつちやらはわすれん

右　敏行朝臣

戀佗てうちぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝなるらむ

左　興風

わひぬれはしゐて忘れんと思へとも夢てふ物そ人たのめなる

右

いとはれて今は限りとしりにしを更にむかしの戀しかるらん

左　興風

しぬる命いきもやすると心みに玉のを計あはむといはなむ

右

あかすして別れしよひのなみた川よとみもなくもたきつ心か

左

思ひつゝひるはかくてもなくさめつ夜こそ涙つきすなかるゝ

右

限りなく深きおもひを忍ふれは身を殺すにもをとらさりけり

左

ひとりぬる身の衣てはうらみなれやみるに涙そまなくよせけれ〔マヽ〕

右

年をへてもゆてふふしの山よりもあはぬ思ひは我そまされる

左　菅野のたゝおむ

つれなきを今は戀しとおもへとも心よはくもおつるなみたか

右

佗わたる我身のららとなれゝはや戀しき事のしき波にたつ

左

ひとりぬる我手枕を晝はほし夜はぬらして幾代へぬらん

右

ほのに見し人に思ひをつけそめて心からこそしたにこかるれ

左

住吉のきしによる波夜さへや夢のかよひ路人めよくらむ

右

夕附夜おぼろに人を見てしより天雲はれぬ心地こそすれ

左

あさかけに我身はなりぬ白雲のたえてきこえぬ人をこふとて

右

近けれと人め／＼をもるころは雲井はるけき身とやなりなん

左

戀しきに侘てたましゐまとひなは空しきからの名にや殘らむ

右

あかすして今朝のかへりち思ほえす心を一つをきてこしかは

左

人しれすしたに流るゝ涙川せきとゝめなむかけは見ゆると

右　貫之

もえもあはぬこなたかなたの思ひ哉涙の河の中にゆけはか

以下闕

亭子院歌合　延喜十三年三月十三日

左のとうには女六の宮かたのみこ。御せうとなかつかさの四のみや大さう。五宮中納言藤原定方朝臣。左衞門督なかみつ(有定イ)の朝臣。讀人藤原興風。凡河内躬恒。方人むねゆき。よしかせとなむ。右とう女七宮かたのみこ。御せうとのかむつけの八宮せいわのさたかす。中納言源のほる。右兵衞督淸貫朝臣。歌讀是則。貫之。かたひとかねみの大君。きよみちのあそむ。みかとの御裝束ひはた色のおほむそに。そら色の御はかま。をとこ女。右はあか色にさくらかされ。左はあをいろにやなきかされ。左は歌讀かすさしのわらは。れいのあか色に。うすゝりのれうのうへのはかま。右はあをいろのれうのうへのはかま。方々のみこは。あかいろ。あを色。みなたてまつりたり。かくて左のそうは。みのときはかりにたてまつる。かたのみやたち。みなさうそくめてたうして。すはまたてまつる。まうちきみよたりかけり。樂はわうしきてうにて。いせのうみといふ歌をあそふ。右のすはまは。むまのときはかりにたてまつる。おほきなるわらはよたり。みつらゆひて。綵鞋はきてかけり。樂はそうてうにて。たけかはといふ歌を。いとしのひやかにあそひて。方宮たちもてはやしてまいりたまふ。左のそうは。さくらのえたにつけて。中務のみこもたまへり。右のはやまふきにつけて。かむつけのみこもたまへり。うたはしたのはこにちひさくて。おなしことゝいれたり。かむたちめは。はしのひたりみきりに。みなわかれてさふらひたまふ。女藏人四人つゝさふらはせたまふ。方のかんしは。女みな一尺五寸はかりまきあけて。歌よまむとするに。うへ

のよま(おほイ)せたまふ。この歌をたれか見きゝはやして。ことはらむとする。たゝふさやさふらふとおほせ給。さふらはすとまうせは。さう〳〵しからせたまふ。右はかちたりとも。かちの御歌ふたつを。くちにて出かたれは。みきひとつまけにたり。されとうたはもちともにそしける。うたかはす。三のうたは山につけたり。うくひすの歌は花につけたり。ほとときすの歌は卯花につけたり。よるのはらふねしてかゝりにいれてもたせたり。左方の宮にみきのかゝりたてまつれ給ひける。しろかねのつほのおほきなるふたつに。ちむあはせ。たき物をいれたり。かたの人々にみなさうそく給ひけり。

題者　二月　三月　四月なり

一番初春廿首

左持　伊勢

青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる

右　是則

淺みとり染てみたるゝあをやきの糸をはるの風やよるらむ

この歌ともこれもかれもよけれは持なり

左持　躬恒

さかさらむ物とはなしに櫻花おもかけにのみまたき見ゆらん

右　興風(或本貫之)

山櫻さきぬるときはつねよりも峯のしら雲たちまさりけり

左はらむふたつあり右は山さくら また有とてちになす

左勝　躬恒

きつゝのみ鳴うくひすのふる里は散にし梅の花にそありける

右　是則

三千歳になるといふ桃は今年より花さく春になりそ(あひイ)しにける

年といふことをよといへりとて右まく

左勝　伊勢

ほともなく散なむ物を櫻花こゝらひさしくまたせつる哉

右　是則

いそのかみふるのやしろの櫻花こそみし春の色やのこれる

こそたのみにてことしの心なしとてまく

左勝　興風(うちの御とある本もあり)

たのまれぬ花の心と思へはやちらぬさきよりうくひすの鳴

右　貫之

春かすみたちしかくせは櫻はな人しれすこそ散ぬへらなれ

うちの御歌なりとて左かつ

左　上御製

はる風のふかぬよにたにあらませは心のとかに花は見てまし

右　貫之

散ぬとてありとたのまむ櫻花春はすきぬと我にきかすな

これもかれもなをありとてちささたむ

或本云内御歌殊勝也右歌ナヲアマリケリトテマケス

左　躬恒

我こゝろ春の山邊にあくかれてなか〳〵し日をけふも暮しつ

右勝　貫之

櫻ちるこのした風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

左歌はなか〳〵しといふ事にくしくらしとめてかたすへたるやうにてつふやけりとてまくるなり

左持　躬恒

花櫻いかてかひとのおりてみぬ後にそまさる色もいてこめ

右

うたゝれの夢にや有らん櫻花はかなくみてそやみぬへらなる

左持　興風

ふりはへて（さけりやと）花みにくれは小倉山（さくらはなイ）いとゝかすみの立かくすらん

右　躬恒

いもやすくねられさりけり春のよは花の散のみ夢にみえつゝ

いつれもよしとてちなり

左　躬恒

ふる里にかすみとひわけ行鴈はたひの空にや春をすくさむ

右

ちる花をぬきしとめねは青柳の糸はよるともかひなかりける（るらんイ）

季春廿首

左持　興風

見てかへる心あかねはさくら花さけるあたりに宿やからまし

右　頼基或友則

しのゝめにおきてみつれはさくら花また夜こめても散にける哉

この右の歌をみかとのおほせられけるやうねめをする〳〵はなをみけむとあ□へいふにやとのたまはすれはさたかたのあそんのほるのあそむのよとこすかたにとおほゆれとそうしけれは御こきよにてさらはとてちになさせたまふなり

左持　躬恒

うつゝをはさらにもいはし櫻花ゆめにも散とみえはうからん

右　是則

花の色をうつしとゝめよかゝみ山春より後のかけやみゆると（のくれなゐのちもみるへくイ）

左勝　躬恒

めに見えて風はふけとも青柳のなひくかたにそ花は散ける

右　興風

あし引の山ふきの花散にけりゐてのかはつは今や鳴らん

みきふるめきたりとてまくるなり

左

散て行かたをたにみむ春霞花のあたりにたちもやらなん

右勝或本左勝　興風

澤水にかはつなくなり山吹のうつろふ影やそこに見ゆらん

左勝

あかすして過行かたを呼子鳥よひかへしつゝきてもつけなむ

右

武藏野にいろやかよへる藤の花若むらさきにそめて見ゆらん

左持　躬恒

春ふかき色はなけれと山吹のはなのこゝろをまつそ染つる

右　兼覽王

風ふけはおもほゆるかな住の江のきしの藤なみ今やさくらん

左　躬恒

かけてのみ見つゝそしのふ紫にいとしほ（ひ歟）染しふちの花そも

左勝　是則

みなそこにしつめるふちの影みれは春の深くもなりにける哉

左持　興風

吹風におしみもあへす散ときはやへ山ふきの色もかひなし

右　元方貫之とも

おしめともたちもとまらて行春をならしの（こそ）山のせき（せきイ）もとめ南

左ち　御製

みなそこに春やくるらんみよしの丶河に蛙なくなり

右　貫之

さくらはな散ぬる風のなこりにはみつなき空に波そたちける

或本オムウタマケムヤハトテカチトナム

左持　躬恒

けふのみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花の影かは

右

花みつゝ惜むかひなくけふ暮てほかの春とやあすはなり南

これもかれもおかしとてちとなむ

夏廿首

左勝　源元方躬恒とも

けふよりは夏の衣になりぬれときる人さへはかはらさりけり

右

かたをかのあしたのはらをうちくれは山郭公けふそなくなる

あちきなしとてまくる一本キルヒトサヘハトテマク

左持　興風

山里にしる人も哉ほとゝきすなきぬときかはつけもくるかに

右

夏きぬと人もつけこぬ我やとに山ほとゝきすはやもなかなむ

左　躬恒

われにして人にかはつけむ郭公おもふもしるく我やとになけ

右勝

ほとゝきす聲のみするは吹風のをとはの山になけく成けり

左　興風

夏池によるへさためぬうき草は水よりほかにすむ方(こそ)そなき

右勝

山(みやま)をいてゝまつはつ聲は郭公夜ふかくまたむまつこゝはなけ

左持

紫にあふみつなれやかきつはたそこの色さへたかはさるらん

右

さよ更ていつくなるらむ郭公ねさめの宿はかす人(や)もなし(き)

左勝

いつれをかそれともわかむ卯花のさけるかきれをてらす月影

右

この夏もかはらさりけり初聲はなこしのをかに鳴ほとゝきす

左

夏の夜のまたもねなくに明ぬれは昨日けふとも思ひまとひぬ

右

卯花のさけるかきねは白雲のおりゐるとこそあやまたれけれ

左

さく花の散つゝうかふ水のおもにいかてうき草ねさしそめけむ

右

待人は常ならなくにほとゝきす思ひのほかになかはらからん

左

たまくしけふたかみ山の郭公今そ明くれ鳴わたるなる

右

郭公のちのさ月もありとてや長くうつきをすくしはてつる

左

右
夏なれはふかくさ山のほとゝきす鳴聲しけく成まさるなり

戀廿首

左勝　躬恒
身をもかつ思ひも能戀といへはもゆるなかにもいれる心は
右　或本躬恒
なみた河いかなる水かなかるらむなと我戀をけつよしもなき
左勝　躬恒
誰ゆへにおもひみたるゝ心にはしらぬそ人のつらき成ける
右
はつかしのもりのはつかに見し物をなと夏草のしけき思そ
左持　躬恒
人のうへとおもひし物を我戀になしてや君かたゝにやみなむ
右　貫之
あしまよふ難波の浦にこく船のつなてなからもこひわたる哉
左　躬恒
うつゝにも夢にも人によるしあへは□新許られしきはなし
右
玉もかるあまとはなしによと共に我ころもてのかはく時なき
左　伊勢
あふ事の君にたえにし我身よりいくらの涙なかれいてぬらむ
右勝　是はおくにありあはせぬ歌
行かへり千鳥なくなり濱ゆふに心へたてゝおもふものかは
左
逢すしていけらん事のかたけれは妹は我身をありとやは思ふ
右
逢ことのかたのしるへか泪かは戀しと思へはまつさきにたつ
左
人こふとはかなきしにを我やせん身のあらは社後もあひみめ
右
夕されは山のはにいつる月草のうへしこゝろは君はそめてき
左
露はかりたのめをかなむ言葉にしはしもとまる命ありやと
右
春雨のよにふる空もおもほえす雲井なからに人こふる身は
左　貫之
身に戀の餘りにしかは忍ふれと人のしるらんことそわひしき
右
君こふる我身ひさしくなりぬれはとしに涙もふりぬへらなり
左
逢みてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみそねはなかれける
右
夏草にあらぬものから人こふる思ひしけくも成にけるかな
かくて左方にうへの御よわたりとて右方のみにうらみまうしたまふとさたしめして院　上
たちかへり千鳥鳴なる濱ゆふのこゝろへたてゝおもふ物かは

題　初　春　廿　首　季　春　廿　首
　　夏　　　廿　首　戀　　　廿　首
讀人　御　製　兼覽王　伊　勢　貫　之
　　躬　恒　興　風　是　則　友　則

陽成院歌合 延喜十三年九月九日

惜秋意

左勝
年毎にとまらぬ秋としりなからおしむ心のこりすも有哉
右
おしといひてうみへもさそへ飛渡る何れか秋のわたり成らん
左勝
あたなりと人やみるらん年毎にとまらぬ秋をおしむ心を
右
よそ人も秋はおしきを淺茅生のむへも聲々鹿やなくらむ
左
長月はこしひよりこそおしまるれ今はかきりの秋とおもへは
右勝
とふ人もなき物ゆへにあちきなくいはんまもなくおしき秋哉
左
神なひの杜によをへて鳴鹿はすき行秋をおしみとめなん
右かつ
こゑたてゝ鳴鹿はかりおしめとも過ゆく秋はとまらさりけり
左ち
時雨つゝ草はもなへてもみつともときはの山に秋はとまれり
右
おしめとも秋はとまらすたつた山紅葉をぬさと空にたむけん
左
秋毎に咲すはあらねと女郎花ちりゆく事はおしくそ有ける
右かつ
めにみえて別るゝ秋を惜めはや大空のみそなかめらる闌
左ち
おしと思ふ心そふかきあまの河なかれて秋のとまる成らん
右
いつくへか秋はゆくらんつの國のなからへ行ときかは頼まむ
左
我宿のきくの花しも紅葉ねは過行秋もあらしとそおもふ
右ち
はかなくて過る秋とはしりなからおしむ心のなをあかぬかな
左
いつこにか秋はいくらん跡をたにとめてゆきをは尋見てまし
右かつ
おほ方の秋はおしめとかひもなしなの長月をとゝめてしかな
左かつ
したひてもとめまほしきを今はとて秋の行覽かたそしられぬ
右
紅葉のにしきと見ゆる秋なれはたつをおしとや鹿の鳴らん
左かつ
惜めともとまらぬ秋としりなからまとふ心はいかにせよとか
右
龍田河わたりし秋にあらぬかななかれて紅葉つねにみるへく
左 本ノマヽ
草村の心しとゝもにそわたるくれはしぬへき秋のおしさに
右
こりすまにあひもみる哉女郎花とまらすかへる秋としるらし

左
我こゝろ慰めかねつ身をすてゝおしむを秋のしゐてすくれは
右
紅葉はのはかなき風にちらされは秋はすく共しられさらまし
左
とゝむれと今はかきりと行秋のわりなくおしくおもほゆる哉
右
あふ坂の關の紅葉し心あらはくれて行とも秋をとめなん
左かつ
秋すくとねをも鳴哉ふかくさのかけとたのめる虫ならなくに
右
いつかたに心をやらんあかすして過行秋をおしみとゝめて
左
まてといひてとまらぬ秋としりなから空行月のおしくも有哉
右
みやまなる紅葉の錦色にいてゝおしむに秋のたゝはらからん
左
暮ぬへき秋をおしめは小倉山みねのもみちも色つきにけり
右
おしめとも秋はとまらぬ女郎花野へにをくれて枯ぬはかりを
左
紅葉のなかるゝ川をゝしなへてせきそとゝむる秋のおしさに
右
ちらすなる心のまゝにをのかしゝわかるゝ秋をおしみつる哉
左
大空の心そまとふめに見えてわかるゝ秋をおしむ我身は
右
とゝむれとゝまらぬ秋をおしむとて心にはかるなをやたちなん
左
身にそへてもたらぬ秋をおしむとてくれむ事社佗しかりけれ
右
紅葉つゝ時雨ふりいてゝ行秋を峯の朝きりたちもとめなん
左
今はとて過行秋のかたみには風のをくれに紅葉たや見む
右
秋なからとしはくれなむ紅葉をぬさとちらせる山のみねより
左
おしめ共とまらぬ秋はときは山紅葉はてぬと見てもゆるさし
右
年毎にとまらぬ秋とおもひなはてもろき人もおしまさらまし
左敗本ノマヽ
右
秋といへは今いくたひも殘らぬをおしむ心もともにつきつゝ
右
おしむにもとまらぬ秋の立ゐては恨をのみやおもひ出にせむ

亭子院有心無心歌合

殿上人とも心ある心なきえりいてんといふことある比。七月七日にかうしんのこのうしむとおもはる。人々たなはたあひのゝちおもふらんことをたひにて。ひのうちによみつつあはせける。

左

年ことにこりすや有らん織女のあひて戀しき別れのみする

右

思ひやる心の空にしらるれはたなはたつめのわかれかなしき

左

あかすしてわかれにしかは天河戀しきせのみおもほゆる哉

右かつ

棚機の我にあふよのしのゝめの見えぬはかりそ霧はふらまし

左かつ

逢事をまつとなけきし時よりも織女つめは今や侘らん

右

なかき世につくすともなく織女の戀は空にやつもりたるらん

左かつ

あひ見てもあはてもなけく織女のいつか心ののとけかるらむ

右

あはすして思ひしよりもたなはたのあかす別れて後そ侘しき

左

逢みてそいとゝ戀しき棚機のなくさむはかりあらぬ世なれは

右かつ

年ことにあかぬ別れはたなはたのあらぬ人さへ歎くへら也

左

あふ計嬉しき事はなけれともわかれて後そ侘しかりける

右かつ

稀に逢て何わかるらん彦星の後にわひしとしらすや有らん

左

別れての後や侘しき織女のあふこはるけきことを思へは

右かつ

わかれては戀しき物を彦星の昨日けふこそ思ひやらるれ

左ち

あひ見むと思ひしよりも別れての後そ侘しき戀まさりける

右

あかてゆく彦星なれは年をへてわすれさりける嬉しけもなし

左

天河わたりて後そたなはたのふかき心も思ひしるらん

右かつ

逢夜なき織女なれは今はとてかへりて後にまとはれし哉

左

あかなくに別れにしかは七夕のかはきし袖は今やぬるらん

右

織女の思ひせむ空もおもほえし別れて後の心まとひに

左かつ

棚機のあかてわかれし戀をこそ空にみちぬといふへかりけれ

右

とことはにおもほゆる哉彦星のこりすわかれて戀渡るらん

左

年毎にひとせをわたる天河かゝるにかけを見つゝ別れし

右

あか月のおきうかりしを天河戀渡るへき物をおもはゝ

左かつ

天河年をわたりてたなはたのあかぬ戀する比にも有哉

右

年ことにあかぬわかれの織女は命なかくも世にへぬるかな

右有心無心歌合推長暦延喜十六年也

內裏歌合

(御記)天德四年三月卅日己巳。此日有女房歌合事。典侍命婦等相語云。去年秋八月。殿上侍臣闘詩合時。男已闘文章。女宜合和歌。及今年二月。定左右方人。就中以更衣藤原脩子。同□等爲左右頭。各令排讀。蓋此爲惜風騷之道徒以廢絕也。後代之不知意者。恐成好浮華專內寵之謗。仍具記之。其儀。暫撤却清凉後凉兩殿中渡殿北蔀。設公卿座於同渡殿之內。鋪左右方人座於後凉殿緣東。(左在南。右在北。)女房又相分候清凉殿西庇簾中。第五間立倚子。(便用女房侍倚子。此間上簾。)申剋就倚子。良久右方入自北方。獻和歌洲濱。(沉押物花足淺香下机。繡花柳鳥花文綾覆。綺地敷。更衣之童女四人舁之進御前渡殿。算刺洲濱置北小庭算刺小舍人圓座之前云々。)暫左方經侍所。自南方獻和歌洲濱。(紫檀押物花足蘇方下机。繡葦手花文綾覆。綺地敷。更衣之童女六人舁出如右。算刺洲濱又置南小庭之小舍人圓座前。始童女□机下後改置云々。)仰令召殿上公卿。卽左大臣(實賴)大納言源朝臣(高明)。右大將藤原朝臣(師尹)。參議雅信朝臣。朝成朝臣參來候座。次各方人侍臣着座。于時日已昏。供燈粂立篝火於南北小庭。令召可讀歌人。左方左兵衞督延光朝臣。右方右中將博雅朝臣。進就洲濱下讀其和歌。(左作金山吹花枝。其葉書歌。右小書色帋。)左近少將伊涉右近少將助信等取脂燭照之。殿上舍人着小庭座刺筭。左大臣評定。于時各方賜饌於公卿及方人。讀歌之中。左詠鶯歌二首。而右誤讀柳歌。仰依失次爲負。惣廿首讀合已畢。左勝員九。比讀歌終。令召樂所人。相分南北小庭。遞奏歌曲。大臣彈箏。大納言源朝臣彈琵琶。此間盃酒頻巡。絃歌無斷。大臣起座獻酒。及遲明賜大臣以下祿有差。

大臣夏裝束一襲。大納言白合御衣一重。參議白單重御衣。自餘疋絹。平旦起座入內。侍臣退出。此曉霜降。近臣云。累□霜氣□寒。人恠時序乖違云々。四月三日未剋之。飛香舍以歌合洲濱給中宮還來。酉剋左洲濱□給昌子內親王。

殿上日記
天德四年三月卅日。女房有歌合之事。此事始自今月上旬。先被書分左右人。以更衣爲左右頭。相分典侍掌侍命婦藏人等爲方人矣。同月十九日。相分侍臣點定方人。藏人頭伊尹朝臣於御前書分云々。當日早旦。藏人所雜色以下參上。供奉御裝束。其儀。西廂皆懸新御簾。納仁壽殿御宿也。第五間也。渡殿內立御倚子。大盤所御倚子。南方立御几帳。立置物机。立御座間。南四間垂御簾爲左方女房座矣。北二間同垂御簾爲右方座焉。御前渡殿南北各敷綠端疊三枚爲公卿座也。後涼殿東小簀子敷。從渡殿南北相分。敷長疊爲左右侍臣座也。南北小庭各敷疊三枚爲樂所召人座。此等鋪設□所司進也。申二剋出御召左右歌。於是右方侍臣等令持洲濱二机。一置歌。一員指。應召參上從御路殿西邊獻御前。先童女一人執地敷。淺縹浮文織物。出進鋪御座乾角高欄下。還却之後。同童女四人。其裝束着青色柳襲。舁洲濱立地敷。洲濱之爲躰沉入金筋。淺香下机入銀筋。其覆花紋綾青末濃。加柳折枝之繡文。机四角以金銀作柳枝四莖。便爲覆臺也。有足結總。但無帶。洲濱之中神妙爲竭。人取鳥獸水樹巖石。皆其所用無不金銀沉香等類。所獻歌以色紙書小字。詠花樹歌令結其樹枝。題好斤又令持其鳥觜。至于春初暮春首夏戀望之間。或在人手。或載漁舟。惣二十首。隨宜分置也。次小舍人藤原實正執金銀花柳枝。下居玉砌傍也。員指。次小舍人二人藤原實明。三善興光。惣三人。皆着青色柳襲也。舁員指洲濱置實正前。頃之左方從殿上侍方參上。童女一人先執地敷。紫地綺也。鋪御座坤角如右方。次童四人舁洲濱立地敷。洲濱之樣大躰同右。紫檀机。蘇芳下机。同色村濃覆。有葦手并藤花柳繡文。有帶。無總。其中銀霍含欵冬一枝。黃金作八重花。青銀作數片葉。每葉各書一首。次又童女執員指洲濱參入。此洲濱野水躰也。無机。有花紋綾例樣之形敷物。其內置金銀藤題也。小舍人藤原宣賴紀延方等。皆着赤色襲。於砌下取傳。置員指座前。次殿上公卿依召參入。左大臣大納言源朝臣右大將藤原朝臣雅信朝臣朝成朝臣等也。北南面也。左右方頭辨備衡重。各給公卿并男女方人。殿上五位取傳給之。於是召出左方延光朝臣。右方博雅朝臣。令講各方獻歌。延光朝臣手執花枝口詠豔藻。博雅朝臣披講之間

誤失次第。（方人遺恨尤在斯。言詩不言乎。白珪之缺尚可磨焉。其今日之謂歟。）評定之間。鐘漏頻移。勝負之次。坏酌互勸。今日之事左方多慰。又御厨子所供御菓子干物等。陪膳（重任朝臣。）依例。又召樂所人々於砌下。左右相分侍席。勝方先吹笙笛。初奏調子。（先是。殊降綸命。書分御遊之歌曲。）（左右之召人也。）左則大臣彈箏。朝成朝臣吹笙。方人侍臣樂所召人陪砌下。（實利朝臣□富門各奏所能等。）右則大納言源朝臣彈琵琶。雅信朝臣拍子。侍臣并召人（藤原清遍。同左方。）占部方座等。同侍右庭。絃歌如左。唱絃管等怱曲調。侍臣等密語曰。每万機之暇景怱命仙欄之御遊。然歡樂之至未如今夜者也。快醉雖興難禁。左大臣賜夏御衣一襲。（青色御衣。蘇芳御下襲。阿古女。御衣御袴。大口御袴。）大納言已下侍臣召人等給祿有差。（大納言白細長一襲。參議單重細長一領。四位五位不論殿上地下挿腰以白絹。六位小舍人皆挿赤絹。）東方漸明。尊儀入御。大臣以下歌舞退出之。

內裏歌合（天德四年三月卅日）

題

霞　鶯　柳　櫻　款冬　藤

暮春　首夏　卯花　郭公　夏草　戀

歌人

左
朝忠卿
坂上望城
大中臣能宣
少貳命婦
壬生忠見
源順
本院侍從

右
平兼盛
藤原元眞
中務
藤原博古
清原元輔

講師

左
延光朝臣

右
博雅朝臣

判者

左大臣

念人

左
中將更衣
宰相更衣
藤典侍
少貳命婦
右衞門命婦
右近命婦
兵衞命婦
兵衞藏人
兵庫藏人

右
辨更衣
按察更衣
橘宰相
少納言命婦
右衞門命婦
美濃命婦
越後命婦
備前藏人
美作藏人

參河藏人　兵部藏人
靫負藏人　木工藏人
侍從藏人　宮内藏人
源爲明　源盛明
源重信　藤博古
源重光　藤賴忠
源延光　藤文範
藤伊尹　清原元輔
源保光　藤國光
藤忠君　藤兼家
平時經　藤助信
源伊渉　藤淸遠
藤爲光　大江齊光
藤守仁　藤安親
藤濟時　秦淸主
平珍材　藤永保
藤重輔　藤惟材
源時仲　藤忠光

童

左　右
平保遠　藤元明
源時明　實正
藤道隆　藤朝光
藤爲時　藤保名
藤景舒　義理
藤惟賢　能正
藤信賴　延正

一番　霞

左勝　朝忠

くら橋の山のかひより春霞としをつみてや立わたるらむ

右　兼盛

ふる里ははるめきにけりみよしのゝみかきの原を霞こめたり

左右歌讀合。勅ニ小臣一曰。可レ定ニ奏勝劣一者。逡巡奏云。小臣纔雖レ備ニ三十一字一。全難レ辨ニ勝劣之義一。伏請ニ天裁一。勅云。若不レ定ニ勝劣一者。已失ニ今日興一。兼結ニ後代欝一歟。猶速可ニ定申一者。遇ニ天氣之不レ許。表ニ空慮之拙一而已。左歌くらはし山に年をつむといへる事よろし。又はしにわたるなといふもさもありなん。歌のふるまひもさてありなん。右歌なとかふるさとにしも春めかしけん。霞こめたらんもおそろしけにや。此間只在ニ勅定一。小臣屢候ニ天氣一。遂無ニ左右仰一。因以レ左爲レ勝。

二番　鶯

左勝　順

こほりたにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯の聲

右　兼盛

わか宿に鶯いたく鳴なるは庭もはたらに花やちるらん

左歌心はへいとおかし。右歌よしなき花ちらすもことなる興なく。ことはもよろしからす。以レ左爲レ勝。

三番

左勝　朝忠

我宿の梅か枝になくうくひすは風のたよりに香をやとめこし

右　兼盛

さほひめのいとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ
鶯をいたすへきに柳をよみてまし。
白妙の雪ふりやまぬ梅か枝にいまそうくひすはるとなくなる
たかへてよみたれと。本歌をめしいたしてからせらる。
右講師博雅朝臣誤讀ニ柳歌ー。左方論云。須レ讀ニ申鶯歌ー。而誤讀ニ申柳歌ー。於レ今者不レ可ニ讀申ー歟者。以ニ左方論申旨ー奏聞。仰云。可レ據ニ定申ー者。小臣奏云。左方之所レ申非レ無レ謂。如レ此之事只隨ニ時之議ー。但依ニ人之誤ー。何留ニ其歌ー。依令ニ讀申ー。其時博雅朝臣頗變レ色。遂不レ讀レ之。纔雖ニ讀揚ー。其音振被下爲ニ左人ー笑上。又歌の詞にうくひす春となくことそらことなり。仍遂爲レ負。

四番　柳

左　望城

あら玉のとしをへつゝも青柳の糸はいつれの春かたゆへき

右勝　兼盛

さほ姫のいとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ
欲レ讀ニ右歌ー之間。左方人申云。件柳歌違ニ濫次第ー。讀申先畢。而重欲レ讀レ之。似レ忘ニ首尾ー者。小臣答云。鶯歌之時。隨ニ左申ー已有ニ裁許ー。重不レ可レ申者。左歌あらたまのとしをへんあをやきよしなし。右歌させることなけれと難はみえす。仍以レ右爲レ勝。

五番　櫻

左勝　朝忠

あたなりとつねはしりにき櫻花おしむ程たにのとけからなん

右　元輔

よとゝもにちらすもあらなむ櫻花あかぬ心はいつかたゆへき
左の歌さてもありなむ。させる難はなし。ことははいとよからねとも。くせなく聞ゆ。右歌はするゑあはぬこゝちそする。又歌からもをとれり。以レ左爲レ勝。

六番

左持　能宣

櫻花風にしちらぬものならは思ふことなき春にそあらまし

右　兼盛

櫻花色見る程によをしへは年のゆくへをしらてやみなむ
左右ともによくつかまつりたり。仍爲レ持。

七番

左勝　少貳命婦

あし曳の山かくれなる櫻花ちりのこれりと風にしらすな

右　中務

年ことにきつゝわか見る櫻花霞もいまはたちなかくしそ
左の歌いとおかしくて。さてもありなむ。右歌はいつこにきつゝみるそ頗荒凉也。いまはといふことはよしなきことなり。仍以レ左爲レ勝。

八番　欵冬

左勝　順

春ふかみ井手の川なみ立かへり見てこそゆかめ山吹の花

右　兼盛

ひとへつゝ八重山吹は開けなむ程へてにほふ花とたのまん
左歌いとおかし。さる事なりときこゆ。右歌八重やまふきのひとへつゝひらけんは。ひとへなるやまふきにそあらめ。心はあるに似たれとも。八重さかすは本意なくやあらん。又上の句のはて下の句のはてとおなし文字

ありされは左かちぬ。

九番　藤

左　朝忠

紫ににほふ藤浪うちはへて松にそ千代の色はかゝれる

右勝　兼盛

われ行ていろ見るはかり住吉の岸の藤浪おりなつくしそ

左歌水なくて藤浪といふことは。ふるきうたにおりおりあり。されとも尋ぬる人なけれはとゝまれるなるへし。歌合にはいかゝあらん。ことによせぬはあるまし。いはれなし。猶水池岸なとそよすへかりける。歌からはきよけなり。右歌おなし浪あるに岸によせたれはたよりあり。かくそふるきにもある。藤なみをしなへていふことにもあらす。御氣色もさやうにそみゆる。小臣問二源大納言一云。尤艶也。暫持に擬之間。右方人申云。左歌藤波水によらすはいかゝと愁申。事理可レ然。仍以レ右爲レ勝。

十番　暮春

左勝　朝忠

花たにもちらて別るゝ春ならはいとかくけふは惜まさらまし

右　博古

行春のとまりしるき物ならはわれも舟出をゝくれさらまし

左歌首尾相叶。ふるまひもありておかし。右歌詞たくみたるやうなり。歌からもをとれり。仍以レ左爲レ勝。

十一番　首夏

左持　能宣

なく聲はまたきかねとも蟬の羽のうすき衣をたちそきてける

右　中務

なつ衣たち出るけふは花櫻かたみの色をぬきやかふらん

左の歌は夏の初とおほゆれと。右の歌はたち出るけふはとあれは。としとそおほゆる。又ぬきかふともあめれは。左の歌よりはとくそ聞ゆる。されと歌のしなおなしほとなれは持にそ定申。

十二番　卯花

左　忠見

道遠み人もかよはぬおく山に咲る卯花たれかおらまし

右勝　兼盛

あらしのみ寒き深山の卯花はきえぬ雪かとあやまたれつゝ

左歌山の卯花をしもおもひ出けんそいかゝ。右歌おなし山なれとおかしさまされり。仍以レ右爲レ勝。

十三番　郭公

左持　望城

ほのかにそ鳴わたるなる時鳥みやまを出る夜半の初聲

右　兼盛

深山出て夜半にやきつる郭公曉かけてこゑの聞ゆる

左右ともに興ありていとおかし。仍爲レ持。

十四番

左持　忠見

さよふけてねさめさりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ

右　元眞

人ならはまてといふへきをほとゝきす二聲とたにきかて過ぬる

左歌きかむともおもはてねさめしけんそあやしき。されと歌からおかし。右歌人なりとも今一聲きかんとて

まてとはいかゝいはんとする。しはしまてなといふへきこゝろか。ことたらぬ心地そする。いつれもおなしほとの歌なれは持にそ定申へきなり。

十五番　左勝　夏草　忠見

夏草の中を露けみかきわけてかる人なしにしける野へ哉

右　兼盛

夏ふかく成そしにける大あらきのもりの下草なへて人かる

右歌なへて人かるなとわろし。左にをとりたり。仍以左爲勝。

十六番　左勝　戀　朝忠

人傳にしらせてしかなかくれぬのみこもりにのみ戀や渡らむは

右　中務

玉のよるの夢たにまさしくは我思ふことを人に見せはや

左歌いとおかし。つよきことなれと。さてもありなむ。右歌むは玉とかけり。よるといふことはぬはたまとそいふかし。歌はおなしやうなれと。かきあやまちたるなめれは。そのよし奏すれは。あやまちあらむにはいかてかとおほせらる。仍以左爲勝。

十七番

左勝　能宣

戀しさを何につけてかなくさめむ夢たに見えすぬる夜なければ

右　中務

君こふと心やそらにあまのはらかひなくてふる月日成けり

左歌頗有情。仍爲勝。

十八番

左持　本院侍従

人しれすあふをまつまに戀しなは何にかへたる命とかいはむ

右　中務

ことならは雲ゐの月となりなゝむ戀しき影や空に見ゆると

左右ともにさてもありなむ。右歌の上下の句のかみにおなし文字そあめる。にくさけにそさふらふへきと奏すれは左右の仰なし。左の人申。左はさるもしさふらはすと申めれと。させる難にはあらぬにそ。仍爲持。

十九番

左勝　朝忠

あふことのたえてしなくは中々に人をも身をも恨みさらまし

右　元眞

君こふと且はきえつゝふる物をかくてもいける身とやみる覽

左右歌いとおかし。されと左の歌は詞きよけなりとて以左爲勝。

二十番

左　忠見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそおもひそめしか

右勝　兼盛

忍ふれと色に出にけり我戀は物や思ふとひとのとふまて

小臣奏云。左右歌倶以優也。不能定申勝劣。勅云。各尤可歎美。但猶可定申者。小臣讓大納言源朝臣。納言敬屈不奏。此間相互詠揚。各似請我方之勝。小臣頻候天氣。未給勅判。令密詠右方歌。源朝臣密語云。天氣若在右歟。右歌甚好矣。因之遂以右爲勝。

三月一日。歌のたいをさためて。かた〳〵にたまふ。おなし月の十八日。そのことも左右にわかせ給ふ。その日になりて。せいりやう殿のにしおもてのみすひとまあけさせ給ひて。こうりやう殿のわた殿に。おましを女房方によそはせ給ふ。おましより南にはひたりの人さふらふ。北には右の人さふらふ。左も右もわつらふことありてのほらす。左の方はないしのすけ。あかいろに櫻かさねのからきぬ。うすもののすり裳。命婦くらんとは赤色にさくらかさね。むらさきのすそこのもみなきたり。たき物はくろはうをたく。右はあを色にあをきもはおなしむらさきのすそこなり。たきものは侍從をたく。かくて日のけしきはれて見ゆるほとに。うたともおそしとめす。左のはおそけれは。まつ右のをたてまつる。すはまはちんをやまにつくりて。かゝみを水にして。ちんのふねうけたり。銀のかはかめふたつ。かふのうらに。しきしにうたはかきていれたり。花足にはちんをつくりて。こかねのすちやれり。せんかうのあしゆひのくみ。すそこのふさしたり。あをくちはうす物のおほひに。やなきとりのかたをぬひたり。たいには柳の枝をつくれり。あさはなたのうちしきしたり。うなひ四人。あを色に柳かさねにて。きたのかたよりかきたつ。おなしかたの殿上人そひて出したつ。かすさしのすはまは北のきはにをく。かすさしはうへのわらは。左の歌たそかれときにたてまつる。そのすはまはちんの山。かかみを水にして。すにもしろかねのつるふたつたてゝ。こかねの山吹に。銀の葉に歌はかきて。つるにくはせたり。花足はしたんをつくりて。しろかねのすちやりて。したつくゑはすはうにして。かねのすちやれり。あしゆひのくみおほひは。ふちのすそこ。あし手をぬひものにしたり。おほひのたいは。しろかねを竹のかたにつくりて。うちしきにはえひそめ。うなひ六人。あか色にさくらかさねきて。みなみの方より御前にかきたつ。かすさしのすはまみなみのきはにをく。宣旨に。左大臣。大納言源朝臣。右の大將ふち原の朝臣。まさのふの朝臣。まさひらの朝臣まいれり。

御前にあたれるわた殿に。ゐわかれてさふらふ。左みきのかたの殿上人。こうりやう殿のかたにさふらふ。おはします間のみすはあけたり。あけぬ間。御几帳たてわたして女房さふらふ。かゝるほとにひくれぬ。きたみなみの庭にはかゝりともす。おほせことにて左右のうたよむへき人をめす。左のふみつの朝臣。右ひろまさの朝臣。すはまのもとによりてうたとりてよむ。おほせことにて左大臣して歌のかちまけのわさせさせたまふ。かすおほく左まさるまゝに。くにてりの朝臣いはんかたなしとおもへり。又左のおとゝをうらめしとみやる。歌とも見はてゝ。樂所のをのこともをめす。左右とりわかれて。おの〳〵にはにさふらふ。左のとうのかちは。おこらかしとおもひてさうのふえふく。左の大臣さうのことひく。つそ（圖書）のかみをさむひは。大せんのしんなかき琴。いよのせうもりときわこん。左衞門志富門ふゑ。すりの大夫しけのふの朝臣。左京權大夫さねとし。とのもりのかみ橘のよりたたなとは。うたうたひにさふらふ。右には源大納言ひは。右近中將ひろまさの朝臣わこん。うたのかみしけひらの朝臣さうのこと。のりたゝの朝臣さうのふえ。右近少將きよとを。たかみつ。きんまさは歌うたふ。かちかたそうてうをふきて。あなたうとうたふ。つきに右さくら人うたふ。左うたへは右はやみぬ。かたみにそあそふ。左あしかきうたふ。右やましろのこまのわたりうたふ心あるへし。かくあそふほとに夜あけぬ。あけほのになみゐたるに。なかきかあさかほを。左大臣□みな人のわらふをきゝもいれて。ことひきゐたるかほいとわりなし。右の人かはらけとらすとてめすに。くにてりの朝臣なつきなんとてかくれぬ。左のうたよむ人に。とうのかういをんなそうそくひとくたりとらす。又かむたちめにはうへよりたまふ。左大臣にはなつのさうそく一くたり。大納言にはしろきあやのほそなかひとかさね。さいさうにはひとへかさねのほそなか。殿上樂所の人々にはこしさし。左には春のうくひすの　さえつり　といふ　あそひ。くれぬる春をおしむにより。右にはやなき

のはなのうらみといふかくをそふす。かすのつもるをおもふなるへし。

殿上日記并注所分方人之由依無其名就他日記書入

三月二日。左右方人のかきわけを。ないしのす頭けしてかた〳〵のとうのさうしにたまへり。これ二月廿九日に。うへのみつからかき出させたまへるなり。みかの日たいをたまふ。これはないしのすけの御前にてかき出せるなり。

かすみ一　うくひす二　やなき一　さくら三
やまふき一　ふち一　春の暮一　初の夏一
ほとゝきす二　うの花一　なつ草一　こひ五

かくてみそかの日のひつしの時。清涼殿のにしおもてのみすひとまあけさせ給ひて。後涼殿のわたとのにあたりて。にしむきにいしのおましよそひておはします。わたとのをわけて。みなみのつほに前栽うへさせたまひて。南には左藤の花。北には右やまふきの花うゑさせ給へり。かた〳〵の藏人命婦は。おましのきたみなみに。みすのうちに左右とさふらふ。裝束はれいのあかくあをし。かくみなとゝのひて。まつ右のすはまたてまつるとて。わらはうちしきとりておまへにしきていりぬ。又わらは四人すはまかきてまいる。裝束はあを色にやなきかさね。たけのほとかみのなかさ。よくとゝのひてかたほならす。すはまのおほひ。あをきすそこにてぬひものしたり。うちしきはあさきはなた。すはまのさまは。うへのにはちんにこかねのすちやれり。したのにはせむかうにしろかねのすちやれり。歌はしろかねこかねをつくり花にして。歌にしたかひつつえたにつけたり。こひの歌は鵜舟にして。かゝり火にいれたり。花の歌は舟につみたり。うくひすのは鶯くひたり。さま〳〵につけてしたり。日のうちかたふきて。ものゝいろみゆるほとにて。いとめてたし。かゝるほとに。左いとをそくまいるとて。主殿頭平のこれつねをめして。をそしとめさせ給ふ。猶をそければ。藏人平のよしきをめしてせめさせ給ふ。たゝいままいらすとそうす。かゝるほとに。いといたうくれぬ。又藏人藤原しけすけをめして。をそきよしおほせ給ふ。ものゝさまも見えぬ程に。すはまたてまつるわらはうちしきとりてまいる。かへりて又四人すはまかきてま

いる。装束あかいろに櫻かさねなるへし。されと見えねはかひなし。かすさしのすはま又わらはもたり。すへて六人わらはあり。おほきさとゝのほらすといふ。よしきわらはの中にましりてさはく。おほきにてかたはにもあらしとおもひたるなるへし。右のかすさしのすはまは。方の殿上わらはとりて。つほせさいにたてゝさふらふ。左のすはまおさ／＼しく見えす。くらくてすなはちおほとなふらまいる。左源少將とれり。うちしきは左兵衛佐とれり。右藏人少將おほとなふらとれり。うちしきは後少將とれり。わたとのゝ左右にうたのかむたちめつけり。左おとゝ。實頼。右大將師尹。藤宰相朝成。源大納言高明。源宰相雅信。うへ人は後涼殿のすのこに。きたみなみにつきなみゐたり。かた／＼の男女房にあるししたり。かくて左のかうし右兵衛の督源のふ光よりて。すはまのおほひをすこしひきあけて。山ふきの花のえたの一尺はかりある。こかねしてつくれるをとりて。さゝけてよひとよゐたり。はなひらに歌はかきたるなるへし。ともかくもせてさゝけてよみときゐたり。かうろささけたるににたり。右の講師源中將ひろまさ。すはまのおほひは藏人少將すけのふもたり。後少將たかみつよりてとる。かくて歌ともあはするに。いかゝありけん。右まけにけり。あはせはてゝ。御あそひつかふまつる。めし人は左右のつほ前栽にさふらふ。左は左おとゝさうのこと。勘ケ由長官さうのふえ。圖書頭をさむひは。大膳進なかき琴。伊豫掾もりとき和琴。左衛門志富門笛。修理大夫しけのふ朝臣。右京大夫さねとし。主殿頭これつね。たちはなのよりたゝなとはうたうたひにそさふらふ。右は源大納言ひは。右近中將ひろまさの朝臣わこん。うたのかみしけひらさうのこと。權左中辨よりたゝの朝臣さうのふえ。治部卿雅信。大藏卿もりあきらの朝臣。右近衛少將きよとを。たかみつ。備前掾きんまさなとは。うたうたひにさふらふ。これかなかに。左のうたひたしは右京大夫さねとし。地下の人にてその座にさふらふ。右のうたひたしは治部卿。わた殿にさふらふ。みな笏拍子とれり。まつかちかた雙調ふ

きて。あなたうとあそふ。つきに右おなし調子ふきて。さくら人あそふ。つき〳〵これよりはしめて。たかひに左右ひまなくあそひあかしたまふ。つとめて。うへよりかつけものたまふ。左のおとゝには御そひとくたり。源大納言にはしろきうちきひとかさね。宰相たちひとへのほそなかをたまふ。こと人々にはみなこしさしをたまふ。二日といふ日。きさいの宮には。すはまとも御らんせさせにたてまつれたまふ。かきてまいる人々。藏人ためみつまささ二人まゐる。御覽して。かつけものたまふ。さて右のすはまはとゝめさせ給ひて。左のはかへしまいらせ給へり。すはまのありさまは。うへはしろかねのすちやれり。したにはすはうに白らふのすちやれりけり。おほひすはうのすそこ。うちしきはこきゑひそめのきなりけり。これはわかみやにたてまつらせ給ひてけり。かくてあはする日は。三月のつこもりの日なれは。すはまとりいつる日は四月朔日。つとめてになりて。左は夏のかさみにていてたり。右はおなし冬のなかからにてとりいる。その左のすはまのおほひに。あし手を縫ものにしたる歌。

千代にちよくはへたり共みゆる哉松のかけなる鶴の齢は
立歸りなけや鶯あすよりはほとゝきすてふ聲そ聞えむ
君か代は天の羽衣まれにきてなつ共つきぬいはほならなん
藤の花色ふかけれや陰みれは池の水さへこむらさきなる
名殘をは夏にかけつゝ百とせの春のみなとに咲る藤なみ

天德四年三月卅日歌合左右假名日記
歌合の又のつとめて左かちぬときゝて大貳好古の宰相右兵衞督朝臣におこせり

しら浪の立よるかたのかた人はかつによりてや心ゆくらむ

かへし　朝忠宰相

もろともに心をよする白浪のそこのかひある心地こそすれ

これを見てないしのすけ

常盤にもたちまさりにし白浪は君か方よりかひとこそみれ

歌合あすとて宰相のかういにつかはす

上

言のはをくらふの山のおほつかな深き心の何れまされる

御返し

道しれるくらふの山にあらぬ身は深さをよそに聞はかり也

又辨の更衣につかはす

吹風によるへさためぬ白浪はいつれのかたに心よせまし

御返し

定めなき心なりとも白浪のよりてはいかゝあるとこそみめ

右天德歌合以信州大英寺空同和尙所持本挍合之件本十市遠忠眞蹟也

堀川中納言家歌合（通兼）天延三年二月十四日

よかはにのほりたまひて。せほう（懺法）おこなひたまふとておはするに。なぬかの日のつとめてよりあめのふるに。いとつれ／＼なるに。これかれあつまりて。さま／＼なることをいひしろふに。きゝ給ふて。こと御かたわにて歌をやはあはせぬとのたまはすれは。いとみてからしこもありけりとてあはす。

左頭勘解由判官通家
右頭前阿波守忠信

左勝　いはのうへの松

岩の上の松のちとせをうちかそへ年をおひつゝ君にまかせむ

右

いはまよりおひたる松の枝しけみ一葉に千代をかそへたる君

左　題闕

雲間よりほのかにみゆるあしたつのいとゝ春けき聲聞ゆなり

右

天の原雲間をかけるあしたつのよはひを君にゆつる春哉

左持　霞

霞たつあしたの原をけふみれは駒はなすへく野はなりにけり

右

霞たち山のふもともとめいれは春のにしきそことに見えける

左　山さくら

山へにはちりや殘ると櫻花さとのにあかてたつね來にけり

右

峯ことに咲ちる時はさくら花やまさむからぬ春の白雲

左　かゝみ山

かゝみ山はこねの山にいりてこそなへての人に影もうつさめ

右

ちりつもる名のみなるらし鏡山やまとなるまて曇らさりけり

左　つりふね

いつかたに浪よせつらむ嶋かくれほのかにみゆるあまの釣舟

右

釣舟にのりてよをのみふる人のいをたにねてやあかしかぬ覧

左　ふかきやま

あし曳のふかきみ山の花の色は見るにつけてそ里は戀しき

右

あし引の山のかひよりたちぬれは殘りの雪そふかく見えける

左　青柳

枝よはみみたれやすなる青柳の糸のたよりに風な（吹）よりこそ

右

谷河のふきあけにたてるたか柳えたのいとまもみえぬ春哉

左　うくひす

風さむみ谷にこもれる鶯のうちとけてなく聲の聞えぬ

右

春といへと山かくれなる鶯はまほにそ聲も聞えさりける

左　あひてあはぬ戀

逢見しをやかてよくやと思ひしに夢路をとらぬうつゝ也けり

右

思ひやる心たゝちにかよへ共ねし夜の夢にをとりぬるかな

一條大納言家歌合（為光）天延三年三月十日

左　紅梅　よしちか君

こむ春をかくのみ見つゝ梅花つるにあかてややまむとすらん

右　少将源つねかた

くれなゐにふかくにほへる梅花雨さへ色をふりそしにける

左　歸鴈　參河權守恒成

いつくをかとしふるさとゝ定むらんくる春ことに歸る鴈かね

右かつ

歸る鴈君もしあはゝふるさとにさくらををしと鳴てつけなん

左勝　柳　なかきよ

はなちらす春の山風あらくとも柳の糸はみたれさらなむ

右　たゝよし

青柳の糸はさかしくみゆれとも吹來る風に亂るへらなり

左　款冬　すけあきら

春風はのとけかるへしやへよりもかさねてにほへ山吹の花

右　なかとふ

底きよきゐての河邊にかけ見えてけふ盛なる山吹の花

左　若草　前中宮のしうはふ

おほあらきのもりの草葉も二はにてけふそ始めて駒も放てる

右勝

下草はしけりにけりなむかしみしいもか家路の跡もなきまて

左　殘鶯

春はまたのとけきものを鶯のかへるくもちに心またしな

右

鶯の羽かせに花やちりぬらん春くれかたの聲になくなり

大納言家歌合（實信）長元二年四月七日

一番　左持　夏衣　加賀

たちてゆく春をおしめと夏衣きたれはこれもめつらしき哉

右　頼實

みな人もけふや衣をかへつらんひとへに夏のきぬと思へは

二番　左勝　山吹　頼家

山吹の花の匂にあひてこそ井手のあるしとならまほしけれ

右　親範

浪のよるかけさへ花と見ゆる哉さかりにさけるゐての山吹

三番　左　藤　五節君

いつかたの梢咲らむ藤波の春と夏とのきしをへたてゝ

右　義清

むらさきの雲のたつとも見ゆる哉こたかき松にかゝる藤波

四番　左勝　卯花

春過しかきねなれとも卯花のさかりにきてはとまりぬるかな

右

うの花の盛になれはよそに見ししつの垣根も過うかりけり

五番　左持　葵　頼家

をしこめていのりかけつる葵草しめのほかなる人もたのまむ

右　頼實

けふみれはかけて歸らぬ人そなきあふひそ神のしるしなり鳧

六番　早苗

左　重成

程もなくしけきうへ田の早苗哉ましるくさはのとりあへぬ迄

右勝　親範

うちかへす程もへなくに小山田の早苗はけふそ色にとりける

七番　郭公

左持　重成

雲ゐよりなく一聲は子規きけともやすきそらのなきかな

右　經衡

またきかてまちつるよりも子規おほつかなきはよはの一聲

八番　龜鳥

左　重成

ひまもなく叩くくひなに蛩のとの驚きなからあけぬ夜はなし

右　親範

夏の夜のあけぬかきりは月影にたゝくゝひなの音のみそする

九番　竹

左　五節君

あたなりし花をもこひしくれ竹のかはらぬ色をわか友とせん

右勝　宰相君

呉竹のふしのしけくもみゆる哉かそへもやらぬちよやしる覽

十番　遣水

左勝　侍從乳母

せきれたるいはまの水の濁らぬにのとかに月の影をこそみれ

右　少辨

せきいれては鏡とそ見る朝ことにのとかにすめる水の流を

賀陽院水閣歌合

長元八年五月十六日。於ニ賀陽院水閣一有ニ和歌合卅講一。聽聞之餘有ニ此興一矣。去四日令ミ資業獻ニ和歌題一。月五月雨池水菖蒲瞿麥郭公螢火照射祝戀。次被レ書ニ分左右方人一。以ニ藏人頭左中辨經輔朝臣一爲ニ左方頭一。以ニ右近衞中將俊家朝臣一爲ニ右方頭一。方人之中依レ無ニ藏人頭一推而爲ニ上首一也。左方人書分幷和歌題。召ニ左少辨經長一賜レ之。方人丹波守濟政朝臣。資業。春宮權亮良賴朝臣。左馬頭良經朝臣。美作守定經朝臣。左近權少將行經朝臣。中宮大進義通朝臣。右近少將經季朝臣。前甲斐守範國。左少辨經長。右近少將良貞。少納言經成。左兵衞佐信長。丹後守憲房。左兵衞權佐資任。刑部少輔經平。散位實綱。藏人式部大丞橘季通。右衞門權尉藤原俊經。蔭孫藤原貞章。右方人書分等。召ニ藏人右衞門佐良宗一賜レ之。方人近江守實經朝臣。木工頭擧周朝臣。中宮權亮兼房朝臣。春宮亮行任朝臣。右近衞少將資房朝臣。右中辨資通朝臣。內藏頭師經朝臣。中宮亮爲善朝臣。侍從通基朝臣。藏人大學頭國成。右衞門佐良宗。右近衞權少將資綱。少納言經家。右衞門佐經季。參河權守經信。信濃權守定季。藏人式部少丞橘義淸。右衞門權少尉藤原家任。蔭孫源賴家。經輔朝臣進下申賢郞可レ爲ニ方人一之由上。此間右方申云。依ニ簡次第一可レ被ニ定仰一歟者。理非相分。許不未レ明。去九日遣ニ藏人藤原貞章於里第一被レ仰下藤原通房可レ爲ニ左方人一

之由。又自余小舍人相分可賜左右之。（左源高房。平經章。藤原範定。右源行家。藤原兼宗。源頼綱。）可從勅定之狀奏達了者。仍左方人相率向彼曹局。是爲賀方之面目也。同十五日講演畢後。諸卿或以退出。交談之次。事及明日之興。各非無芳意。以左藤宰相中將（兼頼）。左兵衛督（公成）爲左方念人。以左源宰相中將（顯基）。右兵衛督（隆國）爲右方念人。更漏漸闌。議定既了。三位中將當日追爲左方念人。文殿幷水閣南廊爲左右宿所。當日早旦。東廂（水閣。）鋪高麗端疊爲公卿座。（北上西面。）簀子鋪東階北間鋪紫端疊爲左方座。（南上西面。）同階南間敷紫端疊爲右方座。（北上西面。）僧侶座如例。諸卿參入。内大臣（教通）。春宮大夫（頼宗）。中宮權大夫（能信）。權大納言（長家）。宮内卿（道方）。左衛門督（師房）。右衛門督（經通）。侍從中納言（資平）。權中納言（定頼）。大藏卿（通任）。左藤宰相中將。右宰相中將。左源宰相中將。三位中將（信家）。左兵衛督。左大辨（重尹）。右大辨（經輔）。右兵衛督。三位中將等也。雖講經畢僧侶未退。盖爲見象外之佳遊也。酉剋左方參。（着直衣二藍指貫紅染擣褂。）先文殿南釣臺下撫船二隻。（家督依爲方人本家便儲之。高欄有蝶鈿。以色色絹爲上張。以緋絹爲総。）

解纜之頃。方念人宰相中將。左兵衛督。三位中將。渡寢殿東階歷東對北階來臨。事出意外。喜歎不足。文臺員刺洲濱等同在舟中。藏人所雜色左兵衛尉藤原經行。源頼實。同齊頼等。鼓棹盪舟。自後池北歷寢殿東高階下潺湲參進。伶人依方誡在舟矣。先吹調子次奏陵王破。雖云仙舟何以加之。絲竹鏘鏘。池水湛然。遂不知方外也。人間也。亦不知崑崙歟。蓬瀛歟。縱觀之者目不暫捨矣。或衣色照耀於簾中。或香氣酷烈於檻外。斯乃優悠好耳目之娯也。棹影穿波着南洲。階下異草雜樹。奇巖恠石。千名万形。不可覼縷而記之。念人上卿先下。次方人等着座。雜色源頼實執地敷（三重杜若色浮線綾。以象眼爲裏。重其上縫葦手。其裏以銀鏤文。）押上。次藏人式部大丞橘季通。藤原貞章等同列階下。藏人右衛門尉藤原俊經傳取鋪東長畀文臺洲濱。（銀洲濱立沈石。以鏡爲水。以瑠璃金銀作青松昌蒲瞿麦水鳥之類。）其上立文臺。（以銀作之。鏤名花好鳥。）扇十枚。書和歌入銀透筥置其上。（以象眼爲紙。依各題目畫圖。以銀爲骨。彫鏤居玉。）次頼實畀員刺洲濱。（松樹恠石潺湲之類皆以銀作之。以二藍象眼爲地敷。）小舍人平

經章（着二二藍指貫赤色細長一。）傳取置二簀子敷一。次右方參入着座。（着二直衣菖蒲指貫蘇芳染擣衣一。或又各任レ意。）藏人式部少丞橘義清。右衞門尉藤原宗任。舁二文臺洲濱一立二東長押上一。（洲濱上立二沈石一。作二銀瞿麥一栽二檻内一。銀蝶各書二和歌十首一。以二三重菖蒲色象眼一爲二地敷一之。）次義清家任舁二員刺洲濱一置二簀子敷一。（以レ銀作二翠竹恠石之類一。以レ鏡爲レ水。以二二藍象眼一爲二地敷一。）判者中三位依レ召參進。左方員刺小舍人平經章。右方員刺義清着座。召二經長資通朝臣等一令レ講レ歌。

一番　　月

左勝　　　　　　　　　　　　　　　衞　　門

夏の夜もすゝしかりけり月影は庭白妙の霜と見えつゝ

右　　　　　　　　　　　　　　　　衞　　門

宿からそ月の光もまさりけるよのくもりなくすめはなりけり

右は一番の歌よみたり。はしにくけにおもひたれと。ことかきりありて。左おかしきおもひありとて。かつになしたり。

二番　　五月雨

左勝　　　　　　　　　　　　　　　相　　摸

五月雨にみつのみまきのまこも草苅ほす暇もあらしとそ思ふ

ときおりふしにしたかふとてかつ。

右　　　　　　　　　　　　　　　　茂忠朝臣

五月雨の空を眺むるのとけさはちよをかねたる心地こそすれ

三番　　池水

左　　　　　　　　　　　　　　　　資　　業

ちよをへてすむへき水をせきれつゝ池の心にまかせたる哉

せきいるゝわろしとてまく。

右勝　　　　　　　　　　　　　　　四條中納言

としをへてすむへき君か宿なれは池の水さへ濁らさりけり

四番　　菖蒲

左　　　　　　　　　　　　　　　　輔　　親

あやめ草尋ねてそひくまこもかる淀のわたりの深き沼まて

右　　　　　　　　　　　　　　　　春宮大夫賴宗

昔よりつきせぬ物はあやめ草深きよとのにひけはなりけり

五番　　瞿麥

左勝　　　　　　　　　　　　　　　四條中納言

とこなつのにほへる庭は唐國にをれる錦もしかしとそ思ふ

右　　　　　　　　　　　　　　　　衞　　門

庭の面に唐の錦をゝる物は（しくイ）なをとこなつの花にそ有ける

なをとこなつとあるわるしとてまく。

六番　　郭公

左勝　　　　　　　　　　　　　　　茂忠朝臣

なかぬよもなくよも更に時鳥まつとてやすきいやはねらるゝ

いますこしよしとてかつ。

右　　　　　　　　　　　　　　　　衞　　門

よもすからまちつる物を時鳥またともなかてすきぬなる哉

七番　　螢火

左持　　　　　　　　　　　　　　　良賴朝臣

さは水に空なる星のうつるかとみゆるはよはの螢なりけり

右　　　　　　　　　　　　　　　　衞　　門

なにたゝる五月の闇もなかりけり澤の螢のまかふひかりに

八番　照射

左勝　公資

五月やみ天つ星たにいてぬよは照射のみこそ山に見えけれ

右　衞門

五月闇ほくしにかくる燈火のうしろめたくやしかはみる覽

九番　祝

左　能因法師

君かよは白雲かゝるつくはねの峯のつゝきの海となるまて

海も山になり山も海とならはあしかりなん。海はうみ山はやまにてあらんこそよからめ。いま／＼しとてまく。

右勝　すけふさの少將

おもひやれやそ氏人の君か爲ひとつこゝろに祈るいのりを

十番　戀

左　能因法師

くろかみの色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そ老ぬる

右勝　春宮大夫

あふまてはせめていのちの惜けれは戀こそ人の命なりけれ

左右每レ講ニ和歌一判者先以相定。第四題菖蒲也。而左方先獻ニ瞿麥歌一次右方出ニ菖蒲歌一。依レ有ニ乖違一改獻ニ同題一。各判决之後。右方云。題之次第已以超越。待定之後可レ獻ニ次歌一者。殿下仰云。天德歌合時。一題依レ違兩歌弃置。乃是勝負未レ决之前。弁論逸興之故也。而今評定之後奈何論難不レ致。前詞何有ニ後求一哉。仍右方獻ニ瞿麥歌一又至下于講ニ照射一之比上右歌有ニ燈之詞一。左方云。以ニ照射一稱レ燈。古今之什所レ未レ聞也。彼是交爭左遂勝。各評定了後中三位賜ニ祿蘇芳織物掛幷袴。於東簀子敷一趁拜之間。超ニ卿相座一是情感之餘。不レ知ニ手之舞足之踏一歟。次勸ニ公卿酒饌一。高坏本家儲レ之。盃酌數巡。感情方催召ニ伶人一令レ奏ニ管絃一丹波守濟政朝臣執ニ拍子一。興闌醉淵。卿相相唱和。其後內大臣退出。郎有ニ曳出物一龍蹄一疋。自餘上卿猶以在レ座。爰明月斜照池水浮レ光。歌吹之聲漫沸。晴天優遊之間。夜欲ニ參半一。仍春宮大夫中宮權大夫權大納言退下。此間曳ニ出華厩馬各一疋一。餘興不レ盡之故也。他上卿同以退出。女房料左方調ニ備檜破子一。以ニ紫檀地螺鈿一爲レ足。以ニ村濃色一結レ之。繪圖山水盡ニ風流之美。方人傳取置ニ簾前一矣。同廿一日。左方又參ニ八幡住吉一。是爲レ遂ニ宿賽一也。歌合日爲下决ニ雄雌一別中涇渭上所ニ立願一也。方人未時會ニ合左中弁經輔朝臣宅一。或着ニ直衣一或着ニ狩衣一。尾張守資基朝臣在府之間不レ入ニ方人一。已悔ニ遲參之咎一苦陳ニ交會之詞一。滿座響應。甚ニ於鐘谷一矣。各騎馬出レ洛爭瞻之者連々不レ絕。至ニ于淀津一乘レ舟。

美作守定經朝臣儲二酒饌一。戌剋於二夫山前一着岸。先參二石淸水一。禊了奉幣。(金銀御幣。)其後權別當院被レ賜レ祿。(白大掛。)次走二十烈一。其後奏二音樂一。先萬歲樂。次賀殿。次陵王。廻雪之袖當レ夏頻翻。修理權別當淸成儲二饗饌一事了退出。

廿二日。於二山崎橋下一乘レ舟。聯句聯歌。和漢任レ意。樂人舟間唱二鼓笛一過二江口一間。遊女舟數隻。任レ波容レ與。光粉妖冶。歌曲幽咽。盖非レ受二天然之性一。乃是土俗之爲也。酉剋着二熊河岸一。駕レ馬向二住吉社一。禰宜率二神人一鳥居外迎謁。禊了先向二宿所一。(左少弁經長弁ヨ備鋪設饗饌。依レ爲二和泉守一便有二其用意一。)着二禮殿一後奉幣。(金銀御幣。)次社司賜レ祿。(白掛)避レ座再拜。次走二十烈一。次奏二音樂一。太平樂。賀殿。陵王。各賜レ祿之。經輔朝臣召二右近將監多正方一脫レ衣。是爲レ賞二妙舞一也。卽令レ題二倭歌一諷吟之間。達レ旦不レ寐。以二式部大輔資業一令レ書レ序。以二前甲斐守範國一令レ講レ歌。

本云。此長元歌合者西行法師之筆寫之。

源大納言家歌合 (師房) 長曆二年九月十三日

題 秋夜月

左

のとかにも見ゆる空かな雲晴ていることをそき秋の夜の月

右

おほ空に月の光のあかき夜は槇の板戸もさゝれさりけり

あき風

左

荻の葉に吹わけて行秋かせのまた誰里をおとろかすらん

右

秋ふかくなりゆくまゝに風の音の梢に高く吹も行哉

露

左

白露ををきつるまゝに見渡せはぬきにぬきてもにたる玉哉

右勝

秋のゝは折へき花もなかり鳧こほれてちらん露のおしさに

霧

左

見わたせははるかに見ゆる河霧の深き秋にもなりにける哉

右

花見むとしめしかひなみ秋霧のあしたの原に立わたりぬる

薄

左

花薄まねくはつねの物なれと行過かたきあきの野邊哉

つねひら

右勝

さためなき風しふかすは花薄心となひくかたは見てまし

菊

左勝

香のみこそまきれさりけれ初霜のあしたの原のしら菊の花

右

むはたまの黒髪なから年ふれは菊のあたりのなつかしき哉

秋田

左持

早苗より穂に出るまて守る田をかりにのみ社人は見えけれ

右

秋の田になみよる稲は山河に水ひきうへしさなへなりけり

紅葉

左

たつねつる心のまゝにいりにけり紅葉の色のふかき山邊に

右勝

風吹はそこにくれなゐみちぬめりいかはかりなる山の紅葉そ

鴈

左

しら雲に宿かりかねのきこゆるは旅の空よりゆけは也けり

右　よしきよ

をとつれぬたひのなきかなかりかねの行かふ道も遙なれ共

鹿

左

つまこひて秋の夜深く鳴鹿のこゑには人もいやはねらるゝ

右

いつ方と聞こそわかね小夜更てたちともしらぬ鹿の音なれは

弘徽殿女御十番歌合 長久二年

一番

左　霞　相模

春のこしあしたの原の八重霞日を重てそ立まさりける

右勝　侍從乳母

春は猶千種に匂ふ花もあれとをしこめたるは霞なりけり

かすみの春のけしきは。よしのゝ山あたりにて。としころみなれて侍れは。けにさためまし侍りぬへきを。このあしたのはらひと所に八重よりもまさりてたちそふと侍るはかし。かく許の言のこゝろいふせう見えはへめり。大かたに萬をもおしこめたらむこそさることゝ思しられはへれ。

二番

左持　柳　良暹

見るに猶たくひなき哉春風に岸の柳のなひくけしきは

右　侍從乳母

花ちりぬ柳の糸はうちはへて吹くる風にまかせてそ見る

あをやきのいとめてたきすちに思ひより侍れと。風につけてよるなとはへるけしきは。しつのをたまきくり返しなへてのよのことにて。なひくすかたはめつらしく見え侍れは。今一しほの色まさりぬへきを。大かたの歌のしなのえすくれす。なをぢとや申すへく侍らむ。

三番

左　櫻

ちらてたにほとへぬへくは花櫻もろこし迄もやるへき物を

右勝　　　　　しゝうのめのと

遠近に匂ふ櫻の花を見て野にも山にもちるこゝろ哉

このうたは我も〳〵とあかつきの露におもひをとゝめ。春の花に心をそめこのよならすもろこしまておもひやりてはへれと。なか〳〵にひのもとの國なから。野にも山にもこゝろをちらすはまさりてそ侍る。ひかめにや。

四番　　春駒

左勝　　　　しけなか

立はなれさはへに荒るはる駒はをのか影たや友とみるらん

右

まこも草青みわたれは澤にあれて取つなかれぬ野への春駒

まこも草あをみわたれるなとは。ひきところある春駒と見えはへるを。すへそおくはしらぬやうに見え侍るに。をのかゝけをやともとみるらむと侍るうたのすへは。しめのうちにかちふちちたちぬへう。のり人ゆかしくなむ。

五番　　さわらひ

左　　　　　さかみ

狩人のとやまをこめてやきしより下もえ出る野邊の早蕨

右かつ　　　侍從のめのと

花をのみおりてかへらん早蕨はおきのやけのに今そ生出る

さわらひといふ事はいにしへの人々も。さま〳〵にいひはへるを。これもひとつのすちなり。花たたにおりてかへらむとは。けにいとおかしく思ひよりてはへるを。もえいつるをはるはかりならは。ほかほかもなとかもとめて歸らさらむ。さてかり人のとやまたこめてと侍るは。いとあまりあつまちにいりたるやうにいひつる。うとましくこそはへれは。かれはまされるにや。

六番　　歸鴈

左　　　　伊勢大輔

行そらもなく〳〵歸る鴈金の聞えぬほとに成にけるかな

右かつ　　　あかそめ

歸る鴈雲ゐ遙になりぬなり又來ん秋もひさしとおもへは

かへるかりの雲井はるかになり行かた。いつれも〳〵おなし心におもひをかけてはへれと。行そらもなくなくとはへるよりも。又來ん秋をとはへるは今すこしまさりてや侍らん。

七番　　かはつ

左かつ　　　　良暹

みかくれてすたくかはつの諸聲にさはきそ渡る井手の浮草

右　　　　　赤染

歸るへき道も遠きにかはつなく河邊に日をも暮しつるかな

大和歌はことのおこりやかてあることをよむへきに。かはつは夕暮よりなきはしむる物としりてはへるを。日暮しつとめてより聞はしめて。をのゝえくたしけむ人のたとひにそおほえはへりける。さてすたくかはつのもろこゑにと侍るは聞所まさりてはへめり。すゑのよにはかゝることありかたくや侍らむとそ見え侍る。

八番　　なはしろ

左勝　　　　藤原隆資

山里のそとものをたのなは代に岩間の水をせかぬ日そなき

右　　侍従のめのと

うへぬよりもるめるものを小山田は苗代水にまかせたらなん

なはしろ水のこひちにおりたちてさためまさむことは。いとふるめかしきほとに成にて侍れは。ことのはゝかりおほうはへりなから。うへぬよりもるといふことは。しかかきなかしけん水くきおかしう侍るを。なはしろ水にまかする事や。よになかれてふることにはへらむ。山里のそとものをたにとはへる歌は。すかたをそ今すこしあらたむへう侍れと。すへよみすましてはへれは左はまさるへきにや。

九番　祝

左持　　永成法師

君か代はすゑの松やまはる〳〵とこす白浪の數もしられす

右　　赤染

なぬか行濱のまさこの數ことに岩ほとならんほとをへよ君

なぬか行はまのまさことといふことは。いはひのかたはたしかにはへれと。むけにいそのかみのふることのかきりもとすゑに見えて侍らす。末の松山とはへる歌のすかたはいとおかしう。しきしまのやまとことはなと見えはへれと。男女いかにそやある。うらみうたと覺えていはひのうたには聞えす覺侍れは。これもかれもわたつみのかた〳〵にたかせふねさして。いつれまさりともましかたく侍れは。これをや持とさためましはへらむ。

十番　戀

左　　伊勢たいふ

世中にわりなき物は人しれす戀つゝとしをつむにそ有ける

右勝　　あかそめ

夢にたにみはやと思に人戀る床にはさらにふされさりけり

戀のうたはいつれも〳〵心をしむるすちなれは。をとらぬこゝろはへはへるにも。夢の床にふされぬまてはへるうたは。今すこしまさりてやと見えはへれは。あはせからにやはへらん。これはあるやうありて。右かちにはさためたるそといひ侍りけるを。ひたりの人々相撲にいかにととひ侍りけれは。あからさまなるたひねのいとつれ〳〵なるに。ちかきまたさためたるとか。夢さめむ後のよまての思ひ出にかたるはかりもわかみえぬかな。

判者
大和守義忠朝臣

歌撰人
左　相撲
右　侍従乳母

此本以二西行上人自筆本一書寫之。少々雖レ有二不審事一任レ本寫畢。重而以二類本一可レ考レ之而已。

祐子內親王家歌合

永承五年六月五日。於賀陽院一宮御方有和歌合事。兼日關白殿下(賴通)相分男女各六人賜題。櫻。郭公。鹿。令獻和歌。以西渡殿爲上達部座。聊有盃盤儲事。雖在前議引以及今日。蓋爲相當庚申也。右大臣(敎通)不期而會。內大臣(賴宗)。中宮大夫(長家)。源大納言(師房)。左衞門督(隆國)。右大辨(經長)。左大辨(資通)。式部大輔資業各在座。(大臣以下大納言以上。着烏帽子直衣。)聽不及廣席。坐席惟窄。仍殿上侍臣不得追從歟。頃之。宮女房(小辨)。所獻和歌入香壺筥。自御簾中出之。便擬文臺歟。(以銀彫透唐草。以瑠璃水精色々珠玉爲花葉。在置口。其底以鏡爲水。以銀龜爲薫爐。在雲母爐。香四散。蘭麝漫薫、置洲濱立沈香。右洲濱上立銀鶴一雙爲箸匙臺。兩鶴翼上置郭公鹿歌二首。又銀心葉雕野水施後素。其重書櫻花歌。)殿下召中宮亮兼房朝臣。令傳取置寢殿南廂西戶前。女房所獻歌置筥上。各書彩牋。或以題目趣施畫圖。或以金銀泥成文彩。風流之美不可覼縷。男以白色紙書之。(兼房朝臣施下繪。)又召菅圓座置御簾前爲左右講師等座。(左講師右大辨。右講師左大辨。)盃酌數巡之後。令講和歌。有儀。以女房爲左方。以男房爲右方。衣色照輝於簾前。香氣發越於戶外。乃縱觀之好。不俗眼所可窺。獻歌者依召候南簀子敷。觀會有限。感情難抑。仍內大臣評定和歌。源大納言注勝負。依無籌刺也。象外之勝遊未曾有者歟。

櫻

一番

左勝　典侍

吹風そ思へはつらき櫻はなこゝろとちれる春しなけれは

右　式部大輔資業

君かすむやとにゝほへる櫻花春くるひとのかさしなりけり

二番

左　侍從

霞たつ峯にゝほへる櫻こそなにゝもまさる物にはありけれ

右勝　中宮亮兼房朝臣

長閑にもみゆる櫻の匂ひかなやとのけしきや風もしるらん

三番

左勝　伊勢大輔

君かよのはるかにみゆる山櫻としにそへてそ匂ひましける

右　讃岐守家經朝臣

さてもなをあかすやあると山櫻花をときはにみる山もかな

四番

左勝　出羽辨

さくら咲はるの霞のたちしより花に心をやらぬひそなき

右　大膳大夫範永朝臣

さけはなをきてみるへきは霞立みかさの山の櫻なりけり

五番

左勝　小辨

たつねくるかひもある哉山櫻しら雲とのみよそにみつれは

右　兵部少輔經衡

年をへて匂ひまされは櫻花みるにあくへきはるやなからん

六番

左勝　相摸

淺みとりかすむやまへは白妙の櫻にのみそはるはみえける

右　能因法師

春かすみしかの山こえせし人にあふ心地する花さくらかな

七番　郭公

左　典侍

いつしかとまちつるよりも時鳥きゝてそいとゝしつ心なき

右勝　式部大輔資業

郭公こそにかはらぬ初聲をねさめてきけはとこめつらなり

八番

左持　侍従

ほのかにてすきぬなれとも郭公聲は耳にもとまりぬるかな

右　中宮亮兼房朝臣

なつの夜はさてもやねぬと郭公二こゑきける人にとはゝや

九番

左持　伊勢大輔

きゝつともきかす共なく時鳥こゝろまとはすさよのひと聲

右　讃岐守家經朝臣

時鳥かたらふこゑをきくおりそまたこと〳〵は覺えさり鳧

十番

左持　出羽辨

さみたれにぬれてきなくはほとゝきす初聲よりも哀とそ聞

右　大膳大夫範永朝臣

初聲をきゝそめしより時鳥ならしの岡にいくよきぬらん

十一番

左勝　小辨

ねぬよこそかすつもりぬれ時鳥きくほともなき一聲により

右　兵部少輔經衡

まつほとに一聲なきて過ぬれはなこりこひしき子規かな

十二番

左持　相摸

さみたれもあかてそすくる時鳥よふかくきゝし初音計に

右　能因法師

夜たにあけはたつねて聞む時鳥しのたの杜のかたに鳴也

十三番　鹿

左勝　典侍

秋霧のはれせぬ峯にたつしかは聲はかりこそ人にしらるれ

右　式部大輔資業

妻戀も色にや出るさほしかのなくこゑ聞はみにそしみける

十四番

左勝　侍従

小倉山たちともみえぬ夕霧につまゝとはせる鹿そ鳴なる

右　中宮亮兼房朝臣

たかせこに妻こひかねてなく鹿は逢坂山にゆきてすめかし

十五番

左　伊勢大輔

夕霧につまゝとはせる鹿の音やよるぬるしきも驚かすらん

右　讃岐守家經朝臣

鹿の音そねさめの床に通ふなるをのゝ草ふし露やをくらむ

十六番

左　出羽辨

きく人のなそやなからん鹿の音はわかつまをこそ戀て鳴らめ

右勝　大膳大夫範永朝臣

あらし吹山のおのへにすむ鹿はもみちの錦きてやふすらむ

十七番

左持　小辨

さをしかの聲きこゆ也みやきのゝもとあらの萩の花盛かも

右　兵部少輔經衡

妻こふる鹿のこゝろは秋萩のしたはをみてや色になるらむ

十八番

左持　相摸

露むすふ萩の下葉やみたるらん宮城野のはらにをしか鳴也

右　能因法師

秋の野に妻を戀つゝ鳴鹿はしからむ萩になくさみやする

勝負褒貶之比。第十七番鹿歌持疑。反覆被レ定レ持了。其後簾中有二驚レ耳微音一。相挑之心中動二外形一歟。滿座高聲乘レ興催レ感。着二本座一後置二碁手料紙一。擯俗佳遊掩レ古被レ今。遺美難レ盡餘興交侵。賞嘆之腸欲レ罷不レ能。仍當座上卿以二三首題一同成二嘉詠一。召二讃岐守家經朝臣一令レ講レ歌。

郭公　殿下

曉明の月たにあれやほとゝきすたゝ一こゑのゆく方もみむ

同題　右大臣

ほとゝきす過にし聲を忍ふるは待しよゝりもめこそ覺ぬれ

櫻　內大臣

櫻花あかぬあまりにおもふ哉ちらすは人やおしまさらまし

郭公

まつことは今もたえせす時鳥なのみたちぬる五月と思へは

鹿

秋をたに空にしるなる小男鹿の戀にはまとふ聲そ聞ゆる

櫻　中宮大夫

花の色にあまきる霞立まよひ空さへ匂ふやまさくらかな

郭公

ね覺して聞たひことに時鳥ふりせぬ物は五月雨のこゑ

鹿

過て行秋のかたみにさをしかの己か鳴音もおしくやある覽

櫻　源大納言

君かよにあふへき春のおほかれはちる共櫻あくまてそみむ

郭公

あたに聞人もやあらむ時鳥ぬるよもなくて待出たる音を

鹿

いつとなく思ふ心のなけれはや秋しもしかの妻を戀らむ

櫻　左衞門督

ちることはならはさりけり櫻花匂ひそめしは誰かをしへし

郭公

五月闇またれし物を時鳥いまは山ちに入やしぬらん

鹿

秋の野に多かる物をゝみなへしなにをこふとか鹿の鳴らむ

櫻　右大辨

たつねてもなをみなみはや櫻花咲とつけらむところ／＼に

郭公

哀ともしらぬもの故ほとゝきすまつに幾よのね覺しつらむ

鹿

たひことのかりねの野へに夢覺ておきふす鹿の聲を聞かな

櫻　左大辨

たくひなく匂ふやと哉櫻花ほかの春をはなにか尋ねん

郭公

ほとゝきす深き聲にならひつゝなかぬ折さへ待明すかな

鹿

み渡せはのへの秋霧立こめて鹿の音のみそかくれさりける

殿下抽二郭公題一殊令レ詠二嘉什一。詞林花鮮艷流泉清。講席之間諷吟無レ止。嘉歎之餘右大臣執而懷レ之。退出之比曳二出龍蹄二疋一。一疋右大臣。一疋内大臣。前駈者取レ之。浮雲半漢。觀者驚レ眼。自餘上卿達旦退出。興味不レ盡之故也。式部大輔資業奉二教旨一粗記レ之而已。

皇后宮春秋歌合 天喜四年四月晦日

判者　内大臣頼宗

歌撰者　左頼宗　右長家

讀師　左顯房　右隆俊

講師

一番

左　臨時客　内乃式部命婦

春たては先もろ人もひきつれて萬代ふへき宿に社くれ

右　八月十五夜月　伊勢大輔

くもりなき空の鏡とみゆる哉あきの夜なかく照す月影

二番

左勝　春日祭　範永

けふ祭る春日の山の神ませはあめの下には君そさかへん

右　七夕祭　内侍土佐

萬代に君そ見るへきたなはたの行あひの空を雲の上にて

三番

左勝　櫻　右大臣

春雨にぬれてたつねむ櫻花雲のかへしの嵐もそふく

右　こまむかへ　下野

ひく駒の數より外に見えつるは關の淸水の影にそありける

四番

左　鶯　宮大夫隆國

山里の垣根に春やしるからむかすまぬさきに鶯のなく

右　はき　美濃

折やせむおらてや見まし秋萩に露も心をかけぬ日そなき

五番

左勝　子日　頭中將

いつれをかわきてひかまし春日野のなへて千年の松の緑を

右　鴈　伊勢大輔

小夜更て旅の空にて鳴鴈はをのか羽風や夜寒成らむ

六番

左持　梅　相摸

岩間もる水にそやとる梅花梢は風のうしろめたさに

右　小山田　伊勢大輔

秋の夜の山田のいほは稲妻の光のみこそもりあかしけれ

七番

左　青柳　宮内侍

みな人の心にかけてくる物は岸になみよる青柳の絲

右勝　もみち　民部卿長家

大井河瀧つせもなく秋ふかみ紅葉の淵と成にけるかな

八番

左　殘雪　但馬

花ならておらまほしきはなには江の芦の若葉にふれる白雪

右勝　菊　民部卿

紫のまたあかさりし二葉にも菊に心はそめてしものを

九番　祝

左勝　祝　源三位俊賢

長濱の眞砂の數もなにならすつきせすみゆる君か御代かな

右　大夫隆國

住の江に生そふ松の枝ことに君かちとせの數そこもれる

右清書。　左兼行眞名。　右經任卿母。

右天喜四年四月晦日後冷泉院皇后宮歌合也。

備中守定綱朝臣家歌合

治暦三年三月十五日式部丞基綱合之云々

題

祝　春雨　霞　鶯　夜風　綠草

蕨　櫻　岸柳　苗代　歸鴈　弦月

欵冬　躑躅

歌人

判者

一番　祝

左勝　兼清

神まして君か命のしるしあらは千とせをふるの社なりけり

右　・忠季

かすしらす行末遠き君か代は鶴龜よりもひさしかりけり

二番　春雨

左持　佐忠

春雨はぬるれとさらにいとはれす花さきそむる始と思へは

右　昌任

しめ〳〵と降くらすなる春雨は軒のしつくの絶ろひまなし

三番　霞

左勝　基綱

あさまたきふる秋きりに夕されの春の霞はたちまさりけり

右　若乳母君

はれまなく夕のかすみたつ折は月なき夜半の心地こそすれ

四番　鶯

左勝　惟兼

としことになきふるさとも春くれは猶めつらしき鶯の聲

右　信通

としふれとみゝなれはせて鶯の聲きくことにめつらしき哉

五番　左勝　夜風　相兼

さ夜更てはけしかるらしこち風の花咲宿はよきてふかなん

右　良成

風のをとの檜の板戸に聞ゆるはよ更て人のとふかとそ思ふ（とふにも風ともおほえす）

六番　左勝　綠草　僖時

をしなへて野もせにおふる草の色は綠深くそなり增りける

右　成道

野邊みれはみとりの草に成にけり變らぬ松の色はかりして（こと色ならはこそかくよまめ）

七番　左勝　蕨　頼成

野へ見れは烟もたゝて春の日にもえいつるものは蕨なり皀

右　貞義

花見にと人にはいひて春の野に立ましりつゝ蕨をそおる（わらひおるにかりにてはいかゝ）

八番　左持　櫻　頼賢

さくら花さける盛りの山里はそらよりふらぬ雪とこそみれ

右　國信

なかめつゝおるへき枝も見えぬ迄ひまなく咲る八重櫻かな（いかなる枝を見給ふそ）

九番　岸柳

左　成助

みる人はきしになみよる青柳のいとに心をかけてこそくれ

右勝　永則

河波のみとりの色にみえつるは岸の柳のかけにそ有ける

十番　左　苗代　頼方

みな人のをのかひき／＼せき入つゝまかする物は苗代の水

右勝　頼季

みわたせはみな苗代におりたちて民のいそかぬ里のなき哉

十一番　左　歸鴈　相任

雲路わけこゝろそらにて行鴈のこの春はかり歸らさらなん

右勝　成任

行鴈のみち見えぬ迄しら雲の八重立かくせしはしとゝめん

十二番　左　弦月　經俊

出るよりこよひ計は弓はりの月は入までのとけからなむ

右勝　道賢

弓張の月はのとかにみゆれとも入山のはのなからましかは（みゆれとも所あるましき）

十三番　左持　款冬　經光

千代ふへき君か御代にはいとゝしくゐての山吹咲まさり皀

右　僖信

咲さかすおほつかなきに山吹をよらぬゐてなくたつねつる哉（ゐてはおほかるものか）

十四番　左　躑躅　石見君

此比はつゝしの花に照されて端山のしけりこくらからしな

右勝　　五節君

さほ姫のみなくれなゐにいは躑躅もえぬ計(なりにイ)もそめてける哉

十五番　戀

左勝　　信綱

みるめなきあまのうき舟戀にのみこかれて物を思ふ(なけくイ)比かな

右　　忠季

思ひしる人もなきよにあちきなく戀にしにする名をや止めむ

右以猪苗代兼誼本書寫遂一挍了

禖子内親王家歌合 治暦三年九月九日庚申

題

菊

歌人

左	右
美作	中務
讃岐	兵衛
駒	さいも
出羽	
せし	

九月九日おまへに。女房たち菊ひともとつゝうへさせて。御らんせさすとて。

一番　菊

左　美作

君か世をなか月のけふ移しうふる菊にはならふ花なかり皃

右　中務

君かため移しうふれは菊の花ちとせ匂はんことそしるけれ

二番

左　讃岐

うつしみは冬しも深くうつろへよ菊より又は花もあらしな

右　兵衛

うつしうふる宿をやかねて菊の花嵐とゝもにをける白露

三番

左　こま

君かすむ宿に千年の秋をへてのとかに菊のにほふへきかな

右　　　　せし
露深く植つる菊のえにしあれはぬれても千世の秋はへぬへし
四番
左　　　　出羽
うふるよりしかこそみゆれ白菊の久しかるへき花の匂ひは
右　　　　さいも
なか月のなかきためしの菊の花心してをけ夜半の初霜
五番
左　　　　せし
ふかきえを心にかけてうふるよりかすをきまされ菊の白露
右　　　　さいも
色々のにほひをこめて初霜のおくゆかしけに見ゆるしら菊

禖子内親王家歌合 治暦四年五月五日

題
菖蒲　時鳥　五月雨　橘　卯花　樗
早苗　照射　螢　水鶏　夏草　蚊遣火

歌人
左　　右
兵衛　駒
近江　武藏
大和　式部
讃岐　せし
出羽　中務
さいも　美作
遠江

一番
左　菖蒲　　兵衛
玉にぬくけふの菖蒲は宿ことの軒端にかけて誰か見さらん
右　　駒
なかきねをたつぬ〳〵とせし程にひきもやられぬ菖蒲草哉
二番　郭公
左　　あふみ
時鳥なけは心そあくかるゝ空たのめすとおもふものから
右　　むさし
夏山の道もまとひぬ時鳥あかてやみぬるこゑをたつれて
三番　五月雨
左　　大和

なかむれと行かたもなし五月雨のをやまん空の雲間をそ待
右　しきふ
かきくらし晴間もみえぬ五月雨はたこの裳裾をほす程もなし
四番　橘
左　さぬき
玉にぬく花たちはなをいつしかとけふの袂に香りかへたり
右　せし
たち花の花吹みたる夕風はむかしをこふるみにそしみける
五番　卯花
左　さぬき
山かつのしつの垣ねも卯花のおりにや人のおもしろくみん
右　しきふ
卯花の盛りならすは山かつの垣ほにたれかこゝろとめまし
六番　楞
左　兵衛
身にかへて誰かみさらむいつしかと待しあふちの花咲に𪀚
右　中務
我せこかいつかとまちしかひありて妹にあふちの花咲に𪀚
七番　早苗
左
里遠み山田のさなへとるほとはしつ心なくものをこそ思へ
右　美作
衣手のぬれゆくまゝに早苗とるたこはかりほに秋を待らむ
八番　照射
左　出羽
奥山のしかのたちとをたつぬとてともしにのみもいる心哉
右　美作
ともしせぬ木影なけれは小倉山立かくれける鹿そかひなき
九番　螢
左　さいも
澤水にすたく螢の光には草の根さしもかくれさりけり
右　中務
久方の月ならねとも草村のほたるそよるの光なりける
十番　水鶏
左　遠江
まつ人のなそありかほに夜を重ね叩く水鶏におとろかる覧
右　武蔵
待人のなき宿なれと夜もすから叩く水鶏におとろかれぬる
十一番　夏草
左　やまと
夏草をむすふしるしのなかりせはいかてゆかまし山里の道
右　こま
見渡せはのへの夏草さをしかのかくる計りもなりにける哉
十二番　蚊遣火
左　出羽
誰かかくつけはをきけん夏くれはまつした燃る宿の蚊遣火
右　せし
すくもかきをのれふすふる蚊遣火の煙にむせふ賤のおやなそ

呂保殿歌合 治暦四年十二月廿二日庚申

こよひろほとのゝはさまにて。庚申かしをまもらせたまはむとてうたあはせあり。ひたむのかたむたにまいる。いては。みまさか。せし。さかみ。こま。右の方人にまいる。みやとの。中將。さいも。なかつかさ。式部。題五首をたまふ。月光似氷。雪埋松。夜霰。寤夢。炭竈烟高。佛名。これなり。はたみかのれいれいたるつきもかけたかく。ちゝたる雪のよも。とりのこゑあかつきをつけわたるに。つかひをはりぬ。

左右のかたむたうたなきは。その名をかゝすかし。

一番　月光似氷

左　いては

天の原みなそこかけててらす哉池の氷にやとる月かけ

右　みやとの

冬のよの氷にやとる月見れはひかりもさゆるこゝち社すれ

二番

左　みまさか

見る人のみにさへそしむ池水のこほりの上にすめる夜の月

右　みやとの

こほるとも宿れる月のみかゝすは池の鏡は暗くやあらまし

三番　雪埋松

左　いては

ちとせふる松の緑はふかけれとひとよの雪にうつもれに鳬

右　はりま

高砂の松はいつれそしら雪に梢もみえす埋れにけり

四番

左　せし

松かえもふりつむ雪にうつもれて冬は緑の色そわかれぬ

右　中將

おほつかないつれみとりの松ならんみな白妙に雪し積れは

五番　夜霰寤夢

左　せし

ぬとはなし霰ふるやの板まあらみもりくる毎に夢も覺つゝ

右　中將

冬の夜はあられの音に寐覺つゝ夢みることのたえてなき哉

六番

左　みまさか

冬の夜は夢結ふまそなかりけるあられ降しく音したえねは

右　さいも

夢さむる夜半のあられのもりくれは片しく袖に玉そ亂るゝ

七番　炭竈烟高

左　さかみ

つねよりも深山さゆへしはれまなくまきの炭竈烟たちます

右　なかつかさ

大原のまきのすみかまたちまさりあま雲はれぬ山とこそみれ

八番

左　こま

すみ竈の烟は雲とたなひきてはれまもみえす大原の里

右　さいも

おほはらや槇の梢も見えぬまてやくすみかまの煙たつめり

九番　佛名

左　　　　　　　　みまさか

あらはるゝみよの佛のなをきくに積れる罪は霜ときえなん

右　　　　　　　　式　部

賴みつるみよの佛の名をきかは積れる罪もあらしとそ思ふ

十番

左　　　　　　　　せ　し

年のうちにつもれる罪をのこさしとみよの佛の名をそ唱る

右　　　　　　　　中　將

君かよをみよの佛にとしへてもかへす〳〵もいのる月かな

日記は女すらもすへきわさならむよ。わすれぬさきにとめよと。おほせことありしかは。またかきつけてこそはへめれ。

治曆四年十二月廿三日のよのみわさにて南。

こよひうたよみし人々。

みまさか　後一條院乳母。從三位藤豐子トイフ。右大將道綱女。大江定經美作守ノ時妻トナル。仍ミマサカトヨフ。

こま　上東門院ニテ小馬命婦。後一條院ノ時內侍トナル。後一品宮ニマイル。父母イマタ見アタラス。

せし　一條院皇后女房。後一品宮ニマイル。中納言平惟仲女。此人道雅ノ妻ニテ子一人アリシ。イカカシテカアリケン。アル時ミソカニニケテ一條院皇后宮ニマイル。後ニ大和守義忠妻トナル。仍大和ノ宣旨トヨフ。

いては　上東門院ノ女房。後三品宮ニマイル。出羽守平秀信女。仍出羽弁トヨフ。

さかみ　入道一品宮女房。父未詳。母能登守慶滋保章女。公資朝臣相摸守ノ時妻トナル。仍號ニ相摸。本名乙侍從。

さいも　入道一品宮女房。三河守菅原爲理女。母ハ加賀丹波守奉親女。仍加賀左衞門トイフ。時ノ人サイモトヨフ。

中將　大齋院女房。源爲理女。母上東門院播磨。大齋院中務姉。

式部　上東門院式部命婦。後朱雀院ノ乳母トナル。筑後守藤信君女。時ニウタヨム女房ニ式部トイフ名多シ。紫式部。和泉式部。綸式部。紀伊式部。小式部。マキラハシサニシルス。

みやとの　後一條院中宮女房。出雲守成親女。仍ミヤトノ出雲トヨフ。

なかつかさ　大齋院女房。源爲理女。同院中將弟。後ニ土佐守範基妻トナル。

呂保殿ハ香爐峯ノ圖障子ニアリ。仍呂保トノトイフ。麗景殿ヲ麗ノ字ヲヨマイテ。計以殿トイフニ同シ。香ノ字ハヨマヌナリ。日記ハ出羽弁カクトイフ。

群書類従卷第百八十二

和歌部卅七歌合三

氣多宮歌合 延久四年三月十九日國司通宗朝臣於社頭合之

題

松　榊　鶯　鹿　櫻
紅葉　卯花　雪　郭公　千鳥

歌人

松　通宗
よろつよの子日とそ見る春かすみ棚引山の峯のまつはら

榊　橘成元
かけまくもかしこき神の榊はを手にとる君は萬よやへむ

鶯勝　國元
梅か香をとめつゝ鳴か山里の垣ねをつとふ鶯のこゑ

鹿
吹かへす葛のうら風さひしきに鹿も鳴也秋の夕暮

櫻持　源縁
山さくら白雲にのみまかへはや春のこゝろのそらに成らん

紅葉　行宗
秋ふかみあさ夕霧のたつ田山紅葉のにしききてのみそみる

卯花
卯の花のをりはかりこそ山里のかきねの山は一重みえける

雪勝
つきもせす越のしらねに年積る雪は常盤のものにそ有ける

郭公
明方にほのめくこゑは時鳥ねさめのこひのこゝちこそすれ

千鳥
ねさめする有明かたの淋しきにさほのかはらの千鳥なく也

攝津守有綱家歌合 承保二年八月廿日拾國合之七番

題

風　霧　野花　芦　雁

鹿　戀

歌人

左

帶刀兼定　史大夫成時　兵衞大夫　縫殿助

帶刀敎定

右

越後四郎　馬大夫頼清　上總大夫惟淸　遠江前司

越後前司　馬允宗忠　兵部大輔

一番　風

左勝　帶刀兼貞

秋風になにはのあしもなひくめりうらみつるかな人の心を

右　越後四郎

いつくにも秋は身にしむ風なれとなにはゝ芦のしつ心なし

二番　霧

左勝

かは霧のひまゝなけれは程近みゆきかふ聲を音にこそきけ

右

さたかにもえこそみわかね難波潟ふる秋霧のたち隔てつゝ

三番　野花

左勝　史大夫成時

みやきのゝ小萩かはらの花さかりから錦ともみえわたる哉

右　上總大夫惟淸

年をへて野への花をはみつれ共かはかり匂ふ秋はなかりき

四番　芦

左持

難波江にまたき初雪ふりにけり芦のほにいててしけき汀に

右　遠江前司

難波潟芦かりをふねなかりせは水にきえせね雪とこそみめ

五番　雁

左勝　兵衞大夫

年をへてきく度ことに身にしみてこひしきものは初雁の聲

右　越後前司

かりそめの宿としらるゝはつ雁の雲ゐはるかに鳴わたる哉

六番　鹿

左　縫殿助

まつ人もなき山里も秋は猶ねられさりけり鳴しかのこゑ

右　馬允宗忠

いつとても忘やはするいかなれは秋しも鹿の妻をしるらむ

七番　戀

左　帶刀敎定

こひすれは旅ねの床の草枕露置増るものにそ有ける

右　兵部大輔

戀しさに命たえなはつの國のいく田の杜の名にやたかはん

右攝津守有綱家歌合以猪苗代謙庭本書寫一挍了

内裏歌合承暦二年四月廿八日

題

子日　霞　鶯　櫻　藤花
菖蒲　郭公　五月雨　七夕　月
鹿　紅葉　雪　祝　戀

讀人

實政朝臣　公實朝臣　家忠朝臣　伊家朝臣
政長朝臣　匡房朝臣　顯季朝臣　通俊朝臣
仲實朝臣　道良朝臣　道時朝臣　爲家朝臣
基綱朝臣　顯綱朝臣　師賢朝臣　正家朝臣
定綱朝臣　家道朝臣

講師

左方
權左中辨師賢朝臣
右方
右中辨通俊

判者

皇后宮大夫源顯房

一番　子日

左勝　頭辨實政朝臣

ねのひするあまたの人の引つれて君か千年をまつと社みれ

右　中宮權亮公實朝臣

君かよにひきくらふれは子日する松の千年もかすならぬ哉

いつかたもなむあらん。まうせとおほせらるゝに右の人。右は千年をかすならすといへり。あれはたゝ千とせをまつとあれは。ことのほかにおとれり。又松といふことかくしたる。子日歌のためしにあらす。そへたるとわきといひたると。いかてかひきくらへむさ申に。もろかたいきの下に。あめの下にありとあらん人のまたん千とせをは。すくなくやはあるへきとはかりまうすに。右の人あめの下の人のみな待とも。おなし折のちとせにこそあらめ。かすならすといひたるは。ゆくするはるかに遠くなんあると。又松をそへたるとはえのへ申さぬに。右のうたの難を。つゆはかりも左に申人なし。判者大納言。右の歌はいみしうおかしくよき歌也。左のうたはたたよみたるにうたなれと。かつと定られしこそ心えさりし。

二番　霞

左持　左中將家忠朝臣

たに河の音は隔すまかねふくきひの中山かすみこむれと

右　藏人辨伊家

いつしかとけさは霞のたなひけは春きにけりと空にしる哉

俊綱。このうたはまつさしところこそなきやまひあり。へたつゝへ〔マこ〕どいふはきのやまひありと申す程に。右の人々たに河の音とよみ。まかねふくきひの中山といへれは。ふるき歌ののこりすくな也といふ。通俊。このかすみはたちとこそはるかなれ。女四宮の前栽あはせにも。さかのをすきてあたし野まて行けんも。あちきなしなとこそ。さためためれと申すに。實政。へたてか

くすはつねに讀ならはしたること也と申せとも。そのことはきこえす。させるろうもなし。ふる歌あまりかくれなくとりたる事も。えいひやらぬほとに。右のうたを難せよとあれは。實政。いつしかとあるはこゝろえす。まつ春もなくて。いつしかとはいかていふそといふに。通俊。やまもかすみてなとこそはよめなと申程に。判者いつれも〳〵持也とさためられぬ。

三番　鶯

左持　刑部卿政長朝臣

としをへてきけとあかぬはわか宿の花にこつとふ鶯のこゑ

右　美作守匡房朝臣

いかなれは春くるからに鶯のをのれかなをは人につくらむ

我宿とはうちにてはよまぬことなりとなすれは。左。天徳のうた合にもよめりなといひて。右のうたをも からにとよめることは。いかなることそといふに。右の人々。からにといふ辭。きゝつるからによしの山とよめるは。歌合のうたにて。かちて後撰なとにも いれるうたそかし。わか宿さは近くはよまぬことゝなんきく。ことはのもしはふるきよきうたに よめりとも。たゝ今のうたの定にそしたかふへき。左よはけ也。右もされ歌なりとて。持と定られしも。され歌とはいかなるをいふそと。いらへまほしかりし。

四番　櫻

左　讃岐守顯季朝臣

たつねこぬさきにはちらて山櫻みる折にしも雪と降らん

右勝　右中辨通俊朝臣

春のうちは散らぬ櫻とみてし哉さてもや風のうしろめたきと

右の人々さきには ちらてとあるは。花をむけに惜む心なし。ちらさてあらんこそ本意なれなと申程に。師かた惜さのあまりに。わかみるをりよりは。こさりつるさきにとはいふなりと申に。右の人々 中々みぬ折にとおもふらん心は。後のうたによまんするにや。また注なとをこそかゝましかといふに。人みなわらひぬ。判者持と定めんとある程に。御前より さりともをとりまさりあらんとおほせらるゝに。さらは右かつとさためられしも。いとあやしく。さきにはいかにさためむと おほされけるにかとおほえし。

五番　藤

左持　中將家忠

藤浪はみきはの松にかゝれ共風のけしきはのとけかりけり

右　丹後守仲實

みなそこも紫ふかくみゆる哉岸のいはねにかゝる藤なみ

實政かいふやう。かけうつるといはては。いかてかみなそこむらさきふかきとはよむへきと申ほとに。右の人。藤の歌の本にするうたには。たこのうらの そこさへにほふとよめるは。いつかうつれるなとよみたると申に。通俊。左の歌にかせのけしきのとけしと よめるも故なし。藤なみににたらんからに。かせのともかくもあるへきかはなといふに。例の持とさためられぬ。

六番　菖蒲

左持　大宮亮通良

菖蒲草なにのためしに引そめてかゝらぬ宿のつまなかる覽

右　　大江匡房

けふよりはつまとそ頼むあやめ草かりそめ也と思はさら南

師賢あやめにあらて。戀にてなんあるといへは。右の人。なにこともつまといふ處あり。やとならねはさつきのつまのもの也。宿ならてふるきうたにも。秋はわか心のつまとあらねともとよめり。またなにのためしにとよめるは。あやめをもの〻ためしにせんといふこと。いはれすといふに。通俊。つねならてひくとよめるは。いかなるそといふに。さねまさ(脱カ)めんあやめ草とよめる歌ありといふに。俊綱通俊なと。是はなにの歌そ。誰かよめるそと〻へは。その人のともおほえすなといふに。判者。右のうたのけふよりたのむらん。いまはしめたりとて右まくと定られぬ。なにのためしにといふも。今はしめてしかにこそ。はたまらすめりき。

七番　　郭公

左持　　右近中將家忠

時鳥あかて過ぬるこゑにこそあとなき空をなかめつるかな

右　　藏人辨伊家

ほと〻きす曉かけて鳴こゑをまたぬねさめの人やきくらん

とし綱申すやう。あとなきそらとは。いかによみたるそ。郭公はあとある物かは。又いま〳〵しきやうなりと申すに。左ことにのふるところなし。右の歌もまたぬ(ね脱)さめのといへるいはれなし。た〻おのつからきくらんひとを思ひやりたるも。おもへる處なきやう也とて。持と定られぬ。

八番　　五月雨

左勝　　道時朝臣

五月雨にたまえの水やまさるらん芦の下葉のかくれゆく哉

右　　爲家朝臣

五月雨のひまなき頃はいせの海士のも鹽の煙たえやしぬ覽

このたひのうたは定られす。左かちぬ。右の人々はおほみついてたるひよりのうたにこそと。する〳〵にてしのひやかにいへは。左の人き〻つけて。下葉のといへたらんを。いかてさおもふへきそ。あしのほすゑのかくれなとしたらんをそ。さはいふへきとてをかれぬ。

九番　　七夕

左持　　藏人少納言基綱

何れをか思ひますらん七夕のあふ嬉しさとあはぬつらさと

右　　丹波守顯綱朝臣

たなはたに心はかすとおもはねと暮行空はうれしかりけり

あき綱。たなはたは七日をのみよむもの也。あふたなはたあはぬたなはた ふたつあるやう也。又あはぬつらさとは むゆかの日よりさき。八日のひよりのちのかたかといふに。師かた。あひたる程のうれしさを。あはぬほとのつらさにまされりと いふなりといへは。つらきもいはれす。さるちきりのあるにこそあれ。心とつらきかは。さらはひこほしをも。なとゆかぬそとやいふへきかといふに。左また。たなはたの契りつらしなとよめることは。ふるきおほくの歌も。みなさはいはれなしとや思ふへき。またなとかさぬに心はうれしきそといへは。されは心もかさぬに。なとくれ行かうれしからんと讀なりといへは。左たかす〻ろに日のくれんかうれしかる

へきやうなし。後朝なとにこそくもるさへこそなともうれしかれ。たなはたをこそうれしからんともよみ。又わかこゝろをはかしたりといははこそは。我はうれしからめなといふに。例の持と定られぬ。

十番　月

左　權左中辨師賢朝臣

み草ゐてかけたにみえぬにこり江の底まて照す秋のよの月

右勝　東宮學士匡房

おほつかなこや有明の空ならんよるともみえす照す月かけ

右の人のいふやう。左の歌いとよからぬ心ちなむする。さらぬ水にも月はうつりなむは。光もさしておと〻う〔マヽ〕ちなんするとん申すに。通俊か影たにうつらさらん水にはいかてか。せめてあかき月なりともすむへきといふに。左の人ことに申す事なし。右のうた難しまうせとあるに。政長よはあけにけるはと申す。さらに心うる人なし。たまさかに右かちぬ。

十一番　鹿

左持　左中辨正家朝臣

ゆふ暮はをの〻萩はら吹風にさひしくもあるか鹿の鳴なる

右　右近中將公實朝臣

霧ふかき山のをのへにたつしかはこゑ計にや友をしるらん

實政。このうたは近きふる歌なりと申すに。公實。こゑはかりこそ人にしらるれといふと。友のゆく方をしるといふ事。ことこと也といふに。右の人。うたはもしつかひをこそいへ。もあるかといへるわたり。いとにくさけなり。是もきむもとか家の歌合にかはらさるはといふに。又持と定られぬ。

十二番　紅葉

左持或勝　師賢

吹かたに散もみちはの從へはららやましきはこからしの風

右　匡房

立田山散もみちはをきてみれは秋はふもとにかへる也けり

紅葉ちらすらん風の。うらやましきこそあやしけれ。大かたは。さはわさと紅葉をちらさはやとおもひけるか。心にもかなはさりけるにや。又したかへはと讀るも。むけに歌のことはとも覺えすみはけなれと。まさふさ申すに。師賢麓の里の秋にそありけるといふうたににたりといふに。匡房。これは又心もえて申すなめり。これこそまことのこととしらぬはくち惜けれ。このうたはかへるといふことをよむなり。秋をもみつるをは。かへるといふはをも根にかへるといふことなれは。秋のふもとにかへるとよむ也。麓のさとの秋なりといふ歌に。いつこかにたるなといふに。判者かすはいつかたのまされるそとあるに。あやしく成ぬ。右。今ひとつなんまけたる中に。此うたかたはひとしくなりなんとて。ちと定られぬ。

十三番　雪

左勝　實政朝臣

ふる雪のひかす積れはしからきの槇の靑葉もみえす成ゆく

右　通俊朝臣

雪降はみえしときはの山もなしみな白妙の梢のみして

右の人。雪は一夜にもあを葉かくるはかりはふらぬも

のかは。山かすあなかちにつもらすともありなん。まきの葉といはむに。文字のたらねは青葉といへる程。水とりのうは毛なとをいはんやう也。又これは松の葉しろきよしの山といふ歌をよめるにこそと申すに。左。そのことゝえまうさて。右の範永か五月雨の歌にみえしをさゝのはらもなしとよめるに似たりとなんする程に。右しをりたりと定られぬ。

十四番　祝

左勝　道時朝臣

みつかきはつきしとそ思ふ神風やみも裾川のすまん限りは

右　匡房

八百萬こゝらのかみの年ならはひるよる守る君かみ代かな

祝のうたはとかくな申そとて。左かちぬ。

十五番　戀

左　内藏頭定綱朝臣

わたつみにみるめ求むるあまたにも千尋の底にいらぬ物かは

右勝　越前守家道朝臣

戀すとも泪の色のなかりせはしはしは人に知られさらまし

右の人。左のうたはいつこに戀はあるそ。海人たに千尋の底にはいる。われもいらんと思ふらんも。すゝろかましき心ちすといふに。左も右もわらひぬ。實政。みるめこそは。戀よといへは。さてはあまのみすへき事なゝりなといふほとに。右かつと定られぬ。なにのみるめにありけむ。千尋のそこの心のあさゝもみなみえにけり。左の人々かもにまいりて。よろこひまうして　こうまくらへなとせさすとて。はらへしてたちける程に。内のたいはむ處より。みちのくにかみのたてふみして。あふちのうすやう二かさねにそかきたりける。

流れてもいとゝや頼むみたらしの河せにみそく祈かなひて

かへし。　頭　辨

いのる事かはせに深くなりぬれは汀ひとしくみえぬ也けり

右の返し。

みたらしのみそきは神もうけしかし汀まされる流と思へは

殿の女房。ものみ車より　こむまかきたるあふきのつまに。すたれのさきして。

嬉しきはみたらし河のためしにて引くらへつる駒のかす哉

かへし。　頭　辨

禊して心くらへにかちぬれは早くはこまもみゆるなるへし

右のかへし。

いつはりの心くらへのかちまけは空にたゝすの神そしる覧

右内裏歌合以猪苗代謙庭本書寫一挍了

若狹守通宗朝臣女子達歌合 應德三年三月十九日於七條亭

題

春駒　櫻　子規　水鷄　萩

月　鶯　雪　戀　祝

歌人

左　右

判者

通俊朝臣

一番　春駒

左勝　阿闍梨

春かすみたちのゝ薄つのくめは冬うちなつむ駒そあれける

右

あるゝ馬は皆葦毛かけにそみえつれと澤に移れる影も有鳧

左のうたは。春かすみたちのゝ薄なといふほとは。おなし野なれとつゝきおかし。さはあれと近きやむことなき人の歌に。冬たちなつむ駒そいはゆるなといふ事のはへれは。めつらしけなけれと。右の歌のあしけかけなとおもひよりたる。たはふれ歌のやうなり。又やまゐとや申へからむ。

あさ緑野への薄はひにそへてつのくむ色のまさる也けり

二番　櫻

左持

さくら咲はるの山へは雪消ぬこしのしらねのこゝち社すれ

右

山さくらちらぬかきりは白雲のはれせぬ峯とみえわたる哉

左歌右のうた。ともにめつらしきふしなけれと。あるはこしのしらね。あるははれせぬ峯なといへる程。をのゝいひなれうためきたり。

咲まさる匂ひそみえぬ櫻花いつれか人のわきて折へき

三番　郭公

左勝　五郎おほとねり

郭公あかすもある哉玉くしけふたかみ山の夜はのひところゑ

右

五月雨の空になけはや子規あかぬ心もはれせさるらむ

左の歌は　ふたかみ山あかすなといふ心いとおかし。ふることなとにやあらんとおほえ侍れと。たしかにそのことゝも覺えぬほとはさためかたし。右のうたは五月雨の空にはれせぬなと思ひよりたるほともおかしけれと。郭公をあかぬ心の。はれせぬといはんことそいかゝ。

ふたかみの山ほとゝきす鳴也はれせぬ空を誰か尋ん

四番　水鷄

左　藏人大夫

とふ人もなき山里のまきのとをよはに叩くはくゐな也けり

右勝　中務命婦

月のさすまきの板戸としりなから誰あけよとて叩く水鷄そ

右の歌　月のさすまきのいた戸なといふ事。めつらしからねと。いひなれておかしくなむ。

槇のとを叩く水鷄はおほかれと月の光そさし増りける

五番　萩

左　備前助一品宮御乳母

秋はきを咲のへことに尋つゝ露もおとさて(すイ)みるよしもかな

右勝　阿闍梨

すかる鳴あたの大野をきてみれはいまそ萩原にしき織ける

左歌。かみのもしつかひ。いひにくゝて。露もおとさすなといへる心。いまもむかしもいひふるしたる事なれは。めつらしけなし。右のうたあたの大野なといへる程。いとおかしうおもひよりたり。萩のにしき織けるなといへる處。いまそこの葉はにしき織けるなといへる。故き歌のこゝちせられて。珍らしけなけれと。おほかたいひなれたるこゝちせられてこそ。

玉にぬく露とはみれと小萩原織る錦にしかしとそ思ふ

六番　月

左持　出雲君

月みるとねぬよな〳〵の重なれは戀する身とや人にいはれむ

右　中務命婦

みる人の心に月のいりぬれはまつ山のははかひやなからむ

左歌ねぬよな〳〵のといへる程。歌めきたれと。月の心すくなくて。こひの心おほくなむ。右歌心に月のいるといふ事は。近き人のよまれたる歌になんある。又まつ山のはといふことは。人こそ月をはまため。山の月またむことはいかゝ侍らん。たゝしまちとる山のはこそつらけれといふふる歌(ことイ)を思ひよそへたるにや。かれは人の惜むあまりに。まちとるとみゆるにそ。此心にはあはすなん。

おしこめて夕霧たては久方の月はさやかに見えぬ也鳧

七番　鴛

左勝　出雲君

浮ねしてしたさえわたるをし鳥のうは毛にさへも置る霜哉

右

山河に心ほそくそすたくなる獨みなるゝをしにやあるらむ

左歌は末にうは毛にさへも置る霜かなゝといへるこそ。霜といふ題をよまんこゝちすれと。うきねしてしたさえわたるといへる。歌めきていとおかし。右のうたはすたくといふことを。こゝろほそしとはいかゝいふへからん。あまたある聲をいふにやあらん。からやうのことは證歌なとや入へからむ。獨みなるゝなとはいひなれたり。

山河の水さへ渡る冬のよにつかはぬ鴛は如何すたかむ

八番　雪

左勝

なにはえの芦のしのやも雪ふれは花の都にをとらさりけり

右　阿闍梨

あさとあけ衣手寒くうちみれはまかきもたはに降るしら雪

左のうたとりわきておかしき處なけれと。花のみやこにをとらさりけりなといへる事。けにさもいひつへし。右のうた朝戸あけ衣手さむくなといへる。ものいひさしたるやうなり。うちみれはなといへるも。つゝみの瀧なといはまほしくなん。又まかきもいかゝたはむへからん。

いつくとも降白雪はわかなくに都はことにみゆる也けり

九番　戀

左持　藏人大夫

人しれぬ思ひに年のへぬる哉いきのをたえはさてやゝみ南

右

戀しなは面影にもや別れなんそれはかりこそ身をは離れね

左歌人しれぬおもひにとしへぬるなといへる事は。いひふるしたる事なり。我のみしるはなといひつへくにそ歌めきたるは。ふるきことなれはにや。右のうた面影にわかるなといへること思ひえかたし。心あまりて其詞たらすなといへるは。かうやうの事をといふへきにや。これかれいきのを絕は。面かけにわかるといへることおなしやうになむ。

戀しなん心は同しさまなれはいつれ増るとみえぬ也皀

十番　祝

左勝

君か代は松よりすたつまな鶴の千歳をへつゝひなかへる迄

右

君か代はやほよろつよの神ことに齡をゆつる程としらなん

左はさても。右のうたやほ萬代の神ことにといふ事おほつかなし。

何よりも久しきものは雛鶴の松よりすたつ程にそ有ける

右若狭守通宗朝臣女子達歌合以百花庵宗固本書寫一挍了

高陽院七番〔首イ〕歌合 寛治八年

題

櫻　時鳥　月　雪　祝

作者

左

大殿中納言君　四條宮筑前君康資王母

周防内侍　右大臣家讃岐君

一宮紀伊君　信濃君

齋院攝津君

右

藤中納言通俊　江中納言匡房

顯綱朝臣　正家朝臣

行家朝臣　賴綱朝臣

左京權大夫俊賴朝臣

講師

左

右大辨基綱朝臣

右

右中辨宗忠朝臣

判者

帥大納言經信卿

一番　櫻

左勝　大殿中納言君

山さくら匂ふあたりの春かすみ風をはよそにたちへたて南

右　中納言通俊

春かせは吹とも散なさくら花はなの心をわれになしつゝ

〔此左歌いとうるはしうよまれたり。右歌は花の心をとよまれたる。花の心やは侍らんと思給ふれは左はまさりたりとや申へからん。〕

二番

左持　四條宮筑前君

くれなゐのうす花さくら匂はすは皆しら雲とみてや過まし

右

白雲とみゆるにしるしみよしのゝ吉野の山は花さかりかも

〔左歌はめつらしきやうによまれたれとも歌の心はとをくて雲と見つれと。ちかくてみれは紅に匂ふ櫻なりけりとよまれたる也。さらは山なとかけてとをきことなとやあるへからん。右歌はめつらしからねと別に難もなけれは持とや申へからん。〕

三番

左勝　周防内侍

山櫻惜むこゝろの幾度かちるこのもとに行かへるらむ

右　顯綱朝臣

花ゆへにかゝらぬ山そなかりけるこゝろは春の霞ならねと

〔右かゝらぬ山といふことは中比の歌にてみな知たる歌也。又霞かゝるとやよまれてあるへからす。おほつかなけれは左勝とや申へからん。〕

四番

左持　右大臣家讃岐君

八千代へんやとににほへる八重櫻やそ氏人もちらて社みめ

右　正家朝臣

風の音ののとけき春の宿なれはにほふ櫻をあくまてそみる

〔左八十氏人もちらてこそ見めとよまれたるは。いのちちらぬこゝろをちらてあれは俄に花のちらぬにやとおほゆるうへに。句の上ことや文字やおほからん。又右の歌はあくまてといふ詞よむことにてはあれと。花をあかんはいかゝ侍へからんとおほゆれは持とや申へからん。〕

五番

左勝　一宮紀伊君

朝またき霞なこめそ山櫻たつねゆくまのよそめにもみん

右　行家朝臣

おもふ事露たになきは山櫻はなみる程のこゝろ也けり

〔左歌はいとなひやかによまれ侍り。もしふることにやあらん。右歌の思ふこと露たかりなしとはまことの歌の詞には見すこそ給ふれ。左の勝とこそ申さめ。〕

六番

左　信濃君

たつねくる心もしるく山櫻いまこそ花の盛なりけり〔マヽ〕

右勝　顯綱朝臣

山櫻にほふ盛に風ふけはあたりの松も花さきにけり

〔左歌は殿上の花の歌なとに常に侍る歌。又わさとの難にはあらねと目なれたるやうにて。右歌は風そかしけるといふ古うたのすちにて。めつらしからねとすこしまさりたりと見給ふる。〕

七番

左持　齋院攝津君

ちりつもる庭をそみまし山櫻かせよりさきに尋ねさりせは

右　左京權大夫俊頼

山櫻咲そめしより久かたの雲ゐにみゆる瀧のしら糸

〔左歌はいと心はへおかしう侍り。右歌はきらひやかによまれたるやうに侍れと持とこそ申さめ。〕

一番

左　郭公　中納言君

五月雨のはれぬそらにも郭公こゑはさやかに鳴わたるかな

右勝　通俊朝臣

郭公こゝろのまゝにたつねつゝ生田の森に一聲そきく

〔此左のつゝきはまたくたりつかぬやうに覺え侍るはひかことにや。されといくたのもりにて聞なと歌めきたれは右勝とや申へからん。〕

二番

左勝　筑前君

山ちかくらこく舟は郭公鳴わたりこそとまり也けり〔マヽ〕

右

子規雲ゐはるかになのれはやあさくら山のよそに鳴らん

〔此左歌いとおかしくよまれて侍めり。かゝるふることあるやうにほのおほえ侍れとたしかならねは一定申かたし。右歌は心ふる〔かイ〕き歌と見給ふれ。上句もとの句も本歌とも侍らん。若朝倉や木丸とのに我をれは名乘をしつゝといふことをよめるにや侍らむ。下句はもし昔見し人をそ今はよそにきく朝倉山の雲非はるかにといふ歌にや侍らん。さらは朝倉山に名のりをしたらんを聞とあらんはかなひなん。此ことのおほつかなく侍れは左勝とや申へからん。〕

三番

左勝　周防内侍

よをかさねまちかね山の郭公雲のよそにて一聲そきく

右　顯綱朝臣

あくるまてまちかね山の郭公けふもきかす〔てイ〕やくれんとす覽

〔此歌は同しやうにのみ申侍を。左は時鳥を聞たる歌右歌はまたきかねは。さき／＼も聞たるをは勝とそ申める。〕

四番

左勝　讃岐君

ほとゝきす夏のよな／＼まち／＼て去年も今年も一聲そきく

右　正家朝臣

きゝつともいかゝかたらむ郭公おほつかなしやよはの一聲

〔右歌問人もなきにいかゝ語らんと侍るこそつゝかぬやうにきこゆれは左の勝にや。〕

五番

左勝　紀伊君

きゝてしも猶そまたるゝ子規なく一こゑにあかぬこゝろは

右

ほとゝきす音信しより音羽山ふもとの里をかれすとふかな

〔左歌よくしりたるやうに聞給ふるに。右のかれすとふとはなくてよみたるにやことたらぬやうにこそ見給ふれ。左の勝にや。〕

六番

左勝　信濃君

ほとゝきす雲井のこゑを聞人はこゝろさへこそ空に成けれ

右　顯綱朝臣

郭公いまそ鳴なるとなりにも吹つる笛〔のイ〕そ音にをとらめて

〔右歌笛の音とゝめつといふこと。おもひかけぬことなれは左めつらしからねとも勝りたりとこそは申さめ。〕

七番

左勝　攝津君

ゆめかとそおとろかれぬる子規またも音せぬよはの一こゑ

右　俊頼朝臣

待かねてぬるよもあらは郭公あかぬためしの名をやたゝまし

〔左の歌は今すこし思ひや入て侍らん。〕

一番　月

左持　中納言君

曇りなきくものうへまて照月はいとゝ光をみかくなりけり

右　通俊朝臣

月みれはひるとそ思ふ秋のよをなかき春日と思ひなしつゝ

〔右歌にひるとひといふ事又これ同事にやと申しかは。中納言はひる日とはみな又言かはりたれは同しことにはあらすとの給ひしを。詞かはりたれと同やうなれは猶さる心なしと聞給内に。櫻花咲ぬる時は常よりも峯の白雲立まさりけりと云歌合の歌いとよき歌也。それに猶まさるへしとこそ申しかとも。かく物え申されさりしかは。左の歌いともえさらさりしかは殿下にいかかさふらふへきと申しかは。例なとはいかかとおほせられしかは。かゝる時は持なんとは定たるよし申て侍ととめられぬ。〕

二番

左　筑前君

きみゝると空にしれはや秋の月曇らぬかけのよゝにすむ覧

右勝

あふ坂のせきの杉原下はれて月のもるにそまかせたりける

〔右歌は君みると空にしれはやとよまれて末にすむらんとよまれたるは。末の代はさもやよまれん。はしめを代々といふことはあまり久しうこそ思給ふれ。右歌杉原下晴てと侍る月のさし入て後侍らん。またしきにはれたりといはむこと先立てなん思ひ給ふると申たりしに。ともかくものへ申さゝりしところにも。なとかいはれさらんと思ふ給ふれは右勝にや。〕

三番

左勝　周防内侍

つねよりもみかさの山の月影はひかりさしそふ天の下かな

右　顯綱朝臣

岩橋の神のちきれるかひもなしくまなくてらす秋のよの月

〔右歌岩橋の神の契れるとよまれたるは葛城の神にや侍らん。さらは此はしをはえわたさすとこそいひつたへたれ。月にはえわたさしとやはあらん。月のあかきかひるのやうなれはこそさもみえめ。さこそ月の限をよまれたれは神もさやはいひしとおほさむと思ふ給ふれは左の勝にや。〕

四番

左勝　讃岐

秋のよはいとゝなかくそ成ぬへき明るもしらぬ月のひかりに

右　正家

常磐山した葉の露のかすことに影さしそふる秋のよの月

〔左めつらしきことのみ見えて。右の歌のときは山とよめるは。山口のみやかて露はをかね下葉といふことは。いかなることにかあらんと見給ふれは左の勝にや。〕

五番

左勝　紀伊

かゝみ山みねよりいつる月なれは曇るよもなき影をこそみれ

右　行家

水ならて人にも月やうつるらんみれは心のすみわたるかな

〔右歌人にも月やと侍るはいかなることにや。左の勝にや。〕

六番

左持　信濃

くもりなき玉のうてなのみかけるに光をそふる秋のよの月

右　頼綱

秋のよの月に心のひまそなきいつるをまつといるを惜むと

〔左右歌よせることみえ侍らねは持とや申へからん。〕

七番

左　攝津

照月の光さえゆく宿なれは秋の水にもつらゝゐにけり

右勝　俊頼

山のはに雲のころもをぬきすてゝひとりや月の立のほるらん

〔右勝に侍るにや。〕

一番　雪

左持　中納言

岩代のむすへる松にふる雪は春もとけすやあらんとすらん

右　通俊卿

押なへて山のしら雪つもれともしるきは越の高根也けり

〔左歌おかしくよまれ侍。右もうるはしく侍り。持にや。〕

二番

左　筑前

ふみゝける鳩のあとさへ惜きかな氷のうへにふれるしら雪

右　匡房

みかりのはかつふる雪に埋れてとたちもみえす草かくれつゝ

〔左歌鳩鳥ふみみけるといふことは。人こそふみみめ鳩の心はしりかたし。又跡さへおしきとは跡をおしみたるにや。ふるくはおしきと云ことは雪をおしみたりとこそみゆれ。右草かくれつゝとよまれたるは。鷹かりに草かくれといふことは鳥の草にかくれたることを申にやあらん。これは雪を詠たるにこそ。されと雪の草かくれたるにやあらむ。右の勝にや侍らん。〕

三番

左　周防内侍

雪もみな降かひありて積れはやしら雲かゝる山とみゆらむ

右勝　顕綱

と山には柴の下葉も散はてゝ遠の高ねに雪降にけり

〔左歌は白雲かゝるといふ言葉。ふるきことゝこそ覺ゆれ。右歌下葉もちりはつといふことといかゝあらん。〕

四番

左　讃岐
近江路はたみの笠のみみゆる哉こしにもまさる雪にそ有ける
右勝　正家
旅人のねすりの衣うちはらひはらひもあへすけさのはつ雪
[左歌近江路といふ事何事にか。たみの笠といふことを思ひてよまれ侍にや。それはさいはれてきこゆる物を。さらは右の勝にや。]

五番
左持　紀伊
あまのはら空かきくらし降雪に思ひこそやれみよしのゝ山
右　行家
雪ふれは野原を行も分やらすかやか下折いとゝしみたれ
[左歌思ひこそやれ神なひの森といふ同し心にや侍らん。右かやか下おれ雪に見たるともみえねはおなしほとにや。]

六番
左勝　信濃
遠近のみねのつゝきもみえぬまてあまきる雪も降しきにけり
右　顯綱
衣手によとのうら風さえ〳〵てたなかみ山に雪ふりにけり
[左歌勝にや。]

七番
左勝　攝津
降ゆきに杉の青葉もうつもれてしるしもみえぬみわの山本
右　俊頼
ふる雪に谷のかけはしうつもれて梢そ冬の山ちなりける

[左の歌いとおかしく侍り。勝にや。]

一番　祝
左持　中納言
きみか代は萬代までにさしてけりみかさの山の神の恵に
右　通俊
君かよの[はイ]天のこやねのみことより祝ひそそめし久しかれとは
[左右やんことなき神をかけたれは申かたし。持に侍めり。]

二番
左　筑前
君か代はまさこの數もあかすして[とイ]瀬々の千鳥も猶そふる哉
右勝　匡房
君か代は曇りもあらしみかさ山みねの朝ひのさゝん限りは
[左猶そふる哉あなかちにや侍らん。右の勝。]

三番
左　周防内侍
きみか代は龜のお山に住鶴の毛衣さへや千代をかさねん
右勝　顯綱
君か代はなからの濱のさゝれ石のいはねの山に成はつる迄
[右はまさりてこそ見給ふれ。]

四番
左持　讃岐
萬代といのりそつむる君か代は山田の原の下つ岩ねに
右　正家
君か代はかねてそしるき春日山二葉のまつの神さふるまで
[左歌萬代とよみて又君か代とよみたるもいかゝあら

ん。持とや申へからん。」

五番

左持　紀伊

よろつよをまつの尾山の陰しけみ君をそ祈る常磐かきはに

右　行家

あめの下久しきみ代のしるしにはみかさの山の榊をそさす

六番

左勝　信濃

萬代を又よろつよを増かゝみかけをならへてしるそ嬉しき

右　頼綱

もゝとせをかさね〳〵て君か代はつきしとそ思ふ萬よ迄に

七番

左持　攝津

千代ふへき君をまもれはみかさ山神の心ものとけかるらん

右　俊頼

おちたきる八十う治川の早きせに岩こす波は千代の數かも

〔右三番判之詞不見後人被勘之給ふへし。〕

中納言　勝一　負一　持三　筑前君　勝一　負三　持一

周防内侍　勝三　負二　讃岐　勝三　負一　持一

紀伊　勝三　持二　信濃　勝三　負一　持一

攝津　勝二　負一　持二

通俊　勝一　負一　持三　匡房　勝三　負一　持一

顯綱　勝二　負三　正家　勝一　負二　持二

行家　勝無　負三　持二　頼綱　勝一　負三　持一

俊頼　勝一　負三　持一

右高陽院歌合以村井敬義本書寫以流布印本及一本挍合了

東塔東谷歌合 永長二年

題　苗代　水鷄　照射　擣衣　鷹狩　神樂

一番　苗代

左持

ますらをはたに水ひきて小山田の苗代すとて春日くらしつ

右

春くれはをのゝ山田は苗代にゆきけの水をまかせこそすれ

左歌あまりにこはくて。おそろしきまてしなゝかならす。なかにもみつひきてなはしろはなと讀る。つかへたるやうに聞えていやし。右歌にをのゝ山田とよめる。いひつかす。されはおなしほとのうたにそ。

二番

左勝

賤のをは山田の氷とくるよりまつなはしろのいそきをそする

右

津の國やたか世わたりの河邊には苗代のためゐせきをそする

右歌なはしろともおほえす。津の國のなにはほりえ。またはさぬきのまのうの池なとのたおほくやしなはんとて。しはしめけむこゝちそする。左歌はむろのはやわせなとならむにても。あまりにそとくおほえはへれとも。すこしはまさりてそ。

三番

左勝　水鷄

さよなかに水鷄ならては山里の杉のいたとを誰たゝかまし

右

夏くれはたゝく水鷄に驚きて草のとさしをあけぬよそなき

右のうたとさしあくるといふこと。すこしおもふへし。又草のとほそはたゝくとも。水鷄にはまかはすやはへらん。又一度はかられて。よことにあくらんもあまりにそ。しかのみならす。たゝく水鷄をは。人かとおもひなしてこそかとをもあけめ。此歌はさこそ聞えね。ふるき歌にもなと さはよみ侍らむかし。もし又證歌なとはへるにや。左のうた杉のいたとゝよめるは。かゝるとかもならて。けにときこえはへり。

四番

左持

さよなかに誰かはこんと思へとも驚かれけりたゝく水鷄に

右

まつ人のくへきよなれはさゝぬとをいかにあけよと叩く水鷄そ

左のうたに。誰かこんとおもふらんは。夢のうちのことにや。さらはこそはおとろかれめ。もしはまとろまぬさき。もしはまとろみたるのちならは。おとろかれけりとは如何よまれはへるへき。又は ものおそろしきかたさまのおとろきにや侍らむ。右歌に まつ人のくへきよなれはとはへるは。さゝかにのふるまひなとのし侍りけるにや。おほよそすゑもふるめかしけれは。持にや。

五番　照射

左持

鹿待とは山のすそにともしして夏のよな〳〵たちあかす哉

右

すかるゆへ夏のよすからともしすと人にものへに立あかす哉

左右おなしほとの歌なり。右の歌の すかるゆへとよめるを。なか〳〵しうゆへにとはへらましかは。もと末かはらぬやうに聞えて。いよ〳〵ひとしくはへりなまし。いとしもはへらぬつかひとそいひ侍る。

六番

左勝

霧ふらぬくらふの山にともすひは覺束なしや鹿のたちとも

右

かつらきの神ならなくにともしする人もわりなし明る東雲

左の歌におほつかなしと讀るは。いかにはへる事にか。ともしは さつきやみにし侍るものそかし。くらうおほえは。ほくしをこそはらちふらめ。もしくらふの山と讀はにや。ふるうたそこの心みれとも。それはなをましくならねは。歌合にはいかゝ。右のうたに。ともしするものゝふの心の。かつらきのかみのやうにおほゆるこそ。すこしおもふへきこゝちし侍れ。しかをまちえぬことをなけくへき。明むよをはさまておもふへきならす。いかにいはむや。なく一聲とよむこゝちのすれは。猶これはまくへきにや侍らむ。

七番　擣衣

左持

長月のなかきよきけは衣うつもゝこゑちこゑやむ時もなし

右

秋ふかみよ風し寒く成ゆけは衣してうつ音そ絶せぬ

右歌したゝかならすこはく。詞たらす。又もゝこゑ千こ

ゑ。たゝうち讀ことはあしかるへき事ならねとも。ひとへに文集をよむならは。萬聲とはいはまほしきを。けにもしの置にくゝ侍るそかし。右歌しならかなれとも。ころもしてうつなといふことは中ころの名歌なれはちにや。

八番　左

秋ふかみよ風はけしゝむへしこそよもの里人衣うつなれ

右勝

夜もすから衣うつ也我ことやまたきく人もねられさるらん

左歌にむへしこそと讀るおもふへし。さすかによむやうある詞也。此歌にはかなはすやあらむ。せめては衣うちけれとやよむへからんとそみえはへる。そまにあたりて。風もはけし。衣もをも打をきゝてよむならは。よ風も寒く吹なへにころも打也なとそよまれ侍るへき。又四隣の擣衣とはいひなから。よもの里に打あひなむも。あまりかしかましくて。心ほそからすやはへらむ。右歌はさせるとかなし。されはかつへきにや。

九番　鷹狩

左持

こゐもせすそりぬる鷹の行方みんあまきる雪の暫しやまなむ

右

みかりすとゝへる鷹をてにすへてあしたの原にけふも暮しつ

左のうた。心はさもと聞ゆれとも。まくらもしにせすとよみ。こしのいつもしにみんと讀。はてになむとよめる。すこし思ひあはすへかりけり。又ふるき歌の心とそおほえはへれ。ひかことにや。右のうたみかりと讀る。なをおもふへし。いかなる野にも。うちまかせてよむへき事にや。あしたの原はさもきこえす。たゝけふやゝめるといふふることのみ思ひいてられてなむ。されともたらかなれは持。

十番　左

さかりふのたかへる鷹を合すとてかたのゝみのに日も暮に息

右勝

御狩するかたのゝみのに雪降はくろふの鷹もしらふとそみる

左歌たかへる鷹と讀ることおもふへし。ふるき歌に。たかへる鷹のたひにかもせむと讀るは。なかころの人のさたしけるなむ聞つたへて侍る。またさかりふのたかへると讀るつゝき。よしともおほえす。右歌にしらふとそみゆるなとそいはまほしけれとも。けにいかゝはいはむする。されは猶これはかつへきなめり。

十一番　神樂

左持

これやこの天の岩門を押ひらきあらふる神もなこむみ神樂

右

よもすからたきあかしつる庭火をは神も哀と思はさらめや

左歌よし。右歌はしならかにまことにそたたにたり。

十二番

左持

さかきはに雪降ときのみかくらは面白さます物にそ有ける

右

にはかなる庭火の煙かせ吹はなひかさらめや神の心も
右歌。風ふかはなひくへしと讀るは。ふかすは神のこゝろもなひくましきとや。もししかるならは。かくらしてたてまつるかひもなき事にこそ。かゝれはおほよそ風に神の心なひくといふことの。たはふれことのやうにおほえて。尾はなの末なとにおもひなされ侍る也。右歌〔マヽ〕もとそすこしおもふへくはへりける。こしの五もしに。雪降はとけにあらさらましかは。又おもしろくといふことふるめかしくはへり。近き歌にもまたはへり。されともかくらのおこりしりてよむなれは。とかにもはへらし。右歌もちかきうたとこそおほえ侍れ。それはこの歌とりはへられてや候けむ。きゝおよけさらむはいかかはけそすへき。おほかた歌のしたゝかなれは持。

右東塔東谷歌合以古寫一本挍合了

山家五番歌合

天仁三年四月晦日歌人
不分左右當座探得之

題

卯花　野草　郭公　五月雨　寄衣戀

作者

中宮亮藤仲實　左近中將源師時　木工頭同俊頼
皇后宮權亮同顯國　左少辨同雅兼　少納言藤定通
前和泉守藤道經　木工助藤敦隆　阿闍梨大法師隆源
琳賢法師

一番　卯花

左　敦隆

遠近のかきねに咲る卯花はたかせこかくるゆふかとそみる

右　顯國

卯花のさけるあすかの里にねてまたきあけぬと驚かれつゝ

二番

左　仲實

うのはなのしのゝに咲る山賤のかきねもたまの庭となる覽

右　隆源

枝毎に玉ぬきかくるうの花をさかはといひし人にみせはや

三番

左　道經

下つ闇ひかりともしきこのまよりもる月かけとみゆる卯花

右　俊頼

雪の色をぬすみて咲るうの花はさえて〔し家集〕〔え詞花〕や人にうたかはる覽

四番

左　雅兼
うの花のまたらのかきにいかにして道ゆく人の心とむらん
右　師時
うの花のかきねにとまる旅人は月に宿かるこゝちこそすれ
五番
左　琳賢
さえぬよりあやめにみれはうの花の積れる雪とみゆる也けり
右　定通
故里はすきならねともうの花の咲る垣ねそしるし也ける
野草
一番
左　顯〔マヽ〕國
男鹿ふす原のゝ草の深けれはさつをのゆみちほらはよりみゆ
右　俊頼
鹽みてはのしまか崎のさゆり葉〔に千載家集〕は波こす風のふかぬひそなき
二番
左　師時
春もえしのはらの草のおひたちて夏はけふりとみゆる也皀
右　道經
夏のゝは過そやられぬ急け共ゆくてにかゝる草むすふまに
三番
左　雅兼
かへるさの道のしるへに宮城のゝ花つまはきを栞りてそ行
右　定通
やきすてしふるのゝ小野のまくすはらたまゝく計也にける哉
四番
左　仲實
あけを〔マヽ〕ゝのひさきまちりの淺茅生も今はすかるのふしか也皀
右　隆源
道しはの茂るのみかは眞葛原まくほとにみなのは也にけり
五番
左　琳賢
花の折過かてにみし宮城のゝ萩のかつらもは茂りあひに皀
右　敎隆
野へことにいつ茂るらんさゐたつま朝伏鹿のかくるなる迄
郭公
一番
左　仲實
とこよゝりかくのこのみを移し植て山子規ときにしそきく
右　師時
あふさかの山子規なのろ也せきもる神やそらにさゆらん
二番
左　琳賢
常になけあはてのもりの子規しのひかぬ也こゑたてつなり
右　道經
郭公鳴よのみかは鳴ぬ夜もまつときくとにいこそねられね
三番
左　雅兼
忍ひ音はこよひはかりそあけはとくまたれてきなけ山郭公
右　顯國
郭公あかぬ山ちにひかすへてよをそむくにも成ぬへきかな
四番
左　俊頼
郭公なかかそいろの〔うくひすに〕くひこまれとなくといふことな事〔ならひ家集〕ひそ
右　郭隆
忍ひかねまたれて鳴ぬ子規ことしや聲におかんとすらん

五番

左　教隆

郭公まつよのかすをしられはやふる聲をたにきかせさる覽

右　定通

一聲のゆきかたもみむ郭公さ月のやみのなからましかは

五月雨

一番

左　俊頼

五月雨は降からをのゝ忘れ水おしひたすらの沼こえはてゝ〔江ひと見る家集〕

右　道經

五月雨にあせのほそ道水ふかみ田なかの里は人そかよはぬ

二番

左　琳賢

五月雨のあまゝをまつと我さへも旅の假庵に日數をそふる

右　定通

五月雨はひかすへにけり東屋の軒はのかやのしたくつる迄

三番

左　仲實

なぬかふるさ月の雨のさかなれは霽すも人をわひさする哉

右　雅兼

賤のやをふくまもはれぬ五月雨にもりもとまらぬ杉の板葺

四番

左　教隆

日數ふる五月雨なれは難波めのやへ葺こやもゝりやしぬ覽

右　師時

五月雨にのもみなうみと成ぬれはをさゝか原は波そ立ける

五番

左　顯國

五月雨は常にわたりしみな瀬川かよはぬ程になりにける哉

右　隆源

五月雨もする限ありけふはやめ民のをたにも暫しさほさん

寄衣戀

一番

左　雅兼

いとはるゝあけのたもとに紅の涙のいとゝいろをそへつる

右　俊頼

是をみよむつたのよとにさてさしてしほれしたつの寐衣かは〔しつ千載家集〕

二番

左　仲實

あひきするたてしの蚕のふちきぬも何によりてか袖はひつ覽

右　顯國

我こひはしつのかり衣をのか身にあはぬ事をも歎きつる哉

三番

左　道經

陸奥のしのふのねすりすり衣みなれてこひのしけりそふ哉

右　師時

よと共にほせとほされぬ衣哉身をやく戀はきえぬものから

四番

左　琳賢

なさけなくふりはなれにし袂にはいかて心のかくかゝる覽

右　定通

なのりそを刈ほすあまのあさ衣おのれとしほる戀もする哉

五番

左　隆源

よも重ねうちはとけすと夏衣へたつる程による身ともかな

右　教隆

あはさらはしほちのたまもいかゝせん涙の海にぬるゝ袂は

右山家五番歌合以屋代弘賢本書寫挍合了

散位源廣綱朝臣歌合 長治元年五月日

題

子日小松　鶯閑中友　霞隔山家　花滿遠色
夏草漸滋　藤花廻岸　卯花盛開　林間蟬聲
閑思七夕　叢裏虫聲　野花暮馥　露染紅葉
籬菊色々　曉見初雪　深夜擣衣　庭上鶴馴

歌人

左	右
女房	散位藤原國基
萱之貫	之恒
典藥助源雅光	兼弘朝臣
紀康盛	藤原宗成
小監物藤原貞光	源成方
大江文遠	僧俊賀
僧俊義	平貞繼
藤原兼行	明法生大比盛佐
忠基朝臣	雅樂允藤原明信
散位顯親	紀助實
平貞基	

判者

一番　子日小松

左　女房

子日する松の葉ことにかそふれは猶そつきせぬ君か千歳は

右　女房

はるかなるきみか齡にくらへんと子日松をけふはひくかな

二番、鶯閑中友

左

鶯のこゑを友にてくらすかなひとりなかむる春のやま里

右　散位藤原國基

山家は鳴うくひすのこゑのみそのとけき春の友と聞ゆる

三番　霞隔山家

左　萱之貫

おほつかなとなりもみえす也にけり霞へたつるむら雲の里

右　之恒

春かすみ八重たちぬれは尋ねゆく道も忘れすくらはしの里

四番　花滿遠色

左　典藥助源雅光

なつかしきかこそ袖まて匂ふなれ花の梢ははるかなれとも

右　同

花さかり咲そめしよりあかなくによその梢を折つゝそ見る

五番　夏草漸滋

左　兼弘朝臣

あさみとりむら〔マヽ〕〳〵みえし若草の夏とゝもにも深く也ける

右　紀康盛

夏草はにはつさなとみしかと鹿ふすはかり也もゆくかな

六番　藤花廻岸

左　藤原宗成

さためなく吹風なれは池水の岸をめくりてよする藤なみ

右　少監物藤原貞光

藤浪のかゝらぬ岸のなけれはや漕くる舟のよるひまもなき

七番　卯花盛開

左　源成方

白妙にうの花さける垣ねをはつもりし雪とおもひけるかな

右　大江文遂

み渡はたねの野へのうつき原みな白妙にさきにけるかな

八番　林間蟬聲

左　僧俊賀

ゆく風の雲のはやしに鳴蟬はこゑもともにそたかく聞ゆる

右　僧俊義

夏木たちしけき梢に鳴蟬の聲きくからにあつくも有かな

九番　閑思七夕

左　平貞継

八重むくらしける軒はをかきわけて星合の空を眺めつる哉

右　藤原兼行

七夕のあふよのほとは思ひやる心さへこそ空にすみけれ

十番　叢裏虫聲

左　女房

尋ねくるかひもあるかな草むらに我まつ虫の聲そきこゆる

右　女房

まつむしの聲も絶せぬくさむらは尋ねぬ人も尋ねきにけり

十一番　野花暮馥

左　明法生大比盛佐

宮城のやたつねてきつる藤はかましるくも匂ふ夕まくれ哉

右　忠基朝臣

今よりはいそきもゆかし入日さす野山の花そ匂ひましける

十二番　露染紅葉

左　女房

しら露のそむる紅葉のいかなれはから紅にふかくみゆらん

右　女房

いかに置しら露なれは紅葉はのくれなゐ深く色をそむらん

十三番　籬菊色々

左　女房

をく霜に籬のきくをみわたせは色々にこそうつろひにけれ

右　女房

をく霜に籬の菊をみわたせは色々にこそうつろひにけれ

十四番　曉見初雪

左　雅樂允藤原明信

かゝみ山曉かたにみわたせはあまきりあひて初雪そふる

右　散位顯親

朝ぼらけまたふみわけぬ初雪に何れを道とわきそかねつる

十五番　深夜擣衣

左　紀助實

我妹兒かうつから衣さよ更てほのかに聞ゆいつこ成らん

右　平貞基

手もたゆく成もゆくらんさよふかみ衣して打里ののとけさ

十六番　庭上鶴馴

左　女房

庭の面に人に馴たるあしたつはよはひを君にゆつる成へし

右　女房

千とせふるやとの景色やしるからん汀のたつの馴にける哉

六條宰相家歌合 永久四年六月四日 於南六條泉亭行之

歌人

左

前木工頭俊頼朝臣　左近少將實能　散位藤原家信

筑前權守爲忠　主殿介兼能　浦風

或女房

右

前越前守仲實朝臣　右近中將雅定朝臣　加賀守顯輔朝臣

散位藤原道經　大貳上　皇后宮攝津

或女房

判者　修理大夫顯季卿

講師　左　散位家信　右　散位道經

讀師　左　前木工頭俊頼朝臣　右　散位仲實朝臣

一番　子日

左持　源俊頼朝臣

春日山ふもとの小野に子日してかことを神に任せてそみる

右　修理大夫上〔へカ〕

ねのひする野への小松を諸人の君かよはひにひきかくる哉

左歌こと葉つかひなたらかならす。又子日の松をさし置て神にことよするも。あしかるへき事ならねと。けふのことにはかなはすや。又まつといふことあらまほしくそ。右の歌はめつらしき事なけれと。なひやかなれは。勝とは申へけれとも。左一番なとははゝかりおもふたまへられて。持とや申へからん。

二番　霞

左　うらかせ少將公教母

あさみとり霞める空のけしきにやときはの山も春をしる覧

右勝　藤原顯輔朝臣

年ことにかはらさりけり春霞たつたの山のみねのけしきは

右歌かすみなとはさほ山にこそ讀まうてくれ。たつ田山は紅葉の錦なと申來ること也と。左のかたの人ののたまはする。さらにくせなるへからす。たつたの山の鶯のこゑとこそよみてはへめれは。左のうた。ときはの山も春をしるらむとよめるこそ。己なきてやなといへるをおもへるにや。にぬことにてなむ。かれはしかのこゝろあるものにてしるにこそ。山はしらむことありかたくなむ。しるとてもいかやうに有へきにか。されはまけとや申へからむ。

三番　櫻

左持　藤原實能

花さかり末のまつ山風ふけはうすくれなゐの波そたちける

右　藤原仲實朝臣

たかさこの花のしら雲立にけり吾やまもりに成やしなまし

此櫻のうたこそ。おもふたまへあつかひにたれ。まちかき櫻さくころは。むかしもいまもあまた讀きたるところをさしすきて。花もよみこぬすゑの松山。まことにおもひかけられす。むねと又まつの花とみえたり。うす紅といふこと葉。そのかみよみたりし後より。今は讀はへ

らす。かた〱おもひかけられす。又右歌ははなのしら雲とはへるもこゝろえられす。花咲ぬれはしら雲に似てなむなとこそは讀きたれ。是も其心とおなしけれとも。さして花のしら雲と云事有やうになんおもふ給ひらるゝ心に。こと葉もあらはれぬやうなれは。ちとや申へからむ。

四番　郭公

左　有女房宰相上云々

ほとゝきす夏のよさへそ恨めしきたゝ一聲に明ぬと思へは

右　藤原仲實朝臣

子規こゝろしあれや橘のたまぬく月にこゑをあらはす

左のうたは。百首の歌に一文字もかはらねは。何事をかは申へき。右のうたも。左ほとゝきす。いそのかみふることならすは。いかゝあらましとこそ思ふたまふれ。

五番　五月雨

左勝　源俊頼朝臣

雲はれぬさ月きぬらしたま衣むつかしきまて雨しめりせり

右　修理大夫上

さみたれにとふ人もなき山里は軒のしつくの音のみそする

左のさみたれは。ふるめかしからぬこと葉なれと。むつかしきなとこそ。むけにたゝ言葉にて。けひたるやうにおもふたまふれとも。右のうた めなれたるさまなれはまくとや申へからむ。

六番　夏草

左　女房

うつら鳴なつのゝ草は生にけり朝ふす鹿もみえぬ計に

右勝　修理大夫上

ゆきなれし道わすられて夏草のむすふ計に成にけるかな

左夏草はくせなくみたまふれと。右よりうつらは秋なむ鳴。夏なとは鳴ぬ物也とはへめれは。證歌こそはいたさるへけれと。そのいてこぬはあやまれるにや。右のうたは。結ふ計に成にけりといへるは。のかひしこまのこちなむするとはへめれは。むねとあるふしにはあらねと。道わすられてなとこそは。ふしに思ひたるにやとみゆれは。右のかちにこそ。

七番　女郎花

左勝　修理大夫上

ひとことに折られにけりな女郎花むへこそ露の心をきけり

右　皇后宮津君

あかなくに我しめしのゝ女郎花こゝろ許さぬ人におらるな

左の歌は。へちにそことみゆる處はなくそみたまふるを。右のかたより。むへこそなとをなむし申は。せめていひところのなきにや。つねの歌こと葉にてなむ。右の我しめしのゝとあるこそこゝろえね。花みてこそあかなくともおもはめ。何をみてかはしめけむ。しめつるとあらはこそ心にはかなはめ。こと葉こゝろとちかひてなむ覺ゆる。まくとや申へき。

八番　月

左　源俊頼朝臣

軒はよりもりくる月を我妹兒かたまもの裾に宿してそみる

右　藤原顯輔朝臣

いかはかり照月なれやまくすはふ杜の下草かすみゆるまて

左歌は玉ものすそにやとしてそみると讀る。ありかたき事也。水なとにうつれるこそ。やとれるなとはいはめ。ものすそにはひかりはかりこそあらめ。月のかたちのやとらむことは有かたくや。右のうたは古く人のよめりける森の下草はかりをかへていたしたると。左より申はふる歌にこそ侍れ。

九番　紅葉

左　源俊頼朝臣

紅葉はをきてみる人のあまたあれはぬしも定めぬ衣ての杜

右　源雅定朝臣

おしめともいとかの山の紅葉はの心よはくも風に散かな

此もみちのうたこそ。年おいほけて。右かつと申てしかとよ。よくもおほえはへらぬかな。左のうたこそ。衣手のもりと有は。散とよみてこそきるなとは云へけれ。ちらぬ紅葉はいかゝきるへからむとこそみゆれ。

十番　雪

左　主殿助兼能

さらぬたにくる人もなき我やとに跡たえまさるけさの白雪

右勝　仲實朝臣

いつのまに降つもりける雪なれはかへる山邊に道まとふ覧

雪ふりて道たえぬとは。山里なと云てこそあらまほしけれ。又道は雪にたえぬるを。たえまさるはいかなる事にか。右はかへる山ちになと申たるからためきて。かつとや申へき。

十一番　霞

左　家信

とふ人もなき山里のしはの庵に音するものはあられ也けり

右　道經

冬さむみいなの中山こえくれはならの枯葉に霰ふるなり

右のうたは。百首歌にふた文字三もしそかはりたると。左方の人々はへめれは。何事をか。

十二番　水鳥

左持　主殿助

水鳥の霜うちはらふは風よりいとゝたま江の底やさゆらん

右　雅定

山河につかはぬおしの終夜ともをこふとやうきねなくらん

左歌。は風にそこやさゆるらんなとこそ。餘り心ふかく。おもひよりてはへれ。右歌は。友をこふとやなとかこはきやうなれは。持とや申へき。

十三番　祝

左持　藤原爲忠

みつかきの久しかるへき君か世を天照神やそらにしるらん

右　顯輔朝臣

かきりても君か齡は岩清水なかれむよには絶えしとそ思ふ

左歌天照かみなとこそ。あまりおとろ／＼しくおもふたまふるに。右に又。いはし水なとはへめれは。いせやはたの御事なと。おとりまさり申につけておそり侍りぬへし。

十四番　戀

左　宰相上

なかれてのなにそ立ぬる涙河人めつゝみをせきしあへねは

右勝　道經

こひわひておそふる袖やなかれ出る泪の河のいせき成らん
左のうた。人めつゝみをむねと有ことにや とみ給ふれは古今なとをみぬ人にやと。すこしあなつらはしくこそ。右歌はなみたのかはの いせきなとめつらしくはへれはかつとや。

十五番

左　俊頼朝臣

いつとなくこひにこかるゝ我身よりたつや淺間の煙成らん

右　修理大夫上

しるらめや淀のつきはしよと共につれなき人を戀渡るとは
又左右のうた。いたはる事ありて。いそきまかりいてぬれは。

右六條宰相家歌合以猪苗代謙誼本書寫挍合畢

群書類從卷第百八十三

和歌部卅八 歌合四

內大臣家歌合 元永元年十月

題

時雨　殘菊　戀

左方

皇后宮攝津公　定信朝臣　女房

盛方朝臣　少將公俊頼朝臣女 關白家女房　信濃公永實女 關白家女房

顯仲朝臣　忠房朝臣　上總公

俊隆朝臣　師俊朝臣　重基朝臣

右方

俊頼朝臣　顯國朝臣　雅兼朝臣

道經朝臣　基俊朝臣　雅光朝臣

宗國朝臣　忠隆朝臣　信忠朝臣

兼昌朝臣　時昌朝臣　爲實朝臣

判者

俊頼朝臣　基俊朝臣

一番　時雨

左兩人共爲勝　皇后宮攝津公

終夜嵐の音にたくひつゝ木の葉とゝもに降しくれ哉

右　俊頼朝臣

覺束ないかにしくるゝ空なれはうらこの山のかたみなせなり

俊頼云。さきの歌は心も詞もめつらしからねと。させる難みえす。後のうたはかたみなせ也とそへたる詞おほつかなし。若此山に。さも讀へき事のあるにか。たゝうらこの山といふに付ていはゝ。歌詞とも覺ぬかな。人々も申されん。然者左勝とや申へき。基俊云。木の葉とゝもに降しくれ哉と。心にしみておかしう思ひたまふるに。右のうらこの山はいかにかたみなせとはあるにか。こゝろ得かたく侍り。左まさりたりと申へき歟。

二番

左俊持 基勝　女房

あやしくも時雨にかへる袂かないなの笠はらさして行とも

右　顯國朝臣

ぬるれとも嬉しくもあるか紅葉はの色增雨の雫とおもへは

俊云。さきのうたは。いなの笠原なといへるわたりいひなれたり。但時雨にかへるなといはゝ。衣の事にやあら

ん。次の歌はけふ紅葉の下にたちて。その雫にぬれてこそ。嬉しくとも讀へけれ。たゝおほかたのしくれに濡て。是は衣をそむる時雨なれは。嬉しとてたちものかさらん。あちきなくそきこゆる。ともにおほつかなしときこゆれは持とや可ㇾ定申。基云。しくれにかへる袂はられしくも有かなと侍。次には増りてや侍らん。

三番

左俊勝　少將公

時雨には色ならぬ身の袖笠もぬるれはかほる物にそ有ける

右基勝　雅兼朝臣

冬くれは散しく庭のならの葉に時雨音なふみ山へのさと

俊云。さきのうたの色ならぬ身といへる。きたりける衣のしろかりけるにや。我身を色好にあらすといへるにや。衣のいろしろきならは色かはるといはむことかたし。我みを色好ならすといはゝ袖笠かほるらん事又かたし。おほかた歌からはなたらかなり。後のうたはふるきうたをあしさまにとりなしたるとみゆる。ならの葉の散しく庭とこそいふへけれ。散しく庭のならのはと侍れは。次第あしき心ちそする。是はあなかちのことをふろき歌の過難ㇾ避けれは猶可ㇾ負にや。基云。色ならぬ身そ。いかなる身にかとゆかしく。ぬるれはかほるなと讀る。梅なとをこそふるき歌にはかくよみて侍れ。なをしくれおとなふみ山へに。たちよりぬへくおもひ給へる。

四番

左基勝　顯仲朝臣

水鳥の青葉の山やいかならん梢をそむる今朝のしくれに

右俊勝　道經朝臣

かきくもり蜑の小ふねにふく笘の下とをる迄時雨しにけり

俊云。水鳥の青羽の山とつゝきて。梢をそむるといふほと無下にあらはなり。次歌。蜑のをふねにかゝらむほと。おもひかけぬさまなれと過にはあらねは勝とや申へからん。基云。水鳥の青羽の山なといへる。いみしくふるめきたれと。右のうたのかき曇りあまのをふねにふく笘なと侍れと。春雨五月雨なとのやうに。つく／＼と降物にもあらねは。下とをるまて有へしと覺え侍らす。猶梢を染る時雨少まさると定申へし。

五番

左俊持　上總公

時雨には菅の小笠も水もりて遠の旅人ぬれやしぬらん

右基勝　基俊朝臣

霜寒て枯行をのゝ岡へなるならの朽葉にしくれ降也

俊云。前歌に水もりてといへるおほつかなし。後うた岡へなるすへらかにくたらす。ならの朽葉もいかゝ。朽なは音つれすもやあらむ。あなかちの事か。基云。時雨には菅の小笠も水もりてといへる詞。なつらへ申へきかたなし。水もるとは玉たれのかめなとの石間あらんこゝちそし侍る。いかなるしくれのさまて侍へきにか。袂をかへすなとこそよの常のことにてははへれ。いとすくれたることなけれは。ならの朽葉におとつれんしくれは。今少きゝなれたるこゝちそし侍る。

六番

左　基持　　　　師俊朝臣

さも社は槇のまやふき薄からめもるはかりにもうつ時雨哉

右俊勝　　　　雅光朝臣

木の葉のみ染るかとこそ思ひしに時雨は人のみにしみに鳧

俊云。前歌。槇のまやふきなといひなれたり。末にうつ時雨とよめるそおほつかなき。若蕭々暗雨打レ窓聲と云きこゆるを思ひてよめるにや。さりとも歌によますは。さらすもやあるへからん。かゝることをよまんとては。そのすしにいはて。みくるしからすかまふる也。右。是は俄なれはいたけに聞ゆる。但いかなる色にかしみけむ。もし木の葉の色にしまは。おひたゝしくや有へき。松風の色になといへる。是もなとかよまさらん。うつ時雨なとよめるには少まさりてそ聞ゆる。基云。槇のまやふき。さこそうすくとも打とをすまてふらん時雨こそ。うちに居たらん人おそろしかりぬへく覺え侍れ。代のはしまりにこそ車のよこかなとのやうにて雨は降侍りけれ。いとおそろしう侍ける時雨かな。暗雨打レ窓聲なとそ唐の歌にも侍るかし。風ふかれて横さまにさはりたるかきをうつにこそ侍めれ。されは窓うつ雨に目をさましつゝなと讀る。いと哀に聞侍るものを。またしくれは四方の山の梢を染るは。さることにて侍り。人の身にはいかにしむにか。いもりのしるしなとのやうに聞え侍る哉。是はいつれもおなしほとにこそ。

七番

左雨人奐爲勝　　　　定信朝臣

音にさへ袂をぬらす時雨かな槇の板屋のよはの寝覺に

右　　　　宗國朝臣

しくれとて柞の杜にたちよれは木のはとゝもに降かゝる哉

俊云。前歌。音なきくに袂濡とよめるいとおかし。さもある事と聞ゆ。次歌もなたらかなり。末の七文字をおもひかへけるとみゆ。されはまへのうたかちにや。あなおそろし。基云。槇の板やの夜半のしくれは。ことにめさましくきゝ侍物かな。袂ぬるらんも。いとおかしく侍り。はゝその杜あしうはみえねと。めつらしけなきやうなれは。夜はの寝さめそ。けにさることゝは思ひ給ふる。

八番

左雨判共爲持　　　　盛方朝臣

神無月み室の山の紅葉はも色に出ぬへく降しくれ哉

右　　　　忠隆朝臣

かみな月時雨てわたるたひことに生田の杜を思ひこそやれ

俊云。前うた神無月とは月日の月の名なり。御室山とて神無月といはむことおほつかなし。證歌やあらん。五文字の六文字有。七文字の八文字あるは常のことなり。それは聞よきに付てよむ也。是はあらはに餘りたりときこゆれは。いかゝあるへからん。次のうたはふるき事と社み給れ。かれはおほつかなきことおほし。これはふるなれはおなし程のことにや。基云。このうたいつれもあしくはみえ侍らねは持とや申へからん。

九番

左俊持　基勝　　　　信濃公

神無月旅行人もいつくにかたちかへるへき時雨もる山

右　　　　信忠朝臣

くらふ山いかゝこゆへき神無月木の葉とゝもにしくれ降也

俊云。前うたは神無月旅とつゝくへしともおほえす。いつくにかもなたらかに聞え侍らぬもの哉。後うたはくらふ山と云てくらしとも云。くれぬとも いひてこそいかゝこゆへきとは云へけれ。木のはとともに時雨といひて。こえわつらふはおほつかなし。このはの散をわつらふならは みちのうたとやきこゆる。是はあなかちの事なり。たゝおなし程にそみたまふる。基云。もる山のしくれはくらふ山に今少まさりてや。たちかへるへきかけのなからんも斷とそ思ひたまふる。

十番

左俊持　忠房朝臣

波よする蜑の笘やの隙をあらみ漏にてそしるよはの時雨は

右基勝　兼昌朝臣

ゆふ月よいるさの山の高根よりはるかにめくる初しくれ哉

俊云。前うたは時雨すけなきやうにきこゆ。しくれは起ゐてきゝ明すへき事ならねさ。是はもるに初て知といへは寝入たるか。もりて衣のぬれけれは 起さはくとみゆ。若もらましかは又の日人傳に社きかまほしと。おほつかなくそきこゆる。後歌は山の高根を めくるといへる事おほつかなし。もろともに山めくりするといへるうたは。この山にふるといへる事や。是はおなし高根をめくるといへは 行道しけると聞ゆるなり。さもありなむにや。偏に難申にはあらす。おほつかなきなり。きゝあきらめん程は持とや可ㇾ申。基云。おしなへてところもわかす降らむ時雨に海士の笘やまてはおもひよらても侍ぬへかりける事かな。又槇の板屋なとには。たゝかるにても時雨の音を知侍なんかし。春雨のいとをみたり音もせすしてもらんにや おとろかれはへらむ。右のうためをよろこはしむるまて。もてあそひとはすへくもあられとも。遙にめくるはつ時雨。いま少こゝろありてや侍らん。

十一番

左　俊隆朝臣

さころもの袂はせはしかつけとも時雨の雨は心してふれ

右兩判俱勝　時昌朝臣

はつ時雨音信しより水くきの岡の梢の色をしそ思ふ

俊云。さ衣のうた心してふれといへるは。ぬれん事のおしさにいへるか。又かつけともといへること。さきにあるへきか。はつ時雨のうためつらしからねと すへらかにきこゆ。色をしそおもふそ ふるき事よとみゝにととまる心ちする。されと水くきなと讀れたれはにや まさりてそみゆる。基云。狭衣と云て。せはしとはいかによまれたるにか。四條大納言の式には 滿歌重言とてわろき事にそして侍る。右歌初時雨音信しよりとゝいへる。時雨はかやうにこそは侍らぬとおもひ給へる。岡の梢の色をおもふなといへるも。云なれておかしさまりたるにや。

十二番

左俊勝　重基朝臣

柞原紅ふかく染てけり時雨の雨はいろなけれとも

右基勝　爲實朝臣

山家にはならのから葉の散敷て時雨の音もはけしかりけり

俊云。柞原のうたは露しもなとの紅葉をそめ草木をうつろはするは。わきも子か裳すそよりをちたる事なれはめつらしけなし。山家のうたはならのからはといへるいとにくきさまなり。枯はといはんにつゝかすはこそさもいはめ。又しくれの音はけしといへる事いかゝ。あらち山の高根より谷の岩とをみおろしていはむこゝちする。前のうたや少まさらん。基云。左右のうたからはおなしほとなれと。左は時雨のこゝろなくて。偏に紅葉のうたにて侍れは。ならのから葉は今少まさりてやはへらん。

一番　殘菊

左兩判爲勝　　上總公

紫に匂へるきくは萬代のかさしのために霜や置つる

右　　俊頼朝臣

おのつから殘れる菊をはつ霜は我置はとそおもふへらなる

俊云。前歌はめつらしけなけれともなたらかなり。はての置つるそ耳にとまるこゝちすれとも。さまてはいか か。後歌にへらなるといふ事は。するのよにはきゝもつかすと人々申さるれとも。さる事と聞ゆとて左の勝とす。基云。紫に匂へる菊とまて歌めき侍れとも。かさしのためとなといへるわたり。又はての置つるなとも。文字つゝきさゝへたる所おほかるやうにて。たをやかなる事すくなけれと。次のうたおのつから殘れる菊なといへる。はてのへらなるもいかなることのもしつゝきにかあらんと。きゝなれぬやうに覺ゆれは。紫のかたには今一しほ染まさりて。むつましらおもひたまふる。

二番

左　　顯國朝臣

ま袖もて朝置霜を拂ふ哉あへす移ふきくの惜さに

右兩判爲勝　　師俊朝臣

露結ふ霜夜の數をかさぬれはたへてや菊のうつろひぬらん

俊云。前歌いとおかしう。但あへす移ふといへる事たつぬへし。聞えぬやうに覺え侍る哉。とりもあへすなといへる詞につきて心うるに。たへすなといへる詞にや。たとひふるき詞なりとも。よみたる事あらん。此歌にてはきゝつかぬこゝちそする。次歌は心詞いとおかし。但是もおほつかなし。露結ふと初に置れたるはいかに。もし露結ひて霜となるといへるか。それならはこよみなとに付たる事なれは一夜のことなめり。次の夜はかりは霜のかきりこそ置へけれ。此歌のこゝろは。よことに露のしもになるやうに聞ゆれはひかことならん。おほつかなけれとも。文字つかひなと優なれはまさりてそみゆる。基云。左歌は姿歌めきて侍れとも。まそてもてそいとよまほしき詞とも覺えぬ。また古の萬葉集にも侍めり。これされはにや古今の序には。見二上古之歌一存二古質之語一。未レ爲二耳目之翫一徒爲二教誡之端一とそ申たるやうに覺え侍る。古今後撰拾遺幷中比のうた合に。この詞よみたり共みえす。あそひにする事とはみなみ侍るめり。此袖こそ延喜十二年の歌合にもとよみてわらはれて。講し侍らすなりにけんこゝちそし侍る。右歌しなすくれねと。露結ふしもよの數なと。文字つゝきあしう

も侍らねは。猶露むすはれぬへき心ちそし侍る。

三番

左　顯仲朝臣

萬代の秋のかたみになす物はきみかよはひをのふるしら菊

右　基俊朝臣

今朝みれはさなから霜をいたゝきて翁さひゆくしら菊の花

俊云。此歌祝にことよせて。ともかくも難レ申。次歌には翁さひゆくといへる事。たしかに知ぬことなり。たゝ古歌に付て心うるに。翁さひと云事は翁されと云詞とこそ承置たるに。是は此こゝろにはたかへり。よもさは侍らし。慥なる事をたつねて一定を可レ申。基云。萬代の秋のかたみになる物はといへる。兼盛か名歌にて みなよみたる也。是はおかしう社侍れ。なすものはといへる。つめけにみえ侍り。さても下句よはひをのふる白きくと。そのことなくなんみえはへる。友則か歌に。露なから折てかさゝんとよめる。又九月九日に 忠峯貫之かもとに送れる返しに。雫もてよはひのふてふ菊なとそ讀て侍るそかし。左樣にてこそよはひのふる 形みにはよく侍れ。右のさなから霜をいたゝきて翁さひ行と讀る。殘れる菊はかやうにも よみてんとみえはへり。 ひかことにや。

四番

左基持　雅兼朝臣

白妙の霜よに置てみつれさも移ふ菊は まか はさりけり

右俊勝　忠房朝臣

八重菊の花の袂をあかすとや霜のうはきを猶か さぬらん

俊云。前歌月もなくて星もなくて。よる霜にまかふらん事かたし。人々申されしもさる事有と聞ゆ。後歌花の袂をあかすおもはむ事は誰かおもふへきそ。猶きたる人や入へき。若菊をぬしになしたるにや。されは八重菊といふ事たかひぬ。されと歌からたくみなりけるとそみ給ふる。基云。此うたは白妙の霜よに置てなとよめる。少云なれたるを。うつろふ菊はまかはさりけりと讀る。移ひなん菊を霜いかゝまかはすへき。また右歌のやへ菊の花の袂をあかすとやとよめる社いと おもひかけす。人の袂にや 菊の袂にやと。かた〳〵思ひなやみ はへる哉。詞たくみなるやうにて事たらぬこゝちし侍るは。勝負のほと定かたくこそ。

五番

左俊持 基勝　信濃公

秋はてゝ霜枯ぬれときくの花殘れる色は深くみえけり

右　女房

白きくも移ひにけりうき人のこゝろはかりとなに思ひけむ

俊云。前のうた秋はてて霜かれぬといへる。名殘なきこゝちす。あきはてぬれと菊は猶みゆれは。すゑに殘れる色は深くみえと侍。首尾相たかへり。後歌は人に忘られたる人の恨たるに常に讀ふし也。戀のうたとそ云へき。菊のうたとはみえす。されとさせることなき歌に。おほつかなき事ともあれは持とそ申へき。基云。のこれる色は深くみえけりといへる。なに事とみゆることなくて。いかにみえけるにか。又歌の躰も。すくれてもあらす。詞もとゝこほりたるやうにみえ侍り。されと右の歌の

偏に菊を惜うたとはみえていかにそや。かれ〳〵になりたらん男女のきくによそへて恨やりたらん心ちして。題の心深からされは。猶左の勝へきとそおもひたまふる。

六番

左俊持　少將公

かれ行をなけきやすらん初霜のきくのゆかりに置と思へは

右基勝　信忠朝臣

わか宿の籬にやとる菊なくはなにゝつけてか人もとはまし

俊云。前歌古言にておもしろしと覺ゆる事もみえす。又なになる事もなし。次うたもふりてめつらしけなし。なくはなといへる腰の文字つかひをさなき也。是も持と可ㇾ申。基云。霜心なき物なれは菊のたよりに惜をなけくへき事にてあらす。右うたは後中書王の四條大納言に送られける歌に。花もみな散なん後はわか宿のなにゝつけてか人をまつへきといへる歌の末にて侍。是は少歌めきたれは右まさるとや申へからん。

七番

左基勝　定信朝臣

霜かれの菊なかりせはいとゝしく冬の籬やさひしからまし

右俊勝　雅光朝臣

しも枯るはしめをみすは白きくの移ふ色を惜さらまし

俊云。前歌きくなりともしも枯なん後は。冬のまかきのさひしからさらん事は。いかゝあるへからんと人々申されしかさもやあるへからん。冬もふかくなりてこそ菊はみ所なくならめ。あさからんほとはなとかさも讀さらんとそ聞ゆる。後のうたはおなし程の歌なれと。今少たましひ有こゝちす。基云。左右おなしけれと。冬の籬さひしく侍らんといへり。さもやとみえ給ふる。

八番

左俊勝　基持　盛方朝臣

冬枯にうつろひ殘る白菊はうは葉に置る霜かとそみる

右　道經朝臣

露しもの曉置のあさことに移ひまさるしらきくの花

俊云。冬枯にといへる文字。聞えかぬる心ちして侍るを。萬葉集に讀る事慥にも覺侍らす。右歌はなたらかにもいとおかしくこそ。朝置霜のなといふ事聞なれ侍り。是はことありかほなる物かな。猶さきの歌そ増たらん。基云。左歌移ひ殘ると云わきかたし。又花をうははに置るしもと。實にいみしきひかめなり。右歌はあかつき置とよめる。又朝ことにといへる重言。いつれも勝負のほとさたかにみえ侍らす。持とや申へからん。

九番

左基持　重基朝臣

秋くれて千草の花は殘らねと獨うつろふ白菊のはな

右俊勝　忠隆朝臣

かきりなく君か千代經むしるしにや散殘るらん宿のしら菊

俊云。秋暮ての歌させることなし。其中にも殘らねとゝいへる。のこりてそとや云へき。扨こそ獨移ふとは云へけれ。次歌菊散といへるうたは。なにゝあらねと猶如何聞ゆ。さはあれと權門にことよせたり。なとかたさらん。基云。左右のうた。心も詞もおなし程なれは。いつれ

とみえ侍らす。是もおなし程にこそ。

十番

左　　宗國朝臣

植しその心も置ぬ白菊はあたなる霜に移ひにけり

右両判爲勝　　兼昌朝臣

菊のはな夜のまに色やかはれると霜を拂て今朝みつる哉

俊云。前うた心も置ぬと云る事にや。後歌の文字つかひはおさなけれとも。霜を拂ふ事はさもと聞ゆ。まさりてもやあらん。基云。何ことにてかはきくに心置けん可ㇾ尋ㇾ之。右よのまの色心おほつかなしとて。霜を拂みつらんこそいとおかしう侍れ。猶こなたそ老の心もとまりぬへき。

十一番

左両判爲持　　信濃公

こけのむす岩ねに殘る八重菊はや千代さく共君そみるへき

右　　時昌朝臣

霜かれに我ひとりとや白菊の色をかへても人にみすらん

俊云。苔のむす岩ねに菊の殘れる證歌やあらむ。若なくはきはめてあしし。すゑはことのほかにふりたり。後歌は我ひとりとやといへる心ゆきても聞えす。人々やまひといふ事に事きるゝ。持とや申へからん。基云。難をは置て岩ねに殘らん菊こそ松なとのこゝちし侍れ。右の我ひとりときくのおもふらんも。おしはかり事にこそ。此花開てなといひて侍るは。みる人のおもふことにこそ侍れは。何れも勝負のほとみえねは持とや申へき。

十二番

左　　俊隆朝臣

霜枯に移ひ殘る村菊はみる朝ことにめつらしき哉

右両判爲勝　　爲實朝臣

置しものなからましかは菊のはな移ふ色をけふみましやは

俊云。前歌無ㇾ指事ㇾ。むらきくおさなけなり。次歌は霜置つれはうつろへる色もみせすとこそ云へけれ。霜置てみゆといへる事たかひぬ。但置たれはひさしく有とみゆと讀るにや。心得ては勝もやせん。基云。此〻させる難はみえねと歌合のうたとはみえす。なけ歌のやうにそ侍るめる。右歌もさせる事はなけれとも。移ふ色をけふみましやはといへる。少云なれたるやうに侍れは。増りたりとや申へからむ。

一番　　戀

左俊勝　　攝津公

絶すたく室の八嶋の煙にも猶立まさる戀もする哉

右基勝　　頼國朝臣

盃のしるてあひみむと思へ共戀しきことのさむるよもなき

俊云。前のうた絶すたくといへるは。ひか事とや申へからん。此室のやしま實に火を燒にはあらす。野中に清水のあるより氣のたつか煙のことくみゆるなり。それを燒といはんことといかゝ。但實の煙とのみ讀きたれは。なとかさもいはさらんや。歌からはあしくもみえす。後歌はたくみにておもしろけれと。必よまるへき樣のみえぬなり。盃と云ては酒ありなんや。又のむと云る事大切なり。酒もなくてのむともいはては。いかゝしるんとする。又盃のと初に詠し出さんもいかゝ有へからん。是は

たくみにおもしろけれとこととたらす。左歌めきたれは勝とや申へからん。基云。絶す燒室の八嶋の燒〔マヽ〕にもと讀たるはいかに侍にか。此處に火燒とは何にみえて侍にか。室の八嶋と云事二有。一には下野にあり。二には人の家に有なり。爰は室ぬりたるを云と或物にみえて侍り。是はいつれによりてよまれたるにか。いつれにても絶すたくといふ事いまたみ給はす。されはにや惟成歌にや。風ふけは室のやしまの夕煙心のうちに立にける哉と讀るも。絶すたちけるとはみえす。淺間の嶽不二の山なとぞ煙絶ぬためしにはよみふるし侍るめり。絶す燒心を本意にて。此うたは讀れて侍るめれはかやうに尋申也。所見すくなくて左樣のことなみ給はぬにや。右歌盃のしゐてあひみんとおもへとももとよめるは。しゐてといふ心はけにめつらしく聞え侍るに。戀しき事のさむるよもなきとは。なにと讀たるにか。さむるといふ詞はおもふにゑひによせてよめるにこそ侍めれ。それならは。なをゑひといふ本文有てやよくは侍らん。たとひ醉たるにても。又いかなれはさむるよもなくてはありけるにか。唐にこそ千日醉たる人は侍けれ。それも三年か間こそ侍けれ。是はいつといふことも侍らす。若法文に無明の醉なとや侍らん。それこそさむる世もなくは侍るなれ。此歌なすらへて申へき方なし。左歌絶す燒らんよりは。今少まさりていとおかしうそ侍る。

二番

左 俊持　　俊頼朝臣

口惜や雲ゐかくれにすむたつもおもふ人にはみえける物を

右 基勝　　基俊朝臣

かつみれと猶ぞ戀しき吾妹子かゆつのつま櫛いかてさゝまし

俊云。前のうたは心もえす。ことやう無振歌にこそ侍めれ。後のうたはゆつのつまくしとは素盞烏尊の稲田姫に逢初給し時。御みつからにさし給し櫛也。此歌はかつみれとゝ讀れたれは。すてに逢にける心なん見ゆる。末の句にいかてさゝましとあれは。またさゝぬとこそみゆれ。本文にはたかひたるやうにみゆる。讀人に可ㇾ尋事也。昔承しにたかひたり。ひかことの覺けるにや。勝負無ㇾ論。基云。口惜やなと讀たらんは。かやうの歌合なといまたみ侍らす。無下にこそおほえ侍れ。和歌詩なとは詞をえりて。先花後實とそいにしへの人も申ける。さればにや諸家集竝歌合なとにも。此詞よみたりとみえす。況やまた初の句にもあらす。又雲ゐかくれに住田鶴と云事。和歌にいまたみ出し侍らす。唐の文の中にやと疑れ侍る。若世説と云文に鳴鶴日下といへる心をよまれたるにや。次の句に靑き雲をひらひて白き鶴をみると註いひたれ。雲ゐかくれにとふなと云ん事こそ侍らめ。鶴といひなから雲の中に住侍るへきこそ。淮南鷄そ雲には入侍りけれは。又若はつるといふ事にや。然者源近公相鶴經と云文に。つるは百八十歳にて雌雄あひみてはらめる事は侍れ。さらは人といふことはいかに可ㇾ謂にか。又雲井かくれに住といふところもなけれは。ことはりともおほえす。大方此歌は詞も心も不ㇾ及そみ給ふる。右歌詞にあやまつところもなく。歌からもあしからねはよろしとはひかことにや。

三番

左 両判為勝　女房

いはぬまの下はふ芦のねを重みひまなき戀を君知らめや

右　雅兼朝臣

〔歌闕〕

俊云。前歌いとおかし。指事不レ見。後歌汝かためつらきと女をいはん事は。なめけにやあるへき。女房なとは我にしなくたりたれと。詞はうやまひてこそいふめれ。指る證歌なくは前歌勝にや。基云。此歌可ニ難申一事も侍らさめり。それかなかにも。下はふ芦は今少やさしうそみたまふる。

四番

左 両判為勝　上總公

こひわふる君か雲ゐの月ならは及はぬ身にも影はみてまし

右　顯仲朝臣

祈るらん神のたゝりはなさる共逢てふ事に身をはけかさし

俊云。前歌は人を月になすは。天徳の歌合におよはぬみをもといふにそうたかはるへき。後歌は人に知れたる歌とそみゆる。さはよむらんやは。證歌そ入へき。又男のもとよりいのりをなんすると讀おこせたらん返しなとに。かくよみやるへき。みしらぬに似たり。負ぬるにや。基云。左歌君か雲ゐの月ならはといへる文字つゝき優なる樣にみえ侍るを。及はぬ身にもとある。天暦歌合に中務か。雲井の月とよみたるをおもひてよまれたるにや。戀しきかけはいとよくみえ侍るに。詞とゝこほりたるやうにこそ。右祈らん神のたゝりなとまては有南。逢てふ事に身をはけかさしといへる。いかにと心得かたし。逢と云事いかなるものなれは身をはけかすへきにか。みそなとにおち入たらんこゝちし侍り。いつれもおかしき心はなけれと。雲井の月は今少よろしくや侍らん。

五番

左 俊持　師俊朝臣

つれなさのためしは誰ゝ誰にても人歎かせんはてはすくやは

右 基勝　定信朝臣

逢事をまつの汀に年ふれはしつえに波のかけぬ日そなき

俊云。前歌は委詞ことにして。ともかくも申かたし。後歌は逢ことを松の汀にといへるほと歌めきたれとも。しつえに波のかけぬ日なきといへるわたり戀の歌ともみえす。泪をかけたらましかはさもや聞えなまし。左は戀のこゝろみゆれと。躰詞優ならす。右はなたらかなれとこひの心すくなし。仍持と可レ申。基云。この歌は詞滑て詩にこそ侍めれ。いみしくけつく(よろイ)しくはらくろけに思ひよりて侍る戀哉。なかとものとくゐかへしといふ文にこそかゝる詞はみたまひしか。よしや草葉のと讀たる事も侍めれと。それはいとおかしうつゝきたるに。是はいとむくつけに聞え侍る。さて逢事を松の汀になとよめるわたり實におかしくこそ。次句のしつえに波のかけぬ日そなきと。いとゝたしかにみえ侍めり。小町か歌にむかひたるやうにみたまふる物かな。これは右かちとまをすへし。

六番

左俊持　少將公

うかりける汀におふるうきぬ繩くる事なくて幾よ經ぬらん

右基勝　信濃公

夜とゝもに袖のみぬれて衣川こひこそわたれ逢瀬なければ

俊云。左右共にさせる難みえす。ふるめかしきは常の事なれは。ひとしとや申へからん。基云。是は何も／＼よろしうみ給ふる。逢瀬なくてこひわたらんこそ いとおかしけれ。

七番

左　兼昌朝臣

戀せしとおもひなるせによる浪の〔下句欠〕

右兩判爲勝　雅光朝臣

玉藻かる忍ふの浦の蜑たにもいとかく袖はぬるゝ物かは

俊云。いつれも／＼おかし。但前歌は初五文字明言をおかしたれは。うち聞に思ひ出られぬ。古人もかやうの詞さるへしとそ申されけれ〔マヽ〕。おとるへきにや。基云。是もかれも ひか事にはあらねと。なる瀬によする波の下句のこし。たえ／＼しく〔こは／＼しく歟〕くるしけにみえ侍るに。忍ふの浦の蜑よりもけに ぬるらん袖こそ今少こひまさりてみえ給ふれ。

八番

左俊持 基勝　盛方朝臣

山のはにはつかの月のはつ／＼にみし計にやかくは戀しき

右　信忠朝臣

戀すてふ皆人ことにとひみはやいと我計あらしとそおもふ

俊云。前うたは古歌にかゝるうたのある こゝちするはひか覺にや。末やすこしかはりたらん。次の歌は文字つつきこはけにそ聞る。おなしほとのうたにや。基云。左歌は廿日の月の 出るよりはてまて。しつのをたまきくりかへし。石上ふるき歌とものもと末にて。めつらしけなく侍と。人ことにみるよりは 歌めきたれは猶左の勝にや。

九番

左基勝　道經朝臣

逢事の今はかたのとなりぬれはかりに問こし人もとひこす

右俊勝　忠隆朝臣

おさふれはあまる涙はもる山のなけきにあたる雫成けり

俊云。前うたはかた野となりなは。かりにくといふへけれ。こすといへるはたかひたり。次歌はあまる涙はもる山のなといへる。 思ふこゝろなきにはあらす。さもときこゆれは勝とも申さむにかたからし。基云。此歌ともにいつれも／＼ ことなる難もなく。心とゝめたる事も侍らぬ中にも。かりに音する人なからんは。今少こゝろほそくそみえ侍る。

十番

左俊持 基勝　忠房朝臣

憂人をわすれはてなて忘川なにとて絶す戀わたるらん

右　宗國朝臣

戀すてふこひはこれにて限てん後にもかゝる物をこそ思へ

俊云。前歌はなにともなし。是ほとのうたはめもおとろかす。奥の歌はこれにて限てんといひたれは。この人のほかに こと人を戀しといへるにや。また明日よりは戀

しといはん事かたし。憶にも聞えぬはおほつかなし。おなし程の歌にや。基云。いつれも〱とかむへきも侍らさるに。右是にて限てんこそいみしう庶幾せすみえ侍れ。なにとて絶すと有は今少うためきてそおもふたまふる。

十一番

左俊勝 基持　　重基朝臣

逢ことをその年月と契らねは命や戀の限成らむ

右　　俊隆朝臣

よと共にもえ社わたれ我戀は不二の高根のけふりならねと

俊云。前歌あしくもみえす。次歌ことのほかにふるめかし。仍前のうた勝たるへし。基云。逢ことをそのとし年と契らて。命をこひの限にて侍らんこそ哀心くるしく侍るに。又よとゝもにもえ渡らん人もいとをし。されはおとりても侍らす。ひとしくそ侍る。

十二番

左俊勝　　爲實朝臣

わか戀はたかしの濱にゐる田鶴の尋てゆかん方もおほえす

右基勝　　時昌朝臣

あふことのたのむ人のなき時はよをうき物と思ひぬる哉

俊云。左右のうたおなしほとゝそみ給ふる。初歌はいささかことなるさまなれと指てことなし。ゐる田鶴のたつねてゆかん勝と申へからん。基云。わかこひはたかしの濱のうた猶上に浪といひて。たかしのとはいはゝやとこそみ給ふるれ。忠房の返しに貫之よみたるにも。おきつなみたかしの濱とそよみたる。濱はいつくにもおほかるに。このたかしの濱のふしにて事たかひてすゝろに覺え侍る。老ほけにたる心なるに。ひか覺にも侍らんかし。右歌みをうき物と思ひたらん。今少しなたらかなるやうにみ給ひはへる。

基俊判奥に獻する歌

身をおきてなとやうきよをうらむらん斷しらぬ我心かな

右元永元年十月内大臣家歌合以古寫二本挍合了

内大臣殿歌合 元永二年七月

判者

修理大夫藤原顯季朝臣

左方人

備後守季通朝臣　皇后宮津君

無名女房實内大臣殿　馬櫪頭盛家

刑部少輔尹時　上總君

僞實　治部大輔雅光

前兵衛佐顯仲　宮内少輔宗國

左近衛權少輔顯國

右方人

前淡路守仲房　右中辨雅兼

刑部大輔定信　散位忠隆

〔式部少輔行盛〕　前左衛門佐基俊

時昌　皇后宮前大夫主兼昌

前和泉守道經　散位忠季

右中辨師俊

題

草花　晩月　尋失戀

一番

左持　季通

さま〳〵の花にしおけは白露も秋はいろをそ定めさりける

右　仲房

をみなへしなつさふほとに花薄まねく方へはゆかれさり鳬

左右歌よみあはせて終にたり。かちまけまをすへきよしおほせられたり。卅一字をはつかにそなふといへとも。勝まけのほとわきまへかたきよしを中に。御返事なきによりて仰をおそりて。末のはちあさけりをもわすれて。むなしきおもえかりのことくもつたなきをのみ。あらはすらくのみ。

二番

左　つのきみ

むすひおく露やわくらんいろ〳〵に亂てさけるも〻草の花

右勝　まさかぬ

こ萩原花さきにけり今年たにしからむ鹿にいかてしらせし

左うた露やわくらんとはいかなる事にか。花の色にひかれてこそいろ〳〵にみゆへけれ。右歌へちのなんみ給へられねはかちとす。

三番

左勝　女房

女郎花のはらの霧にかくれゐてうたても露にたをれふす哉

右　さたのふ

〔モトノママ〕　秋のさかなれと猶はつ花はめつらし

左歌くちをかしきさまなり。右のうたを秋のさかなれとなほ初花は めつらしといへるは。めなれなはめにたつましきにや。まことに花こゝろの人にこそ。よりて左勝。

四番

左　もりいへ

めかれせす我社みつれ女郎花いつのまにかは露はおきつる

右　たゝつね（たか）

うらうへに何まねくらん花薄ひとかたにこそ秋はゆくらめ

左歌われこそみつれ心えすなむ。又あやしく。いつの人まにうつろひぬらんといふ歌。思ひいたされ侍るもの哉。右歌はしめのくに。いとしもみ給へれと右はかつへきになむ。

五番

左　まさとき

露はそめきりたつのへの藤はかま吹秋風にほころひにけり

右勝　ゆきもり

くさ〳〵の花の袂をむつましみ野守はみるといさたはれ南

左歌露はそめ。いみしくすくれて聞ゆ。右のうたたましひこゝろあるをもちて右かちとす。

六番

左持　かむつさの君

秋のゝに千草の花のさくなるにみるも露けきをみなへし哉

右　もとゝし

白露のおりたす萩のからにしき鹿のよる〳〵ころも也けり

左の歌みるも露けしといへるもしこゝろえすなん。右のうた露をおりたすとはいかに。つゆしもをたてぬきにこそよみたれ。つゆにしきをおりいつらんは人にて侍る。またはたなとこそいへれ。たすこそをさなひたれ。されとも左歌からよからす。もて持とす。

七番

左　ためさね

女郎花いくのぬへはか藤袴ひとのにもあらすほころひに皃

右勝　ときまさ

ゆくすゑのにほひさへこそゆかしけれ君か千歳の秋の初花

左歌の詞つかひよからすこそゆゝしくきたなけれ。かくろひたる歌にとおもひけるにや。よのきすにこそ。右のうた心かしこし。又すちかはる事なし。よりて右かつ。

八番

左　まさみつ

年をへてふるのゝ小野に匂へとも猶めつらしき萩のはつ花

右勝　かねまさ

秋くれは千草に匂ふ花の色のこゝろ一つにいかてしむらん

左うた。ふるのの小のこそいとこのましくも聞え侍らね。はつはなはつき〳〵はめなれぬへきにや。右歌千くさの花の色。心ひとつにしむる心なきにあらす。右かつ。

九番

左　あきなか

手向にと結ひておかむかさこしのすそのに尾花ほに出に皃

右　みちつね

あたしのゝ萩の錦やとこならん露ふしあかすをみなへし哉

左歌かさこしいとにくし。ところの名なとは。おかしきをこそとり出まほしけれ。又すそのにといへるちかひたり。すそのゝとこそあらまほしけれ。右歌露ふすこそめつらしけれ。露おくとこそ申つたへたれ。もしそらかやはへらん。なくはちとす。

十番

左　むねくに

たつた山すそのに匂ふふちはかま玉ぬきかくる露やおく覽

右勝　たゝすゑ

佐保川のみきはに匂ふふち袴浪のよりてやかけんとすらん

左歌露かみにあらまほし。右歌心はへ増りたり。よりて右かつ。

十一番

左勝　あきくに

東路のなこその關におひなから猶人まねく花すゝき哉

右　もろとし

山のかけいくのにさけるをみなへし色故人につまれぬる哉

左歌いとけうある歌なり。右歌はくちいとにくさけなり。歌からもおとりてなん。よりて左かつ。

一番　晩月

左　まさみつ

いなり山杉のむら立はをしけみおほろにみゆる夕つくよ哉

右　かねまさ

ゆふつくよともしき影もみる人の心はそこに立くらしけり

左歌よからねとなたらかに聞ゆ。右歌かみいひつゝけにくし。左かつ。

二番

左　あきなか

山のはに急きないりそ夕月夜うきみたに社よにはすみけれ

右勝　みちつね

大そらのたそかれ時の雲まよりもりくる月の影そさやけき

左歌よしなし。さき〳〵の歌ふるきなとにこのさまの歌なし。右歌ははしめのくそいかにせましと。もりくる月かたなくみゆれと左には勝へきにや。

三番

左　もりいへ

秋は猶くれ行空に照月をおほろけならぬひかりとそみる

右勝　たゝたか

吹風はえたやすからぬ木まよりほのめく秋の夕月よかな

左歌くれゆく空に照月をおほろけならぬ光おとろかさてこそ。右うたえたやすからぬなといへるこそ歌めきてみたまふれ。もて右かつ。

四番

左　むねくに

ゆ〔ふ脱歟〕つく日いるやおそきと久かたの空すみわたる弓張の月

右勝　たゝすゑ

東ちやふなきの山のこのまよりほのかにみゆる夕月よ哉

左歌ゆふつく日こそみゝにたちてきこゆれ。またゆみはりの月の空すみわたらむこともかたし。右歌ははしめの句のや。はてのゝこそよしなけれと。末なたらかなれは。よりて右かつ。

五番

左勝　あきくに

夕されは竹のあみとも月かけもさしあはせてそ物は悲しき

右　もろとし

月のまゆ峯に近つく夕まくれおほろけにゃは物あはれなる

左右の歌おなし心に物あはれけに侍りけるかな。しかはあれと右のゆふまくれ事つよなし。よりて左かつ。

六番

左　女房

竹の葉に秋風そよくゆふくれは月の光も心にそしむ

右かつ　まさかね

たかまとの山のすそのゝ夕露にひかりさしそふ弓張の月

左うたさせることなし。右歌末たらかにや。もて右かつ。

七番

左勝

夕されはこのまの月しくらけれはたとりそわたるこやの松原

右　さたのふ

たそかれのおほつかなきに天の原空めつらしき夕つくよ哉

左歌まつのした。ゆふつくよ。まことにおほつかなかりけむとおしはかられてなん。右のうたつた〳〵にきこゆ。よりて左をかちとす。

八番

左　すゑみち

さらぬたにかすかにみゆる三日月を夕霧しはしたちな隔そ

右かつ　なかふさ

いかたおろす杣山川の夕暮は月のひかりのさすからうれしき

左歌かすかにと讀るちからなけになん。右のうたも筏はおとすとこそいへれ。おろすはこゝろえされと末なむうためきたれは右かつ。

九番

左　まさとき

ゆふされや天つ空なるしらま弓とみれは月そ山のはにいる

右勝　ゆきもり

いつるよりさやけき月の光哉いるひの影のそふにかある覧

左歌しらまゆみといへれは月とは聞えにたるに。とみれは月のといへるいかに。このこゝろにては月ともしらさりけるにや。さてはいるはかりのれに〔マヽ〕にや。こゝろならは。しらま弓はなにとおもひけるにか。ふるくよめる天の原ふりさけみれはしらま弓はりてかけたるよみちはよけむとこそ讀たれ。こゝろえぬ事なり。又かみのはてのやもしいとにくし。右歌なたらかに侍るめり。日の光のさしそふそ心えぬや。日のひかりあるをりは。月の光はいかゝとおもひ給ふれとも。猶右のかつへきにや。

十番

左持　女房

宵のまにいつるかけたにさやか也月みつ空を思ひこそやれ

右　もとゝし

なくさむるほとこそなけれ宵のまにわれていりぬる更級の月

左歌いつるかけたにさやかなり月みつ空をおもひこそやれと讀る心えすなん。みたんをりこそとこゝろはへあるにこそ。これはみつそらみたぬそらのならひてあるにやとおほえてなん。右歌さらしなの月とよめる山ならてよむことにや。それそおほつかなし。そう歌なくは持とす。

十一番

左持　ためさね

ゆふつくよ闇の小川に宿らすは立とまりても人のみましや

右　ときまさ

山のはに惜むもしらぬ夕つくよいつ有明にならんとすらん

左歌へちにそのことゝあるなんみえす。右歌はふる歌とこそおもふ給ふれ。まことにいまは物もおほえすまかりなりにたれは。ひかことならは持と申へし。山のはもあかていりぬるゆふつくよいつ有明にならむとすらん。かやうにそおもひいたされは（本ノマヽ）へる。なにの歌にかわかかまへおほえ侍らんものを。たつねらしなふ事。

一番　尋失戀

左　女房

くれことにたつねわひつゝ行方もしらぬ戀ちにまとふ頃哉

右かつ　まさかぬ

さりともと尋ねこしちの方もなくあと方にみてかへる山哉

左歌くれことにたつね わひつゝいとあやし。右歌めつらしからねと。たくみなるこゝちしたり。よりてかちとす。

二番

左勝　ためさね

たつねかれゆきけんかたもしら雲の心空なるこひもする哉

右　ときまさ

なほさりにみわの杉とは敎へおきて尋ぬる時はあはぬ君哉

左歌なたらかなり。右歌は 三輪の杉とおしへおきてけれは。らしなひたるにはあらさなり。よりて左かつ。

三番

左　もりいへ

人しれぬ心はゆきてたつぬれとあはぬ戀ちにまとふ比かな

右勝　たゝたか

ありしたにうかりし物をなにもかて行へもしらすつらさそふ覽

左歌たつねらしなひたりといとみえす。右歌ははしめのふたくふる なれと。たいのこゝろはへ侍めれは右かつ。

四番

左勝　あきくに

うつゝにはゆくへもしらぬやみなれは夢に心をかくる頃哉

右　もろとし

たつぬるも尋ぬるかきり有けれは神にそ祈る夢にしるかに

左歌は あらはのこゝろはよはけれと。ゆくへもしらぬなとは申候めれは。みきの歌はたつぬ計をあらはのこ〔ゝ脱歟〕ろにしたるにや。いとちからなくなむ。よりて左の勝とす。

右元永二年內大臣家歌合以忠家卿眞跡書寫

關白内大臣家歌合 保安二年九月十二(十三イ)日 兼日被下題

題

山月　野風　庭露　戀二首

歌人

左

殿下　前木工頭俊頼朝臣　宮内少輔宗國

散位重基　治部大輔雅光　大膳亮親隆

女房

右

前彈正大弼明賢朝臣　前左衞門佐基俊　右少辨師俊

刑部大輔定信　散位道經　藏人修理亮爲眞(貞歟)

文章生時昌

判者

前左衞門佐基俊

一番　山月

左持　女房

木の間より出るは月のうれしきに西なる山の西にすまはや

右　明賢朝臣

みそらはれ所もわかす照る月の影もてはやす越のしら山

左歌月は山のはよりこそ出るものとしりて侍るに。このまよりはいかに出けるにか。古き歌ともあまた見侍るに。木のまよりもりくるなとそよみて侍るかし。〔又〕西なる山のにしにすまはやと よまれたるも。いと心えかたくそ。月をとくみんには。ひんかしの山の東にこそすまゝほしうはへれ。されはふるき歌にも。月の出る山のあなたの里人とこよひはかりは身をやなさましとそよみてはへる。右歌みやこの山とも〔を〕おほくすきゝて。こしのしらやままておもひよりけんは。雪に月をもてはやさする意とこそ見侍るに。さらはなほ雪と〔よ〕見てやたよりあるこゝちはすへからん。おほかたのさまもいとゆうにもはへらさめれは。こよひの月の影こそいつれまされりともまふしかたし。

左歌このまより月のいつといふことはいかに。本文おほつかなし。又にしなる山のにしにすまはやとまうす。そこはかとなきやうなり。

右歌かけもてはやすしら山とまうすは。雪のきか。しからは雪の字大切なり。白山のなはかりにては いかゝもてはやすへからん。ちとやまうすへからん。

二番

左持　俊頼朝臣

こよひしも姥捨山の月を見て心の限りつくしつる哉

右　基俊

あなし山ひはらか下にもる月をはたれ雪ともおもひける哉

左歌はこよひしも姥捨山のなといへるもしつゝき。ことなることなんなくそ見えはへるに。またおはすて山の月は。なくさめかたき事にそ。いにしへよりよみふるしたるを。この歌には心をつくすと侍るこそみゝなれすあたらしき心ちしはへれ。右のひはらか下にもる月は。なんすへきところはなけれとも。ふるめきすきて。

めつらしからぬさまにはへれは。おとると申へきにや侍らん。

この歌とも別に無㆓其難㆒。左の歌は木のまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋は來にけりといふうた有。それによそへられたれとも。つくしつるかなとある義にあはす。心えす。方人申云。我心なくさめかねつさらしなやをは捨山に照る月をみてとよめる歌あれは。つくしつるかなは左様のこゝろにやさふらはん。判者云。姥捨山の月はなくさめかねつとこそよめれ。心つくしにはあらす。右歌あなし山ひはらかしたのなかつ道はたれしもほの〔イ二字ナシ〕ふる月いてにけりといふ歌をおもひてよめるか。左詠㆓僻事㆒。右似㆓古歌㆒。持とや申へからん。

三番

左勝　殿下

神のますみかさの山に月かけのゆふかけてしもさし登る哉

右　定信

我ひとりいるさの山と思ひしにまつすみまさる秋のよの月

左歌月はつとめて照るなといへるものならはこそ。ゆふかけてしもとはよみ侍らめ。さし登るなといへるわたりも月とはおほえて。たかせ船なとよまん心ちそし侍る。おほかた歌からも。ひまおほかるやうに見えはへめり。なをうみのうへ舟のうちの月ならは。さし登らんもよくはへりなんかし。また右歌三十一字とるへき所なくはよみてはへらん。左におとれりとはおほえす。されと三笠のやまのかみにことよせたてまつりたるわつらはし。さらはいかてかかたさりたてまつりはへらさらむ。

右歌ことはたひたり。

左歌たけたかし。かちとや申へからん。

四番

左勝　雅光

月影をまつも惜むも苦しきにいつくなるらんやまなしの里

右　師俊

いさらなみはれにけらしな高砂の尾上の空にすめる月かけ

左歌まつもをしむもくるしくて。山なき里もとむらんこそ。むけに月のおほえうすくて。もてあそはんの心もなきやうに見えはへれとも。右歌のいさらなみとはなにゝかはへらむ。古き歌にも見えたる所もはへらす。またをのへの空にすめる月かけなとも。おほかたおもひえたる所なくおほえはへれは。なを左はいま少しよろしきにや。

右歌いさらなみとあるは。なにのなそおほつかなし。方人申云。くもゐのな也。判者云。さらは證歌有へし。方人申云。萬葉集の歌なり。判者問㆓其歌㆒。方人不㆑陳。仍左勝。

五番

左持　〔宗國〕

もみちする山のはにすむ月影はいとゝ光そさしまさりける

右　道經

もみちするかゝみの山の月影は光ことにそてりまさりける

此歌左も右も心もことはも。たゝおなしやうに侍れは。いつれまされりと見え侍らす。

左右皆同樣なり。持とや申へからん。

六番

左勝　重基

秋の夜の月のひかりのもる山はこの下影もさやけかりけり

右　時昌

神のすむみかさの山の月なれはかり初にきる雲たにもなし

左歌すかた心ともにいとおかしうよまれてはへめり。右歌かりそめにきる雲たにもなしと。いかによめりといふ意えしりはへらす。なんするにもおよはす。此三笠の山の神。おなし心にわつらはしく侍れとも。ことの外ならんをは。ことわりに御らんしゆるしてんとそおもひ給る。

右歌きるといふことは心えす。あまきる雪なとゝよめるは雪のふるかきりて見ゆるをよめる也。雲をきるとよめる證歌不審[也]。

左歌ことなるなんなし。左を爲レ勝。

七番

左持　親隆

三輪の山すきまもり來る影見れは月こそ秋のしるし也けれ

右　爲眞

伊駒山木しけき物をいかにして谷のをかはに月のすむらん

此歌左右勝負定かたし。左右ことなる難なし。仍爲レ持

一番　野風

左　俊頼朝臣

けさ見れは萩女郎花なひかしてやさしの野への風のけしきや

右勝　基俊

たかまとの野ちのしのはらすゑさわき空や秋風けふ吹ぬ也

左歌。はきをみなへしなひかしてといふもしつゝき。やさしの野へなとまて。いと見ところなくはへめり。誹諧の躰のことはゆかぬにてこそはんへめれ。右歌さまもいとたかく。ことはおかしうはへれは。かつへきにやとおもひたまふも。いかゝはへらむ。左方人右歌のそらやといふことはを。すこふるあさけりまふす。判者云。左歌なひかしてと云ことは。いみしくけなるさまなり。上句すこふるちからもなきやうなり。

右歌そらやとよめるは曾根好忠歌に。そらや秋風ふきぬなりとよめれは。證歌なきにあらす。されは右をやまさ[れ]りと申へからむ。

二番

左勝　上總

風はやみうへ野の尾花おきふすを須磨の浦浪立かとそ見る

右　明賢朝臣

旅衣のちの草ふしさむけきに風も同しくゆふゐせよかし

左歌風ふけはうへのゝ尾花おきふすをなとまては。すゑいかなる事かあらんすらんと思ふほとに。すまのうらなみたつかとそ見るとよめるいとおもはす也。うの花さける玉川の里なとこそ波のしからみかくるもけにとおほえ侍れ。此すまのうらなみはいとこちたく。を花はさまておしこりておふるものにてもはへらす。ひとむらつゝなとこそ秋野にもまねきはへめれ。右歌のたひ衣野ちの草ふしこそまた心もえす。さをしかこそをのゝ草ふしはし侍れ。たひ行人のちの草ふしは。なをふ

るき歌の左様によみたるこそおほえ侍らね。又風もゆふゐせよなといへるわたり。いふにもたらすおほえ侍れは。なをすまの浦波のすこしは立まさるへきにや。
左歌尾花なみに似たりとよめる證歌不審也。
右歌野ちの草ふしは。おほくしかの歌にそよめる。されはをの丶草ふしなと丶よめり。人の草ふしといふ本文ありや。方人申云。伊勢のはまをき折ふせてとよめれは。草ふしとよめるもなとかとこそ聞えはへれ。判者云。いせのはまをきの歌は。此證歌に引へからす。その儀すてに異也。〔左〕右歌みなよろしからす。但右歌雖おほくは左をやまされりともふすへき。

三番

左　雅光

かるもかくゐな野の原の秋風にこやの池水さ丶らなみたつ

右勝　師俊

唐崎やなからの山にあらねともたさ丶浪よるまの丶秋風

此歌ともはた丶おなしほとにはへめれと。なをさ丶なみよるまの丶秋風はよろしうはへ〔め〕り。
左歌かるもかくゐなのとよめるは。いかに心えたるそや。雄略天皇御時の事なり。ゐなのとよめるは。ゐのししなき野とよめる也。されはゐなき野には。なにのかるもいか丶あるへきそ。方人申云。猪なのとよまんとて。かるもかくゐもなきのとよそへてよめる也。ゐのししのありなしは。そのなんはへるへからす。判者云。陳申旨なをうちまかせたらす。
右歌ことなる難なけれは勝とや申へからん。

四番

左勝　親隆

鶉鳴かた野にたてるはち紅葉ちりぬ計に秋風そふく

右　為眞

秋風の尾花ふきまくゆふされは野へには雪のふるかとそみる

左歌はち紅葉こそむけにみ丶なれす。ことあたらしうはへれ。は丶そかへてなとをおきて。はちもみちをしもおもひよりはへるこそいと思ひかけす。たとひよむいろなりとも。はちの紅葉なとやよむへからむ。のもしなきかいみしうことたらぬやうにおほえ侍るに。又右歌の尾はなふきまくといへる。古き歌にもかくよみたらむ尾花の歌また見侍らす。下の句に野へには雪のふるかとそ見るといへるも。はなの風に散るをこそ。ゆきとも見るなとはよみはへめれ。あきのをはなの雪とよみたる古歌こそえみいてはへらね。あしの花をそ唐の歌には雪によそへてつくりてはへるかし。上下に二儀あれは。まことに尾はな吹まくるにこそ侍〔め〕れ。
左歌はちもみちそあたらしきやうにきこゆれと。歌さまあしくも見えはへらす。
右歌をはなを雪のふるに似たりとよめる歌ありや。また尾はなをは。まねくなと丶こそおほくよみならへれ。吹まくとはいか丶あるへからん。方人申云。櫻ふきまくとよめる歌はへれは。なとかさもよそへ侍らさらん。判者云。櫻ふきまくといふは花のちりたるか風にまきあけられたる也。をはなは左様に風にまきあけらるへきものかけ。されは陳申證歌その義ことなり。仍左まされ

りと見ゆ。

五番

左勝　殿下

ありま山すそ野のはらに風吹はたまもなみよるこやの池水

右　定信

秋ふかみ風ふきとよむ宮城野にふすゐの床もあれやしぬ覽

左歌すかたこゝろともにもてあふへき。されとも右歌のみやきのにとよむらん風こそ。いとおとろ〳〵しう。山やはやしなとの風こそさはふきとよめ。小萩かうははふかん風は露はかりやみたれはへらん。又みやきのには妻こふる鹿こそすむとしりてはへるに。ふすゐのとこもきゝならはすそおほえ侍る。されは左の勝へきとさため申はへり。

右歌風吹とよむとよめる。萬葉集なとにはおほくとよむとよめれと。寛平九年歌合に鶯の歌にとよむとよめるを。そのことはよろしからすとさためられたり。また山したとよみなとゝこそよめれ。野にはとよむとよめる歌おほえはへらす。草の葉のおとすと讀は竹萩のはなとをこそあまたよみならへれ。おしなへて草のとよまん事はいかゝはへるへからむ。左歌頗よろしきか。

六番

左　宗國

秋野のはなすり衣ふきかへし色ならなくに風そ身にしむ

右勝　道經

常よりも身にしむ物はさを鹿の朝たつ小野のくすのうら風

此歌ともすかたたゝおなしほとにはへれとも。左歌の秋の野の花すりとよめる。いつれのはなしてすれるにか。萩かはなすりにこそははへめれ。花とてもおしなへてをみなへしふちはかまなとにてする物ならねは。なほ秋の野のはなすり衣には。はきかた（本ノ）いさはにおほえ侍る也。右歌はことなる難なけれは。右の勝へきにや侍らん。左歌はなすり衣とよめるは。なにのはなしてすれる衣そ。はきかはなすりなとゝこそよめれ。此歌にては萩か花すりのやうに。いはまほしくこそ見ゆれ。されはことはたらはぬ歌也。右歌ことなる難なし。仍爲レ勝。

七番

左持　重基

吹風は色なけれとも野はら行人の身にしむ秋の夕くれ

右　時昌

いとゝしくうらかれもていく秋野に淋しくもある風の音哉

此歌ともはいつれもまされりとおほえす。持と申へきにや。

左歌ことなる難なし。

右歌おもへる所あり。左右ともに一の躰〔ソイ〕拾ひたれは持とや申へからむ。

一番　庭露

左勝　雅光

あさまたき庭のあさちのうへ毎につらぬきかくる露の白玉

右　師俊

かるかやのみたるゝ秋のあさきよめ賤の衣や露ふしぬらん

左歌ふるき歌ともにそおほえて侍る。歌のすかた少し

したゝかに侍めり。
右歌あさきよめ露ふしぬらんなといへる。いふにもたらすそおほえ侍れは左の勝とそ見たまふる。
左歌古歌のこゝちそしはへる。右歌〔あさきよめとよめる歌をおもへるか。それは〕あさきよめすなとよめれはこそきゝよくはへれ。このあさきよめは。ことはもたらすこそきこゆれ。左まされりと申へし。右方人。猶にはのあさちはいかゝとかたふきはへりしかは。判の後なりしかは。おもひなからそ。

二番

左持　宗國

庭もせに玉ときちらす白露をみたれてぬける糸薄かな

右　道經

朝またきくさはの露の消ぬまは玉しく庭のこゝちこそすれ

左右おとりまさりのほとさらに見えはへらす。
左歌いとすゝきとよめる不審也。證歌をたてまつるへし。おほかたの歌からはあしくもはへらす。
右歌うたからはいとしもなけれと。させる難なし。ちとや申へからん。

三番

左持　殿下

しつか家のそともの庭のよもきふにやつれす露の玉と置哉

右　定信

いろ〳〵の玉とそ見ゆる紅葉はのちりしく庭における朝露

左歌しつか家のとよめるもしつゝき苦しけにはへめり。
玉とおくかなといへるも。いとたえ〔こは イ〕〳〵しくそ。
右歌ちるらんもみちのうへには時雨のおとなひしそ。常のことにて侍る。千種の花におけらん露とも。いろいろの玉とは見えはへりなんものを。このもみちの露にそけにともおほえはへらねは。いつれもおなし程のうたにこそはへめれ。
左歌しつかいへのとよめることはつかひいとしもなし。
右歌左歌にいくはくもたかはねは持とや申へからむ。

四番

左　俊頼朝臣

庭もせにさきすさひたるつき草のはなにすかれる露の白玉

右勝　基俊

岩のうへの苔のはことに置露を玉しく庭とみけるはやわか

左歌さきすさひたるこそいみしうけにおほえはへれ。萬葉集なとには侍りもやすらん。かやうの歌合。古今後撰なとにこそ。ことによみたりとも見えはへらね。すかれる露もいとお〔か〕しらも見え侍らす。右歌させることはなけれとも。うたさまなたらかにて。よみしりたるさましてはへれは。右のまさりたるにやはへらん。
左歌よろし。されと右歌からまされり。はやわかそ人におほつかなけなる。されと名歌詞也。

五番

左持　重基

うつしうゑし草はの露のこほれれは秋の庭をは拂はてそみる

右　時昌

玉しくと人や見るらむ朝ことにこけむす庭におけるしら露

左歌うつしうゝる草葉やその名あるへからむ。されと

歌さまあしくもはへらす。
右歌も難なけれは。ちとや申へき。

六番

左持　親隆

露しけみさこそこひする宿ならめ玉ちる庭と人やみるらん

右　爲眞

みとりなる玉ぬきちらす心ちしてこけむす庭に置る朝露

左歌露しけみさこそこひするやとならめといへることはこそ。つゝきもなきやうにはへれ。また露しけき宿には。かならすこひすることにやはあらん。また玉ちる庭もいとおとろ〳〵しう。されは露の玉にはあらて和泉式部かきふねにまいりてよむうたに。
物おもへはさはの螢も我か身よりあくかれいつるたまかとそみる。
御返し。
おく山にたきりておつる瀧津瀬に玉ちるはかりものなおもひそ。
とはへれは。玉ちるといふは露の歌かなひたりともおほえはへらす。右歌しそく五寸からちに十首なとよむうたの心ちしはへれは。あらましまうすへきほとにもはへらさめり。されはちとやまうすへし。左歌玉ちるとよめる如何。き舟明神たくせん。和泉式部歌に。玉ちるはかり物なおもひそとよめるに。おもひよそへたるか。それはたましひちるとよませたまへる也。されは露にはいかゝあるらん。方人申云。露は玉に似たり。なみたも玉に似たりとよめれは。その難いかゝはへるへからん。判者。なほかたむかれて持とそ見ゆるとまうす。右歌ことなるなんなけれは也。

七番

左持　少將君

庭のおもにおく白露のなかりせは葉草にやとる月をみましや

右　明賢朝臣

あれ行は秋の野らなる庭の面をはらはてそみる朝ことの露

此歌いつれも〳〵いとしたゝかにおかしうはへめり。
左歌月をも見ましやとよめる。さきに山月といふ題あり。かたはらのたいをおかすはおほひなる難也。
右歌秋の野らなるとよめるは。のらとはなにをよめるそ。方人申云。野らとは草をいふ也。やかて草といふもしなんよみはへると陳申。又判者いはく。古歌にのらとよめるおほえはへらす。またその證歌を不ㇾ陳申。左歌題ををかせり。されはちとや申へからむ。
其外各ことなる難なけれはなり。

一番　戀

左　俊頼朝臣

秋かへすさやたにたてるいな草のね毎にも身を恨みつる哉

右勝　基俊

から衣立田の山にいくしたて神さひにける我かこひかな

左歌秋かへすさやたといへることは。いかなる田にかはへらん。證歌もおほえはへらす。ねことにも身をなといへる。またふるくよみたらん[こ]と見はへらす。ことはいやしくてとりところなし。右歌たつたの山にいくしたてかみさひにけるなといへるわたり。よみしりて

はへめれは。右の勝へきにや侍らん。左歌秋かへすとよめるはいかなることそや。さや田といふはいかなる田をいふにか。なかにももみとよめるたねの事か。いまたもみとよめるうたきこえす。まさなくこそはへれ。右歌ことなる難なし。仍爲レ勝。

二番

左勝　女房

ときのまに命をかへて泪川あはぬためしの名をはなかさし

右　明賢朝臣

あふ事を頼み頼ますいせちなるいならの神のきゝもはてはや

あはぬためしのなをはなかさし。いならのきゝはてんよりは。まさりてそおもふ玉ふる。左歌からたくみに見えはへり。

三番

左持　殿下

わか戀の衣の浦の玉ならはあらはれぬるも嬉しからまし

右　定信

戀せしとおもひたちのゝ駒なれと心はしりになをそ苦しき

左歌うたからはあしくもはへらねと。戀にはあらて法花經の歌よまんに。以二無價寶を一題にえたらん歌の心ちそし侍る。戀にはいとたふとくそきこえはへる。右歌戀せしとおもひたちのゝこまなれとゝいへる。もしつゝきよくもおもひたまへぬに。しもの心はしりのくるしからんも。とにかくにさゝへたらむところおほく。いつれもなんのかちとも見えはへらねは。持とや申へからん。

左歌法文ににたり。いみしうたふとし。戀の歌とはおほえす。右歌心はしりとよめるは。いかゝはへるへからん。證歌あらはたてまつるへし。方人申下有二證歌一由上。されと不二分明一。左なを戀の心ともおほえす。持とや申へからん。

四番

左持　重基

うしとてもさのみや人を恨むへきことはりとたに思ひなさはや

右　時昌

ひと心うきたひことにいとへ共たへたるものは我身なり鳬

此歌左も右もすかたこゝろともにおかしう。けに戀の歌はかやうにこそよまめとそ見たもふる。左右ともによろし。正義をよめる歌なり。ちとや申へき。

五番

左勝　雅光

よとゝもにしほるゝ袖や衣かは汀によするもくつなるらん

右　師俊

こゝろのみくたくる戀や淵となるそはゐによする興津白浪

左歌しほるゝ袖やころも川なとよめる。いひなれおかしうはへめり。右歌ふちとなるそはゐとは。いかにつゝけてはへるにか。歌からもおとりてはへれは左勝とぞ。左右歌おなしやうなれとも。ところのなによそへんに。衣川はすこしまさりてや侍らん。されは左爲レ勝。

六番

左勝　女房

山ふしの旅の泊りに燈す火のうち出て人にほのめかしつる

右　明賢朝臣

うちとくる事の難くも見ゆるよをいひいてあはん方そ又なき

左の山ふしのたひのとまりの とよめるもし。ますらをの戀にはあらて。まことに山ふしの こゝろうちにこめたりける戀にやとそおほえ侍る。こけの衣はたゝひとへなとよめる。まことの山ふしの歌にてあるを。そうかにてよめるにやはへらん。右歌は六義とらへたる ところはへらす。難すへきことはたにおよはねは。なをうち出てほのめかすらん戀やすこしまさりて侍らん。左歌の山ふしのとよめるそ いとしもなけれと。右歌てつきたるやうに見ゆれは左爲ㇾ勝。

七番

左　俊頼朝臣

くれ行は忍ひもあへぬわか戀やなるとの浦にみつしほの音

右勝　基俊

よそなからしらせてし哉みかり野にましろの鷹の戀の心を

左歌なるとのうらにみつしほの おとゝいへる。むけにつふきれに。にほひなくおほえはへるに。ましろのたかのこひの心は。いますこしたかくや侍らん。左歌しほのおとはいかにあるへきそ。戀するはかならす おとある物かは。右歌無ㇾ難。仍爲ㇾ勝。

八番

左持　親隆

戀をのみすまの浦なる濱ひさき誰かはしらぬしほれたりとは

右　爲眞

よと川の淵に我身はあらねとも戀のすみかとなりにける哉

此歌左右見くるしからすはへめり。みところある心ちそしはへる。左歌からは優なり。

右歌有ㇾ念。されはちとす。

九番

左持　宗國

見せはやな時雨ふるやの淋しきに獨ぬる夜の床のけしきを

右　道經

あやにくに夜を長月の秋しまれ草かれ〳〵に人のなるらん

左ぬる夜の床のけしきは。まことに物さひしく あはれにはへるに。また草かれ〳〵になるらん人のこゝろも。いと心ほそきことにこそ。されは此戀のこゝろは。いつれもなんなくこそ おほえはへれ。左右おなしやうにそおほえ侍る。

十番

左　殿下

忘れしのよその情はさもあらはあれうきめ也共あひて社みめ

右勝　定信

おもひかね返す衣はもゝよかはかりにあひみぬ戀もする哉

わすれしのよそのなさけは といへるよりも。かりにあひみぬ戀は。いますこしきゝなれたる心ちそしはへる。

左歌[　　]かしきさまなり。

右歌[　　]爲ㇾ勝。

十一番

左勝　雅光

さもあらはあれ涙の川(は)いかゝせん逢みぬなさへ流さすも哉

右　師俊

夜とゝもに袖のみぬれてあさりするあまゆふなりや我思ふ事

左歌あひみぬなさへなかさすもかなとおもふらん人も。ことはりにいとおかしう。右あまゆふなりやとよめる。あふかた心もえはへられは。なみたの川こそ あはれにおほえはへる。

右歌あまゆふなれや とよめるはなにことそや。左歌よろしくみえはへれは爲レ勝。

十二番

左勝　親　隆

こひしなて心つくしにいままて〔モイ〕はたのむれは社いきの松原

右　爲　眞

芦の屋のかりそめふしは津の國のなからへ行と忘れさり鬼

左の心つくしのいきの松原は。あしのやの かりそめふしには戀のこゝろも 歌のすかたも。まさりてそおほえはへる。左歌すこふる よろしく侍り。右歌もよけれとも。なを左勝とや申へからむ。

十三番

左勝　重　基

つらさのみありそのうみの磯つたひ忘貝たにいかて拾はん

右　時　昌

心さしあこれの浦の底深くこふるしるしはいつか見るへき

右歌あこれのうらとよめるかみの五文字古歌にあはす。心えられす。

左歌させる難みえすしてよろし。されは爲レ勝。

十四番

左勝　宗　國

わりなしや心をいつちやりてまし行てなくさむ方もありやと

右　道　經

そりかへり梓のま弓ふすよなき人をはなにと戀わたるらん

左歌やりてましといへるわたり。おかしけにもみえはへらす。いとこはけにそはへれと。右のそりかへるにくらふれは。いま少しみゝちかくそ おほえはへる。左爲レ勝。

爰に又はへる。

あまゆふなれやとは。あまゆふとはならぬことをいふ也。それをしらさらん人をまけにせんとてこそ歌のぬしはらたゝせたまふめりしか。いさらなみとは。きりのなりとそ。誰かしらぬとそ。よろつのすいなふにはへり。

此一册左金吾基俊以自筆之本令書寫再三加挍合畢

右保安二年關白內大臣家歌合以古寫二本挍合了

和歌部卅九歌合五

永縁奈良房歌合大治三年二月五日

題

櫻　郭公　月　雪　祝

歌人

左

大納言君　三郎君　世宇治山老隱　香象房

弁得業　香雲房　上總君

右

中納言君　弁君　大輔已講　眞常房

花林院得業　慈光坊　式部君

判者　前木工頭源俊頼朝臣

一番　櫻

左勝　大納言君

深山にはしもとかさをれはやけれと麓の花は今年咲めり

右　中納言君

散花をさそふとみつる春風のうはの空にも捨てける哉

左歌はしもとかさをれなといへるなと。ことせぬにあらす。こと葉もいとおかしく。えたをれうせなはさきかかるやとみゆれと。はやけれとゝいへるとの字に。をりのにわたる枝とはみゆめり。ことし咲めりといへることはつゝきそてつゝに見ゆめる。右歌珍らしきふし見えす。ことなる難もなきにや。されとことのほかならぬかきりは左をかたすることなれは以レ左爲レ勝。

二番

左　三郎君

遠近のちる花ことにたくひつゝ春は心のあくかるゝかな

右勝　弁君

山櫻ひるみる色のあかなくによるさへ花の影にむつれぬ

左歌ことなる難見えす。世のつねのことなれは。めつらしくなくそ見給ふる。右の歌はひるみる色のなといへること葉頗おさなけなり。されとあかぬ名殘によるむつるゝなと心ありとや申へからむ。

三番

左勝　世宇治山老隱

浮世にも花のさかりに成ぬれは物思ふ人はあらしとそ思ふ

右　大輔已講

散さらん事こそ花のかたからめ侘ては扨もしはしあらなん
左歌心あり。さもいひつへきことかなと見ゆる。春のこころはなといへるふることに。心はしかをりていとおかし。但おもふといへる詞そ二所みゆめる。句をつゝくれはとかなしといへは。さてもありなんとおもひ給ふれと。次のおもふ句のはしめにあらましかはとそみゆる。右歌はわひてはなといへるより。すゑまておさなけなり。歌とは聞えてたゝこと葉に似たり。仍左を勝とそ申へき。

四番

左勝　香象房
春の日を猶なかゝれと思ふ哉花みることのあかぬ心は
右　眞常房
ことしもやあたに散ぬる山櫻さもあさましき花のくせかな
左右とも優なり。されと左は猶おかしう聞え侍り。右はなのくせ哉なといへる深難にはあらねと。みゝとまりて聞ゆれは猶左勝へきにや。

五番

左勝　弁得業
櫻山はなの盛に風ふけは梢をこして白浪そたつ
右　花林院得業
此春は花に心のあくかれて木の本にてもくらしつる哉
左歌すゑのこと葉すへらならねと。こゝろあるににたり。右歌は心あくかれは花の梢ことにこそあるへけれ。木の本にしつまりてくらさは。花に心とまるとこそいふへけれ。このふしは事たかひて聞ゆれは勝にや。

六番

左勝　香雲房
八重櫻ふるき都に匂へともふるすも花の珍しきかな
右　慈光坊
宮古いてゝかりそめにこし山里の花に心のからめられぬる
左歌は心いとおかし。ふるとふりとは。やまひと申へからん。されととかにはあらすもや侍らん。右歌はかりそめにこしも花をたつねけると見えれは心さしもなし。すゑのからめらるゝといへること葉おひたゝし。古きことになきとにはあらねと。なをみゝとまるこゝちしてそ。

七番

左持　上総君
しら浪の立田の川にしきる哉山の櫻はちりにけらしも
右　式部君
花さかり雪とそみゆる年をへてよし野の山は冬は二たひ
左歌はしきるかなといへるこしの文字。あさはなれて聞ゆ。又水のなかれにつきて見たる本意にあらす。猶梢をみはや。深山かくれのはなをみましやなといへるは。さるなにむかひてあることをいふなり。是は歌合に求めてよまむにはこゝろさしなし。右のうたは花を雪に似する。あけくれの事なれはめなれて聞ゆ。すゑの冬はふたたひゆうにもなし。又ことたらぬに似たり。もし持にや侍らん。

一番

郭公
左　大納言君

時鳥まきのとはかり待つれとなかて明ぬる夏の東雲

右勝　中納言君

郭公なくうれしさをつゝめとも袖には聲もとまらさり鬼

左歌はとはかりといへること葉は。たゝしはしと申す詞にや。さらは心さしなくもや。あくる東雲とよめるは曉のかたより待そめけるにやと聞ゆ。ほとゝきすをきかぬ歌。ふるき歌合に其數みゆめり。されときゝたらんうたのとかなからんにはいかゝはへらん。右歌別によからねと歌めきたり。なとかたさらん。

二番

左持　三郎君

遠方やくもゐの山の郭公あまつよそにも鳴わたる哉

右　弁君

ほとゝきす信太杜の忍ひ音を尋ねさりせはいかて聞まし

此つかひともにあしくもみえす。左はめつらしきさまなり。右はふるめかしきやうなれと。歌からなたらかなり。もし持にもやとそみ給ふる。

三番

左勝　老隱

五月雨にぬるともきかん時鳥二こゑきなく里は有やと

右　大輔已講

五月やみくらくはくらく時鳥聲はかくれぬ物にそ有ける

左歌殊に珍らしからねと。させるとかなし。みくるしきもしなとはすへすよみわたるににたり。右歌は暗はくらくなといへる。はちあしき人のいはんこと葉とそ聞ゆる。歌詞とはおほえす。すゑの聲はかくれぬるなといへる。古き歌に。こゑはかくれぬとも。聲はへたてぬともいへるうたあれは。かた〳〵にはゝかり有へし。雖もなき左の勝なり。

四番

左勝　香象房

あたらしき只一こゑを郭公いかなる里に鳴とよむらん

右　眞常房

いかはかり哀ならまし郭公かくまたれてしきなかましかは

左歌はいといたくおもひよりたりとみゆ。但まさしうなきとよむを聞てこそ。きなきとよむなとはよめれ。きかて鳴とよむらんとをしはからんこと頗荒凉なり。なかすもあらむものをされと心あり。右歌かくまたれてしなとよめるほとすへらかならす。句きらまほしきこともあれは。左の勝にやとそ申へき。

五番

左持　弁得業

郭公はな橘にやとるともなのらさりせはいかてしらまし

右　花林院

さよ中にみふねの山の時鳥ほのかに鳴てすきぬなる哉

此歌ともあしうもあらす。左なたらかにてゆうなり。右みふれの山といひて。ほのかになといへるわたり。思ひ所なきにあらす。仍持とや申へからん。左のさくさ(作者)そなをこゝろゆかすおもはれん。

六番

左　香雲房

終夜まつにはなかてほとゝきす朝の原に一こゑそきく

右勝　慈光房
五月にはしはなくやとそ時鳥猶うら待にさぬるよもなし
左歌はあしたの原をかひなきさまによまれたるこそあやしけれ。今ひとところのなといへるは。ひるもまち尋ぬへきにや。右歌は時鳥はしはなくへきものにはあらねと。ねかはんにはなとかはさもよまさらん。うらまつそはしめとはかりの おりによくしつるやうに。ほとなきことにまうすやうに おほゆる。右にの字そへもしにやあるへからんとおほゆる。萬葉集みける人の歌にやと心にくゝ見ゆ。

七番
左　上總君
郭公ひと聲なきて過ぬれとしたふ心そちゝに有ける
右勝　式部君
ほとゝきす雲のたえまにもる月の影ほのかにも鳴わたる哉
左うたさもなとかと聞ゆるほとにすゐの有けるこそ。そくたい(束帶)してしたふつはかさらん心ちすれ。右歌雲のたえまにもる月は。あやにくにあかき物とこそみ給ふれ。なをかけほのかにといはゝ。月に雲をやかくへからん所社おほつかなき。もし證歌あらはよき歌なり。しはしにても勝とそ申へき。

月
一番
左　大納言君
板間よりねさめの床にもる月を戀しき人と思はましかは
右勝　中納言君
くれはとり二村山をきてみれはめもあやに社月もみえけれ
左歌は板間よりといへる五文字は。ふるき人もはしめにはをくへからすと申けるとかや。荒たる宿の板間よりなとは中によきさまにいひつれは。まきれて聞ゆるなりとそ申ける。ひか事にや。又月の歌とはおほえす。こひの歌ともや申へからん。いとあやし。こひの歌を俄にいれたりけるにや。右歌はさせることもなけれと。かたのことく月の歌にては候めり。さしたる事はなけれと。左のうたのみにけにゝけたれは。本意にもあらて勝にや。

二番
左勝　三郎君
秋のよの月の光はかはらねと旅の空こそ哀なりけれ
右　弁君
秋の夜はたのむる人もなきやとも有明の月は猶そ待出る
左の歌すゐの哀なりけれそ。誠におさなくあはれけに聞ゆめる。右歌は本にもの字しきりたり。又有明の月は哀に心ほそき事にこそ讀めれ。歌合の月の題にはいかかあるへからん。證歌そ侍へき。是はまちつきたることをありかたき事にいひたれは。廿日あまり晦日のほとの月にや。哀にはありもしけん。光は侍らしものを。若左の勝にや。

三番
左勝　老隱
いかにして秋は光のまさるらん同し三笠の山のはの月
右　大輔已講
秋のよは曇るといへとこと月のさやけきよりもさやけかり鳧

左歌あしうも聞えす。すゑなといひなれてうたとおほゆ。いかなる影をなといへるふることと。おもひ出られていとおかし。右歌はこと月とはなみの月をいへるにやと思へと。うち聞からに。月の二つあらんやうに聞ゆるかな。又歌からもすへらかならす。是もみにけのほとにや。秋月なりとも曇らんにはをとらさらん。余のよせい也。

四番

左持　香象房

眞葛はふ山路は晴て秋のよはこゆる旅人やすき月哉

右　眞常房

くまもなき月の光を詠ては日たけてそしる夜は明にけり

左歌はやすき月影とは。月の光にくらかりぬへき山路をなんたとらすこゆるとかや。ことはたらす。古今序在中將の歌をいふに其心あまりて詞たらす。しほめる花の色なくて匂ひのこれるかことくといへり。たゝ其體にや。右歌是も夜は明にけりといへる。なを詞とゝこほりて心ゆうならす。おなしほとの歌ともや申へからん。

五番

左　弁得業

秋のよの更ゆく風に雲はれてはなたの空にすめる月影

右勝　花林院得業

故郷の時そともなき淋しさもなくさむ計澄る月かな

右の歌あしうもあらす。但みとりの空とこそいひならはしたれ。はなたの空とよまれたれはおほつかなし。定證歌侍らん。右歌いとすくれたるにはあらねと。さもと聞えたり。左歌證歌なくは右のうたかつならん。

六番

左　香雲房

秋のよの有明の月はくまもなし朝くら山も名のみ社あらめ

右勝　慈光房

秋の月あかしの浦はなひきもにすむ我からの數もみつへし

左歌有明の月のこと。さきに申つれはこれにてよくともほめ申さんことかたし。いかにいはんやすゑの名のみこそあらめなとなのみなりけりとはいはさりけるか。すへらかにいふには義のたかふをこそわひてかうもいへ。心えかたくや。右歌これも心えす。數もみえけりとこそいふへけれ。見つへしとは只今までは見えぬにや。いつ見るへきにかおほつかなし。されといまあけらんすれは有明の月には光まさるへきにや。

七番

左　上總君

秋のよは長井のうらに泊してのとかにてらす有明の月

右勝　式部君

あきの夜の雪吹はらふ嵐こそ月みる人のこゝろなりけれ

左歌長井のうらにとまりしたるは人か月か。月ならはとまるとはよむらんや。よむ人ならは長閑にてらすといふことたかひぬ。おほつかなき事あるからへに。なを有明いかゝと聞ゆ。右うた月見る人のこゝろなりけれといへる。心ゆうなり。詞もなたらかなり。よみしりたるひとの歌とおほゆ。仍勝とそみ給ふる。

一番　雪

左勝　老隠
玉のきにはゝその杜も成にけりふる白雪の消ぬかきりは
右　中納言君
雪ふれは青葉の山もみかくれて常盤のきをやけさはおる覧
玉の木のこと本文にさることありとかや。むかしらけ給はりしよ。たとひ難ありともよくもしらぬことなれは事かたく。何況あしらうもきこえす。しりてよむはかりの人あしくよまむやは。右歌ゆうにもなし又別の難も聞えす。左にはたゝけすらひの劣たるなり。

二番
左　三郎君
雪降はしるしの杉も花咲て三輪の山へもいかゝ尋ねん
右勝　弁君
白雪にふるの山道うつもれてたとる計になりも行かな
左歌は賀陽院の歌合にありし歌の心なり。古き歌にはよみましたることそよかんなれ。是はえまさらすそみゆる。はなはかり咲たるはなとかたつねさらん。あれは雪にうつもれたれはこそ尋ねにくけれ。右歌はいとよからねと左よりはとみゆれは勝へきにや。

三番
左持　大納言君
覺束ないつれ何地の道ならんしおりもみえすふれる白雪
右　大輔已講
雪ふかみ隣の里もうつもれて煙のみこそしるし成けれ
左歌はいつちの道といへるみちしきりたる心地す。但かくしきりていふ事もあり。それはことさらにいふと見えたることそよけれ。是はをのつからをきたるとそみゆる。しおりは奥山の峯にすることなり。山のみねなとならは。雪積りたりともをしはかりてんや。あなかちの事にや。右歌は隣といふはかきなとをへたてたるさとにやあらん。さらはけふりをしるへにはといはん事おほつかなし。殊のほかに雪つもりたりともしるかりなんものを。煙にまてもをよはし物をひかことにや。猶遠きほとこそ煙をしるへにせんもよからめ。

四番
左持　香象房
水の面もみなふる雪に埋れてたちゐや歎く池の鳰鳥
右　眞常房
みよしのに雪ふりぬれは我宿のならの枯葉そいとゝ淋しき
氷らさらん水の面雪にうつもれんもいとかたし。ゆきいたくふらは池の水こそまさらめ。なをこほらせてらつまはや。あまりの事か。右うた我宿はみよし野にあるか又里にあるか。さとにあるならはふれる雪を見てみよし野を推はかるおほつかなく。峯ならは雪つもりたりともいはねはたゝをしはかりの雪にや。たしかにみすはいかゝはあるへからん。峯ならすもさりともあらん。雪は所をわかぬ物なれは。

五番
左持　弁得業
うちきらし天きる空とみし程にやかてつもれる雪の白山
右　花林院
年をへて伏見の山に降雪はとこめつらにもおもしろきかな

左歌うちきらし心えす。ふりきらしといはゝやな。又すゑの雪のしら山こゝろえす。白山の雪とそ。次第はいはまほしき。かみにをけはなたらかならぬなめり。されはわひてをけるにや。右の伏見の山こゝろえす。里に社讀めれ。山あたらしふしみなといひてや。とこめつらといへるほと思ふ所なきにあらす。されとも山おほつかなし。

六番　左持　香雲房

降雪に山の細みち埋れてまれにとひこし人も通はす

右　慈光房

あしたつるみわのひ原に雪ふかみ宮木ひくおの通路もなし

左よまむともせすたゝ事もなしたるなめり。おいらかにてゆうなり。右わりなく思ひよりてつくりいたしたるなめり。これも力入たり。彼もおいらかなり。持とや申さまほしき。作者いかはかりはらたちて。ようもしらぬ事知顔にいひつゝけたりと申さん。誰にか。

七番　左勝　上總君

白雪のふりしきぬれは葛城やくめの岩橋そこと知られす

右　式部君

卷向のあなし檜原も埋れてかゝるみ雪もふれは降けり

左ふかきとかはみえす。かつらきやのやもしそあきはなれて聞ゆる。はしなとにかゝるみえわたるなといははやな。わたらはなかはしなれはさはいひかたきにや。右あなしひはらもなといへる事は。さしこう(そイ)てをしけつらまほし。又すゑのふれは降けりもすくなる心地す。左のかちかとよ。

一番　左　祝　老隠

みとりなる松陰ひたす池水に千代のすみかと見ゆる宿かな

右勝　中納言君

ちとせとも色にはいてゝ石淸水なかれん程は君か代なれは

左のかけひたすとよめるきはめておほつかなし。ひたすとは物を水にいれんをそいふへき。まつの枝なとこそひたすへけれ。物の影は水の底にうつる物なれは影はいとおかし。右歌なとさせることなし。尋常のふしなればいかゝおもひよりけんとも見えす。ふるめかしうてへちのなんなからむとおほつかなき事あらんといかかあるへき。

二番　左勝　三郎君

君か代は天の岩戸を出る日の幾めくりてふ數もしられす

右　弁君

三笠山ふもとの里は天の下ふるに思ひもあらしとそ思ふ

天の岩戸とはあまてるおほんかみのたてゝ入給ひたりしとなり。たゝし夜の明くるゝは天の戸といふなり。それとおもひてよめるにか。あけくるゝことをよまんと思はゝひかことなり。天の岩戸にても日のめくらん事はありなんや。これおほつかなし。又すゑのてふといふことといひにくし。右歌あめのしたこそ匂ひなきこゝち

すれ。おもふといへる事二所あるは さきにも申けるやうに。やまひにはあらねともみゝとまりて聞ゆ。

三番

左　大納言君

君かへむ八千代の數は天にますとよをか姫の神やしるらん

右勝　大輔已講

君か代は盡しとそ思ふ春の日の三笠の山にさゝむ限は

左歌うたかひなきにあらす。八千代といひつれは數は定てけるは何事をかは豊岡姫はしるへき。神にまかせてしらすへきにては數もしらすとこそいふへけれ。何ことをしるへきそと神やの給ふらん。猶右つよけにそ見ゆる。

四番

左　香象房

打むれて岩ねこねさす小松はのきくの千歳は君そかそへん

右勝　眞常房

たとふへき物こそなけれ君か代は濱の眞砂も數なからめや

うちむれてこそ人なとの物へまかるこゝちすれ。是もかのあまた立なみたるこゝろかひか事にはあらすもやあらん。又こまつはは何ことにか。もし小松の葉といふにや。證歌やあらん聞もつかぬ詞かな。右歌ひたくちにこそ見ゆれとしかはみえす。

五番

左持　弁得業

君か代は長井のうらの濱風に立しら浪の數もしられす

右　花林院

君か代をまつちの山の小松原千代のけしきを見るそ嬉しき

左右ともに珍らしからねと指難みえす。持なとやまうすへからむ。

六番

左勝　香雲房

うれしさは大津の濱に立なみの數もしられぬ君か御代かな

右　慈光房

春日山みねのしらかし萬代を君にといへは神も諫めす

左歌はしめのつかひのことし。なたらかにてさせるとかもみえす。右歌のしらかしはひさしき物にや。證歌のおほえぬかな。神もいさめすもおほつかなし。みにかなふらんや。管見の身おほつかなきまゝに。をとるなと申もおそろしや。

七番

左持　上總君

春日山ちえにさかゆる榊葉は萬代までのきみか□める

右　式部君

君か代ははふはかりなしみ吉野のこかねか峯に御代を待迄

左春日山なとにことよせていとわつらはし。右こかねの峯なとはみたけの御山の事にや。ことありけなるいにも申かたし。をしこめて持なとにて候へきにや。歌からもさやうにそみゆる。

此道被ㇾ催ニ宿習一雖ㇾ似ㇾ好。於ニ善惡事一者全所ㇾ不ニ知給一也。偏依ニ難ㇾ有仰旨一。不ㇾ顧ニ嘲哢一所ㇾ令ニ判申一也。莫ㇾ不ㇾ逮ニ他見一者。幸甚々々。努々。

源俊頼朝臣

西宮歌合

大治三年八月廿九日於廣田社頭講之
神祇伯顯仲卿一家人々相共所會也

判者　前左衞門佐基俊

一番　月寄述懷

左　前美作守顯輔朝臣

難波江のあしまにやとる月みれは我身ひとつも沈まさり鳧

右　神祇伯顯仲卿

かゝみ川影見る月にそこ澄て沈むみくすのはつかしき哉

左右いつれもなたらかに侍。中にも芦間にやとる月見て我身ひとつもしつまさりけりとおもひしられける。姨捨山の月みけん人の心よりもなくさめかたく思たまへらるれは今少し心ありとや申へからん。

二番

左　前大貳長實卿

人しれすはれぬ歎きの有物を普くてらせ秋のよの月

右　兵衞督君

山端のうき雲晴てすみのほる月と共にもゆくこゝろ哉

左歌はれぬ歎きの有ものをとよめる。もしつゝきこはけにてたをやかならすみえはへるに。又右のうた浮雲はれてとよめるわたり。さゝへたる所あるやうなれはこよひの月の光は同しほとにそ見えはへる。

三番　紅葉寄晝

左　大進

朝霧の晴行まゝにもみち葉はあかねさしてそ色まさりける

右　顯仲卿

月草の色とる比はかへれともはゝそのもみち心にそしむ

左歌もしつゝきなとはあしくも侍らぬに。あかねさしとよみて日といふことをそふるくもよみつたへて侍るに。これはたゝあかねさしてそ色まさりけるとよまれたり。みつかぬ心地こそしはへれ。からやうの歌合のうたにはひともしたかふをたに。大なる難にそしてはへるかし。されはにやいにしへより名聞えて人の用ひる程の歌合に。かくよみたる歌こそ有とも覺え侍らね。又右の月草の色とる比はかへれともといへるわたり。心につくもなけれはともかくも申かたくなん。

四番

左　四位少將公教朝臣

いとゝしく照こそまされ紅葉はに日影うつろふ天のかこ山

右　伯卿女

天の原時雨にくもるけふしもそ紅葉の色はてりまさりける

左の日影うつろふ天のかこ山はもみちにうつるひの光とおほえて。をみのかさせるひかけによみたかへつへき心地こそし侍れ。又もみちするやうは所々に名聞えたる山共の多かる中に天のかこ山まて思ひよられけむも萬葉集なとのやうにふるめかしくそおほえ侍る。右の時雨にくもるけふしもそとよめる。もしつゝきのしたゝかさは。紅葉の色の今一しほは染まさりけるにやとそみえ侍る。

五番　鹿寄曉

左　前左衞門佐基俊

曉になりやしぬらん小倉山なく鹿のねに月かたふきぬ

右　伯

暁や聲高砂になく鹿をほのかにやきく沖の舟人
左歌すくれたることはなけれとも其こととめとゝまる所のはへらさめり。右歌の暁やとよまれたる。やもしのおきところいかにそや見えはへるに。又こゑ高砂になく鹿のといへる文字つゝきさかさまなるやうにて。心ゆきてもおほえす。なをさをしかのと上によまれたらは。聲高砂はたよりある心地し侍なんかし。

六番

左　仲正

雲かゝる高志のやまの明暮に妻まとはせるを鹿鳴也

右　伯

山かつの先あかつきをしりかほに裾野に出て鹿そ鳴なる
左歌するは高陽院の一宮の歌合に江侍從か妻まとはせる鹿そなくなるとよめるに。たかふところも侍らさめり。右歌の山かつの先暁をしりかほにといふ。山かつあかつきを待とは何にみえたるにか。唐土に函谷關といふせきの關守こそ暁をまちて鳥のなく聲をきゝつけて關の戸あくといふことは侍れ。やまとことの葉にもかゝらのうたにも。山かつの暁まつといふ事みえはへらねは左右いつれまさるともおもたまへられす。

七番

虫寄夕

左　大僧正

はふりこかしめゆふ野への鈴虫は夕つけて祉ふりたてゝなけ

右　宮内大輔忠季

神かきのいはねにさせる榊葉にゆふかけてなく鈴虫のこゑ
左右の歌ことは姿是もおなし程と申へきにや。

八番

左　親房

風さむみゆふかけ草にかくろへてはたをる虫の聲聞ゆ也

右　兵衞君

誰ためさあやめも見えぬ夕されにはたをる虫の聲聞ゆらん
ゆふかけ草にかくろへてはたをるらん虫よりも。あやめもしらぬ夕されは今少し心ありてみ給へらるゝ。

九番

萩寄戀

左　四位少將公敎

忍ひねを我袖のみと思ひしを劣らさりけり萩の下露

右　宮内大輔忠季

色かはる萩の下葉の露けさは我身のうへと成にけるかな
忍ひねの袖の雫にをとらさりける萩の下露いとおかしく哀にみえはへるに。又はきの下葉の露けさの我身のうへになりにけるこゝろくるしさに。左も右も袖ぬれぬへき萩の露にこそはへめれ。

十番

左　大夫典侍

秋はきの下葉の露にあらねとも消ぬ計そ人は戀しき

右　伯卿女

わすられて年ふる里の淺茅生に誰ためしける萩の錦そ
左のうた消ぬ計そ人は戀しきといへるこそ。歌めきて見ところある心地しはへるに。右の年ふる里の淺茅生にしける萩の錦もけにとかめまほしきことにこそはと。ひとかたならす心うつりて。これも勝負のほと思ひわかれ侍らす。

十一番　女郎花同

左　　　前大貳

戀しさにおもひよそへて女郎花折わか袖そいとゝ露けき

右　　　伯　卿

なつかしく折手にかほれ女郎花戀しき人もわする計に

左のおる我袖そいとゝ露けきといへる。詞つかひなとしたゝかにて。歌合のうたはかうやうにこそはとおかしくみえ侍り。又右の折手にかほるをみなへしにわすれん戀のこゝろはすこし頼もしけなく。心淺きこゝちこそし侍れ。なを露けき袖はまさりてやとそおも給ふる。

十二番

左　　　大夫のすけ

あふことをいなみ野に咲女郎花をらぬ物ゆへ袖そ露けき

右　　　忠　季

うき人の心なりせはをみなへし吹とも風になひかさらまし

いなみ野に咲をみなへしよりは。吹とも風にといへるわたり。今すこしいひしりてや。

十三番　薄同

左　　　大僧正

ほに出てもなとかひもなき花薄思ひこめてそ有へかりける

右　　　伯

うしとのみ人の心はいはれ野にまねくすゝきを何か頼まん

左右おなしほとにそ見えはへる。

十四番

左　　　頭弁雅兼朝臣

つれもなき人にみせはや花薄うらなく風に靡くけしきを

右　　　忠　季

くる人も絶ぬる宿の糸すゝきほに出て誰を招く成らん

左の人に見せはやなとまては歌めきて侍れとも。下のうらなく風になひくけしきをなといへる詞つかひいとゆうにもおほえぬ。こひにくれたけのよゝのふることの殘りすくなく上下にとられて侍めり。右たえぬる宿の糸薄は其ことゝめとゝまるふしなけれとも。あまり亂れかはしきやうに見えはへれは。誰もかちまけの程こそ定めかたし。

十五番　荻同

左　　　覺雅已講

うき人を驚かすへき方そなきうらやましきは荻の上風

右　　　伯

荻原やよかせそつらき音せすはねてこそ人を夢にみましか

夜風そつらきといへるよりは荻の上かせをうらやむらんこひの心は今すこしまさりてそ聞え侍る。

十六番

左　　　左大弁爲隆

荻のはゝ暮行風に音すなり我まつ人のかゝらましかは

右　　　堀川殿下女房

逢ことはかた野にしける荻のはの音をはたつな秋ははつ共

わかまつ人のかゝらましかはと思ひける風の音社。片野にしける荻のはよりも聞所ありておほえはへれ。

十七番　蘭同

左　　　前淡路守仲房

あふことは片野ののへの蘭たれきてみよと露のをくらん

右　兵衞督

色もかもよそへてそみる蘭ねすりの衣馴しかたみに

此歌は左右おなしほとに見え侍るへきに。紫とよみてけにねすりの衣とはよむことゝしりて侍るに。此衣は何のねすりにか藤はかまとよみて紫にとおもひよそへられたるにや。それにても心も見えすおほえ侍れは猶左をよろしと申へからん。

十八番

左　親房

蘭きてみる人もなき宿に戀すてふ名のいかて立けん

右　伯女

わか戀る人もきてみぬ蘭何とてつゆの染てをくらん

左のうたからはあしくも侍らねとも。來てみる人なき宿ならんからに。戀すてふ名はことにいかて立けるにかと其心をしらまほしくこそ。さて右の何とて露のそめてをくらんとよまれたる。詞しけきやうにてもしつつきやすらかにも聞えねは。おなし程にそみ給へ侍る。

十九番　菊寄祝

左　大僧正

幾重そとかさなる菊を尋れは君か八千代の數にさりける

右　伯卿

岩間ゆく菊の下水たえせねはくみてそ千代の數はしらるゝ

八重さく菊を八千代のかすにかそへなしたるは。菊の下水くまんよりも。今すこし便ある心地しはへる。いはひの心もまさりたりと申へきにやあらん。

廿番

左　顯輔朝臣

君か代はかきりもしらす長月のきくを幾度つまんとすらん

右　忠季

君か爲千代まつかけに住吉の神やうへけん岸のしら菊

左歌のかみの句に君か代はかきりもしらす長月のとよめる古今に君か代はかきりもしらすなかはまのとよめる歌にわつかに二もし三文字やかはりて侍らん。下の句をいくたひつまむとすらんといへるも。はしめ終たしかならぬ心地そしはへる。又右のすみよしの菊はいはひの心にはけにいと珍らしく聞え侍るをかくよみたらん歌合のうたこそおほえはへらね。すみよしの岸には忍ふ草わすれ草まつなとをそ。いにしへよりよみふるしたるに菊さかん岸には。すみよしまておもひよらすともありぬへきこと哉とておほえはへる。されは證歌を聞て勝負は申へき也。

南宮歌合

同九月廿一日於二門妙社一合之南宮にてこと題ともにて有へかりし程にもとの歌とものえり殘しにてせよと度々人の夢にみゆるによりて

判者　大僧正

一番　月遠懷

左　大僧正

ありし世にかはらぬ秋の月影は昔の友にあふこゝちする

右　伯

月よみの神も昔をわすれすは昔き影に我をもらすな

二番

左　親房

久堅の空ゆく月にさそはれてうき身もしはし心をそやる

右　忠季

秋のよの月みる程もなくさまていとゝゆかしき雲のうへ哉

三番　紅葉晝

左　名欠

出る日の光はるかにたけ行はてるとそみゆる峯の紅葉は

右　伯

霧のまに峯のもみちは尋ぬとてひもたけにけり高圓の山

四番

左　仲房

秋霧の朝な夕なに立田山晝そ紅葉の色は見えける

右　伯女

紅にそむる時雨のひるまにもぬれ色にのみみゆるもみちは

五番　鹿曉

左　大僧正

歌闕

右　伯

終夜しけみにしのふさをしかもあけつけとりと今そ鳴なる

六番

左　頭弁

秋深み霜まつ峯の鐘の音に聲うちそへてをしか鳴也

右　伯女

衣手の山のすそ野にたつ鹿のうら淋しきは曉のこゑ

七番　虫夕

左　六條院大進

何ことを思ふなるらん鈴虫の夕くれなゐにふりいてゝなく

右　伯

夕されは蓬かねやのきり〳〵す枕の下に聲そ聞ゆる

八番

左　大夫典侍

夕されは淺茅かうへの露寒み誰まつ虫の下になくらん

右　重道

ひくまのゝゆふつけをけるくら〳〵に聲たてゝなく轡虫哉

九番　萩戀

左　仲房

秋はきにをく白露の玉ゆらも戀しき人はわすれやはする

右　內大臣家越後

萩のえにまかひし袖の白露はあひみぬ程に色つきにけり

十番

左　親房

戀ふれとも粟津の原に咲萩の花と散なん名社おしけれ

右　伯

まくすはふ小野の糸萩くりかへし恨めしなから猶そ戀しき

十一番　女郎花戀

左　僞實肥前前司

あたなりといはれの野への女郎花なこ我にしも靡かさる覽

右　兵衛君

みをつめは哀とそみる女郎花人もこす野の露にしほるゝ

十二番

左　大夫典侍

女郎花なひかす風にみをなして人を心にまかせてしかな

右　重道

我のみとおもふ夕へに女郎花誰をこふとて露けかるらん

十三番　薄戀

左　大夫典侍

逢ことはさこそかた野にたてりとも忍ひて靡けしのゝ小薄

右　忠季

わか身からうきふし繁きしの薄忍ふとたにもしらすや有覽

十四番

左　親房

花すゝき招くをよそにみし物を我もほにいてゝ人そ戀しき

右　三宮大進

篠原やをさゝましりの村薄よをならへてもつらき君哉

十五番　萩戀

左　大僧正

待人を萩の葉とたに思ひせは風のつてにも音はしてまし

右　伯

うきことを風のつてにも聞つれは萩の上葉の露そこほるゝ

十六番

左　修理權大夫行宗

我戀の萩ふく風の音ならはしられてかくは數かさらまし

右　兵衛君

よひ／＼に分こし人は音もせてそよと聞ゆる萩の上風

十七番　蘭戀

左

徒にやとに匂へる藤はかま戀しき人のきてもみよかし

右　伯

うらやましみやけかはらの蘭たれにむつれて紐ときつらん

十八番

左　顯輔朝臣

わきもこか裾野に匂ふ蘭おもひそめてし心たかふな

右　兵衛君

きてなれし人はみねとも蘭をのか心とほころひにけり

十九番　菊祝

左　頭弁

老せぬは汀のきくのしるしとも流をくめる人そしりける

右　伯女

君か代を長月にしも咲初て久しく匂ふしら菊の花

下一番闕

右西宮歌合南宮歌合以御子左忠家卿眞蹟書寫畢

住吉歌合

大治三年九月廿八日參ニ社頭ニ合之　前との歌合のゝちに住吉のうらやませ給ふよしのゆめ度々有しかは參りてあはせられたるなり

題同前

判者　神祇伯顯仲卿

一番　月述懷

左　前和泉守道經

くまもなき月に心をなくさめてうきみに年の積りぬる哉

右　伯女

月清み心もすめる秋のよや身をうき雲の晴間なるらん

判云。左和歌うるはしくよまれて侍。されとくまもなき月に心をといへるこそふるめかしくや。右歌今めかしく侍れとすこしもとの心ゆかす思ふ給ふらるれは。海士の舟さしてもいはしつきひとの桂のかちをとるにまかせて

二番　紅葉寄晝

左　前淡路守仲房

みつ汐のひるまに過る東路や清見か關に紅葉しにけり

右　帥大夫重道

散ぬへき紅葉のにしき夕風のたゝぬさきにときてもみる哉

左歌の心おほつかな。いかて過らん旅人のもみちは關のかたみと思ふにとこそみえ侍れ。いかゝ。右をりかくる社のもみちの錦たも風のたつにそうはきともなる心地しはへる。錦ちらさしと思ふ心よくはへり。されとたゝぬさきに紅葉のにしきをきたれはにや。委心ゆかすみえ侍れは梢の風たちまさらんことかたくやとおほえ侍れは。清見かたやしほに染る紅葉はにもみちのにしきたちもまさらしと申へきにや。

三番　鹿寄曉

左　親房

しら露のおきいて聞はさほ山に曉かけてをしか鳴なり

右　重道

柴の戸を嵐の過る明方に妻よふ鹿は聲たてつなり

左右ともに物によせられたるさまくたけて侍れと今すこし左やすゝみて。

さ衣の袂すゝしき風よりもを鹿の聲そ身にはしみける

四番　虫夕

左　覺雅已講

とふ人もなき古里の暮ことに誰まつ虫のたえす鳴らん

右　兵衛君

眞葛原なひく夕の秋風にうらみ顔なる松虫の聲

身をしれは（つめイ）みな松虫としりなから根顔なる聲やまさらんとなむみえ侍る。少しすこき所の侍るかとよ。

五番　萩戀

左　大夫典侍

糸萩のいとはるゝ身としりぬれはくるも苦しき心地こそすれ

右　伯卿

我をこそ忘れもはてめ諸共に植し小萩の花はきてみよ

右歌するゑのこゝろゆかす侍れは。をしなへて宿の小萩のするゑよはみ露もこゝろそとまさりけるとみえ侍れは。左まさるへきにや。

六番　　女郎花戀

左　　大僧正

女郎花咲野へことに身にしみて花心なる戀もするかな

右　　兵衞君

我戀のなくさむつまにあらねともおらて過うき女郎花哉

たゞみなへしくちなし色の花なれは。いかにもえこそいはれさりけれとてや。

七番　薄戀

左　　顯輔朝臣

いつとなく忍ふもくるし篠薄ほに出て人に逢よしもかな

右　　伯卿

いかにせんまのゝ入江に汐みちて泪にしつむ篠のを薄

左歌つねのさまならねといきほに出てなんともいへれはとかなし。右のうた泪に沈むといふ事心もゆかねはおもふ事大野にたてるしのすゝき忍ふ心の有かたき哉とみ給ふるこそいかゝ。

八番　荻戀

左　　仲正

そよ〳〵と荻吹風は音すれと人はたのむることのはもなし

右　　兼昌入道

よさの浦に一村たてる濱荻の又たくひなき戀もする哉

左歌人はたのむるなといへるほとありつきて聞えはへれとも。もとこそ心よくもみえ侍らね。右歌は戯れうたにてやはへらん。されと今少しめやつき侍らん。

九番　蘭戀

左　　基俊

汀なる蘆あしに紛ふ濱荻はよしとそみゆるよさの浦人

白露のむすひをけはや蘭花の下ひもとけかてにする

右　　伯卿女

匂ふ香を君によそへて蘭はかまなつさふ袖に露そこほるゝ

右歌よくほへれと末のこと葉うたすかたににぬ心地して如何はへらん。されは。

蘭露の結ふをみるよりも玉ちる袖はなつかしきかな

十番　菊戀

左　　宮内少輔定信

君かへん世を長月に咲ぬれはいく秋としもしら菊の花

右　　伯卿

みる人もよを長月の花なれは久しと聞そうれしかりける

左歌こと葉ことに心もをよはされはいかにも申かたくそ。右とかく申へき程ならねはたゝ。

とゝこほることのはなれはよし水に流れさり皃菊の雫も

藻汐艸かき散すよりちかの浦の玉つ嶋守みるめ恥かし

中宮亮顯輔家歌合 長承三年九月十三日

題

月　紅葉　戀

歌人

左	右
左衛門督雅定	中宮亮顯輔
新中納言宗能	散位道經
右兵衛督顯頼	前備後守季通
大藏卿經忠	彈正大弼維順朝臣
左宰相中將成通	兵庫頭仲正
神祇伯顯仲	修理權大夫行宗朝臣
丹後守爲忠朝臣	宮内大輔忠季
太皇大后宮大進忠兼	前肥前守爲眞
前越後守國能	顯時
信濃守親隆	雅親
僧琳賢	僧隆縁
參河	讀人不知

判者　前左衛門佐基俊

一番　月

左　左衛門督

いかなれは同し空なる月影の秋しもことに照まさるらん

右　中宮亮顯輔

終夜ふしの高ねに雲消て淸見か關にすめる月影

左歌姿こと葉共にうるはしく見所侍るめり。おなし空なるなといへる詞秋しもことにといへるわたりいにしへに耻たるなとも聞え侍らす。昔の人いかてよみ殘し置侍けん。末の代には有かたく出きて侍る歌にこそ侍めれ。右歌姿はあしからねとも二のなんそはへるめる。一には雲終夜きゆとよめり。雲は終夜消る物にもあらす。須臾に滅する物なり。然は維摩經にのする喩にも此身はうかへる雲のことしといへり。尋常ならぬにたとふるなり。又唐歌にも大和うたにもかくのみそ作りよみて侍るめる。二には必煙をそよみはへる。雲をはよめりとも古き歌にもみえ侍らす。されは相撲か歌合よめる。よとゝもに心空なる我戀やふしの高ねにかゝる白雲とよめる歌なは。煙を置て雲をよめり。富士の本意にあらすと難せられてまけ侍りにけり。仍以レ左爲レ勝。

二番

左　新中納言

あかなくに惜むもしらす傾くも思ひくまなき秋のよの月

右　散位道經

秋のよも天の川瀬や氷るらん月の光のさえわたるかな

左右兩首。文花義興等同。勝負難レ分。仍爲レ持。

三番

左　右兵衛督

すみのほることよひの月の影をこそ秋の例の空と詠れ

右　前備後守季通

さらぬたに秋の心にたへぬ身をあなあやにくの月の氣色や

左右歌等［　　　　］一端之興。餘情猶似レ薄。仍爲レ持。

四番

左　大藏卿

岩間行八十氏川のはやき瀬にみなはたてともやとる月影

右　彈正大弼維順朝臣

なかめする身は池水にあらねとも心に月のすまぬよそなき

左右歌花實同神。等級難レ定。雖レ然左歌徒多二河情一少二月辭一右歌偏存二月思一無二餘趣一仍以レ右爲レ勝。

五番

左　左宰相中將成道

たとふへき方こそなけれ天河月すみわたる有明の空

右　兵庫頭仲正

うかれ行ありなし雲も晴のきてかゝる隈なき秋のよの月

左たとふへき方こそなけれなといへるわたり。こと葉いやしくて歌合とも聞えはへらす。右歌三十一字の詞ひとつとるへき所も侍らされは左少し宜見え侍れは以レ左爲レ勝。

六番

左　神祇伯

おなしくは朝日の影にうつるまてしはしな入そ山端の月

右　修理權大夫行宗朝臣

雲晴て庭さえわたる月影は手にもたまらぬ秋の雪哉

左歌上句同字頗以卑陋歟。又何爲不レ賞二今夕停午之光一。空可レ惜二明朝寅卯之影一哉。事義云相違蒙二旣裁一。右歌文躰雖レ似レ可レ觀。於レ辭有二狐疑一手にもたまらぬ秋の雪とよめる。若有二本文一歟。將亦有二證歌一歟。井蛙智短。已迷二身緒一。聞二正說一決二雌雄一。但右歌製躰頗可也。云爲之間暫以レ右爲レ勝。

七番

左　丹後守爲忠朝臣

古の人あらませはとひてまし今宵計の月はみきやと

右　宮內大輔忠季

隈もなき月の光のさすからになとかさゝきのまたきたつ覽

左歌文躰無二曲折一辭義無二異端一作者之心依然可レ觀。右歌何忘二我朝之艷詞一偏授二漢家之雜儀一。和歌之本意豈可レ然哉。詠曰隈もなき月の光のさすからになとかさゝきのまたきたつらんといへり。是依二何書文一被レ詠哉。依分暉度鵲鏡詠者全非レ月。本文已爲二古詠文一被レ欺歟。若又依二魏鵲之文一被レ詠者。又已乖二本文之意一。倩予案二文意一此二文之外無二別奧事一歟。未レ聞二正說一之間推以レ左爲レ勝。

八番

左　太皇大后宮大進忠兼

更科の山路にさける白菊の花のまはゆき秋のよの月

右　前肥前守爲眞

空晴てきれる雲たになきよはに月の桂の影のみそする

左歌更科の山路にさける白きくはとよめる。未レ聞二本文證歌一。としころは更科にはたゝなくさめかたき月照所とのみそ知りて侍。更に菊咲る所とは承らす。若山路の菊の露のまにとよめるふることなとにおほしわたりて被レ詠たるにや侍らん。彼は仙家の菊なり。更非二俗境之菊一。又花もまはゆきと被レ詠者。はなのまはゆからんするか。人のまはゆからんするか。此事度二兩端一未レ知二正說一耳。右歌語似レ近二人耳一又叶二物情一。依レ月詠二桂影一

者是詩歌の常の事也。仍以レ右爲レ勝。

九番　左　前越後守國能

秋のよの月には雲のいとはれていつくの空に立かくるらん

右　顯時

天河雲の梯とたえしていかてか月のすみわたるらん

左歌詠レ月甚少雲辭尤多ニ意趣一候。已處背ニ題意一歟。右歌天のかは雲のかけはしとたえしてといへり。依ニ此文一予案之。天の川に白レ本無ニ雲梯一只有ニ鵲橋一。詩にも烏鵲橋とつくれり。又和歌にも空すみわたる鵲の橋となんよめる。橋といへは何れもおなしやうに聞え侍れと橋と梯其義不レ同。河や池にわたすをは橋といひ此峯彼谷にわたすをは梯といふ。おなしことのやう侍れと所レ用之字不レ同はへるなり。雲梯者劔閣と云所にそ侍るとうけ給はれ。但此難は侍れと此歌こそ。いかてか月のすみわたるらんといへる程いひしりて聞えはへれは。以レ右爲レ勝。

十番　左　信濃守親隆

心にも見れは入ぬる月影を山のはのみとおもひける哉

右　雅親

秋の山峯のあらしに雲はれて空すみわたる有明の月

左歌此歌は後冷泉院御時の歌合に。大貳三位所レ詠之秀歌也。予今多在ニ人口一。文字頗雖ニ相違一大意無レ違。本歌云。山のはも名のみ也けり月影はなかむる人の心にそいる。誠與ニ故心一相通事者。甚興あることにはへれと。歌合之所頗可レ避事歟。右歌は一首中帶ニ二巨病一一者蜂腰病之。二者鶴膝病之。和歌作式准ニ詩門病一立ニ八病一云。一首の中同字三あるを蜂腰同字四あるをは爲ニ鶴膝一者。今予勘ニ此歌一あの字四あり。又のゝ字三あり。已犯ニ蜂腰鶴膝一也者此巨病也。入ニ和歌腹心一。非ニ扁鵲一者誰得レ痊哉。左歌者已舊秀歌也。右歌者一扁中有ニ二巨病一

十一番　左　僧琳賢

秋の夜の月と計に言なれやはれたるなつの日とそ見えける

右　僧隆緣

むは玉のおほおそ鳥の羽にかける程さへしるき秋のよの月

此左右。詞義兩□不□評定。

十二番　左　參河

底清みうつらぬ水そなかりける雲ゐの月はひとつなれとも

右

すみのほる月の光やまさるらんひまなき星の見えす成行

左歌はしめの句の底清みそいとゆうにもきこえ侍られと。末はきゝ所ありてよみすまされたるやうに聞え侍。右歌心もたらす詞も闕所少く侍めれは以レ左爲レ勝。

一番　左　紅葉　左衞門督

みな人の心にそめておもへはや紅葉の色の深くみゆらん

右　顯輔

山姫に千重の錦を手向てもちるもみちはをいかてとゝめん

此左右歌心詞共に云所ありて何れまさるとも思ひ定めかたく侍る程に。なを右のちへの錦を手向てもといへるふること思ひ出られて。今一しほ色やまさらんと思ふ給へられて。以レ右爲レ勝。

二番

左　新中納言

見渡せはもみちにけらし露霜に誰すむ宿のつま梨の木そ

右　道經

紅の末つむ花にうすくこき露や紅葉の色をそむらん

左歌詞雖レ擬二古質之躰一義似レ通二幽玄之境一。右歌義實雖レ無二曲折一言泉已凡流也。仍以右爲レ勝畢。

三番

左　右兵衞督

紅の八しほの杜のもみち葉は深き色こそ身にはしみけれ

右　季通朝臣

秋の色を心に染し唐人もまつはもみちの錦□

左歌詞雖レ非二秀逸一。義存□詩常。右歌心感二秋興一雖レ類二宋生潘良之思一辭希二古質一徒仰二億郎萬撰之風一事非義。仍以レ左爲レ勝。

四番

左　大藏卿

嵐吹舟木の山のもみち葉は時雨の雨に色そこかるゝ

右　維順

秋ふかみ朝夕露のもる山は槇の下柴もみちしに皃

左歌詞かしこくさゝへやりて侍れとも。姿そ甚いやしく侍れ。あまくたるひなに年へたる□の。都のてふりしらすして。花の宮古にきたりたらんやうにそおほゆる。右歌朝夕露のといへるわたりこそ白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らす紅葉しにけりといふふる言に。いくはくたかひたりとも覺えはへらす。下柴と云事こそふるくよみたりともおほえ侍らね。なとかへてまゆみ柞はしなとを置て。槇の下にいふせくわりなけに生たらん楢柴椎柴の。もみちすらん事もしらぬに。わりなく紅葉せさせんとはおほしよりけるに侍らん。されはたゝ姿はわろくはへれと。舟木の山の紅葉をまさりと申へくや侍らん。

五番

左　宰相中將

をしなへて紅葉の色に成にけり時雨に染ぬ梢なけれは

右　仲正

もみちはは峯のあらしにはつられてをりとめ難き錦成けり

左の時雨に染ぬもみち葉右の嵐にはつられたらんもみち葉よりはまさりてや侍らん。

六番

左　伯

木のまゆくいさゝ小河にもみち葉の深くも色を移しつる哉

右　行宗朝臣

時雨する二上山を見渡せは梢もあけに染にけるかな

左歌詞花言葉共可レ見。右製依二已迂誕一首尾少二妓艶一仍以レ左爲レ勝。

七番

左　爲忠朝臣

幾入か時雨ふり出て染つらんからくれなゐに木からしの杜

右　　　忠季

秋されは小倉の山も名のみして下照峯の紅葉しにけり

左歌いくしほかといへるより唐紅にといへるまて。いひかなひたりと聞ゆるほとに。次句の木枯の森そついてうしなへと。唐紅にといへるもしの居ところのあしきにこそ侍めれ。右歌小倉山に下てる峯といふみねの侍るにや。諸歌證文きかまほしくこそはへれ。左歌は下句にもしのゐ所たかひたりと聞ゆ。右歌はしたてる峯おほつかなくはへり。仍爲ㇾ持。

八番

左　　　忠兼

散ぬへき小嶋か磯のもみちはにあらくもよする奥津白波

右　　　爲眞

山城のこまの山へのもみち葉を唐錦とや人は見るらん

左歌詞義頗似ㇾ有ㇾ疑。小嶋磯には紅葉ありとよめる證歌侍らんや。但歌云まつ嶋やをしまか磯にかつきせし海人の袖こそかくはぬれしかといへり。若依二此歌文一者彼詞頗□詐僞無者。非二可ㇾ指事一也。右山しろのこまの山邊の紅葉はをから錦とや人はみるらんといへり。山城のこまの山をは。昔かのうりふ山といひて瓜つくる所とこそ聞わたりて侍りつれ。紅葉すとは。されは山しろのこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心哉となんよみて侍り。古歌にをしまか磯にもみちすさよめるふる歌も見侍らす。松嶋やとそ讀つたへて侍る。又こまのわたりもみちよめる歌も見えす。たゝ瓜つくるとそよみて侍れは。此左右歌辭義共闕。仍爲ㇾ持。

九番

左　　　國能

は山より紅葉の色の深けれはおく床しくも尋れいらるゝ

右　　　顯時

時雨にはかへる袂もある物を色はへまさる衣手の森

左歌詞義共滯比興花少。就中卒章のいらるゝの辭。尤有忘□故人有ㇾ言。人文之處尤可ㇾ恐之。右歌辭無二比興之辭一義無二可ㇾ採之義一。就中色はへまさるの句尤類ㇾ迂。仍爲ㇾ持。

十番

左　　　親隆

三輪の山秋のしるしを尋れは杉間を分て紅葉しにけり

右　　　雅親

露霜やまなく置らん神なひのいはせの杜の色付にけり

左歌なと名に高きもみちする所々を過て。三輪の山本の杉たてる門よりわつかに透て見えけん紅葉を。秋のしるしと尋んもとおほしより侍ると。あやしくこそ思ひ給ふれ。右歌たとひ霜は大鳥の羽にはふり侍れとも。なをいはせの森にはをかせまほしくそ覺えはへる。この二首大畧雖二同科一右は今すこし文字つゝきいひなれたるやうにみ給ふれは。以ㇾ右爲ㇾ勝。

十一番

左　　　琳賢

朝日山てる紅葉はのあたりには松の緑もうつろひにけり

右　　　隆縁

朝霧のかゝる紅葉の色みんとから紅のふりてゝそこし

左歌朝日山にもみちのてらんからにあたり松さへうつろふへきやうもなし。うつろふとよみ侍るは猶みな月の萩の下葉や秋ふかき籬の菊なとをこそ讀はへれ。いかてか千とせを契れる松の。もみちの色にあひてうつろひはへるへき。然者以レ言加ニ川水一只紅葉といふ題をつくれる詩にも。ほのおの〱ひとりさめける松のたにの色となん僞て侍る。此歌の心にまつに紅葉のせさせて侍るこそ。いひ知らぬに聞はへれ。右歌朝霧のかゝるとよめらん。聞侍らす。又から紅のふりてゝそこしといへるわたり。いともみちを唐紅とよめりとも見えす。我身をよめるとこそ覺え侍れ。此事いと心えかたく侍り。かすにいみしき事に侍れと。みえん所をはしのはす書付よと侍は申になん。此二首は定め申にもたらぬ事にこそ侍るめれは。さるにて持なとこそは申侍らめ。

十二番　左　參河

紅のやしほの岡のもみち葉は時雨ふり出て染る也けり

右

柞原ゆくへき道もなかりけり散紅葉はのふまくをしさに

左歌無レ譽。纔存ニ一興一歟。右歌詞滯義迂風義共薄仍以レ左爲レ勝。

一番　戀　左　左衛門督

つゝめとも涙に袖のあらはれて戀すと人にしられぬる哉

右　顯輔

つらからんことの葉もかな侘つゝは恨てたにも慰めにせん

左歌辭義花麗。心匠軍可卒。謂ニ秀逸一乎。右歌辭已有レ所レ闕義又有レ所レ□。仍以レ左爲レ勝乎。

二番　左　新中納言

我こそはねをのみ鳴て逢瀬なき涙の河の身をつくしなれ

右　道經

あやにくにつゝめは出る泪かな戀すと人に見せしと思ふに

左右兩首。文花義實。共無ニ等級一。仍爲レ持。

三番　左　右兵衛督

逢ことを身にかふはかり歎けともつれなき物は命也けり

右　季通朝臣

身のうさの歎きに戀のまさるとは泪の色の深きにそしる

左歌辭花可ニ以翫一。義實可ニ以憐一而已。右歌以ニ涙色之深淺一可レ論ニ憂戀之勝劣一哉。心□倘以レ左爲レ勝乎。

四番　左　大藏卿

身につゝみいひたに出ぬ池水の流れもやらぬ戀をする哉

右　維順

おく山の谷の埋木人しれす戀に朽ぬる名こそ惜けれ

左歌詞澁ニ妖艶一富ニ風流一就中論ニ其氣味一尤足レ詠之。右歌初句雖レ學ニ英花之躰一卒章已舊歌也。其歌云。うらみわひほさぬ袖たにあるものを戀にくちなん名こそをしけれ。以レ左爲レ勝。

五番

左　宰相中將

けふこそはしらせ初つれ戀しさを扨のみやはと思ふ余りに

右　仲正

今はさは如何いはまし戀しとは盡しはてつる言のはなれは

左右二首。言花口實以同科也。指南難レ定。仍爲レ持。

六番

左　伯

袖のうらに海人の栲繩繰かへて干とはすれと乾くまそなき

右　行宗朝臣

忍ひ妻おきゆく朝の霜のうへに跡ふみつくな人もこそしれ

左歌文躰雖レ不レ驚二耳目一首尾以存二戀心一矣。右歌戀心已髪空只言二明利一矣。詠物理空以可レ然哉。仍以レ左爲レ勝。

七番

左　爲忠朝臣

住吉のちきの片そき我なれやあはぬ物ゆへ年のへぬらん

右　忠季

逢ことをなのみたちゐて松浦川七瀬の淀のよとみかちなる

左歌一篇雖レ存二風躰一但ちきの二字頗沍レ旨也。右歌にも松浦河七瀬のよとゝよめるは。させるイ文侍歟。鈴鹿川八十瀬とよめるなと。かやうなる事のけへるにやあらん。未二見及一之間以レ左爲レ勝。

八番

左　忠兼

あまたとかよるはのたなは君によの亂れかたなる我心かな

右　爲貞

ひたふるに思ひたえてもあるへきにあなむつかしの心情や

左歌よるはのたなはといへるわたり詞甚いやしうてきき所侍らす。雖レ然末句はいひなれたるやうに聞え侍り。右歌已存二俳諧之躰一尤爲二誹謗一兩首程自由。仍爲レ持畢。

九番

左　國能

あふ事をいつともしらぬ我戀やときはの山の谷の埋木

右　顯時

逢事の跡たへてなき戀路には入よりまとふ物にそ有ける

左歌一篇有二義理一首尾叶。右うた跡たえにたるといへるわたり。詞滯て聞所少し。仍以レ左爲レ勝。

十番

左　親隆

思ひやれこはいかなりし雫そと問はるゝ泣の袖の泪を

右　雅親

戀わひて落る涙の玉ならはちはこの數にぬきもしなまし

左歌纔陳二旨意一也。歸二艷流一右歌籬存二古風一頗有二逸興一但ちはこの數といふ事こそふるき詩にも歌にもみえはへられ。此歌おもへ侍る。物しりたる人のよみたるにやあらんとこそみはへれ。定めてちはこ文の文に侍らん。たゝ常は信太の葛の千枝は物かはなとよめるにや。又錦木のちつかの數なといへることをのみそ口つめて侍る。ちはことといふ事いまたきゝはへらす。若毛詩といふ文の千箱といふ事をおもひてよまれたるにや侍らん。それはくるまといふ事なり。されは文選にも千箱とはつくりて侍る。箱と□とはもしかはりて侍れと。これを

いたはりて書けるとそいひつたへて侍る。其儀に侍らは。人まとかはせんとてひか事をよまれたるにやあらん。是より外おほえ侍らす。たゝし千箱覺束なけれと。歌からの左よりは宜く見え侍れは。以右爲勝。此うたのぬしにちはこ必尋ねさせ給ふへし。

十一番

左　琳賢

打とけぬ人に契を結ひけん身をそつらしといふへかりける

右　隆縁

さくらあさのおふの繁みに思ふ事こへはた帶のいかて結はん

左右雨首。不遑議定。凡不知和歌之趣者歟。

十二番

左　參河

人しれす袖をそしほる數ならぬ身をしる雨の音はたてねと

右

人しれすねをのみなけは衣河袖のしからみせかぬ日そなき

左歌の身をしる雨に袖をしほるをきゝては。あやなく袖のうへに時雨の音はれかたく。右の袖のしからみせかぬひそなきといへるを聞ては。又あやなく右のそてのうらにあまもつりしつへく思ひ給へられて。これを聞て情をかけ。彼にむかひて心を通はすほとに。老のこころいとゝほれまさりて。いつれまされりと定めかたくそ侍るや。むかし潯陽の江のほとりに。よる琵琶をききて。みとりの袖うるほしける人も。かくやありけんとさへそおもひやられける。

右衛門督家歌合

久安五年六月廿八日於中御門亭合之

題

秋月　九月盡　戀

歌人

左

右衛門督家成
權中納言忠雅
左京大夫顯輔
左馬頭隆季朝臣
少將家明朝臣
散位賴保
散位範綱前馬助
忠兼入道
散位賴政源藏人大夫
散位季時
女房土佐

〔右脱歟〕

前齋院兵衛顯仲伯女
攝津守重家
治部少輔能輔
散位顯方藏人大夫
散位隆長清輔本名
前阿波守賴佐
散位遠明
資基入道
僧隆縁伯耆公
藤原宣宗〔兼歟〕前待賢門院藏人
女房丹波

判者　左京大夫顯輔

一番　秋月

左　右衛門督家成

秋はなをあまたの星のみえぬ迄いかてひとつの月照すらん

右　前齋院兵衛

秋のよは天の川瀨やすみまさる流るゝ月のことにみゆるは

左歌月のあかけにはへれとも。あまたの星ひとつの月

なとこそ。歌こと葉ともみえ侍らね。右はすみまさると
いへるほとそ。さゝへたるやうなれとも。きゝつきて侍
り。

いかなれは星みえぬまて照月に天の川せの澄まさる覽

二番

左　　權中納言忠雅

我からや月に心のすみぬれは秋のよなれと程なかりけり

右　　攝津守重家

秋のよの月は心に入にけり山のはとのみなにおもひけん（おもへるかなイ）

左歌は五文字こそこはくみゆれともふること見えす。
右歌は山端は名のみなりといふ歌に。かはりはへらさ
めり。

三番

左　　左京大夫顯輔

月影の心にいるは石上ふるきことゝはしらぬなるへし

右　　治部少輔能輔

秋毎にひるにかはらぬ月影はわかいつるをやよるとしる覽

入はいさわかよはふけぬ秋の月かたふく物の影をなかめん

左歌はをのれなきてや秋をしるらんといふ歌の心なれ
はにやおかしくはへめり。但心こと葉ともにとりたる
を古歌とは申なり。心をとりてよめるはおかし。何にか
へたる命とかいはんとよめるは是なり。右うたはわか
よのいたくふけにける哉といふ古歌やはへるらん。

徒信て我よふけぬと歎けん昔のことはわかゝらめやは

四番

左　　左馬頭隆季朝臣

久かたの天の夕きり晴にけりうつろふ月の四方にさやけき

右　　散位顯方

天の川やそせの浪やあらふらん清くもすめる秋の月かな（よの月イ）

左歌は月のさやけきによりて。霧晴にけりと思ふらんこ
そえみぬにやおほゆれ。右歌さやうのことみえ侍らす。

天の河八十瀬の波のあらふなる月の光やすみまさる覽

五番

左　　少將家明朝臣

晴わたるみとりの空の淸けれは曇なく見ゆ秋のよの月

右　　散位隆長

さゝ波や志賀の都はあれにしをまたすむ物は秋のよの月

左歌くもりなく見ゆと侍るほとこそ。餘にとまりたる
心ちすれ。右歌はあしからねとも。さゝ波や大津の宮
をきて見れは霞たなひき宮守もなしとそ萬葉集にはへ
る。さゝなみや志賀の都とはよめらんことといまたみ給
はすそ。難はへるましくは歌まさりてや。

さゝ波や大津の宮はみしかとも志賀の都はいつこ成覽

六番

左　　散位賴保

よるとてもねられさりけり秋の月光はひるの心ちのみして

右　　前阿波守賴佐

常よりもうつれる月の影淸み秋は水もや澄まさるらん

左歌はこしのもしをこそ置わつらひてはへめれ。右歌
は水のすみまさるによりて月のきよくみゆるにては。
大かたはいかゝ侍らん。おほつかなき月の影哉。

宿すらん水のみ澄る月よりも晝とみゆるは照まさり鳧

七番

左　散位範綱

涼しさにさやけき影やまさる覽すくれてみゆる秋のよの月

右　散位達明

すみわたる月を見てしか白川の關までおなし影やしたると

左歌月の光なんすゝしく覺ゆるとそいはまほしき。すすしきによりて月のさやけく見ゆるは冬の月にはしかし。又すくるとはあまたの物の中にひとつかことに見ゆるをや申らん。ひとつゝある物をは。たゝほむへきにや。右歌はかみおろしの句はなたらかにはへるに。影やしたると侍るこそ誠に秋の月をもてあそふに曉の雲にあへらんこゝちすれ。又秋といふもしやはへらぬ。すくるてふ覺束なさに比ふれは秋ならさらん月はほいなし

八番

左　忠兼入道

千代ふへき宿のけしきにことよせて長閑に澄る秋のよの月

右　資基入道

宿わかすさのみもいかゝ照すらんみぬ人もなき秋の夜の月

左歌はさせる事はなけれとも祝によせられたれは。右歌普き句は日月の光とこそ申めれ。事あたらしくこそ聞ゆれ。

九番

左　散位頼政

月影の思ふ思はぬあるよりも君を祝ふはいふ事（はかりイ）もなし

右　僧隆縁

常よりもさやけき月にさそはれて床あくかるゝ秋はきに鳧

秋のよの露も曇らぬ月をみて置所なき我こゝろ哉

左歌はいまた月をはみて初秋のこゝろをよまれたるにや。右歌は心こと葉おかしくはへり。

何となき初秋よりも月をみて置所なき心まされり

十番

左　散位季時

宿からかことにも月のさやけきは何處も同し秋のよなれは

右　藤原宣兼

さもこそは鏡の山のかひならめ光をそふる秋のよの月

左歌のことにもといふもしこそ。たいおちにもはへらね。右歌かゝみの山に光さしそへられたるより侍り。

曇りなき鏡の山の月なれはひとしき影もあらしとそ思ふ

十一番

左　女房土佐

秋の夜は軒端にすかくさゝかにの糸の數さへ見ゆる月影

右　女房丹波

いかさまに靡くもみゆるさゝかにの影曇りなき秋のよの月

左右歌心こと葉かはらねとも。數さへみたれたれは今少しあかくや。左歌はさゝかにを同しく照す月なれと糸のみゆるや澄勝る覽

一番　九月盡

左　權中納言

秋のゆく道しりたらはけふはかり惜こゝろも惑はさらまし

右　重家

とゝまらぬ秋こそあらめいかてきはくたく心を思ひ返さん

左歌道しりたらはといへる程こそくちつゝに聞ゆる。

天徳四年内裏歌合に春のゆくとまりしるき物ならは我もふなてゝをくれさらましといふ歌にこそはへれ。右歌くたくる心とそいはまほしき。くたく心とはわか心とくたくとや。心さしはや持なり。

くちつゝに世の故事をいふよりは心くたくや思ひ増覧

或本判歌 秋をおしむ心の程を比ふれはまとふ心は同し程なり

二番

左　　左京大夫

何方とさためてまねけ花すゝき暮行秋のゆくゑたにみん

右　　能輔

大江山秋の幾のゝ夕露はかたみにをける物にそありける

左歌ゆくゑたにみむとおもふとも。心さしそあはれなれとも行秋を尾花のまねくといふこと。一定しりかたし。右歌は大江山はいく野の道とをけれはとよめるこそきゝよけれ。秋といふもしのはさまりていかにそや聞ゆれとも。中比の上手のよみたることなれはさためてよく侍らん。又かたみの露もをきたまりてそ候つらんかし。

行さきの心の程をくらふれは形見の露や置まさるらん

三番

左　　右衛門督

紅葉はのなもおりつへしけふよりは秋果ぬとは我にきかすな

右　　兵衛

暮て行秋なと男鹿の聲さへやけふ計とて盡しはつらん

左歌紅葉のなもおりつへしとよめる。心えかたし。冬になれはもみちのさたのあるましき。ふるくもから錦枝に一村殘れるは秋のかたみをたゝぬなりけりとこそよみたれ。あやしけなる物のなにしにのこれるそとはよまさめり。右歌こゝろ言葉おかし。

紅葉はの名をるよりは暮て行秋を男鹿の聲そ身にしむ

四番

左　　家明

とまり居て秋をも何かおしからし暮行道をそれとしりせは

右　　隆長

花すゝき招く方なそ詠やるくれ行秋の道とおもへは

左右。こゝろ詞おなし程にそ。

行方をしるとしらぬと比ふれは火と水とをは如何定めん

五番

左　　頼保

心にはあきもはてぬを長月の今宵計ときくかわりなき

右　　頼佐

霧たにもしはしとゝまれ小倉山秋立こめてやらすや思はん

左歌は長月のといへるもこそ。今すこしおもふへかりけれともいひなれたり。右歌の秋たちこめてといへるは。秋を立こめてといへるか。心あまりて詞たらすとは是にや。又小倉山をしも霧のこめていつらんも物おそろしけにや侍る。

恐ろしや小倉の山を霧こめてつゝ暗なれはみ所もなし

六番

左　　隆季

涼しさは袂にしらる此暮のあさけの風に衣かへせん

右　　顯方

命あらは秋には又も逢へきに身にそふはかりをしき何なり

左歌は初秋のこゝちそする。秋たちて幾かもあらぬに此ねぬる朝氣の風は袂すゝしもとよめる心也。くれの秋とは見えす。又此暮のあさけはあすにやはへるらん。しかやあらまほしき。衣かへも中間なり。右歌はさてもありぬへし。はてのもしそなを物語をみるによみたる心ちすれとも。

かねことに衣更せん人よりも身にかふ計惜むまされり

七番

左　忠兼入道

暮てゆく秋をとゝめよもみちはの手向ならけそ逢坂の關

右　資基入道

けふはなを紅葉の影にくらしてん今年は又も見へき秋かは

左歌あふさかとしもよまれたるは。秋はいつこよりいつくまてまかるにか。又われはいつこにゐてよまれけるそ。又秋なとゝめんとおもふ心ならは關といふもしやそへるへき。右歌はおほつかなき事はへらさめり。

逢坂の關もみえねは行秋も誰かとめんにか通らさるへき

八番

左　頼政

かくはかりおしまはしはしやすらはて情もしらぬ秋の暮哉

右　隆縁

宿毎にかく惜まるゝけふをしもあき果ぬとはなとかいふ覽

右歌心おかしくはへめり。

けにさりや情物よに誰もみな秋果ぬてふ事そおかしき

九番

左　範綱

野へことに尾花なしなみ招けとも秋の夕霧たちもとまらて

右　遠明

入日さす影こそけふはをしまるれ秋もにしへや暮て行らん

左歌きりの立もとまらねは秋くれぬと思ふにや。初秋にも霧はたちまたれぬに侍めるは。右歌秋もくれてや西へゆくらんと思へはとそいはまほしき。もしたらぬ心地そすれとも。九月盡の心はへめり。

暮はつる秋の心はしらすしてなに霧をのみ惜むなる覽

十番

左　土佐

いかにせん風ふきみたる道芝の露もとまらぬ秋のおしさを

右　丹波

きえかへりおしめと人を思へはや露をかたみに秋のをく覽

右歌露をかたみにとゝめられたるは。形見とはあかなからんおりこのくれとなり。冬の露はいかゝ。それ離に侍るましくは秋のおしさをとよめるよりは。なたらかにはへめり。

野へ毎にをけは草葉の露なれと形見にをくは情（致イ）勝れる

十一番

左　季時

惜めとも暮行秋の悲しきに木の葉をさへにさそふ風哉

右　宣兼

我ならぬ人もかくやは惜らん今宵はかりの秋のけしきを

左歌に木の葉さへと侍るこそ何ゆへにおしき秋なれはもみちに心さしこそはへらね。三月盡の歌にも花たに

もちらてわかるゝ春ならは　いとかくけふもおしまさらましとこそよみたれ。右歌は珍らしき事はなけれとも。目にたつところはなし。

諸人の惜もしらすくれて行秋の景色はわりなかりけり

一番　戀

左　左京大夫

よしさらは我戀しなん思ひをは誰やまひにかならんとはしる

右　能輔

深山木のくち葉か下の埋水かきなかさはや戀しとたにも

左歌はいと〳〵おそろしくはへり。萬は身の爲なり。とくとくいそきなひき給ひねと申さまほし。右歌は題に忍ひたる戀ともはへらさめるに。なと戀しとはえかき給はさる。こゝろにこそあらめ。

心には思ひやすらん戀し共かゝねは誰かそらに知へき

二番

左　右衞門督

あさりする海士の衣にあらね共しほたれぬるゝ袖のうら哉

右　兵衞

人しれぬ思ひは色にいてぬより先うつろふは泪成けり

左歌しほたるといへるにもぬれ侍りなんかし。しほたれぬるゝとよまれたるこそ。十八日の日といふやうに聞ゆれ。右歌はなみたうつろふとはいかに申事にか。心えかたし。但しほたれぬるといへるよりはなたらかにや。

しほたるといふにて路もしりぬへしなと聞にくゝくりとをする。

三番

左　中納言

思ひかね泪のふちに身をなけはちへ迄いりて君にみえまし

右　重家

つれもなき人こそ今はつらからめ戀は心にかなはましかは

左右心こと葉おかし。右歌の人こそつらからめ。戀さへこゝろにかなはさらん。さることゝ聞ゆ。左歌泪の淵に身をなけんも便あり。また九重のふちとそいふにちへまていりてみえんも。心さしの深き今すこしまさりてや。但あらましことにそはへめれ。

誰も皆哀にいへと身をなけてみえましてふ戀は勝らん

四番

左　頼保

いかならん言の葉にてか靡くへき戀しといふはかひなかり鳬

右　頼佐

篠すゝき忍ひかねてそいはれのゝ荻の下葉の亂有まし

左歌心こと葉いと〳〵おかし。

とにかくに右は心にかなはねは左かちとや人はみる覽

五番

左　隆季

風吹は浪よせかくる岩のうへのいつもの花のいつか逢見ん

右　顯方

人しれす思ひいれとも梓弓ふすよなけれは夢にたにみす

左歌萬葉集におもひいてられわさ〳〵しけにはへめり。右歌ふることとなれはにやなたらかにはへめり。あたらしきよりいはゝ左こゝろあり。

つねにみるきの關守か弓よりもいつもの花は珍らしき哉

六番

左　家明

浪うてはいそにかたよるなひきもの靡くを人の心ともかな

右　隆長

さりともと逢事をこそ頼しか戀しなん日を今はまつかな

おなし程にやはへるらん。但右歌は今すこしせちにや。おもひて侍らむ。

たれも皆戀しといへと死計思ふらんこそ哀とそみる

七番

左　頼政

逢ことはなきさにかへる白波の猶よりくるやこりすまの浦

右　隆縁

見れはうしみねは恨めしとに角にあふさきるさの思ひ成鳧

左歌のなきさにかへるといへるきゝつかす。又なをよりくるやといへるわたりいひつかす聞ゆ。右歌はみねは戀しとそいはまほしき。みねはうらめし心えす。されとも左よりは歌めきてや。

うしと思ひ恨めしと社しらるれは泪の川の汀まされり

八番

左　範綱

我袖はすさの入江の磯なれやなつさふ波のかけぬまそなき

右　遠明

つれなさや思ひなをると待はかり戀ゆへおしき我命哉

左歌戀のこゝろすくなし又なつさふ波も心えす。右歌まつはかりこひゆへをしき我命かなといへる末句かきあはす。同し程の歌にや侍るらん。

判歌闕

九番

左　忠兼入道

忘艸しけるしの屋の白露のかはかぬ袖をとふ人そなき

右　資基入道

逢事のなと片きしにおひにけるいつをまつともなきみ成覽

左歌これもこひの心うすくなけれとも。心えぬこと葉見えす。右歌はきしとまつとことのほかに物へたゝりて。かたしきにはなにのおひたりけるそとあきれて。

かたきしにおふとは人のいふめれとはるかにのきてたてる松哉

十番

左　季時

心から心よりする戀なれは我みそつらき人のとかゝは

右　宣兼

誰ために逢ことなれは命にもかへつはかりは歎く成らん

左右ともに心なきにしもあらす。おなし程なり。

皆人のいふことのはのおかしさにいつかたへともえこそなひかね。

十一番

左　土佐

にこり江の下かくをしの心地してすむよもしらぬ戀もする哉

右　丹波

黑かみに泪の玉のぬきかくるかすはかりなき戀もするかな

左歌にこり江の下かくをしのこゝちしてすむとよめる

こゝろえす。をしの下かく水の心ちしてすむとそよむへき。右歌は涙の玉のぬきかくるといへるいかにそやおほゆる。たれかすることならは。ぬけかゝるとやいふへき。人のすることならは。ぬきかくるとそいはまほしき。いつれも〳〵心えぬことおなしほとにや。右はゝかりなしとそ見えはへる。
をしとりのかたらんよりはこひしさのはかりしなきやまさる成らん

太皇太后宮大進淸輔朝臣家歌合

永曆元年七月日

題

鶯二　梅四　櫻二　時鳥二　織女五
月四　紅葉二　雪二　戀六　述懷六

歌人

左　　右

太宮大進淸輔朝臣　俗俊惠
前紀伊守雅重　僧顯昭
式部丞藤原憲盛　入道空仁
刑部少輔家基　前馬助敎賴
女房大輔　侍從師光
前越後權守資隆　豐後守賴輔
前少將公重朝臣　僧祐盛

判者

左近少將通能朝臣

一番　鶯

左持　淸輔朝臣

鶯のなく木のもとに降雪は羽風に花のちるかとそ見る

右　俊惠

鶯のなきて木つとふ梅かえにこほるゝ露や涙なるらん

左右ともになたらか也。但左歌は鳴て木つたふといふ句そいかゝあるへからん。それも露こほさんれうに大

切なれは持とにやあらん。

二番

左　雅重

鶯は春を知ても鳴ぬなる我身は春をしらてこそなけ

右勝　顯昭

杣人はをのゝ音しはしとゝめなん谷のうくひす初音鳴也

左歌もなたらかなり。右歌は詞はとゝこほるやらなれとも。心あしくも聞えす。勝とやいふへからん。

三番　梅

左持　清輔朝臣

あしかきのおくゆかしくもみゆる哉誰すむ宿の梅の立枝に

右　顯昭

光ある春の日くらし袖たれて垣根の梅の花みる我は

左はいひなれたるやうなり。右は末句さゝへたる様なれとも持歟。

四番

左勝　憲盛

春の夜はいこそねられね閨近き梅の匂ひにおとろかれつゝ

右　顯昭

小夜ふかみ旅寢の床に香らすは梅さく宿といかてしらまし

左ことにゆうなり。右古歌合歌なり。

五番

左持　家基

匂ふかはいつれの梅も變らねと色なる花そわきて身にしむ

右　空仁

梅のはな香をは袂にしむれとも色をはえ社移さゝりけれ

左はすくるともいひつへけれとも。さまてなけれは持。

六番

左勝　雅重

梅の花折てかさせは二月の雪は衣におつるなりけり

右　敦頼

時ならぬ卯の花ともや思はまし垣ねの梅の薫はさりせは

左心なきにもあらす。

七番　櫻

左勝　清輔朝臣

唐國のとらふす野へに匂ふとも花の下にはねてそ歸らん

右　顯昭

わきもこかはこねの山の糸櫻結ひ置たる花かとそ見る

彼是あしくもそ□すこしは猶めつる心深けれは。左やすくならん。

八番

左持　女房大輔

浮世をは又何にかはなくさめん花に先たつ命ともかな

右　師光

櫻花春の山かせみねこせは雪ふり積る谷の細道

共になたらかなり。それにとりて右はまさりたりともいひつへけれとも所もふりたり。左もめつらしらしね なし。よき持にこそ。

九番　郭公

左持　清輔朝臣

時鳥心のまゝに尋ぬとて鳥の音もせぬ山に來に鳬

右　敦頼

しほりして又たつねこん郭公此山にてそ一聲もきけ

　左壽心はふかけれと。上に時鳥といひて末に鳥といふ。病にやあらん。但證歌有らん。されともよからさらんとはまねふまし。右させることなし。詩歌云賀陽院歌合。通俊卿云。おしなへて山の白雲つもれともしるきはこしの高根なりけり。こしの高ね山なり。叶ニ此證一。雖然不レ惑。無レ難。又鶯郭公と詠。又鳥と證歌兩以在歟。

十番

　左勝　　　　　　　　　　　　　　俊　惠

宵のまと人をは待し時鳥明るまてこそねられさりけれ

　右　　　　　　　　　　　　　　　顯　昭

花はすきもみちはまたき夏山にをりえても鳴時鳥かな

　左歌ゆかしくもとめたりける物かな。

十一番

　左勝　織女　　　　　　　　　　　俊　惠

七夕はたえぬ契りをうれしとも今宵はかりや思ひ知らん

　右　　　　　　　　　　　　　　　賴　輔

天の川わたることよひや七夕は中々袖をぬらさゝるらん

十二番

　左　　　　　　　　　　　　　　　資　隆

秋風の吹と聞より七夕は心のうちやすゝしかるらん

　右　　　　　　　　　　　　　　　師　光

七夕のまちつる程の久しさにはかなく明る空をかへはや

十三番

　左持　　　　　　　　　　　　　　大　輔

彥星の暮をまつまはあちきなく雲のよそなる心地こそすれ

　右　　　　　　　　　　　　　　　顯　昭

さもこそは身はならはしといひなから七夕いかて堪てすく覽

　歌からは左勝れとも心もえす。右はするけらいてい也。

十四番

　左　　　　　　　　　　　　　　　俊　惠

七夕のわかるゝ今朝の袂にや秋の白露置はしむらん

　右　　　　　　　　　　　　　　　顯　昭

秋へてもはてなき中を見る折は七夕つめそ羨れぬる

十五番

　左持　　　　　　　　　　　　　　淸　輔

おもひやる今朝の別は天のかは渡らぬ人の袖も濡けり

　右　　　　　　　　　　　　　　　敎　賴

七夕のあすの別をなけくまにあふ夜も袖やかはかさるらむ

　左右ともにさもとおほえたる。

十六番

　左持　月　　　　　　　　　　　　淸輔朝臣

今よりは更行までに月はみし其ことゝなく泪落けり

　右　　　　　　　　　　　　　　　空　仁

待人の來ぬも思へはつらからす寢なは今宵の月をみましや

　共になさけあり。何れとわきかたし。

十七番

　左　　　　　　　　　　　　　　　淸輔朝臣

終夜をは捨山の月をみてむかしにかよふ我こゝろ哉

　右勝　　　　　　　　　　　　　　敎　賴

山のはに雲のよこきる夜のまは出ても月そ猶待れける

十八番

左　　資隆
久かたの月のかつらの色のみそ秋をふれとも替らさりけり
右勝　　俊恵
おのか爲あくるにもあらぬ天の戸に急きな入そ秋のよの月
左難はなけれとも劣りてや。右はよ明ぬさきにいるをりやあらん。されとも月の心なとはさやうにもあらむ。歌からのまさりてみゆれは。

十九番
左勝　　大輔
うちはらふ枕の塵もかくれなく荒たる宿をてらす月影
右　　頼輔
秋の夜の月みる袖にをく露やひるにかはれるしるし成らん
ともにあかくほいありて覺ゆれとも。今すこし詞なれたれは左勝とす。持ともいひつへし。

廿番　紅葉
左持　　雅重
秋されは曉露にいもか袖まきゝの山に匂ふもみち葉
右　　空仁
した染はおなしみとりに見し程も紅葉の色の薄くこき哉
左は歌のたけはあれとも。右は又なたらか也。仍爲レ持。

廿一番
左勝　　清輔
小倉山きゝの紅葉のくれなゐは峯のあらしのおろす也鳧
右　　俊恵
深く淺きもみ「ち脱歟」葉なかる飛鳥川ふち瀨は色に顯れに鳧
共にあしくもなし。右は五文字こはし。左は難なし。

廿二番　雪
左勝　　資隆
霜かれて籬のなかに雪降は菊より後の花も有けり
右　　空仁
花咲は雪かとみせて雪ふれは花かと見するみよしのゝ山
共にゆうなり。されとも右は負といひつへし。

廿三番
左勝　　公重朝臣
雪深み賤のふせやも埋れて煙計そしるし成ける
右　　空仁
花のはる紅葉のあきもしるかりし松の梢もみえぬ白雪
左歌はしるしの煙心すこく聞ゆ。右は下葉まてはふりかくさん雪もかたし。けにともきこえす。

廿四番　戀
左勝　　清輔朝臣
戀しさの慰さむことやなからましつらき心を思ひよせすは
右　　俊恵
君こすはうちへもいらし拂ひつる閨の思はん事も恥かし
ともに優なれとも。うちのしたまてもおもほえれは。右負ともいひてん。

廿五番
左　　家基
戀しなん後は煙とのほりなは棚引雲をそれとたにみよ
右勝　　師光
我身たに思ひにたかふ物なれはことはりなれや人のつらさは
右けにとおほえたり。なさけあり。

廿六番

左　俊恵

戀しなん命を誰にゆつり置てつれなき人のはてを見せまし

右勝　顯昭

つれもなき人は思ひも捨られてうき身のみ社なけまほしけれ

左あしくもなけれとも。ふるめきたり。右すつとなくと病にてあるへからん。されともおもひすつといひつれは心たかひぬ。いかさまにも勝なり。

廿七番

左　雅重

我戀はすさの入江のこもりえの思ひこめても年をふる哉

右勝　敦頼

わか戀は音なし川の浪なれや思ひかくれと聞人もなし

右こゝろ詞かなひて。姿あしくもなし。

廿八番

左　俊恵

わきもこをかたまつ宵の秋風は荻の上葉をよきて吹なん

右勝　敦頼

朝夕におつる涙や戀草のしけみにすかる露と成らん

右歌のふるまひあしくもなし。つき／＼し。

廿九番

左勝　俊恵

君やあらぬ我身やあらぬ覺束な頼めしことの皆替りぬる

右　頼輔

戀しなん命そ惜きつれもなき人にしも身をかへんねたさに

左ふりてやあらんとおほゆれとも。なさけなきにしもあらす。右こゝろはあしくもなけれとも。詞たらす。

三十番

左持　清輔

年をへて梅も櫻も咲ものを我身の春に待そかねぬる

右　俊恵

數ならて年經ぬる身は今更に世をうしとたに思はさり鳬

共にさせる難もあらす。又すくれたるふしもなし。

三十一番　述懷

左　雅重

紫に色もかはらすあけ衣我黑かみの白くなるまて

右勝　空仁

よをも厭ふよにも我身の厭はれて離れ難きそ悵しかりける

左もあしくもなし。右さもけに悵しかるへし。

三十二番

左　敦頼

いつとても身のうき事はかはらねと昔は老を歎きやはせし

右勝　空仁

かくはかりうき世の中も捨果んと思ひになれは悲しかり鳬

ともにさもとおほゆ。されと右は今すこし勝らんかし。

三十三番

左持　公重朝臣

人數にあらす鳴海のうらに又老のなみさへよるそ悲しき

右　師光

うきなから猶惜まるゝ命哉後の世とても頼な□

ともに心えぬへくもなし。

三十四番

左　　　　　　　　　家基

世のうさに秋の心のふかけれは落る泪も紅葉しにけり

右勝　　　　　　　　禎盛

思ひ出も又待こともなけれともさすかに世社捨もやられね

共にあしくもなけれとも。右勝りたり。

三十五番

左持　　　　　　　　雅重

われか身はさそふ水待浮草のあとたえぬとも誰か尋ん

右　　　　　　　　　淸輔朝臣

うきなから今はとなれは惜き身を心のまゝにいとひつる哉

ともに神妙なり。

右淸輔朝臣家歌合以百花菴宗固本書寫得一本挍矣

群書類從巻第百八十五

和歌部四十 歌合六

中宮亮重家朝臣家歌合 永萬二年

題

花　郭公　月　雪　戀

作者

左方

權中納言實國　別當隆季　宰相中將宗家
左大辨雅賴　中宮亮重家　若狹守經盛
前少將公重　左少將通能　前中務少輔季經
前少納言資隆　中宮大進賴保　西游範綱入道

右方

前石見介親部成仲　阿闍梨心覺
小侍從太皇太后宮女房待宵　三河二條院内侍　辨殿下女房
右京大夫殿下女房　兵庫頭賴政　右京權大夫師光
前豊後守賴輔　侍從有房　右馬權頭隆信
僧顯昭　寂念爲業入道　生西爲眞入道
賀茂政平片岡禰宜　僧俊惠

判者

前左京大夫顯廣朝臣

一番　花

左持　權中納言實國

をちかたの風に亂るゝ糸櫻わかてにかけてみるよしもかな

右　小侍從

命あらは春には又もあふへきを花にをくれて一日やはへん

左歌をちかたの糸さくら。まことにおもひよりかたくめつらしくみゆ。右歌春には又もなといへるわたり。おかしくもきこゆるを末の句やあまりたらん。さすかにさき〳〵のとしも。花にはをくれてのみこそは。彼貫之か我身にしあれはおしき春かなといひ。長能かいけらは後のなとよめるは。めてたく侍るものを。この一日やはへんはいかにそや。たらすもきこえ侍る。但歌のさまとり〳〵也。仍爲ㇾ持。

二番

左勝　別當隆季

打よするいそへの波のしらゆふは花ちる里のとをめ也けり

右　三河

ちりちらす覺束なきに花さかり木のもとを社住家にはせめ

左風躰は幽玄調。義非ニ凡俗一。但し花をしらなみしらゆ

ふなとよむはつねのことなれと。波によせつる時は海河をひき。ゆふとかけつれは森やしろともいへるや。よしありてきこゆらん。花ちるさとのとをめならは。いそへのなみのしらゆふならすともや侍るへからん。右ふることともを。とかくひきよせられたるうちに。かのいせのみやす所の歌は。山ちにて故郷のといふかしかりけになにちりちらすきかまほしきをといへるこそ。ことにおかしきを。この歌にはちりちらすおほつかなからんことは。花を思ふ心はふかゝらんやときこゆらん。末にすみかにはせめといひはてられたるほと餘情たらすやあらん。猶なみのしらゆふは歌のさまたけまさりてや。

三番

左　宰相中將宗家

春はたゝ花咲よもの山ことに心をさへもちらしつる哉

右勝　辨

又さかん春に心のかゝらすはちりゆく花に身をやかへまし

左歌のさまはおかしく侍るを。花により四方の山に心をちらすこと。ちかき世の歌人よみ給ひし心地する。右歌は末句いかにそや。ことたらぬところある心地すれと。春に心のかゝらすはなといへる心すかた右はまさるへくや。

四番

左持　左大辨雅頼

春風にうこかぬ雲とみえつるはまたちらぬまの櫻なりけり

右　右京大夫

櫻花さかりになれは吉野山ふもとの里に旅ねをそする

左歌花のけしきしつかに。心つかひ歌合の歌とみえ侍るか。うこかぬ雲といへることはや優にしもきこえさらん。雲とみえ侍ることも山なとやあらまほしからん。右歌はことなるとかなけれと。かやうの心つねのことに侍るめれは持とみえたり。

五番

左持　中宮亮重家

をはつせの花のさかりをみわたせは霞にまかふ嶺のしら雲

右　兵庫頭頼政

あふみちやまのゝ濱邊に駒とめてひらの高根の花をみる哉

此左右の歌。已如下看二陵雲臺一在中望海樓上。いつれもまことにみところ侍るかな。それにとりて左歌は後撰集にも入れらるゝにや。すかはらやふしみの暮にみわたせは霞にまかふをはつせの山といへる歌を。花のうたにひきなされたるなるへし。かやうのことはいみしうはからひかたきことになん。ふるき名歌もよくとりなしつるはおかしきことゝなんふるき人申侍りし。白氏文集古萬葉集なとは。いさゝかとりすくせるにとかなきにやあらん。まことによくなりにけるものは。かれをまなへるとみゆるに。なさけそふわさなれはなるへし。たゝしふるき歌名歌をはとるへきこと。いむなりなんとはおもふたまへるに。かのふしみのくれにといへる歌を。ことに心にそめならひにけれはにや。この霞にまかふ嶺のしら雲と侍るも。いみしくおかしくおほえ侍るなり。右歌のまのゝわたりの眺望もいとおかしく思ひや

られて。ひらの高根をたちまさると申さは峯のしら雲すてかたく。をはつせ山に心をよせんとすれは。ふるきとかさためかたし。よりて持と申へきにや。

六番

左持　若狭守經盛

さくら咲峯をあらしやわたるらん麓のさとにつもるしら雪

右　右京大夫師光

櫻花としの一とせ匂ふともさてもあかてやこのよつきなん

左峯のあらしをわたし麓に花をちらすさまなる心は。つねにみゆる心地すれと。此ふもとの里につもるしら雪は。すかたもいとおかしくこそ。右歌ことにめつらしくはあらねと。としの一とせ匂ふともなと。いひしれるさまにて。花を思へる心もふかく侍るめり。かみしもの句のはしめの文字おなしきことそ。ふるき歌合にとかとせるやうにおほえ侍る。たゝしかれこれをなすらふるに。これも持とみえたり。

七番

左持　前少將公重

よしの山花のさかりに成ぬれは梢におつる瀧のしら糸

右　前豐後守頼輔

春の日のけしきに花のにさりせは長閑に匂ふ色はみてまし

左歌梢におつるといへるすかたおかしくもみゆ。たゝしちかくも雲井にみゆる瀧のしら糸なんいへるは。おかしくこそ侍るを。これは梢におつるといへれは。梢よりうへには瀧やはあらんとそおほゆる。右歌はふかやふか春はさはかりのとけきを花の心やなにいそくらんといへる心思ひ出られていとおかしく思ふたまふるか。末の句の色はみてましといへるほと。またすこしたらぬ心地すれは。これもまた持とす。

八番

左　左少將通能

年をへて惜むにとまる花ならはいくへか今は咲かさねまし

右勝　侍從有房

ねにかへる時をみんこそ悲しけれ花にさきたつ命ともかな

左風情すきたる心地やすらん。右もあまりなるとは思ひ給ふれと。ねにかへるといひて。花にさきたつなといへる心おかしくもみゆれは右勝と申へし。

九番

左持　前中務少輔季經

春風やかへりてわれを恨むらんのこさす花を折つくしつる

右　右馬權頭隆信

年をへてつくす心をあはれとや匂ひをそへて花もさくらむ

左歌春のかせのうらむまて。さしも花を折つくしけんこと。いかなりけることにか。右歌としへて心をつくすによりて。花の匂ひそへんこと。花の芳心殊のほかにやあらん。さほと思ひにかなふ花ならは。たゝつねのにほひなからも。ちらてそ今はしもなとやおほゆる。されとおりつくしてん花よりは。匂ひそへたらんはまさるへけれと。年をへて匂ひをそへてといへる。ての字おなしことにやとみゆれは。なを持なとにそ。

十番

左持　前少納言脊隆

しら雲のやへかさなりてみえつるはならの都の櫻なりけり

右　僧顯昭

をちこちに匂ふ櫻や春ことに人の心にかゝるしら雲

此左右のしら雲。いつれもきよけにみゆるにとりて。左はやへさくらのよしならは。雲のやへとみえんこといかゝ。また雲のやへかさならんことは。山なとにもかけとをきほとなとや。よろしくきこゆらん。されとやへさくらといふかたつかたの心につきては。たくみおかしくきこゆるに。またなりの字そふたところ侍るめる。右は姿なと今すこしゆうにはみゆるを。ちかくもかやうなることみ給へし心地そすれとたしかならす。歌さまはともにおかしけれは。また持たるへし。

十一番

左　中宮大進頼保

急きてや花のあたりをすきなましちる迄あらは物を社思へ

右勝　寂念

世をすつる心ならすは櫻花あかてやけふの日をくらさまし

左歌花のちらぬさきにすきなんといへる。これも花をおもふゆへのこと葉とみゆれと。つねのならひ。はるかなるやまちと。らとき人の宿をも。花あれはたつねいるこそつねのことなるを。駒をもよほし鞭をあけてすきなんこと。あまりにかしこくやあらん。右歌おなしく花のもとにはとまらぬ歌なれと恩を弃無爲に入心あらすはといへる。さる事ときこえたり。心ならすはさくら花なといへる。すかたもいひしりてきこゆれは以レ右爲レ勝。

十二番

左持　西遊

さゝ波やなからの山の峯つゝきみせはや人に花のすかたを

右　生西

風ふけはみふねの山の櫻花しら波かくるこゝちこそすれ

左こと葉つゝきいひしりて。やすらかにきこゆ。右みふねの山しら波かゝるなといへるたくみにはみゆるを。しらなみかくるほとそ。いかにそやきこゆれと歌のさま持とみえたり。

十三番

左持　前石見介祝部成仲

あかなくに花のあたりに旅ねして月たにあれや散迄もみん

右　片岡禰宜加茂政平

身にかへて花を散さぬ世也せは惜まぬ人やあやなみるへき

左歌のすかた詞つかひおかしくきこゆるを。月なくてくらき夜の花をしもなとかとそおほゆる。右は心ありてみゆるを。いつこにかと。こと葉たらぬ所ある心やすらん。左ははるの夜のやみをあやなくきこゆれと。歌すかたおかし。右はいかにそやいひおほせられぬ所あれと。花を思へる心ふかし。又持と申すへし。

十四番

左　阿闍梨心覺

よしの山花のさかりをみわたせはたゝ春の日にきえぬ白雪

右勝　僧俊惠

みよしのゝ花咲ぬらしよそにさそ峯にはかけしやへの白雲

左の歌常のことなから。さしてそのふることゝはおほ

えぬにや。歌合の歌とみえたり。しもの句のたゝの字そいますこし思ふへしやときこゆる。右の歌すかた詞いさおかしくみゆる。但みよしのゝ花咲ぬらしといへるほとそ山あらまほしくやときこゆ。またかみしもの句のはしめに。みよしのゝ峯にはとをけるやいかゝ。されとかやうのとかは毛をふく疵なるへし。猶嶺にはかけし八重のしら雲といへるすかたいとおかしくみゆ。仍以レ右爲レ勝畢。

一番

左勝　郭公　　權中納言實國

なこりなく過ぬなるかな子規こそかたらひし宿としらすや

右　　小侍從

たつねつる心のほとやみえぬらんかへれはをくる郭公哉

左歌きゝなれたる心地こそすれと末の句いとおかし。右の歌もかへれはをくるなといへるすかたはいとおかしくみゆるを。時鳥にをくられんほとや。きゝすてゝとくかへりけるにやとおほゆらん。猶左のこそ。かたらひし宿としらすやといへるすかたいとおかし。左可レ爲レ勝。

二番

左勝　　別當隆季

いかなれはなか名をよはふ時鳥いねかてにのみよたゝ鳴覽

右　　三河

年をへてきゝふるせとも時鳥なくたひことにめつらしき哉

此左右の歌。左はむかしの詞にして心めつらしく。右はちかきすかたなから。ことふりてきこゆれは以レ左爲レ勝。

三番

左勝　　宰相中將宗家

夕つく夜いるさの山の木かくれにほのかにもなく時鳥かな

右　　辨

時鳥なく一聲のあかなくにすくる雲路の關とならはや

左歌すかた詞いとおかしくこそみえ侍れ。右歌過る雲路のなといへるすかたおかしくみゆるに。せきとならはやといへるほと。すこし俄なる心地そする。またありかたきことゝもおほゆれは。左のいるさの山木かくれは。猶おかしくおもふたまへられて左を勝と申へし。

四番

左持　　右大辨雅賴

時鳥なかて明行夏の夜はまたれぬ聲をたてつへき哉

右　　右京大夫

まちかねてまとろむほとに郭公夢のもりにて今そなくなる

左めつらしきさまにはみゆるを。またれぬ聲とはいかなる聲にかあらん。もし秦女野客のたくひならは。明かたの聲もおかしくやあらん。さらすは輕々にもや。右まとろむほとに夢のもりにてなんといへるおかしくはきこゆるを。この夢のもりこそきゝなれてもおもふたまへられね。若證歌あらは勝侍りなん。當時はおほつかなけれは愚見の判者暫持と可レ申。

五番

左勝　　重家

さみたれにしほれつゝなく時鳥ぬれ色にこそ聲はきこゆれ

右　　賴政

時鳥きゝてもいとゝくるしきはあかて猶まつ心なりけり
左歌しほれつゝなくと いへるほと。おかしくきこゆるを。聲はいかにぬれ色なるらんとそおほゆれと。ものゝ色をほむる 時ぬれ色なりなといふなるへし。又こは色なといふこともあれは。なとかさもなからん。右歌は心ありてみゆるを。高陽院の歌合にや。きゝてしも猶そまたるゝほとゝきすなく一聲のあかぬ心はといへる歌思ひ出られて。きゝなれたる心地すれは左の勝にやとそ。

六番

左持　　經盛

郭公なくねは年にかはらねといやめつらしき心地こそすれ

右　　師光

足引の山より出るほとゝきすはつ音ふるさて我宿になけ

此左右の時鳥。左のなくねはとしにといへるすかた。右のはつねふるさてなとよめる心。いつれもいひなれてきこゆれは持と可ㇾ申。

七番

左　　公重

心あらは我にちかはて時鳥たつぬるかたの山路にをなけ

右勝　　頼輔

時鳥まつはをろかに思ひけりたつぬるおりそ聲もおしまぬ

左おかしきさまにはみゆるを。われにちかはてといへるほと。かならすちかふへきことにやはときこゆ。末の句も心たらぬ 心地やすらん。右末の聲もおしまぬやあまりならんとおほゆれと。まつはをろかに 思ひけりなといへるわたり。よろしくきこゆるうへに。左はなけとはかりいへる歌なり。右はよくきける詞なれは 右勝とみえたり。

八番

左勝　　通能

子規かたらふ聲はとまらねとすきぬる空のなつかしき哉

右　　有房

まちてたになくさむへきを時鳥鳴出る夏そ夜さへみしかき

左歌すきぬる空のなといへるわたり おかしくみゆ。あとなき空をなかめつるかなといへる歌にそ かよひてきこゆれと。さてはあらすやあらん。右歌はなき出る夏はといへるほと。ことのほかにたえすきこゆれは 左の勝なるへし。

九番

左勝　　季經

時鳥さこそまたなき聲ならめたゝ一たひもなのるなるかな

右　　隆信

時鳥雲路にきゆる一聲はゆきかたをたにえやはなかむる

左歌すかた 詞めつらしくはきこゆるを。さこそまたなきとはいかによまれたるにか。もし無二亦無三なるにやあらん。時鳥はけにさもある事なり。聲ならめなのるかなそおなし事にやきこゆる。右末の句はよろしくみゆるを雲路にきゆるといへるほと。いかにそやきこゆ。おなし一聲なれときゝまよはしてんよりは。たしかになのるらんはまさるとなん。

十番

左勝　　資隆

かをとめて山時鳥きなかすは花橘のなをやおらまし

右　顯昭

郭公まちかね山の一聲はきくにつけてもうらめしき哉

左歌かをとめてといへるより。花橘の名をやおらましなと。いとおかしくきこゆ。もし花橘の心やすゝみたらん。右歌まちかね山の一聲きくにつけてもうらめしなといへる女の歌とおほえて優にはきこゆるを。またきゝなれたる心地もすれは。猶花橘をまさると申へきや。

十一番

左持　頼保

たれにこはしのひの岡の時鳥なをうちとけて夜半に鳴らん

右　寂念

石上ふりぬる身にも時鳥あかぬ心はかはらさりけり

左たれにこはとをきて。よはになくらんなといへることゝ葉つかひおかしくみゆ。右は素性かふるき都の時鳥といへる述懐の歌にやとそみえたれと。作者にあひかなはゝさてもありなん。持とすへし。

十二番

左持　西遊

子規しのたの森のしのひねはきち行われそまつはきゝける

右　生西

とゝまらんところをしへよ時鳥尋ねゆきつゝ又もきくへく

左歌信太森のしのひねはなと。うためきてきこゆるに。きち行我そとなのれるほとや なたらかにしもきこえさらん。右のうたはたつねゆきつゝ又もきくへくもなと。あまりたしかなるやうにそきこゆれと。はしめよりたたことはにいひくたして理つよくみゆ。左はきちこはけれと萬葉集なとにもいへることなれは。信太森も打すきかたくて。これもまた持と申す。

十三番

左持　成仲

常よりもめつらしきかな時鳥いまきの山のけふの初聲

右　政平

うの花の垣ねにきなく子規さなから宿にいかてうつさん

左いまきのやまのはつ聲は。まことにめつらしくはきこゆるを。この山こそつねにきゝなれてもおほえ侍らね。萬葉集にいまきの岡とはよめる心ちすれは。山もありもやすらん。證歌やいるへからん。右卯花のかきねになくらん時鳥は。けにうつさまほしくもやとはおもふたまへるを。これはいかにそや。かの鹿のねなからといへるには。さすかにあらぬ心地やすらん。但歌さま持と申へき。

十四番

左持　心覺

子規しはしわれともかたらはて誰忍ひねをなきてすくらん

右　俊惠

今こそはいてちかふなれ時鳥しはしすそ野にまつへかり鳧

左歌我ともといへるほと。いと庶幾せられねと歌さまなたらかにみゆ。右はすかた詞おかしくはみゆるを。山なくてすそ野はかりやいかゝ。又いてちかふなれといへるほとも。みやこのいちなとやと人しけきこゝちやすらん。左はさせる事なし。右はすかたさまおかし。仍

爲ㇾ持。

一番　月

左持　　權中納言

なにゝかく更行月をおしむらんまつに心はつきにしものを

右　　小侍從

心すむ折からなれや月影の秋しもなにかひかりそふへき

左歌こゝろありておかしくは侍るか。いさよひゐまちのほと。心をつくしはてゝ。くまなくすめらん空をは。すくなくてみん事あいなくやあらん。右歌心すむおりからなれやといへるは。すかたも心もおかしくきこゆるを。秋しもなにかとよまれたる。すこしことのちにたかふらん。四序五行隨ㇾ節遷轉。秋は少陰之位也。月又陰之精也。かゝれは月の影もひかりをそへ。人の心もあはれをますへきおりにて侍る也。されは秋しもひかりのますことは。ことはりなりとそあらまほしき。されといつれも歌のさまおかし。仍爲ㇾ持。

二番

左持　　別當

あかなくの心つからに契り置て千世てふ秋の月をみてしか

右　　三河

天のはらくもらぬ月をなかむれは心もはるゝ物にそ有ける

左は多秋の月をちきらんなと心なくすへたり。右はすかたはおかしくみゆるを。心もはるゝといはんために。くもらぬ月をとをかれたる。はるゝくもらぬおなしことなれは。わけしるへきにもあらすやあらん。されと歌のさまなたらかにみゆれは。これも持とす。

三番

左持　　宰相中將

なかむれは雲井はるかにすみのほる心や月のかけにそふ覽

右　　辨

まつ人のこぬも思へはいかゝせん月をみすてゝ入もせましに

左け心すかたおかしくみゆるを。月影に心をそへたる事。近き歌合ともに見給へしにや。めなれたる心地そする。右は人をまつ心はおほくして。月をみることはすくなくやあらん。又持なとにこそ。

四番

左持　　左大辨

くまもなきみ空に秋の月すめは庭には冬の氷をそしく

右　　右京大夫

名にたかき姨捨山の月影も秋はことにそてりまさりける

左歌銀漢雲盡秋月澄々。沙庭霜凝冬水凛々。見二其文躰一已以詩篇。心匠(有イ)之至尤可ㇾ翫ㇾ之。右歌姨捨山の月も秋なりといへる猶詠ㇾ月歌已當二正理一。ことにめつらしきところなけれと歌合の歌とみえたり。仍爲ㇾ持畢。

五番

左持　　重家

いかてわれしはし此世になからへて月みる秋の數を重ねん

右　　頼政

月影にうつもれぬとや思ふらん雪にならへるこしの里人

左歌不ㇾ餝二文花一。偏全二義實一。ことにさる事ときこゆ。右うつもれぬとやおもふらんなといへるすかたいひなれて。心もおかしく侍るか。こしの里人やすこし荒凉なら

ん。越の國とこそ申めれ。その國にもさためて里はあらめと。をしこめてこしのさとゝいはん事はいかゝ。されとこれはあまりのことにもあらん。左は詞をかさらすして。月を思へる心ふかし。右おほつかなきところもあれとすかたおかしけれは。これも持とす。

六番

左勝　經盛

我心あくかれにけり清見かた波路はるかにてる月をみて

右　師光

秋のよは月の舟にやのりぬらんあかしのうらへゆく心かな

左右おなしほとにみゆるにとりて。左は波ちはるかにてる月をみてといへるすかたいときよけにみゆ。右はこれも歌さまはいとおかしくきこゆるを。月の舟にやのりぬらんとならは。あまのかはらなとやいますこしいはれたらん。あかしの浦まてはたゝよのつねの舟にても。いとやすくかよふへきにやとおほゆれは左のかちと申へし。

七番

左　公重

くもるとてこよひねたくは月影の更行空のかけをみましや

右勝　頼輔

終夜さえたる月の影みれは水なき庭も氷しにけり

左歌のかけをみましやと。優にしもあらすやきこゆらん。右歌はことにめつらしきところなけれとも。いひしりてきこゆ。右のかちとみえたり。

八番

左持　通能

秋毎にこよひはかりの影をみはめつらしけなき光ならまし

右　有房

月により山のはをのみかこつ哉まつもおしむもおなし心に

左こよひの月を賞する心はおかしくも侍るか。首句に影をみはといひて。卒章にひかりならましといへる。影と光といへる。おなしことを二ところにをかれたるやうにあらん。右は山のはをのみかこつかなゝといへる詞つかひおかしきさまにきこゆるを。末のおなし心にといへるほと。たらぬ心地すれは持と申へし。

九番

左持　季經

うき雲のたちやは出る照月のあたりを拂ふよはのけしきに

右　隆信

雲はらふ風にあはれをさきたてゝ空行月の影のさやけさ

左の月のあたり拂ふ事。ちかく杢頭俊頼の。吹風にあたりの雲をはらはせてひとりもあゆむ夜半の月哉といへる心にやあらん。右は風に哀をさきたてゝといへる。末はましてあはれもいかにとをしはからるゝを。たゝ影のさやけさとてはてたるや思はすなる心地すらん。右は末よはし。左はことふりたるにや。仍又爲レ持。

十番

左持　資隆

澄のほる月しやとれは難波潟みちくる汐もつらゝゐにけり

右　顯昭

終夜ゆきちかひてやすみぬらん心は空に月はこゝろに

左の歌難とすへき所なく。歌合の歌とみえたり。右歌心すかたいとおかし。但夜もすからゆきちかはんほと。しつかならぬ心地やすらん。そも〳〵此たひの歌に。おほくちかふといふことのみえ侍れは。もしこのころの歌のおかしきことはなとにやあらん。それをもしらすやかやうに申にやとあやしく侍る。下の句の心は空に月は心にといへるも。すこし心みたるゝ心ちそすれと。たかひにすめるほと。なをこれはおかしかれは心うるはし。よりてこれも持と申へし。

十一番

左持　頼保

こよひこそ雲のへたてはのけてけれみ空は月のすみ所とて

右　寂念

秋のよは光をそへて玉かつらかつらき山にすめる月影

左の雲のへたてとりはらひけん空のけしき。はれ〳〵しからんときこゆ。右のかつらき山の月は。よるともなんいへるふることゝおほえて。心もすみぬへく侍るを。これは光りをそへてといはんために。玉かつらとはをかれたるへしとはみゆれと。かつらき山の葛藟まつはれたらん樛木のしたの月にやと。いふせき心地するかたやあらん。但歌のすかたこそ。なたらかに侍めれ。又左はいかにも月あかゝらんとみゆれは。またもて持とす。

十二番

左勝　西遊

はつ〳〵に山端出る月みれはいかにすへきかいらん惜さを

右　生西

池水の底に紅葉のちりしけはやとれる月もあかき也けり

左の月の山のはいつるよりいかにすへきかいらんおしさをといへる。あまりさへきりてやあらん。空にすむまもなをあはれにもめてたくも侍れは。これは二山之間谷底にてみたる心地やすらん。右は池水の底にもみちの散しけはといへるまたいかゝ。水にちりしく木葉は池にも河にもうかふものなり。されは石なとの心ちやすらん。又月もあかきなりけりなともをろかにきこゆ。ふるき歌にはとき〳〵よめれと。なをかやうの詞はよく用意すへき事也。左は出る月をみんに。人ことのおほえんもなとかはとおほゆれは左かちとすへし。

十三番

左　成仲

たちかへり天の川波あらへはや流るゝ月のくまなかるらん

右勝　政平

いつもかく空に有明の月ならはあかて入夜のものは思はし

左歌なたらかにはみゆれと。あまの川なかるゝ月のなんといへる事。つねにいひなかしてふりにたる事にや。右歌は心ありておかしくも侍るか。月は四維をめくる事こそあれ。いつもされは空にこそはとやおほゆる。されと南閻浮の空にと思へるなるへし。又歌はさやうにこそわかち申事なれは。なとかはさもいはさらん。左めつらしけなけれは右のかちとみえたり。

十四番

左勝　心覚

さやけさはひるにかはらす秋の月哀そにたる物なかりける

右　　　　　　　　俊　恵

かきくもる折こそあらめ月影ははるゝにつけて物そ悲しき

左歌あはれそにたるなんといへる。すかたいひしりておかしくきこゆ。但さやけさはひるにかはらぬとよまれたる。ひるをさやけしとやは申すらん。このさやけしといふ詞。古語にいへるは神樂のはしめよりおこれる事とそみえたる。群神の歌舞し給ひしとき。あはれあなおもしろ あなさやけなんとうたひし詞也。されはひるもいひつへきやうにはきこゆれと。さやけとは竹のはや聲なりとそいへる。すゝしけなる心なるへし。それより月のひかりなとをさやけしと いひならはしきたる也。ひるは陽氣なるかゆへに。すさましく心ほそきけしきなとはなきにやあらん。右の歌はことに おほつかなきところなともみえす。心すかたこれも おかしくはみゆれと。左はすこしおほつかなき所はありなから。月やなをしつかにあきらか ならんとみゆるうへに。末の句なとよろしくみえ侍れは左かつ。

一番　　雪

左　　　　　　　權中納言

その原やふせやは雪に埋もれてありとはかりもみえぬ箒木

右勝　　　　　　小　侍　従

庭の面に降つむ雪の上をみてけさこそ人はまたれさりけれ

左歌ふせやの雪はゝきゝみえすなといへること。つねにみゆる事にやあらん。右歌心はめつらしからねと。降つむ雪のうへをみてなといへる すかたおかしくみゆ。右の勝と申へし。

二番

左持　　　　別　當

ますらおか埴生のこやのむね弱み幾重に成ぬ雪のうはふき

右　　　　三　河

雪ふれは草木もわかすをしなへてよにおもしろく花咲に鳬

左はにふのこやなと。さるかたにきこゆ。むねよはみやなたらかにしも きこえさらん。右よにおもしろくなといへる。まことにおもしろからんとは おほえ侍れと持なとにや。

三番

左持　　　　宰相中將

久かたの天津みそらや春ならん花ちろとのみみゆるしら雪

右　　　　　　辨

道もなく雪降つもる故鄕はもとこし駒もいかゝとそみる

左歌雲のあなたは春にやあるらんといへる 歌思ひ出られておかしく侍る。これは春ならんといへることの葉のいひおほせられぬやうにきこゆるにや。右歌さまはいときよけにみゆ。もとこしこまもいかゝとそ みるといへるそ心えす思ふたまふる。これは管仲か老馬の智もちひたりし事をいふ事也。それは齊桓公征二孤竹一時。雪にあひて道をうしなひて。軍衆みなしる事なかりしに。管仲老たる馬をはなちて。それにしたかひて かへりたりしなり。されは道もなく雪ふりたらん故鄕に。むねとも とこし駒はきたるへきや いかゝとは。おもふへくもなき事なり。これはたゝ道みえねとも故鄕は もとこし駒

にまかせてそくるといへる歌はかりにつきてよまれたるにこそ。その歌も本躰はこの事をよめる也。されは歌の程同料なり。これも持とすへし。

四番

左勝　　左大辨

いかにせん冬木もいまたこらなくに深くも雪の成まさる哉

右　　右京大夫

いかはかりさひしからまし雪深き大原山のけふりたゝすは

左右ともにさせるとかなくはみゆるに。左はふかくも雪のなといへるほといひしりて。いますこしはまさり侍なん。

五番

左持　　重家

しら雪の降ぬる時そ花さかぬ常葉の山は春とみえける

右　　頼政

雪つもるこしの山風吹ぬらしひはら松のはあらはれてみゆ

左歌おかしくは侍るめり。但ときはの山の雪を花にまかへてのちや春とみゆともいはん。みな白妙に雪ふれらん山を春とみん事さすかにいかゝ。またもみちせぬ常葉の山は吹風のなといへるは。いみしくきこゆるを。花さかぬときはの山はよろしからすきこゆるにや。右歌こしの山風吹ぬらしなといへるほと。いひなれてきこゆるを。檜原松の葉といへる。すこしかそへたてたる心地すらん。されとかゝるふるき姿もあるへし。左もいさゝかおほつかなきかたはあれと。歌のさまおかしけれは持と可レ申。

六番

左持　　經盛

住吉の濱松かえにふる雪をしらゆふかくと思ひけるかな

右　　師光

をさゝはら夜のまの雪に埋もれてゐなの山風音そともしき

左すみよしの松しらゆふかくなといへる詞。きゝなれたる心地すれとも。はま松かえにふる雪をなといへるすかたおかしくみゆ。右のゐなのさゝはら雪にうつもるゝなと。これもまたつねのことなるを。音そともしきなといへるほと心ありてきこゆれはこれも持とす。

七番

左持　　公重

霜かれの尾花も雪のふりつめはまねくかたなく埋れにけり

右　　頼輔

雪ふれるせたの長橋みわたせはたゝしら玉をしける也けり

左雪降つめらん尾花まことになにかはみえわかん。右の瀬田の長はしの雪。おかしくもみわたされなんとは思ふ給ふか。又玉のしき所思ひかけぬ心ちやすらん。庭なとこそつねの事なれ。されはほり江には玉しかましをなといへる事もあれ。いつこにもなとかはしかさらん。但歌のほとおなししなにみゆ。よりて又持と申へし。

八番

左勝　　通能

高砂の尾上も雪にうつもれて道絶ぬらん志賀の山こえ

右　　有房

ねぬる夜はむへさえけらし朝戸明てみれはみ雪の庭にみちたる

左歌すかた詞おかしくきこゆ。たゝし秋冬なともしかよりゆきかふものをは。しかの山越すとこそは申らめ。うちまかせては春の花さかりなとにこそは。志賀の山こえとて。いにしへもおかしき事にはしける。この事そいかゝとおほつかなく侍る。右歌偏效二萬葉之歌風一頗背二中古之妙躰一也。かゝるかたにてはさても侍りぬへけれと。左おほつかなき所ありなから。道たえぬらんなといへるすかた。みちたるの詞にはまさりてきこゆなり。

九番

左持　季経

呉竹はそこ共みえす雪ふれはたへすおれふす音はかりして

右　隆信

降そめて花かとみせしその梢かくるゝほとそ雪の日かすは

左くれ竹雪におるなといふ詞。つねにいひならはせる事なれと。呉竹はとさしてをかれたるほとやいかゝ。なよ竹なとこそさはあらめ。右その梢なといへるおかしきさまなるへし。末の句のかくるゝほとそといへるわたり。いかにいひおほせられねは。歌のほと持とや申へからん。

十番

左持　資隆

ちとせ迄春をもしらぬ松かえにあたなる花を雪そかしける

右　顕昭

ふまはおしふまてはゆかん方もなし如何はすへき野ちの初雪

左歌はよそのもみちをかせそかしけるといへる歌を。あたなる花をとひきなされたるこゝろおかしくも侍る。かみの句そいかにそやきこゆ。松をはもみちせす秋をしらすなといへるはよくきこゆ。花こそさかさらめ。ちとせまて春をしらすといはんいかゝ。春のはしめのはつねにも。小松をこそはひくことなれは。春をはしりてやあらん。されはかの寛平の御時きさいの宮の歌合にも。ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけりとこそ宗于朝臣よみて侍るめれ。はしめつかたのつかひに。ときはの山の雪にかやうの事侍るとよ。松をは猶いはひのものにてをかまほしくて。たひ／＼かたふき申になん。右の歌上句はちかくかやうの事ききし心地する。ひかおほえにや。末の句もことにすくれてきこえねと。左おほつかなき事ともあれは又持とすへし。

十一番

左勝　頼保

降雪に谷のかよひちまよふらし人こそみえねみやまへの里

右　寂念

さらぬたによもきか宿は寂しきに雪踏わけて誰かとふへき

左谷の通路迷ふらしなといへるすかたいとおかしくきこゆ。右も雪ふみわけてなといへるほとは。いひしりてなたらかにみゆれと。左かみしものすかたいひかなひてみゆ。左勝たるへし。

十二番

左勝　西遊

かきくらし越のかたみち降雪はいつはた山を思ひこそやれ

右　生西

よの常は雲の衣をこしにまくたかまの山は雪降にけり

左こしのかた道いつはた山なと。なつかしきさまにはきこえねと。またかゝる歌にてはさてもありなん。右はいとめつらしくこそみえ侍れ。但この山をは。よそにのみ見てやゝみなんかつらきやたかまの山の峯のしら雲なとのみこそきゝならひぬるを。これは雲の衣をこしにまくといへる。それよりかみおもひやられて。山のすかたもよろしからすやきこゆらん。かのまかねふくきひの中山帯にせるなといふやうなる事のあるにや。よもゆへなくはあらしを。え見をよはぬことにて。おとろきおもふたまへるこそいとくちおし。されとこしにまくとは猶すかたもいかゝ。いつはた山を勝と申へし。

十三番

左勝　成仲

雪ふれは草のとさしも埋もれぬいかゝはすへきあくる春迄

右　政平

雲井まて降雪なれは名にたかきことはりなりや越の白山

左右ともになたらかにみゆるにとりて。左の草のとさしあけん春まてなといへる心おかしく聞ゆ。右のこしのしら山も。まことに雪たかくきこゆるを。降雪なれはことはりなりやといへる。おなしき事にやともみゆれは左かちと申へし。

十四番

左　心覺

ふる雪にまきの杣山跡たえてをのゝひゝきもけさは聞えす

右勝　俊惠

雪ふれはきゝの梢も咲そむる枝より外のはなもちりけり

左歌さまはいときよけにみゆるを。まきのそま山には雪ふりをのゝ音きこえすなといへること。つねにきこゆる事にや。右はきゝの梢にさきそむろ枝とつゝける程そいかにそや。木々まかへらるゝ心ちすれと。枝より外のなといへるすかたいとおかしけれは以レ右爲レ勝。

戀

一番

左勝　權中納言

鹽たるゝいせおの蜑や我ならんさらはみるめをかる由もかな

右　小侍從

夢にさへみし面影のたちそひてぬるにもやすむ心地社すれ

左歌いせをのあまやわれならんとをきて。さらはみるめをなんといへるすかた。いとおかしくも侍るかな。右歌よるの衣をかへし曉の枕をそはたてゝも。夢のうちになりぬれはあはれともつらしともみん事こそつねの事なれ。夢のうちにさへ俤のたちそはん事いかゝおほえ侍れ。左のかちとすへし。

二番

左勝　別當

あちきなやあはぬつらさを種として劒の枝のみとや成へき

右　三河

數ならぬわれから人もあひみねは戀しき度に身をそ恨むる

右歌はもにすむ虫のなといへるよりは。われから人もあひみねはなといへるよはくきこゆれは。左はつよからんとそ思ふ給へられ侍る。

三番

左勝　宰相中將

つれもなき人の心はうきぬなは苦しきまてそ思ひみたるゝ

右　辨

かくはかりつれなき人に昔なととくる契りを結はさりけん

左人の心はうきぬなはとつゝけるほとこそおかしくみえ侍れ。末のくるしきまてといへるほとや。かたつかたの心つよからぬ心すらん。右はつれなき人にむかしなとゝいへるほとおかしくきこゆるを。末のとくる契りやいかなるちきりにかとおほゆらん。よりて左の勝とす。

四番

左　左大辨

いひしらぬ戀は君社もたりけれみそめしよりそかくは焦るゝ

右勝　右京大夫

戀しさはその色としもなき物をなと身にしみて思ふなる覽

左歌めつらしきさまにはみえ侍るを。なかの五文字そよろしからすや。右歌なたらかにきこゆ。おはりの句そ今すこしおもふへくやとみえたれと。ことなるとかなけれは右の勝にこそ。

五番

左　重家

夜とゝもにくたく心のいかなれは戀より外にちらぬなる覽

右勝　頼政

くれなゐの涙にそまる戀衣かへせは袖そうらみなりける

左心詞おかしく侍る。和泉式部か歌に。君こふる心はちらぬくたくれとひとつもうせぬものにそありけるといへる心にそかよへる。右かへせは袖そなといへるすかたおかしくみゆるに。涙にそまる戀衣なとや優なる詞ともきこえさらん。されと萬葉集にも。戀衣きなれの山になとよみたるにや。かゝるかたにて歌のさまもこれはめつらしきにつきて右勝と申へし。

六番

左　經盛

あふ事のこの世ならねはいとゝしくしなん命も惜からぬ哉

右勝　師光

戀しとも又つらしとも思ひやる心いつれかさきにたつらん

左歌あふことのこの世ならねはといひて。しなん命なと侍る。戀の心もふかくさることゝきこゆ。右歌は又すかた詞いとおかしくて。かた〳〵思ひわつらはれ侍れと。なをまたつらしとも思ひやるといへるけしき。あはれにもみえ侍れは以右爲勝。

七番

左勝　公重

君かすむ宿のうへきにたなひかん戀しなんまに雲となりなは

右　頼輔

厭ふにはいとゝ思ひそまさりける戀はつらさにはゆる也鳬

左心ふかきやうにみえ侍り。戀しなんまにといへるほとや。たへぬ心地やすらん。右はことなることなけれと。やすらかにてゆうにきこゆるか。末のはゆるなりけりといへる詞。おもふへくやとみえ侍るに。またまさりけるとおなしことあれは。いかにも左の勝にこそ。

八番

左勝　通能

錦木もさてこそよそに朽にしか戀すてふなのなそやたつ覽

右　有房

をのつからあふにもかふと思はすは戀には身をもなけつへき哉

左歌錦木はむなしく朽てやみにけんに。戀すてふ名のなそやたつらんといへるすかた詞。いとおかしくこそきこえ侍れ。右歌も心はあしくもあらぬを。あふにやかふといへるほと。もしのたらぬにやあらん。左の勝とみえたり。

九番

左　季經

いかなれは戀をはわれにならはして逢みることを教へさる覽

右勝　隆信

我ゆへの涙とよそにこれをみはあはれなるへき袖のうへ哉

左ことのいはれおかしくもみゆるを。あひみる事をゝしへさるらん。おさなきやうにやきこゆらん。右歌よろしく侍るにや。仍爲レ勝。

十番

左　資隆

相坂の關をゆるさて年ふれは思ふ心もゆかすそありける

右勝　顯昭

かはり行姿をのみやつゝまゝし涙にくつる袖なかりせは

左歌さまはおかしくも侍るか。心ゆかすおほえんはかりは戀の心すくなくやあらん。せきをゆるさてといへる詞も。かの淸少納言は函谷關の昔のことによせて。よに逢坂の關はゆるさしとよめる。ことにおかしくきこゆるにや。右歌はいかにそ。かたつかたの心いひおほせぬやらにそきこゆれと。すかたをのみやつゝまゝしなといへる詞つゝきいとおかしくきこゆれは右の勝と申へし。

十一番

左持　頼保

戀かはにしつむにつけて思ふ哉我身も石となるにやある覽

右　寂念

岩に生る松に心はかくれともかひなき戀に年そへにける

左戀河にしつむ我身も石なといへる。ふかくかたき義なるへし。但此石になる事は。もし望夫石と申ことにやあらん。そのかみにおろ〳〵み侍りしは。武昌北山上有二望夫石一。其狀如レ金。むかし貞婦ありけり。その男遠き國へ行けり。わかれをおしみて。かの山のうへにたてりて夫を見をくりけるか。化してたてる石となりにけり。されは戀かはにしつむにはおもひ出へしともおほえねと。たゝ石になるといふ計に侍るめり。右まつに心はかくれともなといへる。すかたよろしくきこゆるを。末の句やこともなく侍らん。左の河にしつむ石。右岩におふる松。堅柔雖レ異勝劣已同。仍爲レ持歟。

十二番

左　西遊

我戀はかけおふ鷹にあらね共あふことぬるき頼みをそする

右勝　生西

老ぬれは錦木をたにえそたてぬ千束こるへきよはひならねは

左の歌かけおふ鷹あふことぬるきなといへるけしき。たゝならておかしく侍る。右としのほと思ひしりなか

ら。なけきなやめろけしきあはれにも侍る。ちかくかやうなる事きゝし心地すれとひかおほえにや侍るへし。すかたなとおかしくみえ侍れは右勝とすへし。

十三番

左　成仲

思ひかねなくさむやとて芹つめは田中の井とに袖そ濡ぬる

右勝　政平

君故に世にあらはやと思ふ哉しにてあふへき道をしらねは

左の歌のさまは。おかしく思ひよれることゝはみゆるを。たなかのゐとには。なきつむところとこそきゝならひて侍れ。またちかく田中の井とに袖ぬれてあふ事なきのなといへる歌きこえし心地するを。これは芹つめはといへる。なきにはかはりたれと歌はふるくや。右末の句なとゆうにきこゆ。かみのよにあらはやさいへるいかゝならん。されと左おほつかなきところあれは右の勝とみえたり。

十四番

左持　心覺

いさなみの神ならね共戀すれは夜晝わかすねをのみそなく

右　俊恵

きぬ／＼になるへき人もなき物を明ぬと鳥のたれにつく覽

左歌事及二日本紀一てわつらはしくは侍るめれと。よるひるねをのみそなくと。いはんためはかりは。なにことによせてもおほくありなんを。やんことなき神代の御事。よみあらはさすともや侍るらん。右歌すかた詞おかしくはきこゆるを。これはまたひとりねのあかつき鳥の音きけるはかりにては。戀の心やすくなからん。鳥きこゆれときぬ／＼ならすして。つまなとを思ひいてん事おほえ侍る。このあけぬと鳥なといへるけしき。ふるく戀の道になれにける人にやとあはれに歌のさまもおかしくこそおほえ侍れと。左もいさなみのみことなと侍れは。いかゝをろかにはとてなを持とす。

太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合

仁安二年八月日

題

草花　鹿　月　紅葉　戀

歌人

刑部卿藤原重家朝臣　太皇太后宮亮平經盛朝臣
前少將藤原公重朝臣　右近少將源通能朝臣
前中務少輔藤原季經朝臣　太宮前大進藤原清輔朝臣
皇太后宮亮藤原賴輔朝臣　前兵庫頭源賴政朝臣
左少辨藤原爲親　前少納言藤原資隆
左近權少將源朝臣有房　右京權大夫源朝臣師光
宮內權少輔藤原朝臣仲行　中務少輔藤原朝臣定長
日吉禰宜祝部成仲宿禰　片岡禰宜賀茂政平
左京大夫入道敎長　右馬權頭入道實淸
師阿闍梨心覺　大進公俊惠
亮公顯昭　登蓮
三河大殿女房　小侍從大宮女房

判者

太皇太后宮前大進藤原清輔朝臣

一番　草花

左持　刑部卿藤原重家朝臣

色とこそ萩か花すり思ひしか香さへ袂にうつりぬる哉

右　前少納言藤原資隆

秋の野にいつれともなき花なれと招く薄そまつめにはたつ

左右歌み給ふるに。をの／＼おもふところなきにあらす。はた左歌のまへの句。右歌のむすひ句。ともに心ゆかす侍れは。みしかきおもひはかりひたりみきにまとひて。なましひに持に定畢。

二番

左勝　大宮亮經盛朝臣

花すゝきたれともわかす招くにも心をとむる我やなになり

右　前少將藤原公重朝臣

あたにをく夜のまの露にむすほゝれて思ひしほるゝ女郎花哉

このつかひ又ひとしきほとに侍るを。右はおもひしほるゝといふこと葉おほつかなし。させる證なくは左勝にそ侍るめれ。

三番

左　右近少將源通能朝臣

女郎花露もわきてやをきつらんしほれ姿のあてにもある哉

右勝　小侍從

もゝ草の花もあたにや思ふらん一色ならすうつすこゝろを

左露もわきてやをきつらんといひて。色のうすくこともそいはまほしき。しほれすかたの かたにはかなひてもきこえす。またあてにみゆなんと。ゆうにもあらすや。右心なきにもあらねは勝もしなん。

四番

左　前中務少輔藤原季經朝臣

行人を野への尾花にまねかせて色めきたてる娘部志かな

右勝　左少辨藤原爲親

吹おりそ過る人をはまねきけるかせや尾花の心なるらん

左ことなる事みえす。右もとの三句にて つゝけにきこ
ゆれは。心ありてみゆれは勝とも。

五番

左　皇太后宮亮藤原頼輔朝臣
秋の野は花のいろ〳〵多かれと萩のにしきにしく物そなき
右勝　前兵庫頭源頼政朝臣
ほりはてぬ花こそあらめ秋の野に心をさへものこしつる哉
左ふるめきてみゆれと あしくもあらす。右ほりしそ心
ゆかねとさしてはいかゝ。心はへいと おかしけれは勝
とすへし。

六番

左持　右京權大夫源師光
むつ言もいはまほしきを女郎花くちなし色のつらくも有哉
右　日吉禰宜祝部成仲
娘部志花の心はしらねとも名をきくにこそおらまほしけれ
左おかしく侍り。但くちなし色ならぬ花はものは申て
んや。おほかたは花をはものいはすとこそ いひならは
したれ。されとふかきとかにはあらねは。おかしきにゆ
つりつへし。右うるはしくよまれて侍り。名をきくにこ
そなといへるわたり。思ふ所しあるやうに きこゆれは
勝まけ申かたし。

七番

左勝　右近少將源有房
はきか花わけゆく程は故郷へかへらぬ人もにしきをそきる
右　中務少輔定長
聲たてゝなく虫よりも娘部志いはぬ色こそ身にはしみけれ
左よくよまれて侍り。右いはぬ色とはいかなる いろに
か。くちなし色とおもひなされたるにや。心えかたく
や。いかにも左勝に侍るめり。

八番

左持　亮　公
うつらなく遠里をのゝ小萩はら心なき身もすきうかりけり
右　登　蓮
秋の野の花に心をそめしよりくさかやひめも哀れとそ思ふ
左こはきはらをよまは 宮城野なとそいはまほしき。右
くさかやひめは 日本紀に侍る事にや。この紀にはいさ
なきのみこと いさなみのみことみとのまくはひして。
まつ國土あきつしまをうむへきに。諸國山河海をうむ。
草木をうむと侍る。いはゆるきのおやく〳〵のち。くさの
おやかやの姫なり。歌の心はたかはぬ くさかや姫とつ
つきたるおほつかなし。かゝることは本文をたかへす
こそよむへけれ。日本紀竟宴歌にも。としことのはるや
むかしのかやの姫とこそよめ。たゝしかやうの事は。た
しかにみる所ありてそ よまれたらんと おもひ侍れは。
おとりまさり申かたし。

九番

左勝　片岡禰宜賀茂政平
女郎花いつれの秋かみえさりし野原の霧にたちなかくれそ
右　宮内權少輔藤原伊行
心から夜のまの露にしほたれてあさしめりする 女郎花哉
左いと興ありてよまれ侍り。右露にしほたれん 事もい
かゝ。又いせおのあまなとおほゆるうちに。させる心も

なければまくへきにや。

十番

左勝　　阿闍梨心覺

いろ〳〵に心そうつる秋の野は露もあたなる花しなければ

右　　右馬權頭入道實清

花すゝき風のけしきにしたかひて心おこらぬ人なまねきそ

左心も詞も右にはよみまして侍めり。

十一番

左勝　　大進公

我こそは野へをは宿に移しつれたかさそひこし虫のねそこは

右　　三河

秋の野の千種の花のいろ〳〵を心ひとつにそめてこそみれ

左むしをいとひたるやうにきこゆるそほいなけれと。またおかしくおもふあまりともきゝなしてん。右元永二年内大臣家歌合に。兼昌歌にや。秋くれは千種に匂ふ花の色の心ひとつにいかてしむらんと侍るたかはねは左勝にや。

十二番

左　　太皇太后宮大進藤原清輔朝臣

我宿も殘る花なくうへつれと野へのけしきは猶そゆかしき

右　　左京大夫入道教長

秋はきの枝もとをゝにをく露のはらはゝあやな花やちり南

右古今集に。おりてみはおちそしぬへき秋はきのえたもとをゝにをけるしら露といふ歌にや似て侍らん。

一番　鹿

左持　　重家朝臣

小男鹿も秋をはなにと思へはやときしも聲をたてゝなく覽

右　　經盛朝臣

嶺になく鹿の音ちかくきこゆ也もみち吹おろす夜半の嵐に

左さきしも聲をなと侍るわたりいひしりてきこゆ。右もゝみち吹おろすなと歌めきたり。そも〳〵傍題はよまぬ事なりとや申人もあれと。天德花山歌合にも侍るめれは。ひかことにはあらしとて持にさため侍りぬ。

二番

左勝　　通能朝臣

吹風も身にしむ秋の夕くれにあはれをそふる鹿の聲かな

右　　爲親

妻こふるさ夜ふけかたの鹿のねに聲うちそへて秋風そふく

左右おなしさまに侍るに。右のつまこふるさ夜ふけかた。詞上下したるやうなる。さよふけかたにつまこふるとそいはまほしき。左はかゝるところのなければ勝もしなん。

三番

左勝　　頼輔朝臣

たれよりも秋のあはれやまさる覽聲にたてゝは鹿そ鳴なる

右　　亮公

春夏はなにゝ心をなくさめて秋のみ鹿の妻をこふらん

左あることくきこゆ。おかしく侍。右もあしくもなきを。有綱朝臣家歌合にや。秋しも鹿のつまをこふらんとよめる歌侍るやうにおほゆれは。末二句は猶はゝかる事也。左勝とすへし。

四番

左　　　　定　長

小男鹿のなくねはよそにきゝつれと涙は袖の物にそ有ける

右勝　　　季經朝臣

山たかみおろす嵐やよはるらんかすかになりぬ小男鹿の聲

左は俊頼朝臣の歌に。小男鹿のなくねは野へにきこゆれと涙は床のものにそありける。右のかたは心なきにあらされは可レ爲レ勝。

五番

左勝　　　公重朝臣

きく人の袖もぬれけり秋の野の露わけてなく小男鹿の聲

右　　　清輔朝臣

鹿のねの吹くる方にきこゆるは聲やをのかたちとなるらん

左鹿のねはあはれとはうちきくも。袖ぬるゝまてはいかゝなるへくも。かくよめる歌こそおほえね。このさきに申つる俊頼の歌こそ涙とよまれて侍るめれと。歌合なとには猶跡なきことはいかゝ。おほかた歌めきて侍るめり。右のあらしやをのかたちとなるらんと侍ること。おもひかけすおとろき思ひ給ふれは。みつからの歌に侍りけり。かゝるやうになきにはあられと。歌合の歌はよみやうありとは。かやうの事也。左尤勝侍なん。

六番

左　　　　資　隆

草枯のふしとさひしくなり行は鹿こそ妻もこひしかるらん

右勝　　　登　蓮

小男鹿の聲しきる也みよしのゝいさかた山に妻やこもれる

右いさかたやまきゝつかすや。又何のゆへともみえす。大かたはよみしりたるやうなり。左草かれに鹿は妻をこふるやうにきこゆ。草枯とは九十月をや申すらん。期たかひてや。又題をそへてよめる心えす。猶歌合なとにはかくはよむましき也。されは野宮歌合に。女郎花をそへてよめるは。やまとなにいひにくきことをこそかくよめと難したるやうにおほえ侍れ。歌はなまめかしくみゆれと右勝にて侍るへきにや。

七番

左持　　　頼政朝臣

草かくれみえぬ男鹿も妻こふる聲をはえこそ忍はさりけれ

右　　　成　仲

秋の野の花の袂にをく露や妻よふ鹿の涙なるらん

左はおもしろく右はやさしく。とり〳〵にみ侍るに。右歌はおなし文字やおほく侍るらん。これは遍身病とて和歌作式にせいしたれとも。このやまひある歌おりおりの歌合になきにあらす。かつはこのたひあまた侍れは申あふへくもなきうちに。かやうの事は歌のさまによるにやとみ侍れは。この歌まけにさためかたけれは猶可レ爲レ持。

八番

左　　　師　光

山風にしほるゝ野への草むらのねや寒しとや鹿のなくらん

右勝　　　實清入道

あはれとはねらふさつおも思ふらん男鹿妻とふ秋の夕暮

左首尾おもへるところもなきやうなり。中にも鹿のふしとはつねのことなり。ねやこそきゝつかす侍れ。右ね

らふさつおそにくさけにきこゆれと。あしくもあらねは可ﾚ爲ﾚ勝。

九番

左持　伊行

秋萩を草の枕にむすひてや妻戀かねて鹿のふすらん

右　有房

妻こふる秋にしなれは小男鹿の床の山とてうちもふされし

左あしくも侍らぬを伊家弁の歌にや。秋はきを草の枕にむすふ夜はちかくも鹿の聲をきくかなといふ歌そ侍れと。歌のふしにもあらす。心もことなるうちに右の歌よろしからねは。とかくゆつろひて持にて侍りなん。

十番

左持　三河

終夜妻こふるまに小男鹿のめさへあはてやなきあかすらん

右　小侍従

ひとりのみみねの男鹿の鳴聲にあはれふきそふ風の音哉

左めさへあはすといふ事つねのふしなり。右あはれふきそふ。うちそふなとこそいへ。されとふかきことならねは。たゝ持なとにて侍るへし。

十一番

左　政平朝臣

小男鹿の空にあはれときこゆるは山のたかれになけは也鳧

右勝　心覺

ゆふまくれ霧のまかきのさひしさに男鹿なく也秋の山さと

左そらにあはれときこゆとよめるいかなる心にか。鹿のなくなんその事としらねと空にあはれなるとにや。もししからは鹿はつまこひてなくことゝは人しれることにてはあらすや。霧のまかきになきけん鹿こそ。いますこしなさけありてきこゆれ。

十二番

左持　大進公

嵐ふく眞葛か原に鳴鹿はうらみてのみや妻をこふらん

右　左京大夫入道

山里は妻こひかぬる鹿のねにさもあらぬ我もねられさり鳧

左まくすか原にうらふれけん鹿の音も。右のやま里にいねかてにきゝける聲も。ともにものさひしくおもひやられて。いつれもあはれおとるへしともきこえねは。おもひわきかたきことにてそ。

一番　月

左持　重家朝臣

月きよみなかむる人の心さへ雲井にすめる秋の夜はかな

右　頼政

のこるへき垣ねの雪はまつ消てほかはつもるとみゆる月哉

左よのつねのことに侍めり。秋のよはかなといへるわたりもたよりなき心地す。右かきねの雪のまつきゆらんはいかなることにか。もしかきねのかけにて。月のひかりのみえぬ心にや。めつらしさすきてこそきこえ侍れ。ほかはつもるなとも。左の秋のよはかなといへるにまさりてもみえねは。いつれとも申かたし。

二番

左勝　經盛朝臣

松浦舟明石の鹽にこきとめよこよひの月はこゝにてなみん

右　　登蓮

月影のさえゆくまゝにをく霜と思ひもあへす鐘やなるらん

右豐山の鐘の心にや。それは霜降時自鳴とかや申める。されは秋月似ニ夜霜一云詩にも。歎ニ豐嶺鐘聲一否とそつくられたる。これはわか月光を霜とみておもふとなり。かねは霜に和してこそなれ。心なきものなれは霜をみてならんとおもひあへすや。なるらんといはん事はかなはすや。左五もしそ心ゆかれとも。ことはり侍めれは勝なんとそおもひ侍る。

三番

左持　　参河

おきあかし隈なき月をなかむれは野原の草の露もかくれす

右　　公重朝臣

月をみて心をこよひつくす哉くまなき空はみえもこそすれ

左おきあかしなかむれは我宿にやと思ふに。末に野原の露と侍るいかゝ。月はかならす野へにいてゝみることにもあらす。旅のよしなとをいひてやかくよむへからん。右あしくも侍らぬに。末の七もしいとくちおしけれは持なとや。

四番

左勝　　俊惠

月清みかひの白ねをなかむれはいつかは雪に空ははれける

右　　通能朝臣

くまもなき月みる程の心にてやかてこのよをすくしてし哉

左心さしうちにありて詞ほかにあらはれぬやうなり。月光を雪にまかへは雪なき所にそよまゝほしき。かひのしらねをとあれは。かの雪をよめるやうにてたしかならす。又姨捨山をきてかひのしらねの月をよめるも。野宮歌合むけにたゝありのまゝにみゆれは。なを左や勝侍るへからん。

五番

左　　季經朝臣

さやけさに又こと〳〵もわすられてふた心なく月を社みれ

右勝　　實清入道

いかて猶秋しも月のかゝりけんみる程あらし夏のよならは

左すかたたくみにて又させる心なけれは右の勝と申へし。

六番

左　　爲親

しほ風の雲ふきはらふ秋のよは月すみわたる天の橋立

右勝　　政平朝臣

あかさりし花にたとへて詠むれは月は心にすみまさりける

左風はいつことわくへきならねと。しほかせの雲ふきはらふと侍る。ことたかひたるやうなり。右たとふと侍ること葉そ心ゆかれと。させるとかのあらねは可レ爲レ勝にや。

七番

左持　　小侍從

天津星ありともみえぬ秋のよの月はすゝしき光なりけり

右　　師光

さよふくる空にきえゆく浮雲のなこりもみえぬ秋の夜の月

左□樹病あるうへに。いま一句そひて。三句まては初の

字おなし。これはふるき歌合にも申たる事也。右又夜もしふたつあれは。まささまの病なれとも。左歌心えられねはいつれとも申かたし。

八番

左勝　定長

月影をまつと惜むと秋のよはふたゝひ山のはこそつらけれ

右　伊行

吹はらふ月のあたりの雲みれは春はいとひし風そうれしき

右月のあたりの雲ふきはらふとそいふへき。詞上下してきこゆ。大かたも至意なきやうなり。左ふるき心に侍れは勝もしなん。

九番

左　有房

影きよく月をよこきる浮雲は秋の名をさへけかしつる哉

右勝　成仲宿禰

てる月を沼のうへにてみる時そますみのかゝみいる心地する

左秋の名をさへけかすと侍る いかにそやきこゆ。右留僕鏡の心にや。沼のうへの月。まことに一片秋澤水にことならす侍けんかし。右勝ぬへし。

十番

左　清輔朝臣

をくら山下行水のさゝれ石も數かくれなくてらす月かけ

右勝　心覺

銀河とはたる月の影すみてにこれるよともみえぬ空哉

左させる事なし右さもありなん。なとかゝたさらむ。

十一番

左勝　顯昭

おしみかねあかぬなこりの苦しきに入迄はみし秋のよの月

右　頼輔朝臣

月影のかたふく方にさしいれは宿のうちにも霜そをきける

左いりなんなこりくるしかるへしとて。月をみはてゝいてんも。あまりうらかへりたる。右かたふく月やとにいるへしといふ事荒涼なり。宿のありやうにそよるへき。詞つかひしらぬやうなれは左勝とすへし。

十二番

左持　資隆

しら雲な心なしともいひはてし秋の月をはくらさゝりけり

右　大夫入道

わきてしもおしまさらまし照月の秋より後も限なかりせは

左大かた秋の月に雲のかゝらぬやうにきこゆ。古今序に喜撰歌をいふに。望ニ秋月ー如レ遇ニ曉雲ーとこそ書て侍れ。右秋より後はみな月のくらきやうにきこゆ。月は冬こそみるへかりけれなともいへるものを。但ともに毛をふくきすなり。おなしほとのことゝそみ侍る。

紅葉

一番

左勝　重家朝臣

山姫やきてふる郷へかへるらんにしきとみゆる衣手のもり

右　俊恵

色々のきゝのにしきを立田川ひとつはたにもおりなかす哉

左山姫はつねにいへる物にこそ。いつこか故郷に侍るらん。右きゝのにしきもちらしてそ川にもおりなかすへきふるくも紅葉みたれてなかるめりといひてより。

わたらはにしき中や絶なんともよみたれ。又立田川ひとつはたとあるもいかゝ。猶はたによりたる所名もしはこと葉につきてそいふへきを。さらてたつ田川ひとつはたとよめる。心にまかせて侍らん。古歌にもはたものなしのにしきなりけりなとよめる。歌からはおかしけれと。さりかたきことゝもなれは猶左勝とや申へからん。

二番

左勝　經盛朝臣

秋霧のたえまにみゆるもみちはやたちのこしたる錦なる覧

右　賴政朝臣

もみちゝる立田の山はえそ越ぬ錦をふまん道をしらねは

右落花落葉なとに。なかころ又ちかくの人もあまたゝひよめることなり。左はけふあることゝくきこゆ。歌からもきよけなれは勝とすへし。

三番

左　顯昭

くれなゐのこ染の色とみえつるややしほの岡の紅葉なる覧

右勝　資隆

初時雨ふりにし里をきてみれはみかきか原は紅葉しにけり

左くれなゐのこそめの色に。やしほの岡をとりあはせられたる。たくみにはみえ侍れと。右はいますこしすかたもうるはしく。ものさひしくよみすまして。むかしの歌をみる心地おはすれは。勝侍らんとそおもひ侍る。

四番

左勝　賴輔朝臣

色ふかきやしほの岡のもみち葉に心をさへもそめてける哉

右　通能朝臣

しくれつゝ秋こそふかく成にけれ色そめわたるやのゝ神山

左めつらしからねと。なたらかにくたりてきこゆ。右萬葉集は。かくはとらぬ事とこそきゝたまへをきて侍れは。色そめわたるやのゝ神山なと。おひ／＼しきさまなれは可レ爲二左勝一。

五番

左　爲親

あさ日山嶺の紅葉をみわたせはよもの木するゑにてり増り鳬

右勝　師光

紅のやしほの色にめかれすなおなしはもりの神といふとも

左させることなく。こと葉つかひなともうつくし。右はもりのかみは荒涼木にはよまぬこと也。かしは木によむへしなとそ。ものしれりとおほしき人は申めれとも。よろつのものには。それをまもる神あれは。葉もりの神とは樹神を申にや とこそおほゆれは。いつれの木をかまもらさるへき。されは此歌もあしからす。終のいふとも侍るそたしかにきこゆれは。かちなとにやみえ侍る。

六番

左勝　公重朝臣

山姫はもみちのにしきをりてけりたちなやつしそ嶺の朝霧

右　政平朝臣

しくれには紅葉の色そ増りけるまたかき曇る空はいとはし

右しくるゝ空は おかしくこそあれ。いとはるへきことかは。もみちの色まさりけり。猶たゝいまさとりけるも

ことたつらしくきこゆ。左あしくもあらぬを二韵字同。これは聲韵病と申にや。また天德歌合にはとかめたる歌もあり。とかめぬ歌もあり。うちきくにみゝにたゝぬはさてもあるにや。この歌くせともきかぬに合て。右歌よからねは左勝にてはへるへし。

七番

左持　定長

いろ〳〵にそむるもみちに立田姫心の程のみえもするかな

右　季經朝臣

いろ〳〵にとりそめてけり立田姫はしむらこなる衣手の森

左ことなる事なし。末もふるめきてや。右又俳諧歌のていに侍るめれは。いつれとも申かたし。

八番

左持　伊行

もみち葉はくれなゐ深く成ゆけとひとりさめたる松の色哉

右　小侍從

柞原しくるゝまゝに常盤木のそれなりけるも今そみえける

左右ともにもみちをはをきて。ときは木をよまれたれは題のほいなしや。右はすかたはまさりたれと。むけにもみちみえす。又あやしく。つゐにもみちぬ松もなけれといふ歌もおもひいてらるれは。たゝ持にて侍るへし。

九番

左持　成仲

秋ことに葉守の神のつらき哉もみちを風にまかすと思へは

右　登蓮

くれなゐに梢の色のかはるより風の音さへあらすなる哉

左さもありなん。右も聲□林風といふ詩の心ならは。もみつるよりやはちり侍らんとそおほゆれと。また夏の梢の葉をさかりなるを。ともにはにすもあらんとおもひなせは。とかなくて持にてもありぬへし。

十番

左勝　有房

一たひは風に散にしもみち葉をとなせの瀧の猶おとす哉

右　實淸入道

色ふかき紅葉うつらぬところこそ立田の川のあさせ也けれ

左おかしくみえ侍り。大井逍遙なとによまれたらましかは。いますこしよからまし。右もみちうつらぬところをあさせとたのまん。あやまちしつへし。おほかたもおとりて侍らん。

十一番

左　淸輔

おほつかないつれうらこの山ならん皆紅にみゆるもみちは

右勝　三河

大井川岸のもみち葉ちるおりは波にたゝする錦とそみる

左いかなることのあるへきそ　ときくほとに。すゑいとこひさめなり。右へちに難もみえねは勝へし。

十二番

左持　心覺

柞原しくれにそむるくれなゐは梢の風やふきてほすらん

右　敎長入道

もみち葉は入日の影のさしそひてゆふ紅の色そことなる

左ころもにしきなといひてそ風にもふかせまほしき。

右めつらしきことはゝなけれと。めにたつところもみえねは持なとにても侍りなん。

一番　戀

左勝　重家朝臣

今は早昔かたりになりなましつらきにたへぬ我身なりせは

右　師光

戀しさもうき身の程につゝまれはいつ迄ありし心なるらん

右おもひいれたる事もなく。左あることゝきこえ侍り。上下句にてみし心ちそし侍る。すゑは後拾遺に思ひ出てとふことの葉をたれみましうきにたへせぬ命なりせはといふ歌のおほゆるにや。おほむねはにたれとも。詞はたかひたれは。いかなるへしともおほえ侍らす。この歌ににすは左勝なん。人々さため給ふへし。

二番

左　公重朝臣

あちきなく思ひによはる我身哉人のけしきは心つよきに

右勝　爲親

思ひわひなくさめかたき夕暮はそなたの空に詠められける

左思ひによはる又心つよきになといへるよくもあらす。右歌合の歌ともおほえねと。いとひくるしくおもひやられ侍れは勝と申へし。

三番

左　有房

戀しなん身は惜まれて妹か住同しよにたになからんそうき

右勝　季經朝臣

君にまた思ひをかけん人もかなたれにもつらき心かとみん

左こゝろあるににたれと。すかたよろしからす。右よしなきねかひことかなと。あやにくにおほゆれと。歌からはまさりても侍らん。

四番

左　定長

後の世もしらぬ契りを頼みつゝあらまし事に身をやうつさん

右勝　通能朝臣

あすからは七瀬の淀にゐる鳥のうきみにそへる戀そわりなき

左あふにみをかふといふ心にや。それはいかなることなれはかくはよめるにか。あらましことに身をかふらんもおほつかなし。今のちの世にあはんと命をすてよとちきる人のありけるにや。さらはあらまほしき歌なり。右心えぬ事はなけれは。勝侍ぬへし。

五番

左勝　俊惠

あふに祉かへもえさらぬ我命なとやたゝさへ思ひやられぬ

右　清輔朝臣

我戀はあまのたく火の下もえてまたほのめかす方もなき哉

左詞つゝきそよからねとも心は侍るめり。

六番

左　資隆

戀しなはもえん煙を人はみよ君かかたにそ思ひなひかん

右勝　歌欠

左さてもありなん。つねにいひなれたる事にてや侍らん。右すかたなひやかなる中に戀の心さしもせちにみ

ゆれは勝侍りなんかし。

七番　左勝　顯昭

しるへなき戀路に深く入ぬれは思ひかへるもかなはさり鬼

右　賴政朝臣

命をそ今は惜まぬ限りそときかはなさけにもしやとふとて

左しるへなしとはいかに。思ひのみこそしるへなりけれとこそふるくもよみたれ。すゑに思ひかへるとあるも。まことに心さしのなかりけるにやときこゆ。うしとてもさらにおもひそかへされぬなといへるこそ戀のほいにては侍れ。右心さしはせちにみえ侍れと。すゑの七文字心ゆかねは。うたからにつきて猶左勝へきにや。

八番　左　心覺

さもあらはあれ涙に袖は朽ぬ共衣のすそのあひたにもせは

右勝　登蓮

あふきてを祈らは扨や戀せしの御秡も今はかなはぬやなそ

左ころものすその　あひたにもせはとよめる。いかなる事にか。したのおひこそゆきめくりてあふ事にはいふめれ。さやうのこと葉の侍るにや。もし萬葉集に。から衣すそのうらうへ[うちかへ萬葉]あはねともけしき心をあかおもはなくにといふ歌を思ひてよめるにや。衣のすそはあはぬ事とこそきこゆるに。いまの歌には。あふことゝおほしくよまれたるは。このことにはあらぬにや。大かたかゝることは物こしよりおちたる事をよむへきなり。萬葉集にありとても。いひならはさぬことはよしなし。四條大納言の新撰髓腦にも。歌はへもしにいふもめつらしきことをよみ出へし。さりとてよみならはさぬ事なとをいへるもわろし。われはおもひえたりとおもへと。人の心えぬことは。かひなくなん有とこそ侍るめれ。右おほつかなき事はなけれは勝とも申へからん。

九番　左　實淸入道

我袖や波こす磯のさゝれ石うちあらはれてひる事もなき

右勝　伊行

とけやらぬ人の心はつらからてむすふの神をうらみつる哉

左こひの心ほのかにや。なにゝあらはるゝ袖にかとおほつかなく侍り。又こしの句もことはたらぬやうにきこゆ。右うちきくは人ゆへに神もうらめしかるへきとおほゆれと。そねみことはにこそは。戀の心もまさりするにも。今すこしなたらかなれは勝へきにや。

十番　左　小侍從

たのめしをまちしほとなる暮毎におもひわひぬるわか心哉

右勝　賴輔

こひしなん別は猶もおしき哉同しよにあるかひはなけれと

これは右勝にこそは。いとおかしく侍る。こはたれかよみたるにか侍るらん。こゝろにておもひたまふるものかな。

十一番　左勝　成仲宿禰

あふせたに涙の川にあらませはみくつとなると歎かさらまし

右　　　政平朝臣

よしさらは異人かとてうちとけて戀にやつれて面變りせり

左よろしくみえ侍り。右もとよりうるはしくおもはねはこそはあはさりけめ。いはんややつれたらんかたちをみて。こととはすあらんこと。けにともおほえねは左勝とすへし。

十二番

左　　　參河

逢事の形見と思へは忍ふ故にぬれぬる袖をえこそしほらね

右勝　　左京大夫入道

あふ事のいつともしらぬ戀草やまつに變らぬ常盤なるらん

左ぬるゝ袖をあふまのかたみとおもはんには。いかゝつれなき人のかたみとはいひもなしてん。右めつらしくすかたもやさしくきこゆれは。もともかち侍りなん。抑たひ／＼のおほせを。さのみやはいなふねそとて。さしもえぬことを申侍る。春の田のかへす／＼おそれ侍れと。あきの鷹のちきりをたかへたてまつらしとて。御目よりほかにはちらさせ給はてを。

群書類從卷第百八十六

和歌部四十一 歌合七

左衞門督實國卿家歌合 嘉應二年五月廿九日講之

題

立春　更衣　九月盡　歳暮　後朝戀　祝

歌人

左	右
大納言隆季	刑部卿重家
左衞門督實國	前左京權大夫師光
左兵衞督成範	前皇后宮亮賴輔
前少將公重	右京權大夫賴政
前大進清輔	勘解由次官親家
左少將有房	前中宮大進賴保
前少納言資隆	中務少輔定長
右馬權頭隆信	片岡禰宜政平
權禰宜重保	俊惠法師
前右馬助敎賴	顯昭法師

講師　右京權大夫賴政

讀師　右馬權頭隆信

判者　前太皇太后宮大進清輔

一番　立春

左持　隆季

人はみなふりゆく物をけふといへは誰ためなれや新しき年

右　重家

老の波立かさなれるけふしもあれなと若水を汲はしめけん

左右の歌よみあけて後。をの〳〵なむあるへきよし申せは。人々左の歌させる難はなけれと。すゑの句のあたらしきとしや。こゝろゆかす侍らん。右はさせる所は侍られ共けにとはきこゆれと。左の一番はいとまけぬことなれは持とさため申つ。

二番

左勝　實國

今日こそは春はきにけれふしのねの煙とみるや霞なるらん

右　師光

一歳をくり迎ふる夜のほとはいつくに有て今朝かへる覽

人々云人あるににたれと。いつくにありてけさかへるらんとある心えす。冬と春との行かふ程にはたえまやあるへき。又いつくにありてといへるも。なにゝかあら

んと覺ゆ。左はこゝろえぬ事はなしとあれは勝にこそは。

三番

左持　成範

めつらしき春のはしめのしるしとて山も霞の衣きてけり

右　頼輔

春たつと水のおもにそ聞そむるかけひの氷とくるやま里

いつれもなたらかなり。

四番

左　公重

賤の宿にたてならへたる門松にしるくそ見ゆる千よの初春

右勝　頼政

めつらしき春にいつしからちとけてまつ物いふは雪の下水

左すゑあしくも聞えぬを。かと松にといやしきやうにきこゆと申さるめり。右おかしといひあはれたるを。水ものいふといはん事やいかゝと申せは。こゑにつきていはるゝにこそなとてかと侍れは。右勝。

五番

左持　清輔

いつしかと春のしるしの見ゆる哉三輪の杉原打霞つゝ

右　俊恵

春のくる所はわかしものゆへに朝のはらのまつかすむらん

右あしたの原の先かすむらんと有は。ほかよりもとくかすむ所にや。又わかしものゆへなとあるも。やり句とてよからぬ事になと申しかと。それはなとてか。又あしたのまつかすむによせたる事こそはなと申されしかは。我歌にある番。それはとかく申さて持にて侍るや。

六番

左　有房

春日たつはしめと人につけかほにいつしか霞む朝またき哉

右勝　親宗

津の國のあしまの氷とけにけりこやたつ春の始成らん

左かみおろしの句きゝつかす。右なたらかなり。

七番

左持　資隆

水の面に昨日も吹し風なれと春たつけふそ氷をはとく

右　頼保

いつしかとたなひく山の霞かなけふをは春と誰かをしへし

左歌心おかしくすかたもあしく侍らす。右させる心もなく又誰かをしへしといへるわたりも。心よくもきこえねとも。人々おなし程の歌とのみ申されは。何れとも申さゝりき。

八番

左勝　隆信

あふ坂の關のし水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん

右　定長

思ひやる程たにとをき東路をよのまにいかて春のきぬらん

左歌おかしく侍り。人々もさ申さるゝ。

九番

左持　重保

今朝よりや春はのとわる春風に氷のはしのたえはしむらん

右　政平

いつしかと霞わたれはわたつ海の浪のうへにも春立にけり

左歌橋とはかれよりこれにわたる物をそいふへきに。ひたちにこほれらんをはいひかたくや。又氷の橋もさためたる事のやうにきこゆと人々申さる。ある事ときこゆ。右心えぬ事なしとて持ぬ。

十番

左勝　敦頼

さゝ波や志賀のわたりの霞めるは今朝山こえに春や立らん

右　顕昭

いかなれは霞こめたる空をしも春のしるしといひ初めけん

左かすみ。あしき方さまに霞たりと申さるゝ人もありしかとも。とかともおほえすと申人もありしかは勝へきにやとて。

一番　更衣

左持　隆季

おほつかな月の都にすむ人もあまの羽衣けさやかふらん

右　重家

櫻色の衣をかへて卯の花のしらかさねきるけふにも有哉

左月の都はさにこそは更衣にてはなけれ。右ことなることなけれとも。更衣にてはあめれは。勝へしと侍りしかともすむ人もあまのは衣かへんといへれは。しの字衣かへの心は侍と申しかとなる持になりにき。

二番

左　實國

おもひなく花色衣ぬくはかりそめし心のまつかはれかし

右勝　師光

櫻色の衣をかへて卯の花そおりにもあへるしらかさね哉

左歌勝よし人々申あはれたれと。なを右めつらしくやとて勝と定てき。

三番

左　成範

さくら色にそめし衣をぬきかへて散にし時の心ちこそすれ

右勝　頼輔

夏衣きれは心もかはりけり春はいとひし風そまたるゝ

左右共におかしくさためられしなひか事にや。後拾遺に和泉式部歌に。櫻色にそめし衣をぬきかへて山ほとゝときすけふよりそまつといふ歌侍やうにおほゆるは。なを初の句はいかゝ申しかは左右なしとてまけにき。

四番

左持　公重

ぬきかふる蟬の羽衣うすけれは夏は來たれと涼かりけり

右　頼政

今日やさはうの花色のしらかさね春のつゝしに引かへつ覽

左はなたらかにきこゆ。右はおもしろしとてよき持とす。

五番

左　清輔

卯の花もまたさかぬまの白妙はけふ立きたる衣なりけり

右勝　俊恵

立かへり春やうらみんいつしかとけさぬきかふる花の袂を

右立かへりなむと春思ふ事あれは。勝とそみ給ふる。

六番

左勝　有房

いつしかとかふる袂のすゝしきは春の別にたへぬなりけり

右　親家

花の色に衣をそめてきたりせは何か袂をかへうからまし

左歌おかしとて勝へきよし人々申さる。

七番

左　資隆

せみの羽のうすき袂に成にけり衣に夏やたへぬあるらん

右勝　頼保

花の色にこそめの衣をしなから猶ぬきかへつうすき袂に

くれなゐにこそめとこそよみきたれ。花の色にはいまたきかすといはるゝ人も侍れとも。左歌後拾遺の秋の初の歌に。うちつけに袂すゝしく覺ゆるは衣に秋はきたるなりけりといへる歌侍れは。ふるき事にたるも。たひ／＼なれはいかゝとて右勝ぬ。

八番

左勝　隆信

衣をは一重にかふるけふもなを春のおしさは重ねてそ思ふ

右　定長

夏衣いそく中にもわれはたゝ散にし花そ面影にたつ

左なたらかにきこゆ。かさねて思ふなとあるもゆへあり。右むけにたゝ事なり。こしの五文字もてつゝに聞ゆとて負ぬ。

九番

左　重保

今日よりははつ卯の花のしらかさね櫻のすそに引かへて鳬

右勝　政平

こゝろさへけふはかはりぬ夏ころも山郭公昨日まちきや

左すそにひきかふるみゝに立てきこゆ。たもと袖なとこそ常の事なれはさかさまなりと定らるゝ。思給ふるまゝに忠臣の歌には數もやあらん。更衣にはさまていそくへしとも覺えす。しかいひて右歌心あれはよき勝に侍めり。

十番

左持　教頼

けふこそは花の袂を立かへて春にわかるゝこひころもきん

右　顯昭

あかなくに花の袂をぬきかへてをりしらぬなは今日や立へき

左右共におなしとて持になりぬ。

一番　九月盡

左　大納言

身の上は秋はてゝのみわくれ共秋はつる身の秋はあかなく

右勝　刑部卿

これもまた同し日數に暮ぬれは長月の名もかひなかりけり

左歌すゑかしかましきやうなり。右歌はおかしとてかたよりに申されしかは爲レ勝。

二番

左持　左衛門督

くれゆくをおしむにつくる心こそ秋の今宵のならひ也けれ

右　前左京權大夫

虫の音も花の匂ひもあすよりはかれ／＼ならん事をしそ思ふ

左右おかしくきこゆ。右はむしのねも花の比もあすよ

りはかれ〳〵と侍事もよろしからす。かきこそたゆへけれと人々申しかと。ゆへはさもあれとも十月初ころ。霜かれのこりたる花の下。虫のねおり〳〵きこえすやはある。心ほそくこそよまれたれとて持とさためられき。

三番　左　左兵衛督

しかさけひ山も嵐にむせひつゝ秋のおはりは悲しかりけり

右勝　前皇太后宮亮

年をへておしむ心のつきせぬに今日計なる秋をなさはや

左しかさけひなとある五文字よからすと。定あはれたるをこれはと詩の心に詩なとをよむには。さのみとそと申しかとも。山もあらしにむせひなとあるも心えす。あらしのむせふへき山は。いかゝはせんと思給ふるうちに。右歌もあしからねとさは勝にこそはとてやみにき。

四番　左　前少将

しかはかく暮ゆく秋を惜め共野にも山にもとまりやはする

右勝　右京権大夫

秋にこそ今夜別め木葉さへとまらぬ音を聞そかなしき

ともにおなしき歌なれと右はいますこし心ありと。人人侍りしかは。

五番　左　前大進

いつ方を秋のとまりと尋まし紅葉の船はちり〳〵に行

右勝　大夫君

今日こそは秋の哀をなかめきて心つくしのはてはありなし

左あしからすと侍る人もありしかとも。ちり〳〵にゆく程も。わらはせてきこゆるうちに。右歌とゝろかにいひくたして。心つくしのはてはなと侍もおかしければ勝へし。

六番　左　左少将

鳴虫もこゑよはり行われはかり秋をおしめる物はなき哉

右勝　親家

くれて行秋のとまりを尋ぬれはおしむ心のうちにそ有ける

右歌すかた心うちかなひていとおかしく。おしむ心のうちもけにいはまほしき事なりと思給ふるうちに。人人もさ申しかはかつと申き。

七番　左　前少納言

いつ方へ秋の行らんかくはかりおしむ心のさきにとまらて

右勝　前中宮大進

けふまてと思はぬ時のくれにたに秋の哀れはいかゝ悲しき

共におかしければ持にてやと申しを。なを右はせちなる所ある。勝へしと人々申されしかはかちにて。

八番　左　右馬権頭

けふのみとなかめぬ荻の風たにもたゝなる物か秋の夕くれ

右勝　中務少輔

行秋をおしむにさよのふけぬれは袂より社しくれそめけれ

これも左右ともにおかしく見給ふるに。右はたもとにしくれそめたるめつらしき詞なるうへに。姿ゆうにきこゆるなと一方の申あはれたれは。

九番

左　権禰宜

くれて行秋はおもひや虫のねもなかぬ袂に露そこほるゝ

右勝　片岡禰宜

長月はなのみ也けり暮はつるけふのおしさは春にかはらす

虫のねもきかぬたもとはいかにそや。我たまくらの下に鳴なりとよめるも。ゆへをいひて後にいへはこそおかし。たれ〳〵もさやうにおもはれたり。右はしたゝかによまれて侍り。すゑの句そいましはし思へかりける。されと難にはあらねは勝へし。

十番

左勝　前馬助

白露を秋の形見とみるへきにあすは霜にやをきかはりなん

右　亮君

わたつ海の手向は何そかへる秋もみちの山のぬさは思はし

判欠

一番　歳暮

左勝　大納言

年の内にしめをく春のわか水を何れの里の板井なるらん

右　刑部卿

歌欠

左はあしくあらす。右はつねにいひふるせる事也とそたれも申されしかは。負になりぬ。

二番

左勝　左衞門督

身の上にかさなる年をこゆるきの急くや何のいさみ成らん

右　前左京権大夫

すきて行すかたもみゆる年ならは後るゝけふは眺めましやは

右すかたみへはこそ行方もいますこしなかめられめ。心得ぬとてまけぬ。

三番

左勝　左兵衞督

明はてはまたかへるへき年なれと暮行けふは猶そかなしき

右　前皇太后宮亮

暮て行年の惜さはならひかと老をはいはぬ人にとはましや

左ことはりにいはれて侍り。右もあしからねとなを左勝にてと人々申されき。

四番

左勝　前少将

くれて行年を何ゆへいとはまし我身につもる老とならすは

右　右京権大夫

をのかしゝしつの門松もてさはくたつへき春や近く成らん

左あり事ときこゆ。すかたもなたらかなり。右させる事なくてすかたもをとりて侍り。

五番

左勝　前大進

行年に言つけやらんいつしかとまつ人ありと人につけなん

右　俊恵

行年にたちかはらんと春かすみいつくに今夜待あかすらん

左歌との字おほかりと申さるゝ人もありしかと。多くは心をかしと侍りしは。まことにおなし文字おほかる歌みな勝たる例あれは人々の御心なりと申てき。就中右歌はらんの字二あり。やまひなるへし。

六番

左持　　右少將

數ふれは一そち餘りふたつきのことそともなく暮にける哉

右　　親宗

淺ましやこよみの奥を今日見れは一くたりにも成にける哉

一そちあまり二つきいかゝと。又こよみのおくも。むけにたゝ事とも也とて持になりぬ。

七番

左持　　前少納言

程もなく月日の過てくれに鬼年とはけにそいふへかりける

右　　前中宮大進

年くれてふり行事をなけく哉あたらしからぬ我身ならねと

左心はおかしきを。ふるくあるやうにおほえなから。人人申さるゝにつきて思ふは。古今集にとゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなく過るよはひかと侍る歌にやと申しかは。なりたゝ。ひとしけれとこそ歌の肝心也とて。右歌もあたらしからぬと侍あたりも。けにともおほへねはとて持になりにき。

八番

左勝　　右馬權頭

いかなれは惜む日數はかひなくて身にのみ年の立とまる覽

右　　中務少輔

月も日も流れ〳〵てあすか川けふとなりてや身に淀みなん

右月も日もなかれ〳〵てと侍わたり。いかにそやおほゆるとてまけぬ。

九番

左　　權禰宜

何となくよそにやけふを惜まゝし身に積られて年の暮すは

右勝　　政平

いつくにも老せぬ門をたてたらはあけむ年をも厭はさらまし

右たいのみなり。左ふるき心なるらへに。結句の詞よからすとてまけにき。

十番

左勝　　前馬助

のこりありしその昔たに暮て行年を惜まぬ年はなかりき

右　　亮君

暮ゆけとあくれはやかて立かへる年のよかれを何歎くらん

左歌はうた合の歌とそ覺ぬ。おいたを積しこそ心ならすや。ふるくもかくそ申たる。但右はすかたあしくはあらねと。よかれ心得す。こもりの夜とてなく侍にやはある。夜かれといはむ事いかゝとて負に定められしにや。

一番

左勝　　後朝戀　　隆季

波の上に夜すからむかふ友舟のあしたの浦は出そわつらふ

右　　重家

命をはあふにかへむといひ〳〵て今朝は千歳を契へしやは

左あしたの浦そ。おほつかなけれと。侍にこそあらめ。右さもいひてむとおほゆれは然とそ見給れとも。左勝

とのみいひあはれは。かつへきにや。

二番

左勝　實國

あひ初て又何事を思はましあけてかへらぬ習なりせは

右　師光

はかなしやさらぬ別のあるものをけさ歸るさにおつる涙よ

左おかしくきこゆ。右さらぬ別よしなしとてまけぬ。

三番

左　成範

うらみこし程たに有をから衣けさより袖のなとや露けき

右勝　頼輔

つらかりし恨もませて玉章に戀しとのみや今朝そかきつる

左歌からはあしからね共。けさより袖のなをやつゆけきと侍。すきにし方まさりけるにやとおほゆ。けさそなとそあるへき。右おかしとて人々勝おもはれたり。

四番

左持　公重

逢見てもあはぬ思のつきせねは今朝よりいとゝ物を社思へ

右　頼政

あさまたき風吹野への葛の葉もかへるはかくや露はこほるゝ

左右共におかしきさかり　いとゝなと侍る。かくこそいはまほしけれ。

五番

左勝　清輔

むかしにも今朝の思はまさる哉つらくて人ははつへかり鳧

右　俊惠

あけぬ共歸らぬ物としらすへく我やためしに今朝はならまし

右歌あしくも侍らぬを人々左すへてすこしおかし勝とあれは。いなみ申へきにもあらす。

六番

左　有房

これは又なをしめそせん今のまは移り香のみそ形見也ける

右勝　親宗

玉つさはかへる儘にそ急かるゝ猶暁のまもおほつかなさに

右歌けにある事ときこゆ。

七番

左　資隆

古の人のしわさもあらためてあくとも今はかへらすもかな

右　頼保

命あらは猶このくれも待へきにけさの情のかはらすもかな

左歌人のしわさ何事にかとて心ゆかすけに思はれたり。右はおかしと いひあはれたりしかとも。はしめに命あらはといひて。するにはしぬへきよしそあらまほしき。かゝらすもかなと侍る。たかひたるやうに覺しかと。滿座おかしといはれしかは申も出てやみにき。

八番

左勝　隆信

さらに又今朝はしむる思ひ哉あはても戀の年はへにしを

右　定長

なれそめてあかぬ夜とこそ思へ唯しらぬにたにも通ふ心を

右後朝の心なし。日來月來あへるやうなりとてまけぬ。

九番

左　重保

したひものとくるあしたは中々にきへかへらるゝ道芝の露

右勝　政平

みちしはの露とそ今朝は消なゝん暮を頼まぬかへさ也せは

左右おなしくつゆにはよりたれと。右今すこしたましひあるやうに。人々思はれたるにや。

十番

左持　敦頼

きぬ〳〵のありつる袖をかへす哉又ねの夢に君や見ゆると

右　顯昭

今朝そしるあはぬよとこにとまりゐる身に從はぬ心うれしと

又ねの夢ちかく仁和寺の歌なりと申さるゝ人々ありしかと。けふたゝはりしはもりのほとの事はなと申さるる人もありしうちに。右歌はともかくもさためなくて持なめりと侍りしかは。さてやみにき。

一番　祝

左持　隆季

かみあけやかみのしるしにあふ人の契れる年を君そあらそふ

右　重家

君か代にあまの羽衣をりきつゝいくつの石をなてつくす覽

此かみあけの歌たれもしらす。右もへちの事なければ持にてこそ。

二番

左持　實國

君か代はしたつ岩ねのかやは□しるしかへ□百かへり迄

右　師光

千々へてのやそのしまりのさゝれ石を君か千歳の數に比へむ

左右共にあしくもあらす。持にてや侍るへからむ。

三番

左勝　成範

君か代は神そかそへむ住吉の濱のまさこそ十かつにして

右　頼輔

鶴龜のよはひをつきてくらふとも猶君か代の久しかるへき

左心たくみにすかたうるはし。右つるかめの齢つきかたくやなと申さるゝ人あるめれはまけぬ。

四番

左　公重

君か代は山のしつくの年をへておくらに石のなかくほむ迄

右勝　頼政

君か代はなからの橋を千度迄つくりかへても猶やふりなん

左のなかくほむまてとある。みゝにたつと侍めり。右はさる事なしとて勝へしとそ人々も。

五番

左持　清輔

君をいはふ心のあかすな□千代をは物の數とやは思ふ

右　俊惠

萬代と君をいはへは春日やま山ひこさへそ聲はあはする

右よろつ代と山こそよはゝ又きみを人のよはらんこそ。けにともきこへね。萬代とはいのりてん。いのるよはふといはふへきにやとおほへしと。かやうにとかむる人も侍らさりしかは。われとはいかゝと思て。申いたさてやみにき。

六番　左　有房

八千代へて白玉椿さてもあらし君か爲にやかけをかふらん

右勝　親宗

君か代はやつのしほちに立波の數や千歳のためしなるらん

左歌は千とせに色をあらたむる物なるを。やち代へはさてもあるへくといはれたるおほつかなし。君かためにやかけをかふらんといへるも。けにともおほえすと申されしかや。右歌は歌合のうたとよまれたれは勝へしとそたれも。

七番　左　資隆

龜の尾のいはねにおふる小松原をかよりことにみゆる千代哉

右勝　頼保

千とせふる鶴のかひこもかへ□うら山ほとの君か御代哉

左歌のさためなくて。たゝ右めつらしと。くち〳〵に侍りしかは無二左右一勝と申へき。

八番　左　隆信

限なきためしとみゆる君か代の數にはとらし千代も八千代も

右勝　定長

春日山おひそふ松は君かためいく千とせ共かきらさりけり

當氏の家の歌合は。春日山とよみてむことをは。とかくいふましとて右勝。

九番　左　重保

君か代はあまてる神の宮うつしうつしかさねて千度ふる迄

右勝　政平

君そなを雲のうへにてくもりなき千歳の秋の月はみるへき

わつらはしき事にかゝりぬる歌は可レ被レ下レ不レ重。

十番

歌闕　左　敦頼

歌闕　右　顯昭

判闕

住吉社歌合 嘉應二年十月九日

題

社頭月　旅宿時雨　述懷

作者

左

正二位藤原朝臣實定
從二位行權大納言藤原朝臣實房
大法師俊惠
散位從四位上藤原朝臣清輔
正三位行左兵衛督藤原朝臣成範
從三位行左近衛權中將藤原朝臣實家
大皇大后宮小侍從
正四位下行内藏頭兼大皇大后宮亮平朝臣經盛
散位正四位下藤原朝臣公重
女御家兵衛佐元二條院參河内侍
女御家兵衛督
正四位下行中宮亮藤原朝臣季經
禰宜從四位上賀茂政平
正五位下行左馬權頭兼淡路守平朝臣經正
攝政家卿
從五位下守刑部大輔平朝臣廣盛
前齋宮大輔
散位從五位下藤原朝臣伊綱
大法師祐盛
從五位下行皇后宮權大進藤原朝臣邦輔

駿河權守從五位下藤原朝臣朝宗
飛驒守正六位上源朝臣宗長元通清
前齋宮中納言
法眼和尙位靜賢
沙彌寂念

右

正三位行皇大后宮大夫兼右京大夫藤原俊成
從四位上行右京權大夫源朝臣賴政
正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣實國
參議從三位行左大辨勘解由長官藤原朝臣實綱
散位從四位下藤原朝臣盛方
散位從五位上藤原朝臣敦頼
正四位下行右近衛權中將藤原朝臣實守
從四位上藤原朝臣賴輔
法眼和尙位圓實
正四位下行左近衛權少將藤原朝臣脩範
正四位下行右近衛權少將源朝臣通親
從五位上行右馬權頭藤原朝臣隆信
散位從五位上藤原朝臣親重
從五位下行隱岐守源朝臣仲綱
散位從五位上源朝臣季廣
大法師智經
從五位下行中務少輔藤原朝臣定長
散位從五位下藤原朝臣季定
散位從五位下藤原朝臣憲盛
前大政大臣家堀川

散位從五位下藤原朝臣懷綱
正六位上藤原朝臣憲經
沙彌素覺
沙彌寂超
前右大臣家輔

講師

讀師

左　從五位下行皇后宮權大進藤原朝臣邦輔

右　駿河權守從五位下藤原朝臣朝宗

判者

正三位行皇大后宮大夫兼右京大夫藤原朝臣俊成

一番　社頭月

左勝　實定卿

ふりにける松ものいはゝとひてまし昔もかくや住の江の月

右　俊成卿

こゝろなき心もなほそつきはつる月さへすめる住よしの濱

左歌むかしもかくや住の江の月といへる。こゝろすかたいとおかしくも侍かな。かみの句はかやうの心きゝなれたるやうなれと。さしてかくいへるは覺え侍らぬうへに。ふりにけるとをき松ものいはゝなといへる心。いとよろしくそ覺え侍。

右歌おまへのはまの月に。をろかなる心もつきはて。ことはもをよはす覺えけるはかりにや。左歌ことによろし。かつとすへし。

二番

左勝　實房卿

庭火たくあたりをぬるみ置霜のとけぬや月の光なるらん

右　頼政朝臣

ひとすちにあふくこゝろを住吉の空行月に分そやらるゝ

左歌こゝろめつらしく。ことばいひしれりとみゆ。

右歌嘆仰心なるに。月をみてわけやりけん心はへ。またいとおかしくきこゆれと。なをとけぬや月のなといへるすかた。歌合のうたと見え侍は。以ㇾ左爲ㇾ勝。

三番

左勝　俊惠法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれは霜はをき鳧

右　實國卿

住吉のまつのゆきあひの月影は雲まにいつる心ちこそすれ

左右おなしく松のゆきあひにおもひよれる心。ともにおかしくは見ゆ。雲間にいつる。けにさこそはときこゆれと。左のひまよりもといへるもの字。ふかくさかひにいれるにや。よりて左のかちとす。

四番

左勝　清輔朝臣

月影はさえにけらしな神垣やよるへの水につらゝゐるまて

右　實綱卿

月かけにかなつるきれか心まて雪をめくらす心ちこそすれ

左歌よるへの水につらゝゐるまてなといへるもしつゝき。よろしくはみゆるを。おほつかなきことゝもは侍める。よるへの水といふことは。源氏のものかたりにそ。賀茂のまつりの日歌に。さもこそはよるへのみつも見

えさらめとみたまへし。さらてはふるき歌にもみをよひ侍らす。このみつおろ〳〵うけたまはるに。たとへはいつれのやしろにも侍らめ。まつ當社のおまへの月には。うみのおもてこほりをみかき。濱のまさこそたまをしけらむをはをきて。よるへの水はかりむかひて。月はさえにけらしなと思はむことやいか丶。

右歌まひのすかたをいふに。廻雪といふことのあるを。いま月の光によせて。ゆきをめくらすと見ゆらむ心。いとおかしくみゆるを。かなつるきねかといへるわたりや。よまぬことにはあらねと。ことに優にしもやきこえさらん。左はおほつかなきことゝもそ侍れと。歌のすかたよろしく見ゆ。なをかつとや申へからん。

五番

左勝　成範卿

ゆふかくるこゝちこそすれすみよしの松の梢をてらす月影

右　盛方朝臣

すみよしの松の梢をみわたせは今宵そかくる月のしらゆふ

左右の月の歌。ともに松の梢にしらゆふをかけたる心。たかひにおかしくみゆれと。右歌こよひそとわける事はよしなくやきこゆ。猶左はもしつゝきうるはしく見ゆれは又かつとすへし。

六番

左持　實家卿

住吉の松のむら立風さえてしきつの波にやとる月かけ

右　藤原敦頼

なには江の空にやとれる月をみてまたすみのほるわか心哉

左歌しきつの波にやとる月影なといへる。すかたよろしき歌といひつへし。

右歌そらにやとる月をみて。またすみのほるらん。こゝろふかく思ひいれたりとは見ゆるを。なには江といふに住吉もこもるらめと。社頭の心やすこし荒凉にきこゆらむ。左又歌さまは歌合の歌と見えな　ら。さすかにことなるよせなきにやあらん。よりて持とす。

七番

左持　小侍從

住吉とあとたれそめしそのかみに月やかはらぬ今宵成らん

右　實守朝臣

あきらけき神の心やたくふらんほかよりもけにすめる月哉

左あとたれそめしそのかみになといへる。よろしくはみゆるを。下の句のこと葉やいひおほせられぬやうにきこゆらむ。

右こゝろことは。社頭月にあひかなひては聞ゆるを。ほかよりもけにといへるこしのくのこと葉や。いますこしおもはまほしく侍らん。よりてかれこれをなすらふるに。又持と見えたり。

八番

左勝　經盛朝臣

住吉の松吹風の音たえてうらさひしくもすめる月かな

右　賴輔朝臣

やはらくる光や月にそへつらんしめのうちには照まさり皃

左歌すかた言葉いひしりて。さひてこそ見え侍れ。

右歌のこゝろ。又社頭の月のほひなり。たゝし光や月に

そへつらんといへるわたり。いさゝかたらぬところある心ちやすらん。左なを歌さまたちまさりて聞ゆ。よりて爲レ勝。

九番

左　　　　公重朝臣

すみの江のこほりと見ゆる月影にとけやしぬらん神の心も

右勝　　　　圓　實

住よしのおまへの岸の松の葉もかすかくれなくみゆる月影

左こほりと見ゆるといひてとけやしぬらんといへる言葉は。よせあるやうなれと。寒夜之月江上之氷と見えは。むすひやすらんなとやうにそいはまほしき。春朝之風東岸之氷ともいはゝ。とけやしぬらんとあるへからむとそおもふたまふる。

右おまへの岸の松の葉もといへる。かやうのことによせて。月のあかきよしよむことゝ。さき／＼もある心ちするやうにそ聞ゆることとなれと。月あかく侍めれは。右のかちとこそは申へけれ。

十番

左持　　　　兵衛佐

松もみなしらゆふかけてすみよしの月の光もかみさひに鳬

右　　　　脩範朝臣

かたそきの行あはぬまよりもる月をさえぬ霜とや神はみる覽

左歌月の光も神さひにけりといへる。すかたよろしくみゆ。

右歌又さえぬ霜とや神はみるらんといへる。もしつゝきおかしくは聞ゆる。月をもさゆるものとこそはよみならはしたれ。たゝしまさしきしもにならふるとき。さえさるへしとにや。なをすこしはおほつかなくはおもふたまふれと。歌のすかたいつれもよろしくみゆ。持とすへし。

十一番

左持　　　　兵衛督

住吉の神さひにける玉垣をみかくは月の光なりけり

右　　　　通親朝臣

くまもなくさえ行月にみかゝれて光をそふるあけの玉垣

左右の月の光。ともにたまかきをみかけるにとりて。みきのすゑの句。ちかく聞なれたるこゝちし侍に。左又けるけりといへり。よりて持とす。

十二番

左持　　　　季經朝臣

すみのほる月の光にみかゝれて曇も見えぬ玉つしまひめ

右　　　　藤原隆信

住吉の松の梢に入月はしつえのひまそ猶またれける

左歌月の光たまつしまをみかける心。おかしくはみゆるを。くもりもみえす玉つしまとまてにてそあらまほしき。はてのふたもしは。くもりもみえすといはむには憚あらんや。

右歌こゝろあらむとはよめるやうなれと。松の梢にいる月はといへる。光のいるなるへしとはみゆれと。山端なとの心ちやすらん。たゝしこれは當社月。左も玉つ嶋の明神をかけたてまつれり。いつれもめてたき心なれは。勝負はゝかりあり。又猶持とす。

十三番

左　禰宜政平

住吉のあまくたります松の上に空よりかくる月のしらゆふ

右勝　藤原親重

しめのうちにしらゆふかけぬ隙そなき月も手向の心有けり

左歌そらよりかくるなといへるは。おかしきやうなれと。まつのうへにあまくたりましけむことといかゝ。おほつかなし。

右歌月もたむけのといへる。心すかたよろしくみゆ。よりて勝とす。

十四番

左持　平經正

ゆきもあはぬちきのかたそきもる月を霜とや神の思ひます覽

右　源仲綱

白妙の雪かとみれは風さえて月そしくるゝすみよしの松

左すかたは優に見ゆるを。ちきといへることある所の歌合に。基俊のきみといひし判者にて。ゆるさすそいひて侍し。をはりの句も今すこしおもふへくやとみゆ。

右このまの月の光を。ゆきのしくれかゝるかとおもへるこゝろはおかしきを。月そしくるゝといへる言葉やいかゝと聞ゆ。はしめの白妙のとをけるも猶思ふへしやとみゆれは。持と申へし。

十五番

左勝　卿

住よしの松にとはゝや老かよに今宵はかりの月はみきやさ

右　源季廣

すみよしの浦さえわたる月みれは松の木かけそ曇り也ける

左歌めつらしきふしにはあられと。すかたよろしといひつへし。

右歌月のあかきよしをよむに。そのものはかりそくもりなりけるなといふこと。常のことなるうへに。松の木かけをくもりといふならは。すくなからすこそ聞ゆれ。よりて左の勝とす。

十六番

左持　平廣盛

住吉の松の梢にふる雪のつもりまさると見ゆる月影

右　智經法師

すみよしの濱松か枝をこす波に月のしらゆふかけそへて見

左右ともに。ことなるとかなくゆうにきこゆ。持とすへし。

十七番

左持　大輔

月さゆるつもりのうらのみつかきは降しく雪に色も變らす

右　藤原定長

あらし吹松の梢にきり晴て神も心やすみの江の月

左歌つもりのうらさえて。ふりしく雪かとみゆるに。みつかきの色のかくれぬにて。月の光とはしるといへるなるへしとはみゆれと。言葉のすこしかなはぬにやあらむ。たゝみつかきは雪ふれとも色かはらすといへるやうにそ見えたるやいかゝ。

右歌心すかたよろしともいひつへきを。あらしふくとをける。濱松なとにはあらしとはいふへからす。むへ山

風をあらしといふらんといふ歌にてしるへき事也。たたし歌のすかたよろしきににたり。又爲レ持。

十八番

左持　藤原伊綱

てる月もをのか光やたむくらんしらゆふかくる住吉の松

右　藤原季定

かたそきのゆきあはぬまよりもる月は霜に霜をや置重ぬ覽

左歌優にはみゆるを。をのかのことは。ことにあるへしともや覺えさらん。

右霜にしもをやなといへる。すかたおかしくはみゆ。たたしかたそきのゆきあはぬことは。いまはしめてよむへからさるよし。心に思ふたまふる所ありて。よりて猶持とす。

十九番

左　祐盛法師

さえわたる月の光やすみよしの松の葉しのきふれるしら雪

右勝　藤原憲盛

月のすむなにはの浦のけしきには神の心もたへすや有らん

左歌すかたもしつゝきよろしくは見ゆるを。ことに思ひいれる所なく。たゝいひわたしたるやうにやあらん。

右歌こゝろありてはみゆるを。心あらん人にみせはやつのくにのなとこそいひたれ。なにはの浦に人のこゝろたへすといひて。ことのあらむやうにやきこゆらん。たゝし神のこゝろもなといへるわたり。おかしくも見ゆ。よりて以レ右爲レ勝。

二十番

左勝　藤原邦輔

玉垣にひかりさえそふ夕月夜神にたむくるかけにや有らん

右　堀川

雲はらふあらしのみかく月にまた光をそふるあけの玉垣

左歌ゆふつくよ神にたむけたるこゝろはへもしつゝきいとおかしきを。もち月ありあけならてとく入なむや。くちおしく侍る。

右歌光をそふるをふしにしたる。ちかくきゝなれたる心ちするよしさきに申をはりぬ。なを左歌さままさるへくや。

二十一番

左　藤原朝宗

久かたの月も光をやはらけてしめの内にはすむにやある覽

右勝　藤原懐綱

月影を雪かとみれは住吉のあけの玉かき色もかくれす

左月も光をやはらけてなといへる。歌すかたはおかしくみゆるを。しめのうちの月のやはらかならむ光こそおほつかなく。

右雪かとみれはさをき。色もかくれすといひはてたることはつかひ。いかにそきこゆれと。こゝろにことはゝいひかなへて見え侍は。右のかちとす。

二十二番

左勝　源宗長

有明の月の光もすみよしの空にしりてやあまくたりけむ

右　藤原憲経

やはらくる光やそふる住吉のあたりくまなし有明の月

左歌すかたもしつゝきゆうにきこゆ。
右歌題の心かくよむへしとは見えたるを。光やそふるといへるあたり。いさゝかたらぬ所ある心ちす。くまなしもすこし荒涼なるやうにやあらん。左とかなくみゆ。かつとすへきにや。

二十三番

左持　中納言

すみよしのきしうつ波に照月はこかけもあかし松のむら立

右　素覺法師

年ふりて神さひにけるすみの江の岸の玉もをみかく月影

左歌きしうつなみにてる月の光かへりて。松のかけもかゝやく心いとおかし。たゝしあかしといへる言葉やいかゝあらむ。かやうのことはゝよくつかひおほせつるときはよく聞ゆと。故人も申侍し。
右歌すかたことはよろしとはみゆるを。神さひにけるといへる。すみの江のきしまてはしかるへし。玉にいたりて神さひむことといかゝ。みかくといはむため。たまもにかゝらむことはりなくやあらん。たゝし歌のすかたよろしくみゆ。持と申へし。

二十四番

左　靜賢

あまくたる神も久しく宮ゐして月ものとかにすみよしの浦

右勝　寂超法師

神代よりたくひなしとも住よしの松やこよひの月をみる覽

左こゝろすかたいとおかしくこそ見え侍れ。たゝし神もひさしくとをき。月ものとかにといへる。兩所のもの字こそみゝとまるやうに侍れ。
右ことにとかとすへき所なきうへに。まつやこよひのといへるすかた。いとよろしくきこゆ。よりて右のかちとす。

二十五番

左持　寂念法師

松風にふけ行月の住の江は波のよるこそたちまさりけれ

右　輔

霜ならて月もる宵やかたそきのゆきあはぬひまも神は嬉しき

左歌更行月のすみのえはといへるは。よろしく聞ゆるを。なみのよるこそといへるや。ちかきうたともに。なみのよるこそいはまほしけれといひ。なみはかりこそよると見えしになとやうの歌とも侍を。かみの句はことなれと。これをふしとしたるはめつらしけなくやあらん。
右歌うたさまはおかしきを。かたそきのゆきあはぬ月はかりを。うれしともみそなはすへきにあらす。神明のかきりなき。八しまのほかまてこそまもりおはしませ。いはんやつもりのうら。すみよしの濱は。なみのうへまつのかけ。へたつる所あるへからす。かたそきのこともさきに申をはりぬ。たゝし歌のすかたはあしくもあらす。持なとや申へからむ。

一番　旅宿時雨

左　寂念

時雨する紅葉の錦ゆかしきにあけてをたゝむふたむらの山

右勝　佐

都にもおもひやすらむ草枕うち時雨たる夜半のね覺を
左歌あけてをたゝむふたむらの山といへる。おかしくはきこゆれと。かの兼輔卿のうたに。ふたみの浦はあけてこそ見めといへるより。常のことになりにたる。又ゆかしきにとをける。まこと歌のことはにはあらさるへし。撰集には。とき〳〵あれとも。歌さまにしたかひゆるすときのあるにこそあれ。いふかしといふことはなり。歌合にはまことのことはならぬことは。いはさるなるへし。
右歌しくれはたひの道なとにふれとも。かならすしも都にふらぬも。つねのことなれと。たゝたひのねさめをおもひやすらんといはむも。なとかはなからむ。歌の心もよろし。かつとすへし。

二番

左勝　静賢

なら柴の旅の庵に音つれて時雨も今そ山めくりする

右　寂超

旅衣うらかなしかる淺茅生によはの時雨よいかにせよとか
左右ともに。よろしくは聞ゆるにとりて。たひの庵にをとつるらむは。今少あはれにもや聞ゆらんとて。左のかちとす。

三番

左　中納言

槙の屋の時雨の音に夢さめて都戀しきれにそぬれぬる

右勝　素覺

旅ねするのちのしはやに音つれて過るはよはの時雨也けり
左歌うたさまはゆうに聞ゆるを。みやこならすともたひならぬまきのやもやあらむとおほゆるうへに。すそのくもたらぬ所あるこゝちするにや。
右歌ことなることはなけれと。よろしく聞ゆ。かつと申へきにや。

四番

左持　源宗長

旅ねするあれたるやとの時雨には涙も共にもるにそ有ける

右　藤原憲經

契らねとさよのね覺にをとつれて時雨そ旅の友となりける
左すかたこゝろよろしくはみゆるを。たひねするとはいへれと。あれたるやとのなといへる。旅宿としも覺えすそ聞ゆる。
右はしめにちきらねとゝをける。やともといはむためとは見ゆれと。ことはなれたるこゝちすらむ。たゝしころありてはみゆ。持とすへし。

五番

左勝　朝宗

晴くもり時雨する夜はまつかねの枕をえこそ定めさりけれ

右　懷綱

神無月しくるゝ夜半の旅やかたもるとはなしにぬるゝ袖哉
左右ともに。歌さまはゆうに聞ゆ。たゝし右歌。やかたのもらさらむことよくは聞ゆれと。しくるゝ。ぬるゝ。ことはさるへしとみゆるうへに。左猶まつかねのなといへるすゑさまのもしつゝきよろしくきこゆ。よりて以レ左爲レ勝。

六番

左持　邦輔

旅ねするこやのしのやの隙をなみもらぬ時雨にぬるゝ袖哉

右　堀河

時雨つゝ物そかなしきわすれ草枕にむすふきしのたひねは

左歌すかた言葉あしくはあらす。もらぬ時雨にもとそいはまほしき。

右わすれ草を枕にむすふらんすみよしのきしの旅ねにこそはと。えんにはきこゆるを。かみの句にわすれ草によりたるよしのあらましかはとそ聞ゆる。持なとにや。

七番

左持　祐盛法師

きしちかみ旅ねのとこを打波の歸るひまにそ時雨とはしる

右　憲盛

柴の戸をたゝくあらしの音に又時雨うちそふ旅のよはかな

左歌しくれやうちはへしつるなるらんとそきこゆれと。かへるひまにそなといへる。心ありてはみゆ。

右歌たゝくあらしのをとに又なといへる。おかしくはきこゆるを。柴の戸時雨とをける。はしめのもしいかゝとみゆ。よりて持とす。

八番

左　伊綱

時雨もるかりほにぬれて乾衣なかゐのあまは取やたかへん

右勝　季定

獨ねのあはれひまなき旅衣時雨はれても袖はぬれけり

左歌のすかたはいとおかしきを。時雨にころもたかへん事やいかゝ。

右あはれひまなきとをきて。しくれはれてもといへる心。いとよろしくこそ侍めれ。右のかちと見えたり。

九番

左勝　大輔

うらさむくしくるゝ夜半の旅衣岸のはにふにいたく匂ひぬ

右　定長

思へたゝ都のうちのね覺たにしくるゝ空はあはれならすや

左歌きしのはにふにいたくにほひぬといへる。すかたこはきこゝちすれと。萬葉の風躰と見えたり。

右歌こゝろはよろしきを。思へたゝとをける。たれにいへるにかあらん。かやうのことはゝ歌のかへし。戀の歌なとにこそつかふことなれ。左のうたつよかるへし。

十番

左持　廣盛

草枕しくれも袖をぬらしけり都をこふるなみたならねと

右　智經法師

かり庵さすならのかしはの村時雨哀れはまきの音許りかは

左右ともに。すかたことはゝゆうにみゆるを。左はしくれの袖ぬらすことを。はしめてしれるやうなり。右はまきの音をのみあはれあるものと思ひける心ちす。よりて持とす。

十一番

左勝　卿

かりの庵はそゝく時雨もとまらねは露分衣ほしそかねつる

右　季廣

さらぬたに旅ねの床は露けきにいかにせよとてうちしくる覽
　左そゝくしくれもといひ。右いかにせよとてなといへる心ことは。いつれもよろしからさるにはあらぬを。右の歌の五七五。むけにつねのことくやすらかにそきこゆる。左は露わけ衣ほしわつらへる心も。今すこしはまさるへくや。

十二番

　左　　經正

時雨には庵もさゝし草枕をときくとてもぬれぬ袖かは

　右勝　　仲綱

玉もふくいそやか下にもる時雨旅ねの袖もしほたれよとや

　左の草枕いほりもさゝしと思ひすてゝ。をと聞とてもぬれぬ袖かはといへる。いとおかしく見え侍を。右歌のたまもふくとをき。たひねの袖もしほたれよとやといへるすかたもしつゝき。いとあはれにも侍かな。よりて右の歌なをかつと申へし。

十三番

　左　　政平

しくれもる旅ねの床は花そめの袂そさきにまつかへりける

　右勝　　親重

はなれゆく都を思ふひとりねの涙をさそふはつしくれ哉

　左歌すかたおかしくはみゆ。たもとそさきにといへるや。みやこへかへるさのたひと見えたるよしあらは。おかしかりぬへくそきこゆる。
　右歌はなれ行とをけるより。なみたをさそふなといへる。心ことはいとよろし。右のかちと見えたり。

十四番

　左　　季經朝臣

心あれやかきなくらしそ初時雨またさしはてす柴のかり庵

　右勝　　隆信

住吉の松かしたねのたひ枕時雨も風にきゝまかへつゝ

　左またきしはてすといへるしもの句。たひの心。歌のすかた。いとおかしきを。こゝろあれやとをける。やの字こそふるくをきならはしたる心にはあらす侍めれ。これはしくれをかりていはむこゝろなるへし。
　右たひ枕そ。いかにそきこゆれと。詩にもたひ枕とはつくれは。の字なくともいかゝせん。しくれもかせにといへる。もしつゝきよろしきにや。よりて右のかちとす。

十五番

　左　　兵衞督

道芝の露分きつるたひ衣しくるゝ夜半はほしそわつらふ

　右勝　　通親朝臣

時雨するをとにいくたひね覺して草の枕にあかしかねらむ

　左のみちしは。ことなるふしもなく。又させるとかもなし。右の草のまくらにあかしかねたる。心はおかしきを。かのいくたひはかりねさめして。ものおもふやとのひましらむらんといへる歌は。冬の夜のあかしかたきことをいへるかおかしきなり。是は時雨するをとにいくたひといへるや。つゆけき草の枕にしけくまとろめるこゝちやすらん。たゝし右猶おもひいれたるにやと見ゆ。かつと申へし。

十六番

左　　　　兵衛佐

草枕たひねさひしき山かけにこの葉さそひて時雨ふるなり

右勝　　　　脩範朝臣

住の江のまつかはひねを枕にて波うちそふる時雨をそきく

左のやまかけのたひね。このはさそひてといへる。すかたよろしくはきこゆ。

右時雨をそきくといへるをはりのこと葉そ。いかにそみゆれと。なみうちそふるなといへるも。よろしくきこゆるうへ。なをすみのえのまつのしたは。波のこゝろもよすへくやとて。右のかちとす。

十七番

左勝　　　　公重朝臣

今宵しもあやにくにふる時雨かなまはらにさせる柴の庵に

右　　　　圓實

草枕つゆけきたひのくれはとりあやにくに又しくれふる也

左右のしくれ。ともにあやにくにふれるにとりて。右歌はくれはとりとをきて。あやにくにとつゝけたる。おかしくはきこゆるを。つゆけき旅のといひて。くれはとりといへるほと。おもひかけぬこゝちやすらん。左はくれはとりはなれたるあやは。ことなることはなけれと。まはらにさせるなといへるわたり。うるはしくきこゆ。よりて左のかちとや申へからん。

十八番

左持　　　　經盛朝臣

なにはかた芦のまろやの旅ねには時雨は軒の雫にそしる

右　　　　賴輔朝臣

津の國や（のイ）こやの旅ねに時雨して何かはもらむ芦の八重ふき

左右ともに。攝州芦のやの旅宿なり。たゝし。左はすかた心とかなくはみゆるを。歌合にはおなし文字よつありなと。ふるくはとかめたるおりしもあれと。のゝ字よつあるは。ことにとかときこえす。たゝたひねにはとをきて。またしくれはといへる。はの字やふたつなれと。みみとまりてきこゆらむ。右おなしくもらぬ時雨なれと。しくれしてと置て。なにかはもらむといへるや。すこしことたかひてきこゆらむ。しくるともなと いへらはこそは。なにかはといはむにはかなはめとおほえ侍。いかか。たゝしいつれもあしのやのしくれなれは。勝負きゝわきかたし。よりて持とす。

十九番

左勝　　　　小侍従

草枕おなしたひねの袖に又夜半のしくれも宿はかりけり

右　　　　實守朝臣

いほりさすやまちは過ぬ初しくれ故郷まてやめくり行らん

左歌おなしたひねの袖に又といひて。よはのしくれも宿はかりけりといへる。すかたいとおかし。

右歌もこゝろおかしくみゆるうへに。はつしくれとをきて。ふる里まてやとをけることは。よくをかれたりとこそ見え侍る。たゝし左歌心なをよろし。かつと申へし。

二十番

左　　　　實家卿

旅ねするいその苫屋の村時雨あはれを波のうちそへてけり

右勝　敦頼

もりもあへすまたきにぬるゝ袂哉梢しくるゝ松のしたふし

左いそのとまやの時雨に。あはれをうちそふらむなみの聲は。けにあはれにこそおしはかられ侍。うちそへてけりといへるをはりことはや。すこしかなはすきこゆらん。

右こゝろすかた又いとおかし。松のしたふし。あたらしきことなるを。ふるくいひならはしたらむやうにきこゆらんとそ思ふたまふれと。もりもあへすまたきにぬるゝなといへる。こすゑしくるらん松のした。けにさこそ侍らめと。こゝろほそくきこゆ。よりてなを右のかちとす。

二十一番

左持　成範卿

かきくもり旅ねの庵に時雨して露けきさまさる草枕かな

右　盛方朝臣

まはらなる庵よりもりて村時雨おりしくならのはにそ驚

左いとなほくきこゆ。

右わりなくはこゝろさして見ゆるを。いほよりもる時雨の。しけるならの葉におとろかんほとふしたらんみのほと。心ほそさすきてやあらん。たゝし右歌の下の句むけに思ひいれすみゆ。はからひあはするに。持とや申へからん。

二十二番

左　清輔朝臣

いなむしろしきつの浦の松風はもりくる折そ時雨ともしる

右勝　實綱卿

大空も都のかたをしのふらし今宵はことにうち時雨つゝ

左歌まつの風に時雨をまかへて。もりくるおりそ時雨ともしるといへる。心よろしくみゆるを。このいなむしろは。しきつの浦といはんためをけるなるへしとはみゆれと。いなむしろのほんたいを思ふに。しきつのうらにことよるへしとこそおほえ侍ね。かはそひやなきのかけ。もしは田家なとのたひねならは。おかしかるへし。住吉の松の下には。いなむしろしくへしともおほえ侍らぬなり。またいなむしろはかりにて。旅のこゝろあるへしともおほえぬ。いかゝ。

右歌は大空とをけるより。都の方をしのふらしなといへるすかた。歌合の歌といひつへし左歌うけ給ひらくへけれと。これに過たることなくや。をして以レ右爲レ勝。

二十三番

左勝　俊惠法師

もしほ草しきつのうらの寝覺には時雨にのみや袖はぬれける

右　實國卿

旅ねにははにふのこやの板ひさし時雨のするをさやに聞ゆる

左もしほ草しきつのうらのといへるこそ。いとおかしく。かくそいふへかりける。末のくにしくれにのみやといへるも。心こと葉やすからすこそ見え侍れ。右ははにふのこや。時雨のおとさやかならんも。ゆへなきにはあらねと。左歌ことによろしよりてかつとす。

二十四番

左勝　實房卿

風の音にわきそかねまし松かれの枕にもらぬ時雨なりせは

右　　　頼政朝臣

旅の庵は嵐にたくふよこ時雨しはのかこひにとまらさり覧

左歌わきそかねまし松かれのとをきて。枕にもらぬ時雨なりせはといへる。こゝろすかた又いとありかたくも侍かな。

右歌ことさまことはつかひ。おかしくはみゆるを。よこ時雨さはあることとなから。優にもきこえすやあらむ。下のくの。しはのかこひにといへるにの字も。いさゝか心たらぬこゝちす。左尤爲レ勝。

二十五番

左勝　　　実定

うち時雨物さひしかる芦のやのこやのね覺に都こひしも

右　　　俊成卿

あはれにもよはにすくなる時雨哉なれもや旅の空に出つる

左歌ものさひしかるとをき。みやここひしもなといへるすかた。既幽玄之境に入。よろしくこそきこえ侍れ。

右歌は判者拙歌に侍りけり。依レ例不レ能レ加レ判矣。

一番　述懐

左勝　　　兵衛佐

昔とて身の思ひ出はなけれとも君忍ひねそたえすなかるゝ

右　　　脩範朝臣

幾世しもありへん物としらぬ身はうきもつらきも何か歎かむ

左歌身のおもひ出はなけれともなといへる。すかた優にみゆ。心もそのゆへはしらされとも。舊主をしのへるおもむき。あはれに侍めり。

右歌心のたつる所いとうるはしくはみゆ。たゝし右はさして思へる所なきを。左はなをしのへる所あり。かつと申へくや。

二番

左持　　　公重朝臣

住吉ときこゆる里にいとはすはをき所なき身をやなけかん

右　　　円実

すきていにし秋に後れて霜かるゝきくや我身のたくひ成覽

左右のうた。いつれもことにとかなくはきこゆ。たゝしかやうの歌。すこしは人によることとあり。左歌は心くるしきやうなから。又をろかにきこゆ。女の歌ならは。優なるへき。

右歌は孤露のよしをうれへたるにとりて。貴種のやから。しかも花の最第の心にかなはゝ。いよ／＼おかしかるへし。たゝしかの延久第三のみこの歌に。うへなきしきみもなき世にとしへたるはなは我身のこゝちこそすれといへる歌にやかよひて侍らん。いつれも作者おほつかなく侍ほと。暫爲レ持。

三番

左持　　　経盛朝臣

哀とや神も思はん住の江のふかくたのみをかくる身なれは

右　　　頼輔朝臣

たのみつるこのひとむらの人ことに千歳をゆつれ住吉の松

左歌ふかくたのみをなといへるわたり。よろしといひつへし。

右歌のこのひとむらは。このたひのうた人をいへるに

や。又たゝわかひとつ家のやからにや。いかにもともにたのむこゝろあさからす見ゆれは。又持と申へし。

四番

左　　小侍従

あくかるゝ玉とみえけむ夏虫のおもひは今そ思ひしりぬる

右勝　　實守朝臣

いはすとも思ひはそらに知ぬらんあまくたります住吉の神

左歌心ふかゝらんとは見えたり。たゝしこれはかの泉式部か。さはのほたるもわか身よりといへる歌を思ひてよめるなるへし。さらはあくかるゝたまとほたるを思ひけむなとやうにあらはこそ。いつみしきふか思ひをしるにては侍らめ。これはたまと見えけむ夏むしのといひつれは。なつむしのおもひを思ひしるにそきこゆる。さらはかのかつらのみこによみてたてまつりける。身よりあまれるおもひなりけりといへるうたのこころにそかなひぬへき。さてはまたあくかるゝたまと見えけんといへることは。たかふへくや。

右歌はことにこと葉つかひなとえんにはあらねと。思ひはそらにといひて。あまくたりますなといへる。ゆへありてきこゆ。右のかちとすへくや。

五番

左勝　　實家卿

くらゐ山峯のさくらをかさしても人は物をや猶おもふらん

右　　教頼

有て社あらぬ姿に成もせめうしとていかゝ身をはなくへき

左すかた心いとおかし。作者おほつかなくも侍かな。就中人はものをやなを思ふらんといへる。すかたことによろしくそ聞え侍れ。

右もうしとていかゝなといへる。もしつゝきよろしくはみゆれと。猶以レ左爲レ勝。

六番

左　　成範卿

何事をあけぬくれぬと急く覽はかなき夢のよとはしる／＼

右勝　　盛方朝臣

かすならぬ身をうき草と思へともなそよと共に沈む成らん

左歌世上のならひをなけき。ゆめのうちのまとひをさとれる。以其理しかるへし。

右歌しつむなるらんなといへるすかたは。ことにゆうにしもあらされと。身をうき草とをきて。なとしつむらんなといへる。おかしといひつへし。右のかちなるへし。

七番

左持　　清輔朝臣

わかさかりやよいつ方へ行にけむしらぬ翁に身をは讓りて

右　　實綱卿

いかなれはわかひとつらの變るらん羨しきは秋のかりかね

この左右又ともによみ人によるへき歌なるへし。左心おかしくはみゆるを。壯年之辭レ身去たれの人もおなし。うらみしたふへきことなれと。さかりの時。殊爲ニ齡華容一。或帶ニ重職頭官一。或列ニ羽林蘭省一なとゝて。ことにおもひいてあらむ人の。わかさかりやよいつかたへなといへらん。いよ／＼おかしくきこゆへきなり。されはさためてさやうの人の御歌なるへし。いとおかし。右歌は

わかひとつらを いかなれはとあやしみて。うらやましきは秋のかりかねといへり。あきのかりのつらは。兄弟のついてあやまたすとこそは見えて侍れ。もしそのついてたかへたることなとの侍にや。しからは又いとおかし。これもよみ人おほつかなきほと。暫爲レ持。

八番

左　俊惠法師

よの中をうみ渡りつゝ年へぬることはつもりの神や助けん

右勝　實國卿

家の風我身の上にすゝしかれ神のしるしをあふくとならは

左うみわたりつゝといひて。ことはつもりのかみやたすけむといへる。こゝろはおかしきを。うみわたりつゝといへることとは。ことに庶幾せられすやきこゆらむ。右神のしるしをあふくとならはといへる心おかしくきこゆ。以レ右爲レ勝。

九番

左　實房卿

いとふともなきもの故に世中の哀をさすからちなけきつゝ

右勝　頼政朝臣

徒にとしもつもりの浦におふる松そわかみのたくひ成けり

左歌ひとつのすかたなり。心もさることゝきこゆ。右歌としもつもりのうらにおふるといひて。まつそわかみのなといへる。いとよろしくみゆ。よりて右のかちとす。

十番

左勝　實定卿

數ふれは八歳經にけり哀れわか沈みし事はきのふと思ふに

右　俊成卿

徒にふりぬるみをも住吉のまつはさりともあはれ知らん

左歌たれの人のなにとならむとはへること侍らねと。たゝうちみる歌のおもて。心すかたいみしくあはれにも侍かな。まことによろつのこときのふけふとおほゆるを。年つきのすくること〔さ〕のみこそは侍を。かそふれはやとせへにけりあはれわかといへるすかた。いとしのひかたくこそ見え侍れ。

右歌かみのくかやうのこゝろつねのことに侍へし。下の句又すこし心をやれる所あるやうにみえ侍れと。いさゝかおもふ所ありて。判者愚老の拙歌に侍也。又依レ例不レ加レ判。たゝし神慮定在レ左歟とそおほえ侍。

十一番

左　兵衛督

ね覺して浮世を思ひあはすれはまとろむ夢にかはらさり鳬

右勝　通親朝臣

住の江のうきにおひたるしほれ芦を波ひきたてよ神の惠に

左歌うきよを思ひあはすれはといへる。もしつゝきゆうにはみゆ。ことに身に思ふことなからん人は。たゝよのはかなきなとはかりを思はむ。しかあるへきことなり。

右歌はすみのえのとをき。うきにおひたるなといへる。このうらにことよれり。右のかちとすへし。

十二番

左勝　季經朝臣

ほのかにてあるかなきかに過るみや波まにまかふ螢の漁火

右　隆信

住よしの猶たのみこししるしありて歸る都に思ひ出もかな

左なみまにまかふあまのいさりひといへる。すかたことはゝよろしく見ゆ。ほのかにてといへるや。いさりひのひとかたはいとおかし。人のよをすくるかたや。ほのかならんことといかゝ。

右うたさま。いてもかなといへるや。歸りなむするところにあることをこそ。おもひいてとはいふへけれ。かくてはいとあひかなひてもおほえぬにや。又これはかへらんまゝになと思ふこゝろにや。それもこゝろみしかきやうにきこゆ。左すかたよろしきにつきて。かつと申へし。

十三番

左持　政平

我もいかて世になからへて住吉の松の千とせの行末もみん

右　親重

たとへけん浪は我身にあらはれぬ漕行舟の跡はほかゝは

左いとありかたきこと思へるにやあらん。

右なにゝたとへむあさほらけといふ歌をおもひて。渭濱の浪おもてにあらはれゆくことをなけきける心。おかしくは見ゆ。ほかゝはといへるほさ。すこし荒凉にやきこゆらん。たゝし左は祝言にこゝろさし。右はつねなきにことよれり。旨意雖ㇾ懸隔ㇾ勝劣可ㇾ等同ㇾ。

十四番

左勝　經正

みやゐして幾世へぬらん住吉の松吹風も神さびにけり

右　仲綱

世中をいとふ心はさきたちていつまてとまるうき身なる覽

左右の述懷。左はたゝみや居して幾世へぬらんと思ふはかりを。おもふことにせるにや。

右はよの中をいとひなから。いつまてとまるへきにかとのみおもへる。いつれをまさると申へしとは。思ふたまへわかれと。おほん神にことかゝれるにつきて。左のかちとや申へからん。

十五番

左　卿

わかの浦と思ふ計りを賴みにて宿も定めぬあまのこそうき

右勝　季廣

住吉のまつことなくて徒に年はつもりのうらみをそする

左こゝろくるしくは聞えなから。まことにわかの浦とおもはむも。行すゑたのみありぬへし。

右はとしはつもりのうらみはかりにて。まつことなきは思ひしられ侍れは。右勝さ申へし。

十六番

左勝　廣盛

世にすめと人しれぬ身やしほりする深山かくれの谷の下水

右　智緣法師

あしからむ難波のことはかねてよりちかくて守れ住吉の神

この右のうた。あしからむなにはのことなとよそへなから。もしつゝき。たゝものをいへるやうにやきこゆらん。

左の谷の下水は。いひなかれたるやうに見たまふれは。爲レ勝。

十七番

左勝　大輔

住吉のなこの濱へにあさりしてけふそしりぬるいけるかひをは

右　定長

歎かしなよは定めなき事のみかうきをも夢と思ひなせかし

左歌心しかるへし。すかた又ひとつの躰なるへし。ことのみか右歌もひとつの俗にちかきすかたなれと。なをむけにすてたること

と思ひなせかしなといへる。なをむけにすてたること葉なり。左をこそはかつと申へし。

十八番

左持　伊綱

住吉のきしかたのよに引かへて花咲まつのみともならはや

右　季定

たのみこし神のしるしに浮世をも住吉とたに思ひなりせは

此つかひの左右のことはつかひ。またたはふれことにみゆ。なをはなのうたは。すこしも思ふへくや。おなしほとなるへし。

十九番

左勝　祐盛法師

やはらくる光を頼むしるしにはこむよの闇を照ささらめや

右　憲盛

神に我たのみをかけてまつなれは住吉にこそ身をは術さめ

左うたことにめつらしき心にはあらす。又もしつゝきもやすらかにそ見ゆれと。心の思ふ所こそあはれに侍。右歌たのみをかけてまつなれはなといへるは。おかしきやうなれと。歌のたけ左なをすこしはまさるへくや。

二十番

左持　邦輔

身のうさを忘れ草こそ岸におふれむへ住吉とあまも言けり

右　堀河

世をわたる道をたかへてまとふ哉何れの方に行かくれまし

左人わすれ草おふといふなりといふ歌をおもひて。身のうさをとひきなしたる心。よろしといひつへし。右かゝる歌のすかたにてはおかしきを。かの俊頼朝臣の。わふるやまよにふるみちをふみたかへとよめるにそ。きゝなれたるこゝちすれと。いつれのかたになといへるすゑのく。あはれにもきこゆ。持なとや申へからん。

二十一番

左持　朝宗

數ならぬ身こそ思へは嬉しけれ憂につけてそ世をも厭はん

右　懷綱

長らへはかくてのみやははてんとて過にし方は慰みもしき

左身こそおもへはなといへる。もしつゝきゆうにみゆ。右はてんとてとをけるほとそ。つよくきこゆれと。すきにしかたはといへる心又よろし。よりて又持とす。

二十二番

左　源宗長

おひやらぬいはねの松はわれなれや久しくよゝに緑なる哉

右勝　藤原憲經

池水のいひいてすとも思ひかれふかきられへを神はしる覽

左歌ひさしくよゝにといへる。心はよろしくきこゆるを。松のみひとりみとりなるかなといへる歌にそ。聞なれたる心ちする。

右歌池水のいひいつなと。又常のことなれと。ふかきうれへを神は知らむといへる。こゝろこもりて少しまさるへくや。

二十三番

左勝　中納言

津の國の難波のことも芦のねのこのよはかくて枯果ねとや

右　素覺

いかてなをまとふ浮世を背きなは誠の道をふみもたかへし

この左右うたのこゝろともにいとあはれにみえ侍にとりて。左歌なにはのこともあしのねのとをきて。このよはかくてかれはてねとやといへる心すかた。誠になには江のなみそてにかゝるこゝちし侍は。以レ左爲レ勝。

二十四番

左持　靜賢

なに事をまつとはなしに住吉の神に心をかけぬまそなき

右　寂超

いたつらにおひにける哉古の人のうへけんすきならなくに

左歌まつとはなしにとなといへる。こゝろいとおかしくきこゆるを。

右歌人のうへけむすきならなくにと詠せらる。すかた又よろしくみゆ。よりて持とす。

二十五番

左勝　寂念

あやなしなたふさにすゝをとりなから思ふ心のかつ亂る覽

右　佐

何事をまつとはなしになからへていつ住吉と思ふへき身そ

左歌おもふこゝろのかつみたるらんといへるすゑの句。いとよろしくこそ侍めれ。たゝしたふさにすゝをといへるこそ。すゝはこゑにいふなり。たゝことはにやきこゆらむ。

右歌いつすみよしとなとよそへたるは。おかしきやうなれと。をはりのことはいひすてたるやうにやあらん。左むねの句そ。おもふへくみゆれと。すゑのもしつゝき。いとおかし。かつとすへし。

そも／＼和歌のうらのみちは。ちひろのうみふかくして。その所々をはかることかたく。萬里の波はるかにして。そのはてをしることとなし。いはんやしほちはるかにをくあみの。ひきひきなる人の心なれは。あまのうけふね。こゝろひとつにさたむることとありかたくなんある。この神風いせしまには。はまをきとなつくれと。なにはわたりにはあしとのみいひ。あつまのかたにはよしといふなるかことくに。おなしきうたなれとも。人の心より／＼になむあるうへに。たまのことはにきすをましへ。いさこのなかにもこかねあることあるを。をしほ山のをしこめて。よしの河のよしとのみいひなかさは。このみちのをとろへゆかむことをなけきおもふあまりに。かくれてはみちをまもる神におそれ。あらはれてはみちをこのむともからにはゝかりなから。あさきことのいつみ。をろかなるこゝろのみつにまかせて。見ゆるところを。しるしあらはし侍る事をなむ。よるのころものかへす／＼

そてのこほりのおもひむすほゝれ侍ぬる。

左

	勝	負	持
實定	勝三		
實房	勝二	負一	
俊惠	勝二	負一	
清輔	勝一	負一	持一
成範	勝一	負一	持一
實家	勝一	負一	持一
小侍從	勝一	負一	持一
經盛	勝一		持二
公重	勝一	負一	持一
兵衞佐	勝一	負一	持一
兵衞督		負二	持一
季經	勝一	負一	持一
政平		負二	持一
經正	勝一	負一	持一
卿	勝二	負一	
廣盛	勝一		持二
大輔	勝二		持一
伊綱		負一	持二
祐盛	勝一	負一	持一
邦輔	勝一		持二
朝宗	勝一	負一	持一
源宗朝	勝一	負一	持一
中納言	勝一	負一	持一
靜賢	勝一	負一	持一
寂念	勝一	負一	持一

右

	勝	負	持
俊成		負三	
賴政	勝一	負二	
實國	勝一	負二	
實綱	勝一	負一	持一
盛方	勝一	負一	持一
教賴	勝一	負一	持一
實守	勝一	負一	持一
賴輔		負一	持二
圓實	勝一	負一	持一
脩範	勝一	負一	持一
通親	勝二		持一
隆信	勝一	負一	持一
親重	勝二		持一
仲綱	勝一	負一	持一
季廣	勝一	負二	
智經		負一	持二
定長		負二	持一
季定	勝一		持二
憲盛	勝一	負一	持一
堀河		負一	持二
懷綱	勝一	負一	持一
憲經	勝一	負一	持一
素覺	勝一	負一	持一
寂超	勝一	負一	持一
佐	勝一	負一	持一

建春門院北面歌合　嘉應二年十月十六日

題

關路落葉　水鳥近馴　臨期違約戀

作者

左方	右方
按察使公通卿	皇太后宮大夫俊成卿
前大納言實定卿	備中權守重家卿
權大納言隆季卿	淸輔朝臣
權大納言實房卿	右中將實家卿
左衞門督實國卿	左京權大夫賴政朝臣
左大辨實綱卿	右少將隆房朝臣
右中將實守朝臣	右少將通親朝臣
左少將脩範朝臣	右馬權頭隆信
散位盛方朝臣	勘解由次官親宗
散位季廣	伊豆守仲綱

判者

皇太后宮大夫俊成卿

一番　關路落葉

左持　按察使公通卿

こえやらてふまゝく惜く見ゆる哉紅葉の色にはゝかりの關

右　皇太后宮大夫俊成卿

色々のこのはに路も埋れて名をさへたとるしら川の關

左歌もみちの色にはゝかりの關といへる。こゝろおか

しくこそ見え侍るめれは。右歌は判者のつたなきこと
のはに侍りけりとは見たまへなから。作者をかくされ
て侍れは。しら川の關は名になかれたる所なるを。しゐ
て申おとさんも。あやしくやとおもふたまふ。また左の
うたもいとおかしく見ゆる上に。一番のつかひ。誠には
はかりの關は。はゝかり多くおもふ給へて。持なとにや
とさため申訖。

二番

左勝　前大納言實定卿

山おろしに浦つたひする紅葉哉いかゝはすへきすまの關守

右　備中權守重家卿

紅葉するふしの山風吹けらし錦をたゝむなみのせきもり

左歌浦つたひするとなき。すまの關守といへるこゝろ。
最おかしく侍るかな。山おろしといへる五文字も。こと
によくおかれたりと見え侍れは。右の歌も姿こと葉き
よけにはみゆるを。これは清見かせきにこそはと。おし
はかられなから。歌のおもてには見え侍らねは。たゝ波
の關といふせきのあるにやと。すこしおほつかなくや
なと侍しなり。よりて左を勝とす。

三番

左　權大納言隆季卿

逢坂の關のいはかとたゝきあけてこのはもてくる風の使は

右勝　清輔朝臣

なみの上に紅葉こきおろす清見かた山の高根に嵐吹らし

左の歌ふるまひ心はえおかしくは見ゆるを。うた合の
歌にとりては。いかにとかや申侍しを。關のいはかとは。
良暹法師のひかことゝいひたりけることなりき。しか
れともかの關のいはかと踏ならし山たち出るきりはら
の駒といふ歌を。いはの廉といへるそ。巖門といふこと
は。つねのことなれは。あふ坂の關に。せきのいはかと
とよみたらむ。さらにとかあらしとおもふ給へて。その
ことにおきては。さやうに申侍しなり。右もみちこきお
ろす清見かたといへる。すかたよろしくはみゆ。山の高
ねといへるや。いつれの山にかと。おほつかなくきこゆ
らむとは申侍しか。歌のさまの歌あはせの歌とや　おほ
えたらむとて。以レ右爲レ勝。

四番

左勝　權大納言實房卿

きよみ潟せきにとまらて行舟はあらしの誘ふこのは也けり

右　右中將實家卿

道もせに紅葉つもれる秋をさへとゝめてみゆるあふ坂の關

左歌心詞いとおかしく侍。たゝし一葉の舟なと云。つね
のことなれと。清見かせきのあらき渚をすきゆく人。木
のはを舟と見むことやいかにと。すこしうたかひ侍し
かとも。けにあまのなかせる舟なと。みなよむことなれ
は。難におよふへからす。右歌もこゝろはおかしくみゆ
るを。あふ坂のせきやあきをとゝむることはかりは。い
つこの關にてもありぬへからぬとおもふ給へて。すか
たも猶いとおかしく侍れは。左を勝とす。

五番

左　左衛門督實國卿

をとは山ぬさと散かふ紅葉はを關もる神や我物とみる

右勝　　左京權大夫賴政朝臣

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉ちりしく白川のせき

左歌をとは山ぬさとちりかふとおきて。關もるかみやなといへる。こゝろいとおかしくは見ゆるを。すゑの句やすこしいかゝと申侍しにや。右歌はかの能因法師の秋かせそ吹しら川の關といふ歌をきて。かやうによみいてん事ありかたくは侍れと。なを上の句の。かすみと共にたちしかとゝいへるやうには。いかてかはとはおもふ給へなから。もみちのにしき立けん日かすの程も。心ほそく思ひやられ侍らへに。人々もよろしきやうに申侍しかは。右をもて勝としおはりぬ。

六番

左持　　左大弁實綱卿

嵐ふくあふ坂山のもみちはゝ散つもるこそ關と見えけれ

右　　右少將隆房朝臣

逢坂の關の紅葉のからにしき散らすは袖にかさねましやは

左右あふさかのすかた詞。ともにおかしくはみゆるにとりて。左は關とみゆるといふことや。ちかく聞なれたるらむと申侍し也。右はちらすは袖になといへるは。いとおかしく。あふさかのから錦なと。ことにあひよれる事なきにとりては。いつくにてもありぬへきやとて。持と申侍るなるへし。

七番

左勝　　右中將實守朝臣

紅葉はを關もる神に手向おきてあふ坂山を過るこからし

右　　右馬權頭隆信

不破の山もみち散かふ梢よりあらしをこさぬ關もりもかな

左歌關守神に手向おきてなといへる。心すかたいとおかしくみゆ。右歌もみち散かふ木すゑよりあらしをこさぬなといへる心。よろしくは聞ゆ。人々も左樣に侍しを。紅葉すてに散かはんによりては。あらしをこさてことなるかはとおほゆるらへに。ふはの山とをけるはしめの句。心ゆかす思給へて。以レ左爲レ勝とさため申侍しなり。

八番

左　　左少將脩範朝臣

山おろしに紅葉しくれは淸見かた錦をかくる浪の關守

右勝　　右少將通親朝臣

散かゝる紅葉のにしきうはきにて衣の關をこゆる旅人

左歌きよみ瀉とをき。にしきをかくるなといへる。すかたはよろしく見ゆるを。右もみちのにしきうはきにて衣のせきをなといへる心はえ。なをおかしくきこゆれは。以レ右爲レ勝。

九番

左持　　散位盛方朝臣

見るからにとまらぬ人そなかりける散紅葉や不破の關守

右　　勘解由次官親宗

紅葉はの皆くれなゐに散しけは名のみなりけりしら川の關

左すかたふるまひいとおかしくみゆ。これも不破の關といへるや。ことによれることなからむ。右名のみなりけりしら川のせきといへる心。いとおかしくはみゆるを。みなのことは。散しけはとをけるほとなとや。すこ

し耳にとまるらんとおもふたまへしうへに。一番のつかひに。いくはくもかはらすみゆるを。ことによろしきよし引申さんもいかゝとおほえしほとに。おなしほとや〔にやイ〕とさため侍しを。猶おもふたまふれは。白川のせきはまさるへくやとおほえ侍れと。すかたことはをなすらへて。持と定申けるにや。

十番

左勝　散位季廣

からにしき立かさねてもみゆるかな衣の關にちれる紅葉は

右　伊豆守仲綱

あふさかの關のを川の色つけは梢さひしきをとはやま哉

左歌八番の右の歌に。いくはくかはらさるへし。これもおかしくは聞ゆ。右歌落葉なことはにあらはさすして。題をまはせる心は。おかしくみゆるほとに。題の歌はまはす文字の侍るなり。この題の落はゝ。たゝあらはによむへき也。關のをかはの色つき。音羽山のこするゑさひしからんはかりは。猶おほつかなくやとて。左爲ν勝。

一番

左持　水鳥近馴　按察使

なれにけりくたす筏のこす〔さイ〕棹にたちもさわかぬあちの村とり

右　皇太后宮大夫

君か代をのとかなりとや水鳥も玉の汀につはさしくらむ

左歌くたすいかたのこ〔さイ〕す棹になといへることは。いひしりていとおかしく社侍れ。右歌またみつからのあやしの歌と見侍しかは。左勝と申侍しを。人々祝のこころあり。勝へしなと侍しかは。さらは持なとにやと定申侍にき。但瑤池なといふことこそあれ。見きはやいかかといふことの侍しを。よみ人をかくされたるゆへに。くはしくもえ申侍らさりしなり。瑤池玉砌なとは。詩にも常のことなり。みきはゝやまと詞なれは。本文はなにかは侍らむ。是は水のきはといふことなり。又玉といふ事は。河をもほむる時のことなれは。みきりとても侍へかりしをといひつれは。ことはもをとりみつもちかゝらむため。やまとことはにつきて。おまへの汀につはさをしかせて侍しはかりなり。歌もことなる事なきを。祝ことによりて。持とまかり成しこそ。かたはらいたく侍しか。

二番

左　前大納言

水鳥にうきねの床をならふれははなれもやらす立ゐなく也

右勝　新三位

池水を宿の汀にたゝへもて手かひにそするあちの村鳥

左歌うきねの床をならふれはなといへる詞。いひなれてよろしくは見ゆ。右歌たゝへもてと置。あちの村鳥なといへる詞。ことにえんには見えねと。題のこゝろいみしう近馴てきこゆ。人々もおなしきやうに侍しうへ。左のうきねの床も。舟なとにこそおしはかられ侍なから。すこしおほつかなくやと思ふ給へて。右爲ν勝とさため侍しにや。

三番

左持　藤大納言

を舟こく人のあたりに馴に鳧をしのうきねもおとろかぬ迄

右　　　　　　　　　　　　　清輔朝臣

鴛鳥のはかせも近くみなるゝはわかもとゆひの霜を拂ふか

左歌をしのうきねも　おとろかぬまてといへる。心すかたいとおかしくみゆ。右のもとゆひの霜心ほそく。ちかく馴たる心なとは侍るを。をし鳥のかうへの霜と羽をかはせるや。無下にうちとけてきこゆらんと。人々申侍しうへ。すこしかといへるおはりのことは。やまと歌とも覺さらむとは。おもふたまへなから。左歌も句のはしめと。をし鳥のをの字いかゝと見たまへてなを持とす。

四番

左　　　　　　　　　　　　　權大納言

を舟漕ともろにもなをたゝしとやつなてをくるゝ鴨の村鳥

右勝　　　　　　　　　　　　三位中將

汀にてをしの羽吹をふくからにうは毛の霜を袖にかけつる

左つなてをくゝるなといへる。心すかたいとおかし。右歌うは毛の霜を袖にかけつる　なといへる詞つかひ。又えんに侍は。いみしくおもひわつらひ侍しを。すこしの理をも。勝負あるへきやうに侍れは。左は心はいとおかしくみゆるを。ともろといへるわたりや。少しいかにそとおもふ給へて。をしのはふきを勝に定侍しなり。

五番

左　　　　　　　　　　　　　左衞門督

こやの池の玉もかるおにみなれてやをしの毛衣立も離れぬ

右勝　　　　　　　　　　　　頼政朝臣

子を思ふ鳰の浮すのゆられきて捨しとすれやみ隱れもせぬ

左歌心すかた最おかしく見ゆる。をしの毛衣は　古き歌あはせには。つるの毛衣とこそいへ。をしには詠すと難したる事なりと申人侍しかと。そのことゝ葉ふるく。つるの毛衣とし　ふともとよみ　置たるにこそあれ。おほかた鳥は毛を衣とするものなれは。かの文選の　おふむの賦にも。みとりの衣あをき衣のたくひなとこそ作たれ。また文にかもめを作にも。毛衣といへり。ふすまの中に鴛鴦のふすまと　いふこともあれは。をしの毛衣とよめらむ。更に咎あらしと思ふ給ふて。毛衣におきては。難あるましきよし申侍き。右歌に鳰のうきすの　ゆられきてといへる。心ことはわりなく求いてゝ。いとめつらしくみゆるに。子をおもふといへる五文字。ことはりとあはれにきこえ侍しかは。右の勝としおはりぬ。

六番

左勝　　　　　　　　　　　　左大辨

舟とむる入江にすたく鴨とりはおなし汀にうきねをそする

右　　　　　　　　　　　　　隆房朝臣

岸近み芦まの水にうきねして手飼ひになつくをしの鴨とり

左右ともに。おかしくはみゆるを。いさゝかの故を申侍に。ひたりは舟のあるを。おなしうきねにとりては。少まさるへくやとて。左爲ㇾ勝。

七番

左　　　　　　　　　　　　　實守朝臣

高瀨舟同し芦まにとまる夜はつかはぬをしも共ねをやする

右勝　　　　　　　　　　　　隆　信

すみなるゝ手飼の鴛やこれな覽たちゐるむらにたゝぬ番は

左の心詞おかしくは見ゆ。右もすかたこゝろは　よろし

きを。立ゐるむらにといへるや。むれゐる鳥のとも。むれたるたつのともいふこそあれ。むれとつかひたる事。きゝつかすありけむ。心よろしきやうに聞えて侍しかは。右のかちにやとさため侍しなり。

八番

左持　　脩範朝臣

たかせ舟のほる汀にゐる鴨はこすのつなてにも騒かさり鳧

右　　通親朝臣

めなれてや鴨のうきねも驚かぬあしまをわけて舟は巡れと

左こすつなてにもといへるもしつかひ。右のかものうきねもおとろかぬといひて。あしまをわけてなといへる。こゝろ言葉。ともにおなしく侍れは。持としおはりぬ。

九番

左持　　盛方朝臣

波まくら浮れの床に立よれは袖をそかはす鴛の毛ころも

右　　親宗

池水ををのか羽風に打たゝきむれゐる鳥に手かひをそする

左袖をそかはすなといへる。すかたよろしくは見ゆるをうきねの床やすこしおほつかなき様なり。毛衣のことは前に申畢。右のをのか羽かせにうちたゝきなとは。けにさることゝおかしくは聞えなから。まださすかにことなるよせなきにやとて。又持とす。

十番

左　　季廣

日をへつゝ馴にけらしなあし鴨の上毛の霜をはらふ計に

右勝　　仲綱

袖川の筏になるゝあしかもは立てもさきに遠くやはゐる

左歌もことなるとかなくは見ゆれとも。右の袖川といひて。たちてもさきにとをくやはゐるといへるこゝろ。けにさこそはとおかしくきこゆ。右勝とすへし。

一番　臨期違約戀

左　　按察使

あはし共かねていひせは中々に空しき床にまたてねなまし

右勝　　皇太后宮大夫

思ひきやしちの端かきかきつめて百夜も同しまろねせんとは

左歌むなしき床にまたてねなましなといへるわたり。心ほそくおほえて。おかしく思給へしを。右歌も様姿よろしきよし。人々定られしかは。をさへ侍るもあやしくやとて。右の勝にまかりなりしなるへし。

二番

左持　　前大納言

契きなみち芝の露分よとはまきの戸よりはかへすへしやは

右　　新三位

頼めこしけふを待たにありつるをこはいかにする心變りそ

左右すかた言葉えんには侍るを。みち芝のつゆわけよとはとよみあけ侍しかは。まきの戸よりはのはの字ともや耳にとまるらんと申侍しなり。右歌はことはをいたはらす。題の中をわたりて侍れと。歌しなかたむことはいかゝはとて爲レ持畢。後にうけたまはれは。左歌正本には分よとてと侍りけるものを。

三番

左　藤大納言

流れきていはものうちによる舟のねたくも波にさかのほる哉

右勝　清輔朝臣

神かけていひし契を引かふるいつきの柚のゆふくれのそら

左歌すかたこと葉。かゝるかたの歌ひとおもてはおかしく侍るを。いはもの中なにことにかとおとろく人も侍りき。ふる歌なとにはえ見をよひ侍らす。右うたすかたよろしくはきこゆるを。ゆふくれのそらとてはてたるや。すその残る心地すらむとはおもふたまへなから。また云すてたるすかたも。さてありぬへくやとて。右の勝になし侍しなり。

四番

左　權大納言

今やさは消果ぬへき露の命たのめしことのはにそかゝりし

右勝　三位中將

わひつゝは僞にたにたのめよと思ひし事をこよひこりぬる

この左右。ともにおかしくきこえ侍るを。右歌の心けにさもあることに聞え侍しかは。いますこしのことをもちて。以レ右爲レ勝。

五番

左持　左衞門督

小夜衣きて重ねよと契しをかへしてもさは夢にみよとや

右　賴政朝臣

いかにこは下もの紐をときかけて思ひかへつゝ又結ひぬる

左の夢に見よとやといへる末の句のすかた。いとおかしくきこえ侍りき。右歌臨期心にあまりさへちかくきこえ侍し。ひと〴〵も委しきやうに聞え侍し上に。ときかけてといへるほとも。けにおかしくやと思給へて。ややもせは右のかちになりぬへく侍しを。左方なかはほころひあらはれて。持にさたむへきよし侍しこそ。いとおかしく興ありて侍しか。しつかに見給へれは。えん有かたは。まことに左の勝とも申すへく侍けれと。なを持と見えたる事共の侍るなり。

六番

左勝　左大辨

なにせむに其僞をたのみつゝつらさをそふるけふと待らん

右　隆房朝臣

いかなれは人を汀によすれ共きしうつなみの立かへるらむ

左の末の句。いとおかしく見ゆ。右の人をみきはになと置。きしうつ浪のなといへるすかたこと葉。またおかしくは見ゆるを。違約心や。左は今少しまさるらむとて。爲レ勝畢。

七番

左勝　實守朝臣

つゐに又かはりはつともいたつらに契し程の言の葉もかな

右　隆信

賴めつゝあはぬ例は世にもあれとけふの暮迄さや契りつる

左のちきりしほとのことのはもかなといへる。さることと聞えて。すかたよろしくみゆ。右の上句あはぬためしは世にもあれとなといへるは。よろしくはみゆるを。末のさやちきりつるといへるほとは。よせある字のあらまほしきにや。かくいへはさやつかのまになとよそ

ふること。日ころおほく侍る。左の勝とす。

八番

左持　脩範朝臣

飛鳥川ふち瀬にあらぬ中なれときのふ頼めてけふ變りぬる

右　通親朝臣

今暫し空たのめしにもなくさまて思ひ絶ぬるよひの玉章

左歌あすか川によせて。きのふたのめてなといへるすかた心おかしくきこゆるを。右のそらたのめにもなくさまてとをきて。思ひたえぬるよひの玉つさといへる末の句。ことによろしく侍るなり。但左もかみしも相叶たり。仍持とすへし。

九番

左勝　盛方朝臣

杣川の淺からすこそ契りしかなとこのくれを引たかふらむ

右　親宗

歸りぬと今になりては何かいはん思ひ定めて頼めましかは

左すかた詞おかしく いひつゝけ侍。そま河このくれなとや いひならはしたることならんと申侍しを。右歌の末はおかしくきこゆ。上の句やいかにそ思ふ給ふるに。なをよ左歌もさすかに さしてそのかたともなけれと。しあるやうにもやとて。可ㇾ勝哉と申侍しなり。

十番

左持　季廣

照月のおほろけならす契しはそらたのめ共けふこそはしれ

右　仲綱

このくれをたのめしいもか玉章のもしはかり社今も變らね

左歌すかた詞いとおもしろく。歌あはせの歌といひつへし。右歌心いとおかしく。文字はかりこそ今もかはらねといへる。いまのことは尤よろしくきこゆ。但かれ是をかよはしなすらへて。爲ㇾ持了。

左方		右方	
公通卿	持二　負一	俊成卿	勝一　持二
實定卿	勝一　負一　持一	重家卿	勝一　負一　持一
隆季卿	持一　負二	清輔朝臣	勝二　持一
實房卿	勝一　負二	實定卿	勝二　持一
實國卿	持一　負二	賴政朝臣	勝二　持一
實綱卿	勝二　負一	隆房朝臣	持一　負二
實守卿	勝二　負一	隆信	勝一　負二
脩範朝臣	持二　負一	通親朝臣	勝一　持二
盛方朝臣	持二　勝一	親宗	持二　負一
季廣	持一　勝一　負一	仲綱	勝一　負一　持一

右建春門院歌合得一本挍合了

群書類從卷第百八十七

和歌部四十二 歌合八

廣田社歌合 承安二年十月十七日

題

社頭雪　海上眺望　述懷

作者

左	右
按察使公通	太宰大貳重家
前權大納言實定	右京權大夫頼政
大皇太后宮小侍從	權大納言實房
權大納言實國	源師光
觀蓮左京大夫教長入道	左大辨實綱
參河內侍	宰相中將實守
俊惠法師	皇太后宮大夫俊成
左兵衞督成範	盛方
左近衞中將實家	登蓮法師
前齋宮大輔	大皇太后宮亮經盛
左近衞中將實宗	左馬權頭隆信
左近衞中將頼實	皇后宮亮季經
左京大夫脩範	寂念法師
神祇伯顯廣王	道因法師
賀茂縣主政平	憲盛
賀茂縣主重保	通清
資隆	左兵衞佐經正
廣季	廣言
親重	朝宗
季廣	仲綱
顯綱	隆親
伊豆守仲綱	大炊御門右大臣家佐
季定	刑部權大輔廣盛
皇后宮權大進邦輔	安心
懷綱	祐盛法師
懷能	憲綱
智經	經平
阿闍梨性阿	淨緣法師
前齋宮中納言	素覺

判者

皇太后宮大夫俊成

一番　社頭雪

左勝　按察使公通

ゆふしての風に亂るゝたとさえて庭しろたへに雪そ積れる

右　太宰大貳重家

あさまたき雪降しける廣前に跡ふみつけは神やいさめむ

左歌風に亂るゝ音さえてなといへる姿。うたあはせの歌とおほえて。いとおかしくこそ侍るなれ。右歌心ことはいひかなへられて。社頭雪はかやうにみてはと見え侍るを。上下の句の初に同し文字ある事は。重き難にはあらねと。天德四年の内裏歌合にも。判者とかめ申されたることに侍れは。左うるはしく難なく侍らんにとりては。聊のこともいかゝはとて。以レ左爲レ勝。

二番

左持　前權大納言實定

何ことに身をも惜まて白雪の神のいかきをこえんとすらむ

右　右京權大夫頼政

しめのうちに夜をとをす哉下消ぬかしらの雪を打拂ひつゝ

左これは雪のいみしく深くふりて。いかきをもこえぬへき心なるへしとはみえ侍れと。心雪よりも深く。義王よりもかたくして。愚老の判者をよひかたくそ侍る。右かしらの雪をうちはらひつゝといへる心。いとあはれには侍るを。これはまことの雪やすくなからんとそ見え侍れと。した消ぬとをけるなるへし。社頭に通夜せるこゝろもおかしく侍れと。左雪心もふかく侍れは。勝劣さためかたくて。持と申侍るへし。

三番

左　大皇太后宮小侍從

解るまも積るもえこそ見えわかね豊みてくらにかゝる白雪

右勝　權大納言實房

山あゐもてすれる衣にふる雪はかさす櫻のちるかとそみる

左白妙のみてくらに雪をかけて。解るもつもるも分かたからむ。いとおかしくは侍るを。右のすれる衣に雪をおひて。かさしの花にまかへられて侍る心姿。いとめつらしく艶に侍るうへに。左にはさきにも侍る句の初の文字も。毛をふくにやと見え侍れは。以レ右爲レ勝。

四番

左勝　權大納言實國

をしなへて雪のしらゆふかけてけりいつれ榊の梢なるらん

右　源師光

常よりもけふこん人をあはれとや積れる雪に神も見るらむ

左歌雪のしらゆふかけてけりといへる心すかた。誠におかしく。よまゝほしきさまにも侍るかな。右歌けふこん人をあはれとやとよまれたる詞つゝき。いひしりていとおかしく。是も見え侍れと。猶左歌風躰足レ蹉歟。依勝と申侍へし。

五番

左　觀蓮

榊葉もかくるにきての色々に皆白妙に雪そふりつむ

右勝　左大辨實綱

しめの内にふるしら雪の消ぬまは其いろならぬ朱の玉垣

左題の心に叶ひ。歌のすかたたくみにして。いとおかしく社侍るを。聊覺束なき事そ侍るめる。かくるにきての

色々にとよまれたるにきては。古き文にも。種麻を以てあをにきてとし。穀木をもつて白にきてとするとかや。榊はの色にあをしとはきこえす。雪のふりつむに白しとは見えぬるを。其外ににきての色。いろ〳〵にあまた有へしともおほえ侍らぬは。ひかことにや侍らむ。右ふる雪のきえぬまは。その色ならぬ朱のたまかきといへる。心おかしくことなる難なし。正説をうけたまはりひらかんほと。先以レ右爲レ勝。

六番

左　三河内侍

榊はのかをとめくれは降雪にやそうち人の袖やさゆらむ

右勝　宰相中將實守

雪ふかきおまへの濱に風ふけは松のうれこすおきつしら波

左歌八十氏人のそてやさゆらむといへる。心詞いとおかしくきこえ侍るを。かのさかきはの香をかくはしみとめくれはといへる神樂の歌に。殘りすくなくや侍らん。右歌おまへのはまに風をふかせて松のうれこす沖つしらなみといへる歌のすかた。雪のおもかけ。すてに嫉妬のこゝろおこり侍るにや。よりてまた右の勝とす。

七番

左持　俊惠法師

しめの内に神さひにけりはふりこか頭の雪そ降かさねつゝ

右　皇太后宮大夫俊成

いさきよき光にまかふ塵なれやおまへのはまにつもる白雪

左歌神さひにけりと置。かしらの雪そふり重ねつゝと。心いとおかしくこそ侍るめれ。右姿こと葉ことなる事侍らぬうへ。判者のうたに侍り。任レ例不レ加レ判。

八番

左勝　左兵衛督成範

雪ふれは神のしるしや是ならんしらゆふかけぬ榊葉そなき

右　盛方

神垣やあとたれそめし庭なれは雪も爰にそあまくたりける

左歌うるはしくくさりて。させる科なく侍り。右はあとたれそめし庭なれは雪も爰にそなといへる。こゝろおかしくは侍るを。そめし天降るなとや。おなし心なる詞に侍らん。ふかき難にはあらねと。左うるはしく侍れは。勝と申へくや。

九番

左持　左近衛中將實家

ありし秋のすみのえに見し月の色をけふ神垣にうつす雪哉

右　登蓮法師

雪ふれは朱の玉垣をしなへてひまなくかくるしらにきて哉

左すみのえに見し月の色をけふ神かきにうつすゆきかなといへる。兩社の間月と雪との色かよへるこゝろ。いとおかしく侍り。右朱のたまかきをしなへてと置。ひまなくかくるなといへる詞つゝき。いひしりてつよくきこえ侍り。左はおかしく。右はうるはしく。歌のすかた相似すといへとも。かれこれをなそらふるに。なを持とす。

十番

左　前齋宮大輔

しめのうちの松吹すます風の音も埋るはかりにふれる白雪

右勝　　大皇太后宮亮經盛

しら雪はさたえも見えす降に鳧いつこなるらむあけの玉垣

左松ふきすますといひ。埋るはかりになとよめるけしき。ふかくおもへる事とは見え侍り。右とたえも見えすふりにけりといへる詞。所の名をひける心にとりて。いとおかしき上に。左の吹すますは。猶あまりなること葉にやあらん。又以レ右爲レ勝。

十一番

左勝　　左近衛中將實宗

日にそへてふり積りつゝ瑞籬にひさしく雪もきえぬなり鳧

右　　左馬權頭隆信

降にけり年の數のみと思ひしに雪さへつもるあけの玉かき

左歌日頃ふりつもる雪を。瑞籬によせて久しく消えすといへる心姿いさおかしくこそ侍けれ。右歌こと葉つかひなとあしくは侍らぬを。たまかきのとしつもる覽こさ。いつれのやしろもさこそは侍ることなれと。ふるの社なとをや。分てかくはいふへからんとおほえ侍れは。以レ左爲レ勝。

十二番

左持　　左近衛中將頼實

さゆるよのふるしら雪に埋れてあけの玉かき色かへてけり

右　　皇后宮亮季經

榊とる雪のしらゆふ取してゝ空さへ神をまつるなりけり

左すかたこと葉いひなれて。文字つゝきなとおかしくも侍るかな。右これは空さへと侍るにや。是は心姿興ありては侍るを。とりしてゝといへるは。さるや空のしわさならは。ほとゝをきやらにてとそおほえ侍れと。ふかき難にはあらぬらへに。空さへ神をなといへるすかたも。猶おかしく侍れは。持とや申へからむ。

十三番

左持　　左京大夫脩範

しめの内に積るとならは白雪のきえすもあらなん神の驗しに

右　　寂念法師

ふる雪を天つおとめや手向らんしらゆふかくと見ゆる榊葉

左右いつれも優美にして。ことなるとかなし。可レ爲レ持。

十四番

左　　神祇伯顯廣王

よみまつるやまとことのは妙なれは神の心の雪そつもれる

右勝　　道因法師

榊とる武庫の山風さえ／＼てやしろもしろくゆきふりに鳧

左歌こゝろもめつらしく。神の慮の雪つもるらんも。かやうの愚判のことはをく人侍る迄は。ほいある心ちなんし侍れ。但右歌の武庫のやま風さえ／＼てといへる姿心。上下あひかなひてよろしく聞え侍れは。猶右勝とは申侍りぬ。

十五番

左持　　賀茂縣主政平

榊はにふりつむ雪のしらゆふに神のこゝろは先とけぬらん

右　　憲盛

あとたれしとたえの神やこれならんおまへの濱の雪の村消

左右ともに。歌の心こと葉はおかしく侍るを。雪はまたをの／＼心とけたるほとに侍るめれは。持さや申へか

らん。

十六番

左　　賀茂縣主重保

榊はも雪の下にてきねはすく音にそ神のすみかをはしる

右勝　　通清

やおとめの立まふ庭に雪ふれはみな白妙のそてかとそ見る

左うたは。榊はも雪の下にてといふ。をとにそ神のなといへる。こゝろおかしく侍を中の五文字やすこし俗に近く侍らん。右うたはみなしろ妙のなといへるは。珍しきことにあらねと。やおとめの袖はいろ〳〵ならんに。みな白妙のそての色にみゆらんこゝろ。よろしく聞ゆ。以右勝と申へきなり。

十七番

左持　　資隆

祝子かいはふ榊のしらゆふに四手かけそふるけさの雪かも

右　　左兵衛佐經正

雪みては神もさこそは思ふらんあとふみつけしみつの弘前

左のしてかけそふるといふ。右の神もさこそなといへる。こゝろはいつれも興ありて見え侍るを。左のけさの雪かも。右の雪みてはなと侍るほと。猶少し思ふへくやとも侍れは。持と申へし。

十八番

左勝　　廣季

天くたる其神よりやふりくらむ雪つもれりとみゆる玉垣

右　　廣言

人はいさわれとはふまし神かきやひろたの濱にふれる白雪

左そのかみよりやふりくらんさいへるこゝろ詞。いひしりてこそきこえ侍れ。右も神かきやひろ田のはまにとよめるすかたはよろしく見え侍れと。猶左歌もとすゑあひかなへり。よりて勝とす。

十九番

左持　　親重

雪ふかみ朱の玉戸もうつもれて心あてにそ手向をはする

右　　朝宗

ふみわけて人はとめきぬ榊はの香をこそ雪の埋まさりけれ

左の朱の玉戸雪にうつもれて。心あてに手向したる心。右の香をこそ雪のといへるすかた。ともによろしく見ゆれは。持と申すへし。

二十番

左勝　　季廣

ゆきふれは松の花さくしめのうちは神の慮やはるめきぬ覽

右　　伊綱

しめの内に立まふきねも心せよおまへの雪にあとも社つけ

左右させる難なく。優には侍るにとりて。左松のはなをさかせて神のこゝろや春めきぬらんといへる。いひしりてきこゆ。以左可為勝。

廿一番

左持　　顯綱

ふりつもる雪の下消たるひして玉ぬきかくるしめのしら雪

右　　隆親

〔ゆふかくるこゝちこそすれ白妙に雪降つもるあけの玉垣〕

左歌のこゝろはおかしく見ゆ。しめの白雪や。つねにき

こえぬことのありつきて侍らん。右ことなるとかなくゆうに侍るを。また句のはしめ。猶めとまるにや。持と申へし。

廿二番

左持　伊豆守仲綱

けさみれはきねかまろねの跡なれやいかきの内の雪の村消

右　大炊御門右大臣家佐

けさみれは濱の南の宮つくりあらためてけり夜はの白雪

左右のけさみれは。いつれも雪のけしきめつらしく見え侍り。きねか丸寐はまことにさみてはと。歌のすかたもみゆ。濱のみなみの宮つくりは。また清けに侍り。よりてまた爲レ持。

廿三番

左　季定

雪つもるみちわけ初る人をこそ神もあはれと思ひますらめ

右勝　刑部權大輔廣盛

磯ちかき神の御室にふる雪や海にしられぬなみの白ゆふ

左歌この頃あまたみゆるすちには侍れと。すかた優にして。おもひますらめといへる末の句。心こもりて。いひしれる歌とは見えたり。右歌いそちかき神の御室の雪を海にしられぬなみのしらゆふといへる。おかしくきこえ侍れは。猶右のかちと申へくや。

廿四番

左勝　皇后宮權大進邦輔

神かきやしらゆふかけて降雪やあまつみそらの手向なる覽

右　安心

神かきや濱まつかえも色かへてうらめつらしきけさの初雪

左右いつれもいひなれて優には見え侍るにとりて。うらめつらしきけさの初雪は。秋の初かせなとに聞なれたるこゝちし侍れは。左のあまつみそらの手向は。立まさるとや申へからん。

廿五番

左持　懷綱

降雪のゆふしてかくる村すゝきみてくらしろに手向てそ行

右　祐盛法師

神垣の雪つもるをは押なへてふるのやしろと人やいふらん

左歌姿心めつらしく見ゆ。むら薄そおもひかけぬ手向くさなれと。みてくらしろになといへるけしき。うたよみのしわさなといひつへし。又村すゝきみてくらしろもかゝる物かたりの侍るなるへし。右歌神かきのゆきつもるをはといへる。こゝろ詞よろしといひつへし。よりて爲レ持。

二十六番

左　懷能

神かきやおまへの濱の松かうれをふゝきにあらふ雪の白波

右勝　憲綱

降もあへす庭火の前にとけ[illegible]は神のこゝろも雪としれとや

左まつかうれをふゝきに洗ふなといへる。かけあらんとよめる歌なるへし。右ふりもあへすとをきて。神のこころも雪としれとやといへる。おかしくきこえ侍る。右の勝と申へし。

廿七番

左勝　智経

玉垣のうち人とはつらし降雪をふまゝく惜と神こそはみれ

右　経平

庭の雪はおまへの濱におもなれて梢を神やめつらしとみる

左めつらしきさまにはあらねと。優に侍るめる。右おまへの濱のいさきよき雪にしもおとろかぬ。心はいとおかしくも侍るを。梢をといへるや。松なといはてはいかかと覺え侍れは。左とかなきに付て可ㇾ勝にや。

廿八番

左持　阿闍梨性阿

祝子かさす榊はにふる雪たちりてみたるゝ幣かとそ見る

右　浄縁法師

たとふへきかたこそなけれ廣まへの濱松かえにふれる白雪

左はめつらしく。右はおもしろく。姿はかはれと。歌のほとおなし。持と申へし。

廿九番

左勝　前齋宮中納言

神かきの榊はことにゆふかけてふるしら雪そなれ手向する

右　素覺

雪のいろをきねや重ねてしらけたるお前の濱はそえて及はね〔めこそイ〕

左歌ふるしら雪そなれ手向するといへる心。いとおかしくこそきこえ侍れ。右歌はかの神まつる卯月に咲るといへる古ことおもひ出られて。是はひとつのすかたには侍れと。猶歌の離相似。以ㇾ左可ㇾ爲ㇾ勝。

一番　海上眺望

左勝　按察使公通

朝ほらけあしやの沖を行舟のよそめは鴨のゐるかとそみる

右　大貳重家

波間よりほのみとりにそ見えわたるこや住よしの松の村立

左歌あしやの沖を行舟のなといへる。すかたおかしくも侍哉。右歌ほのみとりにそみえわたるといひて。こや住よしの松のむら立と侍る心。亦いとよろしく聞え侍るを。かしこにみゆることを。こやとよみて侍らんや。かれやとそいはまほしく覺え侍る。だなた芦やのおきの舟を鴨のゐるかとまかへられ侍らんところは。まさるへくやと見え侍る。いかゝ。

二番

左持　前權大納言實定

武庫の海をなきたる朝にみわたせは眉も亂れぬあはの嶋山

右　頼政朝臣

和田つ海を空にまかへて行舟も雪のたえまのせとに入ぬる

左詞をいたはらすしてまたさひたる姿。ひとつの躰に侍るめり。眉もみたれぬあはの嶋やまといへる。彼黛色迥臨蒼海上といひ。龍門翠黛眉相對なといへる詩。おもひいてられて。幽玄にこそ見え侍れ。右また空にまかへてゆく舟もといへる心。ふかくかすめる心ちして。雲の絶間のせとに入ぬらんほとも。愚なるこゝろに及かたくして不ㇾ分明。よりて爲ㇾ持。

三番

左勝　小侍從

天津空雲ゐや海の果ならんこき行舟の入と見ゆるは

右　權大納言實房

和田のはら波ちたゆたふ雲まよりほの見えわたる淡ち嶋山

左歌こゝろ姿よろしくこそ見え侍れ。右歌また波ちたゆたふ雲間よりといへるすかた詞。いつれもいとおかしく思ひみたれ侍るを。あはち嶋やまと侍るや。上の句の末にては。少ちかくやきこえ侍らん。よりて左の。雲ゐやうみのといへるは。猶増り侍るへからむ。

四番

左　　　　権大納言實國

松浦ふねみえ行ほとはそれなから只都へのきゝそたえぬる

右勝　　　　師　光

朝なきの鹽ちはるかに出にけりかもめにまかふ沖のつり舟

左のまつら舟見えゆくほとはそれなから。都へのきゝたえぬらんほと。心ほそくは侍るを。右のしほちはるかにいてにけりといへる。姿よろしく聞えて。眺望のこころなをまされるにや。

五番

左勝　　　　觀　蓮

なみの上に浮ふこのはと見ゆるかな漕はなれ行朱のそほ舟

右　　　　左大弁實綱

うす雲のかゝる浪ちを見わたせはまた色とらぬゑしま也鳬

左歌なみの上にうかふこのはなといふは。きゝなれたることに侍れと。朱のそほ舟は。木のはも色あるこゝちして。おかしく見え侍り。右歌なみち雲へたてゝ。繪嶋はまたいろとらすみゆらむ心。よるへありて聞え侍れと。猶左は聊まされるにやとおほえ侍れは。左のかちと申侍るへし。

六番

左　　　　三河内侍

和田の原おきつ風吹ゆふなきにあるかなきかとみゆる釣舟

右勝　　　　宰相中將實守

なこの海に立とし見えぬをし鴨やとをさかり行あまの友舟

左文字つゝき詞つかひは。おかしく侍るを。右のあまの友ふねをしかもと見ゆらん。心おかし。友といふ文字いひしりてみえ侍るに。左のおきつかせふくらんゆふ浪は。なを叶はすやと見え侍れは。右の勝と可レ申にや。

七番

左勝　　　　俊惠法師

雲のなみ分行ふねのきえぬるは天の川原にこきやつけつる

右　　　　皇太后宮大夫俊成

和田の原こきはなれぬる舟路には心もえ社つなかさりけれ

左歌天川原にこきやつけつるといへる。彼張博望之到二于漢一侵二十萬里之濤一といふ句のこゝろをとられて侍り。いとおかしくこそ侍れ。右歌は愚老歌に侍るへし。さのみ判者の威をかりて。とかをあらはさす侍らむ。神慮の恐れあるへし。心つなかすといへるはかりは。眺望のこゝろさためて少く侍らんかし。左歌の心。誠に萬里の浪おもひやられて。はるかにこそ覺え侍れ。よりて以レ左爲レ勝。

八番

左持　　　　左兵衛督成範

おきつなみあまの川にや立のほるこき行舟の空にみゆるは

右　　　　盛　方

こきいてゝみをさ海原みわたせは雲ゐのきしにかゝる白雲
左是も前のつかひの。左のかたの心にかよへるへし。天の川にや立のほるといへる心。おかしくは見え侍り。そらに見ゆると侍るそ。上に見ゆらむやうに聞ゆれと。なみのまの空にひとつにみゆる心なるへし。右雲井のきしやさしたる心ちし侍れと。これも心はおなしすち成へし。みをさうなはらなといへるすかた。幽玄の躰に見え侍けれは。持と申へし。

九番

左持　宰相中將實家

けふこそは都の方の山のはも見えすなるおの沖にいてぬれ

右　登蓮法師

なかめやる舟路はあともなかりけり恨やふかき松浦さよ姫
左歌都のかたの山のはも見えすなるおのといへる。何となく心ほそきこゝちして。歌の姿もめつらしくこそ侍れ。右舟路はあともなかりけりとをける文字つゝき。最よろしくこそ聞え侍れ。うらみや深き松浦さよ姫といへるや。うちこしはなれたる心ちと。よく思ひとけは。詞幽に心こもりて。猶おかしく侍るへし。持と申へきにや。

十番

左　大輔

いつかたへ浦わたりするむら鳥の立かとみれは雲にきえ行

右勝　從三位經盛

沖つなみ立ゐる程そしられけるあはの嶋山見えすみえすみ
左歌すかたは幽にみえ侍り。村とりといへるや千鳥鷗なとならは。さまて遠からすや侍らん。舟なとも鳥かと見ろほとならは。雲にきえんもいと少便や侍らまし。右歌させる難なくてうほうの心あり。勝と申侍るへし。

十一番

左持　左近中將實宗

はりまかたすまの晴間に見わたせは雲ゐに浪の立かとそ思

右　左馬權頭隆信

朝なきに御まへの沖を漕出てそ雲をは海のものとしりぬる
左すまのはれまにと置。雲ゐのなみになといへる。心すかたいひしれる歌と見えて。いとおかしくこそ侍れ。右うたも。雲をは海のなといへるけしき。よまんと思へるうたとみえ侍れは。持と申すへきにや侍らん。

十二番

左勝　右近中將賴實

はる〳〵と御前の沖を見わたせは雲ゐにまかふ海人の釣舟

右　皇后宮亮季經

沖へ行われをもともになかむらん霞わたれる遠のうら人
左歌文字つゝきうるはしく。下りて雲ゐにまかふあまの釣ふねといへる末の句も。いとよろしき歌とこそきこえ侍れ。右歌はこゝろありておかしくは聞え侍るを。沖へゆく我をもと侍るや。舟ならて行とは。いかゝ覺え侍らん。歌さまはおかしくも侍れと。歌あはせの時は。姿をさきとし難を除く事あれは。尙左の勝にやと見え侍るなり。

十三番

左　左京大夫脩範

雲晴てよものしまへを見つる哉あまのを舟の波まくらして

右勝　寂念

芦の葉も霜かれにけり難波かた玉もかり舟行かよふ見ゆ

左歌けしきこゝろほそく。すかたもいとおかしく見え侍るを。あまのをふねに浪まくらしてといへる。夜のうたならは。月ありてそ雲もはれまほしく侍る。いかゝ。右は終りの句の いひとちめたるほとに。ほいすくなきやうに侍れと。霜かれにけりなにはかたなと。珍しからぬ事なれと。さひても侍れは。難なきにつきて。右可レ勝にや侍らん。

十四番

左　顯廣王

見わたせはおまへの沖のなみまより幽にまかふあまの釣舟

右勝　道因

眺めやる心をそふるゑしまかな波ちははてもなしと社きけ

左ははしめつかたに。御まへの沖を見わたせは と侍りつるうたの。文字つゝき少しかはりて。是ははしめの五文字の ことはなれたるやうに侍るにや。右はなかめやると置て。なみちは果もなしとこそきけといひすてたる。すかた最おかしく。心もあはれにこそ見え侍れは。亦以レ右爲レ勝。

十五番

左　賀茂政平

山のはも見えぬなみちは月も日も海よりいてゝ海に入けり

右勝　憲盛

ほのみゆるかたや敷つの浦ならん浪まに浮ふまつの村たち

左歌山のはも見えぬなみちにと おもひよれるこゝろ。いとおかしく侍り。なみよりいてゝなみにこそ いれといへるも。こゝろかはりたるにや。右歌一番のうたにや。またこの心侍りつれと。かたや敷津の浦ならんと いへるすかた。最よろしくこそ見え侍れ。左は風情あり。右はすかたおかしく 思ひわつらひ侍れと。なを浪まにうかふといへる末の句。おかしく聞ふれは。右の勝と申侍りぬ。

十六番

左持　賀茂重保

沖つ海やしほちに空のまかふ哉雲まやなみの立かくるらん

右　通清

いつかたや行共みえぬあまをふね雲の浪まに果はかくれぬ

左右ともに。眺望の心はかりにして。優にみえ侍り。依而爲レ持。

十七番

左持　資隆

波の上にすたく鳥かと見ゆる哉とをさかり行室のともふね

右　左兵衛佐經正

こき出てあれやゑしまと見渡せは波にけたるゝ松のむら立

左歌ことにめつらしきふしにはあらねと。室のともふねのすたく鳥かとみゆらん心。おかしく見ゆ。右歌なみにけたるゝまつの村たちなといへる 姿ことは。めつらしくみえ侍れは。いつれもとり／＼にて持と申へし。

十八番

左持　廣季

見渡せはおきの鹽ちに雲とちて空か海かとわきそかねつる

右　廣言

わたのはら雲井はるかにこき出て夕日にまかふ朱のそほ舟

左はこと葉ふり姿さひて。よろしき歌といひつへし。右は朱のそほ舟夕日の空にまかへたるこゝろ。おかしく見ゆ。題の心はおなしく。歌のすかたはとり〳〵なり。よりてまた持とす。

十九番

左持　親重

はる〳〵と嶋つたひする藻刈舟やかて雲ゐのなみに消ぬる

右　朝宗

和田のはら遙に出る海人舟はくものなみをも分る也けり

左のもかり舟。右のつりするあま。なみに消。雲をわけたる。詞はかりそかはりて侍れと。題の心歌のほと同しく見ゆ。なをまた持とす。

二十番

左持　季廣

嶋かくれ見えみ見えすみ行舟のはては雲井に消そしにける

右　仲綱

はる〳〵となみちこき行舟よりも風に先たつかこの聲かな

左歌すかた心はかすかに侍り。末の句のことはつゝきそいかにそや。さらてもと聞え侍る。右歌は心めつらしく。詞おかしく侍るを。かこのこゑのさきたゝんこと。眺望の爲は そのよしなくや侍らん。いつれまさらむことはいかゝとて。また前のことく云々。

廿一番

左持　顯綱

和田の原なみにをりゐるしら雲の晴れはそらに汀なりけり

右　隆親

遙々とおきつしほちを見わたせは雲井に消るあまの釣舟

左右ともに。題の心さき〳〵も侍り。同心なるにとりて。ひたりは汀なりけるといへるや。あまりさゝへてきこゆ。右はまたおきつしほちにといひ。雲ゐにまかふを。是は消るとよまれたることそ。かはりて侍りける。これはさらてもありぬへけれと。難には及はす。猶持とすへし。

廿二番

左勝　仲綱

海はらや雲ゐはるかに漕舟を浮木にのれる人かとそみる

右　佐

おほつかな行か歸るかあまを舟見えみ見えすみ浪隱れして

左のうきゝにのれる。是亦蜀部靈槎張騫か漢に昇しかとうたかへる成へし。心おかしく侍るめり。人かとそ見るといへるや。少さゝへたるやうにきこゆれと。唯張騫かうきゝにやといへる成へし。右歌はことなる難なとは侍らねと。唯云ひわたしたる心ちして。無下にさせるふしなくや侍らん。依て左の勝と申へきにや。

廿三番

左持　季定

漕はなれしほちを行はあはち嶋かくるゝまてと詠つる哉

右　廣盛

浪こしにやへのしほちを見わたせは海人の友ふね數そ消行

左歌すかたはよろしとみえ侍るを。下の句や。かくるゝ迄もかへり見しはや といへる名歌の句いて侍れは。いかゝと聞え侍る也。歌は古歌一二句なとは 常のことなれと。さくらちるなとをくことは。はゝかるへく侍る也。右歌もうたさま おかしくけ侍るを。なみこしにと置ては。其嶋此山なとそあらまほしき。やへのしほちも波路なれは。おなし事のやうにや侍らん。是もつねの例に持とすへし。

廿四番

左　邦輔

和田のはら浪ちはるかに行舟のやゝ見るまゝに雲に消ぬる

右勝　安心

もしほやくけふり立らし見わたせは薄雲まかふ淡路しま山

左すかたは優に侍めり。雲にきゆるこゝろ。今はあまりにめなれ侍りて。とかく申やりかたくなりてはへる。右このうす雲は。煙たつらしと置て。うす雲まかふといへる。よろしくみえ侍り。以レ右かちと申へし。

廿五番

左勝　懐綱

詠こし天津雲ゐはなた舟のこき行さきにありける物を

右　祐盛

白雲に續くしほ路をなかむれはいつれを雲とえ社見わかね

左右いつれもよろしき歌とは見えなから。右はあまた見え侍る。歌とも雲と浪とにまつはれて。おもひわけかたく侍る上に。つゝくしほちをといへる。聞よくもあらぬにや。左はなた舟また優にしもあらねと。なかめこし天津雲井はなといへるこゝろ。よろしく見え侍れは。左の勝と申侍りぬ。

廿六番

左持　懐能

なこのうみのしほちはるかに詠れは雲たちましる沖つ白浪

右　憲綱

海人をふね千里のなみに漕ちれは釣のこゝろやひとつ成覧

左さき／＼のおなし心に侍るにとりて。末の句。雲ゐにまかふおきつしらなみといへる。詞花集の歌に。たち交るはかりやかはれり。（右は珍らしきさまには侍るを。釣の心。眺望には用なくや侍）らん。また波を千里ともいふは。つねのことなれと。海のおもてを千里とよまむことは。少し先達ゆるさゝるやうにそおほえ侍れと。おもき難にはあらし。但歌のほと持なるへし。

廿七番

左　智経

沖つ洲に潮やみつらんあさりする芦まの田鶴の立騒くめる

右勝　経平

わたの原すまのなみちを見渡せは浦つたひして月も宿れる

このつかひの歌。左右ともによろしくはみえ侍るを。二首の末のことはに。左はさはくめるとをき。右は宿れるといへる。ともに木にとまるこゝちそし侍れと。猶右の須磨のなみちを見わたせはといへる。姿優にきこゆ。仍て右の勝と申へし。

廿八番

左持　性阿

廣田よりあかしを越して眺むれはゑしまか磯にさはく白浪

右　淨　縁

あれやこの海士の住てふ浦ならんたくもの煙空にしるしも

左心ことはおかしくは侍るを。廣田よりとをかれたるはしめの句。あまりたしかなるこゝちやすらん。末のゑしまか磯にさはくしら波も。なとさはくそきこゆる。右歌下句のたくものけふり空にしるしもといへるは。古き姿に侍るを。上句にあれやこのとをけるや。おなし歌のすかたとも覺侍らす。ふかき難にはあらねと。たかひにかやうの事の見え侍れは。持と申へきにや。

卄九番

左　中納言

武庫の浦の沖のうけ舟近つけはともさそふなり海士の呼聲

右勝　素　覺

武庫か崎うらより遠にこき行はこしかたははや霞けらしな

左歌こゝろおかしくは侍るを。眺望の心やすくなくて。あまの友さそふ詞やすゝみて侍らん。右歌は末のけらしな。いかにそきこえ侍れと。浦より遠になといへるわたり。よろしくや侍らん。依右之勝と申侍るへし。

一番　述懐

左　按察使公通

幾とせに〔のイ〕春にしられて成ぬらん老木に花はいつかさくへき

右勝　大貳重家

うきなからいとひは果し後の世も是に増らん物ならなくに

左右の歌。いつれもさる事ときこえて。とり〳〵におかしく侍る。但左歌いくとせにと置て。末にいつか咲へきと侍るや。いつれの字おなし心に侍らん。もし然らは右歌させる難なし。勝と申へきにや。

二番

左　實　定

さりともと松をたのみて月日のみすきの早くも老ぬへき哉

右勝　頼　政

思へ唯神にもあらぬえひすたに知なるものを物のあはれは

左歌まつをたのみてなといへるすかた。最おかしく侍り。松杉なといへるや。これかれにかゝりたるやうに侍らん。右歌はことかはり。あらぬ姿のこと葉つかひなともおかしくこそきこえ侍れ。これは同〔間イ〕巷の鄙曲の中に。えひすたにものゝ哀なりとうたふ歌の侍るなるへし。かれをひきて。神にもあらぬえひすたにといへるうたの姿。いさおかしく聞え侍るなり。但詞少俗に近くや侍らん。されと神の御名もかゝりて侍れは。以レ右勝と申へし。

三番

左持　小侍従

君か代にあふせ嬉しき石清水すむにかひあるなかれ共かな

右　實　房

とに角に哀むかしにあらませはと思ふことのみ數積りつゝ

左君かよにあふせられしき石しみつとよまれたるかたかたに。いかてか歌に負侍らん。右こゝろこもりて。何となく哀にもきこえ侍るものかな。但左歌勝負はゝかりあり。持なとにや侍らん。

四番

左勝　　實國

あまくたる神の惠のしるしあらは星のくらゐも猶のほり南

右　　師光

行末にかゝらん身共しらすして我たらちねの生したてけん

左天降とをき。星のくらゐもなと侍る風情。いとおかしくも侍るかな。右ことはの花をかさらす。ことのはに見せて。直々といひくたされて侍れと。けにさることゝきこえて。あひなくよそのたもとまてしほるゝ心ちなんし侍り。但兩首の意趣懸隔なるうへに。左すかたなをおかし。仍爲レ勝。

五番

左持　　觀蓮

此世には數ならすとも九品わくるはちすの身とも成りなむ

右　　實綱

くらゐ山のほれはくたる吾身哉もかみ川こく舟ならなくに

左は蓮臺の有〔宿イ〕緣うたかひなく。右は棘路の昇進たのみおほく。現當雖レ異。後憑已同。依爲レ持。

六番

左勝　　三河内侍

をしなへて心ひろ田の神ならはかゝる憂身を惠まさらめや

右　　實守

けふ結ふちきりは終に夢さめん後の世まてもたのもしき哉

左歌こゝろ廣田の神ならはといへる。まことのうき身のためと。たのもしく覺え侍り。右歌けふのやまとことのはのちきりは。長夜の夢覺んよまてのたのみとなるらんこと。まことにしかあるへき事なり。但左猶當社をかけ奉れり。仍かちと申へし。

七番

左持　　俊惠

なにしおはゝ西てふ神を賴み置んそなたを終に願ふ身なれ

右　　俊成

千早振神に手向ることのはゝこん世の道のしるへともなれ

左歌にしてふ神をたのみ置んといへる。すかたおかしく。こゝろ哀にこそ侍れ。右歌は身しつみよはひくれぬるものゝ。述懷の題にあふことは。愁をのへ胸をやすむへきたよりには侍れと。身の愁のこと。今は中々にまかりなりて。申にもをよはす侍れは。たゝけふのことの葉の手向によりて。かへして當來世々の轉法輪の緣とせんとはかりを。おもふ給へ侍るを。左はすかたいとおかしく侍れと。心さし同しすちなるさまに見え侍るに付て。持をや乞へく侍らんとそおもふ給へ侍る。

八番

左持　　成範

ふたつなき法のおしへを背つゝいく度六のみちにまとひぬ

右　　盛方

哀てふ人もなき身をうしとても我さへいかゝ厭ひはつへき

左歌法のおしへをそむきつゝといへる姿。いとおかしくそ侍るめれ。右歌かやうの心なる歌は。少きゝなれたるやうには侍れと。われさへいかゝなといへるすかた。これもいと哀にきこえて。いつれともおもひわけかたく侍れは。なをまた持と申へきにや。

九番

左持　實家

昔よりめくみ廣田の神ならはさりとも秋のこゝろしるらむ

右　登蓮

いつ迄と吾世のほとを賴みつゝはかなくすくす月日成らん

左歌めくみひろたのなといへるこゝろ。あまた見え侍るめる中に。秋の心をよせられて侍るは。いとおかしくこそ侍るなれ。宜下將二愁字一作中秋心上といへる詩のこゝろなるへし。右歌こと葉にはなをもとめ。文に玉をかさらされとも。ことはつゝき文字すくなに聞えて。よろしくこそ見え侍れ。誠之至深者共詞无レ詞。文之偏質者共躰少レ躰といひて。是ひとつのすかたに侍るへし。左はさり共あきのこゝろといへる。心哀れにきこゆ。右はかなくすくす月日なるらんとよめる。姿叶レ躰。仍亦爲レ持。

十番

左勝　大輔

身のほとの思ふさかりはいはれねとしる覽ものを神の慮に

右　經盛

ねき事をわきて哀とおもひなん神のめくみはあまねけれ共

左歌ことは外にあらはさされとも。心内にこもりて優に聞え侍り。右うたもさることなりと聞えて。難なくは侍れと。左猶思ふはかりはなといへる。姿よろしくみえ侍り。仍左のかちと申侍へし。

十一番

左持　實宗

吾君の長閑き御代につかへても神のめくみを賴むとをしれ

右　隆信

白濱のまさこの數にあらぬ身もめくみ廣田の名をたのむ哉

左歌外者聖朝の事。内者神德を仰く。まことにしかあるへきことゝ聞えて。いとおかしくこそ侍れ。是難題のうたの躰なるへし。ことのとゝのほりたゝしく。世をほめて神に告るといへる。まことにかくこそ侍らめとみえたれ。右歌ことなる事はなけれとも。御前の濱の眞砂に吾身をよそへて。神のめくみをたのめるこゝろ。程につけておなしくや侍らむとて。持と申侍るへし。

十二番

左勝　賴實

けふまてはかくて暮しつ行末をめくみ廣田の神にまかせむ

右　季經

厭ひつゝ捨もやられぬうき身哉あやしやたれか惜むなる覽

左歌かくてくらしつ行末をといひて。めくみ廣田の神にまかせんと侍る。文字つゝきいとおかしくも侍るかな。右歌いとひつゝ捨もやられぬうき身かなといひをきて。あやしやたれかとすつらて侍るこゝろ。またいとあはれにこそ見え侍れ。このつかひまことにおもひみたれ侍りぬ。たゝし左歌。神をかけ奉られたる上に。歌のこゝろ行末遠く見え侍り。よりてなを以二左一爲レ勝。

十三番

左勝　俯舵

徒にうき世もなかは過るまてをくりむかふる果そゆかしき

右　寂念

ね覺してものそ悲しき昔見し人はこの世にあるそすくなき

左歌うき世も半すくるまてといへるわたり。よろしく

こそきこえ侍れ。右歌はすかたさひて心ほそく。けにさることとやと聞え侍るを。かなしきとをき。あるそすくなきといへる。そのをきの字おなしさまにそ聞え侍る。歌あはせにはさるへきこと成へし。左は末の床しきといふことはや。少しいかにそおほえ侍れと。あれは餘りのこと也。以ㇾ左勝と申へし。

十四番

左　顯廣王

昔よりちかひ廣田の神なれは祈るいのりもなるをとそきく

右　道因

住のえに武庫のうら風立そひて二度神のめくみをそ待

左右のうた。いみしくおかしくこそ見え侍れ。左のちかひ廣田の神なれはとをきて。祈るいのりもなるをとそきくといへる。此たひの歌あはせに。かならすあるへかりけることかなとこそ聞え侍れ。右またふたゝひ神のめくみをそまつといへる。心すかたまことに哀に見え侍れは。此番の勝負は。神慮にまかすへし。仍不ㇾ加ニ愚判ニ了。

十五番

左持　賀茂政平

なからへて世にある事は津の國の生田の杜の名に社有けれ

右　憲盛

數ふれは八十年さかひたらちねのかけにかくれて身社老ぬれ

左歌すかた詞つかひは　おかしく見え侍り。名にこそ有けれといへるこゝろそ。いともこゝろえられ侍らねと。おほ心は見えて侍るへし。右歌ことによそへたる事なとそ見え侍らねと。歌の心あはれに見え侍り。左歌も生田のもりなと侍れは。尙持と申へし。

十六番

左勝　賀茂重保

いつまてか朽木の花に身をなして心のはるを待へかるらん

右　道清

世をわたる橋をたつねてつのくにのなからへ行と神は知覧

左心姿おかしくこそ見え侍れ。右もなからへゆくと神は知らんといへる。心はあはれに侍るを。はしめつかたの詞や。なをくちきの花に身をなしてといへるは。よろしく聞え侍らん。依左の勝とす。

十七番

左持　資隆

西にのみはこふ心のしるしをはそなたに今は神に祈らん

右　經正

むらさきのゆかりの袖はなりはてし吾のみ朱の色そ變らぬ

左西方の運心をそなたの神にいのり。右は紫のそての中にあけの色を愁へられて侍る。ひとつは哀に　ひとつはめつらし。ことのこゝろたかへりといへとも。うたのほとおかしくみゆ。仍爲ㇾ持。

十八番

左　廣季

位山高根の雲をよそに見てかゝる身とたに知られぬそうき

右勝　廣言

いかにせん人並ならぬ水無瀨川さすかに世には住渡りつゝ

左歌かゝる身とたになといへる。姿いともよろしくこ

そみえ侍れ。但たかねの雲やすこしあまりに聞ゆらむ。されと諸道につけて道をきはめ。いへをおこすものをも。たかねの雲となとかはいはさらんや。右歌の水無瀬川はこゝろ詞かなひておかしくもみゆ。勝と申へし。

十九番

左持　親重

いかにせん頼みし水のたえぬれは身を浮草のよる方そなき

右　朝宗

數ならぬ心にたにもいとはれて置所なき身とそなりぬる

左右のうた。心すかたとり〳〵にして。優に聞ゆ。持とすへし。

二十番

左持　季廣

歎かぬもなけくも夢を見るたひに驚きなから驚かぬかな

右　伊綱

かこつへき方もなき身の愁をはこゝろ廣田の神そしるらん

左歌よろし〔くイ〕と聞え侍り。中の五文字や。少しさゝへて聞ゆらん。右歌上句におもひあまれる心見えて。いと哀にこそ侍れ。終の句の知らむといへるや。なを思はまほしく侍らむ。又持と申へし。

廿一番

左持　顯綱

うきに猶せめてもおしむ此世かな背く心のかゝらましかは

右　隆親

つの國の難波のことも憂身には芦の枯はをよそにやはみる

左歌心文字つかひいとおかしく。しゐても　おしむとやいはまほしく侍らん。右すかた詞優に聞えて。させるとかなし。仍勝負わかちかたし。亦爲レ持。

廿二番

左　仲綱

天降る神にとはゝやなそもかくをりて　のほらぬ雲の梯

右勝　佐

ひとすしに頼てかくるゆふたすきなかき愁を神やしる覽

左歌すかた心はおかしく侍るを。あまくたると置て。またをりて　のほらぬといへるや。おなしことのやうに侍らん。右のゆふたすきは。めつらしき事にあらねと。させる難なし。勝と申へきにや。

廿三番

左勝　季定

なけきあまり山に入とも身のうさの先さきたちて我を待覽

右　廣盛

くらゐ山立ものほらぬ身にあれはうらやまれけり峯の白雲

左うた。我を待らむといへる心。いとおかしくこそ侍れ。右歌末の句なとよろしくは侍るを。み文字やまひに侍り。これはおもき科にはあらねと。少の疵をもとめてこそは。勝負をしるし侍らめとて。しゐてもとめ侍る也。依左勝と申へし。

廿四番

左持　邦輔

うきなから身をは流石に捨やらて過たぬ世を恨みてそふる

右　安心

世をすくふえひすの神の誓にはもらさし物を數ならぬみも

左身をはさすかになといへるすかた。おかしくみえ侍れ。右歌はすくふこゝろ少したかひたるやうにそ聞え侍れと。えひすの神をかけたてまつりて。歌にまくへきにあらす。持なとにや侍らむ。

廿五番

左　懷綱

徒にとしはみそちにあまりても身は數ならぬ歎をそする

右勝　祐盛

數ならぬ言のはみては嬉しけれうき身も人にしらぬと思へは

左歌こゝろ詞おかしくは見え侍り。壯年の時は潘岳かよはひにをよふも。さこそはおほゆることに侍れと。あれをうらやむ人もおほく侍らんかし。右歌はうき身も人にといへるこゝろ。おかしくこそ侍るなれ。かの能因法師をいふ詞に。心花山のあとをねかひて。こと葉人にしられたりといへることを思ふに。心おこりに侍るへし。歌もけによろしく聞ゆ。右の勝と申へし。

廿六番

左持　懷能

うしとてもこはたか爲にともすれは吾身をいとふ心なる覽

右　憲綱

かくてのみ朽はか下に埋もるゝ此身は神よあはれならすや

左歌の心ことはつかひおかしくみえ侍り。右くち葉か下に埋もり。此身は神よなといへるすかた。またわりなく見ゆ。仍爲レ持。

廿七番

左持　智經

よの中に置所なく思ふ身は廣田の神をたのむはかりそ

右　經平

鳥のゐし昔にかへれ勝間田のいけるかひなき身をも歎かん

左歌心すかた優にこそみえ侍れ。右歌のむかしにかへれかつまたのと云ることはこそ。いと哀に侍れ。是は勝とも申侍るへきを。左うるはしく侍るうへに。末の句のことは。歌にまくへきにあらす。また持とす。

廿八番

左持　性阿

名にしおへは賴そかくる西の宮そなたにわれを導けやとて

右　浄縁

葛城やすかのはしのき入ぬ共うき名は猶や世にとまりなん

左は初の七番のつかひにや侍る歌の。詞つゝきいさゝかかはれるに侍めり。右はすかのはしのきなといへるすかた。幽玄にこそ聞え侍れ。但いつれも心のおもむき哀に見ゆ。倚また持と申侍へし。

廿九番

左勝　中納言

水底に吾身は沈みはてぬれはうき名を流すせゝそかはらぬ

右　素覺

花さかぬ吾老木には年たへて身のなるさまそ怪しかりける

左歌水底にしつめる心。哀にこそみえ侍れ。濱の南の神感さためて侍らんや。右歌の老木の身のあやしくなる事。けにさることゝはおもひしらるれと。なを左の我身はしつみはてぬれはといへる。哀ふかくすかたおかしきによりて爲レ持。

しきしまや道はたかへす思へとも人こそわかね神やしる覽

承安二年十月十七日加判之。如レ令レ馳レ筆不レ能ニ沈思一。後見雖レ有レ恥。仍恐ニ神慮一也。

三井寺新羅社歌合 承安三年八月十五夜

題

遙見山花　古郷郭公　湖上月　野宿雪

談合友戀

作者

左

中納言君法性寺石藏法橋房

阿闍梨蓮忠三乃聖護院住

阿闍梨證兪丹後守爲盛息

肥後君明智

藏人君賢辰

常陸公道禪

帥君信親

佐君良敏

右

少輔君三井寺南院執行房住敎智律師房

阿闍梨泰覺泰尊法橋息

阿闍梨親實大臣伊實息

大進君智暹

讃岐君觀宗

出羽公長照

少將君智經俊忠息

淡路君忠勝

講師

佐公良敏

讀師

藏人公賢辰

判者

從三位行皇太后宮大夫俊成卿

一番　遙見山花

左勝　中納言君

よしの山木々のこすゑにゐる雲は花の盛のよそめなりけり

右　少輔君

みよしのゝ水わけ山のたかねよりこす白波や花のゆふはへ

左歌すかた心優に侍めり。但木々の梢にといへるや。雲も各別ならんやうにきこゆらん。右歌みつわけ山のさ置て。こすしら波にまかへたる。心はおかしきを。末に花のゆふはへといへるや。ついてなくきこゆらん。左の木々のこすゑ。深きなんにあらす。勝と申へし。

二番

左　阿闍梨蓮忠

よそめには雲にまかひぬ山櫻あらぬかそかは行て社みめ

右勝　阿闍梨泰覺

白雲にひとつに見ゆる山さくらいつくか花のきはめ成らむ

左歌さまおかしくはみゆ。第四句にそかはといへることはや。すこし不足ならん。それかあらぬかなとそ。ふるくも詠るかし。右のいつくかはなのきはめならんといへる。すかたいとおかし。はるかにきはもなくあらむ。かの白毫の光の萬八千世界をてらしゝ心ちして。はるかにきこゆ。右爲レ勝。

三番

左持　阿闍梨證兪

都いてゝゆかは山ちに日やくれんよそめの花にあかぬ東雲

右　阿闍梨親實

すか原や伏見の里に駒とめてをはつせ山の花をみるかな

左歌はるかといふ字を詠る。すかたおかしきを。あかぬしのゝめとむすはせるほと。すこしついてなきやうに侍らん。右歌かの後撰集にふし見のくれを見わたせは

といふ歌をそ。きゝすこせるにやあらん。ちかくあると
ころ歌あはせにも。かやうなる歌侍しにや。仍すかたま
さりて事ふりたり。准レ之爲レ持。

四番

左持　明智

雲のゐるをちの高根の櫻はな咲もさかぬもわかれさりけり

右　智暹

遲くとき花やさくらんよしの山處さためぬやへのしら雲

左のさくさかぬといひ。右の遲くときといへる。風躰已
等。雲望忽同によりて。爲レ持。

五番

左持　賢辰

春かせにかつちりぬらしさくら花かゝりもやらぬ嶺の白雲

右　觀宗

たくひなき匂ひなれ共よそにては雲に見まかふ山櫻哉

左は春風且零落。峯雲不レ懸レ遠といへる。心はことなる
事なけれと。すかたいとおかし。右は花匂無二比類一。雲色
猶相混といへる。心はおかしきを。見まかふといふこと
は。すこしたえすやあらむ。左右雖レ有二得失一。勝負已不二
分明一。なをまた持なるへし。

六番

左　道禪

みよし野の花はよのまに咲にけり峰に朝ゐるやへの白雲

右勝　長照

梓弓はるかに見ゆる白雲はいるさの山のさくらなりけり

左のうた。末の句のことはつゝきなと。いとよろしくは
きこえ侍るを。上にみよしのとをき。下に峯といへる。
句のはしめ文字同は舊歌合にも。少しとかめたること
なるへし。右歌澁の字をさへてよまれたるそ。落ると
ころなきこゝちすれと。あつさ弓とをき。いるさの山な
と侍る。めつらしきことにはあらねと。また云しれるに
似たり。左吹毛なりといへ共。見ゆる所あるによりて。
以レ右爲レ勝。

七番

左勝　信親

よそにのみ雲とそ見まし山さくら匂ひを送る風なかりせは

右　智經

あさ霞はれぬと見れは立かはる雲は高根のさくら成けり

この番。兩首共にいへるすかた。よろしくは覺え侍れと。
猶左の。にほひをゝくるといへる。かの春の山へはとを
けれとゝいふふること思ひ出られて。にほひそへる心
ちす。左の勝と申へし。

八番

左　良敏

よそにたゝ眺めやらん山櫻ちかきは花のおらまほしさに

右勝　忠勝

咲にけりたかまの山の櫻はなおなし梢にはれぬしら雲

左題をよめる心はおかしくきこゆれと。はなのもとは
おらまほしとて。よそにてやみなん。あひなくやあらむ。
右おなし木すゑにといへる姿こそ。峰のしらくもはつ
ねのことなれと。たかまの山はことに侍るにや。よりて
以レ右爲レ勝。

一番　左持　故郷郭公　中納言君

なには潟あさこき行は時鳥聲をたかつの宮に鳴也

右　少輔公

故さとのみかきの原のほとゝきす聲は昔にへたてさりけり

左歌詞存二古風一。近代入二幽玄一。但郭公高聲。强非二其庶幾一歟。右歌すかた心よろしくは見え侍るを。かの石上ふるきみやこのほとゝきすといへる素性か歌に。通すきてや侍らむ。但是はみかきかはらとをきて。昔にへたてすといへるこそ。物上手のしわさと見え侍れ。されと古きこと葉おほし。仍てかつとも申かたし。持なるへし。

二番

左持　蓮忠

ほとゝきす過かてになく故郷をいかてか人の住あらしけん

右　泰覺

古を思ひいてゝやほとゝきす聲をたかつの宮になく覽

此つかひ。ともにゆうにこそ侍れ。各ふるさとをおもへるこゝろ。かの箕子之作二麥秀詩一。周大夫之成二黍離章一。みなこの心なるへし。高津宮も古をおもひ出やといひては。今少しよくきこゆなるへし。いつれも。何となくあはれにきこゆ。よりてまた持とす。

三番

左　證兼

ころはかり昔といひしことのはに露もたかはぬ旅の空かな

右勝　親實

けふこゝに初ねをそきく時鳥なきふるさとと人はいへとも

左のうたから。聲はかりこそむかしなりけれといへる歌を。本歌とせるなるへし。かゝる様も侍事なれと。歌あはせの時は。猶あまりかすかにやあらむ。右歌はつねをそきくとおきて。鳴ふる里と人はいへ共といへる。いとおかし。右の勝と申へし。

四番

左持　明智

すたきけむひとをやしのふ時鳥あれ行里に猶きなくなり

右　智暹

あれ果るたかつの宮の子規なにはのこともかなしとやなく

左右兩首。心同詞優也。但不二委細一。故爲レ持レ之。

五番

左勝　賢辰

里はあれて人はふりにし哀をもしりかほになく時鳥かな

右　觀宗

淺ちふのかきほにすたく蜀魂なれも昔やおもひいつらむ

左歌かの庭もまかきもといへる歌を本歌とせる。心はおかしくは見ゆ。但古今の本歌の五七句を。そのまゝにをかんことや。歌あはせのときはなを思唯あるへく侍らむ。右歌郭公をすたくとよめること。きゝなれすやあらん。あさちふのかきほもいかゝ。猶左の勝とや申へからん。

六番

左勝　道禪

故さとの花たちはなに時鳥むかしをしのふ聲きこゆなり

右　長照

すむ人もなき故里にほとゝきす昔をしのふ音をやなくらん
二首のほとゝきす。共にわかれをしのふる。心すかたまたおなしくいうにみゆるを。左は花たちはなと置るに。匂ひくはゝりてきこゆ。仍又左爲ㇾ勝。

七番

左勝　信親

すみなれし里はみしよにあらね共山時鳥こゑはふりせす

右　智經

あれにける宿の梢にほとゝきすたれをあるしと名乘行らん
左歌郷里跡已變。山鳥聲獨新といへる。こゝろすかたいうに見ゆ。右歌やとのこすゑになといへるはよろしきを。名乘はあるしにやはとそきこゆる。左のかちなるへし。

八番

左勝　良敏

すむ人もなき故郷の郭公たれとかたらふ聲にかあるらん

右　忠勝

あれ果てゝもすさめぬ故郷に誰とかたらふほとゝきすそは（かなイ）
左右のほとゝきすたれとかたらふといへる。心はおなしきを。猶左はこと葉つかひ少しはまされるなるへし。かやうのことは。いくはくかはれることやはなといふ人ありぬへきことなれと。かの法花の弟子品文にや。天見ㇾ人人見ㇾ天と釋せるを。人天交接兩得ニ相見一といひつれは。いますこしめてたくきこゆる樣に。詞心もすこしきゝよくなりぬれは。勝負いてくる事に侍る也。仍左の勝とす。

一番　湖上月

左勝　中納言君

夜もすから志賀の浦和に月すめは水も結はぬ氷しにけり

右　少輔公

見わたせはめも遙かなる水海にみちてもすめる夜はの月哉
左歌ことなるとかなく。優に侍めり。右歌みちてもすめるなといへる末の句は。いとおかしきを。めもはるかなるなといへるそ。目のことはや。歌合の時の歌にはいかかと聞え侍らむ。左の勝なるへし。

二番

左持　蓮忠

月きよみしかの浦人沖にいてゝ舟はたたゝく袖そくれぬる

右　泰覺

すはの海よすからさゆる月影をかちわたりする氷とそみる
左はしかのうらに釣漁の舟をのそみ。右はすはの海にかちわたりのこほりかとうたかへる。心とところことなれと。歌のしなおなし。持と見えたり。

三番

左持　證兼

さゝなみやしかの浦わに風すみて宿れる月ものとけかり鳧

右　親實

月影のあふみの海にみちぬれはふたもおほはぬ鏡とそみる
左歌すかたはよろしくみゆ。かせ澄てといへるや。月すみて風はのとかなりとやあるへからむとそきこゆる。右歌心こと葉おかしくはきこゆるを。鏡匣あまりにこたいにやあらむ。倚また持とすへきにや。

四番

左持　明智
秋のよは余古の入えに澄月をさえぬつらゝと思ひける哉

右　智暹
夜もすからしかつの浦による玉や波ちはるかに照す月かけ

左右ともに。姿心おかしくはきこえ侍。但左さえぬつららといへる。月をもさゆとそいはまほしき。されと是は。ことにさむからぬ心なるへし。右は波ちはるかにといへる。姿はよろしきを。夜もすから玉のよらむことやいかゝ。かの孟甞君か（ヲイ）浦にかへりしたまもひとつ也。是もまた持とす。

五番

左　賢辰
鳰の海くにつみかみの浦かけて波ちもさやに照す月かけ

右勝　觀宗
唐さきやしかの浦わに月すめははるかにうたふ沖の釣舟

此兩首。とかくにおかしく社見え侍れ。古風躰。猶故實。いひしりて見ゆ。右はことなくいひくたしたるさまなから。新羅の御まへより眺望しくたしたらむ。さこそは侍らめと。見るやうに侍うへに。棹歌一曲釣漁翁といへる詩の心とおほえて。心ほそくきこゆ。右はいさゝかはまさり侍らむ。

六番

左持　道禪
唐崎やえかたの波やあやの上にうつしてそみる秋のよの月

右　長照
月清み汀の波のをとせすは氷れるしかの浦と見てまし

左えかたのなみのなといへるけしき。最おかしうふるまへる歌なるへし。右ことなる事はなけれとも。こほれるしかのなといへる末の句も。よろしくきこゆ。とりとりなるによりて。亦持とす。

七番

左勝　信親
おほそらとひとつにすめる湖のなみちより社月はいてけれ

右　智經
さゝ波やひらの高ねに月すめはしかつの沖に雪そ消えせぬ

波ちよりこそといへるは。姿心いとよろし。但月いてゝ後や澄むへからんとそきこゆれと。空も湖も。かれてすまんことなとか。しかつのおきは月をすませて。比良の高根にや雪はつもるへからむとそ聞ゆれと。おきにも雪のきえぬかと見えんも。またいかゝは。猶左のひとつにすめるといへる。姿すこしは増り侍らん。

八番

左持　良緻
くまもなき月は氷と見えなからさゝ波よする志賀の辛崎

右　忠勝
から崎や月影やとすあきのよは心もなみのうへにこそすめ

左さゝ波によするなとは。常にきゝなれたることなれと。月はこほりなといへる姿の優に侍るめり。右月影やとすなといへるは。少しあたらしきやうなれと。こゝろもなみのといへる末の句は。またよろし。是をはからふに。猶持なるへし。

一番　野宿雪

左持　中納言君

雪深き草のまくらを結ふかな秋もはなゆへ旅ねせし野に

右　少輔公

野へもせに雪降に蒐むへしこそ尾花かりしく床はさえけれ

左歌あきのたひねぞ題の外のこと。よしなけれとえんにはきこゆ。右歌おはなとかりしけらむ旅のいほに。床さえことに雪ふるとしらさらんやはとそきこゆれと。歌さまは。これもいふなるへし。持とす。

二番

左持　蓮忠

眞柴かりいほさしやとる宮城野にきたけを寒み雪降にけり

右　泰覺

あはつのに眞柴おりかけ庵してわかふす床に雪そ降しく

左右のましはのいほり。宮城のあはつの所名〔已同。科無ニ差別一猶爲レ持。〕

三番

左勝　證兼

雪ふかき枯のゝ野への旅ねこそ哀をそふるかきりなりけれ

右　親實

かりそめと思ひしのへの草の庵に雪も日數もつもりぬる哉

左のかれ野の旅ね。あはれもけにさることゝきこゆ。右の雪も日數もといへることそ。見侍し心ちすれと。さしておほえ侍らす。かゝることなくは。歌さまはおかしかるへし。但雪つむとも。野邊廬に日數をきへつまんこと。いかゝ。左の枯野の野へ。させるふしはなけれと。あはれ深くきこゆ。かつと申へし。

四番

左　明智

いほりさす野へのしら雪積りつゝ草のまくらに花咲にけり

右勝　智還

道見えす雪降にけり踏わけて行人をまて野ちの朝立

兩首の風躰。雖レ爲ニ同科一。左の草まくらの花、少しついてなくやあらむ。右は猶旅宿之徒類。別ニ前途之行人一。さもあることゝ聞ゆ。右の勝なるへし。

五番

左持　賢辰

かりてふく野原のをかや雪つみて庵にわつらふ草まくら哉

右　觀宗

山おろしにゐなのさゝ原吹雪してねさめかちなる雪の下伏

左すかたは優に見ゆ。庵にわつらふといへるまてに。歌の心はきこえぬるを。かさねて草まくらかなといへる事。重疊してやきこゆらん。右上の句のふるまひ。草なとのこゝちすらむ。ねさめかちなるも事悪にや。まところみかたくこそ侍らめ。但歌のほと持と見えたり。

六番

左　道禪

いとゝしく旅ねの床の狭莚に雪降つもる野原しのはら

右勝　長照

霜かれの小かやかりしき旅ねする野へさへさえて雪降に蒐

左歌いとゝさむきたひねの床に。野原しのはらゆきつむといへるなるへしとはみゆれと。狭莚に雪積るやう

にそ見え侍る。さらは野原しのはらよしなくや。右歌は野へさへさえてといへる。日かすゆく心や　あらまほしからむ。但右すこしは勝へし。

七番

左持　　信親

夜もすから雪のうはきは重ぬれとさえ社勝れ野への旅ねは

右　　智經

あたに社のへのかり庵は結ひつれ思はぬよはの雪のうはふき

左右爲レ躰。共錺ニ其花一。頗忘ニ其實一歟。雪のうはき。雪のうはふき。其こゝろまた相似。仍可レ爲レ持矣。

八番

左勝　　良敏

庵さす野へのをかやの隙を荒み白むと見れは雪にそ有ける

右　　忠勝

ぬは玉のよはの白雪心せよまはらにさせる野路のいほりを

此つかひ。共にことなるとかなし。いらに侍めるにとりて。猶左いますこしよろしくきこゆ。勝と申へし。

一番　　談合友戀

左　　中納言公

散さしと神に誓ひし妹からへも君はかりにはえ社へたてね

右勝　　少輔公

白雲のへたてぬ中といひなから空おそろしき戀をきかする

左歌ことなるもしはなけれとも。亦させるとかなし。右空おそろしきや　何事そときこゆれと。白雲のへたてぬなといへるところ。心よせありて見ゆ。右勝なるへし。

二番

左持　　蓮忠

身をつめはけにさり共や思ふとて戀するとちそ語らはれける

右　　泰覺

君に吾人のつらさを語るまにうき身の程をしられぬる哉

左右兩首。同科無ニ差別一。依爲レ持。

三番

左　　證兼

戀ゆへに語りあはする諸人のこゝろ〳〵そおもひしらるゝ

右勝　　親實

あふ事のかたきを君となけくかなかねたつ程の契と思へは

左歌以レ及ニ諸人之風聞一。此爲ニ廣座之露顯一歟。戀の歌の常のならひにあらすやあらむ。依レ之圖レ之。契談焼ニ心懐一。其理可レ然。仍以レ右爲レ勝。

四番

左持　　明智

慰むるかたなからまし我戀はへたてぬ中のなき身なりせは

右　　智暹

妹かことといひてなくさむ人もなき人いかにして日を暮す覽

左なしといふところ兩所あり。右殊成難なしといへ共。歌にかたんことかたくや。猶持なるへし。

五番

左持　　賢辰

いかにそとことゝふ人に語る哉戀のやまひのつきしおこりを

右　　觀宗

思ふとちあらましことにしつる哉君にあひみん夜はの契を

左戀の初の病のおこり。右のあひ見む時の　あらましこ

と。いつれもこゝろなきにあらす。持とす。

六番

左持　道禪

吾戀のゆかりにもあらぬ人にさへ君か事のみいふやなになる

右　長照

へたてなく語り合するかひありて君に逢ふへき戀路をしへよ

兩首の戀。勝負又不分明。おほかたは。戀のうたに君とよむことは。その人にむかひ其人におくるときよむなるへし。他人に談する時。君字頗荒凉なるにや。是も猶又持なり。

七番

左　信親

思ひかねたのむ中とて語れ共あふへき道をいはゝ社あらめ

右勝　智經

君ならて誰にかいはん吾妹子かうきもつらきもしる人そしる

左依レ爲二戀中一雖レ談殆以二可レ遇路一不レ指といへる。おかしくきこゆ。右稱二芳友一爲レ君。以二戀主一謂二吾妹一。こころ又いひしりて見ゆ。但右の末の句。かの友則を本とせるこゝろ。尙よろしきにや。少しは勝なるへし。

八番

左勝　良敏

あひみねは我とはいはす君たにも戀しぬへしと又語りせよ

右　忠勝

戀しさをいひ慰むる人なくは今まていきてなけかさらまし

左歌のまたかたり。友たんかうといはん題のこゝろは。かやうにこそはと。おかしくきこゆ。右ことなるとかはなけれとも。又させるふしなきにゝたり。よりて以レ左勝とす。

判者歌

和歌の浦の波に朽ても年へすは新羅の神にしられましやは

先日所レ給レ預之歌合。如レ形加二判詞一所二進覽一也。日來雖レ有二種々病疾一。且難レ背二君命一。且依レ恐二神慮一。相扶講功候也。抑近來和語好道家處。多以蜂起。然而自陳事不レ驚思給之處。於二今度歌合一者。殊感與不レ少者也。三密瑜伽之壇傍。暫詠二柿下之風一。一乘止觀之窓前。遙望二湖上之月一。卽參二詣新羅社之廣前一。各講二誦豊葦原之舊跡一。以更爲レ分二此勝劣一。誤被レ召二取愚判一。一爲レ恐一爲レ悅者歟。以二拙身之虛名一及二衆徒之高聞一。已可レ爲二今生名譽後世資粮一也。但愚判之趣定不レ叶二衆心一候歟。此條聊畏申之由。可レ然之樣可レ令二披露一給上候也。頓首敬白。

十一月五日　皇太后宮大夫俊成

謹上　石藏法橋御房

右大臣家歌合 安元元年十月十日

題

落葉　初雪　曉戀

歌人

左　右

大貳卿　頼政朝臣
女房丹後 頼行女　寂念法師 爲業入道
季經朝臣　頼輔朝臣
女房 皇嘉門院別當局　小侍從
經家朝臣　行頼
隆信朝臣　仲綱
基輔　尹明
季廣　資忠
俊惠法師　道因法師
右大臣 兼實公　清輔朝臣

判者

清輔朝臣

一番　落葉

左勝　大貳卿

木からしの吹にし日より立田川もみちになれる浪の音哉

右　頼政朝臣

ちらしても猶ふく風はいくたひか楢のかしはをかへし行覽

左歌あしくも侍らす。右歌もあしからねと。かみおろしの句に。ちらしてもと侍る。風さきにあらまほし。又させる詮もなきやうなれは。以レ左可レ爲レ勝にや。

二番

左勝　女房丹後

ちりぬれは紅葉の色に埋もれて谷のむしろにしく物そなき

右　寂念法師

よしの川もみち流れて岩からへにくれなゐ深き浪そ越ける

左歌さてもありなん。谷のむしろにしくなといへるも。便ありて聞ゆ。右歌は古今集に。もみち葉のなかれてとまるみなとには紅ふかき波やたつらんと云歌侍り。おなしことゝ聞ゆれは。これも左勝にこそは。

三番

左勝　季經朝臣

炭竈のあたりに積るもみち葉はこかれし色そ深く見えける

右　頼輔朝臣

板間ふく木のはの音をあやなくももる時雨かと思ひける哉

左歌一興そ有し。右歌板まふくとある五文字。おひたゝしくや。良暹法師か。板間よりもりくる月の影みれはやとはあらしてすむへかりけりとよめるはよき歌を。大宮禪師懷圓は。歌の五文字と童女のあしからとは。まつなたらかなるへしとこそいへれ。板間おひたゝし。貫之か。あれたる宿の板間よりとよめるは。腰句にかきはさめたれはこそ。くせとも聞えねとそ申ける。けにあることなり。いはんやさせる事なからん歌を。もる時雨もすてにもりきたる心地すれは。かた〳〵心ゆかす。可レ爲ニ左勝。

四番

左勝　女房皇嘉門院別當局

一村も枝に木のはのとまらねは庭をそ秋のかた見とはみる

右　小侍從

もみちちる小川のなみの立たひにきれ〴〵になる唐錦かな

右歌もみち散をかはの波といへる。便なき心地に。なを山なとの事あらまほしき。きれ〴〵になるといへるも。おひたゝしきやうなれは。左勝とや申へからん。

五番

左持　經家朝臣

庭の面に風に波よるもみちはさらす錦をまくかとそ見る

右　行頼

思ひやれ庭のこのはを蹈分てとふ人もなきやとのさひしさ

左歌句のする。詞の終ににもし侍り。是はふるくもよからぬ事にそ申たるかし。又錦をたゝんなとこそいへ。卷と侍るもいかゝと覺侍り。右歌すかた心ともにあしくもはへらねと。もみちはそはの事にて。たゝ淋しきことをのみのへられたれは。歌合なとにはいかゝとおほゆれは。持なとにてや侍るへからん。

六番

左持　隆信朝臣

ちりしをもあはれと聞しもみちはを又らら返す風わたる也

右　仲綱

散かゝる紅葉か下にふす鹿のうへはなつ毛の心地こそすれ

左歌させる事なくや。うらかへすなと侍るもいかにそや聞ゆ。右歌心はたくみなるやうなれと。夏毛もひとへに紅にやは侍るへからん。おひたゝしく聞ゆれは。何とも申かたし。

七番

左勝　基輔

もみちちる清瀧川をきてみれは錦をつまぬ筏しもなき

右　尹明

時雨する音はすれとも槇の屋のもらぬはおつる木葉なり鳧

左歌清瀧川そよしなく聞ゆれと。すかたはあしくもなし。右歌初句にしくれするといひて。次の句に音はすれともといへる。病にてこそ侍らめとみゆれは。左勝に侍るめり。

八番

左　季廣

さほ川に峯のもみちを吹かけて波も錦のころもきてけり

右勝　資忠

紅葉ちる山よりかへる賤の男は誰ためこれるにしき成らん

右歌心は侍るを。紅葉の散かゝりたるよしそあらまほしき。左うたもあしくもなきを。風といふことなくや吹と侍る。いかなると右の方人申されしかは。庭のはなもとの梢に吹かへせちらすのみやは心なるへきといふ歌もなくやはと申しかと。猶人々。歌合はことかはることなりといひとをり申されしかは。右勝に定め申てき。

九番

左　俊惠法師

しなか鳥猪なのしは山吹風におろす紅葉そこやの八重ふき

右勝　道因法師

紅葉ゆへふたゝひつらきあらし哉又庭をさへ拂ふへしやは

左歌おほつかなき事多し。ひとつはしなか鳥のゐなのしは山は。ふるき歌の二句なり。いと名歌ならぬはよめることあれと。これは名歌にはへり。就中歌合にはいかか侍るへからん。すゑにこやの八重ふきとあるも。なを花なとによせては。やへ葺ともいひてん。もみちはたよりなく聞ゆ。又こやの池のやへ葺とそあるへき。かたかた心得られ侍らす。右歌は心こと葉あしくもあらねは。勝にこそ侍らめ。

十番

左勝　右大臣

槇の屋にたえす音なふ木のはこそ時雨ぬよはの時雨成けれ

右　清輔

閨の上におり〳〵そゝく村時雨かはける音や木のは成らん

左歌心おかしくこと葉清らか也。時雨ぬよはのしくれなりけれの句。さはやかにて。相摸御の歌と覺えたり。右歌わかことなれはにや。させる難はなしと思ひ給ふを。かはける音こゝろえす。濡たる音いかなるそなと申さるゝ人ありし。わりなく侍り。資通大貳歌合に。良勢法師の歌にも。風にかはける聲きこゆなりとこそよめれ。但左歌こよなくて。右はまけ侍りぬるにこそ。

一番　初雪

左勝　女房別當

めつらしと神もみるらん榊葉に白ゆふかくる今朝のはつ雪

右　小侍從

めつらしく我は待みるはつ雪をいとひやすらん小野の里人

左歌めつらしからぬ心なれとも。よくつゝけられたり。右歌まち見るといへる詞。いとしもなし。又古歌にさふさをこふるをのゝ炭やきと讀るは。冬の來るをはられしき事におもへるにこそ。初雪を厭へしとはおほへす。大かた歌からも。劣り侍るにや。

二番

左勝　季經朝臣

いつしかと冬のしるしに見ゆる哉雪降にけるみわの杉村

右　[illegible]輔朝臣

木の間もる月の影にも似たる哉はたらにふれる夜半の初雪

左右共に。ふるき心にはへるを。左はすかた歌めきたれは。可レ爲レ勝歟。

三番

左　女房丹後

けさよりは消んことをそ思ふへき待えて見つる庭の白雪

右勝　寂念法師

霜かれの眞萩か枝そめつらしき遠里をのゝけさ[illegible]はつ雪

左歌ことなる事なし。右歌まはきかはら。とをさと小野なといへるあたり。いひなれて聞ゆれは。可レ勝にこそ。

四番

左勝　經家朝臣

吉野山あをねかみねも白妙にふりそうつめるけさの初雪

右　行頼

いつしかと越路のかたをけさみれは比良の高ねに初雪そ降

左歌させる難はへらす。右歌こし路の方をみわたしてひらの雪をみたる。おほつかなし。彼山はあふみの國と

こそしりて侍れ。こしちに又かくいふ山の有にや。このひらならは。あふみちとはいひてん。僻事と聞ゆれは。
左勝に侍り。

五番

左勝　隆信朝臣

さむしろの俄にさゆるあやしさに起てこそみれよはの初雪

右　仲綱

淋しさは兼て降にし山里にならはしかほのけさの初雪

左歌にはかにさゆるそいかゝとおほゆれと。右歌のならはしかほのとはへる。なの意よりは。さにてこそは侍らめとそ見ゆる。

六番

左持　俊惠法師

めつらしく又も見よとや吉野山さくらか枝にふれる白雪

右　道因法師

待つけて雪みるけさは故郷のすみ馴しさへめつらしき哉

左歌はめつらしくまたもみよとやと讀るは。春花を見よとおもひて侍るにや。いとさも聞えすそ。雪をいへる心地しはへり。心さしうちにありてこと葉外に顯れすなとは。かやうの事にや。右歌からはあしからぬを。初雪のこゝろやなからん。まちつけてといへるにて。初雪とはおもひかたし。いつれもおほつかなき所あれは。持なとにてや侍らん。

七番

左　季廣

霜かれとみしほともなく淺茅生に初雪ふりぬいとゝ淋しも

右勝　資忠

花咲し秋におとらす見ゆる哉枯野からへにふれるはつ雪

左右ともに。あしくもなきうちに。右は今すこしよしひたれは。勝にてや侍るらん。

八番

左　右大臣

初雪のふれるあしたの旅人はみな白菅の小笠をそきる

右勝　清輔朝臣

おしねかる賤のすかきも白妙にはらひもあへす積る初雪

左右歌。同樣にきこえ侍るを。雪ふらん時はいかゝなと申人ありしかとも。田は秋こそかる物にてあるを。雪ふらん時はいかゝなと申人ありしかとも。

九番

左勝　基輔

めつらしや今朝はつ雪に宮城のゝ萩のふるえに花咲にけり

右　尹明

今日よりは谷の岩道雪ふりて跡たえぬへき深山邊の里

左歌萩のはなは白くやはさく。雪におもひまかふへからすと。人々申されしかと。雪は花に似たる物なれは。色までの事はあまりにや。又萬葉集には白萩なともよめは。強に咎にはあらし。歌からあしからす。右は谷の岩道なと。なき事にはあらねと。聞つかぬ心地すれはとて。左勝と申てき。

十番

左勝　大貳卿

朝またき大内山を見わたせは今日そみゆきのはしめ也ける

右　頼政朝臣

降雪にかへらぬ色の狩衣けふやはしめてぬれんとすらん

左歌いとよくよまれたり。心しめつらし。右歌かへらぬ色のかり衣けふやはしめてかへらんすらんとそいふへき。濡むとすらんといへるは。かきあはぬこゝちす。又はしめて狩衣のぬるゝにて。初雪のこゝろ侍りなんや。雪はとくもふりにけん。たゝかりする事の今日はしめたるにもあらんと聞ゆ。かた〳〵左歌にをとりてや。

一番

左　曉戀　右大臣

うつゝにも別し鐘のこゑなれは逢と見るよの夢も覺けり

右勝　清輔朝臣

獨ねの戀のけふりやほの〳〵と明ゆく山の峯のよこ雲

右歌はまされるさまに。人々申されしとおほえはへるは。僻事にや。

二番

左　俊惠法師

見ぬもうしみてもわりなし夢故に物を思はぬ曉も哉

右勝　道因法師

誰とねて君きぬ〳〵に成ぬらんかたしきてこそ我は明すに

左歌夢ゆへに物をおもはぬ曉そなきとそいはまほしき。あかつきもかなといへる。打聞たる。かきあはぬやうにや。右あしくも侍らす。たゝかたしきてこそとあるそ。何をかたしきけるにかとおほゆれと。あまりの事なり。可レ爲ニ右勝一。

三番

左　大貳卿

をのつから逢とはいはすあはぬよも明ゆく計戀しきはなし

右勝　頼政朝臣

鐘の音を獨ぬるよもいとへたゝ逢てふ夢を打さましつゝ

左あはぬ夜のあけゆかんは。いかに悲しかるへき。ひとり寢のよのなかきをこそ。なけく事にははへれ。されは道綱母の歌にも。ひとりぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしるとこそよめれ。右すかたはあしくも聞えす。逢てふ夢そ心ゆかす侍る。あふとみる夢とこそいふへけれ。逢こふ夢は心えねとも。ふかき咎にもあらねは。猶右勝へきにこそ。

四番

左勝　女房丹後

戀あかす我をはしらて君は今たれと別を惜かぬらん

右　寂念法師

詠わひ君待わひて月日のみすきの板戸の明くれの空

右なかめかねとまちける。かくいふへしとも聞えす。大かた五句きれ〳〵にて。又いひとちめたる所もなし。左もさせることとなけれとも。こゝろはさにこそとみゆめれは。勝もし侍りなん。

五番

左勝　季經朝臣

わか戀る人はとはてそ明ぬなるまたれぬ鐘の音はすれとも

右　頼輔朝臣

鳥の音にいとゝ泪のおほつかな今宵もあはて明ぬと思ふに

いつれもおなしさまにみ給ふを。左はすこしおもひよせるやうに。人々申されしかは。勝にこそ侍るめれ。

六番

左持　經家朝臣

戀しつゝ獨ふせやにましりきてとふらふものは有明の月

右　行頼

さらぬたにねさめ露けき曉にしのひし人をおもひ出つる

左歌月はいかにとふらひけるにか。おほつかなし。戀のなくさむ心にや。月見ては人こひしと社申めれ。右あかつきは人をおもひ出てそ露けかるへき。さらぬたにといへる。心えられす。いつれとも申かたくそ。

七番

左　隆信朝臣

思ひ寢の夢にもしはしなくさめてそれさへ鳥の驚かす哉

右勝　仲綱

夢の中におき別ぬる曉はうつりかたにもとまらさりけり

左させる事なし。右おきわかれぬるといへるわたりそよからねと。末よく聞え侍れは。勝にはへるめり。

八番

左持　基輔

あかなくに別し程の鳥のねはそれよと聞もうらめしき哉

右　尹明

東雲のあくるをのみそ歎かまし逢みて歸る空とおもはゝ

左右。おなしほとなり。

九番

左　季廣

詠やる山のはのみか待かぬるこゝろのうちも明くれそす

右勝　資忠

明ぬとてきぬ／＼になる空さへそかはさぬ袖は美まれぬる

右はこゝろはへまさりてや。

十番

左持　女房別當

鳥のねも我もかはらぬ曉にかへりし人のかけそ戀しき

右　小侍從

思ひきや歎て過し年月にけさの別のまさるへしとは

左歌月あらまほし。右歌は後朝のうたにこそ侍るめれ。曉の戀はなを分別すへき事なり。さはあるへきことなし。右は題の心なけれは。おなしほとの事に侍るめり。

大略伺ニ御氣色一。所レ付ニ勝負一也。當座付ニ勝負一。翌日書ニ判詞一。其後所レ付ニ作者一也。兼不レ存ニ歌合之儀一。只爲ニ比興一臨レ期隱ニ作者一合之。最寄事也。就中未レ入ニ其境一之輩。且爲ニ練習一詠之。努々不レ可ニ披露一。若貽ニ後代一者。必可レ招ニ恥辱一者也。早可ニ破却一之。以前兩度會。又以同前。

安元元年十月廿九日書寫之

和歌部四十三　歌合九

別雷社歌合

治承二年戊戌三月十五日己酉。天晴。今日於二別雷社廣庭一。有二歌合事一。是則當社神主重保之結構也。歌人六十人。分二左右一番之。

題

霞　花　述懷

作者

左

中宮大夫隆季　權大納言實房
藤大納言實國　左衞門督時忠
左兵衞督成範　源中納言雅頼
權中納言實綱　右宰相中將實守
宮內卿永範　太皇太后宮權大夫經盛
左京大夫脩範　皇太后宮大夫入道釋阿
法印靜賢　前權律師範玄
刑部卿頼輔朝臣　右少將隆房朝臣
左少將有房朝臣　前右衞門佐忠度朝臣
前民部少輔盛方朝臣　前右馬權頭隆信朝臣
右少將公時朝臣　民部少輔定宗
成家　季廣
兼綱　敦仲
廣言　親盛
僧寂念　佐

右

觀蓮　二條院讃岐
登蓮　俊惠
通親　公重
師光　前齋院大輔
成仲宿禰　資隆
顯家　賴政
季經　經家
僧道因　親宗
經正　僧寂蓮
僧顯昭　仲綱
定家　伊綱
公衡　前齋院備前
智將　僧勝命

僧祐盛

沙彌行念　　沙彌安性

重保

判者　入道三品釋阿

一番　霞

左勝　　隆季

神かきや榊にかくるしめを又いかにたなひく霞なるらん

右　　觀蓮

朝霞をしほの山にたちにけりいはねとしるし春のけしきは

左の歌。榊にかくるしめを又いかにたな引といへる心。よろしくこそ侍るめれ。右の歌心おかしくはみえ侍るを。小鹽の山は。たゝ大原やをしほの山なとよめるこそ。えんには聞え侍るを。さらては山の名も口おしくや。よりて左を勝とすへし。

二番

左　　實房

むら雲の絕まの空やうつるらんまたらに見ゆる朝霞かな

右勝　　讃岐

はる霞わけ行まゝに尾上なる松のみとりそ色まさりぬる

左村雲の空かすみにうつりて。霞の色またらなる心は。いとおかしく侍る。右春霞さをけるはしめの句や。今すこし思ふへからんとみえ侍れと。分行まゝに松のみとり色まさらむ心姿。ゆうには侍るにや。右の勝なるへし。

三番

左持　　實國

霞しく志賀のわたりをみ渡せはいつれかひらの高ねなる覽

右　　登蓮

八重ふかく野もせの霞立にけりいつくか室の八嶋なるらん

左右の霞。ひらの高ね。室の八嶋。いつれいつくかといへる心姿。定め申かたし。いつれも名高き所なるらへに。歌の姿共におかしく。かみの句も。とり〳〵なるへし。仍持とす。

四番

左持　　時忠

をしほ山こ松か原のかすめるははや大原に春はきにけり

右　　俊惠

しめはへてしつのあらまく小山田の春のかこひは霞なり鳧（なるらんイ）

左のをしほ山の霞。おかしく社思ひやられ侍れはや。大原にといへるわたりや。かのせれうの里わたりのおほはらにやと聞え侍らん。是はおほ原にこそ侍るめれ。右春のかこひといへる。つよきやうには侍るを。しめはへてとをき。賤のあらまくなといへる姿。かの田夫の花のかけにやすめらん心地して。かたらん事かたし。是をなすらへて。又持とすへし。

五番

左持　　成範

いつしかとをとはの山のかすめるは春をこめてや立渡る覽

右　　通親

はる霞立はこむれと榊葉の香をかくはしみかくれさりけり

左の歌姿詞ゆうには侍らめと。春をこめてやといへる心や。心得ても侍らさらん。右の歌詞つゝきことにやすらかにはくたれと。霞の中は榊のかくれさらん心。おか

しく聞ゆ。猶又持とす。

六番

左　雅頼

いつしかと春めく人もゆかしきに立こめてける朝かすみ哉

右勝　公重

をくら山霞にこめてみえねともとなせの瀧の聲は聞ゆる

左やすらかにいひ下して。ことなるとかなきなるへし。右深き心はなけれと。をくら山霞にこめてなといへるも。つゝき宜しく侍るにや。仍右の勝にや侍らん。

七番

左持　實綱

けさ見れは霞にくもる鏡山はるゝはみかくこゝちこそすれ

右　師光

みかりせしもす野の原の朝霞その草くきやいつく成らん

左歌詞實文花あひかねておかしくはみえ侍らめと。但霞に曇るとをきなから。はれぬるを歌の表として。鏡山を賞せぬやうにみえ侍らん。右歌姿柿本の風を傳へて。言葉を藤のうら葉にかけたり。但霞は春のうちにてたにあらは。早晩心にあるへけれと。此題は猶春の初ならむや宜からん。此歌くれの春なとやいかゝ。左右ともに宜しき歌の。いさゝかの疑あるによりて持とす。

八番

左持　實守

きのふまて雪降つみし御吉野の春知かほにけさはかすめる

右　大輔

霞たつこせの春野のたま椿つらねもあへすみえみ見えすみ

左めつらしきふしにあらねと。こと葉つゝきことなるとかなく。優に侍るへし。右巨勢の春野のなといへる姿。ことに庶幾せられさる言葉にはみえ侍れと。彼つらつら椿つら〳〵に見れともあかすこせの春野はとかやいへる萬葉集の歌を思へる成へし。ひとへに古風を存せるうへに。霞のたえま〳〵。つらねもあへぬ心とゝめて見ゆ。よりて又持とす。

九番

左持　永範

さほ姫の霞の衣をりてけり遊ふ糸ゆふたてぬきにして

右　成仲

なにはかた霞たな引春のよは澳こく船の見えみみえすみ

左霞にあそふ糸ゆふたてぬきにしてといへる心。彼當レ天遊織ニ碧羅綾一といふ句も思ひ出られて。さほ姫の句たくみならむ。思ひやられておかしく侍り。右難波の浦の霞に沖こく船のなといへるすかたも。心あらん人に見せはやといひけん程もおもひやられて。一かたにしもおほえ侍らねは。猶又持とす。

十番

左勝　經盛

神山のこすゑにかゝる夕霞これこそ春の手向なりけれ

右　資隆

春霞あめかしたにそみちにける神の惠もかくそ有ける

左の歌山のとをきを。梢にかゝる夕霞といへる文字つゝき。いひしりてこそみえ侍れ。右の歌神の惠もなといへる。心はゆうにはへり。かすみやあまりならむとそ見

え侍る。左を勝とす。

十一番

左勝　脩範

やへ霞さやの中山たちこめて遠近人やみちたとるらん

右　顯家

かつらきや高まの山のしら雲に春はかすみそ立かへてける

左首尾相叶て心詞よろしくこそ侍れ。右春は霞そなといへる。姿はおかしく侍るを。たかまの山の嶺の雲。春は立すならむ事。おほつかなくこそ。よりて左を勝とす。

十二番

左　釋阿

そまくたし霞たな引春くれは雪けの水も聲あはすなり

右勝　頼政

かすみをや煙とみらん武藏野のつまもこもれる雉子なく也

右歌かのむさし野はけふはなやきそといへる歌を本として。つまもこもれる雉子なくなりといへる心はへにこそおほえはへれ。上の句も。素性か花とやみらんしら雪のといへる歌とおほえて。いとおかしく侍り。左は初にそまくたしとをけるや。にはかなる心ちして。ゆうにしも聞えす。以レ右爲レ勝。

十三番

左持　靜賢

神かきのあたりをはらふ春風にたちものかぬは霞成けり

右　季經

さらぬたにあたにもみえぬ玉垣にかさねてこむる八重霞哉

左神垣の春風。そのあたりにはらひ。右の玉垣は霞かさねて宿衞せり。兩首の姿心。をの〳〵おかしく見ゆ。持とすへし。

十四番

左持　範玄

かみ山はかすみにけらし榊葉のかをとめつゝや春は行へき

右　經家

いつしかとさほの山へにかけてけり霞の衣たつと見しまに

左の歌。かをとめつゝやといへる末の句は。ゆうに侍るめり。けらしとをけるや。かなひてしも聞えさらむ。右の歌さほの山へに霞かくなといへる。心は常の事なれと。末の句なと宜見ゆ。但左の霞は神山にことかゝれり。猶持とす。

十五番

左　顯輔

朝またきかもの川瀬をみ渡せは霞の底に埋れに鳬

右勝　道因

行末をたちのくけさの霞こそなか〳〵道のしるへ成けれ

左歌よろしく聞え侍り。霞にうつもるなとよむ事。いつこも同し事にはあれと。賀茂の河瀬なとは。さは見えすしもや侍らん。右の歌旅行かすみ立のくやうにみゆらむ。さる事也。心ありて聞ゆ。すこしはまさり侍るにや。

十六番

左持　隆房

神山の霧はいくへへたつともあけの玉垣なやはかくるゝ

右　親宗

わきも子か袖ふる山もみえぬかな霞の衣たちしこむれは

左歌霞はいくへなといへる姿。いとおかしくこそ侍るめれ。なやはかくるゝの詞や。いかゝと聞ゆらん。右歌袖ふる山もなといへる。心すかたいひしりて　みえはへり。但社頭の歌。猶持とすへし。

十七番

左　　有房

見わたせはあかしもすまも霞していつれ成らんをのか浦々

右勝　　經正

吉野山消あへぬ雪をこめつれは霞そ冬のへたて成ける

左あかしも須磨もとをきて。をのか浦々といへる心。おかしくは侍らめと。かすみしてといへること葉。ふるくもよめらむを。えこそ見及ひ侍らね。時雨して夕立して雪してなとは。聞なれてもはへりぬ。いかゝ。右霞のへたてなる心は。つねなる事なれと。心ありても見ゆ。左に申ところ有。仍右の勝とす。

十八番

左持　　忠度

朝霞ふかくしたてはその原やいつらよそにもみえし箒木

右　　寂蓮

よしの山雪には殘る瀧つせもはるは霞にうつもれにけり

左の歌。その原霞によせて。いつらよそにもなといへる所。おかしく侍り。右の歌詞に珍しき事ははへらねと。上下あひかなひて。歌の姿宜しく侍るなるへし。但左は本歌あるやう也。持とすへし。

十九番

左持　　盛方

すまの沖の霞の衣たちぬれはいつれか浦とみえまかひぬる

右　　顯昭

朝かすみ消行まゝに高砂の松のみとりのふかくなるかな

左のすまのおきの霞。いつれか浦なといへる心姿。おかしくこそ侍るめれ。はての句。いさゝか心のゆかぬやうにやはへるへからむ。右の歌始つかた侍りつる歌に。いさゝかの詞とものかはれるなるへし。是は消行まゝにといへるか。いかにそ聞ゆるにやあらん。左右ゆうに侍るへし。又持とす。

二十番

左持　　隆信

山高みかすみの中にきてみれはいてし都を又こめてけり

右　　仲綱

やまひめやさらすかひなく思ふらん霞にこもる布引のたき

左いてし宮古を又こめてけりなといへる心姿。よく侍るめり。右の歌姿いとおかしくは侍るを。霞にこもるといへるや。布引の瀧すこしほいなく侍らん。持とすへし。

二十一番

左持　　公時

見船山そこともみえぬ霞にておちくる瀧の音のみそする

右　　定家

神山の春のかすみやひとしらに哀をかくるしるし成らん

左歌落くる瀧のなといへるすかた。いとおかしく社はへるめれ。みふね山いつこにても侍りぬへからむ。右歌神山の霞もあはれをかくるしるしにやといへる心。よしなきにあらす。但左なにとなく。歌しなおかしくみえ

侍り。右歌又神山に事よれり。猶持とす。

二十二番

左持　定宗

いつしかと焼てし野への霞をは又おもひたつ煙とそ見る

右　伊綱

かつらきやくめちの橋のゆふ霞春はいつくかと絶なるらん

左の歌心姿おかしきやうに侍るを。又思ひたつ烟。さらてもや聞ゆ。右の歌かつらきやといへる。歌めきてはへるを。くめちの橋はわたさんとはしめしはかりにてとたえにやをよひけん。夕霞わきていへるを。なしなへてもいかゝ。左右おなしほとの事なるへし。

二十三番

左　成家

朝霞かすみの中の梅枝に鶯きゐるはるの山さと

右勝　公衡

あさまたきたるみの澳をみ渡せは霞そ渡る淡路嶋山

左歌すかた心よろしくははへるなるへし。たゝし鶯梅かえなとにわたれるにや。歌あはせにはいかゝ。はれの歌は人に見せあはすへく侍る事也。右この澳の名すこしさらすともやと見え侍れと。淡路嶋の霞は。眺望の心いとおかしく。霞の歌はかやうにこそとみえ侍れは。右の勝にこそ。

二十四番

左持　季廣

明くれの空かと思へは朝日さす山ちもみえす霞むなりけり

右　備前

はる霞たては烟もまかひつゝいつれかふしの高根なるらん

左右の霞。左は空を賞し右は高名なり。いつれもすこしあまりにやあらん。尤持とす。

二十五番

左持　兼綱

うとからぬいもせの山の中は只かすみ計そへたてなりける

右　智将

信濃路やみさかをのほる旅人は霞をこゆる心ち社すれ

左の歌いもせの山の霞は。おかしといひつへし。只といへる言葉は。うちまかせぬやうなれと。此歌にとりては。あしくも聞えす。へたてなりけるなとやいかゝ。右のたひ人は。おも影有て優にみゆるを。霞をこゆるといへる心は。さかしきやうなるから。物にくせむ心地やすらん。但左も俗に近き心あり。猶持とすへし。

二十六番

左勝　教仲

山のはに一むらかゝるうす雲はたな引そむる霞なりけり

右　勝命

いつくとも立くる春をしらぬ哉大方そらの霞わたれは

左歌一むらかゝるうす雲と見ゆらむ。宜しく聞ゆ。右歌おほかた空なといへる心もおかしく侍れと。左の霞はいますこしたちまされるにや。

二十七番

左持　廣言

神山は霞にけらし今朝みれはいつらみとりの松のむら立

右　祐盛

はる霞八重のしほちに棚引はそこども見えすおきつ嶋山
左歌おかしくもはへるを。けらしといへること葉や。末の句のいつらみどりのなといへる。姿は不ニ相似一も侍らん。右歌そことも見えすおきつしま山といへる。すかたは宜しく侍るにや。但猶持とす。

二十八番

左　親盛

下の帯に細たに河はなりにけり霞をきたるきひの中山

右勝　安性

武藏野に朝なくきゝす聲すなり霞の中につまやこもれる
左歌よろしく侍り。はしめの句や。たゝしたの帯にとりて侍りなんを。右歌は十二番のつらにや侍りつる歌の。おなし心に侍るめり。是は霞の中につまやこもれるといへる。すかたおかしく侍るを。さきの歌はけふりとやみゆらむといふにこそ。かの本歌にかなひたれ。是は只霞につまのこもれるを尋わひたるとそ聞ゆる。たゝし左の歌。心はおかしきやうなるを。きひの中山の歌を思ひたらむ姿。こていにやあらむ。武藏野の歌も。姿につきて少しはまさるにや。

二十九番

左　寂念

きゝすなく聲はへたてす春霞あたのおほ野の曙の空

右勝　行念

神やまにたなひくけさの霞こそいかきの外の隔て成けれ
左歌末の句よろしく聞え侍り。聲はへたてすなといへる心や。常の事ならむ。右いかきの外のなといへる心おかしく見ゆ。右の勝とすへし。

三十番

左勝　佐

さひしさをとふ人そなき山深み立よる嶺の霞ならては

右　重保

松山のみとりへたつるはる霞今ひとしほの色をかくすな
左右の歌。心姿とり〳〵に見ゆ。左は姿ゆうにして。立よる峯の霞ならてはといへるも心ほそく聞ゆ。右はみとりへたつる春霞なといひて。今一しほのといへる。おかしく侍るを。末の句にかくすなといひはてたるにや。少藝なる心地し侍らむ。左歌猶宜侍るにや。よりて勝と申へし。

花

一番

左　隆季

おほつかな花なき里のさと人は春の心やのとけかるらん

右勝　觀蓮

散ぬとていかゝかへらん山さくらあかぬ名残の花の木陰は
左歌春の心はのとけからましといへる歌の。上句はかりかはれるなるへし。かゝる様にとりては。おかしくもはへれと。あまりにやあらむ。右歌花の陰はといひはてたる程そ。ゆうにしも聞えれとも。花の散なん木の下に。猶名殘をこひたる心。よろしきにやあらむ。よりて右の勝と申へきにや。

二番

左持　寶房

さくらはな散なんのちの姿をはかはかりみせよ嶺の白雲

右　　讃岐

咲そめてわか世にちらぬ花ならはあかぬ心の程はみてまし

左右ともに。姿詞いとおかしくこそ侍るめれ。但左はかはかりみせよといへらむやいかゝ。雲は花の前後おなしくや侍らん。右は我世の言葉。たれもよむことには侍れと。歌合の時はいかにそや。用意あるへくみえ侍る也。持こすへし。

三番

左持　　實國

神かきやみしめのうちの櫻花あらき風にはあたらし物を

右　　登蓮

年毎にそむる心のしるしあらはいかなる色に花のさかまし

左の歌みしめの内のはなあらき風にはなといへる心おかしく侍り。右の歌いかなる色に花のさかましといへる姿いとおかし。つねの花の色には染まさるにやと見え侍れと。みしめの内のはなはあたならす侍れは。持と申へし。

四番

左　　時忠

一年をさなから春になしはてゝたえす櫻をみるよしもかな

右勝　　俊惠

雲かゝる高ねの櫻ちりぬれはゐせきをこゆる天の川なみ

左彼和泉式部か。をしなへて春は櫻になしはてゝちるてふ事をなけかすもかなといへる歌にかよひて。さなから春にと置。たえす櫻をなといへる心。おかしくこそ侍れ。右の歌さまはいとおかしく侍るなるへし。但ゐせきをこゆるといへるにや。山のたかねそゐせきとみむ事。いかゝとおほえはへらん。高陽院家の歌合に。雲井にみゆる瀧のしらいとなといへる歌こそ。誠にさることゝおかしくは侍れ。されとこれもかれもたけあらむとよめる歌に侍るめり。右のあまの河浪。すこしはたちまさるにや侍らん。

五番

左持　　成範

おしめともかひなかりけり櫻花風にのみこそ誘はれてゆけ

右　　通親

神垣にしめゆふ花はもろ人のおもひひらくるかさし成けり

左歌姿詞よろしくこそ侍るめれ。花をおしみかねて。いかゝはせんと思ひけるやうにそきこえはへる。右歌おもひひらくるなといへるあたり。えんなること葉にしもあらねと。しめゆふ花をろかならす見ゆ。持と申へし。

六番

左勝　　雅頼

みよし野の山のあなたに散花を吹こす風の便にそみる

右　　公重

あかすのみ思ふ櫻のはなかとて心にかゝる嶺のしらくも

左右の花。いつれも木の本にてみるにはあらねとも。左は風のたよりにて見るなといへり。右は嶺のしら雲。詞を心にかけたるやうには聞えはへり。あひなくやあらん。花かとてなといへるも。心すくなき心地す。左の勝なるへきにや。

七番

左　　　　　實綱

ときはなる松のあたりの櫻はな散なん山の名をやたつへき

右勝　　　　師光

吉野山さはかぬ雲にしるき哉おのへの櫻はなさかりとは

左歌すかたこと葉おかしく侍り。但これはときはの山にや侍らむ。ふるくはときはの山は吹風のともいひ。よその紅葉を風そかしけるなとやうにいへるや。宜しく聞え侍らむ。山の名をたゝむ事いかゝ。右歌さはかぬ雲といへるけしきよろしく。なへての世も風しつかなる心地す。仍右の勝とす。

八番

左持　　　　實守

たに風の吹上にさける花みれは雲立のほる高圓の山

右　　　　大輔

吉の山このした月夜なくはこそ花みて暮す日をもいそかめ

左雲たちのほるといへる末の句。いとよろしく見え侍り。ふきあけにさけるといへるや。吹上の濱なとのやうなる處のあらむやうにきこゆらむ。右のこの下月夜なくはこそといへる姿。又ゆうにこそはへれ。日をもいそかめといへるわたりや。少し事たらぬやうに聞え侍らん。持と申へし。

九番

左持　　　　永範

心ありて花にはうつれ鶯のはふれに散もおしき匂ひを

右　　　　成仲

はるふかく成行まゝに吉野山梢こそりて花さきにけり

左の歌はなにはうつれといひ。はふれにちるもなといへる姿。いひしりてみえ侍り。右歌梢こそりてなといへる心。よろしく見え侍れは。是も勝負難レ知。仍持とす。

十番

左　　　　經盛

吉野山みねにたなひく白雲の絶まやをそき櫻なるらん

右勝　　　　資隆

神山の榊にましろさくらはなときはの色にならへとそ思ふ

左よしの山嶺の白雲なとは。めなれたる詞に侍れと。たえまやをそきなといへる心。おかしく侍るめり。右の歌ときはの色にならふといふ事も。常の言葉にあれと。榊にましるらむ櫻は。めつらしくもおもひなされて。右の勝とす。

十一番

左持　　　　脩範

日にみかき風にたなひく花よりも光や増る朱の玉かき

右　　　　顯家

櫻花うつゝはかりにちるとみは夢には風をうらみさらまし

左歌日にみかき風にたなひく花に。朱の玉垣光そふらむ心いとおかしく。光やといふやの字や。見すして思ひやれる心地すらむ。右の歌はかの貫之か夢のうちにも花そちりけるといへる歌をおもへるなるへし。夢には風をなといへるすかた。ゆうに侍るめり。持とすへし。

十二番

左勝　　　　釋阿

身にしめしその神山のさくらはな雪降ぬれとかはらさり鳬

右　頼政

風ふかはかへりかくれよ櫻花さかぬまもさそ枝にこもりし

左判者の愚僧の歌なるへし。誠に雪ふりにける事ともにこそ侍るめれ。昔の春。當社の花のさかりに。久しくまうて侍し事の　わすれすのみはへるを。述懷せるはかりなり。右の歌はかへりかくれよとをき。さかぬまもさそなといへる心姿。誠におかしく侍り。但すこし俗にちかくや侍らん。是はかの競馬はことさら勝負を興するも。濫さる躰(程イ)にこそ侍るめれ。左の歌老駑馬なからとなるへきにや侍らん。

十三番

左勝　靜賢

神山に花のしらゆふ懸てけりこやさほ姫の手向なるらん

右　季經

今よりはたかねへ行むつくは山このもかのもに花もみえ鳬

左の歌。花のしらゆふかけてけりといへる姿宜しくこそ侍るめれ。右たか根へゆかんといへる。このもかのもの花みん心。おかしくは見え侍り。但なを神山のはなきよけに侍り。左を勝とすへし。

十四番

左持　範玄

みわたせははなの波こす心ちしていつれのみねも末の松山

右　經家

をとに聞ならの宮古の花みれは散積りても八重そかさなる

左右ともにゆうには見え侍り。左はするの松山。たゝ浪にはあらて。花の波こす所にてあらんやうに聞ゆらむ。右ははなみれは　といへるわたりや。すこしおもはまほしく見ゆらん。持とすへきにや。

十五番

左勝　頼輔

春風も心してふけしめの内はにほひことなる花とこそみれ

右　道因

み吉野のみふねの山の櫻はなとしはつめとも色はかはらす

左のうた。しめのうちの櫻。春風もまことに心すらんとおほえて。よろしくこそ侍るめれ。右歌雪をよめらんやうに聞ゆ。左勝と申へし。

十六番

左勝　隆房

はることにうす花櫻いかなれはこゝろに深くそむる成らん

右　親宗

山櫻なぬかといふにちりはてゝなこりとゝむる嶺の白雲

左薄花櫻いかなれはといひて。心にふかくとうたかへる心。おかしてみえ侍る。右名殘とゝむるなといへる心すかたいとよろしく侍るを。七日といふにといへるや。ことなるよせなきやうに侍らん。薄花さくら。少し詞まされるなるへし。

十七番

左持　有房

散花のかたみとすへき春さへにのこり少くなりも行哉

右　經正

散そうき思へは風もつらからす花を分ても吹はこそあらめ

左右ともにゆうに侍るへし。かたみとすへき春さへな

といへる心。すこしあはれにこそ聞え侍れ。花をわきてもなといへる姿。文字つかひいとおかしくきこえて。思ひわかれす。持とすへきにや。

十八番
左　忠度
木のもとをやかて住かとなさしとて思ひ顔にや花は散らん
右勝　寂蓮
風ふけは峯にわかるゝ山さくら色のみならす雲かとそ見る
左歌やかてすみかとなさしとてといへる。えんにこそ侍るめれ。右歌嶺にわかるゝなといへる言葉つゝきよろしく侍るにや。右はすこしはまさり侍らむ。神慮おそるゝによりて。いさゝかの事も。思ところをわかちはへる也。

十九番
左持　盛方
吉野山みねのあらしの吹まゝにむら消わたる花の白雪
右　顕昭
さくら咲おりにしなれは初瀬山たゝひとさかり越る白浪
左のよし野山。右の初瀬山。歌のすかたはともにおかしく侍る。村消わたる白雪とたゝひとさかり越る浪なと。見ゆはかりにて。ことにははなをおもへる心は。なきやうにや侍らん。よりて持とす。

二十番
左持　隆信
たつねつる花咲にけりみよしのゝたかきの山にかゝる白雲
右　仲綱
こほれ出て匂ふものから白雲にそらかくれする山さくら哉
左歌みよし野のたかきの山なと。めつらしきことにはあらねと。よろしきやうにみえ侍り。右歌そらかくれするなといへるすかたおかしく見ゆ。左右とり〳〵なり。よりて持とすへし。

二十一番
左勝　公時
年をへておなし櫻のはなの色を染ます物は心成けり
右　定家
さくらはな又たちならふ物そなき誰まかひけん嶺の白雲
左おなしさくらの花の色を染ますものはといへる心姿。いとおかしくも侍るかな。右誰まかへけんみねの白雲といへる心も。よろしきにやと見えはへれと。左歌なをめつらしくも見え侍れは。勝へきにや侍らむ。

二十二番
左持　定宗
櫻花やかてかへさぬ春風にことしもこりすさそはれんとや
右　仲綱
一とせはちらて櫻の匂ひつゝ花さかぬまの七日なりせは
左は姿ふるまひわりなく見えて。いとおかしく祉侍るめれ。右は花さかぬまの七日なりせはといへる心。又ゆうにみえ侍り。仍持とすへし。

二十三番
左勝　成家
花さかり賀茂の瑞籬きてみれは吉野の山も名にこそ有けれ
右　公衡

花さかり四方の山へにあくかれて春は心の身にそはぬ哉

左右の花さかり。ともに宜しく見え侍るにとりても。右はなを春は心のなといへるわたり。いとおかしくおほえ侍るを。あくかれなから花のもとにしもむかはぬ心にやとそ見え侍る上に。左の歌まことに社の花をめてたる事や。もし勝とも申へからむ。

二十四番

左勝　季廣

おしむにはとまらぬはなのしたかへは浦山しきは春の山風

右　備前

さくとまち散とてなけく春は只はなに心を盡す成けり

左歌うらやましきははるの山風といへるすかた優にこそ侍るめれ。右の歌心姿よろしくは侍るを。かやうの心の歌つねの事なるにやあらむ。左勝と申へくや。

二十五番

左勝　兼綱

入ぬれはそこともしらす中々にのきてそ花はみるへ隔ける

右　智將

惜みつゝ折てかへらはあちきなく風にまかすと花や恨みん

左のきてそ花はなといへる。すかたおかしくこそ見え侍るめれ。上の句の心みやまの中なとさも侍りなん。右おしみつゝといへるを。風にまかすとはなや恨みんとおもひなから。かへりこんほとや本意なく侍らむ。素性法師は暮なはなけの花の陰かはとこそよみて侍るめれ。のきてそ花はなといへる。なを姿少はまされるにや。

二十六番

左　敦仲

風たにも吹てのとけき春ならは折手にのみや花はちらまし

右勝　勝命

かきりありて露ときえなん世なり共花に心や殘し置へき

左折手にのみやといへる。姿いとおかし。但吹風も枝をならささらむ春の花を。折手にのみちらさん事いかゝ。右は露と消なん世なりとも花に心や殘しをかんといへる。心よろしきにやあらん。以レ右爲レ勝。

二十七番

左勝　廣言

梢まて花のしらゆふかけてけり神も嬉しと春を見るらし

右　祐盛

山櫻雪の色こそうはふともふるならひをはつたへさら南

左歌花のしらゆふは。これもよろしく見ゆ(見る)らしなとも。歌からあるさまなるへし。右歌ふるならひをはといへる。おかしくは聞ゆるを。はいかいの躰にそみゆる。左勝へきにこそ。

二十八番

左勝　親盛

あかすみる花はかりたに散さすは匂ひを風に惜みやはする

右　安性

尋ねつる花みるほさもいかにこは春の心はのとけくもなき

左歌のすかたおかしといひつへし。匂ひをとてもおしまさらん事やいかゝ。右詞つかひおかしからんとは思へり。春の心はのとけくもなきといへる末の句。はるの心はのとけからまし といへる本歌に。殊外に聞え侍る

めり。業平朝臣もうれたくやおもふらんとおほえ侍し。
以レ左可レ爲レ勝。

二十九番

左勝　　寂　念

神山をあふきてみれは白雲のたつは櫻の梢なりけり

右　　行　念

やま櫻こするをはらふ風吹ははなのちりたつ歎をやせん

左歌姿詞よろしくこそ侍るめれ。あふきてといへる言葉そ。ゆうにしもあらぬ事なれと。神山をあふきてとつつけたるは。あしくも聞えす。右の花のちりたつといへる事あるやうにて。ことなる心なきなるへし。左歌はまさり侍りなん。

三十番

左　　佐

はるも又たちかへるへき年あらは二度花の咲よしもかな

右勝　　重　保

きよめすなしめの宮人散つもる花にましはる神もますらん

左歌ふたゝひ花のなといへる姿。いとよろしくこそ侍れ。上句もかの春くはゝれるとしたにもといへる歌の心地おほえ。おかしくは侍るを。ことしも冬の立春のよしなとなくは。心得かたくやあらん。右歌しめの宮人なといへる。文字つかひ姿いとおかしくみゆ。初の五文字や。此春はかりあさきよめすなといへるには。にぬやうにきこえ侍らん。但歌さまなと。社頭の歌とおほえて。いとおかしく侍り。以レ右可レ爲レ勝。

一番　述懐

左勝　　隆　季

とにかくに浮世を夢としりなから扨も厭はぬ我やなになる

右　　觀　蓮

數ふれは身は七十をへぬれともまたみとり子の心地社すれ

左歌さてもいとはぬなといへる心。いとおかしくあはれにこそ侍るめれ。右歌身は七十といへるほとおかしく聞えて。末の句いふかしく侍るを。またみとり子のといへるや。少し幼少のすきたるこゝちすらん。左の勝とすへし。

二番

左勝　　實　房

ひとは又おなし祈をいのるともたゝしき道を神はことはれ

右　　讃　岐

いはてのみ賴みそ渡るよそなから御手洗川の音にたてねと

左。存ニ故實之風一叶ニ雅頌之時一。彼毛詩に。然は頌者美ニ盛德之形容一。以ニ其成功一告ニ於神明一者也といへる。此心なるへし。右みたらし川のをとにたてねとゝいへる。歌さまはおかしく侍るを。よそなからたのみわたらむもほいなくやあらむ。以レ左爲レ勝。

三番

左持　　實　國

こしかたも今行末もならのはのひろき惠をたのむ計そ

右　　登　蓮

此よにも猶おとろかぬこゝろ哉いつをかきれる夢路なる覽

左歌以往未來なとのひろき惠をたのむ心。おかしく見え侍り。右歌はいつをかきれるなといへる姿。いとよろ

しくみゆ。左は社壇の廣惠なたのみ。右は佛道の照曠なる事をなけゝり。すかたとり〳〵なり。よりて爲ㇾ持。

四番

左勝　時忠

千早振神のめくみに影なひく位のやまにのほる身になせ

右　俊惠

見たらしや淸き流れにいくしたて心の垢をいかてすゝかん

左神の惠にかけなひくとをける。文字續きおかしくこそ侍れ。右はみたらし河に心のあかをあらはん事。さらて有ぬへくや。心性水澄なは業障の垢あらはれぬへし。みたらし川のなかれにも無ㇾ便やあらむ。以ㇾ左爲ㇾ勝。

五番

左　成範

ひろまへに植てし種の朽せすは思ふ事なき身とそなるへき

右勝　通親

みかさ山嶺つゝきなる跡をみて登らむ道のしるへせよ神

左歌心おかしくこそ侍るめれ。但うへけん種や少おほつかなく聞え侍らん。右歌末の句の神の字そ。いかにそやきこえ侍るやうなれとも。歌はさのみそ侍るへき。累葉數代の峯つゝき。のほらん道のなといへる。尤しかるへし。右の勝とや申へからん。

六番

左勝　雅頼

子を思ふ道をそ祈るすへらきにつかふる跡をたかへさら南

右　公重

うき身には老にけるこそかなしけれ若くは賴む事もあらまし

左つかふるあとをいへる心姿。よろしく聞え侍り。心のやみはけにすてかたき事に侍るへし。右かの願か年わかくはなけれはつかへすとかける。思ひいてられて。さる事とは聞え侍れと。わかくはたのむといへる姿。無下にかたき事にこそ見え侍れ。左の勝とすへし。

七番

左勝　實綱

黑かみに霜のおくまてよにふれと心とけたる春のなき哉

右　師光

をのつから神の惠を待えすはなにゝ心をかけてすきまし

左歌霜のをくまて心とけたるなといへる姿。おかしくこそ侍れ。右の歌さる事と聞えて。あはれにこそ見え侍るを。詞にことなるよそふるところなくやあらん。左の勝と申へきにや。

八番

左勝　實守

くらゐ山花をまつこそ久しけれ春の都にとしをへしかと

右　大輔

みたらしや淸き流れに渡すらん數にはもれしみくつなり共

左歌花をまつこそひさしけれといひて。春の宮古に年をへしかとゝいへる心姿。まことに宜しくも侍るかな。右歌思ふ心ゆうには侍れと。位に心うつりて。汀のみくつ思ひわかす侍るなるへし。仍以ㇾ左爲ㇾ勝。

九番

左持　永範

思ひきや百ちふたゝひ參りをきてみしなの國の極むへしとは

右　　成仲

八十まて神の惠のたはまねは後の世もなをたのもしきかな

左歌意趣よろしくこそ侍るめれ。今生世隨㆓昇進㆒掃望彌不㆑盡者也。しかるにみしなの國のきはむへしとはといへる。心實正直之儀也。定神感歟。右歌八旬之尊齢雖㆑傾。七社之壇無㆑媚。今生之宿縁已爾。後世之引導何疑はん。たのもしきなといへる。尤可㆑然歟。但左のまいりをきてといへる。いさゝか俗に近く。右のたはまねはとをける。ことなるよせなくやあらん。しかれとも。かの剰子之中。駑馬有㆓驥之一毛㆒不㆑可㆑得㆑爲㆑驥。龍有㆓蛇之一鱗㆒不㆑可㆑得㆑爲㆑蛇。大徳可㆔以掩㆓小瑕㆒。小火爲能潤㆓枯旱㆒といへるかことく。いさゝかの不足なりとも。大意をのをのよろしきによりて。持とすへし。

十番

左勝　　經盛

よろこひのしけき社と聞つれは一かたならすたのもしき哉

右　　資隆

みたらしの清き流にすゝかれて心のあかはのこらさらなん

左よろこひのしけきみやしろの句は。いとおかしくきこゆ。右歌あかの事さきに申畢。以㆑左爲㆑勝。

十一番

左持　　俊範

たくひなく深き心をくみてしれ頼をかくるかもの河浪

右　　顯家

わか身にもうき世あらしとたのむ哉かもの川水すまん限は

左たのみをかくる賀茂の河浪といへる姿。いひなかしてよろしく見え侍り。但右は河なみ川水。しゐてふかさあさゝ尋侍らむもはゝかりおほし。れいの持とすへし。

十二番

左持　　釋阿

たちかへり捨てし身にもいのる哉子を思ふ道は神も知らむ

右　　頼政

上はかみ下はしもとそ祈るへき我ねかはるゝこゝの品をは

左歌思ひを捨て桑門に入なから。猶心のやみは晴かたくして。かさねて和光のところをたのめるなるへし。右歌ひとへに往生の望なり。尤なり。宿因にまかせて。雖㆓下品㆒足ぬと思ふ事に侍るを。上には上輩に列せんことを祈。下には下品に生せん事を好み願はん事やいかゝ。勝負不㆓分明㆒。神慮にまかすへし。

十三番

左持　　靜賢

ことに出ていはゝかしこしいはて只頼む心は神にまかせん

右　　季經

うき世には底のみくつと成ぬとも頓て沈むなかもの河水

左いはゝかしこしいはてたゝといへるすかた。おかしくこそ侍れ。右底のみくつとなりぬともといひ。やかてしつむなといへる心。又宜く見ゆ。猶持とすへくや。

十四番

左持　　範玄

つもりゐて心をけかすちりひちも御手洗川に濯かさらめや

右　　經家

わかたのむ其神山のかひあらはなとか榮行時もなからん

さき／＼もすゝく歌ともみえ侍りつる中に。歌合のちりひちは。さても侍りなん。つもりゐてなといへる五文字。あしからす聞ゆなるへし。右歌なとかさかゆくなといへるも。さる事とみゆ。又持となるへきにや。

十五番

左持　頼輔

數ならて老ぬとなにか歎くへき三のたのしひある身なり鳧

右　道因

むかし我いつきの宮につかへしを神も哀とおもひ出すや

左榮期か三樂の心。よろしくこそ侍るめれ。怨レ不レ背者不レ退レ性也。傷レ不レ達者不レ知レ命也とこそいひて侍るめれ。三のたのしひある身なりけりといへる。可レ謂レ知ニ運命一矣。右は在昔のいつきの宮の奉公をおもひて。今日當社の述懐にいたせり。兩首の心さし共によろしく見ゆ。仍爲レ持。

十六番

左　隆房

今よりは秋の小鹿のふた毛をもわか元結のよそにやはみる

右勝　親宗

すへらきを千世の春とそ祈ます我行末に花や咲とて

左者思ニ朝々二毛之齡一。右者祈ニ聖代千載之春一。歌品雖レ等。意趣依ニ祝心一。以レ右爲レ勝。

十七番

左持　有房

人なみにゆられありきの果は只沈むみくつの身とや成なん

右　經正

むかしより思ふ心にある物をみたらし川にくみてしらなむ

左歌浪にゆられて。はてはしつむなといへる心おかしく侍り。右歌又思心有てみえ侍れは。持とすへし。

十八番

左持　忠度

ひたすらに祈るにあらす恨かね背きはつへき世共しらせよ

右　寂蓮

世間のうきは今こそ嬉しけれ思しらすはいとはさらまし

左の歌の心さし。いと宜しく見え侍り。右もことなるよせ有てはみえ侍られと。歌の姿文字つゝきゆらに侍るなるへし。仍持とすへし。

十九番

左勝　盛方

ひろせ河底のみくつも流れつゝ我よりは猶しつまさりけり

右　顯昭

ねきかくるしるしたかへて我方に神よりいたの名を頼む哉

左歌我よりはなをといへる。心姿ゆうにこそ侍るめれ。中の五文字や。今少し思へからむ。右歌珍しきやうには侍るを。初の句より神よりいたのなといへる矣。不レ被ニ庶幾一や侍らん。左猶勝に侍り。

二十番

左持　隆信

みたらしの水の水上世にすまはさのみはかくて沈はてしな

右　仲綱

神もみよ思ふ事なき人たにもたつことやすきしめの内かは

左みたらし川によせて。世にすまはなといへるすかた。

心ありてきこゆ。右たつことやすきなといへるすかた。おかしくみゆ。持なるへし。

二十一番

左持　公時

二葉より頼みそわたるもろかつら傳りきたる跡はたかはし

右　定家

ふかゝらぬ汀に跡をかきとめてみたらし河をたのむ計そ

左もろかつら二葉よりと置。つたはり來るなといへる心姿。おかしくこそ侍るめれ。右みたらし川をたのむゆへに。ふかからぬことのはをかきとむらん。思心なきにあらす。老の心なんみたれて。勝負不ニ分明一。よりて猶持と申へし。

二十二番

左持　定宗

さりともと頼む心になくさむはかつ〳〵神のしるし成けり

右　伊綱

さり共と賀茂の河なみはやくより頼をかくるしるしみせ南

左右ともに。さりともといへる心姿なと。おかしく聞えなから。させる詞のよせなく聞ゆ。右はかもの川波によせたる心はおかしきを。終の句のこと葉いさゝかをとれるなるへし。なそらふるに。又持とすへきにや。

二十三番

左持　成家

山あゐの袖ふる神はかさなりぬいつか嬉しきことを包まん

右　公衡

ゆく末はたゝすの神にまかせ置て昔の跡を踏もたかへし

左の歌山藍の袖にうれしさをつゝまん事。さもある事には見え侍るなるへし。右の歌糺の神にまかせをきてといへる。かれまたしかるへし。ともに神慮を期せり。よりて持とすへし。

二十四番

左　季廣

さりともと神の誓ひを頼むこそ沈む數のたえま成けれ

右勝　備前

千年まつ若葉のふちの榮をも頼めは神に禰宜そかけつる

左心はゆうなるへし。しつむなけきのなといへるや。させる詞のよせなく侍らん。右ちとせまつわか葉のふちは。ねきかくること葉もことよりては聞ゆ。以レ右爲レ勝。

二十五番

左　兼綱

おもふ事かなはてやまはうき身ゆへ又雲分むことそ悲しき

右勝　智將

我たのむ心のほとをみたらしの水の水上くみてしらなん

左の歌は姿ゆうに侍り。但雲の言葉さてもや有へからん。かやうの事はかつは作者により。折にしたかふへき也。右歌心の底をみたらしのとをけるは。おかしく見ゆ。すゑに又。汲てしらなんといへるや。ことかさなるやうならん。但猶右勝へし。

二十六番

左持　教仲

たのみこし其神山のしるし有て榮行道の程を知はや

右　勝命

いまはとていそく心をほにあけて彼岸ちかく行船もかな

左その神山いかゝはさかゆく事なからんと聞ゆ。右かの岸をねかへる心あはれに見ゆ。こゝろ詞とり〳〵なり。持とすへし。

二十七番

左持　廣言

世に住て御手洗川を頼む身は嬉しき瀬にもあはさらめやは

右　祐盛

やはらくる月の桂の光にはこむよの闇もなにかまよはん

左の歌世にすみてとをき。うれしき瀬にもなと。たのもしく聞ゆ。右の歌すかたよろしきやうにはみえ侍り。但やはらくる光。こんよのやみなといへる事。すみよしの社の歌合にや見侍し心ちそする。ひかおほえにや侍るらん。よりて勝負申かたし。

二十八番

左持　親盛

さりともと世を待ほとに身につもる年計こそ人に劣らね

右　安性

我ためは後のうき世をわたさなん又雲わけむ神の名もおし

左よをまつほとになといへるや。かの有明の月の光をまつほとにとといへるには似す聞ゆらん。をとらねといひはてたるも。散々なる心地やすらん。右後のうきよをといへる。ゆうなるへし。河なとやあらまほしからむ。後の句はさてもありぬへきよし。さきに申をはりぬ。歌さまおなしほとなるへし。

二十九番

左勝　寂念

むかしよりみたらし川にすましつる心の月をうかへつる哉

右　行念

いはすとも神はしるらんみてくらにしても頼をかくる心を

左右の歌いつれも心はゆうには侍るを。右みてくらにしてもなといへる姿。俗にちかくやあらん。左の心の月をなといへる姿。宜しきにや侍らん。勝と申へきにや。

三十番

左　佐

ちはやふる御手洗河のあふせには浪立まさるうたかたも哉

右勝　重保

すへらきの願ひを空にみて玉へ分いかつちの神ならは神

左のうたみたらし河に。おもひをのふるに。浪立まさるうたかたもかなといへる。しきしまの道を澁々おもへる。こゝろさしふかゝらねと。ゆうにはきこゆ。右の歌祈精するには。聖主萬年之榮かけたてまつるとては。下社上社之惠。心こと葉かた〳〵かけまくかしこし。願を空になといへる。尤祝言。是叶二神慮一歟。仍爲レ勝。

右別雷社歌合以流布印本挍合了

廿二番歌合 治承二年八月

題

閑庭秋來

作者 長精進戀

左

頼輔　維光　定宗　道清

宗因　親盛　匡範　廣玄

仲遠　仲頼　親基

右

有房　六條殿　伊經　爲廣

州覺　中納言殿　因幡　辨殿

侍從殿　美濃　良賢

判者 亮公　顯昭

一番　左　閑庭秋來　頼輔

荻の葉にあきの初風音す也人めまれなる深山への里

右勝　有房

人も見ぬまかきの荻に吹風は秋のけしきを誰に告らん

左右ともにやさしう侍るに。左の歌は庭といふ事やおほつかなう侍らん。右は人も見ぬといへるはしめの詞そ。心よからねと。庭の心あるによりて。右まさり侍るへきにや。又云。左右ともにやさしく侍。初よりいひなかされて。姿おかし。右は秋のけしきをたれにつくらんなと侍。心ありてとり〳〵に。勝劣申かたきにや。

二番　左　維光

草しけみ入くる人もなき宿に朝露しろし秋はきにけり

右勝　六條殿

あききぬと驚く人もなき宿にしらせかほなる荻の上かせ

左歌は朝露しろしなといへるわたり。いひしれる心ちして侍り。いりてなといひて。末にきにけりと侍。おなし心にや。曾丹か我せこかきまさぬよひのあき風はこぬ人よりもうらめしきかなとよめるは。すくれたる歌なれは歌合にはいかてかとかめす侍るへき。右可ㇾ爲ㇾ勝。又云。右はまさりてや侍らん。

三番　左勝　定宗

人ならはかゝらさらまし庭の面に秋はくれとも猶そ閑しき

右　伊經

主なくて閑しき宿の庭のおもにあきをとつるゝ荻の上風

右は秋をとつるゝといへるつゝきや。心よからす侍らん。左勝へし。又左の歌まことにさる事と聞え侍て。心有ては侍るを。秋はくれともと有そ。秋はくるにつけていとゝさひしさのまさるなと侍るは。今すこしかなひてやときこゆれと。右はしつかさもすきて。ぬしなくてなと侍る。如何かとはゝかり有やうにて。左はまさるへきにや。

四番　左持　道清

まくすはふ蓬か宿をかき分て秋はきたりと告る風かな

右　　　　爲廣

蓬生となり行庭をかき分て物あはれなるあきはきにけり

心詞おなしほとか。左はいまま葛はふ露はかりはふるまひて。右の物あはれなるよりはまさり侍るへきに。すこし庭の心のをくれたれは。ひとしとは申侍也。又云。ともにおなしさまにやさしく聞ゆるにとりて。右はすこしいひなれて聞え侍り。

五番

左持　　　宗因

をのつからとふ人もなき我宿のさひしさそふる秋はきに鳧

右　　　　州覺

さらぬたに拂はぬ庭の閑しきに一葉を散す秋風そ吹

ともにあしくも侍らぬにとりて。右ははらはぬ庭のさひしきといひ。木葉ちらす秋は今少したよりあるへきに。一葉ちらすと侍こと葉つかひ。すこし心よからす。一葉つゝ散なといへるよりは。秋は只一葉のみちるかともいひつへけれは。なそらへて持とす。

陳狀に云。一葉と申事は。朗詠集に立秘題に。一葉落レ庭と申題にて。詩を作たる事の候也。その心歟。然は秋日初て一葉落はしめ候歟。又云左なたらかによみ下されて侍るに。右一葉をならす風こそ。此題にはさこそよまるへかりけれと聞えて。いとおかしくはへれ。左人なとも。秋のきたる心には。早臨二一葉一將レ老程とつくりて。詩にもかよひて。ことに興有心地し侍れは。右の勝にや侍らん。

六番

左勝　　　親盛

きり〳〵すともなふ秋はきにけらし蓬の庭の閑しかりしも

右　　　　中納言殿

音もせて霧はかりふる庭の面に誰を尾花のまねきたつらん

右の歌は霧はかりふるといへるに。たしかに人すますとも聞えねは。閑の字いかゝと覺え侍る。大かたは人のすまぬをのみしつかとは申へきにあらす。閑居と云は人あれとかやうによみ侍るへきにや。以レ右勝とすへきにや。又云。左歌。蓬の庭には蛬のとも待つるほと。たくみに聞ゆるにとりて。少し秋の蛬をともなはん樣にそ聞え侍れと。さまてはあまりのなんに侍り。右はまねき立らんと侍ほと。今少したちをとりてや。

七番

左持　　　匡範

くる人もなき庭もせの糸すゝき初秋風になひく夕くれ

右　　　　因幡

みち絕て野もせとあれし庭の面に秋の哀は尋きにけり

おなしほとゝ申へし。又云。右の歌殊の外にやさしくあはれにこそ見え侍れ。

八番

左持　　　廣言

あれはてゝ問人もなき宿なれと庭の淺茅に秋はきにけり

右　　　　辨殿

家主なき籬の荻に吹風はたれに知する秋のけしきそ

是もかちまけ申難くや。又云。左いとやさしく侍り。右はあるしなきと侍るにや。初も申侍るにや。閑の心にはあ

るしなしと侍る。へちの事にこそ侍らめ。

九番

左持　仲遠

日をへつゝ蓬しけれる庭の面に明くる物は秋のはつ風

右　侍從殿

いにし秋のきてやかへれる故郷に人なき庭の萩のにしきは

右ふる里の錦の心は興あるにや。されは故郷にといひて。人なき庭のなと侍る程。よくもかなへりとも覺侍らねは。左右なすらへて持と申へき也。又云。左なんもなく。やさしけに侍り。右はいにし秋は萩の錦もなかりける樣にや聞え侍るらん。

十番

左持　仲賴

きり／＼す庭の淺茅にしるへして哀をそふる秋そきにける

右　美濃殿

日を經つゝ問人もなき庭の面に立にけらしなあきのはつ風

これも持にて侍るへし。又云。左蛬の秋のしるへなとする事の侍るにや。かやうの事ふるくもよみけるは。きりきりすやしるへなるらむなとやうにこそ侍るめれ。右もさせる難は見えねとも。まさらん事はいかゝ。

十一番

左　親基

むしの聲まちかく聞は艸ふかき庭こそ秋のなさけ成けれ

右　良賢

とふ人もなき故郷に荻風のそよいかにして秋はきぬらん

左は心詞ともにまさりて侍らんに。荻風そ少しこはく聞え侍る。荻の上風。おきの葉風。荻ふく風なとこそよみなして侍れ。かやうの事はことはりはつきにて。ふるき跡を追へき事になん。荻風さるへき歌にあらは。勝侍るへし。しからすは持と定むへしと申侍らぬにて。此道の勝れたる事はしらせ給ふへし。

陳。後拾遺抄秋上。藤原長能歌。荻風もやゝふきそむる聲すなりあはれ秋こそふかくなるらし。

又云。左虫の聲によりて草深き庭のなさけとおほえん事。さもこそ聞えておかしく侍るを。秋のくる心にやすくなく侍らん。右は又秋はたしかにきたりとよまれて侍れと。歌すかたをとりてや侍らん。

一番　長精進戀

左持　賴輔

こひしさに心すむ身は石清水みとせこもりも僻かたきかな

右　有房

かく計り通ふ心をいつさなくいもゐのしめに引なへたてそ

右歌あしからす。左歌なか／＼さらしんとは申なから。三とせこもりといへる。いとよからねと。やむことなき御神にことよせたれは。ひとしめておなし程と申へきにこそ。又左歌戀しさに心すむとよまれたる。さも有事なれと。いかにそや聞え侍にや。月をも見。世中の無常をもおもひなとせんには。今少しすみもやせむ。戀にもすむおりも侍なん。又みたれん事はおほくや侍らむ。されと石清水にたより有てよまれたるにこそ。右いもゐのしめに引なへたてそと侍る。たれかひきへたつるにか。さらしんは人のをしてさする事なとにや侍る。こ

れも見ゆる所を中に侍るはかりなれは。いつれもさまての難には侍らねは。おなし事にや。

二番

左持　維光

日數ふるいもかいもゐはあきのよの長き恨の基なりけり

右　六條殿

いく百日いもゐのしめを引かさね戀せしといふ道にしつ覽

左歌秋の夜のなかき恨。此歌の中におもひかけぬ心地し侍る。右のいくもゝかは。うちいひてられたるも。いかにそや聞ゆれと。又持歟。又云。左とり立たる難は侍らねと。又ことなる事も侍らす。右詞もいひなれて。心もおかしくは侍るを。此題の心はたゝ。さうしんの月と戀をする身てこそ侍らむと思給ふるに。戀せしといふみそきのれうのさうしんと侍るそ。いかゝと見ゆれと。それまては餘の難に侍る。いかさまにも右は勝りて侍らん。

三番

左勝　定宗

月日をは心きよくてすくせとも涙の落る事そわりなき

右　伊經

さのみやはみよの佛にことよせて逢みぬ夜半の數をかそへん

右のみよの佛にことよすらん程。たしかにもさうしともいひあらはされぬ心ちなんし侍る。左はむけにたゝことなれと。歌合にはかつ事も侍なん。又云。此左右いつれも長精進の心たしかにも聞え侍らぬにや。

四番

左持　道清

誰爲のもゝかいもゐのしめなれやあはんといはゝ今もあけてん

右　爲廣

いつとなく清き衣を身にきつゝ神にそいのる妹かつらさを

此題は久しくきよさは侍るあいた。逢へき人にあはぬ心にてや侍るへき。つらからん人にあはんといのらんは。題のほいに不レ叶や。何樣にも同樣歟。又云。左右共に十三番の右へきにや。又ともかうも人の心々によるへきにや。何樣にも同樣歟。又云。左右共に十三番の右歌に申侍る。おなし心によまれたれは。いよいよさのみ申へきに侍らす。左は今すこしきゝ所有てや侍らん。右もあしくはなけれとも。始の句なとをとりて見え侍り。

五番

左　宗因

あふ事を祈るみしめは日數へて□しるしもなきに成ぬる

右勝　州覺

しめの内に百夜をかきる丸ねして果は戀にそ日數へにける

左歌の心。さきに申侍ぬ。右勝侍るへし。又云此左歌又れいの心に侍るめり。その難さのみ申へきならねは。同心にとりて。この歌よくこそよまれて侍けれ。右歌もあしくは侍らぬに。はては戀にそと侍る。いかなれはとも心えかたく侍れは。左勝にや。

六番

左持　親盛

いはた川せこりに身をはすゝけとも戀に心をけかしつる哉

右　中納言殿

流れあはん程をたにいへ石淸水いもゐの日數いまいくか共

とり〳〵にその心侍るめれは。持と申侍るへし。又云。左歌恐れ有心ちそし侍れと。又さもなとか侍らさらむ。右なかれ逢むほとをたにいつとて。石清水にひきよせられたる。さもと聞ゆれとも。勝へきほとには侍らす。持と申へし。

七番

左勝　　匡範

戀しなは神の名たてに成ぬへし百かもまたて御しめあけてん

右　　因幡

百夜まて引しめ繩に思ひしれしちのまろねのつもる數をは

左むすひゐのみしめあけてんといへる詞。やまと歌のつれのことはつかひとはおほえ侍らねと。右のしちの丸ねといふ事は。たしかにも見えぬ事にて侍る上に。しちのはしかきとこそ申ならはしたれ。まろねといふ事は。ちか頃ある女歌よみ詠て侍し後より。みなか樣にのみよまれ侍る也。いかにも右勝へし。又云左もゝかもまたてみしめあけん事。むけに不重にきこゆれと。又それも神のなたてにならん事を思ひよられたる心なきにあらす。右百日さうしんに。しちの丸ねの數。同し日數にと思はれたるは。さもと侍る事なれと。いかやうにおもひしるへきにか。まろねの數つもるよしにや。いかさまにも左はまさり侍らん。

八番

左持　　廣言

しめの內に清き衣をみとせ迄戀の涙にあらひはてつる

右　　辨殿

いさきよきもゝかのしめの內なから絶ぬは袖の雫なりけり

三年百日のいもゐ。久しさはたとへなけれ。共にいはれ侍めれは。とり〳〵とこそは申侍らめ。又云。左右共に同心に侍るめり。さうしんの日數は。左ことのほかに久しく侍れは。題の心にかなふへきにては侍れと。あらひはてつるなと侍るいかにそや。よみおほせられても聞え侍らす。右歌こそ。此戀の歌ともの中に。題の心にかなひてよく侍れ。勝侍なん。

九番

左勝　　仲遠

千早振かもの社にもゝ夜ねて戀かねぬとは妹は知しな

右　　侍從

ひろまへに丸ねは三とせ過ぬれと待わひていも新枕すな

右まち侘ていもといへることはよろしからす。よき人の一のかたは有に似たり。左可レ勝。又云。左はあまりやすらかにて。いかに申へしともおほえ侍らす。右ひろまへ。さ讀事なれと。いかにそや聞え侍れと。今少し思ふ所侍るや。いつれもかちまけ申ほとには侍らす。

十番

左勝　　仲賴

曳しめの日數へぬれはつゝみあへて清き衣の袖そぬれぬる

右　　美濃殿

百夜まてゐかきの內に丸ねして戀の病を我かつきぬる

右うた。なにとなくうちきく〳〵に。ゐかきの內にて病つかん程。いかにそや聞え侍。左勝へし。又云。左歌はことの外にまさりて侍り。題の心にもかなひて聞ゆ。右我かつ

きぬると侍。いかにそや聞ゆ。左の勝にや。

十一番

左持　　　　親基

いくとせも君ならてはと思ふまに淸き衣をぬかてやみぬる

右　　　　良賢

三歳まて思ひたちにしきよ衣かさねぬつまに袖そしほるゝ

此ほと殊にみたり心地あしき事侍りて。つかひことに勝まけたしかにも見とき侍らぬうへ。□□てのつかひなとは。をの〳〵も定させ給へし。又云左はまさりてきこえ侍り。

右大臣家歌合治承三年十月十八日

題

霞　花　郭公　月　紅葉

雪　祝　戀　旅　述懷

歌人

左方

女房實定公　皇太后宮大夫入道　季經朝臣

隆信朝臣　行頼朝臣　師光

良淸　俊惠　寂蓮

別當局皇嘉門院女房

右方

大貳入道　源三位賴政　經家朝臣

基輔朝臣　資隆朝臣　仲綱

資忠　顯昭　道因

丹後右府女房

判者　皇太后宮大夫入道

一番　　霞

左勝　　皇太后宮大夫入道

山高み嶺のかけちを見渡せは岩もかすみにうつもれにけり

右　　大貳入道

立わたる春の霞もわかれぬは烟になるゝしほかまのうら

左歌山〔の〕霞岩をうつめるはかりなん。ことなる事みえ侍らす。右歌しほかまの浦は。すこしいふせきやうに

や侍らん。彼浦は松のかけ波の氣色。眺望かきりなき所にそ侍るなる。されはいせ物語にも。我御門六十餘國の中に。鹽かまの浦に似たる所なかりけりとそ書侍める。霞もわかれす煙になるゝ所はかりいはるゝは。浦もほいなくや侍らん。左の歌よろしきにはあらねと。一番の左なるによりて。勝と定申。

二番

左勝　女房

霞しく春のしほちをみ渡せはみとりを分る沖つ白浪

右　源三位

東路を朝たち行は葛飾やまゝのつき橋かすみわたれり

左歌いとおかしくこそみえ侍れ。春の霞蒼海の上にひき渡るさま。朝みとり色をそへたるに。沖つ白浪立わけたらんほと。おもかけおほえ侍れ。右歌かつしかやといへる。彼まゝの繼橋やますかよはんといへる萬葉集の歌を思て。東路の霞おもひやられて。心ほそく覺侍れと歌の姿はしるてことならぬ成へし。猶みとりをわくるおきつ白浪は。たちまさりて侍る。

裏書　あのをとせすゆかんこまもかかつしかの まゝのつき橋やますかよはん　下總國歌

三番

左持　寂蓮

たちかへりくる年波や越ぬらん霞かゝれる末の松やま

右　仲綱

みつしほにかくれぬ沖のはなれ石霞にしつむはるの明ほの

左末の松山にとしをこし波をかくる事。常のことなるやうに侍れと。姿詞優に侍るなるへし。右心も珍しく侍ろを。はなれ石やことに見所あるものには侍らさらむ。すゑの松山は。おかしき所のめなれたるさまに侍る。はなれ石。かとありてめつらし。ことなる事なきにやとて。これをなすらへて持と申へし。

四番　花

左持　女房

みな人の我ものかほにおもふかな花こそぬしは定さりけれ

右　大貳入道

はるの内はよし野の山の嶺ならぬ心も花に成にけるかな

左歌旨趣珍重。事理叶へり。但上五七句の聊俗にちかくや侍らん。右吉野の山の峯ならぬなと。おかしく侍るを。心も花にといへるや。あたなる櫻のはな心になれなんと聞え侍る。歌の心は花より外の他事なくなむあるといへるなるへし。左歌下句殊によろし。右は上句おかしく侍り。爲レ持。

五番

左持　隆信朝臣

世をいとふすみかと聞と春に逢はなも咲けりみよしのゝ山

右　道因法師

わかやとの花をや風にゆつらましぬしとなりなは惜む計に

左右兩首。ともに心詞おかしくは侍るを。左はみよしのの山を。世をいとふ栖とはかりはきゝをきて。春花咲所としることの遲かりけるにやとそきゝ侍る。右花をや風にゆつらましとまておもひよれ。春は花を惜む心もふかく侍るを。ゆつらましとをきて。主と成なはといへる詞や。すこしけなるやうに侍らん。ともに勝負不分

明。仍爲レ持。

六番

左勝　寂蓮

たつねきて花みぬ人やおもふらんよし野の奥を深き物とは

右　顯昭

あやしさに尋て花と知ぬれはよそめ嬉しき嶺のしら雲

左歌言葉に花とをきよし野の山の深さあさゝをいへらんやうにこそ聞ゆれと。花をたつねて身は心さしの深きゆへに。吉野山もふかうすなと覺ゆると侍めり。右歌たつれて花と知ぬれはと侍るにはあらさりけりと聞ゆるほとに。よそめ嬉しきといへる花は。まことの雲もありけるにや。上下たかひたるやうにきこゆ。あやしさにと置る初の句も。優にしもあらぬにや。左よろしきに似たり。可レ勝。

七番

左持　郭公　皇太后宮大夫入道

すきぬるかよはのね覺のほとゝきす聲は枕に有心地して

右　資隆朝臣

ほとゝきす過る聲をやとゝむると雲路にいかて關をすへまし

郭公の歌に。雲路に關をすへましかはといへる心。ちかうもきゝなれはへる。聲をやとゝむなといへるは。いますこし有かたくやとそ聞ゆ。姿はおかしくこそ侍れ。左歌宜しからすこそ侍らめ。且は依レ例不レ能ニ勝負ニ云々。

八番

左勝　行頼朝臣

ほとゝきすなき行方をたつぬれは花橘のもとにきにけり

右　基輔朝臣

忍ひねに里なれそむる郭公聞ぬかほにて又なのらせん

左ほとゝきすに花橘なとは珍敷心はあらねとも。姿詞ことなる事なく。優に侍るめり。右心はおかしく。里なれそむるなとゝいへるわたりも優には侍るを。ほとゝきすにきかぬかほにて又なのらせんことそ。いかゝと覺侍る。左可レ勝。

九番

左持　月　隆信朝臣

雲はるゝ三笠の山の月影はさしのほるよりさやけかりけり

右　女房丹後

久方のあまの河より流きてなをしも水にやとる月かな

左心詞あひかなひて侍り。三笠の山の月さしのほるなとそ目馴て覺る。右なをしも水にやとる末の句。ことに宜みえ侍るを。中の五文字のをしはれまほしく聞え侍るなり。左はことなる難なく。右は末おかしく。持とすへし。

裏書法性寺入道殿(忠通)内大臣の時歌合に。題山月。
神のます三笠の山の月影はゆふかけてしもさしのほる哉

十番

左持　女房別當

照月のすかたはかりはおもなれて影珍らしき秋の空かな

右　道因法師

かきり有ていらむ月をもいかゝせん山端迄は曇らすもかな

左姿はかりはおもなれてといへる。月の姿なとは。さきさきいひなれて。おほえすや侍らん。末句は優に侍る。右上の句は落月にやと見え侍。末の句は東峰に出るよ

り西山にかたふくまてくもらすもかなと。たゝ大かたの事と聞え。當時月あかきには見え侍らす。但歌姿はよろしく侍れは。是も又爲レ持。

十一番

左　　俊惠法師

照月のすむへき夜半に成ぬれは雲も心は有けるものを

右勝　　源三位

をちかたやあさつま山に照月の光をよするしかの浦なみ

左歌雲心なしとあるを。雲も心はありける物をといへる。心はおかしくこそ侍れ。すむへき夜半に成ぬれはといへるなり。八月十五夜九月十三夜なとにや侍らん。是はことに名をえたる夜な〳〵。その外は曇りてのみあらんやらにや聞え侍らん。すむへき秋にといへらは。ひろく侍るましとそみえ侍る。右歌をちかたやとをきて。光をよするしかの浦浪といへる末の句。面影おほえて。いと宜しく侍めれ。あさつま山はふるくもよめる所にはあれと。ことにこひねかふへしとはみえ侍らねと。なをしかのうら浪の光をよせたる心。おかしく見え侍り。仍以レ右爲レ勝。

十二番　　紅葉

左持　　俊惠法師

日をへつゝしくるゝまゝに立田山まつのみとりの殘行かな

右　　資隆朝臣

秋くれは千種にそむるいとか山吹なみたりそ木からしの風

左歌心有ては見え侍り。しくるゝまゝに立田山といへるに。紅葉さためてあるらんとは。をしはかられ侍れと。詞に紅葉の侍らぬこそ。歌合にはいかゝと覺え侍れ。松の綠の殘り行かなといへる行の字も。しくるゝまゝにの詞にいひあはせて。思なとはみえ侍れと。ゆくの詞や松の綠の言葉にかなはす侍らんと覺え侍る上に。津守國基歌云。紅葉するかつらの山にすみよしの松のみひとりみとりなるかなといへる歌に。末の句いくはくかはらすや侍らん。右歌千草にそむるいとか山は。心いとすくれて宜しく侍るに。吹なちらしそ山おろしの風といへる。古今の歌に。吹なみたりそ木枯の風。文字のをきやうかはる所すくなくや侍らん。兩首ともにめつらしきにはあらさるにやと覺侍れは。持と申侍へし。

十三番

左持　　良清

たつた山時雨ふりにしむかしより梢そ秋を忘れさりける

右　　基輔朝臣

面影にとまるはかひもなかりけり梢に散ぬもみちともかな

左歌こそ何ともえ心得侍らねと。もし時雨ふりをけるならの葉の名におふ宮のふることそこれといへる歌をおもひて。奈良の御時立田の山の紅葉御らんしけることなとをや。おもへる人にや侍らん。木すゑそ秋を忘さりけるなといへるも。ふもとさまなとは。いかになりにけるにかとこそ聞え侍る。これも紅葉をはまはしてよめるにや侍らん。右歌さまふるまひはおかしく侍るを。面影にとまるはかひもなし。梢をちらぬ紅葉ともかなといへる事も。をろかなる事とこそおほえ侍る。左は歌のたけあるやうにて。聞知るに及はす侍るほと。是もお

なしほとゝ申へきにや侍らん。

十四番

左持　皇太后宮大夫入道

時雨行そらたにあるをもみち葉の秋はくれぬと色にみす覧

右　大貳入道

あきふかみ岩かきまゆみ紅葉して錦をかこふ太山へのさと

左ひとへに秋暮ぬる事をおしみて紅葉をしも賞せさるにや侍らん。右いはかきまゆみとをきて。錦をかこふなといへる。彼石季倫か家に。五重の錦障たてたりけんなと思ひやられて。姿おかしく見え侍り。但うへに岩かきとをきて。末にかこふといへる。おなし事にや侍らん。かこふは こと葉のやうにははへれとも。かこふといふもかきなるへし。されはむかし切韻を見侍しに。拵。籬なり。以し柴壅也とそ申たりしやうに覺侍る。仍勝負不ニ分明ー。最下愚老已迷ニ是非ー。兩方吟明士定決ニ雌雄ー歟。左歌くれの言葉二所あり。しかれと時雨は雨の名なり。あきくれぬは夕也。仍病にあらす。

十五番　雪

左持　皇太后宮大夫入道

たつぬへき友こそなけれ山かけや雪と月とを獨みれとも

右　道因法師

朝戸あけて外の雪をも詠やらん心の行はあとしつかねは

左歌心は山居の雪をみて。彼王子猷か山陰の雪夜載安道をおもへる事を。いへるにやとはみえはへれと。歌の面に雪の事すくなくや侍らん。右歌は雪の歌と覺て。姿もおかしく侍る。外の雪をもといへるや すこし荒涼に聞え侍らんとそおほえ侍る。勝負之條。是もさきの番におなしきによりて。不レ加レ判耳。

十六番

左勝　俊惠法師

うちはらふ衣手さえぬ久方のしらつき山の雪のあけほの

右　顯昭法師

浪かくるとしまか崎のはま楸しつえは雪も積らさりけり

左歌旅宿雪なとそおほえ侍と。雪の曙といへる文字遣ひ。おかしく侍るめり。しらつき山や。しるて庶幾せられす侍らむ。萬葉集なとの歌。殊に優なる事を。歌合にはとり出へき事とこそ。ふるくも申て侍るめれ。此山久かたにはいかゝをきて侍らんや。此しらつきは若槻の木にてもや侍らん。少しおほつかなくみえ侍れとも。今は大かたのものゝおほえす侍る也。いかにひかことゝも申たりと。人の見候はんすらん。右歌。としまか崎の濱楸。これも歌のふるまひはおかしく侍るを。浪かくるしつえに雪のふらぬことはり。見所なくや侍らん。末につもらんをは。お花ともうたかひ。濱にしけるを月と見んや。雪の歌のほいに侍へからんとそおほえ侍る。雪の明ほのは猶おかしくもやみえ侍らんとて。以レ左爲レ勝。

十七番

左勝　寂蓮

ふりそむるけさたに人のまたれつる深山の里の雪の夕暮

右　大貳入道

たひ人ははれまなしとや思ふらんたかきの山の雪の明ほの

み山の里の雪は。今朝たに人のなといへる 心よろしく

侍るにや。たかきの山の雪は。歌のたけありて優に侍るへし。此たかきの山も吉野の山にこそ侍れ。旅人なとのつねにすくることは。いとなくや侍らんと覺え侍るうへに。雪の夕くれ。少しさひて思ひやられ侍れは。又左のかたへつきや侍らん。

十八番　祝

左持　女房別當

君か代の末をはるかに三笠山さしなからこそ神にまかすれ

右　大貳入道

數しらぬためしは何と人とはゝ君か御世とそいふへかりける

左歌はいはひの心ふかく侍りぬへれと。さしなからといふこと葉。かすあるものをゝきて。むれたるといへるは。さなからといふにはかなふへきにや侍らむ。右歌すかたもおかしく。祝の心も侍りぬれは。持と申侍るへし。

十九番

左　季經朝臣

君か代をいかにかそへん世中に數にたるへき物しなけれは

右勝　源三位

住吉の神もしるらめよる浪の數かきりなき君か御代をは

數にたるへき物しなけれはといへる。誠に峯の松濱の眞砂を盡すとも。數ある物はしることも有ぬへけれは。祝の心かきりなく聞ゆ。但いかゝかそへんとをきて。かすにたるへきといへる。同事にこそ侍るめれ。住の江の波にかけて君か世の數によせたる心は優なるへし。おなし事なきによりて。以右爲勝。

二十番　戀

左持　皇太后宮大夫入道

あふ事は身をかへてとも待へきによゝを隔てん程そ悲しき

右　女房丹後

おもひねの夢になくさむ戀なれは逢ねと暮の空そ待るゝ

左歌物ふかき心地しておかしきさまにもみえ侍るへし。右歌あはねとくれの空そ待るゝといへる。けちかきさまして。戀の歌とおほえてこそ。但勝負不能定申歟。

二十一番

左勝　季經朝臣

思ひ出るその慰めも有なまし逢みて後のつらさなりせは

右　顯昭法師

よそにみる人はかくしも厭はぬをうき身は戀に顯はれに鬼

左の歌戀の心もさることゝ聞えて。姿も優に侍るめり。右姿はおかしきやうに侍るを。うき身は戀にといへる。少心をそくしれりけるにやと聞ゆらん。以左爲勝。

二十二番

左勝　俊惠法師

我戀はいまは限とゆふまくれおき吹風のをとつれて行

右　道因法師

くれなゐに涙の色のなり行をいくしほ迄と君にとはゝや

左秋の夕まくれの野風なといはん題の歌にやとそ見ゆれと。おもひいりたるやうには侍るへし。右紅に涙の色なるといふは。常の事にてこそ侍れと。いくしほまてと君にとはゝやといへる末の句。よろしく侍るめり。但左も猶心有てみ侍れは。爲勝。

二十三番

左勝　女房

行かよふ心に人のなるれはや逢見ぬさきそこひしかるらん

右　經家朝臣

つらきをもうきをもしらぬ心にはなにをかはとて戀しかる覽

左歌おもひつゝへにける年をしるへにてといへる歌の心にかよひて。是は逢見ぬ先に戀しかるらむといへる。すかたおかしくこそ侍るめれ。右歌うきをも知ぬなといへる。歌めきて聞侍るを。末の句やあまりさへ心もなからさらん心地して侍らむ。仍以左爲勝。

二十四番　旅

左　隆信朝臣

たひねするむろの苅田のかり枕鴫も立めりあけぬこのよは

右勝　源三位

宮古へは今もことつけやるへきにうつの山へに逢事そなき

左むろのかり田に鳴立なとそ。ちかき歌に侍りしかと。をき所かはりて侍ぬれは。姿おかしく侍めり。末の句のあけぬこの夜はとをけるそ。此頃常に見ゆる心地して。さまてなき事の例のことく覺侍り。右うつの山へにといへる。ことによそへなんとなけれ共。彼宇津の山へのうつゝにもと云る歌を思へる心。よろしくこそ覺え侍れ。左歌はふるまひたるやうにて。耳にとまる所あり。右はことなる詞なくて。心旅の歌と覺たり。勝と申へし。

二十五番

左　季經朝臣

朝夕におも影さらぬ宮古かな心や先にたちかへるらん

右勝　資忠

たひねする庵をすくるむら時雨名殘迄こそ袖はぬれけれ

左右ともに殊なる事なく。優には侍るに取て。右のなごりまて袖はぬれけれといへる。いと宜しく聞ゆ。右勝侍るへし。

二十六番

左　俊惠法師

妹しるやは山しけ山越くらし木の葉かたしき明しつるよを

右勝　顯昭法師

遠さかるまゝに都の忍はれてかさなる山のうらめしきかな

左歌いもしるらめやとをける舊歌のふるまひ。いさおかしく侍るを。はやましけ山と置て。この葉かたしくといへる。字重なりてこそ侍るめれ。しからすはよく侍れと。歌合にはまさるへき。木のはかたしきといへる。このはゝいかゝかたしくとはいふへからんとそ覺侍る。右歌まゝに都そといへる。彼小夜ふくる儘に汀や氷るらむといへる歌を。こひねかへるにやあらん。是はとをさかるまゝにみやこのといふ句。よろしきにあらさるへし。但かさなる山のといへる末の句も。たひの心ゆうに聞ゆ。同事なれとも以右爲勝。

二十七番

左勝　女房

日を經つゝ都しのふの浦さひて浪より外のをとつれもなし

右　仲綱

宮城野の木下露をうちはらひこ萩かたしきあかしつる哉

左歌すかた心おかしくこそ侍めれ。浦さひてといへる。

少しいかにそや聞ゆらん。右歌ことなる事侍らす。左歌なみよりほかのなといへる姿。猶よろしく侍るめり。以レ左爲レ勝。

二十八番　述懷

左持　皇太后宮大夫入道

かきつめて思ふも悲しもしほ草沉みはてにしな社おしけれ

右　資隆朝臣

はなれ駒行もかへるもおとろかぬ心こそ猶うらやまれけれ

左歌もしほ草かきつむなとこそ。事ふりて覺侍る。右歌放駒珍敷侍るへし。歌躰不ニ相似一。懸隔之上。判者愚詠。依レ例不レ能ニ勝負一。

二十九番

左勝　師光

今は唯いけらぬ物に身をなしてむまれぬ後の世にもふる哉

右　資忠

うきなからなを驚かぬわかみかな夢路に迷ふ心地のみして

左歌心ふかく姿おかしく。いとよろしくこそ侍れ。右歌なをおとろかぬとをき。夢路にまよふなといへる心はおかしくは侍るを。かやうの夢の心つねにみなれたるさまに申侍らん。左猶めつらしく見え侍る。爲レ勝。

三十番

左持　女房

ね覺して思ひつらぬる身のうさの數にそふとや鴫の羽かき

右　仲綱

更にける我よのほとはもとゆひの霜をみてこそ驚かれぬれ

左歌數にそふとやといへる姿よろしくこそ見え侍れ。右歌ふけにけるわか身のほとゝをきて。霜をみてこそといへる。始終相かなひ言葉たくみにして見え侍れは。兩首の姿心とり〳〵にして。楚忽之斟酌かた〳〵みたれはへれは。持と定申。

返し　大夫入道

和歌の浦になを立かへる老の浪しけき玉藻にまよひぬる哉

右府

老の波ひかりをよする和歌の浦の月に玉もゝみかゝれに皀

雖ニ荒本至極一。旅宿之徒然之餘。寫留之畢。

寛正二年七月十八日　常縁在判

同四暦癸未六月十八日。以ニ後本一寫畢。　道端之

右此本。以ニ宗勝院本一寫ニ留之一畢。

享祿二年十一月十一日

右二部以奈佐勝皐藏本一挍了

群書類從卷第百八十九

和歌部四十四歌合十

若宮社歌合建久二年三月三日

題

山居聞鶯　松間梅花　寄祝言戀

作者

正三位行權中納言兼右兵衛督藤原朝臣兼光
從三位行右京大夫藤原朝臣季能
從三位藤原朝臣季經
正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信
正四位下行左京大夫藤原朝臣顯家
正四位下行左近衛權中將兼備中權介藤原朝臣兼宗
正四位下行左近衛權少將藤原朝臣隆保
散位從四位下藤原朝臣有家前少納言
散位從四位下藤原朝臣伊經前中務權少輔
前播磨守從五位上藤原朝臣隆親
前飛驒守從五位上中原朝臣有安
前大和守從五位上源朝臣光行
散位從五位下藤原朝臣季定
散位從五位下鴨縣主長明
散位從五位下菅原朝臣是忠
筑後守從五位下源朝臣仲賴
從五位下大和守大江朝臣公景
正六位上行雅樂少允紀朝臣康宗
正六位上行木工少允惟宗朝臣光成
正六位上行左衛門少尉中原朝臣淸重
法印靜賢
法橋宗圓
法橋季嚴
阿闍梨顯昭
阿闍梨成全
僧覺盛
僧覺綱
沙彌性照
沙彌安性
前齋院尾張
右大臣家佐
侍從

判者　阿闍梨顯昭

一番　山居聞鶯

左勝　正二位行權中納言兼右兵衛督藤原朝臣兼光

鶯のはつ音もきゝつ山里をもの淋しともはるはおもはし

右　阿闍梨顯昭

心ありてふるすを近み家居せしかひあれとなく谷の鶯

左歌心詞あひかねて宜侍り。右歌させるとかはみえ侍らねと。詞くたけてや侍らん。以レ左爲レ勝。

二番

左勝　從三位行右京大夫藤原朝臣季能

鶯のなき行かたにしたふ哉なれぬる谷のともとおもへは

右　正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信

わか宿は谷のふるすを隣にてふかくみにしむうくひすの聲

左歌上下句なひやかによみくたされて侍めり。右歌たにのふるすをとなりにてなとたくみにては侍れと。ふかくみにしむなと心ゆかすや侍らん。なを左勝侍へし。

三番

左　從三位藤原朝臣季經

山里のはるのなさけやこれならん霞にしつむ鶯のこゑ

右勝　法印靜賢

たにふかき宿の梢はうくひすの古巣なからも里なれにけり

左歌かすみにしつまん鶯のこゑの。山さとのなさけときこえん事。おもかけありて身にしみ侍れと。右歌のふるすなからさとなれにける。今すこしめつらしくや侍らんと思たまふれは。以レ右爲レ勝。

四番

左持　正四位下行左京大夫藤原朝臣顯家

春きてそそともの谷の鶯もともにすみかと音にはあらはす

右　正四位下行左近衛權中將兼備中權介藤原朝臣兼宗

たに深く宿のすまゐはうくひすの聲よりほかに問人そなき

左歌そともといふことは。日本紀にみえたることはへれと。これも心はたかひ侍らぬに。下句やすらかにしもいひくたされす侍らん。右歌きゝなれたるさまにや侍らんとはおもふたまふれと。さしてはおほえ侍らねは心詞をひとしめて。持と可レ定申レ歟。

五番

左勝　正四位下行左近衛權少將藤原朝臣隆保

まつかきやかやかりふきの宿なれはたにの鶯こゑは思はす

右　前播磨守從五位上藤原朝臣隆親

今しはしあさいせさせて鶯のこゑをよとこへをくるたに風

左歌まつかきやかやかりふきのやとなといへる。おかしくも聞ゆる物から。またみゝたちて。かしかましきかたもや侍るらん。右歌はふるくたけちかくよとこねはせし鶯の鳴こゑきけはあさゐせられすとよめる事をよみうつされてよしあれと。めもおさろかす侍らへに。かれはねやのまへに竹のある所にね侍りて。とことはかられて侍にや。さやうのおりにかなひたる風情と。歌合とはにぬ事にや侍らん。鶯のため本意なくや。左はあやにくにうくひすをもてなされて侍めれは。左可レ勝侍らん。

六番

左勝　散位從四位下藤原朝臣有家

鶯はたにのふるすを忍ふらしやまかたつける宿にしもなく

右　法橋季巖

深山へのたにのこほりもうち解て春しりかほに鶯そなく

左心もおかしく。上下句の詞もみなふるき跡を思ひて。宜きこえ侍めり。右も。すゑの句は聞え侍に。み山へのたにの氷と侍〔「るのみ」の三字脱なる歟〕にて。山居の心うすくや侍らん。いまの世には吹毛の難のみおほく侍は。よにしたかはても。いかゝはと思ふたまへて。以レ左爲レ勝。

七番

左持　散位從四位下藤原朝臣伊綱

淋しさは冬にかはらぬ山里にはるめく物はうくひすの聲

右　前大和守從五位上源朝臣光行

鶯のこゑもみちをそとちてける雪は消にしみ山へのさと

左歌こゝはとみゆる所もなく。なひやかにて。歌あはせのふるまひによまれて侍めり。右歌もおかしく聞こえ侍めり。遠(袁歟)司徒之家霽路應達と作れる心はせも思いてられて。なさけふかき心地し侍れは。持とことはり申へし。

八番

左勝　前飛驒守從五位上中原朝臣有安

かきねなるひとむらすゝに宿かりて聲ならすなりたにの鶯

右　法橋宗圓

たに深きかけちをしむるすまゐには闇のしたにも鶯そ鳴

左かきねなるひとむらすゝになといひしりてこそ聞え侍めれ。萬葉には一むらはきとよみ。古今にはひとむらすゝきと侍めるを。とりなされたるにこそ。いさゝむらたけなとよみをきける心はせも思しられ侍るを。右たにのかけにいへゐするは。山里の常の事なれと。かけちをしむるすまゐと侍。いかゝと聞ゆるうへに。ねやの下に鶯のなかむ事も。あやしくきこえ侍。孫姫式に褊蝶病なとあけたるは。かゝる事にやと思たまふれは。左勝侍へし。

九番

左持　散位從五位下藤原朝臣季定

まとゐする山の高根に聞ゆなりたによりいつる鶯の聲

右　阿闍梨成全

鶯にそまたつこともわすられて我も谷より出ぬへきかな

左まとゐする山の高根にきこゆとはかりにては。題の心とたかひてや侍へき。あまりの事にや。右そま人によせて山居をあらはさん事は。さもありぬへし。たにのうくひすに心をかけんには。かならすしも我はたにより いてすとも侍らなんや。今すこしことはたらす侍にや。なすらへて持と申へきか。

十番

左持　散位從五位下鴨縣主長明

をのつから問人もなし鶯のふるすにかよふ聲はかりして

右　侍從

たに近きすまゐならすは鶯のすたつ初音をいかてきかまし

彼是ともにすへらかによみくたされて。させる疵となるへきこともみえねは。又おなしほとゝや申へからむ。

十一番

左持　散位從五位下菅原朝臣是忠

谷ふかくいふせきやとも鶯のいてたちかたの初音をそきく

右　筑後守從五位下源朝臣仲頼

すまゐする山のかひにはうくひすの都へいつる初音をそ聞

左右ともに。えたるところえぬ所はへるめり。左のたにふかくいふせき宿とはへるよりは。右のすまゐする山のかひにはさあるは。なたらかに聞えはへるに。右の宮古へいつるはつねは。きゝふるしたるさまなるに。左のいてたちかたの初音は。今少し心あるさまなれは。心詞をなすらへて。これもひとしと申へし。

十二番

左持　從五位下守大和守大江朝臣公景

鶯のはつ音にあかていりしより思はぬ谷のすまゐをそする

右　沙彌安性

八重うつむ霞のそこのしはの庵にたにの鶯こゑかよふなり

左右ともに。こと葉つかひもいひしられてはへるうへに。こゝろはへり。よろしくみえはへるめれは。ともにすへらかにて。また持にてはへるへし。

十三番

左　正六位上行雅樂允紀朝臣康宗

山家のはきのふるえをつたへともまたうらわかき鶯のこゑ

右勝　正六位上行左衞門少尉中原朝臣淸重

寂しさもわすられぬへし鶯のまつをとつるゝ深山への里

左歌はきのふるえをつたはせて。またうらわかきとはへる。わりなくは聞ゆれと。右のまつをとつるゝみ山へのさとは。歌すかたまさりてや侍らん。右のかちなるへし。

十四番

左持　正六位上行杢少允惟宗朝臣光成

霞たにはれぬ住ゐのあやしきにことゝふものや鶯のこゑ

右　僧覺綱

ねりそゆふはたのかきねに鶯のきなく枝をはしのきしほ覽

左歌かすみたにはれぬすまゐとはかりにて。かならすしも山居は聞えすや侍へき。山里とよみたるも山はちかけれとなをひろくはへり。里もたなかものへの家ゐも。やまさとにはこもりはへるなり。山居は一定やまにすむへきにて侍もいかゝ。右歌ははたのかきねさはへるは山はたのいへゐは。うたかひなき山居にては侍に。鶯のきなく枝をしのきしほらんと侍は。いかによまれたるにか。しのくと申事は。のそくには侍らす。浪をしのく雲を凌くなと申も。おかしましはる心とこそみえてはへめれ。されは萬葉集には。こらかてをまきもく山にはるされはこのはしのきて霞たなひくとよむも。またおく山のすかのはしのきふるゆきのけなはは はたをしあめのふりこく〔萬葉には消者將惜雨莫零行年〕とよめるものそくにはあらす。しかはあれと左の山居も右の凌。各存たまふよしはへるらん。をしてさかく申かたし。

十五番

左　右大臣家佐

鶯のこゑにこゝろはとゝむるをかへる山てふな社つらけれ

右勝　沙彌性照

人とはぬ吉野の奧もうくひすの聲になくさむ春のつれ〳〵

左歌にかへる山てふなこそおしけれとよまれたるは。こしちに聞ゆるやまにや。我をのみおもひつるかのこ

しならは。かへるの山はまとはさらましと。ふるくもよめり。又山人のかへさにや。いかさまにも山路のこゝろにてそ侍へき。右歌は吉野のおく。まことに春のつれつれも。なくさめかたかるへし。ふるき歌にも。みよしの の山のかなたに家もかなよのうきときの かくれかにせんと侍。思ひいてられはへめり。題おほつかなきにつきて。左のまけなるへし。

十六番

左　前齋院尾張

深山へのすみかはかすみこむれともかくれすきくは鶯の聲

右勝　僧覺盛

柴のいほに古巣ならへし鶯のけさか都へいつとつけつる

左歌こゝろはありてきこひ侍に。すみかは かすみこむれさもとあるつゝきや。こゝろよからすはへるらん。かくれすきくなとはへるも。たゝことはにや かよひ侍らん。右はふるすならへしといひをきて。けさかみやこへなんと。したはしけなるけしきも。あはれふかく侍れは。爲レ勝。

一番　松間梅花

左勝　兼光卿

そなれ松むめかえかさす木のまより雪ふきまはす春の山風

右　阿闍梨顯昭

たのむかけありとや松を思はまし枝さし交す梅しちらすは

左歌そなれまつの 梅かえをかさして。廻雪の袖とみえんことと。たくみにこそきこえ侍めれ。右たのむかけなくもみちちりけりなと侍古歌の。ふしはかりを 思ひつるにや。あなつらはしくはへるめり。そなれまつははるかにたちまさり侍らん。

二番

左勝　季能卿

梅かえのにほひをほかへやらしとや緑をおほふ松のむら立

右　隆信朝臣

枝かはす松のちよをや重ぬらんやへに限らすさける梅かえ

左心こと葉ともに おかしくみえ侍めり。梅の匂ひをちらさしとて。松の緑をおほはんこと。いとめつらしく聞えはへるにや。右まつのちよをかさねんことはたくみなるに。八重にかきらすといへるそ。あなかちにきこえ侍。八は陰數のかきりなれは。あまるをもたらぬをも。をしなへてやつとこそはよみならはしてはへめれは。かきらすと申侍は ことあたらしくや侍へき。いかさまにも。左は心詞めつらしけれは。勝と定申へし。

三番

左勝　季經卿

常盤なる松にましれる梅花よはひにかへよをのかにほひを

右　法印靜賢

えたかはす梅のありかはこゝそとや松風にほふ春の明ほの

左まつのよはひに 梅のにほひかへんこと。まことによままほしき風情に侍けれ。いと〳〵めつらしく侍めり。右歌まつ風のむめのありかをつけんことも おかしけれと。いますこしきゝなれたるかたやはへるらんと。おもふたまふれは。又以レ左爲レ勝。

四番

左勝　　顯家朝臣

なみたてる松の緑はつゝめともなをもれ出てさける梅かえ

右　　兼宗朝臣

梅のはなえたをかはして咲ぬれは松ふくかせそ匂ひなり鳧

左詞つかひは。菅家萬葉集にいりて侍かや。あさみとり
のへの霞はつゝめともこほれて匂ふはなさくらかなと
いへる歌のすかたを。こひねかはれなから。松のあひた
といふことをは。よみおほせられてこそ侍めれ。右歌も
おかしけれと。つねのこゝろにてやはへるらむと思ふ
たまふれは。以レ左爲レ勝。

五番

左　　隆保朝臣

松山のこまよりみゆる白雪の色にまかへるむめのはな哉

右勝　　隆親朝臣

枝かはす梅のよそめを袖のうへに思ひしらする嶺のまつ風

左まつ山と侍。みちのくのするの松山にても。さぬきの
まつ山にてもはへるには。白雪よりは白浪をかけてやた
より侍へからむ。古歌には君をきて あたし心をわか
もたはすゑの松山なみもこえなむ と侍めり。又松山の
まつのうら風ふきよせは ひろひてしのへこひわすれか
いとよめり。白雪にみえんことは。いつれのまつにもた
かひ侍らしや。たゝしこれはあまりのことなり。やまと
歌の心はさためあるへからす。右の歌こそ。心ありてみ
え侍めれ。梅のよそめを袖のうへに おもひしらするほ
と。心にもしみぬへし。爲レ勝。

六番

左持　　有家朝臣

枝かはす梅さきぬれや吹風の匂ひあやしき松のむらたち

右　　季　經

松風もことにそ春はなつかしき枝さしかはす梅のにほひに

左歌松のむら立 杉のむらたちなといふこと。何事とな
くよまゝほしきことと葉に侍を。にほひあやしきなと。い
といとこのもしくはへめり。右歌はあなかちにつきめ
るけしきは侍ねと。たゝありにてとかなし。松風もこと
にそなと侍も。松風入琴といふこゝろにや。なさけふか
くはへれは。持とや申へき。

七番

左　　伊經朝臣

咲まさるむめの匂ひは春なからあきとおほゆる松のした哉

右勝　　光　行

ときはなる松もや春を知ぬらん木のまの梅の風のたよりに

左心はたくみに侍に第四句や。いますこしおもはるへ
くや侍らん。秋とおほゆると侍ならは。まされるまし。
相撲詠にも。したもみちひとはつゝ木のもとにあきと
おほゆる蟬のこゑかなとよめり。おほかたも詩歌は一文
字と。むかしの人も申されけるは。かゝる事にや。右歌
ふるくは。ときはなる松のみとりもはるくれは今一し
ほの色まさりけりとこそよみて侍に。木のまの梅のか
せのたよりにときはの松のはるをしらむもさもとおほ
え侍り。左は第四句いひおとされて侍るにつきて。右勝
侍へし。

八番

左勝　有安

枝かはす梅のにほひをさそひきていとゝみにしむ峯の松風

右　宗圓

かせ吹は雨のをとする松にしも枝さしそふるむめの花かさ

左歌優に聞え侍めり。右歌上句は簫瑟催レ心學レ雨辰といふこゝろを思ひ下句はあをやきをかたいとによりてうくひすのぬふてふかさやむめのはなかさといふこゝろとは。いはぬにさきたちて侍に。いさゝかかたふかれ侍にとは。まつにしもとある第三句は。いかにをかれて侍にか。笠は雨にきりものなれは。要にになひてこそは侍れ。まつにしもといふは。あしかるへき心かとうたかはれ侍て。いつかたにもたしかにきかする心はあらまほしくや。おほめかるゝこともなけれは。以レ左爲レ勝。

九番

左　散位季定

枝かはす梅のにほひやかほるらん松吹かせのなつかしき哉

右勝　成全

枝かはす梅の匂ひと思はすはあやしかるへき松のかせかな

この兩首。はしめに枝かはすとをかれたるこそ。松風の匂ひによせられたる。たゝおなし事にて。とかくおもひわくへくは侍らねと。なか〳〵おなし色なるにつけて。いささかこきうすきもみえやすきことなれは。すこしのしるしを申へきにや。左は常のことなれとも。匂ひやかほるらんとはへるおなしこゝろにや。こと詞にてあらまほし。ふくかせのなつかしきも。右のあやしかるへきと思はせたるには。をとりてや侍らんとそ。おもふたまふる。以レ右爲レ勝。

十番

左勝　長明

枝かはす梅の匂ひにをのつから松ふく風も春めきに鳧

右　侍從

梅かかをさそはぬ時の音とてもみにしまさりし松の風かは

左右歌。こゝろもことも葉もあらぬさまにて。をとりまさりわきまへかたく侍り。むかし長能道濟か。鷹狩の歌あひたゝかひけんも。かくやとそ思ひあはせられ侍。道濟か歌は。ぬれ〳〵もなをかり行むはしたかのうは羽の雪をうちはらひつゝ。これはのさひにてあやまつことなし。この左の歌に似たり。長能歌はあられふるかたののみのゝ狩衣ぬれぬやとかす人しなけれは。これはわりなけれといさゝかあやまりありぬへし。此右歌の梅か香をさそふとはかりにて松間といふこゝろをくれたるかことし。彼四條亞相の評定になすらへて。左可レ勝歟。

十一番

左　是忠

消のこるゆきかさのみそみ山への松にましれるむめの初花

右勝　仲頼

梅かかをみとりの枝にうつしもて我ものかほに匂ふまつ風

左歌すゑのまつにましれる梅のはつはなとをかれたるはよろしきに。雪かとのみそみ山へのとつゝけられたるは。みゆるといふ心にや。ふるくかゝるためしなきにはあらねと。歌合なとにはなをことあさくや。右歌いますこしたしかにや聞え侍らん。みとりのえたにうつし

もて我ものかほになと侍。みところ有心地つかまつれは。以レ右爲レ勝。

十二番

左勝　公景

松風はきかまほしきを枝かはす梅のさかりはいとはるゝ哉

右　沙彌安性

なつかしみうす紅にさく梅の色もてはやす松のむら立

左歌よろしくこそ聞え侍めれ。こゝはすくなにつよからぬものから。おもへるところ殘らすいひとをされて侍めり。右歌はしめの句になつかしみとをかれたるも。すゑにわたりてあひかなへりとも聞え侍らぬうへに。花もみちにつけて。ときは木を色もてはやすとよめる。わきもこかものすそよりおちたることとなれは。左勝侍へし。

十三番

左持　康宗

末の松なみのこゆるとみえつるはたえまの梅の匂ひ成けり

右　清重

藤なみのなに思ひけんたかさこの松には梅もさきかゝり鬼

左さきのつかひに。まつやまにかけては浪をこす心や侍へきと申つるいきとをりは。此歌にこそとけ侍ぬれ。たゝし八條大相國六條のあまのはしたてにて歌合したまひけるに。德大寺左府のよみ給へる。はなさかりするの〔松風歟〕山かせふけはうすくれなゐの波そ立けると侍歌をは。六條修理大夫判者にて。むかしもいまもよみきたるところをさしすきて。はなもよみこぬするの松山。

ことにおもひかけすとそことはり給ける。けにとおほゆることとなり。かくは侍れと。和歌のいまやうすかたをみるに。くに〳〵の風俗をもたつねす。歌枕のありさまをもしらす。いまはいかなる野にも山にも。はなをさかせ月をもてあそふことになり侍にたれは。みよしの。をはつせもかひなく。あかしさらしなもうらみをのこしつへし。夏にこそさきかゝりけれ藤のはなまつにとのみも思ひけるかなといふ歌の心を。ひきちかへられて侍にや。ひとはしのなさけはあれと。勝とは申すへくもあらねは。持と定侍へし。

十四番

左　光成

枝かはす松のしるしに梅のはな色をもかなもときは也せは

右勝　覺綱

梅かえの匂はさりせはひたすらに松に花なく春かとやみん

左歌は金葉集に。松間さくらといふ題に。このはるはのとかに匂へさくらはな枝さしかはすまつのしるしにとよめる歌の心にこそ侍めれ。右はよろしく聞え侍れは。勝と申へし。

十五番

左勝　佐

みれとあかす梅のにほひの紅に松のみとりのひとへ重ねて

右　沙彌性照

消やらぬ松の雪かとみえつるやよのまに咲るむめのはつ花

左歌むめのにほひのくれなゐに松のみとりのひとへかされん事さもとみえて。心にふかくしめ侍り。もしをむ

なのよみたまへるにや。むかしの伊勢御なとよみのこされたりけるにか。右歌もきえやらぬ松のゆきとはへろも。み山にはまつの雪たに消なくにとよめる歌おもひあはせらるれと。こするゑの雪を梅ともさくらともみるは。つれのことなれは。くれなゐの梅は。匂ひもふかくや侍らん。

十六番

左　前齋院尾張

ふくたひに春はあたりそなつかしき梅さきましる松原の風

右勝　覺盛

さしかはす梅のたちえは色榮てまつかせかほる夕くれの空

左歌ふるくより。こやの松はら。あふの松はらなとよみつるは。きゝよくはへるに。まつはらの風ととちめられたるこそ。むけのたゝことはときこえはへれ。右おなしまつかせにとりて。これは心もおかしく。こと葉もつきつきしくふるまはれたれは。かちと申へし。

一番　寄祝言戀

左持　兼光卿

契りつるしら玉つはきはかゆ共かはせる枝の久しかれとは

右　顯昭

いほとせも千年もたえし君と我ありなれかはに影を竝へて

左歌上句は椿葉之影再改ともつくり。白玉つはきやちよともよまれたるあとを追て。祝言のこゝろたしかに侍めり。下句は長恨歌のく。在レ地願爲ニ連理枝一といふこゝろにて。戀のこゝろさしもふかくはへるめり。但第三句のはかゆともとはへる詞や。頗心ゆかすはへるらん。是非盡埵之嬿只猪磨金山之謂也。右歌所詠のありなれかは。日本紀よりいてたり。雖レ非ニ俵國之風俗一已爲ニ新羅之名所一。評定之處請爲ニ同科一矣。

二番

左　季能卿

諸共に千世まてとこそいはれけれかえんとはせし命なれ共

右勝　隆信朝臣

同しくはすむへきちよの數となれひとよもかゝすたつる錦木

左は古歌に。いのちやはなにそも〔は歟〕露のあたものをあふにしかへはおしからなくにといふこゝろをは。さるへきさまにとりなされてはへめれと。かへむとはせしといへるや。詞ゆか〔心ゆか歟〕すきこえはへらむ。右歌は にしき木はちつかになりぬ。いまこそはひとにしられぬねやのうちみめとある古歌を思ひて。千世のかすとなれとよまれたるは。おかしくはへるに。ひとよもかゝすと侍そ。あやしくおもふたまふる。かのにしきゝよるたつとはえうけたまはらす。しちのはしかきと申ことそ。もゝ夜かゝすふしけりとは申すめれ。さはあれと。えひすかふるまひしりかたくはへるうへに。心おかしけれは。右可レ勝歟。

三番

左持　季經卿

雲かゝる高根にちりのなるほとをあひみて後の契りとも哉

右　法印靜賢

岩の上の松のよはひもみてしかなねかたき中の末を思へは

左は君か代はちよにひとたひゐる塵のしら雲かゝる山

となるまてといふ歌を。よろしくとりなされてはへめり。右は種しあれはいはにもまつはおひにけりこひをしこひはあはさらめやはといふことを思ひて。ねかたきなかのするなとなかめられて侍にこそ。さもにふるきあとにつきて。あたらしき心はせをあらはされたれは。是をかつかれをまくとも申かたきつかひにこそはへめれ。

四番

左　　顯家朝臣

逢せをはやわたらなん千年まてすむへきものを中川の水

右勝　　雅宗朝臣

いかにして長き契りを結はんととけぬにつけてまつ思ふ哉

左歌なか川の水によせて。あふせをすゝめ。ちよをかねて久しくすむへきよしは。おとこをんなのなからひ。かへるあしたの玉章に。かきなかしたることのはにやはへるらん。さりとてこの歌を。いそのかみふることゝさため申にはあらす。右歌すくれたるふしあまりの心はみえ侍らねと。させるとかはみえはへらねは。中々かちとも申はへりぬへし。

五番

左勝　　隆保朝臣

千世をへてすまゝくほしき思ひかは逢事浪に袖そぬれぬる

右　　隆親

忘るなよあひみ初なはちよ迄もかけ並へんといひし言のは

左この歌も。ふるき心はみえれと。思ひかはによせて。ふかきうらみをはいひとをされたれは。あしくも侍らす。右もあしからぬに。あひそめなはといへるわたりや。とゝこほりたる心地し侍らん。仍以レ左爲レ勝。

六番

左　　有家朝臣

我君のみよのかすとて錦木をちつかまてにもたてんとそ思

右勝　　法橋季縁

ちよ迄とせめては君をいのる哉あひもやすると心なかさに

左歌二番の右歌の心にや。わか君のちよのかすこそ。いはまほしけれと。するのちつかとをかれぬれは。たゝ御代のかすと侍にこそ。いかさまにも千とせをはねかはれてはへるにこそ。たゝしちつかまてたてんとねかはれたるは。いそきあはんとおもはねは。こひの心や少く侍るらん。右はすかたもなひやかに。心もさもときこゆれは。可二勝侍一歟。

七番

左　　伊經朝臣

君か世をかそふるはまのまさこにも條るは人のつらさ成鬼

右勝　　光行

思ひたつ戀地のするのとをさこそ千年の坂にいる心地すれ

左は古今にわたつ海の濱のまさこをかそへつゝ君かいのち「ちとせ。古今」のありかすにせん。又云。ありそうみのはまのまさことたのめしはわするゝことのかすにそ有ける。此歌とものの心をいてすや侍らん。またするは近ころ侍し歌にや。ひまもなく涙をつゝむ袖になをあまるは人のつらさなりけり。右はこひちのするを千年の坂によせられたる。たくみにこそ侍めれ。花山僧正の

千とせの坂もこえぬへらなりとよみをかれたるを。おもひよらさりけるも。それましくこそおもふたまへらるれ。こひちとや（云の誤歟）ことは泥と申す文字なれはにや。ふるくはみなおりたつとよみ。袖ぬらすなとよみきたれるを。今のよの人々は。おほやうこひのみちといふ心にのみよまれて。ふるき心をはわすれてのみ侍はいかゝといきとをり侍けれと。ふるき歌にさやうによみたることとも。をのつから侍は。作者もおさなくよまれたるにや。かちと申侍へし。

八番

左　　　有安

色かへぬたけのよな〳〵はらへ共かはくまもなき袖の露哉

右勝　　　宗圓

さもこそは末遠かなるみよならめかひたき戀に年をへよとや

左歌さまは宜けれと。色かへぬたけとはかりにては。いはひのこと葉とも申かたくや。久しき契をもいひあはせてそかなひ侍るへき。右歌はたしかに題の心にかなへり。爲ㇾ勝。

九番

左勝　　　季定

君と吾あひみて後の久しさはなゝのこの〳〵よにあはん迄

右　　　成全

男山まつよりしてそたのもしきすみて久しく逢んと思へは

左なゝのこのこの世にあはんと侍は。七世孫にあはむとにこそ。久しき契にこそ。右歌おとこ山松よりしてそとよまれたるは。男をまつにや。古今にもさのみこそよみて侍めれ。をみなへしうしとみつゝそ行すくる男やまにしたてりと思へはともあり。又いまこそあれわれもむかしはおとこ山さかゆく時も有しものなりとよめり。是を思ふに。いまの歌は。おとこをまつよりたのもしとにや。女のうたになりてよむもつねのことなり。またおとこやまた。神のかたにもおとこのかたにもよせられたるにや。たゝし久しく逢んとはかりにては。七世孫にはをとりてや侍らん。以ㇾ左爲ㇾ勝。

十番

左勝　　　長明

我君の千世のみかけに住侘らはかなき戀にみをやかへてむ

右　　　侍從

たつのゐる濱のまさこに比ふれは袖しの浦は波そかけそふ

左歌題こゝろはたしかによまれて侍めり。右歌はたつのゐるはまの眞砂のかすよりも久しくみゆる君かみよかなといふ歌をおもひてよまれたるにや。此いはひのことはとあるは。ふるき祝ひの歌のこと葉といふには。よもはへらし。いまの歌にも。いはひの心をかけてこそよみ侍けれ。此歌はたつのゐるはまのまさこに我こひをくらへて侍れは。本意たかひてや侍らん。うけたまはりさたむるほとは。しはらく以ㇾ左爲ㇾ勝。

十一番

左勝　　　是忠

萬代もちとせのあきもさもあらはあれ只一時のあふ事も哉

右　　　仲頼

久しくはつらさも變る折やあると君かやちよを誰も過さん

左歌さることゝきこえ侍めり。右歌もこゝろも侍めれと。共に久しくなからへは。つらさやかはるといふ歌は。近頃きこえ侍き。寄祝戀といふ題に。としへなん後はあはれやかくるとて人をも身をも千世といのりつと侍しかは。同し心にこそ。以レ左爲レ勝。

十二番

左勝　公景

逢みてののちは千年もすくす共つれなき事の程へすもかな

右　安性

羽衣のまれになつてふいはほこそつれなき人の心なりけれ

左歌きもときこえ侍り。右歌は君かよは天のはころもまれにきてなつともつきぬいはほならなんといふ歌を思はれたるにや。是は梵天以二三朱衣一拂二盡四十里磐石一爲二一劫一といふ經説をよめるなり。されは經文はかりをおもひて。まれになつてふいはほといはゝ。祝言にあらす。かの祝歌を思ひたらは。さも侍ぬへし。たゝし霓裳羽衣といふことは侍れと。天人の衣を。たゝはころもとはかりにてはいかゝとそ聞ゆる。女の名なとにつくるは別事也。いかさまにも左おかしけれは。爲レ勝。

十三番

左勝　康宗

あたらしき春のあしたはわきもこにむつひの月とまつ祝ふ哉

右　清重

つらけれと千世とそ祝ふ長らへは思ひ返りて逢もみるやと

左歌萬葉集云。むつきたちはるのきたらはかくしこそ梅をおりつゝたのしきをつめといひ侍り。むつきはむつひ月也。その名をおもひていはれたる。さも侍ぬへし。右歌はさきに申つる歌にことふり侍ぬ。なかにも諸共に千世ふへくはこそよからめ。人はかりいのらはわかみのいかゝと云ことゝも侍き。あまり事なれと。けにときこゆることなり。左可レ勝歟。

十四番

左持　光成

訪よりは逢みて千世とかねこさに祝ひこめつゝむすふ玉章

右　覺綱

逢みてはちとせのなかといふからにいとゝ心の急かるゝ哉

左の千世といはひこむる玉章も。右のちとせの中ときゝていそくこゝろも。ともにさもときこゆれは。持と申へきなり。

十五番

左　佐

逢事のちとせをへても有ならは何かためしのまつか久しき

右勝　性照

君か代のためしにひきし呉竹のひとよも妹に逢よしもかな

左心はさよなとみえ侍れと。こと葉さたかに聞え侍らす。末の松かひさしきとあるも心ゆき侍らす。こしのあるならはと侍もよろしからす。右はふるき歌のふるまひにて心にくゝこそ聞え侍めれ。よしのかは岩なみたかく行水のはやくそ人をおもひそめてし。今のよにはかゝる躰はたえて侍に。よみおこされて侍こそ。むかしにかへりぬる心地して。我身ひとつのよろこひと思ふたまふれ。以レ右爲レ勝。

十六番

左持　尾張

命あらは逢夜やあると千年とそつらき人さへ祝はれにける

右　覺盛

ちよまてと契りし中に思ひきやつらき心も久しかれとは

左たひ〳〵聞え侍つる心にこそ侍めれ。右おもへる心ことはにあらはれて。よろしくみえ侍れと。左もあしからねは。持とさため申へし。

しきしまのやまと歌は。やくもたつ出雲のことわさよりおこりて。今の世まてそつたはりにける。やすみしろおほ君ももてあそひたまひ。千早ふる神々もめてたまへり。其中に歌合のはしめは。元慶の御代より出きて。あのあと代々をへてたゆることとなし。そも〳〵此みやしろのいはゝれ玉ふよしをたつぬれは。おとこ山のしけきみかけを。はなのみやこにまねひつたへ。いはし水の清きなかれを。たえせぬみなもとにうつしとゝめられにけりと。ところのありさまを思ふに。たゝことはにはあらさりけらし。きたにのそめは。はこやの松あたらしくとなりをしめ玉ひて。とかへりひらくるはなの色さかりににほひ。にしにむかへは。ちよにひとたひすめるみつのとかになかれて。いけるいろくつをはなつかはせかとおほめかる。あけの玉かきは。光をやはらくるしるしにかなひ。みつのひろまへは。塵にましはる跡をあらはせり。こゝにいまふたこゝろなき思ひをはこひて。いやまひかしこまりたてまつり給うらのおさいてきませり。はしめにはよつのうみにしはたつなみをしつめて。おほきふたつのくらゐにのほり。後にはこゝのへのちかきまもりにそなはりて。みかさ山のたかき木末にそよち給にける。むかし久方のあめよりくたれるつかひ神の。いさをさためられ劔ためしも。思ひあはせられてなん。しかるあいたやまと歌のなにをへるあかたのさきのかみ。このみちをひろむるあまりに。人のやしろには。みなうたあはせあり。このみやにしも。なとかそのあそひなかるへきといふかも〔な歟〕うらみて。あめのしたのうた人をすゝめて。そのうるはしきことのはをあつめられたり。をとろのみちをふみ。よもきのしまにあそひ玉ふまうちきみたちをはしめて。あさゆふにかたをならふるともから。おきふしに心をおなしくするたはれおにいたるまて。をのかしな〳〵なさけをかけたり。そのほかに。家をいてたる世すて人は。むらさきのうはきこけのつゝりをもえらはす。色をこのむたをやめは。はなのもすそしゐしはの色をもわくことなし。かゝる時しもあれ。このみやにさねとつかさとれるまめ人いませりくらゐはのりのはしをわたり。なさけは歌のみちにかけられたり。このことをうけよろこひて。たまのみきりにかたわれの月のみまし〔本ノマヽ〕をはへ。はなのかけにたゝまくおしきまとゐをすゝめらる。其うへに思ひのかけをあふき。ことはのいつみをわかされたり。ときはやよひの月のはしめ。みつにあたれるよきかけなり。くれなゐのもゝはにしきをさらし。みとりのそらは花にゑゝり。から人も船をうかへてあそひ。わか國にもたにみつに浮はなをなかせり。まことにけふのあそひめつらしきかな。むへなるかな。しかるに顯昭法師。おく山のみたにゝとしへたるまかり木の身なれは。花さく春のゆくゑをもしらす。みやゐひ

くしつのをたまきにもすてられたれと。をしてるやなにはつになさけをくろなとつりて。むそちあまりのよはひにたけぬれは。さためて。ことはのはなのこきうすきにほひをわきまへ。心のみつのふかくあさきほとをはくみしるらんとて。きおへるこまのかちまけをさたむへきよしを。たまひかけさしわけてのたまはすれと。たつかゆみあたらぬはかりに。いなむしろたひ〳〵かへし聞ゆれと。よこふえのあなかちに。たまゝくたちのせめにをそれて。さのみやはつのさふるいはになるへきとおもひかへせは。まことにほとけのみのりもとひこたふるをこそ。ふかき心もあらはるゝもとゐとすなれ。まして。うけるたはれのことのはゝ。よしあしをあらそはす。みちをおこすかひなくなんあるへきとおもふ玉へて。つたなき心にまかせてことはり。みしかきふてをはせてしろしつけ侍ぬ。世人のくちひるをかへさんことはさもあらはあれ。かみのみるめもはつかしとは此ことにこそ。さたからのみとにたむけおさめられなは。ゆめ〳〵しめのほかへちらし玉ふなとそ。かこち申ける。

民部卿家歌合 建久六年正月廿日

題

山花　初郭公　暁月　深雪　久戀

歌人

左

歌人	勝	持	負
權中納言兼民部卿藤原經房卿	勝二	持二	負一
權中納言平親宗卿	勝三	負二	
權中納言兼左衛門督藤原隆房卿	勝一	持二	負二
權中納言藤原兼光卿	勝三	持一	負一
參議左近衛權中將藤原公時卿	勝二	持一	負二
參議右近衛權中將藤原公繼卿	勝四	負一	
正三位藤原季能卿前右京大夫	勝二	持二	負一
從三位藤原季經卿前宮內卿	勝一	持二	負二
從三位藤原經家卿	勝二	持一	負二
左京大夫藤原顯家朝臣	勝二	持一	負二
左近衛權中將藤原兼宗朝臣	勝二	持二	負一
右京大夫藤原隆保朝臣	勝二	持二	負一
右中弁藤原定經朝臣	勝三	持一	負一
散位藤原有家朝臣	勝二	負三	
散位源定宗朝臣	勝三	持一	負一
權右中弁藤原宗隆朝臣	勝二	持一	負二
治部少輔藤原爲季	勝一	持三	負一
中務大輔藤原保季	勝二	持一	負二
攝津守源長俊	勝二	持一	負二
片岡禰宜加茂重政	勝一	持一	負三

沙彌性照	勝二	持一	負二
興福寺權別當法印範玄	勝二	持一	負二
皇太后宮大夫入道釋阿	無勝	持四	負一
右			
殷富門院大輔	勝一	持二	負二
沙彌生蓮師光	勝二	負三	
中宮讃岐	勝二	持二	負一
二條院三河內侍	勝一	持一	負三
陽明家丹後	勝二	持一	負二
右近衞少將藤原成家朝臣	勝一	負四	
阿闍梨顯昭	勝一	持二	負二
沙彌寂蓮	勝二	持二	負一
右大臣法眼實快	勝二	持一	負二
僧祐盛	勝二	持一	負二
左近衞權少將藤原定家朝臣	勝一	持二	負二
散位藤原伊綱	勝一	持二	負二
左衞門權佐藤原朝經	勝一	持一	負三
前越中守藤原家隆	勝三	負二	
皇太后宮亮藤原有經	勝一	持一	負三
左少辨藤原資實	勝二	持一	負二
前播磨守藤原隆親	勝一	持三	負一
侍從藤原實宣	勝二	持一	負二
僧靜緣	勝二	持一	負二
前大和守源光行	勝三	持一	負一
沙彌見佛	勝二	持一	負二
右京權大夫藤原隆信朝臣	勝二	持一	負二

少納言法印靜賢　勝一　無持　負四

判者

皇太后宮大夫入道釋阿

一番　山花

左勝　民部卿經房

春はたゝ名をたにいはしかへる山峯の櫻にこゝろとまりて

右　殷富門院大輔

やま櫻たつね行まはくれなゐの霞のまよりみゆる白雲

左歌心詞おかしくこそみえ侍れ。右歌紅の霞にしら雲とみゆらむ心はゆへあるを。紅霞は詩なとにはつくる事なれと。今紅とをける。少いかにそ聞ゆるうへに。聞の字二所に有。ふたまははゝかるへきや。以レ左勝とすへし。

二番

左勝　權中納言親宗

三笠山みねの朝日に櫻はなさしてそしるき萬代のはる

右　沙彌生蓮

よしの山咲ちる花に住人のあはれやいとゝおもひしるらん

左は嶺の朝日に萬代の春をしるしといひ。右は山の櫻に世のあはれをいとゝしるといへる。心とり〳〵なりといへとも。左祝の心なるうへに。三笠山とをかれたる。勝と申へし。是勝は先例なり。

三番

左　左衞門督隆房

いつのまに花の白雪積るらんかふろにみえし山のいたゝき

右勝　中宮讃岐

風かほる花のあたりにきてみれは雲もまかはすみ吉のゝ山

左歌山かふろになるなといふ事は有うへに。いつの間に雪つもるらんなともおかしくは侍れと。戯ことなるやうにそ侍へき。右歌風かほるとをけるより。姿詞優なるへし。勝とすへし。

四番

左勝　權中納言兼光

春日なる三笠の山の櫻はないく萬代のかさしなるらむ

右　二條院三河内侍

老ぬれはのほる山路のくるしきに心をひくは櫻なりけり

此右歌尙齒會なとの歌ならは。よろしかるへくや。左は二番の左歌に心おなし。又かちとす。

五番

左　參議公時

これをみよ嵐のやまの岩かねに一もと匂ふはなのゆふはへ

右勝　關白家丹後

花かとも驚ろく人やなかるらん雲になれたるをはつせの山

左歌風躰おかしきさまに見侍り。但あらしの山にしかある花の侍にや。右歌下句なと宜く侍れは。右爲レ勝。

六番

左勝　參議公繼

花ゆへは春の山邊にさきたちてまつわれ誘ふ我こゝろかな

右　右近少將成家

たちなるゝ雲居の花を思はすはよしのゝおくに春や暮さん

先我誘ふ我心かなといへる下句なと。殊おかしくみえ侍り。左勝とすへし。

七番

左勝　正三位季能

春風に梢はなれて吉野山はなの雲しく岩のかけ道

右　阿闍梨顯昭

白雲にまかふとならは山さくら春にかきらぬ匂ひともかな

左歌ひとへに散はてたる歌に侍れと。花のくもしくなといへる。姿よろしくみゆ。右歌花をおしめる心は優なるを。末句少不足にや侍らん。左歌さま勝り侍らむ。

八番

左持　從三位季經

さかぬまけ花かとみえし白雲にまたまかひぬる山さくら哉

右　沙彌寂蓮

たつね入山下風のかほりきてはなに成行嶺のしらくも

左白雲に花をまかふることはふりにたることを。めつらしきやうにいひなして侍へし。右はなに成行らん心は宜きを。近くか樣なる事承はりし心地そすれと。心はかはれるなるへし。但左は花と櫻を兩所にをき。右は山と嶺と上下にあり。ともにふかき難にはあらされと。勝負不分明にや。

九番

左持　從三位經家

みよしのゝたかきの山のはな盛ならふ物なき色と社みれ

右　法眼實快

高圓の尾上のさくら咲ぬれは音さへつらきみねの松かせ

たかきの山の花さかり。ならふ物なき心さしありて侍

へし。たかまとはことなる事侍らねと。音さへつらきな
といへる宜侍れは。是も勝負不ニ分明一へし。

十番

左勝　左京大夫顯家

あさからすたつぬる人の心をはよしのゝ奥の花やみるらむ

右　僧祐盛

花みれはうきを忘るゝ春ことに山つくり飯神そ嬉しき

左歌優にこそ侍めれ。右歌上句はこともなく侍るを。下
句余りのふること おもへるやうにや侍らむ。左まさる
と申へくや。

十一番

左持　左近中將兼宗

新千 白雲とあたにもいはし山櫻よそにみるなの立もこそすれ

右　左近少將定家

吉野山幾代へたてゝ櫻はなを白雲の色にみゆらん

左心詞はおかしくみえ侍り。右も姿宜からさるにあら
す。持とすへし。

十二番

左　右京大夫隆保

よそめには霞こむれと山人のなれるものとや花をみるらん

右勝　散位伊綱

遠近のはなもみるへくいも瀬山かすみの衣中なへたてそ

左歌山人は幽隱の賢者も 侍らむなれとも。いはむこと
いかゝ。右歌は婦山なりとも。衣不レ隱覽事餘にやとは
おほえ侍れと。をちこちの花をみむためにいへる。さも
侍りなん。少はまさるへくや。

十三番

左持　右中弁定經

筑波根の此面かのもの花さかり匂ふ雲地になる心かな

右　左衛門權佐朝經

櫻はな梢をさして尋入ぬかへる山路を誰にとはまし

左このもかのもに匂ふ覽花になれ。右かへる山路を誰
に問ましといへる心。ともに宜侍へし。持とすへし。

十四番

左　散位有家

朝またき霞にもるゝ花の色の奥ゆかしきはみよしのゝ山

右勝　前越前守家隆

よしの山花は匂ひにこほれ落て袖にしられぬ嶺の春風

左霞にもるゝなといへるは おかしきを。奥ゆかしとい
ふ事常のことになりにたるにや。右風躰は宜を。余情の
過たるにや。淺心及かたくそ侍と。袖にしられぬなとい
へる。姿なをよろしかるへし。可レ勝や。

十五番

左勝　散位定宗

よしの山朝ゐる雲のしかすかにめなれぬ色や櫻なるらむ

右　皇太后宮亮有經

春毎にあかぬ櫻の花ゆへに吉野の山を住家とそする

左歌心姿は優なるを。中々五文字やいかにそ聞ゆらん。
右歌歌合の歌とはみえなから。又やすらかにや侍らん。
左なをしかすかなからまさり侍らんかし。

十六番

左　權右中弁宗隆

ことはりも過てみゆるは花盛よしのゝやまのあけほのゝ空

右勝　左少弁資實

いにしへのよゝの御幸も跡ふりて花のな高きみよしのゝ山

花の盛のよしの山の曙。けに斷過て侍らむと。おかしく聞え侍を。代々のみゆきもあとふりてといへる心。殊に宜侍るにや。右まさると申へくや。

十七番

左持　治部少輔爲季

谷風のはなふきたむる岩間より流れ出るやゆきの下水

右　前播磨守隆親

匂ひくる山下風にしるものを花になきなをたつるしら雲

左右心姿おかしくは侍を。左はひとへに落花なり。右は山下風に匂へる心は宜を。花になき名なといへるや過言ならん。なすらへて持とすへし。

十八番

左　中務大輔保季

つく〳〵と思ひかへせは花盛さらぬよそ目は嶺のしら雲

右勝　侍従實宣

常盤木のこすゑの空の村雲や青根か嶺の櫻なるらん

左心詞わりなくはみえ侍る。右青根か嶺の櫻は。ことふりたるやうには侍れと。梢の空の村雲といへる。姿まさりてや侍らん。

十九番

左　攝津守長俊

よしの山花の圓居のあとなれや木の下かけの雪のむら消

右勝　僧静縁

高砂のおのへの花に夜をこめて雲にふしたる明ほのゝ空

左歌花の圓居の跡おかしくは思ひやられ侍り。右の歌尾上のはなに夜を籠てといへる。又宜しく侍を。ふしたるの詞や如何にそ聞え侍れと。左散はてにける雪の村消もいかゝとて。明ほのゝ空勝ると申へくや。

二十番

左　片岡禰宜重政

吉野山みねの梢にかゝるには雲さへ花にうつろひにけり

右勝　前大和守光行

よしの山花ゆへ結ふたひの庵をなかき棲となしやはて南

左かゝるにはといへるわたりそ。いかにそ聞ゆれと。雲さへ花に杯いへるは。優にも侍へし。右花を思へる上に。ことなるとかなく侍れは。右の勝とす。

廿一番

左勝　沙彌性照

櫻はなちり初しまてみし程になぬかになりぬしかの山越

右　沙彌見佛

ちらぬまを詠あへぬに程もなく日をさへ暮す山さくら哉

左右ともに。下句は優に聞ゆるを。左はみるほとにとやいふへからむ。しの字にては少ことたかへるにや。但右は日をさへ暮すといへり。左は七日になりぬといへれは。心指まさるへくや。

廿二番

左勝　興福寺權別當法印範玄

よしの山ふもとの櫻おしむまにまたてやおくの花はちる覧

右　右京權大夫隆信

あかなくになを尋ても山櫻こゝろわくへきはなのかけかは

兩方の歌。ともに上に櫻とをき。下に花といへるは。かかる例も侍へし。但歌の心もともにおなしきを。右は詞つかひたゝならす聞ゆれと。あかなくにとをける。末に相叶てしも聞えす。左はまたてやおくのなといへる姿も。優なるへし。勝とすへし。

廿三番

左持　皇太后宮大夫入道釋阿

風かほる春のにしきにまかふ哉花ちるころの志賀の山こえ

右　少納言法印靜賢

三輪の山杉の青葉は時過て花こそ春のしるし成けれ

左歌しかの山越は春の花ふりにたる事なるうへに。まかふらむ心も。たと〳〵舗思ふ玉ふる程に。愚なる身つからの歌に侍けり。大形は歌合には。いやしくも爲レ判者ノものは。歌人の數には入さるは先例なり。又よむことある時も。其番には判を加へすなとそ申ならはしたる。但右歌三輪の山とをかれたるより。此所はもとより杉のみとりも心にそみ。えむなる事に覺え侍れはにや。杉たてる門もをして。右まさるとそ申さまほしく侍れと。判者の例にことよせて。しはし心にくゝやとて。志賀の山越をとれりとも。申さためすなりぬるなるへし。

一番　初郭公

左　民部卿

待けりとなれも心やかよふらし初音きかする郭公かな

右勝　大輔

時鳥うの花かけにたひ立てかたらひ初る聲きこゆ也

兩方の時鳥。初めたる心はともにおかしく侍を。左は古風近俗頗相交たる樣にや侍らむ。右はうのはなかけにたひたちてなと。偏に近來の躰。あしからす聞ゆ。右の勝と申へくや。

二番

左勝　平中納言

しはの戸に初音きかすは時鳥待し太時のなをやおくまし

右　生蓮

めつらしくけふ待えたる子規こそかたらひし聲にそ有ける

左歌柴の戸とをき。待しみ山といへる。兩首にや侍らん。右歌事理ありては聞ゆるを。侍えたるといへる詞不ニ庶幾一にや。下句も似レ無ニ餘情一にや。左まちしのことはゝいかにそ聞ゆれと。歌さままさると申へし。

三番

左持　左衞門督

いつかたへ山時鳥すきぬらんよにしのふ音を我にもらして

右　讃岐

ほとゝきす太山かくれを出やらて雨うちそゝく暮を待けん

左初たる心おかしく聞ゆ。我にもらしてなとや餘たしかに侍らん。右雨打そゝくなといへるは。艶にみえ侍るを。はしめの心やすくなく侍らんなととて。持とすへきや。

四番

左　藤中納言

子規はつ音をこよひ聞つるもなれかなたてと人や思はん

右勝　三河内侍

いつか我こゝろやすまん時鳥きゝ初てこそなをまたれけれ
左歌初ての心有ては聞ゆるを。述懐の心あまりにや侍らむ。右歌か様の心つねのことに侍れと。子規を思へる心に似たり。右まさるへし。

五番

左勝　藤宰相中將

たくふへき物なかりけり時鳥また里なれぬ小夜のはつ聲

右　丹後

おほつかなこれは初音か子規雲路にまよふたそかれの聲
兩方の時鳥。また里なれぬ小夜の初聲。雲路にまよふたそかれのころ。幾程の勝負なく思ふ玉ふる程に。右歌上に初音といひ。末に黄昏の聲とをかれて侍けり。以レ左勝とすへきや。

六番

左勝　右近衞權中將

新千此里にしはしかたらへ郭公ほかの初音はけふならすとも

右　成家朝臣

かみ山を夜半にやきつる子規うつきのいみをさせは鳴也
左歌外の初音はといへる姿心。いとおかしくこそ侍れ。右歌始たる心は。是もあしからす聞えなから。下句なと餘たしかなるやうに侍にや。以レ左可レ爲レ勝。

七番

左　前右京大夫

うつゝとも夢ともわかす時鳥はつ聲なのるふかきよの空

右勝　顯昭

尋つるしるしと思へは郭公初音をきくは心なりけり
深き夜の空の初音。夢現とわかれさらむ事おかしく聞ゆるを。初音なのるらんや。いかになのるにかと。少おほえ侍らん。初音を聞は心なり鳬といへる事。理なへるにや。右の勝と可レ申にや。

八番

左　前宮内卿

春かけてきのふやいてし時鳥いつしかきゝつ明ほのゝそら聲イ

右勝　寂蓮

あくかれし人の心もほとゝきす里なれそむるよ半の一こゑ
左歌初たる心はおかしきを。春かけて昨日や出しといへる。山なとならてはいつくより出とか聞ゆらむ。彼天徳歌合兼盛歌にも。太山出て夜半にやきつるなといへることそ。おかしくも侍れ。右歌あくかれけん人の心も里なれ初らん。優に侍にや。右勝にや侍らん。

九番

左勝　六條三位

明はまつ尋てきかんほとゝきすれ覺の床に告て過なり

右　右大臣法眼

明はまつ人に語らむほとゝきすう月たつ日のしのゝめの聲
兩方の明はまつ。左は尋て聞むといひ。右は人に語らむといへる。いく程の勝負にはあらされと。唯人に語らんよりは。尋ん心さしまさるへくや。

十番

左　顯家朝臣

しる人もさらになしとや時鳥かたらひ初る聲きこゆらむ

右勝　祐盛

夏來ぬと忍ひにつくる郭公春のおしさを慰めよとや
左歌上下の心相叶てしも聞えさるにや。右歌優ならさるにあらす。勝にや侍らむ。

十一番

左勝　兼宗朝臣
めつらしき初音なれとも子規あかぬ名殘は恨みられ鳬

右　定家朝臣
かはらすも待いつるかな時鳥月にほのめく去年のふる聲
左歌合の歌と覺え侍。右かはらすも待出つる哉なといへる姿。宜は侍れと。去年もことしも月にしもほのめきけむ事覺束なくや。以レ左勝とすへし。

十二番

左持　隆保朝臣
世にふれはけふそ又きく時鳥去年かたらひしなれか忍ひ音

右　伊綱
山ふかく尋ぬ□(る歟)人か郭公ふる巣なからの聲はきかしな
左歌上句いかなるへきにかと聞ゆるを。末ことなる事なくや。右歌優には侍るを。鶯の歌にやと覺え侍る。なすらへて持と申へくや。

十三番

左勝　定綱朝臣
郭公また打とけぬ一聲もうの花かけに尋てそきく

右　朝經
ほとゝきす夜半の旅ねの初こゑを都の人は聞すや有らん
兩方の子規。ともに優には聞ゆるを。夜半の旅ねは時鳥たつねけるにや。慥ならす侍を。左は卯花かけに尋てそきくといへる。まさると申へし。

十四番

左　有家朝臣
さてもなを夢かね覺の郭公なれぬ名殘はうつゝともなし

右勝　家隆
時鳥まつよかさなる雲路より初音にかへる去年のふるこゑ
左歌夢かね覺の杯いへる心は宜を。初の五文字やいかてもありぬへく。徒にをける樣にや侍覽。右歌初音にかへるといへる心最おかし。可レ爲レ勝。

十五番

左持　定宗朝臣
待かぬる人なかりせは郭公はつ音聞つといかてしらまし

右　有經
なつ衣たつよりきては時鳥思ひのまゝに初音をそきく
待かぬる人なかりせはといへる。我身の事にや。末の句叶ひてしも不レ聞にや。夏衣たつより迄はといへるも。下句また思はすにや侍らん。持と可レ申なるへし。

十六番

左勝　宗隆朝臣
ほとゝきす語らひ初る一聲の名殘しも社なをまたれけれ

右　資實
おほかたの初音ならめと郭公わか身にあまる心地こそすれ
左歌名殘しもこそといへる。少聞なれたるやうに侍れと姿宜侍へし。右歌世間にをきての初音ならめと。我身に餘るといへる。義實相兼ては侍れと。左は歌さま宜侍にや。勝とすへくや。

十七番

左　爲季

郭公はつ音聞つとかたらすはなにゆへ人に浦山れまし

右勝　隆親

きゝつともさてもねられし時鳥初音に限るとしゝなけれは

兩方ともに優にはみえ侍るを。右歌初音に限るといへるすかた。猶宜しきに似たり。勝とすへし。

十八番

左持　保季

思ひねの夢にはなれき時鳥うつゝはこれそはつ音なり鳬

右　實宣

深山邊の家ゐならすは郭公人より先にいかてきかまし

左歌姿心おかしくは侍るを。夢にはなれきといへるや。そて打かはしなとやうにや。きゝなされ侍らん。右歌ことなくはいひくたして。歌合にはまさるとも申へく侍れと。左尙現はこれそなといへる。ちからいれるやうに聞え侍れは。持と申へくや。

十九番

左勝　長俊

時鳥人の心をさそひてはまた里なれぬしるへにやする

右　靜緣

誰もまた聞すといはゝいとゝしく嬉しかるへきほとゝきす哉

左右の歌。をの／＼心ありてはみえ侍るを。左時鳥人の心を誘ひてしるへにせん事。餘りにや有む。右は人ことに子規やきゝけると尋問て後。いとゝ嬉しかるへしといへる事。たい／＼舗や侍らん。左おほつかなき所は侍れと。心さしまされるにや。

廿番

左　重政

いつしかと聲ならすなり時鳥きのふかへりし春にちかひて

右勝　光行

子規さとなれ初る一こゑにあまたこたふる山ひこもかな

左歌春にちかひてなといへる。さまてならぬ詞を。ちかき世常に聞やうに侍れと。初たる心は有へし。右歌あまたこたふる山ひこもかなといへる心宜。勝と申へきや。

廿一番

左持　性照

今日かふる衣手にこそつゝみつれいつしかきゝつ山子規

右　見佛

おしみつる花の袂の匂ひをも忘れねと鳴ほとゝきすかな

兩方の子規左はかふる衣の袖に聲をつゝみ。右はおしみける花の袂をも鳴音にわすれたる心。ともにおかしからさるにあらす。持とすへし。

廿二番

左勝　興福寺權別當法印

思ひ寐の夢にきゝつる初聲にかはらすなのる山郭公

右　隆信朝臣

なをきなけ尋そきつる子規里なれぬ音のきかまほしさに

左の子規は。夢にも聞うつゝにも聞けり。右はなをきなけとをける文字つかひ。たゝならすはみえなから。末の句の心も〔は歟〕また聞ぬやうにきこゆ。先例もきけるをは。まさると申ことにや。

廿三番

左　皇太后宮大夫入道

なにたてる時の鳥とやいつしかとう月きぬとて初音なく覽

右勝　少納言法印

郭公はつ音きかする嬉しさをつゝみとめつる衣手のもり

右歌衣手の森に初音きける嬉しさをつゝみとめたる心。いとおかしく社侍めれ。左歌はなと〔を歟〕常のこと時鳥とこそよむへけれ。時の鳥殊不レ可ニ庶幾一事也。雖レ爲ニ判者。歌この番にをきては。をして以レ右勝とすへし。

一番　曉月

左持　民部卿

あはれさは昔もかくや有明の月はおしまぬ人はあらしを

右　大輔

なにたてる秋もかひなしあたら夜の月を殘して明るしのゝめ

左歌昔もかくやあり明のといへるわたりは。おかしく侍を。初五もしと末句と。少不ニ相叶一や聞え侍覽。右歌下句は宜聞え侍るを。秋もかひなしといへる。しかるへからす聞ゆ。兩方ともにおほつかなき所侍れは。持と申へくや。

二番

左　平中納言

月おつる有明の空のあはれさを思ひしりけになく鳥の聲

右勝　生蓮

有明の月は雲井のよそなれときぬ／＼になる心地こそすれ

左右の有明。ともに曉の心おかしくは侍を。左思ひしりけにといふ詞。傾けなるにや侍らん。右は月は雲ゐのといひて。衣々になる心地すらむ。心宜きこゆ。右勝と申へし。

三番

左　左衞門督

秋はたゝ鳴の羽音の過るまて月すむ夜半の數をこそかけ

右勝　讃岐

新古 おほかたにあきのね覺の露けくはまた誰袖に有明の月

左歌鳴の羽音のすくる迄數かくらん。心宜侍ㇾ。右歌秋のね覺の露けくはとをきて。又たか袖にといへる。心殊にふかくも侍る哉。猶右可レ爲レ勝。

四番

左勝　藤中納言

有明の月のひかりはみやつこのいそく衣やたとらさるらむ

右　三河内侍

晝とのみ照月影になく鳥はをのか八聲に夜をや知らん

左有明の月のさ〔ひ歟〕かりは宮つこのいそく衣なといへる。少おほつかなく侍程に。是は毛詩といふふみにみ玉へしにやとそ覺え侍る。曉の心に引よせられたる。いとおかしくみえ侍れ。右をのか八聲によをや知らんといへる。木綿付鳥は本よりよなしれるにや。事たかひてや侍らん。左勝とすへくや。

五番

左　藤宰相中將

たく霜に月のひかりやまかふらん尾上の鐘の聲きこゆなり

右勝　丹後

月はなをいらて有明の山のはもさそあらましに恨めしき哉

左歌豐嶺鐘の心にや。かの鐘は曉の霜にこたへてなるへし。是はたゝ月の光をしもにまかへてなると侍れは。曉としも聞えすや侍らん。右歌さそあらましにといへる心。いとおかしく侍るらへに。左歌上下の句の始の字おなし。以レ右勝とすへし。

六番

左勝　右近衞權中將

みても猶あかぬ名殘を思ふまに月にも鳥の音こそつらけれ

右　成家朝臣

時もとき空のけしきもたくひなし秋の半の明かたの月

左月にも鳥のなといへる姿。優にみえ侍り。中の五もしのまにといへる程そ。今少思ふへくやとみえ侍れと。とかには及さるへし。右三五夜の明かた。下句は宜侍を。初の句ときも時といへる。事有けにて。こと成事なかるへし。以レ左爲レ勝。

七番

左持　前右京大夫

かさこしや更ぬる月に霜置て雲のそこより鐘ひゝくなり

右　顯昭

山の端をなにいとひけん月影のいらぬに明る空もありけり

左歌姿詞ひとつの風躰相叶てみえ侍り。右歌山のはいとふ心そ。常のことに侍れと。下句やすらかにいひくたして。姿も優に侍めれは。なすらへて持とすへし。

八番

左　前宮内卿

またれつる其よひのまを月影のあかて明行程になさはや

右勝　寂蓮

今ははや月も名殘を思ふらんひかりことなる明かたのそら

左その宵の間をといひ。ほとになさはやといへる。近俗なからとかなく侍るへし。右は今ははやとをき。光ことなるなといへる心宜しく侍にや。勝と可レ申哉。

九番

左勝　六條三位

あくる夜の名殘やおしき白露に光をやとす山のはの月

右　右大臣法眼

なかむれは心も消ぬ故郷の軒端にかゝる有明の月

左歌なこりやおしきといひ。光をやとすなといへる。心姿おかしく社侍めれ。右歌軒はにかゝるらん有明の月も。心優には侍るを。心もきゆらむや。いかにそ侍らん。左少はまさるへくや。

十番

左　顯家朝臣

終夜あはれ催す月影にたえてや鳥も聲にたつらん

右勝　祐盛

ひるとのみかたふく月を詠れはかねも入相のこゝち社すれ

左たえてや鳥もなといへる姿は。おかしくみゆるを。鳥の音は。曉やみにもみな鳴ことにてや侍らん。右鐘も入相のといへる心よろしきにや侍らん。以レ右爲レ勝。

十一番

左　兼宗朝臣

有明の月のひかりのさやけきはやとす草葉の露や置そふ

右勝　定家朝臣

明方は月もなこりやおしむらんなを光そふ袖のうへかな
兩方の月の歌。やとす草葉のといひ，月も名殘やなといへる。姿心ともに優には侍を。右尙光そふといへる下句宜侍にや。聊まさるへくや侍らん。

十二番

左持　隆保朝臣

夜を送りおしむ心のふかけれは雲井に殘る月を猶見ん

右　伊綱

今こむといふ人もなき秋のよに詠そあかす有明の月
左歌雲井に殘る月影を猶みんといへる心。何となく哀こもりて侍にや。右歌いひし計に長月のといふ歌を思ひて。詠そあかすといへる心。又優にみゆ。依て持とすへし。

十三番

左　定經朝臣

岩ねふみ月に山邊を越行は關路の鳥の聲しきるなり

右勝　朝經

草枕あけぬる鐘のをとす也名殘おしくもすめる月かな
左ひとつの風躰なるへし。函谷關に鷄なくなとの句もおほえて。おかしくも聞ゆるを。右名殘おしくもすめる月哉といへる。何となく艷にみえ侍れは。まさるとや申へからむ。

十四番

左勝　有家朝臣

道しはの露わけぬ袖も打しめり月にも鳥の音こそつらけれ

右　家隆

なかむれは千里の秋も雲消て月にこもれる有明のそら
左歌月にも鳥のといへる。さきの六番左にや侍つるにおなしきを。これは露わけぬ袖もといへり。右歌月にこもれるといへる。心あまりては聞ゆれと。左歌合のうた歌〔衍歟〕といひつへし。勝に侍へし。

十五番

左　定宗朝臣

今更に明ぬる鐘の聲せてもよるとみえつる月のかけかは

右勝　有經

ひるとのみ思ひはつへき月影をあらはしかほに鳴そ羽かく
左右ともに。月を晝にまかへたる心同しきを。左は詞つかひわりなからむとはみえたり。右はうるはしくいひくたせるうへに。鳴そ羽かくといへる末の句優なるにや。すこしはまさると申へくや。

十六番

左持　宗隆朝臣

詠むれは月はのこれる有明の空に心をつくしつるかな

右　資實

山のはにかたふく月や秋のよの明行空の名殘なるらん
左歌月はのこれるといひ。空に心をつくしつるかなといへる。心姿宜侍るを。右歌明行空のなこり成らんといへる。また艷にも侍れは。かた〳〵心うつりて。よき持とすへし。

十七番

左持　爲季

みわたせはこほりしきつの浦さひて浪間に消る有明の月

右　隆親

たゝ今の鳴の羽音にしられ鳬月かけ明るあきのよの空

左心姿宜はみゆるを。有明の月は浪の上にもなをのこさまほしかりける事にや。右始の五字あまりにやあらんときこゆれと。末の句おかしからさるにあらす。ともに勝とは申かたし。又持とすへくや。

十八番

左勝　保季

あくるまで露のやとりやおしからむ淺茅かすゑに殘る月影

右　實宜

鳥の音も月さへわたる心地して尙有明にしく物そなき

左歌露のやとりや惜からんと云て。淺茅か末にのこる月影といへる。妖艶荊臺の夢に入し姿にことならさるにや。右の歌も優にはみえ侍れと。以左勝とすへし。

十九番

左持　長俊

有明の月もてあそふ岩まより光をちらす波のはなかな

右　静緣

軒ちかきまかきの竹の音さえて時しも秋のあり明の空

左右兩首。左は岩間の浪の上に月光をもてあそひ。右は竹葉の風前に秋の空を感せる。共に優にはみえなから。浪の花竹風を思ひて。月の詞すくなくやあらん。持とすへくや。

二十番

左持　重政

照月をなをもなかめむ明わたるかたをはこめよ山のはの雲

右　光行

松の戸に獨なかめしむかしさへ思ひしらるゝあり明の月

左歌かたをはこめよなといへる末句。おかしからさるにあらす。上句の尙も詠むといへるもの字そ。ふるくもよまさるにはあらねと。不可庶幾にや。猶とて有ぬへきを。詞のたらさる時もの字を添つれは。凡氣に聞ゆる也。右歌昔思ひ知るゝといへる。是は文集の陵園妾を思へるなるへし。但松門曉到月徘徊とそいへれは。松の門とそみえたり。されと松の戸といはんも。ふかき難にはあらさるへし。左の猶も右の松戸又持とや可申哉。

廿一番

左　性照

月をみる有明の空の鳥の音は獨ぬるよもうらめしきかな

右勝　見佛

露もろきをのゝ篠原風ふきてやとりもあへぬ有明の月

左歌さま優にはみゆ。獨ぬるよも鳥の音うらめしなといふ心そ。常のことなるへき。右露もろきとをきて。やとりもあへぬ有明の月といへる。宜こそ侍めれ。以右爲勝。

廿二番

左持　權別當法印

難波潟鹽ひになれは芦間より玉もをなかす有明の月

右　隆信朝臣

あかて入し夜な〳〵よりもつらき哉月を殘して明る山のは

左歌玉もをなかすといへる。風躰たかく見所おほく社侍れ。右の歌又下の句に月をのこして明る山の端と云

る。心いとおかし。左右とり〳〵にして勝負不ニ分明一。依て持とすへし。

廿三番

左　　皇太后宮大夫入道

今もなをなくさめかね一（るへ）　の月あり明かたの更科のさと

右　　少納言法印

清見かた有明の月をみぬ人の心をとめよなみのせきもり

両方月歌。さらしなの里清見か關ともにそ名高き所なる上に。左愚老の比丘か歌なるへし。例に仍て不レ加レ判。

一番　深雪

左勝　　民部卿

常盤山ふたはの松とみえつるは雪降つもる木末なり鳬

右　　大輔

朝またきすとの竹かきよをこめて降つむ雪に明そ煩ふ

左常盤山の瑞雪及ニ數尺一。みとりの梢二葉にみえたる心。いとおかしくこそ侍めれ。右歌すとの竹垣夜をこめたる雪の朝扉あけわつらへる。心は故なきにあらされと。常盤山と賤の屋と眺望の懸隔なるにや。以レ左勝とすへし。

二番

左勝　　平中納言

雲わけし谷の木末も降雪のそこにのみなる天のかこ山

右　　生蓮

あとたゆる雪のあしたにかき分て心の行はこしのしら山

左右両首。天のかこ山越のしら根。昇降雖レ不レ異。左雲分しとをき。あまのかこ山といへる。よせ有て聞ゆるを。右は思ひやれる越のしらやまは雪深き所なれは。今みる所の雪はたゝ跡たえたる計也。左谷の梢もそこに成らん。ふかきもまさると申へきや。

三番

左勝　　左衞門督

夜を寒みこしの山風さえ〳〵て積るからへにつもるしら雪

右　　讃岐

しはしこそ人も待しか山里はいたくなとちそ雪のかよひ路

左歌つもるか上にといへる。心姿おかしくきこゆ。右歌姿はよろしく侍を。上下の句の心相かなはぬやうに聞え侍るにや。左可レ勝や侍らん。

四番

左持　　藤中納言

春過は道ふみ分る人やあると降つむ雪を誰忍ふらむ

右　　三河内侍

降つもるしるしは今そ聞ゆなる三輪山ひゝく杉の雪折

左袁司徒か家の雪おもひやられて。おかしく侍へし。右しるしは今そといへる。心はおかしきを。三わ山ひゝく覽雪折や餘りなるらん。但雪はふかゝるへし。持なとにて侍れかし。

五番

左持　　藤宰相中將

たつぬれは降つむ雪の下にこそ越のさと人聲あはすなれ

右　　丹後

さり共となか〳〵人そまたれける道ふり埋む雪の明ほの

左右両首の下にこしの里人を尋ね。曙の空に人をまて

る心。とり〳〵におかしくみえ侍り。猶又持とすへし。

六番　左　　右近衛權中將

子日せし春の野邊ともみゆる哉雪ふり埋む松の木末は

右勝　　成家朝臣

しをりせし柴の梢を踏分て山路の雪のほとを知かな

左歌心姿優にはみえ侍り。右歌しはの梢に山路の雪のふかさをしれる心。宜く侍るにや。少はまさるともや可レ申侍らむ。

七番　左勝　　前右京大夫

降雪の軒かくほとになりぬれは尾上につゝく窓の通路

右　　顯昭

雪ふれはあしのうら葉に浪越て渚もわかぬなはのつふらえ

左雪深う。心はおかしく侍るを。山の奥とも越の里ともなくては。是程の雪あまりにやあらむ。右芦のうらはに波こえてなとは優に侍るを。末の句こそ。少おとろかれ侍れ。かゝる姿に成ぬれは。初より一躰なるこそ。ゆする事に侍れ。左のつゝくの詞そ。いかにそ聞ゆれと。猶以レ左爲レ勝。

八番　左持　　前宮内卿

尋常の雪にそ人もまたれける庭に跡なき深山への里

右　　寂蓮

我もまち人をも問む道そなき雪のあしたの小野の山里

兩方の雪。姿詞はともに優に侍を。左よのつねの雪にそ人もといへる。いかほとの雪にかと聞ゆるを。庭に跡なきは常の事にや。右又人をもとはむ道そなきといへるも。雪の朝の小野の山里。いくほとの事にあらすや。山さとほともおなし程にやとて。持にてや侍らん。

九番　左　　六條三位

降ゆきのちへに百重に積りゐて白妙なれやみてくらのしま

右勝　　右大臣法眼

ふる雪にましはるられもおれふして道分かぬる冬の山さと

左上句はことありけにて。みてくらのしま。ことに事なくや侍らん。右の山里道分かぬると云る。宜や侍らん。勝と可レ申哉。

十番　左勝　　顯家朝臣

ましはもてはかなくさかふ賤のやの隔もみえす埋むしら雪

右　　祐盛

氷室山谷ふかくうつむ白ゆきの夏まて消ぬたくひなりせは

左歌はかなくさかふと云るわたりよろしく聞えけり。右歌ひむろ山。殊なる事なきにや。以レ左勝とすへし。

十一番　左持　　雅宗朝臣

ふる雪にとたえもみえす成ぬれは渡しはてたる久米の岩橋

右　　定家朝臣

しのひすむ心もたえす山かけや軒端にかゝる松の雪おれ

左右の雪。ともに深く侍へし。かつらき山の雪岩はしわたしはてたる。心おかしくみえ侍るに。右の山陰。まつ

の雪おれに忍すむらん心も。ふかきすしも侍らしとて。持と可レ申や。

十二番

左勝　隆保朝臣

年へたる松のみとりも埋れて谷の心に似たる雪かな

右　伊綱

ふりつもる雪に梢の殘れるや下打過し大荒木の森

左歌谷の心に似たる雪哉といへる。姿詞優に侍へし。右歌大荒木のもりは。ひくしめもひさしきことにたとへ。下草もからすなとこそいひならはしたれ。駒うち過るみちとしけん事やいかゝ。以レ左勝とすへし。

十三番

左勝　定經朝臣

かよふ人あらはみせまし年は暮雪はさかりのみよしのゝ山

右　朝經

行さきの枝をりはいかにこし方の跡さへみえす降る白雪

兩方の歌。姿詞ともにおかしく社侍めれ。左は年はくれ雪はさかりといひ。右は柴折はいかにこしかたのなといへる。文字つかひ歌には侍るを。跡さへみえすといへるよりは。三吉野の山ふかくや侍らむ。左尙少は可レ勝や。

十四番

左　有家朝臣

日數ふる雪踏分てとはゝ社人のなさけもふかしとはみめ

右勝　家隆

埋れて梢にかはる深山路もまた跡たえぬ雪くれの空

左歌雪ふみわけてとはゝこそなといへる姿は優に侍へし。右歌梢にかはる深山路もといひて。また跡たえぬといへる心。尙宜聞ゆ。右まさるにや侍らん。

十五番

左勝　定宗朝臣

ふり積る雪に籬は山なれとくる人たえてかひなかり鳧

右　有經

降雪に小野の山路は埋れて通ひし人も跡まかふなり

左雪にまかきはなといへる姿優なるへし。右殊成とかなくはみゆれと。また常のことにや。左宜に似たり。勝と申へし。

十六番

左　宗隆朝臣

から人のむかしの門の淋しさも雪にはかくや跡たえにけん

右勝　斉實

妻木とる岩のかけ路も跡たえて降つむ雪や冬の山守

左歌から人のむかしの門といへる。是も袁門陶閑を思ひやれる心。おかしくは侍へし。右うた降つむ雪や冬の山守といへる。やまとことはきゝちかくして。今少は右勝と申へきや。

十七番

左勝　爲季

雪ふれはすその原の跡たえてからぬ眞柴もみえすなり行

右　隆親

をくれくる人は跡をや尋ぬ覽もとこし駒のゆきのかよひ路

左からぬ眞柴もといへる。おかしく聞ゆ。右も姿詞は優

なるへし。もとこし駒といふ事は。齊桓公北孤行を綱せし時。雪天に失二前路一。管仲放二老馬一。其跡にしたかひし也。是よりいふ事也。常の雪の通ひ路なとにをくるゝ人尋ぬなと。いふへくやあらさらん。左無事にみゆる。勝とすへきや。

十八番

左　　保季

なくさめし枯野も雪に埋もれて吹くる風のをとつれもなし

右勝　　實宣

吳竹のよをへて積る雪なれは今朝はおれふす音もきこえす

兩方の雪。左は枯野に寄。右はおれふす竹につけて。音せぬ事をいへる心はおなしきを。徒に吹來るかせをいはむよりは。雪のつもれる事をいへり。以レ右可レ爲レ勝。

十九番

左　　長俊

旅人は煙を里のしるへにて雪の下なる宿をかるかな

右勝　　靜緣

信樂のおくいかならんと山たに道まよふまてふれるしら雪

左歌煙をさとの指南にてといへる姿は優なるを。上に里といひ下に宿といへる。さるへしとそさき〳〵も申侍めり。右歌しからきの奥いかならんといへる。よろしく聞ゆ。以レ右爲レ勝。

二十番

左勝　　重政

紅葉せし梢に袖をかくる迄たつたの山は雪ふりに鳬

右　　光行

宮木引民のかよひち絕にけりいつみの杣の雪の明ほの

左立田の山雪の梢に紅葉をおもひ出され〔たる〕。おかしからさるにあらす。右いつみの杣の雪民の通路たゆらむ事は宜を。雪の明ほのとしもいへることやいかゝ。明ほのといふ事を。今のよの人の常によむ事になりにたるは。ことに優のこと侍にや。春の明ほのなとこそ。ことにおかしき物にはいひならはしたれ。雪はあしたこそおかしくはみゆるものなれ。近く俊惠法師と申もの。しらつき山の雪の曙とよめりし後。よろしかりけるにや。人のかく申なりにたるなり。其時も老僧ゆるさす申て侍りき。よりて以レ左勝とすへし。

廿一番

左　　性照

夜とともにたえぬ煙もみえぬ迄雪ふりつもるふしのなる澤

右勝　　見佛

まきのやのひまよりつもる白雪に梢をうつむ程そしらるゝ

左歌富士の山は。さ月の晦日にも雪いとしろしとこそ。伊勢物語にも申たれは。まして冬の雪はさ社侍らめ。但ふしのなる澤とてはてたるこそ。いひさしたるやうにみえ侍れ。右歌まきのやのひまもる雪に。梢をうつむ程をしるらむ心。宜や侍らん。以レ右爲レ勝。

廿二番

左　　權別當法印

日をへつゝ梢は雪にうつもれて春より先にさく花もなし

右勝　　隆信朝臣

けさみれは梢も庭もひとつにて雪のそこなるみよしのゝ里

左右の梢の雪。日をへつゝといひ。今朝みれはといへる。心はおなしけれと。雪のそこなるみよしのゝさと。宜や聞ゆらん。右の勝と可ㇾ申や。

廿三番
左　皇太后宮大夫入道
ほのみゆる梢はそれか初瀬山雪のあしたのふたもとの杉
右　少納言法印
降雪に宿はさなからうつもれて名はあらはれぬ白川のさと
白河のさとの雪。名にあらはれむ心おかしくこそ侍るめれ。但依ㇾ例而不ㇾ加ㇾ判。

一番　久戀
左持　民部卿
いかなれは人の心はかはらぬにわか黒かみのしろくなる覽
右　大輔
今そしる戀のやまひに年ふるは物思へとていけるなりけり
左歌心おかしく聞え侍り。右歌戀のわつらひにとしふるよし。いかにそ聞ゆれと。物思へとてといへる。心ふかゝるへし。持にてや侍らん。

二番
左　平中納言
御狩する裾野の松にゐる鷹の千とせや戀の根なるらん
右勝　生蓮
なにせんに思ひそめけん逢事を松にとしふる鶴の毛衣
みかりするすその〻松。姿ことはいとおかしく侍るを。ゐる鷹のとをかれたるや。松の千年にへたゝりて聞え侍らん。松にとしふるといへるは。文字つゝき宜や侍らん。

三番
左持　左衛門督
忍ひつゝ戀わたるまに朽にけりなからの橋を又や作らむ
右　讃岐
新古跡たえて淺茅か末に成にけり頼めし宿の庭のしら露
左歌長柄の橋をまたや作らむといへる姿心。ことに宜も侍る哉と思ふ給ふるほとに。右歌又淺茅か末に成にけりとをき。頼めしやとの庭のしら露といへる。心詞あはれに。苔の袖にさへ露かゝる心地し侍れは。いつれをまさるとも申分かたくなん。

四番
左勝　藤中納言
戀路には長柄の橋のあらは社年へぬるみのたくひにもせめ
右　三河内侍
年をへてかゝる戀にもたへけれははかなからぬは命なり鳬
此はかなからぬはといへる下句は。おかしくも侍れと。左の長柄の橋のあらはこそといへる姿。猶宜みえ侍れは。以ㇾ左勝とす。

五番
左勝　藤宰相中將
歎きつゝさもあらぬとしを重ねきて片敷袖そ空しかりける
右　丹後
つれもなき人の心も年月のかはるに付てかはらましかは
左歌上句は何さなく心詞に籠りて。下句にかたしく袖そむなしかりけるといへる。姿心ふかくも侍るかな。右

歌かはるに付てかばらましかはといへる。又おかしく
はみえ侍れと。左なを思ひましたるにや侍らむ。勝と可レ申や。

六番

左勝　右近衛權中將

よしさらは恨もはてし岩におふる松のためしも有と社きけ

右　成家朝臣

よそなから幾年すきぬ逢事を松も老ぬる高砂のきし

兩首の久しき心。ともに松によせたるにとりて。高砂の岸よそに過たるも。さもある事には侍れと。左歌松のためしもありとこそきけといへる姿心。ことにおかしくみゆ。可レ勝とや。

七番

左持　前右京大夫

逢てのみ過ぬる程の久しさに思ひくらへてまつ暮もかな

右　顯昭

年をへてつらきにこりぬねき事のしるしはいつか三輪の杉原

左歌させる其餘情とはなけれとも。心詞とかなくいひくたして。歌合の歌とみえたり。右もいとおかしきを。ねきことのと置る中の五字。不レ可二庶幾一にや。なすらへて持とすへくや。

八番

左勝　前宮内卿

侘ぬれは過る月日そなつかしきつらきもふかき契と思へは

右　寂蓮

恨侘なを年ふとも哀わかいつ迄とたに思はましかは

左つらきもふかきなといへる。戀の心ふかく侍へし。右あはれ我とをける。末に相叶てしもきこえさるにや。以レ左勝とすへし。

九番

左　六條三位

涙ゆへ朽ぬる袖をかそふれはかさなる年のほとそしらるゝ

右勝　右大臣法眼

つれもなき君に心をつくしきていつ迄か世に生の松はら

左歌朽ぬる袖をかそへて。かさなるとしをしれる心。あはれなきにあらす。右歌心をつくしいきの松原なといふは。常の事なるやうに聞ゆれと。いつ迄かよになといへる。姿まさると可レ申や。

十番

左持　顯家朝臣

あふ事を命にかへは四十あまり我なからへてあらむ物かは

右　祐盛

涙ゆへくつる袂をぬきかふる數も千度にあまりぬるかな

左命にかへは四十餘なといへる。心詞あまりにたしかにや侍らん。右泪ゆへぬきかふる袂千度にすきにけん。戀の心ことの外にはおほえ侍れと。朽るといへる詞も。いかにそ聞え。袖の數もあまりにやあらんとて。持とすへし。

十一番

左勝　兼宗朝臣

戀初て久しき中といはれなはそれも契のなかきにやあらぬ

右　定家朝臣

すきにけりたのめてうへし姫小松梢のかせになけきそふ迄
左歌これも契のなといへる。心ふかく社侍れ。右歌木す
ゑの風になけきそふ迄といへる。姿はよろしきににた
れとも。〔左の字脱歟〕尙心ふかくきこゆ。まさると可
レ申哉。

十二番
左勝　隆保朝臣
あはてのみ年をふるのゝ草はなる露とも消ぬ身をそ恨る
右　伊綱
としへたる中とそ今はいはれまし空たのめせぬ心なりせは
左のふるのゝ草の露優に侍るへし。右下の句なとかれ
これにや聞ゆらん。以レ左勝とす。

十三番
左勝　定經朝臣
我戀はいはてふるやの忍草としに添ても茂りぬるかな
右　朝經
なけきつゝあはても年の積りゐて果は命にまかせつる哉
左歌忍草しける比聞なれたることにそ侍れと。姿詞い
と宜見え侍り。右歌下句の詞つかひ。なをおかしくはみ
ゆるを。つもりゐてとをけるほとそ。今少思ふへくやと
聞ゆ。左勝と申へし。

十四番
左勝　有家朝臣
かくしつゝいく百夜にか成ぬ覽數かき侘ぬしちのはしかき
右　家隆
獨ねのなみたかたしき床ふりて幾度袖をくたしかふらん
左數かき侘ぬといへる。心姿宜侍るへし。右泪かたしく
なとはおかしく侍を。袖くたしかふる心。さきにも聞え
侍りつるやうに覺え侍れはにや。左のしちのはしかき。
まさるにや侍らん。

十五番
左勝　定宗朝臣
いつとなく同しときはのなけきにてあふ事松も久しかり鳬
右　有經
つれなくてやゝ年月の積りなは戀やうきみの終りなるへき
左歌おなしときはのといひて。あふ事まつといへる。心
宜こそ侍めれ。右歌戀やうきみのといへる。優に侍る
を。漸のことはや。久しき心もすくなき樣に侍らむ。以
レ左可レ爲レ勝。

十六番
左勝　宗隆朝臣
年ふれと戀はをはりもなかり鳬思ひ初しは初め成しを
右　資實
わか戀はふしの高ねのたくひ哉いつれの世よりもえ初め劔
左戀はをはりもなかりけりといひはしめけん。思ひそ
めしはなといへる。いとおかしく聞ゆ。右いつれのよゝ
りなといへる。ふかくもみえ侍るを。中の五字や。今少
おもふへくと聞え侍るにや。左勝と可レ申哉。

十七番
左持　爲季
つれなさもさのみやはとて待程に年も數もつもりぬる哉
右　隆親

思へたゝ君も岩木の心かはいくとせ過しつらさとかしる
雨方の戀。左はとしもなけきもといひ。右はいくとせすきしつらさとかしるといへる。ともにいとおかしく侍れは。仍持とすへし。

十八番

左勝　保季

すゑの松浪のしたにも年はへぬぬるとも朽ぬ袂なりせは

右　實宣

つれなさを思ひも絶ていく年か我戀草のしけり增らん

左歌末の松山の浪によせて。ぬるとも朽ぬなといへる。心姿おかしくみゆ。右歌戀の心は久しなから。戀草のよせなく侍らん。尙末の松山まさると可ㇾ申哉。

十九番

左勝　長俊

戀しさに殘す心はなけれともあはて年ふるなたやとゝめん

右　靜緣

うちなけき暮ぬる年をかそへても頓てつらさの程をしる哉

左右の戀。あはて年ふるといひ。頓てつらさのといへる。心はいくほとの勝負なきを。右うちなけきとをける五字ことなる事なくや。左少は可ㇾ勝や。

二十番

左　重政

歎きつゝ年へぬるみをしたひきて戀さへ鳩の杖はつきけり

右勝　光行

逢までとおしむにのふる齡哉なみたの末や菊のした水

左歌戀の鳩の杖つける事。思ひかけぬ風情にや あらむ。右歌泪のすゑや菊のした水といへる。いと宜しくも侍哉。以ㇾ右勝とすへし。

廿一番

左勝　性照

つれなしときくの長濱なからへて心つくしの物をこそ思へ

右　見佛

つれなさや思ひなをると待程に心のほかの老はきにけり

左右の久しき戀心は。ともに優には侍を。左きくの長濱なからへてといへる。又おかしく聞ゆ。この番も菊の歌まさるへし。

廿二番

左　權別當法印

しほたれて磯に年ふる海人よりもあはぬ恨そ久しかりける

右勝　隆信朝臣

二葉よりそめし心を命にて松は色こそとしふりにけれ

左磯にとしふるあまよりもといへる。あはぬうらみのひさしき心おかしくも侍れと。右松は色こそといへる。よろしかるへし。以ㇾ右爲ㇾ勝。

廿三番

左　皇太后宮大夫入道

ふりに鳬としまのあまの濱ひさし浪間に立もよらまし物を

右　少納言法印

むかしより心つくしに年はへぬ今はしらせよあふのまつ原

左歌はまひさしといへり。彼浪間よりみゆるこしまのはまひさき久しくなりぬ君にあはすしてといふ歌は。萬葉集にも宜き本と申にも。多は久木とそ書て侍を。鄙

曲なとにうたふ歌に。はまひさしとうたふにつきて。歌繪なとにあまの家なとを書て久しとかく也。されはひさきそ正說には有へき。但はまひさきは。久しくなりて朽もうせにけん。あまのしほやなとのひさしは。今もこしまにも有ものなり。一說につきてことさらよめるなるへし。又萬葉集にも楸とはかゝす。久木とかける也。少は覺束なきことなるへし。右歌心つくしに年はへぬといひて。あふのまつ原とよまれたり。いと宜しくこそ侍めれ。左歌は古事取すくしてもみえ侍れと。是も判者に事よせて不レ加レ判。夫是非定は。作者の群義にあるへし。

敷しまやまと歌の道にをきて。津の國のよしあしをさたむる事は。あまつ乙女のなつらむ石よりもかたく。わたの原浪のそこよりもはかりかたし。いはんや愚老をや。たゝこの道にたつさひて。あら玉のとしつもれるといふ計に有時は千はや振神のみやしろに事をよせ。あし曳の名にかこちて。此事をさためさする事。はまの眞砂の數あまたに罷成しかは。未レ得爲レ得未レ證爲レ證のつみも。此世後の世よしなさに。から國のことのをのなかくたちつることゝなりて。まかり過にしを。今の代には三笠の山峯の松風しつかにして。やまとみことの道ふかく尋給ふにより。もゝちの歌をさへつかひむすひて。をとりまさりしるしさため奉れなとおほせ玉ふにより。老の浪立かへり。入えのもくつをもかすまへ給ふかしここに。立てしこともさらにかくして。をろか成ことのはをのみ。申ちらすことに成にけり。折ふしもいま。中のもの申すたみのつかさのかみ。此道を翫ひ。ふるき跡をもおこして。いつゝの題をわかち。あまたの人をすゝめて。あまたつかひの歌の莚をのへられたる事あるを。もとよりこゑをしり。袖をむすふ心さしのうへに。いさゝかむらさきのいろのゆへもありとにや。武藏野の草の中にもましはるへきよしあるを。いなはの山のいなひかたさに。花ならぬこと葉をましへ。おほえぬ事をしりかほにしるし申なるへし。大形は歌は必しも。繪の處のものゝ色々のにの數をつくし。つくもつかさのたくみのさま〳〵きのみちをえりすへたる樣にのみ。よむにあらさる事なり。たゝよみもあけ。うちもなかめたるに。艶にもおかしくも聞ゆるすかたのあるなるへし。たとへは在中將業平朝臣の月やあらぬといひ。紀氏の貫之雫に濁る山の井のなといへるやうに。よむへきなるへし。老比丘今は九十にちかつきて。草はの露と消むこと。あすを待へきにもあらされは。且は此たひ計もやとて。あまのもくつのことおほく。ふすゐの床のみたれたる事をしるしをくなるへし。歌のよろしきを宜とするすも。人に心をよするにはあらす。又とかむへきをとかとあらはすも。氣をふく心にはあらさるなり。その事をはかくいふにこそ。かゝる事をはしかいふなりけりと。をの〳〵のちを心へ。とまらぬあとをみても。道をしらむ人は思ひわかむため。よしともしるし。とかともあらはすなり。すへて歌の莚には。かけまくもかしこき住吉の御神もてらしのそみ玉ひ。道を守る人丸の卿のなきたまも。かよひかけるわさなれは。なをき道を思ひ。よこさまなる事をはしるささる物なり。先々もかやうの事の心は。申いてまほしなから。たかまの山のたかきおほせのときは。はゝかりのせきのはゝかりをなし。たつのくちふむとらのおのをそれにより。思ひてむなしくまかりすくるを。いまこのことのついてに。おもふ所をもあらはしつるならし。

もしほ草かきをく跡のきえさらは
あはれはかけよ和歌のうらなみ

群書類從卷第百九十

和歌部四十五 歌合十一

御室撰歌合 正治二年二月五日當座

題

春　夏　秋　冬　雜

作者

御作守覺法親王　　入道左大臣藤原朝臣
權中納言藤原隆房　　中宮權大夫藤原公繼
右イ左近衞權中將藤原兼宗　　入道皇太后宮大夫俊成
前宮內卿藤原季經　　權律師賢淸
右京權大夫藤原隆信　　前中務權大輔藤原有家
左近衞權少將藤原定家　　上總介藤原家隆
阿闍梨顯昭　　阿闍梨禪性
阿闍梨覺延　　阿闍梨勝蓮
沙彌生蓮　　沙彌寂蓮

判者

入道皇太后宮大夫俊成 後日付進判詞

一番　春

左持　　御作

谷かけははるめきやらすかせさえて消れは氷る雪の下水

右　　入道左大臣

墨染の袖にはふれし梅花あらぬにほひにかよひもそする

すみ染の袖に〔は〕ふれしと侍より。まことに世をいとへる人のつかうまつり出られたりと。よそまでも老のなさけ催れ侍れとも。消れは氷る雪の下水もおもしろく侍て。一番左最以可ㇾ爲ㇾ勝者歟。

二番

左　　權中納言隆房卿

よし野山みねをはなれぬ白雲のきゆるや花のねにかへる覽

右勝　　中宮權大夫公繼卿

吉野山かよはぬ程のみちならは雲とや花をおもひはてまし

左右ともに吉野山の風情。花の根にかへる。雲にまかへる。いつれも是非辨へかたくして。勝負(劣イ)みえわかす侍る。持にこそと申侍しを。右方歌人に雲とや花をおもひはてまし。今少立まさり〔て〕侍るなと。方引申されて勝侍ぬ。

三番

左勝　　右イ 左近衞權中將兼宗卿

おしきかな猶みる人や稀ならん吉野のおくの花のさかりを

右　　入道皇太后宮大夫俊成

むめかかも身にしむころは昔にて人こそとはね春のよの月

此番。右歌者愚老か詠にて侍けり。月やあらぬ春やむかしの春ならぬ。在中將のふる事を。わつかにひろひあつめたる計にて。我力入たるふしもなく侍れは。吉野の奥の花さかりやさしと申侍て。以レ左爲レ勝。

四番

左勝　　前宮内卿季經

にほひくる梅のあたりに吹風はつらき物からなつかしき哉

右　　權律師賢淸

春もなを霞のそこに成にけり冬籠せしみやまへの里

冬こもりせし深山へのさとは。長高く聞ゆるよし申侍りしを。梅のにほひふくかせはつらきものからなつかしき詞も心も花實をかねて。幽玄にこそ侍らめと仰下されしかは。勝の字を付侍りき。

五番

左　　右京權大夫藤原隆信

朝戸あけて春たつ空をなかむれは思ひもあへぬ鶯の聲

右勝　　前中務權大輔藤原有家

かすみ行おほろ月夜の有明にほのかにかほる梅のした風

あさ戸明ておもひもあへぬ鶯の聲を聞侍らんは。めつらしからぬ風情。あまり耳なれて侍るうへ。霞ゆくとをきて。おほろ月夜の有明にといひて。ほのかにかほるといへるまて。おかしくおもしろく侍れは。尤勝にて侍るへきよし申侍しかは。中宮權大夫藤原朝臣申されていはく。上句にておほろと置て。下句にほのかにとあるは。例の躰の句にて侍るとも。同心の病にてや侍らましと申されしかは。人々もさほとにや侍らんと申されしに。愚老か申侍しは。朧とほのかと。更に同情の病に侍らしを。天德の歌合にも。中務か歌におほろよの月□を歸鴈名殘おしさにほのかにも見む。とよみてありしそれも持にこそなされ侍しか。同病の沙汰なくやと申侍しかは。まことにいにしへもさたなく侍るうへは。今更さたありかたしとて。勝になされ侍りき。

六番

左　　隆信朝臣

よしさらはさても心をなくさめよ花ちる峯にのこる白雲

右勝　　大輔有家

春のうちはそこともかきらぬなかめ迄花にせかるゝ白川の里

右花にせかるゝ白河の里は。勝侍へしなと申侍て。勝字を付侍き。

七番

左持　　左近衞少將定家

うくひすはなけともいまた古郷の雪の下草春をやはしる

右　　上總介家隆

しけき野と詠し秋のあともなしかすめる空の荻の燒原

故郷の雪の下草もうらめつらしく。しけき野のかすめる空の荻の燒原も。いとやさしく侍れは。持にこそと各申され侍りき。

八番

左持　　定家朝臣

ゆく春よわかるゝ方も白雲のいつれの空をそれとたに見ん

右　　家隆朝臣

花ちりてはては物うき鶯も恨かねたる春のあけほの

此番。勝劣いかゝ。なか〳〵よそよりさたの侍しと申侍しかは。左右の暮春。何も雌雄難ㇾ決して。勝負見えすと申侍しかは。爲ㇾ持。

九番

左勝　　阿闍梨顕昭

春風のなさけならては櫻花さかぬ宿までにほはましやは

右　　阿闍梨禪性

いつしかと花まつ比のなかめにはさそあらましの嶺の白雲

さそあらましの嶺の白雲は。立まさりたる様にこそと申侍しかは。有家申云。此句は去年の仙洞の御百首につかうまつれりし句なりと申侍しかは。けに〳〵さる歌有と仰出されしうへは。左勝に定申侍ぬ。

十番

左勝　　覺延阿闍梨

うき事もあらしとおもふ三吉野のおくにも花の散をみる哉

右　　勝蓮阿闍梨

花の枝を（をみるイ）おり〳〵毎の心こそうきをわするゝ世とは成ぬれ

右あまりにおさなかましくて。竹馬に策の心地すれは。劣と申ぬ。左はことに宜侍り。

十一番

左持　　生蓮

なくさめし遠のなかめも絶にけり霞にこもるみ山へのさと

右　　寂蓮

春風やさそひはてつと思ふらん花にもとまる梅のにほひを

かすみにこもる深山邊も。心うつりておかしく。花にもとまるむめの匂もみ所あり。やさしき持にこそ侍るめれ。

十二番

左持　　生蓮

身はすてつ今は此世に花ならてなにゝ心をとゝめおくへき

右　　寂蓮

かへるかり雲の浪路にかす消て友をはなるゝあまの釣舟

左は身をすてつより。述懷の心やさしく。右は春のけしき。かへるかりにもよほされて優にや。爲ㇾ持。

十三番　夏

左持　　御作

石はしる音さへ涼し水無瀬河なみにや夏の立はなるらん

右　　入道左大臣

是はかり世をそむきぬるしるしとてけふ立かえぬ墨染の袖

右世をいとへるとり所の意趣も。まことに此色にあらはれて侍けりとおかしくて。勝と申〔さ〕むとし侍るを。作者云。左もおかし。さらは持を申うけられ侍りき。

十四番

左持　　隆房卿

ゆふされは秋の姿をうつしもて月をそむすふ（ねイ）松かけの水

右　　公繼卿

出にけり月や都のしるへにて夜半にもきつる（そイ）山ほとゝきす

左右。たくみにおかしくて持とす。

十五番

左　兼宗卿

夏衣ひとへにかふる袂にも花のにほひをとゝめましかは

右勝　俊成卿

にほひくる花たちはなの袖の香に涙露けきうたゝねの夢

左同類ありとて。負になすへしと。各定申侍き。

十六番

左勝　兼宗卿

むすふ手に夏の日数そわすれゆく秋やすむらん山の井の水

右　俊成卿

このまゝに後の世までも時鳥かたらひなるゝ友となりてよ

右はよしなき人のみるへきものならねは爲レ負。

十七番

左　季経卿

夏深きをかやか原の夕すゝみ秋にさきたつかせの音かな

右勝　賢清

たちのほるたゝひと村のうき雲のよもにみちくる夕立の空

右下句こそいま少しおもひ入ぬさまに侍れとも。いさゝかなたらかなるやうなり。左は秋にさきたつかせ。宮内卿女房かふるくつからまつれる下句とて。爲レ負。

十八番

左持　隆信朝臣

花の色にそめし衣よまてしはしかすみの袖は立かはるとも

右　有家朝臣

山のはも霞の衣立かへて今朝はひとへに嶺のしら雲

左右の霞衣。いつれもとり〳〵に云しりて侍は。愚意迷ニ雌雄之篇品。短慮忘ニ優劣之眞様。暫可レ爲レ持歟。

十九番

左　定家朝臣

ゆふ立の杉の下かせうちそよき夏をはよそに三輪の山本

右勝　家隆朝臣

夏衣はるにおくれてさく花のかをたに匂へおなしかたみに

夏ころも春におくれてと。つゝけつかうまつれるほと珍。かをたににほへ同し形見さたてゝまて。やさしく侍れは。左とかくのさたに及はす。右以爲レ勝。

廿番

左持　顕昭

さみたれにもとの心やかはるらん野中の清水くむ人もなし

右　禅性

花の色にそめぬ袂は夏くれと衣かへうきうらみやはする

左珍しからす。右は宜やうなれとも。さきに入道左大臣のつかうまつり出られたる風情なりとて爲レ持。

廿一番

左　覚延

古郷のあとをたつねて分くれはあはれも深くしける夏草

右勝　勝蓮

郭公をのかなく音をいかなれは人のめつてふ物となすらん

右俗に近き様には侍れとも。云しれる風情なりとて。爲レ勝。

廿二番

左　生蓮

けふといへはよと野に生るあやめ草枕にたれも引むすふ覧

右勝　寂蓮

山かけに岩もる水のいつはりを秋きにけりとたのみける哉

左珍しき樣に侍れとも。右岩もる水のいつはりを秋きにけりとなとつゝけ侍ふし。やさしくて殊與有之旨。各被レ申侍き。仍被レ免ニ勝字一畢。

廿三番　秋

左勝　御作

七夕に心をかしてあちきなくあかぬ別のよそにくるしき

右　入道左大臣

鹿の音にむかしの袖はぬれしかと老のね覺の程はなかりき

老のねさめの鹿の音にもよほされ侍らんやう。やさしきふしにて。いとありかたくは侍れとも。左たなはたに心をかしてあかぬ別のよそにくるしき風情。むかしより多く七夕歌見侍れとも。かゝる風情いつこに殘れりけると。やさしくみえ侍は。何かの子細に及侍らす。左を勝と申せり。

廿四番

左勝　御作

あさゆけはくすの葉分に袖ぬれて露所せき深草の里

右　俊成卿

植置し萩のさかりをみつる哉おもふにかなふ事もありけり

左いとやさしく侍るめり。右は花の傍に深山木のさまなれは。如何たちならひ侍らん。

廿五番

左勝　御作

野邊ならはしからむ鹿にかこたまし我さ散ぬる庭の秋萩

右　釋阿

秋の野よいかに心を分よさて千種の花に鹿の鳴らむ

左はいつこの姿よりもやさしく。染ニ風情於一入再入紅一。瑩ニ露詞於千顆萬顆之珠一。姿を見れは曉の月雲のよそにほのめき。意をとへは秋の鴈霧の中にまよひなし。かゝるめてたき御番に。愚老さのみ推參つからまつりて。重て面目なきをおそれ侍りぬ。

廿六番

左持　御作

身にかへていさゝは秋を惜みみんさらてももろき露の命を

右　有家

さとはあれて人は出にし深草の野原のくれにうつら鳴也

是も左。たくひなくめてたきさまに侍て。耳をやしなふ藥となれるを。右もいとやさしく。里はあれてといへるより。野原のくれにうつらなく聲まても。きゝたかくおかしく。右の勝にこそと被ニ仰出一侍しかとも。作者頻にさしもの事に侍らすと侍しかは。爲レ持。

廿七番

左持　隆房卿

きり／＼す恨むる聲そよはりぬる過行秋のこゝろつよさに

右　公繼卿

なひけともやかて野風の過ぬれは獨露けき女郎花かな

左右ともに以珍重之由。各褒美申也。仍爲レ持。

廿八番

左勝　兼宗卿

雲間よりほのかにみゆる夕月夜いつるを人にしられさり鬼

右　釋阿

月をおもふふかき心を照し見よをはらん雲も我まとはする

左こそやさしく侍。右例のあさましきふしなれは。かたひき申へきふしなかり。

廿九番

左持　季經卿

荻の葉に風のおとせぬゆふされは秋ともなれは淋しかり鳧

右　賢清

としにありて稀にたのむる一夜たに猶更にけり星あひの空

荻の夕風も。珍しからすなからやさしく。としに一夜の七夕も。ふるきふしなからとかなし。仍持と申侍りぬ。

卅番

左　隆信朝臣

荻のをとに鹿の音そへて秋萩のかせより外にとふ人もなし

右勝　有家朝臣

荻の葉のそよきのことくなけれとも露こそおつれ秋の初風

左右の荻。おなしふしなるを。右の下句猶やさしき樣なりとて爲レ勝。

卅一番

左持　隆信朝臣

昔みし跡とも見えすあれはてゝうつらなく野や深草の里

右　有家朝臣

秋は來ぬ鹿は尾上に聲たてつ夜半のね覺をとふ人はなし

左右ともに。やさしくおかしきさまに侍れは。いつれをとりわくへきにあられは。宜レ爲レ持。

卅二番

左勝　顯昭

波かくる清見か關の岩枕こゝにて月はみるへかりけり

右　有家朝臣

宿ことにいそきそあかすから衣空吹かせ夜さむなるらん

から衣空吹かせ。たくみにつきて侍れとも。清見か關の岩枕こゝにて月はみるへかりけりと。みることに云して。やさしくおかしく侍れは。尤爲レ勝。

卅三番

左　定家朝臣

里はあれて時そともなき庭のおもに本あらの小萩花咲に鳧

右勝　家隆朝臣

あり明の月待やとの袖の上に人たのめなるよひのいな妻

左とかなくつかうまつり出て侍るを。右有明の月まつやとの袖の上に人たのめなるとをきて。よひの稻妻といひはてたる。誠にやさしくおかしき姿詞にて侍れは。さたにおよはす。以レ右爲レ勝。

卅四番

左　定家朝臣

たれも聞さそやならひの秋の夜といひても悲しさを鹿の聲

右勝　家隆朝臣

秋は今いくかもあらし夕くれのなかめは殘せ峯のこからし

左三句きゝにくき樣なりとこそ。人もみ給らめ。右いとやさしく侍る。爲レ勝。

卅五番

左勝　顯昭

打群て同し野へには出つれとかさしの花はをのかさま〳〵

右　　　禪性

やよやいかに招きよせては花薄ことそ共なく露のこほるゝ

左は今少し勝と云へきさまにや侍らん。

卌六番

左持　　　顯昭

秋の夜は月と草葉の白露とひかりくらへにいつれかたまし

右　　　禪性

秋といへはいつしか夜こそ長くなれねぬに明しは昨日と思ふに

左右ともに以。たはふれ歌の姿なるへし。光くらへも優の詞ならす。なかくなれも俗にちかし。共以不レ可レ有レ異歟。

卌七番

左持　　　顯昭

くれぬれと旅ゆく人や此頃は月にうかれてたゝよひの闇

右　　　禪性

あなし吹なたの汐路に月さえて村雲はしる有明の空

これも共に義勢ありと。こと〳〵しく名所ともひき出されて侍れは。爲レ持歟。

卌八番

左　　　覺延

けふのみとおもはぬ秋のくれにたに心をそめぬ袖の色かは

右勝　　　勝蓮

ねぬ夜のみつもりの浦の里人や月に衣をうちあかすらん

右歌宜おかしく侍るめり。

卌九番

左持　　　生蓮

ことはりや秋の初風さむけきにかさね染けむ天の羽ころも

右　　　寂蓮

荻の葉にまちかき夜半の風よりも雲にさえたる初鴈の聲

雲にさえたる初鴈の聲。きゝ高く鳴まさりて侍るを。あまのはころもひき出したれは。よろしき持とこそ仰出され侍りき。

四十番

左　　　御作

ふる雪をいとふとよそに見えしとて山分衣はらはてそゆく

右勝　　　入道左大臣

冬かれの野へのけしきを詠むれは秋は哀のはしめ也けり

左よろしく侍れとも。右ことにやさしけれは。此番いかにも右勝にて侍るへきなりと。被二仰出一畢。

四十一番

左　　　隆房卿

冬かれの野へのけしきを詠むれは秋みし花の俤もなし

右勝　　　公繼卿

冬枯は草木のみかは袖さへに物おもふ身はうちしくれつゝ

右歌よろし。左は上句さなから入道左大臣の歌なり。無念とて負畢。

四十二番

左　　　雅宗卿

たつねきてとふ人もなき庭の雪にあはれなりける鳥の跡哉

右勝　　　釋阿

ひとりみる池の氷にすむ月のやかて袖にもうつりぬるかな

左よろしきを。右もとかなし勝なるへしなと。ひと〳〵

かたひき申されて。被ㇾ免ニ勝字一畢。

四十三番

左勝　季經卿

いもせやま中は吉野の川の瀬にむすふ氷や契なるらん

右　賢清

雪をとふ人有けりとみゆはかり我とや庭に跡をつけまし

我とや庭に跡をつけましも。雪の興尤ふかく。おもしろく侍るを。いもせやま中はよし野のと置て。結ふ氷やちきりなるらんと侍るこそ。たくひなくおかしく侍ると。各申あひて。勝になされ侍りき。

四十四番

左持　隆信朝臣

冬きぬとしるしはかりを見せかほに氷れはとくる山河の水

右　有家朝臣

水鳥のうは毛の霜を打はらふは風ややかてさえまさるらん

左右共以無ニ得失一可ㇾ爲ㇾ持之旨被ㇾ申。いかゝ侍るへかりつらんとこそ見給ふれ。

四十五番

左持　定家朝臣

あらたまの年の幾とせ暮ぬらんおもふ思ひの面かはりせて

右　家隆朝臣

み乚秋の月より後もなくさます雪の朝のおはすての山

左あらたまのとしのいくとせとつゝけかさねて。おもふ思ひの面かはりせぬ。かさね句さしも咎あるへきにては侍らす。一の姿にては侍れとも。かしかましやと申出し侍しを。何のとかゝ有へからん。やさしくこそ侍れと。口々に申され侍りき。右もおかしく見え侍れは。又只爲ㇾ持。

四十六番

左勝　顯昭

水鳥の青葉のやまは名のみして雪にそ白き朝明の嶺

右　禪性

浮世にはきえもはてなて埋火の下にこかれて何いけるらん

左は長ありて高情なりと見え侍り。右は詞砕て下劣なりと聞ゆ。しかあれはさきの青葉の山たちのほり侍るへし。

四十七番

左勝　覺延

秋はすき冬はたち來る道芝に露と霜とや置かはるらん

右　勝蓮

數ならぬ我身のみそとおもひしに山路も雪にふりやはつ覽

右の歌。下句こそかへす〴〵心得かたく見え侍る。山路の雪のふりはてにけるとやあるへからん。山路も雪にふりやはつらん。みしらぬこゝちし侍れは。さしてすくれたるとり所は侍らねとも。以ㇾ難負に定むれは。難なきによりて。左勝侍りき。

四十八番

左　生蓮

霜さひてをとろへはつる翁草何をまちてか猶いけるらん

右勝　寂蓮

山風の音さへうとくなりにけり松をへたつる峯のしら雪

みねのしら雪。何とやらんすへかねたる詞にては侍れ

とも。松をへたつる峯やさしく侍れは。以レ右爲レ勝。

四十九番　左勝　雑　釋　阿

君か代は高野の山の岩の室あけん朝の法にあふまて

右　隆信朝臣

出る日に光さしそふ君か代は千よへむこともかきりなき哉

右出る日に光をならへる御代のけしきも。いと目出度つかうまつれるを。勝になさるへきよし申出侍しかは。左慈尊之出世。三會之下曉。於二身意(者イ)一視着何事過レ之。高野之岩窟。尤可レ被レ賞翫一之旨。再三被レ仰出一。愚蒙之幸歟。かしこくそかひ／＼しく。岩の室つからまつり出て侍けると。一惶一喜。有レ興有レ感。尤面目とこそおほえ侍しか。

五十番　左持　有家朝臣

照すらん道かはるとも萬代に法のあるしとみもすその月

右　定家朝臣

君か代は高野の山にすむ月の待らん空に光そふまて

左右ともに。やさしく優美に見え侍るを。右高野又可レ被二賞翫一之旨。左方作者申侍しを。今愚詠につかうまつり出て侍りつるに。人ませし侍らす。さのみ高野勝ならむもけしからすと。あらそひ申出て侍りしかは。不便なりとこそ仰侍しかとも。なすらへて持に申定侍ぬ。老耄の是非をわきまへぬにや。相似侍らんと覺てこそ侍りし。

五十一番

左勝　御作

なからへて世に住かひはなけれとも憂にかへたる命也けり

右　入道左大臣

人なみに家をは出ぬさても猶まことの道をしらて社あらめ

左右共以。やさしくいみしき姿に見え侍れとも。うきにかへたる命の。わりなくやさしきと申侍りき。

五十二番　左持　雅宗卿

世をすつる心は猶もなかりけり憂をうしとは思ひしれとも

右　釋　阿

戀しさもかなしき中に悲しきはあはれをかけし白川の浪

左うきをうしとはおもひしれともとつかうまつれる。いとやさしく侍れは。勝に定め申さんとつかうまつれるを。かなしき中に悲しきはあはれをかけし白河のなみも。こゝろとゝまりておかしくこそと。面々に申侍しかは。さらは持にまれなされ侍れかしと申侍しは。深山木のをのれかふしのいやしきもしらぬは。いかにひかむなるへきと。能因法師かつかうまつれりしにおもひあはせられ。おかしくや侍らんとこそ。おほえ侍りしか。

五十三番　左持　賢　清

四十迄おほくの年はつもれとも猶數ならぬ身をいかゝせん

右　隆信朝臣

いかにこは背きもやらぬ世成らむ人やは情む身やはすゝまぬ

左はなひやかに。童部のかふし何よりなたらかにして。

いとやさしく侍り。右はこまやかにしていひしれり。得失いまた見わき侍らす。紅葉の色にまとひ侍りぬれは。暫爲レ持。

五十四番

左持　有家朝臣

大かたは世をも恨みし蜑のかるもにすむ虫の名こそつらけれ

右　定家朝臣

明日しらぬけふの命のくるゝまに此世をのみも先なけく哉

左右共やさしく。よろしき樣にやつからまつれり。乍レ去さのみ勝負なきも。よしあししらぬに似たり。しゐて人人申されよやと申侍しかとも。いつれもやさしく侍る有レ興にこそと申されて。感二兩方之什一。無二一決之難一。

五十五番

左　家隆朝臣

先たてし心もはてはあしひきの山のあなたにきゆる白雲

右勝　顯昭

しはしたに嬉しき袖につゝまはや憂におつるもおなし泪を

各左右之雌雄いかにと尋申侍しかは。何もいとおかしくいひしりて。優美なりと感申されしかは愚老申てき。さのみ迷二是非之理勝負之定一。後見もけしからすこそ。此つかひいかにも。毛を吹て疵をもとめ出侍らんと申侍りしかは。尤しかるへしと仰侍りしかは。左はいひしれる姿いとやさしく侍れとも。右もとかなく優美なり。さりなから。左山家に心をおもひ入て侍るは。よしあるさまなるを。やかて心かはりせり。右は一筋にうきを歎て。同姿をうれしなきのなみたもるさま。おかしく思はれたるは。山のあなたに入てこゝろかはりせるよりも。今すこし切にこそ侍らめと申侍しかは。けにもよく毛を吹まはしてもとめ出たりと仰有しかは。以レ右爲レ勝。

五十六番

左　公繼卿

數ならてありへし人をもとかしと見しよりも猶憂身也けり

右勝　禪性

何事にいままて捨ぬうき世そと我心にもわれそとひつる

左も心有て聞え侍れとも。右の我こゝろにもわれそ問つるは。けにもさる事侍りとおかしく。道理きはまりてきこえ侍れは。以レ右爲レ勝。

五十七番

左　覺延

うき世そと思ひしらすは中々にいとはぬ身をも恨さらまし

右勝　勝蓮

いとひてもかひなかりけり苔の袖そむる心のいつか有へき

左右共に。世をはのかれなから心の道に深く入らぬ由。同樣なから。苔の袖そむる心のつゝけたるは。今すこしたちまさりて。歌めきたるにや。

五十八番

左勝　隆房卿

恨めしの我身のさまや苔の袖かりそめにたに思ひたゝぬは

右　季經卿

身をもなと思ふ心のなかる覽後の世をさていかにせよとて

右やさしく侍りなから。左苔の袖かりそめにたに思たたゝぬはとつゝけける句つゝき。やすらかに侍れは。左の

勝と申定き。

五十九番

左持　　賢清

徒にはかなく過る月日かな後の世までもうかるへき身を

右　　寂蓮

跡たえて花はかりさく山里に鳥の音さへもをとたえにけり

左は述懐の色ふかく。右はあらぬさまの山家のけしき。述懐になされたるも。かすかにこゝろすみければ。準て可レ爲レ持之旨。各被レ申侍しを。右方の作者。此歌は一すちに山家をつかうまつり。述懐の題にそむけり。負になされよとや申請侍しかは。さらはさにてもと申侍しを。入道左府。あなかち難ならましかはこそ侍らめ。よき持なりと。又被ニ仰定一侍りき。

六十番

左持　　生蓮

長らへていけるをいかにもとかまし浮身の程をよそに思はゝ

右　　寂蓮

うしとのみ厭ふさへ社哀なれあるものとやは身を思ふへき

此番。左右ともに以。殊やさしくつかふまつれり。宜き持と被レ定歟。

右正治二年二月五日御室撰歌合以流布印本挍合

仙洞十人歌合 正治二年九月十二日

題

神祇　若草　落花　菖蒲　時鳥
浦月　山嵐　曉雪　水鳥　庭松

作者

女房　　左大臣
内大臣　　權大納言忠良
隆信朝臣　　定家朝臣
家隆朝臣　　雅經
前座主　　寂蓮

講師

讀師

判者　定家

一番　神祇

左勝　　左近少將藤原定家

君をまもる天照神のしるしあれは光さしそふ秋のよの月

右　　上總介藤原家隆

みぬ世まて心そすめる神風やみもすそ川の曉の聲

左頗有所おもふにや。右末の聲字。似レ無ニ其要一。可レ爲ニ左勝一歟。

二番

左勝　　侍從藤原雅經

今も又さしそふ千代の朝日まて天照神の光なるへし

右　　沙彌寂蓮

思ふよりいともかしこし神風やみもすそ川の廣き流は

左心あるさまなり。右ひろきなかれ。其故なくや。

三番

左持　　左大臣

神風や御裳濯川にちきり置し流のすゑは北の藤なみ

右　　内大臣

かけまくもみれは畏こし石清水きみか流のひとつすへらき

左右勝劣難ㇾ定歟。

四番

左勝　　前座主

君を祈る心の色を人とはゝ紅の宮のあけの玉垣

右　　散位藤原隆信

兼てより和歌の浦路に跡たれて君をや待し玉つ嶋姫

右の歌。させる難なくはへれと。左は今少し心もふかく。めつらしきさまにみえ侍り。

五番

左持　　女房

日影にもむかし忘れす神風やみもすそ川のさゝ浪の聲

右　　權大納言忠良

雲のうへにあまてる影を移しても猶もますみの鏡なり鳧

左天の岩戸のむかし。おもひ出られて。聞えて〔此三字除くへき歟〕みもすそ川のさゝ波。そのよせ優に聞えはへり。右もまたおもふ心ありて。あしからす侍り。

六番

左　若草　　内大臣

行末の秋の哀をみせかほにうら緑なるさいたつま哉

右勝　　權大納言

萠出る艸葉はあきの色なれと詠に秋の花はこもれる

いつれも秋をかけてよめるによりて。左はみとりにてあきを見せんこと。いかゝ侍らん。

七番

左持　　左大臣

春かせの吹にし日よりみよしのゝゆきまの艸そ色かはり行

右　　前座主

霜かれの野へのあしてのすみかきを色とり初る春の若草

左はむけにおもへる所なく。右はたはふれことのやうにや侍らん。

八番

左　　家隆朝臣

春はまた人めはかるゝ山里のけしきもしらぬ庭の若草

右勝　　雅經

高砂のをのへの雪はきえやらて先みとりなる野への一しほ

右はみやまには松の雪たにといへる歌。思ひそへられて。心のこもれるさまに見え侍り。尤可ㇾ爲ㇾ勝歟。

九番

左勝　　隆信朝臣

秋の色は霧のまかきにしほれきて霞にめくむ荻の焼原

右　　寂蓮

春雨にひはりの床も顯れてくもるはかりの見えぬ頃哉

右の歌。若艸むけに荒涼にはへり。左もさせる要なくはみえ侍れと。右には勝りてや侍らん。

十番

左勝　女房

春きても積りし雪は消やらて村々あをし野への若草

右　定家朝臣

うち靡き春のみ空も緑にて風にしらるゝ野への若草

右もあしからねと。左の村々あをしといへる。めつらしく侍り。

十一番　落花

左　家隆朝臣

あすも猶きえすはありとも櫻花降たにそはん庭の雪かは

右勝　女房

み吉野は春のあらしやわたるらん道もさりあへす花の白雪

左右ともに古歌をおもひてよめる中に。右はさかひにいれるさまなり。

十二番

左持　寂蓮

麓をそかへりては今尋ぬへき風に花咲みよしのゝ山

右　前座主

散にけり心も空に櫻かり花にはる風やかたをの鷹

左歌風に花さくといへる。さたかに心えかたくや。逐〆風潜開ともいひ。十日花開ともいへる。華は風にひらくる物なれは。たゝ麓のさくらの風にひらけたるとも心えられぬへくや。右歌迷惑せらるゝこゝろにし侍れと。させる難はなかるへし。持なとにや。

十三番

左持　定家朝臣

我きつる方にも見えす櫻はな散のまかひの春の山風

右　權大納言

みよしのゝ花の白ゆき降まゝに梢の雲を拂ふやま風

左右ともによろしくはへり。

十四番

左　左大臣

あたらよのなかめし花に風吹は月を殘して晴る白雲

右勝　雅經

花さそふ名殘を雲に吹とめてしはしは匂へ春の山風

左歌の月。させる要なくや。右心こと葉めつらしく聞え侍り。

十五番

左勝　隆信朝臣

散さしと惜し花はそれなから見るになくさむ庭の面哉

右　内大臣

ちりつもる花を梢に吹よせよつらき春風おもひかへさん

左させる咎なく見え侍り。右こするに吹よせよといひかたくや。

十六番　菖蒲

左勝　定家朝臣

手なれつゝすゝむ岩ねの菖蒲草けふは枕に又や結はん

右　女房

夕風は花橘にかほりきてのきはの菖蒲露も定めす

左心あるさまに聞え侍り。右はむすひ句こは〲しくや。

十七番

左勝　家隆朝臣
かりそめの軒の菖蒲の時しあれは五月の空に匂ひとそなる
右　左大臣
けふといへは袖も枕もあやめ草かけてそ結ふなかき契を
左歌よろしくこそ見えはへれ。右はさせることなかるへし。

十八番
左勝　権大納言
長きねを久しき宿にふきそへて菖蒲や君か千代にひかれん
右　内大臣
千年へん宿のしるしに菖蒲草今一ひさしふきそへんとや
近きよに。ひとひさしさすといふ歌侍るにや。かれは草庵のこゝろにて侍るやうに見ゆ こ〔こ字衍歟〕れはさもと聞ゆ。これは久しきよしにや。けにともきこえす。左させることなけれとも。右にはまさり侍らん。

十九番
左持　寂蓮
故郷の閨もかはらて草枕むすふはけふの菖蒲成けり
右　雅経
けふこゝにむすふ淀野のあやめ草是もなれぬる枕成けり
左右ともに。させる事なしといへとも。又させる難もなし。

廿番
左持　前座主
月影を五月のものになかむれは菖蒲そ軒の光成ける
右　隆信朝臣
涼しくも袂に通ふ匂ひ哉軒のあやめを風や吹らん
左歌あやめをひかりといはんこと。あまりにやはへらん。右はさせる咎なきにや。なすらへて可レ為レ持。

廿一番　郭公
左　前座主
さり共とこゝにやまたん時鳥木のまろとのゝたそかれの聲
右勝　定家朝臣
待あかすさよの中山なか〳〵に一聲つらきほとゝきすかな
左はちか比少々聞えはへる風情なれとも。これはつゝきあしからす見え侍り。又未聞時鳥のうたは。ふるき歌合には。本意なきやうに沙汰はへるにや。右すかた詞いひしりたるさまに聞ゆ。

廿二番
左　寂蓮
尋いる山路しくれて時鳥ひと聲こゆる峯の白雲
右勝　女房
時鳥いつちいくたのもりならん聲の名残を雲にのこして
一こゑこゆる。やうありけにてやうもなきにや。いつちいくたのなと侍るは。あしからす社きこえはへれ。

廿三番
左　左大臣
をちかへり軒はにきなけ時鳥花橘に雨そゝくなり
右勝　権大納言
時鳥また宵の間の一聲に名残の空は東雲のつき
左歌常のことにはへり。右歌なく一こゑにといへる歌おもひ出られて。おかしくこそはへれ。

廿四番

左勝　家隆朝臣

尋こししらぬ旅ねは里なれて山郭公一聲そきく

右　內大臣

聞てきといさいつはりに時鳥初音になるゝ人にいはれむ

左あしからす聞え侍り。右はつねにいかゝなれはへるへき。すてに短慮迷て見え侍るなり。

廿五番

左勝　隆信朝臣

けふもなを山路くれなは時鳥いかにたつねん一聲の空

右　雅經

尋こし垣ねわたりの時鳥花橘に聲うつるらん

左させる難なきにや。右かきねわたり。よろしく聞えすやはへらん。

廿六番　浦月

左　女房

秋の月浪路も遠く影さえて心さへにや須磨の浦風

右勝　前座主

消はてぬ須磨のもしほの夕煙月にうれしき秋のうら風

すまのもしほの夕けふり。心こと葉殊宜侍り。左のうらかせには立まさるへくや。

廿七番

左勝　權大納言

よさの浦や波に有明の影さえて月の氷をみかくまつ風

右　定家朝臣

淡路嶋月のかけもてゆふたすきかけてかさせるすまの浦浪

左月の氷をみかくまつかせ。よろしくはへり。右は波もてゆへるといふ歌をおもひてよめるなるへし。あなかちに優にも聞えす。

廿八番

左持　寂蓮

清見潟我こゝろより關すへていくよの月を三保のうら波

右　左大臣

月影や波をむすはぬうす氷しきつのうらによする舟人

左右ともに。いくほとの勝劣なくや。

廿九番

左勝　家隆朝臣

誰里に山のはまてと詠むらんあかしのうらに有明の月

右　雅經

哀なをあかしのうらの秋の月すめともなれる波のうへ哉

左歌心こと葉さかひにいれるさまなり。殊よろしくこそはへれ。右無二指事一。

三十番

左　內大臣

田子の浦晝にかはらて月すめは夢みるめなしいねの蜑はら

右勝　隆信朝臣

外としもあかしの名をはしらしかし月に心を須磨の浦人

海人をあまはらとは申てんや。夢みるめなしも。きゝにくゝ侍り。右無二異儀一。

三十一番　山嵐

左持　女房

薄もみち猶色まされ三室山あらしにつたふ秋の時雨に

右　左大臣

うち時雨よもの木のはは色つきて深山の嵐秋を告也

左よろしくはへり。右もさせる咎なくは。持なとにや。

三十二番

左勝　雅經

吹まよふ四もの嵐の秋のころしくるともなき山廻り哉

右　定家朝臣

秋のあらし一葉も惜め三室山ゆるす時雨の染盡すまて

左歌ことにおかしくこそ聞えはへれ。右の歌ゆるすしくれ。あまり心こもりて。愚意難ㇾ及。

三十三番

左勝　前座主

秋は又花に紅葉をそめかへて嵐にこゆるしかの山越

右　内大臣

心からつと紅葉をちらしはてゝ梢さひしき峯の嵐そ

左花にもみちを。よろしく侍り。右歌一篇見るへき所なきうへに。中五文字ことたらすはへり。可ㇾ爲ニ左勝一。

三十四番

左持　權大納言

立田山梢のあらし秋くれてかはらぬ松に聲しくる也

右　寂蓮

嵐をや峯のこのははさそふらし散は枕に音聞ゆなり

いつれもあしからす。持なとにや。

三十五番

左勝　家隆朝臣

吹しほる峯の草木のいかならん袖たにたへぬ秋の嵐に

右　隆信朝臣

山陰や音しつかなる嵐こそはけしきよりも身にはしみけれ

あらしをしつかなるとよめる。證歌やはへらん。はるのかせなとやとおほえはへるとよ。

三十六番　曉雪

左勝　權大納言

ひましらむ窓のあけかた詠れは横雲さゆる峯の初雪

右　内大臣

朝戸あけてとをちの里を詠れは雪のしたにそ鳥も鳴なる

左は優に侍り。右歌とをちの里など。眺望むねとして聞えはへるほとに とりもなくなるこそ。上下ことにたかひてきこえはへれ。

三十七番

左勝　家隆朝臣

鐘の音に今や明ぬと詠むれは猶雲深し峯の白雪

右　左大臣

終夜かさなる雲のたえまより月をむかふる峯の白雪

なをくも深しなといへる。ことによろしくこそみえはへれ。

三十八番

左勝　定家朝臣

明ぬるか梢をれふす松か根のもとより白き雪の山端

右　女房

なかむれは曇もやらす風さえて雪より空の有明の月

左まつかねのもとよりなと。おもしろきさまに聞ゆ。右は難もなく侍れと。なを左めつらしくや。

三十九番

左　雅經

月は今くもりはてぬと詠れは雪のひかりも有明の空

右勝　前座主

秋よりも冬は名殘そまさりける月入ぬれは雪の有明

くもり果ぬるや。あまりに侍らん。入ぬれは雪の有明。めつらしきさまなり。

四十番

左持　寂蓮

降雪に柴の庵もうつもれて明ゆく鐘の聲の村消

右　隆信朝臣

まち〳〵てくもるうれしき初雪に心をわくる有明の月

雪に鐘のこゑのむらきえんこと。おほつかなくはへれと。めつらしきさまなり。こゝろをわくるなとは。常のことにはへれと。とかなけれは持なとにや。

四十一番　水鳥

左　女房

月さゆるゐしまか磯も波かけてこをおもふ鵆の有明□

右勝　家隆朝臣

いてゝくる衣手寒き河かせに思ひかねたるをしのこゑ〳〵

右の五文字そ。なにとなきやうにおほえはへれと。妹かりゆけはなとおもひいてられて。よろしくきこゆ。勝はへらん。

四十二番

左持　前座主

鴨のゐるゐしまか磯のおきの石は浪より外のすみか成けり

右　權大納言

浪のよる鵆のうきすは風さえてむすふ氷やとまり成らん

左右同科にや。

四十三番

左　左大臣

さゆる夜にむれゐる鳥の音なれや氷のうへに浪を聞哉

右勝　定家朝臣

薄氷ゐるをし鳥のいろ〳〵にうち出る波の花そうつろふ

右めつらしきさまに侍り。

四十四番

左勝　寂蓮

波まくら氷にさはくをし鳥やおもひ定ぬうき寢成らん

右　內大臣

羽うちするあたりにたつる小波ややかて下毛に移すをし鳥

羽うちするといへる。もしたけと侍るも。みなきゝよからす。左初七句(五字イ)つゝきそ。いかにおほえはへれと。いかてか右にはまさらてはへらん。

四十五番

左持　雅經

あしかもの浮寢よいかに波まくらたのむ入江のまの〻浦風

右　隆信朝臣

さゆる夜は芦の葉隱れうき寢して朝日にいつるあちの村鳥

いつれもあしからすはへり。

四十六番　庭松

左持　內大臣

二葉よりはこやの山のみきりなる玉松かえは光さしそふ

右　　　　　　　　　　　雅　經

誰ゆへに詠めわひぬる夕とて己やととふ軒のまつ風

右心すかたあしからす侍り。左結句にいひきりたるやうにはへれと。玉まつかえ。萬葉集をおもへるなるへし。これもよろしくはへり。

四十七番

左持　　　　　　　　　　　左大臣

庭の石もいはとなるへき君か代に生そふ松の種そ籠れる

右　　　　　　　　　　　隆信朝臣

聳たつ山へは遠き庭までも萬代かけて松かせそふく

山邊はとをきといへる。よろしくもきこえす。庭の石ものに勝へき様もせぬなるへし。

四十八番

左持　　　　　　　　　　　寂　蓮

あしたつの年ふる庭をなかむれは軒をこめたる松かせそ吹

右　　　　　　　　　　　定家朝臣

枝かはす玉のみきりの松の風いく千代君に契りそふらん

左はやうありけに侍れと。又させることなくや。右何に枝をかはすにか。いつれまさると申かたし。

四十九番

左　　　　　　　　　　　家隆朝臣

萬代と玉しく庭の松かえを春の光ものとかにそさす

右勝　　　　　　　　　　前　座　主

千代經へき光そひゆくしるしとて玉敷庭に松の村立

左萬代と玉敷といへる。つゝきてもおほえす。又結ひ句よろしからす。右歌は難なく侍り。

五十番

左　　　　　　　　　　　女　房

是もさす久しき宿のしるしとて軒はにすくる松の下風

右勝　　　　　　　　　　權大納言

河竹のなかれ久しき雲井迄ちよ吹かはせ宿の松風

千代吹かはせよろしく侍り。

御子左大納言爲遠卿以₂自筆之本₁書₂寫之₁了。

至徳二年十一月七日　　　　左少將藤原雅俊

右正治二年九月十二日仙洞十人歌合以奈佐勝皐本挍合

群書類從卷第百九十一

和歌部四十六歌合十二

老若五十首歌合建仁元年二月

左方老

權大納言忠良
前權僧正慈圓
左近權少將定家
上總介家隆
沙彌寂蓮

右方若

女房後鳥羽院
左大臣良經
宮內卿
越前
左近少將雅經

題

春　夏　秋　冬　雜　各十首

一番　春

左持　權大納言忠良

よしの山明ゆくみねのしら雲やけさ立そむる春の初花

右　女房

春はいま冬をこめてや立ぬらん霞にもるゝ峯の松かせ

二番

左持　前權僧正慈圓

君か代の春のためしは住吉の松にかゝれる霞成けり

右　左大臣

けさよりは都の山もかすみぬと櫻につけよ春の初かせ

三番

左　定家朝臣

にほのうみやけふよりはるに相坂の山もかすみて浦風そ吹

右勝　宮內卿

かきくらしなをふる里の雪のうちに跡社みえね春は來に鳧

四番

左勝　家隆朝臣

天原霞てかへるあら玉のとしこそ春のはしめ成けれ

右　越前

萬代を光にこめてあさ日山のとかに霞む初春の空

五番

左　沙彌寂蓮

音羽山雪ふるそらのかすめるやこそとことしの相坂の關

右勝　雅經

武隈の松にや音を立そめてけさはみやこの春の初かせ

六番

左　權大納言

朝ほらけ霞にあまる鶯の聲の匂ひは梅のしたかせ

右勝　左大臣

いにしへの子日の御ゆき跡しあれはふりぬる松や君を待覽

七番

左勝　前權僧正

うくひすのはつねの松をひくのへに春をかさねて立霞かな

右　宮内卿

見渡せは冬たに霞む住よしの遠さとをのゝ春の此（野イ）頃

八番

左　定家

しろたへの袖かとそ思ふわかな摘みかきのはらの梅の初花

右勝　越前

春たてはきしうつ波は長閑にて霞そかゝるすみよしの松

九番

左勝　家隆

氷とく春の山かせ吹ぬらしいはねをとむる瀧のふるこゑ

右　雅經

雪きえぬひらやまおろし猶さえて霞に氷るしかの浦かせ

十番

左　寂蓮

谷ふかき霞の窓は明やらて雲にいさよふうくひすのこゑ

右勝　女房

朝かすみたてる山邊そなをさゆるこのめも春の雪は降つゝ

十一番

左持　權大納言

埋もれて雪の下なる若なこそうき身をつみて袖はぬれけれ

右　宮内卿

難波かた霞の間よりほのみえて波にかけろふ春の三か月

十二番

左勝　前權僧正

神かせやかけても春に成にけり波につのくむいせの濱おき

右　越前

八千世迄君かねのひをまつなれは野へにそ多く引殘しつる

十三番

左　定家

今はとて鶯さそひ吹かせに霞も匂ふ春のあけほの

右勝　雅經

鶯の聲やはかすむ春とても月そ朧の在明のそら

十四番

左　家隆

春たちて雪は花とそ散まよふわかな摘野も道まよふかに

右勝　女房

和田の原遠のかすみの春の色（波イ）にやそ嶋かけて歸るかりかね

十五番

左　寂蓮

ぬしは誰梅の立枝はしらねとも袖になれたる春かせそ吹

右勝　左大臣

冬かれの梢に殘る去年の雪はことしの花の初め成けり

十六番

左勝　權大納言

山のはもいつくと見えぬ大そらの霞にやとる春のよの月

右　越前

うくひすの初音はきゝつ我宿の花こそ今は立居またるれ

十七番

左勝　前權僧正

朝霞梅の匂ひを袖にしめてたなひく山に春かせそふく

右　雅經

花はなをかせまつほともある物を枝にたまらぬ春の淡雪

十八番

左　定家

心あてにわくともわかし梅花散かふ里の春の淡ゆき

右勝　女房

むさしのゝきゝすよいかに子を思ふ煙の暗に聲迷ふなり

十九番

左　家隆

花の香も谷の戸出る山かせにあくかれそむる鶯のこゑ

右勝　左大臣

かすみよりつゝみかねたる梅かかの朧月夜に誰さそふらむ

廿番

左勝　寂蓮

山ふかくなを分いれは尋つる花はみやこのこすゑなりけり

右　宮内卿

鶯をさそひていつる春かせも花を思へはのこるうらみを

廿一番

左勝　權大納言

木のもとに（のイ）旅ね夜ふかき苔の上の花の枕に春かせそ吹

右　雅經

さらすとて匂はぬ梅のあたりかは風もあやなし春のよの暗

廿二番

左　前權僧正

けふ迄はいとはしからぬけしきかな花待みねに春の山かせ

右勝　女房

都人そこともしらす（いはイ）打むれて花に宿かる志賀の山越（タくれイ）

廿三番

左勝　定家

梓弓いそへの小松春といへはかはらぬ色も色まさりけり

右　左大臣

かつらきや高間の山の雪まより空にそ霞む鶯の聲

廿四番

左勝　家隆

百敷の大宮人の袖の香にかさねて匂へ（ふイ）のへの梅かえ

右　宮内卿

一しほも色やはまさる春かすみかすめるほとの松のむら立

廿五番

左勝（持イ）　寂蓮

咲ぬれは雲と雪とに埋れて花にはうとし（きイ）みよしのゝ山

右　越前

梅かえを窓吹かせや過つらん春のねさめにかほる手枕

廿六番

左　權大納言

小初瀬の梢の空の花盛雲よりかほる山おろしのかせ

右勝　女房

花匂ふ霞のそらをなかむれはおほろけならぬ春の夜（みかイ）の月

廿七番

左　前權僧正
人のすむやまとはなの國なれやみよしのゝ山小初せ山〔の脱歟〕
右勝　左大臣
明石潟かすみてかへる鴈かねも嶋かくれゆく春のあけほの
廿八番
左持　定家
もゝちとり聲ものとかに霞む日に花とはしるし四方の白雲
右　宮内卿
風わたる柳のいとに春かけてむすほゝれたるうくひすの聲
廿九番
左勝　家隆
ことつてん詠もたえぬかへる鴈道行ふりの春雨のそら
右　越前
あさみとり糸よりかくる青柳の梢を結ふ遠の山かせ
卅番
左勝　寂蓮
山のはもうす紅の花さかり雲にまかはぬ春の明ほの
右　雅經
心あらん人ともいはし津の國の難波の春の明ほのゝそら
卅一番
左　權大納言
淺茅原はる雨すかるわか葉より緑をうつす玉そこほるゝ
右勝　左大臣
梓弓おして春雨をやまたになはしろ水は今や引らむ
卅二番
左　前權僧正
末の松山も霞のたえ間より花の浪こす春は來にけり
右　宮内卿
袖ひちてあし(らイ)たのをたにつむせりをしたひてあかる薄氷哉
卅三番
左勝　定家
千世までの大宮人のかさしとや雲ゐの櫻匂ひそめけん
右　越前
春の色またあさしとやのへみれはつのくみやらぬ荻の燒原
卅四番
左持　家隆
花見つゝけふも暮しつ足曳の山鳥のをのなかき日影に(をイ)
右　雅經
雪や(そイ)これ雲やあらぬとうつりきて待えたる花に春かせそ吹
卅五番
左　寂蓮
ふけぬなりさてさは人もとはしとや朧月夜の(にイ)花に(をイ)まかせて
右勝　女房
あたら夜のまやのあまりになかむれは櫻にくもる有明の月
卅六番
左　權大納言
かへる鴈雲のいくへをかき分て行末とをく思ひ立らむ
右勝　宮内卿
春雨のふるとは空に見えねともさすかにきけは軒の玉水
卅七番
左　前權僧正
面影や花より後も殘るらむめかれぬものは心なりけり

右勝　越前

故郷にいかなる花の匂ふらむよしのゝ（を捨てイ）春にかへるかりかね

卅八番

左　定家

春かすみかさなる山を尋ぬとも都にしかし花の錦は

右勝　雅經

色は雲匂ひはかせに成はてゝ（にけりイ）をのれともなき山さくらかな

卅九番

左勝　家隆

櫻花夢からつゝかしら雲の絶てつれなき（ねイ）峯のはるかせ

右　女房

花故に志賀のはな園けふみれはむかしをかけて春風そふく

四十番

左　寂蓮

水くきの跡をや人に忍ふらむ霞の袖につゝむかりかね

右勝　左大臣

いつまてか雲を雲とて詠けむ櫻たなひくみよしのゝ山

四十一番

左勝　權大納言

折にあへはこれもさすかに哀也小田のかはつの夕暮の聲

右　越前

此春もよもの山へにあくかれぬ花のあるしに宿をまかせて

四十二番

左持　前權僧正

をのか波に同し末葉そしほれぬる藤咲たこのうらめしのよや

右　雅經

尋きて花にくらせる木の間より待としもなき山のはの月

四十三番

左　定家

春やいかに月も在明に霞つゝ梢の花はにはのしらゆき

右勝　女房

わきてこのよし野の花の惜かななへてそつらき春の山かせ

四十四番

左持　家隆

あたら夜の哀はしるやよふこ鳥月と花との在明のそら

右　左大臣

かせふけはをのか雲よりをのか雪を散してみする山櫻かな

四十五番

左持　寂蓮

暮て行春のみなとはしられとも霞に落るうちのしは舟

右　宮内卿

花は（もイ）散惜みし人も今はとて思ひ立ぬる春の木のもと

四十六番

左　權大納言

詠れは哀もけふに限りけりいまはとかすむ春のゆふくれ

右勝　雅經

名殘まておもふこゝろやのこるらむ花より後の春の暮かた

四十七番

左持　前權僧正

はつせ山なかめそかねてつきぬへき春の別れの鐘を殘して

右　女房

思ふ共あけなむ空はいかゝせむ夜の間はおしめ春つくる鐘

四十八番

左　　定家

としのうちの二月三月程もなくなれても馴ぬ花のおもかけ

右勝　　左大臣

花の色は彌生の空に移ひて月そつれなき有明のやま

四十九番

左持　　家隆

花散て後さへやすき詠かはいつの人まに春のくるらむ

右　　宮内卿

おしむなり井手のわたりの里人は蛙に春の暮をまかせて

五十番

左勝　　寂蓮

晴やらぬ眺めは春の物なれと時はやよひのくるゝけふしも

右　　越前

よしの河瀧つ岩ねのふちのはな手折て（折てをイ）ゆかん波はかくとも

五十一番　　夏

左　　權大納言

櫻色の春の袂を立かへてふたゝひ花の名殘をそおもふ

右勝　　女房

見渡せは名殘はしはし霞めとも春にはあらぬ空の曙

五十二番

左　　前權僧正

へたつなる卯花かきのこなたにて鶯しのふほとゝきすかな

右勝　　左大臣

きのふまてかすみし物を津の國の難波わたりの夏の明ほの

五十三番

左勝　　定家

櫻色の袖もひとへにかはるまてうつりにけりな過る月日は

右　　宮内卿

花ゆへはいとふにはへて夏衣たつかとすれはかせすさむ也

五十四番

左勝　　家隆

夏衣たつことやすきかけもなしなを花思ふ庭のこすゑに

右　　越前

しら雲のたつのとよそに見えつるや卯花さけるをのゝ故鄕

五十五番

左　　寂蓮

散ぬともなにおしみけむうの花の垣ねも春の色ならぬかは

右勝　　雅經

たちのこる（すイ）霞の袖のうすみとりこれもやけふの習ひ成らむ

五十六番

左　　權大納言

忍ひあまる心よいかにほとゝきす卯花かけのさよの一聲

右勝　　左大臣

里人のうの花かこふ山陰に月と雪とのむかしをそとふ（おもふイ）

五十七番

左持　　前權僧正

ほとゝきす思ひや出る忍ひねを啼てたちにしうの花の宿（かけイ）

右　　宮内卿

ほとゝきすまつに心も更にけりなこりをとめよ明るひと聲

五十八番

左持　　定家

春暮ていくかもあらぬを山陰に葉末かたよりなひく下草
右　越前
ひきつれて花のさかりはこし物を春より後はとふ人もなし
五十九番
左勝　家隆
ほとゝきすまつとけしまにわか宿の池の藤なみ移ひにけり
右　雅經
わきて猶まつをはしるやほとゝきす一聲きくもねぬよ也

六十番
左　寂蓮
さみたれの雲より下に空晴て綠は軒のあやめ也けり
右勝　女房
久堅の月のかつらにあふひ草かけてそたのむかもの河浪
六十一番
左勝　權大納言
こゝろあれやしはしまたれて郭公更行月に哀そふ也
右　宮内卿
賤かふくあやめのすゑを便にて宿をならふる軒のさゝかに
六十二番
左持　前權僧正
郭公みあれのしめに引こめて外にけかさぬ聲をきかはや
右　越前
暮ぬとて千町のさなへとり〳〵に急くそしるき田子の諸聲
六十三番
左勝　定家
神まつる卯月待出てさく花の枝もとをゝにかくるしらゆふ
右　雅經
泊瀨山入あひのかねの音までもうちしめりたる五月雨の頃
六十四番
左持　家隆
うの花のかきねにきてもほとゝきすなを白雲の夕暮のころ
右　女房
郭公くもるこよひの村雨にまたしき聲や世にふりぬらん
六十五番
左　寂蓮
卯のはなの咲る垣ねの雨のよは月の影もるのきの玉水
右勝　左大臣
郭公啼よはいはすなかぬ夜もなかめそあかぬのきの橘
六十六番
左持　權大納言
たえ〳〵にうす雲かくれ星見えてなを晴やらす五月雨の空
右　越前
なそやかく心をくたく郭公待につけてもきくにつけても
六十七番
左勝　前權僧正
軒の雨の雫にそしる郭公啼やさつきのあやめ草さは
右　雅經
大かたはうちぬる程も夏の夜をさてもいつより明しかぬ覽
六十八番
左勝　定家
遙かなる初音は夢かほとゝきす雲のたゝちはうつゝなれ共
右　女房

あやめ草いはかき沼のね(にイ)をたえてけふは袂の匂ひとそなる

六十九番

左　家隆

村雨の風にそなひくあふひ草むかふ日影もうすくもりつゝ

右勝　左大臣

五月山雨に雨そふ夕かせに雲よりしたを過るしらくも

七十番

左持　寂蓮

今そこれまちし五月をほとゝきすなを思へとや忍ひねの空

右　宮内卿

橘の匂ひにかへてほとゝきす花ちらせとはちきりやはせし

七十一番

左勝　権大納言

楝さく外面の木かけ露散(落イ)て五月雨はるゝ風わたるなり

右　雅経

山かけや袂涼しき夕風に聲をはきかし蝉のはころも

七十二番

左持　前権僧正

五月やみみしかき夜半のうたゝねに花立花の袖に涼しき

右　女房

ほとゝきすのきの立花匂ふかにえや忍はれぬおちかへる聲

七十三番

左　定家

さみたれの月はつれなき太山よりひとりもいつる郭公かな

右勝　左大臣

なをさりに袖のあやめをかたしきて枕も夢も結ふともなし

七十四番

左勝　家隆

夏もなを月やあらぬと眺むれはむかしにかほる軒の立はな

右　宮内卿

杣人のとらぬまきさへなかる也にふの河瀬のさみたれの頃

七十五番

左持　寂蓮

夜をかさね心にいれて(なイ)ほとゝきす初音[を脱歟]あかぬ名殘なりける

右　越前

さらてたにむかしを忍ふ夕暮に花立はなにかせそふくなる

七十六番

左　権大納言

身にあまる思ひやなにそ夏虫の水にもきえすもえわたる覽

右勝　女房

郭公おもひもわかぬ一こゑにあけぬるかたはしのゝめの月

七十七番

左持　前権僧正

五月雨にゆきて尋ねんかつまたの池もや今はおきつしら浪

右　左大臣

うかひ舟下すとなせのみなれさほさしも程なく明る夜は哉

七十八番

左持　定家

ことはりやうちふすほともなつの夜はゆふつけ鳥の曉のこゑ

右　宮内卿

五月雨によもの梢もみかくれて軒をあらそふにわたすみ哉

七十九番

左勝　家隆

つもりゆく雲もゆるさぬ山のはも明れはしるき五月雨の空

右　越前

眞菰刈るたこのもすそもくちぬへしみつのみまきの五月雨の比

八十番

左持　寂蓮

あたら夜の月にのみやはほとゝきす啼て過なる五月雨の空

右　雅經

野への色も茂りにけりな大荒木の梢につゝく杜の下草

八十一番

左　權大納言

夏の夜はすゝむほとなく明ぬれは清水も夢も結はさりけり

右勝　左大臣

尋きてこゝには夏もあらし山木かくれにこそ秋は有けれ

八十二番

左持　前權僧正

なかめをは照日のかけやへたつらん春秋もなき夏姿かな

右　宮内卿

山里のそともにたつる蚊遣火は夏さへたえぬ煙なりけり

八十三番

左　定家

夏の日を道ゆきつかれいなむしろなひく柳にすゝむ河かせ

右勝　越前

ふすほともなく一聲にあくる夜の名殘そ深きしのゝめの空

八十四番

左持　家隆

夕暮の雲のはたてにみたれつゝ思ひもしるく行螢かな

右　雅經

秋のゝの千草花を待ほとやしはしやとれるさゆりはの露

八十五番

左　寂蓮

結ふ手のあとのみにこる山の井のあかぬ心を袖にまかせて

右勝　女房

夏の月しはしみる夜もあらは社くもらはくもれ山のはの空

八十六番

左勝　權大納言

松かせに夏の日數を忘れ草涼しくなひくすみよしのきし

右　宮内卿

おそくとくおつる鵜舟の篝火に淵せもよそにしられぬる哉

八十七番

左勝　前權僧正

結ふ手に影みたれゆく山のゐのあかても月のかたふきに鳬

右　越前

咲にけり深き夏野の草村のしけみにましるさゆりはの花

八十八番

左持　定家

かけ宿す水のしらなみ立かへりむすへとあかぬ夏のよの月

右　雅經

大江山木かけもとをく成にけりいくのゝ末の夕立の空

八十九番

左　家隆

出やらぬ初音をきゝし深山邊に里なれかへるほとゝきす哉

右勝　女房

郭公雲のはつかにきこゆ也よとのわたりの村雨のそら

九十番

左持　寂蓮

夜もすから草のはらやく夏虫のもえても人の袖ぬらすらん

右　左大臣

螢飛のさはに茂るあしのねのよな／＼下にかよふ秋かせ

九十一番

左勝　權大納言

夏ふかみ夜な／＼秋やたつた河くるれは涼し岩なみのこゑ

右　越前

むら雨の過る晴間の夕つくひ霈色まさるとこ夏の花

九十二番

左　前權僧正

いほりさす野澤の夏の夕涼みもの所せき秋にそ有ける

右勝　雅經

夏むしの光をやとす末葉より淺茅色つくのへの夕暮

九十三番

左　定家

山めくりそれかとそ思ふ下紅葉うちちる暮の夕立の雲

右勝　女房

秋やちかき賤か垣ねの草むらに何ともしらぬ虫の聲かな

九十四番

左　家隆

夕かけて風そ涼しき神山の梢にのこるならの葉かしは

右勝　左大臣

ほとゝきすなくねも稀に成まゝにやゝかけ涼し山のはの月

九十五番

左勝　寂蓮

夏ふかき杜の梢の空蟬のはにをく露は秋のゆふくれ

右　宮内卿

雲はるゝ山井の水に影見えて底より出る夏のよの月

九十六番

左　權大納言

夕暮や松ふくかせにさそはれて梢のをとに秋は來にけり

右勝　雅經

けふといへは御禊になひく袖なから秋風たちぬせゝ（岩イ）の河波

九十七番

左　前權僧正

夕暮は野中の松の下陰に秋かせさそふひくらしの聲

右勝　女房

夏もまたおしまか磯のかち枕うきねの波に秋かせそ吹

九十八番

左　定家

夏はつるあふきに露ををき初てみそきに涼しかもの河かせ

右勝　左大臣

とこ夏の花に玉敷夕暮をしらてや鹿の秋を待らむ

九十九番

左勝　家隆

さくらあさのをふの下草（露イ）いかならんみそきに成ぬ六月の空

右　宮内卿

秋かせに思ひたかへて葛の葉もうらみそめぬる夕暮のそら

百番

左勝　寂蓮

思ひあまりなのる共なき虫の音のしのに籠れる野への夕風（暮イ）

右　越前

夏草の葉末に結ふ夕露に秋おもほゆるもりの下かせ

百一番　秋

左　権大納言

みそきしてねぬに明ぬるしのゝめの袂にしるき秋かせそ吹

右勝　女房

秋たちてけふみるのはら風涼しやゝたなはたに衣かせ山

百二番

左　前権僧正

秋はきぬなぬかはまたし七夕のあさ引糸のふしや侘らむ

右勝　左大臣

秋を秋と思ひ入てそなかめつる雲のはたての夕暮のそら

百三番

左　定家

秋かせよそゝや荻の葉こたふとも忘れぬ心我身やすめて

右勝　宮内卿

荻の葉にやゝ秋かせは吹すきぬ野中の庵をとふ人はなし

百四番

左　家隆

さひしさのなかめはわきつ夕日さすをかへの松の秋の初風

右勝　越前

はらふらんまくらそみゆる夕ま暮雲の塵なき星合のそら

百五番

左　寂蓮

秋はきぬとはかりこそはなかめつれ籬のくれに萩の下露

右勝　雅経

昨日まてよそに忍ひし下荻の末葉の露に秋かせそふく

百六番

左勝　権大納言

けさのまに心をいかにつくせとや残りおほかる秋の初かせ

右　左大臣

うつゝなく野へのしのやに一夜（ひとりイ）ねて袂ならはす萩の下露

百七番

左　前権僧正

みか月のほのめく空に秋をこめてそゝろに渡る山のはの雲

右勝　宮内卿

風わたるおはなか末にすめはとて月の影さへなひく野へ哉

百八番

左勝　定家

夕月よいるのゝ尾はなほの〳〵と風にそつたふ棹鹿の聲

右　越前

はかなくも雲のよそにそ思ひける泪は袖にはつかりの聲

百九番

左持　家隆

うちもねすあくるそつらき山陰にひとり詠る萩の下露

右　雅経

秋は猶風にこたふる暮よりも荻の上葉のむらさめの聲

百十番

左持　寂蓮

啼わたる雲ゐのかりよ心せよこぬ人たのむ秋かせの比

右　女房

荻のはに秋かせふきぬともすれはかはらぬ月の影そ涼しき

百十一番

左持　権大納言

ひこ星の雲の衣の袖ぬれてけさや戀路に立かへるらん

右　宮内卿

中々に秋のあはれは暮よりも雨おとつるゝふかきよのそら

百十二番

左勝　前権僧正

秋ことにぬれてかさぬる袂かな月さゆる夜のかりの涙に

右　越前

思ひやれ夜ふかき空の鴈金に涙つらなる秋のねさめを

百十三番

左持　定家

玉くしけ二見の浦の秋の月明まくつらきあたらよの空

右　雅經

秋そかしかへらはこそはと思へとも雲路の鴈の遠さかる聲

百十四番

左　家隆

藤はかまなひくまかきの夕くれに空さへ匂ふ秋のむら雨

右勝　女房

秋風は身にしむ物と荻の葉に吹よりこそは習ひ初しか

百十五番

左　寂蓮

里わかすみるへき月の影なれとあかぬこゝろはをは捨の山

右勝　左大臣

しら露のたのめかおきし人はこて霧のまかきに松虫の聲

百十六番

左持　権大納言

初かりはかへりし春の聲なから秋の哀をかきつらねけり

右　越前

しら露の玉まく葛にかせさえてうら悲しくも澄ろ月かな

百十七番

左持　前権僧正

夕されはうつらになれてしむる野の夜半の思ひは鴫の羽かき

右　雅經

谷ふかき軒端たこむる朝霧のはるゝとすれは暮方のそら

百十八番

左　定家

秋の夜は月のかつらも山のはもあらしに晴て雲もまかはす

右勝　女房

住吉の松に秋かせ小夜ふけてうらよりおちに月そさやけき

百十九番

左　家隆

立そむる秋霧のうへに鳴かりの聲ほのかなるいさよひの月

右勝　左大臣

たか秋のねさめとはむとわかす共たゝ我か爲の小男鹿の聲

百廿番

左持　寂蓮

たれとなく戀しかるへきこよひかな月影いとへ棹鹿の聲

右　宮内卿

隈もなき月をはいかゝみよしのゝたのむの鴈のよると啼覽

百廿一番

左持　権大納言

つれなしやかくてもへけりみ山への松の嵐にをしか鳴よを

右　雅經

宿はあれぬ庭は蓬にうつもれぬ露うちはらひとふ人はなし

百廿二番

左　前権僧正

ひきかへて今宵の月はみゆるかな山立いつる駒のゆかりに

右勝　女房

荻の葉にをくしら露の玉ゆらもきゝ忍ふへき秋の風かは

百廿三番

左　定家

秋をへてむかしは遠き大空に我身ひとつのもとの月かけ

右勝　左大臣

露のうへに鴈の涙をきてみんしはしな吹そ荻の夕かせ

百廿四番

左　家隆

里はあれて鹿そ啼なる菅原や伏見の野への秋の夕くれ

右勝　宮内卿

思ふさへくもらぬ夜半のなかめかな姨捨山のいにしへの空

百廿五番

左勝　寂蓮

村雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立のほる秋の夕暮

右　越前

いつくにもさこそは月を眺む共いとかく人の袖はしほれし

百廿六番

左　権大納言

夕ま暮なかむるまゝに露なれてたもとに秋の哀をそしる

右勝　女房

秋の色はまた一しほのもみち葉に心してふけ山おろしの風

百廿七番

左持　前権僧正

秋をへて月をなかむる身となれりいそちのやみを何歎らん

右　左大臣

雲はみなはらひはてたる秋かせを松にのこして月をみる哉

百廿八番

左勝　定家

露落るならの葉あらく吹風に涙あらそふ秋の夕くれ

右　宮内卿

きゝもあへすぬるゝね覺の袂哉かねて思ひし虫の音にしも

百廿九番

左勝　家隆

久堅の月のかつらやまかふらむ緑にすめる秋のそらかな

右　越前

いつよりも慰めかたき今宵かな哀はのこせ山のはの月

百三十番

左　寂蓮

いさこゝにしくるとならは立田山ふもとの庵の秋の末まて

右勝　雅經

たへてやはおもひ有ともいかゝせむ葎の宿の秋の夕暮

百卅一番

左　　權大納言
露結ふよもの木のははつれなくて月にそ秋の色はみえける
右勝　　左大臣
さむしろにひとりね覺の夜半の月歟忍ふへき秋のそらかは

百卅二番
左勝　　前權僧正
聲たてゝ啼といふ鹿にことゝはん秋や悲しき妻や戀しき
右　　宮内卿
宿からのあはれといひていてぬともいつれの里も秋の夕暮

百卅三番
左　　定家
初雁のたよりもすくる秋風にことゝひかねて衣うつこゑ
右勝　　越前
よさの海うきねにかよふ鹿の音は波よりもけに袖そ濡れぬる

百卅四番
左　　家隆
うき雲は月やは拂ふさらしなやをは捨山のみねの秋かせ
右勝　　雅經
を山田の稻葉の風はほのかにて庵もるひたのさよ深きこゑ

百卅五番
左　　寂蓮
かきくもり時雨も今はすか原や伏見の外山色かはるまて
右勝　　女房
秋やとき時雨やをそき御室山染ぬ梢にあらし吹也

百卅六番
左持　　權大納言
鹽かまやうらの松かせ音さえて波に月すむ有明のそら
右　　宮内卿
ちらぬより木の葉に通ふねさめ哉かせに村たつ秋のよの雨

百卅七番
左勝　　前權僧正
玉章のかきあはせたるしらへかなかりの琴ちに過る松かせ
右　　越前
淺茅生の露ふく風につけつゝもまつこほるゝは涙也けり

百卅八番
左　　定家
たをやめの袖の紅葉かあすか風いたつらにふく霧の遠かた
右勝　　雅經
拂ひかねさこそは露のしけからめ宿るか月の袖のせはきに

百卅九番
左　　家隆
松虫の聲はつれなき故郷の庭の木のはに秋かせそふく
右勝　　女房
暮てゆく秋の名殘は大あらきの杜のこすゑに有明の月

百四十番
左持　　寂蓮
さひしさを誰忍へとか小倉山秋の麓に小鹿なく也
右　　左大臣
月殘るふるさと人の淺茅生にわすれす秋の衣うつなり

百四十一番
左勝　　權大納言
虫の音も秋の末葉にかれはてゝ霜にさえ行庭のかやはら

右　越前

山里よいかにせよとかましらの鳴あらしにたにもたへぬ涙を

百四十二番

左　前權僧正

秋の風は荻のうは葉に立そめて木のはの色に吹かはりぬる

右勝　雅經

今こむと契らぬ妻を長月の有明の月にさをしかのこゑ

百四十三番

左　定家

山姫のぬさのおひかせ吹かさねちひろの海に秋のもみち葉

右勝　女房

なか月や秋の末葉に霜をけは野はらの小萩かれまくもおし

百四十四番

左　家隆

やゝ寒きいく田の杜の秋かせにたへぬ里人衣うつなり

右勝　左大臣

見わたせは松に紅葉をこきませて山こそ秋の錦なりけれ

百四十五番

左　寂蓮

山かせに峯のこの葉は旅たちぬ獨やすまん岡のへのいほ

右勝　宮内卿

立田山みねのあらしを時雨にて河瀬の波も色付にけり

百四十六番

左　權大納言

紅葉する木末に秋は成はてゝ嵐とともにいそきたつ也

右勝　雅經

袖のうへにたれ忍へとか行秋の名殘かほなる野への夕露

百四十七番

左持　前權僧正

哀にも袖より外はおともせす秋くるゝ日のよひの時雨は

右　女房

尋見よいかなる關のせき守かつれなくくるゝ秋をとゝむる

百四十八番

左　定家

物ことに忘れかたみの別にてそをたに後とくるゝ秋かな

右勝　左大臣

草も木もおのか色々あらためて霜に成ゆく長月の末

百四十九番

左勝　家隆

暮はつる秋こそやかてしらせけれあふ人からのよはの習ひを

右　宮内卿

秋ふかし虫の音よはるね覺には物こそいはね絶ぬ泪を

百五十番

左　寂蓮

いつまてか鶉の床に待をらむたのみし秋もふか草のさと

右勝　越前

おしと思ふ心ははてもなき物を秋はけふこそ限成けれ

百五十一番

左　權大納言

村雲のはれのゝみねを詠れは梢にしるき初しくれかな

右勝　女房

津の國のをやもあらはに霜かれてやへふく軒に時雨ふる也

百五十二番

左　前權僧正

から錦殘る時雨の初雪はしろ地におれるこゝちこそすれ

右勝　左大臣

秋かせにあへす散にしなら柴のむなしき枝に時雨ふる也

百五十三番

左　定家

月日のみ杉の葉しくれ吹あらし冬にも成ぬ色はかはらて

右勝　宮內卿

から錦秋のかたみや立田山散あへぬ枝にあらし吹なり

百五十四番

左　家隆

しろたへの菊のみけさは有明の冬に移ふ庭の月かけ

右勝　越前

きのふにも野への景色はかはらねと秋にはあらぬ村時雨哉

百五十五番

左持　寂蓮

いまはとやしのたの杜の初時雨めつらしからぬ千枝の雫を

右　雅經

今よりの宿をはかれす人はとへ庭のけしきは霜にあるとも

百五十六番

左　權大納言

立田山紅葉ちりしく夕暮のあらしをわけてとふ人もかな

右勝　左大臣

ふしなれし芦の丸屋も霜かれてうちもあらはに宿る月かな

百五十七番

左持　前權僧正

神無月槇の板屋のうたゝねに時雨せぬ夜もこのは散なり

右　宮內卿

時雨つる木の下露は音信て山路の末に雲そ成ゆく

百五十八番

左勝　定家

神無月時雨てきたるかさゝきのはねに霜をきさゆるよの袖

右　越前

露をたにいとひしのへの蓬こよひの霜にいかてたふらん

百五十九番

左　家隆

時雨つゝ殘る紅葉の色もおし梢にかへれなか月のそら

右勝　雅經

木のはふくあらしそ今は音羽山みね立ならす鹿の音はなし

百六十番

左　寂蓮

時雨つる夕日の色も袖さえて山陰さひし菊のむら露

右勝　女房

このころは小夜の時雨もきゝわかすこの葉になるゝみ山への里

百六十一番

左持　權大納言

うらかるゝ野への草葉の霜とけて朝日にかへる秋のしら露

右　宮內卿

秋といへはしられぬ色の身にしむと深山おろしよ烈し刈覽

百六十二番

左勝　前權僧正

あけは先木のはに袖をくらふへし夜半の時雨よ夜はの泪よ

右　越前

散にけり山はこけちの錦にて紅葉をあらふ谷の岩水

百六十三番

左　定家

冬枯て青葉もみえぬ村すゝき風のならひはうちなひきつゝ

右勝　雅經

秋の色をはらひはてゝや久堅の月のかつらに木枯のかせ

百六十四番

左　家隆

霜こほる柴のさ枝やうるふらん煙そしめる山のへの里

右勝　女房

冬になをかさねて空の風さえて時雨にかはる峯の白雪

百六十五番

左勝　寂蓮

たえ／＼に里わく月の光哉時雨をゝくる夜半のむらくも

右　左大臣

あらしふく梢に波の音はして松の下水うすこほりせり

百六十六番

左勝　權大納言

冬かれの荻の上葉に風さやき霜をはらひて霰ふるなり

右　越前

とふ人のなきにつけてもみよし野の山の奥まてみゆる白雪

百六十七番

左　前權僧正

おなし影を庭と池とにさしかへて霜も氷も冬のよの月

右勝　雅經

かけとめし露のやとりを思ひ出て霜に跡とふあさちふの月

百六十八番

左　定家

外山よりむら雲なひき吹かせに霰よこきる冬の夕暮

右　女房

常盤なる松の緑をふきかねてむなしき枝にかへる木からし

百六十九番

左　家隆

すみかまのみねの煙にくもりて雪氣に成ぬ大原の里

右勝　左大臣

水上やたえ／＼こほる岩間より淸瀧川に殘るしらなみ

百七十番

左　寂蓮

さま／＼にたえぬ木のはの音よりも思ひいれたる松の風哉

右　宮内卿

みしま江の玉江の芦は霜かれて風の音さへ色かはるなり

百七十一番

左　權大納言

ふし侘ぬ吉野の里の山おろしに霰くたくる夜半のさむしろ

右勝　雅經

けさみれは岩間をくゝる山河のよとむともなき薄氷哉

百七十二番

左　前權僧正

世中のはれ行空に降霜のうき身はかりそをき所なき

右勝　女房

なかむれは浪こす山の末の松こすころにやとる冬のよの月

百七十三番

左　定家

さえさをる風の上なる夕つくよあたる光に霜そちりくる

右勝　左大臣

月そすむたれかはこゝにきの國や吹上の千鳥獨啼なり

百七十四番

左勝　家隆

あすか川かつ氷つゝかつらきの山のはしろく雪降にけり

右　宮内卿

かち人の汀をつたふ音さえて氷にぬれぬえにこそ有けれ

百七十五番

左勝　寂蓮

山かせにくもりもあへぬむら時雨名殘は月の影よりそふる

右　越前

冬こもる草の庵の柴の戸にこととふ物は木枯のかせ

百七十六番

左　權大納言

つま木とる谷のかよひちうちはらひ分そ侘ぬる柴の雪おれ

右勝　女房

から崎や氷に波の音たえてみきはにのこる小夜の松風

百七十七番

左　前權僧正

けさは又かさねて冬をみつるかな枯野の上にふれる白雪

右勝　左大臣

槇の戸をあさけの袖にかせさえて初雪おつる峯のしら雲

百七十八番

左　定家

大淀の松によりくる波かせをうらみてかへる友千鳥かな

右勝　宮内卿

庵ちかき麓の松の梢より哀を分る山おろしのかせ

百七十九番

左持　家隆

みやまより落くる水は氷ゐて秋のかきりの色はとまらす

右　越前

むへしこそねさめの床も氷けれ雪の花咲窓の梅かえ

百八十番

左　寂蓮

山のはに雪けの雲のかゝるより麓のいほはとふへかりけり

右勝　雅經

有明の月にむれたるころなから千鳥なみよる興津汐かせ

百八十一番

左　權大納言

いかにいはむ言の葉もなし雪の上に月すむ夜半の更科の里

右勝　左大臣

朝妻やをちのと山に出る日の氷をみかくしかのからさき

百八十二番

左持　前權僧正

鹿の音をうきねのをしの聲にかへて我も生田のをのゝ草伏

右　宮内卿

深山には松の葉白く降雪にすそのゝ原はむら雨のそら

百八十三番

左　定家
なかめつゝよわたる月にをく霜の過て跡なきひとゝせの空
右勝　越前
をしなへて松にも花そ咲にけるかすかの山の雪の明ほの
百八十四番
左持　家隆
冬の夜の有明の月もしほの山さしいての磯に千鳥鳴也
右　雅經
夕されは雪もふりにし宿なれや庭も籬も跡たゆるまて
百八十五番
左　寂蓮
はやき瀬の波にまかせてよるひをは結ひとゝめぬ氷也けり
右勝　女房
高砂の松吹かせそむもれゆくおのへの雪や降まさるらむ
百八十六番
左持　權大納言
山たかみ千里はおなし麓にてなかめにたとる雪の明ほの
右　宮内卿
人とはぬ都の外をいつなれて跡なき庭の雪とみるらむ
百八十七番
左持　前權僧正
千鳥啼さほの河原〔の〕霧晴て友まとはさぬ有明の月
右　越前
いとゝしくしらぬ山路そまとひぬるねに行鳥の聲を聞にも
百八十八番
左　定家
神さひていはふみむろのとしふりて猶ゆふかくる松の白雪
右勝　雅經
大かたは哀もしらぬものゝふも八十うち河の冬の明ほの
百八十九番
左　家隆
久堅の雪にましりて咲花の匂ひもさひし冬の山里
右勝　女房
須磨の浦にことそ共なき煙哉雪のあしたの海士のもしほ火
百九十番
左持　寂蓮
降雪に軒はの松もうつもれて音せぬかせもさえまさるなり
右　左大臣
山人のたきすさみたるしゐしはの跡さへしめる雪の夕暮
百九十一番
左　權大納言
有明の月かけさえて鹽みてはいりぬる磯に千鳥啼也
右勝　越前
吹かよふみねの嵐は音もせてさひしさまさる雪の下おれ
百九十二番
左勝　前權僧正
君をのみ思ふこゝろは大原や世にすみかまの煙にもみよ
右　雅經
はかなしやさてもいく夜かゆく水に數かき侘る鴛の獨ね
百九十三番
左勝　定家
春しらぬたくひをとへは三笠山此ころふかき雪の埋木

右　女房
冬ふかみ外山の嵐さえ〳〵てすそ野のまさき霰ふるなり
百九十四番
左　家隆
花なまつ春もとなりに成にけり故郷ちかきみよしのゝ山
右勝　左大臣
呉竹の葉末にすかるしら雪も夜ころへぬれは氷とそなる
百九十五番
左持　寂蓮
いほりさす麓は雲に道たえぬなをしもいかに峯のしら雪
右　宮内卿
人またはいかにとはましさよ千鳥河かせさむみ冬の明ほの
百九十六番
左　権大納言
年くるゝ雪けのそらのうす雲や明なは春の霞成へき
右勝　雅経
月をのみめてしつもりのこよひにて年こそ人の老と成もの
百九十七番
左勝　前権僧正
椎柴のしはしうき身の世に住てうち詠れは年の暮ぬる
右　女房
西の海のあら磯波によりたけの夜に成ぬ冬の日数も〔本ノマヽ〕
百九十八番〔判欠〕
左　定家
日も暮ぬことしもけふに成にけり霞を雪になかめなしつゝ
右　左大臣
よしの山花より雪になかめきて雪より花もちかつきにけり
百九十九番
左　家隆
なかめつゝ涙そくもる行としもつもれは袖に有明の月
右勝　宮内卿
色ならはわきそかねまし炭竈の煙につゝく峯の白くも
二百番
左勝　寂蓮
ひとりのみなかむるやとはとし暮てふるき梢に松風そふく
右　越前
波たかし浮寝の床の苫やかたこゝろして吹山おろしのかせ
二百一番
左　権大納言
頼もしなみもすそ河にやとりきて天てる影の底にすむなる
右勝　女房
心をは天てる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に
二百二番
左　前権僧正
四方の海の治まれる世のしるし哉なきたる朝の海士の釣舟
右勝　左大臣
わか國は天照神の末なれは日のもとゝしもいふにそ有ける
二百三番
左　定家
久堅のあまてる月日のとかなる君のみかけを頼むはかりそ
右勝　宮内卿
いかてかく代々の子日にもれ過て野中の松の年ふりにけむ

二百四番
左持　家隆
空はれて波もしつかに住吉の松にそ見えし御代の行末
右　越前
神かせや山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

二百五番
左持　寂蓮
久堅のあまの岩戸を明そめし光は君かこゝろ也けり
右　雅經
君か代のためしはこれか四方の海の波を治むる和歌の浦風

二百六番
左持　權大納言
行末やなをもつもりの浦風にいくとし波のよらんとすらむ
右勝〔本のマヽ〕　左大臣
昔よりみくにつたはる法の水なかれてすめるよつの海かな

二百七番
左勝　前權僧正
和歌の浦のあし間のたつの聲す也昔のしほやさしてきぬ覽
右　宮內卿
竹の葉に風ふきよはる夕暮の物の哀は秋としもなし

二百八番
左　定家
秋津嶋外まて波はしつかにてむかしにかへるやまとことの葉
右勝　越前
思ふことといつか成へきいすゝ河賴みをかけて年はふりにき

二百九番
左持　家隆
忘れしな君に契し友千とりみくまのかはにすまむかきりは
右　雅經
影やとす露のみしけく成はてゝ草にやつるゝふるさとの月

二百十番
左　寂蓮
呉竹をやとのまかきに植しより吹くるかせも友とこそなれ
右勝　女房
淡路嶋ふきまよふすまの浦風にいくよの千鳥聲かよふなり

二百十一番
左　權大納言
玉津嶋なみに光をやはらけて心とよせよ和歌の浦なみ
右勝　宮內卿
水無月のてる日もしらす降雪にいつもさえたるふしの山風

二百十二番
左勝　前權僧正
すまの關夢をとをさぬ波の音を思ひもよらて宿をかりける
右　越前
數ならぬ心は神にたくへてきあまねき影にすまむと思へは

二百十三番
左　定家
仰けともこたへぬ空の靑綠むなしくはてぬ行末もかな
右勝　雅經
すみなるゝ同し木の間に影落て軒はに近き山のはの月

二百十四番
左勝　家隆

和歌の浦を光にこめしみゆきより神や玉藻をみかきそふ覽

右　女房

おしめともつれなく明ぬ夜半の月名殘を山のはには殘して

二百十五番

左　寂蓮

をしなへて梢吹しく山かせにひとりしなのる松のたとかな

右勝　左大臣

民もみな君に心たつくは山しけきめくみの雨うるふ世に

二百十六番

左　權大納言

あら磯のもくつの床の梶まくら袖より外の波になれぬる

右勝　越前

住よしの浦吹かせのしきなみに哀はかけよ岸のひめまつ

二百十七番

左勝　前權僧正

うみ山とものゝ哀を思ふにはいそもたかねもたゝ松のかせ

右　雅經

ならはすにすまはやすまむおのつから雲より遠の山のかけ庵

二百十八番

左　定家

わか友とみかきの竹もあはれしれよゝ迄なれぬ色も變らて

右勝　女房

とひもこぬ人の心も三輪の山しるしの杉の名こそ惜けれ

二百十九番

左勝　家隆

もろこしの空もひとつに雲きえてたれか三笠の山のはの月

右　左大臣

(ほ歟欣)此ころ關の戸さゝす成はてゝ道ある世にそたちかへるへき

二百廿番

左持　寂蓮

白雲の絕間にみゆるみやま路を賴むこととは打なかめつゝ

右　宮内卿

出かはる月日はかりをしるへにて行衞さたむる波の音かな

二百廿一番

左　權大納言

淺ちふや結ふ枕の露しけみまたかたしかぬ袖もしほれて

右勝　雅經

瀧の音松のあらしを枕にてむすはぬ夢のむすほゝれつゝ

二百廿二番

左　前權僧正

心すむ限り成けりいその上ふるき都のありあけの月

右勝　女房

なかむれは松の木陰にほの〳〵とあくるもつらき浦嶋の月

二百廿三番

左持　定家

歎かすもあらさりし身のそのかみを羡む計りしつみぬる哉

右　左大臣

かゝる世に契有てそ逢坂の小河の末は君にまかせむ

二百廿四番

左勝　家隆

あけは又越へき山の峯なれや空行月の末のしら雲

右　宮内卿

いつくより通ひけりとも見えぬ哉里をはなれて奥に住いほ

二百廿五番

左　寂蓮

柴のいほは嵐のまゝに住なして窓より内に雨そゝくなり

右勝　越前

身のうさは過にし方になしはてゝ神のしるしをみわの山本

二百廿六番

左　權大納言

松浦潟なきたる沖を見わたせはもろこしまてにつゝく白浪

右勝　女房

濱ひさし波のまに／＼眺むれはみゆる小嶋に有明の月

二百廿七番

左勝　前權僧正

思ふ事なとゝふ人のなかる覽あふけは空に月そさやけき

右　左大臣

世中を有にまかせて過るかなこたへぬ空をうちなかめつゝ

二百廿八番

左勝　定家

身をしれは人をも身をも恨みねとくちにし袖の乾く間そなき

右　宮内卿

暮かゝる野路の旅人分過て露のみやとるすゝのしの原

二百廿九番

左　家隆

こよろきの磯立ならしよる浪のよるへも見えす夕闇の空

右勝　越前

神さひて哀いく代に成ぬらん波になれたるあさくまの宮

二百卅番

左　寂蓮

待人のをとせぬよりもつらきかなとはてを過よ峯の松風

右勝　雅經

ふかき夜によもの嵐は音たえて野中にたてる松のひともと

二百卅一番

左　權大納言

我宿は槇の木かくれ枝しけみ月もさしこぬ谷の細道

右勝　左大臣

しるや君ほしをいたゝく年ふりてわか世の月も影たけに皃

二百卅二番

左勝　前權僧正

花ならてたゝ柴の戸をさして思ふ心のおくもみよしのゝ山

右　越前

尋けん人の心そみわの山いく世を杉の梢なりとも

二百卅三番

左　定家

十年餘り三とせはふりぬよるの霜をき迷ふ袖に春を隔てゝ

右勝　越前

あはれなる草の枕のかりねかな夜はのけしきも峯の嵐も

二百卅四番

左勝　家隆

明わたるをしまの松の梢より雲にはなるゝあまの釣舟

右　雅經

波よする磯屋か下のかち枕なれたるあまもぬれぬ袖かは

二百卅五番

左持　寂蓮
かりそめに鬪もる夜半のね覺まて袖にふれたる須磨の浦風
右　女房
吳竹のふしも定めすねもいらす鷄のなくまて月をこそみれ
二百卅六番
左持　權大納言
めに近く人をみきかぬ事こそあれ山里とても住はうき世を
右　宮內卿
初瀨山さそふ嵐やいかならんたえ〳〵になる入相の鐘
二百卅七番
左持　前權僧正
君か代に逢坂山をこえゆけはせきたる身共ならさらめやは
右　越前
夜もすから窓うつ雨に夢覺てことそともなく濡る袖かな
二百卅八番
左　定家
わか賴む心のそこをてらし見よみもすそ河にやとる月影
右勝　雅經
波のうへもなかめは限有物を心のはてそ行衞しられぬ
二百卅九番
左　家隆
あし曳の山のあなたの山のはを心つよくも出る月かな
右勝　女房
言とはんたれかは爰に隅田河名にしおふ鳥は有やなしやと
二百四十番
左　寂蓮
月をのみおしみし方をなかむれは都の山も山のあなたに
右勝　左大臣
いくとせの花と月とになれ〳〵て心の色を人にみすらむ
二百四十一番
左持　權大納言
道もなくおつる木の葉はまとふらし都の空やいつかたの雲
右　越前
一たひもにしに心をかけつれはいるもうれしき山のはの月
二百四十二番
左勝　前權僧正
花と月と思ひわたして行心これもさとりのはしめ成らん
右　雅經
故鄉のけふの面かけさそひこと月にそ契るさよの中山
二百四十三番
左　定家
春日野や下もえわたる思ひ草君のめくみを空に待かな
右勝　女房
都人さひしき宿の松かせに月をはみるかとたにとへかし
二百四十四番
左　家隆
ふみわけん物とも見えす朝ほらけ竹の葉山の霧の下露
右勝　左大臣
代々をへて君か御代をや松のかせ殘るかひ有住吉のきし
二百四十五番
左　寂蓮
芦田鶴もとしへぬるこそ哀なれ我世ふけゐの浦に鳴なり
右勝　宮內卿
おもひこしいなはの山の峯にしもたのめぬ松の嵐をそきく

二百四十六番

左　　　權大納言

水清みにこらぬ御代のためしには嶋の外まて名になかる也

右勝　　雅經

朝露にきつゝもなれぬ旅衣はる〴〵ぬれむ袖をしそ思ふ

二百四十七番

左持　　前權僧正

神のます木のもと涼し朝夕に君かねかひをみつの濱かせ

右　　　女房

住よしの松はいく代とことゝへは岸うつ波そ磯にこたふる

二百四十八番

左勝(持イ)　定家

曇りなき日吉の宮の夕たすきかけし思ひのいつかはるへき

右　　　左大臣

和歌の浦の芦へのたつのさしなから千年をかけて遊ふ比哉

二百四十九番

左持　　家隆

いつもかくさひしき物か津の國の芦屋の里の秋の夕暮

右　　　宮內卿

千世まてや松をはともに思ふらむなを末遠き君かよはひを

二百五十番

左勝　　寂蓮

まよひこし昔の跡は男山道ある時に哀ともみよ

右　　　越前

波のみかとまやの下のうき枕もりきて月も袖ぬらしけり

右老若歌合以醍醐大納言冬基卿自筆本挍合了

新宮撰歌合 建仁元年三月廿九日 作者隱名褒貶

題

霞隔遠樹　羇中見花　雨後杜鵑　松下晩涼

山家秋月　湖上曉霧　嵐吹寒草　雪似白雲

逢不遇戀　寄神祇祝

作者

左方

左大臣良經　內大臣通親　權中納言公繼

釋阿　越前　散位隆信

左近衞中將通具　散位有家　散位保季

上總介家隆　寂蓮　散位鴨長明

散位賀茂季保

右方

御製　前權僧正慈圓　權大納言忠良

權中納言兼宗　參議公經　大宰大貳範光

宮內卿　讃岐　丹後

左近衞權中將定家　左近衞權少將雅經　左兵衞佐具親

左馬助家長

讀師

左方　左近衞中將通具

右方　參議公繼(經歟)

講師

左方　上總介家隆

右方　左近衞權少將雅經

判者　釋阿

一番　霞隔遠樹

左持　内大臣

もえいつる梢は嶺の草葉にて野邊のけむりと立霞かな

右　女房

浦の松の色やまさると春みれは霞そたてるしかのから崎

左歌を右方に申云。峯の梢を草葉とみて。野邊のけふりとかすみをまかへたる心。上下たかひてや聞(ゆ)る。左方陳申云。誠にみねを野邊とみるにはあらす。眺望のこゝろには。詩なとにも常にいひならへる事也。右の歌を左方特申旨なし。

判者申云。左歌右難申旨もわるき難にはあらす。右歌姿心ことにおもしろし。但かつは一番の左の歌なれは。持とすへし。

二番

左持　左大臣

なかめこしおきつ波間の濱ひさき久しくみせぬ春かすみ哉

右　參議公經

たかせさす六田の淀の柳原みとりもふかくかすむ春かな

左歌を右申云。上に詠こしとをきて。下にみせぬといへる。同心の病かいかん。右歌を左申云。たかせさす六田のよとは。いつことおもへるにか。六田の淀とは。吉野川とこそ。萬葉集にもみえたれ。柳原六田のよとに。證歌の侍るにやおほつかなし。右陳云。六田の淀の柳。古歌に讀ならはして侍にや。猶證歌を申へしと申。

判者申云。左歌姿宜けれとも。なかめの詞うたかひ有。右歌六田淀おほつかなし。又持とすへし。

三番

左　寂蓮

末とをき松のみとりも埋もれてかすみそ波にうきしまか原

右勝　左近衛權少將定家

みつしほにかくれぬ磯の松の葉もみらく少なく霞むはる哉

右云。末とをきとをけるよりすへて聞よからぬにや。右歌を左申云。松の葉こそあまりにくはしくきこゆれ。

判者申云。みらくなといへる詞。わろき事なれと。宜も聞えねと。すゑとをきといへるにはまさるへくや。

四番

左持　羇中見花　寂蓮

旅の空いくよの雲にふしなれて思ひもわかぬ花のゆふかけ

右　霞隔遠樹　慈圓

みよし野の山のはふかし朝かすみこむる梢を雲にまかせて

左歌を右申云。ことなる難なし。剩頗宜歟の由申。右歌左又申旨なし。

判者申云。歌のすかた艷には聞(ゆ)れと。殊花を思る心すくなきや。右も又あさかすみ。こひねかはれぬさまに侍り。持とすへし。

五番

左勝　羇中見花　左大臣

けふも又櫻にやとをかり衣きつゝなれゆく春のやまかせ

右　霞隔遠樹　雅經

からにしき秋のかたみと立かへてはるは霞の衣てのもり

左歌を〔右〕殊申旨なし。右歌左申云。はるの霞の歌に。から錦秋のかたみとをける。よしなくや。判者以レ左爲レ勝。

六番

左持　羇中見花　有家

みやこより吹こん風のをとつれも花にはつらき山路也けり

右　宮内卿

ふるさとのたより思はぬなかめ哉花ちる比のうつの山こえ

左歌右申云。吹こんといへるかせのをとつれ。耳にたちて聞〔ゆ〕るにや。右歌左申云。なかめかなといへる。なかむれはなとゝこそ。ふるくも讀ならはして侍れ。なかめと云ものゝ有やうにや聞ゆらん。

判者申云。宇津の山越伊勢物語にも。つたかえてしけりてなとゝこそ申たれ。花には讀ならはさすや侍らん。右方人。當時櫻おほく咲たる由陳申せとも。なかめことに心ゆかすとて。持とす。

七番

左　雨後時鳥　通具

むらさめのはるゝ雲間に時鳥月かけちきるさよの一聲

右勝　羇中見花　雅經

岩ねふみかさなる山を分すてゝ花もいく重のあとのしら雲

左歌右方申云。月かけ契るとは。いかにちきれるにか。

右歌左難なきか宜由を申。判者右もて勝とす。

八番

左持　雨後郭公　内大臣

ほとゝきす聲は晴間にをとつれてしつくをのこす軒の立花

右　羇中見花　慈圓

よもぬれし片野のみのゝかり衣花の雪にはやとからすとも

左歌右申云。五月雨のはれまと云るは。又もふりぬへきにや。雨の後の心にはいかゝ。左申云。はれまなと云事は。雨後の事常の事也。右歌左申云。旅の心少にや。又交野に櫻なと。ことに聞えすや侍らん。判者。左歌晴間しつくなとも雨としも聞ぬにや。右歌たえて櫻のなと讀るも。かたのゝかたにかりせし時の歌なり。歌のさまも優に聞〔ゆ〕れは。勝とさためらるゝを。左をかたのゝかり。日數もつもらす。たゝひとへにきはめたる旅の遊戲は。羇中の題には不レ叶やと申を。右方申云。晴間といへる計にて。雨の後に用む事如何侍へき。すへてまの字は。よろすの事のあひたにいひならはしたれは。雨やみぬる心はなしと申によりて。又持とす。

九番

左持　雨後杜宇　左大臣

五月雨をいとふとなしに時鳥人にまたれて月をまつらむ

右　羇中見花　女房

風ふけは花は波とそこえまかふ分こし旅のすゑのまつ山

左右ともに申旨なし。判者。ともにおもしろく聞侍り。左の月をまつ心。右花の波。ともにすてかたく侍とて。持とす。

十番

左　雨後時鳥　有家

ほとゝきす待よひなから村雨のはるれはあくる雲に鳴なり

右勝　讃岐

さみたれの雲まの月の晴行をしはしまちけるほとゝきす哉

右歌殊に宜也。左不レ及ニ沙汰一。可レ勝。判者同以レ右爲レ勝。

十一番

左持　松下晩涼　散位資信

立よれは夕浪涼し住吉の松を秋風ふかぬものゆへ

右　大宰大貳範光

秋やときかせや涼しき松かけのおもひもわかぬ夕まくれ哉

左右申狀。又如レ先。判者。左の夕浪涼しなと。宜聞〔ゆ〕るにや。仍持とす。

十二番

左勝　山家秋月　通具

さゝの庵露をく床のこけむしろしく物もなき秋のよの月

右　松下晩涼　公經

友さそふ片山かけの夕涼み松ふく風にひくらしの聲

判者申云。友さそふといへる。すゑにもさせるゆへなきにや。左歌優にきこゆ。可レ爲レ勝。

十三番

左勝　山家秋月　左大臣

時しもあれ故郷人はおともせて深山の月に秋風そふく

右　松下晩涼　慈圓

木末より夕かせおつる松かねは秋まつ夏のなこりなりけり

判者申云。右歌雖レ無ニ指難一。左猶宜によりて爲レ勝。

十四番

左　湖上曉霧　公繼

にほてるや浪路はるかに霧こめてやとりかれたる有明の月

右勝　松下晩涼　丹後

涼しさを松の木かけに先たてゝまたこぬ秋の夕くれの空

左申云。右歌尤宜。況以承伏。

判者申云。左歌雖レ無ニ指難一。右歌宜。仍爲レ勝。

十五番

左持　湖上曉霧　内大臣

あけぬるか霧のたえまにみほかさき漕はなれゆく遠の浮舟

右　松下晩涼　兼宗

夕まくれ秋のけしきを先たてゝ袂にかよふ松のしたかせ

判者云。をちの浮ふね。いかにそきこゆれとも。右もことなる事なけれは。爲レ持。

十六番

左　湖上曉霧　〔名欠〕

しかの興やいつくを霧のへたつらん浪よりいつる有明の月

右勝　山家秋月　慈圓

かけきよき月よりおつる袖の雨の雲は秋のよ軒は山のは

右申云。左歌は只望ニ秋月一。曉の隔なし。題の心如何。左無ニ申旨一。判者云。右歌。心詞尤宜有レ興。仍爲レ勝。

十七番

左　嵐吹寒草　内大臣

秋はてしあはれは猶そのこりける花もあらしの野邊の夕暮

右勝　山家秋月　定家

都人さらても松の木のまより心つくしの月そもりくる

判者云。右爲レ勝。

十八番

左　嵐吹寒草　釋阿

をさゝ原夜半のあらしは拂へとも葉分の霜は猶むすひけり

右勝　山家秋月　　女房

柴の戸やさしもさひしき深山への月ふく風にさほしかの聲

右申云。をさゝ原は色かはらぬものなれは。枯たる草にあらすや。左申云。さゝは草也。冬は寒けれは寒草になとよまさらん。判者云。右歌あな面白。右勝と定申。

十九番

左持　嵐吹寒草　　保季

山おろしに枯野のまくす打なひき霜に恨やむすひ果らん

右　山家秋月　　雅經

よそにみし雲よりおくに宿しめて梢におつる山のはの月

右申云。くすのはのうらみ。かれはてぬ折にや讀へからむ。判者云。いつれも無二殊事一。爲レ持。

廿番

左　嵐吹寒草　　越前

更に又秋にもかへすあらし哉霜かれはつる萩の下葉を

右勝　湖上曉霧　　(名闕)

うすきりの汀をこむる有明は月にうらあるしかのから崎

右申云。萩の下葉を秋にもかへすとは。いかに讀るにか。左申云。あはれを又かへす也。判者云。うす霧。少耳にたてとも。歌のさまよろし。仍爲レ勝。

廿一番

左　嵐吹寒草　　左大臣

木の葉散て後はむなしき外山より枯野の草にあらしおつなり

右勝　湖上曉霧　　女房

しかの浦やにほてる沖に霧こめて秋もおほろの在明の月

左右未レ申先に。判者。右歌殊心肝にそむ。左又優なりといへとも。猶以レ右爲レ勝よし申也。

廿二番

左勝　雪似白雲　　内大臣

雪ならは月とともにや眺めやらんはらひなはてそ嶺の白雲

右　湖上曉霧　　右馬助家長

にほの浦やうら傳ひゆく霧のまにたえ〴〵はるゝ有明の月

右歌人々云。去年の御製に似たり。仍左爲レ勝之由。判者申。

廿三番

左持　雪似白雲　　寂蓮

あらし吹みねにつれなき白雲のたつかとみれは松の雪おれ

右　嵐吹寒草　　定家

あさちふやのこる葉末の冬の霜をきところなくふく嵐哉

左右。たかひに宜由申レ之。判者。ことに優也。可レ爲レ持。

廿四番

左　雪似白雲　　釋阿

故郷はさゆる雲とやみよし野のよしのゝおくの峯のしら雪

右勝　嵐吹寒草　　範光

萩原やいまはうれはに吹かへてあらしになりぬ野への秋風

左歌宜由。人々これを申といへとも。判者以レ右爲レ勝。

廿五番

左　雪似白雲　　季保

よそにては雪ともえこそ白雲のかはらぬ色をみよしのゝ山

右勝　嵐吹寒草　　女房

草のはら露のやとりを吹からにあらしにこほる道しはの霜

不及左。右之心爲レ勝之由。判者申レ之。

廿六番

左勝　寄神祇祝　内大臣

君か代のちとせのかけやうつるらん天てる光わくる鏡に

右　嵐吹寒草　權大納言忠良

〔萩原や霜をく色はかはれとも嵐を秋のなこりとそ思ふ

判者以左爲勝。

二十七番

左勝　寄神祇祝　左大臣

君か代のしるしとこれを宮川の峯の杉原色もかはらす

右　雪似白雲　定家〕

冬のあしたよしのゝ山の白雪も嶺にふりにし雲かとそ思ふ

判者。左爲勝。

廿八番

左　遇不逢戀　越前

くやしさにおつる泪をせきかねて空なる名をや袖に殘さん

右勝　雪似白雲　女房

雪やこれはらふたかまの山風につれなく雲の峯にのこれる

左歌不及沙汰。右歌可爲勝之由。判者申之。

廿九番

左勝　逢不遇戀　釋阿

泊瀬河又みんとこそたのみしか思ふもつらしふたもとの杉

右　寄神祇祝　宮内卿

數しらぬ君かよはひは神かせやみもすそ川のせゝのしき浪

判者。以右勝とすへき由申を。左右ともに左を可爲勝之由申請也。

三十番

左　遇不逢戀　家隆

いまこんの契は夢かしきたへのまくらの上にあり明の月

右勝　寄神祇祝　女房

神風や八重のさかきは重ねてもみもすそ川の末そはるけき

右歌祝によりて可勝之由。判者申之。

三十一番

左　遇不逢戀　長明

なかれてと何思ひけんかち人の渡れとぬれぬあふせ計りは

右勝　寄神祇祝　慈圓

君か代をよろつ代とこそかそふらめ七の社の三のひかりは

以右勝之由。判者左右ともに申之。

三十二番

左持　遇不逢戀　寂蓮

うらみわひまたし今はの身なれとも思ひなれぬる夕暮の空

右　丹後

わすれしのことのはいかに成ぬらんたのめし暮は秋風そ吹

左右互に宜由を申。判者。兩首ともに心優也。勝負定申に不及。

三十三番

左勝　内大臣

逢みしは昔かたりのうつゝにてそのかね事を夢になせとや

右　定家

人心ほとは雲ゐの月はかりわすれぬ袖のなみたとふらむ

判者云。左右宜聞れと猶左はまさる成へし。

三十四番

左勝　左大臣

しはし社こぬ夜あまたと數へても猶山のはの月をまちしか

右　具親

中々に又たのまるゝ世なりけりかゝるへしとは契やはせし

右方申云。古歌宜といへとも。題におゐては。左歌尤可レ勝歟。判者同レ之。

三十五番

左　權中納言公繼

たえぬるはわか心ともいひつへし涙をとはゝいかゝ答へむ

右勝　公經

あはれなる心のやみのゆかり共みしよの夢を誰かたのまん

右歌ことに可レ勝之由。左右たかひに申レ之。判者同レ之。

三十六番

左勝　通具

ちきりきやあかぬ別に露をきし曉はかりかたみなれとは

右　宮内卿

恨みてもぬるゝ袖かななき名のみをしまか磯の蜑ならね共

左申云。あふてあはぬ戀のこゝろおほつかなし。

判者云。以レ左可レ爲レ勝。

群書類從卷第百九十二

和歌部四十七 歌合十三

影供歌合 建仁元年八月三日

題

初秋曉露　關路秋風　旅月聞鹿　故郷虫

初戀　久戀

作者

左方

女房 後鳥羽院

左大臣正二位藤原朝臣(良經)

內大臣正二位兼行右近衞大將皇太子傅源朝臣(通親)

前權僧正慈圓

正二位行權大納言藤原朝臣忠良

參議正三位行左近衞中將藤原朝臣公經

從三位行式部大輔藤原朝臣光範

女房小侍從

女房讃岐

女房丹後

沙彌寂信

正四位下行左近衞中將源朝臣通具

散位從四位上藤原朝臣保季

從五位下行右馬助源朝臣家長

從五位上行隼人正大江朝臣公景

散位從五位下鴨縣主長明

散位從五位下賀茂縣主季保

正六位上行左兵衞少尉藤原朝臣秀能

右方

正四位下行左近衞權少將兼安藝權介藤原朝臣定家

從五位上守左近衞權少將藤原朝臣雅經

沙彌寂蓮

散位正四位下藤原朝臣有家

女房越前

女房宮內卿

從三位藤原朝臣範季

散位正四位下藤原朝臣隆信

沙彌釋阿

法印靜賢

沙彌生蓮

正五位下行右近衞權少將藤原朝臣良平

従五位下守左兵衛佐源朝臣具親
僧慶印
正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣景頼
正六位上行右衛門少尉藤原朝臣季景
散位従五位下中原朝臣宗安
武者所正六位上平朝臣景光

讀師
左大臣

講師
左近衛權少将定家

判者
沙彌釋阿
但於ニ判者歌一者衆議。

一番　初秋曉露

左勝　女房
きのふまてかゝる露とや野へに置秋きにけりな曉のかせ

右　定家
夏と秋と行かふ空や明ぬらむかたへもしらぬ道芝の露

二番

左勝　左大臣
秋のきていくかもあらぬに荻原や曉つゆの袖になれぬる

右　雅經
なつと秋と行かふ風や吹ぬらし露ちりそむるしのゝめの道

三番

左勝　内大臣
秋きてはいくかもへぬに白露の置てわひしきしのゝめの空

右　沙彌寂蓮
きぬ〳〵の恨はしらぬ袂まて露をはつゆと秋はきにけり

四番

左勝　前權僧正
秋きても月はまたしき袖の上に露はかりこそ有明のそら

右　有家朝臣
秋はきぬ露は草葉に置初てゆふへしらるゝしのゝめの空

五番

左　忠良卿
あけぬなりけふより秋と詠むれは萩の下葉にしのゝめの露

右　女房越前
眞野の浦や曉かけて吹風にまた秋なれぬ露の萩はら

六番

左持　公經卿
から衣すそのゝ露におきぬれて明ほのまよふはつ秋の空

右　女房宮内卿
露ならはかくしもいかゝ曉のむら雲あやしはつ秋の空

七番

左持　光範卿
風の音におとろくのみか曉の露のをくにも秋はきにけり

右　範季卿
鳥なけは立ていくのゝあさちふに露をき初る時はきにけり

八番

左勝　女房小侍從

しのゝめの風にあはれをさきたてゝこれや秋くる道芝の露

右　隆信朝臣

秋きぬとまた白露のをきもあへす風に玉ちるのへの明ほの

九番

左　女房讃岐

夜をこめてさゝわくる袖に置露や秋の涙のはしめ成らん

右勝　沙彌釋阿

秋きぬと枕につくるかれのをとにやかてもかゝる袖の露哉

十番

左持　女房丹後

秋は猶ゆふへの空と聞しかとたつ曉そつゆはをきける

右　法印靜賢

秋きぬとかねもきかする篠目に朝ちるつゆもけしきこと也

十一番

左　沙彌寂信

秋立てあかつきことのしら露やきみか三千世の數にをくらん

右　沙彌生蓮

秋きぬと詠めもあへぬ風のをとにやかて露をく曉の空

十二番

左持　通具

曉はなみたや露にかさぬらん秋やは深き小のゝしのはら

右　良平朝臣

葛の葉のうらめつらしく吹風にをけはかつ散しのゝめの露

十三番

左　保季朝臣

秋來ぬとおもひもあへぬねさめより袖にいさよふ篠目の露

右　具親

明やらぬともには露をすかのねの長くもよはの成にける哉

十四番

左　家長

草のはら秋の日かすはあさちふの露の底より鳴立にけり

右勝　俗慶印

秋風も袖にしらるゝ明ほのに露なれそむる庭の萩原

十五番

左　公景

秋やくる露やまかふとたとりてもまことはしるき東雲の空

右　景頼

きのふこそ夏くれたけのよをこめて秋にや露の結ひ初らん

十六番

左勝　長明

秋きてもいくよかはふるしのゝめや岡へに白き玉さゝの露

右　季景

涼しさはかたへ過ぬる秋風に明るもしらぬ萩の下露

十七番

左持　季保

うちつけに秋の哀を白露のいつならしけん篠目の空

右　宗安

明ゆくは秋きにけりとしら露にをき分れぬる夏の面影

十八番

左持　秀能

眞葛原露吹はらふしのゝめの風うらめしき秋はきにけり

右　景光

秋はまた結ふ日數もあさちふにいつしか深きしのゝめの空

一番　關路秋風

左勝　女房

夏たにも月は秋なる清みかた波ふく風の此ころのこゑ

右　定家

宿とはん人にもかくや須磨の浦關吹こゆる秋の初かせ

二番

左勝　左大臣

人すまぬふはの關屋の板廂あれにし後はたゝ秋の風

右　雅經

さひしさはこゝにとゝめつ清見潟關もる波に秋風そふく

三番

左勝　内大臣

風の音やみにしむはかり聞ゆらん心つくしのもしの關もり

右　寂蓮

春やまたあふ坂こえん秋風にけふ立かへるしら川の關

四番

左勝　前權僧正

清見潟せきもる浪の秋の聲これや都の荻の上かせ

右　有家

白河の關の秋風立かへりいつふるさとに雪のゆふくれ

五番

左　忠良

きよみかた秋のあはれはとめてけり關守波にふしの山風

右勝　越前

關もりのまたひとへなる衣てにいたくなふきそすまの秋風

六番

左持　公經

木するゑふく風より秋の色ちりて紅葉をわくる白河の關

右　宮内卿

都へはしくれんころとたのめとや秋風ふきぬしら河の關

七番

左持　光範

みちのくの衣の關に秋やたつゆふこへくれは袂すゝしも

右　範季

山おろし紅葉をさそふ夕されは錦ふみうきしら河の關

八番（判欠）

左　小侍從

吹すくるすまの浦風うらむなよ秋のけしきはとゝめ置とも

右　隆信

都出てかさなる山の秋風にむかしのあとをしら河のせき

九番

左　讃岐

春のくる道とそきゝし相坂の關にも秋の風は吹けり

右勝　釋阿

時しもあれ秋の旅ねをすまの關身にしむ風のかへる白波

十番

左　丹後

霞わけ都立けんいにしへのあとおもほゆるしら河の關

右勝　靜賢

誰かまたふしの秋風みにしみて清見か關を月にこゆらむ

十一番

左勝　寂　信
やとりつる衣の關をけさ立は袂すゝしき秋かせそふく
右　生　蓮
秋風は衣の關にたちにけり月日もしらぬひなの長路は
十二番
左持　通　具
浦かよふ秋風さひしすまの關吹こす浪のをとにつけても
右　良　平
すゝか山關こえならす道すからみねの木のはに秋風そ吹
十三番
左　保　季
相坂やいまは夜寒の山風をわらやのとこに誰しのふらん
右勝　具　親
あふ坂の山吹こゆる秋風も聲をとゝむる關のすきむら
十四番
左勝　家　長
秋風のふきくるかたやそれならん都の空もしら河のせき
右　慶　印
さひしさを誰にかたらむ秋風にひとり關もるあしからの山
十五番
左勝　公　景
しら河の關の秋風立ぬなり都のかすみ月日へたてゝ
右　景　綱
春霞ともに立けん旅人のい□し風ふくしら河の關
十六番
左　長　明
むかしたれわひて住けん逢坂の關の秋風袂すゝしも
右勝　季　景
秋はなをすまの關路の夕まくれ浦吹風の浪の音まて
十七番（判欠）
左　季　保
かへるさの色はこすゑに契りをかし秋風立ぬ逢坂の關
右　宗　安
人こそあれ風は過ゆく浦路哉清見か關の秋の夕くれ
十八番
左勝　秀　能
音羽山峯の木の葉やかはるらむ關路すゝしく秋風そふく
右　景　光
あはれ春かすみしものを相坂やせき路の杉に秋かせそ吹
一番　旅月聞鹿
左勝　女　房
夜をかさね月に朝たつ旅衣きつゝなれゆく小男鹿の聲
右　定　家
野への鹿そふるなくねは我ひとりいてし都も月は見るとも
二番
左勝　左大臣
わするなよかりねに月をみやきのゝ枕そ近きさをしかの聲
右　雅　經
草むすふ露の枕に袖しきて月にしかなく小夜のなか山
三番
左勝　内大臣
よをこめてたつへきのへの名殘こそ鹿の音なから有明の月

右　寂蓮

都人月はへたてぬおもかけにならはぬものはさをしかの聲

四番

左勝　前權僧正

草まくらなみたもよほす鹿の音や今宵の月もくもるなる覧

右　有家

秋の空なをいひしらぬ旅ね哉よわたる月にさをしかの聲

五番

左勝　忠良

まはらなるしはのかり庵に月もりて枕に近きさを鹿の聲

右　越前

月寒み野への鹿の音身にしみてころも片しき旅ねをそする

六番

左　公經

男鹿なくは山のしけり分くれて月に友とふ手枕の露

右勝　宮内卿

月影はきつゝもなれぬ旅衣すそのゝはらかさをしかの聲

七番

左持　光範

月のすむさゝ浪山に一夜ねてしかのなくねを枕にそきく

右　範季

草枕かり庵てらす月のみかつまよふしかの聲もわりなし

八番

左持　小侍從

をかやふくたひねの床にもりくるは月や友なふさを鹿の聲

右　隆信

月みてはなくさみぬへき旅ねにも猶袖ぬらすさをしかの聲

九番

左　讃岐

草枕鹿のねそはぬ月にたになくさめかねしさらしなの山

右勝　釋阿

船とむるあかしの月の有明に浦より遠のさほしかのこゑ

十番

左勝　丹後

松かねのまくらに鹿の聲はして木の間の月を袖に見るかな

右　靜賢

いかにせん月は隈なき旅の庵におほろに鹿の聲を聞かする

十一番

左持　寂信

今宵たれ秋の野山に旅ねして月をなかめて鹿を聞蘭

右　生蓮

草まくらつけのゝ野への月影にむかしおほゆるさを鹿の聲

十二番

左　通具

旅の空我とともなる月影に嵐もしかの聲送るなり

右勝　良平

したひゆく我をも友に哀とや鹿なくみねに月殘るらん

十三番

左持　保季

月をみて都をいてしあらましにおもひしまゝの小男鹿の聲

右　具親

おもひしりぬのへはすみかの鹿のねに草の枕の有明の月

十四番

左勝　家長

月のすむあまの河原に宿かれはかたのゝ鹿も哀そふ也

右　慶印

露むすふ旅ねの床にもる月を袖にうらむるさほしかの聲

十五番

左持　公景

篠原や旅ねの月にふしわひて幾夜か鹿の聲恨らむ

右　景頼

月影にいせのはま荻敷そめし昔もかくや鹿の鳴らん

十六番

左勝　長明

草枕哀を袖にさき立て月にやとかれさほしかのこゑ

右　季景

庵むすふ小のゝ篠原月さひてたへぬあまりに鹿の音そする

十七番

左　季保

鹿のねをすそのゝ原に先てゝ山路を送る有明の月

右勝　宗安

月は猶都もすみき草枕かりにもきゝし鹿の聲かは

十八番(判欠)

左　秀能

草枕月はくもらぬ袖の雨やすそのによはるさを鹿の聲

右　景光

よもすから野への枕にすむ月のあはれをそふるさを鹿の聲

一番　故郷虫

左勝　女房

飛鳥のあすかの宮のきり／＼す月やむかしの秋になく也

右　定家

むかしへをしのふる里の淺茅生に今もや人を松虫の聲

二番

左勝　左大臣

高圓の尾上の宮の秋萩をたれきてみよと松むしの聲

右　雅經

あれぬとて鳴かまかきのきり／＼すをのれ淋しき蓬生の宿

三番

左　内大臣

虫のねそかはらぬ秋の恨にてすみすてゝける淺茅生のさと

右　寂蓮

住なれし宿はむかしのあさち原誰としりてか松虫の聲

四番

左勝　前權僧正

故里の秋の夢ちの關もりはみかきかはらの松虫のこゑ

右　有家

あれぬなりたか住すてし宿なれやまかきの野への虫の聲々

五番

左　忠良

いく夜へて虫のねしけくあれぬらんむくらの宿の秋の夕暮

右勝　越前

たれきけとあれたる宿の蓬生に聲ふりたてゝ鈴むしの聲

六番

左勝　公經

秋をへて幾夜もしらぬ故里に昔おほゆる松虫の聲

右　　　　　　宮内卿

故郷の庭にてしりぬ虫のねをおもはん宿は草にまかせて

七番

左持　　　　　光範

故郷のかきほはやかて虫のねの聲々しけき野へにそ有ける

右　　　　　　範季

つたへくる人もよりこぬ故郷にこゑの絶せぬきり〳〵す哉

八番〔判欠〕

左　　　　　　小侍從

昔わかすみしわたりを尋ぬれはこたへ顏なるきり〳〵す哉

右　　　　　　隆信

はかなしや誰に契りを深草の野となる里に松虫の聲

九番

左　　　　　　讃岐

我ひとりあるし顏にて故郷に人まつむしの鳴明すらん

右勝　　　　　釋阿

むかしたにまかきものらと成し跡にたれまつ虫の今も鳴覽

十番

左持　　　　　丹後

故郷の庵をは野へとなしはてゝ虫の音のみやあるし成らん

右　　　　　　靜賢

故郷は庭のむくらのほとよりも猶しけみなる虫の聲哉

十一番〔判欠〕

左　　　　　　寂信

秋の夜は猶長岡の故郷に昔をしのふ鈴むしのこゑ

右　　　　　　生蓮

故郷の野らと成ぬる籬まて猶ぬし有と松虫のこゑ

十二番

左　　　　　　通具

あれにけり昔のかへのきり〳〵すよもきか杣に聲そ殘れる

右勝　　　　　良平

いにしへの高津の宮の跡ふりて虫の音のみそ秋を忘れぬ

十三番

左持　　　　　保季

志賀の宮昔なからのきり〳〵す誰手枕の跡おもふらん

右　　　　　　具親

跡もなき蓬か杣の庭の面にむかしにならふ松虫の聲

十四番

左　　　　　　家長

たからへし一むらすゝき道絕て虫の音しけきのへと成らん

右勝　　　　　慶印

さりとてもたのましものを故郷にこれやならひの松虫の聲

十五番

左持　　　　　公景

かり人はのへとなるはかり住すてゝふりゆく里の鈴虫の聲

右　　　　　　景頼

あれはつる宿のあさちにふりせぬはむくらか下の鈴虫の聲

十六番

左持　　　　　長明

住すてゝ人めかれにし淺茅生にたかならはせる松むしの聲

右　　　　　　季景

きて見れは思ひし宿のかたみかと庭のよもきに虫の聲のみ
十七番
左持　季保
故郷は野原の庭のものとみて猶心ある松むしのこゑ
右　宗安
宿はあれて庭はのへなる故郷にあるしとなりて虫の侘らん
十八番
左勝　秀能
今こんと契るともなき故郷に長き夜すから松虫のこゑ
右　景光
くちにけるまかきの跡に音つれて獨ときはの松虫の聲
一番　初戀
左持　女房
ならはすよ秋なれはとてをくか露かたしく袖の打しめる迄
右　定家
我戀はけふ初時雨もるやまにかはる下葉の秋のひとしほ
二番
左持　左大臣
すまの蜑のもしほの烟たちまちにむせふ思ひを問人のなき
右　雅經
けふよりや人に心をおきつ浪かけてもしらぬ袖の浦風
三番
左持　内大臣
習はねはまたしらね共これやさは怪しかるへき詠め成らん
右　寂蓮
けふこそはほのかに人をみしま江の蘆の浦はの打萎れつゝ
四番
左勝　前權僧正
行末をおもふもかなしやかてさは泪にくもる秋のみかつき
右　有家
いつしかとふかきためしは紅の初花そめの一しほをみよ
五番
左　忠良
しらさりし戀に泪をかけそめてならはぬ袖をしほりそへぬる
右勝　越前
我戀はあさかの沼の花かつみかつ〳〵袖のしほれそめぬる
六番
左　公經
きのふまてよそに詠めし浦人のしほたれ衣袖もほしあへす
右勝　宮內卿
またしらぬ詠めは今宵いつか又ものや思ふと人にとはれん
七番
左持　光範
さゝれ石のなかの思ひを打いてゝ仄かにけふそしらせ初ぬる
右　範季
獨ぬることはえならぬ物なれやあはせぬ胸をこかし初ぬる
八番
左　小侍從
物おもへは泪の色はかはるかと戀になれたる人にとはゝや
右勝　隆信
しるへとて風のたよりをたのめとも猶跡もなき波の上かな
九番

左　　讃岐

しらせてもかひなかりけ何せんに思ひ返さて色に出にけん

右勝　　釋阿

覺束なはつとやたしのかたかへりかりはのをのゝ戀の行末

十番

左持　　丹後

いつよりか思合せんよひ〳〵のいめに見えしは我そゝれ共

右　　靜賢

思ひかねけふふみそむるあ□いつれの誰かあふ坂の關

十一番

左勝　　寂信

ほのかにもいかてしらせん逢夜迄うかひにくたす篝火の影

右　　生蓮

身に包むかひもあらしをよしさらは漏してをみん人の心も

十二番

左勝　　通具

戀くさやいつ花そめの袖の露いかになれてか色かはるらん

右　　良平

きのふ迄かくやは袖のしほれにしあやしや露の處せきまて

十三番

左持　　保季

しらさりし歎きやこれと思ふよりうちぬる宵のたゝならぬ哉

右　　具親

人しれぬ思ひといふやこれならん我みよりこそ恨み初ぬれ

十四番

左持　　定家

今日よりは烟をよそに思ふかは戀せしすまの蜑のもしほひ

右　　慶印

せかしたゝたえぬおもひの涙川いつしか袖は色かはるとも

十五番

左持　　公景

きえわたる雪まにみゆる初草のけふよりもえて物や思はん

右　　景頼

おもひあまりけふふみそむる丸木橋わたる計の契りとも哉

十六番（判欠）

左　　長明

春日のゝ雪も□かなおほえぬ袖の□の露

右　　季景

戀草の種まきそむる程もなくいつしか袖にむすふ露哉

十七番

左　　季保

いかにせんおもひ立ても から衣なれぬにあらふ袖の玉水

右勝　　宗安

見そめつるけさよりしける戀草にいつしか深き袖の白露

十八番

左勝　　秀能

人しれぬ涙はけふそ初しくれいつしか袖の色に出にける

右　　景光

またしらぬ戀路とおもふやすらひに中々まよふ我心かな

一番　　久戀

左勝　　女房

今こんといひしはかりを頼みにていく長月をすくしきぬ覽

右　定家

宿りせぬくらふの山は夢路にてまとふ思ひの年そふりぬる

二番

左勝　左大臣

難波人いかなるえにか朽果んあふ事なみに身をつくしつゝ

右　雅經

年月はむなしき空に移りきてふるきなかめになれぬ俤

三番

左勝　内大臣

あちきなしこの［　　］こむ世のはてよいかゝ［　］

右　寂蓮

みるめなきまくらの［　　］としふるあまも［　　］

四番

左勝　前權僧正

戀しなて年も遙にみくまのゝ浦のはまゆふかさねきにけり

右　有家

しるらめやいつより袖のぬれそめてけふ徒に朽はてぬらん

五番

左持　忠良

いくかへり涙しくるゝ秋をへてたえぬなけきの色を染らん

右　越前

夏引の手ひきの糸の年へてもたえぬ思ひにむすほゝれつゝ

六番

左持　公經

まちわひて三年も過る床の上に猶かはらぬは涙なりけり

右　宮内卿

住吉の千木のかたそきあはすして久しきためし我をよにみよ

七番

左　光範

逢ことを今や〳〵とまつ山のまつにてのみや世をはつくさむ

右　範季

昔よりいもゆへ袖をしほりつゝみつはくむにもやゝ勝り鳬

八番

左　小侍從

いつまてとつらからさりし昔よりやすむまもなき我心哉

右勝　隆信

［　］ことはむかしにあらはれて［　］なみたの袖［　］

九番

左　讃岐

契りおきしその［　　］袖に我なもくちやはてなん

右　釋阿

［　］契りしものをいはのまつつる巣くふ迄成にける哉

十番

左持　丹後

百夜ともしちのまろねは頼めけりいつ我戀の限りなるらん

右　靜賢

おもひきやわかの浦にてみし人に老の浪まて袖ぬれんとは

十一番

左持　寂信

頼めをけ今いくとせをまてとたに命をかけんその言のはに

右　生蓮

つゝいつの井つゝにかけし昔よりみつはくむまて思ふ心を

十二番

左勝　通具

年をへて涙のみをにしつめともくちぬは戀の心なりけり

右　良平

人心うきたのもりに引しめの幾年かけて朽はてぬらん

十三番

左持　保季

年ふれはたのめ〔　　〕たえてむなしき庭に荻の上かせ

右　具親

恨みてもかゝるおもひに〔　　〕つれなしとやは人はいふへき

十四番

左勝　家長

くらへこしふりわけ髪のなかからへてもといひそめし〔　　〕

右　慶印

年をへて〔　　〕しきたへの枕もうとくなりやはてなん

十五番

左勝　公景

住吉のきしの姫松それならて幾世か袖に浪をかくらん

右　景頼

いかゝせんとしふる戀を〔　　〕やそせの波の袖に〔　　〕

十六番

左持　長明

岩の上のたねは〔　　〕おもふ〔　　〕

右　季景

いくとせも〔　　〕さはさらすとて數ならぬとは思ひやはなき

十七番

左勝　季保

涙のみふるの神杉いく世へてつらきしるしの猶のこるらん

右　宗安

月影のたくひともなき我戀もつもれは人の老となりけり

十八番

左持　秀能

〔　　〕おもひそめても〔　　〕

右　景光

〔　　〕

撰歌合 建仁元年八月十五夜

題

月多秋友　月前松風　月下擣衣　海邊秋月
湖上月明　古寺殘月　深山曉月　野月露凉
田家見月　河月似氷

作者

左

女房
左大臣正二位臣藤原朝臣
沙彌釋阿
俊成卿女
宮內卿
越前
丹後
散位正四位下臣藤原朝臣有家
沙彌寂蓮
從五位下行右馬助臣源朝臣家長
散位從五位下臣鴨縣主長明
正六位上行左兵衞尉臣藤原朝臣秀能

右

內大臣正二位兼行右近衞大將皇太子傅臣源朝臣
前權僧正慈圓
正二位行權大納言臣藤原朝臣忠良
參議正三位行左近衞權中將越前權守臣藤原朝臣公經
小侍從
讃岐
散位正四位下臣藤原朝臣隆信
正四位下行左近衞權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家
正四位下行左近衞權中將臣源朝臣通具
散位正四位下臣藤原朝臣保秀
從五位上守左近衞權少將臣藤原朝臣雅經
從五位下守左兵衞佐臣源朝臣具親
從五位上行隼人正臣大江朝臣公景

讀師
講師
判者
沙彌釋阿

一番　月多秋友

左勝　左大臣

月ならて誰かはしらむ君か代に秋のこよひのいくめくり共

右　讃岐

今宵より千代のかけをそ數へつるてる月なみの秋の中半に

左右歌讀申訖。

判者。左勝之由申レ之。

二番　題同

左勝　寂蓮

高砂の松もむかしに成ぬへし猶ゆく末は秋の夜の月

右　前權僧正

君か代のかけにかくれぬ秋なれは月に千歲を契らましやは

右方叙申ニ左歌宜之由ー。判者同爲レ勝。

三番　題同

左勝　女房

ゆく末の千歳の秋はいくめくりなれても夜半の月を眺めん

右　雅經

いく秋を空に契て君か代にすさむかきりのあり明の月

左。千とせの秋いくめくりの月。高振ニ神妙之思ー。已希ニ古今之間ー。仍爲レ勝。

四番　題同

左　有家朝臣

君か代の契りおもへはひさかたや月の都のゆくすゑのあき

右勝　内大臣

行すゑを猶久方の秋の月なにかはらはの空たのめなる

左歌右方殊無ニ申旨ー。右歌左方。猶久方の月。近比きこえしらへに。すゑの句すこし戀の歌にかよへる所や侍るらんと申せと。右方の二句なとはさりあふへきにあらすと。判者戀心にかよへるも。中々にめつらしきすかた侍りとて。勝と定申了。

五番　題同

左勝　宮内卿

行末もいく代の秋の友なれやなれてもあかぬ山のはの月

右　公經卿

年を經ておなし雲井にいくめくり變らぬ秋の月をみるらん

判者。右歌ともの心すこしおほつかなくやとて。以レ左爲レ勝。

六番

左勝（左月前松風　右月多秋友）　女房

庭のまつ木のまもりくる月影に心つくしの秋風そふく

右　權大納言

雲ゐにてなれし月にや契をきてはこやの山の萬代の秋

右の下句この間侍し歌也と。左方申レ之。判者以レ左爲レ勝。

七番　題同

左持　左大臣

秋の夜のひかりもこゑもひとつにて月のかつらに松風そ吹

右　隆信朝臣

君ならてたれかちきらん秋の月ともにすむへき萬代のかけ

左は歌のすかたたかく。右は祝の心ふかしとて。爲レ持。

八番　月前松風

左勝　釋阿

月の影しきつの浦のまつかせにむすふ氷をよする浪哉

右　内大臣

これやこの月をみとりのまつか枝に秋吹風の身にもしむ色

判者以レ右爲レ勝。但左歌ことによろしくきこゆ。可レ勝之由。左右共定申。

九番　題同

左勝　宮内卿

月すめは空もみとりにおなし色の松をしらする嶺の秋かせ

右　通具朝臣

をとこそあらめ泪もいかにしくるらん月に冴たる峯の松風

判者以レ左爲レ勝。

十番　題同

左勝　俊成卿女

月にたにあくかれはつる秋の夜の心のこさぬまつの風かな

右　具親

くもりなく山のはまてとはらふ也月より西の峯のまつかせ

右の月より西。此ころあまたきこゆるうへに。左の心のこさぬ松の風。ことによろしく侍は。可レ爲レ勝之由。判者申レ之。

十一番　題同

左勝　寂蓮

月は猶もらぬ木のまも住吉の松をつくして秋かせそ吹

右　保季朝臣

はる〳〵と波より松にかへり來て月にこたふるよさの浦風

よさのうらかせ。住吉の松にをよひかたしとて。以レ左爲レ勝。

十二番　題同

左勝　鴨長明

なかむれはちゝに物思ふ月にまた我身ひとつの嶺の松風

右　小侍從

すみよしの月はしきつの浦波に松ふく風も神さひにけり

松ふく風の神さひにける心。誠によみふりて侍るうへに。我か身ひとつのみねの松風。めつらしとて。以レ左爲レ勝。

十三番　左月下擣衣　右月前松風

左勝　宮内卿

まとろまて詠めよとてのすさみ哉麻のさころも月にうつ聲

右　前權僧正

秋は月つきすむ夜半は松の風いかに詠めていかにしのはむ

右の松のかせもいふに侍れと。なかめよとてのすさみなとをける。あさのさ衣月にうつ聲。身にしみて聞ゆとて。左をもちて爲レ勝。

十四番　月下擣衣

左勝　女房

あさちふの月ふく風に秋たけてふる里人は衣うつなり

右　定家朝臣

秋かせによさむの衣うちわひぬふけゆく月のをちの山もと

右歌よはくきこゆるうへに。左の歌ことによろし。よりて爲レ勝。

十五番　題同

左勝　左大臣

さとはあれて月やあらぬと恨みても誰あさちふに衣うつ覽

右　通具朝臣

さよふけてさらては色もころもなしたゝ月影に衣うつさと

左歌殊によろし。仍爲レ勝。

十六番　左海邊秋月　右月下擣衣

左勝　俊成卿女

波のうへはちさとのほかに雲さえて月影かよふ秋のしほ風

右　讚岐

すか原やふしみの里も秋の夜は月におきゐて衣うつ也

又以レ左爲レ勝。

十七番　題同

左勝　越前

きのくにや秋さへ霜をおきつかせ吹あけの月の有明の空

右　公景

かりにこん人のためとやてる月に衣うつらむ深草のさと

吹上の月。なすらへならすおかしくきこゆとて。又勝とす。

十八番　題同

左勝　宮内卿

心あるをしまのあまのたもと哉月やとれとはぬれぬ物から

右　内大臣

君ゆへに恨むるつちの音はしていかなる里の月を見るらん

月やとれとはぬれぬものから。又かきりなくおかしとて。勝とす。

十九番　海邊秋月

左持　釋阿

たとへてもいはんかたなし明石かた秋のも中の波のうへの月

右　小侍従

おきつ風ふけゐの浦による浪のよるとも見えす秋のよの月

又々可レ爲レ持。判者申レ之。

廿番　題同

左持　丹後

わすれしな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は見るとも

右　雅經

秋は今宵浦はあかしの波の上にかゝる月をはいつか眺めむ

あかしの波かゝるなと。より所なきにはあらねと。こと浦にすむ。めつらしくおかしとて。持と定申。

廿一番　題同

左勝　鴨長明

松嶋やしほくむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは

右　讃岐

松嶋やをしまのあまも心あらは月にや今宵袖ぬらすらん

左歌殊によろし。仍爲レ勝。

廿二番　題同

左　藤原秀能

あまのやくもしほの煙我からに時しもわかすおほろなる月

右勝　内大臣

あま人も月に心のあれはこそなたかき秋をまつか浦嶋

左の月のおほろなるはかり。歌のさまをしらす。右かちとすへきよし。これを申。

廿三番　湖上月明

左勝　丹後

よもすから浦こく船は跡もなし月そ殘れるしかのからさき

右　内大臣

夜もすからひらの山風うみふけは月もてよする志賀の小波

うみふけはなと。こたいなるさまに侍れとも。めつらしき所なけれは。猶以レ左爲レ勝。

廿四番　題同

左勝　女房

からさきやにほの水うみ水の面に照る月なみを秋風そ吹

右　讃岐

をちかたや雲もへたてぬ志賀の浦の波と空とにすめる月影

にほの水うみの水のおも。めつらしとて左爲レ勝。

廿五番　題同

左　釋阿

にほてるや月の氷はしかの浦に猶さゝ波のかすは見えけり

右勝　前權僧正

しかの浦にわきてや月のやとるらん曇らぬ神の跡を尋ねて

右歌寄二事於嚴重之神威一。依レ之爲レ勝。

廿六番　左古寺殘月　右湖上月明

左勝　釋阿

又たくひあらしの山のふもと寺杉のいほりにありあけの月

右　雅經

からさきや秋のこよひをなかむれは照る月浪にうら風そ吹

右のてる月なみ。さきの左歌にむけにを とりてきこゆとて。また左をもて爲レ勝。

廿七番　題同

左勝　藤原秀能

はつせ山あかつきかけていつる月やかて木のまに有明の空

右　具親

月きよみ波のよそなるうき雲も行ゑあとなきしかの浦かせ

左歌又宜。仍爲レ勝。

廿八番　古寺殘月

左　宮内卿

秋は猶おほつかなしや初瀬山このうれもとにのこるよの月

右　公經卿

れ覺とふかねよりおしきなかめ哉をはつせ山の有明の月

左のこのうれもと。ことにきゝならはす侍れと。右又めつらしき心侍らねは。なすらへて爲レ持。

廿九番　題同

左勝　鴨長明

はつせ山かねのひゝきにおとろけはすみける月の入方の空

右　具親

これやこの殘るひかりの影ならんたかのゝ山の有明のつき

をの〳〵申ていはく。左歌かねのひゝき。入かたの月。猶夜ふかくは。殘月の心いかゝ侍らん。又陳云。遊子猶行殘月なといふも。たゝ曉月也。曉月殘月。その心ことにわくへからぬにや。猶歌のさまよろしとて。勝とすへきよし。判者是を申。

卅番　深山曉月

左　女房

すみなれてたれ我やとゝ眺むらんよしのゝおくに有明の月

右勝　前權僧正

よし野山月はたかねにかたふきてあらしにのこる鐘の一聲

左深山たゝおもひやるはかりなり。おなしくはわれすみてみんやまさるへく侍らんと定申。

卅一番　題同

左持　左大臣

深からぬとやまの庵のね覺たにさそな木の間の月は淋しき

右　雅經

人はこてまきのはわけの月そもるみやまの秋の有明の頃

左右ことなる事なし。仍爲レ持。

卅二番　題同

左持　宮内卿

まちえても明やらぬ夜の月は猶道たと〳〵しみやま木の陰

右　權大納言

よし野山すゝふきみたる秋風にたれしのへとて有明の月
みちたと〳〵し。すゝ吹みたる。ことにいふにしもきこえす。仍爲レ持。

卅三番　題同

左持　俊成卿女
秋のよのふかきあはれをとゝめけりよしのゝ月の有明の空

右　內大臣
あはれなり鳥もをとせぬ山なれは明るもしらす秋のよの月

又ことなる事なし。持とすへきよし定申。

卅四番　左深山曉月　右野月露凉

左勝　有家朝臣
はなをのみおしみなれたるみよし野の梢におつる有明の月

右　內大臣
しら露にあふきををきつゝ草の原おほろ月夜も秋隈なきに

右歌幽玄の事に思ひよりて侍れと。左うるはしく。よろしき歌也とて。爲レ勝。

卅五番　題同

左勝　鴨長明
よもすからひとりみやまのま木のはに曇るもすめる有明の月

右　定家朝臣
をきあかす野へのかり庵の袖の露己か住家に月さへそゆく

左歌ひとりみ山のま木の葉にくもるもすめるなと。もともよろし。仍爲レ勝。

卅六番　野月露凉

左勝　女房
月すめは露を霜かとみやきのゝこ萩原は猶あきのかせ

右　具親
我とたにやとりかねたる秋風の野原の露に有明の月

右やとりかねたるは。春影供歌合の中に。湖上霧の歌に侍しにや。宮城野の秋風いとおもしろく聞ゆとて。以レ左爲レ勝。

卅七番　題同

左勝　左大臣
秋の野のしのに露をくすゝの庵はすゝろに月もぬるゝ貌なる

右　前權僧正
草枕月すむのへのしら露にまたひとへなるたひころも哉

しのに露をく。よろしく聞ゆ。仍左爲レ勝。

卅八番　題同

左持　俊成卿女
あさち分やとる月さへ影さむき露ふかくさの野への秋風

右　雅經
袖のうへにふけゆく月の影なからつゆ吹むすふ野への秋風

右歌よろしくきこゆれと。左歌又をとらすおかしとて。爲レ持。

卅九番　題同

左勝　越前
わくるたに寒けき野への白露によかれすやとる秋のよの月

右　保季朝臣
月やとる床は草葉のかり枕をきあへぬ露にのへの秋風

よかれすやとる。殊によろし。よりて爲レ勝。

四十番　左野月露凉　右田家見月

左勝　藤原秀能

おき原や露を秋風吹からに袂をならすありあけの月

右　隆信朝臣

かと田ふく風のあはれをよそとても(本ノマヽ)月より外に訪人もなし

つゆをあきかせといへるわたり。又尤可レ爲レ勝。

四十一番　田家見月

左勝　女房

宿近き山田かりいほのいなむしろたれしきなれて月をみる覽

右　通具朝臣

鹿のねは馴にけらしな小田の庵に露なきあかし月はもれ共

山田かりいほのいなむしろ。しく物なくおかしくきこゆとて。又爲レ勝。

四十二番　題同

左　藤原秀能

わさ田もるとこの秋風吹そめてかりねさひしき山のへの月

右勝　定家朝臣

さをしかの妻とふを田に霜をきて月影さむしをかのへの宿

右柿本古風を思へり。山の邊の夜月にまさると定申。

四十三番　題同

左勝　左大臣

秋の雲しくとはみれといなむしろ伏見の里は月のみそすむ

右　具親

いつれとも思ひさためぬれ覺哉いなはの風に秋の月かけ

左歌秋浮(稼イ)雲をなせる心。海邊月歌。すかた詞もいとおかしとて。勝と定申。

四十四番　題同

左勝　俊成卿女

稻葉ふく風にまかせてすむ庵は月そまことにもり明しける

右　前權僧正

かりのくる伏見のを田に夢さめてねぬ夜の庵に月をみる哉

左歌又優也。仍爲レ勝。

四十五番　(左河月似氷 右田家見月)

左勝　左大臣

これも又神代はきかす立田河月の氷に水くゝるなり(とはイ)

右　內大臣

いなむしろかり田の庵に月すめはしき忍ふへき袖の露かは

月の氷に水くゝる心おかしく聞ゆるうへに。いなむしろかり田とつゝけたる。いかゝとて。以レ左爲レ勝。

四十六番　河月似氷

左　釋阿

千鳥なく河かせさむみ月さえて氷は秋のものにそ有ける

右勝　前權僧正

よしの川月をやとして行水はをとはかりこそ凍らさりけれ

左の氷は秋のといへる。思へる所なし。仍以レ右爲レ勝。

四十七番　題同

左勝　越前

月影はこほりと見えてよしの川岩こすなみに秋風そふく

右　雅經

月影やいかにさえゆく薄氷なみはたつたの秋の川かせ

いかにさえゆくうす氷。くたけて聞ゆ。よりて左勝とす。

四十八番　題同

左勝　寂蓮

月きよみこほりはてたるやま川のせゝにつれなき水の白浪

右　通具朝臣

月のすむ河せのなみはさむからて冬にしられぬ氷ゐにけり

又以ν左爲ν勝。

四十九番　題同

左勝　家長

網代木にいさよふ波のをとはして月影こほるうちの河かせ

右　保季朝臣

いは間には浪はさすかにたつた川月はまことの氷ならねは

右いは間にはなみはきえにくきにや。以ν左爲ν勝。

五十番　題同

左勝　俊成卿女

おほ井川ゐせきにかよふ波のをとは凍らてこほる川の影哉

右　定家朝臣

すみわたる月かけ清みみなせ川むすはぬ水を氷りとそみる

こほらてこほる。ことによろし。又以ν左爲ν勝。

影供歌合 建仁二年五月廿六日

題

曉聞郭公　松風暮涼　遇不會戀

作者

左	右
左馬頭藤原親定	權中納言藤原兼宗
左大臣	參議源通具
内大臣	女房宮内卿
前權僧正慈圓	女房伯耆
權大納言藤原忠良	女房越前
前權中納言藤原隆房	散位藤原有家
權中納言藤原公繼	左近衞權少將藤原定家
參議藤原公經	散位藤原保季
右中將源通光	上總介藤原家隆
沙彌釋阿	左兵衞佐源具親
俊成卿女	沙彌寂蓮
散位藤原隆信	散位鴨長明
右馬助源家長	左兵衞少尉藤原秀能

讀師

講師

衆議判

一番　曉聞郭公

左勝　内大臣

横雲のたな引山の郭公なく一聲にしらみ出ぬる

右　越前

うちつけに物かなしきはほとゝきす雲間にまよふ曉のこゑ

二番

左勝　權大納言藤原忠良

時鳥夜半にまたれて有明のねられぬ月に雲路行聲

右　左兵衞佐源具親

郭公雲のいつくにあり明のつきせぬ聲の名殘なるらん

三番

左勝　左馬頭藤原親定

今こんとたのめやをきしほとゝきす月そ待いつる有明の聲

右　散位有家

ほとゝきす雲のいつくに有明の［　　　　　　　］

四番

左勝　前權僧正

尋ねつるかひも有明の郭公月にたひねの雲になくなり

右　左近衞權少將藤原定家

郭公なく一聲のしのゝめに月のゆくゑもあかぬ空かな

五番

左勝　左大臣

月にゆくせきの旅人出ぬらし山に友なふほとゝきすかな

右　上總介藤原家隆

今はとやをちかへり鳴ほとゝきすをのか五月も有明の山

六番

左持　前中納言藤原隆房

明はてはいたくな啼そ郭公またておきぬる人もこそきけ

右　女房伯者

五月雨に明やらぬ空のほとゝきすかさなる雲の空に鳴也

七番

左持　參議藤原公經

郭公なく程なくて有明の雲のいつくに聲うつるらむ

右　參議源通具

郭公よはも名殘や忍ふらんなを明やらぬ一聲のそら

八番

左持　權中納言藤原公繼

明るまの雲の外にそ聞ゆなるまた里なれぬ山ほとゝきす

右　權中納言藤原兼宗

またれつる心のほとも郭公見よとや來なく明かたの空

九番

左勝　俊成卿女

ほとゝきす鳴行なみたのこしけりわかたまくらの明方の空

右　沙彌寂蓮

時鳥有明の月の入かたに山のはいつる夜半の一こゑ

十番

左勝　左近中將源通光

ほとゝきすあかぬ名殘も有明の月をはなれて遠さかる聲

右　散位藤原保季

有明の月こそ雲の空ならめ聲もおほろのほとゝきす哉

十一番

左勝　沙彌釋阿

あはれいかゝおりしもきつる郭公雲間の月の有明の空

右　女房宮内卿

郭公名殘はさてもおもほえてあかていく野のあかつきの聲

十二番

左勝　右馬助源家長

郭公なくや五月をかそふれは今いくよかは有明のころ

右　左兵衛尉藤原秀能

五月山おりはへてなけ郭公夏もふけ行ありあけの空

十三番

左持　散位藤原隆信

またよひの月そ待つるほとゝきすなく一聲に有明のそら

右　散位鴨長明

せきすへぬならひはなそや夏のよの山ほとゝきす入方の月

一番　松風暮涼

左　親定

夏山のしかにつけこせ松の風尾上にいまは秋の夕くれ

右　有家朝臣

高砂のおのへの暮になかむれは秋風いそく松のむら立

二番

左持　左大臣

松にふく風になかるゝたつた川木葉はかりや秋の夕暮

右　家隆朝臣

暮行は風は秋なるふるさとに色こそ見えね松の下草

三番

左持　内大臣

たゝならぬ夕まくれ哉思ふにも松ふく風の音は身にしむ

右　越前

すゝしさはいつくと風のわかねとも野中の松の夕暮の聲

四番

左勝　前權僧正

山かけやむすふ岩井の水の面に秋の浪たつ松の夕風

右　定家朝臣

暮ぬるか夏の空さへをしほ山松よりつたふ風の下かけ

五番

左勝　權大納言

柴の戸にさすやこのまの夕つくひ影も涼しき軒の松風

右　具親

木のまより風も涼しく成ぬるか月のみいまはもりの下かせ

六番

左持　隆房卿

山をいつる月のかつらにかよふらしたもとになるゝ松の下風

右　俳者

今さらに夏やなからん一聲の秋にそかよふ松の夕風

七番

左持　公繼卿

木末よる日影やにしに成ぬらん涼しさまさる松の風哉

右　兼宗卿

松風はことのねにこそきこゆなれ秋にもかよふ夕間暮かな

八番

左　公經卿

たかさこの尾上の松の夕すゝみしかなきぬへき風の音哉

右勝　通具朝臣

月をこそかはらすすめとまつ山の松よりこえて秋風そふく

九番

左勝　通光朝臣
夕まくれ秋とや今はまつの風すゝしくかよふ蟬の羽ころも
右　保季朝臣
さらねとも夕波すゝしまたきより秋となつけそ磯の松風

十番
左勝　釋阿
夕かせの枝しつかなる松かけにかねてしらるゝ千代の秋哉
右　宮内卿
夕附日さすや梢をよそにみて山かけすゝし庭の松かせ

十一番
左勝　俊成卿女
大かたにきかまし風の夕さへわか身ひとつの松の音哉
右　寂蓮
さをしかや猶秋まてと忍ふらん夕はいまも松にふくかせ

十二番
左勝　隆信朝臣
ゆふまくれ岩井の水は結はねと夏なきとしの松風の聲
右　鴨長明
風もよし夕日をさへて松たてる夏をいとはゝ住のえの濱

十三番
左勝　家長
松風にこたふおのへの鐘の聲すゝしくひゝく入相の空
右　藤原秀能
月すめはいまた夏なる夕すゝみ秋とも吹か松の下かせ

一番　遇不會戀
左勝　左大臣
これまてもさそな昔のならひ哉待夜いまはのかたしきの袖
右　家隆朝臣
忘れしの行末かはるけふまてもあれはあふ夜を猶頼みつゝ

二番
左勝　親定
わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出にけり
右　有家朝臣
いはさりき頼めてとはぬ夜な〳〵をこれは情そ後忍へとは

三番
左持　前權僧正
枯はつるうつゝこそあらめいかにせん夢も冬野の淺茅原哉
右　定家朝臣
我戀は雪ふりうつむ小萩原うつろふ露をうらみし物を

四番
左持　公繼卿
忘れしとたのめし事と頼むやと見えんことさへ今は悔しき
右　兼宗卿
逢みての後こそ人もつらけれは唯我からのねをのみそなく

五番
左持　内大臣
忘るなよ忘れしとこそ契りしをたか僞りになせとかは思ふ
右　越前
今こんといひし計に夜比へてむなしき床に有明の月

六番
左持　釋阿
淺ましやかへてしやまは山城のゐての玉水何むすひけん

右　　宮内卿
たれとまた別れもやらてなかむ覧月も出ぬとおしみし物を
七番〔判欠〕
左　　權大納言
ふみ分し庭はあさちに跡たえてはらひし夜半の露は袂に
右　　具　親
せめてかく物思へとのあまりにや忘るなとたに契り置けん
八番
左持　　俊成卿女
夢かとよ見し面影も契りしも忘れすなからうつゝならねは
右　　寂　蓮
里はあれぬ空しき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹
九番
左勝　　隆房卿
見すもあらすみもせぬ程の詠めたにさこそ昔は日を暮しけれ
右　　伯　者
なからふとまたしもあはし世中のいきて歎かぬ我身なり共
十番
左持　　通光朝臣
かたみとてまなくもちるかしかすかに馴しなこりの袖の白露
右　　保季朝臣
かたみとてほのふみ分し跡もなし今はむかしの庭の荻原
十一番
左勝　　隆信朝臣
中々にとまるにつけてつらき哉わすれかたみの袖のうつり香
右　　鴨長明
待なれしなこりはかりのうたゝねに面かけ誘ふ玉たれの月
十二番
左勝　　公　經
中々にあふ道芝のかれはては行てにかゝる物はおもはし
右　　通具朝臣
みわの山たれ頼めけん忘られてふるの神杉しるしたになし
十三番〔判欠〕
左　　家　長
年もへぬわれや行けん君やこしそのかよひちは苔生にけり
右　　藤原秀能
つらかりし名殘やさてもやみなゝん袖のせはきにふる泪哉

水無瀨釣殿當座六首歌合建仁二年六月

作者
藤原朝臣定家
藤原朝臣親定後鳥羽院御作名

判者
藤原親定

一番　河上夏月

左　定家朝臣

たかせ舟下す夜川のみなれさをとりあへすあくる頃の月影

右　親定

いかたしのうきね秋なる夏の月きよ瀧川にかけなかるなり

左の歌。くたす夜川のみなれ棹。とりあへすあくらん頃の誠に名殘おほかるへし。右の歌さしたる事なしといへとも。しはらく持なとにや侍へき。

二番　海邊見螢

左　定家

すまのうらもしほの枕とふ螢かりれの夢路わふと告こせ

右　親定

津の國のあしやの里に飛螢たか住かたのあまのいさり火

左の歌行平のちうなこん。もしほたれ侘けんすまの浦。誠に面影も有心地して。有かたく侍るうへに。秋風吹とかりに告こせなといへる古歌思ひ出られ。結句なとことにやさしく侍り。右の歌詞めつらしからさる上に。初の五文字ことさらこひねかふへくもなかるへし。

三番　山家松風

左　定家

松風や外山をこむるかきねより夏のこなたにかよふ秋かせ

右　親定

柴の戸をあさけの夏の衣手に秋をともなふ松の一こゑ

左の歌夏のこなたにかよふ秋風。めつらしく侍れとも。またあなかちには聞えす。右の歌夕なとや。松風ともなふへき柴の戸をあさけの衣。頗よせなきに似たるをや。

四番　初戀

左　定家

春やときとはかりきゝし鶯のはつ音をわれとけふやなか南

右　親定

おほかたのゆふへは里のなかめより色付そむる袖の一しほ

左の歌初戀の心珍らしく侍へし。右の歌上句少しさもやきこえて侍れと。いかさまめつらしからす。左少勝。

五番　忍戀

左　定家

夏草のましるしけみにきえぬ露をきとめて人の色を社みれ

右　親定

歎きあまり物やおもふと我とへは先しる袖のぬれて答ふる

左の歌ましるしけみにきえれ露といへるわたり。返々おかしくこそ侍れ。爲ㇾ勝。

六番　久戀

左　定家

幾世へぬ袖振山のみつかきにたへぬ思ひのしめをかけつと

右　親定

思ひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕くれの空

右の歌。無ニ指事一。又さしたるとかなくは。一番なとは可ㇾ勝歟。

群書類従卷第百九十三

和歌部四十八　歌合十四

水無瀨殿戀十五首歌合　建仁二年九月十三夜

題

春戀　夏戀　秋戀　冬戀　曉戀
暮戀　羇中戀　山家戀　古鄕戀　旅泊戀
關路戀　海邊戀　河邊戀　寄雨戀　寄風戀

作者

左馬頭藤原親定 後鳥羽院　左大臣 良經
前大僧正 慈圓　權中納言公繼
俊成卿女　宮內卿
大藏卿藤原有家　左近衞權少將藤原定家
上總介藤原家隆　左近衞權少將藤原雅經

讀師　家隆朝臣
講師　定家朝臣
判者　皇大后宮大夫入道釋阿
當座付二勝負一追加二判詞一

一番　春戀

左 勝　左大臣
鶯の氷れる涙とけぬれと猶我袖はむすほゝれつゝ

右　俊成卿女
おもかけの霞める月そやとりける春やむかしの袖の涙に

左歌は雪のうちに春はきにけり鶯のといへる歌をとり。右歌は月やあらぬ春やむかしのといふ歌の心也。ともにえんにはみえ侍るを。左なを我袖はむすほゝれつゝといへるすかた。殊によろしく見え侍れ〔は〕。以レ左爲レ勝。

二番

左 勝　親定
月殘る彌生の山の霞む夜をよゝしとつけよまたすしもあらす

右　宮內卿
さても又慰やとてなかむへきそなたの空も薄かすみつゝ

右の歌。さても又とをけるより。すかたおかしくはみえ侍るをうす霞つゝといへる末の句や。猶くもいひならはしても聞えすや侍らん。左彌生の山のかすむ夜をなといへる心すかたいみしく見え侍り。もとも勝とすへし。

三番

左 持　有家朝臣

夢にたにみぬ夜な〳〵を恨みきて衣はる雨しほれてそふる

右　雅經

人しれすをさへてむせふひまことに涙打いつる袖の春かせ

左衣春雨しほれてそふるといへる詞。よせおほく見え侍り。右又彼とくる氷のひまことにといへる歌の心を。戀に引なして。涙打いつる袖の春かせといへる。左はよせおほく。右はえんにみゆ。仍なすらへて持とすへし。

四番

左勝　定家朝臣

忘れめや花にたちまよふ春霞それかと計見えし明ほの

右　家隆朝臣

恨みても心つからのおもひ哉うつろふ花に春のゆふくれ

左はそれかと計見えし明ほの。右はうつろふはなにはるの夕くれとよめる。すかた心ともによろしくは見え侍るを。勝負此つかひは時の衆儀にや侍らんと申を。左の勝と定られ侍し也。

五番

左勝　前大僧正

戀もせてなかめましかはいかならん花の梢におほろ月夜を

右　權中納言

思ひきや匂ひを送る梅かえの移りかをのみみにしめんとは

左なかめましかはいかならんとをきて。花の梢に朧月夜をといへる。心すかたいみしくおかしく見え侍り。右おもひきやとをきて末に何とせんとはなといへる事。常の事にやと人々申され侍りしかは。左をもて勝と定申侍りし也。

六番　夏戀

左勝　親定

さてもいかに岩かき沼のあやめ草あやめもしらぬ袖の玉水

右　俊成卿女

はかなしや夢も程なき夏の夜のねさめ計の忘れかたみは

寐覺はかりの忘れかたみはといへるも。優ならさるにはあらす侍るにや。しかあれとも。さてもいかにとをきて。あやめもしらぬ袖の玉水といへる。物のあやめしるはかりの者の。いかゝよろしからすとは思ひ侍るへき。以左爲勝。

七番

左　宮内卿

みに餘る思ひをさても夏虫のわれひとりとや色にいつへき

右勝　有家朝臣

忍ひあまりなくや五月のあま雲のよそにてのみや山郭公

左はみにあまるといひ。右は忍ひあまりといへるこゝろは。ともにゆうならさるにはあらす侍るを。左は我ひとりとや色に出へきといひ。右はよそにてのみや山ほとゝきすといへる文字つゝき。すこしはまさるへきにや侍らん。

八番

左持　權中納言

よそにては軒の橘かほる夜にむかし語りをしのふとやみむ

右　雅經

きかし只人待山の郭公我もうちつけのさよの一こゑ

左歌心かすかには侍れと。すかた詞ゆうに侍るを。右歌

始にきかしたゝといへるは。あまりなるやうに侍れと。末の句なと。今すこし心有て聞え侍るにや。なそらへて持とすへし。

九番

左勝　左大臣

草ふかき夏野分行さをしかの音にこそたてね露そこほるゝ

右　家隆朝臣

時そとや夜半の螢をなかむらんとへかし人のしたの思ひを

左歌よそへいふすかた詞。誠におかしくこそ見え侍れ。右歌とへかし人の下の思ひをといへる。またよろしくは侍るを。句のはしめのとの字。ふかき難には侍らねと。歌合には只なるよりは耳にたつやうに侍るうへに。なを左の音にこそたてね露そこほるゝ。もとも勝へきにや侍らん。

十番

左持　前大僧正

夢にたにかさねそかぬる夏衣かへすとすれは明るしのゝめ

右　定家朝臣

郭公空につたへよ戀わひてなくや五月のあやめわかすと

左かへすとすれは明る東雲。まことにおかしく見え侍るを。右空につたへよ戀わひてなくや五月のなといへる。文字つゝき。あしからす侍るにやとて。れいのをのく〳〵さため申侍りて。持にまかりなりにし也。

十一番

左　秋戀　親定

よしやさは頼めぬ宿の庭に生るまつとなつけそ秋の夕かせ

右勝　前大僧正

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすくる荻の上風

左歌よしやさはといへるより。待となつけそ秋の夕かせ。心詞まことにおかしくは見え侍るを。右歌又色もなくてやといひ。袖より過る荻のうはかせ。いみしくおかしく侍るを。猶勝負申へきよし侍しかは。左劣るへしとは覺え侍らすなから。右の勝へきにや侍らんと。めつらしからん爲に。殊更に申侍りし也。まことにかたはらいたくこそ侍りしか。

十二番

左　權中納言

わか心いかにかすへきさらぬたに秋の思ひはかなしき物を

右勝　定家朝臣

今宵しも月やはあらぬ大かたの秋はならひを人そつれなき

兩首ともに秋のおもひに堪さる心はおなしきを。左は潘岳か秋興賦の心にても侍らん。悲しきものをといへるや。やすらかならんと聞ゆるを。右は心猶あるさまにやと聞え侍りしかは。勝になり侍りし也。

十三番

左持　俊成卿女

なき渡る雲ゐの鴈の涙さへ露をく袖の夜半のかたしき

右　雅經

なかめしや心つくしの秋の月露のかことも袖ふかきころ

左雲ゐの鴈の涙さへなといへる。心すかたよろしくは侍るを。右又露のかことも袖ふかきころといへる末の句なと。おかしく侍れは。持とすへきにや。

十四番

左　左大臣

せく袖に（もイ）涙の色やあまるらんなかむるまゝの萩の上の露

右勝　有家朝臣

物思はてたゝおほかたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

両首の心すかた。ともにいとおかしく見え侍るを。しゐて委細に申へきむね侍りしかは。左せく袖にと侍るや。末に萩の上の露と侍るに。しゐてかなはすやと申侍りし。右はたゝおほかたの露にたにといひて。ぬるれはぬるゝ秋の袂をといへる。よろしくや侍らんさて。勝になされしにや侍らん。

十五番

左　宮内卿

物思ふたもとはいはす鹿のねはたゝおほかたのね覺なり鳬

右勝　家隆朝臣

思ひ入身は深草の秋の露たのめし末やこからしの風

左歌心すかたや〔さ〕しくは見え侍るを。右歌みは深草の秋の露といひ。たのめし末やこからしのかせといへる心。なをよろしく侍らんとて。勝になり侍りし也。

十六番　冬戀

左　左大臣

芦鴨のはらふ翅に置霜のきえかへりてもいく世へぬらん

右勝　雅經

霜ははや布留の中道中々にかれなて人を何したふらん

左歌心ことはよろしく。とかなく侍りけるを。右ふるの中道中々になといひ。かれなて人をといへる。すかたおかしくやとて。勝にまかりなりにしを。けさしつかにみ給へ侍れは。冬草ともあさちさもなくて。只中道かれなてといへる。いかゝと申へくやさ見え侍れとも。勝に定り侍りにけり。

十七番

左勝　宮内卿

落つもる涙の露はさよ衣さらても袖にみえけるものを

右　有家朝臣

しはしこそよそにみきはの薄氷とけてはやまし結ほるゝ共

左さらても袖になといへる。すかたふるまひ。まことに勝に侍りけり。

十八番

左勝　親定

うつり行まかきの菊と折々はなれこしころの秋をこふらし

右　權中納言

冬の夜は幾度はかり寐覺すといふもまとろむひまやなか覽

左歌。まかきの菊も折々はなとよせおほく侍り。すかたまことに有かたくのみ覺侍を。右歌増基法師か歌の心もおかしく侍るを。上の句殘りなくなりて見え侍る上に。戀の心もすくなくや侍らんさて。右の負になり侍りにし。

十九番

左勝　前大僧正

いたつらに千鳥鳴なる河風におもひかねても行かたそなき

右　家隆朝臣

戀をのみ菅のねしのきふる雪の消たにやらす山もしのゝ（みゝイ）に

左おもひかねてもゆくかたそなき。いみしくおかしくみえ侍るを。右すかのねしのき降雪のといへるは。よろしく侍るを。末の句山もしのゝにや。ふるき詞に侍れと。しゐて庶幾すへからすや侍らんとて。左かち侍りしなり。

二十番

左勝　俊成卿女

かよひこし宿の道柴かれ〳〵に跡なき霜のむすほゝれつゝ

右　定家朝臣

床の霜枕の氷消侘ぬむすひもをかぬ人のちきりに

左歌心すかたよろしく侍るへし。右歌も床の霜枕の氷なといひて。むすひもをかぬといへるもゆうには侍れと。左猶よろしく侍れは勝になりき。

廿一番　曉戀

左勝　家隆朝臣

忘れすよいまはの心つくはねの峯のあらしに有明の月

右　雅經

涙さへ鴫の羽かきかきもあへす君かこぬ夜のあかつきの空

左はいまはの心つくはねのといへる心よろしく。右はしきのはねかきかきもあへすといへる。彼君かこぬよは我そ數かくとといへる歌をおもへるも。ゆうには侍れと。左の峯の嵐に有明の月。猶まさり侍るへし。

廿二番

左勝　親定

白露のをきてわひしき別れをも逢にそかこつ有明の月

右　有家朝臣

またこんといひて別れしなこりのみなかむる月に有明の空

左は逢にかこつ有明の月。右はなかむる月に有明の空。いくほとのことには侍らぬを。上の句こそ殊外に侍りけれは。右彼今こんといへるはいみしく侍るを。又こんといひし計に長月のといへるは事の外に劣てそ聞え侍るなり。左しら露のをきてわひしきなと。勝侍るへし。

廿三番

左勝　前大僧正

たのめつる夜半もいまはの袖の雨に月さへ曇る有明の空

右　俊成卿女

おしみかね別れしよりも數々におもふかたみの曉の空

此右の歌。すかた詞いとよろしく侍るを。左夜半もいまはの袖の雨とをきて。月さへくもる有明の空こそ。上下始終ことによろしく聞え侍れ。仍勝に定申侍りしなり。

廿四番

左　宮内卿

今はたゝかせやはらはんうき人の通ひ絶にし庭の朝霜

右勝　定家朝臣

俤もまつ夜むなしき別れにてつれなくみゆる有明のそら

左の歌心すかたゆうに侍るを。うき人のといへるや。近ころも人よみて侍りしかと。いかにそよはきやうにや聞え侍るを。右の歌よろしくや侍らんとおもひ給ひしを。有明の空計にて。月なきやいかにとさたの侍りしを。作者やかて此本歌も月は侍らぬなりと申侍りしかは。まことにさこそ侍りけれとて。勝になり侍りしなり。

廿五番

左　　左大臣

もりあかす水のしら玉今はとてたゆむもしらぬ袖のうへ哉

右勝　　權中納言

明るまた何恨みけむ逢事のなごりも今は戀しき物を

左水のしら玉いまはとていひ。たゆむもしらぬなといへる心おかしく侍るを。右末の句やすらかに侍るへしとて。右の勝につけて侍りにしなるへし。

廿六番　　暮戀

左勝　　親定

いかにせんこぬ夜あまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空

右　　定家朝臣

なかめつゝまたはた思ふ雲の色をたか夕暮と君たのむらん

左歌こぬ夜あまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空といへる。いみしく侍りて。勝になり侍る。

廿七番

左　　宮内卿

今こんと只なをさりの言葉をまつとはなくて夕暮の空

右勝　　雅經

あちきなくそへし心のかへりこてゆくらんかたの夕暮の空

兩方のゆふくれの空。心すかたともによろしくこそ侍りけれ。待とはなくてといひしより。ゆくらんかたのといへる。いさゝか心のまさりて見え侍れは。右の勝になり侍るにこそ。

廿八番

左勝　　左大臣

何ゆへと思ひもいりぬ夕たに待出し物を山のはの月

右　　前大僧正

いかにせむ待へしとたに思よらて暮行鐘に打しほれつゝ

左まち出しものを山のはの月と侍るを。右待へしとたにおもひよらてといひて。暮行かねにといへる文字つつき。これもいみしく侍れと。左のやまのはの月。なをたちのほりて侍れは。勝と定め申也。

廿九番

左持　　俊成卿女

身にそしむ人なき床の夕まくれ涙の露をはらふ秋風

右　　家隆朝臣

今はたゝまたれしあとの夕暮の曇るはかりそかたみ也ける

左人なき床のゆふまくれといひ。涙の露をはらふ秋風よろしく侍るを。右曇るはかりそかたみなりけるといへる。又えんに侍れは持にてなん侍るへし。

三十番

左　　權中納言

荻の葉に風うちそゝく夕くれや人を戀しと思ひそめけん

右勝　　有家朝臣

おもふ事みにしみまさるなかめ哉(ゆふへイ)雲のはたての空のあき風

左荻のはに風うちそよくといひ。人を戀しとおもひそめけんといへる。やすらかに聞え侍り。右雲のはたての空の秋風は。かのあまつ空なる人をこふる身は(とはイ)といへる歌を思へる成へし。雲のはたても。つよきやうに侍れは。勝になりにしなり。

三十一番　　羇中戀

左　　定家朝臣

君ならぬ木のはもつらし旅衣はらひもあへす露こほれつゝ

右勝　家隆朝臣

篠原やしらぬ野中のかり枕松もひとりのあきかせの聲

左歌木のはもつらし旅衣といへる。すかたよろしく侍れと。右歌まつもひとりの秋風の聲といへる。今すこし心こもれるやうにやとて。勝に申侍しや。

三十二番

左　有家朝臣

武藏野やひとり思ひにむせふ哉きつゝなれにし妻も籠らて

右勝　雅經

草枕むすひさためんかたしらすならはぬ野への夢の通ひち

左はむさし野やとをき。つまもこもらてといへる。けふはなやきその歌の心にや　と聞え侍るに。ひとり思ひにむせふ哉といへる。すこしきゝわけす侍るにや。右はたたならはぬ　野への夢のかよひちといへる。ゆうにきこえしかは。右を勝のよし申侍りし。

三十三番

左勝　親定

君もしなかめやすらん旅衣朝たつ月をそらにまかへて

右　左大臣

うつの山うつゝかなしき道たえて夢に都の人はわすれす

左の歌朝たつ月を空にまかへてと侍る心すかた。源氏物語の花のえんの歌なと思ひ出られて。いみしくえんにみえ侍り。右の歌はうつの山うつゝかなしきなと侍る。此ころうつの山あまた聞え侍るにや。左勝侍るへし。

三十四番

左勝　權中納言

我妹子か家路にかへる心かなかさなる山をしゐてすくれは

右　俊成卿女

わすれしの契り結ひし枕さへあらぬかりねの夢そはかなき

左羇中の心はたしかに侍るへし。右はわすれしの契りむすひし枕さへといへる。ゆうには侍るにや。左猶かさなる山をしゐて過なといへる。さまさへたしかに侍るにやとて。左勝にしるし侍るにや。

三十五番

左勝　前大僧正

蔦の色に袖をあらそふ旅ねにはうつゝもかなし宇津の山こえ

右　宮内卿

廻りあはん程をはいつといふへきそ便りたになし宇津の山越

左右の宇津の山こえ。おなしくは侍れと。左は蔦の色あるやうにみえ侍り。右はたよりたになしと　いへるはかりは。ことなる事なきにやとて。左の勝とす。

三十六番

山家戀

左勝　俊成卿女

人とはぬころたにつらき山里の松に心のあきかせのこゑ

右　家隆朝臣

わすらるゝ人めはつゐにかれにけり誰山里の冬とまつらん

左比たにつらき山里のといへる心よろしく侍るへし。右人めも草もといへる歌を思へるにやとはみゆれと。いといひおほせられても聞えさるにやとて。左の勝になり侍りき。

三十七番

左勝　左大臣

山かつの庵のさころもおさをあらみあはて月日や杉ふける庵

右　定家朝臣

風吹はさもあらぬ峯の松もうし戀せん人は都にをすめ

左あはて月日や杉ふける庵。ことのほかにまさりて。勝に申侍りき。

三十八番

左勝　親定

身をしれは思ひもよらて杉の庵に猶さりともと松風そふく

右　有家朝臣

おもひわひ涙ふりそふ嶺の庵にかたしく雲やうちしくる覽

左歌杉の庵になをさりともと松風そふく。おかしくは聞え侍るを。右の歌かたしく雲のうちしくるらんほと。いかゝときこゆ。もとも左をもて勝とす。

三十九番

左勝　前大僧正

山陰や山鳥の尾のなかきよを我ひとりかもあかしかねつゝ

右　雅經

君しるや都もよそに嶺の雲はれぬ思ひになかめわひつゝ

左山鳥の尾のなかき夜を我ひとりかもなと侍るすかた高く聞ゆるを。右君しるやとをけるは。及かたくきこゆ。

四十番

左持　權中納言

ひとりふすまやのすきまの雨そゝき落る涙の數そへんとや

右　宮内卿

物思はぬ人はたへける山里に我身ひとつの秋のゆふくれ

左まやはかりにては山家の心なくや。右末の句。こその百首のうちに。有家朝臣の歌をなそらへて持たるへし。

四十一番　故郷戀

左勝　親定

里はあれぬ尾上の宮のをのつから待こし宵も昔なりけり

右　左大臣

末まてと契りてとはぬ故里にむかしかたりのまつ風そふく

左尾上の宮のをのつから。ことに珍らしくみえ侍る也。右末の句よろしく侍れとも。猶左をもて勝とす。

四十二番

左持　有家朝臣

あた人の心よりまつあれそめて庭もまかきも野への秋かせ

右　家隆朝臣

さゝ波や志賀の古郷いくかへりわすれかたみの袖ぬらす覽

左歌あた人の心よりあれそむらん。いかゝ。右歌も志賀の古郷に袖ぬらすらんもいかゝ。可レ爲レ持。

四十三番

左持　前大僧正

色にみよ袖にしくれの故里のみかきか原の秋のおもひは

右　俊成卿女

飛鳥のあすかのさとに秋ふけぬ出にし人は音つれもせて

左歌みかきか原の秋の思ひ。よろしく侍るへし。右飛鳥のとをける。こと／＼しくや聞え侍らん。秋更ぬといへるよろしく聞ゆるによりて。又持とすへくや。

四十四番

左　權中納言

まかきには鹿もなれきて妻とふをきくに袂そいとゝ露けき

右勝　宮内卿

契りしもあらすなりけり面影はありしなからの渡りなれ共

左まかきには鹿もなれきてといへる心。とかなく侍るを。少俗の詞けにや侍らん。右ありしなからのわたりなれともといへる。ことなる事なく侍れは。勝へくこそ侍らめ。

四十五番

左持　定家朝臣

つれなきを待とせしまの春の草かれぬ心のふる里の霜

右　雅經

人ふるす里をも何かいとふへき我身ひとつのうき名也けり

左まつとせしまの春の草なとはおかしかるへきを。かれぬ心のなと。いかゝいへるにか。こゝろえす侍る也。右里をいとひてこしかともといへる。歌の心にやとはみえ侍れとも。愚意及かたくのみ侍れは。持とすへくや。

四十六番　旅泊戀

左持　俊成卿女

都をも心のはてもゆくゑなき芦やの沖のうきねなりとも

右　宮内卿

いまはとてあかて出にし曙にゐなのみなとも月そかはらぬ

右あかて出にし。すこし心かすかなるにや　ときこえ侍るを。左芦屋の沖も。さまてきこえられて侍らねは。持となんかし。

四十七番

左持　權中納言

しるらめや風のたよりをまち佗て袖に波たつ梶まくらすと

右　定家朝臣

わすれぬは浪路の月に愁ては身をうしまとにとまる舟人

左かちまくらすとはてゝ侍る。いかゝなと侍りしを。右の身をうしまとも。さまても侍らぬにやとて。又持と定侍りしなるへし。

四十八番

左勝　親定

おもふ人をうきねの夢にみなと川さむる袂にのこるおも影

右　有家朝臣

おもひねの夢路に人をみなと川さむれはもとの浮ねなり鳬

左右の湊川。さむれはもとのといへるも。よろしくはき〔こ脫歟〕え侍れと。左のさむる袂に殘るおも影。いみしくおかしく侍れは。以レ左爲レ勝。

四十九番

左　前大僧正

ふねとむるむしあけの磯の松の風たか夢路にか又かよふ覽

右勝　家隆朝臣

うき枕なみに波しく袖のうへに月そかさなるなれしおも影

左たか夢路にか又通ふらん。心おかしく侍るを。右波になみしくといひて。月そ重るなといへる。よろしくやとて。勝になり侍しなり。

五十番

左勝　左大臣

まてとしもたのめぬ磯のかち枕虫あけの波のねぬよとふ也

右　雅經

片しきの袖もうきねの浪枕ひとりあかしのうらめしの身や
左右の上の句は。ともによろしくきこえ侍るを。右の下の句うらめしの身や。ことの外よはくみえ侍り。左虫明の浪のねぬ夜とふ也。もとも勝に侍るなり。

五十一番　關路戀
左勝　前大僧正
東路やひとり旅ねの日數へて涙せきあへぬあしからの關
右　權中納言
いかて云んかく社有けれ關守もいつら勿來のなと答へけん
左歌とかなくみえ侍り。右歌いかていはんなと。珍らしきやうには侍れと。こゝろえす侍れは。左勝に定め申侍しなり。

五十二番
左持　家隆朝臣
わすらるゝうきなもすゝけ清見かた關の岩こす波の月影
右　雅經
みし人のおも影とめよ清見かた袖に關もるなみのかよひち
左右の清見かた。ともによろしき樣にはみえ侍るを。左のうきなもすゝけ。いかにそや聞え侍る。なみのかよひちは。すこしまさるへくやとはみえ侍れと。持に付侍にけり。

五十三番
左勝　俊成卿女
相坂の木綿付鳥よなれをしそ哀と思ひねに鳴てこし
右　宮内卿
たえはつる人やはつらき心からなさへうらめし相坂の關
兩首の相坂。いくほとの勝劣有かたきやうに侍れと。ふるき心も故なきにあらす侍れは。左の勝にこそ侍らめ。

五十四番
左勝　左大臣
我戀やこのよを關と鈴鹿川すゝろに袖のかくはしほれし
右　有家朝臣
誰も又關もれとやは清見かたみせはや袖のなみの月影
左歌のこよひを關とすゝか河は。珍らしくこそ侍れ。右の歌。みせはや袖のなと優によろしく侍るを。上句いかにそや聞え侍れは。左のかちたるへき也。

五十五番
左勝　親定
戀をのみすまの關屋の板ひさしさして袖とも波はわかしを
右　定家朝臣
すまの浦や波におも影立そひて關ふきこゆる風そかなしき
左右の須磨の關。左はさして袖ともなと珍らしく侍る。右は關吹こゆるなとは。よろしく侍るへきを。風そかなしき。あまりにやと聞え侍るらへに。左誠にえんにみえ侍。尤可ㇾ爲ㇾ勝。

五十六番　海邊戀
左　俊成卿女
契りしを我みひとつに松嶋やをしまの浪の音はかりして
右勝　有家朝臣
松嶋や戀せぬあまのぬれ衣ぬれてもしはしほさぬ物かは
兩方又松嶋也。左我みひとつにといへるもよろしきを。右戀せぬあまのぬれ衣と侍る。いたくたちまさるにこ

そ。

五十七番

左勝　親定

いかにせん思ひありその忘れ貝かひもなきさに波よする袖

右　宮内卿

友とみて伊勢雄のあまに宿からん物思ふみは袖もかはかす

左思ひありそのとをきて。かひも渚に浪よする袖。いとおかしくこそ侍れ。右友とみてといへる。ことなることなくや侍らん。左尤かちに侍るへし。

五十八番

左勝　左大臣

打忘れもにすむ虫はよそにしてすまの餘りに恨みかねつゝ

右　雅經

契りきなさてやは頼む末の松まつにいくよの波はこえつゝ

右まつにいくよの波はこえつゝといへる。えんに侍るを。左猶心ふかく侍るにや。仍勝と付侍し也。

五十九番

左持　前大僧正

心あるいせをの海士のぬれ衣ほすへき波の折をしらはや

右　定家朝臣

別れのみを嶋の海士の袖ぬれて又はみるめをいつか刈へき

左右いく程の勝劣なく侍るとて。持に定侍しなるへし。

六十番

左　權中納言

磯なつむいせのあま人(をのあまのイ)我袖をたくひとみらんことそ悲しき

右勝　家隆朝臣

藻鹽たれひるまもなきをわくらはにとへともまたしすまの波風(浦イ)

左の歌類ひと見らんなと。古今の歌の詞。出くへしともみえ侍らぬにや。右の歌とへともまたしすまの波(うらイ)かせ。尤勝に侍るへし。

六十一番　河邊戀

左勝　左大臣

泊瀬川ゐてこす波の岩の上にをのれくたけて人そ强面き

右　定家朝臣

なとり川わたれはつらし朽果る袖のためしのせゝの埋れ木

左の歌はつせ川ゐてこす波のなと。萬葉集を引てまたえんにもみえ侍るを。右の歌なとり河せゝの埋木。事舊て侍るへし。左歌可レ勝侍らん。

六十二番

左勝　親定

我袂さて山河の瀬になひく玉もかりそめにかはくまそ(もイ)な(くイ)き

右　俊成卿女

なかれての契りをよそに水無瀬川かけはなれ行水のしら波

左さて山河のせになひくをきて。玉もかりそめになと侍る文字つゝき。まことにみ所おほくこそみえ侍れ。右のみなせ川。ことなるとかなくは侍れと。左尤かちに侍るへし。

六十三番

左勝　宮内卿

飛鳥川契りしことはむかしにてかはるなのみやせに殘る覽

右　雅經

篠のくまひのくま河にぬるゝ袖ほさてや人の面かけもみん

右さゝのくまひのくま川。ふるき心。よろしくはみえ侍るを。左あすか川かはるなのみやせに殘るらんといへる。心殊によろしく侍れは。尤勝たるへし。

六十四番

左勝　權中納言

しらさりつみはすゑまつる御秡河神さへうけぬ思ひせんとは

右　家隆朝臣

千鳥なく河へのちはら風さえてあはてそかへる有明のそら（月イ）

左みはすゑまつるみそき川なといへる。故ありてこそみえ侍れ。右有明の空は。つねのことなからよろしく侍るを。河へのちはらなと。ゆうにしもあらさるにや侍らん。左神さへうけぬなといへる。勝にや侍らん。

六十五番

左勝　前大僧正

ともすれはなき名立たの河波にけにぬれ衣をしほりつる哉

右　有家朝臣

音羽川せき入る水の瀬をあさみたえ行人の心をそみる

右本歌の心上下の句。いくほともかはらす侍るにや。左立田川はめつらしきさまにみえ侍れは。勝としるし侍りしなり。

六十六番　寄雨戀

左　權中納言

雨ふれは軒の雫のかすかすに思ひみたれてはるゝまそなき

右勝　俊成卿女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに

左歌雨ふれはとをけるより。末の句まて。雨のよせ有てはきこえ侍るを。右の歌時雨は袖に秋かけてなといへる文字つゝき。えんに侍るにや。仍爲レ勝。

六十七番

左　有家朝臣

あれまもる雨も涙もふるまゝにえならぬ床に水たまりつゝ

右勝　定家朝臣

ゆくゑなき宿はとゝへは涙のみさのゝわたりのむらさめの空

左えならぬ床は我床にや侍らん。右佐野のわたりのむらさめの空。ふるからすはよろしくも侍るへし。勝の字付侍りにけり。

六十八番

左勝　親定

おもふことそなたの空となけれとも伊駒の山のあめの夕暮

右　雅經

なかめわひたえぬ涙や雨とふるしくるゝ空にまかふ夜の袖

左歌そなたの空となけれともなといへる。誠におかしくこそみえ侍れ。右歌たえぬ涙や雨とふるなといへる。えんにはみえ侍れと。猶左の雨の夕くれ。あはれおほくこもりてみえ侍り。勝の字しかるへく侍るへし。

六十九番

左勝　前大僧正

はれぬ雨の曇りそめけん雲やなに戀（けイ）よりたてし烟なりけり

右　宮内卿

年へたる思ひはいとゝふかきよの窓うつ雨も音しのふなり

左雲や何(けイ)にとをきて。戀よりたてしけふりなりけりといへるすかた。めつらしくもおかしくもみえ侍り。

右は上陽人なと の心さこそは侍らめ。左なを勝たるへし。

七十番

左勝　左大臣

こぬ人を待夜乍らの軒の雨に月をよそにてわひつゝやねん

右　家隆朝臣

わひつゝもうちやはねぬる宵の雨にやかて更行鐘の音かな

左右の歌ふるき心ともにて侍を。左月をよそにて侘つゝやねんといへる心。殊によろしく侍るへし。仍勝に付へし。

七十一番　寄風戀

左勝　宮内卿

きくやいかにうはの空なる風たにも松に音する習ひ有とは

右　有家朝臣

打なひく草葉にもろき露のまも涙ほしあへぬ袖の秋風

右袖の秋風。えんにみえ侍るを。左心こと葉始終なをよろしく侍るにや。仍かちとすへし。

七十二番

左　權中納言

ひとりのみ富士の山風やむこなく戀をなとてかするか成覽

右勝　家隆朝臣

いかにせん身はならはしの物とても軒端の松に秋風そふく

左富士の山風やむこなく戀をするかなと。めつらしくこそ侍るめれ。右身はならはしのものとてもといひ。ちかきものよめり。□　みおよはす侍りけり。いかにも右勝に侍へし。

七十三番

左勝　親定

わくらはにとひこし比におもなれて（もイ）さそあらましの庭の松風

右　前大僧正

いかにせんなくさむやとてむすふ庵に猶松風のみねに吹也

右の歌なを松風の峯にふくなりといへる心すかた。いとよろしくは侍れと。左歌わくらはにとをき。さそ（もイ）あらましのなと侍るは。又及かたく侍るへし。仍爲レ勝。

七十四番

左　左大臣

荻原や余所に聞こし秋の風もの思ふくれは我身ひとつに

右勝　俊成卿女

きえかへり露そみたるゝ下荻の末こす風はとふにつけても

左歌よそにきゝこし秋の風といひ。物思ふくれは我身ひとつにさいへる心。ことによろしくも。えんにも覺侍るを。右歌末こす風はとふにつけてもといへる。又よろしくは侍るへし。是は狭衣と申物語の歌の心に侍るへし。左も劣るへきには侍らねと。右勝の字付侍りしなり。愚老か面目にも侍るへし。

七十五番

左　定家朝臣

白妙の袖のわかれに露落て身にしむいろの秋風そふく

右勝　雅經

今はたゝこぬ夜あまたの小夜更てまたしと思ふに松風の聲

左歌身にしむ色の秋風そふくといへる。よろしからさるにはあらさるへし。右歌またしと思ふに松風の聲と

いへる。まことにおかしかるへし。仍勝に定り侍りにけり。

親定	勝十四		負一
左大臣良經	勝九		負六
前大僧正慈圓	勝九	持三	負三
權中納言公繼	勝三	持三	負九
俊成卿女	勝五	持四	負六
宮內卿	勝四	持二	負九
大藏卿有家	勝四	持二	負九
左近衞權中將定家	勝四	持四	負七
上總介藤原家隆	勝六	持三	負六
左近衞權少將雅經	勝四	持五	負六

右水無瀨殿戀十五首歌合以一古寫本挍合

水無瀨櫻宮十五番歌合　建仁二年九月廿九日

題

春戀　夏戀　秋戀　冬戀　曉戀
羈中戀　暮戀　山家戀　故鄉戀　旅泊戀
關路戀　海邊戀　河邊戀　寄雨戀　寄風戀

作者

女房
左大臣正二位藤原朝臣
前大僧正慈圓
皇大后宮大夫俊成女
宮內卿
正四位下左近衞中將藤原定家
正四位下藤原有家
正四位下上總介藤原家隆
藤原雅經朝臣

判者

釋阿

一番

左持　春戀　俊成卿女

おも影の霞める月そやとりける春やむかしの袖の涙に

右　同　定家朝臣

わすれめや花に立まよふ春霞それかとはかりみえし明ほの

左右ともに霞。左は春やむかしの夜半の月になひき。右

はそれかとはかり見えし明ほのゝ花に立まよふによりて。いつれまされるとも定かたし。

二番

左　夏戀　左大臣

草深き夏野分行さをしかのねにこそたてね露そこほるゝ

右勝　故郷戀　女房

里はあれぬ尾上の宮のをのつから待こし宵も昔なりけり

左の歌やさしきさまに侍れとも。又あなかちにめつらしきにはあらす。右の歌はさせることなしといへとも。すくれたるとかなし。いさゝかまさり侍りなむ。

三番

左　秋戀　女房

よしやたゝ憑めぬ宿の庭に生るまつとなつけそ秋の夕かせ

右勝　同　有家朝臣

物おもはてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

左の歌。たゝ憑めぬ宿にまつといふ名をおしめる計なり。しかれともしはらくみれはすくれたる難なしと申侍るへき歟。右は大かたの秋にたになりぬれは。いかなる色の風もみにしむものなるを。とひ入てなかむれは。袖の露秋ことに色深くそ侍らん。

四番

左勝　秋戀　家隆朝臣

思ひいるみは深草の秋の露たのめし末やこからしの風

右　冬戀　俊成卿女

かよひこし宿の道芝かれ〳〵に跡なき霜のむすほほれつゝ

左右ともに。返々おもしろき様に侍れとも。左のためし末や木枯。猶さひしくや侍らん。

五番

左持　冬戀　宮内卿

落つもる涙の數はさよ衣さらても袖に見えにけるかな

右　同　定家朝臣

床の霜枕の氷きえ侘ぬむすひもをかぬ人のちきりに

左はよろしく。右はめつらしきによりて。持とす。

六番

左持　曉戀　慈圓

憑めつる夜半もいまはの袖の上に月さへ曇る有明の空

右　羇中戀　雅經朝臣

草枕むすひ定めんかたしらすならはぬ野への夢のかよひち

左の歌珍らしき様に侍とも。右もやさしき様なり。

七番

左　暮戀　女房

いかにせんこぬよあまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空

右勝　同　左大臣

何ゆへとおもひもいれぬ夕たに待出し物を山のはの月

左右ともに難なしといへとも。待出し夕の山のはの月。さしのほるへきにや侍らん。

八番

左勝　山家戀　左大臣

山かつの麻のさ衣をさをあらみあはて月日やすきふける庵

右　寄風戀　有家朝臣

打なひく草葉にもろき露のまも涙ほしあへぬ袖の秋かせ

左は麻のさ衣をさをあらみなといへることは。よろし

きさまなり。右は草葉にもろき露のまもなと。やさしく侍れとも。左歌におよひかたし。

九番

左勝　秋戀　慈圓

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすへる荻の上風

右　關路戀　左大臣

我戀やこの世を關と鈴鹿川そゝろに袖のかくはしほれし

左の歌は。色もなくてやこほれつるなとゝいへること。よろしき様なり。右も珍しくは侍れとも。なを左はすくれてや侍らん。

十番

左　旅泊戀　家隆朝臣

うき枕浪になみしく袖のうへに月そかさぬるなれし俤

右勝　海邊戀　左大臣

打忘れもにすむ虫はよそにしてすまのあまりに恨かけつゝ

左の歌は上下ともによろしき様なり。右はねを社なかめ人はうらみしといへる歌の心。かへす〳〵もおもしろく侍り。左もすてかたしといへとも。右はなをまさるへし。

十一番

左持　河邊戀　左大臣

はつせ河ゐてこす波の岩の上にをのれ碎けて人そつれなき

右　寄雨戀　女房

思ふことそなたの空となけれともいこまの山の雨の夕くれ

左の歌。流るゝ水尾のせをはやみといふ歌の心おもひ入て。岩うつ浪のをのれのみといふ心なり。尤よろしかるへし。右の歌のこと葉をよひかたしといへとも。させるとかなけれは。持とやいふへからん。

十二番

左　寄雨戀　慈圓

はれぬ雨の曇りそめけむ空やなに戀よりたてし煙なるらん

右勝　同　俊成卿女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに

左の歌心珍らしく侍り。右殊にやさしきさまなり。勝負定かたしといへとも。猶袖にかゝらんしくれ。色ふかくや侍らん。

十三番

左勝　山家戀　慈圓

山陰ややま鳥の尾のなかきよを我ひとりかも明しかねつゝ

右　寄風戀　雅經朝臣

今はたゝこぬ夜あまたにさ夜更てまたしと思ふに松風の聲

左のうたは。山鳥の尾のしたり尾のといふうたのこゝろなり。右はまたしと思ふそまつにまされるといふたのこゝろなり。この兩方。ともに本歌をさすなり。しかれとも。猶左はたけたかきさまなり。

十四番

左持　寄風戀　宮内卿

聞やいかにうはの空なる風たにもまつに音する習ひ有とは

右　同　定家朝臣

白妙の袖のわかれに露落てみにしむ色の秋風そ吹

左右ともによろしく侍り。左はまつ夜むなしくあけなんとすることをそらにうれへ。右は袖のわかれにをけ

る露を秋かせにかこつによりて。いつれまされるとも定めかたし。

十五番

左持　寄風戀　　　　　　　　女　房

わくらはにとひこし頃に思ひ馴てさそあらましの庭の松風

右　　同　　　　　　　　　俊成卿女

消かへり露そみたるゝ下荻の末こすかせのとふにつけても

左はまつによそへてもおもひをのへ。右は荻のうはかせみにしみてなをうらみふかくや侍らん。左右ともに難レ定。よつて持とす。

八幡若宮撰歌合 建仁三年七月十五日

題

初秋風　野徑月　故郷霧　海邊雁

羇中暮　山家松

作者

女房

攝政左大臣

前大僧正慈圓

大納言藤原朝臣忠良

權中納言藤原朝臣公繼

權中納言藤原朝臣家經

沙彌釋阿

俊成卿女

女房宮內卿

大藏卿藤原朝臣有家

左近衞權少將藤原朝臣國通

右近衞權少將藤原朝臣雅經

左兵衞佐源朝臣具親

散位鴨縣主長明

左兵衞尉藤原秀能

一番

左勝　初秋風　　　　　　　　女　房

我妹子か袖ふきかへす秋風のまたうらなれぬ淚とふらん

右　　　　　　　　　　　　公　繼

から衣すそのゝ風や立ぬらし袖にさきたつあきのしら露

左歌またうらなれぬなみたとふらん。すかたまことにおかしく侍るかな。右歌袖にさきたつといへる。こゝろすかたいみしくえんに侍るに。おほかた歌合の例として。一番のうた。左を勝とし。右すこしつよき時。持とするよし申こと侍へし。しかれともこれには侍らす。右歌もたゝうちおとれると申ほとにはすきて侍り。左又いみしくおかしくみえ侍れは。其儀には侍らす。勝と申侍へし。

二番

左勝　攝政左大臣

やわた山にしにあらしの秋ふけは河波しろきよとの明ほの

右　宮内卿

六月やてる日にいとふ衣手もみになつかしき秋のはつかせ

左歌西にあらしの秋ふけはといひ。河浪しろきなといへる。いみしくおかしくこそ侍れ。右歌身になつかしき秋のはつかせ。えんにおかしく侍るを。六月やとをける。少いかゝとみえ侍れは。左彌まさり侍るへし。

三番

左　俊成卿女

あかつきの露も枕の露なれて心にふかき秋のはつかせ

右勝　野徑月　女房

さひしさは秋のさか野ののへの露月にことゝふ千世の細道

左歌心にふかき秋のはつかせ。よろしく侍る哉。右歌秋のさか野ののへの露とをき。月にことゝふと侍る。心すかたありかたくいみしく侍り。仍以右爲勝。

四番

左勝　俊成卿女

なかめ行ほとは雲井の月影をしるへにわくるむさしのの露

右　長明

かはらすよいはてこしよにとひなれて

左歌しるへにわくるむさしのの露とをき。右いはてこしよにとひなれてといへる心。えんにみえ侍るを。右かはらすよといへる五文字や。しゐて庶幾せられすや侍らん。仍左まさるへくや。

五番

左　釋阿

露ふかきみやきか原をしほれ行月すむ袖に萩か花すり

右勝　故郷霧　慈圓

なにはより吹こす風になひくめりたかつのうらの秋の朝霧

右歌難波より吹こすといひ。たかつのうらなと。よろしく侍うへ。左文字うちまかせたらん。みくるしけにきこえ侍り。尤右かちとすへくや。

六番

左勝　有家

荒にけるあとをも誰かみかの原くにのみやこの秋霧のうち

右　秀能

花にたにとはてくれにし故郷のしかのみやこの秋の夕きり

左あとをもたれかみかの原といへる。心おかしくみえ侍るを。右歌故郷のとをきしかの都のとをけるや。ことかさなりて侍らん。猶左秋きりのうちも。たけまさりて侍らん。

七番

左　　俊成卿女

やゝふるき尾上の宮の秋の霧いく世むかしをへたてきぬ覽

右勝　海邊雁　　攝政左大臣

しら雲に翅しほれし鴈かねのおりゐる磯になみやひまなき

左歌おのへのみやのきりいくよ昔をといへる。心よろしく侍り。右しら雲に翅しほれしといひ。おりゐる磯のなとも。ともにおかしくみえ侍る。左やゝふるきといへる五文字や。さまて聞えす侍らん。仍勝とすへし。

八番

左持　　慈圓

ほの〳〵としまかくれ行かり金の遠さかりなはあまの釣舟

右　　家經

うらつたふうらよりをちに飛かりの雲にきえ行あとの白波

左ほの〳〵とをかれ嶋かくれなとは。ふることにやとみえ侍るを。とほさかりなはあまの釣舟。心まことにおかしくこそみえ侍れ。右歌うらつたふうらよりをちなといへる心えんにこそ侍れ。勝負趣不分明と申へくや。

九番

左　　釋阿

今そしる秋は南にゐる鴈はあかしの沖の月になくなり

右勝　　雅經

こしの海のあとなきかたの波の上に風をたよりの初鴈の聲

左歌明石の浦の沖になきけるこしこはうちまかせてもおほえ侍らぬ上に。かせをたよりのなといへる。おかしくきこえ侍れは。以右爲勝。

十番

左持　　俊成卿女

松嶋やをしまのうらになく鴈の涙にぬらすあまの袖かな

右　　秀能

故郷にかよはゝつけよ秋の風ゆふへの空になかめかねつも

左歌をしまのうらのかり金。いみしくみえ侍るを。右歌かよはゝつけよなといへる。心いみしくみえ侍り。持と申へくや。

十一番

左勝　　慈圓

まちわひぬ今いくかまて東路やそなたの空に山のはの月

右　　長明

まくらとていつくの草に契るらん行をかきりの野への夕暮

左歌そなたの空に山のはの月。いとありかたくこそ侍れ。右歌行をかきりといへるわたり。いとよろしく侍れと。猶いつれの草にといへる。山のはの月には及かたく侍らん。以左爲勝。

十二番

左勝　　忠良

草むすふかりほの床の秋の袖露やはぬらすゆふくれのそら

右　　釋阿

しはしたにいかて都をわすれまし秋の夕のしほかまのうら

左歌心すかたいとおかしくこそ侍れ。右歌秋の夕のしほかまの浦。ふることに侍るうへ。なにとも聞わかぬやうに侍らん。以左勝とす。

十三番

左　　攝政

故里をいのちあらはとまつら川かへるひとをしゆふなみの空

右勝　山家松　女房

みやこ人とはぬほとをもおもひしれみしよりのちの庭の松風

左歌松浦河。かのさるまろかふるき跡まて思ひ出られて侍り。かへる日とをしといへるすかた。いみしくおかしく侍るを。右歌又みしよりのちの庭の松風。ひさしさのほといみしくおかしくみえ侍れは。松浦川のむかしのいかゝと覺え侍れは。猶右勝と申へくや。

十四番

左持　國通

あらし吹まきのお山の松の風たへすや心うちのさとひと

右　具親

つれもなき友とはたのむみねの松猶聲たつる秋かせそふく

左右歌。姿ともにいうにして。勝負不分明。持と申へし。

十五番

左持　釋阿

いまはとてつま木こるへき宿の松千世をは君と猶いのる哉

右

山ふかくのかれはてたる身にし猶心をさそふまつの風哉

右のかれはてたるといひ。心をさそふ松かせなといへるすかた。よろしくみえ侍る。左の歌はつま木こるへきもことふりて侍るを。宿の松とをける。さゝへて侍るやうに聞え侍れは。劣ると申へきを。祝の歌にことをよせて侍りぬる。ことにこれも持と申へくや。

群書類從卷第百九十四

和歌部四十九歌合十五

北野宮歌合元久元年十一月十一日當座

題

時雨　　忍戀　　羇旅

作者

御製
攝政從一位行左大臣藤原朝臣
參議正三位行左衛門督源朝臣通具
女房下野
正四位下行左衛門(近衞歟)權中將藤原朝臣定家
大藏卿正四位下藤原朝臣有家
從四位下行前下總介藤原朝臣家隆
左近衞權少將正五位下藤原朝臣雅經
從五位下行右馬助源朝臣家長
正六位上行左衛門少尉藤原朝臣秀能

講師

讀師

衆議判

一番　時雨

左勝　　御製

つきそ今もる山みちの夕しくれ殘るしたはも嵐ふくなり

右　　定家朝臣

この程は木の葉もしらぬ槇の屋を霜をへたてゝとふ時雨哉

しもをへたつらむ。いかゝ。左尤宜。爲レ勝。

二番

左持　　左衛門督

杖のやにもるは時雨とまよふまてぬれぬかたしく夜半のさ衣

右　　雅經

なかめあひ我身よにふる夕時雨くもりな果そ空もうきころ

左ぬれぬかたしく。右の我身世にふる。ともにゑんにきこゆ。仍爲レ持。

三番

左勝　　攝政

村雲にをくれさきたつ夜半の月しらす時雨のいくめくり共

右　　定家朝臣

雲さはく山人いまや袖ぬらすあらしもみえてしくれ降ころ

右あらしに見えてこゝろえられす。むら雲にをくれさ

きたつ月。ことによろし。爲レ勝。

四番

左　女房

夕まくれしくるゝ空を眺むれはひとやりならぬ袖のうへ哉

右勝　有家朝臣

木葉ちるむへ山かせのあらしより時雨になりぬ峯のうき雲

左ことなることなし。右むへ山風なといへる。たくみにきこゆ。爲レ勝。

五番

左持　家長

峯は雪麓はしくれみよしのゝおなし雲よりふりわかる也

右　藤原秀能

吹はらふ風にわかるゝうき雲のしくるゝ袖に月そやとれる

おなし雲より。かせにわかるゝなといへる。共によろし。爲レ持。

六番　忍戀

左勝　左衛門督

さしも猶ゑやはいふきの下草の跡なき霜におもひきえなん

右　下野

したむせふ思ひのけふり立いては鹽やく浦のあまと答へん

右の歌もいうにはきこゆれと。左のあとなき霜におもひきえなむなといへる。尤よろし。爲レ勝。

七番

左勝　御製

我戀は槇のした葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

右　雅經

われなからうちねぬほとの關守に夢もゆるさぬよひの通路

夢もゆるさぬも。心なきにあらされとも。左歌猶可レ爲レ勝。

八番

左持　攝政

もらしわひ氷にとつる谷河のくむ人なしにゆきなやみつゝ

右　家隆朝臣

谷河の氷につけてしのふるをなをうきものは松のゆふかせ

谷川氷ともによろし。爲レ持。

九番

左持　有家朝臣

なれきぬる枕の下のあまもなをえそしら波の打もいてねは

右　藤原秀能

山河のいしまの水のもらしかねした行みちはしる人もなし

ともにさせる難なし。爲レ持。

十番

左勝　定家朝臣

わすられぬときはの山の秋の風なをつれなかれ露消ぬとも

右　家長

夜と共に雲もへたてよふしのねのくゆる煙を空にまかへむ

雲もへたてよといへる。いうにはきこゆるを。むろのやしまにやともかなこひのけふりをそらにまかへむと。ちかきうたにかよへるにや。以レ左爲レ勝。

十一番　羇旅

左勝　御製

さひしさをいつよりなれてなかむ覽またみぬ山の秋の夕暮

右　　左衛門督

月とともに秋はすみこし山おろしおくに木葉に道やまとはむ

右鳳凰池上月をおもへる。心ありときこゆれと。左のまたみぬ山の秋のゆふ暮。すくれてよろし。仍爲レ勝。

十二番

左　　下野

なかめこし月そへたつる宮こいてゝ幾重の山の峰の白雲

右勝　　家長

新古今 けふは又しらぬ野原にゆきくれぬいつれの山か月はいつ覽

左はいうにはきこゆれと。いつれの山かなといへる。なを勝とすへし。

〔十三番十四番欠〕

十五番

左勝　　家隆朝臣

新古今旅 ふる里にきゝし嵐のこゑもにす忘れぬ人をさよの中山

右　　藤原秀能

たひ衣霜にかさぬる足曳の山のいはねを吹あらしかな

右の歌もよろしくきこゆれと。左なを勝とすへし。

卿相侍臣歌合 建永元年七月廿五日

題

朝草花　海邊月　羇中暮

作者

左方

御製　勝二持一

内大臣　負二勝一

前大僧正慈圓　勝二持一

前大納言藤原忠良　持二負一

左衛門督源通光　勝負持

中納言藤原公經　勝三

權中納言源通具　勝二負一

參議藤原良平　勝一持二

正三位藤原季能　勝二持一

俊成卿女　勝一負二

右方

宮內卿藤原家隆　持一負二

大藏卿藤原有家　勝二負一

左近權中將藤原定家　勝二持一

越前　勝一持二

左衛門尉藤原秀能　負勝持

右近權少將源具親　負三

丹後　負二勝一

散位藤原保季　負一持二

小比叡禰宜祝部成茂　負二持一

左近權少將藤原雅經　勝二負一

講師　左右

讀師　左右

判衆議

詞寝筆　後日被下之

一番　朝草花

左勝　御製

よこ雲のたなひく山のをかへなるすゝきも白く吹あらし哉

右　宮内卿藤原家隆

我袖はけさもほしあへす飛鳥河ゆきゝの岡の萩のしら露

左右より難申侍し樣々。よくもおほえ侍らす。おもひてゝ判の詞かきつくへきよし。人々申あひ侍れは。おろおろ書付侍也。

左歌しろきすゝき。あしたの風にしかありぬへしなと。さた侍りしにや。

右歌ゆきゝの岡の萩。めつらしきさまなれとも。又無ニ指事ーとて。左の勝になり侍にき。

二番

左　内大臣

なかき夜をあかせる袖はいまたひすお花か露そ秋風は吹

右勝　大藏卿藤原有家

小萩原おれぬはかりの朝露にぬれぬ袖ほす野邊の秋風

左方に。申むねなし。

右方に。いまたひすといへるきゝよからす。仍以レ右爲レ勝。

三番

左勝　前大僧正慈圓

朝露よあらましかはの秋にあひて誰袖うつす萩の上葉そ

右　左近權中將藤原定家

あさな〳〵したく葉もよほす萩のはにかりの涙そ色にいて行

右方に。頗宜之由申之。

左方に。又やさしきさまなるよし申せとも。あらましかはの秋。おもへる所あり。仍爲レ勝。

四番

左持　前大納言藤原忠良

里はあれて笆は野への小はき原朝たつ鹿もこゝになかなむ

右　越前

野らと成し昔の跡に蘭はかまそれかとはかりにほふ朝露

左方より難申ていはく。つらといへるきゝにくし。

右方より又申云。こゝになかなむといへる鹿そのようなし。左方陳申。題の心あるうへ。鹿さかにあらす。

五番

左勝　左衞門督源通光

明ぬとて野へより山に入鹿のあと吹をくる荻のうは風

右　左衞門尉藤原秀能

眞萩原なにゝ根を結ひをかんうつろひゆかは今朝のあさ霜

右方よろしきよし申レ之。

左方頗やさしきさまなるに。けさのあさ霜無レ要歟之由難申之。

六番

左勝　　中納言藤原公經
朝嵐の色に荻ふくをみなへし消あへぬ露の花にこほるゝ
右　　右近權少將源具親
さをしかのいる野の薄ほの〴〵と明ぬるかよの峰のうす霧
左方より。上句きゝなれたるよし申之。
右方無㆑申旨。

七番
左勝　　權中納言源通具
朝露も花のえことにかはりけり鴈の涙の色やわくらん
右　　丹後
嵐ふくあしたの原の秋はきは露のこるへき物とやは見し
右方申云。花のえ一定草花歟。もし春の花にかへるかり
の涙と心えんもとかあるへからす。秋といふこと大切
也。
左方陳申。色なとある涙は。うちまかせてはこゝろある
へし。鴈のなみたの色やわくらんなとは。おほく秋にひ
けり。そのうへに右歌あやしのものなり。左花のえこと
になと。いうなるよし申之。

八番
左勝　　參議藤原良平
小萩はら今朝をく露の數々にむかし戀しき袖そうつろふ
右　　散位藤原保季
なく鴈のよはの涙かかた岡のあしたのはらの萩のした露
右方さして申むねなし。
左方申。すへてきゝよからす。

九番
左勝　　正三位藤原季能
朝つゆの玉まく葛に風過てうらみそめたるあたしのゝ原
右　　小比叡禰宜祝部成茂
ほしもあへす露消かへり女郎花誰に名殘の今朝のしほれそ
左方申云。けさのしほれそ。きゝにくし。
右方より。させる申旨なし。

十番
左勝　　俊成卿女
あはぬよの涙やむすふ萩の露篠わけし袖の色はしられと
右　　左近權少將藤原雅經
このまよりさすや岡への朝日影うつろふ露ににほふ萩原
右方より申云。頗いうなり。
左方申。右もやさしきさまなれとも。猶あはぬよの涙色
ふかき歟。

十一番　海邊月
左持　　御製
もろこしの山人今はおしむ覽まつらかおきのあけかたの月
右　　家隆朝臣
秋のよの月やをしまの天の原明かたちかきおきの釣舟
左方より申。月やをしまの天のはら。尤めつらし。勝へ
きよし申侍き。しかるに持にて侍ける。おほきなるふし
む也。

十二番
左持　　內大臣
有明の月吹はらふ浦かせにけふりつれなきあまのもしほ火
右　　有家朝臣

おほかたに物を思へとするかなる月はきよみかうらの秋風
左方申ていはく。おほかたにといへる五文字。そのことゝなし。右方申旨なきなり。

十三番

左持　前大僧正

和歌の浦に月の出しほのさすまゝによる鳴つるの聲そ悲しき

右　定家朝臣

もしほくむ袖の月影をのつからよそにあかさぬすまの浦人
左右兩方尤宜之由。各申之。

十四番

左持　前大納言

浦つたふ月はあかしの空はれて浪にあきふく須磨のしほ風

右　越前

秋をへてとしもつもりの浦風に曇らぬ月をいくよかはみむ
兩方ともにかたひきちからなきよし申之。其上右方より名所あまりおほかり。一所にてあらむに難あるへからす。又當時一定いつくにて詠たるそとたつね申とも。作者當坐になきによりて陳申にをよはす。右方又右歌祝言にいうせらるへきよし申。左方申云。右歌末句。頗祝歌とみえさるよし申。

十五番

左　左衛門督

月やとるもしほの袖を人とはゝわふとこたへよすまの浦浪

右勝　藤原秀能

あかしかた色なき人の袖をみよすゝろに月もやとる物かは
左右兩方よろしきよし各申之。猶右末句殊優也。仍可勝之由定申。

十六番

左勝　中納言

なかめやる心いつくにかよふ覽もろこしまてもすまの月影

右　具親

月の秋は名のみそ夜のもしほ草かくかきたえてみる夢もなし
左方に申。もしほ草せんなし。かくかきいつれにてもひとつにて侍なん。右方に申。もろこしすまよりとをし。左に陳云。とをきこゝろこそは。秋月の本意に侍へけれ。

十七番

左勝　權中納言

なかむれは涙そこゆる袖のうらの月やはつらき秋のしほ風

右　丹後

ほしやらぬ小嶋の蜑の袖迄もやとりやすらんあたら夜の月
左方に申云。はしめに秋といふ事もなくて。あたら夜の月。頗春の歌にて。よかりぬへし。右方無申旨。

十八番

左持　參議

あさりするをしまのあまのぬれ衣みなれそなれて宿る月哉

右　保季朝臣

里わかぬなさけは月のならひにて心なきあまの袖にすむ覽
左方申云。わか方なからみなれそなれてといへる。上日のものゝ官なとなりたるおりそ。かゝる事はきくやうに侍。いまた和歌の詞にきかす。すへてよろしからすと申。右方申云。又右歌言不足のよし申。仍不能勝負也。

十九番

左勝　正三位

ひとりみる袖こそあまに通ひけれをしまか磯に月や更ぬる

右　祝部成茂

あまさかるよもの浦風雲すきて波間の月にやまとしまみゆ

右方より申云。あまにかよひけれといへる。聞よからす。

左方申云。作者にあらす。惣てきゝよからす。

廿番

左　俊成卿女

人はたゝ浪のよる〳〵とはすとも月にあかしの秋のうら風

右勝　雅經朝臣

里のあまの袖にくたけぬ影をみん岩うつ波のあら磯の月

左方申云。末句めつらしきさまなり。右方申云。末句させることなし。

廿一番　羇中暮

左勝　御製

をくるへき月たに山をまた出ぬに夕のあらし袖にしほれぬ

右　家隆朝臣

獨すむとはかりきゝて宿かれは入相のかねにのこる山かせ

右方より。よろしき由申之。

廿二番

左　内大臣

踏なれぬ山の岩ねのゆふまよひをとやしるへの谷河の水

右勝　有家朝臣

都人たのめぬ物をまつち山ゆふこえかねてひとりかもねん

左方に申云。殊よろしきさまなるに。むすひ句あまりふるめかし。しかれともよろしきよし申之。右方に申云。ゆふまよひきゝ馴す。

廿三番

左勝　前大僧正

思ひねの今朝の袂もまたひぬに又くれかゝるうつの山もと（こえカ）

右　定家朝臣

たのめての末のはら野の黄昏はとはれぬ風に露こほれつゝ

右方宜之由申之。

廿四番

左　前大納言

都おもふ涙はたひのものなれと雲よりみねの夕暮の空

右勝　越前

今日も又夕ゐる雲にやとりぬと都へつけようつの山風

右方。涙はたひの物なれとゝいへる。むけにきこゆ。

廿五番

左持　左衛門督

暮は又いつくに宿をかりのなく峯にわかるゝ袖の秋霧

右　藤原秀能

草まくら夕のそらを人とはゝなきてもつけよ初雁のこゑ

左右ともに。殊よろしきよし各申之。

廿六番

左勝　中納言

くれぬとや我より先にとまるらん生野の末にあふ人のなき

右　具親

かゝれとて秋しもたつか旅衣かさねてしけき道のゆふ露

右方申云。めつらしきさまなり。

廿七番

左　權中納言

宿かれは露しく床のいはまくらゆるさぬ松の風の音かな

右勝　　丹後

都をはあまつ空共きかさりきなになかむらん雲のはたてを

右方申云。ゆるさぬ松のかぜ。なにをゆるさぬぞ。左方陳云。ゆめをゆるさぬ也。重申。しからは夢尤大切也。左方申云。右歌本歌の雲のはたては。あまつそらなる人をこふる心なり。此歌あまつそらをこひさるにゝたり。如何。

廿八番

左持　　參議

をちこちもしらぬ山路に宿とへは松にこたふる秋の夕かせ

右　　保季

移りゆく山より山にけふ暮ぬはてはしかなく野へのかり庵

左方に申云。はては鹿なく。不レ足レ云といふへし。右方に申云。末句又むけにめつらしからぬうへに。きゝよからす。

廿九番

左持　　正三位

露におきて露にやとりぬ道のへの草にしほるゝ旅ころも哉

右　　祝部成茂

み山ゆく秋の涙の夕しくれあらそふものかまきの下葉も

右方申云。上句ことありけなるに。末さまやすらか也。左方申云。右歌は上句たに事ありけなし。

三十番

左　　俊成卿女

故郷も秋は夕をかたみにてかせのみをくる小野の篠原

右勝　　雅經

いたつらにたつや淺間の夕煙さとゝひかぬるをちこちの山

兩方殊よろしき歟と申之。しかれともたつや　あさまのといへること尤めつらし。可レ勝と各申之。

鴨御祖社歌合 建永二年三月七日

題

山家朝霞　　湖邊夕花　　社頭述懷

作者

左

御製

前大僧正慈圓

正二位行權大納言源朝臣通光

大藏卿正四位下藤原朝臣有家

正四位下行左近衞權中將藤原朝臣定家

從五位下守左近衞權少將源朝臣具親

右

從二位行權中納言源朝臣通具

俊成卿女

女房丹後

宮内卿正四位下藤原朝臣家隆

從四位下行左近衞權少將藤原朝臣雅經

正六位上行左衞門少尉藤原朝臣秀能

講師　大藏卿正四位下藤原朝臣有家

讀師　正二位行權大納言源朝臣通光

一番

左　山家朝霞　　御製

槇の戸やつれなくあけし名殘とて袖よりつらき朝かすみ哉

右　俊成卿女

明ぬるか霞なをまよふ谷の戸にふるすおほゆる鶯のこゑ

二番

左　慈圓僧正

都にもわかかたをかの朝かすみへたつる色の袖にうつれる

右　通具卿

人はこす霞はとつる松の戸にあすかねぬよのなにかあく覽

三番

左　通光卿

山かけのかすみの衣ほころひて春風さむきあさあけの袖

右　丹後

やとちかに深くやみゆる朝かすみ冬のなこりのしはの烟を

四番

左　有家朝臣

たつねてもけさは霞のそことたに誰かみやまのおくの庵を

右　雅經朝臣

宮古人とふともけさはしら雲の八重たつ山のなをかすみ行

五番

左　定家朝臣

明わたる峰のしはやのよそめたにわすらるはかり霞む頃哉

右　家隆朝臣

あさ露のをのへの山のたま柳さかひもとをくかすむ春かな

六番

左　具親

朝かすみたつなたまきを友とみて春もとはれぬ谷の通ひち

右　秀能

けさはしも霞もふかしおく山とたのめし人にうらみ殘すな

七番　湖邊夕花

左　御製

けふはくれぬあすは麓のゆきてみむなからの山の嵐吹めり

右　俊成卿女

花の色もうつりもゆくかさゝ浪やなからの山の春のゆふ暮

八番

左　慈圓

からさきや志賀に散花色そこきひよしの山にいもひさす程

右　通具卿

なかむれは花よりほかの色もなし夕なみつゝく志賀の浦風

九番

左　通光卿

にほてるや夕日をこめてひく網のさゝ浪白くよるさくら哉

右　丹後

暮ゆけととまりさためぬつり船の花にそやとる志賀の辛崎

十番

左　有家朝臣

志賀の山もるや梢の夕つく日ちりかひくもる花の下かせ

右　雅經朝臣

浦かけてちりかふ花のさゝ浪や志賀のゆふ風山に吹らし

十一番

左　定家朝臣

志賀の浦や釣する船の袖もみなさくらなからの山の夕かせ

右　家隆朝臣

花やふく釣するあまの袖のうへにぬれぬ浪こすしかの夕風

十二番

左　具親

志賀のうみ入日うつろふ水の面は散てもまかふ花のうき雲

右　秀能

とまやかたゆふへの浪に袖ぬれて花こそかほれ志賀の辛崎

十三番　社頭述懐

左　御製

御集 みつ垣や我世のはしめ契をきしその言のはを神やうけゝむ

右　俊成卿女

君かためいのりをきけん萬代のはるとも神そ空にしるらん

十四番

左　慈圓

守るらん法のためにもみそきせむかたなひきなる塵や拂ふと

右　通具卿

ふりにけりなくよの末を哀とも誰かはくまんかもの水かき

賀茂別雷社歌合

題

海邊歸雁　暮山春雨　社頭夜風

作者

左

御製
前大僧正慈圓
從二位行權中納言源朝臣通具
大藏卿正四位下藤原朝臣有家
正四位下行左近衞權中將藤原朝臣定家
從四位下行左近衞權少將藤原朝臣雅經

右

正二位行權大納言源朝臣通光
俊成卿女
女房丹後
宮内卿正四位下藤原朝臣家隆
右近衞權少將正五位下源朝臣具親
正六位上行左衞門少尉藤原朝臣秀能

講師　正四位下行左近衞權中將藤原朝臣定家

讀師　正二位行中納言源朝臣通光

一番　海邊歸雁

左　御製

難波かたすきこし春に又やあふとはかなく歸る鴈そ鳴なる

右　通光卿
わたのはら鹽路かすみて行鴈のつはさにかゝるおきつ白浪
二番
左　慈圓
難波かた春のあしまをたつ鴈のなみたに契る秋の初露
右　俊成卿女
雲井より秋風わけし鴈金の歸るなみちは霞なりけり
三番
左　通具卿
馴てしもよゝの秋風こしの海のかへるなみたに鴈そ鳴なる
右　丹後
今はとて鳴てや鴈も歸るらんなにはのうらの明ほのゝ空
四番
左　有家朝臣
秋の空きり飛わけてこしの海の浪にかすみて歸る鴈かね
右　家隆朝臣
しほるらん春の波路をゆく鴈のつはさ吹ほせやへのしほ風
五番
左　定家朝臣
浦にたくもしほの烟立わかれ霞のなみにかへる鴈かれ
右　秀能
難波江のはるへしたひて歸れ鴈またうら若き芦のなたてに
六番
左　雅經朝臣
歸る鴈遠さかり行すゑの松まつに名殘の浪はかけつゝ
右　具親
遠さかる雲ゐの鴈の名殘まてかすめるつらきなには江の月
七番　暮山春雨
左　御製
三芳野や春雨きをひちる花を今日もくれぬとさそふ山風
右　通光卿
あふ坂の杉の木間をもる雨のしつくにやとる春の山人
八番
左　慈圓
我袖よぬれてやとかるならひかなしくれし山の春の夕くれ
右　俊成卿女
あめそゝく花の雫はぬれつゝも露を〔本ノマヽ〕とはてかへる山人
九番
左　通具卿
春とてもたれかみ山の槇の葉にとふもさひしき夕暮の雨
右　丹後
いはねふみ歸る山人いかゝする春さめそゝくたそかれの空
十番
左　有家朝臣
御吉野や花にくらせる山の奥に雨はふりきぬ道ふかくして
右　家隆朝臣
これも又いそくか秋のたつた山木のめ春雨降くらしつゝ
十一番
左　定家朝臣
けふの日もむなしき山にすきの葉の下吹かせになひく春雨
右　秀能
春雨にぬれたる花のしほれても歸るはつらき山のゆふ暮

十二番
左　雅經朝臣
霜かれのゝなる草木のめもはるに雨降くらすきさらきの山
右　具親
かすみたにふかき山路とながめつる峯にゆふゐる春雨の雲
十三番　社頭夜風
左　御製
和歌の浦たむくる夜半の風にこそ猶此みちに神もなびかめ
右　通光卿
さかきとるやそうぢ人の袖のうへにかをとめてふく春夜の風
十四番
左　慈圓
いかにせん神も思はし人もいはず夜吹風をしてにきけとは
右　俊成卿女
鐘の音もほのかにふけぬ神山の花のほかまてさそふ嵐に
十五番
左　通具
かすむ夜の月をあかすやみたらしのきよき河せを洗ふ春風
右　丹後
かも山の月のかつらの木間より神さびわたるみたらしの風
十六番
左　有家朝臣
見すしらぬその神山の神代まてかよふ夢ちをとふあらし哉
右　家隆朝臣
雲わけて君を八千代とまもるらし風靜なる神山の月
十七番
左　定家朝臣
神かきやして吹風のよをかさね誰かは君の千世を祈らん
右　秀能
さかきとるしてに嵐の音さえて袖にもあくる春夜の月
十八番
左　雅經朝臣
馴そめしその神山の夜半の嵐ちらぬたのみをまつにつく也
右　具親
かも山や仰ける御代のためしとやのとけき風に雲もなき月

歌合建暦三年八月十二日

題

山　野　關　浦　橋　河　江　原　杜　池

作者

女房
正二位權大納言藤原良平
從三位藤原朝臣頼範
從四位上行播磨守藤原朝臣範基
從四位上行丹後守藤原朝臣範宗
正五位下行左近衛權少將兼近江權介藤原爲家
從五位上行侍從藤原朝臣光家
正六位上行左衞門權少尉藤原朝臣康光
正六位上行左兵衞權少尉藤原朝臣永光
志女遊婦

上歌合

一番

左　音羽山　女房
ふく風の音羽の山は色つけと人のこゝろの秋そつれなき

右　宮城野　權大納言藤原朝臣
このころの秋のゆふ露袖ならておほかたにやは宮城のゝ原

七番

左　長柄橋　範宗朝臣
わすれしと契りなからの橋はしら袖よりさきに朽はてに鳧

右　明日香川　爲家
いきて社あすをもまため飛鳥川淡ともけふはきえぬへき身を

八番

左　憚關　頼範卿
露はいかに色やはそむると思ふより涙も袖にはゝかりの關

右　布留高橋　範宗朝臣
身に秋のきても哀をしらすなり袖にしくれのふるの高はし

十一番

左　生野　權大納言藤原朝臣
いつまてか誰もいく野の草のはらなにそは露のあたの命を

右　眞野繼橋　範宗朝臣
袖の露さやく霜夜は消かへりたえまをなけくまのゝ繼橋

中歌合

八番

左　八橋　範宗朝臣
唐衣きつゝなれにしやつはしの隔てゝうつる花の名そうき

右　三嶋江　光家
みしまえや霜置まよふ芦のはのかれなは人の心とやみむ

十番

左　石瀬山　女房
我こひは人にもいまたいはせやま下行水のうちしのひつゝ

右　久米道橋　範宗朝臣
夜もすから契りし事のたえ行やくめちの橋のかつらきの山

十二番

左　万々繼橋　範宗朝臣
ひとめ見しまゝのつき橋道たえてやますも物を思ふ比かな

右　龍田川　爲家

徒にあやなき名のみたつた河わたらてはてむ物そかなしき

十四番

左　度絶橋　範宗朝臣

逢ことはいかにとたえのはしならん風のみ渡る床のさむしろ

右。生田杜　藤原永光

津の國のいくたのもりに色やなきよそなる袖を過る秋風

下歌合

三番

左　廣澤池　志女遊婦

たのめこし人こそ秋のめくりきてむかしを忍ふひろ澤の月

右　濱名橋　範宗朝臣

とをさかる人の心のあさきりにはまなの橋も行まよひつゝ

九番

左　佐野船橋　範宗朝臣

あつまちや行末かけてさのみやはさのゝ舟橋さして頼まむ

右　信夫原　藤康光

誰こゝに忍ふか原のをみなへしひとりしほれて秋を待らん

十二番

左　武藏野　權大納言

草のはらむかしの露やかゝりけむ妻も籠らす秋のむさし野

右　宇治橋　範宗朝臣

我そ思ふたれかはうちの橋柱いさよふ浪のよそのよな〳〵

歌合建暦三年九月十三夜

題

江上月　旅宿戀　暮山松

作者

左方

女房

權大納言藤原良平

侍從藤原朝臣定家

左近權中將藤原朝臣雅經

左近權少將藤原朝臣爲家

右方

從三位藤原朝臣家衡

女房志女遊婦

宮内卿藤原朝臣家隆

皇太后宮大夫俊成卿女

侍從藤原光家

講師

讀師

一番　江上月

左　女房

玉江こくあしかり小舟あとみえて水の秋とや月もすむ覧

右　家衡卿

風そよく芦の葉わたる夜半の月たれみしま江に渡るなる蘭

二番

左　權大納言

難波江や芦の葉分にひとりゐてみるしるしなきなか月の月

左　しめゆふ

芦のやのなたの入江の月をみてぬるゝかあまの袖のうら浪

三番

左　　定家卿
なには江に咲やこの花しろ妙の秋なき浪をてらす月影
右　　家隆朝臣
みふねこくほり江の水も底すみて玉しく月の影そさえける
四番
左　　雅經朝臣
秋はなをことしの空も津の國のなにはかはらすみ嶋江の月
右　　俊成卿女
すみのえの波に秋風吹よせてたまゆらなひく月の影かな
五番
左　　爲家
住の江のきしの松かせ吹まゝになみさへはなの秋の夜の月
右　　光家
秋風の芦のうら葉を吹わけて玉江の水にやとる月かけ
六番　　旅宿戀
左　　女房
思ひつゝ獨たひねの夢にたにみゆとは見えぬ人の面かけ
右　　家衡卿
いたつらにひとりなかめし夜半の雲さても重なる旅の空哉
七番
左　　大納言
から衣たひねなれきて久かたの秋の露しも袖にくちぬる
右　　志女遊婦
をのつから頼む夢路に跡たえてぬれとねられぬさよの中山
八番
左　　定家卿
とゝめおきし袖の中にや玉くしけふたみの浦は夢も結はす
右　　家隆朝臣
逢事はたゆひの浦の旅まくらこかれそあかす夜半のも鹽火
九番
左　　雅經朝臣
都にはかこちかねにし我袖にあまるもしらす野への夕つゆ
右　　俊成卿女
面かけのしたはぬたひの夢覺てあはれ都の露は物かは
十番
左　　爲家
俤をいくへの雲にさそひきてかたしく山の床のあき風
右　　光家
戀しともえやはいはねの草枕むすひかをきし跡の契を
十一番　　暮山松
左　　女房
秋の色はとやまの松の夕しくれつれなき名のみ猶やふり南
右　　家衡卿
夕されにさひしかれとも高砂の松をおのへに秋かせそふく
十二番
左　　大納言
松の葉はもみちぬ秋のゆふたすきたむけの山を月にまかせて
右　　しめゆふ
たれこゝに岩のかけちを跡たえてあらしやくれの松風の聲
十三番
左　　定家卿
秋はいぬ夕日かくれの峯の松よるの木のはの後もあひみん

右　家隆朝臣
高砂のおのへの松の夕しくれかくてふり行身をやつくさん
十四番
左　雅經朝臣
今よりの夕ゐる雲やさそふらんしくれをならす峯の松かせ
右　俊成卿女
山ふかき秋にやかこつ夕暮を松にとてのみふかぬあらしも
十五番
左　爲家
夕つくひうつろふ山の松の葉はいつともわかす色そつれなき
右　光家
から錦たつたの山の夕霧になをいろふかき峯のまつかせ

仙洞歌合 建暦三年閏九月十九日

題
深山月　寒野虫　寄風雜

作者
左方
女房 順徳院　勝三
大藏卿藤原朝臣有家　勝三
從三位藤原朝臣家衡　持三
宮内卿藤原朝臣家隆　勝負持
丹後守藤原朝臣範宗　勝二持一
散位藤原朝臣行能　負勝持

右方
左近衞權中將藤原朝臣雅經　負三
侍從藤原朝臣定家　負三
左近衞權中將藤原朝臣經通　持三
俊成卿女　負勝持
左近衞權中將藤原朝臣爲家　負二持一
侍從藤原朝臣光家　勝負持

判者　侍從藤原朝臣定家

講師

讀師

一番　深山月
左勝　女房

月の色も山のはさむしみよしのゝふる里人やころもうつ覽

右　雅經朝臣

しくれ行色こそしらねしからきの外山のおくも秋のよの月

左歌其躰高其詞艷也。可レ謂二花實相兼一。右歌すかた又いうなるさまには侍を。しからきのとやまは。ことに深山ときこえすや侍らん。又おくといはんためならは。外山のことはさせる要なきにや侍らん。以レ左爲レ勝。

二番

左勝　大藏卿

秋のよと月やはかけて契置しかつらき山のくめの岩はし

右　侍從

しらかしの露をく山も道しあれは枝にも葉にも月そ伴なふ

左上句慇意いとしも心え侍らねとも。すかたはいうに侍へし。右しらかしの露をく山とつゝけたる。ふることなとも侍らぬを。ことありかほにきこえ侍らは。そのことゝなくや。道あるみよの月かけ。山のおくまてくもりなかるへき心を思けるに。こと葉のたらぬにそ侍へき。以レ左爲レ勝。

三番

左持　從三位

あまのはらさゆる光をしもとゆふてる月影のかつらきの山

右　經通朝臣

なかめ侘ぬひと夜をたにもみよしのや故郷うとき山端の月

左しもとゆふかつらき山の中にてる月影とをけるにや。あたらしくきこえ侍らん。さゆる光をしもとゆふとそへたるには侍めれと。俊頼朝臣歌に。てる月のたひねの床やしもとゆふかつらき山の谷河の水。ちかく家隆朝臣。色かはるいまや木のはのうへにをくしもとゆふへのかつらきの山。又きのふけふもかやうの心きこえ侍しにや。この比しもとゆふかつらき山いたく耳なれて侍れと。右歌も又ことなる事侍らねは。爲レ持。

四番

左勝　家隆朝臣

月影もすめはすみけり白雲のたえすたなひく峯のこからし

右　俊成卿女

鳥の音も木のはもしらぬみ山分て月はわすれす涙もるそて

左右ともに。よろしくはみえ侍を。しら雲のたえすたなひく山によせて。月影もすめはすみけりとをける心。誠にたくみにおもしろく侍れは。左勝と申へくや侍らん。

五番

左勝　範宗朝臣

嵐ふくみ山の庵のひまをあらみ月をあるしととふ人もかな

右　爲家

しら雲のかゝるみ山の月にたにとへかし人の秋のおもひを

左下句いうに侍へし。右秋の月のひかりにむかひて。しら雲のかゝるといへる。事たかひてきこえ侍れは。以レ左爲レ勝。

六番

左　行能

君か千世を空にみやまの松のえの變らぬ月もいつとわき鳧

右勝　光家

あをやきのかつらき山に雲消てなかき夜わたる月そ久しき

左歌君か代なといふとも。千世も八千世もきこえ侍なん物を。このはしめの六文字すこしき﹅なれすや侍らん。又松かえ梅かえは。つれにかの字をそき﹅なれて侍。花のえなとはいひなれて侍へし。ふかき難にはあらす。右めつらしきふしもみえ侍らす。又させるとかもなき程に。いさ﹅かまさり侍へくや。以左爲勝。

七番

左勝　寒野虫　女房

淺ちふや床は草葉のきり〴〵す鳴音もかる﹅野への初霜

右　雅經朝臣

きり〴〵す鳴音もよはの初霜に野への淺茅や先かはるらん

左の床は草葉とをきて。なく音もかる﹅と侍。心ことはかのひとりぬるといへる本歌にはおほくまさりて。まことにありかたくこそきこえ侍めれ。右もすかたことは﹅いうなるさまにはへるを。ちか比露のぬき夜はの山風この比はたつたのにしき心してふけ。此歌もし作者見をよはす侍にても。今はめつらしからすみえ侍れは。以左爲勝。

八番

左勝　大藏卿

すたきこし野もせの虫よ秋たけて我たに殘るしたの思ひを

右　侍従

ゆく秋のすゑの﹅木のはあさな〳〵そむれは弱る虫の聲々

行秋のすゑの﹅おもかけしほるらん。草葉の露霜をはをきて。木のはをしもいひたてたる。たかひて侍うへに。色といふもしもなくてそめたるも。ことはりなく侍らん。これた﹅尤風情つきて。白紙をのかる﹅はかりのいたつらことにこそ侍めれ。以左爲勝。

九番

左持　従三位

をのか秋をおしむか夜半のきり〳〵す枯野の草の露に鳴也

右　經通朝臣

よはるかは音に鳴かれぬ蛬をのかすむの﹅霜のふりはも

左はことなることなく。右はおもふところありけに侍れと。ことはやすらかならす聞え侍れは。同程には侍らん。

十番

左　家隆朝臣

野へは今虫の音たゆむ初霜に聲ものこさすうつ衣かな

右勝　俊成卿女

うらむなり今は嵐をまつ虫もかれ（のイ）の﹅露にき﹅わふるねに

むしのねたゆむはつ霜に聲ものこさすといへる歌のさま。いとよろしくは侍を。音とこゑとは。なを同心にやあるへき。又ことに擣衣をよめるにや侍へき。おほかたのすかたことはは。まことにいうにきこえ侍れと。題の心。右はうるはしきにつきて。勝と申へくや。

十一番

左勝　範宗朝臣

長月やすゑの﹅原の色よりもなをかれまさる虫の聲哉

右　爲家

初霜のをくの﹅小篠うらみてもをのれ枯行松むしのこゑ

左歌心ことはかなひて。よろしくこそ侍めれ。右歌をくの﹅をさ﹅といへる。き﹅なれぬやうには侍れと。た﹅はつ霜のをくよしをよめるにそ侍へき。末の﹅原は猶いひしりてみえ侍れは。以左爲勝。

十二番

左勝　行能

虫の音もつきせぬ御代をたのむらし露は夜寒の野への松虫（風イ）

右　光家

すゝ虫の聲はいとゝやよはの霜ふるのゝをさゝたへぬ嵐に

虫の聲夜半の霜のこと。七番の右の歌の おなし心に侍へし。すゝむしのふりたることも。めつらしからす侍れは。つきせぬ御代なと祝言に侍めれ。勝侍へし。

十三番　寄風雜

左勝　女房

龍田河なかれも行か紅葉々のちらぬかけをも風にまかせて

右　雅經朝臣

つくはねのこのもかのもの嵐にも君か御かけを猶や頼まん

左心すかたいとよろしくは侍を。秋の歌にやすこしききなされ侍らん。右歌のさまもいうに。心もあはれに侍るを。つくはねのこのもかのも君か御かけ三句をき所。たゝかけはあれとますかけはなしといふ二句はかりやかはりて侍らん。古歌を本とすれと。三句おなし所にをかは。あたらきし歌のこゝろいくはくならすとかや。そのかみ老父申旨侍き。猶以左爲勝。

十四番

左勝　大藏卿

長月のかさなる雲のかよひちに行末とをき秋風そふく

右　侍從

飛鳥川今はふるさと吹風の身はいたつらに秋そかなしき

左かさなる雲によせて閏月をそへたる。心たくみに詞いひしりて。いとよろしく侍らへに。右いたつらにふりはつる身かなしめるよりほかに。心詞のおかしき所も侍らねは。返々以左爲勝。

十五番

左持　從三位

そよやいかに幾よに成ぬ神風やいせの濱荻とはゝこたへよ

右　經通朝臣

いく千世と思ひもわかぬ秋かせにをのれそなのる住吉の松

伊勢の濱荻のいくよ。住吉の松の幾千世。左とはゝ。右なのる。いくはくのをとりまさりみえ侍らぬにや。

十六番

左持　家隆朝臣

我よはひ君のやちよにふく風の契かそへよ和歌のうら浪

右　俊成卿女

なかき夜の夢をもさませ露ふかきさゝの庵のしたは吹かせ

この兩首。又よろしき持に侍へし。

十七番

左持　範宗朝臣

しるへせよ我言のはに吹風もきこゆはかりにすみよしの松

右　爲家

山おろしによその木葉は散はてゝ松にはたえぬ夕しくれ哉

此番も猶いくはくの勝負みえ侍らす。右歌たゝ山風とて侍なん。

十八番

左持　行能

風たゝぬ御代のしるへはしら浪の岩うつ聲もなきさなり鳬

右　光家

行末もたのみそわたる天津風のとけき御代の雲のかけはし

兩首の御代風しつかなる心。又おなしさまにみえ侍めれは。しゐてわきまへ申かたくや侍らむ。

群書類從卷第百九十五

和歌部五十 歌合十六

禁裡歌合 建保二年七月二日當座

一番 初秋露

左持 女房

萩原やすゑはの露もしらせけりうき身ひとつの秋の夕暮

右 家衡卿

さやかにもしらぬ計の秋風にうらめつらしき袖の白露

二番

左持 賴範卿

風のみかいつしか萩のうへに又秋しりかほにをける白つゆ

右 範基朝臣

昨日けふまた秋淺き萩のはにいつしか露のやとり馴たる

三番

左持 經通朝臣

秋きぬとまた夕風も音せぬにあやしや袖に露そことゝふ

右 範宗朝臣

みそきせしるくしに秋や立ぬらんかへれは深し道芝の露

四番

左勝 保季朝臣

秋とたにまた大かたはしら露の萩のはならす程もへにけり

右 雅隆

今朝みれは野原のくさの露そをく袖より外も秋はきにけり

五番

左勝 藤原康光

里わかす秋はきにけり白露の萩のうは葉に月や澄らん

右 菅原淳賴

ふか艸のあれにし里をけふみれは野原の露に秋はきにけり

六番 野草花

左 藤原康光

秋とみしきのふの暮のいかならんあさけの袖の萩か花すり

右勝 家衡卿

宮城野やはつ花摺の秋の色にいつしかうつる心なりけり

七番

左持 保季朝臣

昨日みし野への夏艸いつのまにもとあらの萩にをしか鳴覽

右 菅原淳賴

みやきのゝ野へのけしきの色に出て小萩かはらに秋風そ吹

八番

左持　經通卿

宮城野や千種の秋の唐にしきかはらぬ露も色そかはれる

右　雅隆

染わたす萩の錦の花さかりたゝまくおしき野への色かな

九番

左　賴範朝臣

秋きぬとけさはいはれの野へとてや尾花か末に風もほのめく

右勝　範宗朝臣

つなかぬ駒も心せよ野への小萩の花さかりなり

十番

左勝　女房

萩か花咲らんをのゝ朝露にぬるゝはかりの袖の色哉

右　範基朝臣

宮城のゝ露をたひねにかたしけは袂にうつる萩か花すり

十一番　夕山風

左勝　女房

艸葉にはあたにおもひし夕露を衣手ならす秋の山風

右　範宗朝臣

夕つくよくものはたても跡たえて嵐吹なり天のかくやま

十二番

左勝　賴範朝臣

夕つくひ入さの山の秋風に袂すゝしき日くらしの聲

右　雅隆

けふも又入相の鐘にかよひきて初瀬のひはら風すさむ也

十三番

左勝　經通卿

詠めわひぬ秋風今はたつ田山夕ゐる雲もかつ時雨つゝ

右　菅原淳賴

袖の露も泪もいかにしくるらん秋は夕の山おろしのかせ

十四番

左　保季朝臣

猶ふかき夕は空や寒からむ外山のまさ木あき風そ吹

右勝　家衡卿

いつしかとかはるか秋の夕ま暮すゝみに來つゝなれし山風

十五番

左持　藤原康光

村時雨もる山陰の夕かせにもろき木葉の色そうつろふ

右　範基朝臣

つま木こる片山陰の夕すゝみ袖に吹まく荻のうはかせ

十六番　雨後月

左持　藤原康光

さやけさも誰か又みん村しくれはれぬる雲の跡の月影

右　範宗朝臣

村雨のはれ行すゑの雲間より出るも澄る秋の夜の月

十七番

左持　保季朝臣

誰里のあさちに露のこほるらん村雨すきぬ月の行ゑに

右　範基朝臣

なかめすや一村すくる夕立のはれのゝ跡の山端の月

十八番

左持　經通卿

村雨の雲も殘らぬ山のはに待いつる月の秋の夕くれ

右　家衡卿

雨雲のよそに晴ゆく夜半の月さしのほる影の氷る玉水

十九番

左　賴範朝臣

村雨は通りにけりな淺茅生の露にわりなく月をやとして

右勝　菅原淳頼

夕暮は雲もとまらす村雨の空とも見えす澄る月かな

二十番

左勝　女房

秋の雨の宵の村くも跡きえてはらふ嵐に殘る月かな

右　兼隆

時雨つる雲ふく風をたよりにて千里にすめる秋のよの月

廿一番　羇中戀

左（判欠）　女房

いのちやはあたの大野の艸枕はかなき夢もおしからぬ身を

右　菅原淳頼

月影にちきりて出し面かけを忘れすしのふ古さとのそら

廿二番

左勝　頼範朝臣

ぬるゝをは山ちの露にことよせてかこつ方なき袖の色哉

右　家衡卿

旅の空いつまれなれし夕暮にわきても物を思ふなるらん

廿三番

左持　經通卿

春ことにかはらす歸る雁かねは霞のうちに道やしるらむ

右　名闕

立わたる霞の末の山端のはつかにみえて歸るかりかね

廿四番

左（判欠）　範宗朝臣

此ころは秋をしのたの杜にきて月の露ちるそての面影

右

以下闕

歌合 建保二年八月十六日

題

秋風　秋露　秋月　秋雨　秋雁
秋虫　秋鹿　秋花　秋水　秋霜
秋祝　秋旅　秋戀　秋懷　秋雑

作者

女房順徳院　僧正行意
權大納言源朝臣通具　參議藤原朝臣定家
大藏卿藤原朝臣有家　宮内卿藤原朝臣家隆
左近衞權中將藤原朝臣雅經　丹後守藤原朝臣範宗
侍從藤原朝臣光家　皇太后宮大夫俊成卿女

讀師

講師

判者　參議藤原朝臣定家

一番　秋風

左勝　定家卿

おさまれる民の艸葉をみせかほになひく田面の秋の初風

右　有家卿

しらさりついつはた秋のきにけらし深く身にしむ風の音哉（色イ）

左の歌民の草葉かせになひき。稲葉の雲をなせる心はかりにて。更によろしきふしも侍らぬにや。右の歌たけあるさまに侍れと。一番の左。治世にことよりて侍れは。爲レ勝。

二番
左勝　　女房
よや寒き衣手うすし片敷のまたひとへなる秋の初風
右　　俊成卿女
荻のはにそよく哀は吹過て心にのこる秋かせのこゑ
左かたしきのまたひとへなると侍る。詞姿えんにおかしく聞えはへるを初五文字そ。あきの初風にはすこし過てやときこえ侍る。右そよく哀なと申事。ふるきうたには見え侍らす。吹すきて心にのこるなと。申さまほしきこと葉にははへらねは。以左爲勝。

三番
左持　　家隆朝臣
狭莚に人をはたれとたのまねとくるゝ夜ことに秋風そ吹
右　　雅經朝臣
今よりの萩の下葉もいかならんまついねかての秋風そ吹
人をはたれと頼ねとくるゝ夜ことにといへる。尤よろしく聞えはへるを。まついねかての秋風もをとるへくも侍らねは。ことによろしき持にやはへらん。

四番
左勝　　僧正
うちなひき正木のかつら秋やくる外山にかはるけさの初風
右　　通具卿
露はけに袖も置あへす荻のはやしのに秋ふく夕暮の風
あられ降らしといふ本歌をおもひて。正木のかつら秋やくるとをき。外山にかはるなと侍る。ありかたくみえはへれは。しのに秋ふくも心あるさまに侍れと。猶以左爲勝。

五番
左勝　　範宗朝臣
彦星の妻待秋のよひの間は風のみわたる鵲のはし
右　　光家
うつり行卿葉につけて吹風の色はさやかにみえぬ秋かな
左歌尤宜。仍爲勝。

六番
左勝　秋露　　家隆朝臣
乙女子か袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋のしら露
右　　通具卿
矢田の野の色つく淺茅をしなへて白くも露を吹嵐かな
左歌をとめ子か袖ふる山に玉かつらみたれてなひく。心もめつらしく。姿も及ひかたきさまにはへるへし。かやうなるをや秀歌と申へく侍らん。右歌もやたの野に淺茅いろつくといへる。ふるき心たくみにいひくたされて侍れと。此左のうたは。なをいてきかたきさまにや侍らん。

七番
左勝　　僧正
秋きぬと風にのみやは驚かんひろはぬ袖に玉もはかなし
右　　光家
木間より色つく影にうつりきて袂にそむる秋の夕露
左ひろはぬ袖に玉もはかなしと侍。露の詞まことにあさやかに面白くみえ侍るうへに。右このまよりいろつくかけ。なにの影ともきこえねは。殊以左爲勝。

八番

左持　女房

小山田のかりほの庵のとことはに我衣手は秋の白つゆ

右　範宗朝臣

秋きぬとさそな草葉のしほるらん袖たにかゝる露の手枕

左右の露のこと葉艶なるさまにて。姿もおなし程にやはへらん。

九番

左　定家卿

袖ぬらす忍ふもちすりたかためか亂てもろき宮城のゝ露

右勝　雅經朝臣

音そよく荻のはよりも秋風の人にしらるゝ袖の夕露

左のしのふもちすり。古きみたれをき所もかはらす。めつらしき所侍らねは。右させるとかなくて。勝侍るへし。

十番

左勝　有家卿

夕されは野もせにみかく白露のたまれはかてにあき風そ吹

右　俊成卿女

ことはりの露と計はなくさめとぬれそふ袖にもよほすも秋

左たまれはかてにこそ。いと有かたく宜きこえはへるめれ。右もよほすも秋といへる。きゝなれぬこと葉にや侍らん。尤以レ左爲レ勝。

十一番　秋月

左勝　雅經朝臣

大かたは我身ひとつの秋としも嵐にはるゝ山端の月

右　女房

天津空道もやとりも白雲のあくるもしらて月をみる哉

左いとよろしくいひくたされて侍うへに。右の道もやとりもしら雲のとはへる。愚意わきまへ知かたく侍れは。左勝とや申へく侍らん。

十二番

左勝　通具卿

秋はまたうきをも袖につゝみ皃なれぬる月の露のかことに

右　範宗朝臣

夕より雲をはらひし秋風のともに更行山のはの月

左うきをも袖になといへる。おもひ入て侍にや。右もこころあるさまにはみえはへれと。共に更ゆくといはゝ。山のは遠くや侍らん。なを以レ左爲レ勝。

十三番

左勝　家隆朝臣

あくかれて宿をは出ぬ此里も我衣手は月にぬれつゝ

右　定家卿

いつはとはわかぬ常盤の山人も空におとろく月の影哉

左歌ゆうなるさまに侍れは尤爲レ勝。

十四番

左勝　僧正

鵲のちかふる橋のおもひはをよわたる月のいかてもるらん

右　俊成卿女

君と秋と月とひかりと萬代の契りは空に曇りなくみゆ

左をよひかたきやうの姿こと葉にはへるうへに。右君と秋と月。ことは心えられて侍るを。此外光とわけて申ならへん事。いかゝはへらん。心えられ侍らねは。以レ左

爲レ勝。

十五番

左勝　有家卿

月みても我世はすてに久堅のあまねく照せ秋の心を

右　光家

久堅の淸きみ空の秋風に月も光をみかきそふらし

左すかたも宜。心もさる事と。あはれにきこえはへるうへに。右みそらの月なとを下に置て。淸きといふこと葉につゝけて侍る久かた。ことけりたかひてや侍らん。以レ左爲レ勝。

十六番　秋雨

左持　僧正

いとはしな月待よひのあさちふにたえ〳〵そゝく秋の村雨

右　雅經朝臣

風すさふ桐の落葉に跡たえて窓ふかきよの秋の村雨

右歌空階雨滴落葉窓深なといへる古きこゝろ。何となくおもひいてられて。ゆへあるさまに侍れと。左の月まつよひの淺茅生も。又おもかけありて。えんに聞えはへれは。おなし程の事にや侍らん。

十七番

左　定家卿

花そめの衣の色もさたまらす野分になひく秋のむら雨

右勝　通具卿

人はこす拂はぬ軒のきりのはに音なふ雨の音そ淋しき

左衣の色もさたまらすといへる。其こと〻聞えすや侍らん。右雨滴梧桐山舘秋といへる景氣かよひはへるにや。此雨のをとは。いと〻よろしく聞え侍れは。殊爲レ勝。

十八番

左勝　家隆朝臣

秋はまた軒はの木葉つれなくてき〻もまかはぬ夜半の村雨

右　範宗朝臣

朝な〳〵一葉つゝちる柞原あきも時雨のもろき色哉

左ことなる事侍らねと。いひしりて聞え侍にや。右もゆらにははへるを。落葉冬にかきりて申をきたらんやうにきこえ侍らん。猶き〻もまかはぬなと。宜聞え侍れは。爲レ勝。

十九番

左　女房

宮城野の木の下露やいかならん風に玉まく秋のむら雨

右勝　有家卿

日くらしのなく夕暮のうき雲に村雨そゝく森の下露

宮城野の木の下露。ゆうには聞え侍るを。なく夕暮の浮雲も。やすらかにいひくたされて。景氣みる心地してはへれは。爲レ勝。

廿番

左　光家

しほれぬや庭も籬も秋の色のふるとはつらき夜(よそイ)の村雨

右勝　俊成卿女

風ませに窓うつ夜半の村雨のもらぬよりもる床(袖イ)の露哉

秋の色のふるとはつらきとつゝけたること葉。さらに叶はすや聞え侍らん。無下にいふかひなくみえ侍れは。もらぬよりもるも殊に聞よくは侍らねと。いろのふる

には何かは勝はへらさらん。

廿一番　秋雁

左　俊成卿女

松風の秋にはいと〻たえ〴〵にふしみの夢のきゆる鴈金

右勝　家隆朝臣

鴈かねの聞ゆる空や明ぬらん枕にうすき窓の月影

伏見の夢。いたくありつきてやはへらむ。いつれの名所にも。そこの夢はき〻ならひ侍らす。題の雁金もかしこくましり侍にけり。枕にうすきこそ。いとおかしく聞え侍れは。爲レ勝。

廿二番

左勝　女房

誰ためにくる秋風のことつても涙そおつる初鴈の聲

右　通具卿

秋ふけぬ衣かりかね夜や寒きつはさにくもを重ねてそ鳴

右の衣かりかね雲をかさねたる心。おもひ入てたくみには聞えはへれと。左はことによろしく聞え侍れは。可レ勝や侍らん。

廿三番

左　定家卿

此ころは鴈の涙やはつしほにいろわきそむる峯の松風　のイ

右勝　僧正

鴈かれのゆき〻を空に忍ふとて霞を霧にいくへ詠つ

左のかりの泪のあとはかりにて。松風の歌と申へくや侍らん。右往來を空にしのひ。かすみを霧になかめたる心。誠にめつらしくおかしく侍れは尤爲レ勝。

廿四番

左持　範宗朝臣

山人も道たえぬらん鴈かねの友よひかはす峯の朝霧　秋イ

右　有家卿

秋の鴈風にきほひて越路より誰をたのむの澤に鳴らん

左歌詞ゆうにははへるを。鴈かね峯の秋霧に友よひかはせる心。鹿のこゑなとにおもひよそへられて。山とひ越る雲井のつはさとしも聞えすや侍らん。右誰をたのむの澤になかは。風にきほひてこし路の事。ことなるようなくやはへるへき。爲レ持。

廿五番

左勝　雅經朝臣

鳴わたる鴈の泪やしくるらん羽うちかはす村雲の空

右　光家

たつた山からくれなゐの降出て鳴や木末の秋の鴈かね

左こ〻ろこと葉はしめをはりかなひて。いと宜こそ侍めれ。右梢の秋の鴈。さきにはへる同しさまの。是は今すこし見ならはぬすまゐにや侍らん。たかみそきゆふつけ鳥なとをみたかえて侍るにや。かへす〳〵以レ左爲レ勝。

廿六番　秋虫

左持　女房

秋の野の尾花吹ちる風のうへにありか定めぬ虫の聲哉

右　有家卿

秋の虫のはたをる野へのくれはとりあやしや袖に露亂つ〻　くイ

秋の野かせにありか定めぬ虫の聲。さこそは侍らめ。は

たをる野へにくれはとりのあや。ことはりは聞え侍れと。左は艷に右は事理かなひて侍れは。持とや申へく侍らん。

廿七番

左勝　　僧正

くるゝより同しまかきのきり〳〵す近つく聲に夜や更ぬ覽

右　　家隆朝臣

野や寒き夜半の枕のきり〳〵す我もとゆひも霜は置なり

おなしまかきなから。更て近つく虫のこゑ。面影いとおかしく聞えはへれは。たれもいとひかね侍。霜の色はわさと負に申なし侍るへし。

廿八番

左勝　　通具卿

露はつゆ鳴音はたてつ蛬おもふか物をあきのよもきふ

右　　光家

秋は猶淺茅か原のをのれのみかれゆく虫の何を待らむ

おもふか物を秋の蓬生。優にはへれは勝侍るへし。

廿九番

左持　　雅經朝臣

月影はいたらぬ里もなく虫の聲のかきりや深草の露

右　　範宗朝臣

まつ虫のこゑをとひくる秋の野はたかふる里の庭の籬そ

雨首ともにさせる難侍らねは。同しほとの事にや侍らん。

三十番

左　　定家卿

あるしから思ひたえにし蓬生に昔もよほすまつ虫のこゑ

右勝　　俊成卿女

うつもれぬ軒はにつたふ虫の音に蓬かもとの宿の夕暮

おなしさまのよもきにははへれと。蓬も歌も右はたけ勝りてや侍らん。

三十一番　秋鹿

左勝　　女房

三室山下草かけてなく鹿の聲よりしけき曉のつゆ

右　　家隆朝臣

忍ひわひ思ひやかくる神なひの三室の山に鹿そ鳴なる

雨首みむろ山。下艸かけて鳴鹿のとはへるは。今すこし優にはへれは。勝と申へくや侍らん。

三十二番

左持　　通具卿

昔おもふ三わの檜原や風くれて峯にをしかの聲送なり

右　　雅經朝臣

おもひ入山にても又鳴鹿のなをうき時は秋の夕暮

猶うき時は秋の夕くれ。いと宜は聞えはへれと。むかしおもふ三輪のひはらも心あるさまに侍れは。持にやはへらん。

三十三番

左　　光家

色かはる床は淺茅生露霜に鹿も妻なき音をや鳴らん

右勝　　有家卿

あさちふのをのか艸ふしうら枯て人やはとはぬ小男鹿の聲

色かはる床。聞よからす。又鹿のつまなき。事ふりはへ

りき。をのか草ふしうらかれて。いと宜きこえ侍れは。
勝はへるへし。

三十四番
左勝　範宗朝臣
時こそあれいかに契りてさをしかの秋の夕の野へに鳴らん
右　俊成卿女
根よとなれる契の鹿の音に夕もつらき霧のまかきに
鹿のちきり秋のゆふへ。おなしこゝろにははへれと。左はこと葉つゝきいひしりて宜聞え侍れは。爲レ勝。

三十五番
左勝　僧正
秋山のみねゆく鹿の友をなみ霧にまとへる夕暮の聲
右　定家卿
朝な〳〵木葉うつろひ鳴鹿のことはりしるき秋の山かけ
右ことはりにくゝ侍れは。以レ左爲レ勝。

三十六番
左持　女房
袖の色は露のひまたにとゝまらて薄も荻も秋風そ吹
右　僧正
咲にけりうたの大野の小萩原つまとふ鹿も今かなくらん
兩首ともに優にきこえはへれは。爲レ持。

三十七番
左　定家卿
旅衣ひもとく花のいろ〳〵に遠里小野のあたら朝きり
右勝　俊成卿女
ぬれてほす袖こそあらね露の色はもとみし秋の萩か花摺
左花をおしむ心によりて。あたら朝霧とつゝけたる、本たかひてや聞え侍らん。右作者定てゆへ侍らん。優に侍れは爲レ勝。

三十八番
左勝　通具卿
をしなへて移ろふ露にわきかねぬ花のえ毎に秋とをいはん
右　光家
小萩さく花すり衣うつろひぬぬれてのちや袖の朝つゆ
右下句こそ心えはへらね。後しも朝露ならんこと。なにと侍にか。左尾花か末を秋とをいはんといへる歌をおもひて。花の枝ことにと侍。おかしく聞えはへれは。尤爲レ勝。

三十九番
左　家隆朝臣
あかなくに野へにましりてけふ暮ぬ露の宿かせ本あらの萩
右勝　範宗朝臣
やとりつる月はかたみもとゝまらてあけゆく袖は萩か花摺
左いとおかしく侍れと。すこし聞なれて侍るへし。右月はかたみもとゝまらて明ゆく袖はとはへる。いと珍らしく優に聞え侍れは。爲レ勝。

四十番
左　有家卿
朝露に花の下ひもとけにしを又今さらに野への夕暮
右勝　雅經朝臣
秋風に咲ちるをのゝ露しけみ袖もとをゝにうつる萩原
左とけにしをのへと侍る。又心えわかれ侍らす。右袖も

とをゝにうつる萩原といへる。よろしく聞えはへれは。
爲レ勝。

四十一番　秋水

左勝　僧　正

立田川うつる紅葉のちらぬまはわたれとにしき中や絶ける

右　範宗朝臣

ふみ分て誰かはとはん秋山の紅葉ふりしく谷の下みつ

わたれとにしきといへること葉。珍らしくおかしくみえ侍れは。爲レ勝。

四十二番

左勝　家隆朝臣

山のはも時雨はまたき朝日影くれなゐにほふ瀧の白糸

右　有家卿

大井川しもはかつらの紅葉はもひとつあらしの山の秋風

大井川しもはかつら。あまりくはしくや侍らん。あさ日影にほふらん瀧のしらいと。すこしは勝はへるへくや。

四十三番

左勝　通具卿

おもひこし生田の杜の秋風に川音すみぬ夜や更ぬらん

右　光　家

時雨つゝ木葉をさそふ水の面に浮ても秋のいなんとや思

うきても秋のいなんとやおもふ。よはくや侍らん。左河音はたくみなるさまに聞えはへれは。爲レ勝。

四十四番

左　定家卿

秋風のかつ吹はらふ谷の戸におもふもきよくすめる山水

右勝　雅經朝臣

音羽川關のあらしの影みえてたか色深き秋の瀧つせ

たか色深き秋のたきつせ。まことによろしく侍りぬ。尤爲レ勝。

四十五番

左持　女　房

人くまぬ板井の清水里とをみむかしもいくよ秋そもりくる

右　俊成卿女

小倉山あらしやいそく大井河はやせの浪に秋の日数を

兩首下句。ともに心ゆかす聞えはへれは。爲レ持。

四十六番　秋霜

左勝　女　房

もみち葉はふりみふらすみ置霜のさえ行松に秋風そ吹

右　光　家

初霜のをくらの山はうつろひぬ秋の木葉の色もかきりに

紅葉のふりみふらすみこそ。いと珍らしくおかしく聞えはへれは。以レ左爲レ勝。

四十七番

左勝　僧　正

さをしかの妻とふ岡は霜かれてからぬさは田に殘る秋風

右　俊成卿女

置まよふ影をかたしく袖の月の霜のまくらに秋風そ吹

袖の月霜の枕。艶には聞え侍れと。ことなるこゝろは侍らぬにや。妻とふ岡はしもかれてなといへるは。いと宜侍れは。勝はへるへし。

四十八番

左　家隆朝臣

しらすけの眞野の萩原朝な〳〵をきまとはせる秋の初霜

右勝　雅經朝臣

よを寒み今はあらしの乙女子か袖ふる山の秋のはつ霜

左もさせる難なく。いひしりては聞え侍るを。右の今はあらしのをと女子かとをける。おなしはつ霜も。ことに艶に聞えはへれは。爲レ勝。

四十九番

左　定家卿

秋の色に殘るかたみの霜をたにをけかし艸はそれもとまらす

右勝　有家卿

霜白くをかの庵のさゝまくら一夜に秋の末はをそしる

左をけかし草は。輕々の詞に侍るへし。右さゝ枕ひとよの秋かせ〔故〕なきに侍らす。勝侍らん。

五十番

左持　通具卿

行あはぬ方のまよひに霜そをくにゐしまもりか麻のさ衣

右　範宗朝臣

山里は雪よりさきも住わひぬ初霜かれの長月の空

左は萬葉の古風をこひねかひ。右は九秋のくれを悲しむ。姿詞はかはりて侍れと。をの〳〵おもへる所其難侍らねは。左右相似たり。持にや侍らん。

五十一番

左持　有家卿

君か代にちゝの秋風吹そめてなひきにけらし野への草木も

右　僧正

君かへんよはひをかねて幾千代とかすかく鳴の羽音よ深し

兩首ともいはひのこゝろ。歌のさまいつれとも申かたくはへれは。爲レ持。

五十二番

左持　定家卿

山水に老せぬ千代をせきとめてをのれうつろふ白菊の花

右　範宗朝臣

菊の花君かためには長月のこゝぬかことに千代そつむへき

左はことなる事なく。右もすこし平懷にや侍らん。是も不分明。

五十三番

左　女房

行末をおもへはひさし乙女子か袖ふる山の秋のよの月

右勝　家隆朝臣

君か代のちとせも秋そ顯るゝ四方の時雨に殘る松かえ

左もさせる難なくはは へるを。右の四方のしくれに殘る松か枝。なをめにたちて。よろしくみえ侍は爲レ勝。

五十四番

左　光家

千代のかけ久しかれとそ松かえに猶吹むすへみよの秋風

右勝　通具卿

君か代はちゝの秋風まさかつら神の宮人いのりそめけん（てきイ）

左の千代のかけみよの秋かせ。祝の歌には。よの字あまたよめるためしも侍めれと。なを其難なき右の歌。勝はへるへきにや。

五十五番

左持　雅經朝臣

神風やみもすそ川の夕波に千とせの秋の聲はつきせし

右　俊成卿女

あめつちのひらけし神のみことより千歳の秋は我君のため

左は優に。右はちからいれたるさまにはへれは。又おなし程とや申へく侍らん。

五十六番　秋旅

左　定家卿

ふる里は遠山鳥のおのへより霜をく鐘のなかきよの空

右勝　家隆朝臣

艸も木もあたなる比の野山わけ契りし都程もはかなし（るけイ）

ふるさとは遠山鳥。ことなる事侍らし。草も木もあたなるところは。おかしく聞え侍れは。爲レ勝。

五十七番

左持　通具卿

都おもふ袖もかた〳〵ほしあへすあへの嶋山露深くして

右　雅經朝臣

月よ猶さやの中山なか〳〵になに面影の秋のふるさと

萬葉のあへの嶋山夕露にといひ。古今のさやの中山なかなかにといへる本歌のこゝろ。何れもおもひ侍所はへれは。勝負申かたくやはへらん。

五十八番

左持　女房

都をはよそにたに見んさゝのくまひのくま河の秋の夕暮

右　範宗朝臣

東路やこえ行山も色つきぬ都も今やうち時雨るらん

檜隈川の秋の夕くれ。艷に聞え侍るを。こえゆく山の色つくをみて。宮古のしくれをおもへる心。ことにめつらしく侍らねと。又優に侍れは。持にや侍らん。

五十九番

左　光家

うらみぬや旅ねの夢は秋風にむすほほれたる故郷の空

右勝　僧正

歸りこん程をはいつとしら露のすかるなく野に秋風そ吹

左初五文字こゝろえはへらす。秋風ふる里もむすひにくき物にや侍らん。白露のすかるなく野こそ。珍敷おもしろく聞え侍れ。尤爲レ勝。

六十番

左持　有家卿

ふる里はしのふやいかに信夫山とはゝや秋の風のたよりに

右　俊成卿女

古郷の雲たにそれと跡もなし淺間の山の秋霧の空

左とはゝや秋の。すこし事淺くや侍らん。右の雲たにそれと。ことたらぬ心地しはへれは。同し程にや侍らん。

六十一番　稚戀

左勝　女房

わすれはや風はむかしの秋の露ありしにも似ぬ人の心を（にイ）

右　定家卿

下むせふもしほの煙こかるとて秋やはみゆる人はうらみし（めイ）

風はむかしの秋の露。艷におかしく聞えはへれは。爲レ勝。

六十二番

左持　光家

きけはうし吹とな告そ白露の置て人まつ宵の秋風

右　俊成卿女

面影〔は〕契りしまゝのこゝの葉にまたしきくるゝ秋の色哉

ことなる事侍らす。勝負不分明。

六十三番

左持　通具卿

なかむれは空やはかはる今こんのまゝの繼橋月も恨めし

右　家隆朝臣

長してふ秋のよのまも徒にゆきては來ぬる夢のかよひ路

まゝのつきはしにかはらぬ月をうらみ。夢のかよひちに長き夜をおもへる心。いつれと申かたくや侍らん。

六十四番

左勝　僧正

東雲や別るゝ空のうき雲にのこすかたみの月もとまらす

右　雅經朝臣

風むすふ便もつらしみちのへの尾花かもとの露の下艸

左右ともに艶によろしく聞えはへるを。右は風むすふすこしあたらしくきこえ侍れは。なを以左爲勝。

六十五番

左　有家卿

すへてたゝ戀せぬ袖の露たにもろきならひの秋の夕かせ（初イ）

右勝　範宗朝臣

かこつへき艸葉にあまる袂哉秋より外の色に出つゝ

左も優にはへれと。右はなをよろしく聞え侍れは。勝はへるへくや。

六十六番　秋懷

左持　女房

秋も秋月も雲ゐのそれなから昔を今におもひかねつゝ

右　雅經朝臣

しらさりしね覺も今はふかき秋の有明の月によを殘しつゝ

左ことのゆへ侍らん。作者をうけたまはらては。わきまへ申かたくはへれ。右もやすらかに云くたして侍れは。勝負いつれと申かたくや侍らむ。

六十七番

左勝　僧正

今そしるあゆむ艸葉に捨をきし露の命は君かためとも

右　家隆朝臣

いつこにか身をは宿さん鴈のくる嶺にも晴ぬ思ひある頃

右の歌も。こゝろ姿いとよろしく聞え侍を。左のあゆむ草葉とをきて。露のいのちはといへる。猶みところ多くはへれは。爲勝。

六十八番

左勝　範宗朝臣

捨やらぬ身を秋風に年をへておつる涙の數そ添ゆく

右　俊成卿女

身をいとふ心をちきる古郷のまかきの花とさける朝かほ

左さる事ときこえて。あはれもふかくこそ聞なされはへれ。右も優にはへれと。こゝろをちきるなと。すこしくたけてきこえ侍れは。左爲勝。

六十九番

左　有家卿

誰かとはんたゝ徒にふりまさる身をしる雨の秋の夕くれ

右　　　　定家卿

老か身はあはれ末野の草枯によるの思ひの長月の空

雨首共に舊老のうたにはへるめり。人すくななる倚齒會にや侍らん。としまさりて侍らむ作者勝侍るへし。

七十番

左勝　　　　通具卿

ねさめとふさそならひの風もうし秋も昔の秋ならぬ身に

右　　　　光家

かれぬとも猶音にたてよ蛩なれも今はの秋の思ひを

右はなれも今はなといへる程。常の事のよからぬにやはへらん。左は優なるさまにいひなかされ侍れは。勝侍るへし。

七十一番　秋雜

左　　　　定家卿

わたつ海や秋なき花の波風も身にしむ頃の吹上の濱

右勝　　　　範宗朝臣

鳴のたつ野澤の秋の夕まくれいつくにとまる心なるらん

右の歌こそいとよろしく見えはへるめれ。仍爲ㇾ勝。

七十二番

左持　　　　女房

高砂の松にすむ月今よりの尾上の霜や光そふらん

右　　　　僧正

吉野山こけに露をく岩かねに契ありけれはあまたたひねぬ

高砂の霜のひかり。吉野の露の契。松にすみ。いはにふす。持に侍るへし。

七十三番

左持　　　　通具卿

影淸き蓬かほらの秋の月霜をてらさは捨すもあらなん

右　　　　有家卿

人とはゝ柴のあみ戸をさしあけていつか深山の秋をこたへん

左もし霜鬢のこゝろにや侍らん。思ふ所侍らん。右いつかみ山の秋をこたへんも。優に聞えはへれは。勝負不分明。

七十四番

左勝　　　　雅經朝臣

秋の色をかつはつらしとみ山木のこりす時雨も袖をかす覽

右　　　　光家

吹まよふ梢そもろき秋風にこは世にしらぬ袖の露哉

左の歌いとよろしくこそはへるめれ。右歌大かたもその所ときこえ侍らぬうへに。こは世にしらぬといへる。みくるしく聞え侍れは。殊に以ㇾ左爲ㇾ勝。

七十五番

左勝　　　　家隆朝臣

嵐ふくふるの神杉露おちて其代もしらぬ秋の夕暮

右　　　　俊成卿女

苔ふかくやとるも悲し秋の月忘れぬ袖に露やをくらん

左その代もしらぬ。又ことによろしくはへるうへに。右のわすれぬ袖につゆやをくらんとはへる。すこし心えかたくや侍らん。おほつかなきまては侍らねと。猶すくれて聞え侍れは。勝侍るへし。

月卿雲客妬歌合 建保二年九月盡日

題

河落葉　寄鳥戀　深山雨

作者

左

女房
權大納言藤原朝臣良平
從三位藤原朝臣家衡
右近衞權中將藤原朝臣家良
從三位藤原朝臣基良
右近衞權中將源朝臣通方
參議左近衞權中將藤原朝臣經通
兵衞內侍
七條院權大夫
俊成卿女

右

左近衞權中將藤原朝臣雅經
散位藤原行能
左近衞權中將藤原朝臣國通
宰相忠定朝臣
散位藤原朝臣保季
中宮大進藤原朝臣兼隆
左衞門權少尉藤原康光
文章生菅原淳賴
前播磨守藤原朝臣範基

講師

侍從藤原光家

讀師

判者

宮內卿藤原朝臣家隆

一番　河落葉

左勝　女房

故さとのさほの川水いかならむはゝその色は風ものこらす

右　雅經朝臣

神なひの山のあらしや立田川みつの秋のみ深きころかな

水の秋のいつくはあれとさほ河のはゝその紅葉身にそしみける。

二番

左持　權大納言

もみちはやよとますうかふ飛鳥川なかれて早き秋の日數に

右　行能

あすか河行せも深き紅葉々にきのふの波も色かはりけり

もみちはの流れて早き飛鳥河きのふもけふも分ぬ秋哉。

三番

左勝　從三位家衡

吹風のこゝにはみえぬ唐錦かは瀨のなみの立にまかせて

右　國通朝臣

秋の色のさそふ水あらはと思ひける紅葉を流すうちの河波

唐錦山にはあらぬ色なから埋もれわたる宇治の川なみ。

四番

左　右近衛中將家良

こからしの立田の紅葉もろ共にさそへは誘ふ秋のかはなみ

右勝　忠定朝臣

見わたせは秋かせなかる立田河ちるや三室の山の木のはに

木枯のさそへは誘ふ河なみの立田の紅葉見てをわたらん。

五番

左勝　從三位基良

たつた河なみにのこらぬ紅葉々を外山にしのふ松かせの聲

右　保季朝臣

おほゐ河わたらは錦あともおしこの頃はかり筏おろすな

大井川ひくかたもなき筏士のこのはにまかふ山おろしの風。

六番

左　右近衛中將通方

山おろし吹にし日より音羽河もみちによとむせゝの白なみ

右勝　兼隆

立田山あらしの空の夕時雨河せのなみの色もそめけり

嵐吹たつたの山の夕時雨さそな川せの色はそむらむ。

七番

左勝　宰相中將經通

梢には音もあらしの立田川なを秋ふかき水のいろかな

右　藤原康光

立田河うつる木のまの色なから秋をそ誘ふみつのしら波

立田河うつるは知らぬかけもあれと音も嵐やこのは立らん。

八番

左勝　兵衛内侍

山おろしの紅葉吹おろす立田河ゆくせに早き水のあきかな

右　菅原淳頼

吹まよふ嵐につけて行秋を河せにいそく嶺のもみち葉

立田河ゆくせに早き水の秋をいそく紅葉の色そかひなき。

九番

左勝　七條院權大夫

夜もすからしくるゝよはの嵐より木のはに埋む谷川の水

右　範基

唐にしき秋の色をや立田川このはいさよふせゝのしらなみ

唐にしき秋たつ色はふりにけり木のはにかゝる谷河の水。

十番

左勝　俊成卿女

立田山梢の秋をなみにとめて紅むすふ瀬々のかはかせ

右　光家

まきもくの高根の雲や時雨ぬるあなしの河に木のは過也

卷向の高根の雲はしくる共深き河せのくれなゐの水。

十一番　寄鳥戀

左勝　女房

けふも偖空しき空に飛鳥のあすかとたにも何を賴まん

右　雅經朝臣

待わひてこぬ夜むなしく明行はなみたにかすむ鴫の羽かき

鳴の立あかつきよりも飛鳥のあすかの里の夕くれの空。

十二番

左勝　權大納言

あふ坂の夕つけ鳥の聲たてゝ賴めぬ人のゆきゝをそまつ

右　行能

飛鳥のあとみし空に立けふりたえむ思ひのしるへはかなし

あふ坂の行きにとまる心哉空とふ鳥の跡をしらねは。

十三番

左　從三位家衡

物おもふ袖の涙のくれなゐにふりつゝそなく山ほとゝきす

右勝　國通朝臣

たつのゐる芦邊の汐のいやましに袖ほすひまもなく〳〵そふる

たつのなく芦邊の汐やまさるらん深き涙の色はみゆ共。

十四番

左持　右近衞中將家良

なみたのみ鳴のはねかきかき侘てこぬよの數や袖の片しき

右　忠定朝臣

艸も木もうつろふ秋のみ山鳥獨やねなん霜しろき夜を

秋の色のうつろふ山にぬる鳥の獨おき行しのゝめの霜。

十五番

左勝　從三位基良

うしや猶とを山鳥の獨のみ長きおもひにあかぬよのそて

右　保季朝臣

忘れしな人を恨みてなくなへにいなとな告そいなおほせ鳥

哀とは秋のかりほにみしかとも露もこほれぬ鳥の聲哉。

十六番

左勝　右近衞中將通方

思ひやる深き心は飛鳥の聲たにもせぬやまの夕くれ

右　兼隆

あふ事はかたのゝとたちかる鷹のそれて空しき思ひ也けり

箸たかのそれて空しき思ひより深きみ山の聲を尋ねん。

十七番

左　宰相中將經通

淺ちふや恨る袖の朝霧にたれ故とてかうつらなくらむ

右勝　藤原康光

しられしな深きえにすむ水鳥の下安からぬ思ひありとも

契りありて深きえにすむ水鳥のあたりの水にぬるゝ袖哉。

十八番

左　兵衞內侍

侘つゝも小夜やふけゐの浦千鳥なくれ跡なき袖の月哉

右勝　菅原淳賴

物おもへはよそにはきかす小夜千鳥恨みてかへる曉の聲

よそなから恨みや猶も增るらんおなし千鳥の曉のこゑ。

十九番

左持　七條院權大夫

にこり江に思ふ心は深けれと人こそしらねにほの下みち

右　範基朝臣

わか戀はつれなき波をかことにて通ふもくるし鳰のした道

人しれす通ふ心のくるしきやいつれもおなしにほの下道。

二十番

左　　俊成卿女

はかなしや夢ちたえ行鳥の音になきて別れし人の面かけ

右勝　　光家

忍ふれ[と]あまる涙に鴫鳥のぬれつゝきつる跡やみゆらむ

人しれぬ袖のなみたを鴫鳥のぬれて絶ぬる跡そかなしき。

二十一番　深山雨

左勝　　女房

つれ〳〵のなかめも今はまさきちる太山の秋の村雨のそら

右　　雅經朝臣

ふみまよひたつきもしらぬ山人の袖もしほりの雨の夕くれ

この頃の雨の夕暮聞なれてみ山のまさき色增りつゝ。

二十二番

左　　權大納言

月にたにとはれん山としらさりししおりのおくの雨の夕暮

右勝　　行能

山人の袖のみ色にふる雨のしつく空しきまきのあきかせ

たつぬへきしおりの奥も深けれと袖に色ふく槇の秋風。

二十三番

左勝　　從三位家衡

堪てたれきくか嵐の吹まよふよしのゝおくの秋のむらさめ

右　　國通朝臣

雲かゝる太山の奥の雨そゝき餘りになれてさひしくもなし

淋しさはあまりになれてしらすともよしのゝ奥の秋の村雨。

二十四番

左持　　右近衞中將家良

よし野山寒き嵐の吹まゝに木のはこきませ打しくれつゝ

右　　忠定朝臣

うきなから我身世にふる時雨より秋いろ深き山のおく哉

思ひしれいつれも深き山のはにわかししくれの空に任て。

二十五番

左勝　　從三位基家

衣手はしくるゝ雨のふりはへてとはれぬ山の奥のかりいほ

右　　保季朝臣

槇のはになれてもそまぬ村時雨いくよむなしき山をすく覽

槇のはにそまぬしくれはいかなれや山の奥こそ色增るらむ。

二十六番

左持　　右近衞中將通方

この比はもみちを染るしくれのみふるの山みち誰通ふらん

右　　兼隆

あし曳の山はよしのゝ奥のいほ時雨るゝ空はとふ人もなし

めくり行秋のしくれも幾かへりふるの山道みよしのゝ奥。

二十七番

左　　宰相中將經通

村雲は風も吹あへすかつらきや高間の奥も時雨すくらし

右勝　　藤原康光

しくれする色こそ見えね卷向のあなしの山に鹿はなくなり

卷向のあなしの山はつれもなく鹿のねそむる行しくれ

哉。

二十八番
左（勝）　兵衞内侍
外山たに淋しき頃の村雨に雲よりおくのあきのゆふくれ
右　菅原淳顯
槇の葉はさそなつれなき秋の比しらぬ山ちのゆふしくれ哉
村しくれ雲より奥の夕くれの　さひしきやまを心にそとふ。

二十九番
左　七條院權大夫
けふも又露わけ衣ほしあへていく村さめかみくまのゝおく
右（勝）　範基朝臣
おほかたの淋しさのみはなかり鬼太山の雨の秋「の」ゆふ暮
みくまのゝいく村雨の數よりも獨み山のゆふくれの庵。

三十番
左　俊成卿女
そむれともつれなき槇の下葉もる時雨にあへぬ袖の色哉
右（勝）　光　家
しおりこし山ちを埋む雲にまた木のは降そふ秋の村雨、
袖の色に槇の雫もあらね共しおりも深き村雨の雲。（そらイ）

四十五番歌合 建保三年六月二日

題
春山朝　夕早苗　行路秋　曉時雨
松經年

作者
左方
御製
大僧正行意
權大納言源朝臣通光
權中納言兼左衞門督藤原朝臣忠信
參議左近衞中將藤原朝臣實氏
沙彌寂印
宮內卿藤原朝臣家隆
散位藤原行能
蔭孫高階家仲

右方
前大僧正慈圓
參議侍從藤原朝臣定家
左近衞中將藤原朝臣雅經
右近衞中將藤原朝臣家良
俊成卿女
丹後守藤原朝臣範宗
左衞門尉藤原朝臣秀能
備前守源家長
小比叡禰宜祝部宿禰成茂

判者

衆議

詞

宸筆後日被下之

一番

左勝　春山朝　御製

春のたつ霞のひかりほの〴〵と空に明ゆく天のかくやま

右　前大僧正

朝霞ものおもふ人の袖の色にたへて住へき春の山かは

左方申云。右方より難をいたし侍らさらんさきに申なり。霞の光詩なとには聞なれたるやうにはへるを。歌にはいまた承及はす。如何。右方申曰。歌には誠にきゝなれすはへれとも霞の光まことにたしかに侍るものなり。しかれは難にあらす。左方又申曰。右方も物おもふ人のそての色。ことによろしきさまなり。左歌及ひかたし。右方又申曰。猶左歌難なし。仍以左勝と被仰侍りき。

二番

左持　僧正

朝朗とをき山への霞より野原にいつる鶯のこゑ

右　侍従藤原朝臣

このねぬる朝けの山の松風は霞をわけて花の香そする

右方申曰。左歌遠き山へのかすみ尤勝へきにや。左方申曰。朝あけの山のまつかせ花の香をさそひて霞をわけんに。殊にすてかたくなん侍る。左は遠き山へのかすみ。右はこのねぬる朝けのなといひて。ともに古歌をおもへり。なそらへて為持。

三番

左　権大納言源朝臣

山姫の霞の袖や匂ふらん花にうつろふ横雲の空

右勝　雅経朝臣

いつも見し朝ゐる雲はそれなから〔　　〕

左右共に申曰。左歌させる難はへらねとも。右あさゐる雲はそれなからといへる。よろしきにや。仍為勝。

四番

左勝　左衛門督藤原朝臣

曙や〔　　〕海山もひとつに霞む春は来にけり

右　右近中将藤原朝臣

花はみな散らても同し朝霞たな引山のおくのしら雲

左方申曰。右方上句ことありかほに侍る程に。するさまさせる事なく侍にや。右方申曰。左方難陣ひきかたう侍り。共うへ左うたこゝろあるさまに侍るにや。仍為勝。

五番

左勝　左近中将藤原朝臣

朝霞たつ田の山を秋とはゝ花のしをりのかひやなからん

右　俊成卿女

櫻ちる四方の山かせ恨てもはらはぬ袖のはなの朝露

右方申曰。左歌心あるやうに侍るを。秋とはゝといへるわたり。少しいかにそや聞え侍るにや。左方申曰。よもの山あまりにおほえはへり。上句に櫻といひ。下句に花とをける。題になきはなあまりにおほく侍る程に。朝の

こゝろ無下に多くいて來てはへるにや。秋とはゝとい
へる。かろき難にや侍なん。

六番

左　沙彌寂印

花の色は枝にこもれる梢より朝日そ匂ふみよしのゝ山

右勝　範宗朝臣

大かたも春は朧の柴の戸にあくるも霞む山のはの月

左右共に申曰。左のうたも難なくはへるを。右歌春はおほろのといひ。明日もかすむとをける。今少しすゝみてはへるよし申侍りき。

七番

左持　家隆朝臣

よしの山峯のあさけの櫻花松の葉青き雪かとそみし

右　秀能

大かたの春の光ののとけきに霞に明る天のかく山

右方申曰。左歌まつの葉あをきといへる。尤めつらしく侍る。左方申曰。霞に明る天のかく山。ことに高く見え侍る。仍左右共に何れも不レ可レ負之由申之。

八番

左　行能

朝な〳〵たつ田の霞晴すのみ哀つきせぬ山の奥哉

右勝　家長

朝日影にほへる櫻くれなゐのうす花そめのかすむ山の端

左方申曰。立田のかすみはれすのみといへる。本歌の嶺のあさきりに。ことの外に立おとれるよし申レ之。

九番

左勝　高階家仲

横雲や峯に別て霞らん櫻そうすきみよしのゝ山

右　成茂

山霞むはるやわたりて立田川けさは氷の中そたえ行

左右ともに申曰。兩方心を盡して案たる歌と見え侍る。しかはあれと。左の櫻そ薄きといへる。聊まさるへきにや。

十番　夕早苗

左勝　御製

早苗とる山田のあせにせく水の濁るにも澄夕月夜哉

右　前大僧正

暮ぬとていそく早苗の小山田に雨そほ降て郭公鳴

左方申曰。時鳥なくといへる。頗尋常のことに俳諧の躰に侍なり。右方申曰。左かつへきにや。左方又申曰。たゝ人の可レ詠歌にあらす。定有二其様一歟。然して尙以レ左爲レ勝。

十一番

左持　僧正

早苗とる門田に靡く夕風を昨日になして又やなかめん

右　侍從藤原朝臣

新玉の年ある御代の秋かけてとるや早苗にけふも暮しつ

右方申云。左風情尤可レ然はへり。左方申云。右の歌としある御代爲二祝言一。仍以爲レ持。

十二番

左持　權大納言源朝臣

さなへとる山田の田子の濡衣ほしあへすくるゝ夕つく日哉

右　　雅經朝臣

里遠き田なかのもりの夕日影うつりもあへすとる早苗かな

左右申曰。歌の躰尤相似。不レ可レ有二勝負一。

十三番

左勝　　左衞門督藤原朝臣

夕されは山田のさなへうちなひき音こそきかね通ふ秋風

右　　右近中將藤原朝臣家良

五月雨に小田のしめ繩ふりはへて長き日くらし早苗とる也

左方申曰。を田のしめ繩ふりはへてといへる。さたかに其心をえす。如何。右方無二陳申旨一。仍爲レ勝。

十四番

左持　　左近中將藤原朝臣實氏

さなへとる賤のをた卷いやしきも君をそ祈る雨の夕暮

右　　俊成卿女

くれぬとていそく早苗を取もあへす風たえ雲に過る村雨

左方申曰。風たえ雲に過る村雨。頗しくれの躰なり。但君をそ祈るといへる。あまりさしすきたるさまなり。おなしことなれとも。世をいのるといはん心歟。右方申曰。時雨の難誠にさおほえ侍る。左歌君をそいのるといへる。其心强に不レ違歟。左右ともに大略おなしほとの物にやはへらむ。

十五番

左持　　沙彌寂印

さなへとる賤のをた卷秋やくる夕の風の音はたてねと

右　　範宗朝臣

十七番

左　　行能

右勝　　家長

天の下を賴むのさなへ暮まてとれと盡せぬ千代の歡哉

右方申曰。千町のさなへ。頗以不足なり。左申云。ちまち强にふそくにあらす。但右の歌宜。仍爲レ勝。

十八番

左持　　高階家仲

小山田や賤か庵さす夕つく日袖にかけつゝ早苗とる也

右　　成茂

立くらしさなへや民のいとまなみいそかすとても秋は待覽

左方申云。右歌いそかすとても秋はまつらむとをける。さまてなき躰にはへる物哉。なをなそらへて。持なとにや侍るへき。

十九番　行路秋

左勝　　御製

わけ行は其色となき太山木も秋は身にしむ風の音哉

右　　前大僧正

まねかすはあたに過へき山路かは尾花みたるゝ秋の夕くれ

右方申曰。をはなのまねくことめつらしきことにあらす。左方申云。尤花のまねかさらん尤遺恨也。殊宜由。左方强に申せとも。左猶勝へきよしさたありて。勝になり侍りにき。

廿番

左　　僧正行意

わけいらは袂に露やみたれなん心し秋の艸葉ならねは

右勝　侍從藤原朝臣

うち渡す遠方のへの白露によもの木草の色かはる頃

右方申曰。左歌殊によろしくはへるを。心し秋のといへる。少し心えかたくはへり。左かた申云。ともに優に侍れとも。遠方のへの露。いますこし色ふかくやなと沙汰侍りき。

廿一番

左持　權大納言源朝臣

草枕ゆふかり衣ぬれにけり裾野の露も色かはり行

右　雅經朝臣

もみち葉もゆくゑ定めぬ秋風にしらぬ野山の道たとりつゝ

左右ともに申曰。左のゆふかり衣。右のしらぬ野山。ともによろしく侍り。

廿二番

左勝　左衞門督藤原朝臣

草の原露もさなから夕霧の我袖こめて秋風そふく

右　右近中將藤原朝臣

常盤山いつはた秋としらさりし袖に見え行露の色哉

左方申曰。いつはたあきとしらさりしといへる。わかき歌の中にきゝなれてや侍らん。右方申云。我袖こめてといへる。殊によろしくはへる。仍爲ㇾ勝。

廿三番

左　左近中將藤原朝臣

草の原いつくの秋に行くれてかりねの枕露に結はん

右勝　俊成卿女

虫のねも我身ひとつの秋風に露わけわふるをのゝしの原

左方申云。右歌こと葉つゝきやさしく侍り。右方申曰。左歌させる難なし。兩方申曰。右すこし可ㇾ勝にや。

廿四番

左　沙彌寂印

高圓の野への秋はき行すりの道もとをゝに花咲にけり

右勝　範宗朝臣

秋はなを時雨ぬ袖も露霜に濡てゆきゝの岡の萩原

左方申云。ぬれて往來の岡のはき原。宜侍るにや。右方申云。道もとをゝにといへる。又やさしく見えはへり。左右ともに申曰。ゆきすりのといへる。すこしきゝよからす。仍以ㇾ右爲ㇾ勝。

廿五番

左持　家隆朝臣

玉鉾の道もやとりも白露に風の吹しくをのゝしの原

右　秀能

旅衣なれすはしらし大かたの秋の哀はおもひこしかと

右方申云。風のふきしくといへる宜はへり。左方申曰。秋の哀はおもひこしかと。又左の歌。古歌のこと葉をよくとりて見え侍り。右も又捨かたく侍るもの哉。仍爲ㇾ持。

廿六番

左持　行能

けふは又山路やふかく成ぬらんきのふにかはるまきの秋風

右　家長

ふみならす道のこゝちをよそにして花にそまとふ宮城のゝ秋

左右申曰。昨日にかはる山おろしのかせといへるちかき世の歌こと葉。其こゝろをもかへさる如何。又右のうた。みちのこゝちもあまりなる氣地李。近頃夢の心地なといへるは。その謂も侍ることにや。

廿七番

左　高階家仲

旅人の行かふ山の下もみち袖にみたるゝ秋風そふく

右勝　成茂

鹿のねも袖にこほるゝ玉鉾の道の木のはは我そ染行

左方申曰。鹿の音はいか樣に袖にこほれ侍るにか。右方陳申云。袖にこほるゝは露のこと也。道のこのはは我そ染ゆくなと。やさしく社はへれ。左の方又申云。まことに左歌も强のこと侍らす。たゝ一旦鹿の音の袖にこほるゝやうに見え侍ることを。不審申はかりなり。

廿八番　曉時雨

左勝　御製

かたしきの衣手寒くしくれつゝ有明の山にかゝる村雲

右　前大僧正

曉は空のけしきもたゝならて我袖のみは時雨さりけり

左方申曰。右歌ことによろしく侍り。おほろけのもの難澁侍るへし。右方申曰。左うた尙可レ勝。

廿九番

左　僧正

嵐山ころさへつらきね覺哉しくれにむせふあかつきのかね

右勝　侍從藤原朝臣

まとろまぬ須磨の關守明ぬとてたゆむ枕も打しくれつゝ

左の歌ころさへつらき寢さめ哉といひ。右のうたたゆむ枕もうち時雨つゝとはへり。誠にいつれもおとりとも見え侍らす。ともにわきかたきよし申あひ侍るを。なをたゆむ枕のしくれ。まさるへきにやとさためはへりき。

三十番

左持　權大納言源朝臣

鐘のねの時雨を送るまきの屋にもらても夢の覺る東雲

右　雅經朝臣

槇の戶の明方としも驚かす寢覺ふりにし頃の時雨に

左右ともに申曰。やさしきさまになんはへり。仍爲レ持。

三十一番

左勝　左衞門督藤原朝臣

曉とうらみし人はかれはてゝうたて時雨る淺茅生の宿

右　右近中將藤原朝臣

しはし殘る有明の月の山のはにまたき時雨のかき曇つゝ

左方申曰。右歌させることなく侍り。右方申云。うたて時雨る淺茅生の宿。尤よろし。仍爲レ勝。

三十二番

左持　左近中將藤原朝臣

風の音はみ山もさやに明る夜の時雨吹まく楢のはかしは

右　俊成卿女

淚さへいとゝしくるゝ浮雲に殘るともなきしかの月かけ

雨方歌無二異事一。仍爲レ持。

三十三番

左勝　沙彌寂印

柴の庵また住なれぬ曙のこけの袂はしくれせすとも

右　範宗朝臣

立田山しくれは過ぬ曉のゆふつけ鳥やぬれて鳴らん

左方申曰。右歌たかみそきゆふつけとりとも。させることなきにや侍らん。右方申云。左歌も誠に。住なれぬこけの袂あはれに侍り。仍爲ㇾ持。

三十四番

左持　家隆朝臣

曉や木のはも色はまさるらん時雨よ袖にしむ心地して

右　秀能

うき物とおもひなれたる曉の枕に過るはつ時雨かな

左方申曰。右歌誠におかしくはへり。しかはあれとも。左歌木葉もいろはまさるらんといひて。時雨よ袖にしむ心地してとをける。いかてかまけ侍るへき。右方申曰。まことにいつれやさしくそ見え侍る。たゝし右歌曉はかりうき物はなしといへる歌のこゝろ。捨かたく侍り。兩方ひき〳〵申あひ侍りき。仍持になりはへりにき。

三十五番

左持　行能

時雨ゆく嵐の山のやましたに木のはわけいる有明の月

右　家長

身にそしるみちあり明の初時雨わかぬ艸葉の色の深さを

左方申云。このは分入有明の月。めつらしくはへり。右のかたも。心あるさまに見え侍れとも。左歌なをすゝみておほえ侍。如何。右方申云。わかぬ艸葉といへる心詞。いうにはへるなり。いかて負る程の事はへるへき。仍爲ㇾ持。

三十六番

左持　高階家仲

村雲はまた過はてぬ外山より時雨にきほふ有明の月

右　成茂

鐘の音は秋のねさめに替らぬを猶色ふかくとふ時雨哉

左右ともに申云。よのつねの物なり。勝負難ㇾ定はへり。

三十七番

左勝　御製

かたそきの行あひの霜の幾かへり契り結〔か〕ふ住よしの松〔本ノ〕

右　前大僧正

君か代の千歳にあまる末まても色かはらしと松のいふなる

左方申曰。左歌結けんけに聞なれて侍り。右歌尤めつらしくはへり。右方申ていはく。右歌まつのいふなるといへる。無下にたゝありに侍り。左方も申曰。殊にたゝあり成さまにははへらす。右歌尤可ㇾ勝由申ㇾ之。然而猶左可ㇾ勝之由。右方定申。仍爲ㇾ勝。

三十八番

左勝　僧正

身にかへて君の八千代を祈をくしるしは末の松のみそ見ん

右　侍從藤原朝臣

手向草露もいくよか契置し濱まつかえも色はかはらす

左右共に申云。左歌ことにこゝろある樣にはへり。尤可ㇾ勝之由申ㇾ之。

三十九番

左持　權大納言源朝臣

神路山すゑも百枝の松の陰に天てるかけや契り初けん
右　雅經朝臣
いつ迄か松のしつえにこゆるきの磯ちにかゝる浪も恨めし
左右ともに申曰。左歌ことによろしく見えはへるを。右又心こと葉尤やさしきよし各申。仍爲ㇾ持。
四十番
左勝　左衞門督藤原朝臣
限なき時しも君にあふみなるしかのはま松いくよふりなん（しかイ）
右　右近中將藤原朝臣
住吉のきしの瑞籬神さひて其世もしらぬ松の色哉
左右共に申曰。左歌尤よろしく侍り。仍爲ㇾ勝。
四十一番
左持　左近中將藤原朝臣
いにしへの人しもあらは高砂のまつを友とかいはまし物を
右　俊成卿女
おひ初て君かためしに住吉のまつも幾世と神もしるらん
左右ともに無二差事一はへり。可ㇾ爲ㇾ持。
四十二番
左持　沙彌寂印
住吉のきし方よりも濱ひさし久しかるへき御代の松かな
右　範宗朝臣
限なく君そ見るへきとしをへて猶末遠き住よしのまつ
兩方申狀同前。
四十三番
左持　家隆朝臣
神代よりいくよかへにし乙女子か袖ふる山のみつかきの松
右　秀能
思ふ事なとすみよしのまつかひも渚につらき年のへぬらん
左右申曰。樣かはりなから其躰おなし。仍爲ㇾ持。
四十四番
左持　行能
奧津なみきよる濱松年ふりて空しきねのみあらはれそゆく
右　家長
我君の齡をまつのかけひろみ下に隱て萬代やへむ
左右共に申曰。兩方歌同體なり。但空しきねのみあらはれそ行といへる。いさゝかまさるへくやはへらん。右歌又祝言のこゝろなり。仍爲ㇾ持。
四十五番
左持　高階家仲
君か代にくらふの山の峯の松ふりにし色の千代は物かは
右　成茂
幾千代かなをすみのえの松の影君かためしの限なけれは
左右ともに申云。おなし程のものに侍り。仍ひとしき由つけ侍りにき。
（本云）右之一册。以二實相院増運筆翰一令二書寫一之。再返挍合畢。

月卿雲客妬歌合 建保三年六月十一日當座

題
野外夏草　月色似秋　契經年戀

作者
左　右
女房　左近權中將藤原雅經
栗下覆勘右大辨藤原定高　散位藤原保季
丹後守藤原範宗　散位藤原行能
左近權中將藤原忠定　左衞門權少尉藤原康光
前播磨守藤原範基　讃岐守藤原資隆

講師
讀師
衆議判

一番　野外夏草
左　女房
露分る夏野の草のぬれ衣なるとはすれと色もかはらす
右　左近衞權中將藤原雅經
夏草のみとりも深しいはしろの野邊のした草結ふ計に（露イ）

二番
左　栗下覆勘右大辨藤原定高
武藏野のはきや薄やほりたてゝ瓜やなすひや植てもたはや
右　散位藤原保季
かせやときまのゝ萩はら露をたにまたしらすけの同し線に

三番
左　丹後守藤原範宗
岩代の野への夏くさしけれたゝ旅ねのまくら露むすふ迄
右　散位藤原行能
今はさはあとなき野への庵哉くさたつ迄そ人もまたれし

四番
左　左近衞權中將藤原忠定
しのふよりこぬ秋をさへ知せけり末こす荻の野への夕かせ
右　左衞門權少尉藤原康光
人すまぬかた岡野への夏草は茂りにけりなおなしまに〳〵

五番
左　前播磨守藤原範基
玉ほこの道の夏草秋かけてかつ〳〵はらふ袖のしらつゆ
右　讃岐守藤原資隆
われのみそ露のなさけもかけてける月に分行庭の蓬生

六番　月色似秋
左　左近權中將藤原忠定
秋の色を露につけてやかり枕しろくも袖にやとる月かな
右　散位藤原行能
つゆはまた荻の葉ならぬ風の色に月のみ秋の袖をしるかな

七番
左　女房
かせの音の身にしむ色もかはらねと月に幾度秋を待らん
右　栗下覆勘右大辨藤原定高
はたかねの小夜更かたに腹ふくれかせもすゝしふ月も秋也

八番

左　　　　　　　　　　左近權中將藤原雅經
空の色は秋をもまたぬ久堅の月のかつらやまつもみゆらん
右　　　　　　　　　　丹後守藤原範宗
しら露のゐなの笹はら分なれてやとるや月の秋の面かけ
九番
左　　　　　　　　　　前播磨守藤原範基
なつの夜の月にも秋は通ひけりかならす荻に風ふかねとも
右　　　　　　　　　　左衞門權少尉藤原康光
ほとゝきす聲みな月の山のはに秋をかけてや月のいつらん
十番
左　　　　　　　　　　散位藤原保季
をのつからこよひの空をみすしらて秋とか人の月を待らん
右　　　　　　　　　　讃岐守藤原脊隆
なつ衣ひとへにすゝむよはの月影はかはらぬ秋と見えつゝ
十一番　　契經年戀
左　　　　　　　　　　左近權中將藤原雅經
とし月はむなしき空の夕露にはてはちきりも朽ぬ袖哉
右　　　　　　　　　　左衞門權少尉藤原康光
年へぬるその神山のゆふたすきかけて契し中やたえなん
十二番
左　　　　　　　　　　女房
つれなくて幾秋風を契りきぬきさ山かけのまつとせしまに
右　　　　　　　　　　丹後守藤原範宗
はまひさし久しく成ぬ恨ても末の松山なみもこえつゝ
十三番
左　　　　　　　　　　前播磨守藤原範基
としをへてあはぬ契を菅原やひとりふしみのよその夕暮
右　　　　　　　　　　散位藤原保季
あとたえて果は淺ちに成ぬともたのめし宿の昔わするな
十四番
左　　　　　　　　　　左近權中將藤原忠定
たのめ置し言のはとても枯果る野なる草木も春はきにけり
右　　　　　　　　　　讃岐守藤原脊隆
たのめてもおなしみとりの杉の庵のあれたに果ぬ山の奥哉
十五番
左　　　　　　　　　　栗下覆勘右大辨藤原定高
あはんとの空證文にいく夜へて數年に成ぬこはいかにせん
右　　　　　　　　　　散位藤原行能
徒にくちてや偕も山城のゐてのした帶むすほほれつゝ

群書類從卷第百九十六

和歌部五十一　歌合十七

百番歌合 建保四年閏六月九日

題

春　二首　夏　二首　秋　二首　冬　二首

戀　二首

作者

左

御製
正二位行權大納言源朝臣通光
正二位行權大納言藤原朝臣公經
從二位行權中納言兼左衞門督藤原朝臣忠信
參議正三位左近衞權中將兼近江權守藤原朝臣實氏
從三位藤原朝臣家衡
從三位宮內卿藤原朝臣家隆
八條院高倉
兵衞內侍
藏人正六位上行左衞門權少尉藤原朝臣康光

右

右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣
參議從三位行治部卿兼伊與權守藤原朝臣定家
二條院讃岐
女房越前
參議從三位行左近衞權中將備前權守藤原朝臣經通
前丹波守正四位下藤原朝臣知家
正四位下行右兵衞督兼伊與介藤原朝臣雅經
從四位上行丹後守藤原朝臣範宗
散位正五位下藤原朝臣行能
僧正行意

講師

判者　治部卿藤原朝臣定家

或本衆議判後日付詞畢

一番　春

左持　御製

降雪にいつれをはなとわきも子かおる袖にほふ春の梅かえ

右　治部卿定家

しるしらすわきてはまたす梅の花匂ふ春へはあたら夜の月

左右各講畢。可ㇾ申二其難一のよし。頻に被ㇾ仰。右方歌人等申云。左歌更に無二其難一上似二秀逸一歟。木ことに花そさきにけるといふうたの心をおもひて。いつれをむめとわきも子かとをき。おる袖にほふはるの梅かえと侍。まことに殊勝のよし。皆悉申ㇾ之。右歌あらぬさまの詞をたによまては。またすはともといへる。よりところなき。わきてのことは殊露顯のよし申侍しを。依二別勅定一持の字をかゝれ侍にき。定貽二後代之疑一歟。

二番

左勝　權大納言通光

雲のゐる遠山ひめのはなかつら霞をかけて吹あらし哉

右　讃岐

ふく風やたにも春と告つらん雪ふるすよりいつる鶯

右方歌人等申云。萬葉集にけふそわかせこ花かつらせよといふ歌侍にや。遠山花をしなへて山姫の花かつらといはむこと。すこし本歌のあらまほしくや侍らん。左方ことはきゝよきにつきて。いひくたすとき〳〵。かやうの心常の言葉に侍へし。歌さまなをいひしりてよろしく侍よし申。右方谷にや春と告つらんといへる。こゝろあるよし右方申せと。左方猶よろしとて勝侍にき。

三番

左勝　權大納言公經

青柳の糸をみとりによりかけてあはすは春に何をそめまし

右　越前

散ぬれとかたみはひさし梅の花とまるおもかけ袖のうつりか

糸をみとりによりかけてなと。いひしりて侍を。あはすはといふは。かた糸にてや。ことはり叶へきと。右方少少申人侍しかと。宮内卿藤原朝臣。右方下句頗輕々のよし難申。仍以ㇾ左爲ㇾ勝。

四番

左持　左衛門督忠信

君か代のもゝ木の梅の花なれはあふへき春も限りしられす

右　左中將經通

春立とけふはいはとの神代よりあくれはかすむ天のかく山

右方申。君か代の百木の梅。ことはりかなふへきにや侍らん。家持卿追和太宰歌。みそのふのもゝ木のむめといへり。以て君か代のもゝきとよむへきにや。たゝし祝言のこゝろ。强に不ㇾ及二難申一。左方又。けふは岩戸の神代よりなといへる。宜よし申せは。持定申。

五番

左持　左中將實氏

山さくらうつろふ比はつゆなからこほれて匂ふ花の下かせ

右　知家

玉ほこの道行ふりの春の雨にをのれしほれて鳫の鳴らむ

右方申云。左方よろしく聞え侍を。こほれてにほふや常に聞なれて侍らむ。左方道ゆきふりも。又同程の事と申て。爲ㇾ持。

六番

左　從三位家衡

よしの川たきつ岩根のはやき春霞なかるゝ浪のはつ花

右勝　範宗

花のかはありとやこゝに乙女子か袖ふる山にうくひすそ鳴
右方申云。瀧つ岩根の早春。詩の題には聞なれて。うたのことはには珍しくえ聞てや侍らむ。かすみなかるゝといひて浪の初花と侍も。かれこれいつれとなくや。宮内卿藤原朝臣。早春ことなる難には侍ましと。はなの香をありとやこゝにといひて。袖ふる山に鶯のなく心よろしく聞え侍るにや。此乙女はさき〳〵おほくつかうまつれと。この花の香はいまた思より侍らすと申て。かちに定めらる。

七番

左持　高倉

鶯のふるすに誰かことつてし梅さく宿をわきてとへとは

右　右大臣

あを柳の春のけしきとたをやめのかさしの玉の露そみたるゝ
左右ともに優也。各申乙無下可二難申一事上之由。爲レ持。

八番

左　兵衛内侍

かすみゆくおほつかなさを詠てもたれのみ山の春の夕くれ

右勝　右兵衛督雅經

霞ゆくひかりは空にかけろふのもゆるのはらのはるの夕暮
左右かすみ行。ともに優に侍を。おほつかなさをといへる。すこし凡俗のことはなり。かけろふのもゆる野原の。殊にこゝろありてとて。

九番

左持　左衛門尉康光

きのふ見し軒はの梅はちりにけり櫻にうつる庭の春風

右　行能

春かせに鶯さそふ花のかにゝほへる山をかへるかりかね
右方申云。軒端のむめきのふちりて。さくらにけふうつる春風。はなめつらしききのふけふ哉といふこゝろには。たかひて侍れと。强無下可二難申一事上。鶯さそふ花の香にかりかねのゆきあふ山路も。こゝろなきには侍らねと。あまたことにかゝりて。殊なることなしとて。ともに持と定申。

十番

左　宮内卿家隆

あはれとは香にこそしのへ梅のはなたか袖なれし故郷の月

右勝　僧正行意

をのつからいそしのみゐやくもるらむおれる錦を春の山陰
左（右歟）方すゝみて。左歌常に聞なれたるよし申。右方いそしのみゐをはなのかゝみにくもらせて。にしきをはるのやまかけと侍る。ことにたくみに及かたきさまなりとて。爲レ勝。

十一番

左勝　御製

春かせに散行かたやはれぬらん花よりにしの山端の月

右　治部卿定家

咲はなは雪とのみこそ故郷をこゝろのまゝに風そ吹しく
花より西の山のはの月。左右歌人ともに詠吟聲滿レ耳。不レ申二是非一。爲レ勝。

十二番

左勝　權大納言通光

山川にはるゆく水はよとめとも風にとまらぬ花のしら浪

右　讃岐

いにしへの春にも歸る心かな雲井の花に物わすれせて

雲井の花にもの忘れせて。あはれに聞え侍れと。はる行水はよとめとも風にとまらぬはなの白浪。殊秀逸のよし兩方ともに申。爲レ勝。

十三番

左勝　權大納言公經

恨へきかたこそなけれ春風のやとりさためぬ花の故鄕

右　越前

こゝろある軒はのかせの匂ひ哉花ちるへくも吹ぬ物から

やとりさためぬはなのふる里。殊によろしきよし兩方申て。左方の。右歌近年入二新古今一歌。月やとれとはぬれぬものから。相似よし各被レ申。仍以レ左爲レ勝。

十四番

左勝　左衞門督忠信

しかのあまた出ぬるあとも霞つゝ我すむ方の山端もなし

右　左中將信通

はるのきる霞のそてのうすみとりみたれて花の色そみえ行

右歌もえんにおかしく聞え侍れと。左殊よろし。猶勝へきよし。兩方ともに定申。

十五番

左持　左中將實氏

初瀨川はなのみなはのきえかてに春あらはるゝせゝの柵

右　前丹後守知家

さらてたにうつろふ花を山かつのしつ心なく春かせそふく

左右ともによろしきよし申て。爲レ持。

十六番

左　從三位家衡

かさこしや峯のこすゑの空はれて麓あまきる花の白雲

右勝　丹後守範宗

春のよのをほろ月夜にちりつもり花の上にそしく影はなき

右方申曰。ふもとあまきるとて。はなのしら雪とや侍へき。天きるくもさためて侍らめと。當座證歌不二覺悟一。左方又申二不分明之由一。右方右歌いかゝと申侍しを。左方。無レ難可レ勝由申。

十七番

左　高倉

これならて何をこの世にしのはまし花にかすめる春の曙

右勝　右大臣

春きても雪とは花の降しきぬあすよりさきにとふ人もなし

左歌上句ことに思いれす聞ゆとて。以レ右爲レ勝。

十八番

左持　兵衞内侍

はなの色はつきしとそ思ふ百敷や大宮人の千世のかさしに

右　右兵衞督雅經

みよし野のまきたつ雲の梢にははなとつれなき色そ殘れる

右歌宜のよし各申侍しを。百敷のはなのいろ盡せす。大みや人の千代のかさしとならむ事。返々所二庶幾一のよし申て。持とさため申侍にき。

十九番

左持　左衞門尉康光

葛城やたえすかゝれる白雲のよそにも見えぬ山櫻かな

右　散位行能

みよしのゝさくらうつろふ春毎にいくよの人の袖にほふ覽

左右とも無ㇾ難上。各爲ニ宜歌一のよし。兩方申。爲ㇾ持。

二十番

左勝　宮内卿家隆

泊瀬山うつろはんとや櫻はな色かはり行峯のしら雲

右　僧正行意

花さかぬ山邊はなしと詠めてもいくよの春を身にうれふ覽

左秀逸の躰也。右歌こゝろ多ことはたくみなるへし。各申ㇾ之。爲ㇾ勝。

二十一番　夏

左勝　御製

五月雨の雲の晴まを待えても月みる程の夜半そすくなき

右　定家

郭公たかしのゝめを音にたてゝ山の雫にはねしほるらむ

左景色見るよふなりと。滿座申ㇾ之。爲ㇾ勝。

二十二番

左勝　通光

かせ吹はみなはに靡くかりこものみたれてのほる淀の川舟

右　讃岐

まちかねてふくる枕に過ぬ也やま時鳥一こゑのやと

右方歌人少々申。かりこもはみなはになひかむことおほつかなくや侍らん。左方又難無ニ申旨一。歌躰なを可ㇾ勝のよし各申。

二十三番

左勝　公經

時鳥なくや五月の雨雲のよそに成ゆく夕くれのこゑ

右　越前

ほとゝきすありかしらはや告やらむ卯花月夜つきよよし共

左方申云。右歌月夜重疊。聞よからす。左歌よろしきよし各定申。爲ㇾ勝。

二十四番

左　忠信

小山田のさなへとるてのぬれ衣しほる程なき五月雨の空

右勝　經通

夏刈のあしふきわふる難波女のさみたれなから過る頃哉

左歌無難のよし右方申侍しを。右歌心詞尤宜ニ稱美一。可ㇾ謂ニ秀逸一のよし。兩方同心申ㇾ之。仍爲ㇾ勝。

二十五番

左勝　實氏

村雨に秋のつゆかる玉さゝのみちかき夜半は曉もなし

右　知家

あしのやの螢の縄たくいさり火のそれかとはかり行螢哉

左歌又一同褒美。仍爲ㇾ勝。右歌又無ニ其難一歟。

二十六番

左　家衡

郭公をのか五月のみしか夜は聲のうちにやあけんとすらむ

右勝　範宗

時鳥なくよの雨の程なきに花たちはなもうつろひにけり

左歌よみあけて侍し。よろしき歌にやとうけたまはりしを。右方作者申云。上句はひとりしぬれはあかしかね

つもといふ歌の上句只替二三字一。下句はなく一こゑに明るしのゝめの同心。かはりたる事なし。又夕月よ小倉の山に鳴鹿のといふ歌の下句に似也。秀歌よまん事やすくや侍へきと申に。思ひ出し侍しかは。誠にさもや侍へきと申上侍き。右歌無難よし。左方被レ申侍しうへに。詞姿優に侍れは。勝に被レ定。

二十七番

左　高倉

夕まくれ花たちはなの匂はすはゆく郭公なのりしもせし

右勝　右大臣

待よひの山ひとこゑよ時鳥うす雲まよふむら雨の空

左歌無二殊事一。右可レ勝のよし各申。

二十八番

左　兵衛内侍

なつ山のかけ行水にかさすまて雫も涼しならの下露

右勝　右兵衛督雅經

ほとゝきす鳴や五月の玉くしけふた聲きゝて明るよもかな

右うた。なくや五月の玉くしけとつゝけたる。さつきのたまのこゝろは□ひしりて。殊に宜きよし。兩方ともに申て。爲レ勝。

二十九番

左勝　左衛門尉康光

ぬれつゝもきえせぬものは夏虫の草葉にもゆるよひの灯

右　行能

うたゝねもふす程すゝし長き夜に螢みたれて秋そちかつく

右涼しきよからす。左きえせぬものえん也とて勝侍き。

三十番

左勝　家隆

あかなくにやすらへそらの郭公なつくはゝれる年も稀なり

右　行意

夕すゝみまさきのかつら吹風に外山をかけて秋やきぬらん

まさ木のかつらふく風もこゝろあるよしを。各申侍しかと。夏くはゝれるとしも稀なり。閏月九日今日已以レ之爲レ證のよし各申。爲レ勝。

三十一番

左勝　御製

御そき川なつのゆく瀬の水はやみ影もとまらぬ六月の空

右　定家

夏はつるみそきにちかき河風のいは浪たかくかゝる白ゆふ

夏川のゆく瀬の水はやみ。誠にゆうひにきこえ侍よし。返々侍しかと。持と被レ仰侍にき。

三十二番

左勝　通光

かせになひくせゝの川なみ打さやきしらぬ露ちる夕立の空

右　讃岐

橋に枝うつりするほとゝきすこゑ聞よりも珍しきかな

左せゝの川なみの本歌侍にや。當座不覺悟のよし。右の方申出侍しかと。右枝うつりこのころの姿にあらすとて。以レ左爲レ勝。

三十三番

左勝　公經

住なるゝ時はなつみの河よとにやま蔭すゝしみよしのゝ里

右　越前

たちよれは涼しきのみか夏衣ころも忘れて松の下水

右のすゝしきのみか。聞にくしと。念人も言葉くはへ侍て。以レ左爲レ勝。

三十四番

左　忠信

石はしる瀧もとゝろにちる玉のひかり涼しき夏のよの月

右勝　經通

たかみそきしらゆふ浪の立田川曉かけてかよふ秋かせ

石はしるたきも。光すゝしくは聞え侍を。誰みそきしらゆふなみあかつきかけたる。殊に優にきこえ侍よし申て。爲レ勝。

三十五番

左　實氏

都いてゝ更にかそへるあふさかの山ほとゝきす關守やなき

右勝　知家

日くらしのなく山蔭はくれぬらんゆふひかゝれる峯の白雲

左歌もえんによろしく侍れと。右歌ことに可レ謂二秀逸一のよし各申て。爲レ勝。

三十六番

左　家衡〔マヽ〕

秋ちかき月のかつらの川かみに螢とひかふかゝりの火の影

右勝　範宗

こたへねとたれとは見えぬたそかれや遠かた人の夕顔の花

左歌右方少々難レ出二不審一。非二殊難一。右歌よろしきよし。兩方ともに申て。爲レ勝。

三十七番

左持　高倉

立よれはなつのよそなる柳かけこれよりにしや秋の通路

右　右大臣

玉鉾や露のみちしは打なひきくもれはすゝむ夕立の空

左右同躰のよし。兩方ともに申す。

三十八番

左　兵衛内侍

秋ちかき常盤の山に吹風の色こそなけれ身にしみにけり

右勝　雅經

みつしほのからかの嶋に玉も刈あまゝもみえぬ五月雨の頃

左歌尤優にきこえ侍よし申出侍し。殊に玉藻かる雨まも見えぬさみたれ。猶可レ勝のよし左右定申。

三十九番

左　康光

大澤の池の玉藻のみかくれにかはつ鳴なり五月雨の頃

右勝　行能

時鳥こえ聞小野の萩か枝をかりのなみたのいつかそむへき

左のかはつ無二殊事一。右ほとゝきすえむ也とて爲レ勝。

四十番

左勝　家隆

秋たては蟬のおりはへ夏衣ひも夕くれは風そ涼しき

右　行意

たまにぬく夕かけ草のしら露にまた秋とをし五月雨のそら

夕陰草のしら露も捨かたく聞え侍れと。せみのおりはへなつころもめつらしくおかしとてかちと被レ定。

四十一番　秋

左勝　御製

夕霧のまがきの秋のはなすゝき遠かたならぬ袖かとそ見る

右　定家

なをさりの小野の淺茅にをく露も草葉にあまる秋の夕ぐれ

夕ぎりのまがきの花すゝきおちかたならぬ袖みえん。まことにめつらしき心に侍へし。ふるき歌に遠方人の袖も見てましといへるは。見ところなくも侍ける也。兩方ともに申て。爲ㇾ勝。右歌も秀逸のよし有ニ沙汰一。

四十二番

左勝　通光

里わかすみにならすよの秋風に荻のはなから露そこぼるゝ

右　讃岐

古郷はねやの板まに苔むして月さへもらす成にける哉

さとわかすみにならすよの秋風。さる本文侍らんやうにやなと申人侍しかと。右歌ふかき心なしとて。以ㇾ左爲ㇾ勝。

四十三番

左　公經

かり金の鳴つるなへに小倉山めにみぬ秋をそらに聞かな

右勝　越前

常盤なる山路はあきの外かとて詠むる暮もさをしかの聲

鴈かねの鳴つるなへにめに見えぬ秋をきかむこと。心いふにおかしくは聞え侍るを。ときはの山を秋のほかとなかむるこゝろ。又よろしとて。爲ㇾ勝。

四十四番

左持　忠信

秋風に小田のかりほのかたよりに靡く末葉の露そいろつく

右　經通

袖にまた人しるらめや淺茅生の小野のしの原忍ふ秋風

左はかたよりに末はなびかん事。かりほのすがたかなはすかと。右方申。をのゝ篠原ゆらには侍を。かの本歌うち返したるさまにて。いくはくめつらしからすと。左方に沙汰侍て。持に被ㇾ定。

四十五番

左勝　實氏

もみぢちる川せの霧のをのれのみうきて流れぬ秋の色哉

右　知家

天の川あきこぐ舟のみなれ棹そてのしづくの露と散らむ

秋こぐふねのみなれさほも。させる難なく。よろしく侍る。川瀬のきりの秋のいろ。猶ふかくおもひいれたるとて。以ㇾ左爲ㇾ勝。

四十六番

左　家衡

あきの色は心よりこそ替りけれ身にしむ風のいかにそむ覽

右勝　範宗

秋の夜はとを山鳥のおのへまて月はひかりもへたてさりけり

左歌優なるやうにきこえ侍しを。右作者申。近ころ三輪の社にて人々歌よみ侍けるに。土御門内大臣。秋といへは心の色もかはりけり何ゆへとしもおもひ定めねと。此歌人多きゝ侍き。右歌又よろしくつかうまつれるよし申て。爲ㇾ勝。

四十七番

左勝　高倉

我庵は小倉の山の近けれはうき世をしかとなかぬ日そなき

右　右大臣

己か秋に行あひのわせをかりかねて鳴なるなへに露そ置そふ

うき世をしかとなかぬ日そなき。すこし述懐にはよりて侍れと。かの山もとの秋のあはれ。人によりてふかゝるへきよし満座申。以左爲勝。

四十八番

左持　兵衛内侍

秋たつと思はぬ空の風にたにまつは淋しきみ山への里

右　雅経

越路より秋はいそかす鴈金は初もみち葉のおりもあふらし

あきをいそかすかり金。殊によろしきよし申人々侍し。左歌猶持とさためられ侍にき。

四十九番

左勝　康光

草枕ころもてさむき秋風にをけはかつ散のへの白露

右　行能

山ふかき秋の夕へをきてみれは木のはしくれて鹿そ鳴なる

右歌新古今に。山里の春の夕暮きてみれは入あひのかねに花そ散ける。同心なり。をけはかつちる野へのしら露。ゆうにつからまつれりとて。勝と被定。

五十番

左持　家隆

手向山もみちのにしきぬさはあれと猶月影のかゝる白ゆふ

右　行意

春日山やまたかからし秋霧のうへにそ鹿の聲は聞ゆる

たむけ山紅葉のにしきに月影のかゝるしらゆふ。歌のたけ心詞。殊勝のよし沙汰侍しを。かすか山やま高からしとをきて。鹿のこゑ秋きりの上に聞ゆる心。又およひかたくたくみに聞え侍うへに。春日山のしか。歌合にまけましきよし定申侍にき。

五十一番

左持　御製

宮城のゝしからむ萩やちりぬらんあらはれて鳴さを鹿の聲

右　定家

を鹿なくは山の陰の深けれはあらしまつまの月そすくなき

あらはれてなくさをしかのこゑ。誠に本歌の心もめつらしく聞えて侍を。右歌よろしとて。爲持。

五十二番

左勝　通光

暮は又わかやとりかは旅人のかちのゝ原のはきの下露

右　讃岐

もろ人の心のうちは春なから千とせの秋の月をこそ見れ

かちのゝ原。萩の下露。可勝のよし定申。

五十三番

左持　公経

たかそめし外山の峯のうす紅葉しくれぬさきの秋の夕くれ

右　越前

諸人の心は月にすみぬらし都のあきのふかき夜のそら

時雨ぬさきの秋の夕くれ。宜之由各申。宮古のあきの深

き夜のそらも。ゆうなりとて。持と被レ定。

五十四番

左　忠信

ひとりすむみ山の秋の風の音にをのれと殘るさをしかの聲

右勝　經通

これそこの我身にいとふ秋の霜つもれは人の袖の月影

左歌艷あるやうには侍を。をのれとのこるさをしかの聲。短慮易レ迷て。わきまへ侍らぬよし。左方人にとひ侍しかは。分明にこたへも侍らす。我身にいとふ秋の霜つもれは人の袖の月かけといへる。晉室潘中郎之感秋之詞。我朝在中將厭老之心。彼是によりて妖艷にきこえ侍しかは。勝とさため侍にき。

五十五番

左勝　實氏

うちわたす衣かりかね聲たてつ旅ねの霜や冴まさるらん

右　知家

旅人のみのしろ衣をさをあらみまとをにうつる萩か花すり

みのしろころもまとをにうつるも。心おかしくきこゆれと。衣かりかねこゑたてゝ旅ねの霜とおもへる心。なをゆうにきこゆとて。爲レ勝。

五十六番

左持　家衡

夕暮はかりのつはさのおほひ羽をもりて降くる秋のむら雨

右　範宗

都たに夜さむになりぬいかはかりこしの山人衣うつらむ

かりのつはさの霜も雪も。もりくる物になりにけれは。其難は侍らねと。このおほひ羽。ことにえむにはきこえすや侍らん。右歌優にきこゆれと。ことは侍らすとて。持に被レ定。

五十七番

左勝　高倉

いささらはこんよをかれて賴めをかむ限もしらぬ月の光に

右　右大臣

白妙の霜のころもを打わたすをちかた人や袖にしるらむ

霜の衣うちわたす。おかしく聞え侍を。かきりもしらぬ月のひかり。心ふかしとて。勝と定申。

五十八番

左持　兵衛内侍

しくれつゝはけしくかはる山風にはれ行月も明方の空

右　雅經

虫の音もいかに恨みてまくすはふ小野の淺茅の色かはり行

左右ともに宜よし。兩方同申。

五十九番

左持　康光

ふしわひぬ秋のよなかき吳竹の小枝もりくるねやの月影

右　行能

月かけも夜さむになりぬ今よりの寢覺を誰かとはんとす覽

左歌右方難なきよしを申。左方人。小枝もりくる不ニ甘心一之由申。右歌左方又不レ加レ難。下句思所なき由。右方申レ之。仍爲レ持。

六十番

左　家隆

賤のうつ衣かりかね聲さむみはね白妙に霜や置らむ
右勝　行意
限りあれはよしのゝ奥に吹風は秋なれはとて音もまさらす
左衣かり金ゆうには聞ゆれと。みよしのゝ奥のあき風。たつね入てきかさらむ人こゝろおもひかたしとて。以ﾚ右爲ﾚ勝。

六十一番　冬
左勝　御製
神無月あらしにましる村雨に色こきたれて散木の葉かな
右　定家
よしさらはかたみも霜に折はてぬ今はあたなる秋のしら菊
左殊勝秀逸之由。兩方共申。右講師頗停滯不ﾚ讀之間。瑕瑾彌現ﾚ形。殘菊之芬芳厭□却之外意得之由。作者申ﾚ之。以ﾚ左爲ﾚ勝。

六十二番
左持　通光
ちりはてゝ木の葉をとなき山川の氷のよそにゆくあらし哉
右　讃岐
神無月いつれもろさのまさる覽木々のこのはとふるき涙と
氷のよそに行嵐。いひしりてよろしく聞え侍よし各申。木々の木のは。ふるき涙。きほひおつる。こゝろふかきたくひは。あはれに聞なされ侍しかは。持と定申。

六十三番
左勝　公經
山川の紅葉のうへのうす氷このまもりこし月かとそみる
右　越前
霜ふかき難波のあしのしたはれてむれゐる鳥の跡そ見え行
もみちのうへのうすこほり。宜之由各申。鳥のあと。殊にみところなしとて。以ﾚ左爲ﾚ勝。

六十四番
左勝　忠信
時雨行ねやのひまたになきものをいかてか袖の色をそむ覽
右　經通
見るまゝに雲のはたてそかはり行山には秋も峯の木からし
左閨のひまなくは。何にかそむる色にやと申人々侍しかと。華亭の時雨かならすもらすとも。涙にかはらむ袖の色は。おりから人によりて。ゆへこそ侍らめと申人侍き。右くものはたてのかはりゆく山には。秋も峯のこからし。又よろしきよし各申侍しかと。猶以ﾚ左爲ﾚ勝。

六十五番
左勝　實氏
秋の色もうつりにけりな村雲の山のはさらぬ時雨せしまに
右　知家
まかきなる竹の葉さやき置霜のよとこにさへや夢も結はす
左歌すかたこと葉宜は聞え侍を。右方すゝみて。あきのうたに出したらん。無ニ分別ーかと侍しかと。村雲の山のはさらぬ時雨。ほとすきなん後は。冬までこそ侍らめと。右より定侍しかは。さらてはよろしき歌なりとて勝侍き。右うたもことなる難侍らさりしにや。

六十六番
左持　家衡
冬きては結ひもなれぬ初霜のおくてのはなは風さやくなり

右　　　　　　　　範　宗

炭かまのけふりを雲に吹ませて雪のみしろき小野の山かせ

左歌季秋之月。霜初降寒氣總至。冬來なん後はましてむすひなれたる霜にや侍へきと。右方難申。左申云。前霜强の非難とも。右煙を雲に吹ませたるをのゝ山風。景氣おかしなと申人侍しかと。持に被﹂定侍にき。

六十七番

左勝　　　　　　　高　倉

旅衣すそ野の尾はな霜かれてやとりし秋の露をこふらし

右　　　　　　　右大臣

木枯も時雨もしらしいほえさす神なみ山の常盤木のかけ

左はことにえんに。右は心たくみなるよし。各申侍しを。左なをゆうに聞ゆとて。勝侍にき。

六十八番

左持　　　　　　　兵衞內侍

夕暮は難波のあし火たきそへてこやもあらはに立煙かな

右　　　　　　　雅　經

白妙の衣吹ほすこからしのやかてしくるゝ天のかく山

左芦火燒そふる煙。右の衣吹ほす木からし。いつれとなくよろしきつかひ也とて爲﹂持。

六十九番

左勝　　　　　　　康　光

山風に雪まのけふり打なひき冬こもりせる小野のすみかま

右　　　　　　　行　能

霜きゆる日かけに秋やかへるらむ枯野の草に露そかゝれる

左のゆき間の烟。よろしきよし各申。右も枯野の草にかかれる露。心侍にやと申侍しかと。これほとの心はうたことにありと。こゝろ〳〵聞えて。以﹂左爲﹂勝。

七十番

左　　　　　　　家　隆

朝ほらけさほの川霧冬かけてなくや千鳥の猶まよふらん

右勝　　　　　　　行　意

うち渡すおほ川のへの瀨をひろみをよはぬ聲に千鳥なく也

左歌よろしきよし沙汰侍しかとも。おほ川のへのせをひろみ。歌も及はぬこゝろに侍しかは。右勝と申うけ侍き。

七十一番

左　　　　　　　御　製

道のくの野田のたま川みわたせはしほ風かけて氷る月かけ

右勝　　　　　　　定　家

みそら行月もまちかし足引のよしのゝ里の雪のあさけに

みちのくの野田の玉川。誠に金玉に聞之由。右方申﹂之。猶右可﹂勝のよし。左方に有﹂沙汰。仍爲﹂勝。

七十二番

左勝　　　　　　　通　光

神無月しくれにけりなあらち山行向そてに色かはるまて

右　　　　　　　讃　岐

□□物さひしさはしらねともきゆるはおしき庭の雪哉

あらち山の行向袖。いとよろしくきこえ侍るよし。兩方申﹂之。爲﹂勝。

七十三番

左勝　　　　　　　公　經

つま木こる山路はいまやたえぬらむ里たに深き今朝の白雪

右　　越前

風さえて日影もりこぬ谷河にむすふこほりはいくへ成らん

さとたにふかきけさのしら雪。又殊に宜由申て。爲レ勝。

七十四番

左勝　　忠信

深山川木のはかくれに行水のたえ〳〵のこる秋の色哉

右　　經通

うら風のはわけの霜や積るらむよな〳〵蘆の音そかれ行

左のみやま川。聞え侍るよし右方申。右のかれゆくあしも優に侍と。ことにめつらしきふしは不レ侍とて。以レ左爲レ勝。

七十五番

左勝　　實氏

紅葉せし四方の山へはあれ果て月より外の秋そ殘らぬ

右　　知家

ふる雪の時ともわかぬふしの根はよその色にや冬を知らん

右歌もえんには侍と左うた殊宜。可レ勝のよし各申レ之。

七十六番

左持　　家衡

いたつらにまつのこすゑしうつもれぬ誰ふみ分て峯の白雪

右　　範宗

山里はしつのをたまきいやしきも長き夜あかぬ雪の降つゝ

左歌難なきうへよろしきよし。右方申。右歌しつのをたまきいやしきとつゝけ。又有レ心之由。左の申。仍爲レ持。

七十七番

左持　　高倉

この頃は雪をしるしとみわの山なみしろたへの杉のむら立

右　　右大臣

しほくもり盬風あらき岩のうへにつまき折たき誰あかす覽

左右共無二指難一。又無二差事一之由。爲レ持。

七十八番

左　　兵衛内侍

船人のかよふ浪路はあとたえてこほりそしかの浦つたひ行

右勝　　雅經

かり衣すそのもふかしはし鷹のとかへる山の峯の白ゆき

氷そ志賀のうらつたひゆく。殊宜之由兩方共申侍しを。かりころもすそのもふかしとをきて。はし鷹のとかへる山なと。猶まさりてや侍らむとて。右の勝をうけ侍にき。

七十九番

左勝　　康光

ふる雪に庭のこのははうつもれて嵐そとをき冬の山里

右　　行能

雪しろき菟田の原をみわたせはあたに住こし庭そのこれる

右も指難は侍らさりしかとも。左嵐そ遠きといへる。ことに優なるよし人々申て。爲レ勝。

八十番

左勝　　家隆

草のはら枯にし人は音もせてあらぬ外山の松のゆきおれ

右　　行意

今朝よりはゆく瀬の水もあさもよひきの川上か氷しぬらん

右行せの水もあさもよひ。詞のつゝき宜聞え侍のよし。

右方申侍しを。左猶可ㇾ勝之よし被ㇾ仰定ㇾ侍にき。

八十一番　戀

左勝　御製

一すちにうきになしても頼まれすかはるにやすき人の心は

右　定家

逢事はしのふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけむ

左心殊可ㇾ然とて。爲ㇾ勝。

八十二番

左勝　通光

思ひあれはつれなき色もかはりけりえやは岩根の松の下露

右　讃岐

いかなれは涙の雨はひまなきにあふくま川のせたえしぬ覽

左心詞ゆうにおかしく聞え侍之由。各申。爲ㇾ勝。

八十三番

左　公經

身を秋の人の心はしら露のおくてのいなは風も吹あへす

右勝　越前

あた人をまつ夜更ゆく山のはに空たのめせぬ有明のそら

左歌よろしく聞え侍を。右歌又優なる様に侍るとて。爲ㇾ勝。

八十四番

左持　忠信

恨み佗まつとはなくて此よひの有明の月をなく〳〵そみる

右　經通

うきものと思ひそ出る有明のつれなくみえし袖の別は

右歌ことに艶におかしく侍よし各申侍しを。左も同有明の月。ことにわくへき處なしとて。爲ㇾ持。

八十五番

左持　實氏

うたゝねにつれなくみえし面影は夢としりても猶や恨みむ

右　知家

人めもる我かよひ路のしの薄いつとかまたむ秋のさかりを

左右いつれとなくゆうにきこゆとて。爲ㇾ持。

八十六番

左　家衡

我こひはをしまのあまの笘ひさし久しく成ぬ浪にしほれて

右勝　範宗

うきめのみおひて亂るゝ岩の上に種ある松のなを頼みつゝ

左わか戀はをしまのあまとつゝけたる。不ㇾ叶や侍らんと。右方申。右よろしき由。左方申て。爲ㇾ勝。

八十七番

左　高倉

かたしきの涙にぬるゝ小夜衣よしさはくちぬ人にしられて

右勝　右大臣

めのまへに風も吹あへすうつり行心の花もいろはみえけり

左歌殊に思入たるさまにも侍らぬにや。右うたえむにおかしき様にきこえ侍よし各申て。爲ㇾ勝。

八十八番

左勝　兵衞内侍

なか〳〵にあはすは何をかた糸の思ひみたれぬ夕暮そなき

右　雅經

秋の田のわさほのかつらゆふかけて結ふ契はかりにたになし

右わさほのかつら。いひしりてことによろしく聞え侍るを。左のあはすは何をかた糸の。このたひもあまた聞え侍る中に。おもひみたれぬゆふ暮そなき。猶すくれたりとて。以レ左爲レ勝。

八十九番

左　康光

獨ふすよとのつき橋よとともに思ひそわたるまのゝ浦かせ

右勝　行能

夕くれの露には色もなかりきとまつ我袖を我そとかむる

右方申云。左ふし所いかゝ侍へき。ひとりふかすよとよまんとは思ひて侍る。たゝうちきくに。橋のうへに寐たるやうに成侍にや。右我そてをわかとかめたる。かとかとしなと沙汰侍て。勝侍にき。

九十番

左勝　家隆

しらさりき袖になかるゝ涙川うきて思ひのかゝりけるよを

右　行意

我そては朽木の袖にたつ民のたつきもしらす戀やわたらむ

くち木の袖にたみも。つよくは聞え侍を。袖になかるゝなみた川。えんにおかしとて。爲レ勝。

九十一番

左　御製

よる浪もをよはぬ浦の玉松のねにあらはれぬ色そつれなき

右勝　定家

來ぬ人をまつほの浦の夕風にやくやも鹽のみもこかれつゝ

をよはぬ浦の玉松。をよひかたく有かたく侍よし。右方申侍しを。常にみゝなれ侍らぬまつほのうらに。勝の字を付られ侍にし。何故とも見え侍らす。

九十二番

左勝　通光

まつ嶋やわか身のかたにやく鹽のけふりの末をとふ人も哉

右　讃岐

うたかひしゐもりの跡はそれなから人の心のあせにける哉

我身のかたに燒しほ。又宜よし人々申侍しうへに。右あとはとをく聞え侍しかは。以レ左爲レ勝。

九十三番

左持　公經

ぬきみたる涙の玉のをとめ子か袖に哀をかけてたにとへ

右　越前

わたつ海の涙のあはとうく袖やよるへもしらぬ蜑のすて舟

泪の玉のをとめ子も無レ難之由各申侍しを。又なみたのあはとうく袖ゆうなりとて。爲レ持。

九十四番

左持　忠信

まきもくのあなしの川の川風になひく玉もの亂れてそ思ふ

右　經通

煙たにをよはぬ空にきえわひぬいかゝは須磨の蜑のも鹽火

左右共によろしきよし申。爲レ持。

九十五番

左持　實氏

いかにせむ茂みにましる花の色の人にしられぬ露の深さを

右　知家

とはれしはむかしかたりの夕暮に思ひもいれぬ荻のうは風
　人々申云。いかにせんしけみとつゝけたる。なにのしけみとも聞えすと侍し。夏草にてこそは侍らめ。右もことなる事なしとて。爲レ持。

九十六番

左　家衡

いたつらにあはすは何をなく涙かけて頼まむ玉のをもなし

右勝　範宗

いかにせむねをなく虫のから衣人もとかめぬ袖のなみたを
　あはすは何を。猶さき〳〵のやうにいと有へきよし。右方申す。ねをなく虫のから衣。まことによろしく侍れは。勝侍にき。

九十七番

左　高倉

たつねこし伏見のさとの名のみして草の枕に夢もむすはす

右勝　右大臣

浪まよりそむきにみゆるおくの嶋我をやなはの恨はてつる
　左歌思ひいれぬさまなるよし各申。そむきにみゆるおくの嶋の心。たくみにおかしく聞え侍よし申て。爲レ勝。

九十八番

左勝　兵衛内侍

歸るさをしはしと鳴ぬ鳥の音にあくるもまたぬしのゝめの道

右　雅經

をとは川瀧つこゝろをせきかねてあふ坂山のなさへうらめし
　瀧つ心をせきかねて。會坂山の名をさへうらみたる心。ことに宜よし沙汰侍しを。かへるさをしはしとなかぬ鳥の音。殊めつらしくおかしきよし兩方申て。爲レ持。

九十九番

左持　康光

涙川みをはやなからゆく水のあさき瀨もなき戀の道かな

右　行能

いたつらに心のまつに吹風のをとにも人をきかす成行
　左みをはやなから。本歌のこゝろに叉よし。右方申侍しな。左もことにことはり聞えて。申のへ侍らす。右下句叉無ニ殊事ーとて爲レ持。

百番

左　家隆

しら露の曉ことにくたかけのくたけてそ鳴あかぬ恨みに

右勝　行意

志賀の蜑の興になつそふ燈火のうきにつれなき浪にきえ南
　右歌いとよろしく侍らへに。くたかけいうならさるよし。左方すゝみて詞をそへられ侍にき。仍以レ右爲レ勝。

建保四年閏六月十二日書寫之。是爲ニ淸書ー下給。先同書寫畢。九日夜依レ召參内。勤ニ講師ー畢。而十一日夕又相ニ副判詞ー下給。判詞治部卿筆也。書進之間於レ傍令レ書ニ寫之ー。勝負字幷作者不レ可ニ書入ー之由被ニ仰下ー。仍不レ書。不審。

同廿九日。以ニ行能本ー書寫挍合畢。

右百番歌合以古寫一本挍合

歌合建保四年八月廿二日當座

題

朝紅葉　夕擣衣　深山霧　羇中戀　海邊戀

作者

左

女房　實氏卿　賴範卿
經通卿　保季朝臣　經高朝臣
家宣朝臣　經家　資隆

右

家衡卿　兵衞內侍　雅淸朝臣
知家朝臣　範基朝臣　範宗朝臣
行能　信實　藤康光

衆議判　隱レ名如レ恒。

一番　朝紅葉

左勝　女房

よこ雲はあけはなれゆく山のはにのこる紅葉も秋風そ吹

右　兵衞內侍

夜もすから時雨ふりけり柞原しつくもかはる杜の下草

左爲レ勝。

二番

左持　實氏

あさな〳〵時雨の露に色そひて秋あらはなる神なひのもり

右　範宗

かくれぬのはつせの山のこもりえに朝露かけて移る紅葉は

爲レ持。

三番

左持　經通

色まさるまさきのかつら朝露に外山のあきそなかは過ゆく

右　家衡

あかねさすやしほの岡の朝日かけらつろふ色は木葉成けり

兩首尋常也。仍爲レ持。

四番

左持　賴範

秋の色もまた朝露のをきそめて日影ことなる峯のもみちは

右　雅淸

朝日かけさすや岡へのうす紅葉ひとしほならす色やそふ覽

爲レ持。

五番

左持　保季

色そこきまた露おちぬ紅葉々はぬれて朝日のさすや岡へに

右　行能

立田山しくれも夜半に過にけり淺茅のもみち色ことになる

持。

六番

左持　經高

三室山もみちそめたる朝露のたえすかつちる嶺の秋かせ

右　知家

柴の戶をあくるあさけの山のはに木葉うつろふ秋のむら雨

左右共無二指事一。仍爲レ持。

七番

左持　家宣
たつた山おなし梢の秋の色をもるゝひかりや朝日成らむ
右　信實
み渡せはまたひとしほは朝露に移ろひあへぬ峯のもみち葉
左右共無指事。仍爲持。

八番
左　經兼
あさな〳〵紅葉のにしき立田山いくしほ露のよはにそむ覽
右勝　範基
朝日かけ露もまたひぬもみち葉をその色なから吹あらし哉
右歌爲勝。

九番
左勝　資隆
露霜の色とる木々もかすみえて朝日いさよふ嶺のもみち葉
右　康光
けさみれはかりの涙をふりませて時雨に殘る峯のもみち葉
左歌色とるきゝ。あしからす。仍左爲勝。

十番　夕擣衣
左勝　女房
秋風もゆふへやさむく成ぬらんうちもすさまぬあさのさ衣
右　範宗
うちわたるたけたの原の夕嵐にまなくもひゝく槌の音哉
左歌優なり。右歌つちの音けしからす。仍左爲勝。

十一番
左　實氏
夜をさむみかつ置霜やまさる覽くるゝよりうつあさのさ衣
右勝　兵衛内侍
くるゝより夜さむの露もうちしほれ月になれゆく麻のさ衣
以右爲勝。

十二番
左　經通
はるかなる雲よりをちの夕まくれかせにつけてそ衣打なる
右勝　康光
ゆふ日さすおかへの庵にたれすみて秋きにけらし衣うつ覽
左歌有病。仍右爲勝。

十三番
左　賴範
夕つくひさすやたかへの松のはのかせさむけくも衣うつ也
右勝　家衡
夕くれはたか秋風を身にしめて夜さむの衣ひとりうつらん
左歌已是古歌也。以右爲勝。

十四番
左勝　保季
あけゆけは音もまとをに打絶し麻のさ衣くれをまちけり
右　信實
こととはて夕きりかくれすむ人も里をはしれと衣うつをと
右歌の始の五文字。心不相叶。仍左爲勝。

十五番
左　經高
たか里の雲井に人をへたてつゝけふもくれぬと衣うつらん
右勝　雅清
聲さむみ夕風ふけは我せこからうらめつらしく衣うつ也

左様々しく。右無過失。仍以右爲勝。

十六番

左持　家宣

遠近のきぬたはそことわかねともおなししるへの秋の夕風

右　範基

穐かせの袖にすゝしきいさよひの月待ほともうつ衣哉

左歌きぬたはかりにては音ありかたくや。右又夕の心いたくすきたりとて。爲持。

十七番

左　經兼

夕風のふきくるまゝに淋しきにいたくな打そ賤のさころも

右勝　行能

わするなよいもかきなれしから衣たつたの山の秋の夕くれ

左歌其詞おなしとて。以右爲勝。

十八番

左　資隆

賤のめか秋の狭衣うつたへにけふもくれぬところいそく覽

右勝　知家

うつとてもひとりはつらき夕暮を誰ためとしも衣うつらん

左歌うつたへ常事也。右歌又無難とて爲勝。

十九番　深山霧

左勝　女房

槇のはのつれなき色もなかりけり秋の深山の夕霧のそら

右　家衡

霧ふかき深山のおくにたつ鹿のみちやまとへる聲そ聞ゆる

左歌まさるか。仍爲勝。

廿番

左持　實氏

ころくるゝ山路も深き霧のうちにをさつれて行秋のたひ人

右　知家

をはつせや峯のひ原に露おちて夕きりなひく秋の山かせ

左右無難。仍爲持。

廿一番

左持　經通

いつくとか□くひもわけむ山深み夕霧まよふ道のなかてに

右　範宗

吹かせの千種の色もおのつから霧のたえまのみ山へのおく

左右共爲持。

廿二番

左勝　賴範

友よはふ遠こち人の聲すなり今朝たちこむる霧の中やま

右　範基

朝きりのたつたの山を秋ゆけはそても草葉もおなし白露

右歌殊無正躰。左歌きりの中山不審雖然以左爲勝。

廿三番

左持　保季

霧ふかきねやまををしむ鹿は猶おのれ鳴てや夜をのこす覽

右　康光

卷向の檜はらか末はそれなから霧にあけ行峯の月影

左右共無差難とて。爲持。

廿四番

左持　經高

たか袖にわけてみるらむ葛城のたかまの奥の夕霧の空

右　行能

みよし野や槇たつ山の山人のおもひもいれぬそての秋きり

左右共爲レ持。

廿五番

左持　家宣

やまのはもあはれも深き夕霧に心そらなるむかしをそ思ふ

右　雅清

まきのたつあとも小倉の山深みたつきもしらぬ霧こめて皃

左右共爲レ持。

廿六番

左持　經兼

たつねいる山路もふかき夕霧に鹿の音さへに遠さかりぬる

右　兵衛内侍

み山へやはれぬなかめもまさるらん雲よりおくの衎の朝霧

左右共無二差事一とて。爲レ持。

廿七番

左　資隆

山人もおのれしほれて歸るらむたつたの奥のきりの迷ひに

右勝　信實

すきわひぬ嶺の朝きりいくへともしらぬ庵のあとの山風

右歌を爲レ勝。

廿八番　羇中戀

左持　女房

かきりあれはおなし都の雲たにもへたてゝ遠き心ならひを

右　兵衛内侍

契こし程は雲井の夜半の月おなしかたみの空をわするな

左右共無二指事一とて。爲レ持。

廿九番

左　頼範

道すから都をこふる袖の上に涙とおつるこしのしら雪

右勝　行能

小篠原かりねの床の山風に一夜の契夢をたえつゝ

左歌こしの白雪。心を難レ得。仍右を爲レ勝。

三十番

左勝　實氏

しるといへは草の枕のかりにたにいはてそあかす露はをけ共

右　家衡

旅のそらふしの煙をなかめてもするかたもなき我身也けり

右歌するかたもなき。詞よはしとて。左爲レ勝。

三十一番

左勝　經通

旅ころもきつゝかれ行古郷の俤のみそ袖にのこれる

右　知家

たひ衣あきのわかれの袖の露さるは夜さむの床の山風

右歌俊成卿のうたにいくほとの無二相違一とて。左を爲レ勝。

三十二番

左　保季

都をはぬれても出す旅ころもいく朝露の色かはるまて

右勝　康光

思ひねの草の枕のゆめちにもわすれすのこる人の面影

右歌尋常なりとて爲レ勝。

三十三番

左持　　經高

かへりみるそなたのそらも白雲のかさなる峯に消つゝそ行

右　　信實

をのつから空ゆく月はめくりきぬ程は雲井の夕たつれて

左右共無二指事一。仍爲レ持。

三十四番

左　　經家

しのひあまる心の色をさきまよひ草の枕の露さなしつる

右勝　　範宗

我そてよしのたの杜にくらふれは千枝の雫もぬるゝ數かは

右姿詞優なりとて爲レ勝。

三十五番

左勝　　資隆

草まくらむすふかひには大方のならひにあまる袖のしら露

右　　雅清

旅衣くちやはてなん夏引のいとしも物をおもふなみたに

右歌。夏引のいとしもなしとて。左爲レ勝。

三十六番

左　　家宣

東路の忍ふはしめの關の名をこえても猶そするゑの松山

右勝　　範基

玉鉾の道の草葉のかり枕露をかたみにいくよむすひつ

左歌やう〳〵しく。右歌無レ難とて爲レ勝。

三十七番　　海邊戀

左持　　女房

消かへりうはの空なる煙たにことうら風はいふかひもなし

右　　範宗

かみしまやいそまの浦の月みてもねぬよの浪そ袖にかさなる

左右とも無二指事一とて爲レ持。

三十八番

左持　　實氏

くちねたゝかたみの浦の忘れ貝忘れぬものをあふよしも哉

右　　康光

播磨潟あまのかるもの我からや人にしられぬ身をくたく覽

左右共心詞ゆうにきこゆ。仍爲レ持。

三十九番

左持　　經通

わひぬれは袖ほすひまも遑なみ戀くむ蜑の名にやふりなん

右　　兵衞内侍

しるへせよわれもなくさの濱千鳥あとなき浪のよるの通路

左右共尋常にみゆ。爲レ持。

四十番

左　　保季

戀たれしはしめはことの數ならて蜑のも鹽火またこかる覽

右勝　　雅清

我戀はみるめもしらす伊勢嶋やしほひの方は風もつれなし

左歌やまひあり。仍右爲レ勝。

四十一番

左持　　經家

いかにせむ思ひあかしの浦はより消かへりぬる蜑のも鹽火

右　　信實

いせの海の蜑のたくなはくるゝ夜の長き思ひは秋そ悲しき

左右共させる事なしとて爲レ持。

四十二番

左持　家宣

もらすなよ袂に浪はかよふともあまたにつゝむ戀の行衛を

右　知家

をのつからありし計りの夢も見す猶らしまとのせとの鹽風

左右ことなる事なしとて。爲レ持。

四十三番

左持　資隆

たちそひしつらきかたみも增鏡みぬめの浦に絶やはてぬる

右　範基

よを絶て波にうきねをすまの蜑のかくやは袖の乾く時なき

左右ともわろしとて爲レ持。

四十四番

左勝　經高

逢事を猶まつ嶋のあまころもしほたれてのみ年やふりなむ

右　行能

思ひやるさかひやいつこ白浪のうちよる〳〵の夢をたにみす

うちよる〳〵きゝにくしとて左かちぬ。

四十五番

左　賴範

わすれなん思はしとすれはいとゝ又すまの關やの秋風の聲

右勝　家衡

いたつらに幾夜あかしのうら波にしほくむ蜑の獨ぬるらむ

左歌とるところなきによりて右爲レ勝。

右建保四年八月廿二日歌合以古寫本挍合

歌合建保四年八月廿四日當座

題

夕草花　古寺月　寒山雁　寄雨戀　寄石戀

寄夢戀

作者

左

女房　經高朝臣　家宣朝臣

行能　信實　資隆

藤康光

右

家衡卿　雅清朝臣　保季朝臣

知家朝臣　範基朝臣　範宗朝臣

兵衛内侍

講師　知家朝臣

衆議判隱レ名如レ恒

一番　夕草花

左勝　女房

みしまのや夕露おもく吹風にいろの千種の花そめのそて

右　兵衛内侍

旅人のおほかる野への女郎花あたの露ちる秋のゆふくれ

左右共雖レ無二指難一。左歌の下句たちまさるへくや。仍爲レ勝。

二番

左勝　經高
宮城野やゆふ露をもく吹風にちらまくおしき秋萩の花
右　家衡
さを鹿のなくねなからやうつるらむ夕露かけて萩か花すり
右歌其詞首尾不レ叶。仍左爲レ勝。

三番
左持　家宣
心せよ夕つゆしけしをみなへし思はぬ風になひきもやせん
右　範基
日暮ぬとあたのおほのに宿かれはあるしかほなる女郎花哉
左右ともに無二差事一。仍爲レ持。

四番
左勝　行能
夕されは心やちゝにかはるらむ萩ふく風は色なかりけり
右　保季
くれぬるか野への尾花を吹かせのなひくにつけて棹鹿の聲
左歌聊有二其意一。仍爲レ勝。

五番
左勝　信實
露もろき尾花かそてもたそかれの遠方のへに秋風そふく
右　知家
夕露のおかへの萩のすり衣花のさかりをそてにみるらん
左歌尋常にみゆ。仍爲レ勝。

六番
左勝　資隆
咲ましる千種の花の色なから露吹なひく野への夕かせ
右　雅清
ゆふまくれたつね入のゝ衣手に露にひもとく萩か花すり
左歌頗たちまさるか。仍爲レ勝。

七番
左　康光
たそかれをこたへぬ野への秋風にお花か末の露そこほるゝ
右勝　範宗
花すゝきそて吹かはす秋かせに野原の露をわくる夕くれ
右歌袖ふきかはすの句得レ躰。仍爲レ勝。

八番　古寺月
左　康光
わすれはやふるきあととふ月をみて横川の水にすむ心哉
右勝　兵衛内侍
初瀬山月はくもらぬあらしより尾上の鐘の聲も殘らす
右爲レ勝。

九番
左勝　資隆
はつせ山檜原にたてるうす霧のはるれはすめる秋のよの月
右　範基
荒にける野寺の鐘の打たえてもるとはなくて月そすみける
左爲レ勝。

十番
左勝　信實
初せ山峯のひはらの色なから秋をはあきとさゆる夜の月
右　保季
あきかけていはねに霜をしき嶋や山遠くすむ小泊瀬の月

右歌秋かけての詞。なにとなし。仍左爲レ勝。

十一番

左持　行能

人すまぬ野寺の小さゝ世々ふりて尾上の松にくもる月影

右　家衡

荒はつる野寺の鐘はをともなしすむよの月の影にまかせて

兩首無ニ差事一。仍爲レ持。

十二番

左持　家宣

雲の色は猶山ふかき小泊瀨に月ゆへしもの鐘ひゝくらむ

右　雅淸

はつせ山檜原のかせにきをひつゝもりくるかねも明方の月

左右共無ニ差事一。仍爲レ持。

十三番

左　經高

泊瀨山つきものとかにすむ空のあけまくつらき鐘のをと哉

右勝　知家

むかしおもふたかのゝ山の深きよに曉とをくすめる月かけ

左歌あけまく。きゝよからすうへ。右の歌殊秀逸なり。仍爲レ勝。

十四番

左　女房

をはつせやひはらか月は晴にけり入あひの鐘に秋風そふく

右勝　範宗

はつせ山杉の庵のひまよりも月にはみゆる秋のいろかな

右歌殊尋常也。仍爲レ勝。

十五番　寒山雁

左勝　女房

山さとの峯の木葉やちりぬらむ枕にちかき秋のかりかね

右　知家

なくかりの淚かつちる山かせに衣手うすきみちの空哉

左歌有ニ景氣一。仍爲レ勝。

十六番

左持　經高

あらし吹こゑはあらちの山のはにつはさもさむく鴈渡る也

右　雅淸

かせさむみ雲もくらふの山のはに幾つらとたにわかぬ鴈金

兩首無ニ差難一。仍爲レ持。

十七番

左持　家宣

山たかみさこそあらしの名なり共殘るこのはゝかりの一行

右　範基

富士の山みねとひこえてゆくかりの翅の霜を吹あらし哉

右歌寒山餘りおひたゝし。左歌又なにとなし。仍爲レ持。

十八番

左持　行能

鴈のなく山の秋かせ夜やさむき翅の月を霜にまかせて

右　兵衞内侍

むら時雨はれ行秋にとふかりのはかせもさむき山のはの月

兩首無ニ差難一。仍爲レ持。

十九番

左勝　信實

萩のうへも霜にさえ行山風になみたや氷る秋のかり金

右　範宗

あき山にをく初霜の朝あらしに鴈のなくねもくたけてそ行

以レ左爲レ勝。

廿番

左勝　資隆

み山路やはれゆく月の影さえてかりのは風も夜さむ成らん

右　保季

山風のさえゆく夜はやいかならむこほらて落るかりの泪も

左歌いさゝかまさる。仍爲レ勝。

廿一番

左持　康光

いこま山更ゆく月にとふ鴈の翅にもろき秋のはつしも

右　家衡

天とふやをのかはかひをもる霜の寒き山への衣かりかね

左のもろきなにとなし。右又あまりしたゝめたり。ゆかしき所なし。仍爲レ持。

廿二番　寄雨戀

左　康光

たつぬへきそなたの空も雨雲のへたてゝ遠き戀の道哉

右勝　家衡

大かたのよにふる雨をなかめても袖の雫を人のとへかし

右歌詞艶なり。仍爲レ勝。

廿三番

左持　資隆

徒に嶺のあま雲よそなから身をしる袖そぬれてかひなき

右　雅清

思ひあまり世をふる雨の雫にもをとらすぬるゝ我袂哉

爲レ持。

廿四番

左持　信實

せきあえぬ雫は袖のよそならすさすかにみゆる峯の雨雲

右　知家

つらさには厭はしなからいかにして我身世にふる袖の村雨

爲レ持。

廿五番

左勝　行能

なかき夜のくらき窓うつ秋の雨に雫もかはる袖の色哉

右　保季

きのふみぬ軒のしのふも露深しみなしる雨やけふはそふ覧

左聊まさる歟。

廿六番

左勝　家宣

むら時雨たもとの露の數そへてしはし涙そ人めつゝまぬ

右　範基

かく計り思ひたえてはなからましふる共雨にとたに賴ます

左の下の七文字。きゝよからす。又右のとたにたのます。殊見苦歟。

廿七番

左持　經高

思ひわひぬ身をしる雨とかこちても契らぬそらの秋の夕暮

右　範宗

さても猶ねられぬ夜半の村雨にこぬ人まちし月そ戀しき
　雨首爲レ持。
廿八番
左勝　女房
大方のなかめにまさる袂かな軒の忍ふの秋のむらさめ
右　兵衞内侍
ふれはけにわかみにさても久方の雨の下にはしけき思ひを
　左歌心詞えんにきこえ侍る。尤爲レ勝。
廿九番　寄石戀
左勝　女房
わたの原荒磯浪の岩のうへによせくる玉のくたけてそふる
右　範宗
とことはに浪こす沖の離れ石にあはぬためしの名さへ恨めし
　右歌無二差事一之上。左あらいそ波たちまさるか。可レ謂二
　秀逸一。仍爲レ勝。
卅番
左持　經高
逢事はよゝにかたくとさゝれいしの苔むす迄に猶も待みむ
右　雅清
心さしなからのはまのさゝれいしの數々にやは人を恨みん
　爲レ持。
卅一番
左持　家宣
われのみや岩うつ浪のうらみかねくたけても猶立かへる覽
右　範基
我袖は浪にしたかふさゝれ石のひかたきのみやたくひ成覽
　左歌いはうつ波のをのれのみに恨かねたる。ことのほ
　かなとりたり。右盥ひにみえぬ沖のいしの心かはらす
　といへとも。ことのほかに玄隔也。
卅二番
左勝　行能
名とり川おもひにしつむ淵の石のいつあらはれむ契共なし
右　兵衞内侍
あふ事の浪うつおきの岩の上によらぬ玉藻の亂れかねつゝ
　右歌近ころの歌の下句歟。仍以レ左爲レ勝。
卅三番
左　信實
石はしる瀧つなみたの消かへりうきておもひの果そ悲しき
右勝　家衡
なみた河みなはに沈む玉かしはくちぬためしは己のみかけ
　雨首雖レ無レ難。右聊まさる。仍爲レ勝。
卅四番
左持　資隆
逢事はまれにもかたきさゝれ石の巖とならん行ゑしらせよ
右　保季
まてとかや頼めしよるの契たにしらてやたえむ久米の岩橋
　雨首不レ足レ言歟。
卅五番
左持　康光
物思ふ色こそみえねいしま行水のこゝろはせくかたそなき
右　知家
明石かた浦よりをちのはなれ石の獨りも浪に幾よぬれなむ

兩首猿程也。仍爲レ持。

卅六番　寄夢戀

左持　康光

我こひはあしもたゆますおもへとも人こそしらぬ夢の通路

右　知家

歎きわひねぬよの空に月日へて夢のかよひち跡やふりなん

右なにといふ心なし。左又あしもたゆますの句。あしもやすめすに殊にをとりて見ゆ。

卅七番

左　資隆

頼めつる夢もむなしく明ぬとやきゝおとろけと鳥も鳴らむ

右勝　保季

なみた河いくよ淵せとしつみきて渡る名もなき夢の浮はし

右聊まさる。

卅八番

左　信實

をのつからさめさらましの夢もうらしぬれはや人を頼む枕に

右勝　家衡

あたし世のはかなき夢の契たにむすはぬ人を思ひける哉

右歌尋常也。

卅九番

左持　行能

むは玉の夢にも人のみつのえのあくる恨はたれもはかなし

右　兵衛内侍

あふとみし夢もなこりの泪さへしらぬ契にかゝるよひかな

兩首爲レ持。

四十番

左勝　家宣

うたゝねにしはし休らふ心にもいとゝそつらき夢の名殘は

右　範基

なさけなく成行人の面影は夢にもつらきならひのみかは

右歌不レ得レ意。仍左爲レ勝。

四十一番

左持　經高

夢にたにありし名殘を待わひぬねぬ夜の月の袖に馴つゝ

右　雅清

うつゝこそ戀ちにいらめよな渡るとたえかちなる夢の浮橋

右歌聊惡氣也。左又惡氣也。仍爲レ持。

四十二番

左勝　女房

忘れ草露ふかき夜の夢ちにやかよへる袖のひるよしもなき

右　範宗

夢路にもあふよのかねはつらき哉なにを名殘の現ならねと

此番兩首尋常也。而左歌聊得レ躰。仍爲レ勝。

右建保四年八月廿四日歌合以百花庵宗岡本挍合

群書類従巻第百九十七

和歌部五十二歌合十八

歌合 建保五年四月廿日

題

羇旅郭公　河邊夏草　寄松述懷

作者

左

御製

參議正三位行左近衛權中將兼讚岐權守藤原朝臣實氏

參議從三位行左近衛權中將兼備前權守藤原朝臣經通

從三位藤原朝臣家衡

參議正三位行治部卿兼伊豫權守藤原朝臣定家

右

僧正行意

正四位下行丹後守藤原朝臣範宗

正四位下行左近衛權中將兼備中介藤原朝臣忠定

藏人正六位上行左衛門權少尉藤原朝臣康光

從三位行宮內卿藤原朝臣家隆

講師

讀師

判者

一番　左　羇旅郭公　御製

時鳥み山なからのはつこゑをこけの枕にあかつきそきく

右　僧正行意

これまてそ鳥の音もする時鳥あすはふもとのよその白雲

二番　左　參議實氏

ちきりをかぬ涙そかよふ郭公誰も旅なる夜半のねさめに

右　丹後守範宗

明わたるみねの梯こえやらてきけはすき行ほとゝきすかな

三番　左　參議經通

露分る山時鳥をのれまたなく音をそへて袖しほるらん

右　左近中將忠定

今夜ぬるは山かみねの雲路にも猶こゑ遠きほとゝきすかな

四番

左　従三位家衡

旅の空行かふ山のほとゝきす都へたつる雲になくなり

右　左衛門尉康光

こえかねてけふもくらしつ時鳥なく山のはにいつる月かけ

五番

左　參議定家

郭公われも旅なりかち人の花たち花をそことおしへよ

右　宮内卿家隆

駒とむる野中の森は立にけり鳴や向の山ほとゝきす

六番　河邊夏草

左　御製

夏川や淺瀬になひくにこ草のにこらぬ水の色そ涼しき

右　僧正

茂りあふ草はみなからかけみえてをのれ浪こす野路の玉河

七番

左　實氏卿

河の瀬に夜わたる舟の此ころはかるやまこもの亂てそゆく

右　範宗朝臣

山河の岩もと小菅浪こえて木かけ涼しき夏の夕暮

八番

左　經通卿

からす共結はさらめやまこも草たかせのよとの枕はかりに

右　忠定朝臣

ふみ分ぬ谷の夏草しけるらし此ころほそき山河の水

九番

左　家衡卿

日數ふる淀のわたりの村雨にからぬまこもや末みたるらむ

右　藤原康光

浪こゆる河瀬に近きさゝのよのみしかく明る夢そはかなき

十番

左　定家卿

夏草の道のへ深きおもひ川むすはぬ水のかけはなひかて

右　家隆卿

夏くれは玉嶋川にかる草の浪もてゆへる色そ涼しき

十一番　寄松述懐

左　御製

今そしる北野の松の陰しけみあまるは神の惠なりけり

右　僧正

住吉の松をいはゝんためしには君の御代をそ引へかりける

十二番

左　實氏卿

あらはれよ松にそ君をとはかりに思そめてし行すゑの色

右　範宗朝臣

黒髪の霜より後も年ふりて松の位の山そはるけき

十三番

左　經通卿

身のうへを思ふね覺の深夜に涙くたくる松の風かな

右　忠定朝臣

おもふ事ちゝに心を木枯の松にくたけてすくる比かな

十四番

左　家衡卿

君か代の猶行末のみれの松おひぬる身こそたのみかたけれ

右　　康光

萬代と分てそあふく玉松のおなしみとりを袖にかけつゝ

十五番

左　　定家卿

花の下紅葉のよそにしほれつゝうき年ふかき松はふりにき

右　　家隆卿

去年の春袖にほしてし松の露猶としあらは身をなしほりそ

右建保五年四月廿日歌合以村井敬義本挍合了

右大將家歌合 建保五年八月十五夜

題

虫聲驚夢　曉惜別戀

作者

左

右大將通光　前大僧正慈圓

藤原朝臣定家　藤原朝臣雅經

右

大納言公經　僧正行意

藤原朝臣家隆　藤原朝臣秀能

講師

讀師

判者

一番　虫聲驚夢

左持　　通光

鈴虫の聲ふるさとの秋の夜はむすふ夢さへおとろかれけり

右　　公經

見る夢を枕のしたの虫の音におとろかされて有明の空

左歌むけにをさなく聞ゆ。右歌有明の空にはかにいてきたり。暫此つかひ持に侍るへし。

二番

左勝　　慈圓

我さへに夢をのこしつきり〲す蓬か袖に秋やふけぬる

右　行意

思ひねのあふ夢やふる虫の音はうさも哀もおなしかりけり

左歌初句をさなく聞ゆ。右歌思ねのあふ夢とつゝきたるいかにそや侍。やふるおそろしく聞ゆ。左歌すこしはまさり侍らし。

三番

左　定家

秋の夜の夢をそ覺すきり〳〵す小萩かもとの曉のこゑ

右勝　家隆

草枕結ひもはてぬ夢路よりうつゝにかへる松むしのこゑ

左歌すこしくたけて聞ゆ。右歌優也。可ㇾ爲ㇾ勝。

四番

左勝　雅經

夜もすから夢の枕のきり〳〵す覺てもおなし音をのみそ鳴

右　秀能

きり〳〵す語らふ聲は身にしみて夢もしところの萓か下ふし

左歌初五文字てつゝにをかれたり。右歌優に聞え侍るを。きり〳〵のかたらひ。耳に立てきこえ侍れは。猶以ㇾ左爲ㇾ勝。

五番　曉惜別戀

左持　通光

今はたゝかされぬ妻となりなはや哀は袖の露もよしなし

右　公經

あけゆけは月も色ある心ちしてかへる空なきわか涙かな

左歌かへる朝の露うるさしとて。かさねぬ妻となりなはやとねかはむ事あまりにや。又後朝の戀にて。曉の心みえす侍。右歌月も色ありと。何樣にあるへきそや。下句ふるめかし。此つかひ持に侍なん。

六番

左持　慈圓

鐘の音は宵とも思なすへきをそゝやまことの鳥そ鳴なる

右　行意

待兼てあふ嬉しさはしりぬらん歸るあしたの袖を見せはや

左歌曉のかねを宵と思なさん事。まことしからすこそ聞え侍れ。右歌あふうれしさは知ぬらんといへる。心をやりて侍。左は別の心なく。右は偏に後朝なり。なすらへて持とす。

七番

左勝　定家

めくりあはむほとをもしらぬ別路は名殘のみこそ有明の月

右　家隆

涙さへとまらさりけり曉のわかれはおしきこゝろなれとも

左歌尤優也。右歌心えぬさま也。左尤可ㇾ爲ㇾ勝。

八番

左持　雅經

もろともにおしみかねぬる別かな涙の袖にありあけの月

右　秀能

あけぬとていそく別を消かへりおれはたもとの露そ悲しき

兩首とも優にみえ侍。勝負所ㇾ難ㇾ定也。可ㇾ爲ㇾ持。

右右大將家歌合以古寫一本挍合了

右大臣家歌合 建保五年九月

題

夜深待月　故郷紅葉　河邊擣衣　行路見戀
山家夕戀　羇中松風

作者

右大臣(道家)
參議治部卿定家卿　參議左近衞中將實氏卿
前丹波守知家卿　宮内卿家隆卿
丹後守範宗朝臣　右兵衞督雅經朝臣
備前守家長　中務權大輔信實
兵衞内侍

判者　衆議判　後日治部卿書判詞

一番　夜深待月

左勝　右大臣

ふくる夜は惜みし月のまたれても山のは計りうき物はなし

右　治部卿

夜を重ねたゆまつひ〔す歟〕さに詠つる山のはおそき月を戀つゝ

左心も珍姿ことは殊宜由各申ν之。右もちかくあるさま也なと。頻に定られ侍しかと。たゆますひさにといへる。殊きゝにくゝ侍へし。作者も優なりとは。よもおもひ侍らし。只風情つきても讀さらん事を申なんとかまへたるにて侍らむ。尤左勝とさため申侍にき。

二番

左勝　宰相中將

長き夜の秋さへいたく更ぬらし待出る月のかはるおもかけ

右　知家朝臣

大方の秋も更ゆく夜半の空待にものうき山のはの月

兩首いつれもいうにこそ侍るめれと。申いたし侍しに。待に物うきことは。いかによめるそと侍しかは。秋も更行をおしむとて。月待心もをこたるにや侍らんと申侍しを。人々ものうくは月に志なくやと定申され侍しうへは。左いと宜みえ侍れは。勝と定られ侍にき。

三番

左　宮内卿

あきかせに更ゆく星のかけさへに心もよほす月をまちつゝ

右勝　雅經朝臣

まち出てもいつかなかめん久堅のあまり深ぬる山のはの月

兩首又いと宜承由侍りき。更行星の影さへ心催すらん。月待ほとの空のけしきも。まことにさこそ侍らめと。頻に申侍しかと。いつかなかめん久方のあまり更ぬるといへる詞つゝき。猶ことに宜とて。右可ν勝由申うけられ侍りき。

四番

左持　範宗朝臣

いてかての月待空も更ぬれはみしかくのこる曉そうき

右　兵衞内侍

有明になりゆく月のいてかては待よひ過て更る山のは

左右のいてかての月。同し心に侍れは持と定申。

五番

左　信實

山のはの夕闇なからふくる夜の月をかことの空もつれなし

右勝　家長

こからしよ月吹をくれ秋の夜のなかは更ゆく山のあなたに

月をかことのとは。いかになと侍しかと。特にことはりも聞え侍らす。半ふけゆく山のあなた。いとおかしくこそ聞え侍れと申侍しを。あなたにといへるや いかゝなと申侍りしを。あなたをとこそいふへきと方人侍し。まことさは侍へけれと。月をかことおぼつかなしと。右勝に侍き。

六番

左持　故郷紅葉　範宗朝臣

露時雨いく夜をかけて染つらん尾上の宮の秋のもみち葉

右　信實

おひかはる梢もあらすふりにけり檜原の宮の秋のもみち葉

いく夜をかけて染つらん。梢もあらすふりにけり。尾上の宮。ひ原の宮。いつれまさるけちめわきかたしとて。爲レ持。

七番

左　知家朝臣

人とはて秋の木の葉のふる郷に袖をはかれす吹嵐哉

右勝　兵衞內侍

もみちつゝうつろふよりもとふ人の秋はかきりの故郷の色

左の袖をはかれす。えんに宜聞え侍るよし申侍しほとに。右もみちつゝうつろふよりもとをき。とふ人の秋はかきりと侍る。ありかたくおかしくきこえ侍る由。同し心に定申。爲レ勝。

八番

左勝　宮內卿

故郷のみかきか原のはしもみち心とちらせ秋の木からし

右　家長

たをやめの袖は惜ますあすか風紅葉をよそによきて吹なん

右歌袖吹かへすあすか風と云歌をおもへる心。いひしりてはきこえ侍れと。左の心とちらせ秋の木からし。すくれて宜聞え侍れは。左のかちと定申侍りき。

九番

左持　宰相中將

荒果て時雨ふりをける里の名をよそにはからぬ秋の紅葉葉

右　治部卿

うつろひし昔の花の宮古とてのこる錦の色そしくるゝ

左時雨ふりをける里の名宜聞え侍由。頻に申侍しを。右歌もみちと侍らぬいかゝと申をも。きゝいれられす。持と定られ侍りにき。

十番

左持　右大臣

こまなめていさみかの原故郷のもみちは今も秋をしるらん

右　雅經朝臣

ならのはの名におふ宮も今更に時雨ふりそふ秋の色かな

左心詞優に侍るを。駒なへていさみにゆかん古郷はといへる古歌。只四文字かはりたり。不レ珍とおほせられて。ならの葉の名におふ宮。時雨ふりそふ秋の色。殊に宜由沙汰侍しかと。猶持にや侍へからん。

十一番　河邊擣衣

左持　　　右大臣

おちたきつしらゆふ浪に泊瀬めのおのかてつくりうつ衣哉

右　　　知家朝臣

泊瀬河ゆくせをはやき月日かなことしも秋のころも打也

左右の初瀬川。いくはくのかはりめ侍らねと。左はたくみに。右はえんなるさまとり／＼にみえ侍れは。宜持と定れ侍き。

十二番

左　　　宰相中將

里ちかくせく谷川も岩こえてうつや衣の音のさやけさ

右勝　　　雅經朝臣

秋深きよしのゝ里の河かせに岩浪はやくうつころもかな

左の谷川岩こえて衣のをともさやけき。ことはりきこへておかしくみえ侍るを。吉野の里の河風岩浪はやくうつよしの詞のつゝきいひしりて。殊よろしく侍れは。かちとさため申侍りき。

十三番

左持　　　治部卿

こはた川こは誰かためのから衣ころも淋しき槌のをとかな

右　　　兵衞内侍

から衣いまやたつ田の河かせにきぬたのをとも打すさむ也

左めつらしからぬこはたかためよりも。末句無下に見くるしく侍よし。たひ／＼申出侍りしかと。右もことなる事なしと申さるゝ人々侍しかと。槌のをと哉 持や面白侍るへからん。

十四番

左勝　　　宮内卿

霜さゆる河邊のさとに打衣千たひや千とり（たひ家集）聲そあらそふ

右　　　信實

網代木にもみちのにしきかけすてゝ打や衣を槙の嶋人

もみちの錦かけすてゝといへる。こゝろ詞いと宜く侍るを。千たひや千とり。猶たくみにつよき所や侍らんと見侍りしかは。勝へきよし侍りき。

十五番

左勝　　　範宗朝臣

長月のうちの河かせ寒からし槙のしま人衣うつなり

右　　　家長

朝夕の雫にくたす衣手をほさてはいかにうちの河長

左難なし。宜侍るへし。右擣衣の心なし。落題の由各申されしを。いかにうちと云詞。打をすへて侍にやと侍しかと。宇治の河長にて。擣衣に用ひかたしとて。左勝侍りき。

十六番　行路見戀

左持　　　雅經朝臣

思ひをくる心はかりは下おひの道はかた／＼ゆきめくる共

右　　　兵衞内侍

難波なるみつと計りに過やらて袖にはよそのも鹽たれつゝ

下おひのみちは。かた／＼宜由侍りき。右歌も難波なるみつとはかり。よそのもしほたれたる。心優に侍れは。持と定申侍りき。

十七番

左持　　　知家朝臣

わきもこか入野のすゝきほのかにもそれかと迷ふ秋の夕霧

右　信　實

誰となくゆくてにこる山の井もあかぬはしるき影そ移れる

兩首共に宜つかひの由各申て。爲ㇾ持。

十八番

左持　治部卿

露そたくゐての下生さはかりも結はぬ野への草のゆかりに

右　家　長

額みこし契はさてやまとちのゆくてにくみし井手の玉水

左詞のつゝきおほつかなく侍らん。ゐての下おひに露置たりと聞ゆる。理かなひ侍らぬよし申侍き。同し心を思ひよりなから。右はつよく聞え侍るらんとみ侍しを。むすはぬ野への草のゆかりいうなる由。宮内卿申うけられ侍りしかは。爲ㇾ持。

十九番

左勝　宰相中將

いかにみんわけつる道の秋そともしれかし人の野への白露

右　範宗朝臣

しらさりきおつる泪の玉鉾やみちのゆくての袖にみんとは

左いうなる由侍りき。右もことなる難侍らぬを。近き歌ににたる事侍とかや申さるゝ人侍りき。そのうたも又わすれ侍にけり。大方此比。露泪の玉ほこ。常めなれたる由人々申て。左勝侍りき。

廿番

左持　右大臣

道のへの夕きりつもるさゝの葉の結ひもあへす亂かねつゝ

右　宮內卿

しられしな忍ふの衣ゆきすりのひとめはかりに亂れわふ共

兩首共に。艶に宜きこえ侍れは爲ㇾ持。

廿一番　山家夕戀

左勝　右大臣

待人のむなしきゆかを拂ひつゝ身をしる山の夕暮そうき

右　兵衞內侍

額めこしたかなをさりの夕ともわかぬなかめのみ山へのさと

兩首ともにいうなるよし。各被ㇾ申侍りき。右の末句少よはくや侍らんと申旨侍りて。以ㇾ左爲ㇾ勝。

廿二番

左持　宰相中將

つれなきをたかゆふ霜にならひけんわかるゐる山の嶺の椎柴

右　信　實

うき人のまたれぬ宿もありやとて住山本の秋の夕くれ

このつかひ。又いと宜由申侍りき。またれぬやともありやとても。殊いうなりける由被ㇾ申人々侍しかと。つれなきをたか夕霜にとをける。嶺の椎柴。殊に深おもひいれて。まことに宜みえ侍れは。勝負あり難や侍らん。

廿三番

左勝　治部卿

泪せくやともは山にかくろひてあらはにこふる夕暮そなき

右　宮內卿

とはれしとさしてはすます松の門みはてむための秋の夕暮

右歌未きゝわき侍らぬさきに。左勝へき由。宮內卿定被ㇾ申侍しかは。右の歌はうけたまはらてやみ侍りにき。

廿四番

左勝　　知家朝臣

はしたかのと山の庵の夕くれをかりにもとたに契やはする

右　　範宗朝臣

おもひやれこひせぬ人も住わひぬみ山の庵の秋の夕暮

左姿詞まことに宜侍り。右歌はおもひやれみ山のいほの秋の夕暮。うたかひなきわか身のことゝ聞え侍るを。戀せぬ人もすみわひぬといへるは。それも同し人ならは。戀の心なくや侍るへき。隣なとの事ならは。そのよしもなしと各申て。以ㇾ左爲ㇾ勝。

廿五番

左勝　　雅經朝臣

よそにみし雲のはたての夕暮をのきはの山におもひ消つゝ

右　　家長

夕つく夜むかひの岡の草かれにおもふ心も霜に朽つゝ

左宜由各申。夕附夜むかひのおか。水無瀬殿歌合に侍る由。宮内卿頻に申て。左かち侍にき。

廿六番

左勝　　信實

羇中松風

とをさかる松のあなたの故郷をかへりもみよとふく嵐かな

右　　兵衛内侍

たのめてもあけはいなはの嶺の松そなたの風に誰忍ふとて

松のあなた宜侍るらうへに。いなはの岑このころいたく耳なれたる由各申て。以ㇾ左爲ㇾ勝。

廿七番

左持　　知家朝臣

ゆくまゝに木葉しくるゝ山路にも松はかはらぬ風のをと哉

右　　家長

うつりゆくおなし嵐に聲たてゝ野路も山路もたゝ松の風

兩首ともに宜よし一同申。爲ㇾ持。

廿八番

左勝　　治部卿

なれぬ夜の旅ねなやます松風にこのさと人や夢結らむ

右　　雅經朝臣

けふへは又野中の松をともなへとをくる嵐そ遠さかりゆく

左歌又させる故なく可ㇾ勝之由さためられ侍し。是非をわきまへ侍らす。

廿九番

左勝　　宰相中將

みやこおもふ心も空のうき雲に身をわけて吹松の秋風

右　　宮内卿

分きつる山はうらちにかはれともこれも久しき松のかせかな

此番も又ことに宜由各申き。左爲ㇾ勝。

卅番

左　　右大臣

あまの原日も夕しほのから衣はる／＼きぬるうらの松風

右勝　　範宗朝臣

をのつから恨ぬ神もあらしかしかへる野中の松の秋風

左いと宜聞え侍るを。唐衣日も夕くれの心。この比おほくめなれたるよし。仰られ侍りて。右勝と定られ侍りき。

右右大臣家歌合以横田茂語藏本挍合了

四十番歌合 建保五年十月十九日

題

春雨　夏月　秋露　冬風　變戀

作者

左方

知家朝臣　爲家朝臣
宗平　家光
藤原康光　藤原助連
大江康久　御製

右方

範宗朝臣「宗」歟」　伊平
範經　藤原範綱
源兼康　藤原範保
源康茂　兵衞内侍

講師

讀師

判者

御判　隱ニ作者一

一番　春雨

左持　知家

冬かれのよものこのめも春雨に我身つれなき年やふりなん

右　範宗

吉野山ふるさと寒く猶さえて雪氣になるか春の夜の雨

左歌述懷によりてよろしく侍るに。右歌させる難又侍らぬにや。仍爲レ持。

二番

左勝　爲家

詠ても日數ふり行春雨にまた解やらぬ花の下紐

右　伊平

埴姫の霞の衣しほるらむたなひく山の春雨の空

右も指難は侍らねとも。左は今少し髭なるさまにて。爲レ勝。

三番

左　宗平

雨のうちもなくさむ色そなかりける花待山の春の夕暮

右勝　範經

春雨に花散ぬとや鶯の軒端の梅にぬれつゝそ鳴

左歌雨の中もなくさむ色と侍詞。何樣のこゝろに侍るにか。不審程。暫以レ右爲レ勝。

四番

左　家光

をしほ山花のみとりにあらはれて常盤の色を松のむら雨

右勝　範綱

春雨のふる里匂ふ梅かえの花より落る軒の玉水

左下句うけられす侍うへ。右風情ある躰に侍れは。爲レ勝。

五番

左勝　康光

この頃はそれともわかぬ春雨に軒端の梅の花そしほるゝ

右　兼康

をれはまた花の錦もぬきやよはき糸よりかけて春雨そ降
左のそれともわかぬ春雨。何とも侍らす。勝ても侍らね
とも。右の五文字。うけられぬ事多侍にや。其上いとよ
りかくるは。多は柳にそきゝならひて侍。唯花錦斷の糸
あまりの芳心歟。仍て爲レ負。

六番

左持　助連

春雨にまとの梅かえ散にけり色さへ匂ふ軒のたま水

右　範保

雨首爲レ持。

七番

左持　康久

櫻かり猶とめゆかむ春雨にぬるらん花のかけをよそにて

右　康茂

冬枯のよものこのめも春雨にみとりの色にあらはれにけり
左のかけをよそにての詞。なにとなくや侍らむ。右歌末
の句のよはさも。勝へくも侍らねは。爲レ持。

八番

左　御製

まきもくの檜原の山の朝曇り空もみとりに春雨そふる

右勝　〔名欠〕

春雨のふりゆく色と青柳の糸よりつゝく杜の下露
右歌無レ難侍の上。左よりはまさり侍るへし。

九番　夏月

左　知家

をのつから秋のけしきを有明の空にまかへてすめる月影

右勝　範宗

月影をいかにちきりて郭公をのれも雲路よはに出らむ
雨首强の難も侍らす。又持となる事を侍らぬを。聊左の
秋のけしきをあり明のとつゝけられたるや。みゝにた
ち侍らむ。仍以レ右爲レ勝。

十番

左　爲家

夏の夜も雲のかよひち霜さえてたましく庭の月そさやけき

右勝　伊平

郭公かたらひすくる一聲にやかて明ゆく山のはの月
左もあしくは侍らねとも。右は今少し勝へし。

十一番

左持　宗平

夏の夜はまた宵とこそ思ひねの月も心に明る空かな

右　範經

螢とふ野澤の水にすむ月の光もうすき有明のそら
左おもひねの月とつゝけて侍。すこしこゝろゆかすや
侍らん。然る樣ありけに侍うへ。右も指事はんへらねは。
爲レ持。

十二番

左　家光

郭公たゝ一聲の雲間よりなこりにのこる有明の月

右勝　範綱

まつ宵はまたふけなくに有明の光そ出るなつの月影
左歌たゝ有明の月そのこれるといへる歌のこゝろ。お

なしことに侍るか。ことのほかにをとりて侍るにや。右
猿程に侍れは。爲レ勝。

十三番

左勝　康光

夏衣かたしく夜半や明ぬらんうすき袂に殘る月かけ

右　兼康

郭公こゝろつくしのみ山出る月見ぬ人や秋をまつらん

左歌かやうのことはつゝきは。つねの事にても侍とも。
右こゝろつくしのみやまいつる。詞鄕鎭西山かとおほ
ゆる躰に侍。尤うけられすきこゆるうへ。左ほとよりも。
やさしけに侍は。勝侍へし。

十四番

左持　助連

山のはにまた宵かけて出つるにあとよりしらむ夏の夜の月

右　範保

なつかりの芦のかりねのみしか夜によ渡る月の影そ少なき

左いてつるにのことは。如レ此事秀歌なとには中々侍り
やすらむ。さらては少しよはくはへるにや。右歌もさせ
ることなく侍れは。爲レ持。

十五番

左　康久

おしきかなむすはぬ霜を打はらひ袖よりしらむ夏の夜の月

右勝　康茂

郭公たゝ一こゑの名残さえ空にそのこる有明の月

左歌はしめの五文字。樣たゝ事ともおほえ侍らす。たゝ
ゆゝしきこと葉にて侍らむ。聊留レ耳けして侍るを。右
歌例のたゝ有明の月そのこれるにて侍れとも勝へし。

十六番

左持　御製

郭公なく一こゑの程たにも月よりのちのあかつきそうき

右　内侍

時鳥鳴一こゑはしのゝめの月を殘して明る山のは

左右共。めつらしきことも侍られは。なすらへて爲レ持。

十七番

左　秋露　知家

今よりはこの葉ももろき秋風にかつ散るやまの槇の下露

右勝　範宗

たか秋にうつろふ色のかはるらん露の玉まくくすのうら風

右歌ゆうに侍る上。左かつ散ると侍るは。露の事にて侍
にや。こゝにてはかつの字心ゆかす侍れは。まけ侍るへ
し。

十八番

左持　爲家

秋萩の咲やをかへの夕露を誰ため鹿のぬれてわくらむ

右　伊平

秋の田のほなみにむすふ白露のたまゆらみゆる宵の稲妻

兩首ともに。常の事にては侍らむ。よろしき爲レ持。

十九番

左勝　宗平

吹すさふ風より後のしら露も秋はかすそふ宮城野の原

右　範經

をしなへて草のうへ吹秋風に野原の露や消わたるらん

又おなしほとのことにて侍るを。左すこしゆうにきこえ侍は。爲レ勝。

廿番

左　家光

たひ人のあさたつ野への小萩はらおもはぬ袖に秋のしら露

右勝　範綱

末なひきはわけにむすふ白露の玉江のあしに秋風そ吹

左思はぬ袖とはいかなる袖にか。あはれわろく被レ讀侍るものかな。右も五文字頗不ニ落居一見え侍れと。自レ左はまさり侍へし。

廿一番

左勝　康光

人とはぬ庭のかるかやおのれさへ亂てむすふ秋のしら露

右　兼康

秋の月いたらぬ里のたにかけも下草かけて露は置つゝ

兩首持程の事か。但右の下草は。なにゝかけて侍るにか。如レ此事ころによるへきことに侍る。仍以レ左爲レ勝。

廿二番

左持　助連

秋風やあかつきかけて吹ぬらんあくれはもろき萩の下露

右　範保

秋ふかく木末の色もなるまゝに草葉にあまる宮城野の露

左あかつきかけて吹風には。以の外遲くもろき萩の下露にて侍か。右も草葉の露。强に梢の色によるへきこともおほえ侍らす。如レ此歌定聊勝劣侍る。然而爲レ持。

廿三番

左持　康久

道芝の露にそしるき草のはら誰に問ねと秋のけしきは

右　康茂

宮城のや花のひもとく秋ことに千くさにみゆる露の色哉

左歌本歌のこゝろのさることにて。非ニ指秀逸一歟。右もまたよれる所なき見苦ものとこそみえ侍れは。又爲レ持。

廿四番

左　御製

草のはらうつろふからに白露の秋を置てや色まさり行

右勝　内侍

しくるらむ誰かみやまの秋の色に袖のみ染るまきのした露

左秋をきて時こそ有けれといふ歌のこゝろにて侍にや。こゝろゆかぬ躰に侍る上。右不レ及ニ左右一。可レ爲レ勝。

廿五番　冬風

左持　知家

神無月空さたまらぬ村雲に時雨ほとふる峯の松風

右　範宗

津の國の生田のあしのうら枯て風もあらはに冬のきぬらん

兩首共同科にて。

廿六番

左勝　爲家

引かへてまた冬こもる氣色かな時雨をさそふ木からしの風

右　伊平

山風のもみち吹おろす夕暮に曇らて出る冬の夜の月

右嵐ののちのたかねより木の葉くもらて月やいつらんといへる歌のこゝろに侍るにや。然而優には侍を。左上

下にかなひて。尤可ㇾ爲ㇾ勝。

廿七番　　左　　　　宗　平

ふしわひていくよに成ぬ笹の庵や霰吹まく峯の嵐に

　　右勝　　　　範　經

神無月しくれの後のこからしにぬれて散しく峯の紅葉は

左もあしうは侍らねとも。右は今すこし詞つゝきはまさりて侍らん。

廿八番　　左勝　　　　家　光

秋の色は麓のさとに散はてゝ木末むなしき山おろし〔の〕風

　　右　　　　範　綱

沖つ浪よる浦風やさえつ覽けさつらゝゐるしかのおほわた

右のおきつなみと置て。次句による浦風とひきはなれたる。中々無ニ風情一。よそへもきこえ侍らす。けさつらゝゐる。又同前にて。左常の事にて侍らん。爲ㇾ勝。

廿九番　　左勝　　　　康　光

人目さへ冬はかれのゝ山風にそれともみえぬしもの下草

　　右　　　　兼　康

移り行木の葉のこらす吹風にめにはさやかに冬そみえける

右歌定作者の心には秀歌ともや思ひ侍らめと。なとやらんにくゝ侍上。左冬はかれ野の山。風聲霜色叶ニ冬景氣一。尤可ㇾ爲ㇾ勝。

卅番　　左　　　　助　連

夕くれはなにはのあしも霜かれて吹程みえすやへのしほ風

　　右勝　　　　範　保

花のおりもみちの頃はさもあらはあれ雪の木末の峯の木枯

左の吹ほとは。しるにやをよひ侍るへき。いかゝはみえ侍るへき。歌にも有ほとのことをこそとくと取なすことは侍れ。これはあしくみえ侍り。右春花秋葉何浦の江よりも。梢雪嶺嵐只言景氣しろき色は。左にも勝侍るへし。

卅一番　　左勝　　　　康　久

秋の色をはらひはてゝはをのれもや淋しかるらん冬の山風

　　右　　　　康　茂

散る花の春にしられぬ梢まて雪吹まよふこからしの風

左歌右よりはふるまはぬ躰に侍るも。中々勝にてや侍らん。

卅二番　　左　　　　御　製

紅葉葉をあるかなきかに吹捨て木末にたかき冬のこからし

　　右勝　　　　内　侍

千鳥鳴みきはの氷ふみわけて河風さむきうちのさと人

右歌不ㇾ能ニ左右一。爲ㇾ勝。

卅三番　　戀戀　　左　　　　知　家

今さらに我さへかはる心かなまたぬ名をなかめわひつゝ（本のマヽ）

　　右　　　　範　宗

かへり行人の心の色に見し山のこの葉はかはらさりけり

右も本歌心ゆうに侍れとも。左いひしりて侍れは。勝侍へし。

卅四番

左持　爲家

契りこしすゑの松山いたつらに袖さへかけて浪はこえつゝ

右　伊平

人の心うつりにけりな我やとの庭の淺茅生あともなきまて

兩首共よろしき爲ㇾ持。

卅五番

左　宗平

人心たのめてあはぬいつはりに涙の色のかはらましかは

右勝　範經

人心うらかれそむる言の葉に露の契りの何のこるらん

右歌今少し道理かなひて侍れは爲ㇾ勝。

卅六番

左　家光

人しれす心の花そかはりける我身ひとつは春を忍へと

右勝　範綱

いつはりとあたに思し夕暮もたのめしまてのかたみ也けり

左歌戀のこゝろともみえ侍らす。沈淪を愁たる人に聞なされ侍るにや。右も殊事神妙侍れは爲ㇾ勝。

卅七番

左　康光

契りしは仇なりけりと思ふにもいとゝすみうき淺茅生の宿

右　雅康

泪のみ我身しくれの袖のうへにかはる心の色も見えけり

左ゑせ女なとはさこそはと。いとおしく侍上。右ゆゝしけにて。實無ニ指事一。見くるしき物にて侍歟。

卅八番

左　助連

同しくは思ひたえなん言の葉を人つてならていふにかへはや

右勝　範保

いかにせんあふには夢路たえぬれはつらき現に猶歸りつゝ

左歌いふにかへはや。以外平懷㒵。まゝなるすかたも。樣により侍るへし。右尤爲ㇾ勝。

卅九番

左勝　康久

人はいさいく有明を隔つらん契し月のかけは忘れし

右　康茂

思ひきやたのめし暮の空しくてよるの心もかへすへしとは

右出歯大夫辨淵の詞。めつらしけなくや侍らん。左も無ニ指事一侍とも。爲ㇾ勝。

四十番

左　御製

おもひそめし色こそ見えねたけくまの松も昔の秋の夕暮

右勝　内侍

うしとみし契りを夢[　　]覺るはかりのなくさめもなし

右下句殊によろしくみえ侍る上。左むけにおもふところなきやうに侍歟。二首の詞非ニ一口之論一。以ㇾ右爲ㇾ勝。

右四十番歌合以古寫二本挍合

歌合建保五年十一月四日

題

冬山霜　冬野霰　冬關月　冬川風
冬海雪　冬夕旅　冬夜戀

歌人

左方

御製
權大納言右近衛大將源朝臣通光
參議左近衛權中將藤原朝臣實氏
參議治部卿藤原朝臣定家
左近衛權中將藤原朝臣忠定
右兵衛督藤原朝臣雅經
中務權大輔藤原朝臣信實
兵衛內侍

右方

宮內卿藤原朝臣家隆　俊成卿女
丹後守藤原朝臣範宗　八條院高倉
前丹後守藤原朝臣知家
右大臣兼左近衛大將藤原朝臣（道家）
左衛門權少尉藤原朝臣康光
權中納言兼左衛門督藤原朝臣忠信

講師　知家朝臣

判者　衆議　治部卿定家後日書詞畢

歌合

一番　冬山霜

左持　御製

敷嶋やみむろの山の岩こすけそれともみえす霜さゆる頃

右　宮內卿家隆卿

鵲のわたすやいつこ夕霜の雲井にしろき峯のかけはし

左たけ姿難レ及。心詞相叶。まことの秀逸の躰。無二比類一の由。滿座各申。右常の宜歌に侍らは。更にさたに及ましく侍るを。雲井にしろき嶺のかけはし。又凡俗の思ひよるへきやうには侍らすと申出侍を。宮內卿藤原の朝臣。左は萬葉古風。本歌も慥につよく侍へし。右は更にことなる事侍らぬ由。頻にうかゝひ申侍しかと。猶依二天氣一爲レ持。

二番

左持　右大將通光卿

朽のこる木葉すくなき山風にむすひさためぬ霜の下草

右　俊成卿女

そめし秋の露はあらしの山風に木のはの色をうつむ朝霜

兩首歌。左右作者各優なる由申侍りしを。左の初の五文字。理はたかふましき事にあ（侍イ）れと。うち聞たる初に。木の葉のうへとは聞えすや侍らん。長良の橋のはし柱。つゝゐつのむかしの井筒なとならは。さも侍なん。右も。同し五文字もよまぬには侍らねと。なかく聞え侍れは。ことなる至要なきにや侍らん。仍持と定申侍にき。

三番

左持　左中將實氏卿

みむろ山風にまよはぬ木葉哉こほれる霜のむすほほれつゝ

右　　丹後守範宗朝臣

うつり行冬の日かすはつもれとも霜につれなき嶺の常盤木

左右耳にたつところなく。ともに優なる由。をの〳〵申て。無レ難持にて侍るへし。

四番

左勝　　治部卿定家卿

冬の日もよそに暮行山かけに朝霜けたぬ松の下柴

右　　高　倉

神無月たつ田の山のやま姫もそめあへぬまに霜や置らむ

左歌大方の歌のさま。卑下微少の姿に侍うへ。立田山の山姫いと宜きこえて侍由。頻に申出侍しを。宮内卿藤原朝臣殊加レ詞。左可レ勝之由定申。

五番

左勝　　左中將忠定朝臣

散るまてに山の木の葉を染捨てをのれや霜の置所なき

右　　前丹後守知家朝臣

をく霜のみなれぬ色の初瀬山今朝はひ原そうすみとりなる

左右とも難なく。優に侍由。各申侍しうへに。左下句。猶宜聞え侍由。聊申いたして侍しかは。勝に定られ侍にき。

六番

左　　右兵衞督雅經朝臣

山かせにみむろの木のまもる霜の下草かけて冬は來にけり

右勝　　右大臣

夜をかさね山路の霜もしらかしの常盤の色そ冬なかりける

此つかひことに宜聞え侍る由。又各申侍しに。宮内卿。いまの白かしの冬の色。昔の柿本の姿をのこせる由申て。勝とさためられ侍にき。

七番

左勝　　中務權大輔信實

菅の根もうつろひかはる冬の日に夕霜いそく山の下草

右　　左衞門權少尉藤原康光

泊瀨山おのへの鐘や更ぬらんひ原にしろき夜半の初霜

兩首優に侍る由。末さまには各申侍しかと。右の初霜。おほかたの霜の名に讀ならはして。冬のうたにも多く侍れは。猶いかゝなと定られ侍て。左下句優なるによりて。かち侍にき。

八番

左持　　兵衞內侍

そめはてし木の葉のあとの立田山をのれ色なき嶺の朝霜

右　　左衞門督忠信卿

足曳の山かつらかき散はてゝ霜のふりはに殘る色かな

左歌其難侍らす。右のうた。山かつらかき。座に當て當學老。左もともにおほえ侍らぬ由は申侍しかと。ちからいれたるさまにやとて。なすらへて爲レ持。

九番

冬野霞　　御製

左勝

むさし野の草はみなから埋れて霞にのこるさゝのをと哉

右　　家隆卿

やたののに霰ふりきぬあらち山あらしも寒く色かはるまて

左義實文章相兼て。珍重殊勝之由。各申也。右歌矢田野の淺茅。今更にあられの色にかはれる心。珍面白もみえ

侍るを。わさとよめるに侍るめれと。あらち山あらしそ。
同字多侍ると申て。彌以レ左爲レ勝。

十番

左勝　通光卿

木枯にはらひはてたる宮城のの萩のふる枝にあられふる也

右　俊成卿女

濡侘ぬあはてこし夜の袖よりもさゝわくるのへに霰ふりつゝ

左無二其難一。右あられも消行まゝにぬるましきものには侍らねと。秋の野にさゝわくる袖よりまさらん事かたくやと。人々申侍て。以レ左爲レ勝。

十一番

左　實氏卿

露も又あられにかはる衣手にぬれぬ玉ちる小野のしの原

右勝　範宗朝臣

露をかぬかれ野の冬の白玉は風にみたるゝあられ成けり

左右宜由。末さまに申侍りしを。ぬれぬ玉といはん事。あまりにかはきてや承旨侍し。理極て。以レ右爲レ勝。

十二番

左勝　定家卿

あまつ空たかぬく玉にをたえして霰みたるゝ野への篠原

右　高倉

あたし野のお花をしなみ吹風に霰もなひく空の浮雲

右いとおかしくみえ侍を。左可レ勝由。各定られ侍りき。

十三番

左持　忠定朝臣

枯野なる草の葉しほる山風に薄にたまる霰おつなり

右　知家朝臣

花すゝき枯野の草の袂にも玉ちるはかりふる霰かな

左のすゝきにたまるあられ。珍しくおかしく聞え侍りしを。右の草の袂たまちるはかりなといへる。殊宜とて持と定申。

十四番

左持　雅經朝臣

うたの野や宿かり衣きゝすたつ羽音もさやに霰ふる也

右　右大臣

ぬれつゝもしゐてとかりの梓弓末の原野にの霰降らし

宿かり衣きゝすたつ。かやうに云つゝけたる歌のすかた。あまりにくさりすくしたるも。頃日おほく聞え侍れと。これはわさと雉子よく侍由申侍しに。右またちから侍らんと。各申て。爲レ持。

十五番

左持　信實

吹とめぬ風もよこ野のかたよりに降や霰のくたけてそ行

右　康光

風による野への玉さゝうちさやき今宵はいたく降霰哉

こよひはいたく降あられ。おさなく聞ゆとさた侍しに。ふるやあられも。やすらかならすや侍へきと申て。又爲レ持。

十六番

左持　兵衞内侍

なかめゆく末野の原の霜かれにたまらぬ色は霰なりけり

右　忠信卿

しめし野の霞の玉にみかくれてうすみとりなる冬の下草
左のたまらぬ色。いと宜侍る由。各申。右のみかくれて。水のあたりにやなへていひならはしたると申人々侍しかと。俊頼朝臣。たまくしのはにみかくれてもすの草くさめちならすとも申歌侍るよし申出し侍。左猶歌さまいうなりとて。爲レ勝。

十七番　冬關月

左勝　御製

風さむみよはの衣のせきもりはねられぬまゝに月やみるらん

右　家隆卿

さゐのほる須磨のうらはの冬の月關はもしほの煙たになし
夜半の衣の關守。昔今たれもなとかくおもひより侍らさりけむと。各今更に遺恨をさへなし侍れは。左爲レ勝。

十八番

左勝　通光卿

神無月こほれる月の影みれはひとりはすまぬ不破の關守

右　俊成卿女

須磨の關浪風寒みさよ千鳥更行月に聲うらむ也
右下句。常にきゝなれたる由。各申て。以レ左爲レ勝。

十九番

左持　實氏卿

殘りける月のひかりのおくもみつ雪にやとかる白川の關

右　範宗朝臣

嵐吹きよみか關の波のうへに時雨て晴る冬のよの月
左歌のこりける月のひかり。その故おほつかなきよし難申。右歌姿宜難なき由はさた侍しかと。左の殘の詞。當時のことを賞する時。かやうの事例おほく侍へし。明月の景氣優に侍るよし申て。爲レ持。

廿番

左持　定家卿

忘れめやみかく氷はとちそへていつる關戸のあくる月かけ

右　高倉

降つもる雪をさなから照す月こよひなりけり白川の關
右の今夜成けり白川の關。いひしりて殊宜侍るうへに。左の上句。題外の氷詞。くたけてきゝにくゝや侍らん。又いつくの關とも聞えす侍由。頻に申侍しかと。當座の勝負を定られ侍らす。實に後覺の不審を殘し侍歟。

廿一番

左持　忠定朝臣

あふ坂は冬まてあをき杉の葉に時雨もしらぬ月そうつろふ

右　知家朝臣

逢坂やかはらぬ杉の下かけに月は冬ともわかれさりけり
左右又優に無レ難由。各申〔す〕上に。逢坂の杉の葉の時雨もしらぬ。冬ともわかぬ。同し樣の事に侍れは。爲レ持。

廿二番

左持　雅經朝臣

清見かた月かけこほる冬のよにをのれたゆまぬ浪の關守

右　右大臣

月影のあらしをさむみ出るより衣の關の色にみえつゝ
此つかひ。又持に定られにき。

廿三番

左勝　信實

須磨のうらに秋をとゝめぬ關守もゝのこる霜夜の月はみるらん

右　　　　　　　　　　　　　　　康　光

あれにける不破のせきやの跡みえて月影わたる木枯の風

秋をとゝめぬ關守。のこる霜夜の月をみる心宜とて。爲ㇾ勝。

廿四番

左持　　　　　　　　　　　　　　兵衛内侍

須磨の關かよふ霜夜の友千鳥月にうらみて聲かへる也

右　　　　　　　　　　　　　　　忠信卿

風さゆる關のわらやの跡ふりて誰すむ閨に月やとるらむ

左は千鳥。させるめつらしけなく。右は誰かすむねや。又よしなしとて。爲ㇾ持。

廿五番　　冬川風

左持　　　　　　　　　　　　　　御　製

山河の木のはののちの薄氷これもかけたる風のしからみ

右　　　　　　　　　　　　　　　家隆卿

立田川木のはの後のしからみも風のかけたる氷なりけり

兩首。木の葉ののちの。只同し心に侍るを。これもかけたる風のしからみは。風のかけたる氷成けりと云はてたるに。殊外にきこえ侍る由申て。各勝と定申侍りしかと。持字を被ㇾ付侍ける。

廿六番

左持　　　　　　　　　　　　　　通光卿

みなと川霜吹まよふ山かせ（おろしイ）にはねうちしほれ鳴千鳥哉

右　　　　　　　　　　　　　　　俊成卿女

はし姫のまつ夜むなしき床の霜はらふもさひし（むイ）うちの川風

ともにさせる難なしとて。爲ㇾ持。

廿七番

左持　　　　　　　　　　　　　　實氏卿

宵のまはこほらぬ水にみし月も更てへたつるさほの川風

右　　　　　　　　　　　　　　　範宗朝臣

さゆる夜の松風わたる山川はこほれと浪の聲そ聞ゆる

左の更てへたつる。おほつかなしと申人々侍しかと。氷にやとれる月影。氷をへたつらん。理たかふましく侍れは。持と定申。

廿八番

左持　　　　　　　　　　　　　　定家卿

山風の岩瀬吹こすをとは川いそくみなわに暮るゝ年かな

右　　　　　　　　　　　　　　　高　倉

山川にかけしもみちはあともなし氷にかふる風のしからみ

右又廿五番同心に侍れは。いと宜聞え侍由申侍しを。氷にかふる。すこし耳にたつと申人侍て。持に定られ侍き。

廿九番

左持　　　　　　　　　　　　　　忠定朝臣

水鳥のあをはやましる立田河浪染のこす嶺の木からし

右　　　　　　　　　　　　　　　知家朝臣

浪の上に氷あらそふ水鳥の鴨のかは風さゆる夜半かな

左。水鳥の青羽にもみちの浪そめのこせる心。み所ありて見え侍を。右も。川かせ水鳥又同心優に侍れは。をの〳〵持と定申。

卅番

左勝　　　　　　　　　　　　　　雅經朝臣

このころは時雨も雪もふる郷に衣かけほすさほの川風

右　右大臣

吉野川きよきからちの山風にこほらぬ瀧もよるはさえつゝ

右のきよき河内も。たけあるさまには侍れと。左の衣かけほす。猶宜侍由各申。爲ㇾ勝。

卅一番

左　信實

川の瀬に紅葉をくたすおひ風のしはしもかけぬ冬のしからみ

右勝　康光

吹風にみきはや遠く氷らむ川瀬の浪のをとそすくなき

追風冬のしからみ。風のよしにくゝ侍て。右下句優に侍れは。可ㇾ勝由を申。

卅二番

左　兵衞內侍

月すめはむすふ氷もきよ瀧のせゝにたまらす河風そ吹

右勝　忠信卿

おもひ川たえす流るゝ水鳥のをのか羽風も嵐ふく頃

左ことなる事なく。させる難なし。右本歌の詞三句に及て侍れと。下句殊宜聞ゆとて。勝と定られ侍りき。

卅三番　冬海雪

左　御製

風さむみ日かすもいたくふる雪に人やはおらんいせの濱荻

右勝　家隆卿

和田の原八十嶋しろく降雪のあまきる浪にまかふ釣舟

人やはおらんいせの濱荻。風雪の景氣。詞尤妖艶。有かたく珍見え侍るを。釣舟のあまきる浪にまかひて。わたの原八十嶋白き眺望。秀歌の姿又心にまかせてつかまつれる由申侍しを。右に可ㇾ勝由天氣侍き。

卅四番

左持　家隆卿

あま衣ひも吹かへすしほ風にたまらてさゆる雪のしら浪

右　俊成卿女

さえわたる嶺の雲よりこしの海のそことも浪の雪の鹽風

朝な夕なにかつきするあまの衣。ひもゆふためしありかたくやと申人侍りき。嶺の雲よりこしの海。そこともなく浪。まことにふりまかひては侍らめと。そこともみえわかれ侍らねは。持とさため申。

卅五番

左　實氏卿

雪つもる沖津嶋ねの小松原くたけし浪の色そかへらぬ

右勝　範宗朝臣

ふりしけとたまらぬ雪のなみの上に一むら積る浮しまの松

左させる難も聞え侍らす。右優なりと申人々侍りて。爲ㇾ勝。

卅六番

左　定家卿

住吉の浪にうつろふ松の雪ふらすはなにを花とかもみむ

右勝　高倉

さとのあまのさためぬやとも埋れぬよする渚の雪のしら浪

住吉の松。遠海のなみなきをはなとみすとも。その恨侍らし。よする渚の雪の白浪。いとおかしく聞え侍れは。右勝と定め申。

卅七番

左持　忠定朝臣

浪のうへにむら／＼雪そ積りけるそれとはみえす蜑の釣舟

右　知家朝臣

あまのすむさとのゆくゑを恨ても知ぬはま路の雪の夕暮

釣舟の姿はみえす。浪のうへに雪のつもれる風情。妖艶に珍みえ侍を。さとの行衛を恨ても しらぬ濱路といへる。詞のつゝき。えんに宜侍れは。持と定申。

卅八番

左持　雅經朝臣

里かよふあまのとまやの跡たえてたれとなくさの濱の白雪

右　右大臣

海原や釣する沖にふる雪のあまきる衣うちはらふらむ

たれとなくさの濱の白雪。いひしりて宜きこえ侍れと。うな原や釣する沖。歌たけ侍る由各申て。無ニ勝負一。

卅九番

左持　信實

たこのあまの宿迄埋む富士の根の雪もひとつに冬は來に鳧

右　康光

あまの原雪ふりよする浦風にしほひのかたやさえ増るらん

左右共に優なる由申て。又爲レ持。

四十番

左勝　兵衛內侍

こきかへるたなゝし小舟みちもなし難波のあしの雪の下折

右　忠信卿

をしなへてたれかはとはん松嶋やいそへの山の雪の下おれ

難波のあしの雪の下おれ。いと宜きこえ侍る由。一同に申て。爲レ勝。

四十一番　冬夕旅

左持　御製

ぬれきつゝとふへき山の夕くれもおなし時雨の末の白雪

右　家隆卿

さえ暮すさやの中山なか／＼にこれより冬のおくもまさらし

ぬれきつゝとふへき山の夕くれ。時雨の雲めくりあへる心。かきりなくおかしく聞え侍由。滿座申侍しを（にイ）。これより冬のおくもまさらし。殊勝之由天氣侍りて。右の勝と被レ仰侍しを。宮內卿懇切に持之由を申。

四十二番

左持　通光卿

かち人のぬれぬ（くイ）とたのむ宿なれや契らぬ雪の末の松（山イ）のは

右　俊成卿女

はかなしやしは折くふる夕けふり宿とふ旅の空のしるへも

左のちきらぬ雪。おほつかなきよし。人々申て。右もことなる事なしとて。爲レ持。

四十三番

左勝　實氏卿

歸りみる空もそなたにさえくれて時雨ぬ山もしほれてそゆく

右　範宗朝臣

こえくれてたのむ山路の常盤木の下もはけしく吹嵐かな

左歌させる難なく侍しかとしくれぬ山もしほれてそゆく。可レ勝の由定申。

四十四番

左勝　定家卿
引むすふ草もしも夜の故郷はくるゝ日ことに遠さかりつゝ
右　高倉
柴の庵の山風つらき冬の日をくれすはよそに見てすきなまし
右歌。心姿いとおかしくみえ侍るを。依二天氣一。以レ左爲レ勝。
四十五番
左　忠定朝臣
降くらし山路まよはす雪まより夕日はうすき遠のしら雲
右勝　知家朝臣
冬の日のゆくほともなき夕暮に猶里とをき武藏の原
微陽之短晷雖レ無レ程。長途之遠望猶不レ盡。殊宜之由各申也。爲レ勝。
四十六番
左　雅經朝臣
晴くもり時雨る空やくれぬらん日かけもいそくさやの中山
右勝　右大臣
夕暮の雪けの雲を吹風のめにみぬかたやあすの通路
日かけもいそくさやの中山。ことに宜聞え侍るを。吹風のめにみぬ方。猶珍や侍らんと申人々侍りて。勝と被レ定。
四十七番
左持　信定
折しけはかつ散る山のなら柴のなれぬ夕をふく嵐かな
右　康光
冬の空くるとはいそけ道芝のむすふ枕はいつくなりとも
なら柴のかれぬ夕。いひしりて優に侍れと。道芝に結ふ枕も無レ難由申て。爲レ持。
四十八番
左勝　兵衞内侍
とひわふるけふりの末もはてそなき雪けの山の奥の夕くれ
右　忠信卿
草枕しのの衣の夕しくれいかなる色をわきて染むらん
けふりの末もはてそなき。優に宜由各申て。爲レ勝。
四十九番　冬夜戀
左勝　御製
冬草のかれにしあとはかひもなし人の心のなかき夜の霜
右　家隆卿
待人の庭の木のはも衣手もかれて朽ゆく夜な〳〵の霜
右衣手庭の木葉。かれたるものはおほくみえ侍れと。左冬草はかりにて。人のこゝろと侍る。おなし霜も深き色ことにみえ侍れは。一同に申二左勝之由一。
五十番
左持　通光卿
消わふる霜の衣をかへしても見るよまれなる夢の通ち
右　俊成卿女
忘れしの契は夢のかたみたに涙のこほる袖の月かけ
兩首ともに優に侍由。各申。可レ爲レ持。
五十一番
左　實氏卿
月も猶つれなき人のかけとめよ冬もこほらぬ袖の泪に
右勝　範宗朝臣

つらかりし人の心やかよふらん月もよかるゝ霜の冬草
左もすかた優に侍るを。右月もよかるゝ霜の冬草。猶深くおもひ入たりとて。爲㆑勝。

五十二番

左　定家卿

雪もよの鐘の音こそつれなけれとはるはかりの契やはまつ

右勝　高倉

なかき夜に衣かたしき臥わひぬまとろむほとの泪ならねは
鐘の音こそつれなけれ。むけにたゝ事にてこそ侍るめれ。雪もよも。きゝよからすや侍らん。右詞甚美麗にて。凡又不㆓停滯㆒。尤可㆑勝由定申侍き。

五十三番

左勝　忠定朝臣

かたしきの袖ゆく水のうす氷思ひくたけていく夜ねぬらん

右　知家朝臣

中々にこぬ夜ふけ行槇の戸をとはてもすくる時雨なりせは
こぬ夜更行も。心あるやうには侍るを。袖ゆく水の氷くたけたる心。殊宜とて。爲㆑勝。

五十四番

左勝　雅經朝臣

涙せく袖の氷をかさねても夜半の契は結ひかねつゝ

右　右大臣

またしらぬ道の冬草ふみからしまつらん里にさよや更ぬる
右も優に侍るを。左の袖の氷をかさねても夜半の契むすひかれたる心。猶すくれ侍由各申て。爲㆑勝。

五十五番

左　信實

呉竹のふしておもひの長き夜も埋れまさる雪のやとかな

右勝　康光

今更に人の心もたのまれすまたてやねなん寒き霜夜を
左呉竹のことなるふし侍らす。右優なるよし侍れは。勝と定申。

五十六番

左勝　兵衛内侍

なみた川袖ゆく水のこほるよりうきねの床の夢は結はす

右　忠信卿

たつぬへき道たにつらき山鳥の尾上の霜にふしやわつらふ（ふらんイ）
右の歌。ことなる難ならねと。左の詞姿ありかたくおかしくみえ侍れは。滿座申㆓可㆑勝之由㆒。

延慶三年十一月二日書㆑之。　判

右建保五年十一月四日歌合以古寫二本挍合

歌合 建保七年二月十一日當座卒爾

題

春風　春雨　春月　春雪　春野

春山　春水　春里　春戀　春祝

作者

左

御製　左近權中將藤原朝臣爲家

右近權少將藤原朝臣伊平

右

宮內少輔藤原光經　大膳亮藤原範綱

左衞門權少尉藤原康光

講師

讀師

判者

一番　春風

左勝　女房順德院

やたの野の雪まの草の朝みとりなひかぬ色に春風そ吹

右　光經

朝日さす山の白雪消そめて霞にゆるき春の風かな

二番

左持　爲家朝臣

花の香をおのか匂に先立ていく木の梅を風さそふらん

右　〔康光〕

大かたはしろへともなき谷風にさそはれ出る鶯のこゑ

三番

左　伊平朝臣

青柳の糸もとをゝの春風にひとりみたれぬ朝霞哉

右勝　範綱

霞つゝ吹としもなき春風におのれこほれて匂ふ梅かえ

四番　春雨

左勝　女房

池水の汀の柳露ちりて浪にしくるゝ春のむら雨

右　光經

かきくらし木の目春雨ふる時はみとりにぬるゝ山の色かな

五番

左　爲家朝臣

をしなへて四方の木のめも春雨にまつあらはるゝ青柳の糸

右勝　康光

春雨にぬれてをおらん人しれす待し櫻の花の下陰

六番

左勝　伊平朝臣

山陰やつれなく殘るあは雪も跡たえはつる春雨そふる

右　範綱

深山への木のめも今は春雨にぬれつゝもゆる野への若草

七番　春月

左持　女房

春はなを霞にけりな久堅の月のかつらも色かはるまて

右　光經

尋きてみる人やなき花咲ぬ朽木の杣の春の夜の月

八番

左持　為家朝臣

松風も霞にむせふ高根よりほのかに出る春の夜の月

右　康光

香をとめておらはやおらむふかき夜の霞る月に匂ふ梅か枝

九番

左持　伊平朝臣

志賀のあまの鹽やく煙消ぬれと春はおほろの浪の上の月

右　範綱

武蔵野やなかむる末の山のはに麓かすめる春の月影

十番　春雪

左勝　女房

春日野の若菜もしろくふる雪に春の衣のぬれぬ日はなし

右　光経

雪降はみ山や寒きしからきの外山にいつる鶯のこゑ

十一番

左勝　為家朝臣

春日野やけふさへ雪もふりはへて袖白妙に若菜つむらし

右　康光

咲そむる花かとそ見るかたをかの小松か原にふれるあは雪

十二番

左持　伊平朝臣

百千鳥こゑは春めく空なからそれかと殘る谷のうす雪

右　範綱

若菜つむ我ころも手も白妙の雪をまかへて打はらひつゝ

十三番　春野

左勝　女房

誰しかも野へに心のあくかれてそこともいはぬ花を見る覽

右　光経

あさな／＼きゝす鳴なりむさし野の霞のうちに妻やこもれる

十四番

左勝　為家朝臣

末とをき野たのすくろに立雁の行衞もかすむ春の空かな

右　康光

草枕またやむすはん春の日のかすみてくらす武蔵のゝ原

十五番

左勝　伊平朝臣

をく霜のいく重か下にかれはてし野へも緑に春はきにけり

右　範綱

いつしかともえ出ぬらし春日野の飛火ののへの春の若草

十六番　春山

左勝　女房

白雲や花よりうへにかゝるらむ櫻そたかきかつらきの山

右　範綱

花なれや遠かた霞む山のはに月もへたてぬ春の白雲

十七番

左　為家朝臣

時わかぬ雪間もかすむ富士の山煙や春の色にみゆらん

右勝　光経

吉野山さのみは花もなかりけり人たのめなる峯の白雲

十八番

左　伊平朝臣

三よし野の山の白雲ふみ分て花になれぬる春そへにける
右勝　康光
櫻さく春の山人やまにても花に心やあくかれぬらむ
十九番　春水
左勝　女房
春の田の苗代水にせきかけて谷の小河は雪なかるなり
右　範綱
谷川の岩間の氷かつとけて下行水のかけそうつろふ
二十番
左勝　爲家朝臣
さま〳〵に小田の苗代いそくらし行方しけき山河の水
右　光經
すみよしのあさゝはをのゝ忘水たえ〳〵ならぬ春雨のころ
二十一番
左　伊平朝臣
春風に芦間の氷とけはてゝ野澤の水にかはつ鳴なり
右勝　康光
やちとせをすむへき御代の始とていはひそむる春の若水
二十二番　春里
左勝　女房
山ふきの花のしからみかひもなしとまらぬ春のゐての里人
右　範綱
いたつらに雪とそ花はふる里の吉野の山の春の梅かえ
二十三番
左勝　爲家朝臣
春きても雪けの雲のさむければ煙たゆまぬ大原のさと
右　光經
もしほ燒けふりと人やなかむらん霞棚ひくあしのやの里
二十四番
左持　伊平朝臣
此頃はしほ燒あまもいとまあれや芦屋の里の春の日くらし
右　康光
見わたせはあさけの煙打なひき霞めるかたや深草の里
二十五番　春戀
左勝　女房
いふき山もゆる思のけふりたも霞めるころはしる人もなし
右　範綱
夕されは軒端の梅の移香にぬしさたまらす打なかめつゝ
二十六番
左勝　爲家朝臣
はかなしや春の幾夜をまところまて夢より外に猶たのみつゝ
右　光經
春の日のなかき契りやすかのねの枯にし色に消るあは雪
二十七番
左勝　伊平朝臣
きえぬともしらしな人は谷ふかみ下行水の春のあは雪
右　康光
をしなへてかすめる比のしほかまはいつれ思の煙なるらん
二十八番　春祝
左勝　女房
神風やあまてるかけの春の日になかき契を猶むすふらし
右　範綱

長き日の千とせのかすと今年より春くはゝれる君か御代哉

二十九番

左持　爲家朝臣

雲そなき春の朝日もさしはへて三笠の山のかけそのとけき

右　光經

君そ見む常磐堅磐の色なから松と竹との萬代の春

三十番

左持　伊平朝臣

色かへぬときはの松の陰よりも君か千とせの春にあふころ

右　康光

幾度か折てかさゝむかきりなき雲井の松の春の初花

右建保七年二月十一日歌合以古寫一本挍合

歌合 建保七年二月十二日當座

題

深山春　夕歸鴈　水郷秋

被知戀　曉更戀　朝野鹿

作者

左

御製　左近衞權中將藤原朝臣爲家

右近衞權少將藤原朝臣伊平　兵衞内侍

右

中宮亮藤原朝臣範宗　宮内少輔藤原光經

左衞門少尉藤原康光　大膳亮藤原範綱

講師

讀師

判者

一番　深山春

左勝　女房

奥山の岩根の櫻いたつらに人もおしまぬ花やちるらん

右　範宗朝臣

白雲のたつきもしらぬ山櫻いつれの代よりまかひそめけん

二番

左勝　爲家朝臣

降つみし松の白雲猶きえて深山は春の色そつれなき

右　康光

春やときまた雪ふかき奥山の檜原にかすむ明かたの空

三番

左勝　伊平朝臣

白雲の消にし日より吉野山すゝの下草春をしるらし

右　範綱

春きぬとあくかれ出る深山へは去年みし花そしほり成けり

四番

左持　兵衛内侍

深山へやいつより花の散ぬらんまかひし雲の色そみたるゝ

右　光経

春霞たちにし日より青柳のかつらき山そみらく少き

五番　夕歸鴈

左持　女房

夕まくれ空もみとりに行雲のたえまにみゆる春のかり金

右　範宗朝臣

夕かすみわたるつはさの色までもみとりに歸る春の鴈かね

六番

左勝　爲家朝臣

歸るさのかりの羽風もうつもれぬ霞む末野の夕暮の空

右　康光

山たかみゆふゐる雲にかすみつゝ歸やかりの聲そすくなき

七番

左勝　伊平朝臣

山人も家路をいそく夕暮に尾上の雲をかへるかり金

右　範綱

遠さかる數さへ霞む春の日の夕ゐる雲にかへる鴈かね

八番

左　兵衛内侍

おほよとの松にもつらき夕へ哉見るめをよそに歸るかり金

右勝　光経

夕暮にいつくをさして歸る鴈霞のうへを(にイ)遠さかるらん

九番

左勝　水郷秋　女房

山河の岩行浪のわきかへりしはしはよとむ秋のもみちは

右　範宗朝臣

風の音に宇治のはし姫分て猶秋やま袖に浪も立らん

十番(判欠)

左　爲家朝臣

くるゝより月やとるへき氣色かな池のうき草秋風そふく

右　康光

水の音の行瀬もみえぬ秋きりにたえ／＼おとす宇治のはし姫

十一番

左持　伊平朝臣

朝日山みねの紅葉の色みえて浪も秋なるうちの里かな

右　範綱

立田川木の葉なかるゝたえ／＼に浪には月の影そ色そふ

十二番

左　兵衛内侍

龍田河秋行水はよとまねと散らぬかけせく風のしからみ

右勝　光経

秋霧のふかき夕にせり河の千世のふる道誰たとるらん

十三番　朝野鹿

左持　女房
色かはる野路の萩原あさな／＼露分なるゝさをしかのこゑ
右　範宗朝臣
朝露に置もとまらてさをしかのいる野の薄秋風そふく
十四番
左持　爲家朝臣
秋萩の咲ちるをのゝ朝露にぬれてや鹿の妻をこふらん
右　康光
さをしかの涙ももろき朝露に妻こひ（とイ）わたるをのゝ篠原
十五番
左　伊平朝臣
朝露のおくのゝをのゝ小萩原かくろひて鳴さをしかのこゑ
右勝　範綱
宮城野やしからむ萩の朝露に涙もぬれて鹿そ鳴なる
十六番
左　兵衛内侍
旅人のいる野の袖のあさ露による鳴鹿の涙なやをく
右勝　光經
朝霧のふかき野原にたつ鹿のをのれとぬれて鳴ぬ日はなし
十七番
左　被知戀　女房
しられてもかひやなくさの浦にほすみるめのよその袖にかけつゝ
右勝　範宗朝臣
をのつから夢にみえけん面影をそれとはかりは今やしるらん
十八番
左勝　爲家朝臣
いかにせんさのゝ中川中々に流てしたに思ひたえなて
右　康光
すくもたくむろのやしまの夕煙むせふ心を人にしらせよ
十九番
左持　伊平朝臣
思ひかねけふこそ人にしらすけのまのゝ萩原色にいてつゝ
右　範綱
いひそめし言の葉よりそ人もうき只われからの思ひ成けり
二十番
左持　兵衛内侍
せきあへぬ涙もさらぬ枕よりまたしる袖になをやかこたん
右　光經
たちにける我下もえの夕煙心にけたぬ時のまそなき
二十一番
左持　曉更戀　女房
思ふともしらてや人のなかむらん我のみぬるゝ有明の月
右　範宗朝臣
曉のね覺の袖のほとはかりうさもつらさも思ふものかは
二十二番
左勝　爲家朝臣
曉は猶うしとてもいかゝせん逢みぬさきの別ならねは
右　康光
物おもふね覺の床にうちそへて猶うらめしき曉のそら
二十三番
左持　伊平朝臣
袖のうへにぬるゝかほなる影もうし別しまゝの有明の月

右　　　　　　　　　　　　　　範綱

をのつからぬる夜明行鐘の音にむすひもはてぬ夢の面影

二十四番

左　　　　　　　　　　　　　兵衛内侍

身にそへるうき面影の別よりこれをかたみの有明の月

右勝　　　　　　　　　　　　光經

有明の月をその夜の形見にてなくさむほとの契たになし

右一帖。以二寫本一委加二一挍一畢。

應永二十七年卯月日　　　　　　前上總介

右建保七年二月十二日歌合以二本挍合

群書類從卷第百九十八

和歌部五十三歌合十九

石淸水若宮歌合寛喜四年三月廿五日

題

河上霞　暮山花　社述懷

作者

左方

正二位行權中納言藤原朝臣定家
正三位行權中納言藤原朝臣家光
參議正三位行右兵衞督兼伊豫守藤原朝臣爲家
正三位藤原朝臣家隆
正三位藤原朝臣知家
從三位藤原朝臣範宗
散位正四位下藤原朝臣行能
從四位上行右近衞權少將藤原朝臣伊成
從四位下行右近衞權少將兼周幡守藤原朝臣親氏
從四位下行右近衞權少將藤原朝臣賴氏
散位從四位下藤原朝臣顯氏
正五位下行治部權少輔兼春宮權大進藤原朝臣經光
正五位下中務權大輔藤原朝臣爲繼
從五位上行侍從藤原朝臣隆祐
正六位上行左兵衞權少尉源朝臣家淸
法印大和尙位昭淸
正六位上行右近衞將監大神宿禰式賢

右方

皇太后宮大夫俊成卿女
從四位下行權右中辨藤原朝臣光俊
正三位行兵部卿藤原朝臣成實
女房下野
前權大僧都法印大和尙位幸淸
正四位下行左京權大夫藤原朝臣信實
法印大和尙位覺寛
日吉禰宜從四位上行大藏少輔祝部宿禰成茂
女房少將
前但馬守從四位上源朝臣家長
從四位下行右馬權頭源朝臣有長
法印大和尙位耀淸
沙彌明教
女房但馬

太田祝賀茂縣主季保
法眼和尚位信忠
沙彌寂身

講師

中務權大輔爲繼

讀師

正三位知家

判者

權中納言定家

一番　河上霞

左　　　權中納言定家
わたりする河瀨の霞立なれて藤なみかさす雲の上人

右勝　　　俊成卿女
新拾 橋姫の袖の朝霜なをさえてかすみ吹こすうちの河風

左歌。老耄之狂言也。往年久積ニ舞人之庭數一たらん。勅使之行粧。時代雖レ隔。景氣未レ忘。依ニ纔覺悟一。憖以詠吟。
橋姫之袖霜尤妖艷之躰也。可レ爲レ勝。

二番

左持　　　權中納言定光
河船のゆきゝの跡も白浪の音さへかすむ春のあけほの

右　　　光俊朝臣
あすか河よとまぬ水も霞つゝ心有とやはるは見ゆらむ

左右ともに無ニ殊難一。可レ爲レ持歟。

三番

左持　　　右兵衞督爲家
新拾 行かへりみつのかは長さす棹のみなれし跡もかすむ春かな

右　　　兵部卿成實
立わたる霞の衣春きても浪風さむきよとの川長

兩首の河長おなしさまに侍れは。又持とす。

四番

左　　　正三位家隆
わたり船それともみえす朝ほらけみつ野をかけてかすむ河浪

右勝　　　女房下野
朝日影さすや霞の立田川かは水くゝるはるのくれなゐ

左よとのわたりの朝ほらけ。おもかけおかしくおもひやられ侍るへし。右曙後霞光を立田川の水くゝるよし。風情よろしく侍れは。勝とす。

五番

左持　　　正三位知家
明わたる川瀨の浪に立煙やかてもふかくかすむ空かな

右　　　前權大僧都幸清
春霞うきてなかるゝ柴舟の跡さへみえぬ宇治の河浪

明わたる河浪けふりたてる心。歌によみならへることには侍らねと。誠にみゆることなれは。おかしく聞なされ侍るへし。柴舟の跡さへ見えぬも。所につけてははかなけなるものから。むかし今かはらぬ事のさまも。ゆへ有ていうに聞え侍れは。可レ爲レ持歟。

六番

左　　　從三位範宗
春くれは霞の衣立田川あらへとぬれぬ浪そかけゝる

右勝　信　實

したさはく高瀨の川の浪間より霞むや袖のみなと成らん

兩首ともによろし。右は下句聊可ㇾ勝歟。

七番

左持　行能朝臣

あすか川行瀨の浪に春たちて昨日もけふもかすむふるさと

右　法印覺寛

春の色はそれともみえす立田河霞をくゝる瀨々の岩なみ

あすか河。たつた川ゆく瀨の浪。せゝの岩波。たちまさるけちめ。わかれすや侍らむ。

八番

左勝　伊成朝臣

かすむ日は消こそ渡れ谷川の氷し水の浪のはつはな

右　成茂宿禰

水上や岸の柳のふかみとり霞のみをのしるし成けり

右の歌みなかみ岸なといへるに。河の心は侍らめと。題の字の中。山川田野のたくひは。かならす其字を歌の表によみすゆへしと。昔ならひて侍れは。歌のさまも。いうなるうへ。川字侍らねは。以ㇾ左かちとす。

九番

左持　親氏朝臣

秋よりも花のにしきの立田川霞わたれとなかそ絶せぬ

右　女房少將

春といへはかすみにけりな絶す行あすかの河の末みえぬ迄

左は風情を先として。詞少しくるしく。右は古き事をやすらかにいひなかされて侍るに。姿はかはりなからおなし程にや侍らむ。

十番

左　頼氏朝臣

朝またき霞のみをも白浪の瀧田の川をわたるかち人

右勝　家長朝臣

とをつ河をちかた人やまよふらん霞の間より袖そちかつく

霞のみをも白浪のことはいうに聞え侍れと。遠つ河の遠かた人。姿非二凡俗之躰一。有二抜群之氣一。爲ㇾ勝。

十一番

左　顯氏朝臣

高せ船ゆきゝはみえす霞めとも聲はへたてぬ淀の川長

右勝　有長朝臣

さはた川霞の袖はそれなから下にふかめて春そ暮行

左させる難なく。又ことなる事なし。右本歌の心をおもひて。下にふかめてなといへる詞。よろしく聞え侍れは。爲ㇾ勝。

十二番

左持　經　光

高せさす淀のわたりは道絶てまた夜深きに立霞かな

右　法印耀清

我身よにたつせそしらぬ飛鳥川霞は深き淵となれとも

右たつ瀨そしらぬ。述懐其ゆへ侍らめと。ふかく心得わかれ侍られは。勝負又分明に申わき難し。

十三番

左勝　爲　繼

吉野川すくる岩なみ高けれとかすめる比は下くゝる也

右　　沙彌明教

あさな〳〵（あちきなくイ）浮て霞の思川なを晴やらて有世なりけり

右うきて霞の思ひ川。つゝくへき詞とも覺侍らす。左ことなる事なけれと。無二其失一。爲レ勝。

十四番

左勝　　隆祐

心あてにむかひの里やなかむらん霞をわたる淀の川船

右　　女房但馬

ものゝふのやそうち川や霞む覽行ゑもみえすせゝの網代木

左おもかけ有てよろしく聞え侍るへし。右もさせるなんは侍らねと。ひたりなをまさるへき歟。

十五番

左勝　　源家清

遠近のゆきゝも遠くなるまゝに霞わかるゝよとの川船

右　　賀茂季保

山風や霞ふきなかせ吉野川しらゆふ花の色そくもれる

左無二其難一。右霞ふきなかせ。いひしれる詞にあらす。色そくもれるも讀ならへる詞にあらす。初五文字のやの字。たかひて聞ゆ。やの字をつかふことはゝ。大原やをしほの山。春やとき花や遲きと。此ふたつの詞に用ひ侍る。吹なかせといはん上の句にはやの字如何。所謂不レ知二歌趣一者歟。以レ左爲レ勝。

十六番

左持　　法印昭清

吉野川はやくも春やなかるらん音さへかすむせゝの岩浪

右　　法眼信忠

きよくすむ水の心やみわ河の波も霞の衣たつらん

春や流るらむといふ詞。和漢きくとも覺侍らす。としをはなかると詠し來る。但可レ依二證歌一。定忘却歟。水の心きよくすまんによりて。浪の霞のころもたゝむも。惣不レ得レ心。不審。持たるへし。

十七番

左　　大神式賢

をしなへて霞の衣たつた川春の色とや浪もをるらん

右勝　　沙彌寂身

音羽川せきいれし人の心まてかすめは見えぬはるの曙

左歌。無二其難一。右歌。於二權中納言小野山庄一伊勢所レ詠之心歟。依レ聽二此道一可レ賞二其源一。昔能因下レ車忽拜二路頭之結松一。今微臣染レ筆爭輕二瀧瀨之餘流一。仍爲レ勝。

十八番　暮山花

左　　定家

たのみこしみ山の櫻けふやみる我身夕の春のひかりを

右勝　　俊成卿女

月影もうつろふ花にかはる色の夕を春もみよし野の山

左歌。久仰二宗廟之冥鑒一。適浴二聖朝之天恩一。雖レ恥二老耄之至極一。猶喜二信心之不一レ空。纔述二其志一。更非二宜詞一。右歌可レ謂二妖艷之姿一。足二于握翫一。爲レ勝。

十九番

左　　家光

尋ても花の山邊はあかなくにいる日をかへす道をしらはや

右勝　　光俊

くれぬとて雲に一よの宿とへは花こそあるしみよしの山

左。惜ニ虞淵之影一。思ニ魯陽之蹤一。風情有ニ其興一。但右歌。姿詞殊得ニ其骨一。叶ニ雅頌之躰一。仍猶勝にさたむ。

二十番

左　爲家

まてしはし花下かけの夕つくひうつろふ雲にくるゝ山かせ

右勝　成實

續拾 櫻色の雲のはたての山風に花の錦のぬきやみたれむ

櫻色の雲のはたて。花の錦のぬき。詞の美色をかりてみところ多く侍れは。以レ右かちとす。

二十一番

左勝　家隆

山のはも夕日のとけき白雲のにほふは春の花さかりかも

右　下野

けふも又とよらの鐘の入相に花にやとゝふかつらきの山

右の歌かつらきの寺鐘の聲。をしはかられ侍れと。左にほふは春の花さかりかも。高振ニ神妙思一とは。此姿にや侍らむ。尤可レ爲レ勝。

二十二番

左勝　知家

なかしとは花まつ程や山櫻日をすかのねにくらしわひけむ

右　幸清

三吉野の里もとはゝや山さくら夕ゐる雲に色そうつろふ

右歌も。おもかけおかしく聞え侍れと。日をすかのねにくらしわひけむ。ことによろしく侍れは。爲レ勝。

二十三番

左勝　範宗

山人の峯の櫻をおりそへてかへるかさしもにほふはる風

右　信實

なかき日そさかりは見ゆる山櫻夕ゐる迄の雲にまかへて

山人のかへるかさし。始をはり叶ひてきこえる侍るにや。夕ゐる迄の雲にまかへても。おかしく聞え侍るを。盛はみゆる。あしかるへき詞にはあらねと。猶以レ左爲レ勝。

二十四番

左勝　行能

新勅 あすもこむ風しつかなる三吉野の山の櫻はけふくれぬとも

右　覺寛

櫻かり山路もくれぬさらすとてやとらさるへき花の陰かは

風しつかなるみよし野のとをきて。山の櫻はけふくれぬともと侍る。殊催ニ感歎之思一。やとらさるへき花の陰も。おもふ所いうに侍れと。左得ニ秀歌之躰一。爲レ勝。

二十五番

左　伊成

待人にとはれぬ山の櫻花あたなるなにや日をくらすらん

右勝　成茂

夕月夜ほのかにかゝる山のはのあかても花にやとりぬる哉

左としにまれなる人も待けりといふ歌の心には侍れと。下の句。少しいひおほせられぬ所や侍らん。右心きゝわかれて侍れは。爲レ勝。

二十六番

左持　親氏

櫻かりなを行山の遠けれはくるとも花にやとはさためし

右　少將

尋みる花もなこりやしたふらんくるゝもしらす匂ふ山風

左右させる難なく侍れは。爲ㇾ持。

二十七番

左勝　　　　　　　　　頼　氏

音羽山夕ゐる雲を吹風にさく程見ゆる花さくらかな

右　　　　　　　　　　家　長

いたつらに匂ふもつらし心なきいはきの山の花の夕はへ

左さくほと見ゆる。ことに宜しく聞れは。音羽山夕ゐる雲。心なき岩木の山には。勝侍るへし。

二十八番

左　　　　　　　　　　顯　氏

いさやさは花咲山にやとしめて夕いそかむかたとくらさん

右勝　　　　　　　　　有　長

吉野山暮なはなけの花はあれといつらは春のなかしてふ日は

左初五字。さまて難にては侍らねと。こひねかはれぬ詞にや侍らむ。右くれなはなけの花はあれと。よろしく聞え侍れは。爲ㇾ勝。

二十九番

左勝　　　　　　　　　經　光

此里は櫻そちかきみなせ山ほとはむかひの夕暮の空

右　　　　　　　　　　耀　清

越やらぬ心そしるき夕くれのまかきの山の花の下かけ

右心あるさまにおかしくは聞え侍るを。夕くれのまかきの山本。歌の心ならはまことの山にあらす侍らむ。以ㇾ左爲ㇾ勝。

三十番

左持　　　　　　　　　爲　繼

山櫻たゝけふのまの風にたに夕や花のさかりすくらむ

右　　　　　　　　　　明　教

暮ぬとて花にもかへるともは有とよしみむ人は三吉野の山けふの間の夕の風情よみたると。ほむる人も侍らん。あしたの夕のほと。いたくくはしくや。友有と。宜しき句には侍らねと。持にて侍なむ。

三十一番

左持　　　　　　　　　たかすけ

初瀬山夕日のちかくなるまゝに峯より花の色そうつろふ

右　　　　　　　　　　但　馬

なかめやる雲のはたても匂ふらんたかまの峯のはなの盛は

初瀬山の夕日。たかまの峯の雲。うつろひにほへる心。いつれと申かたし。爲ㇾ持。

三十二番

左持　　　　　　　　　家　清

山陰のたそかれ時の花の色はおるまてなから雲とみえつゝ

右　　　　　　　　　　季　保

塵つもる櫻にうつむ山の井のあかてもくるゝ花の色かな

山かけのたそかれとき。山のゐのあかてくれぬる心。おなしはなの色。又わきまへかたし。

三十三番

左勝　　　　　　　　　昭　清

しはしとてたつこの本と思へとも花にくらしつしかの山越

右　　　　　　　　　　信　忠

よそにたつ高間の雲の色まても櫻になりぬ夕くれの空

たかまの雲。ことたらす。夕くれの空。平懐なり。しかの
山こえ勝侍るへし。

三十四番

左勝　式賢

故郷はさもくれかたき春の日の花にすくなきみよしの〻山

右　寂身

櫻さく春にしなれは山のはに夕をそめぬ雲そか〻れる

さも暮かたき春の日の花にすくなきといへる。いとよろしく聞ゆ。右も詞いうに侍るを。色の字なくてそむといへるいか〻。以左爲勝。

三十五番　社述懐

左　定家

なかきよといた〻く雪も有ふれはあふく誓の惠なりけり

右勝　俊成卿女

たのみこし心にもすめ石清水むかしの袖の影やとすまて

以右爲勝。

三十六番

左勝　家光

なかきよをかねてそいのる石清水やとれる月のもとの光に

右　みつとし

男山さかゆく時のいかならむた〻よをわたる道そくるしき

左いはし水やとれる月のもとの光にと侍る。詞のつ〻き。宜しくいひなかされて侍れは。爲勝。

三十七番

左持　爲家

思ひやる契もふかし石清水みとせの花を外にかさ〻て

右　成さね

あはれ我君にまかせてみつかきの久しく物を思はすもかな

兩首無指勝劣歟。

三十八番

左持　家隆

數ならてわか身はふりぬ男山老せぬみやも哀かけなん

右　下野

ひよしのや光をやとす石清水心をわけてたのみそめてき

老せぬ宮兩社和光。又難辨申。

三十九番

左　知家

祈りこししるしあらはせ男山いはにも松のおふるためしに

右勝　幸清

たのみこしよのことはりは石清水神と君とに任せてそまつ

男山の岩にも松。よりところ有て宜しく侍るへし。右ことはりきはまりて聞え侍れは。猶爲勝。

四十番

左持　範宗

神垣や照すひかりにたつちりのちかひもあたに頼やはする

右　のふさね

男山ゆくてふおいの榊葉のかけたのまる〻道をしらはや

兩首。又ことに申わくへき所もなし。持とす。

四十一番

左　行能

いたつらにかけし思ひそ朽ぬへき願ひをみつの杜のしめ縄

右勝　覺寛

たまくしの光をやとす石清水にこらぬ人の心くむなり

左詞姿いうには侍れと。右たまくしの光をやとすいはし水。勝へき歌のさまにや侍らん。

四十二番

左持　伊成

いはし水おなし流に年を經ていのるおもひの末をしらはや

右　成茂

ゆふたすきたのみをかくる陰なれはなれぬ榊の色もなつかし

左右無ニ差勝劣一。

四十三番

左勝　親氏

君か代を祈れは神もなひくらむけふゆふしてにかくる心を

右　少將

みをうしとおもひも捨し神垣や祈るしるへの道はへたてす

左うたもさも爲レ勝。

四十四番

左　よりうち

後の世のやみをもてらせ八幡山神のふもとの有明の月

右勝　家長

新後拾　やはた山神やきりけむ鳩の杖おいてさかゆく道のためとて

左のうたも。いうには侍るへし。右のうた神やきりけんは。ふるきことはゝやはた山に寄て。鳩の杖ことにつよく聞え侍れは。勝と可レ申や。

四十五番

左持　あきうち

むかしよりきよき流の石清水にこらぬ御代をいかに守らん

右　有長朝臣

君すめは濁らぬみよに石清水わかみくつたに沈ますもかな

いはし水にこらぬ御代。無ニ其優劣一歟。

四十六番

左　つねみつ

やはた山猶神かきに祈みんおしかるへくもあらぬ身なれと

右勝　幸清

おとこ山春のめくみにもらすなよまつは久しき心なれとも

なを神垣に祈みんとをきて。下の句の心少し不ニ相應一やはへらん。人子之禮。聽ニ於無レ聲。視ニ於無レ形。不レ登レ高。不レ臨レ深。尤惜まるへくや侍らん。右其理可レ然。爲レ勝。

四十七番

左持　ためつく

かさしこし花のかたみの岩清水ふりぬる春を哀とも見よ

右　明教

いつまてか世を慕ひけん男山あはれをかけよ苔のたもとに

かさしこし花のかたみ。いとひつる苔の袂。ともにいうに聞え侍れは。爲レ持。

四十八番

左持　たかすけ

けふまてはつれなく過ぬ男山さか行時もしらぬものゆへ

右　但馬

いはし水すみにこれるをわきて思ふ神の誓のはつかしのみや

此つかひ。又ことなる得失見え侍らねは。爲レ持。

四十九番

左勝　家清

さりともとちかひをたのむみや柱こと人よりも契くちめや

右　季保

神は只人の心をいはし水すむも濁もあはれとや見る

神は只。非ニ宜詞一。人の心をいはしみつ。つゝきても聞えす。以レ左爲レ勝。

五十番

左勝　昭清

わか頼む神々ならはゆふたすき心にかくるしるしあらはせ

右　信忠

すてぬ世をかりの姿の男山あふけはもとの君もみえけり

あふけはもとのきみとは。なにのみえけるにか。惣不レ得ニ其心一。以レ左爲レ勝。

五十一番

左勝　式賢

男山まつとせしまにふりにけりひとり老木の色もかはらて

右　寂身

わかたのむ神のみ前の榊葉にかけてそいのるしけき歎を

右歌無ニ其難一。たゝし榊によせて。しけきなけきなと。めつらしき事にはあらす。ひとり老木の色もかはらて。ことによろしく聞え侍れは。爲レ勝。

光明峯寺攝政家歌合　貞永元年七月

題

寄衣戀　寄鏡戀　寄弓戀　寄玉戀

寄枕戀　寄帶戀　寄糸戀　寄莚戀

寄船戀　寄綱戀

作者

左方　右方

權大納言基家　民部卿典侍

春宮權大夫良實（光明峯寺攝政左大臣）　權中納言定家

右衞門督爲家　信實朝臣

前宮内卿家隆　忠俊（洞院攝政左大臣）

兵部卿成實　隆祐

資季朝臣　源家清

家長朝臣　下野

頼氏朝臣　中宮但馬

親季朝臣　行能朝臣

知宗　兼康

中宮少將　正三位知家

判者　權中納言定家

一番　寄衣戀

左持　權大納言基家

紅のこそめの衣たちそめて心の色をしらせつるかな

右　民部卿典侍

續古
山姫のそめぬ衣もくれなゐの色にいてゝや今はこひまし
左右各可ㇾ申㆓所存㆒之由被ㇾ仰。兩方共無難之由申。紅衣之色大概同心歟。淺深難ㇾ分之旨各申。

二番

左勝　春宮權大夫良實
戀衣若紫のいろに出て亂れそまさるしのふもち摺

右　權中納言定家
秋草の露分衣おきもせすねもせぬ袖はほすひまもなし
各又不㆑難申㆒。本歌夏草。推而詠㆓秋艸㆒。無ㇾ謂之由申ㇾ之。于時秋也。隨㆓時節㆒有㆓其興㆒之由被㆓宥仰㆒。左尤若紫背㆓故詞㆒。衣摺也。尤可ㇾ爲ㇾ勝之由定申。

三番

左勝　右衞門督爲家
しら露の篠分わひし麻衣またうきふしの袖はかはかす

右　信實朝臣
すまの海士の鹽たれ衣くちねたゝほさぬ例のなさへ恨めし
兩方共不ㇾ出㆓難詞㆒。更有㆓感氣㆒。家長朝臣申ㇾ之。海人鹽垂衣不ㇾ乾之由。詞雖ㇾ優心不ㇾ珍。左麻衣之句。殊其興味候歟。各同ㇾ之。仍爲ㇾ勝。

四番

左持　前宮内卿家隆
玉葉
いかにして行てみたれむ陸奥の思ひ忍ふのころもへにけり

右　忠俊
思ひしれむねにたくものした衣うへはつれなき煙なりとも
讀㆓上左歌㆒之間。ゆきてみたれんみちのくの。殊勝之由滿座一同感歎。講師。右歌。胸にたくもの下衣うへはつれなき煙なりとも。妖艶珍重。左右共に可ㇾ勝歌也。依相合雖ㇾ爲ㇾ持。不ㇾ可ㇾ准ㇾ常。持之由被ㇾ定。

五番

左持　兵部卿成實
紅のはつしほいそく衣ての秋のなみたやしくれなるらん

右　隆祐
から衣かさねぬよはの秋風はかへすにつけて夢をやはみる
左歌始終叶て。姿優也。右歌理きこえて。詞えんなり。又可ㇾ爲ㇾ持之由定申。

六番

左　資季朝臣
續後撰
月草の花摺衣あたにのみ心の色のうつりゆくかな

右勝　源家淸
から衣袖のなみたのはつ汐に思ひそめたる色をみせはや
左姿おかしく詞色ありて聞ゆるよし申侍しに。右又宜しくつかまつれり。十首の初題に思ひそむるなといへるも。心侍るよし各申。爲ㇾ勝。

七番

左持　家長朝臣
玉葉
つゝみあまる袖の涙の泉川くちなんはては衣かせやま

右　行能朝臣
新後撰
さよ衣かへすしるしの慰めもねられし迄の夢にそ有ける
左あまる涙の泉川くちなんはては衣かせ山。たくみに思ひよれるよし申。右ねられしまての夢にそ有ける。又優なり。よて爲ㇾ持。

八番

左　頼氏朝臣

をのつからかへす衣の故ならて夢のたゝちにあひみつるかな

右勝　中宮但馬

物や思ふみのしろ衣うちしめり身をしる雨におとろかれつゝ

　夢のたゝちにあひみむうへは。かへす衣のゆへ。其要なくやと申人々侍りき。右又優に聞ゆ。仍爲レ勝。

九番

左　親季朝臣

あま人の浪かけ衣ほさてのみはては恨の名をや立なむ

右勝　下野

いかにせん忍ひ〳〵に袖ぬれて木かくれあへぬ蟬の羽衣

　波かけ衣。させる難も侍らねと。又珍しき事にあらぬよし申。木かくれあへぬ蟬の羽衣。艶也とて。爲レ勝。

十番

左　知宗

我思ふかたには吹ぬ浦風にしほたれ衣いとゝぬれつゝ

右勝　兼康

遠さかる身はうつ蟬のなつ衣なれはまさらて秋風そ吹

　左歌無レ可ニ難申一旨。右歌なれはまさらて。殊勝なるよし定られて勝。

十一番

左　中宮少將

いかにせん衣かたしき今夜さへねられぬ床にねをのみそなく

右勝　正三位知家

新拾 からあゐのやしほの衣ふかけれとあらぬ涙の色そまかはぬ

　左いうにおかしきよし。各申。右のやしほのころもふかけれとあらぬなみたのまかはさらなん。殊に宜しく聞ゆとて。爲レ勝。

十二番　寄鏡戀

左　九條大納言

別れにし石井の水のます鏡あかぬかけさへなと濁るらむ

右勝　民部卿典侍

とゝめをきてさらぬ鏡の影にたに泪へたてゝえやはみえける

　石井の水。跡あることのうへ。ことはり聞ゆるよし申侍りき。涙へたてゝえやは見えける。めつらしきよし人々申て。勝と定めらる。

十三番

左　春宮權大夫良實

あけて見ぬふたみの浦のます鏡あはぬ袂に浪やかくらん

右勝　京極中納言定家

新拾 行水の花のかゝみの影もうしあたなる色のうつりやすさは

　二見の浦のますかゝみ。姿詞殊によろしく侍るよし申侍りしかとも。右歌下句輕忽卑賤に侍るを。依ニ御氣色一爲レ勝。

十四番

左勝　右衞門督爲家

水草ゐる野守の鏡影たえてへたてし中はよそにたにみす

右　信實

うき旅の涙くもりてます鏡面影そはぬつらさをやみむ

　右歌優に侍れと。うきたひの涙。すこしたしかにきこゆとて。左可レ勝之由被レ定。

十五番

左　　　　　　　　　　　　　　　家　隆

あさな〳〵手にも取見すますす鏡忘らるゝ身の影しうつれは

右勝　　　　　　　　　　　　　　忠　俊

ちはやふる御室の鏡かけてなと戀しきかたを祈そめ劔

左の心。めつらしく興あるさまに侍れと。右始終けたかく及かたきさまに侍れは。爲レ勝。

十六番

左持　　　　　　　　　　　　　　成　實

ます鏡見えはみつへき影たにもへたつる中を何したふらん

右　　　　　　　　　　　　　　　隆　祐

ます鏡くもらぬほとの涙にやかはるとたにも影はみえけん

おなしますかゝみ。歌のほとも無二勝劣一之由申。

十七番

左勝　　　　　　　　　　　　　　資　季

てる月のますみの鏡くもらねは我思ふ人の影はみえけり

右　　　　　　　　　　　　　　　家　清

鏡山影となる身の年をへて立よらはやはあはれともみん

てる月のますみの鏡。きら〳〵しく聞ゆとて。勝へきよし申。右歌も思へる所は侍るへし。

十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　家　長

ます鏡そこなる影をみてそ思ふしらぬ翁はさそいとふらん

右勝　　　　　　　　　　　　　　行　能

續拾
ます鏡うつりし物をとはかりにとまらぬ影もかたみ成けり

左風情有二其興一之由申人々侍りしかと。右艶にやさしく聞ゆ。仍爲レ勝。

十九番

左勝　　　　　　　　　　　　　　頼氏朝臣

なき戀る泪にくもれますゝ鏡忘らるゝには影をたにみす

右　　　　　　　　　　　　　　　中宮但馬

あた人の影もとまらぬます鏡なにをか今はかたみともみむ

左宜きよし被レ定て爲レ勝。右歌もいうに侍るへし。

廿番

左持　　　　　　　　　　　　　　親季朝臣

ます鏡見ぬめの浦の名もしらすたか俤にかけて戀らん

右　　　　　　　　　　　　　　　下　野

うつりゆく人こそあらめます鏡我影さへに面かはりして

兩首難もなく。又ことなる事もなしとて。爲レ持。

二十一番

左勝　　　　　　　　　　　　　　知　宗

さてもかくえこそかくては山鳥のはつおの鏡かけはなる共

右　　　　　　　　　　　　　　　兼　康

ます鏡うつれはかはるかたみかはわかみる影もあらすなり行

初尾の鏡。ちからみえ侍りしよし申人々侍りしかと。本歌ある事はさのみこそと宥られて。歌の優なるよし侍りて。爲レ勝。右のも歌其難聞え侍らす。

二十二番

左持　　　　　　　　　　　　　　少　將

ます鏡わか身をしほる外に又なきてもいはむ俤そなき

右　　　　　　　　　　　　　　　正三位知家

かたみともあらはみつへき影をたにとめぬならひの増鏡かな

雨首無ニ得失ー。可レ爲レ持之由定申。

卄三番　寄弓戀

左　大納言基家

契のみあたちのまゆみ色に出て今は時雨の末の秋かせ

右勝　民部卿典侍

新拾
人はいさあたちの眞弓をしかへし心の末も(をイ)いかゝ頼まん

右方申云。左右おなしあたちの眞弓に侍れと。色に出て時雨の染る心。檀の木に侍らは。弓の題には不レ叶や侍らむさ。定家申云。安達のまゆみと。一句にをかるゝ上は。弓なき難は侍るましくや。猶各申。はるともひくともつゝけてや。弓の心は侍らん。秋の色に染るはかりは。いかゝ侍るへき。偏以ニ時雨之染レ葉之色ー難レ用ニ織月之當レ心乃勞ー。是爲ニ樹木之名字ー。定違ニ弓矢之疑殆ー者歟。依ニ此難ー。方可レ勝之由被レ仰。

二十四番

左勝　春宮權大夫良實

みちのくのあたちのま弓末たはみいかなる方に猶なひく覽

右　京極中納言定家

狩人のひくや弓末のよるさへやたゆまぬ關のもるにまとはんあたちの眞弓するたはみ。歌のたけ及ひかたきよし申て。以レ左爲レ勝。

卄五番

左勝　右衞門督爲家

玉葉
ひきとめよ有明の月の白ま弓かへるさいそく人の別路

右　信實朝臣

我かたによると契らぬ梓弓をしてはいかゝひとをたのまん

右歌無ニ難中事ー。左有明の月のしらま弓。ひく人々侍りて。爲レ勝。

二十六番

左　家隆

わか戀は吉野のおくの山人のさつかは眞弓ひけとよはらす

右勝　忠俊

たつか弓ひきのゝ草の葉末よりおきふし袖に露そこほるゝ

左詞たくみに。弓つよく聞え侍るよし申。右又ひきのゝ草の葉するよりおきふし袖にと侍る。殊に宜しくはへるうへに。とつかは眞弓。つねによみならへる物にあらす。耳とをきよし申人々侍りき。仍右勝。

二十七番

左　成實

梓弓おきふししけくまたれてもはてははかなく明るしのゝめ

右勝　隆祐

あつさ弓生田の川に身を捨てなをのみ惜む跡そはかなき

右歌無ニ其難ー。いくたの川の弓。もとのこゝろおかしく聞え侍りしかは。可レ勝之由申。

二十八番

左勝　資季

つらさをは恨もはてす梓弓心よはくも猶こふるかな

右　源家清

人心あたちの眞弓頼ますよひくてあまたにかはる契は

昔よりよみならへる事なれと。人心といふ初の五文字。今は好みよむましきよし被ニ仰下ー。又弓にはひくてあまたには理かなはす。左優なるよし。被レ定レ勝。

二十九番

左勝　家長朝臣

新後撰　つれなさのためしにひかは梓弓おもひよはらぬ心つよさを

右　行能朝臣

梓弓いるのゝ小篠むすひても世々の契のひくかたそなき

梓弓ひかん事は。理かなふへし。野へのをさゝむすへるほと。その要なし。左の弓。つよく聞ゆ。可レ勝之由被レ定。

卅番

左　頼氏朝臣

猶たのめ梓の眞弓ひくにてもあらきよりこそしなひそむなれ

右勝　中宮但馬

思ひあれはとしのみとせの梓弓心よはさをよそにやはきく

しなひけむなと。艷ならす。としのみとせの梓弓。優におかしく侍るとて。爲レ勝。

三十一番

左　親季

ひき捨て手にたにとらぬ梓弓また我かたにかへりやはせん

右勝　下野

いさや又人のつらさも白ま弓ひくかたにこそ心よるらめ

左無二可レ難事一。右宜之由申て。爲レ勝。

三十二番

左持　知宗

梓弓するの野の原の春の草かれぬ心の色をみせはや

右　兼康

色かはるあたちのま弓ひきかへし又はよりこん末も頼ます

兩首依レ無二殊得失一。爲レ持。

卅三番

左　中宮少將

思ふ事先ほに出て梓弓いるのゝ薄あき風そふく

右勝　正三位知家

續古今　さても又猶やらみむ梓弓いてやと人を思ふものから

左優なるよし人々申。右いてやとの詞。おかしく侍るよし申て。爲レ勝。

三十四番　寄玉戀

左持　權大納言基家

消かへり袖にくたくる泪ゆへ戀路にひろふ玉もはかなし

右　民部卿典侍

續拾　かひもなしとへとしら玉みたれつゝ答へぬ袖の露のかたみは

涙の玉。同心に侍れは。爲レ持。

三十五番

左持　春宮權大夫良實

黒髮のみたれてよはるねをそなく泪の玉のぬきもとゝめす

右　中納言定家

緒を絶しかさしの玉とみるはかり君にくたくる袖のしら露

左右とも。宜きの由各被レ申。仍爲レ持。

三十六番

左持　爲家

なけゝたゝみぬめの泪はては又よし玉のをもたえぬ計に

右　信實朝臣

白玉かなにそとまかふ袖もかなあまる涙のいろもしのはん

各無二殊事一之由申。爲レ持。

三十七番

左　　前宮内卿家隆
いかゝせんぬしは誰とも白玉のとへと答へぬあたのかたみは
右勝　　忠俊
いせしまやおきつ白玉よそにのみなみたくたくる袖の上哉
行能朝臣申。玉の題に。ぬしは誰ともといふ詞。可ㇾ有ニ思所ㇾ哉。右又尤宜。爲ㇾ勝。

三十八番

左　　兵部卿成實
しら玉かとはかりいひし行ゑとて露をゝあたに思ひやはする
右勝　　隆祐
人こゝろ世のうきよりもうきたひの袖にそひろふ瀧の白玉
左無ニ殊得失一。右世のうきよりもうきたひの袖にそひろふといへる。ことによろしく聞え侍しかは。人の心同前にて侍しかとも。右可ㇾ勝にやはんへらむ。

三十九番

左　　資季朝臣
戀わふる泪の玉にみつしほの袖しの浦はひるひまもなし
右勝　　家清
汐みては玉もひろはぬ袖のうら涙のかすを何にまかへん
右歌。優につかふまつれるよし申て。爲ㇾ勝。

四十番

左　　家長朝臣
夜ひかる玉かと人をみてしより其俤にますかけそなき
右勝　　行能朝臣
あはてふるあはをのすちにぬく玉の亂れてよはき泪なり皃
よるひかる玉。めつらしき心に侍れさ。右艷におかしく侍るのよし申。爲ㇾ勝。

四十一番

左　　頼氏朝臣
人しれぬ秋の契のなかりせは玉のかさしはかへらさらまし
右勝　　中宮但馬
あたなたつ心はかりは淸けれと玉ならぬ身はけにそ悲しき
秋契十三年にと申侍りしは。驪山宮の七月七日の事にやと申さるゝ人々侍るを。なかはをつみおりし玉のかんさしは。かへる詞にかなはすや侍らん。玉ならぬ身。題にかなひて聞ゆ。仍爲ㇾ勝。

四十二番

左持　　親季朝臣
岩の上の瀧つしら玉いたつらに思ひくたけて戀やわたらん
右　　下野
いつまてか袖の瀧つせをろかなる泪の玉といひけたれけん
左右ともに優なるよし申侍て。爲ㇾ持。

四十三番

左　　知宗
玉のをのさしも短き末の世の一よはかりはあふかひもなし
右勝　　兼康
かつきせし浪の中にもしらさりき人をみぬめの袖の白玉
玉のをのさしも短き。不ㇾ可ㇾ然之由人々申上。右の歌よろしくつかふまつれるよし被ㇾ定。爲ㇾ勝。

四十四番

左勝　　少將
いとゝ又なみたの露も落そひぬ玉のをなかく人をこふさて

右　　　　正三位知家

はては又行別れつゝ玉のをのなかき契は結はさりけり

玉の緒なかく。尤可レ然之由各申。爲レ勝。

四十五番　寄枕戀

左勝　　　大納言基家

せく袖（床イ）のうらはのもしほかくとのみ枕の上そ煙たえせぬ

右　　　　典侍

涙もる枕や戀をしりぬらん定めかねてはうちもねぬ夜に

判詞落

四十六番

左　　　　春宮權大夫良實

續拾　時雨ゆく紅葉の下のかり枕あたなる秋の色に戀つゝ

右勝　　　權中納言定家

續古　忘るなよ三とせの後のにゐ枕さたむはかりの月日なりとも

紅葉の下のかり枕。戀の心も色ふかくきこえ侍るを。優なる所も侍らぬ新枕。依ニ御氣色一爲レ勝。

四十七番

左勝　　　右衞門督爲家

新後撰　しきたへの床のみをなる泪川まくらなかれて見る夢もなし

右　　　　信實朝臣

なをさりの枕はかりや殘る覧いかにねし夜の夢のかたみに

右歌も。おかしく聞え侍るを。床のみをめつらしくや侍るとて。爲レ勝。

四十八番

左勝　　　前宮內卿家隆

よしさらはあふ瀨に見えよ名取川つけの枕のよゝの埋木

右　　　　忠俊

歎わひさてふるほとの思出にむすひもはてぬ夢の手枕

夢の手枕。妖艶之由各申。つけの枕のよゝの埋木。秀逸之由依レ仰。爲レ勝。

四十九番

左持　　　兵部卿成實

さはかりにつもる泪をしきたへの枕そ戀のふちとなりぬる

右　　　　隆祐

なにと又枕の塵をはらふらんこぬ夜のかすはつもる物から

枕そ戀の淵となりぬる。塵をはらふ數つもれる。ともに宜之由申て。爲レ持。

五十番

左持　　　資季朝臣

人しれすおつる涙の瀧まくら音にはたてす戀わたるかな

右　　　　家清

うきなから獨やねなんわたつ海のあれゆく床の浪の枕に

涙の瀧枕。ことにおかしく聞え侍るを。うきなからひとりやねなん。又捨かたきよし被レ定。猶爲レ持。

五十一番

左勝　　　家長朝臣

浪枕たかせのよとにさす棹のさてや戀路にしほれはつへき

右　　　　行能朝臣

思ふ事ありとはかりはしらるともかゝる枕の露はもらさし

右歌難は聞え侍らねとも。めつらしからぬにや。左高瀨のよと。さてや戀路に。いひしれる歌と聞ゆとて。爲レ勝。

五十二番

左　賴氏朝臣

袖の上の露をあやめてしきたへの枕の外は人やしるらん

右勝　中宮但馬

賴めねとたゝあらましのよひ〳〵に枕の塵をうち拂ひつゝ

露をあやめて優ならすと申人有て。右勝。

五十三番

左勝　親季朝臣

涙川わたらぬ中になかる也まくらの下の淵となるまて

右　下野

草枕あたに結ひし夢なれとさもわすられすのこるおもかけ

左宜しくきこゆとて。爲ㇾ勝。

五十四番

左勝　知宗

待人のこすけの枕あはれなとつらきえにしも結ひそめけん

右　兼康

たち出るうき名は塵に埋れてはらはぬねやのつけの小枕

まつ人のこすけの枕。いひなれて聞ゆとて。爲ㇾ勝。

五十五番

左　中宮少將

敷たへの枕たにせてみる夢はさむるとこにもしる人そなき

右勝　正三位知家

にこり江に影みぬ水や塵つもる枕の下の涙なるらん

右歌宜し。爲ㇾ勝。

五十六番　寄帶戀

左持　九條大納言基家

待わふる我なみたさへむすほゝれあひみる中にとけぬ下帶

右　民部卿典侍

新拾 かりそめに結ひすてたる下帶をなかき契となをや忍はん

兩首いうに侍るよし各申。爲ㇾ持。

五十七番

左持　春宮權大夫良實

今そしるかことはかりに常陸帶とくともとけし心たゆまて

右　權中納言定家

新拾 いかゝせんうへはつれなき下帶の別れし道にめくりあはすは

兩首爲ㇾ持。

五十八番

左　右衞門督爲家

あさはたのしつかかり帶のあたにのみ又も結はぬ契也けり なれとやイ

右勝　信實朝臣

芦のやの賤はた帶のかりそめを結ふ契にたのみやはする

右歌いうに侍り。左初五文字耳遠く聞えはへるよし申て。以ㇾ右爲ㇾ勝。

五十九番

左持　前宮内卿家隆

めくりあはん契もしらぬひたち帶のひた道にのみ戀や渡らん

右　忠俊

新拾 紫のこそめの帶のかた結ひとけてぬる夜の限しらせよ

紫のこそめのおひ。めつらしくおかしく侍しよし各申。常陸帶のひた道も。餘情有て聞ゆとて。爲ㇾ持。

六十番

左勝　兵部卿成實

戀をのみ賤はた帶のむかしよりたえぬ恨やむすひ置けん

右　隆祐

結ひをきし花田の帶のいく世經てあはぬにかへる色はみゆ覽

花田のおひ世々へん色いかに。左無二其難一。爲レ勝。

六十一番

左持　資季朝臣

契をはいかなる帶に結ひけんなれにし中も今は絶つゝ

右　源家清

心のみ花田の帶の一すちにうつろふ色はいふかひもなし

兩首無難のよし申て。爲レ持。

六十二番

左　家長朝臣

戀をのみ賤はた帶の結ほゝれ心しとけはそれもとけなん

右勝　行能朝臣

足曳の山田にならすひたち帶のかりにもとけぬ契なりけり

山田にならす常陸帶。珍敷よし申て。爲レ勝。

六十三番

左勝　頼氏朝臣

月草の花田の帶のとけそめて恨にかへるはてそかなしき

右　中宮但馬

むすひをきし契絶すは山城のゐての下帶めくりあひなん

左優に聞ゆるよし各申て。爲レ勝。

六十四番

左持　親季朝臣

山かつの賤はた帶のいくかへりとけてかひなき思ひそふらん

右　下野

石川やあはに契や結ひ置し花田の帶のうつりやすさは

左右無二得失一。爲レ持。

六十五番

左持　知宗

契のみしつはた帶を結ひても猶したはるゝむかしなりけり

右　兼康

しらさりき賤はた帶のめくりあはて結ほゝれたる契有とは

賤はた帶又同前。

六十六番

左持　中宮少將

さても又身をははなれぬ下帶の行わかるゝや契なるらん

右　正三位知家

古の契もいかに結ひけむしつはたおひのとけぬ心は

又無二申旨一。不レ能二勝負一。

六十七番　寄糸戀

左勝　大納言基家

あはぬ夜は亂れやわふるさゝかにの糸を限りに年をへにけり

右　民部卿典侍

多本歌不見

左の糸、詞のより所多く。宜しく侍るよし申て。爲レ勝。

六十八番

左勝　春宮權大夫良實

さゝかにの手玉もゆらにひく糸のくるれは人をまたぬ夜そなき

右　京極中納言定家

夏ひきのいとしもなれし俤はたえてみしかき後そかなしき

左殊勝之由各申。仍爲レ勝。

六十九番

左勝　右衞門督爲家

新拾　あふまての契もまたす夏引の手ひきの糸の戀のみたれは

右　信實朝臣

さらてたゝなるゝとまても頼れすをのか手引の糸の亂れは

右歌。上三句いたつらに糸によれる詞侍らすと申。左爲レ勝。

七十番

左勝　前宮内卿家隆

誰ために人のかた糸よりかけて我玉のをのたえむとすらん

右　忠俊

青柳の花田の糸のかたよりにあふよもしらぬ名こそつらけれ

人のかた糸よりかけて。殊によろしく聞え侍り。青柳のはなたの糸も。まことにしたひよりて聞え侍れと。依レ無二殊仰一。左爲レ勝。

七十一番

左持　兵部卿成實

あはぬ夜のうきふしことにかた糸の此方彼方に物や思はん

右　隆祐

くるゝ日の契も今はかた糸のいかなるふしに中は絶けん

兩首。殊又無二指勝劣一歟。

七十二番

左持　資季朝臣

夏引の手ひきの糸の誰ゆへに絶ぬ思ひもみたれそめ劔

右　源家清

くりかへし哀はかけよかた糸のあはても絶ぬ命なかさを

結番之歌。勝負雖二大切一。於レ無二指得失一。離レ決二雌雄一歟。

七十三番

左　家長朝臣

あふ事は思ひもよらすかた糸の此方かなたに年はへにけり

右勝　行能朝臣

深き色の程をみよとやからあゐのちしほの糸の先みたれ筒

此題のかた糸。數多侍りて。後のふかき色の糸。めつらしさにや。勝と侍りき。

七十四番

左　頼氏朝臣

いかゝせんあふ事しらぬ片糸のよるはすからに亂れ侘つゝ

右勝　中宮但馬

何と又うきふしなからあは糸のたえぬ契のむすほふるらん

あはいと勝へきよし。御定。

七十五番

左持　親季朝臣

玉のをやかけて結はんかた糸のみたれてあはぬ人の心は

右　下野

中々に絶ぬもくるし夏引のいとふ心のほとは見えにき

兩首又無二殊得失一之由申。

七十六番

左　知宗

うつりにし人の心もかた糸のあはてやかくて此世へたてん

右勝　兼康

絶さらむ心もしらす内糸のあはをにむすふ中の契は

しら糸のあはをめつらしきよし申て。爲ㇾ勝。

七十七番

左勝　中宮少將

かゝりける契りもつらしかた糸のいかなる色に思ひそめ劔

右　正三位知家

かくしつゝいつ絕はてん白糸のうきふししけく成まさりつゝ

右歌つゝの詞在二二句一之由申。左又優なり。仍爲ㇾ勝。

七十八番　寄莚戀

左　大納言基家

うちかへし衣かたしくさむしろに人の心を見る夢もかな

右勝　民部卿典侍

玉葉 よしさらは淚の下にくちもせよ身さへなかるゝ床の小莚

傍題の衣。無二指要用一之由各申。右爲ㇾ勝。

七十九番

左持　春宮權大夫良實

續後撰 吳竹のふしみの里のすか莚ねにのみなきてひとりかもねん

右　京極中納言定家

東野の露のかりねのかや莚みゆらんきゝてしき忍ふとは

伏見里。殊勝の由一同雖ㇾ申。推而被ㇾ定ㇾ持。

八十番

左　右衞門督爲家

あふ事はかりほの小田のいな莚露たに袖のかはきやはする

右勝　信實朝臣

新拾 いたつらに暮せるよひのさ莚の夢を賴みてねんかたもなし

左無二指申事一歟。右優美之由各申。爲ㇾ勝。

八十一番

左勝　前宮內卿家隆

くちねたゝ人やあやめむあや莚程ふるまてもしき忍へとも

右　忠俊

續古 はかなしや其夜の夢をかたみにてうつゝにつらき床の小莚

人やあやめむあやむしろ。おかしく聞ゆ。右又妖艷之由各申といへとも。依ㇾ仰左勝。

八十二番

左勝　兵部卿成實

あや莚なみたの露のたてぬきに誰をりそめて敢忍ふらん

右　隆祐

思ひねの淚のかすにしきかへてしたにくち行床のさむしろ

右のさむしろなみたのかすにしきかへん事。其員繁多にやはへらんと申て。左爲ㇾ勝。

八十三番

左　資季朝臣

新後撰 岩かねのこりしく山の苔むしろぬるよもなしに歎く比かな

右勝　源家清

こよひこそこぬもつらけれ獨ねの我さむしろに秋かせそ吹

右優に聞ゆるよし申て。爲ㇾ勝。

八十四番

左勝　家長朝臣

へたてなきすきまの風もをのつから猶さむしろのよはの手枕

右　行能朝臣

待夜のみむなしき床のあや莚くるれはこりす猶はらふかな

右あやむしろ。かならすしも求むへき事にはあらねとも。一句もあやによれる詞なし。左人を戀たる心にはあ

らねとも。懇切之芳契おなし事也とて。左勝。

八十五番　左　頼氏朝臣

さむしろに獨ぬるよの夢もみつけにならはしの風は吹けり

右勝　中宮但馬

續後撰
一夜ねしかりそめふしのかや莚いまは涙をかさねてそしく

右優に聞ゆるうへ。左歌合にならはし不㆓甘心㆒とて。右爲㆑勝。

八十六番　左　親季朝臣

さても猶しき忍ふてふ稲莚河そひ柳浪はこすとも

右勝　下野

はらふへき袖さへくちぬいたつらに塵のみ積る床の小莚

左戀すくなしと申人侍りしかと。しき忍ふといはんに。ふるまこもりぬへきよし侍りき。右させる理侍らねと。ふるまひたるやうありとて。爲㆑勝。

八十七番　左持　知宗

ひとりねの夜をさむしろの霜をたに置所なき心ともみよ

右　兼康

絶てなをまちえんものか綾莚ほさぬ涙にをさへくちなは

無㆓殊勝劣㆒。又爲㆑持。

八十八番　左持　中宮少將

うき物とさのみや塵のつもるらむぬる夜わするゝ床の小莚

右　正三位知家

涙もる床のさむしろうきなからうへはつれなく敷忍ひつゝ

此番。又ともに優なりとて。無㆓勝負㆒。

八十九番　左持　寄船戀　大納言基家

袖の浦よする涙も色そへていとゝちしほのあけのそほ船

右　民部卿典侍

續後撰
濁江にうき身こかるゝも刈船はてはゆきゝの影たにもみす

左袖の浦よするなみたの色ならは。あけのそほ船かなふへしやなと申人々侍しにや。弁申侍らす。右歌又ことなる事侍らねは。猶不㆑能㆓勝負㆒。

九十番　左　春宮權大夫良實

續後撰
あらたまの年のをなかくまつら船幾よになりぬ浪路へたてゝ

右勝　中納言定家

白妙の袖のうら浪よる〳〵はもろこし船やこきわたるらむ

年のをなかく松浦船。殊勝のよしみな一同申侍りしかと。可㆑爲㆓右勝㆒之由被㆑仰。

九十一番　左　右衞門督爲家

うき中の芦かりをふね漕まよひ猶おなしえに又やこかれん

右勝　信實朝臣

いかなりし風のしるへの浪のまに思はぬかたのあまの捨舟

うき中の芦かりをふね不㆓甘心㆒之由申侍りき。右爲㆑勝。

九十二番　左　前宮内卿家隆

浪たかき人の心のあら磯はまかちしけぬきよる舟そなき

右勝　忠俊

續後撰 みるめなきしかつの蜑のいさり船君をはよそにこかれてそふる

人の心のあら磯まかちしけぬき。耳とをきよし申人侍りしにや。君をはよそにこかれてそふる。無限秀逸之由申。仍爲勝。

九十三番

左勝　兵部卿成實

またしらぬ浪路はるかにゆく船の風をたよりに戀や渡らん

右　隆祐

芦しけき同しみなとに漕舟の月日はかりはさはらさりけり

左優に侍るうへに。右下句。愚意不通。不能弁申。左右又無申旨。左爲勝。

九十四番

左勝　資季朝臣

續拾 漕いつるおきつ浪間のあま小船ららみし程に遠さかりつゝ

右　源家清

わすらるゝ身は捨舟のうかひ出てみるめの空も遠さかり筒

左歌宜之由被申人々有て。爲勝。

九十五番

左持　家長朝臣

恨めしなあふ事なみに漕船も待としきけは寄るならひを

右　行能朝臣

風をいたみとまりもしらす行船のうきてはかなき身の契哉

兩方無本末。爲持。

九十六番

左　頼氏朝臣

おきてゆくらきねの床の別路に契をくへきことの葉もなし

右勝　中宮但馬

新拾 あま小船我をはよそにみくまのゝ浦よりをちに遠さかりぬる

左歌無船。仍右爲勝。

九十七番

左　親季朝臣

玉江こく芦かりを船行なやみ身のうきからに又やさはらん

右勝　下野

恨むれとゆきあふ道はかたゝ船さてもかひなき名こそつらけれ

かたゝ船。優に侍るよし申て。爲勝。

九十八番

左持　知宗

思川さしよす船のみなれさほ我手にとりていつくわたらん

右　雅康

新千 いかにせん丹生の川浪よるかたも及はぬ船のうきなりせは

左珍敷姿也。右ちから有よし申て。爲持。

九十九番

左　中宮少將

浪のうへは里のしるへにあらねとも恨なれたるあまの釣舟

右勝　正三位知家

みなといる蜑の小船の芦分に又このくれも待そわつらふ

左歌本歌の句のをき所かはらす。難にや侍るへきと申て。右勝。

百番

寄網戀

左持　九條大納言基家

すまのあまの朝な夕なにひく網のかけても戀ぬ浪のまそなき

右　民部卿典侍

續後拾　しかのあまの網のうけなはうきなから絕ぬ恨は猶そくるしき

各申無難之由。爲持。

百一番

左勝　春宮權大夫良實

あま人の手引の網のくるとあくとめかれぬ戀に袖やくちなん

右　京極中納言定家

人心あたなる名のみたつ鴫の網のゆくてになとかゝるらむ

左の手引のあみのくるとあくと。殊勝のよし各申。右不詩常。尤以左爲勝。

百二番

左持　右衞門督爲家

長かれと何ひき懸てたのみ劒思はぬかたのあみのうはなは

右　信實

世とともに浪ちへたてゝ引網のたえぬ恨みはさてやくちなん

兩首無殊事。爲持。

百三番

左持　前宮內卿家隆

いせの海たえぬ恨にひく網のめにあまりぬるわか泪かな

右　忠俊

續後拾　とし經ぬる網の手繩のうちはへて心ひとつをかけぬ日はなし

右殊宜之由各申。依仰爲持。

百四番

左　兵部卿成實

續古　戀すてふ袖しの浦にひく網のめにたまらぬは淚なりけり

右勝　隆祐

浦人のかたを定めて引網もくるしとのみや身をしほるらん

左歌讀說朦殊申宜之由。行能朝臣申云。戀をのみすまの浦はにひく網のめにもつ物は淚なりけり。ふるき名歌也。老耄のうへ管見又忘却歟。何集誰人歌哉とて問之。不憶覺悟。如計本意事之由申。仍以右爲勝。

百五番

左持　資季朝臣

しかのあまの朝な夕なに引網のほすまもしらす濡るゝ袖哉

右　源家淸

數ならぬみほの浦はにをく網のうけひく人もなき思ひ哉

左右無難申事。又持。

百六番

左持　家長朝臣

ひく網のめならふ浦の人なみも身のうき方はかけはなれにき

右　行能朝臣

あふ事も今はなきさにほす網のかはくをみても袖そかなしき

此番又同前。

百七番

左勝　賴氏朝臣

思ふともいかゝ賴まむたれとなく引手あまたの網のうけなは

右　中宮但馬

續後撰　をく網のしけき人めに事よせて又こと浦にひく心かな

左宜之由人々申されて。爲勝。

百八番

左持　　知宗

よしさらは恨もはてよひく網のめならふ人に心をくとて

右　　下野

いせの海思はぬかたにひくあみの我には人の心をくらむ

心をく詞。同不レ可レ有ニ勝劣一之由申。

百九番

左持　　知宗

みし人を忍ふの浦にひく網の苦しやかくはまなくぬらさん

右　　兼康

うきめかるあまのしわさに引網の誰うけひくと恨初けん

猶可レ爲レ持之由同前。

百十番

左持　　中宮少將

續後撰 たえす引網のうけなはうきてのみよるへ苦しき身の契かな

右　　正三位知家

新拾 をく網のひくてあまたに袖ぬれてさても恨みぬ浪のまそなき

猶不レ能ニ勝負一。

左右方人各被レ申之詞不レ幾之上。七旬之老耄病腸惘然。百番之優劣已迷惑(惑歟)難レ決。窮踊之筋力雖レ待ニ披講之終一。以ニ當座一猶忘ニ興味一。後日彌迷ニ是非一。不レ能レ載ニ子細一。定可レ招ニ其嘲一歟。

勝負

	勝	持	負	
九條大納言	勝二	持五	負三	民部卿典侍
春宮權大夫	勝四	持四	負二	權中納言定家
右衞門督	勝五	持二	負三	信實朝臣
前宮内卿	勝三	持三	負四	忠俊
兵部卿	勝三	持三	負四	隆祐
資季朝臣	勝三	持四	負三	源家清
家長朝臣	勝三	持三	負四	行能朝臣
賴氏朝臣	勝三		負七	中宮但馬
親季朝臣	勝二	持五	負三	下野
知宗	勝二	持五	負三	兼康
中宮少將	勝二	持四	負四	正三位知家

歌合 貞永元年八月十五夜

題

名所月

作者

左方

女房後堀河院　權中納言定家
前宮内卿家隆　行能朝臣
信實朝臣　賴氏朝臣
有家朝臣　親季朝臣
隆祐　知家

右方

三位侍從母俊成女
民部卿典侍後堀河院官女爲家卿女　高倉八條院官女
實持朝臣　資季朝臣
家長朝臣　中宮少將藻壁門院官女左京大夫藤原信實女
下野後鳥羽院官女日吉禰宜元仲女　乘康
光俊朝臣　源家淸
右衞門督爲家

判者　權中納言定家

以上一本無之

一番　名所月

左勝　女房

みかさ山ふりさけみれは榊葉のいやとしのはに月はすむらし(んイ)

右　民部卿典侍

立田山そめてうつろふこすゑよりしくれぬ色に出る月影

左榊葉のいやとしのは。姿詞非凡俗之所及の由。各一同申。右上に染てうつろふ梢と置て。下に時雨ぬといへる。ことはりかなはすや侍らん。今出る月の色をよめるよし。右方陳申。其難侍らすとも。左非同日論。爲勝。

二番

左持　權中納言

神風やみもすそ河のきよけれは空行月の光そへけり

右　高倉

見ても又誰にかたらん秋のよの浦風さゆる住の江の月

みもすそ河の月の光そへけるよし。歌合にかたん爲によめる疑ひ侍しを。河の名をよまん。ことに勝へきにも侍らす。歌のさまめつらしからす侍らむ。住のえの月をめてゝ誰にかたらむと侍るも。景氣おもひやられて。可爲持よし申。

三番

左持　前宮内卿

新勅 ひかりそふ木のまの月におとろけは秋もなかはのさよの中山

右　實持朝臣

同 夕なきのあかしの渡よりみわたせはやまとしまねを出る月影

さよの中山。たひに出て木間の月の光そへたるに。秋の半もおとろける心詞。めつらしく興あるのよし各申。明石のとよりやまとしまみゆといへる古歌の心にて。新月のいつるにむかへる姿詞。けたかくきこえ侍れは。又

持とす。

四番

左　行能朝臣

明石潟こよひは月もみつしほのひるにかはれは哀なりけり

右勝　資季朝臣

天の原雲井にちかきふしのねは月すめとてや雪もさえ劒

左に。こよひは月もみつしほといへる風情。尤宜のよし申侍き。右方申云。誠有レ心歌とは聞え侍れと。あはれなりけりといひはてたる詞。くちおしくや侍らむ。近き世の歌に。けしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけりといへる。ことにおかしく聞え侍るよし申出し侍りしかと。此歌。猶ゆるされ侍らさりしかは。雲井に近き富士の根。歌のさまをよひかたけに侍れは。可レ勝の由被レ定。

五番

左　信實朝臣

夜半の月なたかの浦の浪の上に秋はなかはといかにすむ覽

右勝　家長朝臣

新勅　いつくにもふりさけいまや三笠山もろこしかけていつる月影

名たかの浦の秋。風情おかしく侍れと。ふりさけ今や三笠山唐かけてといへる。漢家本朝をかけて。月影至らぬ所なくつかふまつる由。滿座褒美。爲レ勝。

六番

左　頼氏朝臣

曇なきあかしの浦のならひにも秋の今宵の月はみてけり

右勝　中宮少將

補後撰　訪人もあらしと思ふを三輪の山いかにすむらん秋のよの月

くもりなき明石の浦も。猶秋のなかはの月ことなるよし。殊によろしく聞え侍るを。三輪の山いかにすむらんといへる。あらぬさまに艶にゆへ有て聞ゆるよし各申。左歌。ならひにもさいへる詞。いかゝなと申人侍て。右勝に被レ定。

七番

左　有家朝臣

おとこ山秋のなかはの法のには月はこよひの光のみかは

右勝　下野

曇なき月は三笠の山端に秋のなかはの影そさしそふ

放生會今夜の儀。嚴重に聞え侍るを。くもりなき月をみかさの秋のなかはの影をさし添ける心も。其ゆへ侍るへし。歌のさまも宜き由各申て。勝とす。

八番

左勝　親季朝臣

みかさ山ちよの光をさしそへて雲井をてらす秋のよの月

右　兼康

いく秋の空行月をやとすらんしほくむあまの袖の浦なみ

しほくむ海人の袖の浦浪。殊によろしく聞え侍れと。三笠の山のちよの光。雲井をてらす月。不レ及ニ是非一。爲レ勝。

九番

左　隆祐

お花咲まのゝ入江のたよりにもてる月なみに今夜をそしる

右勝　光俊朝臣

雲をくるむこ山おろし吹にけりゐなの湊にはるゝ月影

尾花さく。非二尋常句一歟之由申。以レ右爲レ勝。

十番

左持　知家

櫻とも雪とも今はみよし野の山の秋風はらふ夜の月

右　源家清

立田山月のかつらの下露にあきの半そ色に出ゆく

はらふ夜の月。さえて聞ゆ。月の桂の下露。秋の半の色。いうに聞え侍るを。似る歌ありと申人侍て。被レ處レ持不レ及二見思一。忘ぬる事は相互の事に侍るへし。

十一番

左持　三位侍従母

萬代もみもすそ川のしきなみにすめる雲井の秋の月影

右　右衛門督

續後撰　五十鈴河神代のかゝみかけとめて猶くもりなき秋夜の月

みもすそ河すめる雲井。五十鈴川神代の鏡。尤可レ爲レ持。

十二番

左持　女房

數みゆる雁の羽たれの霜の上に月さえわたるあまの橋立

右　民部卿典侍

續拾　清見潟月の空にはせきもゐすいたつらに立秋の白浪

數見ゆる雁の羽たれ。月さえわたるあまの橋たて。風情景氣殊勝無双。清見潟の月。詞姿難レ捨なと申人々侍りしにや。持のよし仰らる。

十三番

左勝　權中納言

世をてらすみかさの山の秋の月たかき昔の跡もをよはし

右　高倉

水の面にてる月浪の幾かへりこよひにあひぬうちの橋姫

左歌偏に勝負の事を思ひてよめるによりて。照月なみになれて年ふる宇治の橋姫。心くるしく聞え侍き。但今よりのち。今夜の勝負によみならひて詠二社名一假二神威一事。殊可二停止一之由被レ仰。

十四番

左勝　前宮内卿

宮城野の眞萩かうへの白露を玉にしきてもやとる月かな

右　實持朝臣

したくゝる浪もあらはに大ゐ河井せきもかくる月のしからみ

月のしからみ。めつらしくおかしきよし侍しかとも。みやき野の月。心姿可レ勝よし被レ定。

十五番

左　行能朝臣

みかの原山より月のいつみ川わたりをとをみしく氷かな

右勝　資季朝臣

秋の月やとる光し淸けれはおほろの淸水名をもたのまし

わたりをとをみ。きら〳〵しく聞え侍るよし申出し侍りき。月のいつみ河。さしもに聞ゆるよし申人有て。右歌しのひやかに。いうなりとて。爲レ勝。

十六番

左勝　信實朝臣

續古　をしほ山尾上の松の秋風に神代もふりてすめる月かけ

右　家長朝臣

たつ名にはおふの浦なし月さえて秋の半になりもならすも

依二今年之潤月一秋半相違之由。思へる所侍れと。をしほ山の月。歌のさまもよろしきによりて。爲レ勝。

十七番

左勝　頼氏朝臣

久方の月の桂の秋風に雲もかゝらぬあまのかく山

右　中宮少將

たちこちの空もひとつに月さえて野嶋かさきは秋風そ吹

月の桂の秋風に雲もかゝらぬ景氣。歌のすかた相かなひて。秀逸と聞ゆるよし。各稱美申。右歌不レ及二優劣一。爲二左勝一。

十八番

左　有家朝臣

さほ川に月の氷をしきしまのみちある御代を神や待らん

右勝　下野

初瀬山ゆつきかしたもしたはれて今宵の月のなこそかくれね

左無二其難一。有レ道御代尤然るへし。右ゆつきか下もあらはれて。月の名隱ぬ心。殊に宜き由各申。爲レ勝。

十九番

左持　親季朝臣

たち花の小嶋のくまの河風にむかしも聞すすめる月影

右　家康

秋はきの花野の露の行すりにぬれてうつろふ袖の月かけ

たちはなの小嶋にすめる月。あき萩の花野にうつろふ露。いつれとなくおかしく聞ゆ。爲レ持。

二十番

左　隆祐

明石かた名におふ浦にすむ月も猶のこりける影をみる哉

右勝　光俊朝臣

さらしなや姨捨山の月も猶こよひそ秋の影はそふらん

明石更科之月譽雖レ同。右歌依二下句宜一。爲レ勝。

二十一番

左　知家

よしおらて露なからみむもとあらの萩の上なる宮城のゝ月

右勝　源家清

かこつへき山こそみえねゆらのとを夜わたる月の行末の空

左初五文字非二尋常一之上。右ゆらのとを夜わたる月。姿詞尤よろし。仍爲レ勝。

二十二番

左　三位侍從母

花のえに露のやとかる宮城野の月にそ秋の色はみえける

右勝　右衞門督

かゝりける秋のこよひの月よりや浦を明石の名に定めけん

宮城野の月。殊によろしく聞え侍れと。右浦を明石の名にさため叙。可レ勝之由被レ定。

二十三番

左勝　女房

すまの浦やあまとふ雲の跡はれて浪より出る秋夜の月

右　民部卿典侍

續後撰　いくかへりすまのあま人我ための秋とはなしに月をみる覽

右ことなる難は聞え侍らねと。常の月にや。あまとふ雲の跡。たちならふへき物侍らぬよし申て。爲レ勝。

二十四番

左　　權中納言
月影は秋のよなかく住のえのいくちとせにかあひ生の松
右勝　　高　倉
里はあれて伏見の秋をきてとへは月こそやとれ淺ちふの露
住江月。又雖レ慕ニ神社之威一。伏見秋。乃殊入ニ幽玄之境一。
仍爲レ勝。

二十五番
左　　前宮内卿
たつた河紅葉はまたき浪の上に水の秋しる月そさやけき
右勝　　實持朝臣
月すまはあたに過行人もあらしこよひはたゆめすまの關守
紅葉はまたき水の秋しる。其詞姿雖ニ拔群一。こよひはた
ゆめすまの關守。猶可レ然之由被レ仰。

二十六番
左勝　　行能朝臣
續拾
春日山峯の榊葉ときはなる御代の光も月にみえつゝ
右　　資季朝臣
明石かたかたふく月にまかせてや浪間の影も浦つたふらん
峯の榊葉。御代の光。尤足ニ稱美一。かたふく月。浪間の影。
もとより非ニ各別事一歟。以レ左爲レ勝。

二十七番
左　　信實朝臣
いとゝまた露をかさねてしらすけのまのゝ茅原月そ宿れる
右勝　　家長朝臣
君か代はめてゝもめてむ秋の月つもれとたれもわかの浦人
左させるあやまり侍らねと。しらすけいかにやと申人
聞え侍りき。つもれとたれもわかの浦人。姿詞めつらし
く。いひしりて聞ゆるよし各申。爲レ勝。

二十八番
左　　賴氏朝臣
しら雲の鳥羽田の山の山風に空晴まさる秋夜の月
右勝　　中宮少將
浪かゝるなにはの里のあし枕月見るとてやむすひそめ劒
左上句聞なれぬ事に侍れは。あし枕可レ勝之由定申。

二十九番
左　　有家朝臣
紅葉する月の桂のかは浪に光は花とちりまかひつゝ
右勝　　下　野
もしほ燒心あるあまの夕煙月にはたてす松か浦しま
左下句便なく侍り。右夕烟たてぬ心宜きよし申て勝。

三十番
左　　親季朝臣
難波えやしほみちくらし久かたの月ふきよする沖つ秋風
右勝　　兼　康
いくめくり秋のこよひを契るらんみかさの山を出る月影
右歌尤宜。爲レ勝。

三十一番
左持　　隆　祐
なかき夜の限もみえす武藏野や山なき空にすめる月影
右　　光俊朝臣
新勅
すみわたる光もきよし白妙のはまなの橋の秋夜の月
しろたへの濱名のはし。景色殊にきこえ侍にや。武藏野

の山なき心は。近年おほく聞え侍れと。ことなる難は侍らねは。爲レ持。

三十二番

左　　知家朝臣

あまのとのひとつにみゆる浪の上に月まつしまの秋の舟人

右勝　　源家清

たえす行秋の宮河いくちよも淸きなかれにすめる月影

左歌詞優に侍るを。當時月にむかはぬにや。秋の宮川尤可レ然。爲レ勝。

三十三番

左勝　　三位侍從母

ふりにけるあはれも月に住の江の松に夜ふかき秋の汐風

右　　右衞門督

いせしまや遠きひかたのしほかれに光みちたる秋の夜の月

とをきひかたに月の光みちたるよし。心は侍れと。住の江の松に夜ふかき月。景氣殊に思ひやらるゝよし申て。爲レ勝。

以下一本無之

女房	勝二持一	民部卿典侍
定家卿	勝一持一負一	高倉
家隆卿	勝一持一負一	實持朝臣
行能朝臣	勝一負二	資季朝臣
信實朝臣	勝一負二	家長朝臣
賴氏朝臣	勝一負二	中宮少將
有家朝臣	負三	下野
親季朝臣	勝一持一負一	兼康
隆祐	持一負二	光俊朝臣
知家朝臣	持一負二	源家淸
三位侍從母	勝一持一負一	爲家朝臣

群書類從卷第百九十九

和歌部五十四 歌合廿

遠嶋御歌合 嘉禎二年七月

題

朝霞　山櫻　郭公　萩露　夜鹿
時雨　忍戀　久戀　羇旅　山家

作者

左方

女房 後鳥羽院
前内大臣 家良公
權大納言基家
沙彌道珍 入道大納言忠信卿
侍從隆祐
少輔 家隆卿女
散位親成 信成朝臣息
藤原友茂 入道左衞門督能茂子

右方

從二位家隆
小宰相
正三位信成
如願法師
下野
散位長綱
散位家清 家長朝臣息
善眞法師

判

女房

一番　朝霞

左持　女房

しほかまの浦のひかたの明ほのに霞に殘るうきしまの松

右　從二位家隆

春のよのおほろ月夜のなこりとやいつる朝日も猶霞らん

凡歌を判する事は。道に執してゆるされたる物を撰ひて。難波のよしあしをわかち。わたつ海のふかきあさきを定しむ。しかるを花の宮この昔。わつかに三十一字の詞をつらぬといへとも。桑の門の今。三輩九品のつとめひまなけれは。富のを川のなかれたくむ事なく。わかのうら波きしをへたてゝ。十年あまり六年の春をおくれり。今更にこの道をもてあそふにはあらねとも。從二位家隆は。和歌所のふるき衆。新古今の撰者なり。八十餘の命の露。いまたあたし野の風にきえはてぬ程に。かれをめしくして。今一度思ひ／＼の詞をあらそひ。しなしなのすかたをたくらへんとおもふ。これによりて。鴈の玉章の便に付て。うとからぬ輩に。十題の歌をめしあつめて。書つかへり。人の數ひろきにをよはされは。きのふけふはしめて六義の趣を學ふ輩も入て。忍ふの森のことの葉は。風にちらむこと。旁はゝかりおほけれとも。

且は執心の障をのそかんかため。人のそしりをかへりみす。此歌愚詠をもて家隆にあへる事。道にそむけれは。しかるへきにもあらねとも。いそのかみふりにしとしを伴ひて。ことさらに是をつかへり。抑八代集の歌は。昔時々見侍しかは。併もありなから。猶あきらかならす。いはんやちかき世の人々の歌の中にも。十餘年の間のは。一首もきゝをよはされは。たとひ同歌をよめらんなとも。見とかめかたく侍る。しかのみならす。六十のよはひ。老耄もことはり過にたれは。只うはへに見ゆるすかたはかりを。おろ〳〵注し侍るへし。一番の左は。おほくは勝事にて侍れとも。これはいとめおとろくものにはあらす。右歌おほろ月夜の後朝。まことに朝かすみにたより有て。こと葉つゝきすかた殊におかしく侍る。しかれとも一番の左にことを寄て。こと更勝劣を決せさゝるなり。

二番

左持　前内大臣

おほはらやをしほの里の朝霞ゆきゝになれし春そ忘れぬ

右　小宰相

うら人の鹽やく里の朝かすみ春の物とやわかて見るらん

左をしほのさとの朝霞。往來になれしと讀る。おもふ所ありて見ゆるうへに。姿詞よろしく聞え侍るを。右の歌春のものとやわかて見るらんといへる業平か歌に。春の物とてなかめくらしつとよめるも思ひいたされて。やさしく見ゆれは。ともに分ちかたく侍り。持と申へし。

三番

左勝　權大納言基家

春のよのあくる霞の立田山これや神代の衣なるらむ

右　正三位信成

あさ霞雲ゐをかけて見渡せはいたりいたらぬ山のはもなし

左右ともに。わかちかたくは見ゆれとも。左神代の衣。たちまさるへくや侍らむ。

四番

左勝　沙彌道珍

明ぬるか霞の衣たちかへり猶君か代の春をまつかな

右　如願法師

あまの戸の明ゆく空はうれしきを猶はれやらすたつ霞哉

左の歌祝の心はあなかちに賞翫すへきにはあらねと。右うれしきをといへる。庶幾せられす。仍以レ左爲レ勝。

五番

左勝　侍從隆祐

朝日影またいてやらぬあしひきの山は霞の色そうつろふ

右　下野

山ひめの霞の袖も紅にひかりそへたるあさ日影かな

左歌させる難なし。右歌かすみの袖も紅に光そへたる朝日影。あまりはなやかに聞ゆるにや。左うるはしく見ゆれは。勝とすへし。

六番

左持　少輔

やまのはに有明の月の殘らすは霞に明る空を見ましや

右　散位長綱

朝戸あけてなかめなれたる明ほのに霞はかりに春をしる哉

左霞に明る空を見ましやといへる。あしからす見ゆる
を。上句に有明と置て。下句に霞にあくるといへる。す
こしおほつかなくや侍るへからむ。右歌いつれもこと
なる事見えす。准て爲レ持。

七番

左持　散位親成

今朝はまたそれとも見えす淡路嶋霞の下に浦風そ吹

右　散位家淸

春霞なひく朝けの鹽風にあらぬ煙や空にたつらん

左右ともにあしくも見えす。爲レ持。

八番

左勝　藤原友茂

朝またきたつ〔衍歟〕や霞の浪まより昨日はみえしあはち嶋山

右　善眞法師

さえかへる雪けの春の朝くもり霞むなのみや空にたつらん

左歌きのふは見えしあはち嶋山よろしく聞ゆ。右歌か
すむ名のみや空にたつらんといへる。あしからす聞ゆ
れとも。題の心におもへは。名はかりの霞は。なをいさ
さかをとるへくや。以レ左爲レ勝。

九番　山櫻

左持　女房

人こゝろうつりはてぬる花の色に昔なからの山の名もうし

右　家隆

なそもかく思ひそめけん櫻花山としたかくなりはつるまて

右歌なけきこるやまとしたかくといへる歌の詞。おか
しく見え侍る。左歌人心といへることをよむへからす
と。定めらるゝよし聞侍れとも。世にましらふへき歌に
てもなけれは。暫持と申へし。

十番

左勝　前内大臣

數ならぬみ山かくれを尋ねてそ心の末の花も見るへき（くイ）

右　小宰相

まかひこし雲をはよそに吹なして峯の櫻に匂ふ（かほる）春かせ

左右ともに。優に聞え侍れとも。こゝろの末の花。猶い
ろふかく見ゆ。以レ左爲レ勝。

十一番

左　權大納言

しら雲のあさ立山のから錦えたに一むら春風そふく

右勝　信成

かつらきや峯の櫻のさきしより心の空にかゝるしら雲

左歌あさたつ山のからにしき枝に一むらといへる。春
風と末の句にはあれとも。猶本歌の彿忘す。紅葉のこゝ
ちして侍る。しかもさくらとも花ともみえす。聊難とも
申つへし。右の歌。あしくも見えされは。させる難なき
をもて。勝とすへし。

十二番

左　道珍

うつりゆく花の下道跡もなしなかめもしろき春の山風

右勝　如願法師

身にかへておもふもくるし櫻花さかぬみ山の（にイ）宿りもとめん（もとめてんイ）

左歌あしからすきこゆるに。なかめもしろきといへる。

むかし俊成入道。しきりになかめといふものゝ別にあるやうによむことは。うけすと申侍りき。右歌は上下句よろしく聞ゆ。勝とすへし。

十三番

左勝　隆祐

さくら花空にあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

右　下野

櫻さくなからの山の永き日も昔を戀ぬ時のまそなき

左歌させる難なし。右歌是はやすらかに見ゆ。懷舊のこころさしあはれなれとも。歌から。左聊勝へきにや。

十四番

左勝　少輔

ちりちらす花より外の色そなきかさなる山の峯の春風

右　長綱

かつらきやたかまの山は埋れて空にたなひく花のしら雲

左歌よろしく見ゆ。右歌たかまのやまは埋れてと。ことことしく聞えなから。させる事なし。以左爲勝。

十五番

左勝　親成

山たかみみたれて匂ふ花櫻人もすさめぬ春やへぬらん

右　家清

行末の山のかひより昨日見し雲はさなから櫻なりけり

右歌やまのかひより見ゆるしら雲といへる貫之歌の心。よろしく聞ゆ。旅の歌によろしくみゆるや。せんなかるへき。左の歌。山たかみ人もすさめぬさくら花といへる本歌の心よろし。尤勝とすへし。

十六番

左　友茂

さくら咲よしのの山の山風に麓をこめて花匂ふらん

右勝　善眞法師

花の色はあまりにけりな筑波根のこのもかのもにかゝる白雲

左歌させる難もなく。又あなかちにめつらしきやうにもあらす。右歌つくはね。おほやうは山におもひならはしたれともあなかちにやまにはかきらす。只木おほかる所を申なといふ輩も有にや。しかれとも。山のこゝろにもいひなれたれは。歌からよろしきに付て。以右爲勝。

十七番

左持　女房

さのみやはつれなかるへき子規ねさめの空に一聲も哉

右　家隆

やはきやまむかひの里の時鳥忍ひしかたの聲もかはらす

左ほとゝきすの題に。いまたきかさる心は。ほいなくや侍らん。そのうへ。歌からも無下に見ゆる也。右歌これもいたくすくれたるものにあらす。持と申へし。

十八番

左持　前内大臣

神さふる歎きの森の子規ひくしめなはもなく／＼やこし

右　小宰相

さとわかすなけや五月の子規忍ひし比は恨みやはせし

左歌ねきことをさのみきゝけん社こそはてはなけきのもりとなるらめといふ歌をとれる。よろしく聞ゆ。右の歌。忍ひし比はうらみやはせしといへる。やさしきやう

に侍る。爲レ持。

十九番

左持　權大納言

なれをしそあはれとは思ふ子規あかす過にし年のへぬれは

右　信成

我ならて何をうしとか時鳥ことしも雲のよそに鳴らん

左右ともに。あしくも聞えす。又持とすへし。

廿番

左勝　道珍

明ほのはなみたやもろき子規なくねにおつる森の下露

右　如願法師

いまも猶むかしや戀る橘のはなちるさとに鳴ほとゝきす

左右ともに。おなしほとなれとも。右歌の末の句。いかにそゝ聞ゆ。仍以レ左爲レ勝。

廿一番

左勝　隆祐

しからきの外山の末の郭公たかさとちかきはつねなるらん

右　下野

たちはなの匂ひを空に尋きて山ほとゝきす聞ぬ日そなき

左たかさとちかきはつね。あしくも聞えす。右歌もさして難もなく見ゆれとも。左は猶すこし勝へき也。

廿二番

左勝　少輔

さみたれにやすらふ暮の時鳥そなたの雲に聲なへたてそ

右　長綱

過にけりさやは契りて郭公鳴音はかりはこそにかはらて

左歌あしくも見えす。右の歌なくねはかりは去年にかはらてといへる。すこし心えられす。何事のこそにかはれるそや。ほとゝきすは。こそのふる聲なといふ事なれは。かはらさらむも。ことはりにこそ侍れ。左すこし勝るへきにや。

廿三番

左持　親成

ほとゝきす山よりをちの里人はまたてやよはの初音聞らん

右　家清

うちしめり花たちはなの五月雨に軒もる夜半の郭公哉

右歌軒もるよはの子規。なきつる心は聞ゆれとも。なをおほつかなきやう也。左歌あしひきの山のあなたに住人はまたてや秋の月を見るらんといへるこゝろを取なせるにや。ともにさせる難もなし。持と申へし。

廿四番

左持　友茂

おほつかな誰きけとてか時鳥さよ更かたの空になくらん

右　善眞法師

待かねし夜半はむかしにかはらねと今年もつらしやま郭公

左右ともに。おなしほとに聞ゆ。猶持と申へし。

廿五番　萩露

左　女房

した葉には色なる玉やくたくらん風の吹しく萩の上の露

右勝　家隆

又や見むまたやみさらんしら露の玉置しける秋萩の花

左歌殊なるやうにも見えす。右歌またや見む又や見さ

らむしら露のといへる。殊におかしくも。あはれにも侍り。尤勝とすへし。

廿六番

左　　　　前内大臣

あき萩の露のよすかのさかりはも風吹たつる色そみにしむ

右勝　　　　小宰相

定めなき風を待まもうつろひぬ本あらの萩に結ふ白露

左歌つゆのよすかのさかり葉風吹たつらん。めつらしき様なから。すへてさかりはは。古今にも侍れとも。いたくえんには聞えす。右の歌すこしの難もなく。うるはしく見ゆれは。勝とすへし。

廿七番

左持　　　　權大納言

高圓の末野のま萩露ふかし峯の秋風吹すもあら南

右　　　　信成

久かたの天とふ鴈の涙さへ落てみたるゝ萩のうへの露

左右ともに。ことによろしく見ゆ。仍爲レ持。

廿八番

左　　　　道珍

ふるさとの萩の下葉も色つきぬ露のみ深き秋のうらみに

右勝　　　　如願法師

しら露の玉をきみたる萩かえに泪かすそふ秋の夕くれ

左右ともに。やさしきやうなれとも。右はいますこしたけも有て艷にも聞ゆ。仍勝とす。

廿九番

左勝　　　　隆祐

宮城野の木の下風や過ぬらん露におらるゝ秋萩の花

右　　　　下野

ものおもふ宿の物とてなかむれは露におれふす庭の萩はら

左歌露におらるゝ秋萩の花よろしく見ゆ。右歌も難は見えす。されとも。左猶勝たるへし。

三十番

左持　　　　少輔

玉をぬくまのゝ糸萩かたよりにをのれ亂るゝあきの夕暮

右　　　　長綱

待わたる時やきぬらんしら露の玉しく庭の秋萩の花

左右。ことなりといへとも。姿おなしかるへし。

卅一番

左　　　　親成

露すかる庭の萩原いろつきぬいかなる人の思ひそむらん

右勝　　　　家清

をく露は秋のならひの萩かえにあまるや鴈のなみたなる覽

左歌萩の人の思ひをそむらん事。いかなるへしとも覺えす。右歌ことに宜く見ゆ。尤可レ爲レ勝。

卅二番

左持　　　　友茂

上葉ふくあしたの原の秋風におのれうつろふ萩の下つゆ

右　　　　善眞法師

いまよりのたか泪とかなりぬらん下葉色つく秋萩のつゆ

左右ともに同躰の物也。右の歌に。たかなみたとかなりぬらんといへる。人のなみたの草の露となる事は。おほく聞ゆ。草の露を人のなみたに用る事は。すこしおほつ

かなけれとも。あなかち難まてはあらす。持とすへし。

卅三番　夜鹿

左　女房

久かたのかつらの影になく鹿の光をかけて聲もさやけき

右勝　家隆

天河秋の一夜の契りたに片野に鹿の音をや鳴らん

右歌　あきのひとよのちきりたにといひて。かた野に鹿のとつゝきたる。殊にやさしくきこゆ。惟高のみこ。片野に狩して。たなはたつめにやとかりしむかしまて。おもひよそへられて。おかしく侍り。左の歌すへてはいたくあしくもなきを。あらはに夜といふ事みえすなといふ難や侍らんすらむ。何様にも。右歌は秀逸と見ゆれは。尋常の歌ならふへきにあらす。尤勝とすへし。

卅四番

左　前内大臣

ものゝふもあはれと思へ梓弓ひくてもよはの小男鹿の聲

右勝　小宰相

つれもなき妻をや頼む秋風の身に寒き夜は鹿も鳴也

左の歌させるなんなくみゆるを。右歌つれもなき人をそたのむ暮る夜ことにといへる歌をおもひてよめる。殊によろしく聞ゆれは。勝とすへし。

卅五番

左持　權大納言

をのかすむ峯の木枯寒き夜は鹿も紅葉の衣きぬらし

右　信成

すみのほる月にうらむる聲す也ねられぬ鹿や夜寒成らん

左歌鹿ももみちの衣きぬらしといへる。おかしく聞ゆるを。右歌ねられぬ鹿や夜寒なるらんとよめる。又やさしく見ゆ。仍爲レ持。

卅六番

左　道珍

秋おもふ泪やもろき夕月夜木の葉かくれに鹿そ鳴なる

右勝　如願法師

をやま田に風の吹しくいな莚よるなく鹿のふしと成けり

左歌さしたる難はなけれとも。右歌猶よろしく侍る。勝とすへし。

卅七番

左持　隆祐

むは玉の夜や更ぬらんさを鹿の聲すみのほるをのゝ草ふし

右　下野

秋のよはつまとふ鹿のみ山出ていまた旅なるをのゝ草ふし

左右の小野の草ふし。いくほとの勝負なし。宜可レ爲レ持。

卅八番

左　少輔

いま更にふしも定めぬ鹿のねに木葉の數の積る夜ことに

右勝　長綱

木の葉ちる夜半の嵐の月影に心すみてや鹿も鳴らん

左歌木葉の數のつもる夜ことに。珍らしきやうには見ゆれとも。右歌はうるはしきやうに聞ゆれは。勝とすへし。

卅九番

左持　親成

さをしかのふしとを淺み吹風に夜半に鳴ねそふかく成ゆく

右　　　　　　　　　　　　　　家　清

さらてたにれさめ悲しき秋風によるしもなとか鹿の鳴らん

左歌よはになく音そふかくなりゆくといへることは。艶にも聞えす。右歌よるしもなとか鹿のなくらんとよめる。夜はかり鳴やうに聞ゆらん。鹿は秋になりぬれは。いつもなくものなり。すかる鳴秋の萩はら朝たちてなと。古今にもよめり。左右歌すへて。勝負なく見ゆ。持とすへし。

四十番

左勝　　　　　　　　　　　　　友　茂

やま本の森のしめ繩なかき夜を秋のをしかの鳴あかすらん

右　　　　　　　　　　　　　善眞法師

なよ竹の夜なかき秋の山風にいくたひ鹿のねさめしつらん

左歌山本の杜のしめなは長き夜をといへる。よろしく聞ゆ。右歌よなかき秋のやまかせ。かちまけなく見ゆれとも。猶左まさるへくや。

四十一番　　時雨

左持　　　　　　　　　　　　　女　房

物おもへはしらぬ山路に入ねともうき身にそふは時雨也梟

右　　　　　　　　　　　　　　賓　隆

かく計定めなき世に年ふりて身さへ時雨る神無月かな

右歌ふりみふらすみさためなきといへる。しくれの歌のことはを。さためなき世にいひなせる。ことに優にみえ侍る。左歌も。こゝろおなしやうに聞ゆ。暫持とすへし。

四十二番

左持　　　　　　　　　　　　前内大臣

へたてこし昔の人めかれはてゝ時雨にもろき秋の古鄉

右　　　　　　　　　　　　　小宰相

神無月木の葉時雨ぬ頃ならはさのみねぬよの數はつもらし

左右ともに。やさしきやうに見ゆ。左はむかしの人めかれはてゝと云。右はさのみねぬよの數はつもらしとよめる。とり〳〵によろしく聞ゆ。持と申へし。

四十三番

左勝　　　　　　　　　　　　權大納言

風むせふ檜原の時雨かきくらしあなしの嶽にかゝる村雲

右　　　　　　　　　　　　　　信　成

もの思へは雲のはたてを限にて時雨もいたく降みたるかな

右歌しくれもいたくふりみたる。やさしきやうなるを。左歌穴師の嶽にかゝる村雲。たけ有て見ゆれは。勝とすへし。

四十四番

左　　　　　　　　　　　　　　道　珍

秋の色も時雨にもろき深山路の苔の綠の露そうつろふ

右勝　　　　　　　　　　　　如願法師

しからきのとやまの紅葉散はてゝさひしき峯にふる時雨哉

左歌あしくもみえ侍らぬを。さまてくるしかるへきにはあらねとも。此作者の歌に。もろきといふ事あまたよめる。少しとけなくや見ゆらん。右歌やすらかにて。歌からもあしからす。左もろきの難は。此歌にかきるへきにはあらねとも。猶以レ右爲レ勝。

四十五番
左　　　　　　　　　　　隆祐
かみな月くもらぬかたの空までも風に亂れてふるしくれ哉
右勝　　　　　　　　　　下野
忘られぬ昔は遠くなりはてゝ今年も冬ぞ時雨きにける
左歌曇らぬかたの空までも風にみたれてとよめる。よろしく見ゆるを。右歌ことしも冬ぞ時雨きにけるといへる。おかしく聞ゆ。勝劣分かたく侍れとも。猶むかしは遠くとをける心。あはれに侍れは。勝と申へし。

四十六番
左　　　　　　　　　　　少輔
しくれゆく日かずも今はつもるらん浦の苫屋に色は見えねと
右勝　　　　　　　　　　長綱
高砂の尾上の松のはつ時雨ふるにかひなき世をやしるらん
左浦のとま屋に色はみえねとといへる。あしくは見えねとも。右たかさごの松の時雨にそまぬを。ふるにかひなきとよそへたる。おもふ所ありて。よろしく見ゆ。勝とすへし。

四十七番
左勝　　　　　　　　　　親成
神無月時雨はかりそ槇の屋に昔ながらの音もかはらぬ
右　　　　　　　　　　　家清
僞の色にやみえむ神無月つれなき松にしくれふりなは
左歌させる事はなけれとも。かはらぬ事は時雨の音はかりとよめる。あはれなるやう也。右僞のなといへる。こひねがふへきやうにもあらず。聊以左爲勝。

四十八番
左持　　　　　　　　　　友茂
神無月みやまかくれの夕時雨たかたもとにか色を見すらん
右　　　　　　　　　　　善眞法師
時雨つゝ風さたまらすなるまゝにむら雲まよふ遠近の山
左たかたもとにか色を見すらんといへる。あしくも聞えず。村雲まよふ遠近の山。又よろしきやうなるを。冬の初とて。風定まらずとよめる事。常にはきこえず。しかれとも。歌からあしくも見えねは。持とすへし。

四十九番　忍戀
左持　　　　　　　　　　女房
手をたゆみをさふる袖も色に出ぬまれなる夢の契はかりに
右　　　　　　　　　　　家隆
忍ひても聲たてぬへし枕より跡より戀のせめてうき頃
左させる事なく見ゆ。右歌本歌はいかひの中に侍れとも。あとより戀のせめてうきころとよめる。おかしく見ゆ。しかあれとも。左もことなる難なくは。持と申へし。

五十番
左　　　　　　　　　　　前内大臣
つゝめとも心の空にたつ雲のきえぬ物からしる人はなし
右勝　　　　　　　　　　小宰相
思ふともこふ共しらし山城のときはの森の色に出すは
左歌下句。さえぬものからよるかたもなしといへる。本歌に少似て侍り。七文字をとる事は。定れる事なるを。又の七文字の內。三文字をとれるに。文字のをき所もお

なしゆへにや。耳に立て聞ゆるを。右歌思ふとも戀とも
しらしといへる。やさしく聞ゆ。勝とすへし。

五十一番

左勝　權大納言

なみた川袖の玉もの下亂れ人やはしらんせくかたもなし

右　信成

我戀は深山かくれのしらま岩したゆく水に結ほほれつゝ

左右ともに。なたらかに見ゆれとも。袖の玉藻のしたみ
たれ。なをやさしく聞ゆ。仍以レ左爲レ勝。

五十二番

左　道珍

難波江やみしかき芦のよとともに落る泪をしる人やなき

右勝　如願法師

芦の屋に霧たちまよふ夕烟したの思ひもみちや絶なん

左右ともに。あしくも見えぬを。右歌したの思ひのみち
やたえなんといへる。猶おかしく聞ゆ。可レ爲レ勝。

五十三番

左持　隆祐

おもふ事岩ねの苔に浪かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

右　下野

いかにせん又しる人もなきなかす泪をたれにつけの小枕

左忍戀につねによむ風情也。右歌又しる人もなきなか
すといへるつゝき。いたくえんにも聞えす。なきなかす
涕にそへて絶ぬれは花田の帶のこゝちこそすれといへ
る。此歌のこと葉をとれるにや。しかれとも。こひねか
ふへきすかたにもあらす。左もいたくめなれたれは。持
とすへし。

五十四番

左勝　少輔

もらさしと岩こす浪をせきかへし袖にくたくるせゝの白玉

右　長綱

いかにせん苔の下行水たにも人にしられぬ道はしりけり

左歌忍戀におほく聞ゆるふる事なれとも。いたくあし
くは見えす。右歌こけのしたゆく水といへる。いと聞よ
くもなし。左は聊勝へし。

五十五番

左勝　親成

したにのみ忍ふ泪やかよふらん君かあたりの草の上の露

右　家清

かす〳〵に人やとかめむ中々につゝめはもろき袖の涕を

左右ともに。下句はあしくも見えさるを。左したにのみ
忍ふなみたやといへる。平懐にきこゆれとも。忠峯か歌
に。君かあたりの草にきえなんとよめるこゝろを取れ
り。右ははしめの五文字に。かす〳〵にとをけるより。
いたく重點かちにきこゆらん。左の下句。聊まされり。
仍勝とすへし。

五十六番

左持　友茂

我戀は忍ふの衣しのふともしらてみたるゝ袖の月かけ

右　善眞法師

あしひきの山のゆきあひの埋水ふかき淺きもしる人そなき

左歌いと珍しくはあらねとも。さして難は見えす。右歌

山のゆきあひの埋水なと。ふるまひたるやうなれとも。さしてめにたつ事なし。持とすへし。

五十七番　久戀

左持　女房

夜とともに亂れてそ思ふ山鳥のをろの長おの永きつらさに

右　家隆

戀瀬川つれなき中にゆく水は年もせかれぬ涙なりけり

右歌としもせかれぬ泪なりけりといへる。よろしく見ゆ。左歌めなれたるふることに侍れとも。いたくあしきものにあらすは。持とすへし。

五十八番

左持　前内大臣

いかにせん命もしらぬ松山のうへこす浪にくちぬおもひを

右　小宰相

年をへてつらき思ひの限をも見はてゝよはる玉の緒もかな

左松山のうへこすなみといへる。殊やさしく聞ゆ。右歌見はてゝよはる玉の緒もかなと。是もえんに見ゆれは。宜爲ㇾ持。

五十九番

左勝　權大納言

山城のみつののまこもかりそめにみよしの山を戀渡る哉

右　信成

泣なみた淵となりても年はへぬいつまて袖の下によとまん

左歌うへには久しき心かすかなれとも。本歌なとに付てよみ侍るにや。右歌淵となりてもとしはへぬと詠る。久心もつよく見ゆるに。下句に。いつまて袖の下によとまんといへる。忍ふ心にかたとれるやよしなかるへき。しかれは。以ㇾ左爲ㇾ勝。

六十番

左　道珍

いもせ川かさなる年のかひそなき泪はかりはうき沈めとも

右勝　如願法師

しらさりき音に聞えし三輪川の流れて人を戀ん物とは

左歌なみた計はうきしつめともとよめる。いさゝかおほつかなく聞ゆ。なみたにうきしつむといへることはおほかれとも。浮しつむらんもおなし事なるへきか。右歌さして難なく見ゆれは。勝とすへし。

六十一番

左勝　隆祐

徒に年はへにけり玉の緒のなからへはとも契やはせし

右　下野

年をへてひけとよはらぬ梓弓さてやゆつるのかけはなれけん

左歌させる事なく見ゆ。右歌からはこと〳〵しけにて。いやしきさまには見えさるを。上句に梓弓といひて。下句にゆつるとよめるは。もしおなし事にや。しかれは左聊可ㇾ爲ㇾ勝。

六十二番

左勝　少輔

契りしも俤まつやたえぬらんみとせを待し人の心は

右　長綱

いたつらに只ことの葉そ積りゆくこととしもおなし秋の木枯

左歌みとせを待し人の心。やさしきさまなり。右歌こと

しもおなし秋のこからし。これもあしからす見ゆれと。
左は猶勝たるへし。

六十三番

左　　親成

年へてもとはれん物か三輪の山いかになりゆく契りなり共

右勝　　家清

あはてのみ苦しき物と思ひしる長きうらみのあまの釣縄

左歌いかにまち見む年ふともといへる伊勢か歌のこゝろとは見えなから。下句。さたかにこゝろえぬさまなり。右歌あしくも見えす。可レ為レ勝。

六十四番

左持　　友茂

霜まよふ千木のかたそきあはてのみ幾夜か袖に消かへる覧

右　　善眞法師

よそにのみ淺まの嵩を見しほとに我おもひさへ年はへにけり

左右ともに。させる難なく見ゆれは。可レ為レ持。

六十五番　覊旅

左　　女房

數ならぬみしまかくれに年をへて鹽たれわふととはゝ答へよ

右勝　　家隆

おりしかんひまこそなけれおきつ風夕立浪のあらきはま荻

左歌聞なれたるやうに侍れとも。さしたる難はなきにやと見ゆるを。右歌おりしかんひまこそなけれおきつかせといひて。夕立なみのあらき濱荻とつゝけたる。ことに珍しくおかしき樣。尤右為レ勝。

六十六番

左勝　　前内大臣

日數さへしのゝをふゝき立かさねあふみち遠きゆく末の空

右　　小宰相

古郷のたよりもしらぬあら磯の泪はかりそ袖にかゝれる

左歌しのゝをふゝきたちかさねといひて。あふみち遠きとつゝけたる。おかしく聞ゆ。右歌よろしくはみゆれとも。猶左勝とすへし。

六十七番

左持　　權大納言

吹とむるおきつしほひの夕なきに遠山うかふあきのうら浪

右　　信成

またしらぬ山路の露にやとりきて月もならはぬ旅や悲しき

左歌は。海に山のうかへる。旅泊の心引て聞ゆ。然はおほく覊旅にも。近比はよみあへり。堀河院百首の旅の歌に泊のこゝろをよまさる也。むかし和歌所にて。人々申侍しは。覊旅と泊とは。詩なとには同事に作れとも。中中やまとことはには。すこしかはるへきにやとさたしあへりし。右歌覊旅の心は。たしかなれとも。左に勝るへき物にはあらす。可レ為レ持。

六十八番

左持　　道珍

しるへせよ旅ねの夢のさめやすくつらき枕に殘る月影

右　　如願法師

和田の原やそしまかけてしるへせよ遙かにかよふ沖の釣舟

左右ともに。しるへの心。おなし樣よろしくは見ゆ。左つらき枕にのこる月影と云。右やそしまかけてしるへ

せよといへる。いつれも分かたけれは。持とすへし。

六十九番

左持　隆祐

けふは又明石のとよりこき出てつらき枕に殘る月影

右　下野

あしひきの山分衣うちしめり袖にあまきる峯の秋霧

左長あるやうにはみえなから。えんなるさまには聞えす。右はすこしやさしき樣に聞ゆれとも。勝まてはなかるへし。

七十番

左勝　少輔

かへり見し古郷とをくへたつ也過にしかたにかゝるしら雲

右　長綱

かへりみる我古郷は霧こめていやとをさかるおほよとの浦

左歌過にしかたにかゝるしら雲。よろしく見ゆ。右歌別にことなる事なし。左猶爲レ勝。

七十一番

左　親成

たひの空しらぬ山路に行暮て渡りもなれぬ谷の梯

右勝　家清

物おもふ旅ねの草の枕より色つきそむる野への秋風

左歌未練なるやうに見ゆ。右をもて爲レ勝。

七十二番

左　友茂

あすは又かさなる山とかへりみんけふこえうつる峯の白雲

右勝　善眞法師

思ひ出る片野の草のかり枕あらぬ秋にや袖そ露けき

左歌羇旅のこゝろさしは慥なから。五文字のいかにやらむ。すへおほせてもみえさる也。右歌からは。心も有てよろしく見ゆるに。旅のこゝろや。ふそくなるらむ。思ひいつるかたのゝ草のかり枕は旅なれとも。あらぬ秋のいまはに。旅ならすとも思ひ出ぬへし。然れとも。歌のすかたやさしく見ゆれは。以レ右爲レ勝。

七十三番

左勝　山家　女房

軒はあれて誰かみなせの宿の月過にしまゝの色やさひしき

右　家隆

さひしさはまた見ぬ嶋の山里を思ひやるにも住こゝちして

左右ともに。おもひやりたる山の家に侍るを。いまた見ぬを思ひやらむよりは。とし久しく見ておもひ出んは。今すこし心さしもふかゝるへけれは。相構。一番は左の勝と申へし。

七十四番

左勝　前内大臣

しらかしのしらぬ山路になりぬともをくれしと思ふ峯の松風

右　小宰相

住わふる深山のおくにしられけり我身をさらぬ浮世成とは

左歌もろこしのよしのの山にといへる古歌の心。優に侍る。右わか身たにさらぬうき世。よろしく見ゆれとも。なを左をもて勝とすへし。

七十五番

左持　權大納言

世のうきは人つてなから身にそひて猶此山も住かひそなき

右　信成

住かへてうきをなくさむ時や有とこれより奥の山のはも哉

左右ともに。心同事なる上に。歌からも勝劣なければ。持とすへし。

七十六番

左　道珍

岡のへの里の草葉もうら枯て時雨をもれる松の下露

右勝　如願法師

何ゆへにふかき山とも契りけん心の外にすむ庵もなし

左歌あしくは見えさるを。時雨そ傍題にや侍らん。右歌ことはりふかくみゆれは。聊まされり。仍爲レ勝。

七十七番

左持　隆祐

宮古とて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな

右　下野

かり庵さすしはし計のさひしさと思ひしまゝにつもる年哉

左右ともに。無二異事一。爲レ持。

七十八番

左持　少輔

とはれてもまちかきほとの里そなき山陰深き三輪の芦垣

右　長綱

今は又世のうき時のなくさめにいふかひもなき山のおく哉

左右ともに。無二指難一。可レ爲レ持。

七十九番

左持　親成

山さとの庭の岩橋跡ふりて嵐そわたるとふ人もなし

右　家清

さひしさは庭の眞柴にふく風のそよ音信て人は問來す

左ことなることなし。右庭のましはといへる。打まかせては。いかなるやまさとにも。庭に柴の生る事は見えす。そのうへ。そよをとつれてとよめるつゝき。家長か好みよみしすかたにて。あはれに見ゆれとも。歌からさまてなけれは。持とすへし。

八十番

左　友茂

あしひきの山の庵に住人も猶高ねにや月を待らん

右勝　善眞法師

雲かゝる峯の松垣あれにけり世をのかれにし年やへぬらん

左右ともに。させる難はなけれとも。右聊やさしきやうなれは。可レ爲レ勝。

女房	勝一	負三	持六	家隆
前内大臣	勝三	負三	持四	小宰相
基家	勝四	負一	持五	信成
沙彌道珍	勝二	負七	持一	如願法師
隆祐	勝五	負一	持四	下野
少輔	勝五	負二	持三	長綱
親成	勝三	負二	持五	家清
友茂	勝二	負三	持五	善眞法師

右遠嶋御歌合以類本印本挍合

河合社歌合寛元元年十一月十七日

題

冬月　千鳥　不逢戀

歌人

左

前權大納言藤原朝臣爲家　散位藤原朝臣信實
左近衞權中將藤原朝臣光成　左近衞權少將藤原朝臣爲敎
日吉禰宜祝部宿禰成茂　鷹司院兵衞督
藻壁門院少將　春宮辨
安嘉門院甲斐　能還法師

右

沙彌蓮性　沙彌眞觀
少將弟　正親町院左京大夫
前丹後守藤原永光　左近衞權中將藤原朝臣爲氏
沙彌圓空　散位藤原朝臣行家
散位藤原朝臣爲綱　中務大輔藤原朝臣爲繼

判者　藤原朝臣爲家

一番　冬月

左　前權大納言藤原朝臣爲家

よそなから豐の明のこの比とおもひ出たる月そかなしき

右勝　沙彌蓮性

神代より霜降りをける眞榊のいやとしのはにすめる月影

左歌 題の歌とは聞えすして。そのこと〻なきやうにみえ侍るにや。月そかなしきといひはてたる。ことに見ところなく侍へし。右歌眞榊の霜にすめる月。殊にとをしろく。神代まておもひやられて。うるはしき姿に侍れは。一番の左とて。ゆるさるへくも見え侍らねは。右爲レ勝。

二番

左　散位藤原朝臣信實

さえあかす森の嵐に空晴て月は木のまの冬かれもなし

右勝　沙彌眞觀

おきいて〻又社みつれ冬の夜に澄かへりたる山の端の月

左杜の月嵐にはれ。冬かれなき木のまのおもかけ。あらはに侍を。さえあかすと侍るや。させるようなく侍らん。右又こそみつれとをきて。澄かへりたる山の端の月。まことにおほろけならす見え侍れは。猶右勝と申へし。

三番

左持　左近衞權中將藤原朝臣光成

冬かれのた〻すの森のこの間よりみたらし川にやとる月影

右　少將弟

冬くれは月のかつらも木枯にまはらなれはや影のさひしき

右歌詞つ〻きやすらかにいひくたしてよろしく侍るを。左社頭月おもかけ侍れは。をとると申かたし。爲レ持。

四番

左持　左近衞權少將藤原朝臣爲敎

夜を寒み氷るをさ〻の霜の上に影さやかなる冬の月哉

右　左京大夫

袖さえてねなくに明ぬ冬の夜をいかにさひしく月も澄らん

左下句はよろしくみえ侍るを。氷るをさ〻と侍る。つ〻

きても聞えすや。右歌月もすむらんと侍る。おもひやりたるやうにて。本意侍らねと。また同しほとゝ申へくや。

五番

左勝　日吉禰宜祝部宿禰成茂

天の川もゝちの橋はとたえして氷をわたす冬のよの月

右　前丹後守藤原永光

さえわたる冬は氷のことはりをみつなき空にすめる月影

右氷のことはりを水なき空にすめるといへる。少いかかと。心得かぬるやうに聞え侍るにや。左銀河。やすくいひくたして侍れは。氷をわたす冬の月影。なをさえまさると申へし。

六番

左持　兵衛督

常盤なる木のはかくれはかはらねと月は冬社寒まさりけれ

右　左近衛權中將藤原朝臣爲氏

敷妙の衣手さむし冬の夜に雪けさえたる山のはの月

月は冬こそといへるふることとも。ときはなるとては。誠にこの葉かくれ心もこもりて。めつらしくみえ侍るへし。雪けさえたる山のはの月。さしたるとかなく見え侍れは。暫爲レ持。、

七番

左持　少將

くるゝより夜もすからふく木枯に涙こほりて月をみる哉

右　沙彌圓空

をしなへてあまてる月のかつらにも冬は淋しき影やそふらん

左涙氷りて月をみる哉。まことに夜もすからふく木枯のさえて聞え侍を。右天てる月の桂にも。冬はさひしき影やそふらんと侍る。殊に歌からよろしく侍めれは。猶勝負いつれと申かたくこそ侍れ。

八番

左持　辨

木枯の吹もたゆまぬ夕暮に山のはさむく出る月かけ

右　散位藤原朝臣行家

冬川のそこまて月のかけさえて下行水も猶氷りつゝ

左は暮山に嵐さむく。右は冬川に氷さえたる景氣。姿詞いつれもをとりまさると申かたし。猶爲レ持。

九番

左　甲斐

霜雪の色もひとつにさゆれとも跡社みえね庭の月影

右勝　散位藤原朝臣爲綱

そのかみを思ひそ出る山あゐの袖にもなれし冬のよの月

霜雪の色もひとつにとをきて。跡こそみえねといへる。心あるさまに侍るを。そのかみをおもひそ出ると侍る。同し月のひかりも。懷舊の心あはれに見え侍れは。山あゐの袖たちまさり侍るへし。

十番

左　能遍法師

みるまゝに光そさむき冬のよの月の桂に嵐吹らし

右勝　中務大輔藤原朝臣爲繼

一むらのたゝすのもりの木枯にあたり隈なき月の比哉

左歌あまりにやすく聞え侍らん。右歌下の句そすこしいひおほせぬさまに侍れと。上の句。此歌合には。捨か

たく侍れは。可ㇾ爲ㇾ勝。

十一番　千鳥

左　爲家卿

河あひや身をうき波にたつ千鳥またはためしも鳴々そふる

右勝　蓮性

行かへるかもの河原のとも千鳥しはし(ら歟)な下に祈る心は

左歌ためしなき身をうれへたるはかりにて。ようあることゝはみえ侍らす。右行歸るかもの河原。かくこそつゝくへく侍りけれ。しらしな下に祈る心はと侍るも。そのゆへふかく侍れは。尤以ㇾ右可ㇾ爲ㇾ勝。

十二番

左持　信實

霜さゆるつゝみのうへの川むかひ遠かたきけは千鳥鳴也

右　眞觀

神さふるたゝすの森の夕千鳥川瀬をかけて鳴わたる也

つゝみのうへ。たゝすの森。川むかひ。夕千鳥。をちかたきけは。河瀬をかけて。おかしく見え侍れは。よろしき持と申へくや。

十三番

左持　光成

吹まよふ川風さゆる冬の夜の曉ふかく千鳥鳴なり

右　少將弟

聲たてゝ霜夜を寒みなく千鳥かけみたらしや先氷るらん

右かけみたらしやと侍。あなかちにようなく侍るにや。左またさせる事なく侍れは。勝負なくて侍れかし。

十四番

左持　爲敎

冬きては風やさむけき川千鳥なかき霜夜に今そ鳴なる

右　左京大夫

冬川の汀の氷寒からし友よふちとり侘つゝそなく

兩首無㆓得失㆒。一決不㆓分明㆒。

十五番

左持　成茂

誰ためのあふせを夜半に尋ぬらん川なみ千鳥立居鳴也

右　永光

わかまたぬとしまか波に鳴千鳥更ぬる聲そ身にしられける

左下句ちからあるさまに侍るを。上句すこしおほつかなきやうにや侍らん。右更ぬる聲そ身にしられけるといへる。さしあひたるやうに侍るうへ。としまかなみと侍るも。みゝに立侍れは。なすらへて可ㇾ爲ㇾ持。

十六番

左勝　兵衞督

置まよふ霜夜の千鳥をちかへりなく音も寒きかもの川風

右　爲氏

くれ行は夕なみ千鳥聲たてゝ河風寒み今そ鳴なる

左右の千鳥。させるとかなく侍れと。おなし河風も。社頭あらはれて侍らんは。勝侍るへし。

十七番

左勝　少將

冬されは加茂の川風吹過て霜夜の千鳥はるかにそ鳴

右　圓空

夜を寒みはかひの霜やかさぬらん拂もあへす千鳥鳴也

左け景氣幽にて宜しく聞え侍り。右は心詞こまかにて捨かたく侍れとも。先の番に。すてに加茂の川風まさるへしとさためつれは。是もさこそ侍らめ。

十八番

左　辨

河風に千鳥なく也むは玉のよるの氷のうへやかなしき

右勝　行家

おきつ風あら磯なみのいやましにたつことやすきさよ千鳥哉

よるの氷のうへやとさされたるそ。いかゝと見え侍る。たつことやすきつねのことも。あら磯波の千鳥にては。めつらしく聞え侍れは。川風よりは奥津風つよくや侍へき。

十九番

左勝　甲斐

夜を寒み氷る汀のむら千鳥をのれや波に立かはるらん

右　爲綱

風わたる河邊や寒き小夜千鳥更行波に聲そ恨むる

氷る汀といひて。をのれや浪に立かはるらん。よろしくこそ侍めれ。川邊やさむき聲そ恨るといへるほと。すこしをとり侍るへきにこそ。

廿番

左　能暹

神さふるみたらし川に住千鳥なれもうれへのねをやなくらん

右勝　爲繼

音さゆるかもの河風夕かけてなかき霜よに千鳥鳴也

みたらし川に住千鳥。なれもうれへと侍る。をしこめていかゝと聞え侍る。述懷のうたは身をうらむへくや[　]なとをとふらはれやうにや聞え侍るへき。かもの川風ゆふかけて。させるとかなく侍れは。以右爲勝。

廿一番　不逢戀

左　爲家

君たにもねてとたのめはもろこしの虎臥のへに百夜なり共

右勝　蓮性

風あらき浦の笘屋に立煙こゝろやすくはなひきやはする

左とらふす野邊。いかさまにも物とをく聞え侍るうへに。右心やすくはなひきやはする。ことにやさしく見え侍れは。浦の煙たかく立まさり侍へし。

廿二番

左　信實

徒に戀をしこふるわかためし岩にも松のたねをやはみん

右勝　眞觀

身は捨つ今は此よに逢事をなにゝかへてかこひわたるらん

右初の五文字を讀あけ侍るより。作者にとりては。ことはりもかなひ。こゝろこと葉もゆうに侍るを。詠吟し侍るほとに。左の岩にも松のふるきためしも。徒に申おとし侍ぬるにや。

廿三番

左持　光成

年ふれとあふみの海は名のみしてみるめよせこぬしかの浦波

右　少將弟

有明をつれなしとたにならはねは別をしらぬ曉そうき

左は詞つよくて。ちからあるさまに侍るにや。右は心か

すかにて。ゆふに侍れは。れいの持とさため申へし。

廿四番

左　爲数

逢事はかたゝのおきにこく舟のみるめもしらて世を渡る哉

右勝　左京大夫

我戀は名高のうらのなひきもの心はよれと逢よしもなし

左はかたののおきにこく船のみるめもしらぬといへることと葉めつらしからす侍にや。右は名高のうらのなひきもの心はよれとと侍る。すかたやさしく侍れは。可レ爲レ勝。

廿五番

左　成茂

人しれぬ袖の雫やみちのくのいはて忍ふの山かはのみつ

右勝　永光

富士のねになひくを人の心ともならぬおもひに立煙哉

左いはて忍ふの山川も。こゝろのおくしられて。ふかくみえ侍るを。右なひくを人の心ともならぬおもひにといへる。ふしの烟めつらしく。めにたち侍れは。又以レ右爲レ勝。

廿六番

左勝　兵衛督

かりにたによる舟もなし波高きうらのみるめの下のこかれは

右　爲氏

おもひ侘つらさのまゝに戀しなは此世はさても後そ悲しき

左は詞つよく。心たしかに。右はたいかすかに。すかたよはく侍れは。作者をとりかへはやとそ見え侍る。女房の歌よはきこそ。ゆるさるゝ事に侍れは。尤以レ左爲レ勝。

廿七番

左持　少将

逢まてと戀に命のなからへはうきを限の世をやつくさん

右　圓空

天の原とよはた雲の立まよひ空にみたるゝ戀もする哉

左歌心詞えんに侍を。うきをかきりと侍そ。をのつから逢事ありとも。うかるへきかと。きこゆへきかた侍るへき。右歌とよはた雲の立まよひ空にみたるゝ戀もするかなと侍る。たけあるさまにて。さのみまくへき姿に侍らぬに。あはぬ戀の心おほつかなくやと見え侍れとも。かやうの戀のうた。みなあはぬかほには。さしてきこゆる事侍らねは。ともによろしき持にて侍かし。

廿八番

左持　辨

こひしなん命をいつの爲とてか逢にかへすは殘しとゝめん

右　行家

ほし侘ぬ我心なる涙たにたかゆかりとてつれなかるらん

左右ともに。やさしく見え侍れは。又可レ爲レ持歟。

廿九番

左勝　甲斐

思ひねの夜な〳〵通ふ夢ならてなとかうつゝのみちなかる覽

右　爲綱

長らふる身を厭ひても玉のをのあふにかふへき頼たになし

よな〳〵かよふ夢ならてうつゝのみちなきこゝろ。えんに侍めり。なからふる身をいとひても。あふにかふへ

きたのみなき心。すこしことはりかなはすや聞え侍らん。尤以左爲勝。

三十番

左勝　　　　　　　　　　　　能　　蓮

思ひねの夢をこの世のあふことに頼むさへ社かなはさりけれ

右　　　　　　　　　　　　　爲　　繼

なにせんに身を長らへてうき人の心つよさのはてを見る覽

左下句すこしうちとけてや侍らん。右心つよさのはてなどなにせんになからへてみるらんと侍心。いかにみるにか侍らんと。思ひわきまへかたく侍れは。左勝侍れかし。

そむる色のふかき涙もわかぬ身に

いかゝたゝすの森のことの葉　　　　爲　　家

右河合社歌合以百花庵宗固本挍合畢

群書類從卷第二百

和歌部五十五 歌合廿一

院御歌合 寶治二年

題

早春霞　山花　五月郭公　初秋風　海邊月

野外雪　忍久戀　逢不會戀　旅宿嵐　社頭祝

作者

左

女房　太政大臣

權大納言源朝臣通忠　權大納言藤原朝臣定雅

權大納言藤原朝臣公基　中納言藤原朝臣爲經

右衞門督源朝臣通成　兵部卿源朝臣有敎

右近權中將藤原朝臣師繼　沙彌蓮性

左近權中將藤原朝臣爲氏　左京權大夫藤原朝臣經朝

嘉陽門院越前

右

承明門院小宰相　俊成卿女

權大納言藤原朝臣實雄　權大納言藤原朝臣公相

左近少將藤原朝臣爲敎　散位藤原朝臣信實

散位藤原朝臣雅光　辨内侍

右近權中將源朝臣雅忠　下野

少將內侍　沙彌禪信

前權大納言藤原朝臣爲家

講師

讀師

判者　前權大納言藤原朝臣爲家

一番　早春霞

左勝　女房

いつくより春はきぬらん天の戸の明るをまたすたつ霞哉

右　承明門院小宰相

春きても猶氷しく衣川霞もいく重立わたるらん

左歌首尾相叶て。心詞花麗の姿にこそ侍るめれ。右歌衣川氷しくはかりにて。かけても用なく見え侍るうへに。猶氷れる程ならは。霞幾重とは事たかひて侍らん。いかさまにも。以レ左爲レ勝。

二番

左持　太政大臣

皇の御代さかふへき春なれは霞をこめて立や出まし

右　　俊成卿女

君かため猶萬代の春の色に霞そめたる明ほのゝ空

左の御代榮ふへき春。世皆可希事に侍るうへに。下句。そのいはれ聞えて。おかしく侍るにや。右君かため猶萬代といへる。又捨かたく侍れは。兩方の祝は。なすらへて持とす。

三番

左　　權大納言源朝臣通忠

かすか野の草のはつかに雪消て緑も寒く霞む比かな

右勝　　權大納言藤原朝臣實雄

梓弓をして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく

左のかすか野。めつらしき所は見え侍らぬうへに。みとりも寒くかすむ比かなと侍るや。少し心ゆかぬやうに侍らん。右の野山のかすみをこめて。歌からいさゝか立增ると申へくや。

四番

左持　　權大納言藤原朝臣定雅

梓弓春のみ空にいつなれてやかて霞の立かさぬらん

右　　權大納言藤原朝臣公相

淺みとり春の日數もしられけりまた色薄き山の霞に

左かすみを。春のみ空にいつなれてと侍るや。いかにそ見え侍らん。春に霞はたちそへるものにこそ申ならひて侍れは。あつさ弓も春はかりにて。又引よせられたる事は侍らぬにや。右また。色うすき霞にて。早春をしれる心。さもやと見え侍るを。ふかき迄の難には侍らねと。傍題の山や。花よりさきに出きて侍らん。かれこれをなすらへて。持にて侍るへきにこそ。

五番

左勝　　權大納言藤原朝臣公基

今も猶雪は降つゝ朝霞たてるやいつこはるはきにけり

右　　左近少將藤原朝臣爲教

天の戸の明ゆく空は霞つゝ又あら玉の春は來にけり

左雪は降つゝ朝霞たてるやいつこと侍る。殊によろしく侍るにや。右天の戸明暮みなれて侍れは。尤以ㇾ左爲ㇾ勝。

六番

左勝　　中納言藤原朝臣爲經

春たては天つ岩戸の明るより神代も先や霞初けん

右　　散位藤原朝臣信實

朝霞風も音せぬあら玉の春は先こそのとけさをみれ

左はすかたよろしく。詞優に侍るめり。右霞も心こもりて。ちからあるさまに侍るを。あら玉の春とつゝけたる。少しおほつかなく侍る。あら玉の夏冬なと申侍るへきにや。しはらく以ㇾ左爲ㇾ勝。

七番

左勝　　右衞門督源朝臣通成

天の戸の明るやをそき立春の霞て見ゆる横雲の空

右　　右近權中將源朝臣雅光

まきもくのあなしの檜原猶さえて都の空はうす霞つゝ

左天の戸。させる難なく侍るにや。右あなしの檜原猶さえてと見えては。都の空のうす霞はるかにへたてゝ。知かたくや侍るへき。よこ雲の空心見えわかれ侍れは。左

なを勝侍るへし。

八番

左　兵部卿源朝臣有教

きのふまて雪氣に曇る天津空曙かけてはや霞ぬる

右勝　辨内侍

天の原雪氣の空のかすますは立ける春もえやはわかまし

兩方雪氣の空。いつれさたかに見えわかれ侍らぬを。右の霞は。春たしかに顯れて。立まさり侍るにや。

九番

左勝　右近權中將藤原朝臣師繼

君か代の始の春ののとけさを空もしりてや霞立らん

右　右近權中將源朝臣雅忠

此ほとは嵐も雪も猶さえて霞そ薄き四方の山の端

左御代の始の春の長閑き心。捨かたく侍るらへに。右此ほとはといひ出たるほと。こひねかふへき姿に侍らねは。是もかちは左に侍るへきにや。

十番

左　沙彌蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲ゐはるかに今朝は霞める

右勝　下野

さほ姫の霞の衣袖さえてたつとはみれと春そすくなき

左と渡りくらし天の原雲井はるかになと。たけあるさまに侍るを。しつかに今見侍れは。春は今といひて。今朝はかすめると侍ける。今の字の心にやかよひ侍らん。右霞の衣は猶そすくなきとよみはてたる歌。近き頃おほくなりて。めにたち侍らねとも。覺束なき事侍らねは。右勝に侍らん。

十一番

左持　左近權中將藤原朝臣爲氏

あら玉の年を隔てゝ朝霞いつしか春もたちにけるかな

右　少將内侍

久堅の天つみ空の朝霞立こそわたれ春やきぬ覽

兩方の朝霞。あら玉のとしをへたて。久かたのそらにたてるほと。いく程の淺深見えわき侍らし。

十二番

左　左京權大夫藤原朝臣經朝

横雲の霞にまかふ山かつら曉かけて春は來にけり

右勝　沙彌禪信

春來ぬと思ひもあへす久堅の天つみ空に立かすみかな

左歌は。年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけりとて。近き世に見侍しにや。かすみにまかふとては。いよいよみ所なく侍るにやと。右の歌。殊なるとかなく侍れは。尤勝侍るへし。

十三番

左勝　嘉陽門院越前

明渡る峯の霞を出る日の影も曇らぬ千世の初春

右　前權大納言藤原朝臣爲家

いつのまに霞の衣打きらし雪降空も春はたつらん

左かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春。祝言ことによろしく侍れは。かすみの衣。かけてもならひかたくこそ見え侍れ。おほよそ立春早春は。いさゝかおもひわくへきにやと見え侍れと。立春の題に。早春のこゝろよめ

らんよりは。ことたかひ侍らしとみゆるし侍るに。是さへ霞の衣にひかれて。たつとをきて侍る。尤負侍るへし。

十四番　山花

左勝　女房

みても猶おくそ床しきあし垣の吉野の山のはなの盛は

右　小宰相

雲の上の山も木高き櫻花御代のさかりの春にあふらし

左歌おくそゆかしきあしかきのと侍るほと。梅の立枝に見ふるしたるものに侍る。よし野の花にてあらぬ。ことに凡俗の思ひよるへきさまにも侍らす。花實あひかぬるとは。これらにこそ侍るらめと。有かたくこそ見え侍れ。右山も木高きさくら花。うちまかせたる歌に。ならひ侍らましかは。たけあるさまに見え侍りなまし。猶左かち侍るへし。

十五番

左　太政大臣

思ひ出よ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

右勝　俊成卿女

春は又花の都と成にけり櫻に匂ふみよし野のやま

左我もむかしは立田山。さためてゆへなからす侍らんとみえ侍り。右櫻に匂ふみよしのゝ山。花の都に心もなりかへりて。うつり侍りぬるにこそ。

十六番

左持　權大納言通忠

みよしのゝたかきの山の櫻花雲より空に匂ふ色かな

右　權大納言實雄

山かせは心してふけ高砂の尾上の櫻いまさかり也

左高木の山のさくら花。歌たけもみえ侍るを。雲より空こそ。いまたみをよはぬ事にて侍りけれ。雲より猶うへさまににほへる色にて侍らめとも。あまりにあたらしくや侍らん。右姿詞よろしく侍り。かやうの事おもかけあるやうにて。覺つかなく侍れは。左上下句。終の字おなしく侍るも。なきにはおとりて侍れは。持と申へきにや。

十七番

左　權大納言定雅

櫻花遠の里までなかむ覽あたにおらすな春の山守

右勝　權大納言公相

葛城やいつくを花と尋まし梢につゝくみねの白雲

左おもひやりふかくは侍れと。花の遠のさとまて。なかめやりたるさまにや聞なされ侍らん。あたにおらすな春のやまもりと侍るも。上陽春管領の花。處々さためて侍らめとも。いかにそや聞え侍るにや。右かつらきの雲梢につゝきて。花ひとつなるおもかけたちて侍れは。右勝侍るへし。

十八番

左持　權大納言公基

よしの山峯にたな引白雲のにほふは花の盛なりけり

右　爲教朝臣

今朝よりは雲こそ匂へ吉野山高根の櫻今や咲らん

左右共に。白雲の匂ふによりて花を分るよしの山。高下をさため申侍らん。中々に侍れは。可レ爲レ持。

十九番

左　中納言爲經
白波の立重なれる瀧の上の三舟の山は花さかりかも
右勝　信實朝臣
けふしはや花待つくる老らくのみ山かくれに春を知らん
左歌白波のなと。ことしきすかたにおもひよりて侍り。三舟の山といへるまて。さしてその難なく見え侍るを。右歌述懐には侍れと。心詞いひしりて。すかたおかしく。かやうのましらひにも。花待つくる心ちし侍らん。さて花の心みすてかたきにつきて。いはれなく勝の字をつけぬ。

二十番
左持　左衞門督通成
わくかたもなくて詠めん櫻花たちなまかひそ山の端の雲
右　左近中將雅光
櫻花さくと見しより松山の梢に波のかけぬまもなし
わくかたなくて　なかめんといへる。あまりにたゝ事にてや侍らん。さくら花さくとみしより。又めつらしきやうにも侍らねは。おなし程のことにや侍るへき。

廿一番
左　兵部卿有教
尋いる花より花に日數へて山ちのするゑに幾夜とまりぬ
右勝　辨內侍
心のみ行歸りつゝ山高みおられぬ花そうつろひぬへき
花より花に日數へて。すかた詞こひねかふへきやうには侍らぬうへに。山路のするゑも覺束なくこそ侍れ。こゝろの行てといへる。おかしくとりなされて侍れは。おられぬ花に心うつろひ侍りぬ。又以右爲勝。

廿二番
左持　右近中將師繼
よしの山麓の里の春をへてひと日も櫻めかれやはする
右　雅忠朝臣
泊せ山咲そふ花の色みえてことしはふかきみねのしら雲
左の吉野山は。ふもとのさとの春をへてひと日もめかれせぬといひ。右泊せ山は。咲そふ花の色みえてことしはふかしと思へり。知かたく侍れは。此番勝負不辨侍るへし。

廿三番
左　沙彌蓮性
尋きて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初櫻花
右勝　下野
みよしのゝおくまて花に誘はれぬ歸らん道の枝折たにせて
左今そしめゆふたまたすきなといへる。ふるき詞をかけて。いひ知て侍れと。右山とあらはれさるに侍れと。枝折といへるに聞えて侍れは。今たつねくるより。歸らん路の枝折たにせてといへるは。花にまかへる心。猶ふかくやそめまして侍るへき。以右爲勝。

廿四番
左勝　爲氏朝臣
みよしのゝ花は昔の春なからなと故鄕の山となりけん
右　少將內侍
心をは染さらましを櫻花山のかひなくうつろはんとや
左上句春なからといへるまて。珍らしき所侍らぬにや。

下句もあまりにたしかに侍るか。右そめさらましをなといひて。うつろはんとや侍る。少心覺束なく。ことたらぬやうに聞え侍れは。さりとては。左勝侍るへし。

廿五番

左　經朝朝臣

吉野山櫻にまかふ色そなき峯の白雲名にはたてとも

右勝　沙彌禪信

さくら花かはらぬ色を分かねて雲さへおしき春の山風

左歌人丸か目にはといへるいにしへの跡を捨て。今の世にをよはぬこゝろをもて。更にまかふ色なく思ひさため侍らん事こそ。なかれをくみて源をわすれん心。くちおしく侍れ。右春の山風はかりにては。題の心いかゝと見え侍れ共。雲さへおしきといへる。花を思ふ心ありて幽に侍れは。尤以ㇾ右爲ㇾ勝。

廿六番

左勝　越前

みよしのゝ花の盛に成ぬれは四方の草木も匂ふ春かせ

右　前權大納言爲家

老の身にくるしき山のさかこえて何とよそなる花を待覽

左山の心おほつかなくや。右くるしき山の坂こえて。凡卑のすかた。たとへは妻木をへる山人の。なをしも花の陰をさりて。よそにみえたるおもかけ。はなはた見くるしく侍るにこそ。尤可ㇾ負。

廿七番　五月郭公

左勝　女房

里なれて今そ鳴なる時鳥五月を人はまつへかりけり

右　小宰相

をのか妻いかに契れる郭公五月の空を分てとふらん

左歌里なれて今そなくなるとて。五月を人はまつへかりけりと侍る。心姿ことに珍しく。ほとゝきすの古躰もかく侍りけるものを。まことの秀逸にこそ侍らめ。右歌さしたる難には侍らねと。をのか妻あつまやから衣なとはなくて。五月の空をわきてとふらんといへる。ことにより所なく聞え侍れは。猶以ㇾ左爲ㇾ勝。

廿八番

左勝　太政大臣

我のみとなくやさ月の時鳥たれもね覺はよそにやは聞

右　俊成卿女

かたらひし宿の軒はの橘にさ月ことゝふほとゝきすかな

我のみとなくや五月とて。誰もね覺はよそにやはきくと侍るこそ。老の後はことに夏の夜もわかぬね覺。ことによろしく聞なされ侍れ。かたらひしといひて。さ月ことゝふと侍るも。おなし心にて。聞ふるされにたれ。

廿九番

左　權大納言通忠

立花のにほふさ月の時鳥いかに忍ふるむかし成らん

右勝　權大納言實雄

折はへてなけや雲ちの時鳥いまはたをのかさ月きにけり

左右。ほとゝきす。いつかたと聞わかれ侍らねと。いかにしのふるといへるよりは。今はたをのかといへるは。みゝにとまり侍るへくや。

卅番

左持　　権大納言定雅
つれもなき月をまつとて時鳥なくか涙の五月雨の空
右　　権大納言公相
今よりはまたてやきかん時鳥鳴ふるしつる五月雨の比
つれもなき月を。有明の空にみならひて侍るにや。五月雨のゆふにまたるゝ月は。すくさすやとそ見え侍る。下句も。例のさしてそれとはおほえ侍らぬか。見たる心ちし侍れとも。かやうの事は。さのみこそ侍れ。今よりはうたかふへくも侍らぬにや。いつれもおほつかなき所侍れは。しはらく可ﾚ爲ﾚ持歟。

卅一番
左勝　　権大納言公基
人しれすまたれし物を五月雨の空にふりぬる時鳥哉
右　　爲敎朝臣
きかぬまの心つくしの時鳥さ月の空はまたれさりけり
左優に侍るめり。右またれさりけりといへる。おもひ所なく侍れは。尤可ﾚ負ﾟ

卅二番
左　　中納言爲經
立歸り今もなかなん時鳥をのかさ月の去年の古聲
右勝　　信實朝臣
郭公かたまつよりもまたれけりをのかと思ふさ月きぬれは
左立かへりといへるより。ふる聲まて。珍しき事は聞え侍らぬにや。右ことなる事は侍らね共。我か心よりよみ出したる歌と見え侍れは。右勝と申へし。

卅三番
左持　　右衞門督通成
時鳥わきていつとはおもはぬにをのかさ月と今はなく也
右　　左近中將雅光
さ月山月まつよひの村雨にふり出てなくほとゝきす哉
右歌またしとおもへはむらさめの空といへる近き世の歌より。ほとゝきすには。かならす村雨そふへき事に侍りにたり。五月雨すへき比さへ。むら雨いかゝと覺え侍るを。左歌わきていつとはおもはぬにといへるも。ほとゝきすに心いらぬやうに聞えて。ほいなくや侍らん。持にて侍るへきにや。

卅四番
左持　　兵部卿有敎
さみたれの空にそあかぬ時鳥卯月の比にまち習ひつゝ
右　　辨内侍
まてといふになかすもあらは時鳥なにをさ月と思ひわかまし
左右。詞おほく聞えて。よろしきすかたには侍るを。その心たしかにおもひわきかたく侍るを。左題五月本意なく侍るにや。又可ﾚ爲ﾚ持。

卅五番
左持　　右近中將師繼
徒に初音程ふる時鳥まつとせしまに五月きにけり
右　　雅忠朝臣
時鳥忍ひし程の一聲を今はさ月になきやふるさん
左右共に。心詞させる無ﾆ得失ｰ侍れは。爲ﾚ持。

卅六番

左　　　　　　　　沙彌蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてなかるゝねをも玉にぬかまし

右勝　　　　　　　下　野

五月雨のふりにし友とかたらへはなれもことゝふ時鳥かな

左〔歌〕さまよろしく侍るを。下句を讀上侍らぬほと。いかに侍るへきにかと。聞ゆる所にや侍らん。右ふりにし友とかたらへはなれもことゝふといへる。心かよへるところさるかたも侍りなんとて。さのみはいかゝとおもふ給へなから。又勝の字をつけ侍りぬ。

卅七番

左勝　　　爲氏朝臣

あやにくに初音またれし時鳥さ月はをのか時となくなり

右　　　少將内侍

なけやなけ初音おしみし時鳥今こそ夏は五月なりけれ

兩首いつれとわきかたく侍るを。立歸りよく見侍れは。なけやなけといへるよりは。をのか時となくほとゝきすは。聞所侍るへきにや。題の心はかりに。かちと申侍るなり。

卅八番

左　　　經朝朝臣

たか爲に里はあまたの時鳥をのかさ月と猶忍ふらん

右勝　　　沙彌禪信

名にしおふやみはあやなし時鳥をのか五月は聲もかくれす

左の里はあまたこそ。何のよせとも聞え侍らね。右梅の花色見えぬ事をおもひ出て。五月やみによせて。名にしおふといへる。思ふ所なきにあらされは。右少まさり侍らむ。

卅九番

左勝　　　越　前

庭にちる花橘の五月雨に聲はしほれぬほとゝきす哉

右　　　前權大納言爲家

身を歎く涙は時もわかれぬに五月ときなく時鳥かな

聲はしほれぬといへる心。聞ふるしたることに侍れ共。さ月ときなくほとゝきす。題のこゝろをもつて。下句に取あつめて。いふかひなく侍るうへに。身をなけくといへる。まつうけられす侍れは。左かちとこそ申侍らめ。

四十番　　初秋風

左勝　　　女　房

秋といへはあへす色つく木葉かなけさ祉風の音は身にしめ

右　　　小宰相

荻のはにこゑたてね共吹風の身にしむ色に秋そ知るゝ

左あへす色つく木葉かなとをきて。今朝こそ風のをとは身にしめと侍る。ことわりかなひて。すかた詞よろしくみえ侍るに。右吹風の身にしむ色に秋そしらるゝといひて。荻の葉に聲たてね共と侍るこそ。荻の葉秋風しらぬものになり侍らん。くちおしく侍れ。猶以レ左爲レ勝。

四十一番

左　　　太政大臣

袖のうへに老の涙のかゝれるを秋きにけりと風や知らん

右勝　　　俊成卿女

秋としもなと荻の葉の結ひけん夕の風に露の契りを

うちまかせては。秋きにけりとかせを聞てこそ。老の涙もこほれぬへく侍るを。なみたのかゝれるを見て。風の秋をしれる心。珍しく侍るにや。右秋としもなと荻の葉とて。夕の風に露の契りをむすひけんといへるも。女の歌と覺て。優に侍れは。勝をゆるさるゝなり。

四十二番

左　権大納言通忠

をか野へやいつともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきに鳬

右勝　権大納言實雄

君かへん千年の秋の始めとてしらする風も松にふく也

左右おなし松風の秋〔の〕すかたは。いつれと色わきかたく侍るを。右祝言をおもへるうへに。下句よろしく侍るにや。又以レ右爲レ勝。

四十三番

左　権大納言定雅

今ははや東のおくにかよふらん秋のしるしの西のやまかせ

右勝　権大納言公相

けふも又夕をわきて久かたの空よりすくる秋のはつ風

左西の山かせ。近き世に。月吹かへせとて。はしめて聞え侍るにや。此今ははやと侍る心。秋の日數にとりて。いくほとの事にや侍らん。金風は。誠にみちのく山にたより侍らめと。幽玄のすかたには。聞なされす侍るにや。右夕をわきてといへるほと。優艶なるさまに侍るを。空より過ると侍そ。少し荒涼なる所見え侍れ共。東のおくにかよふ西の山かせよりは。秋のはつかせむかしより名譽侍れは。猶右可レ勝にこそ。

四十四番

左勝　権大納言公基

いとゝ又身にしむ風の吹なへにはやしられぬる秋の空哉

右　爲教朝臣

うたゝねの心も涼し吹風のめには見えすて秋やきぬらん

左吹なへに身にしられぬるなと。たけあるさまに侍るにこそ。右ふく風のめにみえすといへる事。ことに不二庶幾一之由おしへを。今思ひ出して侍れは。以レ左爲レ勝。

四十五番

左持　中納言爲經

吹風も涼しく成ぬ久かたの天津み空に秋やきぬらん

右　信實朝臣

身に寒き秋そきぬらし荻原やさらては風のさしもやはふく

秋のはしめの心。身に寒きといへる。あまりにや侍るへき。涼風至るなとこそ申侍るめれ。下句なとは。ことにしたりかほに聞え侍るにや。天津み空に秋やきぬらん。させる事なく侍れと。かちとまてはいかゝと見え侍れは。爲レ持。

四十六番

左持　右衛門督通成

荻の葉の末こす(ふくイ)風の音よりそほのかに秋を聞はしめつる

右　右近中將雅光

袖のうへに露は亂て結へとも猶色みえぬ秋のはつ風

左めつらしき所なく。させる難も侍らす。右袖の露みたれてむすへとも猶色見えぬと侍る。秋風いつより風の色にみゆへきにかと聞え侍れと。左も聞はしめつると

いひはてゝも。勝かたく侍るへきにや。爲レ持。

四十七番

左　兵部卿有教

覺束な秋な告よと誰植てけさは身にしむ荻のうはかせ

右勝　辨内侍

くる秋も只わか爲とおもひつゝきけはや風の身にはしむ覽

左は誰秋を告よとうへけんとおほつかなく。右はたゝわかためとおもひて聞わたる心。いつれも身にしむとは見え侍れと。荻のうは風は聞ふりたるかた侍れは。妖艷のすかたに付て。以レ右爲レ勝。

四十八番

左　左近中將師繼

をしなへて身にしむのみか吹風の音もさやかに秋はきに鳬

右勝　雅忠朝臣

吹風は昨日もけふもかはらねと身にしむをとに秋そしらるゝ

左右おなしやうのすかたに侍れと。身にしむのみかと侍るよりは。身にしむをと増り侍るへし。

四十九番

左勝　沙彌蓮性

天の川かは風涼しとを妻のいつかと待し秋や來ぬらん

右　下野

いつもふく目に見ぬ風の秋といへは身にしむ色のいかてそふ覽

左は歌からことによろしく侍るにや。いつもふくめにみぬ風。負侍るへし。

五十番

左勝　爲氏朝臣

打つけに先そ身にしむ秋きぬといふ計なる荻のうは風

右　少將内侍

いかにして身にしむ色を染つらん音こそあらめ秋の初かせ

左いふはかりなる荻のうは風。右をとこそあらめ秋のはつかせ。此等の勝負は。いく程のこと侍らぬを。そめつらんと云る。あまりにたしかにや侍る。又左勝侍るへきにや。

五十一番

左持　經朝朝臣

白妙の水かけ草やなひく覽天の河原の秋のはつ風

右　沙彌禪信

尋いる秋のしるしもしられけり風吹かはる三輪の杉むら

左下句今まて誰も讀殘すへしとも聞え侍らぬうへに。水かけ草なひくをみれは時はきにけりなとは。み習ひて侍るを。白妙とてこそ。水の色にや草の色にやと。おほつかなく侍れ。右三輪の杉むら。秋のしるしなとは。さもやと「聞え」侍るを。尋ねいると侍るこそ。秋のきたるにや。人の至るにや。短慮まとひて辨へかたく侍れ。吹かはる風のをとも。あまた聞なれて侍れは。可レ爲レ持。

五十二番

左持　越前

風わたる秋の夕の荻の葉にをけはかつちる露のしら玉

右　前權大納言爲家

吹風も朝氣涼しく成にけりねぬる夜のまに秋やきぬらん

左はしめの秋の心。覺つかなく侍るにや。右ねぬる夜のまにもとめ出したる事に侍れは。勝負例の事にてこそ

侍らめ。

五十三番　海邊月

左勝　女房

鹽かまの浦の煙も絶にけり月みんとてのあまのしわさに

右　小宰相

和歌の浦やおなしみなとの君か代に又立出て月をみるかな

左此鹽竈の浦こそ。業平朝臣。わかみかと六十餘國の中に似たる所なしと。申をき侍るにも猶過て。珍しくありかたき海士のしわさとみ給へれは。今の世まて。いかてよみ殘し侍るにか。世くたれりとは。おもふへくも侍らさりけり。もろ〳〵のみちもかく侍らめと。たのもしくも侍るかな。右の歌。おほろけにては。此かたはらにたち出へき事とも見え侍らねは。とかくさたなき〔を〕面目にて侍るへきにこそ。返々以レ左爲レ勝。

五十四番

左　太政大臣

芦そよく難波の浪の數々に身にしめてすむ月の影哉

右勝　俊成卿女

しほるなよ月をは袖の秋の夜にもしほたれてもすまの浦人

難波の浪のかす〳〵に身にしめてすむといへる景氣。さこそとすてかたく侍に。しほるなよ月をは袖のとて。もしほたれても須磨の浦人といへる心詞。妖艶のすかた。ことによろしく侍るにや。とふ人あらはといへる本歌心にもゆつりて。勝と申すへきにや。

五十五番

左勝　權大納言通忠

難波かた海士のたくなはなかし共思ひもはてぬ秋の夜の月

右　權大納言實雄

昔よりきくやあかしの浦の波空にしらるゝ秋の夜の月

左あふ人からの秋の夜。あまのたくなはに引なされて。よろしく侍るに。右あかしのうらの名。このほとおほくめなれて侍るをもて。負侍るへし。

五十六番

左　權大納言定雅

和田の原空もひとつにみ渡せは移らぬ月に浪そかゝれる

右勝　權大納言公相

をし照や難波の浦の夕なきに芦の末葉を出る月かけ

左下句をろかなる心まよひて辨へ侍らす。海より出て浪に入。よひのま曉かたなとの事に侍るにや。さならてはうつらぬ月にかゝる浪。思ひよるへき事ともおもひ侍らす。右させるとか侍らぬ〔さすか イ无〕につきて以レ右爲レ勝。

五十七番

左　權大納言公基

秋の夜は月にそみかく玉くしけふたみの浦によする白波

右勝　爲敎朝臣

ます鏡みぬめの浦は名のみしておなし影なる秋の夜の月

月にそみかく玉くしけふたみの浦。その故侍るに。ます鏡みぬめの浦は名のみしておなし影なるとおもひより侍るは。いさゝか珍しく侍るにや。たまくしけよりも見所ます鏡に心うつりぬ。ひか目にこそ侍らめ。

五十八番

左　中納言爲經

大かたに曇りなき夜の月なれはさこそ明石の浦もさやけき

右勝　　信實朝臣

いさこよひなたのあまのこしるへせよ汐ちの月を漕出てみん

左くもりなき世の月。その心すてかたく侍るに。さきに申侍りつるあかしの浦。殊に繁昌し侍るにや。右いさこよひなたのあまの子なと。いひ知てさる姿と見え侍れは。かち侍るへし。

五十九番

左勝　　左衛門督通成

名にしおふ長井の浦の秋の夜にゆくともみえてすめる月哉

右　　右近中將雅光

見渡せは野嶋か崎の波間より山の端ならて出る月影

野嶋か崎ふたつなき物とおもひしを。水底にといへる古今の歌。下句たかふ所なく見え侍る上に。長井の浦。夜雲〔収〕盡侍まて思ひやらるゝかた侍れは。以レ左爲レ勝。

六十番

左　　兵部卿有教

和田の原八重の汐ちに雲消て月澄のほる須磨の浦かせ

右勝　　辨内侍

もしほ汲夜はのさ衣哀にそあまのしわさは月やとしける

左景氣思ひやられて。みたる心地侍るへし。右さきに有かたく見え侍りつる海士のしわさ。おなしこと優美にして。これまてかたひき侍りぬる。偏頗にや侍らん。

六十一番

左持　　左近中將師繼

漕出し松浦の海を詠めつゝ月になれぬる秋のさよ姫

右　　雅忠朝臣

白妙の袖しの浦による波の數さへみえて月そさやけき

秋のさよ姫珍しく。數さへ見えては。めなれて侍れと。左はちからをいれ。右はやすくいひなして。やうかはりたる躰。持と見え侍るにや。

六十二番

左勝　　沙彌蓮性

海原やなこの鹽干の眞砂ちに清き月夜のさもやさやけき

右　　下野

更ゆけは浦こく舟のをとまてもさもすみ渡る夜半の月かな

こく舟のをとまてすみ增る心。聞なれて侍るにや。なこの鹽干の眞砂地。誠にきよけに見え侍れは。以レ左爲レ勝。

六十三番

左　　爲氏朝臣

なかしとも月に覺えぬ秋の夜をなとか更井の浦といふ覽

右勝　　少將內侍

秋をへて世わたるあまの捨衣鹽なれにける袖の月影

左なとか更井のなといへる程。おもふ所有けに見え侍るを。月に覺ぬなといへるや。たゝ詞に侍らん。世をわたる海士の捨衣なれにける袖の月は。見所侍るへきにや。右勝侍るへし。

六十四番

左勝　　經朝朝臣

和歌のうらや昔にかへる波の上に光あまねき秋の夜の月

右　　沙彌禪信

里の海士の汐たれ衣ほしやらてさなからやとす秋の夜の月

右上下かなひてよろしく侍るに。左和歌の浦むかしにかへるとをき。ひかりあまねき秋の夜の月といへる。尤是賞翫。可レ爲レ勝。

六十五番

左勝　越前

あかしかた鹽やくあまの煙たに今こそなけれ月のすむ夜は

右　前權大納言爲家

秋の夜の名高のうらの鹽風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜といへるほと。こひねかふへきすかたにはあらす侍るを。右おなし文字あまりにおほく侍るにや。歌合には。とかめたる事に侍れは。右負侍るへし。

六十六番　野外雪

左勝　女房

いとゝ又限りも見えすむさし野やあまきる雪の曙の空

右　小宰相

水無瀨山近き御狩の面影やかた野の雪に猶殘るらん

左歌むさし野の遠望。申ならひたる事に侍るを。あまきる雪の明ほのとては。限みえぬ所今一きはおもひやられ侍るへし。右みなせ山近き御狩。よみふるさぬさまに侍るうへ。おなし雪も。おもかけ殘るとては。いかはかりかはと。心わきまへかたくこそ。右は心あさく。左は雪ふかく侍れは。むさし野はるか〔に〕殊勝にこそ。

六十七番

左勝　太政大臣

雪おもる身に習ひても思ふ哉野なる草木のいかにさゆらん

右　俊成卿女

狩にこし跡たにもなく埋もれて雪ふか草の野への古里

左身にをもる雪にならひて野なる草木をおもへる心。その故ふかく見え侍るにや。右かりにこし跡たゆるふか草のさとは。雪にしもかきらす。ふりはてたるなれは。又以レ左爲レ勝。

六十八番

左　權大納言通忠

かち人の分ゆく末もしら菅のま野の古道雪つもりつゝ

右勝　權大納言實雄

白雪のふる枝の小萩けさみれはあらぬ花咲宮城野の原

分ゆくかたもしらすけのまのゝふる道。ことに雪も降侍りぬらん。古枝の小萩も。あたらしくは侍らぬを。白雪のとて。あらぬ花は。はしめて見侍れは。めもとまり侍るにや。仍以レ右爲レ勝。

六十九番

左　權大納言定雅

春日野を分ゆく人の袖さえて道もさりあへす雪は降つゝ

右勝　權大納言公相

けぬからへに又跡つけよ玉鉾の道ある御代の野へのしら雪

左雪上の句。少し打とけて見え侍るにや。右野外雪。只一句に限りて無念なるかたは侍れとも。有道の世尤賞翫すへくこそ侍れは。又以レ右爲レ勝。

七十番

左勝　權大納言公基

霜枯の小野の淺茅生跡もなく心のまゝにつもる白雪

右　爲教朝臣

かきくらし雪は降つゝ梓弓すゑの原野はいる人もなし

左雪いみしくつもりて侍るうへに。雪につけてもあつさ弓末の原野は。とかりの人もいる事さためて侍らんものを。霜枯の淺茅生。猶よろしく侍れは。以レ左かちと申すへし。

七十一番

左持　中納言爲經

石上ふる野のみ雪ふみ分て今そむかしの跡もみゆへき

右　信實朝臣

をのつからみてものそみは及ふやと雪の朝の野へに出ぬる

思ひかねたる雪のあした。眺望あはれに見なされ侍り。ふる野のみ雪。歌さまよろしく見え侍るを。題の心やあさく聞え侍らん。今そむかしの跡も見るへきといへる。捨かたく侍れは。持にて侍るへきにや。

七十二番

左勝　右衛門督通成

梓弓いる野の道も跡たえて鹿もかよはすふれる白雪

右　右近中將雅光

篠竹の野への古みちまよふ共雪ふみならしとふ人もかな

さをしかの入野のすゝきをとりて。あつさゆみに引なをせるに。しかも又かよはすといへる。思ふ所なきにあらす侍るにや。さゝ竹の野へ。珍しく見え侍るに。ひとふしよせあることも侍らぬにや。いつくの野にても侍りぬへかりけると見え侍る。仍左勝侍るへし。

七十三番

左　兵部卿有教

うつもるゝ枯野の薄ふみ分て猶ゆく末も雪のふる道

右勝　辨内侍

木かしはもとより埋む雪の上にふるからを野の道や絶なん

うつもるゝ枯野ふみ分て。猶ゆくすゑも。いかなる所侍るへきなと。ゆかしく侍るを。雪のふるみち。たゝおなし事にや侍りける。無念にや侍るへき。もとかしはもとよりうつむとて。白雪のふるからを野と侍るは。上下あひかなひて。もとの心見え捨かたく侍るにこそ。右かつへし。

七十四番

左持　右近中將師繼

いそのかみふる野の野守ふみ分て雪にも御代の道は有けり

右　雅忠朝臣

終に又もみちぬ色や是ならん野中にたてる松の白雪

君の有道の跡。臣の勸節の貞。左右各存二旨趣一。彼此難レ申二勝負一。尤可レ爲レ持。

七十五番

左勝　沙彌蓮性

下折の非なのふし原いやしきにまなくし雪の猶積るらん

右　下野

木の下の露にや増る宮城野のみかさ取あへぬ雪の深さは

みかさ取あへぬ雪。木の下露にまさるへき事。すてに詞に顯はれて。疑ひなくや侍らん。非なのふし原いや敷に。まなくもつもれる雪。見所殊に侍れは。尤以レ左爲レ勝。

七十六番

左勝　爲氏朝臣

今朝のまも跡こそ見えね白雪のふるからをのゝ本の通ち

右　少將内侍

おもふよりいとゝいく野の道絶てまたふみもみす積る白雪

左ふるからをのゝもとのかよひち。かしはなくては跡はみえぬ雪に。もとの心もわかれぬへく侍るにや。右いく野の道またふみもみす。おかしくおもひ出され侍るに。おもふよりといへる五文字。少し覺束なく侍りける。左けさのまもといへる心。いさゝか侍るへきにや。かち侍るへし。

七十七番

左持　經朝朝臣

降雪に野中の松も埋れて今はあらしのこゑたにもなし

右　沙彌禪信

ふみ分て行へき道も白雪のしらぬ野中の末そゆかしき

聲たにもなし。末そゆかしき。いく程の勝負なし。

七十八番

左勝　越前

かすか野や秋の名殘も見えわかす皆白妙の雪の下草

右　前權大納言爲家

淺茅原枯生の小野の草の上にましる色なく積る白雪

皆白妙。ましる色なく。おなし心に見え侍るを。枯生の小野。そことも見えす。かすか野にをよひ侍らし。

七十九番

左持　忍久戀　女房

つれなきもいはねはこそと思はすは年月いかて長らへもせん

右　小宰相

人しれぬ心にふるす年月の命となれる程そつれなき

左題の心おかしく取なされて。下句殊よろしくこそ侍れ。右人しれぬこゝろにふるすとし月といへる。題皆上句にきはまりて侍れと。歌から優に侍るを。ほとそつれなきと侍るそ。いかゝと聞え侍る。只はかなきなとやうによみ。よは〳〵しきさまに侍らは。今少し艶にも侍るへくや。然れ共。これ程のつかひけるほとの思出侍らねは。はしめて持の字をゆるさるへきにや侍らん。

八十番

左勝　太政大臣

さのみやは絶ぬ思ひもかくれぬの下ゆく水のくるしかるへき

右　俊成卿女

秋をへて時雨るゝ色を忍ふ山露をもらすな道のはてまて

左かくれぬの下ゆく水そ。いかにと見え侍れと。詞やすらかにいひ知て。殊によろしく侍るめり。右ことなる難には侍らねと。忍ふ山は。みちのおくと申し習ひ。みちのはてなるとは。ひたち帶にいひつけて侍るへかりける。負侍れかし。

八十一番

左持　權大納言通忠

年をふる涙なり共をのつからもらさは袖の隙もあらまし

右　權大納言實雄

下にのみ忍ふの山の岩小菅いはて思ひの年そへにける

左としをふる涙なりともなと。上句艶に侍るを。右又いはて思ひのとしそへにける。よろしく侍れは。是をは持

とこそは申侍らめ。

八十二番

左　　権大納言定雅

逢事をまつに涙の夕時雨としはふるとも色に出めや

右勝　　権大納言公相

名取川思ひくちても年はへぬまた顯はれぬせゝの埋木

左まつに涙の夕時雨。つゝきもいかゝと聞え侍に。色に出めやなといひ果たるなと。可ㇾ然すかたならすや侍らん。右名取川。下句よろしく侍れは。右尤かち侍るへし。

八十三番

左　　権大納言公基

逢事を命にかへておもふ身の何と忍ひて年のへぬらん

右勝　　爲教朝臣

水底になひく玉藻の年を經て思ひ亂ると人はしらしな

左下句少し無念ともや申へく侍らん。右玉藻なといへる。歌さまいさゝかまさるにや。

八十四番

左　　中納言爲經

しりかたき人の心のやすらひにいはておもひの年そへにける

右勝　　信實朝臣

月故と人にはいひて誰をかもめてゝも戀の老となるらん

左上句題覺束なく侍るうへに。休らひも少し心ゆかす侍るにや。右月故と人にはいひて誰をかもめてゝも戀の老と成らん。心たくみに。すかたおかしく侍れは。增り侍らん。

八十五番

左　　右衞門督通成

忍ふるもくるしき物を夏引の手引の糸の年をへぬれは

右勝　　右近中將雅光

思ひつゝ幾年なみに朽ぬらん忍ふの浦のあまのたくなは

左手引の糸の年をへぬれはと。終の句にいひはてたる。糸のほとよりは。こゝろつよく聞え侍るにや。右あまのたくなは。歌のすかた增りて優に侍らん。例のかんかへいたし侍らんほと。勝と申侍るへし。

八十六番

左持　　兵部卿有敎

我ならぬ忍ふの山の松の葉もとしへて色に出る物かは

右　　辨内侍

おもふこといかて心のうちにのみつもる月日を知人のなき

左我ならぬといひはしむるより。出るものかはとはてたるまで。いつくこそとみゆる所なく。詞つよくよみ出して侍るめり。右あやにくにちからなく。優なるすかたとり／＼に侍れは。よき持とこそ見え侍れ。

八十七番

左勝　　右近中將師繼

人しれすおもひしほれて朽ねとや袖に年ふる我涙かな

右　　雅忠朝臣

徒に年をふる野の小篠原露たに秋の色に出めや

右小篠原ことなるふしもみえ侍らぬにや。秋と侍るにもさせる要なくや。左朽ねとやと侍るそ。心ゆかぬやうに侍れと。袖に年ふるわかなみたかなといへるは。よろしく侍れは。いさゝか勝とや申侍るへき。

八十八番

左　　沙彌蓮性

すかのねの忍ひに結ふ下紐のとけすや戀んとしはへぬとも

右勝　　下　野

戀をのみ賤か庵のかや葺しき忍ふまにとしそへにける

左下紐忍ひに結ふほと。おもひいれて侍るにや。右俊頼朝臣歌おもひ出され侍れとも。ことのつゝき。是もよろしく侍れは。右かちにや。

八十九番

左　　爲氏朝臣

いはて思ふつらきまゝなる年月を誰みよ何にかゝる命そ

右勝　　少將內侍

おさふへき袖は昔に朽果ぬわか黒髮よ涙もらすな

誰みよなにゝといへる。艶に見え侍るを。袖はむかしに朽果ぬわか黒髮よなみたもらすな。題のこゝろふかく。面影哀れに。いたはしくも見え侍れは。左負侍ぬるにや。

九十番

左　　經朝朝臣

山川の下行水の下にのみをとこそたてれ年はふれとも

右勝　　沙彌禪信

秋をへてふるき軒はの忍草しのふに露の幾世へぬらん

左山川の下ゆく水とはいかに侍るにか。山高みなと聞なれて侍る。河の水下ゆくは。理も叶はすや。又音こそたてねといへるも。山川のをとにのみきく百敷をなとこそ。ふるくも申習ひて侍れ。かた〳〵おほつかなくや。右力あるやうには侍らねと。難なきにつけて爲勝。

九十一番

左勝　　越　前

ふるさとの忍ふの露も色に出ぬいつ我袖よ人の問まて

右　　前權大納言爲家

いはておもふ枕の下の涙ともしらしな人に積るとし月

左しのふ心すくなくや侍らん。右つもるとし月。術つきたるにこそ侍るめれ。例の負侍るへし。

九十二番　逢不遇戀

左勝　　女　房

あかしかねまたるゝ物と成に鳬さしもいとひし鳥の八聲を

右　　小宰相

下の帶のあたに結ひし中なれはめくり逢へき限たになし

左さしもいとひし鳥の八聲。またるゝ物となれる心。きき所多く侍る。ふかくおもひ入られて。優美のすかた。幽玄の心。殊によろしくこそ侍れ。右下の帶のあたにむすひしなとは。さもやと見え侍るに。下句限りたになしとて。戀のこゝろ今は思ひすてたるやうに見え侍る。題の本意「に」侍らねは。尤爲負。

九十三番

左　　太政大臣

みを浦の海士のもしほ木こりすまに立や煙のよそに消つゝ

右勝　　俊成卿女

分し夜の契もきえてかなしきはとへと答へぬ道芝の露

左のさま。よろしきすかたには侍るを。こりすまにとはかりにても。あひにける心は侍ぬへけれとも。右わけし夜のと云るより。題の心。今少しあらはに侍るにや。い

かゝ。

九十四番

左　　権大納言通忠

かきりとも思はてしもやむすひ置し其儘にひぬ袖の白露

右勝　　権大納言實雄

思ひ侘我心にもわすれぬをなけにいひてもねはなかれつゝ

左歌下句少し心ゆかぬやうに侍るらうへに。右歌の心。さる事も侍りなんと。めつらしく侍れは。勝侍るへきにこそ。

九十五番

左勝　　権大納言定雅

徒に明ぬ暮ぬと玉くしけ二たひあはぬ身こそつらけれ

右　　権大納言公相

忘れぬも我身の咎と知にけり有しにかはる曉もかな

右ありしにかはる曉もかなと。優なるやうには聞え侍るに。心いかにと侍るにか。短慮まとひて。思ひわき侍らぬほと。左詞はかくれなく侍れは。勝へし。

九十六番

左　　権大納言公基

今こんといひし契やあた人の只僞りの情なるらん

右勝　　爲教朝臣

思ひきやかゝるつらさを契にて有し其よを限るへしとは

左右共に。おなし程に見え侍るに。今こんといひしはかりにても。逢心には。かなひ侍らめと。有しその夜は。憶に侍れは。歌合の習ひ。勝と申侍るへきにや。

九十七番

左勝　　中納言爲經

つれなくそいきてつらさを歎ける逢にかへてし命ならすや

右　　信實朝臣

いとはるゝつらさある世の逢事を何そは又とたのめ置けん

何そは又とたのめをきけんといへる心。おかしくおもひ入てよろしく侍るを。いきてつらさを歎きける。逢にかへてし命ならすやと侍るこそ。殊に艶に侍れ。右捨かたく侍れとも。左猶勝侍るへきにや。

九十八番

左　　右衞門督通成

今はたゝかさねし袖のうつり香も心のうちに殘るはかなさ

右勝　　右近中將雅光

らしとても恨みは果しかた糸のなからへは又逢よありやと

左袖のうつり香。さもと覺え侍るを。床の枕ねやの莚なとをきて。心のうちにしも殘るかと覺束なく侍り。右かたいとの存命は又逢よありやと侍る。させるとかむへきふしも見え侍らねは。爲レ勝。

九十九番

左持　　兵部卿有教

頼めをきし我身やあらぬと計を今一たひといかてとはまし

右　　辨内侍

またれしを替るつらさと思ふまにやかてこぬ夜の積りはてぬる

左は道雅卿思ひ絕なんの心。優に侍れとも。思ひかたく侍るにや。右やかてもちりのといへる事かよひて。共に心詞ふかきをかすおなしほとにて。爲レ持。

百番

左　右近中將師繼

わすらるゝ思ひに消ぬ命こそをのか物から恨られけれ

右勝　雅忠朝臣

はかなしやたか心よりと絶してみる夜もしらぬ夢のうきはし

左心おかしく侍るに。下句そ我身をはらみぬ事にいひさためたるやうに侍る。右夢のうきはし。心もうかれたるさまに侍れと。こと葉つゝき優なるすかた侍れは。まさると申へきにこそ。

百一番

左勝　沙彌蓮性

頼めてもこぬ僞に更し夜をなかくや人の別はてぬる

右　下　野

驚ろかす人しなけれは今はたゝ見しは夢かと誰にとはまし

左こぬいつはりにふけし夜を。殊によろしく侍るめり。右もみしは夢かと誰にとはましなと。優に侍れとも今はたゝといへるほと。おとり侍るへし。

百二番

左勝　爲氏朝臣

有し夜を戀る現はかひなきに夢になさはや又もみゆやと

右　少將内侍

夢にたに今はみゆとは見えし只忘れし人にそはぬ身なれは

同夢。左めつらしくみなし侍るにや。爲レ勝。

百三番

左　經朝朝臣

曉はつらき習ひの鳥のねを二たひきかぬ契なりけり

右勝　沙彌禪信

思ひきや手枕ふれし朝寢髮みたれても又戀ん物とは

左上句よろしく侍るを。八聲の鳥のね二たひきかぬといへる心。おほつかなくや。ふた夜といへるこゝろなるへきにや。逢事ひと夜あひたるによりて。題の心ふかゝるへきにあらさるや。右[た]まくらふれしあされ髮。作者のおもかけ。いかゝとは覺え侍れと。勝侍るへし。

百四番

左勝　越　前

宵のまの更ゆくかねの恨たにおもひ絶てもとしへぬる身を

右　前權大納言爲家

我はかり心なかさをかゝる共みしは夢とや思ひあはせん

左歌今の世まて思ひつゝけられ侍らん。戀しきことに物わすれせす。さもおかしくこそ侍れ。右の夢語。うけられす侍れは。又負侍るへし。

百五番　旅宿嵐

左勝　女　房

松かねの枕さためん方そなきいかにはけしき夜はのあらしそ

右　小宰相

幾かへり馴ぬ嵐もしくるらん都をしのふよはのまくらに

右の歌題の外の時雨るらん。何の用共聞え侍らぬ。夜半の枕になれぬあらしも。又こひかふへき詞つゝきならすや侍らん。左上下あひかなひて。旅宿の心景氣。おもかけあらはに侍るに。いかにねし夜か夢にみえけん。それとはなく思ひ出され侍るに。よろしくこそ。左尤勝侍るへし。

百六番

左持　太政大臣

あらしとて夜な〳〵聞し音よりも旅ねの庵ははけしかり鳧

右　俊成卿女

露けさを契りやをきし草枕嵐吹そふ秋のたひねに

あらしとて夜な〳〵聞しと侍るほさは。すこしおほつかなく侍るに。旅れの庵ははけしかりけりとてこそ。故鄕の事も聞なされて。よろしく侍れ。露けき草枕あらし吹そふ秋の旅ねなといへる。歌のすかた優艶に侍れは。持と申すへきにや。

百七番

左　權大納言通忠

夜を寒み衣かせ山秋更てかたしく霜をとふ嵐かな

右勝　權大納言實雄

いく夜われかたしき侘ぬ旅衣重なる山の峯の嵐に

左させる難には侍らねと。歌合には。ふるくも旅の心。都のとをきをおもふへきやうに申をき侍るにや。かせやま秋更てかたしく霜をとふあらしなと侍る。殊にねかふへき風躰にも侍らぬうへに。旅衣かさなる山は。珍らしき事に侍らねと。題の中に見え侍れは。爲レ勝。

百八番

左　權大納言定雅

草枕夢のかよひち吹とちて夜半の嵐のをとのさやけさ

右勝　權大納言公相

嵐ふく峯のさゝやの草枕かりねの夢はむすふともなし

此左の歌も。夢のかよひち吹とちてといへるほと。乙女の姿をおもへる雲のかよひちよりは。誠にすくなく侍るにや。嵐吹峯のさゝや。おほつかなきふしも侍られは。右勝侍るへし。

百九番

左　權大納言公基

吹まよふ嵐の風の寒き夜にかりねさひしきさやの中山

右勝　爲教朝臣

かり枕夢もむすはすさゝのやのふしうき程の夜半の嵐に

左やすらかにて。させる難侍らぬにや。右さゝの屋のふしうき夜半なと。結構し出して侍る心。更に優に侍るへきにや。

百十番

左勝　中納言爲經

篠枕またふしなれぬうたゝねに峯の嵐も心してふけ

右　信實朝臣

こよひ又爰に旅ねの松の陰むへ山嵐音のさひしき

右歌すかた詞は。いひ知ておかしく聞え侍るを。むへ山あらしと思ひあはせん心。少し覺束なく侍るへし。左歌夏衣またひとへなる秋風の峯のあらしに吹なせるは。をと増りてこそきこえ侍らめ。爲レ勝。

百十一番

左勝　右衞門督通成

あし引の山の嵐をかたしきてならはぬ岩の枕をそする

右　右近少將雅光

いかはかり都の遠く成ぬらん夢ちもよそに吹嵐かな

左あらしをかたしくといひ。右ふく嵐かなと果たる。共に好み詠すへきすかた詞には侍らねと。左ことはりつ

よく侍るにや。右旅の習ひ。みやこ近き程は見え。遠さかれは。みぬにや侍らん。もろこしも夢に見しかはなと。申習ひて侍るにや。左には劣り侍るへきにこそ。

百十二番

左勝　兵部卿有教

片敷ていく夜になりぬ旅衣袖に馴ぬる峯の嵐を

右　辨内侍

岩のうへの嵐の風はいと寒し旅ねの衣かす人もかな

右ふるき歌詞は同句にならひて。珍しき心聞えすや侍らん。左たひ衣袖をはまきをきて。かたしくものに峯のあらしをせられて侍る。ことはりたかひてや侍らん。但此番。左思ひ出すへくなく侍れは。是はかりは。こゝろの負に申なすへくや侍らむ。

百十三番

左持　右近中將師繼

さゆる夜の嵐に夢もむすひけり身はならはしの草の枕に

右　雅忠朝臣

草枕旅ねの床の淋しさもことはり過て吹嵐かな

左さゆるといひて。させる用なくや見え侍らん。あらしにならひて草の枕ゆめむすふ心。さも侍らん。右あまりにやすくて。照燭の歌なと申へくや侍らん。爲レ負。

百十四番

左勝　沙彌蓮性

岩かねの枕の嵐さらてたにいねかてなるを心してふけ

右　下野

行暮てひと夜宿かる松かねに何と嵐の床はらふらん

左歌上下句はしめの同文字。みとかむる折も侍れとも。いねかてなるを心してふけ。ことによろしく。おなしあらしも聞え侍るにや。右なにとあらしのといへる。心にいれぬさまに侍れは。尤以レ左爲レ勝。

百十五番

左持　爲氏朝臣

打とけてねられやはする草枕むすふ山路の峯の嵐に

右　少將内侍

みやこ人何しか夢に見えつらんかりねかなしき峯の嵐に

左の草枕は。むすふ山路にうちとけてねられぬをかこち。右のかりねは。都人何しか夢に見えつらんと思へるはと。をの〳〵心なきにあらされは。峯のあらし。かたかたいつれと聞わかれ侍らす。爲レ持。

百十六番

左勝　經朝朝臣

古郷にかよふ夢ちの關守は旅ねおとろく嵐なりけり

右　沙彌禪信

嵐ふく山ちかさなる草枕むすふ旅ねの夢そすくなき

左旅寢おとろかすとそ。ありたく聞え侍れとも。右むすふ旅ねの夢そすくなき。又見なれて侍るうへに。あらし吹やまちかさなるとは。いひくたされぬやうに侍るにや。關守ちからありけに侍れは。勝侍るへきにや。

百十七番

左勝　越前

花薄かりねの野へに片敷て月も嵐も都戀しき

右　前權大納言爲家

草木ふくむへ山かせと聞しかと猶そ旅ねの袖はしほるゝ
左あらし。あらはに聞え侍れは。爲レ勝。

百十八番　社頭祝

左勝　女房

わか末の絶すすまなん五十鈴河底にふかめて清き心を

右　小宰相

石清水なかれて清きわか國を君か心に千代も任せよ

みしかき詞をろかなる心をもちて。かやうの事申侍りぬる。きはめておそるゝ所多く侍れとも。心にたゝ思ひ侍る事。むねにくたし侍るへきなられは。はゝかりをわすれ侍るへし。おほよそやまとうたは。いにしへも今も。人の心より出て。世のことはりをあらはし。神のをしへに隨ひて。君のまつりことをたすくるにも。此みちいちしるかるへきをや。この故に神代のはしめより。今に絶さるなるへし。然るを。今の左の歌は。たゝに人の思ひより。たはふれに誰もいひつらぬへき心詞に侍らす。是ひとへに。天照おほん神。すてに我君のふかきおほんまことにこたへて。この歌をあらはし給へり。我君又あまてるおほん神のひろき御めくみをかたしけなくして。このねかひをみて給ふへき時也。是によりて。位に付給ふ君は。はるかに百王にいたり。文をまもる代は。久しく萬歳を期せんものをや。右歌不レ及二是非之沙汰一。爲レ負。

百十九番

左持　太政大臣

八幡山さかゆく峯も越果て君をそ祈る身のうれしさに

右　俊成卿女

神ち山すむ月影も君かため曇らぬ空に光をそます

左我もむかしはおとこ山と侍ること。おかしく侍るを。君をそいのる身を思ふとてといへる近き歌侍るにや。但身のうれしさとては。いよ／＼心ふかくこそ侍らめ。右神ち山すむ月をと。かけたかく侍れは。よろしき爲レ持。

百廿番

左勝　權大納言通忠

君か代のためしにすめる石清水流久しき影は見ゆらん

右　權大納言實雄

あめの下治れる代は三笠山さすや朝日の影ものとけし

左歌すかたうるはしく。殊によろしく見え侍るにや。右三かさ山。天の下によせて讀るいはひ歌多く侍れは。石清水のひさしき影。澄まさり侍らん。以レ左爲レ勝。

百廿一番

左　權大納言定雅

神垣の葛の下風長閑にてさこそうらみのなき世なるらめ

右勝　權大納言公相

君か代を祈る心のしるしあらは久しく契れ加茂の瑞籬

左歌恨なき世は。誠に祝言に侍るを。社頭の題に。まさかき。ゆふかつらなとをきて。秋にはあへすといへる。葛の下風しももとめ出され侍らん。やすきを指をきて。わりなき心をめくらせる事は。是のみに限らす。こひねかふへからすやとそ。うけ給はり侍りし。右の歌。上句殊に心引侍れは。勝とさため申へし。

百廿二番

左持　權大納言公基

治れる御代そしらるゝ住吉の松吹風の音ののとけさ

右　爲教朝臣

さして出る三笠の山の朝日影曇りなき世そ久しかるへき

左右兩篇。勝負難二一決一。可レ爲レ持歟。

百廿三番

左持　中納言爲經

立そめし五十鈴の川の宮柱うこかぬ御代のかため也けり

右　信實朝臣

あらたまる五十鈴の河の宮柱百度千度君そさためん

左下句殊たのもしく侍るを。右五十鈴川の宮造りにあたりて。百度千度といへるも。思ふ所ことに侍れは。兩方の心。共に神慮にかなひ侍らん。尤可レ爲レ持。

百廿四番

左持　右衞門督通成

君のみや汲て知らん石清水たえぬ流れの千世の行末

右　右近中將雅光

石清水清きなかれを結ひても萬代いのる神の乙女子

千代の行末。神の未通女子。同科にこそ。

百廿五番

左　左部卿有教

住吉の岸の松か枝君か代にいく度花の咲かはるらん

右勝　辨内侍

我みても君そかそへん住吉の松はまことに千代もへぬへし

左ことはり〔たしか〕に侍るを。此こゝろ玉椿にて。おもかけ侍るにや。右歌からよろしく侍れは。爲レ勝。

百廿六番

左勝　右近中將師繼

神風や五十鈴の川のいその宮さことよの波の聲そのとけき

右　雅忠朝臣

千早振五十鈴の川の十寸鏡曇らぬ御代を照すとそきく

右照すより聞といへる。みるよりへたゝりて侍るうへに。左いそのみや。今はしめて見出て侍る。まことに日本紀まて。さくりもとめられたるちから。物にまくへきに侍らねは。とこよの波の聲長閑にて。よろしく侍るにや。

百廿七番

左勝　沙彌蓮性

動きなき山松か根の石清水すむへき千代の陰そ久しき

右　下野

千年へんなかれもしるし石清水濁りなき世の末もあらはに

左右おなし石清水。松かねといひ出たる。珍しく侍るうへに。心猶大切に侍るにや。以レ左爲レ勝。

百廿八番

左　爲氏朝臣

色かへぬ君か常盤の陰そへて猶久しかれ住よしの松

右勝　少將内侍

神風や五十鈴の川の絕すして君につかへん御代そ久しき

左只思へる事を。つくろはす申出し侍るにや。右鬪の藤川なと思ひ出されて侍るに。つかへん君か御代そ久しきとそ。有たく侍りける。いかさまにも。五十鈴の川ふ

るまひて侍れは。社の次第に及はへらし。

百廿九番

左　　　　經朝朝臣

住よしの神は知らん君か代をいく度松のおひかはるらん

右勝　　　　沙彌禪信

君すまんなかれ絕せぬ石淸水いはねとしるき千世のかけ哉

左人ならはとはましものをといへる下句。いくほとのかはりめ侍らし。かはるらんといへるも。よろしからすや。右ことなるとかなく侍れは。爲レ勝。

百三十番

左持　　　　越前

えたかはす神ちの山の松のはに君か千年の數そ見えける

右　　　　前權大納言爲家

五十鈴川まもる流れの淸けれは千代も八千代も君そすむへき

左歌千年の數こまかに見えて。難なく侍るめり。右歌千代に八千代といへるたとへは。源順申をき侍る。老の心に覺え侍るまゝに。おなし事のせられ侍りけるとこそ。いかさまにも兩方の思へるこゝろは。神路の山五十鈴川。共に神の納受はうたかひ侍らし。此番はかり神感をもて可レ爲レ持之由。申うけ給ふへし。

抑二代撰者の跡といふを持て。一旦判者の名をけかし侍る事。かたくのかれ申せは。そのおそれまことにふかく。なましゐにしるし付侍れは。この道かへりて淺くおほえ侍るに。殊にへつらへる所なく。しきりにたゝしき心をあらはに申へきよし。今もおほせのくたれるにつけて。見及思ひ出せる事を。たゝ筆にまかせて書付侍るつたなき詞も。をのつから心に及ひて。いきとをりかたふくたくひ侍らは。をしへをうくるみちをうしなへる耻は。更にのかるへきにあらす侍れはをろかなるをもちて。流る世の爲のをそれは。かねていかてかかへりみす侍るへき。かたへすゝみ退くもきはまり。いよへよしあしまよはれ侍れとも。只時にあたれる勅をまもれるをもちて。後の日の嘲りを知侍らさるへし。ひとへに是このみちをまなへるともから。もし又その心をわきまふ人侍らは。難波津のなみは。むかしのたゝしきかたに歸り。淺か山のみちは。いにしへのうるはしきあとをたつぬへきよしを。わつかに身におもへるところを。をのつから人にもしらしめんと也。

右後嵯峨院歌合以古寫一本挍正

群書類從卷第二百一

和歌部五十六　歌合二十二

影供歌合 建長三年九月十三夜

題

初秋露　山家秋風　朝草花　暮山鹿　霧間鴈
名所月　田家月　行路紅葉　寄煙忍戀　寄月恨戀

作者

左

女房　前太政大臣
大納言藤原朝臣隆親　左近衞大將藤原朝臣定雅
權大納言藤原朝臣公基　權大納言藤原朝臣實雄
左衞門督源朝臣通成　正二位藤原朝臣忠定
兵部卿源朝臣有教　正三位藤原朝臣成實
參議藤原朝臣爲氏　沙彌蓮性
俊成卿女　鷹司院按察
中務大輔藤原朝臣爲繼　左近衞權中將藤原朝臣爲教
左京權大夫藤原朝臣經朝　右近衞權中將藤原朝臣經平
散位藤原朝臣隆祐　右近衞權少將源雅言
沙彌寂西

右

前內大臣基　民部卿藤原朝臣爲家
中納言藤原朝臣資季　辨內侍
按察使藤原朝臣良教　少將內侍
右衞門督　下野
右兵衞督藤原朝臣教定　從三位藤原朝臣顯氏
治部卿藤原朝臣行家　承明門院小宰相
前內大臣家　右近衞大將藤原朝臣公相
沙彌禪信　權中納言藤原朝臣師繼
沙彌寂縁　鷹司院帥
日吉禰宜祝部宿禰成茂　左近衞將監源家棟
沙彌眞觀

講師

讀師

判者

一番　初秋露

左勝　女房

ぬれてほす野原の草の露のまに千年の秋のいつかきぬらん

右　前内大臣基

秋きぬと野なる草木もしりぬらんあまねくひろき露の惠に

左右歌講レ之。各可レ申ニ所存一之由被レ仰。

右方申云。左歌。野露。山路の菊。野原の草にあらたまりて。ちとせの秋のいつかきぬらんと侍る。置ところもめつらしく。ことに秀逸之由申レ之。

左方申云。右歌。あまねくひろきといへるほと。千年の秋にならふへきすかたにあらす。右の歌人無ニ陳申之旨一。尤以レ左可レ爲レ勝之由皆悉申レ之。

二番

左持　前太政大臣

白露の玉しくをのゝ淺茅原風よりさきに秋はきにけり

右　民部卿藤原朝臣爲家

玉しきの露のうてなも時にあひて千代の初めの秋そきにける

右方申。風よりさきに秋はきにけり。よろしくきこゆるよし申。

左方申。露臺尤可レ被レ賞。非レ可レ負。仍付ニ持字一。

三番

左持　大納言藤原朝臣隆親

白露の玉をみかける竹の葉にあらはれてくる千代の初秋

右　中納言藤原朝臣資季

しら露のをきにし日より故里のみかきか原も秋そきにける

竹の葉の露玉をみかきて。あらはれてくる千代の初秋。祝言よろしきよし各申侍りき。みかきかはらも秋そきにける。又させる難なし。歌からよろしく侍るよし申て爲レ持。

四番

左持　左近衛大將藤原朝臣定雅

うつろはぬ千代の初秋あらはれて松の上葉にかゝるしら露

右　辨内侍

をく露は草葉のうへと思ひしに袖さへぬれて秋はきにけり

右歌ことによろしきよし人々申侍りしを。さきの竹。今の松。いつれも祝言。色かはるへきにあらすと申て。又爲レ持。

五番

左勝　權大納言藤原朝臣公基

露むすふ衣手涼しねぬる夜の身にしられてそ秋はきにける

右　按察使藤原朝臣良教

今朝とてもおもへはおなし白露のいかてか秋の色をみす覽

左歌ことなる得失なし。

右歌おもへはおなし白露。句ことにくたけて聞え侍るにやとて。負侍りにき。

六番

左持　權大納言藤原朝臣實雄

秋きぬと人こそつけねうたゝねの袖の露にそおとろかれぬる

右　少將内侍

白妙の露や身にしむ色ならん秋くるよひの袖のかはかぬ

人こそつけねとて。おとろかれぬるといひはてたる。心ゆかぬやうにやと申人侍りしかとも。袖のかはかぬと侍も。しゐて勝劣あるへからすやと申て。爲レ持。

七番

左持　左衞門督源朝臣通成

いつのまに秋はきぬ覽白露のあまりてむすふ庭のあさちふ

右　右衞門督

置そむる露にてしりぬさやかにもみえぬと聞し秋のはしめを

左歌いうなるさまにいひくたして。よろしく聞え侍りしうへに。右歌すこしつよきよし。寂西申て左勝とさためられ侍りしを。淺茅露あまるといふ事。ちかき世にみえはへりしよし。右方に申出す人はへりて。持とさためられ侍りき。

八番

左勝　正二位藤原朝臣忠定

野へことに色にいつへき秋きぬとしらせそめてや露の置らん

右　下野

千年へんあさのゆふしてとりもあへす昨日に變る野への白露

左右歌人ともに。きのふにかはる山おろしのかせ。かはらす聞ゆとて。以左爲勝。此間。講師不可讀左右字。暗闘二首所存。一同可申之旨被定。

九番

左　兵部卿源朝臣有教

このねぬる夜のまの秋をしる物は野への草はに置ける白露

右勝　兵衞督藤原朝臣致定

草の葉は秋くるよひのいかならん我衣手は露そをきそふ

兩首ともに申。このねぬる夜のま。めなれて侍るうへに。しるものはといへる。よろしからす。させる難なきにつきて。秋くるよひ可勝之由定申。

十番

左持　正三位藤原朝臣成實

夕くれは袖より露の置そめて秋のけしきそ身にしられぬる

右　從三位藤原朝臣顯氏

きのふまてならす扇に置そへていつしか露の秋をしるらん

ならすあふき。おほくみえ侍るに。秋のけしきそみにしられける。又勝へきすかたに侍らすとて。持とさためられ侍りき。

十一番

左　參議藤原朝臣爲氏

草の原野もせの露も夜の程に置てしらるゝ秋はきにけり

右勝　治部卿藤原朝臣行家

露結ふ下草みれは櫻あさのあふのかりふに秋は來にけり

おふのかりふ。ちからあるさまなりとて勝侍りき。おふのかりふとて。露むすふはかりの草。下もくまてありかたくやとそみえ侍りける。

十二番

左　沙彌蓮性

今やこれ秋置露のにゐ結ひ時はきにけり袂すゝしも

右勝　承明門院小宰相

草の原またきに露は結ひけりいくかもあらぬ秋の口かすに

今やこれとうちいてたるより。にゐむすひときはきにけりたもとすゝしもなと。けとをく。いうならぬさまに。めつらしからんとつくりたてゝ。おなし露も所をくへきにやとうけ給ひしを。さきのおほきおほいまうちきみ。かやうの歌このころおほくいてき侍るにや。後鳥羽院御時は。つや〳〵みすきかす侍りし事也。おなしく萬葉集の歌をとるも。あらはに聞えす。いうなるさまにと

りなすへきよし。うけ給はり侍りき。左右も作者もしり侍らねと。かやうの歌にめをみせられたち侍なは。歌の道はうせぬへきよし。申いたされはへりき。今みたまふれは。作者も承伏し侍りしかとよ。猶みゝにたつことゝも侍しかとも。こまかにおほえ侍らねは。しるしおとすことおほく侍らん。何ともあれ。にゐむすひ負侍へきよし被定申侍りき。

十三番

左持　俊成卿女

秋やくる夢よりぬらす明方の枕のうへに露そ置そふ

右　前内大臣家

打なひき秋きたりとや草むしろ野もせの露の玉をしくらん

夢よりぬらす。きゝよからす侍るを。草むしろ又よろしからぬにやとて。持とさためらる。

十四番

左勝　鷹司院按察

大かたの秋たつころに成ぬとは袖の外なる露にこそしれ

右　右近衛大將藤原朝臣公相

更ぬるか夜半のみそきの麻のはにやかて置そふ秋の白露

秋たつころもおほつかなきに。露にこそしれと。少しつよく聞え侍りしを。更ぬるか夜半のみそきとては。夏のをはりにや。秋のはしめとは。もちゐかたくやとおほせ出されて。まことにそのゆへ侍りけりとて。おほかたの秋勝侍りにき。

十五番

左勝　中務大輔藤原朝臣爲繼

白露もをきあへぬまてむは玉の夜のまの秋は今そきにける

右　沙彌禪信

しら露もけふ置そめて吳竹の千代のはしめの秋を知哉

白露も置あへぬとては。題の心すくなくやとて。祝言かつへしとさた侍りしを。置そめて千代のはしめ。又おなしこゝろなるへきよし申て。猶夜のまの勝に成侍りき。

十六番

左　左近衛權中將藤原朝臣爲教

白露のあまりてをける我宿の淺茅か庭に秋は來にけり

右勝　權中納言藤原朝臣師繼

野へみれはをくしら露の色よりそ秋しりそむるはしめ也ける

判闕

十七番

左持　左京權大夫藤原朝臣經朝

ことよひ猶常よりしけき白露に草葉も今は秋をしるらん

右　沙彌寂緣

今更に我袖おもし夏衣またひとへなる秋のしら露

つねよりしけき。わか袖おもし。勝負不分明之由各申之。爲持。

十八番

左持　右近衛權中將藤原朝臣經平

いつくより露のはしめて結ふらん秋をは人のこゝろこそしれ

右　鷹司院帥

誰とこに秋くるよひといひ置てかくは露けき習ひなるらむ

たかとこにといひいてたる。よろしからす。心こそしれ。あまりにしたりかほなりとて。持とつけられ侍りき。

十九番

左持　散位藤原朝臣隆祐

秋のくる夕のあはれしりそめて何の草木も露やをくらん

右　日吉禰宜祝部宿禰成茂

思ひあへすけふも扇は手になれて露こそ秋と置はしめけれ

ゆふへのあはれ。けふのあふき。又おなしほとゝさためらる。

二十番

左勝　右近衛權少將源雅言

置露の白玉椿けふよりや八千代の秋のはしめなるらん

右　左近衛將監源家棟

秋そとは思ひもわかぬ曉に枕の露をおきてしりぬる

松竹の祝言ののち。をく露のしら玉椿八千代の秋。尤賞へきうへに。あか月におきてしりぬるといへる。よろしからさるよし申て。爲レ負。

二十一番

左勝　沙彌寂西

置まさる草葉の上の露のまにさひしき秋のいつかきぬらん

右　沙彌眞觀

なをさりにさゝ分し野の白露もひまこそ見えね秋やきぬらん

さゝわけしあさよりは。野はをとりて聞え侍るに。なをさりもおほつかなしとて。草葉のうへの露。をきまさり侍りき。

二十二番　山家秋風

左勝　女房

山ふかみすまゐからにや身にしむと都の秋の風をとははや

右　前内大臣基

つまきこる谷のゆきゝの道すから人にしらるゝ秋の山風

都の秋の風をとははや。まことに山中景氣思ひやられて。入二幽玄之境一之由各申。人にしらるゝたにのかせ。さる事にて侍れと。つまきこるゆきゝの道すから。おもかけくちおしと申人侍て。いよ〳〵みやこの秋まさりはへるよし。一同申て。爲レ勝。

二十三番

左勝　前太政大臣

たへすくす嶺のしはやの風の音も更に悲しき秋の空哉

右　民部卿爲家

人とはぬ山のかきほの葛かつらかつらみつゝ秋風そふく

山のかきほのくすかつら。返々よは〳〵しく。當座の歌の躰みくるしきよし申侍き。みねのしはや首尾相叶て。詞姿優美に。ことによろしとて。勝と被レ定。

二十四番

左持　大納言隆親

つかふとてまれにのみ見る山里の庭の淺茅に秋風そふく

右　中納言資季

淋しとも誰にかたらん山里の軒端の松の夜半の秋風

つかふとてまれにのみみるといへる。わたくしをかへりみぬほともきこえて。めつらしくはへるを。軒端の松のよはの秋かせも。きゝ所なきにあらすとて。持と定申。

二十五番

左勝　左大將定雅

吹風もとふにつらさのまさるかななくさめかぬる秋の山里

右　辨内侍

山里の夜半のね覺はさならてもうきをはしるや峰の秋風

山里いつれも。景氣おもひやられて。いうに侍るを。さならてもといへるや。すこし心ゆかぬやうにはへるへきと申いたす人侍て。まけ侍りにき。

二十六番

左勝　權大納言公基

さらてたに心うかるゝ山里の夕くれことに秋かせそふく

右　按察使良敎

山里の秋をはいかになくさめんとふさへつらき峯の松風

とふさへつらきといへるは。をとるへしとて。爲ㇾ負。

二十七番

左　權大納言實雄

今さらにかきほのつゝらくりかへし悲しきものそ秋の山風

右勝　少將内侍

かきほなる山のしたしは打なひき人はをとせて秋風そ吹

かきほのつゝらくりかへし悲しきものはと思ひ。山のしたしはうちなひき人は音せてさうらむる秋のかせ。こゝろいつれも身にしみて。よろしくはへるを。人は音せて秋風そふく。ことにえんに聞え侍れは。可ㇾ勝之由被ㇾ定。

二十八番

左勝　左衞門督通成

たれきてか秋ともつけん山里に松吹風の音なかりせは

右　右衞門督

淋しさはたくひもあらし山里の草のとほそにすくる秋風

草のとほそ。させる事なし。松吹風。なをきく心地するよし。各申て。爲ㇾ勝。

二十九番

左　正二位忠定

山深き秋の哀を身にそへて猶うきものは軒の秋かせ

右勝　下野

風の音にたへてもいかゝすみはてん山の奥まて秋は來に鳬

風のをとにたへてもいかゝ。こゝろありて聞ゆるうへに。秋のあはれを身にそへてといへる。をとるへきよし各申て。負侍き。

三十番

左持　兵部卿有敎

かねてしるすまゐなれとも秋は猶さひしさまさる峯のまつ風

右　敎定朝臣

軒端なる木のはの色はをそけれと秋やと山の風そ身にしむ

木の葉の色はをそけれと秋やとやまといへる。ゆへあるさまに侍るを。さひしさまさる峯の松風も。きゝすてかたしとて。持とさためられ侍りき。

三十一番

左持　正三位成實

我庵の草のとさしのあたなれは明ぬくれぬと秋風そ吹

右　從三位顯氏

ふしなれぬ程をはゆるせ竹のとに風も夜さむの時はきぬとも

草のとさしのあけくれ。あたなるを思。竹のとの夜さむをゆるせといへる。歌のことは。ことなりといへとも。風情おなしかるへきよし各申て。爲ㇾ持。

三十二番

左勝　参議為氏

身にしみて物そかなしき秋風の吹たつころの山かけの庵

右　行家朝臣

今よりや虫のねさそふ山風の音羽の里は夜さむなるらん

山かけのいほ。建仁のころ多く聞ゆるよし。申人侍しかとも。名所月題をきて。音羽の里要なきうへ。題の山家思ひやりたるもいかゝと申て。山陰の庵に勝とつけられ侍し。ふきたつころもゆるされかたくや。

三十三番

左勝　沙彌蓮性

老てすむ山へはさそな風の音も秋にはあへすさひしかる覽

右　小宰相

吹かはる風のけしきになるまゝに猶すみわふる秋の山里

風のけしきになるといへる。きゝにくし。老てすむなといへるは。心あるへしとて。為ㇾ勝。

三十四番

左持　俊成卿女

むくらはふ眞柴の庵に音つれて荻の葉すくるよはの秋風

右　前内大臣家

山ふかみをちかた人はこととはて音信たえぬ松の秋かせ

むくら。ましは。荻。ことおほくきこゆるよし。寂西申侍しかとも。山里のおもかけ。まさしく見る心地し侍れは。難には侍らし。みやこの人をさへて。をちかた人といぼんも。心はかはり侍らねとも。いかゝとて。持と被ㇾ定。

三十五番

左　按察

かくはかりみし人みえぬ山里に情しらるゝ秋の風かな

右勝　右近大將公相

やへしけるむくらの宿の柴の戸もあらはにすくる嶺の秋風

かくはかりといへるのち。またよろしからす。あらはにすくる峯の秋風。ふきまさり侍らんとて。為ㇾ勝。

三十六番

左勝　為継朝臣

身にしむも秋のならひの山風をすむ宿からとなに思ふらん

右　沙彌禪信

とふ人もあらしのかせのいたつらにふくはかりなる秋の山里

あらしのかせふくはかりなるといへる。をとるへきよし各定申。

三十七番

左勝　為教朝臣

淋しさはさらてもつらき山里に身にしむ秋の風の音哉

右　權中納言師繼

山里はいつとしわかぬ松かせのふくにつけても秋そ悲しき

いつとしわかぬといへる。さまての難にても侍らきりしかとも。きゝにくしとて。さらてもつらき山里勝と被ㇾ定。

三十八番

左持　經朝朝臣

なれなはと思ひし軒の山風に秋はいかなる音をそふらん

右　沙彌寂縁

いかにせん我世へぬへき山かけの軒はの松に秋風そふく
兩首同科之由さためらる。

三十九番
左勝　經平朝臣
都人ふみもならさぬ庭の面にかよふ跡なきみねの秋風
右　帥
ならはれはふしそかねたる山里のさゝかきうすき夜半の秋風
さゝかきうすき。いうならすとてまけ侍りき。ふみならさぬかよふあとなき。おなしことにやとそみえ侍ける。

四十番
左　隆祐朝臣
都よりかよふともなき風の音はきけともつらき秋の山里
右勝　成茂
ふしわひぬすゝのしのやの假ひさしやゝ夜さむなる秋の山風
かよふともなき。心おほつかなきうへに。すゝのしのやは。いさゝか心侍るにやとて。爲レ勝。

四十一番
左勝　雅言
すみわひぬ都の秋の淋しさもさらに吹そふまつの下風
右　家棟
さらてたにほさぬ袂をかたしきのとこにな吹そ秋の山かせ
とこにな吹そ。よろしからす。をとるへきよし定申。

四十二番
左勝　沙彌寂西
深山へに柴のかこひのあはらさも吹くる秋の風そしらする
右　沙彌眞觀
山ふかく住はうき身と思ふよりいかにせよとか秋風のふく
いかにせよとか。ことによろしくきこえ侍りしを。本歌三句さなからつゝきてそはへりけるとて。しはのかこひ。あはらなから。勝と定申。

四十三番　朝草花
左勝　女房
わすれすよ朝きよめするとのもりの袖にうつりし秋萩の花
右　前内大臣基
いかはかり露こほるらん女郎花おはなかもとのあくる別に
あさきよめ。よみあけ侍しより滿座吟咏。今ひとつの歌。中々よみ申すへからす。さたあるましきよし申らけ侍し。いま見侍れは。なへての歌にならひ侍らは。よろしくもや侍らまし。

四十四番
左持　前太政大臣
朝戸いてにあかもすそひく乙女子か手折てかさす秋萩の花
右　民部卿爲家
花すゝきたか手枕をとめかねてあくるなけきの人まねくらん
とめかねてといへる。述過たることはにや。あかもすそひく。いましめ申同類なりと左方申て。持字をつけられ侍き。

四十五番
左勝　大納言隆親
朝戸あけてみれともあかす秋萩のうつろひまさる花の盛は
右　中納言資季
あさ露や野へのにしきをそめつらん ぬれて色こき秋萩の花

野へのにしき。秋萩。おなしことにやと申て。爲レ負。

四十六番

左持　　左大將定雅

見渡せは秋の野原の朝日影ち草の花の色そうつろふ

右　　辨内侍

朝ねかみこほれていとゝみたるとも小萩か露は折てかさゝん

野原の朝日影。きら〳〵しく見え侍しを。朝日かけこほれてとつゝけたる。いかゝと申人侍しかとも。ことにこほれかゝると申ならへれは。おもかけすてかたしと各申て。爲レ持。

四十七番

左　　權大納言公基

見てもまた日數はひさしあさな〳〵ちれはかつ咲野への萩原

右勝　　按察使良教

旅人のあさたつ野への花薄たか白妙の袖とみゆらん

あさたつ野へ。めつらしき所侍らねと。歌からよろしきよし各定申。

四十八番

左勝　　權大納言實雄

女郎花たかきぬ〳〵の名殘とて朝をく露にかつしほるらん

右　　少將内侍

花すゝきまねく袂にかけてけりあさたつ人の袖のしら露

たもと袖。はゝかるへきにやとさた侍しかとも。草のたもとか花すゝきとよめるうへは。させる難に侍らし。かけてけりといへるほとそ心ゆかす聞え侍。左はまさるへくやとて。爲レ勝。

四十九番

左持　　左衞門督通成

旅衣あさたつ袖も色見えてたえ〳〵まねく花薄哉

右　　右衞門督

よるとても心のしめはたゆまぬをけさみたれたる秋はきの花

さきによみあけ侍歌。たえ〳〵。ようなきよし申人侍しかとも。心のしめはたゆまぬをといへる。ゆるしかたしと申て。爲レ持。

五十番

左持　　正二位忠定

朝戸あけのたよりにつけてみつる哉人こそとはね庭の秋萩

右　　下野

旅人の朝たつ野へのをみなへしゆくてはかりの袖に匂ふな

みつるかな人こそとはねといへる。よろしからす。そてに匂ふな。又勝へきにあらすとて。爲レ持。

五十一番

左持　　兵部卿有教

よな〳〵や花は咲らんあさことに色まさりゆく野への秋萩

右　　教定朝臣

朝な〳〵うつろふ露はあたなれと萩のふるえの花は忘れす

よな〳〵や。朝ことにも。いひおほせすや。うつろふ露はあたなれと。心わきかたしとて。持のよしさためらる。

五十二番

左勝　　正三位成實

あつさ弓ひくまの野邊のあさ日影にほふ眞萩の色そうつろふ

右　　從三位顯氏

下葉まてそめつくすへき朝露のをき所なきもとあらの萩

あつさ弓引まの野へは。名所又をしていてきたりとさた侍き。もとあらのはきは。いたつらに葉のことはおほくて。むなしく花の心すくなし。名所勝侍き。野へより山に入鹿も。はなはなきにやとおほせいたされ侍し。まことにさまての事には侍らしかし。

五十三番

左持　参議爲氏

朝な〳〵をく白露もうつろひぬ咲そふ秋の花の千草に

右　行家朝臣

哀けさとふ人あれな秋萩の花のうへなる露もひぬまに

左右ことかはりたる持と被定。

五十四番

左　沙彌蓮性

いとゝまたちらまくもおしかり人の朝ふむ野へにさける秋萩

右勝　小宰相

露なから見せはや人にあさな〳〵うつろふ庭の秋萩の花

あさふむ野へ。すこしけとをく聞え侍うへに。露なから見せはや人にといへる。いうなりとて。勝侍にき。

五十五番

左　俊成卿女

さゝわけてぬれゆく袖の雫さへこほれてうつる萩か花すり

右勝　前内大臣家

すかのねのなか月のよのあけたては露けさまさる秋萩の花

さゝ分るはかりにて朝いかゝとて。すかのね勝侍き。長月の萩そ。少おそく咲て侍ける。

五十六番

左　按察

朝ことにたかかたみとて秋萩の花を哀とおもひそめけん

右勝　右近大將公相

朝またき野原しのはら分きつる我衣手の萩か花すり

朝またき秋萩の花をかたみと思ひそめけん。故有ことにやと聞え侍しを。野はらしのはら。催馬樂のことはとりなされたるすかた。有興の由各定申て。爲勝。

五十七番

左　爲繼朝臣

しのゝめはほのかに空のあくるよりまねくをみする花薄哉

右勝　沙彌禪信

このねぬる夜のまに花の咲そへてけさは色こき庭の萩原

しのゝめはほのかにそらの。ことはつゝき心ゆかすとて。よのまの花。けさは色まさると被定。

五十八番

左勝　爲教朝臣

けさみれはわかいねかてにあらはれて下葉うつろふ秋萩の花

右　權中納言師繼

旅人のあさたつをのゝすきかてに亂れてまねく花すゝき哉

いねかて。このころおほく侍よし申侍しかとも。猶勝にけり。

五十九番

左持　經朝朝臣

野へにたつお花のなみの白妙に山のはつゝくあさまたき哉

右　沙彌寂縁

折にあへは野もりか秋の朝戸いてもうらやむ程の花の色哉
おりにあへは野守か秋も。うらやむ程のことはの色に
はあらすとさた侍しを。まのゝ入江なとなくて。おはな
かなみも。より所なしとて。可ㇾ爲ㇾ持の由被ㇾ定。

六十番

左　經平朝臣

白露の手枕の野のをみなへし誰とかはせるけさの名殘そ

右勝　帥

明て行たかかへるさもとゝまらしはかなくまねく花すゝき哉
白露のたまくらのゝ。めつらしくもとめ出されて侍れ
と。名所又ようなきうへに。たかかへるさもとゝまらし
さいへる。あやまちなく。いうに侍れは。勝と被ㇾ定。

六十一番

左　隆祐朝臣

やとりする妻とたのめと女郎花けさこそなひく色は見えけれ

右勝　成茂

立かへり昔をかけて朝露のふるえの小萩かさしにそさす
けさこそなひくといへる心。おほつかなし。たちかへり
むかしをかけてといへるは。心も侍らんとて。勝と定侍
き。

六十二番

左勝　雅言

花すゝきたかきぬ〳〵の名殘とて草の袂のけさは露けき

右　家棟

秋の野のかりねの庵の朝戸出に心そとまる萩か花すり
たかきぬ〳〵。たちまさるへきよし人々申て。爲ㇾ勝。

六十三番

左勝　沙彌寂西

曉の露より後におきていまをそくそみける秋萩のはな

右　沙彌眞觀

たかゆるす花の盛そ朝かほのあしたわひしき宿と見なから
曉の露よりのち。あしたの事こもりて。ひるにてもやと
さた侍しを。たかゆるす心もおほつかなく。下句も凡卑
なりとて。をとるへきよし各定申。

六十四番　暮山鹿

左勝　女房

暮行とはやましけ山さはりおほみあはてやしかの妻をこふ覽

右　前内大臣基

たえすたつ夕への雲の高ねにもすめはすみけるさを鹿の聲
葉山しけ山しけゝれとといへる歌を。さはりおほみあ
はてやしかのと侍こそ。ふかく思ひいれて侍けれと一
同申ㇾ之。たえすたつ雲。此題にはことへたゝりて。かけ
ても要なくやとて。葉山勝の由。滿座申ㇾ之。

六十五番

左　前太政大臣

夕されは妻こひすらし高砂の尾上にひゝくさをしかの聲

右勝　民部卿爲家

夕暮はをのかすみかの山にても猶うき時と鹿そなくなる
尾のへにひゝく鹿のこゑ。たかく聞ゆる由。申侍しかと
も。のちの歌に勝字をつけられ侍き。

六十六番

左勝　大納言隆親

夕暮はわきてあはれやしらるらん妻待山のさをしかの聲

右　中納言資季

深山への秋の夕を哀ともなきてや鹿の人につくらん

両方鹿のこゑ。人につくらんよりは。つまつ山たちのほるへきよし申て。爲レ勝。

六十七番

左　左近大将定雅

秋されは山の尾上に聲たてゝ鹿も夕の物や悲しき

右勝　辨内侍

秋はいとゝさひしき山の夕にもすめはすむとや鹿の鳴らん

両首。いつれもよろしく聞え侍しを。しかもゆうへのものやといへるや。すこし心ゆかぬやうに侍と申人侍て。負侍き。

六十八番

左勝　權大納言公基

妻こひの夕となれはおく山にめにみぬ鹿の音をのみそ鳴

右　按察使良教

夕暮のまかきの山はこれならんつまをへたてゝ鹿そ鳴なる

めにみぬ鹿のね。さはやかに聞えす侍しを。まかきの山ふかく見え侍よし。さたいてきて。さきの歌猶可レ勝の由被レ定。

六十九番

左持　權大納言實雄

み山への秋にはあへすなく鹿もゆふへそ人の袖ぬらしける

右　少将内侍

鳴鹿の涙も袖におちそひぬしけきみ山の秋の夕暮

両首ともによろしき持とさためられ侍き。

七十番

左勝　左衛門督通成

山ふかき秋の夕を哀とも鳴てしらするさをしかの聲

右　右衛門督

夕暮はあやしかりけりをしかなくみやまはいつさわかぬ哀も

秋の夕はあやしかりけりといへるは。きゝにくゝやとて。させるとかなきにつきて。山ふかき秋に勝とつけられ侍き。

七十一番

左　正二位忠定

色まさる涙やふかき夕つくひわけ入山のさをしかの聲

右勝　下野

暮かゝる秋のけしきにたへかねておのへの鹿も妻をこふらし

しかのなみたなれとも。夕つくひ分入山とては。をき所いかゝとさた侍て。秋のけしきまさるへしと定申。可レ爲レ勝。

七十二番

左　兵部卿有教

かきりなき秋のあはれは白雲のゆふゐる山のさをしかの聲

右勝　教定朝臣

夕暮の山のたかねに鳴鹿もあまつ空にや妻をこふらし

おなし鹿の音も。しらくものゆふゐるよりは。あまつ空にやといへる。思ひあかりて聞ゆとて。爲レ勝。

七十三番

左　正二位成實

立ならす葉山しけ山なく鹿の聲もさはらぬ夕ま暮かな

右勝　従三位顯氏

淋しさも秋はならひの夕くれにたえす尾上の鹿そ鳴なる

葉山しけ山たゝいまつゝきて。ことのほかにいやしきよしをの〳〵申て。たえすおのへといへる。よろしさまさりとて。勝侍き。

七十四番

左勝　參議爲氏

夕暮は妻まつ時としりかほにはやまの鹿もねをそたつなる

右　行家朝臣

忍はれぬ山への秋の夕暮はをしはからるゝさをしかの聲

をしはからるゝ。つねの事にあらすと人々申て負侍。

七十五番

左　沙彌蓮性

秋深き山のしつくのゆふこりに鳴やをしかのいかゝしつけき

右勝　小宰相

さを鹿の鳴音もいろはまさりけり夕日かゝれる秋の山もと

鹿鳴山に夕日かゝれる。秋景氣思ひやられ侍うへに。山のしつくのゆふこり。いかゝしつけきとては。いかさまにもかつへからすと。とかめ申人侍りて。爲レ負。

七十六番

左　俊成卿女

鳴鹿もこゑのかきりやつくすらん小倉の山の秋も夕と

右勝　前内大臣家

夕つくひ暮ゆくまゝに鳴まさる秋の小鹿の妻こひの山

聲のかきりやといへる。物語の歌思いたさるゝに。秋もゆふへといひはてたるも聞にくしとて。負侍き。秋のをしかのつまこひの山。名所にてもなにゝても。勝てはいかゝとそ見給へ侍る。

七十七番

左持　按察

さても猶夕やつらき秋山にともはあれとも鹿のなくなる

右　右近大將公相

暮かゝるみ山おろしにたくひきて秋の袖とふさをしかの聲

ともはあれともといへる。あまりに見わきてたしかなるに。秋のそてとふもかけりすきてやと。寂西申て。持に被レ定。

七十八番

左勝　爲繼朝臣

きけは猶淋しかりけりさほ鹿の鳴山かけの秋のゆふくれ

右　沙彌禪信

つまきとる名をなつかしみ山人のかへる跡より鹿そ鳴なる

爪木とる名をなつかしみ。山人のあとしたへる鹿の音。きゝにくしとて。なく山かけ爲レ勝。

七十九番

左　爲教朝臣

から衣日も夕暮につまこめてと山の奥に鹿そなくなる

右勝　權中納言師繼

あはれまたためしもあらしさをしかの妻とふ山の秋の夕暮

つまとふ山の秋の夕暮。いらにきこえ侍うへに。から衣日も夕暮。めなれたるふることに。つまこめてといへる下句。衣のことかけてもそのよせ侍らす。をとるへきよ

し申て。負侍き。

八十番

左持　　經朝朝臣

山ふかみ暮行空にをのれのみ秋の哀は鹿そ鳴なる

右　　沙彌禪信

小倉山妻とふ鹿もわきて猶たへすやふかき秋の夕暮

くれゆくそらにをのれのみ。ことはのつゝきよろしからさるよし。各申侍しを。たへすやふかき。又心ゆかすとて。同科に被ㇾ定。

八十一番

左持　　經平朝臣

妻こひに鹿はなくなりから衣すそろの山の秋のゆふ暮

右　　師

いつの秋たのめをきけんさをしかの妻待山の夕暮のそら

すそろの山。れいのめつらしき名所にやと。さた侍しかとも。わきまへ申人も侍らさりき。いつの秋もいかゝとて。爲ㇾ持。

八十二番

左　　隆祐朝臣

日くるれはゆく人見えぬしからきのと山に出るさをしかの聲

右勝　　成茂

さをしかのは山しけ山ふみ分て鳴夕くれも妻やつれなき

ゆく人見えぬしからき。名所要なきよしさた侍しを。葉山しけ山なをあやうくやと申侍しかとも。勝とさたまり侍けるにや。

八十三番

左勝　　雅言

夕暮は妻待山の風寒み尾上の鹿そ音にたてゝ鳴

右　　家棟

夕日さす松の木陰にたつ鹿のいつともわかす妻やこふらん

まつの木かけ山なきよしさた侍き。まことによくもとめは岡なとまてやと申て。つま待山。たしかに勝侍き。

八十四番

左勝　　沙彌寂西

尾上なる松の木のまの夕つくよさしもはなとか鹿の鳴らん

右　　沙彌眞觀

またけふもむなしく暮ぬ高砂の尾上の鹿の音のみなかれて

又けふもむなしくくれぬといへる。いうに聞え侍るを。鹿のねなきとられてきこゆと申人侍て。夕つくよ。させる難なしとて。爲ㇾ勝。

八十五番　　霧間鴈

左勝　　女房

久方のあまきる霧のたえ〳〵にそれかとみえて鴈はきにけり

右　　前内大臣基

立まよふ霧にとたえやまさるらんをのれ數そふ秋のかりかね

久方のあまきる霧。題はあらはに心はこもりて。ことによろしきよし皆悉申。とたえやまさるらん をのれかすそふ。いかにと見わきかたきよし申て。あまきる霧は。はるかにたちまさるへきよし。各定申。

八十六番

左　　前太政大臣

天の原たえ〳〵みゆるうす霧の雲井に遠き秋の鴈金

右勝　民部卿爲家

立わたる峯の秋霧ひまとめてうすすみしるき鴈の玉つさ

雲井にとをき秋のかりかね。ことによろしく。おもかけ見るやうに侍るを。ひまとめてうすすみしるき玉つさ。かきやつして見所なく侍しかとも。勝字の侍ける。猶しかるへからすや侍らん。

八十七番

左　大納言隆親

たえ〳〵に山とひこゆる鴈金のはかせもしるき峯の秋霧

右勝　中納言資季

夕霧の立もらしける山のはにかすさへみえて鴈はきにけり

はかせもしるきよりは。かすさへ見えては。たしかなるにやと人々申て。爲レ勝。

八十八番

左　左近大將定雅

久方のあまつみ空に立のほる霧分わひて鴈そ鳴なる

右勝　辨内侍

立わたるうす霧かくれみえわかてくれとも遠き秋の鴈金

霧わけわひては。次第にいひつゝけたるやうにて。心も詞も。いかゝと見え侍にや。くれとも遠きは。めつらしききさまなりとて。爲レ勝。

八十九番

左勝　權大納言公基

天津空へたつる霧のたえまよりあらはれわたる初鴈の聲

右　按察使良教

秋をしもをのか時とやあさ霧にたちをくれしと鴈もなく也

あらはれわたる。さも侍なん。たちをくれしといへる。をとるへきにやと人々申て。負侍き。

九十番

左　權大納言實雄

鳴てくるかたもきこゆる鴈金の數こそみえね峯の秋霧

右勝　少將內侍

玉つさはかけてもみえし秋霧のはれぬ雲井に鴈はきにけり

かたもきこゆる秋霧は。みゝにたつやうに侍れは。かけてもみえぬたまつさ。心にくしとて。爲レ勝。

九十一番

左勝　左衞門督通成

晴やらぬ霧のたえまのうすすみにかきつらねたる鴈の玉章

右　右衞門督

たえ〳〵に立秋霧の空にのみ鳴わたりつゝまよふ鴈金

かきつらねたる玉つさ。見るやうなるうへに。なきわたりつゝまよふかりかねは。をとりて聞ゆとて。爲レ負。

九十二番

左持　正二位忠定

ゆく鴈はつゝまてみする玉章をよそにかきけつ峯の秋霧

右　下野

朝霧のたなひく峯を行鴈のはらふ羽風に數もわかれす

よそにかきけつ。見にくきやうに侍れとも。はらふはかせにかすもわかれす。勝へきことはつゝきにあらすとて。持になされ侍き。

九十三番

左持　兵部卿有教

あまつ空たつ朝霧のたえ〴〵にはれゆくみれは鴈はきに鳬

右　　教定朝臣

秋霧のやへにかさなる山のはを聲もへたてす鴈はきにけり

晴行みれは。間もすきて見え侍るにや。八重にかさなる。歌からよろしとて。なすらへて持と定らる。

九十四番

左持　　正三位成實

鴈金のはかせに霧や晴ぬらんをのれまよはぬ秋の空哉

右　　從三位顯氏

とふ鴈の數見えぬへきうす霧に鳴ねはいとゝかくれやはする

をのれまよはぬ。鳴ねはいとゝ。同科の由定申。

九十五番

左持　　參議爲氏

鴈のくると山のこすゑみえそめてよそにわかるゝ秋の朝霧

右　　行家朝臣

秋霧の音もせてのみふる物をいかてかけこし鴈の玉章

と山のこすゑ見えそめて。霧間山と申つへくやと申いたし侍しかとも。をともせてのみ。勝へきにあらすとて。可ㇾ爲ㇾ持之由被ㇾ定。

九十六番

左　　沙彌蓮性

鴈かねのは風はなにそみちのへの霧吹はらへ人のためかは

右勝　　小宰相

しるらめや霧たつ空に鳴鴈もはれぬ思ひのたくひある身を

みちのへのといへるより。地につきたるやうにて。そらのこととも きこえすや。はれぬおもひのきり。述懷の心思ひこめて。勝をゆるされ侍りき。

九十七番

左持　　俊成卿女

立まよふ峯の夕霧ふかき秋の雲井を分て鴈そ鳴なる

右　　前内大臣家

初鴈の鳴音もさむく日は暮てたなひきやらぬうす霧の空

なくねもさむく日はくれて。させるようなしとさた侍しを。ふかき秋の事なかくやと申て。爲ㇾ持。

九十八番

左　　按察

またれつる雲井の鴈の玉章をみせすはつらし秋の夕霧

右勝　　右大將公相

はれそむるたえまそみゆる鴈金のまたとをさかる山の秋霧

みせすはつらし。やかてかこちたるやうに侍にや。又遠さかるけいき思ひやられて宜しとて。爲ㇾ勝。

九十九番

左　　爲繼朝臣

秋霧はたちかさねたる空なれと初鴈かねの聲そへたてぬ

右勝　　沙彌禪信

しはしとてみるほとそなき秋きりのたえまを過る鴈の玉章

おなしほとの歌。間字おもへらんは。いさゝかまさるへきにこそと申て。たえまを過るを爲ㇾ勝。

百番

左持　　爲教朝臣

かけてくるたか玉章そ朝霧のたえまにみゆる秋の鴈金

右　　權中納言師繼

鳴わたる鴈のはかせははらへともまた立まよふ峯の朝霧玉つさ。よみふるしてめつらしからす見へ侍しを。持にて侍ける。

百一番

左　經朝朝臣

さきたつもとまるもみえぬ夕霧に幾つらとてか鴈のゆくらん

右勝　沙彌寂蓮

いくつらと見ても何せん鳴鴈のこゑきく空の秋の朝霧

見てもなにせんとまていひたてすとも。心はきこえ侍なんかし。いくつらとてか鴈のゆくらん。春の歌ににたるらへに。上句よろしからぬさまなりとて。爲ㇾ負。

百二番

左持　經平朝臣

久方のあまの朝霧たえ〳〵にかすあらはるゝ初鴈の聲

右　師

たちわたる霧のたえまのほともなくみえては見えぬ初鴈の聲

あまの秋きり。れいのえんならぬさまにや。見えてもみえぬ風情。さも侍なんとて猶持に被ㇾ定。

百三番

左　隆祐朝臣

へたてなきとしの契にくるかりは霧のうへにも聲そ近つく

右勝　成茂

鴈金のたか玉章を忍ふらんそれともみえぬ峯の秋霧

へたてなきとしの契り。やすらかならす。たかたまつささせる難なしとて。爲ㇾ勝。

百四番

左勝　雅言

立まよふ峯の秋霧たえ〳〵にへたてもはてぬ鴈の一聲

右　家棟

明わたる峯の朝けのほのかなる霧のまよひに鴈はきにけり

明わたる峯のあさけ。いかゝとて。爲ㇾ負。

百五番

左　沙彌寂西

くる鴈のは風にちかき程見えてはるゝかほなる秋のあさ霧

右勝　沙彌眞觀

くる鴈のうきて思ひはしらねともたつ河霧の空に鳴なり

羽風にちかき間はみえ侍れとも。たつかはきりの空になくなり。心詞いうなるよし人々申て。爲ㇾ勝。

百六番　名所月

左勝　女房

月もなをなからにくちし橋柱ありとやこゝにすみわたる覽

右　前内大臣基

ことしこそけに數そひて長月の月もあかしのこゝち也けれ

此長柄橋。たゝ名所月。心も詞も。殊勝とはかり思給ほとに。いまの文臺の事さた侍にこそ。はしめて思いたし侍れ。後鳥羽院御時。宇治に御幸ありて。歌講せられ侍けるに。此文臺のやうをうけ給はりて。或人やそうち河の月影をなからのはしのうへに見るかなと侍けるを。ありかたきためしに。うけ給はりわたり侍を。なからにくちし橋柱ありとやこゝにすみわたるらんと侍こそ。むかしにこえて。いまはまさり侍らめ。あかしのうら。月くはゝれるよしなと侍れと。秀逸あたりにちかつく

へきもの侍らし。返々長柄橋。勝ても勝侍へし。

百七番

左勝　前太政大臣

神路山さこそ此世をてらすらめくもらぬ空にすめる月影

右　民部卿爲家

いつくにも思ひそ出ん松嶋やをしまかいその秋のよの月

うちつゝきて神路山にて。ゆくすゑはるかに世をてらすへきひかり。十三夜の月にあらはれて。上下滿座の詠歌にはこやの山も。けに萬歳の聲を奏する心ちし侍しか。無二是非一勝字をつけられ侍き。いま一の歌も。かれにひかれてさたにをよはす侍し。ひとつの冥かとこそ。よろこひ思給らめ。

百八番

左持　大納言隆親

年をへて見しも昔に成にけりさとはみなせの秋の夜の月

右　中納言資季

清見かた雲をはとめぬ浦風に月をそやとすなみの關守

浪の關もり。題のこゝろあきらかによろしく聞え侍しを。見しもむかしにといへる。なにとなくいうなるすかたなりとて。持にさためられ侍しかとよ。

百九番

左持　左近大將定雅

いにしへのふるき都を三笠山おもひいてつゝ月やすむらん

右　辨内侍

またもあることしの秋のなか月は月もふたみの浦にこそ見め

あけぬふたみのうらも。おほつかなき所なく。さらぬみかさの山も。思ゆへあるすかたに侍れは。持のよし定申。

百十番

左　權大納言公基

とことはに雲吹はらへ月のすむらもあかしの夜半の秋風

右勝　按察使良教

すへらきの三笠の山の月影やくもりなきよをさしてしるらん

このみかさの山。かけまくもいかゝとさた侍しかとも。かくつゝきたる證歌侍よし。申人侍しうへに。いかさまにも。くもりなき世をさしてしるらん。いかてかをろかに侍らんと申て。爲レ勝。

百十一番

左持　權大納言實雄

沖つ風吹上の濱の白妙になをすみのほる秋のよの月

右　少將内侍

とへかしな芦屋の里のはるゝ夜に我すむかたの月はいかにと

ふきあけのはま。みところおほく。おもかけおもしろく。あしやの里はるゝ夜。わかすむかたまて。あらはに見たるやうにおほえ侍れは。ことによろしき持と申定侍き。

百十二番

左持　左衞門督通成

秋の夜は須磨の關守すみかへて月やゆききの人とゝむらん

右　右衞門督

神代よりあまてる月もかけなれてのとかにそすむ住吉の浦

すまのせきもりにすみかへて。ゆききの人をとゝむる月は。ことによろしきよし申侍しを。住吉のうらあまて

る景。長閑なるこゝろも。すてかたしとて。可ㇾ爲ㇾ持之由被ㇾ定。

百十三番

左勝　正二位忠定

よそに見し雲たにもなし葛城やあらし吹夜の山のはの月

右　下野

秋の月こよひあかしのうら浪のとかにみゆる世のけしき哉

明石の浦の浪。春にかすめるおもかけたつとて。かつらき山の嵐。夜半にふけるこゝろまさると。をの〳〵申て。爲ㇾ勝。

百十四番

左持　兵部卿有教

五十鈴川ひとたひすめる色そへて光をやとす萬代の月

右　教定朝臣

時しらぬ雪に光やさえぬらんふしの高根の秋のよの月

ゆきにさえたるふしのたかねの月。歌からたけたかく。きよけに見え侍しを。いすゝ川神威にをそれて。持になされ侍き。

百十五番

左持　正三位成實

ほの〳〵とあかしの浦をなかめけん昔のかけをうつす月影

右　從三位顯氏

立よりてたれもなかめつ鏡山くもらぬ秋の夜半の月影

ほの〳〵とは。眞影事おほくて。かしこく月の出きて侍けると。さた侍き。かゝみ山。たちよりて見るは。ことはりに侍へきに。なかめつや。ことたかふへきとて。爲ㇾ持。

百十六番

左勝　參議爲氏

秋ことに慰めかたき月そとはなれてもしるやをはすての山

右　行家朝臣

長月のきくのたかはま月影にうつろふなみを花かとそ見る

きくのたかはま。よろしきよし申人侍しを。月よりも題になききくの事。おほくや侍らん。又長月とて。句へたてゝ月影も。歌人々にはなきにをとるへくやときとおほえ侍しはかりに申出して侍しを。月次はは〻からすと申人侍き。證歌とてちかき世のいてきて侍しかとも。猶しはらくいかゝとて。めつらしけなき。をはすて山勝侍し。いかなるへき事にか。かやうの事議によるへくや。

百十七番

左勝　沙彌蓮性

かたしきに夜やふけぬらん東路のいそねのはしに月渡るみゆ

右　小宰相

長月の月にそへてやあかしかた秋のなかはの影のこしけん

八月十五夜月。九月十三夜のためとて。かけのこしけんことも。そらにしりかたくやとて。いそねのはしとかや。これいのすかたなから。勝侍にけり。

百十八番

左持　俊成卿女

よにしらぬ光も色も秋の月みやきか原にすめるよの影

右　前内大臣家

たれしかも見て忍ふらんかるもかくふす非の鵬の秋の月影

みやきかはら光かけ。ふるき難にや。又ふくる夜のか

け。きゝよからすと。さた侍し程に。やかていまひとつの歌に勝の字をつけ侍し。かるもかくふす非のしまのおもかけ。まことにたれみてしのふへしともおほえ侍らさりしに。持にて侍けれは。いかゝはし侍らん。

百十九番

左　按察

こよひこそ忍ふの里にすむ人のいとふはかりも月はみえけれ

右勝　右近大將公相

年をへて光さしそへ春日なる山はみかさの秋のよの月

しのふのさと。ひとへに月をいとふにゝたり。本意にあらすとさた侍しを。橘爲仲朝臣このこゝろをよめるにやと申人侍しかとも。光さしそはん三笠の山の月。はるかにまさり侍へしと申て。爲レ勝。

百二十番

左勝　爲繼朝臣

聞をきしほとゝもいはしさらしなや更にそ秋の月はさやけき

右　沙彌禪信

久方の月に夜舟も出やらて浪吹よするすまの浦かせ

夜舟月にいてやらぬにや。風にふきよせらるゝにや。おほつかなしとて。さらにさやけきさらしな勝侍き。

百二十一番

左勝　爲敎朝臣

なに高きほとそしらるゝさらしなや月すむ秋のをはすての山

右　權中納言師繼

あきらけきちかひも月にあらはれて末すみよしと人はいふ也

するすみよしとては。きゝにくしとて。をはすてまさり侍き。

百二十二番

左持　經朝朝臣

ふた見かたよるもやひろふたまゆらも曇らてあくる月の光に

右　沙彌寂緣

時しもあれ千里に月はあかしかたよを長月の有明の比

兩月。さきの百十六番におなし。そのうへにいま見給ふれは。ときしもあれありあけの比と侍けり。ふた見かたよるもやひろふたまゆら。かつへき歌にあらすとて持に侍し。猶いかゝ侍らん。

百二十三番

左勝　經平朝臣

さらしなの山のすそゆくみなの川さこそはすまめ秋の月影

右　師

かけさりし浪にや影のやとるらんたかしの濱の秋の夜の月

つくはねの嶺よりおつる河の。さらしなの山のすそなかれ侍ける。めつらしき事にをの〳〵申侍き。かけさりしといひいたしたる。なみのよせ所いかゝとて。まけ侍にけり。いつれもおほつかなく侍めり。

百二十四番

左　隆祐朝臣

難波かた鹽ひや遠く成ぬらんやとらてすめる秋のよの月

右勝　成茂

神もみよくもりなき世の鏡山いのるかひある月そさやけき

やとらてすめる。結構之躰にきこえ侍しを。かゝみ山の月さやけきかけ。いかさまにも可レ有ニ賞翫一之由各申

て。爲レ勝。

百二十五番

左勝　雅言

白妙になみのよせくる玉つ嶋月にそみかくおきつ汐風

右　家棟

あかしとは月にもしるし長月のとよにあまれるみよの行末

あかしとはといへるはかりにては。よみなさむにしたかはゝ。名所もいかゝと上さまにもさた侍き。月にそみかくたまつしま。なみのよせある事とて。勝と定申。

百二十六番

左勝　沙彌寂西

わか身きてふるの山へのこかくれを月のしるへに出にける哉

右　沙彌眞觀

くまもなきいくたのうらの秋の空月は今宵のさかとこそ見れ

ふるの山邊。今夜はしめていてつかふまつる人の歌は。さかとこそみれ。其興をとるへしと各定申。

百二十七番　田家月

左勝　女房

月よよし世よしとそみるわか門のわさ田をしなみほに出る比

右　前内大臣

秋の田のひたの庵をもる露に我袖ぬれてやとる月影

月よよし夜よしとそと侍。民ゆたかに國とめるほとも。月にあらはれて。華實共相兼。ことによろしきよし各申。ひたのいほりをもる露にやとる月は。いくほとか見所侍らん。返々よよしと申て侍き。

百二十八番

左勝　前太政大臣

門田もるかりほの庵のさよ衣月ゆへとてもぬれぬ袖かは

右　民部卿爲家

秋の田のかりほの露はをきなから月にそしほるよはの衣手

月にそしほる。まことすくなくて。田家かすかに侍うへに。月ゆへとてもぬれぬ袖かはと侍こそ。おなしことのまことには侍れ。尤可レ爲レ勝よし定申侍き。

百二十九番

左勝　大納言隆親

君かすむとは田のおものいねかてに年ある御代の月をみる哉

右　中納言資季

里とをき山田の庵に夜もすからたれ獨のみ月をみるらん

鳥羽田のおも。初五字より何となくおほろけの歌。ならひにくゝや侍へきと申て。爲レ勝。

百三十番

左　左近大將定雅

秋の田にまはらにさせる賤か庵もりくる月の影にまかせて

右勝　辨内侍

秋の田の庵もるよはのあくるまはいかに露けき月とかはしる

賤かいほまはらなるよりは。あくるまひさしき月は。ふるきおもかけもすてかたくやとて。勝侍き。

百三十一番

左持　權大納言公基

もりあかす門田の庵のあれまくも猶おしまるゝ山端の月

右　按察使良教

秋の田のいねてふこともわすられて庵もりあかす月の比哉

門田のいほのあれまくも。させるとかなく。秋の田のいねてふも。ふるきことはをかれり。仍持と定申。

百三十二番

左勝　權大納言實雄

もりあかす月影さむし我門のおくてのいなはほに出る比

右　少將内侍

秋の田の庵もる人のいねかても月ゆへとてや袖ぬらすらん

いねかて。秋の田によせて。いとゝおほくめなれて。おくてのいなはほにいつるころ月影さむしといへるは。まさるへきよし申て。爲レ勝。

百三十三番

左持　左衛門督通成

わさ田もるかりほの庵のいなむしろ露にかたしく秋のよの月

右　右衛門督

秋の夜は山田の庵のひたすらにおとろく計月そさやけき

かりほのいほのいなむしろ。山田のいほのひたすら。おなしほとに聞ゆるよし人々申て。爲レ持。

百三十四番

左　正二位忠定

秋ふかき田つらの庵のいたつらに人こそすまね月はもり鳬

右勝　下野

秋の田の露しくとこのいなむしろ月の宿とももる庵かな

人こそすまね月はもる心。おほく侍らへに。月のやとともといへる。よろしとて。勝侍き。

百三十五番

左　兵部卿有教

秋の夜は門田のいなは吹風に千とせをかねてすめる月影

右勝　教定朝臣

露結ふ門田のをしねひたすらに月もるよははねられやはする

ちとせをかねてといへることは。此田家むしろ田にやと聞え侍しを。人々もおなしていに申て。露むすふ門田の勝とさたまり侍き。作者ちさとをかきあやまてるにやと申侍けるに。又ちかき歌にたかはすと。さた侍けるとかや。

百三十六番

左持　正三位成實

今よりはをしね色つく秋風の身にしむ庵に月をみるかな

右　從三位顯氏

ほに出る門田のいねのいねかても月みる比のならひなり鳬

身にしむ庵。月見るころ。おなしほとのこととて。しゐて不レ及二勝負之沙汰一。

百三十七番

左勝　參議爲氏

いなはもるねさめの庵にさよ更て田のもはるかにすめる月影

右　行家朝臣

獨たにやすくふされぬを山田の程なき庵にすめる月影

やすくふされぬ。狹少心詞いかゝとて。負侍き。

百三十八番

左勝　沙彌蓮性

庵さす田のもはるかにさよ更てねぬわれ獨月を見るらん

右　小宰相

數ならて庵もるしつも月やみるあふたのみある秋の契りに

ねぬわれひとりといへるそ。人はみな睡眠歟と申人侍
しかとも。秋のちきりの歌。るの字あまたさしあひて。
きゝにくしとて。負侍き。

百三十九番

左勝　俊成卿女

さ夜すから月そ山田の庵はもる風になるこはひく人もなし

右　前内大臣家

いほむすふ山田のそひの月影にいなおほせ鳥も夜寒にそなく

さ夜すから。いかゝと申侍しかとも。いなおほせとり夜
さむになくまても不分明の上。山田のそひといへるも。
なきにをとるへきにや。なるこは。ひく人おほくて。勝
侍にき。

百四十番

左持　按　察

夜を重ねいねてふことも忘られぬ庵もる月をみるとせしまに

右　右近大将公相

夜もすから庵もる露のおきゐつゝとは田の面に月をみる哉

見るとせしまにといへるそ。いかゝと聞え侍しかとも。
夜をかさね。夜もすから。同科にさためられ侍けるにや。

百四十一番

左　爲繼朝臣

をしねほす小田の庵のかりにたに幾夜か秋の月をみつらん

右勝　沙彌禪信

かりてほすいねてふことも忘られて山田の庵に月をみる哉

かりにたにいくよといへる。いさゝか事たかひてや。山
田のいほは。月もさしまさり侍よし。定申侍き。

百四十二番

左持　爲教朝臣

露むすふ山田の庵の笘をあらみねぬ夜かさねて月をみる哉

右　權中納言師繼

夜さむなる門田の庵の月影にわかいねかてをとふ人もなし

露むすふ山田の庵。夜さむなる門田の庵。不レ可レ有ニ勝
劣一。持と定申。

百四十三番

左持　經朝朝臣

門田よりほなみの雲に月すみてたみゆたかなる御代の秋哉

右　沙彌寂縁

なこそあれさてしも月の隈そなき門田のいなは雲をなしつゝ

ほなみの雲。いなはの雲。民ゆたかなる名こそあれ。い
つれと見えわかれ侍らねは。おなし門田。さして無ニ勝
負一之由被レ定。

百四十四番

左持　經平朝臣

いなはもる門田の面の月影も夜さむなれはやねられさるらん

右　師

秋の田を守る假庵にいくよへてならしかほには月をみるらん

ねられさるらん。ならしかほには。又おなしほととて。
爲レ持。

百四十五番

左　隆祐朝臣

幾千代もおなしよし田のいなむしろ玉しく露に月やみるへき

右勝　成　茂

ひきうへしみとしろ小田に庵しめてほに出る秋の月をみる哉
　おなし吉田のいなむしろ。ゆへ侍らめとも。みとしろを
たのほにいつる月は。作者さためて見る様侍にやとて。
　勝とさためられ侍りき。

百四十六番
　左持　　　　雅　言
秋田もるかりほのとこのさむしろに幾夜重ねて月をみるらん
　右　　　　家　棟
みるまゝに門田の庵の隙をあらみ幾夜か月のもりあかすらん
　両首同科之由定申。

百四十七番
　左　　　　沙彌寂西
またからぬわさ田をもると霜のよの岡のやかたに月をみる哉
　右勝　　　沙彌眞觀
かりてける門田の稻のなそもかくほされぬ袖に月をみるらん
　門田のいねほされぬにやと申人侍しかとも。わさ田を
もる月を見るいかゝと申て。ほされぬ袖爲レ勝。

百四十八番　　行路紅葉
　左持　　　　女　房
ちらぬよりもみちや道をうつむらん見て過ゆかん方も忘れて
　右　　　　前内大臣基
そめはてゝ時雨は山を過ぬれと人をはやらぬ峯のもみちは
　ちらぬより道をうつむもみち。風情めつらしく。殊勝之
由申侍しかとも。そめはてゝもたしかに。人をはやらぬ
もいかゝと聞え侍しをさへて。持の字をつけられ侍し。
いまに心え侍らすや。

百四十九番
　左持　　　　前太政大臣
かへるさのいつ踏わけん龍田山梢にみゆるよものもみち葉
　右　　　　民部卿爲家
立よれは袖も色つくもみち葉のかけゆく道を人やとかめん
　この番。又風情おもしろく。心あるさまにみえ侍しを。
　おなしく持とつけられ侍き。

百五十番
　左勝　　　　大納言隆親
時雨つゝさきたつ雲やそめつらん越ゆく山の秋のもみち葉
　右　　　　中納言資季
過やらてしはしそみつる露霜に木の葉色つく杜の下道
　この葉色つくといへるよりは。時雨のさきたつ山のも
みちは。色ふかくやと申て。爲レ勝。

百五十一番
　左　　　　左近大將定雅
をのつからをちこち人の立とまる關とそみゆる秋のもみち葉
　右勝　　　　辨内侍
かへるさに色やまさると時雨つる杜の紅葉はまたすきてみん
　又すきて見むといへる。心あるさまに侍うへに。關と見
ゆるまて人ととまるほとならは。をのつからや ことた
かひ侍らんとて。かへるさのもみち色まさり侍き。

百五十二番
　左勝　　　　權大納言公基
旅衣ほさてしくるゝみ山路にしゐてそみつる峯のもみち葉
　右　　　　按察使良教

玉鉾の道ふみかへてけふは又ゆくてのほかの紅葉をそみる
ゆくてのほかのもみち。めにたち侍しを。西行法師こそのしほりの道かへてといふ歌。おもひいたさると申人侍りて。旅衣まさり侍りき。

百五十三番

左勝　權大納言實雄

玉鉾の道ゆき人の袖の色もうつるはかりにそむるもみち葉

右　少將内侍

みち人の時雨をすくすほとても紅葉の蔭をよそにやはみる
うつるはかりのもみち色ふかく侍うへに。時雨をすくすほとても。よそにやはみると侍は。いささか紅葉の事をろかにきゝなされ侍るにやと申て。爲ㇾ勝。

百五十四番

左　左衛門督通成

くれぬとも猶みてゆかんもみち葉の下照道はよるも迷はし

右勝　右衛門督

心さへ峯のもみちにうつろひて秋の山路はすきそわつらふ
したてるみち。ふるき歌にはかよふよし申人侍りて。秋の山ちは。もみちにうつろふ心の色もふかしとて。勝と定申。

百五十五番

左持　正二位忠定

さそひきてしくるゝ雲は過ぬともしはし紅葉の蔭やとらん

右　下野

時雨とも猶やすらはん紅葉ははぬれての後そ色まさりける
すきぬとも。くるとも。かけにやとらん。猶やすらはん。各勝劣不分明の由申て。爲ㇾ持。

百五十六番

左　兵部卿有教

過やらぬ山路の秋の關守は人の心をとむるもみち葉

右勝　教定朝臣

玉鉾のゆききの岡のはつ時雨紅葉のかけをえやはすくへき
玉ほこのゆききのをかけ。歌からよろしく侍うへに。人の心をとむるもみち葉。西行法師白河關にやこゝろかよひ侍らんとて。負侍へきにやと定申。

百五十七番

左持　正三位成實

駒なめてすきもやられすかた岡の杜の木の葉は紅葉しに鳬

右　從三位顯氏

過かてにけふやくれなんもみち葉も眺すつへき梢ならねは
駒なめすとも侍れかしと申人侍しかとも。なかめすつへきも又いかゝとて。持之由被ㇾ定。

百五十八番

左勝　參議爲氏

もみち葉も袖の色にそうつり行木の下かけの秋の山道

右　行家朝臣

今そなる紅葉の色やみさらまし時雨る山をこえこさりせは
見さらまし。こえこさりせは。おなし事にやとさた侍て。左勝とつけられ侍き。

百五十九番

左持　沙彌蓮性

こしかたはそむる時雨も梨原のむまやあきてふ山のもみち葉

右　小宰相

かへるさにおりてもゆかん村時雨そめな殘しそ木々の紅葉は

おりてもゆかん。よろしきよし申侍しかとも。梨原驛家持にて侍し。のちに見給も。當時はもみちおほつかなくこそ侍めれ。

百六十番

左勝　俊成卿女

時雨行秋の山路は紅葉はのうつろふ色やしるへなるらん

右　前内大臣家

見ぬ人の爲とやおらん玉ほこのみちのくまをの初紅葉はを

みちのくまを なとなく人とをに聞え侍るらへ。うつろふ色やと侍。ことによろしく侍れは。勝と定申。

百六十一番

左　按察

行末のみちは千里もあらしとや紅葉にくらす秋の旅人

右勝　右大將公相

てりまさる秋の山への紅葉はによるさへかよふいはのかけ道

もみちにくらす上句いかゝとて。てりまさるもみち。ことに色ふかく見え侍よし申て。爲レ勝。

百六十二番

左　爲繼朝臣

行末はまた遠けれと旅人の紅葉おりはへ日をくらすかな

右勝　沙彌禪信

しくれ行山路も遠きぬれ衣きつゝもみちの色をみるかな

日をくらすかなと侍よりは。きつゝもみちのと云るはよろしとて。爲レ勝。

百六十三番

左勝　爲教朝臣

ぬれぬともゆくてにおらん村時雨そむる山路の秋のもみち葉

右　權中納言師繼

秋はまた紅葉やみちの關ならん行もかへるも心とゝめて

もみちやみちのせきならん。ことはりつよく聞え侍しを。なにさして左勝侍にけるにか。

百六十四番

左　經朝朝臣

みちすから時雨るゝ色はこくうすく梢をわきて紅葉しに鳬

右勝　沙彌寂緣

ゆきやらて日數へにけり龍田山紅葉にあかぬ秋の旅人

みちすからこくうすくといへるよりは。ゆきやらぬたひ人は。紅葉を思ふ心もふかくやとて。勝侍き。

百六十五番

左　經平朝臣

相坂のゆききにえせぬ旅人の心をそむる關のもみち葉

右勝　帥

猶もまた山路の末のしくるれはこれよりふかき紅葉をやみん

おなし行路も。關のもみちはとてはいかゝと申人侍て。山路のするのしくれは。ことによろしとて。勝侍き。

百六十六番

左持　隆祐朝臣

ぬれつゝもとまる情はこえぬ覽さのみ紅葉のかけな時雨そ

右　成茂

なゝそちのおいの坂行山こえてまた色ふかき紅葉をそみる

とまるなさけよりは。山越てといへるは。もみちの色もゆへふかく侍らめは。なゝそちにゆるされ侍るへきにや。

百六十七番

左勝　雅言

行すゑもしくるとみえし山のははけふ過かての紅葉也けり

右　家棟

かつみつゝ色まさりゆく紅葉かな時雨も過る山のした道

ゆくすゑおもひあはする心。さもやとて。左勝と定侍りき。

百六十八番

左　沙彌寂西

もみち葉の色まさりゆく道のへは時雨と共に過そやられぬ

右勝　沙彌眞觀

思ひことみちゆきかねて此秋も我身時雨に木のはそめつゝ

両方のしくれ。きゝわかれす侍しを。しくれはすきやすきものにやと申人侍りて。このはそめつゝ勝之由被レ定。

百六十九番　寄煙忍戀

左勝　女房

忍ふともうはの空にやしられまし戀に煙のたつよなりせは

右　前内大臣基

うら風にたくもの煙なひくともしらるな人に心よはさを

戀にけふりのたつよなりせは。中々事かはりて。いかにいままてよみのこし侍けるにかと。各褒美詠吟ののち。いまひとつの歌よみあけ侍し。うけ給て。いよ／＼心よはく。まけのよしを申上侍き。

百七十番

左勝　前太政大臣

煙たにそれとは見えしあちきなく心にこかすしたの思ひは

右　民部卿爲家

名にたゝむ後そ悲しき富士の根の同し煙に身をまかへても

心にこかすさ侍。詞たくみに心あまりて。ことによろしく侍うへに。ふしのけふりめつらしけなく侍れは。さたのかきりにあらすさて。まけ侍にき。

百七十一番

左　大納言隆親

下もえの思ひをそれとしらすなよふしの煙はいつもたてとも

右勝　中納言資季

富士のねのけたぬ煙もたゝはたて身の思ひたに人しらすは

ふしのけふり。いつれもめにたち侍を。いつもたてともと侍や。心ゆかぬやうに侍へきとて。けたぬ煙は。こゝろもふかくやとて。勝侍き。

百七十二番

左持　左近大將定雅

戀わひてきえなむ後の煙たに思ひありきと人にしらすな

右　辨内侍

あちきなくなとしたもえと成にけんふしの煙も空にこそたて

おもひありきと人にしらすなと侍。しのふ心ふかく。いうに侍を。なとしたもえとなりにけむといへる。すてかたしとて。ことに宜き持と被レ定。

百七十三番

左持　權大納言公基

しられしなたくもの煙下にのみむせふ習ひのそめてうき身は

右　按察使良教

たちのほる煙をよそにいひなして思ひありとも人にしらせし

兩方いつれも。題心ふかく。歌すかたよろしとて。猶持と被ㇾ定。

百七十四番

左勝　權大納言實雄

富士のねにたえぬ煙も心せよわか下もえの思ひあるよに

右　少將内侍

せめて猶下にはなひけ夕煙もえてわか名の空にたゝすは

わかしたもえのおもひあるよに。よろしくきこえ侍るを。心せよとはいかにと申人侍しかとも。せめてなをしたにはなひけ。いうには侍れと。心おほつかなくやと申て。ふしのけふり立まさるよしさためられし。

百七十五番

左持　左衞門督通成

きえねたゝむろの八嶋の夕煙思ひありとも人にしらすな

右　右衞門督

下もえにむせひわふともうつみ火の煙よ立と人にしらすな

兩首の人にしらすな。何れも各なすらへて可ㇾ爲ㇾ持之由申ㇾ之。

百七十六番

左勝　正二位忠定

いつまてと螢のすくもひあちきなくたゝぬ煙の下にくゆ覽

右　下野

いかにせんあまの鹽やにまかへても戀の煙は立やまさらん

たちやまさらんとては。忍心いかゝとて。負侍き。

百七十七番

左持　兵部卿有教

富士のねの煙はさそなとしふとも下の思ひを人にしらすな

右　教定朝臣

人しれぬ忍ふの浦のなにしおはゝ煙なたてそあまのも鹽火

兩首共。無ㇾ指得失ㇾ。一決强不ㇾ及ㇾ沙汰ㇾ。爲ㇾ持。

百七十八番

左　正三位成實

我戀は忍ふの浦のしのへともしほの煙たゝぬまもなし

右勝　從三位顯氏

大方のむなし煙といひなしてもゆるなけきの程をしらせし

しのへともたゝぬまもなきけふりは。忍ふこゝろなし。むなしけふりは。勝ともいひなしつへしと定。

百七十九番

左持　參議爲氏

きえねたゝ下の思ひの夕けふり心のほかの名にもこそたて

右　行家朝臣

煙をもいつかはたつる磯かくれたきあらはさぬ螢のしのひはきえねたゝしのふの山の峯の雲。面影たつよし申人侍き。あまのしのふ戀の心。おほつかなくやと申侍しゆへにや。持にて侍ける。いかゝ。

百八十番

左勝　沙彌蓮性

よしやまたたつとも浦の鹽煙わかやくとたに人のしらすは

右　小宰相

人しれすむせふ思ひに戀しなはむなしけふりや跡に残らん
わかやくとたに人のしらすは。よろしとて。人しれすむせふおもひのすゑさま。をとなくてまけ侍にき。ことはりにや。

百八十一番

左持　俊成卿女

煙まてこひとはたつな跡もなくきえゆく空の雲にまかへて

右　前内大臣家

煙たつ海士のもしほはやきもせよ下の思ひは人もとかめす
あまのもしほはやきもせよ。下の思ひは人もとかめす。こゝろいとさたかならす侍を。こひとはたつな。勝侍へきにあらすとて。爲レ持。

百八十二番

左勝　按察

かくまては誰かはしらんよと共に煙もみせぬ下のおもひを

右　右近大將公相

空に猶たつなもらすな里のあまのもしほの煙下むせふとも
もしほのけふり。めなれてや侍らむ。みせぬけふり。心ありけなりとて。勝と定申。

百八十三番

左持　爲繼朝臣

戀すてふなにはたてしと思ふ身にむねの煙の何こかるらん

右　沙彌禪信

我思ひ煙とならはさのみやはたつなをよそに忍ひはつへき
雨首ともに。忍心おほつかなしとて。爲レ持。

百八十四番

左勝　爲教朝臣

蜑のたく磯の鹽やの夕けふりおもひきゆとも人にしらすな

右　權中納言師繼

よしやたゝ思ひもきえね長らへは身より餘れる煙もそたつ
なからへはけふりもそたつといへる心。たえなはたえねおもひいたさるとて。まけ侍にや。

百八十五番

左　經朝朝臣

しのふるも心にあまる思ひかな身よりや今は煙たつらん

右勝　沙彌寂緣

ふしの山うはの空なる夕けふりわか下もえにこゝろ返せよ
心かへ。忍ふこゝろありとて。爲レ勝。

百八十六番

左　經平朝臣

さてもよし難波入江に蜑のたくもくつの煙それもしらねは

右勝　帥

難波なる芦のしのやの下むせひたてしや煙ゆくかたもなし
もくつのけふり。すくも。あしよりは。めつらしからんとにや。たてしやけふりといへる。えんによろしく侍しかは。猶勝侍にこそ。

百八十七番

左持　隆祐朝臣

人とはゝよその思ひといふはかり空に成行けふりともかな

右　成茂

もしほ火のよその煙はたゝはたてわか下もえを人にしらすな
よその思ひ。よそのけふり。いつれまさるとわきかたし

とて持之由被ㇾ定。

百八十八番

左勝　　　　　　　　　　　　雅　言

つゝむ共たちもそのほるかはらやのしたたく煙思きえなて

右　　　　　　　　　　　　家　棟

かはらやのしたたく煙下にのみ思ひむせふと人にしられし

かはらやのしたたくけふり。おなしさまにわきかたく侍る。のちの歌は。猶ふるくやと申人侍て。爲ㇾ負。

百八十九番

左勝　　　　　　　　　　　　沙彌寂西

人とはゝ里のしるへといひなして戀の煙を猶やたてまし

右　　　　　　　　　　　　沙彌眞觀

靡くかとみえなは人に如何せんたくもの煙けつかたもかな

たくものけふり。心見えわきかたし。戀のけふりは。題心あらはに。いひたてゝみえ侍れは。勝と被ㇾ定。

百九十番　　寄月恨戀

左勝　　　　　　　　　　　　女　房

こぬ人によそへて待しゆふへより月てふ物は恨そめてき

右　　　　　　　　　　　　前內大臣基

うき人はよそに成つゝよもすから月はかり社身にはそひけれ

夢てふものはたのみそめてきは。たれも見るふる事に侍けるを。月てふものはうらみそめてき。まことにありかたくも侍るかな。のちの歌月はかりこそといへるまて。句ことにおなし事かよひなからをとりて。身にはそひけれと結句に侍。凡卑のすかたに侍れは。いかさまにもきさのうた。とにかくに勝侍へきよし。滿座定申侍き。

百九十一番

左勝　　　　　　　　　　　　前太政大臣

海士のすむ里はととはゝ濱千鳥月に鳴夜の袖としらせよ

右　　　　　　　　　　　　民部卿爲家

うき人に涙の衣ひきかへしやとすとかたれ袖の月かけ

あまのすむさとのはまちとり。たくみにいてきて侍かな。袖ひきかへしたる月。いくほとうらみ所侍らしとて。負侍にき。

百九十二番

左持　　　　　　　　　　　　大納言隆親

わすらるゝ我身を秋のつらさとて月さへかはる影をかなしき

右　　　　　　　　　　　　中納言資季

いかにせんらかりし人の面影の月にたちそふあかつきの空

わか身の秋。月さへかはるうらみ。うきおもかけ月にたちそふとなけくこゝろ。いつれと定申かたきよし人々申て。爲ㇾ持。

百九十三番

左　　　　　　　　　　　　左近大將定雅

また宵となくさめて社またれつれ更行月にうさそまされる

右勝　　　　　　　　　　　　辨　內　侍

秋の夜の月にも袖はぬるれ共つらき人にそねはなかれける

ふけゆく月にうささそまされると侍よりは。つらき人にそねはなかれけるは。いうにやと申て。爲ㇾ勝。

百九十四番

左勝　　　　　　　　　　　　權大納言公基

月やとす袖にもしるやうき人の面影そへてうらみわふとは

右　按察使良教

身にしれはさこそは月もしほるらめ眞葛か原の秋のよな〳〵

うらみの題のまくすはらは。秋風そふくと云る　おなし心なるへし。月やとす袖にもとて。おもかけそへてと侍。いうに聞ゆるよし各申。爲ㇾ勝。

百九十五番

左勝　權大納言實雄

そのまゝに忘れんと思ふうき人のかたみもつらし有明の月

右　少將内侍

恨てもなきても何をかこたましみしょの月のつらさならては

かたみもつらしといへる。よろしきうへに。うらみてもなきてもいはんといふ事。ちかく聞えて侍きと　申人侍りて。有明の月爲ㇾ勝。

百九十六番

左　左衞門督通成

つれもなき忘れかたみのつらさかな浮ものとみし有明の月

右勝　右衞門督

うかりける人の心の秋の月かはらぬかけもいつまてか見ん

わすれかたみも。えむに聞え侍しを。かはらぬかけをよろしとて。爲ㇾ勝。

百九十七番

左持　正二位忠定

今はたゝ涙なみえそ袖の月うつれはかはるかけもうらめし

右　下野

もろ共にみし有明の月もせすうきにつけても詠めてそふる

月の題。つきもせすとては。いかゝと申人侍しかとも。みし有明とつゝけては。まして寄たる題には。難侍らしかし。見し。なかめてそとおなし心なるへきと　申侍しを。なみたなみせそ。いひおほせすとて。持の由被ㇾ定。

百九十八番

左持　兵部卿有敎

めくりあへはみしよの月もつらきかな空たのめうき人の心に

右　敎定朝臣

待えても人の契そうかりけるおなし恨の山のはの月

めくりあへはといひいてたるより。句ことにつよくよみすへて侍にや。おなしうらみの山のはの月。いうには侍れと。心おほつかなしと申人侍て。爲ㇾ持。

百九十九番

左　正三位成實

獨ねのわひしきよるをかさねつゝ袖こそいたく月になれぬれ

右勝　從三位顯氏

蜑のすむ里をうき身の契にてたのめし夜の月そ更ゆく

ひとりね。人わろきけに聞ゆるよし各申。あまのすむさとをうき身といへる。歌からよろしとて。勝侍き。

二百番

左勝　參議爲氏

面影は忘れかたみになからへて我ためつらきよはの月かな

右　行家朝臣

このまもる月とやいはん影をたにみるはすくなき心つくしを

心つくしはかりにて。うらみの心おほつかなしとて。おもかけたちまさり侍き。

二百一番

左持　沙彌蓮性
哀又人のあきこそうかりけれ時雨かちなる月をみるにも
右　小宰相
よひ〳〵に月を哀となかめても猶うき人のまたれさりせは
兩首ともに。歌からよろしきよし申て。爲持。

二百二番
左　俊成卿女
うきなからさすかにものゝ月影を忘れはてゝし有明の空
右勝　前内大臣家
つらし猶今宵もさのみふけはてはまたやはまたん山のはの月
さすかにものゝ月かけ。いひさしたるやうに侍れは。山のはの月。たちのほるへきよし各定申。

二百三番
左持　按察
かつみてもまつ歎かれぬむは玉のそのよの月の昔かたりに
右　右近大將公相
有明の月をもいはしつれなさのためしは人の心にそみる
そのよの月。ためしは人。ともによろしとて。持のよし被定。

二百四番
左　爲繼朝臣
さのみまた月にも袖のしほるゝは人をうらみのあまり成覧
右勝　沙彌禪信
ねても又夢にそみつるさ夜衣かへす恨の袖の月かけ
人をうらみのあまり。いひおほせぬさまなりとて。ねても又夢にそみつる。勝侍にき。今見侍れは。夢にそみつるは。戀しき人を見て侍にや。月をみて侍にや。かへすうらみも又見る心にやかよひ侍らん。かた〳〵おほつかなく侍りけり。

二百五番
左　爲教朝臣
今更にみてうき事のまさるかな月やつらさのしるへなる覽
右勝　權中納言師繼
思ひ佗うきおも影やなくさむとみれは悲しき有明の月
見てうき事。月やつらさ。おなし事にやときた侍し。尤其謂侍りけり。みれはかなしき。いうに侍れは。勝侍にき。

二百六番
左持　經朝朝臣
夜もすから袖にそやとるいつまてか月みるとても人を待けん
右　沙彌寂縁
めくりあはて空行月もかたふきぬ山のあなたと契やはせし
兩首。恨心おほつかなくて。たゝ逢不遇戀にてもや侍らん。可爲同科之由定申。

二百七番
左持　經平朝臣
こぬ人のつらさもつらき秋の夜になと更ぬらん山のはの月
右　帥
やすらはて出にし人の名殘とてなか〳〵みすは有明の月
こぬ人のつらさ。いてにし人のなこり。山のは。有明。いつれもわきかたしとて。又爲持。

二百八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　隆祐朝臣
またれつる月は出ぬとなかめても殘る恨みのある身なり梟
右勝　　　　　　　　　　　　　　　　成　茂
いかにせん月のとかとは思はねとうき面影におつる涙を
ある身なりけり。よろしからすや。おつるなみた。めお
とろかぬことに侍れと。勝へきよし各申定。

二百九番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　雅　言
面影はみしよの月にしたはれてうきにも人の忘られぬかな
右　　　　　　　　　　　　　　　　　家　棟
もろともにみし有明は變らねとうき身ひとつにくもる月影
うき身ひとつにくもる月影。ふるきうたにやと申人侍
て。見しよの月にしたはれて。勝侍にき。

二百十番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　沙彌寂西
我巾のよしなき袖にやとりきて恨にましる月の影かな
右　　　　　　　　　　　　　　　　　沙彌眞觀
うき人はさそともいはし夜半の月たのむになれは落る涙を
うらみにましる。たのむになれは。勝劣難ㇾ辨之由各申
之。爲ㇾ持。

嘉曆三年八月十日。以二或人之本一不ㇾ廬令二書寫一畢。
　　　　　　　　　　　　　　　　　　法眼仲顯

右影供歌合依無類本不能歌合

群書類從卷第二百二

和歌部五十七歌合廿三

十五夜歌合文永二年八月

題

欲入月　未出月　初昇月　停午月　漸傾月

作者

左方

女房
前關白左大臣(良實)
關白左大臣(實經)
右大臣(基平)
前內大臣(基家)
兵部卿藤原朝臣隆親
大納言藤原朝臣良教
權大納言源朝臣通成
中宮大夫源朝臣雅忠
中納言藤原朝臣爲氏
左兵衞督藤原朝臣高定
參議源朝臣資平
右近衞權中將藤原朝臣經平
侍從藤原朝臣行家
左大辨源朝臣雅言
右近衞權中將源朝臣具氏

右方

融覺
前太政大臣(公相)
式乾門院御匣
中納言
小宰相
前權大納言藤原朝臣資季
左近衞權中將藤原朝臣公雄
右近衞大將藤原朝臣通雅
權中納言藤原朝臣長雅
寂西
右兵衞督藤原朝臣爲教
法印實伊
鷹司院そち
眞觀

左近衞權中將藤原朝臣忠繼
右近衞權少將藤原朝臣隆博
講師
讀師
判者　衆議

一番　未出月
左勝　女房
大空の雲をのこさすふきなして風も月待けしきなる哉
右　融覺
しろたへに光そにほふかねてより月をまつちの山端の雲
左右歌よみ申て後。兩方とも存知申へきよし仰あり。右方申云。左歌。題の心詞のおもむき。神也妙也。無レ難無レ咎之由申レ之。左方申云。雲無レ要歟。まことに萬葉のふるきこと葉。わつかにおもへるはかりにて。更に見所侍らぬよし申て。尤以レ左爲レ勝之由一同定申。

二番
左勝　前關白左大臣
むら雲にうつろふかけはみえそめて峯に待るゝ秋の夜の月
右　前太政大臣
暮ぬとてまたるゝ空の山端に光そをそき秋のよの月
右方。左無二指難一之由申レ之。左方申旨なし。空の山のはやたしかに侍らんと申出侍き。仍猶左勝へきよし被二定仰一。

三番
左　關白左大臣
よしさらはよひのまつらき袖の露出て拂へと月にかこたむ
右勝　式乾門院御匣
待ほとの空に心をつくせとやなを出やらぬ秋のよの月
左歌をけらん露は。いてゝはらはんといへる心。さもやと各申侍しを。右歌下句艶によろしきよしおほせ出されて。以レ右爲レ勝。

四番
左持　右大臣
まつ人の心つくせと足曳の山のあなたに月そやすらふ
右　中納言
月はまた影かくしたる夕暮にほとよりすめる秋の夜の空
左ことによろしきよし。右方より申侍しかとも。右かけかくしたる。女房の歌にやとて。優せられて持の字をつけられ侍き。

五番
左　前内大臣
こよひとて雲はおさまる天の下によもふりまさる月を待哉
右勝　小宰相
暮るより雲吹はらふ風の音に心すみても月をまつかな
左歌はしめおはりの句のほと。心えわきたる人侍らさりしやらむ。右歌に可レ付二勝字一の由。各被二定申一。

六番
左持　兵部卿藤原朝臣隆親
かねてより影やとれとやむすふらん月待よひの袖のしら露
右　資季卿

久かたの空にひかりはみえなから高根の月そ猶またれける

右歌させるとかなくきこえ侍しかとも。左の歌優なるよし申人々侍て。爲レ持。下句に月まちくらす袖のしら露。おなし題にちかき歌に侍ける。

七番

左持　大納言藤原朝臣良教

思ひやる山のあなたの月かけを待としらせて秋かせそふく

右　左近衛權中將藤原朝臣公雄

さと人のおしむ心のしらねとも山のあなたの月そまたるゝ

兩首の山のあなた。みわかれぬよし。左右ともに申て。又爲レ持。右歌本歌の心詞そいくほとかはらす侍ける。

八番

左勝　權大納言源朝臣通成

出やらぬ月まつほとのよひのまはかねてもつらき山のはの雲

右　右近衛大將藤原朝臣通雅

待ほとも心つくしの秋の月このまもりくるひかりのみかは

右心つくしの秋の月。下句すてにいてゝみゆるによりて。左可レ爲レ勝也由。各定申。

九番

左持　中宮大夫源朝臣雅忠

出やらぬ山のあなたの月影をさそひかほなる峯の松かせ

右　權中納言藤原朝臣長雅

待いてはいかにとおもふゆふへよりかねて心の月もすみぬる

左さそひかほなる松風。いかにそやきこゆるを。右いかにと思ふ夕より月にすみぬる。まさりてもみえぬよし。みな申によりて。爲レ持。

十番

左持　中納言藤原朝臣爲氏

出かてのかけをはよそにさきたてゝ山本をそき秋夜の月

右　寂西

たゝに過る夕間暮とは思ふなよ待るゝものを山端の月

左の歌。かけをみやこにさきたてゝ。新古今の時雨の歌ときこゆとて。負侍しを。右歌たゝにすくる夕まくれ。又勝へきにあらすと仰いたされて。又持の字をつけられ侍き。

十一番

左持　左兵衛督藤原朝臣高定

夕くれの空すみわたる秋風にいとゝまたるゝ山のはの月

右　右兵衛督藤原朝臣爲教

ほのかなる面影はかりみえなから待ほとをそき山のはの月

いとゝまたるゝ。待ほとをそき。左右の山端の月。いくほとの勝負侍らしとて。猶持とさためらる。

十二番

左持　參議源朝臣資平

山端にかねてうつろふ影みえて心つくしの月そまたるゝ

右　法印實伊

かねてより秋はこよひとまたれきて猶そやすらふ山のはの月

兩方。さして申むねなし。仍爲レ持。

十三番

左　右近衛權中將藤原朝臣經平

かねてより光はそれとみえなから峯にやすらふ月そつれなき

右勝　鷹司院帥

いかにして誰ゆへならぬ眺めとも山のあなたの月にしられん
左もさせるとかなく侍れと。右妖艶の躰なりとて。勝と被レ定侍き。

十四番

左持　侍從藤原朝臣行家

さこそ又山のあなたにおしむとも待心しれ秋の夜の月

右　眞觀

夕日さす雲のはたてにみゆる哉出てすむへき月のひかりは

左山のあなたの秋の月。右雲のはたての夕日。をの〳〵本歌をおもへる心尤宜とて。持と被レ定。

十五番

左持　左大辨源朝臣雅言

暮るまは山のあなたの月影もおもひやられてはるゝ空かな

右　左近衞權中將藤原朝臣忠經

山のはをかこちやせまし秋の夜の月の爲なるへたてならねと

左させるとかなし。右へたてならねと。勝へきにあらすとて。爲レ持。今みたまふれは。くるゝはるゝとそ侍ける。

十六番

左持　左近衞權中將源朝臣具氏

みるまゝに月影ちかき夕とやかねても空のすみわたるらん

右　左近衞權少將藤原朝臣隆博

をちかたの雲ゐになかくかけみえて山端つらき秋の夜の月

これ又。兩方無二申旨一。仍同前。

十七番　初昇月

左持　具氏朝臣

山のはになをむら雲は殘れともよそに成行月そさやけき

右　隆博

見れは今我こゝろさへさそはれてそらに成ゆく山端の月

左右。よそになりゆく空に成行。またおなしかるへきよし。右申て。猶爲レ持。

十八番

左持　雅言朝臣

末とをくすむへきほとそしられけるはるゝ雲ゐに出る月影

右　忠經朝臣

さしのほる影そのとけきよひの月曇りなきよを空にしれとや

左右の祝言。勝負無二沙汰一。仍爲レ持。

十九番

左　行家卿

かけしけき松の木のまもみえそめて人にしらるゝ山のはの月

右勝　眞觀

麓にはまたきらうつらぬひかりにて山端はかり月そさやけき

左人にしらるゝほといかゝとて。以レ右爲レ勝。

二十番

左持　經平卿

雲はらふ嵐のかひもありかほに山たちはなれすめる月影

右　帥

出ぬれと山のは高くみえぬまはたかいつはりを月に待らん

左右ともに。指無二得失一歟。被レ定レ持。

廿一番

左勝　資平卿

足引のおのへに殘るうき雲をたちはなれゆく月そさやけき

右　實伊

たか里も今やみるらんあし引の山たちはなれ出る月かけ
右歌里のみえわたるやうにやと。左方より申レ之。仍以レ左爲レ勝。

廿二番

左持　高定卿

誰ゆへにしのひかれてか足引の山たちいてゝ月のゆくらん

右　爲教卿

さしのほる光をそへて山のはに秋のもなかといつる月かけ
左歌月の行粧。凡卑にやと申侍しかとも。右のほかひかりいつる影。めにたつよし左方より申て。爲レ持。

廿三番

左勝　爲氏卿

すみのほる影もさやけし秋風に雲のあとなき山のはの月

右　寂西

山も今秋のなかはのかひなれは出てさやけき月の影かな
右山も今。いかゝとて。左に勝の字をつけらる。

廿四番

左　雅忠卿

たえ〳〵に木間もりくる月影やみ山を出るはしめなるらん

右勝　具雅卿

行すゑの空にはかけのみえぬれとまた山ちかき秋のよの月
左歌郭公の面かけみえにたつとて。右歌勝侍き。

廿五番

左勝　通成卿

よろつ代の行末とをく三笠山かけさしのほる秋のよの月

右　通雅卿

久かたの雲ゐをさしててらす也今かけみゆる山のはの月
右よろしく侍るを。左三笠山さしてかたひき申さるゝ人侍て。左を勝とさためらる。

廿六番

左　良教卿

さしのほる月もさやかに三笠山ゆく末かけてさそくもりなき

右勝　公雄卿

立のほるすゑもはるけし君かすむはこやの山の峯の月かけ
さしのほる三笠の山も。君かすむはこやの山の峯には。をよひかたきよし右申て。爲レ勝。下句やもし。ちかきことに侍らむ。

廿七番

左勝　隆親卿

しるきかなひさしかるへき雲ゐとは今さし昇る月の影にも

右　資季卿

いつしかといたらぬくまもなかり鳬山たちはなれ出る月影
右いたらぬくまもなき。ことはつゝき。めなれたりと申人侍て。左いまさしのほる雲井の月。尤可ニ賞翫一之由一同に申て。爲レ勝。

廿八番

左　前内大臣

松たかき木のまにみえて梢にはなをなりやらぬ山端の月

右勝　小宰相

山のはに今さしのほる光より名におふよはの月はみえけり
左こするには猶なりやらぬ程。松の事ともおほえす。おほつかなしとて。右勝と被レ定。

廿九番

左勝　右大臣

風わたる高根の松の梢より今みえそむる月のさやけさ

右　中納言

おほかたの空たにあるを山のはにかけみえそむる秋のよの月

右上句も心こもりたるやうにみえ侍しを。左やすらかによろしきよし。人々定申て。爲レ勝。

三十番

左勝　關白

峯に吹松のあらしを聞すてゝうはの空にも月そ成ゆく

右　御匣

かつらきや高天の峯の雲まよりよそけに出る秋の月かけ

左松のあらしを聞すてゝとは。月のことにやと申人侍しかと。右よそけに出る月めつらしきを。かつらきの雲おもかけたちなれたりとて。負侍りにき。

三十一番

左勝　前關白

出るより光そしるき秋の月くもらぬ御代の行末の空

右　前太政大臣

あし曳の山のたかねもあらはれて松の葉分を出る月かけ

右まつの葉分を出る月もみすてかたく侍しを。左ゆく末くもらぬ御代の月は。尤可ニ庶幾一之事也と滿座申レ之。爲レ勝。

三十二番

左勝　女房

雲のみか山のはちかき夕暮は月もよこきる光なりけり

右　融覺

いつるより月にそしるきみかさ山光さしそふ秋のなかはは

左の山のはちかき夕暮は月もよこきる。めつらしくも。おもしろくも。ひかりをはなちて。めをよろこはしめ侍しうへに。右の月にそしるき三笠山。あまりにさして事にて。すてられ侍き。

三十三番　停午月

左持　女房

久かたの空にや月もやすらはん秋の半にこゝろとゝめて

右　融覺

すみのほる空には影もかたふかて秋のもなかの月そ久しき

秋の半に心とゝめて月のやすらふほと。たとふへき物なく有かたきすかたなりき。左右ともに申侍しかとも。右祝言に優すへきよし仰下されて。持にさためられ侍き。

三十四番

左持　前關白

久かたの空の半に影とめて秋もこよひと月そのとけき

右　前太政大臣

すみのほる半の空にかけとめて秋もこよひと月そさやけき

左右歌。はしめの五文字の外は。みわくへきすかた。おもひわくへき心ならすとて。尤有レ興。持と被レ定。

三十五番

左持　關白

ます鏡みかくと見えしえにしあれや隈なき月を晝にまかへて

右　御匣

天津空半の月の光にもくもりなきよの秋そみえける
　左歌江の心波の上。午なる時を思て。月かけにみかきなされたる鏡。心うつりて面白くも侍しうへに。右の半の月。いさゝか申出むね侍しにも。くもりなき世の秋よろしきによりて。持とつゝけられ侍き。

三十六番
　左持　右大臣
あひにあふ秋やこよひと知ぬらん半の空にすめる月かけ
　右　中納言
空晴て出つる山のかせはやみなかそらにすむ月そさやけき
　左ことに宜くきこえ侍しを。右又優なりとて。爲ㇾ持。

三十七番
　左持　前内大臣
秋もとき名高のうらのもちしほに夜半も最中と月そさしける
　右　小宰相
月かけはゆくともみえす半天に人のこゝろやせきと成らん
　この番。ことに各申旨なし。老耄くはしくもおほえ侍らす。左歌秋もとき夜半も最中の望。盥に月のさして。事おほく。右の歌。人の心の關も。本歌いかにと申人侍しかとも。とてもかくても持と被ㇾ定。

三十八番
　左　隆親卿
待もかねおしみもあへぬ山端のおなしとをさにすめる月哉
　右勝　資季卿
さよ中とふけぬる空に雲晴てゆくともみえすすめる月かけ
　左おなしとをさ。まことに空にしりかたく侍れと。題の心はかなふへしと申人侍しかとも。右夜雲收盡月行遲心めつらしからねと。可ㇾ爲ㇾ勝ㇾ之の由。人々多く定申侍き。

三十九番
　左　良教卿
かそふれはこよひそ秋の中空にやすらふ月の影ものとけき
　右勝　公雄卿
雲晴てゆくともみえす久かたの空もなかはの秋のよの月
　右又同ㇾ前よろしとて。爲ㇾ勝。

四十番
　左持　通成卿
名にしおふ秋の半の中空に月もさやけき影やとすらん
　右　通雅卿
何事もみちたる御代の月かけを今宵の空の半にそ見る
　右祝言。賞せらるへきよし申侍しかとも。はしめつかた餘にやと仰いたされて。左の歌よろしきによりて。持と被ㇾ定侍にき。

四十一番
　左持　雅忠卿
名にしおふ秋もこよひと半天に影をとゝめてすめる月哉
　右　長雅卿
雲はれて出つる山もいりかたもはるかにみゆる秋夜の月
　是又。左右いつれもおもふ所ゆへ侍れは。同爲ㇾ持。

四十二番
　左　爲氏卿
久かたの空のも中に影とめて行備いそかすすめる月かな

右勝　寂西

曇らぬものとけき御代の秋の空まほにあふきて月を社みれ

右まほにあふきて月みる心。めつらしとて。勝之由被レ定。

四十三番

左　高定卿

秋もさそ空も半をわきてこそ猶すみまされ夜半の月かけ

右勝　爲教卿

名にしおふこよひは秋の中空に影かたふかすすめる月かな

これ又。右勝とさためられ侍き。

四十四番

左勝　資平卿

久かたの空の最中にすむ月の秋はこよひとかせそのとけき

右　實伊

秋風に小夜ふけにけるかりかねの鳴行かたは月そさやけき

左させる難なきうへに。右鴈かねの鳴ゆくかた。荒涼なりとて。負侍き。

四十五番

左　經平卿

一とせに月の名たかきこよひとも更てなかはの光にそしる

右勝　師

（嗜古）水の面にかそへし秋の月みれは空にも今そ半なりける

右順かふることとなれと。水の面の月めつらしきよし。人人申て。勝と被レ定。

四十六番

左持　行家卿

今こそは板井の水の底までも殘るくまなく月はすみけれ

右　眞觀

世をてらすかけにそしるき久かたの空にたゝしき月の行ゑは

右歌すかたまことにうるはしくかたふかす。本文つよきよし人々申侍しかとも。左のうた。板井の底まですめる月かけ。いつもめつらしくみ侍らんと申うけて。爲レ持。

四十七番

左持　雅言朝臣

やすらひにしはしなふけそ秋の月さよも半の空としらせて

右　忠繼朝臣

名にしおふ今宵はしるき秋とてや月もも中の空にすむらん

此番。又兩方無二申旨一。仍爲レ持。

四十八番

左勝　具氏朝臣

月は今ちとせの秋の中空にすむも久しき影そみえける

右　隆博

中空にかけすみまさる秋のよの月こそ月のさかり成けれ

右月こそ月めつらしなから。おもかけあることにやなと申人侍て。左させるとかなしとて。勝侍き。

四十九番　漸傾月

左　具氏朝臣

鴈かねのこゑも聞えす空澄て更ぬる後の月そ久しき

右勝　隆博

惜めともまさ木のつなのかけてたにとゝめ難くそ月は更ゆく

空すみて月そ久しきよりは。まさ木のつな可レ勝之由被

レ定。これも本歌のこゝろ詞さきにそ侍ける。

五十番

左持　雅言朝臣

木間もる月は西にそ成にける心つくしのなかめせしまに

右　忠継朝臣

更行はいつらならひのありかほに月吹かへす風を待かな

右歌月吹かへす風も。ありつきてきこえぬらへに。ふけゆけはいつらならひもつゝかす侍り。左云。木のまもるなかめせしまに。おなしことなれはとて。持とさためらる。

五十一番

左持　行家卿

月ははやふけにけらしなあつまやのほとなき軒も影そみえ行

右　眞観

老らくの身の行末を思ふにはまたかけとをし秋のよの月

あつまやの程なきかけによりて。ふけにけるをしり。老らくの身の行末にくらへて。またとをしとおもへる。左右の月。各見所有とて。持と定申。

五十二番

左勝　經平卿

紅葉する月のかつらも分て猶にしこそ秋とすみまさりつゝ

右　師

秋のよにあかても影の更行はおもふ中とや月のみゆらん

右あかてこそ思はむ中はといへるこゝろ。いうに侍しを。秋はなをもみちすれはやとおもへる月は。てりまさるへしと仰下されて。勝字を被レ付。

五十三番

左持　資平卿

稱古わきて猶更行かけのさやけきはにしこそ秋と月やすむらん

右　實伊

月は猶ふけにけらしな大かたの秋こそこよひ半なれとも

右歌よろしきよし。各申侍しを。下句。先年知家卿詠するよし。三位侍從申いたして。爲レ持。

五十四番

左勝　高定卿

いつのまに更ぬるかけそはるゝよの月は行ともみえぬ物から

右　爲教卿

みるまゝにさ夜更ぬらし久かたの月も半の影そたけ行

右させる難なくきこえ侍しかとも。左はよろしきよし人々申て。爲レ勝。

五十五番

左勝　爲氏卿

見るまゝにまやの軒端をもる月のふくれは影のうつり行哉

右　寂西

さよ中やあまつみ空にすきぬ覽かたふきそむる月の影哉

右歌上句おほせいたさるゝむねありて。左勝侍き。

五十六番

左持　雅忠卿

行末はなをとをけれと秋のよの月は西にも成にけるかな

右　長雅卿

みるまゝにおしむ心はふかき夜の空にもしらて月や行らん

左右おなしほとの事にやとて。爲レ持。

五十七番

左勝　通成卿

ふけぬるかおなし雲ゐを詠むれはゆく方ちかき夜半の月哉

右　通雅卿

山かせは心してふけ秋のよのなかはたけゆく月やかへると

右心してふけとて。月やかへるといひはてたるも。すこし心ゆかすや。左やすきにつけて。勝と被ㇾ定。

五十八番

左　良教卿

ふけぬとて西へかたふく光よりてる月なみも半過らし

右勝　公雄卿

山のははまた遠けれと秋の月半たけゆく影いそくらし

左上句いかゝとて。以ㇾ右爲ㇾ勝。

五十九番

左勝　隆親卿

この秋もおいの心にあくかれてねぬよの月そ西にかたふく

右　資季卿

今宵さへ人もとひこすあつまやの軒はのにしに月めくる迄

右も。させるとかなく侍しかとも。左老にゆうせられて。爲ㇾ勝。

六十番

左持　前内大臣

月までも秋のあはれのさひしさをあかつきかたの空にみす覽

右　小宰相

詠めあかてやゝ入方になるまゝにあはれそ月に猶殘りける

題の心はいつれも分明ならす候よし。左右各申て。爲ㇾ持。

六十一番

左　右大臣

なかめつるそなたの空もかはるまてねぬよの月の影そ更ぬる

右勝　中納言

いとかゝる月とみねはや休らはてねなまし物と人のいひけん

左歌後京極攝政この題の歌に。いくほとかはらさるよし三位侍從申て。右勝。

六十二番

左勝　關白

鳴そむる鳥のねならて更る夜を又しらせつる月の影哉

右　御匣

ふけにけり山のはもなきむさし野のお花か末にかゝる月かけ

右歌また同躰のちかき歌おほしとて。爲ㇾ負。

六十三番

左　前關白

みるまゝに更行よはのあまの河雲のみおとや月さそふらん

右勝　前太政大臣

續古　なかき夜はいつの人まに更ぬらんめかれぬ月そにしに成行

左歌ことなる難なく侍しかとも。右歌ことによろしきよし。一同に申て。勝とさためられ侍き。

六十四番

左勝　女房

月は今軒端の松のかけにこそかたふきそむる程はみえけれ

右　融覺

露をおもみもとくたち行萩かえのおなしかけにも宿る月哉

右露の萩にをけるすかた。ちからよはく。ことはかさりて侍らへに。左の月松をてらす。先たけ高くたくみにして。尤可㆑賞可㆑翫。

六十五番　欲入月

左勝　女房

續古
有明のそらにそにたる山端に入かゝりたる月のおもかけ

右　融覺

さりとては山のは近き老か身のよそへてはみし秋のよの月

左題のこゝろめつらしく。歌のすかた有㆑興のよし。満座申㆑之。右老後の述懐。よみあくるにをよはすとて。又以㆑左爲㆑勝。

六十六番

左持　前関白

いとゝ又名殘に色そまさりける秋もそなたの山のはの月

右　前太政大臣

難波かた浪まを分て入月の猶かけのこる淡路しま山

左下句よろしきよし各申㆑之。右又。そのところおもひやられて興あり。仍爲㆑持へき之由被㆑定。

六十七番

左勝　関白

世をうしとおもふ人なき此頃はひとりや月の山に入らむ

右　御匣

長き夜も明方ちかき鐘の音にしはしやすらへ山端の月

左治世之徳化可㆓賞翫㆒之上。右相㆓似近歌㆒之由。自㆓左方㆒申㆑之。爲㆑負。

六十八番

左　右大臣

夜もすからあかてなれぬる名殘とて暫しはとまれ山のはの月

右勝　中納言

ゆく月の心もしらて入かたの山のはつらくなに思ふらん

左させるとかなく聞え侍しを。右無㆓左右㆒勝とさためられ侍き。今見給に。ものかたりうたのことはましはれる。いうなることゝは受給はりしかとも。本歌も。ことによるへくやとそおほえ侍る。

六十九番

左持　前内大臣

惜みつる君にしたかふ世としらは峯ちかくとも月はいそかし

右　小宰相

入かゝる光もつらくゆく月をたれわか山と今はみるらん

左右の初五文字。をの〳〵一同可㆑爲㆑持之よし申㆑之。

七十番

左持　隆親卿

秋の月なこりをいかにしのへとて山のはいそく影をみす覧

右　資季卿

老か身を思ひよそへて山端にかたふく月もあはれとそみる

左よろしけれと。右又是も老の心すてかたしとて。爲㆑持。

七十一番

左勝　良教卿

大かたに秋行月を山のはのつらきになして猶いとふかな

右　公雄卿

なを殘る光そみゆるよはの月かたふく山のふもとならねと

右上句心おほつかなきうへ。左よろしとて。勝と被レ定。

七十二番

左　通成卿

山のはにつれなきかけを殘してそ猶入やらぬ有明の月

右勝　通雅卿

なかめつゝふくるもしらぬ月影の山のはに夜は成にける哉（こそよになりにけれイ）

左有明の月。不レ叶ニ題心ニ之由各申レ之。負侍りにき。右下句もいかゝとそみえ侍る。

七十三番

左持　雅忠卿

いかにしてしはしとゝめん山端にかたふく月の有明の空

右　長雅卿

おもかけを忘れやすると入かたの月に心をいつち（や）らまし

これ又有明の月。さきのことく申侍しかとも。右下句勝と難レ定之由をの〳〵申て。爲レ持。

七十四番

左　爲氏卿

をくら山ふもとはかけに成にけり松にかゝれる明かたの月

右勝　寂西

入までも猶のこりある夜半の月しゐても老のともとみる哉

左かゝれる月。いひおほせぬさまに各申侍しうへに。右老の心一かときこゆるよし申出して。右勝と申され侍き。

七十五番

左勝　高定卿

いひしらぬ名殘をみせて山端に今はとかゝる月のかけかな

右　爲教卿

あかなくにうはのそらをやかこたまし梢にかゝる秋の月影

右空のこするゑ荒凉なりと。左いひしらぬなこり。勝と被レ定。

七十六番

左　資平卿

すまの浦や遠きしほちの浪の上に明かたちかくやとる月影（る月のかけ哉イ）

右勝　實伊

明るまも久しき物を山のはにしほしほのこれ夜半の月かけ

すまのうらとをきしほち。はる〳〵もとめたるやうにきこゆるよし仰ありて。以レ右爲レ勝。

七十七番

左持　經平卿

いく里のねぬよのそらにしたはれて山端ちかく月殘るらん

右　師

とゝまらぬ月は猶こそうかりけれつれなくみえし影は物かは

兩首又よろし。不レ可レ有ニ勝負ニ。仍爲レ持。

七十八番

左　行家卿

あかすみるおもひをいとによられねと心細くや月のいる覽

右勝　眞觀

夜な〳〵にみるへき月の影なれとあかぬ餘りは山のはもうし

左いとによる本歌の事。融覺申す旨侍て。右勝と被レ定。

七十九番

左勝　雅言朝臣

秋のよのたをのこりある程たにも心にかなふ月のかけかは

右　忠繼朝臣

あはれ又山のあなたに宿もかな入なんのちも月をみるやと

右山のあなたにやともかな。ふるき歌にかはらす。つゝきたるうへに。いりたるにや。しからは。題の心そむくへしとて。左をかちと被ㇾ定。

八十番

左持　具氏朝臣

いくかへり西こそ秋はうき物とそなたの峯に月のみゆらん

右　隆博

山のはに猶入やらぬかけをこそさすかに月の情とはみれ

兩方より。しゐて不ㇾ可ㇾ有二勝劣一之よし申て。爲ㇾ持。

龜山殿五首御歌合 文永二年九月十三夜

題

河月　野鹿　山紅葉　不逢戀　絕戀

作者

左

女房
前關白 良實公普光園入道前關白左大臣
右大臣 基平公深心院關白前左大臣
兵部卿藤原朝臣隆親
權大納言源朝臣通成
權中納言藤原朝臣長雅
參議源朝臣資平
右近權中將藤原朝臣具氏
眞觀
中納言

右

關白 實經公後一條入道前關白左大臣
前太政大臣
前左大臣 實雄公山階入道前左大臣
前大納言藤原朝臣資季
中宮大夫源朝臣雅忠
融覺
中納言藤原朝臣爲氏
侍從藤原朝臣行家
右兵衛督藤原朝臣爲教

左近中將藤原朝臣公雄

講師

左　右近衞權中將源朝臣具氏

右　侍從藤原朝臣行家

讀師

左　右大臣

右　前太政大臣

判者

衆議判

一番　河月

左持　右大臣

行すゑのなかれも遠く大井河水の秋さや月のすむらむ

右　爲氏卿

かけうつす君か千とせも大ゐ河水の秋とや月のすむらん

左方眞觀　左歌。講師讀申之。任承曆例。方人先可詠吟之由被仰。仍發聲詠之。次右歌。講師讀申之。右方人詠吟之後。各可申是非之由有御氣色。右方申。左歌。下句同右歌。又上之二句非珍。左方申。誠右歌同躰也。勘先規。一番兩首同品之時。優左爲勝。右歌秀逸之時。爲持云。右歌無指事歟。尤任先例可爲左勝歟。右又申。かけうつす君かちとせ。爲祝言之上。初句得河月之題。有便宜之詞也。右勝非無例。爭可負哉。左方重難云。かけうつすは。爲君之影非月之光。遠背題之本意歟。然而祝言猶難默止之由。右方頻依支申。猶被定持。

後鳥羽院御時歌合。俊成卿判云。おほかたは歌合の例として。一番歌は左勝とし。右すこしつよき時。持とはしるすよし載之。右方令申請之趣。被背彼判云歟。

右方融覺　左右講師讀申畢。各詠吟之後。可申存知之由被仰下。右方申。兩首初第二句之外同歌歟。不可勝劣之由申之。左方一番左歌必可爲勝之由被仰下。右君か千とせの大ゐ河難定負歟。左右共可爲持之由定申。

二番

左勝　前關白

萬代につかへてそみむ月も猶かけをとゝむるせきの藤河

右　關白

瀨を早み磯まにたきつ山河のたえすそ千世の月はすむへき

右方。左歌。心詞優美之由申之歟。右歌。萬葉集に。磯のまゆたきつ山河たえすあらは といふ歌の。三句つゝきてや侍らんと被仰出。いとさもきこえす候歟と侍從三位申之。ゆの字をとゝめて。磯間にたきつといふより。たえすと いへるまては。三句に わたるにこそ。但萬葉集歌。古來取過非巨難歟之由。有勅定。大閤被申云。今見左歌。忠臣之趣。定無右方作者之難歟。申請可付勝字候哉。關白被申云。於歌優劣者。暫不可論之。仕君之勤節。誠非可申子細。早以左可爲勝云々。

左方より。磯間にたきつ山河。雖存古歌。關の藤川尤宜歟之由被仰。右方申。左歌。誠無指難。似有餘情。仍以左爲勝。

三番

左勝　通成卿

龜のおの瀧つかは浪玉散て千世の數みる秋の夜の月

右　前太政大臣

大ゐ河ゐせきの水に影さえて月もみなきる瀬々の岩波

右方無㆓申旨㆒之間。左方申云。月もみなきる。いとその心えすや侍らん。千世の數みる秋のよの月。あきらかにこそ侍れとて。同可㆑勝之由申㆑之。左方おほゐ河ゐせきの水。めつらしからす。きゝなれたる事歟。右方月もみなきる瀬々の岩浪。秋水の面かけ。よろしきよし申すといへとも。左。かめのおのたきつ河なみ。たちまさりてきこゆる上に。千世の數見所ありとて。左右ともに。以㆑左可㆑爲㆑勝之由。さため申。

四番

左　資平卿

くもりなき今宵は秋の名取河月にやみえむ瀬々のむもれ木

右勝　雅忠卿

大井河岩こす波のしら波に千よの數みる秋のよの月

左歌は。西園寺入道前太政大臣家月十首に。名所河風情ありしにやと。侍從三位申㆑之。其歌は。分明には申侍らさりしにや。左方申云。右歌。先の番の左歌におなし。めつらしからすや。左歌。下句優にこそ侍れ。彼月十首。させる公宴にあらす。さのみはさりあへかたくや。たゝしそれをゆるし侍りなは。可㆑爲㆓道之陵夷㆒歟之由有㆓沙汰㆒。以㆑右爲㆑勝。

右方。今夜は秋の名取河。近年之由申㆑之。千世の數みる。さきの左歌におなし。可㆑爲㆑勝之由各申㆑之。

五番

左持　長雅卿

竹河のふちのみとりも白妙に夜をへて月のすみやわたらん

右　資季卿

大井川ゐせきにやとる月かけはこほれと浪の音そのこれる

左歌。淵のみとりもしろたへにといへるわたり。つゝかすやと右方申侍しかと。本歌も色かはるとこそ侍れは。月の光さやかにこそ見えわたれなと。あらそひ侍き。右歌。建仁之比歌合に。河月似㆑氷といふ題にて。今歌のすかた侍ると。左方申侍しかと。その歌を さらは申へしと。右方せめ侍しほとに。竹河の歌は猶まさりてなと沙汰侍しかと。只持とさためられにき。建仁元年八月十五夜撰歌合。河月似㆑氷。俊成卿女。

大井河ゐせきにまよふなみのをとはこほらて こほる月のかけかな。其夜不㆓覺悟㆒侍し歌は。これに侍ける。

新勅。光明峯寺入道前攝政。をきまよふしの葉草の霜のうへによをへて月のさえわたるかな。左にも。かゝる下句侍けり。右方不㆓申出㆒侍しかと。古歌に隨㆓見及㆒可㆓注申㆒之由。後日被㆓仰下㆒之間。載㆑之者也。右方申。左の末句すこしおほつかなし。左方申。上句三番右のおなし躰也。下句又めつらしからす。可㆑爲㆑持之由兩方申㆑之。

六番

左勝　女房

おほ空の月はひとつを飛鳥河七瀬の淀にいかてすむらん

右　公雄卿

〔舊本九行闕〕
たる子細こそ侍けれ。
右方申。わたるとなしにみなれそめけんといへるうた
をおもひて。誠に優美之由申レ之。右歌左方より。うけた
もつといひ出したる歌の初の五字は。童子のかふしと
こそいひならはしたるに。誠見にくきうへに。世々年と
もいかゝとおほせくたさる。まことに陳申へき事に侍
らす。年代は山峯おなしさまに。或はとかめ。あるひは
なためて侍やらん。この外。年號につきても。さま〳〵
ことおほくうけ給しかと。老耄わすれ侍るを。いまみ
給ふれは。持の字つけられ侍にけり。

八番

左勝　沙彌眞觀

初瀨河ゐてこす浪の音よりもさやかにすめる秋夜の月

右　爲教卿

萬代もたゆる時なき光とやあきつの河も月のすむらん

右方申。波のをとよりさやかにすめる月はいかなるへ
きそやと侍しを。萬葉にをとのさやけさといへるには。
淸といふ字を書てさやけさとは讀侍れは。とかなくや
など。陳し侍りしかは。入道民部卿もさやうにやと申さ
れし。若ひかことにや。右歌たゆる時なき光も。ことあ
たらしくやとおほせ出されて。左勝侍にき。
左方申。はつせ河ゐてこす浪のをと。本歌のことは。月
もさやかにみえてよろしきよしを申。右方あきつの河。
祝歌といへとも。させることなしとて。負はへりにき。

九番

左　具氏朝臣

おち瀧つ吉野の河のきよきせにみれともあかぬ秋夜の月

右勝　前左大臣

久かたのあまてる月の桂河秋のこよひの名になかれつゝ

右方。左下句優ならす。連歌なとをうけたまはる樣にこ
そ侍れと申侍を。本歌に。みれとあかぬよしのゝ河と侍
れは。月の爲かた〳〵おもふ所侍にやとあらそひて。
右歌。又常のことにや。月のかつらは。ちかき歌に侍る
よし申あひ侍しかと。例のその歌。覺悟の人なくて。芳
野之淸瀨をしりそけて。桂川の佳名をすゝめられ侍に
き。野宮の前栽合。嵯峨野をきて。遠くたつねんもあ
ちきなしとはいひをけれと。このたひの題。野も山も。
いつくにても賞翫すへき樣におほせ出され侍しかとも。
右あまてる月のかつら河。まちかき程も十三夜も名に
なかれて侍る。よろしとて。兩方ともに申て。爲レ勝。

十番

左勝　隆親卿

風わたるきさの小河の水すみていよ〳〵きよき月のかけ哉

右　行家卿

大井河末はかつらのかけそへてふけゆく月やすみまさる覽

右申。左歌いよ〳〵きよき月かけ。誠にきら〳〵しくや。
右歌上句ふるくやとさたありて。左いよ〳〵勝侍にき。
左歌この河も。すこしもの遠くやと。右より申出し侍し
かとも。大ゐ河しもはかつら。珍しからすとて。きさの
をかは彌勝と定めらる。

十一番　野鹿

左持　通成卿

おほかたの野風を寒み誰秋にあらぬものから鹿や鳴らん

右　爲氏卿

色かはる野原のこはき誰秋にあらぬものゆへ鹿のなくらむ

兩首歌。おなしすかたには侍れと。おほかたの野風荒涼にやと。右方申せは。大方の野風こそ。たか秋にといへるにかなひて侍めれと陳して。不レ可レ有ニ勝劣一之由申レ之。仍以爲レ持。左右。おなしさまにて勝劣なしとて。持にきためられ侍りき。おほかたののかせは。すこし荒涼にそ侍ける。

十二番

左勝　女房

ねられすや妻を戀らんしめのゆき紫野ゆき鹿そ鳴なる

右　融覺

老てすむ嵯峨のの草のかり庵にいく秋なれぬさをしかの聲

右申。標野行紫野行。心難レ及詞難レ及之由。滿坐申レ之。右歌。老てすむ嵯峨野。作者誰人哉。殊心幽玄之由さたありて。左右ともに詠吟し侍し程に。春日山杜の下草ふみわけていくたひなれぬ さをしかのこゑといふ歌は。後京極攝政詠。新勅撰歌歟之由。被ニ仰出一しかは。とかくの陳方なくて。左はやく勝侍へしとそ。右方申侍し。右。老耄の下句古歌之上。左蒲生野遊獵の面影しかとたちそひて。似レ無ニ比類一。仍尤以レ左爲レ勝。

十三番

左　眞觀

岩倉のをののあきつにゐる雲のはれすも鹿の妻を戀らん

右勝　關白

夜寒なるほやの薄の秋かせにそよさそ鹿も妻をこふらん

左歌下句。續後撰歌歟。

枯はてむ後をはしらて秋草にふかくや鹿の妻を戀らん。此歌におなしきよし。侍從中納言申レ之。眞觀申云。鹿の妻を戀なといへることは。上句をあらぬさまにとりなして侍には。同し歌とも聞えすや侍らん。大方は下句同類侍らすとも。石藏の小野優ならす侍にや。これは。萬葉第七卷譬喩歌にて。挽歌なとにもあらす侍れは。風情述盡て。本歌にもちひて侍けるにこそ。右歌野ありや。ほやのすゝき。古來の難儀也とて。一々に被ニ仰出一て。入道民部卿。いか樣に存知するそやと御尋ありしかは。都不レ存之由申レ之。至極秘事之故歟。野之有無不レ被レ決して。歌の勝負難レ被レ定やとさた侍しかと。侍從三位。信濃國之野名也。能因歌枕にみえたるよし申之間。一說につきて。以レ右可レ爲レ勝之由。被レ定畢。左より。ほやのすゝき。野の有無御尋によりて。右方に陳申さるゝむね侍しやらん。かやうのことゝも。不覺の老の心をよひかたく侍き。左歌。はしめの句。これも童子のかふしいたく優にみえ侍らさりし上は。萬葉集秋津野の雲。其時もみゝにたち侍りし。いまもすかるへくもおほえ侍らす。いかさまにも右勝侍にけり。

十四番

左勝　前關白

春日野やあとあるかたの末なれは今もまよはぬ棹鹿の聲

右　爲教卿

野へはみな曉露のふかき夜にわれ立ぬれて鹿や鳴らん

左歌よみあけて。右歌未二讀申一之間。永承歌合に。春日山とよめらむ歌は。いかてか負侍らんと。二條關白申されけれは。宇治入道關白。まことにしかなりとこそ侍けれ。右方の作者も。氏長者藤原卿等也歟。不レ申二子細一歟。押可レ付二勝字於左一歟由。大閤被レ申レ之。右歌。さすかよみあく。曉露のふかき夜。理不レ可レ然。下句ぬれてや獨鹿の鳴らん。同しことにやなと。人々申あひて。曉露の詞。春日の光には。いとゝけたれ侍にき。左方。野邊はみなあかつき露とて。ふかき夜いかゝとおほせ出され侍し上。春日野のあとある道。いかにもたちならふへきにあらすとて。以レ左爲レ勝。

十五番

左　中納言

秋ののゝお花かもとの露わけておもひありとや鹿の鳴らん

右勝　行家卿

秋の野の草葉ならねは棹鹿の心はかれす妻やこふらん

左歌。下句有二同類一歟之由。右方申レ之。右歌。本歌もめつらし。心詞優なり。殊よろしとて。勝にさためらる。右方申。左歌。かやうのこと近く聞たるさまに侍にやとて。右勝侍き。其座に當りて申出さぬこと。後日に申て詮なく侍れと。衣笠内大臣百首に。思ひそふとや鹿の鳴覽と讀て侍りけり。

十六番

左勝　具氏朝臣

をのか妻みまくほしさに鳴鹿のいくたひ野へを行かへる覽

右　前左大臣

あらはれてをのかいるのゝ花薄ほにこそ鹿の妻をこふなれ

右方申。をのか妻みまくほしさ。優ならすと難し侍しを。本歌おかしくこそ。とりなして侍れと。被二仰出一しにや。右歌は。方の人頻に艷なるよし申侍しかと。下句御製也とて。左勝になされにき。左歌をのかつまみまくほしさになく鹿の。あまりにたしかにやきこえ侍らんと申いたし侍しかとも。左勝侍にき。

十七番

左持　右大臣

忍ひかね妻や戀らむ棹鹿の涙もあまるをのゝ篠原

右　資季卿

やゝ寒きをのゝ淺茅の秋風にいつより鹿の鳴はしめけむ

左歌。初五字不レ宜。第四句非レ珍なと。入道民部卿申レ之。をのゝ篠原しのふれとあまりてなとか人の戀しきと。ふることをいみしくこそとりなして侍めれと。勅定あり。右歌又姿優美にして。たけあるさま。ことによろし。持とさためらる。右方より。なみたもあまるをのゝ篠原。優なるよし申レ之。左方。又右歌も宜由申て。爲レ持。

十八番

左　隆親卿

これも又老の友とや成ぬらん聞てふるのゝさをしかのこゑ

右勝　前太政大臣

をみなへしなひく野原の露分てわか妻とてや鹿の鳴らむ

左歌哀なるさまにて。心詞優にこそ侍るを。これもまたといへる五字。なにの爲ともきこえす。右方難し侍しか

は。鹿の聲ならぬともしありぬへきことなれは。これも又こよめるは。とかなくこそ。これも又といふ句は。なかき別になりやせんと。知家卿よみて。新古今にいれり。行家は。いかゝ此句をは難せむと被ニ仰下一れはかしこまりて申旨なかりき。右歌本歌さることにて。うるはしき姿也とて。勝になされにき。左方より。可レ被ニ優老一由申され侍しかとも。右かた宜とて。勝と被レ定て侍りき。

十九番

左持　　長雅卿

さひしとも誰か聞らん高圓の秋ののうへのさをしかの聲

右　　雅忠卿

朝な〳〵ねに鳴しかの妻こめにやへたち渡る野邊の秋霧

右歌妻こめといひて。八重立わたる秋霧。八雲の跡までも思ひやられて。いとおかし。朝な〳〵とよめるや。鹿はかならすあしたはかりに鳴やうに聞え侍らんと。左方これを難し侍し程に。左歌誰かきくらむまては思ひやりたる。しかの聲は本意なかるへしと。前太政大臣難ニ申之一。秋ののうへは。猶よろしくこそきこえ侍れと。みそもしあまりひともしの濫觴に優して。持と定められぬ。兩首隨ニ申旨一。可レ爲レ持之由被レ定。

二十番

左持　　資平卿

をのか妻つれなきのへの秋風にたへていくよか鹿の鳴らむ

右　　公雄卿

たか秋にあらぬ野風を身にしめてわか妻戀に鹿の鳴らむ

右方申云。左歌無ニ指得失一歟。右歌たか秋にあらぬのかせ。いとその心をえす侍れと。左歌にをとるへからすとて。又持になさる。

右歌にたか秋にあらぬといへる。本歌すてに三首候。兼日歌合。本歌一にかきらは。非ニ本意一歟之由。被ニ仰出一。右無レ所レ于レ被レ陳之由申レ之。仍左勝之由承侍しに。持にて侍けり。

廿一番　　山紅葉

左持　　右大臣

紅葉はもいかに染てかをしほ山神代もきかぬ色とみゆらん

右　　關白

あきらけき君かあたりも小倉山染る錦はえこそとかめね

右歌子細有けなり。本文か何事哉之由。有ニ勅問一。明王好レ儉不レ能レ禁。紅紫蘭將錦繡林。この詩の心のよし關白被レ申。先々も被レ仰ことになむ侍れと。本文古集なとを歌によむことは。不レ明不レ暗朧々月なとを。千里か詠したる事は。作例なきにあらされこ。これは非ニ歌之本意一歟。古今序にも。立田河の紅葉はみかとの御目に錦と御覽し。吉野山の櫻は人丸かめに雲かとそおほえけるなとこそ。對句にもかきて侍れ。いつか漢家のこゝを書て侍と仰らる。誠に歌合は。ことに詞をえらひて。花をさきとし實を後にすへきよし。先達も申侍れと。かの採レ詩之になすらへて。この詠歌之道を思に。求ニ兵論諷判之言一。輔ニ治國撫民之政一侍らんことは。この道の要樞といひつへし。君臣の情もこれによりて見え。賢愚之性もこゝにわかるへきものなれはなり。しかあれは。今和ニ

明王好儉之文_。被_レ述_二我后施德之仁_一。しつかに思ふたまふれは。まけかたくも侍かな。左歌。常のことにやと。右方申侍しを。神代のことをおもひて。神代もきかぬなととりなせる。ことに優にこそ侍れと。左方申侍し上に。をしほ山春日野同事に侍へし。爭か負侍へきと。大閤被_レ申につきて。右方。さらは持とそ申うけられし。左歌。義理相叶。花實共存。尤宜之由。右方申_レ之。右歌。明王好儉。本文尤雖_レ可_レ然。猶非_二和歌之本意_一。且者甚優殊存_二此趣_一歟之由被_二仰出_一。右方有_下被_二陳申_一之旨_上歟。仍可_レ爲_レ持之よし被_レ定。

廿二番

左持　前關白

老か世は人なとかめそ立田山もみちのにしきなをもきてみむ

右　行家卿

山姫の衣たつたのからにしき秋はしくれに袖をまかせて

右方あなかちに申旨侍らさりき。右歌は山ひめはかりにては。山のたしかならむには。をとりてや聞ゆへきと。左方難し侍しかは。衣立田とよめり。山姫又山をはなるへきにあらすと。右方陳申侍し。さる方も侍りとてありしを。衣錦袖。あまりに事おほくきこえ侍にやと。申出し侍しを。これはあまりのことなりと。勅定有しかは。侍從三位。ことの外にちからを得たるけしきにてそ侍し。今度左にも右にも。老の歌勝侍らす。この左歌をは勝にやなさるへきと。大閤被_レ申しかとも。歌にこそよらめと勅定あり。それにつきて。歌もまさり。老をも賞せらるへしと。左方いきとをりふかく侍しかと。時刻をしうつりしによりて。猶持にそさためられにし。左右龍田山の錦。尤可_レ爲_レ持之由各定申。

廿三番

左勝　中納言

山姫の心そみゆる時雨ては

右　（名闕）

松のお山の峯のもみち葉

左歌本歌おかしくとりなして。すかた優なりと。侍從三位申出侍しかは。のこりの人々も。さやうに申されしにや。右歌をは。同方より何とやらん難なくはへ侍りき。おほよそ。左歌をはほめ。右歌をはそしる。左方ちからをもいれすして。右方の申にまかせて。左勝侍にき。左山に峯の寬平勅判者雖_レ可_レ憚_レ之。後多不_レ離_レ之歟。隨又右方無_二申旨_一。勝事爲_レ謝_二後難_一。載_二此子細_一者也。左歌すかたことは幽玄之由各申。爲_レ勝。

廿四番

左勝　女房

外よりは時雨もいかゝそめさらむ我らへてみる山のもみち葉

右　爲氏卿

君かすむあたりの山のかひありて外に染ます秋の紅葉々

右方申。外よりは時雨もいかゝ染さらんさて。我らへてみる山のもみち葉。誠に秀逸たるよし各これを申。左右一同詠吟數返。尤以珍愛也。右歌おなしさまなる外字さへいかゝなと。右方人も申侍しやらん。慥にはおほえ侍らす。左にたくふへきにあらすとて。左雲泥の勝と定らる。左歌講師讀あけ侍しより。滿座詠吟不_レ及_二右歌之沙

汰。爲レ勝。

廿五番

左　隆親卿

嵯峨の山千世の古道立かへりいかに時雨も木の葉染らむ

右勝　前左大臣

あらし山おなし時雨はめくれとも色の千草に染る紅葉々

左歌上二句。定家卿の歌之由。入道民部卿申レ之。右歌色のちくさ。まことに染まさるよし さたありて。勝侍にき。

左初二句。新古今定家卿歌之由。申出し侍りき。右あらし山おなし時雨の紅葉は。ちくさの色も そめまさるへしとて。爲レ勝。

廿六番

左　長雅卿

うちつけに色こそまされ初時雨ふれは山への秋のもみち葉

右勝　前太政大臣

小倉山日かけうつろふ色そへて雲るにみゆる秋の紅葉々

左歌初句うちつけにとある。相撲をみるこゝちすと。右方申レ之。うちつけにものそかなしきなとこそ。ふるくもよみて侍れ。ふれは山へ。宜由御氣色も侍しかと。右歌雲井にみゆる秋の紅葉々。殊にけたかく侍とて。右勝はへりき。右雲井に見ゆる秋のもみち葉。色ことに侍るうへに。左ふれは山へ。本歌のことはなれとも。優ならすとて。以レ右爲レ勝。

廿七番

左持　眞觀

をくら山今一たひも時雨なはみゆき待まの色やまさらむ

右　公雄卿

散ぬへき秋のあらしの山のなにかねてもおしき木々の紅葉々

左歌右方とかく申旨侍らす。右方殊宜之由沙汰ありて。持とさためられし。おほつかなきことになん侍り。

左の小倉山。今一たひの本歌の心思はへたるにては侍れと。右秋のあらしの山の名にかれてもおしき木々のもみち葉。

（此間二十四行闕以下は二十九番の判詞の内也）

末句のとかめなくて。持にそ被レ定たる。かくのことくのみ侍れは。今の作者も。先規にまかせて詠レ之歟。言者無レ罪。但不レ可レ依レ以二前例一。猶可レ爲二向後之誡一歟。

左歌すゑさまいさゝか用意あるへかりけるにやと。申出侍しほとに。右歌老耄の愚歌にて侍けり。返々勝字しかるへからすと侍ける。

三十番

左持　資平卿

はつ時雨山の木間をもりそめて心つくしの下紅葉かな

右　資季卿

色々に染かへてけりしら露のをくらの山の木々の紅葉々

右申。左歌紅葉不足歟。よそにては紅葉みえすや侍らんと。入道民部卿申侍しかは。紅葉をかならすおほくよむへきにもあらす。題をそむかさらん上は。右方難あたらさるよし御氣色侍りき。本歌も。月すくなくてこそは。古今の秋の部にも入て侍れ。木のまをもりそめて心つくしの下紅葉。すかた優にして。こゝろめつらしきさま

なりと。左方よりは頻に申侍りき。右歌これこそ紅葉にあけるさま。誠に題の本意とみえて。歌躰又よろしと沙汰侍り。抑今度の御歌合は。左右方をの〳〵。かたの歌を評定して出へきよし。定仰下されにき。然るを。露のをくら山。只おなし躰なる歌いたせり。しかのみならす。鹿歌には。たか秋にあらぬものゆへといふ本歌を。あまたよみて侍にやと仰出さるれは。右方理にふして。陳方なくこそ聞え侍しかとも。歌躰尋常なりとて持とは被レ定にき。

左歌山にも紅葉みえぬ様に侍と。右方申侍しかとも。右歌色々にそめかへてけるも。めつらしかるへきにあらすして。持と被レ定。

三十一番　不逢戀

左勝　眞觀

命をは我やためしと思ふにもはかなきもの丶ねをのみそなく

右　行家卿

いける日のつらさにかへて逢事をまたぬ命と戀やしなまし

左歌非二戀歌一之由。入道民部卿申レ之。われやためしにあはぬしにせんといへる古歌を思てよめる歌は。いかてか戀歌にあらさらんと。勅定ありしかは。其後は。申旨もきこえさりしにや。右歌いけるひのとうちいたしたる初句。耳に立さまにや。ためこそ人はみまくほしけれといへるにも。第三句にそ聞なれて侍る。下句は。優にきこゆれと。左猶可レ勝之由有レ勅。右方申。左は戀の歌ときこえすや。

左方より。初句もいけるひのといへるもいか丶。我やためしにといへる本歌の戀の心。優なりとて。左勝と被レ定。

三十二番

左勝　通成卿

なか〳〵に扨も心の色みえはあふにはかへて身をや捨まし

右　爲氏卿

戀侘る身のためつらき命にて契もしらぬ同し世そうき

左歌すかた艶にして。心めつらしと。右方申レ之。侍從中納言。見にけ〔本ノマヽ〕のよし申侍しうへに。右歌末句さなくてもや侍へきと各申て。以レ左爲レ勝。

左歌心あまりて。ことは優に聞ゆとて。爲レ勝。

三十三番

左　右大臣

いとせめてつれなき中のなそもかく思ひつきせぬ契なる覽

右勝　融覺

をのつからあふを限の命とてとし月ふるもなみた也けり

左歌いとせめて。なそもなく。優の詞にあらすと。入道民部卿。侍從中納言ことさらに是を難申。左方には。この兩句は皆古今詞也。何强可レ爲レ難哉。おもひつきせぬ契は。ことに優美にこそ侍れと申侍しかは。叡慮もさやうにこそ侍りしか。右歌殊宜之由沙汰ありて。涙なりけりに。勝字をつけられにき。

左よろしく聞え侍しを。右の下句すてかたしとて。勝侍にける。いか丶とそみ給ふる。

三十四番

左勝　前關白

さりともと思ふはかりの慰めにいきてつれなき身を歎く哉

右　前左大臣

淵となる涙の河に身をなけてかこちやせまし後の逢せを

右歌は。古歌のよし。被二仰出一しを。撰集の歌には侍らさるよし。右方人申侍しかと。戀わたる涙の河に身をなけむこの世ならても あふせありやと。まさしくかゝる歌はありとも重勅定侍しかと。右方猶不二承伏一申侍しにや。左歌ことさら戀歌と聞えて。やさしく侍りとて。勝に被レ定にき。作古歌。後日被二引勘一之處に。千載集宗兼歌にてありけりとそ。御氣色侍し。

左心詞艶に聞え侍しうへに。右撰集歌に加はらすと。左より沙汰侍りて。爲レ負。

三十五番

左持　具氏卿

けふまては行末しらぬつらさにていつを限の思ひなるらん

右　關白

くちはてむ袖のゆくゑもしらぬまてあふを限とせく涙かな

左のゆく末しらぬいつをかきり。右の袖の行ゑ逢をかきり。おなし本歌にて。いつれもおかしくよみなして侍かなとて。よき持なるへしと。左右ともに申レ之。

右歌ことによろしく聞え侍しかとも。おなし本歌なりとて。持と被レ定。

三十六番

左持　女房

徒らにめくりもあはす戀草のなゝくるまゝて年はつめとも

右　雅忠卿

中々にその名もつらし相坂の山はわか身の關路なりけり

右方申云。左の七車。まことに凡慮及かたきさまなりと。面々に申あひ侍しかと。不二甘心一人もや侍けんかし。此本歌は。新勅撰に定家卿撰入て侍れは。さためて秀逸にこそ。ちから車と侍るよりも。なゝ車まて年はつめともと侍には。ことにたくみにこそきこえて。上科の歌とそみえ侍ると申上侍き。右歌下句殊有レ興なと。沙汰ありしを。山はわかみの關路。七車よりもおひたゝしくこそ聞侍しかさ。只可レ爲レ持之由さためらる。左歌戀草の七車めくりあはぬまてもちから入て。ことはたくみにうけ給はり侍しかとも。あふ坂山の關。めつらしからすなから持とつけられ侍し。いかゝ。

三十七番

左持　中納言

人を猶えやはうらみむ戀そめし心にまさるつらさなければ

右　前太政大臣

有明の月のかたみもまたしらすつれなきはうき人の心に

右方歌人は。左歌を妖艶なりと申。左方歌人は。右歌を優美なりと申て。兩方一同に宜持と定申侍き。

これも。左は。幽玄ことによろしきよし。右方よりも申侍しを。右月のかたみもまたしらすめつらしとて。持とさためらる。

三十八番

左　長雅卿

山鳥の尾上のへたて徒らに身にしられてもなく〱そふる

右勝　資季卿

逢坂や人のゆきゝはいかならむ我身にかたき夜半のせき守

右方申。おのへのへたてえんなからすやと難侍しかと。山鳥のけをふくにや侍らん。身にしられてもなく〳〵そふる。幽玄にこそ侍れと。執論し侍しに。右歌人のゆきゝはとよめる心いとおかしく。これは嫉妬したるにやと仰下されしかは。右方漸入興之氣侍しにや。鹿紅葉もおなし風情歌。無念のよし沙汰侍ることく。此戀歌には。あふ坂なことゝせり。山はわか身の關。わか身にかたき關。大旨同事歟。然る歌猶よろしとて。勝になさる。山鳥のおのへのへたて負のよし。おほせいたされて。以右爲勝。

三十九番

左勝　隆親卿

逢事のいつをかきりとたのまねはわか涙さへ果そしられぬ

右　公雄卿

しらせはやあふにしかへむとはかりの誰ゆへならぬ命長さを

左歌右方更無難申旨。右歌とはかりの五字。述盡て聞ゆるにやと。左方申侍しかは。右方も。誠にしかりとそ雌伏し侍し。仍左の勝と定られにき。左方歌に。いつを限といふ句兩首侍りけり。これは。右のあふをかきりの兩首にあへにけるとや。

右ゆうなる詞に聞侍しを。左心詞かなひて。ことによろしとて。爲勝。

四十番

左勝　資平卿

めくりあはむ末をはしらす常陸帶のかことたになき戀もする哉

右　爲敎卿

なからへてあらはと頼む命たにかひなくたえむはてそ悲しき

左歌その難なきよし申。誠に歌合の歌とみえたるにや。和歌髓腦に。戀意爲宗と申て侍るは。かやうのすかたにこそ侍らめ。右歌さることゝ見えて侍るを。右方すゝみ申て。左を勝と被定にき。

右之心はかりは。さもと聞え侍しかとも。左のひたち帶かことたになき戀は。風情もめくらされて。勝とさためらる。

四十一番　絕戀

左持　資平卿

いつまてか待わたりけんたのめしも昔かたりの夢のうき橋

右　關白

はかなしや我のみかよふ思ひねの夢路はかりの絕ぬ契りは

昔かたりの夢のうきはし。思ひ寐の夢路はかり。とりとりに優美なりとて。兩方ともにこゝろかよはして。よき持とそさため申侍し。

左右ともに優なるよし各申て。爲持。

四十二番

左持　隆親卿

うき名をもよそになしてやなくさめん我をふるせる秋の夕暮

右　前左大臣

待わたるたえ間を何と歎きけむみしは昔の夢の浮はし

右歌又夢のうきはし。ことに優なりと沙汰侍りしに。左のわれをふるせる。本歌のあひしらひ。猶すてかたしとて。是も宜持とさためられぬ。

右歌ことに心詞幽玄に聞え侍しかとも。左我をふるせる秋の夕くれ。すてかたしとて。持とさためられ侍りき。みしはむかしの夢のうきはし。今見給ふるにも艶にこそ侍けれ。

四十三番

左　前關白

こぬまてもさすかまたれし槇の戸にやすらふ程の慰みもなし

右勝　資季卿

有明にわかれしまゝの年へてもつれなく殘るわか命かな

右方申云。左歌さすかまたれし槇の戸に。いひしれるさまにや。右歌有明にわかれしまゝの年へてもといひて。つれなく殘る我命かなとよめる。殊宜之由有二沙汰一て。左方より勝字をつくへきよし被二仰下一。此上は可レ顯二作者一之由。被レ仰二右方一之處。前大納言藤原朝臣名謁喜悦の色にあらはれ。左右感をうこかし侍き。

左さすかまたれしまきの戸。詞もたくみに心もこもりて。おもひ入たる躰に侍しかとも。右有明にわかれしままといひて。つれなく殘る心ことに宜由。左方よりおほせくたされて勝侍りにき。右方面目作者の榮花とこそみ給へ侍りしか。

四十四番

左勝　右大臣

きぬ〴〵の曉はかりうき物といひしも今はむかし也けり

右　爲教卿

たのめをく契はたれかなさけとてありしうつゝの夢に成覽

左歌心詞優にして。義理あひかなへり。ことに宜歌とこそみえ侍るを。右方かたふけ申旨侍しやらむ。いとうけたまはりわかす侍しかと。右歌ありしうつゝの夢になる風情。懷舊歌にも常に侍へし。左歌常篇にたへたるゆへに。眞觀申請て。付二勝字一乎。

左歌下句ことによろしとて。爲レ勝。

四十五番

左持　中納言

今も又たのめは人のつらかりし名殘にさへや袖のぬるらん

右　爲氏卿

さりともと待したのみの夕暮もいつよりよそに思ひたえけん

左右之詠。優美乃由。各申レ之。仍以爲レ持。續後撰順德院御製。

おもひ侘さてもまたれし夕暮のよそなる物になりにけるかな。右歌。似二此御製一乃由。後日有二勅定一。仍注二載之一。

左上句まことに優にそ聞え侍しかとも。右も又宜とて爲レ持。

四十六番

左持　長雅卿

かさねけむ袖のうつりか昔にて身にしむ物や思ひ成らん

右　行家卿

たのめしは人の昔に成はてゝ我身に殘る夕くれの空

右の歌。わか身に殘る夕暮の空。今度の撰集に。しらさりきたのめしなかはあとだえて夕暮はかり身にとまれとはといへる入道相國歌に。いとかはらすやと被二仰出一。このうへは子細にをよはすと。前太政大臣申されき。しかるを。左方の初句よろしからす。勝歌とはいか

かと。右方にさゝへ申人侍しかは。かさねけむあなかちに難あるへき詞にあらす。下句又優にこそ侍れ。いかか。左歌に持にもなされまして。負にもなさるへきかと左方申侍しかと。このことはりをは申のへすして。たゝ持にて侍へしと。右方申請侍しにや。

右歌心詞艶にきこえ侍しかとも。左歌下句すこし心ゆかすなから。持と被ㇾ定侍りにき。

四十七番

左　通成卿

年ふれと戀しきことに袖ぬれて物忘れせぬわか涙かな

右勝　前太政大臣

哀なと今はかけみぬむもれ水なかれて猶も袖ぬらすらむ

右方申。左歌下句。もの忘れせぬ袖のうは露といへる歌におなしと申侍しを。いつかは似て侍る。袖の上露とあるを。涙にこそと申なさは。あたらしき歌いてきかたくやなと。左方申侍しかとも。右歌猶殊なる難なしとて。勝になさる。

左もの忘れせぬ涙。めなれては侍れと。優にとりなされたる心地し侍しを。右いまはかけみぬむもれ水。よろしくて。勝と被ㇾ定。

四十八番

左勝　眞觀

うきなからしはしはみえし面影もいつの月日か限成けむ

右　雅忠卿

まとろまて人のつらさを數くまに夢さへたえて幾よへぬ覽

右歌ことなるさた侍らさりしにや。左歌題心存知たるにこそと。右方申されしかは。勝はへりけるにや。右歌源氏物語歌のことはつかひ。いと優にこそ侍りけるを。當座に申出人侍らすして。負と成にけり。

左歌面かけのみえすなりけむ月日そ。まことにおほつかなく侍しかとも。右させることなしとて。以ㇾ左爲ㇾ勝。

四十九番

左持　女房

いもとわれ花田の帶のなかなれゃ色かはりぬとみれは絶ぬる

右　融覺

今こむといひしなからの橋柱又もかよはぬ名のみふりつゝ

はなたの帶のなかなれや色かはりぬとみれはたえぬる。まことありかたく。心めつらしく。詞つかひおかしくなと。右方人々もうちとけて。左をほめ申侍しかは。右歌をも。素性かおもかけはし〳〵らに立そひにけりなと。口々に申侍て。持にそさためられしかと。花田の帶の持になりぬるは。左方猶いきとほりむすほゝれてそ侍りけむかし。

花田の帶の中絶にける。戀の心をよひかたくうけ給りしを。なからのはしのふること。なにとして持字をつけられ侍しやらむ。

五十番

左勝　具氏朝臣

年月をへたてゝうときさ夜衣中にありしを何うらみけむ

右　公雄卿

今はたゝ戀わたれともかひそなき契し夜半のくめの岩橋

右のいははしよりは。左のさよ衣よろしとて。勝侍りに

き。

右のいはし。めつらしからすして。左中にありしを。勝とさためらる。

右歌合。幼年之時書寫之本。歸洛之後從二或所一求得レ之。而有二子細一。以二此本一進二獻梶井宮一者也。仍錄二事之由一耳矣。

慶長第九甲辰孟秋中七日　　也足軒素然

右歌合別得古寫一本挍合了

群書類從卷第二百三

和歌部五十八 歌合廿四

攝政家月十首歌合 建治元年九月十三日

一番　十三夜晴

左勝　女房

いつもなをくもらぬ秋のならひさへわきて今宵の長月の空

右　安嘉門院右衞門佐

こよひしも名におふ秋の長月と月もしりてや曇さるらん

左歌。雖レ賞ニ此夜之淸光一。誠是美ニ明時之德化一。加レ之涉ニ風雅之二義一。銷ニ露詞於五句一者歟。神也妙也。不レ可レ不レ感。右歌。雖レ無ニ殊難一。こよひしも名におふ秋の長月と侍に。秋の字やはさまりて聞え侍らん。承暦二年内裏歌合に。降雪のひかすへぬれはしからきの杉の青葉も見えすなり行。判のこと葉に。杉の葉とよむへきに。文字のたらねは。あをはと讀るほと。よはけなりと難せられたるにや。この秋の長月は。彼杉の青葉にことならすもや侍るへからん。左不レ同レ右。右不レ及レ左。勝負可レ謂ニ去隔一者歟。

二番

左勝　三位中將

長月の名高きよはも顯れて影すみまさる月を社みれ

右　則任

すむ月も名に顯れて長月の今宵は雲もあらし吹なり

右歌 こよひはくもゝあらし吹。十躰の其一には侍らめとも。强にもとめられたる風情にこそ。左歌ことなるふしは侍らねと。宜きさまにやとて。猶爲レ勝。

三番

左持　法印道雲

十日あまりけふみか月の影淸み空もさこそは時をしるらめ

右　則雅

長月のつきの名高き今宵とはなきたる秋の空に社しれ

左の。十日あまりとうちいたされたるこそ。歌のやうにも聞えすや侍らん。壬生二位歌に。長月の十日あまりのみかの原なとつゝけて侍こそ。たくみにもおかしくもきこゆることにてははへれ。今の初句は無下にうちとけてそ侍らむかし。右の歌は。なきたる朝のわれなれやと申ふることにすかりて。晴たる風情はおかしとも申侍ぬへけれとも。なきたる空は。朝にかきるへきことには侍らねと。かやうの事は。たゝふるくより申ならひたる

まゝにて。なきたるあさとてそ本とはしたら（本ノマヽ）侍る。但猶朝之有暮なと申本文にゆつりて。なためもや申へからん。しかれとも。上下句のはしめ。同文字こそ侍れ。天徳内裏歌合にさた侍るより此かた。公私の歌合に。或は黙し或は不レ難。用意在二判者之心一歟。左もすゝみかたく。右もしりそきやすくや。仍以爲レ持。

四番

左勝　隆博朝臣

みか月のまたほのかにてみし影の十夜を重ぬる空そさやけき

右　親長

いさゝ又光をそへて長月の中なる三夜の空そくもらぬ

左歌各句々一字として題の心を離れす。尤珍也。尤優なり。和歌の本意只これにあるへきをや。右うた。なかなる三夜。たとひよろしといふとも。左にはをよふへきにもあらさる歌にこそ。

五番

左持　教顯

長月のけふ名にしおふ月そとは空すみまさる光にそみる

右　顯綱

なか月のおなし雲ゐもいかなれは今宵は月の照まさるらん

すみまさる。照まさる。不レ可レ有二勝負一歟。

六番

左　重經

長月の中にみちたる三日の夜の月の桂も色そことなる

右勝　左衞門督

なかつきの半の空にさきたちて月は今宵そすみまさりける

左長月の中にみちたるとては。十五夜にこそとみ給ふるほとに。みかの夜と侍りけり。いかゝこゝろえ侍るへき。心はやき人に。とひてそしらまほしきなと。おほえこそはへれ。古歌のなかに。わつらはしき三日の夜をし（本ノマヽ）たも本とせられたりける。よしなくこそ見えはへれ。右もなかはのそらとさゝれてはへれは。又おほつかなきさまなれと。いつれの月々にも。望ははへるへき事なれは。月の圓明ならんすかたに先たちて。今宵の月は。左よりもはるかにすみまさりて見給ふれは。爲レ勝。

七番

左勝　邦長

長月や月影きよし十日あまりくもらぬみよの秋のしるしに

右　行實

照まさる今宵さかりか長月の月の桂の秋のもみち葉

左十日あまりの句。春より腰にさかりては。さてもやはへるへからめとも。第二句をき所もかなはすして。續後撰後鳥羽院御製をかせるにや。しかは侍れと。下句新勅撰歌也。入道前大納言家詠歟。共とか左はかろし。右はをもくやとて。負侍るへきにこそ。

八番　松月出山

左勝　三位中將

吹はらふ峯の嵐の音すみて松より晴る月の影かな

右　顯綱

詠れはおのへの松のこの間より山のはいつる夜半の月影

右歌おのへと山の端とは。いかゝはへるへからん。寛平の勅判には。山と峯とまたけたりとて。らんといふこさ

葉ふたつよめる歌と。持に定められたり。いはむや。おのへと山とは。おなしこゝろの病のかるへからすや。左は朗詠の秋夕詩に。望ㇾ山幽月猶藏ㇾ影とつゝれるを本として。峯のあらしふきはらひて。やまの月松よりはるるは。いつる心ふかく題をめくらされて。うたのさまたけありかし。可ㇾ爲ㇾ勝。

九番

左〔持歟〕　法印道雲

松に吹みねの嵐に空晴てこのまもしるく出る月影

右　左衞門督

木まもる心つくしの影みえて松にやすらふ山のはの月

左歌新古今。後久我太相國。たつた山夜半にあらしのまつ吹は雲にはうときみねの月影。第四句外。こゝろこと葉おなしく候歟。右歌千五百番歌合に。京極中納言。まちわひぬ心つくしのはる霞花にいさよふ山の端の月。改ㇾ花之詞ㇾ用ㇾ松之題ㇾ計歟。まつにやすらふも。待と聞え侍にや。仍爲ㇾ勝〔持歟〕。

十番

左持〔勝歟〕　隆博朝臣

なみたてる松のこのまの山のはにやすらふ月の光成ける

右　行實

峯におふるまつと知てや出ぬらん秋のいなはの山の端の月

左歌松の木の間の月のひかりとならむこと。おほつかなくや。右歌みねにおふると侍れは。松にこそとは見え侍れと。待としりてやいてぬらんと侍るには。題をかくされたるやうにや　きこえ侍るらん。後京極殿六百番歌合に。殘菊。うつろふかまた咲はなもなき花ときくにもそめつ深きこゝろを。右歌こゝろあるやうには侍るを。花は重疊し。菊はかくし題なるやうなり。うちまかせすや聞ゆらんとて。まけはへりにけり。今思ㇾ暮松之詞ㇾ。不ㇾ異ㇾ殘菊之難ㇾ歟。仍以ㇾ左爲ㇾ勝。

十一番

左持　教顯

山のはにしけき小松のたえまよりはやくも出る月の影哉

右　則任

えたしけき松のこの間に影みえてたえ〳〵登る山の端の月

左はやくいつれともすゝます。右たえ〳〵のほれとも。ひとしくや侍らん。

十二番

左　重經

山の端をはつかにいつる影みえて松の下てる秋の夜の月

右勝　則雅

暮ぬとて山のはいそく月影のしはしやすらふ松の村立

左よろしくやと見給ふるほとに。山のはを出やらぬ間の影見えてまつのしたてるいさよひの月。これは石間集。前大納言良歌にて侍けり。誠是希有異躰之愚撰にこそは侍れと。法皇御時忝備ㇾ叡覽ㇾ。被ㇾ召ㇾ進仙洞ㇾ了。已爲ㇾ公物ㇾ之上者。諸好士任ㇾ雅意ㇾ。不ㇾ可ㇾ破却ㇾ者歟。右歌雖ㇾ非ㇾ宜可ㇾ爲ㇾ勝歟。

十三番

左持　邦長

詠やる尾上のまつのひまなくは月を梢に猶そ待まし

右　　安嘉門院右衛門佐

兼てより雲もかゝらて高砂の松の上こす月そさやけき

左松のひまなくは月を猶そ待ましと侍るこそ。雲なとのひきおほひたるやうに。光もれす侍らんことは。いかなるしけき松原なりとも。有かたくや侍らん。和歌の利口はさることにて。枕のしたに海はあれとなとやうにはよむことなれと。これは其類ひにもあらす。なか〳〵なる事とこそ見え侍れ。詠やるもふるき姿とはみえす。右まつのうへこす月そさやけき。こと葉つかひいひしりて。すかたをよひかたくこそ見給れ。たゝし續後撰歌に。今宵とやかねてあらしのはらふらむ空にくまなき山のはの月。此こゝろにやかよひ侍らん。かやうなることは。先をとり後をすつる習ひにて侍れは。しかもかねてより。雲もかゝらての。ての字もみゝにたち侍らんかし。六百番歌合にも。五條三位入道判に。つれなさも戀る憂身も年をへて心なかさはかはらさりけり。兩所のさの字いかにそ聞ゆと難して侍り。左右ともに。同し文字あまた侍れは。たゝ持なと申へきにや。

十四番

左勝　　女房

みね高き松のひゝきも空すみて嵐の上に月そなり行

右　　親長

山の端の雲をはらふ松風のおなし梢にさはる月影

左歌嶺頭之松響交ニ擲金之聲一。嵐上之桂影添ニ寒玉之光一。誠是爲ニ秀逸一。誰不ニ賞翫一。右歌近代雖レ無ニ其沙汰一。はの字有レ四歟。已彼侵ニ鶴膝一。爭令ニ雌伏一乎。

十五番　　月照籬菊

左持　　法印道雲

呉竹の籬のきくに月さえておなし千年の露や見ゆらん

右　　則任

もろともに千代をかねてや白菊の咲る籬に月の澄らん

おなしちとせは。呉竹のよせもおかしくこそ侍れと。題の四字や。露の上句につくされて侍らむ。籬にすむ月。ところわくへきにはあらぬことなれと。海のほとりの水のうへよりは。みところせはくやとて。爲レ持。

十六番

左勝　　隆博朝臣

わきかねつ色も光もしら菊のおなし籬に月をやとして

右　　則雅

白妙の色もひとつに月さえて籬の菊よえこそ分れね

左おなし文字あまた侍れとも。右下句。歌合歌共見え侍らねは。以レ左爲レ勝。

十七番

左持　　教顯

咲初る籬のきくの花の色にまかひてすめる秋の夜の月

右　　行實

さく菊も時こそ有けれ月影のやとる籬に色のまされは

左歌文字滿ニ遍身一。剰侵ニ鶴膝一。右歌下句有ニ厭黑子一。又痛ニ蜂腰一。云レ是云レ彼。不レ可レ不レ難歟。仍以爲レ持。

十八番

左　　重經

うつり行籬のきくの霜のうへにかさねてさゆるよはの月影

右　親長

えそわかぬ花かあらぬか白菊の籬にうつる夜半の月影

左偏忘ニ月照之秋一。似レ賞ニ霜冴之冬一歟。右花かあらぬか白菊のといへるわたり。菊をうたかひたるとや申へからむ。かのふきあけにたてるしら菊とて。花かあらぬとは。波のよするにまかへてこそ。めてたくは聞ゆることになん侍ける。古も。本歌あしくとりなして。難せられたる事おほかるへし。いはゆる寛治八年高陽院歌合匡房卿あさくら山の詠。建久四年六百番歌合。寂蓮風のやとりの歌。これら共難判詞にみえたり。此外公私歌合。此難不レ可レ勝レ計ことなく侍れは。さのみはしるし申さるものなり。今の御歌合。思ニ雨度之例一。爲ニ詠歌一者雖ニ環瑾一。爲ニ宴會一者可レ爲ニ珍重一者歟。

十九番

左　邦長

白菊の籬にかきる秋の色に光を花と月そともなふ

右勝　顯綱

さえわたる月にうつろふ色見えて露のまかきに匂ふ白菊

左光を花といふ句は。古今集の歌なれは。人ことによみあへる事なれと。弘長三年九月十三夜内裏御會に。あひにあひて秋の籬にてる月の光をはなと咲るしら菊と申歌侍り。今歌。棄レ本逐レ末とや見え侍らん。本歌なれはとて。かやうにとり侍らんことは。さきのうたのためもよしなし。後の歌の爲も益あるへからす。新撰髄腦にも。人のよめる詞をふしとしたるはわろし。ひとふしもめつらしき詞をよみ出んとおもふへしとそ侍るめる。右はとかく申へき事も侍らぬやらんとて。勝とさためまうすものなり。

廿番

左勝　女房

今よりは千年やすまむ月影も籬の菊の露にちきりて

右　左衛門督

是のみやおいせぬ月の影ならん籬のきくに秋を契りて

左歌。兎影契ニ千秋之霞一。右歌。女花約ニ不老之月一。共以難レ宜。右同字有レ出。歌合之席多詠レ之爲レ負。合點之時不レ憚レ之付レ墨者歟。

廿一番

左勝　三位中將

さえまさる霜を重ねて白菊の籬をみかくよはの月影

右　安嘉門院右衛門佐

色まかふ月もひとつにわきかねて籬をたとる霜の白菊

まへのまかきは月にみかゝれて顯れ。うしろの籬は霜にうつもれてかくれにけり。おほつかなき所侍らねは。以レ左爲レ勝。此番如レ此加ニ添判一之處迎レ期。右歌清書之誤也。籬をたとると云々。有レ例者可レ直之由被レ仰。就レ之粗勘ニ先規一。天德四年内裏歌合。むはたまのよるの夢たにまさしくは我おもふことをひとにみせはや。判詞云。右歌むはたまとかけり。よるといふことは。ぬはたまとそ書かし。歌はおなしやうなれと。かきあやまりたるなめれは。そのよしを奏申せは。あやまりあらんはいかてと仰あれは。以レ左爲レ勝。千五百番歌合。きえなくにまたや都をうつむらん　わかな摘野もあはゆきそ降。

粟田口入道大納言判に。すかたよろしきを。又や都をうつむらんといへる。野よりもみやこには。雪のふかゝるへきやうにきこゆるにや。持たるへし。これは。またやみやまとよめる。まの字書誤なり。同歌合。あいなくもしくれのおとのつらき哉まつ人の來ぬよはの寢覺に。顯昭判に。初句のあひなくもと侍。おほつかなく侍り。つねにはあやなくもとこそよみはへれ。もしひかゝきにや侍らん。右のうたさせる難はへらす。されと左のかきたかへをうけ給りて。勝負は申へく侍り。僻書をさゝへてまくへしとうたへ申ことは。左右ゐわかれて勝負をあらそふ時の事に侍り。此外京極御息所歌合已下。古今之例雖レ多。悉不レ載レ之。凡清書之誤。先例不レ過二一字一。合今度如レ改二一句一。然而爭以二執筆之差一不レ直二詠歌之四字一哉。雖顯露被レ用二顯昭之判一。菊花霜彌叶二花麗之躰一者歟。

廿二番

左勝　庭月聞虫　隆博朝臣

君そ見む千世まつ虫のねにたてゝ秋をかきらぬ宿の月影

右　左衛門督

松虫のこゑも淋しき古里の艸にやつるゝ庭のつきかけ

左松虫のねの秋をかきらぬさまにそ聞なされ侍れと。それしもちとせの宿の久しかるへきことはりかなひてこそ侍れ。右新古今草にやつるゝ古里の月にことならすやとて。しりそけ侍へくや。

廿三番

左　教顯

裏にもたれまつ虫か故郷の淋しき月にねを盡すらん

右勝　安嘉門院右衛門佐

暮るよは淺茅かにはの月ならて又松虫よたれたのむらん

左歌は。ふるさとをのみおもひやりて。月もみす虫も聞ぬさまなるにや。右は。ひとをそたのむ暮る夜ことにと申歌。近年殊繁昌したる本歌にて。是をへつらはれたるにやとそ。みたまふれと。庭もたしかに侍れは。まさり侍へくや。

廿四番

左持　重經

月そ猶つゆのよすかも尋ねける蓬か庭のまつ虫のこゑ

右　行實

淺茅ふの庭の月かけいたつらにたのめぬ人をまつ虫そ鳴

新古今。しめ置ていまやとおもふ秋山の蓬かもとに松むしのなく。新勅撰。かれはてゝ後はなにせん淺茅ふに秋こそ人をまつ虫の聲。たゝこれらにこそ侍れは。左右とかく非レ可レ申歟。

廿五番

左持　邦長

露深きにはの草葉のむしの音を尋かほなる月の影哉

右　親長

月も又すみけるものを淺茅ふのやとのあるしと虫の鳴らん

いつれもこゝろあるさまにやとて。爲レ持。

廿六番

左持　女房

人はこす月はかりすむ蓬生のもとのこゝろにまつ虫の聲

右　則任

あと絶るよもきか庭の月影につれなく誰をまつ虫の聲

左右の松虫。こなたかなたの蓬生。もとのこゝろふかくこそ侍れと。つれなく誰をといへるわたりも。我こそとはめとわけかたく侍れは。暫持と申侍らん。

廿七番

左持　三位中將

露さむき庭のあさちの月影に稍よはり行松虫のこゑ

右　則雅

月影はあさちの霜と見えなから鳴音よはらぬ庭の松虫

此まつ虫のねこそ。よはらねはとてもまさらす。よはれとてもおとらすや聞え侍らん。

廿八番

左勝　法印道雲

虫の音のをりみたりたる聲のあやきてそみるへき古里の月

右　顯綱

庭の面にたれまつ虫のねをたてゝよすから月に鳴あかすらん

左ゆゝしくふるまはられたるこゝちにこそ侍らめ。たたし。こゑのあやをきてそみるへきとては。いまた故郷にもかへらさるにや。このあやに綿を重ねきても。夜行ことそ。月を見むためなりとも。かひなくや侍らん。ちからあるさまなれは。題のこゝろをも忘てそ。かち侍へきやらん。

廿九番　旅雁叫月

左勝　教顯

なにことのつらさしれとて初雁の月にはいたくねのみ鳴らん

右　則雅

さらしなの山とひこゆる鴈かねも慰めかねて月に鳴らし

さらしなのなくさめかたき。例の事とみえて。めつらしからすや。はてには。鴈さへなくさめかたく月に鳴侍にこそ。いきとしいけるものゝ心は。みなひとつなるゆへにやと。あはれにこそ侍れ。左はなにとなくいうなるさまにいひくたされて。勝り侍へし。

卅番

左勝　重經

あくかるゝ心を月にたくへてやうはの空なる初鴈のこゑ

右　安嘉門院右衛門佐

旅の空月寒き夜のあきかせに浮立雲の衣かりかね

右歌月の寒きに雲の衣かりかねおかしさに。月の曇らんこともおほえさりけるにやとおかしく。歌の風情つつましかりけるかなとみえ侍にや。但弘長三年内裏十首に。月前鴈。前大納言爲　天の原とわたる夜半の月影に秋かせさむし衣かりかね。此歌にや。雲の外はたかはす侍らん。左歌は。うはの空なるはつ鴈。聞なれたるさまにて。同類もやおほつかなくはへれとも。昨日のこと。けふはわすれ侍る老の心によろしくやとて。しはらく勝と申へし。

卅一番

左勝　邦長

月影はおなし雲井のなか空に越路へたてゝ鴈は鳴也

右　則任

今宵とてなれもねられぬ月影にさそはれぬとや鴈の鳴らん

右歌なれとは誰ことにか侍らん。おほつかなくこそ侍れ。しかも。寝られぬさそはれぬの。れぬ〳〵。いうにも聞え侍らぬにや。左よろしきにはあらねとも。勝侍へくや。

卅二番

左持　女房

萩原やをく露みかく月影に涙あらはす初かりのこゑ

右　行實

忘れすもおもひこしちの空にみし月とや今も鴈の鳴らん

右歌越路にこそとはみたまふれと。おもひこしちとそへられては。空に見しのしの字重りて聞ゆるにや。左下句はおかしとも申侍ぬへけれと。叫月心や。とたからんとて。爲レ持。

卅三番

左持　三位中將

秋の夜の更ゆく空に初鴈のなくねもすみて月そさやけき

右　左衞門督

初鴈のなきて過行天の戸にあけかたちかくすめる月影

明かた近き詞は。ちかき世の歌に數多見え侍る事なれと。更ゆく空。すきゆく。たゝおなしほとのことにや。

卅四番

左勝　法印道雲

月影も淋しき秋の宿からや物うかるねに鴈もなくなり

右　親長

秋といへは雲井の鴈やさそふらん都わすれぬ初鴈のこゑ

右歌に。雲井の鴈。またはつかりのとはへるにや。朗詠の詩に。雨三行鴈點レ雲秋。後撰歌には。行かへりこゝもかしこもたひなれや來る秋ことにかり〳〵となく。和漢の才をもとゝして。詠吟の興をますものにや。新撰髓腦にも。ことさらとりかへしてよみ。所々におほくよめるは。さるやうなりとしるせり。作者の存知。これらにこそ侍らめと。みなおしはかられ侍れとも。月の見えす侍れはにや。そのこゝろもいとくらくまよはれてはへりける。しかも下の句は。後京極殿御詠にて侍るなり。左歌は。さひしなからも月秋はへるうへに。春鶯音たそへて秋鴈ちからをいれたりと聞えはへれは。まさるへくや。

三十五番

左勝　隆博朝臣

何と又鳴てはつくる鴈金そ秋とは月の影も見ゆるを

右　顯綱

鴈かねのおのかはかせに雲はれて月すみのほるよはの空哉

左歌は。かりこそなきて秋とつらなれと申ふることを。かやうにとりなされては。めつらしくやきこえ侍らん。右歌は。續後撰に。雲ゐとふかりの羽風に月さえてとはたのさとに衣うつなりと申。後鳥羽院御製之上句となりて見え侍れは。つくるみゆるのるの字なきにはおとり侍れと。左なをまさり侍へし。

卅六番　月下擣衣

左持　重經

なかき夜の夢路ゆるさぬ月影に誰いねかての衣うつらん

右　則任

里わかすはや夜さむなるつきかけにたれ寢かての衣うつ覽
兩首下句おなしく侍る。しゐて可ㇾ勝負ㇾあるへからすや。

卅七番

左持　邦長

月影のはるかにすめる遠方のはにふのこやに衣うつなり

右　則任

かくはかりくまなき月に誰か又心ははれす衣うつらん

右くまなき月を見て。誰か心はれす衣うつらんと思ひやり侍らんこと。かならすさるへきゆへの侍らさらんには。よしなきをしはかりことにやはへらん。左上句にはるかにすめるとて。遠かたとあるや。文字はかはりて侍れと。おなし心のやまひと申たるに。かやうなるにや。元永元年法性寺殿歌合に。露霜のあかつきをきの鶉ことにといふ歌をは。基俊判に。二重言なりとなむして侍にこそ。曉と朝とは。時分さすかへたゝりて侍るすら。かく難せり。はるかにすめるをちかたはは見渡れて。おなし心かくれもなくやとて。爲ㇾ持。

卅八番

左　女房

今こんと契りし秋の月影に思ひいてゝや衣うつらん

右　顯綱

里ことに夜寒の衣うつほとは月見よとてや驚かすらん

左歌は。いひしはかりに長月の面影おもひいてられて。いとよろしく優なるへし。右は新古今に。なかめよとてのすさひかなあさのさ衣月にうつこゑとある。心こと葉ひとしくこそ。ひかことにあらすとも。左には

此間闕

右　左衞門督

賤のめか寐のさ衣よをかさねねられぬ床の月にうつなり

右續後撰。ねさめのとこに衣うつらんと侍れは。おなしことにやとて。左勝侍へし。

四十三番　寄月忍戀

左　邦長

ちらすなよまたしる人もなきわふる涙こととふ袖の月かけ

右勝　左衞門督

何と又なみたをつゝむ袖のうへにわきては月の影やとす覽

左はしのゝはくさをきゝ侍らん。さるこゝちし侍れは。わきては月の影は。袖にやとしても見まほしかるへし。

四十四番

左勝　女房

しのふれと猶せきかぬる涙かな物やおもふと月やとるまて

右　親長

涙しる袖の月影こととはゝなきなそとたにえやはこたへん

右歌の上下。初の句おなしく侍るは。天徳歌合にもきたあり。千五百番歌合。俊成卿判。上下句のはしめの字おなしく侍り。これは例として深き難にはあらねと。すこしの勝劣をもとむる時は。咎にやとて負侍りけりと。左に此難はへらねは。爲ㇾ勝。

四十五番

左勝　　三位中將

袖のうへの涙にやとす影そとも人こそしらね秋の夜の月

右　　行實

月影はくもらぬよはも忍てふ心のくまに人をこふらん

右歌は。古今誹諧うたに。おもふてふ人のこゝろのくまことにたちかくれつゝみるよしもかなとあるをおもひて。忍てふととりなされたるは。さることとみえ侍れと。いうなる歌を本として讀へきことにや。大かた心のくまと申歌は。ものにも多くは見え侍らぬにや。後撰に人はかる心のくまはきたなくてとあるも。撰集歌に。（本ノマヽ）人なれはとてかす／＼に秀逸なることは。昔もいまもなき事なり。本歌をは。よく／＼おもひはからひてとるへき事となん。先達も申をきてはへる。左は人こそしらね秋の夜の月。いうなる風情。はるかにまさりて見え侍なり。

四十六番

左勝　　法印道雲

ひとしれす忍ふ心のしつく山わくる袂に月そうつろふ

右　　安嘉門院右衞門佐

もりやせん雲間はるかに見し月の面影つゝむ袖の涙も

左歌人しれすしのふと。さては題の心あらはにはへり。その殘そ山路月なと申さん題にや。よろしき歌にても侍へからん。公任卿のかきたるものにも。はしめにおもふことを顯したるは。わろき事になんするとそ見えたる。今のうた。初の八字より外には。題をえたりともみえぬにや。右の面影つゝむ。又いかにと心うへきにか。おもかけと申ものは。心にうかひて身をさらす。いかなる人の中にても。あやめらるへきことにはあらぬものなり。もりやせんと侍る初句より。いうなることとは。ありかたくや。袖の涙のふかき心しのはれて。しらぬことになん侍れは。猶上歌の忍戀。さりとては勝へくや。

四十七番

左　　隆博朝臣

月はよも人にかたみし今宵たゝゆるしやせまし袖の涙を

右勝　　則任

顯れはいかにせよとて袖のうへ涙に月の影やとすらん

左はおかしきさまには聞え侍れと。月はよも。今宵たゝなと申こと葉は。うるはしきかたちにはあらすや。右は艶なるすかた勝り侍らんかし。

四十八番

左持　　教顯

顯れん涙もつらし我そてにくもらぬ月に何やとるらん

右　　顯綱

忍へともかひこそなけれ袖のうへの涙あらはに宿る月影[に歟]

左右ことなる事は見え侍らねと。くもらぬ月にのよの字すへかねてきこえ侍らん。さても持にて侍らん。うらみなかるへし。

四十九番

左　　重經

せきかへす涙たつぬる袖のうへの月の行ゑを知る人もなし

右勝　　則雅

よな／＼にやとかる月も心せよひとにはつゝむ袖の涙そ

左涙たつぬるとは侍れと。露をたつぬる面影し侍にや。右のなみたぞ勝侍らん。

五十番　寄月忘戀

左勝　女房

うき人のこゝろの色のたくひかな涙にかはる夜半の月影

右　左衞門督

たえはつる契そつらきうき人の面影とめし月を見るにも

兩方厭人。在レ左則左重。在レ右側右重。但尙思レ留レ影之句。不レ及レ替レ涙之詞。仍以爲レ勝。

五十一番

左持　三位中將

待なれし契はかはるよな／＼の月のみおなし影をみる哉

右　則任

更ゆくも契し夜はのならひとやよそなる月を猶したふらん

左右共以宜。優劣不レ可レ論歟。

五十二番

左勝　法印道雲

忘られし人のつらさも今更におもかけさらぬ秋の夜の月

右　則任

わすられは忘れなましをうき人の面影のこる月そ悲しき

右歌 君わすれすは我も忘れしと申歌を。おかしうこそ引なをされたれ。左歌上下の句すくらかに聞え侍れと。わか人をわすれたらんも。ちからなきことには侍れと。うちまかせぬやうにやとて。馬内侍かむかしも おもひいてられて。尤可レ爲レ勝。

五十三番

左持　隆博朝臣

いつまてか待夜かはらぬ契とて心も通ふ月をみつらん

右　親長

あかさりし有明の月の形見さへそをたに後と云かひもなし

左歌上下の句におなし心やかよひ侍らん。右歌文藻之趣岸樹之病やおかせる。歌さまともによろしく見え侍れは。爲レ持。

五十四番

左持　敎顯

今はたゝ契しよはの月のみや面影かよふかたみ成らん

右　行實

うたてけに人こそうとくなりにけれ見し夜の月の影は替らて

兩方初句。こゝろにくきすかたにはあらねと。末さまあしからす侍れは。爲レ持。

五十五番

左勝　重經

今もなを忘れぬ月の影そとふ馴しは袖のむかしなれ共

右　顯綱

うき人の契はよそになりぬとも今宵はおなし月やみるらん

右歌。續後撰洞院攝政殿御歌に。心こそ契しまゝにかはるともおなし空なる月やみるらんと侍るにことならすや。左腰つきにほひなくやと見え侍れと。勝こそし侍らめ。

五十六番

左勝　邦長

馴し夜のおなし涙の月みてもあらぬかとのみ身をたとる哉

右　安嘉門院右衞門佐

かたみとてうつろふ月もたのまれす忘る草ののきの下草

左歌存ニ題心一得ニ歌躰一。雖レ思ニ小町之古風一而非下無ニ氣力一者上歟。右歌わするゝ草ののきの下草。こはしのふにやあらんとたのまれぬへくは侍れと。なをおほつかなく。あらぬかとのみたとられて。左勝る。

五十七番　月前感思

左勝　三位中將

秋の夜の月よいかなる契にてさのみもあかぬ影をそふらん

右　行　實

自から身のうきことも忘られてあかす幾夜か月をみるらん

右上句つねに見なれたるこゝちし侍り。左さのみもあかぬかけは。いく夜の月にや勝り侍らん。

五十八番

左勝　法印道雲

老ぬれは月みるまてもうき物と思ひしらする我涙かな

右　則　任

みるまゝにいとゝ心もすむ月の更ゆくかけや哀そふらん

右歌千歲集に。あかていらん名殘をいとゝ思へはやかたふくまゝにすめる月かなにことならすや。まゝいとゝの詞さへあらはに聞えて。更ゆくは。かたふくおなしことにこそ侍めれ。本歌は。ときをとり長きをのそくへきとそうけ給る。左老ぬれはとあるより心ひかれて。思ひしらるゝなみたにそ。勝の字をつけまほしく侍る。

五十九番

左持　隆博朝臣

あかす見る心はかりにさよふけて浮世忘るゝ月の影哉

右　安嘉門院右衞門佐

みるほとは世をうき雲もあとたえて月を隔てすすむ心かな

左は世をわするゝ月の影さやかに。右はよをうき雲のあとたえて。かれはこと葉すなをに。これはこゝろふかし。宜レ爲レ持。

六十番

左　敎　顯

心さへすみこそまされ秋の夜の月を哀とひとりなかめて

右勝　左衞門督

うきこともなくさむ月の影にたになとかきくらす涙なる覽

左歌光明峯寺入道殿下御詠に。なかめつゝ月をあはれといみかねてひとりおきゐる床のさむしろ。かくなん侍れは。月を哀と申詞。後撰拾遺よりいてたる事なれは。いくたひもとりもちゐ侍らんも咎なし。ひとりなかめつゝなとにかよひ侍なんは。彼御詠をおかせるなるへし。右なとかきくらす泪。なにとなくえんなるさまに聞侍れは。爲レ勝。

六十一番

左持　重　經

秋のよのなかきおもひに夢たえて涙もよほす月の影哉

右　顯　綱

いかなれはをのか物から涙たに月みるたひに袖ぬらすらん

なみたもよほす秋の夜の月といふ當世の歌の侍れさ。右の袖ぬらすらんも。されはとて。まさらんことかたくや。

六十二番

左持　邦長

さそはるゝ心は四方にあくかれぬ空すむ月の影にまかせて

右　親長

終夜くまなき月になかめして身のことはりも思ひ殘さす

いつれと申かたく侍り。

六十三番

左　女房

詠めつゝ月にそしのふいにしへのよゝの秋迄思ひつゝけて

右勝　則雅

徒に月をあはれとなかめ來てみそちの秋そ身に積ぬる

左歌に。重點のみところまて侍にや。これは難としたるたひもみえ侍ることなれは。右歌いたつらにみそちをゝくられにけれと。無病なるにつきて可ㇾ爲ㇾ勝歟。

六十四番　月前祝言

左持　法印道雲

三笠山君かさかゆく秋そとは月の光そさしてみえぬる

右　顯綱

いく千代も君か世てらせさしのほる三笠の山の秋の夜の月

左歌に秋そとて光そと侍る。その字は難にや侍らん。嘉應二年住吉社歌合に。難波かた芦のまろやのたひねにはしくれは軒のしつくにそしる。俊成卿判に。たひねにはとをきて。又しくれはといへる。はの字や二なれは。耳にとまりて聞ゆらんと難して侍れは。今のその字これにあたれり。右歌さしのほるみかさの山の月。まことにきよけに。光あまねく世をてらせるさま。をよひかたかるへしといへとも。いく千代といひて君か代とあるわたり。おほつかなくて。古き歌合ともをひき見侍れは。建仁元年石淸水歌合に。すむ月に神もひかりをやはらけていくよかともに世をてらすらむ。土御門内大臣判に。いくよの世。世をてらす。おなしこゝろにや。千五百番歌合。君か代をなか井の浦にゐる鶴のよろつ代まてと聲きこゆなり。師光入道判に。よろしくは侍れと。君か代萬代いかゝ侍へからん。建保二年内裏歌合。千代のかけ久しかれとそ松か枝になを吹むすへみよの秋かせ。定家卿判に。千代のかけ。みよの秋風。いはひの歌には。世の字あまたよめるためしは侍れとも。猶その難なき右の歌。勝侍へし。これらの難につきては。右上の句。いかゝ侍へからん。左歌その字又ゆるされかたくや。なすらへて爲ㇾ持。

六十五番

左勝　隆博朝臣

つもるとも老とはならて君か代に絶すそ秋の月は見るへき

右　行實

くもりなき御代とはしるし久堅のよるひるわかぬ月の光に

右歌おほきなる不審とも侍かな。まつ久かたのよるとつけられて侍る。定てゆへ社は侍らめとも。八十八物異名にも。久かたをは月と申たり。又空も申たる事も侍れと。いまたよるとかきたる物をこそ見及はへらぬは。つつのあなのせはきかゆへなるへし。せめての事に。範永朝臣か。みしよりもあれそしにける石上秋はしくれの降まさりつゝと詠たるは。いそのかみふるといはんとて

の中に。秋はしくれとこめたるは。なとや作者の存知侍らん。まことにあらぬにはあらねとも。今の歌。月をいはんために。よるひるをこめて詠侍らんことは。時雨にはかなはすや侍へき。日不ㇾ知ㇾ夜月不ㇾ知ㇾ晝とこそ。本文にも侍なれ。晝夜をわかたさらんも。かへりてよしなくや。長元八年宇治殿歌合には。君か代はしら雲かゝるつくはねの峯のつゝきの海となるまてとある歌をは。輔親卿判に。海は山になり山も海にならはあしかりなん。海はうみ山は山にてあらんこそよからめ。いま〳〵しとて。其歌まけけるかことく。此月よるひるわかさらんも。いかゝとそおもひ給ふる。左は順徳院御製。今宵そ秋の月は見るへきさ串下句十四字の中。十一字をおかされたるやいかゝと見給れと。右にまさるへきてうは。うたかふへからすこそ侍らめ。

六十六番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　教顯

みかさ山さやかにすめる月影に君かちとせを猶いのる哉

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　親長

かすか山むかしのあとにすむ月は今ゆく末の影もかはらし

千年をいのりて。すゑもかはらさらんことはおなしかるへけれは。持とす。

六十七番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　重經

ゆくすゑを兼てや月もてらすらんはこやの山の萬代のかけ

右勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　則任

三笠山ふりさけ見れは明らけき御代そしらるゝ秋の夜の月

左歌は寳治元年仙洞五首に。月契千秋。故入道太相國。萬代と雲井をかけてちきるらしはこやの山の秋の夜の月。よろつ世のかけも秋のよの月にこそ侍らめ。右歌みかさ山ふりさけ見れはも。いまは目なれたるにや。新撰髓腦には。こはくいやしき詞は。よくはからひて讀へしと。をきておかれたるにや。此歌。四條大納言遺誡をまもられすそ見え侍れと。勝侍へし。

六十八番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　邦長

春日山君のひかりをさしそへて曇らぬ月そ千代もすむへき

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　則雅

くもりなき春日の山の月にこそ榮行みよの光をもしれ

春日山の月の光。いつれもくもりなくみえ侍れは。可ㇾ爲ㇾ持。

六十九番

左勝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　女房

君か代にわかひかりそふ秋なれは思ふも久し月の行末

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　　安嘉門院右衞門佐

みかさ山のとけき月はいく秋とさしてかきらぬ萬代のかけ

左歌君か世に我ひかりそふと侍より。姿雖ニ凡俗一調入ニ幽玄一。作者不ㇾ被ㇾ仕〔注歟〕者不ㇾ知ニ誰人之所詠一。若類ニ能因黑髮之古詞一者。可ㇾ爲ニ老身丹心之備案一者歟。右みかさ山のさして。例の事ときこゆ。勝負可ㇾ謂ニ雲泥一者歟。

七十番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三位中將〔世カ〕

曇りなく影すみわたる月をみてあきらけきそ空にしらるゝ

左衛門督

右勝

今も又みちある御代の月なれはよもの海にも影そのとけき

右歌。見₂有道之月影₁知₂四海之淸靜₁。雅頌之躰感歎可ㇾ足。左くもりなきかけ。あきらけき世。重₂得偶言₁招₂(本ノマヽ)舊難₁者歟。仍以ㇾ右爲ㇾ勝。

抑みかさ山のあらしの聲。よろつ世をつたふ。八十宇治川のなみの色。千とせにすめり。今わかすへらきのみことのりにかはりて。國をおさめ政をしく事わさ。よろつにしけしといへとも。いにしへをもわすれし。今もみそなはせ給はむとて。歌合のことあり。これは。狂言綺語の戯たるのみにもあらす。彼長保大治の跡を尋ねて。透(秀歟)逸を七そちの番に結ひ。評判を七そちの老にせよとなり。身にのそめては面目たり。世にかけては嘲哢なるへし。すへからくわかつかきりにあらされは。のかれ申へしといへとも。道にふけるおもひ。老の今にたえすして。なましゐにかきつくものなり。あまさへしかまのかちまけを定め侍るらへに。難波のあしよしをわかちて。點をあふへきよし聞え侍れは。いなみ野のいなみかたき許に。須磨の浦のすまひたてまつらす。珠玉之篇をむなしくせは。鴻鶴の飛さるにひとしからん。磧礫之詞をよろしともせは。駢龍のわたかまるところをしらぬうらみふかゝるへし。作者あらはされ侍らねは。すゝめんとてもほめす。しりそけんとてもそしらす。たゝ故をたつねて新にならふれは。をのつからとして筆をくたすにわたくしなき所は顯れ侍らん。此事をうけ給はりて。徒につもれるひかすをかそふれは。二の六にそなりにける。はやくせんとすれとも老はねふりをあいし。いそかんとすれとも身は病にまとはり。巧にしてほそきにもあらす。拙してすみやかなるにもあらされは。おこたるところ。いよ〳〵おそるゝにのかれかたき物をや。

〔眞　觀〕

右建治元年攝政家月十首歌合以或家藏秘本挍合書寫了雖有誤字依無類本暫隨原本

正應二年卅番歌合

一番　月前露

左持　女　房伏見院

袖をうすみ露置とをす心ちして月も身にしむ曉の床

右　中　將

竹の葉に露白きよの月の色に物寒くなる秋そ悲しき

左の御歌は。道信朝臣の。秋はつる小夜更かたの月見れは袖も殘らす露そ置そふ　とよめる景氣を取て。露置透すと讀せ給ふ事。打聞より身にしむはかり侍るを。右歌も竹の葉の露しろき夜の月の色に。いとゞ秋のかなしさも。あはれさもたゞならす。烟葉淸冷月華凝と賦か作れる詩の心も。何となくおもひ出られて。えならぬ御作意。ふかく聞え侍れは。いつれをそれと申わけけん事もかたくて。持と定め侍らんか。

二番

左　藤原大納言典侍（本ノマヽ）

庭もせの露のみ月にしらみあひて千種の色はいつれ共なし

右勝　從三位親子

風にもろき荻の上葉の露深み月敷庭の秋そ淋しき

左歌　露のみ月にといひて。千種の色はいつれともなしとよめるや。あなかちに題をのみせんとしたるやうなれとも。さして其興もなく聞え侍る。定家卿の歌に。今いく日秋もあらしの横雲にいつれかしらむ山の端の月と讀ること葉を。しらみあひなといひかへられたるにや。右の歌は上下よく打あひて。月しく庭なともおかしくいひかなへたる姿なれは。荻の上葉の露いとおもしろくをきまさりたる心地して。右の勝になし侍る。

三番

左持　延政門院新大納言

雨の後軒端の月の影さして露をつらぬく蛛の糸すち

右　從一位藤原朝臣教良女

光そふ艸葉の露に月をみてひとり心のゆかぬ夜そなき

左の歌古今集の。秋の野にをくしら露はたまなれやつらぬきかくる蛛の糸筋とある詞をとりて。月華綱在二蛛糸上一と侍る沈庸齋か秋の詞の心まて。よくおもひとられて侍る。右の歌も。艸葉の露に月の光をそへて。秋のよな／＼こゝろゆくかきり打詠むる意を。下の句によくいひおほせられて侍れは。軒端の月。艸葉の露。折ふれ時にしたかひ。その興さま／＼なるへけれは。ましおとりをわけかねて侍るまゝ。持と申へし。

四番

左持　永福門院内侍

さえ白き竹のよふかき露の上に月も身にしむ色そ寒けき

右　左近衞中將藤原朝臣家親

影やとす露はそれとも見えわかて月の色なる艸の上かな

左の歌は。式子内親王の。小莚に夜半の衣手さえ／＼て初雪しろし岡のへのまつと侍るをおもひ出られ。竹の葉に映せる月の寒けさもさこそ侍らめと。五文字のさえ白き。少し荒凉の詞と耳にたつまて侍る。右の歌月の色なる草とは。露のあはれをいひたてむとてのあまりに露なきにや。仍爲レ持。

五番

左勝　　従二位藤原朝臣兼行

宵のまに見えぬ草葉も顯れて露さやかなる庭の月影

右　　九條左大臣女

なく露の月の光にみかゝれて玉敷わたす淺茅生の庭

左の歌みえぬ草葉も月に顯れて。露さやかなるとよめる。前の番の歌にかはりて。是そ意こと葉題に能かなひ侍る。右の歌。月の光にみかゝれて玉敷わたすなと。露の光一曲あるやうに侍れ共。歌合の例として。詞なたらかに心ふかさ(き歟)をとる所なれは。左のかちたるへきか。

六番

左　　左近衛中將藤原朝臣俊兼

淺茅生の露のやとりも靜にて更たる色にすめる月影

右勝　　新宰相

露はらふ風は淺茅に音つれて月のみ空に雲そ行かふ

左のうた。心のまゝに置あまる淺茅か宿の白露に。物しつかなる夕暮。月も澄のほりたる躰。誠は(に歟)幽玄に侍れとも。更たるといふ腰の句。いかにそやきゝつかす侍るを。右歌つゆはらふ秋かせのそよ／＼と音つれわたるより。うちあふき見れは。月のみ空は。雲の行來もはやく晴曇る躰。かの漢武帝の秋風辭に。秋風起白雲飛と侍るけはひに。秋天の氣象おもひ入ふかく侍れは。右の勝にこそはならめとこそ。

七番　　暮天鴈

左持　　俊兼朝臣

色薄き夕日のきはに飛鴈の翅さひしき遠方の空

右　　新宰相

霧籠ていとゝゆふへの色深み行鴈かねはかつ消ぬなり

左の歌夕日の際。飛かりの翅淋しきなと侍るは。彼清少納言か枕草子に。夕日はなやかにさして。山きはいとちかくなりたるに。鴈なとのつらねたるか。いとちいさく見えて飛ゆくなと。いとおかしとなん。唐の于革か兩三銜鴈夕陽邊なといふ心をとられたるにや。右の歌。霧引空の色ふかき夕。行鴈の翅もやかて消行ものから。雲外殘聲言外にあはれと聞え侍れは。右のうた。又負へきにも侍らす。引合て持となるへし。

八番

左持　　兼行卿

羽かはす夕の雲はかつ消て風に殘れる鴈のひとつら

右　　九條左大臣女

夕暮の雲は晴ぬる半天にまかふかたなく鴈そ過行

左の歌しら雲に羽うちかはし飛鴈のと云古今集のうたに。本つかれたりとみえなから。上句のつゝき如何。判者のならひ是を難す。しかれとも。下の句に鴈のひとつらと侍るうへ。さしておちとなるへきにもあらす。かゝる風躰もまた一の格法なれと。風に殘れる鴈。あまりいりほかにや。右の歌さして難なく侍れとも。あまり平懐躰にして。おかしきふしも侍らねは。なすらへて是も持なるへき歌ともなり。

九番

左勝　　内侍

はる〳〵と雲井に遠く鳴鴈の聲きく夕ひとり悲しき

右　家親朝臣

聞からに哀もまさる夕暮をおもひはしるや過る鴈かね

右の歌は。人はこて秋の氣色もふけぬるに哀にかりの音つれて行と。西上人のよめる類にや。愁を鴈にかこつ躰。尤あはれなれと。左の歌は。彼猿丸大夫か。奥山に紅葉ふみ分なく鹿の聲きく時そ秋はかなしきと侍る躰を。よく取なされて侍る。奥山の鹿の音に。今の雲井の鴈の聲も。おとるましき歌のさまなれは。尤左の勝になん。

十番

左　新大納言

いかにせよとしくるゝ雲の夕暮に猶色そへて過るかりかね

右勝　從一位藤原朝臣女

夕附日うつろふ雲に鴈鳴て心うきたつ秋かせの暮

左の歌さなきたに。雲打しくるゝ夕暮の空は。いと物わひしきに。いかにせよとて過るかりかねそと。打歎き侍るよしにや。されと。第四句の五文字何の色とも聞つかす侍る。右の歌夕附日の移ふ雲は色ふかく侍るに。まして秋風くれて鳴わたる鴈のこゑに。心もうきたつとにや。されは源氏物語にも。大和詞には秋の哀をとりたてて思へるとかけり。尤女は秋に心をよするものなれは。猶以右の歌は。作者にゆへつきて侍る上。爲レ勝。

十一番

左持　藤原大納言典侍

夕日はれ雲のひとむら靜にて空飛鴈の行衛をそみる

右　從三位親子

いつくよりうかれか來つる鴈かねよ雲も時雨る暮の詠に

右の歌いつくよりうかれて來つる鴈かねそ。雲も時雨る比。鴈も秋の哀にたへかねてやなと。おほとかに難もなき歌のさまなり。左は高岫留ニ殘照一歸鴻背ニ落霞一といふ詩の意か。又雲收行鴈顯なといふ類にもかよひて。吟詠よろし。右の雲もしくるゝなと。人丸の歌に秋されは鴈の羽風に霜ふりて寒きよな〳〵時雨さへふると侍るに。時節たかはす。彼も是も捨かたくて。持に申理り侍る。

十二番

左持　女房

越路より雲のいくへを分過て都はくれぬ天津鴈かね

右　中將

此ゆふへ花ちる萩に風寒し雲井のかりは鳴うかれつゝ

左の御歌。千五百番の歌合に。初鴈は越路の雲をわけ過てみやこの霧に今そ鳴なると。三宮のよみ給ひし面影あり。是は。越路の遠きによりて。暮に來たるとのこゝろにや。腰の末句如何にそや聞おほせす。右の歌難なく侍れとも。蜂腰の躰なれは。勝と申へきほとの歌にも侍らす。持とするより外の事なくや。

十三番　野暮秋

左勝　女房

野邊みれはちかくいぬへき秋なれや千艸の末も色さめぬらん

右　中將

なきからす虫のこゑのみ稀にして野へ靜なる秋の暮かた

左の御歌。ちかくいぬへき秋なと。ふるきこと葉をとりて。暮秋の心顯れ侍る。末の句も。凡人のよみつゝくへ、

きことに侍らす。拾遺集に。逢見てもなを慰ぬ心かなく夜を寢てかこひのさむへきと侍るより此かた。夢のことならてさむるといふこと葉はよみならはしたりと。先輩の歌仙申をかれしなり。それは戀のさむへきを。是は秋色さむるとにや。いとなひらかなる歌の躰なり。右又なきからすとは。寂蓮法師か歌にも。秋深き野への艸葉の色よりもなきからしたる虫の聲かなとよみ侍る。されと。是はこゑのみといひて。又まれにしてと侍る。詞のつゝきよろしくも侍らす。されは。左の御うたにならひては。花のかたはらのみ山木ともいふへきにや。

十四番

左持　藤原大納言典侍

とまらしと野原の色もかれそ行我身うき世に秋の暮方

右　從三位親子

野邊遠き尾花に風は吹みちて寒き夕日に秋そ暮行

左の歌秋をはうしと。野原の艸の述懐にや。右のうた。尾花に風の吹みちて寒き躰。させるふしもなし。めつらしからんとすれはこちたく。すなをならんとすれはおかしきふしなし。仍爲ㇾ持。

十五番

左　新大納言

咲分し花の名はなをしられけり秋の末野の霜かれの比

右勝　從一位藤原朝臣女

夕日影なひく尾花も末さひて野へのけしきに秋そ少なき

左の歌咲わけし花の名はなをしられけりと侍る。如何。聞おほせ侍らす。但古今集に。みとりなるひとつ艸とそ春はみし秋はいろ〳〵の花にそ有けるといふ歌より。よまれたると見えたり。猶といふ字は。うつろひちりて。かれしほむより。其草々もわきてしらるとにや。されと狹衣と申物語にも。霜かれはそこともみえす草のはら誰にとはまし道芝の露なとこそはへれ。霜かれのに草々の花。いかゝ。時節相違侍らんか。右の歌は。新古今集に。入日さす麓の尾はならちなひき。なといふにかよひやすく。すなをにして打聞よく侍れは。右の勝に定め侍る。

十六番

左勝　内侍

かれて行野への千草の色みれは秋もすくなき哀をそ思ふ

右　家親朝臣

冬枯のくさ木のけしきまて[本ノマヽ]しかなまた長月に野への淋しき

右の歌冬かれの草木の氣色。まちもしてかな。またしきに。なと野へのさひしきとかこつ躰にや。左の歌は。色かはる露をは袖に置まよひうらかれて行野への秋哉といふ歌ほとこそなからめ。心はおさ〳〵おとるましけれは。左のうたに。哀をふかくおもひそへ侍るまゝ。いよいよ勝の字を付侍る。

十七番

左勝　兼行卿

野へ遠き尾花かすへの夕日影さひたる色に秋そ暮ぬる

右　九條左大臣女

秋の色は有明の月に殘けり霜かれになる野への草村

左の歌。夕附日向の岡のうすもみちまたきさひしき秋

の色哉と。定家卿のよまれたるを。是は暮秋の題なれは。さひたる色に秋そくれぬると。おしつけていへる所尤にや。右の歌も。新古今に。長月もいく有明になりぬらん淺茅か霜のいとゝさえゆくとよめるたくひ成へし。されと夕日影のさひたる野への色には。尙をされ侍らん。仍左の勝とす。

十八番

左勝　俊兼朝臣

霜結ふ野へより秋やかへるらん淋しくかはる艸の色かな

右　新宰相

枯て行野へを哀となく虫よをのれも秋に殘しもせし

右のうた。かれゆく野邊のいろをあはれふ虫。をのれはた終には殘らしと侍るも。其心しか侍らん。寔に教悔の歌なり。左歌千五百番歌合に。起あかす秋の別の袖の露しもこそむすへ冬や來ぬらんと俊成卿もよめり。然るに霜むすふ野へより秋やかへるらんなとおかしく。露の霜に時をゆつりて。ゆく光陰のうつりかはるまて。哀深くおもひやられ侍るまゝ。又勝の字を。左に付申事になりぬ。

十九番　寄淚待戀

左　俊兼朝臣

待わふる淚のうちに詠なれていつも夕の空そかなしき

右勝　新宰相

今宵さへ來すなりぬよと思ひつゝけ泪ににほふ灯の色

左の歌待わふる夕のけしき。いつもさこそ侍らん。右のうた。さりともと賴むこゝろの今宵さへといふ。さへの字に顯れ侍るは殊勝の事也。匂ふといふこと葉。古き歌にも。枕言葉にも。多くみえ侍るめる。萬葉集には。朝日影にほへる山にてる月のなともよめる。しかるを泪に匂ふ灯の色と。古詞を用ひて。心をあたらしくする事。尤和歌の名譽たるへきよし。京極の黄門申をかれ侍る。とにかくに。右のうたはまさり侍るへけれは。勝と定め侍りぬ。

廿番

左　兼行卿

身になるゝ泪はかりをかことにて幾夕暮を待うれふらん

右勝　九條左大臣女

待とたに人にはいはて更る夜に泪あやしきかたしきの袖

左の歌は。袖に落くる泪はかりをいつもかことにて。幾夕くれを待過すとなん。いとあはれなるを。右の歌又めてたく幽玄に侍るめり。心にのみこめて人目をはゝかり。せきとむるなみたの心にあまりて。あやしくふり出る袖をひとりかたしく床のうへ。さこそひちまさり侍らん。仍勝なるへし。

廿一番

左勝　内侍

さはるらんゆへをたにいへ一筋につらき泪やさらは留ると

右　家親朝臣

待夜さへ猶なくさまて疑のこゝろにたえぬ泪落けり

左の歌待につらきうたてあり。せめてさはり有事のえさらぬよしをいへと。歎く心も哀に聞え侍る。右はうたかひのこゝろにたえぬせんかたなさに。泪のおつるよ

しをいへり。いつれも心をちゝにくたきて打佗たる中に。左はすなをにして。しかもやさしく理りにも侍れは。尤勝たるへし。

廿二番　左持　新大納言

待らかれ鐘のひゝきも更ぬるに泪の數を盡してそ聞

右　從一位藤原朝臣女

さりともと程も過ぬと思ふよりよはに泪そこほれ立ぬる

左鐘の響に數をつくしてなと。よくいひくさりたる歌なり。右又。待よはりたる泪のほとも。今はの時にこほれたちぬるや。実にせきとめ難く侍らん。左は詞のよせうるはしく。右は時を感して泪をそゝく心いたりてふかし。なすらへて持とすへし。

廿三番　左勝　藤原大納言典侍

待かほに人には見えしとはかりに泪の床にしほれてそぬる

右　從三位親子

さこそ又むなしからめと歎かれて更ぬ先より泪こほれぬ

右の歌あたに待明さんと。かねてなけかるゝなみたもろさ。あまりめゝしきにや。左は待とたに人にしられしと忍ふは戀の本意にて。おさふる泪の床に打しほれてぬる躰。さこそとおしはかられて。哀まさりはへるまゝ爲ㇾ勝。

廿四番　左持　女房

頼「む」下の心やよはるまつほともやゝ過ぬかに泪そほふる

右　中將

誰かきくや人をむなしく待なして泪に明る曉のかね

左の御歌。下待こゝろの頼さへよはりゆくにや。おほえす泪のせきとめ難きよし。いとせちなる心なり。そほふるといふ詞は。伊勢物語に出たるを。よくとり結はせ給ふ事。凡慮の外に侍る。萬葉集にも。いやひこのをのれ神さひあまひこのたな引日すら霰そほふると侍る。何れもふりまさる心にや。右のかたも。誰かきくやと疑ひて。人を空しく待なしては。泪にあくる曉の鐘を我のみこそと。身ひとつにおもふ戀路のわりなさも。いかて淺くは侍らん。仍持とこそなし侍らめ。

廿五番　寄夢絶戀

左　女房

をのつから思はぬ夢に入くとも面影絶てたとりもやすらん

右勝　中將

絶て我見ぬ人かなしおもひ寝の夢は心のけにゆかはこそ

左の御歌。我をおもふ人こそ面影にたつものなれ。自絶て我をおもはぬ人は。夢に入きてもその面影さたかなるましく。それかあらぬかとたとる計ならんと。うらみわひたる御作意にや。在五中將の。我を戀らし面影に見ゆ。又思ひあまり出にし玉のあるならんとよめり。式子内親王の歌も。夢にても見ゆらん物を歎つゝうちぬる宵の袖のけしきはとはへり。右の歌。夢は心のけにゆかはこそみめ。今はたえたる中なれは。夢にさへ見ぬ事を歎くにや。されはくしの詞に。夢にたも周公をみすと有。又文集の詩に。平生所ㇾ厚者昨夜夢見ㇾ之といへり。

いつれにつきても。夢は志氣のよる所よりみる事なりと。古人さたしをき侍る。しかるに。是は絕てから夢にも見ぬ中となるは悲しといへるにや。女の才には。かしこくもきとくにも侍れは。勝に申なしける。

廿六番

左持　藤原大納言典侍

おもへともはかなやされは見しまゝの夢や契の限なりける

右　從三位親子

はかなしと思ふ夢にそ殘りける絕ぬる後のひとのかたみは

左の歌　みしや夢のこと。其まゝはかなき契にたえはてたる事を歎き。右又。絕ぬる人の形見に。ありし夜の夢をなそらふ。兩首ともに可もなく不可もなしたゝ持となし侍らん。

廿七番

左勝　新大納言

それさへようつゝの情たえしより我思ひ寢の夢をたに見ぬ

右　從一位藤原朝臣女

夢こそは哀成上もあはれなれ又見るましき人のみゆれは

右の歌又みるましき人の夢なれはこそみゆるよと。はかなき筋にいひくさり侍れと。あまりうちひらめたる歌なり。左のうたは。うつゝの情たえぬれは夢のそれさへ見えぬよし。すなをにして難もなく侍れは。勝に定む。

廿八番

左持　內侍

今さへにいそく關こそ哀なれ夢にき（本ノマヽ）とも見はやと思へは

右　家親朝臣

かはりぬる契なれとも思ひねの夢はみし夜の同し面影

兩首ことなるふしもなく。又難もなけれは。持となし侍らん。

廿九番

左持　兼行卿

又も見ぬ硯（現歟）の夢をそのまゝに思ひさまさぬ我そ悲しき

右　九條左大臣女

うつゝには思ひ出へき契かは夢にも見えておとろかさはや

右は絕たる中を。夢になりとも見えて。おとろかさんのこゝろにや。左は煩惱執着のふかき身を歎くたるへし。寔にあふさきるさに思ひみたれて。判者も定かね侍るまゝ。持になすへし。

卅番

左　俊兼朝臣

馴しよけはかなく過て思ひねの夢ちはかりに情をそみる

右勝　新宰相

戀しさも憂も初にかへりけりよしなき夢の覺る朝は

左の歌は。むかしのうつゝはたえて後はかなき夢の情はかりをみると。なけきたるはかりにや。右のうたは。こひしさもうさも初にかへりけりと。第一第二の句いとめつらかに侍るに。下の句又よろしくいひおほせて。楚の襄王の哀まておもひ出られ侍り。□に有心躰ともいふへき姿なれは。右は勝のうへの勝たるへきとや。

右此判詞をもつて。いみしき御歌ともをけかし侍らんは。いと畏きことなから。大和歌の道は。貴からすして高位にましはるならひなれは。其おそれをもかへり見すなん。

右正應二年三十番歌合以百花庵宗岡本挍合

群書類從卷第二百四

和歌部五十九歌合廿五

十五夜歌合永仁五年八月十五日

題

寄月秋　寄月戀　寄月雜

作者

左

右近衞權中將藤原朝臣賴成
兵部卿藤原朝臣兼行
左近衞權中將藤原朝臣家親
中將
譽子內親王家大納言
中宮宣旨
中宮內侍
譽子內親王家少兵衞督

右

中宮大納言
春宮少納言
中納言典侍
藤大納言典侍
權中納言藤原朝臣俊光
春宮左衞門督
新宰相
左馬頭藤原朝臣定成

講師

讀師

判者　衆議

一番　寄月秋

左勝　右近衞權中將藤原朝臣賴成

すみそめし月の心や秋なりしあきには月の影もかなしき

右　中宮大納言

吹すさふ風もの寒く身にしみてむら雲しけみ月薄き空

左歌題心ふかくして。ことはたくみに。及かたきさまに侍にこそ。右名を得たる明月くもれるよし。むねんに聞るにや。尤以レ左可レ爲レ勝。

二番

左勝　兵部卿藤原朝臣兼行

秋の來てそへし光のうへに又今宵と照す月のさやけさ

右　　　　春宮少納言
此秋はあらぬあはれの又そひて月にも物のことにかなしき
左歌その時にのそみては。思ふ所なきにあらすや。右歌も。心あるさまには侍れと。勝負可レ爲ニ同前ー。

三番

左勝　　左近衞權中將藤原朝臣家親
風に聞あはれもあれと夜な／＼の月にそたへぬ秋の情は

右　　中納言典侍
秋の色のよもにみちぬとみゆる哉こよひの月の光あまねく
左歌風に聞あはれよりも。月にもよほす情すくめる心さし聞えて侍へし。右ことはたらぬさまに侍るにや。左猶まさると申へし。

四番

左　　中將
秋ふかみ身にしむ風のよはをへて月もうれふる色そひ行

右勝　　藤大納言典侍
月の前のなさけの友もかはらさりしみとせの秋を更に戀しき
左歌から優にして　いとよろしく侍るを。かよふの事はあまりなるやうにそ侍る。第三句の夜はのは字。少しいかにそや聞え侍にや。右感ニ一夜之月色ー戀ニ三廻之秋友ー。心情あはれもふかく。優に聞侍るにこそ。

五番

左　　譽子內親王家大納言
夜すからの淺茅か庭の虫のねも月にはたへぬられへ成らし

右勝　　權中納言藤原朝臣俊光
吹すさふ風すさましく身にしみてよ寒に歸る月そ淋しき
左こと成事なくは侍を。右こゝろありてよろしく侍は。まさると申へし。

六番

左持　　中宮宣旨
つく／＼となかむるまゝに悲しきは夜寒の秋の月のよすから

右　　春宮左衞門督
きり／＼す聲々鳴てはた寒き月夜の秋そ物はかなしき
左右ともにおなし程に侍にや。

七番

左勝　　中宮內侍
むしのねもかるゝあさちの露の上に影寒き月の色を身にしむ

右　　新宰相
露よりも月にそいたくしほれぬる詠て明すよとともの袖
右月を思ふ心さしもあらはれて侍と。いたくのことはは。しゐていひいれまほしくは聞すや侍らむ。左ゆうにみえ侍れは。可レ爲レ勝。

八番

左持　　譽子內親王家少兵衞督
秋風よしはしなふきそ月やとる籬の草の露も社ちれ

右　　左馬頭藤原朝臣定成
むしのうらみ千種の色もなさけあれと月にまさらぬ秋の庭哉
右虫のうらみ千くさのなさけ。月のよの氣色も思ひやられ侍るを。まさらぬこと葉おもはまほしくや見え侍らん。左又勝劣分明ならす。しはらく可レ爲レ持歟。

九番　　寄月戀

左勝　　賴成朝臣

又なかめ又かきくらしいく度かうれへの色に月もしむらん

右　大納言

かきくらす我泪にはかはるらむおなし月をそ君もみるとも

右も心おかしく。上下かなひてはきこえ侍と。左隔ニ凡俗之堺(本ノマヽ)ニ心ふかく。ゆふにおかしく侍る。尤可レ爲レ勝。

十番

左持　雅行卿

いかにもろき涙とかしるうき人を心にもちて月を見る頃

右　少納言

わかために曇らぬ夜はそなかりける向へは月に泪うかひて

兩首おなし程にや侍らん。

十一番

左持　家親朝臣

有し夜にかはらぬ月の名殘さへ今いく程の秋にかは見ん

右　中納言典侍

こひ忘れ思ひしのはむと思へとも更にかなはぬ月のよすから

右こゝろありてはみえ侍るを。かやうの風情同類侍るにや。もし見をよはぬ作者にもや侍らむ。そのうへ。はしめのことは。すこしおさまらす侍るにこそ。左までも(本ノマヽ)かつまて侍らすやと。爲レ持。

十二番

左勝　中将

あはれとめし其夜の空を忘れかねてつきせぬ戀になるゝ月影

右　藤大納言典侍

うきになしかたみに思ひとにかくに月を泪の外にやはみる

左上下あひかなひて。心ふかく詞いとよろしく侍へし。右上句にかたみとて。末句に又みるといてたること。よのつねははゝかるへき病にて侍るうへ。歌合のならひ。ことに憚る習ひにて侍るを。古歌のすかた。かならす判者も思ふ所ありて。とかとせさる事。例あることにて侍れと。つねはとかめ可レ申や。旁左勝へし。

十三番

左勝　大納言

昔ならはまたましよはの月影を戀しとのみそ詠められふる

右　俊光卿

思ひ出る人のゆかりに月をなしてかこち憂ふる程そはかなき

左聞え侍り。右ゆかりの詞不ニ肝心ー也。をとると申へし。

十四番

左勝　宣旨

めくりあひてみる我のみそつれなきやあらぬ契に殘る月影

右　左衞門督

うきにたへてさのみ詠むと見るらむと月の心も更にはつかし

月の心も更にはつかしなと。心ありてみえ侍るを。二三句さしあひて聞え侍うへ。みる我のみそ　つれなきやなと。よろしく聞え侍れは。爲レ勝。

十五番

左持　内侍

とはれむのたのみたになき詠哉またはやせめて月のよすから

右　新宰相

こひなかめ涙にくるゝ我そとも月たに人にかたれとそ思ふ

またはやせめて。月のよすから。よろしくえんに聞え侍

るを。月たに人にかたれとそ思ふと侍る。まことにおもひわひなん心には。さこそあはれにも侍れは。宜持と申へし。

十六番

左　　少兵衛督

詠め憂へ今宵の月に戀つきていさやあす迄たへしわか身か

右勝　　定　成

もろともにみしおも影の月そとて詠なくさむ我そはかなき

左心さしをしこめて。そのすちとわりなくきこえ侍に。こひつきていさやわか身哉と。猶いひおさめぬ所侍るにこそ。右たゝしくきこえ侍れは。勝と申へし。

十七番　寄月雜

左勝　　頼成朝臣

むかしへのかゝみをのこす月なれは今の名殘もゆく末の月

右　　大納言

つく〳〵と月に詠て思ひつくすよものあはれも誰に語らん

左往昔のことはりをもて。將來のことをかゝみる。もともたくみに侍かな。右おもひかたく侍へし。

十八番

左持　　兼行卿

こゝのへにすむらん月を思ひやりて獨みる夜の宿そ淋しき

右　　少納言

人すまぬ古き御かきの庭の池にひとりや月の影もさひしき

兩首。心さしあひにてともによろしく侍れは。勝負さため申かたし。

十九番

左持　　家親朝臣

歸りゆかは是をも忍ふ折やあらむ今宵は月にみやこ戀つゝ

右　　中納言典侍

ふくるまてしつかに月を詠れは千里もうかふ秋のおもかけ

左猶風情有様に侍と。右もおもふ所なきにあらすやとて。又不レ及ニ勝負一。

廿番

左持　　中　將

むかしよりいく情をかうつしみるいつもの空にいつも澄月

右　　藤大納言典侍

いく度か此世ならても馴みけむ我こそしらね月はしるらん

いく情をかうつしみる。いつものそらにいつもすむ月。心おかしくも。ことはめつらしく侍を。我こそしらね月はしるらんと侍る。心ことはことによろしくみ侍は。勝負いつれと申かたし。

廿一番

左持　　大納言

思ひ〳〵心々になかむるを月もさま〳〵いかにみるらん

右　　俊光卿

月きよく風おさまれる此秋や光ますへきしきしまの道

右風情あるさまに見え侍るを。祝言のことはも。ともに賞翫すへきさまに侍は。勝負可レ爲ニ同前一。

廿二番

左(持歟)　　宣　旨

山ふかみ獨詠るよはの月みやこのかけもかくやかなしき

右　　左衛門督

あれはてゝよもぎ葎のしげき宿にさはらぬ月の影そさし入閑居の月にむかへる心。いつれもわきかたく侍るへし。

廿三番

左持　内侍

入かたを都のそらとなかめつゝなみたをそくるよその月影

右　新宰相

詠めをかむ世になき身とも成もせは月たに我を思ひいつやと

左上句心あるさまに見え侍るを。泪をそくると侍や。おちるぬさまに侍らん。右思所有にやと哀に侍を。公宴にはかやうの風情思慮あるへきことにこそ侍めれ。なすらへて可レ爲レ持。

廿四番

左　少兵衞督

はる〳〵と都の空をなかめへたてたひとしりてや月も悲しき

右勝　定成朝臣

あすは又いかなるさとの月かみむ今夜は波のうへになかめつ

なかめへたてたひとしりてやと侍るつゝき。すこしおほつかなくやとて。右を勝と申へし。

右永仁五年八月十五夜歌合以百花庵宗固本挍合

歌合永仁五年當座

題
作者
講師
讀師
判者匿名前權中納言藤原朝臣爲兼當座判之

一番

左持　春日　女房

暮かたき春日をなかみつく〳〵とよもの山邊の霞をそみる

右　秋日　中將

秋の日の影も淋しきよの色に日くらし鳴てくるゝ山本

くれかたき春の霞も秋の日のひさしき色も情をそみる

二番

左持　春月　新宰相

こゝろ社あくかれはつれ夜もすから花の陰もる月に詠て

右　秋月　中將

さもあらぬうれへもおほく色そひぬ月みる秋の物悲しさに

花の影にあくかれまさる心より秋なる月も一つにやみむ

三番

左　春風　前大納言敎良女

影うすき月は軒はにみえそめて花のかさそふ春の夕かせ

右勝　秋風　前大納言典侍

ときは秋と心はかゝる山かけのあらしを松に聞そわひぬる

かけ薄き軒はの月も情あれと猶山かけのまつの秋風

四番

左持　春雲　永福門院内侍

あし引の山邊の櫻咲ぬらし霞のそこににほふしら雲

右　秋雲　女房

うきて渡る夕の秋のむら雲につはさをかはす天津かり金

足引の山の櫻もむらくもにつはさもまかふ天つかり金

五番

左　春雨　新宰相

何となくねられぬよはに聞ふけぬ長閑にすめる春雨の音

右勝　秋雨　女房

吹さはく荻の上葉のかせませにまはらにおつる秋のむら雨

のとか成春のよよりも風ませにまはらにきかむ秋の村雨

六番

左勝　春烟　爲相朝臣

立かくす遠の霞の一むらにけふりあまらぬ里の朝あけ

右　秋煙　少兵衛督

難波潟けふりは霧に立そひて曇らぬ月も影くもりつゝ

なにはかた月くもるよの霧よりもおなし烟も里の一むら

七番

左持　春曉　少兵衛督

みえわかすそれかあらぬか歸る鴈明行かねに聲もまかひて

右　秋曉　新宰相

軒ちかき荻のうははに音つれて風はた寒き明かたの月

かねの聲風はた寒き月影もおなし程なる明方の空

八番

左持　春朝　中將

夜の雨の名殘露けき花の色の常より増るけさのあさ明

右　秋朝　前大納言典侍

色々に千草このはそみたれける野分あれける庭の朝あけ

夜の雨の名殘の花も色々の千草の庭もめかれやはする

九番

左持　春夕　中將

飛鳥のつはさのとかに見わたせは夕暮ふかくかすむ山端

右　秋夕　敎良卿女

吹したふ夕かせ寒きうき雲に鳴てそわたる鴈の一つら

のとか成鳥のつはさは見ふりしを夕の雲も立やまかはむ

十番

左持　春夜　藤大納言典侍

あけはみむ花に心はいそかれてみしかき夜はも久しとそ思ふ

右　秋夜　内侍

きり〳〵すやゝ鳴そめて月の色のまたき身にしむ初秋の空

花故に明るを急き月の色の身にしむよはもわきそかねぬる

十一番

左勝　夏山　内侍

雨はるゝ外山のみねの雲間より聲ほのか成ほとゝきすかな

右　冬山　敎良卿女

み山邊やとひくる人の跡もなしいく日の雪に道やとちぬる

跡もなきいくかの雪のみちよりも山時鳥猶やまたまし

十二番

左持　夏川　敎良卿女

月清みなつも忘れてあかす哉川せすゝしき波のよる〳〵

右　冬川　内侍
ふゆ寒み氷にけらし谷川の岩間にむせふ音も聞えす
月きよみ涼しきよはも冬寒み氷るもおなしせゝの川波

十三番
左持　夏野　新宰相
のへ遠き草のしけみに露見えて秋をむかへぬ暮もすゝしき
右　冬野　内侍
かれわたるのはらはおなし色にして薄雪さむし淺ちふの上
野へ遠き露の夕もうす雪のかれののはらも心ありけり

十四番
左勝　夏岡　女房
なつの日にすゝみすらしも旅人のあまた立よる岡の松かけ
右　冬岡　中將
をかのへや松はの雪はらすけれと見やれはしろき遠近の山
をちこちの薄雪よりも旅人のあまた立よるをかの松影

十五番
左勝　夏杜　女房
夕立のはれ行雲の追風にまた雨おつるもりの下かけ
右　冬杜　少兵衞督
霜雪もはらはぬまゝに打はへてかはく時なきもりの下露
しも雪の露よりも猶追風にまた雨おつるもりの下かけ

十六番
左　夏浦　少兵衞督
すまの浦や磯邊の松もしほれつゝ波よせまさる五月雨の頃
右勝　冬浦　爲相朝臣
吹さゆる音のみ冬のうら風に時雨も雪もみえぬ波かな
五月雨に波寄まさる浦よりも音のみ冬の風やきかまし

十七番
左勝　夏江　藤大納言典侍
夏そしらぬみなそこすみて月影のみかく玉江の波のよる〳〵
右　冬江　新宰相
難波江や波にたまらす消る雪に芦のかれはもかくれさり鳬
月みかく玉江の波に心よせて枯葉の芦はみる人やなき

十八番
左　夏里　教良卿女
山里の松の木かけの夕すゝみ夏はかくても暮しぬへきを
右勝　冬里　女房
昨日けふ外山の雪け風あれて寒く時雨るゝしからきの里
風あるゝ外山の雪けしくるらむ景色そことに見る心ちする

十九番
左勝　夏池　中將
しけりあふ汀の木立ものふりてみとり涼しき庭の池水
右　冬池　教良卿女
へたてゝも猶戀しきは九重のいけのみきはの雪のおもかけ
とり〳〵に面影浮ふ池水に木たちふりぬる影や涼しき

二十番
左　夏庭　爲相朝臣
いけ水のにこらぬ色を猶そめて庭なる木々もしける頃かな
右勝　冬庭　藤大納言典侍
夕かせにかれたつ薄うちなひき霰ふりすさふ庭の淋しさ
池水をみとりにそむる木々よりもすゝきなひきて霰降庭

二十一番

左　戀鐘　爲相朝臣
つらくなる入相の聲も哀也聞て嬉しき時もありしを
右勝　雜鐘　女房
大かたの夕にこもる世の色の哀ににほふいりあひのかね
きゝかへむ哀はあれと大かたの夕にこもる入あひの鐘

廿二番
左　戀玉　藤大納言典侍
たきつせの岩に玉なす波よりも我心社なをくたくらめ
右勝　雜玉　爲相朝臣
もくつにも光やそはん和歌の浦やかひ有けふの玉にましりて
瀧津せに碎けんよりもわかの浦の玉の光そ猶まさる覽

廿三番
左持　戀衣　中將
あはぬよをかさねてしほる衣手はひる時もなしほす人もなし
右　雜衣　藤大納言典侍
諸人の衣の色にしられけりとき折ふしのかはるすかたは
折節に變る姿もあはぬよを重ぬる袖もいつれともなし

廿四番
左持　戀枕　爲相朝臣
いかにねて夢をもまたん馴しよのおもかけ遠き床の枕に
右　雜枕　藤大納言典侍
苔の上草の枕にあかすよを風そ音つれ月そともなふ
ねられぬに待らん夢も苔の上にともなふ月もみな哀也

廿五番
左　戀莚　少兵衞督
打ふして今宵やもしとさむしろに淋しく明すよはそ積れる
右勝　雜莚　內侍
これも又ゆへ社あらめよなよなに我ふしなるゝ床の小莚
打ふすと猶さりけなることはよりなるゝを思ふ床のさ莚

廿六番
左持　戀鏡　新宰相
朝夕にみなれし物をますかゝみ誰に心をうつしはつらむ
右　雜鏡　少兵衞督
みすしらぬ昔をうつせますかゝみ變りのみ行よのゆかしきに
見なれしも昔忍ふもますかゝみうつす心はひとつ成覽

廿七番
左勝　戀燈　中將
明ぬるか又こよひもと思ふより泪にうかふともし火のかけ
右　雜燈　敎良卿女
かすかなる鐘のひゝきもきこゆ也ひとりよふくる燈火の本
思ひやる哀もふかくうかふ覽泪のうちのともし火の影

廿八番
左　戀書　少兵衞督
玉札をみるしもうかふ涙かな有しにもにぬ人のことのは
右勝　雜書　權大納言典侍
あとはかりけにもちとせのかたみ哉ぬしは昔になれる玉章
ありてよにかはらむよりも哀也昔の跡としのふ玉つさ

廿九番
左持　戀船　女房
浦かくれ入江にすつるわれふれのわふそくたけて人は戀しき
右　雜舟　內侍
身を海の海士の小ふねのいつとなく哀うきても世を渡る哉

江にすつるわれたる船も身を海にうきて渡るも哀とそみる

三十番
左勝　戀車　　內侍
戀しやのやるかたそなき小車のうしつらしとは思ひとれ共
右　雜車　　新宰相
をくるまの行かふ音のしけき哉たか何ゆへにいそく成らん
音繁く聞らんよりも小車のやるかたなきは猶深からし

右三十番歌合以犬山候取(所欤)藏後伏見院宸翰挍

新名所繪歌合 正安三年

題
櫻木里春　泉水森夏　岩波里秋　打越濱冬
藤波里春　河邊里夏　岡本里秋　關河冬
三津湊戀　大沼橋雜秋

歌人
左
神祇權大副大中臣朝臣定忠
太神宮禰宜荒木田神主成言
權少僧都行賓
權禰宜荒木田神主成宗
權禰宜荒木田神主氏行
權禰宜荒木田神主經顯
權禰宜荒木田神主定顯
大法師尊親

右
太神宮一禰宜荒木田神主尙良
權禰宜荒木田神主延行
法眼能圓
權禰宜荒木田神主長興
大法師良玄
大法師圓親
大法師良譽
大法師良惠

講師

讀師
判者　前權大納言爲世卿

一番
左持　櫻木里䂓

めにかけてちかつくまゝにしら雲の花になり行櫻木のさと　神祇權大副大中臣朝臣定忠

右

あさくまや神代より咲花をみて心そとまるさくら木のさと　太神宮一禰宜荒木田神主尙良

左歌しら雲をめにかけて花と見なす心。つねの風情にや侍らむ。右歌神代よりさく花をみてなといへる。力あるさまに侍れとも。一番左に優して。暫可ㇾ爲ㇾ持。

二番
左勝

尾上よりふもとをかけて櫻木の名にあふさとゝ匂ふ春かせ　太神宮禰宜荒木田神主成言

右

さくら木を梢にみせて咲にけり花もや里の名をはしるらむ　權禰宜荒木田神主延行

右さくら木を梢にみせて咲に皃といへる。事あたらしきやうにや侍らん。左名におふさと。難なし。爲ㇾ勝。

三番
左

春と言は月の光も花の香もおほろにゝほふ櫻木のさと　權少僧都行寶

右勝

はるか成雲のよそまて匂ひきて花の名しるきさくら木の里　法眼能圓

左第三句。花のかにと侍らは。今少理りかなひてやきこえ侍らん。右花の名しるき櫻木のさと。いひしりて侍り。尤爲ㇾ勝。

四番
左

櫻木の名にあふさとのはる風におらぬ袂も花の香そする　權禰宜荒木田神主成宗

右勝

花の色をかすみこめてもさくらきの里とはしるし匂ふ春風　權禰宜荒木田神主長興

左下句あまりにきゝふるしたる心地し侍れとも。只今たしかにおほえ侍らす。右さしたる「とかなきにつきて又爲ㇾ勝」。

五番
左勝

さと人もたのめし春とさくら木の花さく頃やわれを待らむ　權禰宜荒木田神主氏行

右

咲つゝく花より外はさくら木の里には雲もかゝらさりけり　大法師良玄

左我を待らんといへる。あまりに心やりてきこえ侍れとも。右下句よは〳〵しくはへるや。左いさゝかまさると申へし。

六番
左勝

をのつから交る梢も埋れてさなから花のさくら木のさと　權禰宜荒木田神主經顯

右

さけはかつまかはぬ花の梢より名にあらはるゝ櫻きの里　大法師圓親

右咲はかつまかはぬといへる。つゝきよろしからすや侍らん。左の歌いひしれり。尤可ㇾ勝。

七番
左

春と言はよそにもしるく櫻木の花社里の名にたてりけれ　權禰宜荒木田神主定顯

右勝　大法師良譽

尋ね行みちはまよはすさく花の盛りにみゆるさくら木の里

左終句不ㇾ庶幾ㇾ躰にや。右も上句なとはこゝろゆかす侍れとも。名にたてりといへるよりは。すこし勝るへくや。

八番

左持　大法師尊親

櫻木の里になかるゝあさくまの河せも花のかゝみとそみる

右　大法師良恵

さとの名を秋まて花にさくら木とあたにたのむの鳫や行蘭

兩首ともに。心詞不ㇾ宜哉。

九番　泉水杜夏

左　定忠

手に結ふしみつのもりに夏なしとおもひもはてぬ郭公哉

右勝　尚良

五十鈴川なかれ涼しく成にけり清水のもりにかよふ秋かせ

左歌つゝき聞よからすや侍らむ。右歌指難なし。爲ㇾ勝。

十番

左持　成言

影きよきしみつのもりのしたはれて鳴ねすゝしき時鳥哉

右　延行

影をたにむすひもとめぬほとゝきす清水の杜に鳴過ぬ也

兩方のほとゝきす。いつれもよろしからす聞ゆ。

十一番

左持　行實

名にめてゝすゝみにきつるかひあれや清水の杜の松の下風

右　能圓

ほとゝきすしみつの杜のすきかてに鳴や梢もすゝしかる覽

左初五文字。遍昭かをみなへしの歌にはをとりて。無ㇾ其詮ㇾ歟。右なくや梢もよろしからす。猶爲ㇾ持。

十二番

左　成宗

風かよふ清水の杜の松かけに聲もすゝしきほとゝきす哉

右勝　長興

待人の心くみてや時鳥しみつのもりにはつねなくらむ

左歌こすえはるかになと社中ならひて侍れ。松かけのほとゝきす。あまりにさかりてや侍らん。右第二句不ㇾ庶幾ㇾ侍れとも。松かけのほとゝきすよりは可ㇾ爲ㇾ勝。

十三番

左持　氏行

初音鳴しみつの杜のほとゝきすぬれてもきかんむら雨の空

右　良玄

夏山のしけみを出てほとゝきす清水の杜に聲もらす也

ぬれてもきかんむら雨の空。しみつのもりにこゑもらすなり。同等歟。

十四番

左　經顯

手に結ふ清水の杜のほとゝきすあかぬはをのか鳴音のみかは

右勝　圓親

ほとゝきすあかすも過る初音かなむすふ清水のもりの下陰

兩首の清水。しつくににごるといへる本歌を思へるにとりて。右はよろしく侍り。尤可ㇾ爲ㇾ勝。

十五番

左持　　　　　　　　　　　　定　顯

夕涼み清水の杜の郭公かけをは手にもむすひなれけり

右　　　　　　　　　　　　良　譽

神もきけしみつのもりのほとゝきす鳴夕暮のこゑそ涼しき

左子規かけを手にむすひなれむ事いかゝ。右神まて引かけ奉らすとも侍りなん。なすらへて爲ㇾ持。

十六番

左　　　　　　　　　　　　章　親

かたらふも猶こそあかれほとゝきす結ふ清水のもりの下影

右勝　　　　　　　　　　　　良　惠

山の井の清水の杜のほとゝきすあかぬ手向と神も聞らし

左上の句いひおほせすや。右時鳥神に手向て。可ㇾ爲ㇾ勝。

十七番　　岩波里秋

左勝　　　　　　　　　　　　定　忠

秋風も川をとたかくふくる夜に月かけさゆるいはなみの里

右　　　　　　　　　　　　尙　良

ぬれて社ひかりもまされ行あきの月に宿かせいはなみの里

右ぬれてこそといひ出たる。聞よからす。左岩なみ尤立まさり侍るへし。

十八番

左勝　　　　　　　　　　　　成　言

なかめつゝねぬよの月の影ふけて川をとたかしいは波の里

右　　　　　　　　　　　　延　行

いく秋の月やとりきて岩波の立よるさとに名をもとむらん

左歌きゝなれては侍れとも。歌からよろしく侍へし。右第二句きゝよからすや。

十九番

左持　　　　　　　　　　　　行　賓

風わたる秋の夕の柳かけみたれてなひくいはなみの里

右　　　　　　　　　　　　能　圓

さと人も哀しるらむ秋かせやいは波たかく音にたつ也

左清水なかるゝ柳かけなとは。よみ侍れとも。秋の夕の柳かけさて。みたれてなひくなと侍れは。ひとすちにはるの氣色にやとおほえ侍り。右歌さと人とをきて。いは波たかくとは侍れとも。猶題の名所かすかにや侍らむ。仍爲ㇾ持。

廿番

左　　　　　　　　　　　　成　宗

月すめはうちぬる程のよはもなし川音たかきいはなみの里

右勝　　　　　　　　　　　　長　興

月も猶すみ社まされ宮川や淸きなかれの岩波のさと

おなしいは波の里。きよきなかれは。月もすみまさりて侍るにや。

廿一番

左持　　　　　　　　　　　　氏　行

松にふく秋の川かせ音さえて月すみわたる岩なみのさと

右　　　　　　　　　　　　良　玄

松風に川音たつる岩波のさともさやかにすめる月かな

左右まつかせ。いつれも吹まさらす侍るへし。

廿二番

左持　　　　　　　　　　　　經　顯

影やとる月も夜寒の秋ふけて河をとさひし岩波のさと

右　圓　親

里人も月にねぬ夜や更ぬらん川音すめる瀬々のいは波

右題のよみやう十九番の右におなし。左又。あき更てと
いへる詞。このみよむへからさるよし。たしか成庭訓侍
るへき。なすらへて爲レ持。

廿三番

左勝　定　顕

いねかねてに月みよとてや秋風に聲うちそふる岩なみの里

右　良　譽

秋もはや更ゆく月のかけすみて河かせさむしいは波のさと

右無二指難一歟。右秋ふけて同前。左勝侍るへし。

廿四番

左持　尊　親

すむ月の光もきよし宮川のなかれにつゝくいは波のさと

右　良　憲

すむ月の影より水の秋たちて河音すゝしいはなみのさと

左右無二勝劣一歟。

廿五番

左勝　打越濱冬　定　忠

おきつ波あらいそかけてうちこしのはまかせとをく千鳥鳴也

右　尙　良

あまのすむ友とやはみる波あらきうちこしの濱の冬のよの月

右なみあらきうちこしのあまの友とみるらん冬の月。
すさましくや侍らん。左とかなくいひくたして侍り。爲
レ勝。

廿六番

左　成　言

ときつ風しほひをとをみ月さえて波も音せぬうちこしの濱

右勝　延　行

いせしまや波のうちこしに月さえて汐風あらき冬の濱おき

左の歌。いひおほせすや侍るうへに。秋の歌にや。右な
みのうちこし。耳にたち侍れとも。冬の歌。よて爲レ勝。

廿七番

左持　行　賓

うちこしの濱松かえの風をいたみ月にしほくむ冬のあま人

右　能　圓

うちこしの濱松さえて行くもの遠き汐やもさそしくるらむ

左第一二句不二庶幾一歟。右第二句も。たゝはまかせなと
侍へきにや。爲レ持。

廿八番

左　成　宗

打こしの波にしはなくさよ千鳥はま風寒み友したふなり

右勝　長　興

うちこしの濱松かえは波かけて雪けにさゆるおきつしほ風

波にしはなくといへるよりは。雪けにさゆるおきつし
ほかせ。吹まさると申へし。

廿九番

左持　氏　行

うちこしの濱風あれてよる波にやとりさためぬ冬のよの月

右　良　玄

氷る夜の汐かせさむみ打こしの濱の眞砂地月そさえ行

左右おなし科歟。

卅番

左持　經顯

霜きゆる汀のまさこきは見えて跡有なみのうちこしの濱

右　圓親

おきつ波松のしつえを打こしのあらきはまへも氷る汐かせ

左第三句。右終句。いかゝと覺え侍る。又爲レ持。

卅一番

左持　定顯

風はやみ波うちこしの濱あれてしはなく千鳥かたも定めす

右　良譽

入海の汐やくあまもさむからし松かせ氷る打こしのはま

此番猶難レ決。

卅二番

左勝　尊親

月影も汐かせなからさゆる夜にこほらぬ波のうちこしの濱

右　良惠

あともかつ波うちこしの濱千鳥聲さへよそに浦つたふなり

右初五文字こゝろゆかさるにや侍らん。左さゆる夜にとて。こほらぬとつゝきて侍れは。ことたかひて聞ゆ。さゆるよもとて。氷らぬと侍らは。汐海のこほらぬ理りきこえ侍るへし。然れとも歌から。左可レ勝歟。

卅三番　藤波里春

左持　定忠

行春をとゝめかねては萬代を松にそちきる藤なみの里

右　倘良

契りをく春はきて見ん松かえのちとせにかゝるふち波の里

左歌行春をとゝめて社。萬代もちきらはやとも侍るへきに。とゝめかねて萬代をちきるといへる。かなひてもきこえすや。右ちとせにかゝるといへる。心もゆかす。爲レ持。

卅四番

左　成言

春深きみまきのをのゝ淺ちふに松はらこめてかゝるふち波

右勝　延行

此里に幾ちよかけて藤波のはなさく松もはるをへぬらん

左あさちふにとて。松はらこめてかゝる藤なみと侍る。いかゝと聞ゆ。里もたしかならすや侍らん。右も題の名所れいのかすかに侍れとも。さとなきよりは勝侍るへし。

卅五番

左　行賓

宮川のあたりははるの色なれと松にはへたるふちなみの里

右勝　能圓

宮河やはる行水のしからみを岩にかけたるふちなみの里

左松にはへたるといへる詞。近代好よむ言はにや。不二庶幾一侍り。右岩にかけたる藤波のさと。さもやときこえ侍るを。かけたるのたるの字こそ。いさゝか所存侍りけれ。かゝれるなと侍らは。優にも侍りなまし。いかさまにも。右勝侍るへし。

卅六番

左持　成宗

里人やちとせをかけてちきるらむ松に花さく池の藤なみ

右　　長　興

いく千代を松に契りて藤波のさとのあるしも春をへぬらむ

此兩首。左は池ようなく。右はさとのあるし荒涼なり。可ㇾ爲ㇾ持。

卅七番

左持　　氏　行

此さとのあるしや折てかさす覽ちとせのはるをまつの藤波

右　　良　玄

みとり成松にかゝれる藤なみのさともさかりに見ゆる春哉

左さとのあるし同ㇾ前。右歌をさなく聞ゆ。猶爲ㇾ持。

卅八番

左　　經　顯

咲かゝる木々の梢もをしなへておなし名にたつふち波の里

右勝　　閑　親

春ことに色そふ松の世々かけてさかりも久し藤なみのさと

おなし名にたつといへるよりは。さかりもひさしといへる可ㇾ勝歟。

卅九番

左持　　定　顯

末なかく松にむかひのさとまても咲かゝりたるきしの藤波

右　　良　譽

みとりなる松はかはらぬ色みえて夏にそかゝるふち波の里

右歌夏のうたにや侍らむ。左もかつへきすかたにあらす。爲ㇾ持。

四十番

左持　　尊　親

行末の春も久しきさとの名を咲てしらする松のふちなみ

右　　良　惠

立歸りおりにあひたるさとの名も花にしらるゝ春の藤なみ

左右のさとの名。よろしき爲ㇾ持。

四十一番　河邊里夏

左　　〔定　忠〕

波をやく川への螢ゆふやみのふくれはいつる月にけたれぬ

右勝　　倚　良

すむ人やくるれは窓にあつむらむ河邊の里に飛螢かな

左初五文字より終まて。姿詞不二庶幾一也。右就勝侍らめ。

四十二番

左　　成　言

湊入の川邊のまこもこす波に里かたかけてとふほたるかな

右勝　　延　行

浦ちかき河邊のさとのなひきもに入しほみせて飛ふ螢哉

左のまこもよりも。右のなひきも心ひかれ侍れは。爲ㇾ勝。

四十三番

左持　　行　實

昔し思ふ川邊の里のみしか夜に花たちはなの木の間もる月

右　　能　圓

五月雨に河邊のあしのうへこゆる波をかさねて汐やさす覽

左下句庶幾せられぬさまそ侍る。右又里なきか。なすらへて爲ㇾ持。

四十四番

左勝　　成　宗

さみたれにけたぬ思ひも程みえて川邊のさとにもゆる夏虫

右　　長　興

水まさる川邊のさとの五月雨に入江もちかくよするふな人

右入江もちかくといへる。ちかくの詞いかゝとおほえ侍る。左幾度も螢とそ有かたく侍れとも。いさゝか勝侍れかし。

四十五番

左勝　　氏　行

さひしさも誰かとふへき水まさる河邊のさとの五月雨の比

右　　良　玄

雨そゝく河邊のさとの夕やみにをのれまかはすとふ螢かな

右をのれまかはすといへる。何にまかはすともきこえ侍らぬにや。左難なきにつきて爲レ勝。

四十六番

左　　經　顯

夕されは川邊をかけてこすしほに里も涼しく松かせそ吹

右勝　　圓　親

五月雨のみかさをそへてさすしほに川邊の里は船よはふ也

左松かせよりは。右のふねさしまさりて侍るへし。

四十七番

左持　　定　顯

水まさる川邊のさとの五月雨にからぬ眞菰は波そしきける

右　　良　譽

螢とふ河邊のさとの夕やみに色社みえねかほるたちはな

左のまこも。右の橘。おなしほとの事にや。

四十八番

左持　　尊　親

雨そゝく川邊のさとの夕やみにかけも淋しくとふ螢かな

右　　良　惠

かりこものしける下葉の五月雨にかはへの里は波やこゆ覽

兩方同等歟。

四十九番　　岡本里秋

左持　　定　忠

染あかぬもみちや殘るうき雲の時雨てかゝる岡本のさと

右　　尚　良

　　　　　　　　　　またうちもねぬ岡本のさと

右第二三句のつゝき。いひおほせぬさま也。左も上の句心ゆかす。又爲レ持。

五十番

左持　　成　言

たき波の山こしにきくしかのねにねさめ淋しきをか本の里

右　　延　行

をか本のすそ田に秋のかり鳴てよふかきさとに衣うつなり

左瀧なみ耳にたち侍り。右かりの聲ころもの音。うちそへてようなくや。さりとては猶爲レ持。

五十一番

左持　　行　賓

もみちする秋の夕はをかもとのさとの時雨にをしかなく也

右　　能　圓

衣うつきぬたの音も秋風のよはれはたゆむをか本の里

此番また無二勝劣一。

五十二番

左勝　成宗

をかもとのさとは外山の近けれは聞なれにけるさを鹿の聲

右　長興

岡本の里をへたつる秋きりにつまをこめてやしかのなく覧

右さとの霧に妻をこむらん鹿。あまりに人ちかくや侍らむ。左外山のしか。きゝなれて。爲レ勝。

五十三番

左勝　氏行

時雨つゝもみちかつちる岡本のさとも淋しくうつころも哉

右　良玄

木の葉をは色のちくさに染かへてしくれてわたる岡本の里

さともさひしく。時雨てわたる。同し程の事にや。

五十四番

左持　經顯

をか本のさともよさむに時雨つゝもみちかさねの衣うつ成

右　圓親

秋霧のまかきのかこひひまみえてにはものらなる岡本の里

左もみちかさね。右にはものらなる。又おなし科か。

五十五番

左　定顯

風よはるそとものならに音そへて時雨ふる也をかもとの里

右勝　良譽

夜や寒きはつ霜はらふ秋風に竹のはそよくをかもとのさと

左風よはるといへる。よろしからさるうへに。あきのしくれとはきこえ侍らす。右はつしも　はらふあき風。可レ爲レ勝。

五十六番

左　尊親

しくれつゝ木のは色つく岡本のさととひ過るあきのかりかね

右勝　良惠

衣うつ音も身にしむ秋風にならのはさむきをかもとのさと

此番猶以レ右爲レ勝。

此間闕河冬八番欠。以二類本一勘レ之不レ知。

六十五番　三津湊戀

左勝　定忠

たのむへき波のたよりもかひそなきみつの湊のよその浦風

右　尙良

夢なれやみつのみなとのうき枕なみのうつゝにとふ人もなし

右波のうつゝ聞なれすや。左みつのみなとのよそのうら風。心とまりてよろしく侍るへし。

六十六番

左　成言

わか袖そみつの湊をいるふねのよするはかりに波はかけける

右勝　延行

暮ねたゝおなし湊のかたし貝みつといひてもあはぬ名そうき

左ふね。さしたる事も侍らねは。右かたしかい。勝侍るへし。

六十七番

左　行賓

長らへはみつの湊の見つとたに人にはいはんあはぬ名もうし

右勝　能圓

かひなしやみつの湊のみをつくしあた波かけて立つ名はかりは
左人にはいはしと侍らは。さも侍りなん。いはんとては。事たかひて聞ゆ。左歌こゝろあるさまなり。猶可ㇾ爲ㇾ勝。

六十八番

左　成宗

よそにのみ人をはみつの湊ふねうきてこかるゝ戀そくるしき

右勝　長興

いつかさてみつの湊の萎れ芦のねになきぬらす袖もほすへき

左人をはみつのみなとふねといへるよりも。ねになきぬらす袖。優に侍り。爲ㇾ勝。

六十九番

左持　氏行

ほのかなるみつの湊のいさりふねいく世こかれて戀渡る覽

右　良玄

よそにのみ人をはみつの湊江に茂れる芦のねこそなかるれ

兩首おなし科歟。

七十番

左勝　經顯

またいつかみつの湊のうき枕夢にもむすふ契なるへき

右　圓親

うきふしをみつの湊のあら波にみたるゝ芦のね社なかるれ

右あらなみ。おそろしくや。左うき枕。かち侍れかし。

七十一番

左持　定顯

ほのかにも人をはみつの湊江におきふし芦のねこそなかるれ

右　良譽

あた人をみつのみなとによる舟の思ひこかれて行かたもなし

左右勝劣不㆓分明㆒。

七十二番

左勝　尊親

しらせはやうき身にしめて思ふともみつの湊の松のゆふ風

右　良惠

たのめしはあた波こゆる湊江にみつとはかりも名にや立南

みつのみなとの松かせ身にしむ心。勝侍るへき歟。

七十三番　大沼橋雜秋

左　定忠

たちこむる大ぬのはしはほのみえて霧に暮行秋のをやま田

右勝　尙良

わたらひやおほぬの橋もとたえせす秋田かりあけ治れる代は

兩首大沼橋。祝言につきて。以ㇾ右爲ㇾ勝。

七十四番

左持　成言

あけぬとて庵守賤やかへる覽おほぬのはしをわたるさと人

右　延行

明わたる霧のはれまにとたえして大ぬの橋をふるす秋かせ

右ふるす秋かせ。不㆓庶幾㆒。左しつと里人病にや。何様にも。此番可ㇾ爲ㇾ持。

七十五番

左　行賓

たゝわたれ春もかすみにさへられす大ぬの橋は霧深くとも

右勝　能圓

山本はたえ間まれ成秋きりに大ぬのはしも埋れにけり

左初五文字。下知おひたゝしく聞ゆ。さへられすと侍るも。ことをこのみよめるにや。若近代の歌のすかたをならへるにや。かた〳〵不二甘心一歟。右たえまれなる秋きり。たちまさりて。爲レ勝。

七十六番

左勝　成宗

立渡る大ぬの橋のあさきりにゆきゝの人やみちまよふらん

右　長興

朝霧のたつや大ぬのうきはしのうきて思ひもはるゝまそなき

雨首橋。左は猶やすらかにきゝわたされて。勝へくや。

七十七番

左勝　氏行

うきことは大ぬの橋にたつ霧のはれぬ思ひに世をわたる哉

右　良玄

思ふこと大ぬの橋にかきつけて世を秋きりとたちわたる哉

右かきつくるといへる。むつかしくや侍らん。左述懐のこゝろ有レ之。尤可レ爲レ勝歟。

七十八番

左持　經顯

うき事はおほぬのはしの朝霧に猶立まよふ世をやわたらむ

右　圓親

立渡るさかひもみえす霧ふかき大ぬのはしのあきの夕くれ

左右のきり。いつれと申かたし。

七十九番

左持　定顯

きりふかき大ぬの橋のあさぼらけ風こそ人はわたしそめけれ

右　良譽

霧ふかき大ぬのつゝみ行くれてわたりわつらふまきのつき橋

風こそ人はわたしそめけれといへる。橋守なとゝ聞ゆ。右つゝみも似レ無二其詮一。可レ爲レ持。

八十番

左持　尊親

霧の間にくちて殘れるむもれ木や大ぬの橋のはしめ成けん

右　良惠

思ひさへうきて大ぬのはし〳〵ら立朝霧のはるゝまもなし

左埋木。由緒なとの侍るにや。いかさまにもきゝよからすや。右又可レ爲レ勝さまにあらす。爲レ持。

左	勝	負	持	右	勝	負	持
定忠	勝二	負三	持四	尙良	勝三	負二	持四
成言	勝二	負四	持二	延行	勝四	負二	持二
行賓		負四	持六	能圓	勝四		持六
成宗	勝三	負五	持一	長興	勝五	負三	持一
氏行	勝四		持五	良玄		負三	持六
經顯	勝二	負三	持四	圓親	勝三	負二	持四
定顯	勝一	負二	持六	良譽	勝二	負一	持六
尊親	勝二	負二	持五	良惠	勝二	負二	持五

右伊勢新名所繪歌合以流布印本校合

歌合正安四年六月十一日當座

一番　夢中見戀

左持　御製

戀しさのねてや忘るゝと思へとも又名殘そふ夢のおもかけ

右　爲藤朝臣

をのつから夢としりても如何せぬ只うたゝねにみつる名殘は

二番

左　權大納言局

はかなしやつれなき人もうちとけてみゆとはしらぬ夢の通ち

右勝　一條局

袖にせく涙なからの手枕におもかけかよふうたゝねのゆめ

三番

左勝　宮御方

あたにみて覺ぬる夢の面かけをうつゝの後もなをのこさはや

右　大納言局

をのつからぬるか中なる俤もみるとしもなき夢そはかなき

四番

左持　爲景朝臣

俤もしらてや戀むぬるからうちにみるを夢とて頼まさりせは

右　親教朝臣

あふとみし夢のたよりにならひてもまところむ程を猶や頼まん

五番　契行末戀

左勝　大納言局

いさや猶契をくともたのまれすゆく末までの人のことのは

右　親教朝臣

人しれす其かねことの忘れぬやあらは逢よのたのみ成らん

六番

左　御製

忘れしよけふやあすやとしらね共いきて命のあらむ限りは

右　權大納言局

かはり行心ならはと頼む哉つらきなからのよゝのかねこと

七番

左　宮御方

ありへはとたのむ計に契りても消なはあたの露のことのは

右　爲藤朝臣

うき身世にあらは逢よと契らすは長らへてとも頼まさらまし

八番

左　一條局

さためなき命のうちの契りたに猶ゆく末はしりかたのよや

右勝　爲景朝臣

さためなき命のうちはたのまれすいつはりならぬ契り成共

九番　顯後絶戀

左持　爲藤朝臣

ありし名のたつたにおしき我中をさて絶ぬとは人にしられし

右　爲景朝臣

忘らるゝうき名はそへし人しれぬ情のこして絶なましかは

十番

左持　宮御方

今は又思ひたえぬる道なれやあらはれにけるよそのせき守

右　親教朝臣

絶はつる人の契のつらきにそもれしらき名は猶もかなしき

十一番

左持　大納言局

そのまゝに又もかよはぬ契にそ今はなき名と人はしるらん

右　御製

今しはし忍ひもはてぬくやしさもみしかかりける契にそしる

十二番

左勝　權大納言局

今は又かけてもとはすうき名よにもらさむまての契なり兒

右　一條局

うき名をは歎かさらまし人しれす忍ひし程にたえもはてなは

右正安四年六月十一日當座歌合以一本挍合

仙洞五十番歌合　乾元二年四月廿九日

題

春風　夏雨　秋露　冬雲　戀夕

作者

左

女房伏見院也

前中納言平朝臣經親

從二位藤原朝臣兼行

散位藤原朝臣爲相

右近衞權中將藤原朝臣俊兼

從一位藤原朝臣教良女

藤大納言典侍

延政門院新大納言

永福門院小兵衞督

永福門院中將

右

前中納言藤原朝臣爲兼

左近衞權中將藤原朝臣家親

永福門院内侍

右近衞權中將藤原朝臣範春

新宰相

前權大納言藤原朝臣家雅

入道前大政大臣

從三位源親子

前權中納言藤原朝臣俊光

九條左大臣女
講師
讀師
判者衆議隱ニ作者ニ各被レ判レ之
前中納言爲兼卿後日書ニ判詞ニ

五十番歌合

一番　春風

左勝　女房

あすやいかにけふの詠めもあらぬよの夕の花に風たちぬ也

右　前中納言爲兼

さそひ來る梅や櫻の色香にて風なつかしき正月きさらき

左右歌講畢。各可レ申ニ其難ニ之由被レ仰。雖レ有ニ感氣ニ未レ發レ歌。于レ時自ニ末座ニ可レ申ニ所存ニ之由有ニ其沙汰ニ。一番左可レ被レ賞之由兩方共申レ之。誠猶心深姿詞難レ及。尤可レ爲レ勝之由定申侍云々。

二番

左持　前權中納言經親

かけろふのもゆる春日は長くして霞める空に風そのとけき

右　家親朝臣

心とはちらぬになして吹さそふ嵐の花のなさけ添ける

左歌たけあるさまにや侍らん。右も思ふ所なきにあらす。なそらへて可レ爲レ持のよし。定られ侍き。

三番

左勝　從二位藤原朝臣兼行

薄曇霞て匂ふ花の上をちらさぬ程に過る春風

右　永福門院內侍

散しける庭の櫻を吹たてゝ木のした曇る春の夕風

爲相朝臣申云。右歌。先年爲兼卿三嶋社十首に。梢の雪を吹たひに一曇する松の下かけとよみて侍し歌に似侍りて。實に俤かよへるよし。兩方共に申侍て。以レ左爲レ勝。

四番

左　散位藤原朝臣爲相

咲ぬへき山の櫻の枝ををもみ長閑にわたる二月の風

右勝　右近衞權中將藤原朝臣範春

あけ渡る霞のをちはほのかにて軒の櫻に風かほるなり

右歌尤よろし。花葉なき枝おもき。心ことはり不レ叶歟之由。爲相朝臣申レ之。さきぬへき山の櫻とおけるうへは。殊不レ可レ有レ難歟。風情たくみなるよし申侍て。以レ右爲レ勝。

五番

左持　右近衞權中將藤原朝臣俊兼

かすむ空花の梢に吹なれて風ものとけき春をしるらし

右　新宰相

いとはすよさそひははてぬ春風の花に吹よる夕くれの色

春の空に吹なれて花の梢に風ものとけきよしいはむとにやとみえ侍れと。心さしよりは。いひおほせす聞ゆるにや。右も心あるさまに見えなから。下句是もあまれる言葉に聞え侍れは。持と定られ侍にき。

六番

左　　従一位藤原朝臣教良女
暮わたる霞の空は長閑にて柳によはる春のゆふ風
右勝　　前權大納言家雅
ふくとなき霞の下の春風に花の香深き宿のゆふくれ
左歌暮わたるとて。末句に夕風とはてたる。歌合には可レ憚歟のよし。爲相朝臣申レ之。依以レ右爲レ勝。
七番
左勝　　藤大納言典侍
木末よりよこきる花を先たてゝ山もとわたる春の夕風
右　　入道前大政大臣
匂ひをはこなたかなたにかはす共花をちらさぬ春風もかな
左歌尤有ニ其興一之由各申レ之。右も心有てよろしく侍るよし。申人も侍しかとも。よこきる花を吹たてゝやまもとわたる。猶おかしきよし申侍て。可レ勝由さためられ侍りにき。
八番
左勝　　延政門院新大納言
なをさりの風のつてにも梅かかの待とる袖に深くしむらん
右　　従三位源親子
花に吹柳になひきさま〳〵の春の情は風そみせける
右歌心あるさまに聞ゆるよし。申侍しかとも。さま〳〵のといへるつゝき。聞よからすやと沙汰ありて。左勝侍にき。
九番
左持　　永福門院小兵衛督
綠あさき庭の柳に雨そゝき春風なひく暮そのとけき
右　　前中納言俊光
さそひ來る花の匂ひも長閑にて霞にゆるき春の夕風
兩首よろしきさまなりとて。爲レ持。
十番
左持　　永福門院中將
四方山は霞わたりて遠方の柳にすさふ春の朝風
右　　九條左大臣女
なへて世に吹共しらぬ春風を柳の糸のなひくにそしる
左右柳の心詞優なるよし申て。爲レ持。
十一番　夏雨
左勝　　女房
綠そふ庭の梢の色清み夕くれ凉し池の上の雨
右　　爲兼卿
秋近き野原の草の夕かけに村雨降て風そ凉しき
庭の梢の色清み。殊に有かたくや侍らん。すへて始末の句難レ及樣なるよし各申て。爲レ勝。
十二番
左勝　　經親卿
あふちちる梢に雨はやゝはれて軒のあやめに殘る玉水
右　　家親朝臣
急雨の音は軒端にのこれ共をのれ過ぬる郭公かな
軒端にのこる。同しさまに聞え侍れと。左上句。猶たけあるよし各申て。勝侍にき。
十三番
左持　　兼行卿
時鳥間ちかき雲に聲過て軒端に落る明方の雨

右　　　　　内　侍

片岡のならの木陰に立よりて夕立過す遠の旅人

あけ方の雨とては。聞ちかき雲さたかに見えかたくやと。各申侍き。夕立すくすをちの旅人も勝かたきと申て。持とさためられ侍き。

十四番

左　　　爲相朝臣

晴やらぬ日數はかねてふる雨のあすやさつきを曇りうつ覽

右勝　　範春朝臣

夏草のみとりの若葉雨をうけてなひく姿はみるもすゝしき

左たくみに聞え侍を。右こさによろしくして。秀逸の躰也。猶可ν爲ν勝之由。各申侍にき。

十五番

左勝　　俊兼朝臣

露おもき若葉の梢ひとつにて雨に木くらき夕くれの庭

右　　新宰相

村雨にしはしなひける若竹の涼しき暮は秋おほえけり

若葉の竹を見て秋を思ひ出る。ことはり不ν叶や侍るへきと各申侍て。以ν左爲ν勝。

十六番

左勝　　教良卿女

涼しさをしはしそとむる夕立の名殘の露の庭の草村

右　　家雅卿

山のはは雲のそこにて一村の梢かすめる五月雨の遠

梢かすめる五月雨のをち。おほつかなきよし各申侍しうへ。左よろしきよしさため侍りて。勝侍にき。

十七番

左　　藤大納言典侍

打なひく萩の若葉に露淸み雨の朝けの庭そすゝしき

右勝　　入道大政大臣

片岡の槇の村立雨過て綠もうすき夏山の色

左右共によろしくして。詞たくみなるよし各申侍き。槇の村立雨過てみとりもうすき夏山の色。見る心地して。猶まさるへくやと申て。爲ν勝。

十八番

左　　新大納言

卯月添日數の程にふり初てはや五月雨と雲そかさなる

右勝　　從三位親子

枝よはき若葉の竹は庭にふして雨こまかなる夏の夕くれ

左卯月添日數といひ。はや五月雨のなと侍。この程の景氣おもへる所なきにあらねとも。右時興らか(かよイ)ひておし(おかしく歟)聞ゆ。可ν勝由さためられ侍き。

十九番

左勝　　小兵衞督

ひとしきり早く過ぬる夕立の名殘の雲に稻妻のかけ

右　　俊光卿

ひとしめり雨は降つゝ夏草のみとりすゝしき夕暮の庭

名殘の雲にいなつまのかけ。おかしく聞ゆるよし各申て。かち侍りき。

廿番

左勝　　中將

雲たゆる夕の雨のはれかたにかほりすゝしき軒のたち花

右　九條左大臣女

みとりこきをちの山の端晴初て雲立のほる五月雨の空

雲たちのほる五月雨。民部卿入道歌にあひにるよし。前民部卿藤原朝臣申レ之侍うへ。雲たゆる夕の雨の晴方。のきの立花にほはんほとに。優におかしくきこゆるとて。勝侍にき。

廿一番　秋露

左持　女房

我もかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くたく頃

右　爲兼卿

末なひく千種の花の色を染姿をなすも秋の白露

左心詞たくみにして。隔二凡俗之堺一。右歌。更に及かたきよし再三申侍しを。仰によりて持の字をつけられ侍にき。

廿二番

左持　經親卿

ならの葉に下露つたふ音すなり岡邊のきりの深き夕暮

右　家親朝臣

色々の花ともいはし朝あけの露になかむる秋の草むら

ならの葉の露の音。きりふかき夕の景氣。よろしくきこゆるを。岡邊のとては。露の音きこえん事おほつかなきよし申人々侍にき。朝あけの露になかむるといへるも心有さまなりとて。持と定まり侍き。

廿三番

左　兼行卿

しはしみん花も夜のまの姿にてまた風たゝぬ萩の朝露

右勝　内侍

きり渡る朝けのまかき打しめり千種にあまる露の色かな

しはしみん花もよのまのなと。いひしりて聞え侍を。下句御製に似侍よし。各申侍て。以レ右爲レ勝。

廿四番

左持　爲相朝臣

秋はたゝ幾夜の露も袖にをけ月のやとりを外にうつさて

右　範春朝臣

霧うすきあしたの原の草の上に置渡す露の色そ淸けき

左詞いひしり。心いとおかしく侍を。右姿詞たくみにして。殊にありかたきさまなり。ともに秀逸のよし各申て爲レ持。

廿五番

左　俊兼朝臣

色染る夜寒の露の行衛より秋を草木にうつしてそみる

右勝　新宰相

置渡す露の光も月の色も長閑に更る淺茅生の庭

行衛よりといへる詞。すこしをちゐぬさまなるよし各申。のとかにふくる淺茅生の庭。勝へきよし申侍き。

廿六番

左勝　從一位藤原朝臣女

夜すからの野分の跡はしほれはてゝ草の葉白き露の朝あけ

右　家雅卿

花はまた咲も初ぬを萩か枝に露のみ秋と置まさるらん

左右共に無レ可レ難申一事上之由各申て。草の葉白き露の朝あけ。猶宜しき由申て。勝侍き。

廿七番

左持　藤大納言典侍

おれかへり千種吹しほる風の前に置あえぬ露の亂れてそ散

右　入道相國

秋は猶（先イ）草はにからぬ袖の露を我泪にそむすひそめぬる

兩首共に無難のよし。各爲ニ宜歌一之由一同申レ之。爲レ持。

廿八番

左持　新大納言

村雨の跡吹拂ふ秋風に草葉みたれて露そあらそふ

右　從三位親子

秋風もまた吹たゝぬ朝あけの草葉しつけき露の上かな

草葉しつけき露。同類侍よし各申て。露そあらそふも。なみた時雨なとのたくひもなくては。何に爭ふへきそと申て。持とさためられ侍き。

廿九番

左　小兵衛督

光すむ月にみかける草の露よるさへ玉をかさる庭かな

右勝　俊光卿

物思ふといはぬ計そ露かゝる草木も秋の夕くれの色

左いひおほせすきこゆるよしさた侍るうへ。右心あるさまに侍れは。勝へきよしさためられ侍き。

卅番

左持　中將

うすきりのはるゝ朝氣の庭みれは草にあまれる秋の白露

右　九條左大臣女

しほれふす枝吹返す秋風にとまらす落る萩の上露

うすきりのはるゝあさけ。草にあまれる露見る心地しておかしく侍を。枝吹返す秋風にとまらぬ露も亦捨かたしとて。持とさためられ侍き。

卅一番　冬雲

左勝　女房

（玉葉冬御製）山嵐のすきの葉拂ふ曙に村々なひく雪のしら雲

右　爲兼卿

みねの雪を村々雲に吹交て渡る嵐はかたもさためす

左歌上下相叶心詞尤稱美可レ謂ニ秀逸一之由一同申レ之。雪の白雲。猶題の心おほつかなきにや。右歌難レ負之由。雖レ有ニ御氣色一。雪の白雲ことに難レ有の由各申て。右歌難レ及之由申上畢。

卅二番

左持　經親卿

あけしらむそなたをみれは山の端の横雲計時雨てそ行

右　家親朝臣

しくるゝか遠の梢の夕暮にしはしかゝれる浮雲の色

左右同科之由。兩方共に申。仍爲レ持。

卅三番

左持　爲行卿

さえかへる空には風の音もせてしつかにこほる雲の色かな

右　內侍

けふも亦外山の嵐さえくれて雲の雪氣の日數ふる頃

兩首寒雲。いつれとわきかたきよし。各申レ之。

卅四番

左持　爲相朝臣

霰ちり風にあれつる空の色の雪に成ては雲そしつまる

右　範春朝臣

竹はらふ嵐の音ははけしくて雪けにむかふ雲そこほれる

左右。亦いつれも思ひ入たる風情。とり〳〵におかしく侍よし各申て。爲レ持。

卅五番

左持　俊兼朝臣

吹まよふ嵐のつてにうかれ來てあらくしくるゝ雲の一村

右　新宰相

遠方にかさなる雲の色迄もさむくあれたるけふの空かな

雨首共に無ニ殊事一。可レ爲レ持之由。一同申レ之。

卅六番

左持　教良卿〔女〕

一村の時雨の雲は浮過て日影そみゆる遠の山もと（のはイ）

右　〔家雅卿〕

浮て行雲のたえ〳〵影みえてしくるゝ山に夕日さすなり

いつれもおなしさまにして。猶可レ爲レ持之由侍き。

卅七番

左　藤大納言典侍

ふりやらぬ雪氣の空のさえかへりこほれる雲の下に匂へる

右勝　入道前大政大臣

（玉葉）夕日さす峯の時雨の一むらにみきりを過る雲のかけかな

雪氣の雲の下ににほへる。心おかしきよし。各申侍しかと。みきりを過る雲のかけ。なをめつらしきよし申て勝侍にき。

卅八番

左　新大納言

雪あられいつれか先にさそはれん雲さへわたる夕くれの色

右勝　從三位親子

星の影雲にはつれてさゆる夜の梢の風の音そはけしき（はけイ）

雲にはつれてさゆる夜のなと。いひしりてよろしく聞ゆとて。勝へきよしさためられ侍りき。

卅九番

左勝　小兵衞督

雪さそふ外山の嵐はけしくて村雲さむき暮にも有かな

右　俊光卿

時雨には晴やすかりし村雲の行方なきや雪け成らん

左猶かたひく人々侍て。勝侍にき。

四十番

左勝　中將

（玉葉 永福門院）風の音のはけしくわたる梢より村雲寒き三日月の影

右　九條左大臣女

風ふかぬ雪けの空はさえとちて雪閑なる冬の夕暮

左心詞優にして。尤よろしきよし滿座褒美。右もよろしくは侍れと。左猶可レ勝之由。各さためられ侍き。

四十一番　戀夕

左勝　女房

たえすならん身をさへかけて悲しきはつらさを限る今の夕暮

右　爲兼朝臣

暮ことに思ひそまさる待し頃うさ哀さにかはるいまゝて

左優艷にして尤秀歌之由。一同に申レ之。右も捨かたきよし少々申人々侍しかとも。難レ及之由申畢。

四十二番

左　經親卿

さすかもし思ひいつやと此暮の雲の氣色を泪にそみる

右勝　家親朝臣

つく／＼と詠て思ふ夕くれの空たにせめて哀をはしれ

左雖レ無二其難一。右猶まさるへくやと各申て。爲レ勝。

四十三番

左　兼行卿

今も見るゆふへはおなしゆふへにて待し頼みそ昔なりける

右勝　内侍

まちしより今はのはての思ひ迄難面むかふ夕くれの空

左御製にかゝる事侍よし。少々申レ之うへ。右亦優によろしとて。勝さ被レ定侍き。

四十四番

左　爲相朝臣

あはれわかまちし心はあらぬ世に俤計残る夕くれ

右勝　範春朝臣

待なれし契はよその夕くれにひとりかなしき入あひのかね

左もいとよろしく侍れと。右猶優艷にして。まさるへきよし各申侍りて。爲レ勝。

四十五番

左　俊兼朝臣

戀くらしゆふへにむかふ心地よりあらぬ聲そふ入逢のかね

右勝　新宰相

思ひいつるつらさも今は心よはしたゝ俤の夕くれの空

左心あるさまに侍を。心よりと侍る。すこしをきおほせすきこゆるにや。右戀の心おかしく侍れは。勝へきよしさためられ侍き。

四十六番

左勝　從一位藤原朝臣女

いく夕またぬ哀になかめたへてつれなの身やと更にしそ思

右　家雅卿

あらぬ身と今は思によしなくもみし世をさそふ同し夕かせ（くれイ）

左戀の心深くして優におかしきよし。各申侍き。右もよろしく聞え侍れと。なを左まさるへきよしさためられ侍き。

四十七番

左勝　藤大納言典侍

わかかゝる思ひの内の幾ゆふへさもそつれなく詠たへぬる

右　入道前太政大臣

（新拾）ひとかたに待もやせまし僞の變にならはぬ夕成せは

右歌よろしくきこえ侍を。下句なと面影ありぬへくやなと。少々申あへりしうへ。左尤優におかしく侍とて。勝に定られ侍き。

四十八番

左持　新大納言

いかにせん雲の行方風の音まちなれしよに似たる夕を

右　從三位親子

思ひとゝむきはをみるへき此暮ょくれたにはつな心よはきに

雲の行方風の音待なれしよになと。優におかしく侍を。くれたにはつな心よはきにと侍る。えんに心くるしく侍り。勝負難レ決よし各申侍き。

四十九番

左勝　小兵衞督

ひと方にとはすもなれや思絶んさのみ空しき暮はなかめし

右　俊光卿

今更に何歎くらむ爲はもとよりなれし夕くれの空

左よろしく聞ゆるよし申侍しうへ。右の戀心。無念に聞ゆるよし各申て。尤左勝へきよしさため侍き。

五十番

左勝　中將

うれしとも一方にやはなかめらるゝ待夜にむかふ夕暮の空

右　九條左大臣女

いさやけさ別つるまの情かと暮行空を待そやすらふ

右も風情おかしくして。いとよろしく侍れと。左猶心めつらしく。いうにきこゆとて。勝へきよし一同に申侍き。

以ニ爲秀卿筆跡之本一寫レ之則挍合。但端本落帳多歟。重而可レ考レ之。

亦云。乾元貳年歟。

此本令ニ書寫一而十ケ年之後。以ニ類本一挍二合之一。於ニ落帳一五六書二入之一。并相違在之所々腋加レ筆畢。

延寶貳卯月朔日

亦同六年水無月八日書寫畢。

右仙洞五十番歌合以百花庵宗固本挍合

歌合乾元二年五月四日

題

夏夜　絕戀　庭松

作者

左

女房諱熈仁伏見院　右中將範春諱胤仁後伏見院

前大納言家雅花山院庶流右大將兵親大道猷雲子

前中納言俊光　前大納言教良女

左中將家親　右中將俊兼

九條左大臣女

少兵衞督　中將

右

藤大納言典侍從三位爲子大納言爲世女

前中納言爲兼　前民部卿兼行

永福門院内侍　新宰相

前中納言經親

前右兵衞督爲相　延政門院新大納言

春宮權亮淸雅　從三位親子

講師

讀師

判者

衆議居作者各判之爲相朝臣後書詞

一番

左勝　夏夜　女房

ふけぬるかくらき砌の水のをとに枕涼しきうたゝねの床

右　藤大納言典侍

まかひつる螢も星も影きえてくまなき月のさしのほる空

左歌姿さはやかに詞めつらしく。古集の心も通ひて難レ及之由。滿座一同申レ之。右歌も。景氣見る心地して。艷に侍とも。左にはをよふへからさるよし。各定申畢。

二番

左勝　範春朝臣

草深き籬の露に月をみて秋の心そかねておほゆる

右　前中納言爲兼

月影はまた更ぬともみえなくにみしかき夜半は鳥鳴ぬ也

右歌躰もふるめかしう。題の心もことに宜しくきこえ侍るを。左歌籬の露に月をみて。すゑの秋も面影うかひ侍る程は。猶無二比類一由定め申侍き。

三番

左勝　前大納言家雅

風の音はくらき木するに聞えつゝ雲深き夜の五月雨の空

右　前民部卿兼行

かけ清き月をしやとすふけかたの夜の袂は夏としもなし

左歌雲深くふりしつまり侍らむ雨に。風の音はきこえかたくやと人々申侍しかとも。風雨たよりあることに侍れは。深き難にはあらす。右歌月をしやとすと侍。やすらかならぬ上に。第三句もいひおほせぬよし被二仰出一之。猶以レ左爲レ勝。

四番

左持　前中納言俊光

はしちかみ涼みかてらのうたゝねにまとろみあへす明る東雲

右　永福門院内侍

郭公今もやなくと雲くらきあま夜の空を猶詠めつゝ

左歌。無二殊難一。右又有二其心一。可レ爲レ持之由被レ定。

五番

左　家親朝臣

折しもあれ簷のたち花うちかほりくらき枕に村雨の聲

右勝　新宰相

晴そむる月にそみゆる五月雨の名殘の軒に落る玉水

左歌。有二同類一上。うちかほり不レ宜歟。右歌。不二停滯一。仍被レ付二勝字一畢。

六番

左　俊兼朝臣

月清み所々にすゝみしてしつまりやらぬ夜半の里人

右勝　前中納言經親

明かたのとこを涼しみ月もはや光りも薄く空に殘れる

左歌御製中にかゝる事侍にこそ。第三句も不レ宜由各申之。右歌すゝしみのこと葉不二落居一よし侍しかとも。左は猶依レ有レ難。以レ右爲レ勝。

七番

左　九條左大臣女

風になひく軒のあやめのかけろひて袖に涼しき宵のまの月〔本ノマヽ〕

右勝　爲相朝臣

ふけうつる氣色涼しき風立て袖かろくなるうたゝねの床

左は初句幷三句共爲二西行詞一。可レ爲レ難歟之由各申レ之。仍無二左右一右勝之由被レ定。其躰輕忽非レ可レ勝哉。

八番

左勝　　前大納言教良女

草村の露の光りもきよくみえてうたゝね涼し夏の夜の月

右　　延政門院新大納言

さ月やみ月なき比はみしか夜の更行ほともしられさりけり

右もことなる事なく侍れと。左草村の露はまことに光あるさまに侍れは。可ㇾ勝よし定申畢。

九番

左持　　少兵衛督

すきかてのなさけにやとふ郭公ひとりなかむる夜半の心を

右　　清雅朝臣

またれつる月は軒端に影さして水鶏をとする宿そさひしき

左右之間。優劣難ㇾ定之由各申ㇾ之。

十番

左勝　　中将

月もなきあま夜の空の明かたに螢のかけそ簷にほのめく

右　　従三位親子

みしかさようたゝねなからみる月のよひと思ふに鐘の聞ゆる

左歌心詞優美にして初終とゝこほり侍らす。秀逸の由満座申ㇾ之。右又いひ知て興あるさまに侍れとも。左猶讃に侍は。可ㇾ為ㇾ勝之由定侍き。

十一番　絶戀

左勝　　中将

思ひ絶し人の行衛よ今更にあはれになりて戀増る頃

右　　従三位親子

うきやそふ思ひやすさむ人心おなし我身をあらすなしぬる

右歌めつらしき躰にて侍を。聊おほつかなき所や侍覧。左は心ふかくてありかたきよし各申て為ㇾ勝。

十二番

左持　　少兵衛督

今更に誰にいひてかなくさまむかひなきはての人の心を

右　　清雅朝臣

たえてみるわか命をそ恨へきかはるはよゝの契と思へは

兩首雖ニ賞一決一相同之由一同申ㇾ之。

十三番

左勝　　教良卿女

契たえみし世はあらすなるはてに残る我身をいかにいとはん

右　　新大納言

うかりきな契り空しくふけしよゝ思ひ出るも思ひてそなき

右も巧なるやうには侍と。左は残るわか身をいかにいとはんといへる心。めつらしく侍とて。以ㇾ左為ㇾ勝。

十四番

左　　九條左大臣〔女〕

定なき世のことはりにいつまてといひし契よけにそ絶ぬる

右勝　　為相朝臣

わすられし後は我さへいとふ身のたか為ならぬ同し世そうき

左歌世のことはりまておもひ入たる姿に侍るを。いかに侍にか。右歌勝字を付られ侍にき。

十五番

左勝　　俊兼朝臣

よしさらはわか哀をも残さしと思ひなりしも悲しさそそふ

右　　経親卿

おもかけの心にそはぬ時そなきみしは昔に人のなれとも
右歌人のなれともといひはてたる程。いかにそやきこゆるよし各申レ之。左歌はなにとなく心ふかきやうに侍れは。可レ勝のよし侍しにや。

十六番

左　家親朝臣

我恨み人のつらさはなきになりて哀れみなれし世に返らはや

右勝　新宰相

共まゝになを戀やまぬ心をはつれなしとこそきかは思はめ

第三句なきになして。末句はかへさはやとそあらまほしきよし。御氣色有しうへは。以レ右爲レ勝なり。

十七番

左持　俊光卿

盡もせぬ歎きはかりやありしよの人の契の名殘成覽

右　内侍

思ひはて忘れもすへき年月のあはれなど今に捨そ兼ぬる

左右共に思所有て聞ゆるよし沙汰侍しにや。

十八番

左持　家雅卿

なにかそのむかしの名殘心なき雲風にたにうき色そたつ

右　兼行卿

ともすれはもとの哀にかへる哉忘れしきはのうさは忘れて

是又いつれもいひしれるさまにて。勝劣なきよし各申て。爲レ持。

十九番

左持　範春朝臣

折々のわかわひはてし心をは人もやさすか思ひ出らん

右　爲兼卿

兩舌も賴む名殘のありしよしたえはてぬれはこれも戀しき

左歌心めつらしく。姿とゝのほりてありかたうきこえ侍るを。右殊によろしきよし。仰出されて。勝の字をつけられ侍しを。前大納言藤原朝臣。頻左勝よし申請るによりて。持と被レ定。

廿番

左持　女房

憂にたえてあれ共人の許し顏にこひてきかれん身さへ耻し

右　藤大納言典侍

せめてさらは今一たひの契ありていはゝやつもる戀も恨も

左歌古來秀歌なと多〔く〕きこゆるたくひも。かやうに及かたき所はありかたくや侍らんと。心肝に銘て。是非を申におよはす侍し程に。右歌妖艷殊勝のよし。有ニ御氣色一。持に成侍しにこそ。

廿一番　庭松

左持　女房

夕昏の松に吹立山風に軒端くもらぬ村雨の聲

右　藤大納言典侍

風たにも軒端の松に聲やみてゆふへのとけき山陰の庭

のきはくもらぬ村雨の聲。時興もよほして景氣おもしろう侍を。右又すてかたきよし被ニ仰出一て。持になされ侍き。

廿二番

左持　範春朝臣

雨の中にしほれてたてる庭の面の松の姿をみれはさひしも

右　爲兼卿

年經てもかはらぬ色そなつかしき君住宿の簷の松か枝

左は古き姿をやすらかにいひくたされて。うるはしき歌の躰にやと。あらまほしうきこえ侍るを。右歌祝言によそへて。思所も侍るにこそとさたありて。又持に定らる。

廿三番

左持　家雅卿

暮かゝるゆふへの庭に吹そめて入相つゝく松かせのこゑ

右　兼行卿

軒近く折々わたる風の音をふらぬ時雨と松に聞かな

左歌宜を。入相つゝく（ひゝく歟）と侍らは。猶心たしかにきゝよくや侍らんと申侍しかとも。ふかき難にあらす。右又心あるらへは。よろしき持にて侍へきよし定申畢。

廿四番

左　俊光卿

雨はれぬ木するゑの空は雲とちて夕暮淋し庭の松風

右勝　内侍

吹ひゝく山の嵐のするゑうけて軒端にさはく夕暮の松

左歌。無₂殊事₁。但閑てといふ詞近日滿ㇾ耳之。不₂庶幾₁之由有₂其沙汰₁。右歌も何を請てといふ詞。又當時常出來之旨雖ㇾ申ㇾ之。可ㇾ爲ㇾ勝被ㇾ定。

廿五番

左持　家親朝臣

君すめは猶も幾世の宿の庭に木たちふりぬる松の一本

右　新宰相

聞侘ぬゆふへ淋しき山里の軒端にひゝく松風のをと

左歌又御製中に此下句有₂同類₁之由有₂沙汰₁。復祝言被ㇾ爲ㇾ持畢。

廿六番

左持　俊兼朝臣

さひしさの心の友と成にけりなるゝ軒端の松の一もと

右　經親卿

庭遠み池水きよくすむやとの軒にこたかき松そふりぬる（はにたかきイ）

心の友と侍心。强無₂其要₁之由各申ㇾ之。右歌初句前中納言所詠也。雖ㇾ犯之由申ㇾ之。又無₂勝負₁。

廿七番

左持　九條左大臣女

庭の面の一木の松を吹風にいく村雨の聲をきく覧

右　爲相朝臣

ふりぬれと猶も千とせを頼めとや軒にたよはぬ宿の松か枝

左歌いく村雨の聲をきくらん。めつらしきよし申侍しを。右歌例祝言とて持になり侍き。近俗之躰後見見苦侍り。

廿八番

左持　教良卿女

庭の面の松の下陰暮過て梢はけしき山下風のかせ

右　新大納言

ほかはなを入日の名殘見えなから松陰くらき庭の夕くれ

共によろしきよし衆議ありて。爲ㇾ持。

廿九番

左　　　少兵衞督

山ふかみ庭の日影は洩もこすこのした繁き軒の松か枝

右勝　　清雅朝臣

軒近き松にあらしは吹暮て入相ひゝく宿そさひしき

木のしたしけきとて。また軒の松か枝と侍ほと。こと木の下は松のことか。聊か〔不敗〕分明之由有ニ沙汰一。右歌勝畢。

卅番

左持　　中将

わけきても幾世の昔とひかねぬ松ふりしける故郷の庭

右　　従三位親子

きゝわひぬ軒端の松を吹しほる嵐にこもる入相のかね

左歌は あはれ幾世の宿ならんと侍ふるき歌の面影もたちそひて。おもしろく幽玄に聞え侍を。あらしにこもる入相の聲。ことに又きゝすて かたきよし各申て。證判不ニ分明一侍き。

右一挍畢。

後日以ニ他本一又一挍。

右乾元二年五月四日歌合以古寫一本挍合

昭和五年一月二十日印刷
昭和五年一月二十五日發行

不許複製

發行者　東京府西巣鴨町大字巣鴨貳千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市芝區西久保明舟町九番地
松岡松三

印刷所　東京市芝區西久保明舟町九番地
太洋社第五工場

發行所　東京府西巣鴨町大字巣鴨貳千五百七拾番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七番電話大塚〇七一八番